

# 利根西の民俗

— 清里・総社・元総社・東地区 —





上野総社神社本殿（元総社）



大徳寺総門（小相木）



八方にらみの龍（総社・光厳寺）



秋元氏歴史墓地（総社・宝塔山古墳）



応永の石仏（総社・元景寺）



秋元氏墓地（総社・元景寺）



力田遺愛碑（総社・光嚴寺）



大福寺の宝塔（鳥羽）



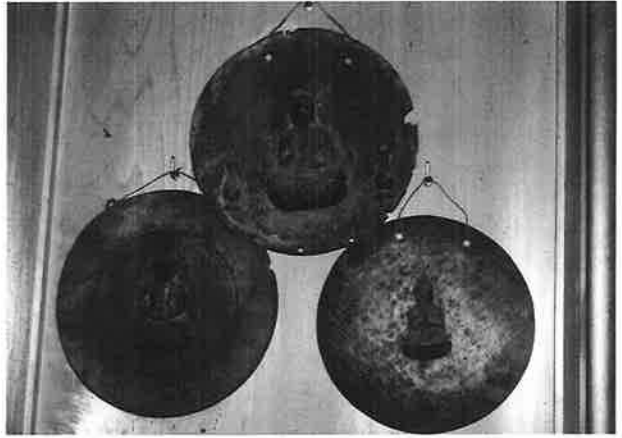
笠薬師塔婆（問屋・丁間稻荷）



鳥羽の大日如来及び笠塔婆（鳥羽西部）



稲荷新田の薬師さま



徳蔵寺の懸仏（元総社）



野良犬の獅々舞（清野）



総社神社太々神楽（元総社）



庚申の掛け軸 (総社 新田)



盆踊り (元総社・総社神社)



どんど焼 (総社 山王)



宝船の掛け軸 (鳥羽西部)



遥拝殿（総社 栗島）



天神様の奇石（青梨子）



調査風景（総社 山王）



# 序

前橋市教育委員会

教育長 岡 本 信 正

昭和六十年から始まった民俗文化財調査事業も、芳賀・南橋・桂萱地区が終了し、昭和六十三年度、平成元年度の利根川西岸の清里、総社、元総社、東地区の調査へと順調に進んでまいりました。このほど多くの関係者のご協力により前橋市民俗文化財調査報告書第二集「利根西の民俗」の刊行を行なうことができました。

前橋市内でも、利根川西岸は榛名山山麓にあたり、上野国の総社である総社神社の所在地であり、江戸時代には高崎藩に属する地域が多く含まれる範囲ということで、利根川東岸とは違う生活習慣があるように思います。

文化財総合調査事業のなかの中核事業として実施されてきました民俗調査は、古いことを知っている古老が年々少なくなり、調査がいつも遅い、もう少し早ければとの言葉を聞かされております。社会制度、社会構造、価値観の大きな変化の中で、これまで永く伝えられ、行なわれていた生活習慣が急速に変わってきております。

庶民の生活の記録は驚くほど少ないのが現実です。また、それを記憶し、行なっている方も年々少なくなってきております。この調査報告書の中には、前橋の風土の中で育まれた、前橋の生活を解明する貴重な記録が集められたと考えております。

この報告書をお読みいただき、先人の知恵、工夫、思考形態を知り、昔の生活を思い出すきっかけにさせていただき、また故郷再発見のために活用していただければ幸いです。

調査に際して、ご協力いただいた地元の話者、自治会の方々、調査執筆にご苦労いただいた調査員みなさんに深く感謝申しあげるとともに、この報告書が斯学の発展のために少しでも役立てば幸いに存じます。

平成三年三月



# 経過

昭和六十三年 清里・総社地区

民俗調査 (民俗文化財総合調査事業)

## 一、目的

民俗とは、一般には民間伝承と呼ばれ、衣食住を始めとして、人々が先祖より受け継いできた日常生活の上で、繰り返される生活事実のすべてを意味するものである。こういった伝承や残された民俗文化財を調査することによって、一般庶民の伝統的生活様式、社会形態を明らかにしようとするものである。

それは、民俗が、一切の階級、身分、出身、才能などに関係なく、日本人であるならば、誰でもが無意識のうちに繰り返し表出する類型的行為の総体を意味し、いわば、日本人を日本人たらしめているものだからである。

そこで、社会の急激な変化により、滅び去ろうとしている民俗を、総合的に調査し、資料収集を行うことで、記録保存を図り、地域をみつめる心を取り戻させる契機とする。

また、資料整備により、将来の博物館構想に資する。

二、調査組織 (前橋市民俗文化財調査委員会)

委員長

近藤義雄 前橋市文化財調査委員

顧問

梅沢重昭氏 市文化財調査委員

近藤義雄氏 市文化財調査委員

調査員

中沢右吾氏 市文化財調査委員  
松島栄治氏 市文化財調査委員  
丸山知良氏 市文化財調査委員

桑原 稔 豊田高専教授

井野誠一 文化財保護室主任

岡野 健 群大附属小教諭

高村真也 群大附属小教諭

新保一美 文化財保護室嘱託

時枝 務 県史編さん室嘱託

神宮善彦 県博学芸員

池田 修 前橋工業高校教諭

菊地誠一 吉井高校教諭

小暮正剛 伊勢崎第二中教諭

横田雅博 高崎市立長野郷中教諭

田口智彦 板倉高校教諭

佐藤 健 太田市立強戸中教諭

地元協力員

各町自治会長

名簿 別添

協力員 (各町一名)

同上

事務局

福田紀雄 文化財保護室長

浜田博一 埋蔵文化財係長

遠藤和夫 埋蔵文化財係主任

井野修二 文化財保護係主任

◎夏季集中調査

八月四日 野馬 巢鳥 栗島(含城川団地) 大渡  
 五日 鍛冶町 大屋敷 山王 桜が丘  
 六日 新田 立石 植野 高井  
 七日 清野 青梨子 池端 上青梨子 前原

総社地区

町名	氏名	住所	電話
総社町総社大渡	堀内正夫	大渡町一五二	五二〇六〇
	戸所啓治郎	〃一三一九	五二〇六四
総社町総社野馬	戸所亀吉	総社町一一三	五二四八九
	久保原要一	〃二二二二	五二四八七
総社町総社巢鳥	新木伊勢雄	総社町総社二三	五二九五六
	福田章雄	〃二二二	五二〇〇九
総社町総社鍛冶町	新木一郎治	総社町総社二五〇	五二四七〇
	持木志郎	〃二二二	五二〇八三
総社町総社栗島	神谷寿男	総社町総社二四〇一二	五二〇四三
	石井徳治郎	〃二四四	五一〇五九
総社町総社大屋敷	大山陽太郎	総社町総社二〇七	五一三九九
	大山伊三郎	〃二〇一	五一三七二
総社町総社山王	都丸民司	総社町総社三三六	五一三六七
	都丸嘉雄	〃二四七	五一三七七
総社町総社新田	阿部嘉和	総社町総社二四三	五一三三三
	中山一良	〃二四〇	五一三七八

清里地区

町名	氏名	住所	電話
総社町植野立石	山田勝二	総社町植野四九	五一三〇九
	高橋岩男	〃三三	五一五九四
総社町桜が丘	松本叶農二	総社町桜が丘二〇六一〇	五一〇七一
	平井清志	〃二六一	五一四七六
総社町植野	榎田行雄	総社町植野九四一	五一五三九
	榎田増見	〃六四七	五一六七三
総社町高井	福島春寿	総社町高井五〇一四	五一六七九
	小畑賢	〃二九	五一三六六
総社町城川団地	樋口正郎	総社町総社三〇三十四	五一六〇二
池端町	吉沢昭治郎	池端町三一	五一九八二
	木暮金一	〃八七	五一九七四
上青梨子町	笠井公	上青梨子町八二	五一九九八
	笹沢周作	〃三七	五一九三四
青梨子町	桜井重男	青梨子町八八	五一九四四
	田村正年	〃三三	五一九五〇
青梨子町前原	伊藤憲衛	青梨子町一六七一一	五一九九七
	松下雅輔	〃一五五	五一九〇八
清野町	本多久夫	清野町二五	五一九六一
	伊藤弥造	〃九五	五一九六四

平成元年度 元総社 東地区

◎夏季集中調査日程

八月三日(木) 元総社町第一 元総社町第二 元総社町第三 元総社町第四 大渡町 大友町

八月四日(金) 下石倉町 石倉町上石倉 石倉町中部 鳥羽町東部

八月五日(土) 東箱田後家町 西箱田町 川曲町 稻荷新田町

八月六日(日) 下新田町 上新田町 小相木町 古市町 江田町

八月八日(火) 前箱田町

八月九日(水) 鳥羽町西部

◎石造物調査

八月三日と四日 元総社地区内

八月四日には箱田の観音堂の仏像も調査

◎民具調査

八月三日 下石倉町

四日 川曲町

五日 上新田町

◎総社神社調査

十月一七日(火)

地元協力員

(元総社地区)

町名	氏名	住所	電話	備考
元総社町第一	都木源之輔	元総社町八一五	五〇四七七	自治会長
	都木良三	〃 三三六	五〇七七六	
	伊藤五十次	〃 三六一一	五〇三六九	自治会長
元総社町第二	松田徳雄	〃 三三九	五〇七六六	

町名	氏名	住所	電話	備考
元総社町第三	柴田幸一	〃 一四四四九	五〇二〇三	自治会長
元総社町第四	中沢徳一郎	〃 二〇五	五〇三六五	
元総社78	吉田寿一	〃 三三六二	五〇七六七	自治会長
大渡町	都木節章	〃 三七一	五〇三七七	元総社歴史研究会
大友町	飯塚敬五郎	〃 一五二二	五〇四八二	自治会長
下石倉町	姓原善郎	〃 一三三七	五〇四八六	自治会長
下石倉町	小澤延由	〃 二〇七	五〇六八四	自治会長
下石倉町	天笠忠男	〃 二一九六	五〇四八三	自治会長
下石倉町	岡田恒雄	〃 二二〇三	五〇七三九	自治会長
下石倉町	鎌田和夫	〃 三三一	五〇三三三	自治会長
下石倉町	近藤満	〃 一三七	五〇三七八〇	自治会長
下石倉町	浅見要	石倉町三八七	五〇四七七	自治会長
石倉町中部	浦野鶴雄	〃 一一二七	五〇四二二	
石倉町中部	金井喜好	鳥羽町八一	五〇二六五	自治会長
鳥羽町東部	富所惣司	〃 八七六	五〇三二〇	
鳥羽町西部	阿部馨	〃 五八	五〇三二九	自治会長
問屋町	深津義男	〃 二〇三	五〇三三二	自治会長

(東地区)

町名	氏名	住所	電話	備考
東箱田	石坂弘一	箱田町七〇二	五〇五三九	自治会長
後家	石坂正雄	〃 一五九	五〇七三八	

小相木町	梅山栄五郎	〃	七六一	五二二〇九元	自治会長
飯野繁雄	小相木町六八一	〃	五二一五五	自治会長	
朝日が丘町	朝日が丘町八一	〃	五二二六九	自治会長	
光が丘町	光が丘町二六	〃	五二二七五	自治会長	
上野新田町	倉林英穂	〃	五二五七三	自治会長	
倉林東洋	〃	〃	五二六八六	自治会長	
倉林重吉	〃	〃	五二七〇〇	自治会長	
下新田町	牛込 亘	〃	五二七六五	自治会長	
牛込 武	〃	〃	五二八三五	自治会長	
吉野秀一	〃	〃	五二九三七	自治会長	
下新田町東陽	萩原 好	下新田町四〇八九	五二九三〇	自治会長	
下新田町南	太田一男	〃	五二九五七	自治会長	
大根根町	今井 寿	〃	五二〇四二	自治会長	
稲荷新田町	高橋順造	〃	五二七三四	自治会長	
川曲町	中里 計	〃	五二四八〇	自治会長	
小根久保政雄	〃	〃	五二五三二	自治会長	
前箱田町	中里武男	〃	五二四八八	自治会長	
近藤熊男	〃	〃	五二四九七	自治会長	
西箱田町	柳沢文平	〃	五二八七〇	自治会長	
石坂辰雄	〃	〃	五二四九四	自治会長	
田村義一	後家町一〇〇	〃	五二六三八	自治会長	
石坂栄男	〃	〃	五二七二〇	自治会長	

古市町	黒崎鉄雄	古市町一三五三	五二四六二	自治会長
新前橋町	野本 茂	〃	五二〇〇六	自治会長
関口好治	新前橋町九二	〃	五二三八六	自治会長
江田町	小野里 普	江田町六六	五二二七三	自治会長
富沢久一	〃	〃	五二八八三	自治会長
歴史散歩の会	名嘉真宣喜	大根根町一五二二	五二二七三	東歴史散歩の会

民俗文化財調査員 分担表

委員長 近藤義雄 石造物

副委員長 井田安雄 地区概観

調査員 桑原 稔 民家

井野誠一 人の一生

岡野 健 社会生活

畠村真也 民具

新保一美 芸能

時枝 務 信仰

神宮善彦 生産生業

菊地誠一 口承文芸

小暮正剛 年中行事

横田雅博 衣食住

田口智彦 民俗知識

佐藤 健 交通交易

池田 修 民家

調査参加職員(事務局以外)

昭和六十三年 度 埋蔵文化財係 鈴木雅浩

話者 一覽表

(元総社地区)

大渡町

堀内 正夫 大正一五年 四月一日生  
 戸所 啓治郎 大正 五年 六月二日生  
 並木 作太郎 明治三四年 生

総社巢鳥

新木 房吉 明治四五年 二月一八日生  
 川田 ヒナ 明治四二年一〇月二九日生  
 松田 ヤマ 明治四五年 一月二五日生  
 伊藤 好郎 大正一一年二月三〇日生

総社大屋敷

臼井 一夫 大正一一年二月三〇日生  
 大山 辰 大正 六年 六月六日生  
 大山 花枝 大正 二年 三月二日生  
 大山 伊三郎 大正 六年 七月八日生  
 大山 貞雄 大正 五年 五月二四日生  
 大山 昭光 大正 四年 一月三日生  
 須藤 尊治 明治四四年 六月二四日生  
 山我 誠司 昭和 六年一〇月八日生  
 大山 陽太郎 昭和 六年 五月五日生  
 大山 夕ミ 明治三九年 六月二日生  
 阿部 嘉和 昭和 二年 一月一五日生

総社町新田

中山 一良 明治三五年 五月八日生

中島 運作 大正 七年 五月二四日生

三浦 宏 昭和 四年二月六日生

根岸 敏雄 大正一五年 九月一五日生

吉沢 保 昭和 四年 九月一九日生

吉沢 四郎 大正一四年 三月一五日生

山川 サク 明治四四年 八月三〇日生

山宮 ナヲ 明治三七年 九月一六日生

中山 コウ 大正一一年 四月二日生

山川 さく 明治四四年 八月三〇日生

山川 尚祐 明治四四年 一月一日生

総社町粟島

神谷 雄二 明治三六年 一月二五日生

石井 徳治郎 明治四〇年 二月二四日生

総社町桜が丘

松本 叶農二 明治四三年二月一日生

平井 清志 大正 九年 一月一八日生

大谷 富治 大正 七年 生

総社町植野

大久保 トモ 大正 二年 一月四日生

大谷 クラ子 明治四三年一月三日生

立見 徳太郎 明治四〇年 一月三〇日生

立見 新一 大正 五年一月三日生

榎田 増見 明治四三年二月九日生

榎田 行雄 大正一三年 四月二四日生

保坂 鹿蔵 大正 三年 一月一五日生

立見とり  
明治四二年 生

総社町立石  
高橋岩男  
大正六年二月十九日生

(清里地区)

池端町  
矢島なみ  
大正元年一月二日生

新井清江  
大正一〇年三月一日生

斉藤雅男  
明治四三年八月三〇日生

高瀬和志郎  
明治三八年五月九日生

蜂巢義雄  
大正九年一月三日生

鹿島ハルエ  
明治四五年三月一日生

小曾根ヒチ  
大正九年四月一三日生

上青梨子町

笹洋周作  
大正四年七月二日生

清水嘉明  
大正一五年六月二六日生

笹沢イマ  
大正五年三月二九日生

湯浅ヲヨ  
明治四四年七月三一日生

笹井久義  
明治三八年六月八日生

湯浅茂  
大正九年六月二三日生

笹沢善一  
大正一二年八月八日生

笹沢伊勢蔵  
大正一一年一月二日生

青梨子町

関根卯三  
明治三九年一月三日生

坂部定市  
明治三四年一月二四日生

青梨子町前原

松下雅輔  
大正二年九月二五日生

松下正次  
明治四〇年二月二日生

小池平三郎  
大正三年八月一四日生

高橋梅二  
明治四五年六月一五日生

(元総社地区)

元総社町

黨高十郎  
明治三七年五月二日生

井田弥寿雄  
大正一四年生

伊藤五十次  
大正四年四月二日生

松田徳雄  
大正六年五月一六日生

松田能夫  
大正五年二月四日生

松田カネ  
大正三年九月八日生

木部富平  
明治四三年一月二日生

赤石豊  
明治四四年一月一四日生

元総社四区

小野里林作  
明治四五年七月一日生

上原ブン  
明治三五年二月三日生

伊藤勝雄  
大正元年一月一〇日生

城田寅八  
明治四五年七月二八日生

瀬下タミエ  
昭和二年八月二日生

野村左京  
明治三九年九月二日生

賀川酉蔵  
明治四二年一月三日生

都木節章  
明治四三年一月一日生

上原一郎  
大正八年六月一九日生

大渡町

戸所好雄  
明治三五年八月一三日生

小沢延由  
明治四三年一月六日生



並木ユキ 大正 四年 四月二十五日生  
並木ぎん 明治 四年 四月 三日生

大友町

城田 洗たけし 明治 四年 生

松村 圓太郎 大正 二年 生

篠崎 満寿雄 大正 三年 生

長尾 ヌイ 明治 三年 生

岡田 ミカ 明治 四年 生

石倉町下石倉

近藤 貞雄 大正 五年 七月二十七日生

近藤 要造 明治 四年 一月二十五日生

近藤 幸一 大正 五年 一月三十一日生

鎌田 和夫 昭和 四年 一月九日生

石倉町上石倉

近藤 充郎 大正 一年 二月二十六日生

角田 敬郎 昭和 四年 一月九日生

鳥羽町東部

金井カ子 明治 二年 六月二十四日生

金井梅次 大正 一年 八月八日生

金井ユミ 大正 五年 一月十一日生

金井ハル 大正 二年 七月十五日生

金井武徳 昭和 四年 三月二日生

鳥羽町西部

阿部 馬吉 明治 三九年 五月九日生

小野里 勝己 大正 四年 四月十七日生

(東地区)

東箱田後家町

齊藤 クラ 明治 三八年 三月 二日生

石坂 嘉夫 明治 三八年 四月 五日生

石坂 栄男 大正 三年 一月 二十四日生

西箱田町

長井 作太郎 明治 四〇年 八月 三十一日生

長井 謙吾 大正 二年 二月 二十七日生

近藤 熊男 大正 元年 一月 二十二日生

菊地 ナミ 明治 三六年 一月 二十八日生

長井 忠雄 明治 三八年 九月 一日生

柳沢 文平 大正 一三年 二月 五日生

石原 善平 明治 四〇年 六月 二十八日生

反町 博志 大正 一五年 一月 二日生

長井 与志美 明治 四五年 三月 三〇日生

前箱田町

松本 正男 明治 三六年 八月 十五日生

八木 福太郎 大正 三年 七月 四日生

八木 久雄 大正 八年 一月 二十六日生

八木 トミ子 大正 四年 二月 九日生

八木 ハツエ 大正 八年 二月 二日生

稻荷新田町

飯塚 卯八 明治 三二年 一月 二十八日生

高橋 秀哉 明治 三六年 八月 八日生

田島 由雄 明治 四四年 五月 三〇日生

田島 くめ 明治 四〇年 三月 五日生

小沢 あい 大正 一年 一月 六日生

上新田町

倉林英穂

明治三八年 八月 三日生

中林重吉

大正 六年 八月 二日生

倉林東洋

大正一二年 八月 二日生

下新田町

杉山茂

明治四〇年 九月 四日生

杉山さと

明治四三年 一月 一日生

杉山うた

明治四一年 一月 三日生

牛込新助

明治三三年一〇月 九日生

松下市郎

大正 元年 八月 二日生

小相木町

飯野久万吉

明治三九年一〇月 二四日生

梅山右一

明治三九年一二月 二日生

梅山初松

大正 二年一二月 八日生

上原泰真

昭和 二年 三月 一八日生

飯野繁雄

大正一四年 一月 一八日生

梅山栄五郎

大正一一年 八月 一五日生

梅山普太郎

大正 二年 七月 二〇日生

飯野ゼン

明治三八年 二月 一日生

佐京ミツ

明治三九年 二月 二日生

古市町

飯野三代治

明治四〇年 四月 一六日生

柳沢系次郎

明治三八年 九月 二四日生

飯野和助

大正 九年 一月 九日生

金古橘

明治四三年 五月 一六日生

金古陽

大正一三年 四月 六日生

高橋サト

明治三一年一二月 一〇日生

金古カツ

明治四二年 一月 三十一日生

野本リヨ

明治四四年 四月 二日生

野本茂

大正一〇年一〇月 二日生

南雲豊明

大正 九年一〇月 一六日生

真塩和三郎

大正一四年一〇月 二日生

真塩光夫

昭和 三年 九月 二日生

黒崎スイ

明治四三年 六月 一六日生

江田町

小野里照親

明治三六年一〇月 二九日生

小野黒トシ

明治三五年一〇月 一日生

小野里ミ子

明治三六年一二月 一九日生

富沢栄太郎

明治三六年 九月 二〇日生

真下喜美枝

昭和 三年 生

小野里兼助

明治三一年 生

# 利根西の民俗 目次

序  
経過  
話者 一覧表

## 第一章 調査地域概観

一、地区概観	一
二、社会生活	二
三、衣食住	六
四、生産・生業	二
五、信仰	三
六、人の一生	七
七、年中行事	三〇
八、口頭伝承	三三
九、その他	三六
十、まとめとして	三三

## 第二章 社会生活

一、村の概況	三三
二、村の構成	三六
三、青年団と子供組	四〇
(一) 青年団	四〇
(二) 子供組	四三
四、家族生活	四六
五、その他	五七

## 第三章 衣食住

一、衣服	五五
(一) 服装	五五
(二) かぶり物	五七
(三) 履物	五七
(四) 雨具	五七
(五) 理髪・化粧	五八
(六) 染色・機織り	五九
(七) 寝具	五九
二、食物	五九
(一) 食糧	五九
(二) 食品	六〇
① 主食	六〇
② 代用食	六一
③ 副食	六一
④ 祝祭食品	六一
⑤ 嗜好品	六二
(三) 調味料	六三
(四) 保存加工	六三
(五) 食制	六三
① 普段の食事	六三
② 年中行事の食事	六三
(六) 飲食関係用具	六七

三、住居	六八
(一) 屋敷取り	六八
(二) 間取り	六九
(三) 建築工程と儀礼	七一
(四) 暖房・照明	七五
第四章 生産・生業	七七
一、農耕全般	七七
二、水田	八〇
三、畑作	八三
四、養蚕	八三
五、諸職その他	八五
第五章 交通・交易	八七
一、交通	八七
二、運搬	八九
三、交易	八九
第六章 信仰	九〇
一、家の神仏と信仰	九〇
二、村の社寺と信仰	九五
三、明神様	一〇七
第七章 石造物	一〇八
清里地区	一〇八
総社地区	一〇七
元総社地区	一〇六
東地区	一一一
第八章 民俗知識	一一三

一、しつけ・作法・禁忌	一一三
二、医療・衛生・保健	一一九
三、卜占・まじない	一二三
四、天文・気象	一二五
五、動物・植物	一二九
六、その他	一三〇
第九章 芸能・娯楽	一三〇
一、神楽・獅子舞	一三〇
二、歌謡	一三七
三、門付其他	一三七
四、その他	一三七
野良犬今昔	一三〇
第十章 人の一生	一三〇
一、産育儀礼	一三〇
(一) 子授け	一三〇
(二) 妊娠から出産まで	一三〇
(三) 出産	一三三
(四) 子供の成長と祝	一三一
二、厄年・年祝儀礼	一三六
(一) 厄年・厄除けと呪法	一三六
(二) 年祝い	一三八
(三) 余暇と娯楽	一三九
三、婚姻儀礼	一四〇
(一) 青年期の動向	一四〇
(二) 婚姻の条件	一四〇
(三) 婚姻の成立	一四三
(四) 結婚式	一四九
(五) 婚礼後の習俗	一六一

四、葬送儀礼	三六四
(一) 葬式の習俗	三六四
(二) 墓制	三七三
(三) 死後の供養	三七五
(四) 死霊	三七七

第十一章 年中行事

一月	三七九
二月	四〇〇
三月	四〇四
四月	四〇五
五月	四〇七
六月	四〇八
七月	四〇九
八月	四一三
九月	四三〇
十月	四三二
十一月	四三三
十二月	四三五

第十二章 口頭伝承

一、昔話	四三四
二、伝説	四五四
三、世間話、怪異	四六四
四、その他	四九八

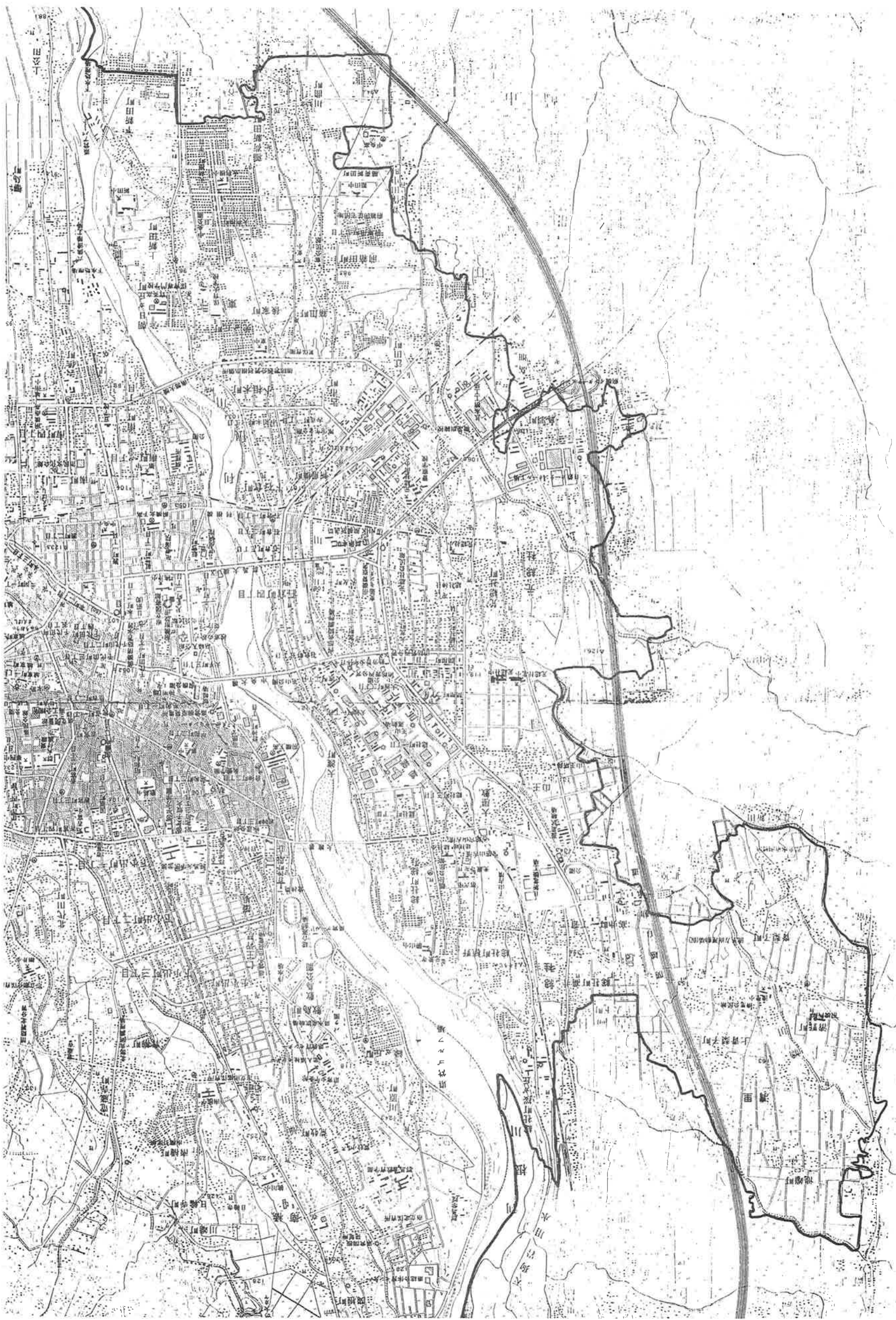
第十三章 前橋利根西の民家

一、総論	五一四
(一) 調査の目的	五一四
(二) 調査対象民家	五一四

(三) 調査の方法	五四四
二、農家	五四五
(一) 平面の形式	五四五
(二) 編年の指標	五四五
(三) 三間取りの民家	五四八
(四) 食い違い四間取りの民家	五四〇
(五) 不整形田字間取りの民家	五三三
(六) 整形田字間取りの民家	五三四
(七) 五間取りの民家	五三一
(八) 六間取りの民家	五三三
(九) 多間取りの民家	五三八
三、町家	五四〇

第十四章 江田の習俗歳時記









# 第一章 調査地域概観

## 一、地区概観

今回の民俗調査（昭和六十三年度・平成元年度）の調査対象地域となったところは前橋市に合併前は、群馬郡に属していた。

昭和二十九年に「町村合併促進法」にもとづいて、東・元総社・総社の二村一町が前橋市に合併し、翌三十年に清里村と新高尾村の一部が合併した。

この地域は、利根川の西南側に位置し、地形・地質上から「前橋台地面」と称せられ洪積台地の上に形成されている。多少の起伏はあるが、ほとんど平坦な台地面である。

原始時代の遺跡は少なく、あまりはつきりしないが、古墳時代に入ると、多くの古墳が築造された。本地区内には国指定史跡となつている古墳が三基あり、また、上野国国分寺跡と山王塔跡も同じく国指定史跡となつている。古墳時代から奈良・平安時代にかけて古代文化の栄えたことを知ることができる。特に、国衛は元総社付近がその所在地と推定されている。平安時代には、上野総社神社も元総社の地に建てられ、古代における政治・文化の中心地として、上野国の核としての役割を果たしてきたのが当地域であった。その当時の様子は、奈良・平安時代の集落調査の結果によっても明らかにされている。

その後、中世の戦乱をへて近世に至り、中世以来の元総社の蒼海城

には諏訪氏が配置されるがのち秋元氏にかわる。秋元長朝は総社（植野の地）の地に新たに総社城を築き、ここに城下町を形成した。総社五カ町（粟島・鍛冶・巢鳥・町屋敷・新田町）の誕生である。この五カ町とそれ以前から存在していたといわれる大屋敷・昌楽寺・野馬塚の三村を合わせて総社町と称することになったという。いわゆる旧大字としては珍しいムラの成立ちであり、現在の町名の呼称もこのような歴史によるものである。

秋元長朝については、天狗岩用水の開さくの功労者として知られ、この用水のおかげで一万余千石の新田ができたという。長朝没後百五十年近くたつてから、この用水関係地の農民が「力田遺愛の碑」を建てている（安永五年（一七七六年））。この碑は総社町の光厳寺境内にあり県指定史跡となっている。水をめぐる領主と領民の珍しい話であり、本文中にも「天狗岩用水の話」としてこの伝承が収録されている。

歴史的には、古代以来、本県でもいち早く開けたところで、前述のように、政治・文化の中心地をふくむ地域である。その地を舞台として展開された「民俗」の一部を今回の調査でまとめたものである。

さて、この地域の生産・生業関係の様子をみることにする。「民俗」を支えていた経済的背景がどうであったかということである。（明治十年頃の「郡村誌」による）

大体のところ、もとの東村地区は田畑の割合をみると田が畑より多い。同元総社村地区は石倉・大渡は田が多い。同清里村は断然畑が多

い。旧総社町も同様畑が多いところ。

こういう経済のしくみが生活を左右していたはずだから、民俗にも影響を与えていたことが考えられる。本文中にあるカラスが弁当をみて、「アワか、アワか」といったという話とか、「二階で米をつくる」という話は、むかしのオカバのことをいったものである。ふだんから、生活のちがいを意識していたことがわかる。

むかしは、飯のたしにたくさん粉食を食べた。寒いころの夕飯におきりこみをよく食べたという。そんなとき、汁の中にたくさん芋・大根などをきりこんで、めんは少かつたという。そんなことを「貧乏人のこたくさん」といったという。(元総社)

むかしはどこでも米を大切にした。「いもはかげの俵」という言葉で表現していた。

民俗はむかしの生きざまをそのまま表現している。世の中が変ると、民俗も変っていくのである。

## 二、社会生活

「社会生活」についてはムラ(大字)と家の二つのことを中心にしてまとめてある。

まず、ムラ(大字)については、各大字の概況を報告し、そのあとにムラ(大字)の構成について、組織や小組の機能を中心に報告している。

この中で特色的な事項についてまとめてみる。

各ムラ(大字の町)ごとの成立事情とか地名の由来については、丹念にまとめられている。あまり表にでないムラの歴史を知る上で興味深い。最近、土地改良事業等の進行する中で、小字等が消えていく

運命にあるという。地名の記録は現在緊急を要する仕事であるといえよう。一部の地区については、屋号の資料が報告されている。かつての地域の生業を知る手がかりとなろう。

ムラの歴史の中で珍しい事件があった。上新田・下新田の旧地であったとされる末風村は、消えた村として珍しい例である。

明治十年の「郡村誌」によると、上新田村と下新田村とは古くは青木庄惣社郷に属していて、「永祿年間末風村ト称シ、慶長年間分ツテ上下新田ノ二村トナス」とある。今でも上新田の字地として末風の名が残っている。

この村は、本文中にあるように、天明三年(一七八三)の浅間山の大噴火のときに泥流のために押し流されてしまったのである。末風村については、別項の中にも紹介されている。

ムラの構成の中ではとくに目立ったことはない。小さいことではあるが、小相木のハッチョウグミのことは珍しい。その内容は、現在の隣保班とほぼ同じだというが、その名称のいわれについては不明である。ゴチョウ(伍長)に対するハッチョウ(八長)であろうか。

このほかに、ムラのフレ役である定使いのことや、冬季の火の番(夜番・夜警)のことが注目される。火の番のための番小屋もあったという。前代の名残りであろう。

ムラの機能については、共同作業(村人足)、近隣の互助関係のこと、ワラジヌギ・八丁じめ・番太・農休みのことなどが注目される。

このうち、八丁じめについては、この地域では七月の農休みの最終日を実行日としている。八丁じめをムラ境に立てて、厄病神がムラ内に入ることを防ぐ行事である。報告をみると八坂神社(天王様)の信仰と百万遍の信仰が合体しているとある。この形は今回の調査地域にひろくみられることであるが、この形のひろがりについては、残

念ながらはつきりしない、新田郡尾島町世良田の八坂神社では、まつりの前（七月一日、まつりは七月二十五日）に八丁じめをムラ境にはる（たてる）。厄病除けの行事として、八坂神社の信仰の一つといえるのであろうか。

なお、青梨子では厄病除けとして、ムラ境に大ぞうりをつるしたことがあるという。この形は、県内でも各地（利根郡利根村・月夜野町・勢多郡東村・藤岡市日野地区など）にみられるものである。

番太については、かつて穴掘りとか地域内の治安維持などの仕事に従事していたという報告があるが、現在では全くみられない。江戸時代以来の名残りであったと思われる。

ムラの交際関係では、かつては、ムラハチブの習慣があったという。公共物を盗んだ場合にこの処罰を受けたという報告がある。

次に、契約という行事について注意してみる。本文には青梨子の例があがっている。正月に隣組単位に行っている。ワカインユの遊びのようなことである。総社町山王の報告によると、ワカインユゲイヤクといて、秋のつごうのいい日に大世話人の家で行なったとある。新加入者を承認する日でもあった。総社町の昌楽寺廻青年会の記録（明治三十七年一月二十四日）と、同会の出納簿（大正八年分）が資料としてあげられているが、契約の様子と青年会の活動の様子を知ることができる。なお、総社町山王では、ワカイシユが一月にウタイゾメを行ったとある。

元総社における契約はこれとはすこし内容を異にしている。阿弥陀寺の場合をみると、ここでは、契約を春と秋の二回行っていたという。二月の契約は、節分の翌日であったが、これはよそへ奉公に行っている者が帰ってくるので、組内の顔がそろうので、あつまつて会食をする行事であったという。特にきまつた行事はなかった。宿は交代。

十月の契約は村祭りの翌日の十月十日に行っている。宿は交代。男衆が一戸一人ずつ参加した。ぼたもちをつくったり、赤飯をつくったりして、飲んだり食ったりした。この日、組内の役員を選挙をしたり、行事をきめたりした。今は町内会。

むかしは、一月二日にウタイゾメをやったという。（元総社）この契約という行事は、県下では北毛や西毛地方に広くみられることである。現在では町内会議という形をとっているが、これも開かないところもある。班長会議で代行しているという。

ウタイゾメについては、かつての婚禮の席で、ワカイシユが謡をしたが、その稽古をした。文字通りその謡い初めであったが今はないという。中毛や東毛地方では、西毛の契約にあたる会合をウタイゾメといて、一月に行ってきたところが多い。

年齢集団については、子供組と青年会の組織がはつきりしていた。子供組は、かつての小学生の集団で、道祖神や地藏まつりに参加していた。このことについては「年中行事」のところにくわしい。

青年会（ワカイシユ組）については、その活動記録の残っているところもある。青年会の活動として注目されるのが、ワカイシユグミの行事である。仲間があつまつて会食をし、役員改選や、村内のしきたりについてのとりきめなどを行っている。

また、一月二日にワカイシユがウタイゾメを行っていたところもある。このことは、利根東の地区と共通した名称である。内容は若干異なる。

むかしはムラの青年たちが、ワカイシユという立場で、ムラ内の婚礼に際して一定の権限をもっていたという。古い時代にワカイシユが地区内の娘の管理権をもっていたという名残りであると考えられる。

このほかに、試作地の耕作や、道普請を行ったり、地藏まつり、

天王まつりの世話など、ワカイシユの活動は活発であった。

ワカイシユが夜遊びに出かけたという話もよく聞く。むかし、養蚕のさかんであったころ、よそから娘さんが蚕の手伝いに来ていた。そこへ、ワカイシユがよく夜遊びに行つたところ。桑畑で出会つた娘さんと約束をとりつけて夜バイに行つたところ、その娘さんは契約がすんで、その日の朝うちへ帰つてしまつたという残念話も聞いた。

(元総社)

ワカイシユは、夜遊びのかねほしきに、うちの米俵から米をぬきとつたり、ゆたんの中からまゆをとりだして売つて、小づかいをためたという。柿ぬすみによそのうちの柿の木にのぼつていたら、下におやじさんがいつまでも立つていて、まいつたという笑いばなしもある。

(元総社)

むかし外風呂が庭にたつていた。その中の湯をすてて、水を入れておいた。そこへ娘さんが入つて困つているのをみて喜んだりしたという。むかしのワカイシユは、いろいろのいたずらをやつていたのである。(下新田)

次に、イエの生活についてみる。

この関係の報告資料は少ないし、特にとりたててみるほどの目立つたことはない。

若干、補足資料をあげてみる。

まず、同族集団についてみることにする。この地区では、同族集団については、イツケとかイチマケといつてゐる。

若干の事例をあげてみる。

ムラうちで、同じ苗字のうちのことをイツケとかイチマケという。イツケという言葉の方を余計つかつてゐる。

むかし奉公にきていて、そのムラに住みついて、主家の苗字をもらつた場合があつた。いわゆるワラジヌギということである。この場合もイツケという。しかし若干の但し書きがついてゐる。

なお、苗字をもらわないうでワラジヌギをする場合もある。(西箱田)  
分家については、ふつう、シンタクといつてゐる。分家は一般的には、本家よりはなれたところ(本家より下)に出るといふ。悪い土地をもらつて出たといふ。分家にでた最初の当主が、分家の先祖になる。

(小相木)

ふつうは結婚して二、三年たつてから分家させてやつた。農家の場合は、五反歩くらいの土地を分けてやつた。大きい農家だと、一町歩くらいに分けたといふ。

分家に出た場合は、墓も家紋も本家と同じである。冠婚葬祭のときは、本分家おたがいに親戚代表の役をつとめた。

本分家のつきあいについては代がかわつてもかわらないとした。

(小相木)

隠居についてはあまり例がない。形としては、楽隠居とふつうの隠居とあつた。楽隠居は、年をとつて楽にしてやりたいといふので、息子が屋敷内とか近くに別棟をたてて隠居させる形である。毎日の生活の面倒は、息子(本家)がみるというものである。これは、ムラ役では一人前にあつかわれぬ。もう一つふつうの隠居は、家族と不仲になつて、年寄夫婦が家を出て別居する形である。一般的には、当主が後妻をもらつたところ、家族と不仲になつて、やむを得ず別居する形をとる。この場合には土地をもつて出る。この土地のことをインキョメンと呼んでゐる(楽隠居でも土地を持つて出る場合がある)。隠居の方で好きなところの土地を分けて出るといふ。この形の隠居については、一戸前の扱いをする。

イツケとかイチマケと呼ばれる同族は、同じ形の家例を守っている。それは、正月三が日を中心とするきまりである。いくつかの例をあげてみる。

○下石倉の近藤家と都木家では、元旦に朝風呂に入ってから、お正月様が朝の六時にやってくるというので、餅の間にイワシをはさんで、家族全体で食べる。これは元旦のときだけのこと。

○西箱田の石原家では、正月三が日の朝うどんをつくってあげる。この間、餅を食べない。餅は四日から食べはじめ。

あさげ、男衆が井戸水（若水）を汲んで、うどんをゆでたり、お茶をわかしたりした。

○西箱田の長井家では

一日の朝はそば

二日の朝はご飯

三日の朝はそば

四日の朝は餅

四日の朝、坊さんが年始に来ないうちに、三が日供えたものをさげて、おじやにして食べた。

○西箱田の反町家では、三が日の間、朝雑煮をあげる。四角の切餅を細く切って、焼いて、二切れずつ、めんぱに入れてあげる。これを七草の朝までさげないで置いて、七日の朝さげて、七草がゆの中に入れて食べる。

○下新田の杉山家では、正月三が日はそば家例。三が日は、朝そばを

あげる。夜はご飯をその上にのせてあげる。それを三日間続ける。三が日の朝、家人はそばを食べる。昼は何を食べてもよい。夜はご飯。

四日の朝、三が日正月棚にあげたものをさげてとっておく。それを七草のおじやに入れて食べる。

なお、杉山家では、五カ日の間、神棚に線香をあげる（香炉をおく）。仏様には二本ずつだが、神様には一本ずつあげる。朝、そばをしんぜるときにあげ、門松のところにも一本あげる。

次に、屋敷神についてみることにする。このことについては、「住居」のところや、「信仰」のところでもとりあげてあるので、ここでは、簡単にその内容についてみることにする。

屋敷神はその家にとつても、一族にとつても重要な神である。この地区では一族でまつるいわゆる氏神的な神様は見当らない。それぞれの家で、屋敷神として稲荷様をまつっている。その場所は、屋敷のイヌイのすみである。各家庭では稲荷様を屋敷神としてまつっている。この祭日は一家によってちがっている。小相木の梅山家では十二月一日、飯野家・中島家では十一月二十八日（もとは十二月の初午の日）。ところが、家によつては、屋敷に先祖をまつっている場合もある。このことについては、「信仰」のところでもふれておいた。県内でも群馬郡倉渕村などに同様の例がみられ、屋敷神についての再検討をする必要があるように思われる。

最初に家族の私財について若干ふれてみる。本地区では、私財関係の言葉としてはヘソクリとかホマチが一般的で、他に、コセツクリとかコデといういい方もある。女性の私財は県内他地区と同様に、養蚕の中心となつて働くので、くずまゆを公認のこづかい用として与えて

いる。

### 三、衣食住

「衣食住」については資料が少ない。全域にわたる調査ができなかったので、一部の地域の資料をあげておく。

#### 衣服について

「衣服」については、その材料や形あるいは用途によつて、一般的には大きく三つに分けることが出来る。

晴着、ふだん着、仕事着の三種である。今回の調査対象地区では、大体次のように五つに分けている。

もんつき……一番いい着物のこと。絹でつくった。女は縮緬、男は塩瀬が一番いいという。嫁は江戸褌、婿は紋付袴を着用した。もんぶくともいった。(鳥羽)

よそいき……二番目にいい着物である。男女とも絹じまあるいは銘仙でつくった。絹物であった。(鳥羽)

ちよいちよ衣着……三番目の着物。木綿に柄のついたものを着た。よくもないし、悪くもないという程度のもの。町へおつかいに行くときに着るので、マチギ(町着)ともいった。見舞に行くときにも着た。(鳥羽)

ちよいと人中出现るときに着た。会議とか買い物に行くときなどに着る。木綿でつくる。(元総社)

ふだん着……四番目の着物。ふだん着ているもの。木綿でつくった。(鳥羽)

野良着……仕事をするときに着るもので、木綿でつくった。(鳥羽)  
仕事着ともいう。

このほか、一番いい着物のことは、イチゲンギモン、よそいきのことは、オキヤクギモンというところもある。(総社町)

ちよいちよ衣着のことを、石倉では前橋着ともいつている。むかしは、前橋の町まで買物に行くときにあらためて着たからという。

次に、年齢による着物のちがいについてみる。その大きさによつて、次のようにいつている。

一ツ身、三ツ身、四ツ身、本裁。

一ツ身はあかんぼうから三歳くらいまで着る。

三ツ身はその上で、四歳くらいのときに着る。四歳になると、「三ツ身を一度は着るものだ」といつた。これを着る期間は短い。

四ツ身はその上で、十三歳くらいまで着た。

本裁ちは大人の着物。ときによつては(体格のいい子)本裁ちを縫いこんで子供にさせておいて、大きくなると縫いこみをとつて着せたという。(鳥羽)

季節による着物のちがいは、あわせとひとえもんの区別があった。あわせは裏がついている着物で、寒い時分の着物。

ひとえもんは裏地のない着物で暑い時に着た。

あわせとひとえもんのきりかえ(衣更え)は、農家の場合は、それほどはつきりしないという。ふつうは、あわせからひとえにきりかえるのは五月から六月にかけてのころ。ひとえもんからあわせになるのは十月のはじめのころ。

寒くなると綿入れを着た。それは十二月から二月ごろまでのこと。特に寒いときはふだん着として、綿入ればんでんを着た。

「衣服」関係のことで、本文にないことを補足的にあげておく。

諺に「一見葬礼火事見舞、そのほかちよいちよふだん着」というのがある。これは、一つの着物を着て、どんな場合でも間に合わせる

ことについていう。自分のことを謙遜するという言葉でもある。いい着物を着ているときにいう。(鳥羽)

むかしの年寄の人は、「おおめ(絹と木綿をあわせしたもの)の着物が一つあればどこへでも着ていけた。あらたまったところにも通用した」といったという。(青梨子)

「羽織ごろ」という言葉があった。羽織は元来冠婚葬祭など、あらたまったときに着るものであった。それで、羽織をよく着ていて、仕事をあまりしない人のことを、「羽織ごろ」といった。総社町植野はかたところ、「羽織ごろ」といわれていたという。(元総社)

むかしは、あらたまったところへ行くときには羽織を着ていかなければならなかった。ふつうでは、羽織を着ることはなかったのである。

「鳥羽のすつぼうぎもんと菅沼のせんちん羽織」という言葉があった。鳥羽のすつぼうぎは、鳥羽ばってんともいわれた。このはるんてんが、ムラの中では羽織の役目を果たしたし、ふだん着でもあった。鳥羽の人はこれをよく着たという。鳥羽の人は、よそへ行くときでもない羽織を着なかつた。鳥羽ばってんで間にあつたものという。菅谷は群馬町の一大字であるが、その人はむかしは格式ばつていて、羽織を着て威張つていたという。便所に入るにも羽織を着ていたので、「菅谷のセツチンバオリ」などといわれたという。菅谷は生活に余裕のあつたところという。

鳥羽では、むかしは自家用として、「鳥羽しま」を織つていた。機織質は身上に入れたという。五、十の日に高崎の市へ持つて行って売つてきたものという。

このように、むかしの人は、「衣服」の面にまで、土地柄をあらわす諺によって、むかしの生活ぶりを伝えていたのである。

### 食べ物について

「食べ物」については、主食やかわりものを中心に、本文中に報告がある。また、ふだんの食制については、四季に分けて一表にしてあり、年中行事関係の食べ物についても、二カ所の事例を報告してある。これによって、本地区の大凡の食生活の様子を知ることができる。

本項では、本地区の食制(食生活)をあらわす特徴的な事項をとりあげてみることにする。

食べ物については、むかしは農作物との関係でちがいがあつた。本地区は畑作地帯と水田地帯に大別される。北部の地域は大むね畑作地帯で、南部が水田地帯となっている。北部の畑作地帯では、別項にあるように、養蚕がさかんで、「二階で米をつくる」とまでいわれ、米はまゆを売つて、買つて食べていたという。そのため、かつては、まわりの人びとからややちがつた目でみられていた。世間話にこんなことがある。

オカバの人は、アワなどを食べていたので、体が軽くて、風呂に入るときは、石を抱いて入らないと浮いてしまうだろうと、からかわれたという話もあつたという。(青梨子)

また、べつの話では、畑で弁当を食べているのを、木の上から見ているカラスが、「アワか」と馬鹿にして鳴いたという話もある。

(元総社)

昭和二十年代より前は、ふだんの食事は麦飯であつた。各地区からの報告にもあるように、はじめはヒキワリをまぜたヒキワリメシであつた。その割合は、米麦が五分五分から米四に麦六という家もあつたという。その後、オシムギに変わったが、それは水車に代つて、いわゆる電気車が出現してからのことで、その時期は、地区によって若干のちがいがあつた。昭和の年代に入つてからのことである。

第二次世界大戦から戦後にかけて、食糧事情は悪化した。イモ飯やムギ飯のひどいのを食べたこともあった。現在では米ぞっきの飯である。かつては、米の飯は一年のうち数えるほどしか食べることで済まなかった昭和二十年代ころまでの生活とは、大きなちがいである。

「貧のかたぐい」という話がある。食糧の保有に余裕がない家では、米がとれば米ばっかり、麦がとれば麦ばっかり、イモがとればイモばっかりというように、そのときどきにとれたものを食っていたという。それだから、「たとえひきわりめしでも、さんぞ食えればありがたいと思え」と、親からいわれたこともあったという。(元総社)

むかしと今では、食べ物関係のことも大きく変っている。右のように、むかしは珍しかった米の飯も毎日の食べ物となり、なかには米食からはなれている人たちも多い。

炊飯の仕事も大きく変っている。釜炊きから炊飯器の時代へと移っている。それに件って、食事の習俗もむかしの面影はほとんど消え去っている。それは、衣食住全体にもわたることであり、生活全般の様変わりの一つである。米櫃を一人で管理して嫁さんに手をふれさせなかつた姑さんの話は、遠い昔語りとなつた。へつつい(かまど)もいろいろもほとんど姿を消してしまつた。

粉食についてみると、かつては、やきもち、まんじゅう・うどん・おつきりこみ・ねじっこ・そばなど、粉食を食べる機会は多かつた。

この中で、おつきりこみは、群馬県全体で粉食(小麦粉)として第一ともいふべき食べ物として知られる。内容はほとんど全県同じであるが、その名称や地域によつてちがう。この近辺でいえば、利根西の地域ではおつきりこみあるいはおつきりこみという。それに対して、利根東の地域では、おつきりこみとも、にぼうとうともいっている。名称のちがいはともかく、おつきりこみは、冬場を中心とした夕食として、

古くから親しまれてきた食べ物である。

このほか、粉食の一つにみつこがある。それも小麦粉でつくる。小麦粉を水でこねて、にぎつて汁の中に入れて食べるもので、簡単にできるので、おもに夕食のおとき、飯のたしとして食べた。それは手早くできるので、昼食のときにもつくつたという。

間食については、おにぎりややきもちなどが主であつた。やきもちをよく食べたという。午後の間食については、コジョウハンというが、むかしはオコエといつた。オコエといういい方は、旧群馬郡地方に分布している方言である。この地方に分布しているもう一つの粉食関係の言葉に、シヨクシンというのがある。それは、悪い米(くず米)を石臼でひいて粉にして、だんごをつくり、それをあんこ汁の中に入れてまぶしたものである。米の粉でつくつただんごのことをシヨクシンとよぶ。ふだんでも、気がむくと、「シヨクシンでもして食うべえや」といつてつくつて食べたという。(川曲)

特別の食制として、年中行事のときの食べ物(食べ物の供え物)については、青梨子と古市の報告がある。それをみると、かつてのハレの日の食制を知ることができる。

ごく大まかに、餅とまんじゅうの役割分担をみることができる。餅は秋から冬にかけて多くつくられる。まんじゅうは、夏のあつっころを中心にしてつくられている。

むかしからのしきたりで、この日は餅、この日はまんじゅうというように、年中行事に際して、餅あるいはまんじゅうをつくつてあげる日がきまつていたのである。このことは、年中行事の内容と深くかかわつていふことであろう。それぞれが、稲と麦の収穫の時期に関連しているように思われる。麦作関係の農耕儀礼・稲作関係の農耕儀礼に関連して、一方では麦を材料にしたまんじゅう、他方では、米を材料



にした餅をつくって神仏に供えるということである。

なお、農作業を区切る餅として、おこ餅とあぶら餅がある。大正六年編という「元総社村郷土誌」には次のようにある。

(五月) お蚕餅

一名地獄餅ともいひて養蚕の期節に入り益々多忙となり身体を勞することを意味する前祝にして、蚕及び神仏に餅を供へ、心のままに遊ぶ。

十二月十五日 楽餅

あぶら餅といひて年内農仕事を目出度く終りたるを祝ふなり

右のとおり、おこもちが農繁期をひかえて、あぶら餅は農作業の終了を祝してつくることになっている。農作業の区切りを餅をついて祝うところに、餅の役目をみることができ。

なお、うどんとそばについては、そばは祝いごとにつかうが、うどんは祝いごとより、仕事につかうという。(元総社)

## 住居について

「住居」については、別項に「民家」という章を設けて、主として構造面から、本地区の民家を取りあげている。

本節では、民家についての、一般的な習俗面からの報告になっている。内容的には屋敷どり・間どり・建築工程その他となっている。

報告の内容をみると、「民家」の報告に大部分のことをおまかせして、分量的に少ない。そのために、本項では、若干の、基本的事項を補いながらまとめてみることにする。

まず屋敷についてみる。屋敷の広さは一反歩から一反二・三步くらいがふつうで、二反歩もある家は広いほうであった。むかしは、宅地は税金が高かったからなるべく狭くした。その補いとして屋敷林を付

属させたが、地目は山林としたという。屋敷続きとか、屋敷に近いところには野菜畑をつくった。これをせんげ畑と呼んだ。(青梨子)

屋敷の形は、地形に応じたというが、この地域は平坦部だから、自由な屋敷どりができた。一般的に、屋敷の形は、南北に長い長方形であった。(青梨子)

屋敷どりとしては、庭を広くあけるようにして家屋の配置をした。母屋は、農家の場合は屋敷全体からみて、西北のすみに寄せてつくるのがふつう。東南の方角に庭をとった。これは、米とか麦をむしろを敷いて干したからである。大きい農家では一度にむしろ百枚ほどの干しもんをしなければならなかったという。一枚のむしろに大体粗が一斗弱干せたという。そのために、庭は大事にした。小石など粗などにまざらないようにふだんから注意をしていたし、冬はぬかるみにならないようにと、わらをすくってでたしびを敷きつめたりした。

(青梨子)

母屋を中心にして屋敷どりをした。

物置のことは木小屋ともいうが、大体、母屋の東(かいどの東)につくる場合が多い。母屋の前につくる場合もある。大きさは二間×三間くらい。(青梨子・上青梨子)

土蔵は大農家でないとつくれなかった。

屋敷のタツミ(東南)とかイヌイ(西北)にたてた。タツミグラがよいといった(上青梨子)

井戸は母屋の大黒柱より北で西につくれといった。

便所はむかしは内便所のあるうちは少なく大ていの家は外便所であった。母屋の東南に接してつくっていた。大尽のうちでは内便所をつくっていた。むかしは、天井から綱がさがつていて、それにつかまっていけばったという(総社町)。内便所のことはかみちようずばといっ

て、大体、床の間の裏あたりであった。

便所には、ちようずばがみさまがまつられていた。むかし子供のころ、ちようずばへ入つて、つばき・たんをするものではないと注意をうけた。ちようずばがみさまはきたないところにいでもきれいさきだといった。便所をきれいにしておく、下の病しんいにかからないといった。お七夜にあかんぼうをつれて、せつちんまいりすることは、別項に報告のとおりである。(元総社)

かいどは、ふつうはタツミの方南につくつた。鬼門につくることはさけたが、どうしてもつくらなければならぬときは、クチナシの木を植えるといった。(上青梨子)

ツボ山は西南の方角につくつた。ここはふだんきれいにしておけとあった。ここには、ツボヤマ神様がまつられているという。天神様をまつつておく家もある。ツボ山にはモチ・モツコク・モクセイ・マツは植えるものだった。大掃除のとき、大神宮様と仏様は外へ出すが、ツボ山へ出しておいた。

母屋の間取りについては、別に民家調査の報告があるので、くわしくはそちらにゆずる。

母屋についての二、三補足的な事項をとりあげておく。

大掃除は春と暮の二回行った。春のすすきは、四月二十日から二十七日ごろまで。蚕の準備がはじまる前にすませる。このとき、畳をあげてうすべり(がまごぎ)を敷く。春の掃除のとき、畳をあげて、干してしまつておいた。うすべりを敷く前はうちであんだネコを敷いた。明治のころのはなしである。明治の末頃までのことである。

夏は、一間ひとまくらいにはござを敷いておくが、あとは板の間にしておいた。

暮の大掃除は十二月二十六日ときまつていた。十二月二十五日が高

崎の暮市であつた。ここへお松などを買に行つた。お松を買つてきて、翌日がすすきはき、二十六日にすすきはきをすまして、夕方買に行く人もあつた。すすきはきをしてから畳を敷いた。

奥の間のことはコザといった。ここが客間であつた。床の間がついていた。結婚式のトリムスビはコザで行つた。

ヘヤは、お産部屋であり、仏様を安置するところでもあつた。

ダイドコの右側には、ウマヤとソウヤがあつた。ウマゴヤの奥にソウヤがあつた。ここは、醬油とか味噌をおいたところ。

利根東では、ここをオコンマヤ(オクウマヤ)とよんでいるが、利根西では、ソウヤとよんでいる。

柱は、名称のついでに五本ある。

床の間の床柱。

コザとザシキの境目にある都柱

ザシキとアガリハナの境にある大黒柱

縁側の中央にある縁柱。

台所にある下大黒。(鳥羽)

むかしの建築工程と儀礼については、本文に報告のとおりである。地祭りから屋移りまでの間にさまざまの工程があり、その間に儀礼が続いた。

上棟祝いのときの投げ餅については、ここではゴシ餅といい、形は、四角か菱形であつた。県内では、このほかに三角というところもあるが、基本形は四角で、長いのは餅の切り方によつて形がちがつてくる。

竜柱には、そのいわれを語る伝承を各地で聞くことができる。本地区では、青梨子の前原での資料が報告されている。ここには、元総社で聞いた話を紹介してみる。類似した内容であるが、その分布を示すために報告してみる。

むかし、えらい腕のきいた棟梁がいた。お宮を建てる時、材木をきりきざんで、いぎ建前をするとき、がらりまちがって柱を短く切りすぎてしまった。

腕のいい棟梁だけど、柱を短く切りすぎて弱った、弱った、建前にならないと頭をかかえて苦しんでいたって。

それを見た棟梁のおかみさんが、

「なにしてるんだい」

「神様のお宮を建てるのに、一番前の柱を短く切りすぎて、建前にならないんだ」

「おとうさん、そんなことはわきゃあねえことだ。柱の根元に下駄をはかせるといい。そうすれば、切りすぎたのがちょうどよくなる」

棟梁はおかみさんに教わって、そのとおりにして、建前をすませることができた。

建前が無事にすんだあと、棟梁は考えた。

「あれだけの腕のいい棟梁が、そんな簡単なことを、たかが女房に教わったかと、世間の恥になる」

棟梁はそう思って、おかみさんを殺してしまった。

殺してはみたものの、どうもおかみさんがかわいそうでならない。それで棟梁は、おかみさんがまい日の機織りに使っていたおさと、おかみさんの髪の毛を、竜柱に結びつけてお祈りをしたって。

それっから、今でも、お宮の見付けのいい柱には、くつ石をはかせようになつたのだという。(元総社)

なお、ワタマシ(屋移り)の前には、新居に何を持っていかなくても、オモトを一鉢持っていっておけば、あとは何をもちこんでもいいといった。オモトは大元に通ずるからという。

ふつうは、ワタマシのときには、先祖様(仏壇)を一番先にうちの

中に入れる。そのつぎに神棚を入れる。ワタマシのときには、近所とか親戚の人を呼んでご馳走をした。(元総社)

以上のほか、「住居」関係の俗信等を取りあげておく。

○上棟式のときのゴシ餅を焼いて食べるな。建前をした家が焼けてしまふ。(元総社)

○建前するとき、一番はじめに建てる柱は、鬼門(東北のすみ)の方角のすみばしら。これを鬼門柱といった。

○物に丹念な人は、一生に一度伊勢参りをする。外宮のところに、地まつりのときにまつる神様がまつられている。その神社(猿田彦神社)から、たとえ石ころひとつ、砂ひとつかみでもいただいて、神主さんにおがんでもらうてきて、その石なり砂を、一番先にたてる柱の下に入れるものという。

○上棟祝いのときに、ぐしに、ご幣三本たてる。その三本のご幣が、火の神、水の神、風の神である。それを、上棟式るとき棟梁が

「水にもめげず、火にもめげず、風にもめげず、このうちをお守りください」とおがんだ。(元総社)

このほか、方角のうち、東西南北の間の方角については、「民俗知識」のところ述べておいた。それは、おもに、仕事師の人がいったことだというが、今回の調査地区全体にわたって(若干のちがいはあるが)この呼び名を聞くことができた。なお、調査地域外へのひろがりについては、資料不足で不明である。

#### 四、生産・生業

「生産・生業」関係の報告資料も少なかった。現在ではこの関係の資料調査から、古い伝承を聞き出すことは困難になっているといつてよ

い。特に目立つた農耕儀礼を聞き出すことは出来なかった。

調査資料の中から、若干の特徴的な事項をとりあげてみることにする。

「二月のからっ畑」ということを聞く。この頃(旧曆二月)高い所から麦畑をながめて、からっ畑の方が、その年の麦作はあたりという伝承がある。これは県下で広く聞くことである。麦畑をながめる場所は、所によつてちがう。新田町の場合は、太田の金山の山頂からながめることになっている。本地区の場合は、麦畑をながめる場所は碓氷峠になつていて、峠の熊野神社の神官が関与している。麦作についての技術面と信仰面とがむすびついた伝承といえよう。

初田植の儀礼は、利根西の地域の一つの特長といえよう。初田植の日、植えはじめの田の水口に酒をさかづきに一つくらいたらしめてやる。これは田の神様に捧げるものという(元総社)。総社町ではこの酒を残しておいて、十時休みにみんな分けて飲んだ。

田植の終了祝いとしてのオサナブリ(マンガアライ)の行事がある。このとき、しまいに植えた田から苗をとつてきて、へつついの上にお供える。おかまさまに供えるものといつてゐる。

このあと、稲刈りのはじめに初穂をとつてきて、やはりおかまさまにあげる。

新米は、はじめて食べる時、神様や仏様にあげてから食べた。

なお、苗代の儀礼については本文に資料報告を欠くが、元総社の例をあげてみる。苗代のとき、小正月のときに小豆がゆをかきまわしたあととつておいたかゆかき棒を、苗間のすみにさしておく。苗が嵐にあわないようにするためという。かゆかき棒は、小正月のあずきがゆをかきまわすとき、棒の先を四つ割りにしてまゆ玉をはさんでおく。このとき「四十八の虫の口をふさぎ」と三回唱えながらかきまわした。

それを床の間に飾つておいて、苗代をするときに、田へ持つて行つて苗間のすみにさしておいたのである。そうすると、四十八の虫の口をふさぐので、苗間に虫が入らないといった。

以上のように、稲作儀礼を追つてみると、苗代から新米を食べるところまで、その折々に神様に供え物をし、儀礼を行つてゐる。

その中で、田植から初穂に至るまで、おかまさまがかなり重要な農耕神としての役目を果していると思われる。田の神の姿ははっきりしないが、おかまさまは、稲作の間の信仰対象となつている点が注目される。

これに対して、麦作については、特に目立つた儀礼はみられない。

一つ、麦まきのあとのネズブサゲが目立つ。(ネズミブサゲともいう)麦まきが終えて農作業が一段落する。そのとき、田にまいたムギの中へ、ネズミとかモグラが入らないようにと、ぼたもちをつくつてふさぐためという。このときのぼたもち(おはぎ)は、うちのもんも奉公人もうんと食べるというた。

総社町では、この日、おはぎの大きなものをつくつて、嫁を里帰りさせてゐる。

養蚕については、この地方は特にさかんであつた。このうち、北部の畑作地帯では「二階で米をつくる」という言葉があるとおりに、養蚕収入がかつての身上を支えていた。まゆを売つた金で米を買つていたということである。養蚕農家が多かつたから、現在でも二階だての大きな居宅がみられる。

最後、鳥羽で聞いた話をのせておく。

ここでは昭和三十五年に工場を誘致した。

それまではいい農家だつた。パイパスが通ることになり、工場をつくることになつた。ここは畑の多いところだつた(畑六に田四)。養蚕

をさかんにしていた。昭和三十年ごろ、畑にキュウリをつくり、鳥羽キュウリといって高崎へ出荷していた。農業試験場の人の指導によるものであった。

一町歩くらいつくるのがそのころの平均だった。多い人で二町歩くらい、少ない人でも八反くらいつくっていた。収入の中心は養蚕で、全体収入の六、七割は占めていた。養蚕、秋蚕、晩秋蚕と三回はきたてた。そのほか米麦、家畜の収入があった。

昭和三十年ころのことで、勤めをしている人たちがいい家に住み、テレビを入れたりしているのに、一町百姓でもうだがあがらなかつた。そんなところへ、パイパスのはなしがあり、土地を手放して、工場を誘致したわけだという。同地区が、純農村から大転換したときの裏話である。

なお、元総社でお聞きした「糸ひきのはなし」は、明治の末から大正にかけての農家の生活の一部を物語っている。蚕にたよっていた当時の人びとの生活をみることができる。

## 五、信 仰

「信仰」については、次のように五つに分類して、調査資料をまとめてある。

- 一、家の神仏と信仰
- 二、村の社寺と信仰
- 三、講と俗信
- 四、明神様
- 五、その他

次の右の各節の順を追って、特徴的な事項をとりだしてみる。

まず、屋内神としては、大神宮、歳徳神、三宝荒神、えびす大黒、ムラの鎮守様、おかま様、おそうでん様、おしら様などがまつられている。このことは、他地区と大差がない。

現状では、生活の変化によって、信仰も次第に変化していくと思われるが、中でもおそうでん様のように、現在では馬を飼う家がなくなつてしまい、屋内の改造もあつて、過去の神様になったものもある。

おしら様も、養蚕農家の減少によって、その信仰もうすれている。

おかま様は、関東地方では、かまどの神様であると同時に、農耕神としての性格をあわせ持つてきたが、今ではむかしのような信仰をかち得ているとは思えない。

三宝荒神も同様である。

今は、年中行事の全体的な後退の中にあつて、神棚の神様をまとめて信仰するという形に変つてきているようである。

すでに過去の信仰となつてしまつたが、天道様を、縁側の真中の柱のところまつつていたという報告（西箱田）があつた。縁側中央の柱を天道様とよんで、ここに天道様への供え物をする形は、おもに利根郡地方にみられることである。

次に屋敷神についてみる。

本地区で屋敷にまつられている神としては屋敷稻荷をはじめとして、井戸神、便所神、つぼ山の神などである。屋敷稻荷以外は、現在では、信仰の度もうすれてきていて、昔のようなあつい信仰はみられなくなつた。現在では、簡単に、正月のときに飾り物、供え物をする程度になつている。

屋敷神については、古くからムラに住み、長い歴史を有する家庭にあつては、むかしからの伝統を守つて、屋敷神に対する信仰を続けている例が多い。

屋敷神は、屋敷のイヌイの方角にまつり、もとはわら宮（オカリヤといった）をつくっていた家もあったが、今では石宮にきりかえた家が多い。その祭日は地区によって若干ちがう。十二月十五日を祭日とする家が多いが（これは、旧暦のいわゆる霜月十五日をそのまま新暦に移行させた形）、十一月一日とか十一月の午の日という家もある。ここでは、二月の丙午の日には、まつらないようである。

屋敷祭りのとき、屋敷神への供え物は、赤飯とおかしらつきが中心で、ほかに、豆腐とかあぶらげ（油揚げ）をあげる家もある。供えた赤飯の残りをうちへ持ち帰って家族で共食するならわしも広くみられる。

屋敷神のまつりはじめについては、他所と同じく、地祭りをしたとき、祭場にたてた四本の竹（しめなわを張ったしめ竹）をまつりこむとか、本家の屋敷神の土をもらってくるという形をとっている。

屋敷神として、稲荷様をまつるのは一般的なことであるが、本地区においては稲荷様のほかに八幡様とか、無名の石宮をまつっているという報告が少数ながらみられる。例えば、総社町新田の小川家では、稲荷様のほかに石宮をまつっているが、稲荷様には赤飯とイワシをしんぜるが、石宮には赤飯だけで、イワシはしんぜないという。元総社からも稲荷様のほかに石をまつっているという報告がある。この場合も、石の方には赤飯だけ供え、イワシはあげないという。上青梨子の笹沢家では、屋敷神として稲荷様と石宮がまつっており、祭日は十二月一日で同じ日にまつったが、稲荷様には赤飯とオカシラツキをあげて石宮のご先祖様の方には赤飯だけあげたという。青梨子の関根家では、屋敷の稲荷様のまつりの日が先祖様の供養まつりの日でもあるという。

このような例をみると、稲荷様は屋敷神として一般的にまつられて

いることを知るが、もう一つ、石とか石宮とかべつのご神体をまつって、それをご先祖様といっているのである。ことさらに供え物を区別している点（なまぐさをさける）に注目したい。ここに、祖霊信仰の姿を見ることができのではないかと思う。群馬郡倉沢村では、先祖様がなくなつて三十三年忌をすませると、屋敷神にまつられるといい、「死霊様」という形でまつられている。このような例は他所にもみられる（群馬郡榛名町など）。

本地区の屋敷神の中に先祖様をまつる形（祖霊信仰）をみることもできるのではないか。このことについては、もうすこし例を求めて考えてみる必要がある。

次に、ムラの神社のことなどをみる。

各町の神社（鎮守様）はそれぞれ、新しい時代の流れの中で、地域の人びととの強い結びつきをはかっている。最近の傾向としては、新年の初詣でを地区の神社でということ、氏子総代の人たちを中心に元旦から町内の人びとを神社によんでいる。これは、各町とも大成功のように見受けられる。また、境内の天神様を表に出して、進学の神様としての信仰をたかめている。新しい時代への神社側の新しい対応といえよう。

古くからの信仰も、新しい時代の中に生き続けている。

上青梨子の淡島神社は、安産の神様として近在近郷に知られた神様である。女の人の信仰があつく、本宮様といわれている本殿横の石宮には、建立者の中に女性の名がみえている。毎月三、十三、二十三日が縁日。春祭りが三月三日、秋祭りはオクンチの日となっている。むかしは淡島様の講があり、ご詠歌もある。おまいりにきた人は、神前の香炉に線香をたてていったという。また神前に奉納してあるおこし（小さいもの）を借りていって、お礼まいりには二つにかえし

たという。この神社の特徴的なことは、別当と称する家があったことである。神社のおもり役といわれる別当をもつ神社は珍しい。群馬郡倉淵村や吾妻郡中之条町などにもあり、この形は他所にもみられたものである。

上新田の雷電様も、雷除けの神様としてこの近在ではよく知られた神社である。

西箱田と中箱田の飯玉神社は珍しいまつり方をしている。双方とも飯玉様が鎮守様である。その鎮守地がそれぞれ相手の地域内となっているのである。つまり、西箱田の飯玉様は中箱田の地域内になり、中箱田の飯玉様は、西箱田の地域にまつられているのである。それは、よそから嫁さんに来たとき、鎮守様におまいりをするとき道中をして、嫁さんをムラの人に見てもらうためだと説明している。確かな理由はどうもはっきりしない。

各町の鎮守様では、秋まつり（オクンチ）のとき、子供たちがまつりに参加して、宵のうちから神社におこもりをしていた。夜が明けると同時にムラの人たちは赤飯をもって鎮守様におまいりにくる。利根東の地域では、子供たちが各家からたき木をあつめて、神社の境内に大きな穴を掘っておたきあげをしたのであるが、本地区では、そのようなことはみあたらない。

さて、本地区の神社で、特筆しなければならぬのは、元総社町に鎮座する総社神社である。この神社については、本文中に特別扱いとなっているので後述する。

次に仏教関係の信仰についてみる。

利根西の旧群馬郡に属する地域で特筆しなければならぬ信仰としては、子供が主役となつて行ふ地藏祭りである。これは地区によって若干のちがいがあがるが、共通していることは、七月の二十四日から七

日間とか、一カ月間、子供たちが地藏様の輿こしをかついで村内をまわることである。各地区とも和讃を唱えながら毎戸まわつてあるくことを基本にしていた。子供が主役となつて行事に参加する形としては、他に、「年中行事」のところに報告した「道祖神祭り」がある。「道祖神祭り」は一月、「地藏祭り」は七月で、ちょうど一年を二分する大行事である。「地藏祭り」の目的とするところは、子供の無事成長を祈ることだという。子育て中心としての信仰が中心となっている。この行事も「道祖神祭り」も、年長者である親方を中心にした、子供の自治組織としての働きをみる事ができる。

なお、「地藏祭り」の起源については、榛名山東麓を中心に分布している点から、時宗僧侶との関連を説く説が有力である（都丸九十九氏説）

薬師信仰の中にも注目すべき形をみる。

化粧薬師の人身御供の伝説には十六歳の娘が登場する。赤城や榛名の入水伝説の主人公もやはり十六歳の娘である。

前箱田の薬師様の縁日の行事も珍しい。

この薬師様は、縁日のとき、薬師様のところに穴を掘り、小屋をつくつておこもりをし、その小屋は燃してしまうという。寡聞にして類例を知らない。

江田の二十二夜様の信仰もよく知られている。二月二十二日にムラの念仏講中の人々を中心になつられている。すぐ近くにある淡島様も一緒にまつられているが、ともに安産の神様（仏様）として信仰されている。二夜様の前で和讃を唱える。だんごをつくつておみごととして分ける。ここでは二夜様のおかげでお産にまちがいなしといっている。強い信仰である。

百万遍については「年中行事」の中に記してあるので略すが、辻念

仏の名の如く本来は、辻で行った行事（信仰）であると考えられる。これと八丁じめとのむすびつきが注目される。

純然たる仏教信仰ではなく、民俗信仰ともいべきものに「庚申信仰」がある。この信仰のさかんであったことは、各地に残る庚申塔の多いことによっても知ることが出来る。「元総社村郷土誌」には、

庚申祭 一月おきに庚申の夜、講中のも六人づつ集りて祭りをなす。

とある。これは、明治時代の終りのころの様子である。本来は、庚申の日が六十日ごとにめぐってくることに関連して、六人ずつで組んで庚申祭を行ったものと考えられる。一年で六人のうちを宿にすることが出来るからである。

元総社町殿小路の御霊様の境内には「千庚申」がまつられている。

これは、幕末の庚申信仰の盛行の様子を物語っている。このほか各地に百庚申をはじめとして、多くの庚申塔がたてられている。別項の「石仏」の項を参照されたい。

さて、この「庚申信仰」の内容であるが、各地の庚申待の報告をみると、「百姓の神様」として信仰してさられたことを知る。

庚申様は、チブクをさらうという。あるいは、早寝をさらう、夜の十二時すぎまでまつたといったりしている。それは、庚申待が、日待としての性格をもっていたことをあらわしている。また、「話は庚申の晩」という。それは仲間の人たちが庚申様の信仰を仲立ちとして、飲食を共にして、共に語りあかしたことを物語っている。

このほか、伊勢参りの報告も当時の信仰を如実に物語っている。当時の人びとにとって、伊勢参りが如何に大切なつとめであったかを語っている。伊勢講を組んで、毎年交代で伊勢参りをしたとか、近隣や身内の人がムラ境まで見送ったり、出迎えたりしたこと、出発する

とき水盃すずみづをかわしたことなど、かつての伊勢参りの重要さと困難さを物語っているといえよう。

総社神社に対する信仰の様子については『前橋市史』にくわしい。本書では、『市史』よりおもな神事を引用し、あわせて調査員の聞き書きを収録してある。

総社神社とはどんな神社か。今、手許にある「上野総社神社」のパンフレットには次のように記してあって、「総社神社とは」という問いに簡潔に答えている。

古 来

上野総社神社は

上野の総鎮守なり

上野総社神社は

国内総神社の神集ひ座す御神地なり

上野総社神社を参拝するは

県内各神社を参拝せるにひとし

総社神社は、古代末期に、国司が国内の神社を参拝する代りに、一カ所に国内の神社をまとめてまつり、そこを総社として、その神社に参拝する代りとしたという。この形は、平安時代の末には一般化したといわれている。

総社神社は、延喜式内社の一の宮と肩をならべるくらいに権威をもっていたといわれる。その鎮座地は、国内政治の中心であった国衙の近くであったという。上野国の国衙（国府）の所在地も、元総社付近に比定されている。総社神社は、古代史の生き証人ともいべき由緒ある神社である。

そのために、古い神事も多く伝えられている。このことは、直接小地域の民俗を代表するとはいえないが、この地域の人びとの生活の中



に、そのことが長い間生きてきたといえよう。というのも、この神社を直接支えてきたのはこの神社をめぐるところに生活してきて、神社とともに長い歴史の歩みをもたしてきた地域の人びとであるからである。

たとえば、大祭、例祭には、地元の元総社の人はもちろんのこと、関係地域の人はいろいろの形で参加してきたのである。長い準備期間と、当日の行事をふくめて、大変なさわぎ（負担）であったという。このときの借金のはなしも報告の中にある。大祭については、「三年たたる」という話もある。

総社神社は、総社の明神様とあって、この近辺の人びとから厚い信仰をうけていた。当社の神事の中には、かつては、農事に直接関係することもあった。一月六日の水的の式は、その年の水の多少を占い、一月十四日の置炭、筒粥の神事は、その年の天候や作物の作柄を占う神事であった。これらは、公表され、人びとはその年の農事の参考にしたのである。

旧十一月一日の神迎え式も、近在の農村の人たちはこぞって明神様におまいりをした。境内には、おこもり家が今でも残っている。土地の人は、特に利根東の人びとのお参りの姿を野良仕事をしながらみていたという。ここにも利根西と利根東の人びとの信仰のちがう形をみることができるといえよう。

以上、本地区の「信仰」について概観した。明治末年に編纂された「元総社村郷土誌」をみると、今では全くわからない行事や信仰も記されている。「信仰」の変遷をあらためて考えさせられることである。むかしと今とでは、ずいぶん形、内容を変えた「信仰」もあるようだが、いわゆる「利根西」の「信仰」を代表すると考えられるいくつかの事例をとりだしてみた。

本地区での特色ある行事、信仰としては「道祖神祭り」と「地藏祭り」の二つであろう。この二つの祭りは、ともに子供が中心となっている。組織も祭りの仕方もちちんとしていて、本調査地区のみならず、広く旧群馬郡地方を代表する「信仰」といえよう。

また、最後にふれたとおり、総社神社に対する広範囲の人びとの信仰については、それを支えるこの地域の人びとの日常生活の中にも、大きな誇りと責任を感じているものがあるように思われるのである。

## 六、人の一生

「人の一生」については、地区内からの資料がまとまって報告されている。その中から本地区における「人の一生」に関する特徴的な事項をとりだしてみる。

まず、安産祈願の神様としては、前橋市下大屋町の産泰様と北群馬郡吉岡町小倉の産泰様が目立つ。そのほかに、二夜様に祈願するといふ形もみられる。利根川をはさんで西側の地区で、橋のない時代もあったことで、下大屋の産泰様に対する信仰がいつごろからのものであったか。

出産の方法としては、この時代の話者になると、もう産産の経験者はいない。話として産産のことを聞いている程度であり、もう産産が一般化した時代となっている。助産者としても産産さんがふつうで、いわゆるトリアゲバアサンのことは、年輩者だけが経験したことになつている。昭和になつてからは、産産さんの世話になつている。

ウブタテノメシは、古い習俗につながるものであるが、本地区からの報告では古い形はほとんどみられない。ノチザンの処理についても、

トボグチのところ埋めたというのは、話として伝えられるだけで、所定の形で処理したという報告である。

このほか、育児関係の習俗で特に目立った事柄はみあたらない。間引きのことは、わずかな伝承が報告されているだけである。

「流れ灌頂」のことも、わずかに実見者がいる程度である。

育児儀礼の中では、お七夜のセツチンマイリの習俗は、ややかたく守られてきたようである。巢鳥のお七夜の日の子供の名びろめのことなど注目される。七五三の習俗は、かつては、一部の家庭を除いては行われなかった習俗であり、一般化したのは新しいことである。七つ坊主については、太田の呑竜様との関係で広く行われていたことを知る。年輩者の中には、七つ坊主の経験者もおられて、その習俗の内容を伝えていく。

四歳のときの厄除けについても同様で、一月四日に、前橋市の高琴院や、新田町反町の反町薬師へ厄除けに行くことは、むかしからの習俗として広く行われてきたことである。

大人の厄除けについては、近年ますますさかんになってきて、佐野や川崎の大師さまとか、成田の不動様へのおまわりに行く人も多い。

喜寿・米寿の年祝いは、むかしはこの該当者が少なかったというが、長寿社会になった最近が目立つようになった。最近では、特に行政とか民間団体による祝賀が先行している傾向にある。

年齢集団としては、かつては若い衆組織があり、その後に青年会、青年団へと発展した。古い習俗としては、契約の行事とか、ムラの祭典への参加など、各地区の若い衆は、地域社会の中で、大きな役割を果たしてきたのである。

契約については利根東の地区のウタイゾメの行事に似たものと考えられる。地域社会とのむすびつきについては、利根東より利根西の若

い衆の方が参加の度合いが密であったように思われる。

女子の場合には処女会の組織があったが、青年会ほどの働きはなかったようである。

むかしのわかいしゅは、よく夜遊びをしたという。そのことについてのエピソードはいろいろ伝えられている。各地区からの報告のおりである。他地区のわかいしゅとの交流もあり、いたずらを含めて、いろいろの人生体験をしたということである。

次の婚姻習俗の中で特徴的な事柄をとりだしてみる。

むかしの仲人の役割については、各地の報告にあり、婚姻関係成立に大きな役割を果たしていたことを知る。

利根西では、利根東という口がためたことをオウサンといっている。このいい方は、旧群馬郡地方に広くみられる。

ところで、利根西と利根東の婚姻習俗の中で大きなちがいは、たんすをもらい方からくれた方に贈る、贈らないのちがいが一つ、もう一つは、式後の双方の親族の顔つなぎなどのしきたりとしての一見客の中に、女一見のあるなしということである。

勢多郡（利根東）から嫁さんをもらうと損をするとは、利根西の人のいうことである。つまり、勢多郡（前橋市合併地区もふくむ）から嫁さんをもらうと、もらい方からあらかじめたんすを贈っておく。嫁さんはそのたんすをもって嫁入りするというのである。

利根西の人からみると、嫁入り道具は全部嫁さんの方で用意するものであるというしきたりであったから、利根西の人は、もらい方からくれ方に対して、あらかじめたんすを贈っておくことについておどろいたということである。

もう一つの女一見のことについては、利根西には特にこのしきたりはない。結婚式にともなう一連の習俗の中で、一見客の往来がみられ

るのであるが、利根東の地区では、男一見と女一見とを区別して、くれ方もい方双方の母親とか女のきょうだい、あるいはおばなどが式の後の嫁の里帰りのときなどに一見客として相手の家へ挨拶に行くのである。女一見は式あとにあらためて往来しているのである。利根西にはこの習俗はみられないという。

式の翌日に行われるカネツケの習俗は古い習俗として報告されている。

むかしは、嫁はこの日文字どおりかねつけをして、お歯黒をつけたという。またまゆげもおとして娘から嫁になったという。

このような古い習俗はほとんど姿を消しているが、その名称は残って、カネツケの祝いが行われていた。たとえば鳥羽では、もらい方は、式の翌日に、親戚の中で呼ばれない人もあつたし、来られない人もあつたので、その人をこの日招待した。仲人と嫁は正装してよりつき(あるいはこぎ)の片すみに座って客うけをしたという。姑がそのときの客に「これがうちの嫁です」と紹介した。

また、この日の朝早く、もらい方からくれ方に赤飯を届けた。これをお届けするのはうちうちのわかいしゅうであつた。このことは、もらい方からくれ方に対して「おたくの娘さんをたしかに嫁として受けいれました」という報告であつたという。そのため、なるべく早く赤飯を届けたのである。これは、いわば、「夫婦のちぎりをむすんだ」という報告であつたのである。(元総社)

むかしは、婚礼の式は家庭で行った。

現在では、専門の結婚式場が各地につくられ、その様式も大きく変化している。その中で特に大きく変化したのは、近隣とか親戚の者の婚礼への関わり方が大きく後退していることである。

いわゆる冠婚葬祭の際の近隣の相互扶助的なむすびつきはほとんど

姿を消している。

婚姻によって結びつく、くれ方もい方双方の近づきの儀式もほとんど失われている。

嫁いであら一定の年限、嫁の里帰りが義務づけられていたが、現在では、そうした習俗も大きく後退している。

かつては、正月や、節供、歳暮のときなど、贈答の品物も一定していて、くれ方もい方双方の結びつきを強める役を嫁婿が果たしてきた。そのことについては、本文に示すとおりである。

次に葬送儀礼についてみることにする。

葬送儀礼の中で、特に大きな変化は、むかしは近親者のみで行われた通夜が、最近では、近隣の人や職場や友人をもふくめて、大々的に行われていることである。

一方で、新生活運動によって、香奠の額を低くおさえていながら、他方で、このような新しい儀礼の出現は何を意味しているのだろうか。

火葬の普及によって、葬送儀礼の中には、いろいろの面で変化がみられ、墓地の改修も大々的に行われている。斎場での葬儀・告別式の一般化も、結婚式の場合と同じように、親族や近隣社会の葬儀への参加の仕方を大きく変化させている。

湯灌も簡単になった。かつての湯灌の儀礼の中には、古いしきたりがみられた。

棺桶についても大きな変化がみられる。

むかしは土葬であつたから、かめ棺であつたり、たて棺であつたりした。かめ棺はごく少数の上流家庭とか水位の高いところでの例外的なもので、ふつうは松板でつくったたて棺であつた。それが火葬になつてからは寝棺になった。

この火葬の一般化にもなつて、斎場での葬儀・告別式が普及して、古い形の葬送儀礼は大きく変化している。

ここに報告されている葬送儀礼の多くは、過去のしきたりとなつてゐる。いろいろの儀礼に立ちあつた最後の体験者の記録であるといつてよいと思う。そのくらい、最近における葬送儀礼の変化は大きいのである。

こうした葬送儀礼の後退（変化）とは象徴的に、死後の供養はむかしとは形をかえて、かなり規模も小さくなつて行われている。七七の供養や年忌供養は近親者や近隣の人や知人が参加して、むかしとはちがつた形で行われているのである。

こうした中で、特に古い形の葬送儀礼として注意したいことを二、三とりあげてみる。

その一つはヨトギのことである。このことは、重病人がでたとき近親者が病人の枕許にいて、息をひきとるのを見守つていたのである。

（元総社）

また、四十九日の間に、仏様の魂はそのうちを守つてゐるといふ。

四十九日が過ぎるまでは仏様の魂は、半分は屋の棟に、半分は寺へ行つてゐるといふ。そのために、この間は餅をつけない。四十九日に餅をついてお寺まいりをする屋の棟をはなれるといふ。

四十九の餅について、下新田では、十日夜の前の晩とか、その翌日、四十九の餅と重箱餅を寺へ持つて行つたといふ。四十九の餅は小さく丸めて（あんなし）四十九コ、わらのつとつこに入れて持つて行つたもの。それはうちの仏様へ供えるものといふ。

重箱餅はあんこの餅を八コとか十コ、重箱に入れて持つて行つたもの。これはお寺の本尊様に供えるものといふ。寺では、おかえしとして果物などを重箱に入れてよこした。寺では十日夜の日に鐘をついて、

上・下新田の子供たちをあつめてその餅をおみごととして分けてやつた。下新田でみられるような四十九の餅に関わる習俗は、新田郡地方にもみられる。

バンタについては、かつては県内に広く存在していたといふことである。いくつかのムラを担当して、村外からの不審者のとりしまりとか、集会の際の下足番のような自警的な役割や、葬式のときの穴掘り役などをつとめていたといふ。このバンタがいなくなつてから、穴掘りを、組内で交代につとめるようになったといふ。社会生活に関わることである。

祝儀・不祝儀に関連して、「口代」と称する呼び状をくばる習慣がある。この地域に広く行われていることである。このことについては、他地区でもみられ、近隣の交際上の一つのしきたりとみることができようか。あるいは新しい形の儀礼といえるか。

## 七、年中行事

「年中行事」については、これまで多くの報告書がだされている。古くは、明治四十三年編の「郷土誌」、新しくは第二次世界大戦後しばらくたつて相次いで発行された町村誌にくわしくその記録が収録されている。また、べつに笹沢周作氏は、「上青梨子の民俗」の中で「大字の「年中行事」をまとめておられる。

そのように、本地区の「年中行事」については、調査研究がさかんである。

本章にまとめられた「年中行事」はそれとはべつ立場から、地区（町・大字）の枠をひろげて、この地区の「年中行事」をとらえてみたものである。

さて、「年中行事」は、地区(旧大字)についてもまた家庭についてもちがいがあって、それをまとめてみることはなかなかむずかしいことである。

本項では、各町内から報告された「年中行事」の中から、特徴的な事項をとりだしてみて、本地区の「年中行事」を大観することにする。まず、一月の行事からみる。

一月六日は六日年という行事が行われている。これは、利根、吾妻郡地方を中心に行われている行事で、年とりの一つである。利根東の旧勢多郡では、赤城、北橋、富士見、南橋村など、利根川沿いの地域に行われている。そのひろがりを見ると、前橋東部から東の地域にはみられない。小さな行事のことであるが、民俗地図を考える上で注意したいことである。

小正月行事の中では、この地域はドンドンヤキ(道祖神祭り)と鳥追いの行事がセットになっていることが目立つ。この系統の行事も北毛や西毛地方にさかんにみられることで、前橋市西部のいわゆる利根西の地区も、そのひろがりの中にふくまれていることになる。七月から八月にかけて行われてきた「地蔵祭り」への子供の参加とあわせて、子供組の活動の目立つ地区である。

「道祖神祭り」に参加する形がきちんとした組織になっていて、また、年齢別の階梯のあることが特徴である。このときの「道祖神大笑」という旗をつくっておまいりすることは、「大笑||大祓い」ということであるならば、この行事のもつ意義を示しているものとして注目される。「へいがみ」といって、ドンドンヤキの当日、通行人に合力を求めるところも、この地区の道祖神祭りの一つの特徴である。

「道祖神祭り」から「鳥追い」に移る形もこの地区から北群馬郡や吾妻郡へとひろがる小正月行事の大きな特徴である。

最近になって、一時中止になっていた小正月行事(時に道祖神祭り)を復活することが各地でみられるようになった。このことは、新しい時代に適応した大人の側からの地域の子供に対する社会教育の形をとっている。むかしとちがって、大人主導型の小正月行事(ドンドンヤキ、鳥追い)となっているのである。

むかしは「道祖神様の親方ができればうちの身上まわしができる」(青梨子)といわれた。小正月行事と子供との関わり合いを端的に示した言葉といえよう。

なお、正月行事の中で、一定期間、正月棚に線香をあげるといいう形が一部でみられる(下新田の杉山家)。正月棚に線香をあげる例は、伊勢崎市や北群馬郡小野上村などから報告されている。他地区にも同様の事例はあると考えられる。正月行事と祖霊信仰とのつながりを示す形とみてよいか、今後の課題であろう。

次に農事に関係した行事として、オコモチとアブラモチのことがある。四月十五日にオコモチ、十二月十五日にアブラモチについて祝う習俗である。農作業のはじまりと終りを示す行事である。

このことについては前述のとおりで、オコモチについては「地獄餅」、アブラモチについては「極楽餅」の別名がある。かつての農作業のつらさと、その終りの喜びを端的にあらわしている。くわしくは別項のとおり、この習俗は、旧群馬郡地方にみられ、地域性を示す行事である。

次に夏の行事についてみる。

七月の「百万遍」と「八丁じめ」の行事は、同日に行われ、一連の行事である。七月十六日あるいは十七日、農休みの最後の日かその翌日に行われる。「百万遍」は、阿弥陀様の名号を文字どおり百万遍唱えて阿弥陀様のご利益を願う行事である。「八丁じめ」の行事は、「百万

遍」が終つてからムラの役員によつて執行される。

「百万遍」は、もとは辻念仏ともいう。辻で行つたことがあるからという（総社町総社、元総社町殿小路）。「八丁じめ」は明神様（総社神社）から受けてきたお札を竹の竿（葉付き）につけて、ムラ境にたてる。疫病がムラ内に入ることを防ぐ行事である。なお、このとき、総社町総社のように大きなわらじをムラ境につるすところもある。

盆行事に関連した行事の中にも、注目すべきことがある。

まず、盆月の一日のカマノクチャアケの行事と七晩やきの行事に注意したい。

カマノクチャアケについては、明治末年に編集された「郷土誌」によると、次のように行事を説明している。

「(八月) 一日、釜の口あけ、この日は地獄の釜の口もあいて、亡者も孟蘭盆会出で来るものなりとし、(中略) 此日にはもとは焼餅を調へたるものなれども後には焼饅頭を焼きて食ふに至れり。

又次第変り遂に焼かずして食するになりたり」(元総社村郷土誌)

この行事については、各地からの報告があり、広く行われていたことを知る。このとき、小麦粉でつくった焼餅を供えるということであるが、焼いたものを仏様に供えるところに意味があつたようである。

一月を一年の前半のはじめとするのに対し、七月は後半の時期である。本来は七月が盆月であつたから、七月一日のカマノクチャアケは、七月一日の行事であつたわけである。小麦粉でつくったやきもちをつくつて供えるところに、稲作の餅に対する麦作のやきもちという対比があるうか。

七晩焼きは、盆迎え前七日間の夕方の行事であり、ムギわらの束を門口で焼く。この火で仏様の道案内とした。前述の「元総社郷土誌」

には、「亡者も孟蘭盆会出で来るものなりとし、途暗ければ七日より十三日まで家の裏に藁火を燃して明となす」とする。この七晩焼きの行事は、ほぼ利根川に沿つて、佐波郡や新田郡地方にまで及んでいる。学者の説によると、正月行事と盆行事を対比して、ともにおたきあげの行事を伴うという。七晩焼きもその一連の行事と考えられよう。

なお、一部の地区から盆月の七日に水沢山にのぼつたという報告がある。盆にお客に来る先祖様の道案内のためという。山から先祖様がやつてくるという考えによるもので、いわゆる山中他界観にもとづくものといえよう。赤城山麓の地方でも、カマノクチャアケの日には、ご先祖様が地獄のカマノクチャアケをあけて、うちへお客に出かけるといっている。同じ考えによるものといえよう。

盆行事に関連しては、注目すべきいくつかの行事がある。

まず生き盆である。これは盆前の月に新しい嫁で、両親のそろつてゐる者が親のところへお客に行くことである。初嫁の場合は嫁ぎ先で絹の着物をつくつて着せてやつた。里からは野良着をつくつてよこしたという。総社町ではおたがいに餅をついて持つて行つたので、両家の餅のくらべっこになつたという。そのために餅の贈答はやめになつたという。鳥羽では、農休み(七月十四、十五日)の十五日を生き盆といつて、初嫁は里へお客になつたという。このときは、うどん一箱、醤油一本、さかな代としておかねを持って、婿と一緒に里へお客に行つて、ムラ内の一家の人とか隣組の人を招待して昼食をご馳走した。このとき、もらい方では新しい単衣をつくつてやつた。これは里の親が丈夫(片親でも)な場合に行つた行事。嫁は二、三晩泊つてきた。とはいふものの、一晩で帰つてくる嫁はいい嫁だといわれたという。蚕や田植をすませたあとのお客であつた。

盆迎えのときの行事では、その晩、家族そろつて、盆棚の前で夕飯

を食べたという。(鳥羽、上青梨子)なお、このとき、両親がそろっている家では、盆ざかなといって、サケの切り身を各人で食べた。これを「盆知らず」とよんだ(鳥羽)。このことは、生き盆の行事とあわせてみると、この盆行事の中には、先祖様をまつるとともに生きている親に対する祝いの行事でもあったことを知る。わざわざ生魚を食して祝うことは、仏事とはちがった意味をあらわしているのである。新盆をべつに、ていねいにまつるということとは逆のことである。

ふつうのお盆のときのあいさつは、

「結構なお盆でおめでとうございます」という。(鳥羽)

もう一つ、盆行事で注意することとは、盆の十五日(あるいは十四日)の野まわりの行事である。このことについては、本文にはないが、前に、上新田、下新田では十五日に盆の野まわりの行事のあったことを聞いた。上新田では、主人が花と位牌を持って田をまわってくる。これはお盆様に稲の作物を見せてやる行事だといっている。帰りに里芋と豆をこいでくる。これが盆送りのときの馬のえきになるといふ。下新田では、農家の人は、十五日に田圃へ行って、里芋をとってきて、盆様にしんぜたという。それを「盆の野まわり」とよんでいる。この行事は西毛の一部や東毛地方にみられる行事である。

次にこの地域で、特に注目すべきは、七月から八月にかけて行われる「地藏まわし」の行事である。

まず、明治末編纂の「郷土誌」をみる。「(七月)二十四日より八月二十四日までは、地藏祭といひて各戸より一人づつ出でて、地藏様の御輿をかつぎ、大勢にて念佛を唱へつつ戸毎に米又は麦などを集め歩き、その修膳費などにあて、残りあれば酒食の費とせしも、今はかゝる風は全く止み、ただ二十四日其の祭を行ふのみとなりぬ」

この行事は、榛名山東麓地方を中心に行われている特色ある行事で

ある。今は、日数等縮少した形で行われているが、かつては、子供中心の行事として、先述の道祖神祭りや双壁をなしたものである。旧群馬郡に属した本地区にあつてもさかんに行われてきた行事である。

このほかに目立つた行事を、二、三紹介しておく。

旧四月八日に「卯月八日は吉日よ、かみなが虫のご成敗かな」と半紙に書いてうちの出入り口(表と裏)や便所に逆さにはる行事があつた。へびが入らないようにするためという。(下新田)こと同じような習俗は、高崎市元島名町にもみられ、やや類似したことは、群馬郡倉洲村や利根郡新治村にもみられるという(『群馬県史』27・民俗3)。新田郡新田町権右衛門では同種の行事を油虫退治のためといっている(『新田町誌』民俗編)。

旧十月十日夜のとき、下新田ではその年に新仏の出た家では、四十九の餅をついて寺へ納めたという。これは「人の一生」のところでもふれておいたが、この地域としては珍しいことである。本県では、旧新田郡地方に広くみられる習俗である。

大友の「いもつくい」の行事は、伊勢講に関連した行事で、十一月一日に行われた。くわしくは「前市女郷研資料」七一号(昭和三十七年十一月十五日)に収録されている。作物の豊作と家内安全を祈つて、伊勢の大神宮様をまつり、里芋や米の飯を食べる大食会であつた。

「稻荷まつり」にも特色があるが「信仰」のところでふれておいたので略す。

## 八、口頭伝承

「口頭伝承」については、伝承者にめぐまれ、比較的多くの資料を得させていたことができた。しかし、このことは、集中調査では不

可能なことであり、その後の継続調査の結果によるものである。「口頭伝承」のように、特別の伝承者をさがしださねば成果をあげることのできない項目として当然のことである。調査の限界は、調査者自身が打ちやぶらねばならないことであろう。特に記録として後世に残さなければならぬ使命があるとすればなおさらのことである。

さて、本地区の「口頭伝承」については思いがけないほど多くの話をお聞きすることができた。それというのすくれた語り手におめにかかることができたからである。特に、元総社町の黛高十郎さん（明治三十七年生）からはたくさんお話をお聞きした。「口頭伝承」だけでなく、民俗全般にわたって、いろいろとご教示いただいている。紙面より厚くお礼申しあげる次第である。

次に、本地区の「口頭伝承」について概観してみる。紙面の都合で大凡の傾向について記してみることにする。

まず、「昔話」であるが、いくつかおもしろい話がある。

元総社でお聞きした「姥捨山」の話は、いわゆる「謎昔」といった話で、中に「なぞ」をふくんでいる。「紙で火をくるむ」とか、「風をくるむ」といった内容である。「姥捨山」の話でこれと同じものを県下ではまだ聞いていない。「豆投げの由来」もおもしろい。それも、県下ではじめておめにかかった昔話である。節分（豆投げ）の由来を、娘の名前と結びつけて語っているところがおもしろい。「馬鹿婿」の話の中には、他所の話とは若干ちがう内容のものもある。「酒買い婿」のほなしなどその例である。話の展開は他の「馬鹿婿」の話と同じであるが、買ひ物の対象物が酒となっている点が珍しい。

「伝説」には、地元の話として、天狗岩用水に関係した話として、若干の地名起源伝説を採録することができた。

また、榛名山に関する伝説としては、「山のつくりっこ」や、「ひと

もっこ山」「入水伝説」「九十九谷伝説」などを聞くことができた。利根川をへだてているだけで、距離的には近いにもかかわらず、利根東と利根西とは、伝説の面でも、話の対象がちがう点が興味深いことである。（利根東の赤城山、利根西の榛名山）

「口頭伝承」の中で、もっとも特徴的な内容をもった話は「世間話」であった。この中で、比較的まとまった話としては、近藤艶平さんの話がある。この人は石倉にいた人で、たくさんのエピソードを残している。正に「世間話」の主人公にふさわしい人物である。この話も、元総社の黛さんからお聞きした。全部で十数話になったであろうか。

それほど古い話ではなく、今から三、四十年ほど前の話であるようである。今のところよそではお聞きしていないので、まだ伝播するところまでいっていないのであろうか。ほとんどが艶平さんの個人的な特別の能力（大食、大力）に関わる話であるから、あまり類話的なものはなさそうである。ただ、いくつかの話は、他所でべつの人の話として聞く「世間話」と同様の話もあるから、「世間話」のひろがりを知る上での一つの素材とすることができるかもしれない。艶平さんには、奉公人としてのご経験があるとのことであるから、「奉公人話」としての性格をみる上での材料としてもみることできるかと思う。それとにもう一つ「世間話」の主人公としていわゆる「奇人・変人」の部類にも属する人物としての資格も十分もっていたといえよう。艶平さんは、「世間話」の主人公としては、県下でも特に新しい時期の人物といえるのではないかと。

この地区で「世間話」の主人公としてとりあげるべき人物としても一人、「引間の源六」さんがいる。源六という人は、その呼び名とおり、隣の群馬町引間の人である。源六さんの伝承の範囲は広く、利根東の一部の地域にも及んでいる。この人にまつわる話は、「源六話」



としてまとめてもよいくらいである。「国府村誌」の中に、同地の住谷修氏が採集された資料が収録されているが、群馬県でも「世間話」の主人公としてトップクラスの人物といつてよい。前に、群馬町でお話をお伺いしたとき、この源六さんの話は、当時の年輩者の間でも話題となっていて、バス旅行のときには、地元の話上手の人が、新作の「源六話」を皆さんに話してやったこともあったという。「生きている世間話」として、おもしろい材料であると思う。「源六道」の話などその典型といつてよい。

このほかに、「世間話」としては、キツネに化かされた話、人魂を見た話、死の知らせや臨死体験など、不思議話もある。それと、「奉公人話」として各地に伝えられている「飯が仕事をやる」とか、「田の草取りの話」などもある。コンニャク一枚で伊勢参りをした話とか、ノミの夫婦の話などのおもしろばなしなどもある。

「世間話」のおもしろさは事実(体験)と伝承の両域にまたがっているところにあるか。この点では、ある種の説得力さえある。内容的には、「昔話」や「伝説」とちがって、新しい材料をふくんでいて、身近かな内容を話題としている点に、人びとの関心と呼ぶ力があるのだと思う。

「口頭伝承」のその他としては、方言、言葉遊び(なぞなぞ)や、「電灯のつきはじめ」などのいわゆる「開化物語」ともいうべきはなしなどをとりあげてみた。

他の項目にうつしてまとめるべきだという内容のものもあるが、いろいろのつながりを考えて、ここへ一括してある。いそいだために組み合わせミスもあるかもしれぬ。

(伝説) 補足

#### 青梨子の関根家の禁忌作物の由来

清野町と青梨子町の関根家の先祖は関根図書といい、大坂落城によりこちらへおちのびてきたという。そのとき子供を四人つれてきた。

おちついた場所は、青梨子の豊前という曲輪、長男が本家をつぎ、豊前に居をかまえた。二男は長男の隣屋敷に隠居として出た。三男は清里小学校前に出た。八幡という曲輪である。四男は妾腹の子ともいわれ、小学校の裏、北内出という曲輪に居をかまえたが、のち渋川へ転居。

関根家の禁忌作物はトウモロコシ。これには次のような話が伝えられている。

大坂落城後、落人としてこちらへ逃げのびてきた先祖が、ここで農民に身をやつしていた。あるとき、トウモロコシをつくっていた。ところが、徳川方の者に見つかって攻められた。そして、徳川方とトウモロコシ畑で戦った。しかし、先祖はトウモロコシに足をとられて首をはねられてしまった。

そのために、関根一家では、トウモロコシは先祖の仇だといつてつぐらないう。 (青梨子)

#### 淀君のはなし

淀君は秀吉の妻。大坂落城のとき、総社の秋元様は、徳川家康にたのまれて、淀君を総社につれてきたという。ところが、淀君は世にいう色好みの女。牢屋に入れられているのに、男をみるとつれてこいという。あんまりしつこくて男が逃げだそうとすると殺してしまう。こうして何人も犠牲者がでた。

そこで秋元侯は、淀君を今の県庁の裏あたりの利根川に沈めたとい

う。そのために淀君は石になってしまった。だんだん上かみにのぼって今のおえんが岩になったという。この石の近くには、化粧石、お歯黒の石、鏡の石などが残っているという。(総社町奥鳥)

### 昔の利根川

むかし、利根川は田口の橋たちばな山の下を通って、前橋の東から伊勢崎の方へ流れて行ったといわれている。そのころ、今のよう到大渡の辺には利根川は流れていなかったという。なお、岩神の飛石は、田口の山から流れついたものという。(大渡)

### 大渡のこと

豊城主が武日向彦、八綱田王命をお伴にしてここ(今の大渡)を通り、利根川を渡った。

当時この辺にはエゾがいたので、それを、豊城主は退治に来て、東の方へ向かわれたのだという。

そのとき利根川を王が渡ったので、王渡と呼ぶようになったのだという。

むかしは、今の利根川になっているところに、大渡の人たちの耕地もあり、人家もあったというが、利根川がひろがってけずりとなってしまつて、今の利根川が流れているのだという。(大渡)

### 王守神社

豊城王が大渡のところを通られたときに、大渡橋の近くに神社をたて、それを王守様とよんだ。

王守様は子育ての神様で、その池の水を飲むとお産が軽くなるといわれている。(大渡)

### 羽階権現と天狗岩用水

むかし、総社の秋元侯が農民のことを考えて、利根川の水をあげて来ようと思つた。ところが、利根川の水と総社の地の差は二丈もあつた。総社の方が高い。そこで、今の坂東橋の東から水をひこうとした。大名仲間では、秋元侯のこの企てを聞いて、秋元侯も頭がおかしくなつたとうわさしたほどであつたという。

秋元侯は、利根川の水をひいてくるのに利根川の東から西へと、川の下を通してひいてくることにした。

さて、用水路をつくつていたところ、どの辺のところかさだかでないが、用水路の途中に大岩がでてきて、人間の力ではとてもどうしようもない。

そこで、和尚様をあつめて、元景寺で祈禱をしたという。

そして、つぐ朝、その場所へ行つてみたら、その岩がどいていてどこにもない。

「ああ、これは天狗様がどかしてくれたんだな」

と思つて、天狗様に感謝して、元景寺の境内に、天狗様のお堂をたてて祀つたという。

それで、その用水のことを天狗岩用水とよんでいる。(総社)

### 坂東太郎岩の伊勢参り

むかし、上州のわかいしゅうが伊勢参りをして、ある宿に泊つた。ところが、そのわかいしゅうはかねがない。それで宿の亭主にたのんだ。

「わたしは上州の坂東太郎というものです。おかねがありませんので、なんとか都合してくれませんか」

宿の亭主は、そのわかいしゅうが真面目そうなので信用しておかね

を貸してやったと。

ところが、いく日たつても、おかねを返してくれない。それはどうもおかしいというので、わかいしゅうにおそわつたところへ来てみたつて。

そしたら、そこは川の中。そこに岩があつて岩の上に貸しただけのおかねがおいてあつたつて。

それで、坂東太郎という岩が伊勢参りをしたことがわかつたつて。

(下新田)

#### 小野小町が通つたという道のこと

元総社の明神様(総社神社)の西に、もと伊藤家があつた。伊藤家の家の道を小野小町が歩いたといういい伝えがある。(もとの大下宿地内)(元総社)

#### 稲の掛橋

むかし、小野小町が元総社地内を通りかかつたとき、川があつたか、あるいは出水で水たまりがあつたかして、そこを通ることができずに困つていた。

たまたま、そこで仕事をしていた農民が稲の束をまるめて、そこへ橋のようにしてやつた。

そのおかげで、小野小町はそこを渡ることができた。

そこで、その橋のことを、稲の掛橋と呼んだという。

今ではとりたばと呼んでいる元総社町の一区に伝わる話である。

(元総社)

#### 大渡橋の由来

むかし、豊城入彦命がここへやってきて、利根川を越えて東へ向かつたという。

そのとき渡つた橋なので、王渡橋といつたが、のちに、現在のようにな大渡橋というようになったという。

#### 王守神社のこと

むかし、豊城入彦命が東北地方へ行く途中ここを通りかかつた。そのとき豊城様にはつれの女の人がいて身重だつた。それで、豊城様はその女の人をここにおいて東北地方へ行くことにした。

そのとき、七つの池をつくつて、その水で身を清めて子供を育てろといつた。

その女の人は無事に子供を産んで、子供を育てたという。

そこへたてられたお宮が王守様で、今でもお産の神様として信仰されてる。

むかしは、木のお宮があつて、男女二体の神様がまつられていたという。

王守様のおまつりは、春が三月十五日、秋が十月十日。(大渡)

#### むかしの利根川

むかしは、利根川の幅はせまかつた。ふつとぶほどではなかつたが、川は越せたという。

西側の方が崖が低かつたという。

大水がでて、この辺は流されたということだ。

## お花の池

お花の池というのが新田小学校の近くにある。

むかし、あるところの女郎の女中さんにお花という娘さんがいた。

あるとき、大事にしていた金のかんざしを池におとしてしまった。

それを拾おうとしたら、池に落ちて死んでしまった。

それで、その池のことを、おはなの池と呼ぶようになった。

そこには地藏様のようなものがまつられている。

そこへおまいりするとかいこがとれるというのでおまいりする人もあった。

## 雷電様のこと

むかし、下新田の勘太郎という人と、上新田の倉林某という人、中林某という三人の人が、おらいれん様をたてたという。

それで、おらいれん様は、上新田と下新田の真中にあるのだという。

旧四月八日がおまつり。雷除けのわらじをうけてきた。返すときは倍にして返す。(下新田)

(蛇穴山、化粧薬師、御霊様の伝記は「信仰」のところにのせてある)

## 九、その他

ここでは、「民俗知識」「交通・交易」「民俗芸能」についてとりあげてみる。

「民俗知識」については、いわゆる俗信的内容が主になっている。内容としては禁忌・卜占・まじない・予兆・民間医療などについてである。この中で、特徴的な事項をいくつかあげてみる。

軒下のことについては、「住居」のところでとりあげたほうが適當と思われるが、ここに資料としてとりあげるので、広く「俗信」としてみることにする。

このことは無縁仏とか、家の境界の問題として考えなければならぬ事柄であると思われる。軒下に関する事項については、資料が少ないので、はっきりしたことはいえない。しかし、日頃の軒下に対する取り扱いをみるとずい分気をつけていることを知る。たとえば、子供に対しては、小便をするなどいい、ふだんでも、お茶を捨てる場所として意識している。葬式のときのおと念仏の水とか、盆のときに仏様にあげた水もここに捨てることと定めている。軒下には無縁仏がまつまっているのである。

無縁仏は、盆のときも、うちの仏様についてきて、ここから先(あまうち)へは入れないで、軒下にあつまっているのだという。利根・沼田方面では、あまおち(軒下)のところを「三途の川」といって、四十九日がすぎると、仏様はこの三途の川を渡ってあの世へ旅立って行くといっている。

「縁側から出入りする人」についても「住居」のところでとりあげるべき内容であるが、禁忌事項との関係で、ここにとりあげてある。いわゆる賓客の扱いについては、特別の配慮がなされた。一見客や和尚さんのような特別な人物に対しては、ふだん出入りしているとは口ではなく、客座敷の入り口から出入りしてもらった。江戸時代において、村役人層のいわゆる格式の高い家には式台といわれる特別の出入り口が設けられていた。式台玄関といわれるものである。総社町の都丸茂雄さん宅は、小栗上野介の旧居を移築したものであり、式台玄関が設けられている。これは、奥座敷の正面でふだんは使っていない。べつにとほ口がある。

群馬町のあたりでは、縁側から出入りすることを玄関あがりといっている。本地区や勢多郡などでは、縁側からの出入りについてサモト（サマト）あがりといっている。特別の場合に、ふだん使用しているいわゆるとぼ口とは別の出入り口を設けているのである。このことは、玄関の本来の機能を考えるのに参考になることであろう。サモトアガリの習俗についてもっと注意すべきであると考ええる。

次に「方角」の呼称についての資料をすることにする。

東北・東南・西南・西北のいわゆる四方の中間の方角についての呼び名である。このことは、地区によつて若干のちがいがあつた。例えば、上青梨子町では、次のように呼んでいる。

東北…赤城ずみ

東南…東京ずみ

西南…妙義ずみ

西北…伊香保ずみ

このいい方は、新築のときなどに、仕事師の人が使う言葉であるといふ。その方角で目立つ地域名をつけて呼んでいるが、上青梨子では、本文の報告と若干ちがっている。

鳥の鳴き声の聞きなしが若干報告されている。その中で、元総社で採集されたホウジロの鳴き声がおもしろい。

「交通・交易」については報告資料が少ない。「交通」の話としては、「渡し」とか「船橋」のことが利根川に関係した重要な交通手段として注目される。全く過去のこととして、その面影をしのぶすがもな

い。「交易」のこととしては、石倉や元総社のぼや市の報告がある。特に元総社のぼや市は有名で、近世から一・六の六齋市がたつていたといふ。江戸時代のぼや市（薪市）の様子については、『元総社誌』に宝曆

十四年（一七六四）の都木初美家文書が収録されている。それによると、市日を決めるまでは、毎日、上郷の山村から薪売りが来ていたとある。その後、現在のような、一・六の六齋市が開かれるようになったという。

総社町でも古くから三・八の六齋市が立っていたという。元総社の場合は、もとは、総社神社門前町のような形で市が立ったのではないかとされている。山地と平地を結ぶ市として注目される。〔前橋市史〕第三巻参照）

（資料）

元総社盆踊りの由来

孟蘭盆は真夏である。この暑さに耐えかねて夏の夜の涼を求めようとする人間の心理と、祖霊を迎え慰める目的のもとに盆踊りは発生したと思われる、盆そのものに附属する行事の一部でもある。

元総社においては、農業行事、養蚕との関係で盆を延ばし、お盆の八月二十四・二十五日に盆踊りは発生当初からおこなわれてきた。また、この時期には、村から嫁にとついだ人が盆で帰郷し、それを迎えての祭りでもあつた。大正初期においては、笛・太鼓を中心とした八木節などが盆踊りの座を奪っており、踊り子の囲む、中央に立てられるやぐらの作りと雄大さは、今も昔も変わらない。

ではなぜ上野国総社神社（明神様）において行なわれてきた郷土芸能盆踊りが長い間受け継がれ、歴史と伝統をほこっているのかと言うと、大正十年以後からの盆踊りが、満二十才で兵隊検査を受ける年を迎えた人達によつてのみ行なわれるようになったからである。それは、成人を迎えた者は毎年踊れるというのではなく、満二十才になったその年一度しか資格がなく、その年に踊らなければ一生盆踊りの舞台を

踏むことが出来ないものであるから、その年の豊作、不作、景気、不景気にかかわらず、その年の成人は、自発的に成人会結成のもとに開催せざるをえない。

召集されて同窓生、仲間という会えなくなるかもわからなく、楽しみとして少ない時代にあつて盆踊りが唯一の楽しみであつたことと、満二十才の兵隊検査を迎えられた成人を祝うようになったこと、満二十才の成人に限られた理由である。

大正十年以後今日まで、長い歴史の中で二度ほど盆踊りが中止されたことがあつた。それは、昭和十二年の日中戦争の年と、終戦の年にあたる昭和二十年である。ことに昭和二十年は、盆踊りが八月十五日過ぎであつたことと、前の年、十九年に多数の召集者が出て、翌年は開催が無理に近い状態であつたことであり、この年の成人は一年上の仲間と踊つたのである。

上野国の盆踊りは、幕末から明治初めにかけて越後から流入して盛んになつた。盆踊りの伝統を知る中にも総社神社（明神様）において受け継がれてきた郷土芸能盆踊りは、他に例を見ない特例である。

昭和以前には仕度とてまちまちであつたが、桃色の手ぬぐいを首に掛けて踊ることはそろつていた。年々上質化されたそろいのゆかたで踊り、中でも女性のゆかたのえりに桃色のえり布を付けることは、今もその名残りを物語っている。

昭和62年

（元総社成人会「盆踊りの夕」パンフ）

次に、「民俗芸能」についてみる。

本地区の「民俗芸能」としては、神楽と獅子舞と盆踊りがある。そ

のほかに、二十二夜信仰に伴う和讃がさかんであつた。

それぞれの「民俗芸能」の内容とその特色については、専門的な立場からの報告がなされているので、ここでは、ごく一般的なことだけを、若干記してみる。

まず、総社神社に伝わる太々神楽はこの地域の中心的神楽で、本文に記すとおり、この近在の宗家的存在となっている。総社神社から伝えられた上新田・総社町植野など各地の神楽が、それぞれの場所で、現在でもしっかりと根をおろして、今にその伝統を伝えていくことは、総社神社の太々神楽をさらに価値あるものにしていくといえよう。

獅子舞については、江田・野良犬・総社町上宿・総社町立石の四カ所のもものが報告されている。いずれも、一人立ち三区の獅子による舞である。この中で、江田の獅子舞については、「褒言葉」がある。獅子舞を見物にきた客人のほめ言葉に対して、獅子側の代表がお礼の言葉をお返している。この形は群馬県内では珍しい事例である。客人側と獅子舞側双方の言葉が非常に整つていて、学のある者の関与を思わせる。神楽にしても獅子舞にしても、伝統ある民俗芸能を、地域をあげて継承し、次代に伝えようとしていることは、このような文化財を伝える地域の人びとの物心両面にわたる支えがあればこそである。心から敬意を表したい。

夏の名物としての盆踊りも、この地域の一つの特色ある民俗文化財である。

群馬県の盆踊りといえは、八木節が有名であるが、いわゆるこの利根西の地域には、八木節とは別系統の盆踊りが伝えられている。内容については、本文に記すとおりである。八木節の源流とあるが、堀込源太の八木節がここから生まれたということではない。八木節の源流については、確たる説といえるものがないのが現状である。八木節よ

り前に行われていた盆踊りの系統をひく、「石投げ」系統の踊りと唄がこの地域にもみられるのである。この系統の盆踊り・唄は、広く旧群馬郡を中心とする西毛地方から、木崎音頭・赤腕節のみられる新田・佐波郡から邑楽郡地方にまでひろがっている。その地域におおいかぶさるように、八木節が分布しているのである。新田町のように古い盆踊り唄である木崎音頭と八木節が共存している地域もある。

利根西の地域の中で特に注目すべきは、元総社町の明神様（総社神社）の境内で毎年八月十三、十四日に行われている盆踊りである。明治の末に編纂された「元総社郷土誌」には、八月十三日から十五日まで孟蘭盆会が行われ、盆踊を十五、十六日に行ったとして次のように記している。

「盆踊を十五六日には盛に踊りたりしが、今は其筋より風紀取締上差止められて次第に止み失せぬ」

これは、当時官への報告ということをおいての記述であろうから、果してこの文言のとおり、盆踊りが中止になっていたかどうかはつきりいえない。しかし、今行われている盆踊りが古くからの伝統をひいていることは、その内容が示すとおりである。特に、元総社での盆踊りがかつては徴兵検査の年齢の青年（数え二十一歳）が主催し、現在では満二十歳の者の組織である成人会が主催し、その伝統を継承しているのである。このように元総社町で行われている盆踊りは、踊りと唄とともにその主催の形が珍しい。

なお、八木節については、元総社町に「前橋五謡会」の組織があり、昭和四十七年に発足し、各種の催しに出演し、活躍している。

このほか、囃子については、石倉の祇園囃子、古市赤烏神社の祭り太鼓、総社神社の祭り太鼓がある。このうち石倉の囃子は戦後の昭和二十九年以降にはじめられたものである。古市の赤烏神社の祭り太鼓

は古い伝統をもち、総社神社への奉納太鼓である。総社神社の祭り太鼓は「明神太鼓」ともいい、総社神社の大祭のときに屋台十一台がひきだされるが、その屋台の上で打ち鳴らされる太鼓である。この太鼓の音は十里四方にまで鳴り響くとまでいわれた。十一台の屋台のうち殿小路の屋台が先頭で、ここが一番先に太鼓をたたくという。

古市や江田の二十二夜和讃、総社の綱笠和讃、大友の百万遍念仏なども、仏教芸能として、古い伝統が現在に復活して保存会などの新しい組織化もみられ、民俗芸能は次代への着実な歩みをみせている。

## 十、まとめとして

今回の民俗調査の対象地域は、前橋の中でも利根川の西部に位置する。現在の利根川からみると右岸に属する地域である。

利根川は中世から近世にかけて河道がたびたび変ったという。今の前橋市域に属する地域においては、古くは今の桃木川のあたりを流れていたといわれている。その地域には、利根川にちなんだ地名もあるし、すこし掘ると川原石のたくさん出るところもある。そして、むかし、利根川が流れていたという伝承がある。

現在の利根川の流路になった時期についてはさだかではない。いくつかの説があるが天文八年（一五三九）および天文十二年（一五四三）の大洪水によって河道が変わったものとされている。（『前橋市史』第一巻）また最近應永三十四年（一四二七）と推定する説が出されている。（『県史通史3 中世葉』）

しかし、最近になって、国道五〇号線の拡幅工事の際の事前調査によると、旧利根川の河道といわれているところから、古墳の一部や古

墳時代の住居跡が発見されたり、平安時代の水田跡や住居が複数発見されて、今までの伝承を大幅に修正せざるを得ない状況になっている。

この調査が行われる前にも、土師器や須恵器の発見があったし、東片貝町の片貝神社の裏には古墳が存在していることよって、今回の発掘調査の結果とほぼ同時代の遺跡・遺物はあったが、今回の学術調査によつて、古墳時代からの集落の存在が証明されたわけである。

となると、古い民俗を考える場合に民俗のひろがりやを予想したとき、今、地質や地形の上から前橋台地と呼ばれている地域は、民俗の上でも一つのテーブルと考えてもよいように思われるのである。しかし、今から四百数十年前に、利根川の流路の変更によつて、生活面での交流が遮断されたところがあった。今の利根西といわれている地域と利根東の旧上川・下川淵村地域とである。この地域については、民俗の上で、ある面では共通点が考えられ、ある面では相異点が考えられるのである。この点については、現在では、牛込姓が利根川の東西にあることや、横手よこてという地名が、やはり東西にあるという伝承として残っている。

なお、川原町は、明治元年九月、利根川の変流によつて、利根西から利根東のムラに変つたところである。そのために習俗や言葉の上で、隣接するもとの南橋村の人たちとのちがいにどろいたという。特に言葉づかいについては、そのちがいに気づき、川原の人たちの使う言葉については、「群馬郡言葉」と呼んでいたという話もある。距離的にはそれほど離れていないところの人たちが、川によつて東西に断断され、長い間、べつべつの生活を営んできた結果生まれた文化（民俗）のちがいである。

そこで、今回の利根西地域の民俗調査についていえば、その点をいろんな方面から考えてみようということになったのである。

平成二年度に、利根東の、上川淵、下川淵地区の民俗調査が行われたが、まだ報告書はでない。比較はこれからである。

ところで、現在では、利根川をはさんで西の人も、東の人も、相手のことを「利根むこう」とよんでいる。今では橋が何本もかかつて、東西の往来は容易になつたけれども、今から百年も前には、橋はあかなし、あつても一、二本だったから往来は不便だった。だから縁組はほとんどなかったという。

因に、利根橋が架けられたのは明治二十八年（一八九五）のことで、それより十年前に、やや北に、仮称金質橋が架けられたが、老朽化したので、利根橋を架けたものという。大渡橋が架けられたのは大正十年（一九二一）のこと。もつとも、元治元年（一八六四）に万代橋が大渡に架けられたが、四年後の明治元年に流失している。

これらの橋より前には渡船が大渡と実正にあつたというが、生活上の交渉はうすかつたということがいえよう。

このように利根川に橋が架けられるまでは、利根西と利根東の縁組はほとんどなかったという。双方の人が縁組をしてみても、いわゆる民俗のちがいに気付いたものという。その一つに、利根東から嫁さんをもたらつたところ、もらい方からあらかじめくれ方（嫁方）へ、箆へらを贈つておかねばならないという習慣におどろいたという。利根西の人はこれを、「利根東と縁組すると箆へら一さお損する」といういい方で表現している。式後の女一見の往来も、利根西にはないという。

今回は利根西の民俗をまとめてみた。

これから利根東の民俗をさぐつて両者の比較検討をしてみたい。



## 第二章 社会生活

### 一、村の概況

青梨子のこと 青梨子は旧清里村の一大字。この中が、次のように六つの組（コグミという）に分かれている。コグミのことをクルリともいった。前原・天神・中内出・北内出・八幡・西原。前原の中はさらに次のような六つの組に分かれている。上屋敷・機械上・機械下・下組・大下・新田。この組については、特に目立った境目はない。旧清里の半分は青梨子が占めていた。村会議員の定員は十二人であったが、六人は青梨子の出身であった。青梨子の鎮守様は菅原神社。

(青梨子)

総社と元総社 前橋市へ合併する前の総社町は、総社五ヶ町・高井村・植野村が明治二十一年の町村合併でいっしょになってできた。本来、元総社が総社神社があるので総社と呼ばれていたが、秋元様が来たとき、植野の南に総社を移して、植野総社といていたが、それでは混乱するといので、もとの総社を元総社と呼び、新しい方を総社と呼ぶことになった。(鍛冶町)

総社五ヶ町 新田町・粟島町・町屋敷・鍛冶町・巢烏町を総社五ヶ町という。粟島町は大屋敷から分れた。町屋敷は秋元が移封されるとともに、町の住民が移り、町がなくなってしまった。今の農協の辺にあった。(鍛冶町)

桜が丘 元は植野分だった。植野は、一本木稻荷神社の前の岡屋敷に住んでいた村だったが、街道ができて、移った。立石も元景寺の前だったが、移った。高井は北原の観音沢の方から移した。(桜が丘)

町屋敷 もと総社五ヶ町のひとつだったので、秋元様の転封のときに、住民もついていってしまったので、今は土地割に町割の名割りをとどめるのみである。町屋敷北とか町屋敷南という地名がある。(鍛冶町)

鍛冶町 総社城の城下町で、鍛冶屋が多く集まっていたところから、その名がついた。元総社から鍛冶屋が移住して町をつくったのであるといふ。(鍛冶町)

植野 一本木から今の所に移った。

大谷		大谷	大谷
畑		榎田	榎田
立見	立見	大谷	大谷
榎田	×	大谷	寺
大谷	大谷		大井
大谷	立見	立見	立見
大谷	大谷	戸所	戸所
大谷	大谷	大谷	大谷
大谷	大谷	大谷	大谷

馬頭

植野村の始まりの町並

高井 観音沢から、今の所に移った。  
新田 稻荷木から移った。大屋敷からは新田は新宅だといふ。鍛冶

町にきた佐藤氏が「歎立て」の命を受けて新田にきた。大阪夏の陣で功労があり猿谷の名をもらったという。猿谷橋を作った猿谷ロクザエモンだという。佐藤、吉沢、中島が古い。

上、中、下に分かれている。それぞれ庚申講をし、宿があり、掛け軸を持つ。秋元侯が総社神社の祭をやる当番の都合で分かれたという。中はへいそくをかつぐ馬のたずなを持つ役だった。上中下から二人ずつ当番を出した。まがつている町の角から西の町は横町、角から南は立町といった。(総社新田)

**大屋敷** 元は王屋敷といい、王様が住んでいたという。新田は大屋敷から、総社の町を作る時に分かれた。(総社新田)

**野馬塚** 元は王馬塚といい、王様の馬が死ぬと、今の前工のグラウンド近くに埋めて塚を立てたから、名がついた。(総社新田)

**江田** 元々は、今の町の南より、新保田中との中間のあたりにあったようである。武田信玄の家臣の瀬下豊後守が持っていた「枝」がここにあたり、元総社の分村だったのではないか。神社も古いものだが、地元の人がつまっていたものではなく、勝呂神社に対抗して作ったものという。(江田)

**稻荷新田** 川曲から出たものというが、同じ名前がない。柴田氏は高崎の大沢から出たという。(稻荷新田)

**西箱田** 前橋市に合併になり、区長制から自治会になった時、戸数が多いので東西に分かれた。五十戸と五十戸に分かれ、東箱田と後家が一緒で六十戸くらいになった。後家と前箱田は、江戸時代高崎藩領で、箱田は前橋藩領という区別があり、前箱田は高崎分ということ、電報も高崎から配達になっていた。老人クラブも、前箱田だけでは、助成金を受けられるほどの規模でなかった。西箱田と一緒にあって、川西長寿会を作った。前箱田団地ができて、人数がふえたので、

分かれて独立の老人クラブになった。(西箱田)

**大渡** もともとは川の中島の方に大渡の村があったが、大水で欠けて、総社分の方に動いてきた。川の中に、元屋敷があったり、田畑が欠けてしまっている。前工の南も大渡分、向大渡といっている。

公民館は比例で分担している。昔は六対四で総社分が多かったが、今は総社七十戸、元総社百戸になっている。行事でかちあう時は、一年交代で使っている。管理運営委員で公民館を運営しており、監査一、三役三、婦人会一で両方から出し合計十人で運営している。委員長を交代で出し、副会長の家に申しこむようにしている。子供会は一緒の組織で、総社分に入っている。元総社小は遠いし、総社小の学校区に入っている。自然に総社になってしまった。(元総社大渡)

元総社の大渡村が元々あり、そのまわりは総社町大字総社だった。新宅へ出る時や、利根川で欠けおちて、総社町分へ移ったので、住所は移っても、つきあいがある元総社分となりいりくんできた。最近では、明治十三年の大水で欠け落ちた時がたくさん動いた。(総社大渡)

公民館は、両方で使っている。(総社大渡)

女の人の酒のみが多かった。石積み、イカダ師の奥さんで、留守をしながら、糸ひきや機おりをしていた。早い人は一日一反おった。

(元総社大渡)

**鳥羽町** 西部は新高尾村大字中尾字金尾で、東部は新高尾村大字鳥羽だった。昭和三十年に前橋に合併した時、鳥羽に吸収されてしまい、金尾町にならなかった。最初は鳥羽町自治会だったが、数年後、分かれて、東部、西部の自治会になった。元々の村がちがうので合わない。スポーツ関係と老人会行事は合同でやっている。これは人数が多い方がいいため。(鳥羽西部)

**石倉町**のこと、むかし内藤分といわれたところが、石倉となり、そ

の中が、上と下に分かれた。のち、利根橋ができてから、中石倉が生まれた。ここへは、主に、上と下石倉の人が移り住んだ。現在は、上石倉と中石倉を合わせて石倉といい、下石倉だけで独立している。

#### (下石倉)

**石倉の地名由来** 江戸時代、酒井侯の領地だった頃、ここに米倉があつて、石の倉だった。それで、石倉と呼ばれるようになったという。ほかに、奈良時代に立派な倉があり、立派な倉のことを石倉といったという説がある。(下石倉)

**末風村** むかし、この辺に末風村というのがあつた。天明三年の浅間山の噴火のとき押し流されて、村がなくなつてしまつた。むかし、この辺に小さな川が流れていて、大噴火のとき泥が押し寄せてきて、本流のようになって、末風村は流されてしまつたという。上新田と下新田と横手は川のはたにあつたが、このとき川が大きくなって、川の東西に分かれてしまつたという。(下新田)

**地名** 五京目、五箱田、七大類、八新保という言い方があり、同じような名の地名がある。(西箱田)

**五箱田** 箱田は、西、中、前、東、後家の五箱田といった。(西箱田)

**後家箱田** 元は、五軒きりなかつたので、五軒箱田といつたのが、後家箱田になつた。(西箱田)

**番地のつけ方** 小字の序列でつける。一つの小字に全部番地をつけ、次の小字にうつる。

村西—道下—道上—西田—高木—古市境—村山 (西—東) 村後—古市前—浜地—五反田—三丁免—西中袋—東中袋—東稻荷境—西稻荷境—木下—張近—木下—村前—川東— (東—西) 川西

一番地から一六六二番地までついている。明治九年の地籍台帳を作る時に、番地がついたが、その前は屋敷に戸番がついていた。(西箱田)

**地名** シチブツ(七仏)、田の中で墓が七つあつたので、明治九年になつて、正式な地名として、登録された。それ以前にもあつたかもしれない。(西箱田)

**井戸** 十人で使う共同井戸だった。天狗岩用水ができてからは、どこで掘つても、水が出るようになった。(総社新田)

**草分け** 富沢家では、天正十八年十月十二日の富沢織部の位牌が最も古い。小野里家では、天正十八年十月三日の小野里内蔵丈の位牌が最も古い。初代であるという。同じ年の同じ月になくなつていく。

#### (江田)

長井家が、古く、常円寺の最初の世話人という。長井因幡守が先祖で、天正期頃にここに住みついたという。高崎の大名の家来で、出家して箱田に來たという。現在の子孫は十五代であるという。先祖の戒名をとつて、常円寺にしたという。(西箱田)

姓原、戸所、並木、小沢、島津の家が古い。(元総社大渡)

湯浅家は武田信玄の家来で、落人でここに來たという。寺の南の阿弥陀様をしょつてきたという。

笠井家は長篠合戦後、こちらに來たという。いわれを書いた大きい石塔がある。(上青梨子)

元総社分で、並木、姓原、島津、小沢が古い家である。(総社大渡)

石倉の斉藤さん。昔の巢鳥分で、総社町大字総社の六番地か七番地だった。それが、昭和二十七〜八年頃連絡が不便で分ける時、大渡になつたらしい。二十三戸ほどだったらしい。初代自治会長は増田レンガの藤井牧太郎さんで、戸所ヨシオ、戸所啓太郎とつづいた。

#### (総社大渡)

小野里、阿部の家が古い。小野里家は十四代で、総本家がある。

#### (鳥羽西部)

中山氏 元は川原からきた。(総社新田)

鍛冶町の松田氏 土木工事の技術にすぐれており、北原の谷地を開拓して、北原村のはじまりとなった。(総社新田)

吉沢氏 秋元氏の命令で、元総社から移ってきた。大屋敷の吉沢氏とは関係がない。(総社新田)

大谷家 言い伝えでは、北条氏直の家来で、藤沢に住んでいたといふ。大谷オオヤといった。北条が負けたので、柴村に土着し、植野に移った。天明年間から大工になった。(桜が丘)

新田 あちこちから移ってきた所なので、いろんな苗字がある。山宮、山川、斉藤、朝倉、伊藤とバラバラである。(桜が丘)

苗字のはなし 伊藤家の本家によそから番頭さんが働きにきていた。その人がよく働くので新宅に出してやった。そのとき、苗字をくれたが、伊藤の「藤」に、藤からさきに新宅にだすので、藤崎という苗字をくれたという。(元総社)

上新田は、倉林、中林、佐藤が中心。下新田は、牛込が半分くらい。あとは杉山、長井である。牛込姓は大体一つのもの、同じ苗字の仲間をイツケという。ご祝儀のときには、牛込姓のものは全部よんだ(皆さん呼びという)もらい祝儀のときは、いたみ樽が二本あくといった。くれ祝儀のときでも、いたみ樽一本はあけた。人をよぶときには、「口代」というのを書いてまわした。イツケは紋所が同じ。(下新田)

屋号 コウヤ、シモダヤ、アラヤシキ、イシガキ、タナンチ、クルマンチ、デエジングルマ、カワバタドウなどがあり、シンタクはコウヤのシンタクといった。(江田)

仲家、西原、川端、庄屋ち家、小間モン、豆腐屋、中店だななどがあり位置、商売などからついたものが多い。(西箱田)

西んち、東んち、下んちなどについていたが、川欠けで、西んちと

東んちはひっくりがえしになっている。(元総社大渡)

西端舎セイケンシャ 一番西にある家

サカヤ サカイヤといっていたのが、つまった。上青梨子と野良犬の境だった。(上青梨子)

スミノヤ 町のスミにある屋敷なのでこういう名になった。

巢烏の町並 この町は、大体支那事変の頃まで町の共有地の人数の五十四戸前後が続いていた。(総社新田)

まず上から本家(福田唯七、金作、章雄) 田中屋(山賀正夫、寛太郎)、昌栄寺(松田正記、稔)、狩野屋(狩野利三郎、孝造、寅雄)、綿屋(伊藤好郎)、伊藤半四郎(文夫、由子)、機屋(川田三郎、知巳夫)私の家(福田和四郎、辰雄)、隣のうち(戸所良吉、伊勢雄、健一)、新亀屋(新木宗四郎)、紺屋(新木平治、金治郎)の順でここまでが上組です。

上の北側は、局(元、郵便局佐藤昇平、貞司)、煙草屋(伊藤国太郎、次雄、庄一)、その奥に笹沢松太郎(芳二)、宮下政吉の二軒がありその東が戸所秀作(文太郎)、上村仲蔵(理重)、福岡由助(葉屋、骨接ぎ)、丸山の床やの前にあった人力屋(福岡庄吉)、次が万石屋(新木福松、伊勢雄)、糸屋(戸所新平、節夫)、石屋(福岡九十九、嘉四郎、伊勢男)、公会堂の以前にあった藤井なか、伝寿庵(狩野庭生、文雄)奥に入って今井万作(四郎、孝治)おなかさんの東の小沢啓三郎(栄一)、玉木屋(小林重正)、この家は大き七、八年頃に大渡から移ってきた。以前は岩丸と言う家があった。

その東の田中屋は昭和に入って上から移ってきた。その隠居も同じ頃出来た。

下の南側は、吉沢直七(清)、福岡清五郎、よこちようの家(小野里

信一、憲享)、鉛屋(福島亀内、政司)、永谷二三衛(治夫)、吉沢辰三郎(繁雄)、吉沢伊勢吉(弾治)、次ぎに吉沢忠夫さんのところに福岡元平の家があつたが昼間、風もないのにつぶれた。それから小野里種吉(春吉)、戸所幾太郎(秋光)戸所八十七(一男)、筆屋(松本栄吉、善太郎)、煙草屋(島田竹七、藤太郎)、島田芳太郎(寅雄、正雄)その南に島田友治、伊藤アイ等の家が東から並んでいた。

下の北側を横町の東側から言うとな福田平四郎(善司、広一)水車(戸所芳雄)、新木豊吉(房吉)北へ行って馬場力造、その奥がお蔵(吉沢竹三郎、喜三郎、利雄)うどん屋、谷屋(小野里又治、岩雄)、戸所弥十郎(柳造、正雄)、戸所倉八郎(亀三郎、長司)、小沢羊十郎(勉)、島屋(島田サク、チカ、タケ)、山田儀十郎(和四郎、又十)、伊藤庄七、新木綱吉(利治)の順に並んでいたが、ところどころに桑原や畑が在り閑静な町並であった。

本家(福田金作、章雄)は魚屋と言われているが、昔問屋でその後造り酒屋をしたので魚屋の言われはよく判らない。その後酒蔵を本間善太郎(初代)に貸し、その後山賀が入った。

狩野屋(鹿野寅雄)明治の中頃まで唐傘の製造販売をしていた。

昌楽寺(松田稔)昌楽寺廻り村名主をした。

綿屋(伊藤好郎)明治の中頃まで綿を紡いでいた。紡(つむぎ機)の動力は川の水車を利用した。

機(はた)屋(川田知巳夫)明治末期頃から創業したと聞いている。主に縮緬を織り、撚糸業もしていた。動力は始め、道路の真ん中を流れる小川の水車を利用したが大正九年にはじめて電気の動力で織物が出来るようになった。戦後まで営業していた。

新亀屋(新木宗四郎)そばやをしていたことがある。

煙草屋(故伊藤庄一)きざみ煙草の製造販売をしていたといわれて

いる。

薬屋(今の丸山床屋の所)天心真揚流の柔術家で薬を売っていた。万石屋(新木伊勢雄)米の粃み摺りの後上米と屑米を選別する機械を万石といっている。この機械を製造販売していたと言われていた。

糸屋(戸所節夫)糸屋をしていた。

石屋(福岡伊勢雄)創業天明年間(約二百年前)旧幕時代から今まで続いている。

伝寿屋(狩野サダ子)昔庵が有ったところでその庵の名前が屋号になった。

田中屋(山賀寛太郎)造り酒屋、山瀬川、二子山の銘酒を醸造していた。

うどん屋(小野里岩雄)たんめん屋とも言った。大渡橋が出来る前は家の前の水車を使い、その後は水道の所の水車でうどんを製造していた。

紺屋(新木金次郎)明治の末期まで紺屋(染物業)をしていた。私どもが知っている時代まで藍瓶が有った。

島屋(島田藤太郎)明治から大正の始めにかけ肥料や石灰を商う他、煙草や塩も販売した。

筆屋(松本善太郎)明治福岡まで筆造りをしていたがその後養蚕の網を長持ちさせるため渋(しぶ)で染めたり、渋紙を造っていた。

鉛屋(福島政司)鉛菓子を製造販売していた。

かみの車(福田広一)水車を所有していたため屋号となった。

しもの車(戸所好雄、久保田友治)水車(精米、精麦)をしていた。

焼き印 ゲタや道具に焼き印を押し、所有者がわかるようにした

① 八三 やまさん

②

③

入万 いりまん

入三(江田) いりやまん

明治の測量 高崎の事務所から来て、測ったが、地元の有力量にた

のんでやった。前箱田を一番にはかって、手本にしたので前箱田はのびがない。他はこれを見て大変だと思つてやったので、平均9%くらいのがあった。村境ほど、のびを大きくして測つた。(西箱田)

ブノビ この辺には、ブノビの土地があつた。明治九年の土地測量のときはなし。測量はムラの西からはじめた。はじめのうちはきちんと測つていたという。ところが、しまいには一筆ごとやるんであきてきて、無駄足あるいたという。それがノビになつた。小さい土地のことは、ホコチといつた。養蚕の景気のいい時分に、田だつたところをまくりあげて、桑を植えて養蚕をした。そういうところをタドオシといつた。もともと田だつたところを、桑畑にするためにまくりあげた。高くなつたほうが桑原になつた。低くなつたところが田圃でせまい。そこをホコチといつた。高くなつて桑原になつたところと、低くなつて田のままのところと二分されたわけ。もとは両方とも田だつたというので、タドオシといつている。(前箱田)

ナワノビ 帳簿にのつている面積よりも余計ある土地のことを、ナワノビとか、ノビメといつた。自作地にノビメが多かつた。大地主とか寺の所有地にはノビメがあつた。(青梨子町)

郡の境 敷島のおえんが岩の上に立ち、真西の浅間山を見て、両手をひろげると、向いの西の方は総社、背の方は勢多になる。敷島、川原も総社分で、税金もあつてきたし、消防の見まわりにもいつた。

(総社新田)

町境 増田レンガの東北に境があり、そこから敷島公園のおえんが岩をむすんだ線の西が総社分に入る。(総社大渡)

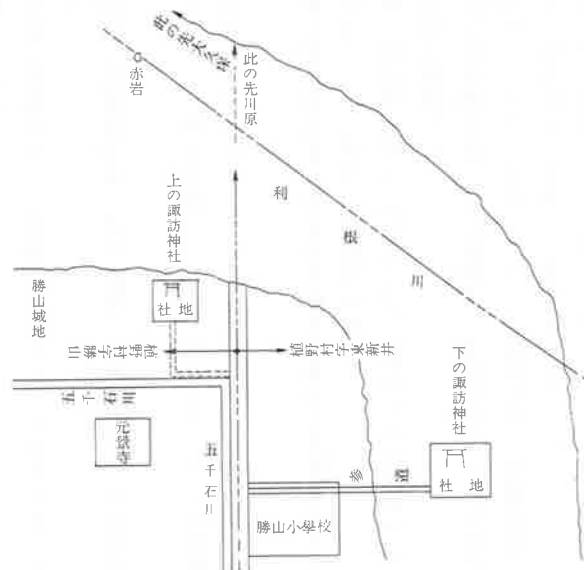
川欠け 利根川が広がり、田が落ちてしまつた。一町五反おちたとか、田が落ちたので、学者になつたとかの話がある。(総社新田)

壁土 春山さん宅の土は、ねばりがあり壁土によかつたので、新田

諏訪神社元宮植野村字東新井字勝山二ヶ所  
有り明治二十一年九月五、六日、大風雨にて利根川満水にて九月七日午前流水する。

立石諏訪神社  
現在の所に明治三十二年十月二十七日改築する。

志しま公園  
おえんが岩



の家の八割は春山さんの土を使っている。川原の方の土は砂地で、壁土には向かなかつた。(総社新田)

## 二、村の構成

村の組織 組、行政区の評議委員、区長、村長という形になり、有

力者の評議委員で、特事を決めていた。(西箱田)

はつちようぐみ 区の役員として、区長の下に、評議委員がいた。人数は四名、小相木には、四つのはつちよう組があつて、各一名ずつの評議委員がえらばれた。任期は一年で、順番であつたが、重任の人もいた。地区の有力者がやれといえは、何年もやって来た。戦争中は配給の世話などもした。葬式とか結婚式のときの世話をした。はつちよう組は、今の隣保班のようなもので、八軒くらいで一まとめになつて来た。冠婚葬祭のときに手伝いつこをして来た。今でも、むかしのはつちよう組の人が、ある程度のつきあひをしている。隣近所で組んで来た。なにかがあると相談し、手伝つたりした。できごとがあると、施主から一任されて、いろいろの世話をした。(小相木)

川曲の組 上が岡田組、中が中里組、下が柳井組とわかれていた。

(川曲)

組 江田は、中組、東組、西組に分かれており自治会長は、順になつた。次の自治会長になる組の代表である評議員が副会長になる。また別に二十三の組があり、二十軒くらいで一組を作っている。また、中組は小野里の一家、西組、東組は富沢の一家で作っており、新宅は本家附になつた。小野里の中組は住宅の位置とは関係がなくなつて来る。

(江田)

五人組からはじまつたもので、分家や新加入などで、数は變つて来た。正月の朝湯のよびつこなどのつきあひがあつた。(西箱田)

中組、五十石、三ツ屋に分かれている。(上青梨子)

大字ーコアザ 大字の下がコアザに分かれ、その中がさらに伍長組(伍人組ともいった)に分かれている。一つの伍長組は八軒くらい。コアザのことは、たまにコウチといつた。(西箱田)

コグミ むかしはコグミ全体で、ご祝儀とか不祝儀のときに、うち

中してよばれていつた。だからコグミの中が伍人組に分かれているとはなかつた。(青梨子町)

班長会議 総会がなく、班長会議がその代行をしている。定例会は、年度はじめと年度末(四月と三月)の二回、あとは、必要に応じて随時開いている。決定事項は、回覧板で知らせている。(下石倉)

寄り合ひ 区長宅で村のことを相談する。連絡のことは、ジョウツケという人がいて、さたをしてまわつた。評議委員に伝え、集まつて決めたことを委員が組長に伝えた。(西箱田)

寄せ太鼓 殿小路は、上が三十戸、下が三十戸、ちようど真中のところ(公民館)で、寄せ太鼓をたたいて、集会の合図をした。百万遍のときもはじまる前にたたいた。臨時のときにもたたく。

(元総社殿小路)

下石倉町の役員 昭和四十二年度より前は区長といい、そのあとは自治会長といつて来る。

区長(自治会長) 一人、伍長二人、会計、隣組長四人で、本部任期は二年、任期は一年。

道を境にして、下石倉を東と西に分け、それぞれに伍長をおいた。

自治会長の時代になつてから、区の役員を次のように改めた。自治会長、副自治会長、書記、会計、この四人で本部を組織している。班が四つあつて、この四人が班(組)を担当している。班は、区画整理後は、道を境にして分けて来る。区の組会はない。区の重要事項は、区長(自治会長)のうちへ役員を呼んで相談し、決つたことは、ふれたり掲示板にはりだしたりしている。(下石倉)

ムラの役員 ムラには、区長と理事という役があつた。理事は昭和十年代くらいまでおかれていた役職。班ごとに選んだ。各班に一人ずついた。ムラのおもだつた人の推せんによる。任期は二年、人数は五

名ほど。区長と相談して、ムラの行政にあたった。このほかに伍長がいた。六、七軒に一人くらいの割合でいた。班の年輩の人がえらばれた。ほとんど仕事はなかった。任期もとくになく、それほど交代もなかった。このほかに神社の世話役としての神社総代（任期二年、十人くらい）と、寺の世話役としての寺世話人（任期二年、四・五人）がいた。むかしは、ムラの総会はほとんど開かれず、区長と理事が寄つて相談した。区長の家にあつまつて、七月（盆休みのとき）と暮（十月十四日十五日）の二回いろいろ相談した。区費についても、区長と理事が相談してきめた。区費は、土地の反別と戸数割（平等）の本立て、半期ごとに徴集した。七月と十二月が納期。（下新田）

ムラヤク 夏になって、夕立がくると往還に出水がある。そんなときには、山の砂を道にしいた。一夏に二度も三度も出た。人足に出るとおかねをくれた。道普請は一日いくらときめた。二十銭とか二十五銭とか、金額は理事がきめた。出ない人からは、出不足をとつた。その場合はあとで一回とか二回でて帳消しにしてもらった。（下新田）

大字の役員 区長は、前原と青梨子の本村は一名ずつべつにでた。組長はコグミに一名ずついた。前原本村とも六名ずつ。古くは、区長の下に区長代理がいた。ムラの重要なことは、区長と組長が寄つてきめた。（青梨子）

区長 二年任期だったが、西と東で一年交代になった。推薦で出た。区長の仕事が大変なものと、家も大変で二年続けられないということだ一年になった。ハオリツケといった。区長としてハオリを着ているから、経費もかなり、多少出費してもしかたがないという意味であった。合併当時で、区長手当は、一戸割で年間十円で、たいへん少なかった。仕事ができなくて収入がへる分は、税金だと思えといわれた。（西箱田）  
定使い むかし、定使い（じょうつかい）という役の人がいた。そ

の人は、「明日は休みだよ」といって、ムラの中をどなってあるいた。このことは、区長がきめてふれさせた。ムラでやとつていた形、ムラから手当をだしたようだ。ふれのほかに、春、夏の町内会議をするときの、お茶出しをしたりした。夏になると、鎮守様のところへ氷の店をだした。（江田）

モノビ むかしは奉公人などは、アズキを食えばその日は仕事を休んだ。アズキはモノビのご馳走と考えられていた。むかし区長の下にいた小使役の人が、モノビのときには、ムラ中を、「今日はお正月だよ」といつてまわつた。小使役の人はTさんという人だったが、農業をしていて、モノビに区長の命を受けてふれてまわつたのである。

この人は、ムラの会議のときには、お茶番をした。自治会（区役場）から給金が支給されていた。ムラの休日がきまつてもまわつた。「正月だよ」とでつかい声をだしてまわつた。これは、その当時は、ムラの中に奉公人がいたので、そうしたものという。正月など、大きいモノビのときにはまわらなかつた。小さいモノビのときにまわつた。このふれを聞いて一番喜んだのは作番頭の人たちであった。（西箱田）

区費 古い時代のことはわからない。現在は、家持と借家に区別して割当ている。もとは、六段階に分けて割当てたが、不公平だというのでやめにした。今は、家持の人が、月額四五〇円、借家の人が三五〇円としてゐる。徴集方法は、組によつてまちまち。（下石倉）

消防団 一軒一人が団員で、組頭一人に小頭二人がいた。消防ポンプが番小屋の中においてあつた。23軒くらいあつたので、二十人くらいの団員だつた。番小屋の所に火の見もあつたが、戦中の金属回収で出してしまった。（元総社大渡）

火の番 もと、火の番があつた。火の見の下に番小屋があつて、そこを火の番の宿にした。小屋は九尺二間くらいの大ききで、床が張つ



てあり、こたつもきつてあつた。当番帳があつた。半紙の横帳で、組と名前が書いてあつた。四、五人で組んでやつた。十二月一日から三月末までの間にした。時間をきめて、拍子木をたたいて、ムラ中をまわつた。一晚に四回まわつた。十時、十二時、二時、四時の四回。当番の者は、夕方になると、布団をかついで、番小屋に行つてつとめをした。火の番は、現在はやつていない。(小相木)

番小屋 区内に番小屋があつて、夜警のときに使つた。小屋は小さくて、四人くらいしか入れない。夜警は、年の暮とか、つけ火があつたときなどにした。夜警は、順番につとめた。一回四人くらいずつでた。夜、何回か巡回した。拍子木をたたきながらまわつた。一時、区でたのんで、専門にまわつた人がいた。夜警は、ふつうは、十二月から三月までの冬場だけであつた。火災予防のためにまわつた。(下石倉)

夜番のこと 夜番は十二月から三月ごろまでやつた。一組四人で、毎晩夜まわりをした。一晚に二回、ムラ中をまわつた。一軒一軒声をかけてまわつた。拍子木をたたいてまわつた。もとは番小屋があつて、そのこたつに入つて、一晚中おきていた。番小屋はせまくなつたので、公民館の方へうつした。(江田)

老人会 別に組織し、総社大渡は、野馬と合同で旅行にいつている。

(総社大渡)

村入り 五軒組にあいさつをしてまわる。(江田)

このムラにはよそからきて住みつく人はすくなかつた。つぶれやしきでもない、よそからきて住みつく人はなかつた。他国もんは来なかつた。富山から糸ひきに前橋へきていて、嫁にきた人があつた。

(青梨子)

農休みの小づかいのこと (大正末) 一円もらつた。

前橋へ行って映画をみた。十五銭

洋食屋でカツが一枚十銭

ビールが一本二十五銭

はらがへると天井一つ二十銭

これだけつかつてもうちへ来られた。(元総社)

ワラジヌギ よそからきた人が、そのムラへきて、ある家に身を寄せて、そのムラに住みついた場合、ワラジをぬいだ(ワラジヌギ)といつた。たとえば、よそから奉公にきていて、主人のところへ嫁をもつてやつて身上をもたせて、そのムラに住ませた場合には、新しく身上をもつたうちのことを、ワラジヌギといつた。この場合には、主人の家からみると、ワラジヌギの家は新宅と同じ扱いをした。ウチウチのつきあいをする。ずつとむかひのはなしでは、苗字をもらつて、うちをつくつてもらつた場合もあつたという。(小相木)

他国からきた人がこのムラにおちつくときに、世話になることをわらじぬぎといつた。越後からきた人のことは、越後もんどといつた。あるいは、越後だほといつた。富山からきた人のことは、越中富山といつた。わらじをぬいだうちとは、親類づきあいをしていた。ご祝儀とか葬式のときによぶ程度であつた。(青梨子)

エエ仕事 エエ仕事は、うちうちで二、三軒で組んでやつた仕事。

軒数が多いと遊びができてしまう。多くても三軒。エエ仕事の場合は、金のやりとりはなかつた。おもに田植のときにエエ仕事をした。機械になつてからは、エエ仕事はやらなくなつた。仕事をしてもらうとエエエエといつて、手間がかえた。仕事の内容にでこぼこはあつたが、血縁関係でやつていることが多いので、あまり文句はいわない。他人との間でやつていても、隣同士でやるとか、親類づきあいをしてある間柄でやつた。エエ仕事というのは、助けあひの仕事のことである。これに対して、手伝いは、金で支払つた。これは、他人様同士で

もしたこと。(青梨子)

出不足 芦田堰の場合は、最近では五百円とられた。村の時は、千五百円とっている。その金でお茶菓子を買ったりした。(江田)

道ぶしん 春と秋の年二回やった。区の事業として、区が材料を用意し、道や川を直した。農道と用水の修理だった。出ない人への罰はなかったが、何度も出ないとズルイといわれることはあった。出ない人に対して班の中でお金をとったこともあった。(西箱田)

用水の会議 水天宮の前に五千石用水の代表が集まって、六月のいつから通すかの相談をした。取り決め書が今もあり、持っている人がいる。(総社新田)

水あげ 農事組合の行事。大体、六月二十日の前後のこと。田植の前に、五千石用水から水をひいている。上石倉の林倉寺の北におおめという堰があつて、そこから水をひいている。大水のときには、その堰から水を利根川におとしていく。この辺では、六月二十三日から田植になり、二十七・八日のころには大体終る。田植の前に水あげをしたのである。組合員全員参加。ヨツゴとか板などをもつて出た。当日、都合が悪くて出られないときでも罰則はなかった。五千石用水というのは、水田にひく水の量が五千石分なので、この名があるという。

(下石倉)

水あげ・水きり 六月なかばに、水あげに出た。このときは、竹でしがら組んで、土手をもたせた。この辺には竹がないので町まで竹を買に行つた。また、貯水のために土留めとして、おたをこしらえた。古俵をあつめて、中に土をつえてつんだ。一つのおたをつくるのに、古俵が二十俵も三十俵も必要であつた。(おだぎをふせてくる一六月のころ) 上流でおたがきれたとき、たのまれて人足をだしたこともあつた。ここは、水には困らなかつた。雨乞いをしたこともない。水

切りは、秋の彼岸の中旬。このときには係がでて、おだぎをもつてきて、公会堂にしまつておく。(下新田)

カサヌギ オクンチの翌日。ムラ中の人のでて、まつりの関係の片づけをする。一軒一人ずつ出て、のぼりをかたづけたり、灯籠(神社の境内と参道にたてた)をかたつけて、神社の小屋にしまった。また収支の計算もした。祭りの買ひものは、祭り当番がした。のぼりのつな、提灯(灯籠)、用紙、麻などの支払いをした。このことについては、店の方でいくらか上のせをして領収書を出してくれた。当番は買ひものについて、一杯飲んできたという。祭りの片づけが終ると、ムラ中の人がムラの新井屋という店で、かさぬぎをした。かたづけ仕事を終つてから、夕方ごろから、みんなあつまつて、ばんばらいをした。それをかさぬぎといつた。費用は区から出た。昭和のはじめごろまで行われたこと。(小相木)

村人足 むかしは、村人足にでない人がなかつた。むかしのひとはかたかつた。今は出ない人がある。銭とりに行っている人もある。一時期、男女の差をつくつて、男はいくら、女はいくらときめたこともあつた。(青梨子)

葬式の手伝い 人がなくなると、五人組の人たち(十四、五軒)と、うちうちの人たち(杉山一家の人たち、十二、三人)が手伝ひにきてくれる。なくなつた当日の夜：通夜。葬儀・告別式の日、あとかたづけの日、の三日間に手伝つてくれる。(下新田)

葬式の場合は、近所の人を手伝つた。枕だんごは、女どしよりが二、三人でつくつた。庭にむしろを敷いて、石臼で玄米をひいた。その粉でだんごを七粒つくつた。竹を三本柱にして、鍋をつるして、それでだんごをゆでた。このだんごは四十九日のあいだ(現在は三十五日)祭壇にあげておいて、四十九日に墓へ(位牌の前)もつていった。

(青梨子)

お湯よび 元日から、毎日一軒ずつお湯を立てて、湯に入った。六軒一組だと六日間つづけた。(鳥羽西部)

節供歳暮 親が丈夫のうちは、歳暮はもっていくもんだといった。ふつうは、シャケをもっていった。三月の節供はすしとひしもちをもつて行く。五月の節供にはタラの干物、八朔の節供には、シヨウガと赤飯をもつていく。シヨウガの節供といった。このときおかしはとくになかった。(江田)

近隣の互助 祝儀不祝儀のときは、同族をこえて手伝うグループがある。今は、新しい班組織になっていて、葬式ときは、班単位になっていて、手伝うが、むかしからのつきあいの人があつて、その人も手伝いにくる。そういう間柄の家は、出来事があつたときは、おたがいによびあつこをした。むかしはうち中呼んだ。今は二人ずつ呼んでいく。(下石倉)

つきあいのこと マンガアライのときには、田植を手伝ってくれた人はよんでご馳走をした。火事があつた場合には、近所とか親戚の者は、あとかたづけの手伝いに行く。火事見舞は、うちうちの者が思い思いに持つて行つた。香典は、この辺では金銭交際である。近い身内の者は、香典のほか、生花、座布団、灯籠などをもつていった。つきあいの場合、帳面につけておく。それを借りがあるといった。この前いくらもらつてあるからいくら(香典を)持つていくときめていった。嫁は、トリムスビのあと、近所の女衆とひきあわせがあつた。もつてきたお茶菓子をだして、お茶を飲んでもらった。大正のはじめまでは、近所の人が日をきめて、よめごよびをしてくれた。各家ごとに、そばとかうどんなどをつくつて、よんで嫁にご馳走してくれた。このときは、うちのものがついて行つた。手拭を一本もつていった。近所

のうちに嫁をよんでくれたもの。このことは大正四年ごろまでで終りになった。よめごよびは、嫁が里へお客に行つてきてから、式のあと、十日くらいたつてからのことである。(青梨子町)

イチドナリ あるうちとよくつきあつているうちのことを、イチドナリという。すぐ隣のうち。他人でも親戚よりもふかいつきあいをしているうち、なにごとについても相談する。(西箱田)

八丁じめ オシメを作り、竹をわたしてつくつた。村の上と下に置いた。厄病を防ぐもので、部落の境界においた。(小相木)

農休みの時にはつた。村の境の所に立てたが、大正十年頃までか。七月十日の農休みから、五日間くらい立てておいた。道の両側に細い竹を立て、なわを二本張り、オシメを下げた。道の中も六尺ほどだつた。古市、江田、日高との境に立てた。(西箱田)

厄病神が来ないように立てた。八坂神社と書いた札と、梵字が書いた札を笹につけ、オンベロをつけた。(上青梨子)

七月の農休みの最終日に八丁じめをした。神主さんにお札をもらつてきて竹にしばりつけて、ムラの出入り口にたてた。悪病が入つてこないようにということ。これをたてるのは、区長と区の役員の人たち四、五人。よそのムラから、このムラに入つてくる道の端にたてた。むかしいつたことに、「八丁じめ入つてきて、まちがいがあつた」ということばがあつた。これは、自分のムラの中で、よそムラのわかいしゅうになぐられたりするのにはずかしいということ。ムラのわかい娘が、よその盆踊りに行つたとき、八丁じめに入つてからまちがいがあつたとき、そんなことをいった。(江田)

当番の人(二名、一年交代、かど順になつてゐる)が、明神様(総社神社)へ行つてお札を受けてきて、それを竹の先につけて、辻々に立てた。悪病神が町内に入らないようにということである。

(総社町総社)

わかいしゅが、仕事が満足にできないようなときには、年寄りの人が、「そんなさまで、八丁じめの外へ出られるか」といわれた。うちの中でいばったりすると、「せまっちいここで文句いわないで、八丁じめの外の、物のわかる人に聞いてみる」などといわれた。

(元総社阿弥陀寺)

百万遍がすむと、ムラ境に八丁じめをたてる。明神様から、厄払いのお札をうけてきて、新竹につるして、辻々にたてる。それをたてるのは町の役員。たてるところは、東西南北の字(町)ざかいのところ。この行事は、町内から厄病を追いだすためという。(元総社殿小路)

八丁じめは、七月十五日の農休みの時にたてた。災難防止、悪病がムラへ入らないようにするためという。(西箱田)

農休み前の十三日に八丁じめをはる。大徳寺からお札をもらつてくる。八枚一組になっている。そのうちの一枚は牛頭天王のお札、あとの七枚には梵字がかいてある。それをたてる(はる)のは、ムラ境。北は石倉境、西は古市境(北と南に二本)南は上新田境・箱田境(二本)、東は南部大橋のたもと(これは新設)南は南は朝日ヶ丘境。大徳寺の和尚さんが護摩をたいてくれる。そのあとお札をくばる。八丁じめをたてるのは、自治会長の仕事。竹(先の枝を二、三本のこして先を切ったもの)にお札をさげたものをたてる。一年一回たてる。疫病除けとしてたてる。わるいものが、ムラ内に入つてこないようにしたもの。よそムラのわかいしゅなどが、ムラへきては生意気なことをいうと、「八丁じめ越えて、なにいうんだ」などといったり、「八丁じめの外へいってけんかしろ」などといったりした。(小相木)

七月の農休みのとき、八丁じめを区長がたてる。神主におんべろをつくつてもらつて、竹の棒の先につけて、ムラの出口のところにてた

た。北と南の二カ所にてた。これをたてるのは区長。疫病神がムラに入らないようにするためという。(下新田)

江田では、八丁じめをムラ境にたてる。これは、農休みの最後の日(七月十六日)の行事。八丁じめをはる(たてる)のは自治会長、おしめを神主さんのところからうけてくる。竹をきつて、おしめ(おんべろ)を神主さんにきつてもらつて、ムラ境にたてた。悪いものが、ムラに入つてこないようにということである。これを八丁じめといった。むかし、嫁さんをもちうるとき、八丁じめのうちまで迎えにでた。ムラ境のところで、わかいしゅとか、組合の人がたき火をして待っていた。ムラ境まで、嫁さんを迎えにでたのである。(江田)

八丁じめは、七月十四日にたてた。祇園の前の日にあたる。神主前原の中島神主)にきりはぎをしてもらつて、それを竹の竿につけて、ムラはずれにたてた。これをするのは、社務係(神社総代の下の役、クルリごとにいる)。道のはずれにたてる。北内出の場合は、上青梨子の境一カ所だけにたてている。八丁じめは、ムラ境をはつきりさせるためと、ムラの中に厄病神が入らぬようにということである。(青梨子) 大ぞうり むかし、高井と植野の境のところに、大ぞうりをつるした。(青梨子)

ムラの休日 春まつり 五節供というが三月節供、五月節供、七夕と八朔(九月一日)の四回である。農休みは三日間やすんだ。これは蚕のさかんなときのこと。七月十四日がかいこ休み、十五日が祇園、十六日「農休み。今でも、祇園と農休みは休日である。(青梨子)

だん家 昌楽寺―姓原 釈迦尊寺―並木 光厳寺―戸所、小沢 林倉寺―小沢、島津(元総社大渡)

西福寺―高橋、今井、飯塚、向田、小杉 徳蔵寺―高橋 善勝寺(宿横手)―柴田 西福寺が無住の時、本寺である光厳寺にたのみにいっ

た。遠くてたいへんだった。(稲荷新田)

上、中は元景寺のだん家。下は光厳寺のだん家になっていた。おつきあいは平等に、どちらのお寺にも御年始にも行ったし、寄付もした。

(総社新田)

先祖まつり 笠井家十軒で、二月一日にやっている。宴会、墓まいり、碑に参拝する。(上青梨子)

穴掘りの人 むかしは、バンタといわれる人がいた。この人は近在に一軒だけ。子供のころのはなし。ふだん、米などをもらいにきた。葬式ときは穴掘りをした。そのほか下足番とか、はさみばこをかつ

いだりした。ふだんは農業をすこしばかりやっていた。いくつかのムラを受持っていたようである。暮には夜番をした。かねの杖をついてムラの中をまわった。これは十二月になってからのこと。かいどをまわってあるいた。このときも、ムラから手当をだした。この人がいなくなつてから、隣組の人たちが、穴掘りをするようになった。(下新田)

番太 むかし、よそムラに番太がいた。総社から引間へ行く途中のくぼつとにいた。番太は、人がなくなると、穴掘りにきてくれた。番太がいなくなつてから、穴掘りは五人組でやるようになった。(江田)

青梨子には番太といわれる人がいた。主として、葬式の際の穴掘りとか、ご祝儀のとき、嫁を村境まで送って行ったり、行倒れの世話や、乞食の取締りなどをしていた。番太のためにはムラで小屋をつくつてやつたり、穴掘りの道具を用意してやつたりした。小屋はわらぶきの家で、六帖の間が二間と台所と勝手があるくらい小さな家であった。人がなくなると、近所の人が番太をたのみに行った。穴掘りをしたときは、施主が日当をだした。また、清めをだしたり、ご馳走をしてやり、引物もやった。穴掘りの人はあがりはななに腰掛けて食事をし、座敷へはあがらなかつた。番太の人が最後の仕事をしたのは、昭和二

十五年のこと(25・6・29)であった。青梨子の人をたのむ前は、総社町の人をたのんだ。(金古の番太(兄)と清里の番太(弟)は兄弟)番太は、いくつかのムラの仕事を兼ねていた。青梨子の方は、金古の仕事もしていた。青梨子のご祝儀の下足番には相馬の番太をたのんだ。この番太は、嫁さんを送っていく仕事をしてた。番太の費用は区長が出していたが、そのほかに、オサンニチ(月の三日、十三日、二十三日)に各戸をまわつて、ムギとかヒキワリをもらつてあるいた。このほかに、お正月とか、おまつりのときにももらいあるいた。

(青梨子)

水死人 川ながれがあつて、行方不明のときには、むかしは、おがみやにみてもらつた。どの方角にいて、いくんちごろにあがるかをみてもらつた。水死人があがつたときには、身元がわかるまで外にいてうちへは入れなかつた。なお、身元がわかるまでは、川原において、火をたいてまっていた。水死人の世話は、区の役員がやつた。(小相木) 処理は、打ち上げられた地籍の町で処理をした。(総社大渡)

湯治 四万温泉に中之条の町から歩いていった。蚕が上がると、よく村中して、夫婦でいった。とても楽しそうだった。食料持参でいき、自炊した。(元総社大渡)

日傭の話 むかし、農家で日傭(ひよとり)をたのんでいた。朝、主人が「今夜は、アワの赤飯だぞ」といっておく。そうすると、夜、赤飯が食えるというので、奉公人は一生懸命に仕事をするという。

(青梨子)

蚕日傭の休み むかし、蚕日傭をたのんでいたうちがあつた。むかしは、柵飼いだつた。かごの下にかいこがおちる。それを蚕日傭が「おれが拾ってくるよ」といって、かごの下に入つて、いつまでたつても出て来ない。そこで寝ていたつて。これは本当にあつたはなしである。

(青梨子前原)

むかしの番頭さん　むかしの番頭さんは朝早く仕事きでかけて、仕事をしないで寝ていたという。帰ってくるたびつしよりになって帰ってくる。朝露のある草の上で寝てきたのがわかってしまったという。また、朝草刈りに行って、かごの上だけ草を山にして、中はかさかさでくる者もいた。仕事をしないで休んでいたのである。(江田)

木戸　午後六時になると、格子戸がしまつて、人が通れなくなつてしまつた。(総社新田)

村八分　むかしは、村八分というのがあつたという。公共の物を盗んだ場合に村八分になつた。たとえば、大水がでたとき流れた橋の材料をぬすんだような場合。ぬすつとぐせのある人は、ムラ内ではわかつていた。区長がやさがしをして、もし、ぬすんだ物がでてきたときには、イッケンモンにした。村八分にしたのである。こうなると、ムラのつきあいができなくなつた。もし、犯人がわからないように盗品を返した場合には罰せられなかつた。むかし、村八分中の人から桑を買つた人があつた。そしたら、その桑を買つた人までが村八分になつたという。実際には、神社の費用をごまかした人が村八分になつたことがあつた。村八分になつた人は、あやまつて解除になつた。(青梨子)

家例　古市でトウモロコシ、トーナスの作れない家がある。(小相木)

電灯　大正七、八年ころに入つたが、各戸に一つで、養蚕の時に養蚕灯といつて臨時に一つ入れることがあつた。(西箱田)

明治四十四年　総社町祭典芝居　入費割

総入費　二九八円二七銭五厘  
花及払物　一四六円一三銭五厘  
差　引　一五三円  
七ヶ町に割当

貳分　三〇円六〇銭　粟島

〃　三〇円六〇銭　新田町

〃　三〇円六〇銭　加治町

〃　三〇円六〇銭　巢烏町

八厘　一二円二四銭　昌樂寺廻り

六厘　九円一八銭　大屋敷

〃　九円一八銭　野馬塚

芝居世話人　三人

大世話人　二人

祭　宿　一人

小世話人　二人

大正一四年の記録

一、日枝神社境内地下二埋モレタル古代大礎石調査ノ為メ東京考古学会々員中　帝室博物館長三宅ロ吉博士ヲ初メトシ各方面考古学専門家式拾参名高井村福島博氏及ビ町長等案内ニテ日枝神社境内地中ノ大礎石視察セラル　是ガ為メ其ノ前西ヲ見エル程度ニ掘リタリ

大正一五年

二、日枝神社境内ノ大礎石ニ関シ其後学界著名ノ考古学者数回ニ亘リ視察ヲ遂ゲラレ其ノ都度其ノ稀有ナルニ驚嘆セラレ国宝ニ値スナド賞讃セラル　本部編纂ノ群馬郡郷土誌ハ之ガ写真ヲ掲ゲ国分寺附処尼寺跡ナラント記載セリ

昭和二年度

神社の老木枯死  
境内　十一月仮指定  
西群馬郡惣社町大字  
惣社町

表 明治二十四年第十月  
記録

一、昌樂寺廻り青年会

これらの記録は、明治二十四年より、昭和八年まで、昌樂寺廻り青年会で決定したことや重大なでき事について記録したものである。(総社山王)

契約 正月がすむと、契約という行事があった。隣組単位(十一軒くらい)で行った。宿は交代、順ぐりに宿をした。一戸一人ずつ出席。なにももっていかない。宿でご馳走をだした。ご馳走は男がつくった。すしとか、ぼたもちとかをつくって食べた。酒のんだ。わかいしゅの遊びのようなこと。(青梨子)

二、青年団と子供組

(一) 青年 団

年齢と集団 小学校6年までは子ども会、20才〜39才は青年会、40才〜59才は壮年会、60才以上は老人会に入っている。若い人には、八年ほど前まで、青年団があった。総社・清里でまとまっていた。

(鍛冶町)

青年会 20才から39才までの入が入っている。天王様のまつり、地藏様のまつり、それに簡易保険の集金などをやっている。(鍛冶町)

青年団 力くらべ、すもう、てんびん棒すもうなどをやった。草けざりや桑畑おこしをして、その金で旅行費や慰安に使った。

(総社町桜が丘)

青年会 一心会といい、東西の箱田で作っていた。小学校を卒業して家に入っている人が入り、二十五歳までだった。道ぶしんの村の仕事をし

て、資金にしたが奉仕作業だった。道にしく砂利は滝川から上げた。旅行で伊香保へ歩いて行った。湯に入るだけだった。朝三時頃出て、夜帰ってきた。十四、五人参加した。役員は、会長一、副会長一、會計などで、東西から五人ぐらいつつ出ていた。会長と副会長は東と西で分けていた。退会する時は、火鉢に名を入れて、新年会でくれた。一心会がなくなって、連合体としての青年団になった。男だけの会で、女の人の会はなかった。(西箱田)

ワカイシ ケエヤクや結婚式するとき、ウタイをやった。また、いろいろなムラ仕事を手伝った。ワカイシがいないと、結婚式のトリムスビができないといわれ、村境へ迎えに行くときもついていった。昔、いわゆるムラハチブみたいな家で結婚式があったとき、祝儀を頼まれたワカイシが、いつまでも酒を飲んでいて、嫁御迎えに仲々いかず、嫁御が村境をこえて、家の近くまで来てから迎えに行き、嫁御を再び村境まで戻してつれてくるというようなこともあった。(鍛冶町)

十五歳から二十五歳の人が入っていた。世話人が数人いた。御祝儀の時、五人組の中に入って謡をした。花火を作る集まりに太鼓をたたいて集めた。この時遅れると、一升買ってあやまった。春と秋の道普しんと堰普しんの裁量をした。村の一軒から一人ずつ出てもらった。その後、江田実業会と改称された。また、道祖神の時、鳥追いでまわりながら新しい嫁やムコをいじめた。ツルナをするといった。江田に嫁ごにいくか、裸でバラしよおうかといわれたくらいだった。やりすぎたことがあって、とりやめになった。若い衆に入るには、花火の時に一升か二升買って近所の顔役に紹介してもらおう。新入りは、先ばいからいじめられたという。上座には絶対すわれなし、顔を黒くされたりしたという。集まる所は、三文店や拜殿、小車屋だった。遊びでは、玉村と板鼻の女郎屋にダルマ買いにいったという。近所の村に夜

ばいに行った。(江田)

ワカイシユゲイヤク ワカイシユだけの契約があった。それをワカイシユゲイヤクとっている。時期は、秋のつごうのいい日、宿は大世話人の家。ワカイシユの役員には、大世話人と小世話人とあった。それぞれ二人ずついた。これは、クルワごとを選れた。大体推せんでワカイシユの年をとった者の中からえらばれた。順番だった。小世話人は、大世話人がきめた。小世話人は入りたてのものが選ばれ、大世話人に、いろいろいいつけられて働いた。役をするのは一年間。それぞれ一人ぬけて一人入った。一人ずつ交代した。新しい加入するものは、ワカイシユゲイヤクの日、一升酒をもっていつて入った。このときは、ワカイシユが飲み食いをした。なお、ワカイシユは、一月二日にウタイゾメをしていた。(総社町山王)

昌楽寺廻青年会記録 明治三十七年一月二十四日の契約記録

記々

- 一、明治参拾七年正月式拾四日契約会ニテ契約シタル条々左ニ記録ス
- 第壹 舅見舞ヲ廃スル事
- 第貳 節句歳暮ヲ廃スル事 但シ初子ハ此ノ限ニアラズ
- 第参 契約後ニテ飲食会ヲナス者ハ出席会員 即チ飲食会ニ同意シタル会員ノ負担タル事
- 第四 毎年正月ノ契約会ハ其ノ月ノ式拾参日ノ日ニ限ル事
- 第五 契約屋戸ハ祭典屋戸ヲ除キ猶式屋敷ヨリ所有スル家ニテ順番ニナス事
- 第六 当村ニテ見物入浴等ノ留守居見舞ヲ全廃ス 猶ミヤゲヲ進入事ヲ廃ス 但シ親屬ハ此ノ限ニアラズ
- 第七 右第壹ヨリ第六マデノ事件ヲ違犯シタル者ハ昌楽寺廻リ誓約書第壹条第貳条ヲテキ要スル事

此ノ契約ハ明治参拾七年正月式拾四日ヨリ行フ事、猶此ノ取締リハ其ノ当時ノ大世話人トス

右記録ス

明治参拾七年正月式拾四日

大世話人

都丸金八 阿久津勇造 都丸安太郎

昌楽寺廻青年会出納簿

大正八年分

収入

一月二十三日 くりこし金 三〇円六六銭五厘

四月十四日 桑葉契約金 五円

七月十五日 〸売金 五九円八〇銭 残金

七月十五日 小作人に御祝儀 二円

七月十五日 蛹粕一俵、〸粕一俵 一〇銭

七月十六日 秋桑代契約

八月二十六日 受入 五〇円三〇銭五厘

八月二十四日 地藏尊さいせん 三九銭

九月三日 屋賃 五円

桑株代 八円五銭

十二月二十五日 地代、屋賃 七円

十二月三十日 三五銭日待残金、八五銭酒分金

総収入 一六四円七一銭

残 七七円九四銭

支出 大正七年度租税 二円一六銭

二月十三日 悪風除祈禱料 二円

二月十三日 酒代 一円五銭



二月十三日 手紙一〇〇枚 二九銭  
四月一日 大豆粕四枚(一枚二八〇) 蛹粕(一〇入四八〇) 一六

円

四月一日 桑苗代 一〇本五銭

四月十四日 二〇銭 ヘイハク料

四月十四日 神酒二升 二円四〇銭

六月十二日 桑園の肥料 魚肥二五貫二〇〇

六月十二日 二一円二一銭 魚肥送賃 二〇銭

七月十三日 御神灯用手ランプ二個 一四銭

七月十四日 障子紙、とうろう紙 一六銭

七月十四日 御神灯用石油 一〇銭

七月十四日 桑園小作料 三一円

八月二十三日 灯油代 二〇銭

八月二十三日 一月二日の酒代 二円二〇銭

九月二十七日 半紙五〇枚 九銭

十月五日 青年会より支払いで削除一六円(運動会、選挙の手当)

十月七日 一〇銭 イノグ代

十月七日 灯ろう用紙 六銭

十月七日 石油代 一〇銭

十月十六日 街灯取付料五燭二箇 一円五〇銭

十二月十三日 十月十六日より十一月分点火料 一円二〇銭

十二月二十九日 十二月外灯二ヶ代 八〇銭

十二月二十九日 住宅地代七月より年末まで 三円五〇銭

総支払 八六円六七銭

この出納簿は、大正六年より昭和三十四年まで、記録されているが、

その内大正八年までのものを掲載した。(総社山王)

## (二) 子供組

子供会 総社、元総社分と合同でやっているが、元総社小に行っている子は入っていない。(総社大渡)

子ども 昔は子どもが仲間を作っていた。14・15才の者が親方、13才の者がダンナ、その下がヘイガミと呼ばれた。男の子だけが入ることができた。小正月の道祖神のときには、ニンベツと云って各戸から金を集めたが、そのときお祝のあった家などではとりわけねだったものであった。集めた金のとり分は親方が一番多かった。(鍛冶町)

子どもが集まる行事 一月十四日の道祖神講。十く十五歳の子。七月十四日、十五日は天王まつりで、トウロウに絵をかいて出した。八月十日、十五日は地藏さままで、子供がかついでまわった。昔は七月一日く七日だった。九月十九のナカのクンチと云って祭日だったが、晩秋蚕をやるようになり、十月九日にのびた。トウロウを立てた。獅子のけいこの時、役者に指名された子や笛吹きの子は練習にきた。十五夜、十三夜、二十三夜には、まんじゅう・かき・くりがそなえてあるのを、篠に釘をさしたもので、取った。十日夜は、ワラデッポウを作つて、地面をたたいた。この日、勢多郡の人で清水の観音さまに、おまいりに行く人にわるさをし、つなをはつてころばせて、便所のおとしの中に入れた。十日夜には、ワラデッポウをたたきながら「朝ソバキリに昼ダンゴ、夕メシ食っちゃ腹デエコ、夕モチ食っちゃ腹デエコ、ドカンドカン」などといった。その日は、モチをついた。地面をたたくと、モグラ除けになった。(江田)

## 四、家族生活

本家、新宅の手伝い お飾り、井戸のつるべをなう、もちつき、麦まき、田植の時に手伝った。屋根ふきは、商売人がやったので、手伝わなかった。(江田)

親戚のまとまり イツケ、ウチウチといった。その中でも、屋号でのまとまりもある。姓がちがえば、イツケに入らない。(江田)

イツケ・イチマケ ムラうちで、同じ苗字のうちのことをイツケとかイチマケという。イツケという言葉の方を余計に使う。むかし、奉公にきていて、そのうちにわらじぬぎをして、ムラに住みついた場合、そのうちの苗字をもらった人がある。その場合もイツケという。しかしこの場合、多少の但しがきがついている。苗字をもらった人で、わらじぬぎをする場合もある。(西箱田)

イツケ ムラうちで同じ苗字のうちのことをウチウチという。むかしはイツケといった。(小相木)

イツケというのは、ムラの中で同じ苗字のうちのことに。同じ本家からわかれたうち。ここでは、イチマケという言葉はきかない。(下新田)

イツケというのは、同じムラの同名のうちのことに。本分家など、身寄りのうちのこと。近所に住んでいるのがふつう。ワラジヌギの家とか、よそムラへ出ている家については、イツケとはいわない。しかし、これらのうちとのよびひきはある。イツケの家は、墓も家紋も同じである。イチマケという言葉がある。これはイツケと同じ意味であるが、イチマケの方が、いくらか血のつながっている場合のことをいう。近いうちに住んでいると、たとえ縁が遠くなってもつきあいはつづく。隣のムラに住んでいる場合には、いとこの子(はとこ)まではつきあつ

たりしている。遠いところにいる親類の者とは、縁が遠くなると、つきあいは終りになる。ふつうのつきあいは、いとこくらいまで。葬式の沙汰をするのは、本人(施主)のいとこくらいまでである。(青梨子)

戸主 ダンナとよび、その妻はオカミサンかオバサンとよんだ。(江田)

分家 田畑があれば、分家をした。百姓新宅(ひやくしんたく)といった。(江田)

インキョした家はインキョ新宅(じんたく)といい、余分に田畑を持たせてやった。半分以上持つていってもらった。インキョは、あとつぎをつれていくので、その人がついでいく。(江田)

この辺では、北のことをかみという。新宅(分家)は、本家からはなれて、悪い土地をもらつて出た。分家の場合は、一番はじめに出たときの当主が先祖になる。(小相木)

新宅 新宅に出すときは、ムラ内に土地を分けて出した。親からみて、自分の子がある程度働けるようになってから、生活できる程度の土地を分けてやった。結婚して二、三年たつてから分家をさせた。土地は、本家からはなれたところの土地をもらった。五反くらいがふつう。大地主の場合には、一町歩くらい分けてやった。新宅に出た場合は、墓も家紋もかれないを本家と同じであった。本分家の関係(つきあい)は代がかわつたとしても同じである。冠婚葬祭のときには、本分家おたがいに親戚代表としての役をつとめた。(小相木)

奉公人の分家 フダイのシNTAXといった。(江田)

インキョメン 大体兼隠居の形で隠居する人が、一、二反(あるいは三、四反)の土地をもって隠居する。この土地のことをインキョメンという。隠居に出る人が、好きなところの土地を持つて出る。位牌はもつて出ないのがふつうだが、もつて出る人もある。こういう場合は、母屋の続きに隠居家をつくつて出る。もし、隠居した人がなくなつ

た場合には、インキヨメンは、またもとのところへもどる。なお、こういう場合の隠居は、ムラでは、一戸前とは扱わない。(小相木)

**養子** 後つぎがない場合、身内の人をつれてくることを、ジンヨウシといい、関係ない人の時、ヨウシといった。女の子をジンヨウシで入れてムコをとることもあった。(江田)

**嫁とり** 仲人が、口をきいて、話をまとめた。「ナコウド、七ななデンプウ」などといわれた。嫁は、群馬郡中どこでもという形で、西の方が多かった。(江田)

**婚姻のあい**て 高崎、群馬郡、渋川、勢多郡の人。勢多は元総社で婚姻が多い。村内は少ない。勢多に総社神社の氏子がいた関係という。おこもりに来たからという。(総社大渡)

**つきあい** 嫁の実家、新宅の嫁の実家とのつきあいは二代まで。

**相続** ヒキユズリといい、親が死んで受けつぐ。サイフは家長がにぎっている。(江田)

**嫁への相続** 嫁に出る時、一反つけてやる。(江田)

**嫁と姑の仕事** 嫁は炊事、洗濯に家の仕事をし、姑は子守に留守番になつていく。(江田)

**子供のけんか** むかしは、紅雲町の子供とけんかした。時期は、十日夜のとぎだった。下石倉の子供が、利根橋を渡つてむこうへ行く。紅雲町の子供は、橋を渡つてくる。わらでつぼうをもつてけんかをしに行った。橋の真中ごろでおたがいに接近した。相手より人数がすくないと退却する。そして、人をあつめてまたおしていく。悪口をいいあった。わらでつぼうで地面(橋)をたたきながら、悪口のいい合いをした。むかしは、相手につかまっていたたかれるものもいた。それは、夜になつてからのこと。男の子だけでやった。小学生同士のけんかで

あった。ふだんはとくにけんかをするようなことはなかった。十日夜の晩だけのことであった。大正の終りから、昭和のはじめのことである。(下石倉)

**子供のおこんじよ** むかし、農休みのころ、この近在の人たちが、石倉まで買いもんにきた。ランプの油を買いに子供がきた。そうすると、この子供が、そういう子供をつかまえておこんじよしたことがあった。(下石倉)

**ヨトギ** 重病人の場合に、身内のものが寄つてねずに看病することをヨトギといった。今夜、あすこんちはヨトギだよといった。こういう場合は、二、三日でなくなることが多い。(西箱田)

**家族の私財** ホマケ：小さい畑のこと、おれのホマチだという。親兄弟にもわからない貯金など、ヘソクリと同じようなもの。コセツクリ：よそのものをすこしずつとつてくること、遊ぶ金にした。さしで、俵から米を抜きとつて穀屋に持つて行つて売るものがあった。一斗くらい持つていった。穀屋では、こういう場合には安く買った。こういうときは、すこしずつ抜いた。上から順に抜いた。わかい時分カフェがよいをした。石倉あたりにカフェがあり、そこへ遊びに行った。遊ぶかねをつくつて。えいらく、ゆうらく、いろは、小川屋などという店があった。きれいな女給がいた。それをさわがしに行った。わかいしゅは、銭がなくて、ヘソクリした。米ばかりではなく、まゆをこまかして売つたこともあった。まぶしを二階からおろして、よそへもつて行つて、まゆを売つた。そんなときには、わかいしゅ同士で相談して手伝つたりした。わかいしゅばかりでなく、おかみさんが、小づかいがなくなつてまゆをごまかして、一貫匁くらいもつてきて売つたこともあった。まゆは、現金で買いくる人もあった。こういうのを、ネズミしたといった。大きいうちは、二階三階にかいこをあげた。三階

からまぶしを下におろしてまゆかきをした。あるとき、おやじさんが子供をつれて近所へ湯をもらいに行つた。その留守にせがれが、二階にあがつて、ゆたんの中にもゆを五分くらい入れて、細びきで下へさげていた。二階から半分くらいさげたところへおやじが帰つてきた。ゆたんが下りてくるところを子供がめつめた。「おじいちゃん、二階から白いもんがおりるよ」といった。せがれはとつつかまつてしまった。やっこさん、おやじにかんかんにおこられたという。わかいしゆは、小づかいが欲しくてしやうがなかつた。まぶしのまんま盗んできて、桑原のたてどおしの中でまゆかきをした。近所のわかいしゆがすけつとに行つた。蚊にさされて大変だつたという。よごれているのも、本まゆもわからずに、ざるにいれて、賀川の床屋さんのところのまいかいのところへ持つていつて売つた。まい買のおじいさんは、「おめえらのまい（まゆ）はいいまいじゃねえから安いよ」と、けつとばされた。（元総社）

くずまゆはとつて、糸をつむいで機を織つた。蚕をはいたあと、桑があまりそうなきには、すこし蚕をはいた。このまゆは、おばあさんとか、おかみさんの分にした。こづかいがわりにやつた。へソクリは、家族のものが、すこしずつ、内緒にためたかねのことである。

（下石倉）

へソクリ：おんなしゆが、旦那に内緒で持つているもの（おかね）  
コセツクリ：ごまかしのあね。悪い意味をもつ。他人様からごまかすかねのこと。この辺ではあまりいわない言葉。（西箱田）

コデのことは、ホマチともいう。畑の一部に、うちのものが、こづかいどりになにかをつくる。それを売つてかねをとつた。そのかねのことをコデとか、ホマチといった。かいかをかつていくずまゆがでる。それらはかみさんの分にした。これを売つてこづかいをつくつた。

それをコデといった。コセツクリというものもある。これらごまかしてある。ヨロクは、臨時収入のことである。（前箱田）

ホマチというのは、かねとか物をくすねておくこと。ふとたば十とれた物の中から一だけいただいておくもの。田植をして、すこし余分のところがあると、そこをいただいて自分のものにするのがホマチ。養蚕をしていて、いいまゆは会社へ出荷するが、たままゆ、ちゆうまゆは、それを買う人がまわつてきた。それはおんなしゆにくれてやつた。それを、おんなしゆは小づかいにした。売つたかねは、おんなしゆのホマチにしるといつてやつた。コセツクリというのは、へソクリの一種である。ごまかしたかねである。公にならないかねのことである。ヨロクというのは、余分にとつておくこと。十とろうとしたら十二とれた。二がヨロクになる。予想外の収入のこと。これは、コセクリとはちがう。（小相木）

家族の私財のことは、へソクリといった。また、コデゼニをこしらえるといつた。余分のゼニをこしらえること。これをへソクリとも、ホマチとも、コデゼニともいつた。コデは、小さなかねということである。ヨロクというのは、土木作業などの手間どり仕事にいつて、給料のほかに余計にもらつたかねのこと。男衆の仕事にいつていつたことばである。なお、かいかのとき、桑があまつて、売り桑があつたときは、それを売つてかいかのあげいわいの砂糖を買つたり、魚を買つたりした。正月の道祖神小屋は二つつくつた。本小屋と小さい小屋をもう一つつくつた。その小さいほうを、コデ小屋といつた。本小屋を燃す前にコデ小屋を燃した。（青梨子）

へソクリ へソクリのことを、コデとか、ホマチといつた。鳥羽の方では、天水場だから、雨が降らないと田植ができない。そういうところはオカボをつくつた。（桑畑と桑畑の間の）税金のかからない土地

のことをホマチといった。(江田)  
家族のよび方

父——オトツツアン・オヤジサン

母——オツカサン・オフクロサン

祖父——オジイサン・ジイサン (ジイサマ)

祖母——オバアサン (バアサマ)

兄——アニキ・アニイ

姉——アネゴ・アネエ

弟・妹は名前をよんだ。

長男——惣領 (江田)

つれあいに死にわかれた人 女の人のことはゴケさんといったが、男の人の場合、男ゴケとはあまり言わなかった。(江田)

村の長老 オバサンデイ、オジサンデイという言い方で、まとめてよんだ。(江田)

使用人のいい方

オバンシ——女中のこと

パントウ——男の使用人のこと (江田)

## 五、その他

ぜげん (女衛) むかしは、ぜげんがいた。青梨子にもぜげんでおちついた (住みついた) 人がいる。ぜげんは、奉公人 (女の子) を売りに買ひする者のこと。子供の数の多いうちでは、口べらしに子供を売った。この辺ではむかしは美濃の方からつれてきた。その子たちは親子の縁を切つてきたという。ぜげんは、ひとつたずな十人とか二十人くらい買つてきた。十歳くらいまでの子供であった。つれてくると、大

百姓のうちほ女中奉公に売った。戸籍は雇い主のところへ入った。その子たちの笠には、親の名とか故郷の名が書いてあった。女中につかっている、年が大きくなると番頭と一緒にさせたり、農家へ嫁にやりたりした。ぜげんは総社町の鍛冶町に一人いた。明治になって、ぜげんが禁止されると製糸工女の募集をするようになった。富山とか新潟へ行つて女工をつれてきた。この場合は、年季証文をかかせた。ぜげんが買つてきた人のことは、その出身地をとって、みのつこといつたりした。ぜげんは、今から四代くらい前の時代の人である。むかしは、ぜげんはおそれられていた。「ぜげんばくろう火事おやし」という地口があった。(青梨子)

お歳暮 暮には、お歳暮をもつていった。嫁さん (婿さん) は里の親が丈夫なうちはお歳暮をもつていくものだった。(江田)

ヨバイ むかしヨバイがあったという。かいこの手伝いにきた女の人のところへ、やはり手伝いにきていた男の人が、夜はつていった。そしたら、「今したべえなのにまたかい」といわれたつて。さつき、旦那さんがはいつていつてすませたばかりだったのである。二階へ入るには、柿の木をつたわつていったという。(江田)

むかしは、かいこのとき新潟方面から日傭とりの女衆がきていた。にわおきのまつさかりはいそがしいときだった。夜になるとつかれてぐつすりねている。日傭とりは、かいこやのとまつくちに寝ていた。戸はあけっぱなしになっていた。わかいいしゆが、そこへよばいに行つた。うちの中に入つて、足のおやゆびにさわつてみて上手にさわらせれば、なんとかものになるといった。上手につかまればものになるといった。(青梨子前原)

お見舞 病気見舞、お産見舞のとき、班の人は相談して同じ金額を包んでいった。本分家のつながりは、班とはべつであつて、冠婚葬祭

のときには、手伝いに行った。病気のときには、身内の者は交代で看病にあたりたりした。(下石倉)

**医者** もう長くないような時にならないとかからなかった。前橋から人力車で来たが、いばつていて、先に人力車代五十銭をとられた。

(総社大渡)

**バクチ** サイコロや花札のバクチを河原や墓地でやっていた。身上をつぶした人もいる。(元総社大渡)

明治になって、禁札が出てくる。一晩で一反負けた人もいるという。(江田)

**鼓笛隊** 入営する兵隊を見送った。江田の音楽隊といって、演奏した。年上の十五〜十六の人が、幻灯機を用意し人を集めて写した。演奏は「広瀬中佐」、「橘大隊長」「ここはお国のく」などをおぼえている。演奏の楽器は、大太鼓一、つき太鼓、三角鉦、手風琴、横笛、りんてきなどだった。幻灯会では、日露戦争の種痘を写した。(江田)

**夜学** 夜、勉強を教えてもらいに行つた。帰りに酒を飲み、飲みすぎて染谷川の水をのみながら帰つたという人もいた。(江田)

**おしめをあげる所** 五門とか七門といって門松、稲荷、坪山、便所、庚申にかざつた。三十一〜七草までに毎日長男がごはんをかけたものを、さげて七草のおじやにした。(総社新田)

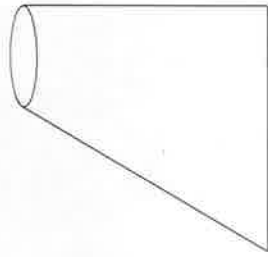
**王山古墳** 耕作して、いいことがあつた人がない。一日と十五日には、おまわりをした。平べつたい大きい石が出ていた。(元総社大渡)

**出口の地蔵** 総社から元総社へ出ていく口の場所なのでこういう名になった。(総社新田)

# 第三章 衣食住

## 一、衣服

男の普段着 普段着のことはツネギ（常着）と呼んだ。新しい着物はヨソイキ（外出着）とし、それが古くなるとツネギにするのが普通だった。男の人は、普段は木綿の縞の着物を着て、絹の三尺の帯を締めていた。冬には、衿あむせの着物を着た。その上に綿入れの半てんを着ることもあった。半てんの袖の形はネジリ袖だった。（総社町植野）

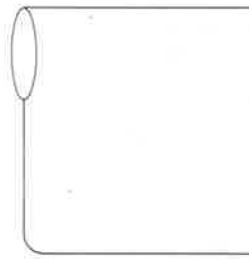


（総社町植野）  
ネジリ袖

男の人は、普段は木綿の地縞の着物を着ていた。地縞の着物は家で織ったもので、縞の色は紺が多かった。紺の着物も着たが、これは買ったもので、染め紺が多かった。伊予紺は安かったが、洗うほど艶がでるといふ久留米紺は高かった。（元総社町第二）

女の普段着 女の人は、普段は木綿の地縞の着物を着て、木綿の半幅帯を締めていた。着物の袖の形はたもと袖だった。着物は夏は単ひとえで、冬には裏をつけて綿入れにした。しかし、綿入れの着物は洗濯に不便だった。そこで、後には衿あむせの着物が多くなり、寒い日にはその上に綿入れの半てんやチャンチャンコを着るようになった。また、大正の初

め頃から、長縞絆にも綿を入れるようになった。（総社町植野）



（総社町植野）  
たもと袖

女の人は、普段は木綿の地縞の着物やニコニコの着物を着ていた。大正の頃からはメリンスの着物も着るようになった。（元総社町第二）

男の仕事着 男の人は、農作業をするときには、木綿の筒袖の紺縞絆を着て、紺股引をはいた。また、紺色の裏つきの腹掛けをすることもあった。（総社町植野）

仕事着のことは野良着とよぶ。男の人は、田で仕事をするときには、紺縞絆を着て浅葱あさぎの股引をはいた。寒いときには綿入れの半てんを着た。半てんには黒い襟があり、袖の形は筒袖だった。（元総社町第二）  
女の仕事着 女の人は、ナガギ（長着）を着たままタスキをかけ、尻をはしよって働いた。他の家に手伝いに行く時は、メリンスのタス



（総社 鍛冶町）  
フダンギ



ノラギ (総社 鍛冶町)

キをかけたりました。(総社町植野)

女の人は、仕事をするときには着物を尻はしよいにした。冬に家で水仕事をするときには、袖のないチャンチャンコを着た。(元総社町第二)

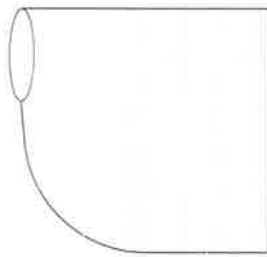
**男の外出着** 外出着のことはヨソイキといった。男の人は、ヨソイキには高貴織の着物や平織の絹縞の着物を着た。袖の形はたもと袖だったが、女の人のたもと袖に比べて袖のツケが長く、人形が三寸くらいだった。着物は二枚重ね着をした。帯については、絹の三尺(兵児帯)や角帯を締めることが多かったが、縮緬の帯もあつた。冬には着物の上に二重廻しを着た。二重廻しは、御祝儀のイチゲンなどのときに着ることが多かった。(総社町植野)

**女の外出着** 女の人は、ヨソイキには縮緬・一楽・三楽・風通・金紗などの着物を着た。昭和になってからは壁織の着物もみられるようになった。袖の形はたもと袖で、冬には八口に紅絹などをつけた。着物は二枚重ね着をした。帯については、縷子などの腹合帯を締めた。冬には着物の上にコートを着た。(総社町植野)

**祝儀の着物** 男の人は、結婚式には高貴織の着物を着て、仙台平の袴をはいた。袴の柄は黒か茶の縞が多かった。着物の上には、五つ紋の黒い紋つきの羽織を着た。このような仕度は婿とん着と呼ばれ、兵隊検査のときに作ってもらうのが普通だった。女の人の花嫁衣装は、黒地に裾文様のある江戸褌だった。帯は丸帯を締めた。なかでも琥珀の帯は最高の帯で、西陣のものが多かった。(総社町植野)

**喪服** 男の人は葬式ときには、高貴織の着物を着て仙台平の袴をはき、黒い紋つきの羽織を着た。男の人は葬式の時も婿とん着だった。女の人は、絹の白無垢の着物を着て、白い帯を締めた。夏は絹のメリンスの単、冬は重(かさ)の着物だった。死者の身内の人で結婚している人(姪くらいまでの近しい人)は、頭に白い布をかぶった。大正の終り頃まで白無垢の着物がみられたが、昭和になってから黒い着物を着て、黒い丸帯を締めるようになった。(総社町植野)

**子供の服装** 男の子は、普段は木綿の縞の着物や紺縞の着物を着ていた。袖の形は筒袖だった。男の子の帯は木綿の三尺が普通だった。女の子は、普段は木綿の縞の着物や紺縞、ニコニコ縞などの着物を着ていた。女の子の着物は、男の子のものに比べて縞が太く、柄も大きかった。袖の形は元禄袖だった。女の子の帯はメリンスの三尺が多かった。ヨソイキには、女の子は着物の上に被風を着ることもあつた。(元総社町植野)



元禄袖 (総社町植野)

**着物** はたおりをして作った。山うぞうりにかすりの着物だった。綿のものであった。(総社大渡)

自分でクズマユより糸をひいて作った。細かいシマ文様のもの。(小相木)

五月五日のノボリをそめて、ジュパンの上のハンテンにした。**通学時の仕度** 子供は、着物を着て駒下駄をはき、風呂敷包みを持って学校へ行った。カバンを持っている子供は少なかった。霜どけの頃には、さし歯の下駄をはいた。学校では上履として、竹の子の皮の草履やゴム草履をはいた。ゴム草履は、表にゴザ、裏に自転車タイヤ



を使ったもので、間にボール紙をはさみ、麻糸で縫って作った。子供は、学校から帰ると古い着物を着せられた。(総社町植野)

## (二) かぶり物

**手拭** 農作業のときには、男の人は手拭でホウカムリをした。女の人はアネサンカムリが普通だったが、昔は鬘を結っていたので、手拭を広げてかぶり、結ばずにその上から笠をかぶった。鬘を結わなくなつてからは、手拭を後ろで結ぶようになった。(総社町植野)

**鉢巻き** 男の人は、豆しぼりの手拭をネジリハチマキにした。

(総社町植野)

**帽子** 大正の頃、ハイカラな人がヨソイキにコンコチ帽子(カンカン帽)をかぶっていた。中折帽子をかぶる人もいた。第二次世界大戦後間もなく、戦闘帽をかぶっている人がいた。(元総社町第二)

**かぶりもの** ふだんは姉さんかぶり、日よけ、雨よけに男女ともスゲ笠をかぶった。

手ぬぐいのほうかぶりはフッコかぶりと言った。

雨具ではタタミ半畳くらいのゴザに油紙がついたものをひもでしばって使った。

また、稲ワラで「ケデエ」というカップを作つて着た。(小相木)

## (三) 履物

**草鞋** 男の人は、山へクズカキ(落葉採取)に行くときには、古足袋の上に草鞋をはいた。草鞋は荒物屋で買ってきた。(総社町植野)

**草履** 養蚕などの農作業のときには藁草履をはいた。家のダイドコ口で仕事をするときには、竹の子の皮で編んだ草履をはいた。女の人は、普段はキルクの草履をはいた。キルクの草履は軽いが欠けやすかつ

た。女の人は、ヨソイキにはフェルトの草履や三枚草履をはいた。

(総社町植野)

**雪駄** 雪駄は草履のような形をしており、表にはゴザがついていて、裏には薄い歯のようなものがついていた。男の人が履いた。

(総社町植野)

**下駄** 下駄には歯の高い高歯、歯の低い駒下駄、歯の高さが高歯と駒下駄の中間である足駄などがあり、それぞれ男女ともにはいた。男の人は、歯の大きい朴歯(ほうば)の下駄をはくこともあった。駒下駄のうち、後ろの部分を丸く削つたものを後丸(おしろ)とよんだ。下駄の材料は主に桐で、歯には朴などを使っていた。また、下駄には白木のままのハダカ下駄、表にゴザのついたゴザブチ、色の塗つてある塗り下駄があった。普段ばきにはハダカ下駄、ヨソイキにはゴザブチをはくのが一般的だった。また、夏の雨の多い時期には、汚れにくい塗り下駄をはくことが多かった。女の人は、ヨソイキには桐の駒下駄のゴザブチや足駄のゴザブチをはいた。男の人は、ヨソイキには後丸のゴザブチをはいた。子供は、ヨソイキには鈴などのついたポツカン下駄をはいた。(総社町植野)

**はきもの** 男女ともにゲタ。タビでワラジの人もあった。ワラゾウリは自分で作つた。

良いゾウリは一見の時くらい。(小相木)

## (四) 雨具

**笠** 夏に農作業をするときには菅笠をかぶつた。男の人の菅笠は、ワツカがあり、ひものないものだった。女の人の菅笠は、ワツカの無い、ひものついたものだった。菅笠は、第二次世界大戦が終わる頃まであった。その後、経木帽子をかぶるようになり、さらにその後、藁帽子が登場した。(総社町植野)

雨の日に農作業するときには菅笠をかぶった。(元総社町第二)  
傘 雨の日に外出するときには、からかさをかぶった。(元総社町第二)  
ミノ 雨の日に農作業をするときには、ミノ・笠をつけた。ミノのことはケデエといった。ケデエには腰と首の部分に紐がついていて、縛るようになっていた。ケデエは荒物屋から買って来た。

(元総社町第二)

ゴザ 田の草取りのときにはゴザを着た。ゴザは丸めて持ち運びができ、敷物にもなるので便利だった。(元総社町第二)

## (五) 理髪・化粧

### 男の髪型

・チョンマゲ——大正十年頃まではチョンマゲを結っている人がいた。(元総社町第二)

植木屋さんで、大正の初め頃までチョンマゲを結っている人がいた。(大友町)

・丸刈り——男の人の髪型は坊主が普通だった。とくに、小学校二・三年生までは剃っていたので、「アオタン坊主」などと呼んだ。

(総社町植野)

男の人の髪型は、丸刈りが多かった。(元総社町第二)

・七三——髪を横で分けるもの。(元総社町第二)

・オールバック——七三より新しい髪型で、戦後になって見られるようになった。(元総社町第二)

### 女の髪型

・桃割れ——小学校一年生から五・六年生くらいまでの子供がしていた。髪をフノリで固めて輪の形に結び、タケナガをつけた。

(総社町植野)

ワツカとよぶ。小学生がする髪型で、ワツカを中心にタテナガをつけた。(元総社町第二)

・下げ髪——大正十年頃からみられるようになった髪型で、若い娘がした。髪を二つに分けて編んだり、一束にして下げたりした。

(総社町植野)

オサゲとよぶ。ワツカを結わなくなつてからみられるようになった。(元総社町第二)

・イソク(一束)——学校を卒業すると、髪を後ろでまとめて丸めた。(総社町植野)

小学校高学年になると、髪を後ろで巻いた。(元総社町第二)  
・銀杏返し——桃割れより年上の娘がする髪型。桃割れがつぶれて、

タボが出る。(総社町植野)

・オールバック——二十歳前後の若い人の髪型。髪を後ろでまとめる。

(総社町植野)

・二百三高地——ハイカラさんが結った。髪の中にアンコウ(釜敷のような形のもの)を入れて、まわりから髪をまとめて、上でまとめた。(総社町植野)

・島田——嫁入りのときに結った。いい家の娘は正月にも結った。

(総社町植野)

・丸髷——既婚者が、正月や結婚式などのときに結った。(総社町植野)  
・髷——普段は既婚者や年寄りは、タボを出して小さい髷を結つてい

た。櫛をさすこともあった。(総社町植野)

髪形 男はザンギリで、娘はモモワレであった。嫁さんは外に行く時、祭の時などは丸マゲにした。女の子はオカッパ。(小相木)

髪結い ムラにオヨネさんという髪結いさんがいて、結ってもらった。(総社町植野)

床屋 自分でした。(小相木)

髪飾り 髪には、飾りとして櫛をさすことが多かった。柘植つげの櫛は欠けやすいので、あまり多くなかった。(総社町植野)

入浴 風呂でからだを洗うときは、小糠の袋を使って洗った。

(古市)

お歯黒 お歯黒は大正頃までみられた。杯の中にお歯黒を溶いて、歯に塗った。(元総社町第二)

口紅 口紅は、ベニバナで作ったものを売っていた。口紅は杯に入っていた。(元総社町第二)

## (六) 染色・機織り

絹糸 昔は自分の家で使う糸は、自分の家にとった。繭を鍋で煮て、ザグリ(座繰器)でひいて絹糸にした。(総社町植野)

昔は、屑繭からザグリで糸をひいた。(元総社町第二)

木綿糸 昔はワタを栽培して、木綿糸を家をつむいだ。その後、糸を買ってきて染めて使うようになった。(総社町植野)

昔は、ワタを作って木綿糸をとった。ワタクリという、ワタから種をとる道具があった。(元総社町第二)

染色 絹糸は絹染め(粉)などで染めた。酸性染料で染める場合は、酢を入れるとよく染まった。染物屋で染めてもらう人もいた。平和町の大黒屋など藍を扱っている人もいた。(総社町植野)

絹糸は染物屋で染めた。木綿糸は、染め粉を買ってきて自分の家で染めた。染め粉を釜で煮て、その中に木綿糸を浸して紺や茶に染めた。こうして染めた木綿糸で、縞の着物などを織った。(元総社町第二)

機織り 昔は、家族の着物は女の人が家で織って作った。自分で織ったものはテメオリ(手前織り)という。普段着の着物のほか、女もの

の半幅帯、男ものの紺縞こゝろなどを作った。明治の頃はイザリ機で織っていたが、その後、高機になった。高機の使い方は機屋で教えてくれた。(総社町植野)

昔は、普段着の木綿の縞の着物を家で織って作った。縞の着物は布地を買って作った。また、屑繭を材料にして絹も織った。織った絹は高崎市へ持って行って売ったが、これは着物の裏地に使われた。古くはひびの大きいイザリ機で機を織っていたが、大正の初め頃にひびの小さいバツタン(高機)に代わった。(元総社町第二)

糸引き 夏の雨の時などに真綿を作り、糸引きをした。ヒマはない。(小相木)

## (七) 寝 具

寝具 夜、寝るときは、袖のついた夜具蒲団をかけた。

(元総社町第二)

大尽の家には親戚用にあつたが、普通の家ではハンテンをぬいでかけてねたり、着物に綿をいれたドテラ(カイマキ)を着て寝た。

(小相木)

## 二、食 物

### (一) 食 糧

米 米には粳うるちと糯もちがあつた。粳米は御飯や粥にするほか、粉にしてマユ玉も作った。糯米は蒸してついて餅にするほか、ボタ餅や赤飯にもした。(青梨子町前原)

麦類 水田が少なかったので、大麦や小麦を多く作った。大麦はヒ

キワリにするほか、味噌や香煎の原料にした。小麦は粉にして、うどんや饅頭などにした。(総社町植野)

大正時代のことであるが、小麦はからをとるのでつくっていた。小麦はあまりとれなかった。

米の場合は、一反に何俵といていた。一反で十俵とれるとせどりといた。

小麦の場合は、何わりといた。大麦についてはいわなかった。だが、ムギといけば大麦のことだった。

そのころ、大麦はたくさんつくった。(青梨子)

アワ アワには粳と糯とがあり、粳アワはアワ飯に、糯アワはアワ餅にした。植野では糯アワが多かった。清里の青梨子では粳アワを多く作り、アワ飯にしていたという。(総社町植野)

アワは食べなかった。(元総社町第二)

ヒエ ヒエは食べなかった。(元総社町第二)

キビ キビは糯キビを作った。(元総社町第二)

里芋 里芋は自家用に作っていた。里芋は主に煮て食べた。

(総社町植野)

里芋のことはタダイモという。タダイモは煮物にするほか、味噌汁や煮こみうどんの具にした。(青梨子町前原)

サツマイモ サツマイモは昔から作っていたが、第二次世界大戦中に供出のために沢山作った。生の芋を薄切りにして乾燥させ、切り干しにして供出した。生の切り干しは、アルコールの原料にされた。生の芋をそのまま供出することもあった。自家用の切り干しは、芋をふかしてから薄切りにして干して作った。(総社町植野)

サツマイモはオコエとしてふかして食べた。(青梨子町前原)

ジャガイモ ジャガイモは煮物や味噌汁の具にするほか、オコエと

して茹でて食べた。(青梨子町前原)

いものはなし ふだん「いも」といえば里芋のことである。タダイモともいった。

ジャガイモのことは、三度いもといった。

この辺では、明治二十六年前にはさつまいもはなかった。

さつまいもの小さいのを、ヨナゴツコといった。これをかますに入れておいて朝、たき火で焼いて食べた。

「いもはかげの俵」という諺がある。

これは、いもは、おやく(米や麦のこと)のたしになるといふことをいったものである。いもをたべて、おやくを食いのばすことである。(青梨子)

むかしから、ただイモというときは、里いものことをいった。

「イモはかげの俵」といった。

これは、イモ飯はどをして、米のたしにしたことをいったもの。

サツマイモはつくらなかつた。

ジャガイモは、一年中食べていられた。

十五夜になると、芋を一株でも二株でもとつてきて、茎のついたまましんげた。(江田)

むかしは、里いもしかなかつた。さつまいもは、明治二十年代からつくりはじめた。

さつまいもの小さいのは、よなつこといった。(青梨子)

ゴマ ゴマは家で作っていた。キンゴマとクロゴマがあつた。ゴマよごし、ゴマ塩などに使つた。(青梨子町前原)

野菜類 ウグイス菜は味噌汁の具やゴマよごしなどにした。シャクシ菜は塩漬にするほか、ヒバや凍み菜にした。大根は味噌汁や煮こみうどんの具にするほか、タクアンや切り干しにした。キュウリは糠漬・

塩押し・キュウリもみなどにした。ナスは糠漬・塩押しにするほか、油味噌の材料にした。トマトは気違いナスなどとよび、昭和の初め頃から食べるようになった。(青梨子町前原)

卵 ニワトリを飼って卵をとった。卵買いが来て卵を買っていったこともある。(元総社町第二)

肉 昔は、病気でもしないと肉は食べなかつた。(元総社町第二)

魚 尾頭つきの魚は、モノ日にしか食べなかつた。オイベス講と稲荷祭りには、サンマやイワシを焼いて食べた。(青梨子町前原)

オイベス講や屋敷祭りには、尾頭つきのサンマを食べた。(古市)

食事 麦(ヒキワリ)メシで、米は半々くらいであつた。

おかずはつけものにオナメやダイコン・ジャガイモ・トナスの煮つけ。ほうざし(イワシ)はごちそうである。

夕方が手打ちのウドン。(うであげは腹にたまるので)冬はオキリコミにした。

シオビキはゴチソウでモノ日に食べた。(小相木)

## (二) 食 品

### ① 主 食

飯 日常食の中心は、米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯であつた。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、米七分にヒキワリ三分なら良い方であつた。昭和の初め頃までヒキワリ飯を食べている家が多かつた。大正の半ば頃から、次第にヒキワリに代わつてオシムギが用いられるようになった。割合は、米三分に対してオシムギ七分であつた。(総社町植野)

米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯(麦飯ともいう)が、日常食の中心だつた。米とヒキワリの割合は五分五分くらいだつた。

(青梨子町前原)

米にヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯が、日常食の中心だつた。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、米七分にヒキワリ三分ならよい方で、米四分にヒキワリ六分という家もあつた。ヒキワリは大麦を水車でひいたもので、コワイ(堅い)ものだつた。昭和に入つてから、ヒキワリに代わつてオシムギを食べるようになった。

(元総社町第二)

普段は、米に大麦のヒキワリを混ぜたヒキワリ飯を食べていた。米とヒキワリの割合は、米七分にヒキワリ三分ならよい方で、五分五分のこともあつた。昭和の初め頃に、ヒキワリからオシムギにかわつた。

(石倉町上石倉)

主食 主食は、ふつうはムギ飯だつた。

むかしは、ひきわり飯であつたが、その後おしむぎになつた。ひきわりは水車でひいた。

小野里尚雄家では、じいさん・ばあさんは米の飯で、あとの家族(番頭さんをふくめて)ひきわり飯であつた。

むかしは、よくつて米が七分か六分であつた。半々くらいのうちもあつた。

半年は米ばつつか、半年は麦ばつつか食べるといううちもあつた。裕福でないうちは、もみすりをして米をみんな食つてしまつたという。そのあとは、米を買つて食べていたという。

もみすりをして、食い扶持を残して、半分くらい売つてしまつたうちもあつた。食い扶持がのこるのはいい方だつた。(江田)

大麦(ひきわり)五に米五の食事だつた。他は、小麦をひいて煮こみうどんにして食べた。(総社大渡)

麦七と米三の割合だつた。(上青梨子)

夜はウドンだった。オツキリコミなので、ネギ、ニンジン、ダイコン、サトイモなどを入れた。(元総社大渡)

麦七・米三の割合だった。米は売ってお金にした。

アイゴメ(アオゴメ)という、モミスリの時に落ちた小さい米を粉にして食べた。(元総社大渡)

アワ飯 明治時代には、ヒキワリ飯を炊くときに糠アワを加え、アワ飯にすることもあった。(総社町植野)

イモ飯 第二次世界大戦中は、ジャガタラ(ジャガイモ)をヒキワリ飯の糀として入れ、イモ飯を炊いた。(総社町植野)

オムスビ アサハンに炊いたヒキワリ飯の残りを握って塩などをまぶし、オムスビにした。ジュウジヤオコエに食べた。(青梨子町前原)

むかしの主食 むかしは、大麦は主穀であった。

はじめは、ヒキワリにして食べ、そのあとオシムギになった。

わし(関根邦三さん)が現役兵として入隊したときはヒキワリを食べていた。

除隊して二年くらいたって(昭和四年のころ)オシムギになった。

昭和三十年に開田になった。それまではオシムギを食べていたが、そのあと米の飯を食べるようになった。

五穀としては、大豆・大麦・アワ・ヒエ・米がある。

結婚式のトリムスビのとき、島台に五穀をあげた。(青梨子)

むかしの食べ物 この辺は、みんなムギ飯を食べた。

ひきわり飯だった。

いいうちで七分三分。米が七分にムギが三分。そのつぎは五分五分くらい。

うんとこまるうちでは、七分三分というが、それはムギが七分で米が三分であった。

こんなうちでは、はちまきして、米をみつけるといわれた。(元総社)

## ② 代用食

ソバ ソバ粉に小麦粉を加えて水でこねる。これを伸ばして包丁で切り、茹であげるとソバができる。ソバは秋から冬のユウハンとして時々食べた。また、正月二日・御年始うけ・小正月の十四日・薬師様の宵祭り・お庚申・大晦などの日にもソバを食べた。(青梨子町前原)

ソバ ソバは普段にも食べたが、正月・十日夜・大晦などのモノ日にも食べた。(古市)

うどん 小麦粉に水を加えてこね、のばして切って、茹でたものがうどんである。(総社町植野)

八月七日の七夕の日には、茹であげたうどんをタマにして、醤油のつけ汁で食べた。(青梨子町前原)

茹でたうどんはウデアゲという。(元総社町第二)

うどんは茹でて作る。(石倉町上石倉)

茹であげたうどんは、正月や盆などのモノ日に食べた。(古市)

煮こみうどん うどんを打って、茹でてからショウギにあげておく。これを、大根・人参・ゴボウ・里芋など沢山の野菜と一緒に醤油の汁で煮こんだ。煮こみうどんは、秋から冬のユウハンによく食べた。

(青梨子町前原)

オツキリコミ うどんを茹でずに汁の中に入れ、芋・人参・大根などをに入れて煮たものをオツキリコミという。オツキリコミの汁には、味噌を播らずに使った。(総社町植野)

オツキリコミは、小麦粉をこねてうどんと同じように打って作るが、茹でずに直接汁の中に入れて煮る。このとき、オツキリコミのコ(具)として、汁の中に大根・菜・芋などを沢山入れて量をふやした。米が

足りないのでオツキリコミはよく作った。(元総社町第二)

オキリコミという。茹でないで味噌味の汁の中に入れて煮る。

(石倉町上石倉)

うどんを幅広く切って、生のまま汁の中に入れて、野菜と一緒に煮たもの。

寒いとき、夕飯におもに食べた。

残ったのを、翌朝、ご飯と半々に食べた。

おつきりこみは、むかしは、ご飯を助けるために食べた。

そのために、あすこんちは、おつきりこみばかり食っているとうわさをしたりした。

うどんを汁の中に入れて煮たものは、にこみという。(江田)

ほうとう ひもかわを汁の中に入れて煮たものは、おつきりこみという。これは、冬でも夏でも、夕飯のときに食べる。

あずきぼうとうというのは、ひもかわをゆでて、あんこにまぶして食べるもの。

汁の中に、いも・なつば・大根などを多くいれ、ひもかわ(めん)のほろがすくないと、

「貧乏人のおつきりこみで、こ(子)だくさんだ」といった。

夏のおつきりこみは薬になるといった。

汗をふきふき食べると、体のためにいいといった。(元総社)

おつきりこみ・にこみ。今はにこみという。おつきりこみはむかしのことば。

寒いころの夕飯に食べた。(下新田)

めんを生のまま汁の中に入れて煮込んだもの。ニコミともいう。寒いころの夕飯につくって食べた。

今はおつきりこみといわないで、ニコミといっている。

おしんこのことは、すいとんという。昼につくって食べた。(下新田)  
小麦粉を水でこねて、のばして、うどんより幅広く切って、生のまま汁の中に入れてにこんで食べる。汁の中には、野菜をたくさん入れた。

これをニコミともいったり、オキリコミともいったり。

寒いとき、夕飯につくって食べた。

これを盛るときは、竹のしゃもじをつかった。このしゃもじには、三本の角のでていた。しゃもじのことは、「手前勝手」ともいった。

(下新田)

ツミッコ うどんこをこねて、にぎって、汁の中に入れてにたものをつみつこといった。

これも、夜つくった。

なお、オシンコは昼間つくった。

夜、ご飯が足りないとき、ご飯のたしとしてつくったもの。(下新田)

オシンコ 小麦粉に水を加えてこね、ねじったものをネジッコという。

ネジッコはオシンコともいい、味噌の汁で食べた。(総社町植野)

小麦粉を水でこね、適当な大きさにちぎって茹でたものをオシンコ

という。オシンコは汁の中に入れてたり、小豆餡に入れたりして食べた。

また、黄粉やゴマをつけて食べることもあった。(元総社町第二)

オツミッコという。オツミッコは味噌の汁や醤油の汁で食べた。

(石倉町上石倉)

小麦粉をこね、適当な大きさにちぎって茹でたものをオシンコという。初年にはオシンコをゴマよごしにして食べた。(古市)

小麦粉を水でこねて、にぎって、汁の中に入れて煮たもの。

小麦粉をやらかめにこねて、しゃもじで汁の中に入れて煮たのは、

すいとんといっている。

すいとんはかんたんにつくれた。

わしのわかいころには、すいとんがはやった。

すいとんも、おしんこも、米のたしにして食べたもの。

昼は、すいとんとかおしんこをつくって食べた。これはかんたんに  
つくれたからである。夜は、おつきりこみをつくった。(江田)

ススリネジ 小麦粉を水でこね、ねじってネジッコを作る。これを  
アンコの汁に入れたものをススリネジといった。ススリネジは、春と  
秋の彼岸の走り口に食べた。彼岸の中日にはボタ餅を作るので、餡を  
沢山作っておく。この餡を使ってススリネジを作った。(総社町植野)

焼餅 焼餅のことはオヤキという。小麦粉を水でこね、味噌、砂糖、  
炭酸を加える。これを丸めて土焙烙で焼いてオヤキを作った。オヤキ  
はジユウジやおコエに食べるほか、八月一日の釜の口開けにも食べた。

(青梨子町前原)

小麦粉をこねて味噌・ネギなどを加え、焙烙で焼いたものを焼餅と  
いう。焼餅は、好みにより砂糖味噌や砂糖醤油をつけて食べることも  
あった。焼餅はコジョウハンによく食べた。(元総社町第二)

小麦粉に重曹を入れて水でこね、味噌やネギを加えて土焙烙で焼き、  
焼餅を作った。(石倉町上石倉)

御飯の残りに小麦粉を混ぜ、味噌で味をつけて土焙烙で焼いたもの  
も焼餅といった。(石倉町上石倉)

焼餅は小麦粉で作る。農休みにはノビルの入った焼餅を食べた。ま  
た、暮のすす掃きのときにも焼餅を作った。(古市)

小麦粉を水でこねて、まるめて、ほうろくに油をひいてやいたもの。  
中に味噌を入れて味付けをしたものもあった。

やきもちは、飯のたしにした。

飯の残りをいれてつくったやきもちもあった。

じりやきは、小麦粉をやわらかくこねてやはりほうろくでやいてつ  
くったもの。

やきもちはおとえ(こじよはん)につくった。野良仕事忙しいと  
きには、田へもついでいって食べた。(江田)

おとえ(三時の休み)には、やきもちをつくって食べた。

夏など、残ったご飯を小麦粉とまぜてこねて、ほうろくに油をひい  
て焼いた。

中に味噌を入れたり、つけたりして食べた。あんの代りであった。

じりやきというのも食べた。

これは、小麦粉をゆるくこねて、ほうろくの上にたらずようにして  
やいたもの。

じりやきの方が損だといった。それで、あまりじりやきはつくらな  
かった。やきもちの方を多く食べた。(江田)

やきもち是一年中つくって食べた。(江田)

ジリヤキ 小麦粉を水でゆるめに溶いて、土焙烙で焼く。これをジ  
リヤキまたはジジヤキといった。ジリヤキはコジョウハンやお菓子代わ  
りに食べた。(石倉町上石倉)

うで饅頭 小麦粉をこねて餡を入れて丸め、茹でるとうで饅頭がで  
きる。(総社町植野)

小麦粉を水でこね、中に餡を入れて丸め、釜の湯の中で茹でる。茹  
だると饅頭が浮いてくるので、とりあげてショウウギに並べた。うで饅  
頭には炭酸を入れなかった。うで饅頭は、天王様・農休み・釜の口開  
け・十五夜・十三夜・十日夜・ネズミツブサギ・アキアゲなどに作っ  
て食べた。(青梨子町前原)

小麦粉に重曹を加えてこね、中に餡を入れて丸める。これを釜の中  
で茹でるとうで饅頭ができた。重曹が入っているが、あまりふくらま



なかった。うで饅頭は、農休み・妙見様の祇園祭り・釜の口開き・十五夜・十三夜などの日に作って食べた。(元総社町第二)

うで饅頭は、農休み・釜の口開け・七夕・十五夜・十三夜などの日に作った。小麦粉をこね、餡を入れて丸め、釜で茹でる。茹だつたらスィノウで上げる。うで饅頭に炭酸は入れない。(古市)

ふかし饅頭 うで饅頭を作らなくなってから、ふかし饅頭を作るようになった。小麦粉を水でこね、重曹を加える。これをちぎって、中に餡を入れて丸め、ドウ(せいろ)でふかす。(青梨子町前原)

小麦粉に重曹を加えてこね、中に餡を入れて丸める。これをせいろでふかすとふかし饅頭ができた。磯部温泉まで行って、磯部の水を買ってきて重曹の代わりに使ったこともある。磯部の水で作った饅頭は、黄色くて香りが良かった。(元総社町第二)

せいろでふかしたふかし饅頭のことをうで饅頭とよんでいた。ふかし饅頭には丸いものと三角のものがあり、丸いものには小豆餡が入っていた。三角のものには、味噌に砂糖を入れた味噌餡が入っていた。ふかし饅頭は、田植あがりや農休みに作って食べた。

(石倉町上石倉)

ふかし饅頭は、うで饅頭に代わって作られるようになった。小麦粉に炭酸を加えてこね、餡を入れて丸め、せいろでふかして作った。第二次世界大戦中は、材料の不足で、炭酸の代わりに磯部温泉の水を使ったり、小豆餡の代わりに干し柿の餡を使ったりした。(古市)

まんじゅう まんじゅうは、七夕・農休み・十五夜・十三夜るときにつくった。

また、田植のあとのオサナづくりのときにもつくった。

むかしは、ゆでまんじゅうであった。

そのあと、ふかしまんじゅうになった。(江田)

まんじゅくをつくったのは次のような機会であった。

七月二十一日の天王様の日。

八月一日のカマノクチアケの日。

七月十四、十五、十六日の農休みの日。

七夕。

十五夜。

十三夜。

二十三夜。(元総社 阿弥陀寺)

### ③ 副 食

味噌汁 御飯を食べるときは必ず味噌汁を作った。ウグイス菜・ナス・インゲン・ネギ・大根など、いろいろな季節の野菜を味噌汁の具にした。また、里芋・ジャガイモなどの芋類や、凍み菜・ヒバなども味噌汁に入れた。(青梨子町前原)

ケンチヨン汁 大根・人参・ゴボウ・里芋などの野菜を油でいため、これに水を加えて煮る。さらに醤油で味つけてケンチヨン汁を作った。ケンチヨン汁は、節分やオイベス講の日に食べた。(古市)

トロロ ヤマイモをすりおろしてトロロを作る。正月三箇日の夕食のうち、一度はトロロを食べることになっていた。(青梨子町前原)

オナメ 夏のおかずとしてよくオナメを食べた。大豆を煮て大麦のコウジをまぜ、カメに入れて塩と水を加える。しばらくねかせて、発酵するとオナメができた。(青梨子町前原)

油味噌 油味噌は夏のおかずだった。ナスとネギを油でいため、味噌で味つけた。(青梨子町前原)

油いため 大根の切り干しやヒバなどを、水でもどしてから油いためにした。味つけには醤油などを使った。(青梨子町前原)

キンピラ ゴボウをよく洗って、細く刻み、水にさらす。水からあげたゴボウを油でいため、醤油やトウガラシで味つける。キンピラは彼岸の中日やオクンチなどの日に作って食べた。(青梨子町前原)

二十二夜講のとき、おかずにキンピラを作った。(古市)

オカラ オカラは、砂糖と醤油で甘辛く炒って食べる。二十二夜講のときおかずとして作った。(古市)

テンプラ ナス・インゲン・人参・ジャガイモ・サツマイモ・ネギ・カボチャなどいろいろな野菜をテンプラにした。テンプラは、身上が上がるようにといってオイベス講には必ず揚げた。正月三箇日のユウハンにも一度は揚げた。(青梨子町前原)

煮物 モノ日のおかずには、いろいろな野菜の煮物を作った。特に庚申講の日には沢山煮た。また、冬至の日にはカボチャを煮物にして食べた。(古市)

ゴマよごし ウグイス菜などの季節の野菜を茹で、搗りゴマで和えたもの。砂糖と醤油で味をつけた。(青梨子町前原)

キュウリモみ キュウリを薄切りにし、塩をまぶしてもむ。キュウリモみは夏のおかずとしてよく食べた。好みにより、青ジソの葉などを刻んで入れた。(青梨子町前原)

豆腐のはなし むかしは、魚とか豆腐などはちよいちよい食べられなかった。

むかしの豆腐は真四角だった。むかしの飯茶碗に豆腐を入れたら、あたまがおもくて、茶碗が倒れたことがあった。

近藤艶年さんは、あるとき、豆腐一丁を五十コに切って、一口ずつぶつかかずに食うという賭けをした。

ところが相手は、豆腐のはじをせまく切って、それを四十九に切った。あとの残りをあわせて五十になる。

これを一ぺんに食えという。艶年さんは食うといった。

ところが、四十九コのほうは食ったが、大きい一切れのほうが口に食えなかった。

それで、艶年さんはあやまったという。

それで、まわりの人も、さすがの艶年さんも、勝つべえじゃなく、負けることもあるんだなあっていったと。(元総社)

#### ④ 祝祭食品

カワリモノ 赤飯・餅・ボタ餅・すしなど、モノ日(年中行事の日)に作る食品をカワリモノという。(古市)

ご馳走のこと 七夕のときは、ふかしまんじゅうをつくって供えるのがふつう。赤飯をふかしてあげるうちもある。

オサナブりのときはうどん・酒・肴で祝った。  
農休みのときは、ふかしまんじゅうをつくる。(江田)

白米飯 米だけの白い御飯はモノ日にしか食べなかった。正月三箇日の夜、六日年の朝、節分、オイベス講、盆の夜などに食べた。(青梨子町前原)

白い米だけの御飯は、正月・マンガアライ・盆・大晦などの日に食べた。また、庚申講や二十二夜講のときにも炊いたが、これらの日にはいくら食べても腹をこわさないといわれた。(古市)

赤飯 小豆を煮た煮汁に糯米を浸し、その後でよく水をきる。そして、煮ておいた小豆を糯米に加え、せいろで蒸して赤飯を作った。赤飯は、コトハジメ・態野神社の春祭り・端午の節供・マンガアライ・祇園祭り・七夕・八朔・態野神社の秋祭り(オクンチ)・稻荷祭り・コトジマイなどの日に食べた。(青梨子町前原)

初午・総社神社の春祭り・五月の節供・総社神社の秋祭りなどの日

には赤飯をふかした。(元総社町第二)

赤飯は、初午・五月の節供・オクンチ・屋敷祭りなどの日にふかした。正月三箇日の朝に赤飯を食べる家もあった。(古市)

小豆飯 粳米に煮た小豆を加えて炊き、小豆飯を作った。小豆飯は、オコトハジメとオコトジマイの日に作って食べた。(古市)

モチをつく日 正月。小正月。二十日正月。お節供。四月八日の草もち。五月二日の八十八夜に草もち。春蚕のあとオコマゲもちをつき、嫁が実家に持っていく。十日夜。麦まきのあとのネズミツプサギ。十二月十五日の油もち。

十二月十五日は、蛭原家は昔油の罐がはねたことがあるからとい、代りにイナリマツリをして、モチはつかない。(元総社 大渡)

餅 糯米を蒸してから、杵と臼で餅をつく。モノ日には餅をつくことが多かった。正月の餅は暮についた。そのほか、小正月・桃の節供・十日夜・ネズミツプサギ・油餅の日などに餅をついた。また、八十八夜・フナ休み・あげ祝いなど、養蚕の節目にも餅をついた。

アワ餅 正月などに餅を搗くとき、糯米に糯アワを混ぜてアワ餅を搗いた。米の餅を五臼、アワ餅を二臼くらい搗くのが普通だった。(青梨子町前原)

雑煮 雑煮には、餅・大根・人参・里芋などを入れた。汁には醤油を使った。雑煮は、正月三箇日のほか、十一日の蔵開きのときにも作って食べた。(青梨子町前原)

正月三箇日の朝には、餅の入った雑煮を食べる家が多かった。五箇日の間、食べる家もあった。(古市)

アンピン 餅の中に餡を入れて丸めたものをアンピンといった。アンピンは三月一日の節供の餅つきのときに作って食べた。

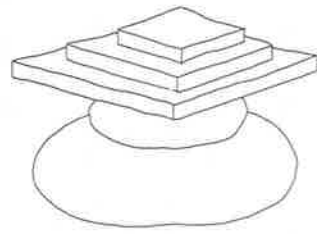
(青梨子町前原)

中に餡を入れて丸めた餅をアンピンという。アンピンは、地獄餅・二十三夜・十日夜・油餅の日などに作って食べた。また、フナ休み・オコアゲ祝いなど、養蚕の節目にもアンピンを作った。(元総社町第二)

アンピンは、オコモチ・フナモチ・ニワモチ・オコアゲモチなど、養蚕関係の行事のときに作った。また、油餅の日にも作った。(古市)

草餅 四月八日のお釈迦様の日には、ヨモギを入れた草餅をつき、餡を入れて丸めて食べた。(元総社町第二)

ヒシ餅 三月一日の節供の餅つきのときには、三日に供えるヒシ餅を作った。餅をのばしてヒシ形に切り、オソナエの上のせておひな様に供えた。ヒシ餅は七・五・三と大きさの違うものを作って重ねた。(青梨子町前原)



餅の節句のヒシ餅 (青梨子町前原)

三月の節供にはヒシ餅を作った。白い餅、食紅で染めた赤い餅、草餅の三種類を作って重ねて供えた。(元総社町第二)

ひな祭りの日には餅つきをしてヒシ餅を作り、おひな様に供えた。ヒシ餅は、白いもの三枚、草餅三枚の合計九枚重ね、梅の枝を刺して供えた。(古市)

グシ餅 ゴシ餅という。家を建てたときの上棟祝いにつく。伸ばした餅を五合杵に合わせて正方形に切り、ホケエに入れ、屋根の上から投げる。(青梨子町前原)

グシ餅はホケエに入っているの、ホケエ餅とよぶ。ホケエ餅の形には正方形やヒシ形があった。(石倉町上石倉)

**ボタ餅** ボタ餅はオハギとよぶ。蒸した糯米を軽く潰して丸め、まわりに小豆餡をつける。オハギは彼岸の中日和盆の朝に作って食べた。

(青梨子町前原)

**盆・春秋の彼岸・ネズミツプサギ**などの日にはボタ餅を作った。また、亡くなった人の命日にもボタ餅を作った。(元総社町第二)

**ボタ餅**は、オイベス講・彼岸・盆などに作って食べた。夏のボタ餅は腐りやすいので、お盆には嫁と姑が仲良くなるといわれた。なお、彼岸に作ったものはオハギとよんだ。(古市)

**マユ玉** 粳米の屑米を石臼で碾いて粉にし、水を加えてこねて丸める。これを茹でてオマイダマを作る。小正月のオマイダマは一月十三日に作り、十四日の朝に道祖神の火で焼いて、何もつけずに食べた。春蚕のフナ休み(三眠)のときには、フナメエダマといってオマイダマを作り、絹笠様に一〜二日供えてから食べた。フナメエダマは、焼いて砂糖醬油をつけて食べた。(総社町植野)

**マユ玉**は粳米の粉で作る。小正月のマユ玉は、一月十三日に作って木にさして飾り、十六日の朝に食べる。このときはマユ玉を塩で煮て、マユから糸をとる仕草をまねしながら食べる。これを、マユ玉を「練って食べる」という。このほか、二月の初午にもマユ玉を作り、重箱に入れて屋敷稻荷様に供えた。(青梨子町前原)

小正月のマユ玉は十三日に作り、十六日に野菜と一緒に汁に入れて煮て食べる。これを「糸取り」という。初午にもマユ玉を作る。また、女の人の集まる二十二夜講には、コロツと子供が産まれるようにと、マユ玉を作る。この他、やはり女の祭りである薬師様の日にもマユ玉を作る。(古市)

**オテマル** 粳米の粉で作った団子をオテマルという。十五夜や十三夜にはオテマルを供えた。もともとこれらの日にはうで饅頭を供えて

いたが、次第にオテマルを供えるようになった。そして、うで饅頭はふかし饅頭にかわり、作っても供えずに食べるだけになった。十五夜のオテマルを子供にとられると、蚕が当たるといわれた。

(元総社町第二)

**ツジユウダンゴ** 十一月三十日にはツジユウダンゴを作った。神様にあげた。粳米の粉をこねて適当な大きさにちぎり、手で握った形にして茹で、棒にさした。そして、井戸・ツボ山・セドグチ・便所・カマドなどにさし、米俵や川の端にもさした。(古市)

**七草粥** 正月七日には七草粥を食べた。七草粥のことは七草おじやともいう。本来、七草は春の七草で決まっているが、実際にはセリ・ナズナ・大根・人参などを入れることが多かった。(青梨子町前原)

正月七日の朝には七草粥を食べた。七草粥のことは七草おじやとよんだ。七草おじやや年男が作り、セリ・ナズナなどの他に、正月三箇日の間に神の鉢に入れて正月様に供えていたものを下げて入れた。

(古市)

**小豆粥** 一月十五日の朝には小正月の小豆粥を食べた。小豆粥を作るには御飯に小豆を入れて煮る。小豆粥はハラミバシで食べ、吹いて食べると田植のときに風が吹くといわれた。また、十八日には小豆粥の残りを家のまわりにまいた。(青梨子町前原)

小正月の十五日には小豆粥を食べた。この粥は少し残しておき、十八日に家のまわりにまいた。(元総社町第二)

小正月の十五日には小豆粥を食べる。このとき吹いて食べると田植のときに風が吹くという。また、十八日に小豆粥の残りを家のまわりにまくと、長虫が入ってこないという。(古市)

**すし** 三月三日の桃の節供の朝にはすしを作って食べた。かんぴょうを入れたのり巻きや、油揚げに御飯をつめたお稻荷さんを作った。

(青梨子町前原)

二月二十二日の二夜様のときには、すしを作って食べた。稲荷ずしとのり巻きを作った。のり巻きには、人参・ゴボウ・カンピョウ・チクワなどを入れた。(元総社町第二)

天神講や三月の八日節供には、巻きずしや稲荷ずしを作った。また、オイベス講には、油揚げをカマスに見立て、御飯を沢山つめて稲荷ずしを作った。(古市)

粉の食べ物 やきもちのほか粉をつかった食べ物としては次のようなものがある。

すいとん。

うどん。

おきりこみ。

おきりこみは、冬につくって食べた。

さといも、にんじん、だいこん、ねぎ、はくさい、じゃがいもなどを入れた汁の中に入れて煮こんで食べた。

めんを太めに切って、生のまま汁の中に入れて煮た。汁の中には、いろいろの野菜を入れた。

おきりこみは、おもに夕食のときに食べた。

よく、ご飯のあまり(おひや)をおきりこみの中に入れて食べた。

おきりこみのことは、ぼうとうともいった。

しかし、すこしちがうところもある。

おきりこみのほうがいくらか細い。

ぼうとうのほうがいくらか太い。

むかしは、齒が三、四本でている竹のしゃもじでもって食べた。

おきりこみは、お客には出さなかった。

お客には、うどんをだす。

この辺では、そばはあまり食べない。(江田)

### ⑤ 嗜好品

茶 茶は石倉の店で買って飲んだ。葬式などのときには大きな店で買った。茶を売りに来る人もいて、風呂敷に包んでもって来た。

(石倉町上石倉)

酒 祝儀・葬式・建前などの機会には必ず酒を出した。酒は買ってきて飲んだ。石倉の金井さんという酒屋で買うことが多かった。元総社には村山という造り酒屋があつて、桜一品という酒を売っていた。これを進駐軍がチェリーと呼んで喜んで飲んでた。東地区の古市町にも酒屋があつた。(石倉町上石倉)

ドブロク 第二次世界大戦後、コウジを買ってきてカメでドブロクを作っている人がいた。(石倉町上石倉)

むかしは、内緒でどぶろくをつくった。

検査官がきても、どぶろくのまんまならよかった。

しぼって粕をとれば違反とされた。

どぶろくの検査がきたとき、どぶろくの中に塩を入れて、かんますという。

検査官がくると、おかみさんが

「うちはおかずですよ。陽気のせいでおきますね」といったという。

白米四斗五升で、生酒が八斗とれるといった。半分こうじ、半分おかゆ。

つくり酒屋を三年やれば、三年目はもとでいらすと云う。

つくった酒の中に水を入れることもあつたという。そういうことを、

「井戸神様をいれる」

といった。

パン屋は空気を売る。

酒屋は水を売る。

といった。

杜氏はかき棒もつてもろみをかんましてあるく。なんとかしてろみをのんでみたいと思っていた杜氏がいた。

杜氏ははらがけをしていた。

もろみをかんまわしていたとき、わざと桶の中におっこちる。もろみの中でばたばたしている。

そのうちにずりあげてもらおう。

着物をきかえてくる。

はらかけのどんぶりの中に、もろみが入っている。それをのんだという。(元総社)

酒 御祝儀、益、正月、祭の時に欵むくらいだった。

量り売りで買ってきた。(総社大渡)

香煎 皮がついたままの大麦を焙烙で炒り、石臼で碾いてから粉篩でふるう。これに玉砂糖や包丁で細かく切った黒砂糖などを加え、香煎を作った。香煎は、来客があつたときなどにお茶うけとして出した。

(総社町植野)

駄菓子 昭和の初め頃、駄菓子屋へ行くと、一銭でビスケットが十

五個、香煎棒が二本買えた。(総社町植野)

おかし 麦でつくったカチカチアメ。カリントウ。一銭、二銭だった。テツポウ玉は、小さいのは黒みつだけ、大きいのはごま入りで、一銭で大きいもの小さいものが五つ買えた。

ソラマメというのは、ふかして、足でふんで皮をむいたものにさとうをまぶして、少し火でかわかしたものだ。学校の前にチンチン

豆屋があつた。三角の袋に入って一銭だった。

小さい車にのせ、鈴をふりながらひいてきた。

原嶋屋の焼まんじゅうは、一くしに五個ついて五銭だった。利根川を利根橋からわたって売店がでた。(総社大渡)

片原饅頭 昔は菓子など買つて食べることはめつたになかった。蚕の繭出しのあと、片原饅頭の店に寄つて饅頭を腹いっぱい食べてよいと父親に言われたことがある。(元総社町第二)

タバコ 町内に一軒タバコ屋があつた。一銭五銭で一箱キサミタバコが買えた。

イタドリを代用品にしたこともある。(総社大渡)

### (三) 調味料

調味料 塩を買うくらいであとは作つた。みそづけも作つた。

(小相木)

塩 塩は買つてきて使つた。福島県まで塩を買いに行つたことがある。(元総社町第二)

味噌 昭和三十年頃までは、各家庭で大麦を使って味噌を作つていた。赤い味噌だった。(総社町植野)

みそ作り 大麦・小麦・大豆に塩で作つた。大麦五斗をつくと三斗五分くらいになる。こうじを入れたあと、一斗くらいはなめみそに分けた。のこりをみそにして、調味料にした。(総社大渡)

オスマシ 味噌をシラジで搗たつて水に溶き、煮立ててからカケンで濾してオスマシを作つた。オスマシは、雑煮やソバ・うどんなどの汁に使つた。(総社町植野)

醤油 昔は醤油を造り、共同で醤油しぼりをした。職人が来て醤油のしぼり方を指導した。樽でねかせた小麦コウジを麻の袋に入れる。

これを舟に入れてジャッキでしぼる。ヨイトマケのかけ声をかけてしぼった。(石倉町上石倉)

**醤油** 醤油は秋に仕込んだ。炒った小麦と煮た大豆を混ぜ、これにコウジを加えてねかせ、モロミを作る。モロミは一年間ねかせ、翌年の秋に醤油を搾った。醤油搾りのときは、モロミを麻袋に入れ、これを厚さ一寸くらいの板の箱に入れる。そして、ジャッキを使って二番醤油まで搾った。「エントヤ、マケ、エントヤ、マケ、もつともつと巻きなよ、まだまだ出るよ」と唄いながら搾った。東地区で醤油を造ったのは古市町だけだった。(古市)

**磯部の水** 磯部温泉(安中市)まで出かけ、磯部の水を買ってきて重曹の代わりに使った。磯部の水で作った饅頭は香りが良かった。(元総社町第二)

磯部の水を重曹の代わりに使って焼餅を焼いたことがある。また、第二次世界大戦後、醤油がないのでその代わりに磯部の水を使ったこともある。(石倉町上石倉)

**第二次世界大戦中、炭酸の代わりに磯部温泉の水を使って、ふかし饅頭を作った。(古市)**

**油** 食用と灯明用に分けて買って使った。(総社大渡)

#### (四) 保存加工

**タクアン** 大根を干してから、塩と小糠を入れた樽の中に漬け込んで、タクアンにした。(総社町植野)

タクアンのことは漬け大根ともいう。大根を干し、樽の中に並べ、塩と小糠を入れて漬け込む。タクアンは冬から翌年の初夏頃まで食べた。(青梨子町前原)

**糠漬** キュウリやナスを糠漬にして、夏のおかずとしてよく食べた。

糠に冷ました塩湯を加え、その中にキュウリやナスを入れて漬けた。(青梨子町前原)

**塩押し** 塩水を煮えたたせてから冷まし、樽に入れたキュウリやナスにかけて押す。(青梨子町前原)

**塩漬** シヤクシ菜や白菜を塩漬にしたものを漬け菜といった。(青梨子町前原)

**梅干** もいだ梅をミョウバン液に一晩つけておく。翌日、これをおげて樽に入れ、塩を加えて漬けこんだ。水があがったら、シソをもんで入れるとよい色になる。土用になったら樽からとり出して三日くらい干した。これを「三日三晩の土用干し」という。(青梨子町前原)

**大根の切り干し** 収穫のときに欠けてしまつて漬物にできない大根は、細かく刻んで天日乾燥し、切り干しにした。大根の切り干しは水でもどし、油いためにしたり、ニシンと一緒に煮物にしたりした。(青梨子町前原)

**ヒバ** シヤクシ菜などを生のまま軒下に干し、乾燥させたものをヒバ(干葉)といった。ヒバは味噌汁の具にするほか、油いためにもした。(青梨子町前原)

**凍み菜** 冬にシヤクシ菜を茹でてから外に干し、凍らせて凍み菜を作った。凍み菜は、野菜類の少ない冬に味噌汁の具にした。(青梨子町前原)

#### (五) 食 制

##### ① 普段の食事

**食事の名称** 朝食はアサハン、昼食はヒルゴハン、夕食はユウハンと呼んだ。午前間の食はジユウジ(十時)、午後間の食はオコエまたはオコジョハンと呼んだ。(青梨子町前原)

**朝食** アサハンには、ヒキワリ飯（麦飯ともいう）・味噌汁・漬物を食べるが多かった。（青梨子町前原）

**昼食** ヒルゴハンには、アサハンの残りものを食べるのが普通だった。ときには、おかずに油いためなどをすることもあった。

（青梨子町前原）

**夕食** ユウハンには、ヒキワリ飯と味噌汁のこともあったが、煮こみうどんを食べることもあった。とくに秋から冬にかけては、煮こみうどんが多かった。また、ソバを食べることもあった。（青梨子町前原）

**間食** ジュウジヤオコエ（またはコジョハン）に年間を通じて食べたのは、オムスビやオヤキ（焼餅）だった。このほか、夏には茹でたジャガイモ、秋にはふかしたサツマイモなどをよく食べた。

（青梨子町前原）

**オコエ** 午後の間食のことを、コジョウハンとも、オコエともいった。

オコエとしては、おむすび・まんじゅう・やきもち・パンなどがあつた。

（前箱田）

やきもちは、この辺では小麦粉でつくった。昼うどん 盆のときの昼うどんのことは、ヒルバテといった。こういうのは、盆のときだけである。（西箱田）

**コジョハン** 午後のおやつに、ヤキモチやイモを食べた。（総社大渡）

**食事や風呂の順** オジイサン——ダンナ——お客——コドモ——オバアサン——ヨメサン

ヨメサンは、水入れ、火もし、背中ながしで、いそがしかった。お客は、風呂をもらいつこしたので、よびっこをしていた人たちが、来た順に入った。（江田）

日常食（青梨子町前原）

	春	夏	秋	冬
	ヒキワリ飯 味噌汁(ウグイス菜) タクアン	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャガイモ、ナス、 インゲン、ネギ) オナメ	ヒキワリ飯 味噌汁(大根、里芋) 漬け菜	ヒキワリ飯 味噌汁(凍み菜、ヒバ) タクアン
	オムスビ オヤキ タクアン	オムスビ オヤキ 梅干	オムスビ オヤキ 梅干	
	ヒキワリ飯 味噌汁 タクアン	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャガイモ、ナス、 インゲン、ネギ) 糠漬(ナス、キュウリ) 梅干	ヒキワリ飯 味噌汁(大根、里芋) 梅干 漬け菜	ヒキワリ飯 味噌汁(凍み菜、ヒバ) 油いため(ヒバ、大根の切り 干し) タクアン
	オムスビ オヤキ タクアン	ジャガイモの茹でたもの オムスビ オヤキ 梅干	サツマイモのふかしたもの オムスビ オヤキ 漬け菜	
	ヒキワリ飯 味噌汁(ウグイス菜) 煮こみうどん(大根、人参、 ゴボウ、里芋) ゴマよごし(ウグイス菜) タクアン	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャガイモ、ナス、 インゲン、ネギ) 油味噌(ナス、ネギ) キュウリモみ 塩押し(ナス、キュウリ) 梅干	煮こみうどん(大根、人参、 ゴボウ、里芋) ソバ 漬け菜 梅干	煮こみうどん(大根、人参、 ゴボウ、里芋) ソバ 煮物(大根の切り干し、ニン ン) タクアン

注：( )内は材料、または汁物の具を示す。



② 年中行事の食事

正月三が日のカレイ 小野里家では、正月三が日、むかしは

朝は餅、

昼はなんでもよし、

夜はご飯。

神様にあげるのは、餅を小さく切って二切れ。これをやいて、汁の中に入れて、大根・人参・いもと一緒にぞうににしてあげた。これをあげるのは年寄（主人）。

うちのものは、きりもちをやいて汁の中に入れて、雑煮にして食べた。

三が日あげたものをさげないでおく。

四日の朝、おたなさがしといって、さげる。これは、とっておいて、七草のときにたべた。

二日の晩は、とろめしをたべた。

これを食べると、中風にならないといった。

七日まで、なっぱを食べなかつた。

七草のセリを食う前になっぱを食ってはならないといった。

(江田)

モノ日の食事 年中行事の日のことをモノ日とよび、赤飯・餅・ボタ餅など、普段とは違った食物を作つて供えたり、食べたりした。

(古市)

おこもち 八十八夜（五月二日）におこもちをつく。よそでは、四月十五日につくところもある。親戚からおこもちを先にもらうので、ここのおこもちをついて、おかえしをした。

これから忙しくなるというので、おこもちをついて食べる。

おこもちはくさもちであった。このもちのことを、鬼の餅ともいっ

た。これから仕事が忙しくなっておそろしくなるというので、そのようにいったもの。（青梨子前原）

家例 モノ日の食事は家毎に異なる場合もある。これを家例という。

例えば、古市町の正月三箇日の家例は次のようである。（古市）

一 馳走をつくる日

・ 八朔の節供は赤飯。

この日は、葉シヨウガをもつて、嫁が里へお客に行った。

・ 十日夜は、新米の餅のつきはじめ。

・ 四月十五日、おこもち。おかいこのまつり。かいこがあたるように。このときの餅のことを、地獄餅ともいった。これから仕事が忙しくなつて、地獄の思いをするというのでそういふた。

・ 十二月十五日、あぶらもちをつく。

このときは、農作業が一段落したというので、このときつく餅のことを、極楽餅といふた。

イネ刈りが終り、ムギまきが終つて、仕事が一段落した。

・ ムギまきが終ると、ネズミプサゲといふて、ぼたもちをつくつた。

ムギをまいたさくにぼたもちをうめた。

・ 秋あげのときは、餅をついた。若い嫁さんは、これをもつて、里へ

お客に行つて、一晚泊つてきた。

このとき、次のような話があつた。

姑が嫁に

「好きほど泊つて来い」

といへば、この嫁は望みなし。

「こつちから迎えが行くまで泊つてろ」

というのが、縁切りのまえぶれだつた。

はしっこい嫁は、迎えが来る前に帰つてきた。

婿が嫁のうちへ二晩泊ると、馬鹿婿とか鼻下長といわれた。気のきかない婿だった。婿は一晚泊りで帰ってくるのがふつう。

・春まつりは赤飯。

・秋まつりのときも赤飯。

・三月の節供はすしと餅（紅白、ひし餅）。

・五月の節供は赤飯。

・八十八夜は草餅。

・彼岸のときは、

「中日ぼたもち、はしりだご」

といった。はしりくちのときはだんごをつくった。つみっこをあんの中に入れて食べた。

・盆のとき、朝はぼたもち、昼はうどん。夜は米の飯だった。盆のときのひるうどんのことを、ヒルバチエといった。

・二十十日、二百二十日のときは、赤飯かあずきめし。

春の彼岸のときは、ぼたんの花の咲く時期なのでぼたもちという。

秋の彼岸のときは、萩の花の咲くころなので、おはぎという。

しかし、この区別はとくにしないで、ぼたもちとっている。

・昼うどんのことを、盆のときに限ってひるばてえといっている。

・あずきぼうとは、まつりのときのご馳走ではない。ふだん食べたいときにつくって食べる。おきりこみと同じようにつくった幅の広いめんを、生のまま、あずきの汁の中に入れて煮たものである。

・ゆでまんじゅうは、昭和十年代のはじめごろまでつくっていたように思われる。昭和十年ごろは、ゆでまんじゅうからふかしまんじゅうにかわっていくころであったようだ。わかいころは、ゆでまんじゅうをつくっていた。（元総社阿弥陀寺）

農休みのまんじゅう 百姓家の番頭さんは、農休みには一日ひまだ

して遊ばせたから朝飯前に長く使った。朝飯前仕事に行ってこさせた。農休みの日、いつもよりはらがへっていた。

早く帰って、まんじゅうを食おうと思っていた。うちへ帰って、まんじゅうに食いついた。まんじゅうを一ぺんに口にいられた。しばらくたつて、残りのまんじゅうみて

「今朝のまんじゅうにはあんこがねえぜ」

といったつて。あんこは口の中に入っていたつて。

そのくらいはらがへつていたということ。

農休みのまんじゅうは、新粉でつくった。そのために、車屋（水車）がこんだ。

二十くらいの人年数までくつた。それでもはらをいためねえと

いった。

むかしは、ふかしまんじゅうではなくゆでまんじゅうであった。

大正六生まれのおばあさんが四つ五つのときのこと。ゆでまんじゅうをつくっているのをみていた。

まんじゅうが浮いてくるのがおもしろくつて、釜のまわりをまわっていた。

まんじゅうはゆだると、浮かびあがった。

それを、おたまじゃくしで一つずつすくいあげた。（元総社阿弥陀寺）

	朝食	昼食	夕食
金古家 A	赤飯		うどん
金古家 B	雑煮		うどん
黒崎家	雑煮		白米飯
野本家	雑煮		ソバまたはうどん
真塩家	雑煮		
高橋家	うどん		

飯野家 雑煮

うどんまたは白米飯

白米飯

※飯野家については五箇日の家例

年中行事の食事(青梨子町前原)

月・日	祝祭日	食	事
一・一	大正月	朝 雑煮、夕 白米飯	
二	〃	朝 ソバ、夕 白米飯	
三	〃	朝 雑煮、夕 白米飯(三箇日中にトロロ・テンブラ)	
四	お棚さがし	朝 おじや	
六	六日草	朝 白米飯	
七	七年草	朝 七草粥	
八	御年始うけ	ソバ	
二	蔵開き	朝 雑煮	
三	小正月の餅つき	餅	
四	小正月	夕 ソバ	
五	〃	朝 小豆粥	
六	ヤブ入り	朝 マユ玉	
八	十八日粥	朝 小豆粥(十五日の小豆粥の残り)	
〇	オイベス講	白米飯・頭つき(サンマ・イワシ)・テンブラ	
二・三	節分	夕 白米飯、炒り大豆	
初旬	初午	マユ玉	
八	コトハジメ	朝 赤飯	
三・一	節供の餅つき	アンピン、ヒシ餅	
三	桃の節供	朝 すし(のり巻き・お稲荷さん)	
元	春祭り	赤飯・煮物	
二	彼岸	中日の朝 オハギ・キンピラ	
五・初旬	八十八夜	餅(オコモチ)	

五	端午の節供	赤飯
中旬	蚕のフナ休み	餅(フナ餅)
六・上旬	蚕のあげ祝い	餅
下旬	マンガアライ	赤飯・酒
七・四	天王様	うで饅頭(ふかし饅頭)
七・五	祇園祭り	赤飯
七・六	農休み	うで饅頭(ふかし饅頭)
八・一	釜の口開け	オヤキ、うで饅頭(ふかし饅頭)
七	七夕	赤飯・うどん
三	迎え盆	夕 白米飯
四	盆	朝 オハギ、昼 うどん、夕 白米飯
五	〃	〃
六	送り盆	朝 オハギ
九・一	八朔	赤飯
九・二	十五夜	うで饅頭(ふかし饅頭)
九・三	彼岸	中日の朝 オハギ・キンピラ
一〇・八	薬師様の宵祭り	夕 ソバ
九	オクンチ(秋祭り)	朝 赤飯・キンピラ・煮物
九・三	十三夜	うで饅頭(ふかし饅頭)
九・三	十日夜	うで饅頭(ふかし饅頭)、餅
二・三	オイベス講	白米飯・頭つき(魚・テンブラ)
下旬	ネズミツブサギ	うで饅頭(ふかし饅頭)、餅
末	お庚申	ソバ
一・一	アキアゲ	うで饅頭(ふかし饅頭)、新米
八	稲荷祭り	赤飯・頭つきの魚・スミ豆腐・油揚げ
五	油餅	夕 赤飯

四・八	花	祭	甘茶
一	大正月	祝祭日	食 事
二	〃		朝—雑煮(赤飯の家もある)
三	〃		昼—うどん(白米飯の家もある)
四	お棚さがし		夕—白米飯(うどんやソバの家もある)
五	七草		生臭物を下げる
六	小正月		七草おじや
七	ヤブ入り		小豆粥
八	十八日粥		小豆粥(十五日の小豆粥の残り)
九	オイベス講		稲荷ずし、オハギ
十	しまい正月		赤飯
十一	節分		ケンチョン汁
十二	初旬		マユ玉、赤飯、オシンコ
十三	初		小豆飯
十四	オコトハジメ		すし(巻きずし・稲荷ずし)
十五	天神講		ヒシ餅
十六	ひな祭り		すし(巻きずし・稲荷ずし)
十七	八日節供		マユ玉、白米飯、オカラ、キンピラ
十八	二十二夜講		オハギ
十九	彼岸		白米飯、煮物
二十	庚申講		

年中行事の食事(古市町)

三	太子講	酒・煮物(職人の家のみ)
六	正月の餅つき	餅(三十日の家もある)
三	冬至	トウナス
三	大晦	夜—ソバ

二・八	オコトジマイ	小豆飯
三	ツジユウダンゴ	ツジユウダンゴ
三	オイベス講	ボタ餅、すし、ケンチョン汁、尾頭つき(サンマ)
二・五	屋敷祭り	赤飯、尾頭つき(サンマ)(二八日に行う家もある)
一〇・〇	十日夜	ソバ、団子、餅
九・三	十三夜	うで饅頭(ふかし饅頭)
一〇・八	葉師様	マユ玉、菓子
九	オクンチ	赤飯
九・三	彼岸	白米飯、煮物
九・一	八坂の笹供	シヨウガ
八・五	十五夜	うで饅頭(ふかし饅頭)
七・三	迎盆	朝—ボタ餅、昼—うどん、夕—白米飯
七	七夕	夕—白米飯
六・一	釜の口開け	うで饅頭(ふかし饅頭)
五	天王様	きゅうり
七・四	農休み	焼餅、うで饅頭(ふかし饅頭)
六・上旬	オコアゲモチ	アンピン
六・下旬	マンガアライ	白米飯、酒
五・五	男の節供	赤飯、しょうぶ酒
五・中旬	フナモチ	アンピン
五・下旬	ニワモチ	アンピン
五	オコモチ	アンピン

五	油	餅	アンピン
三	冬	至	トウナス、コンニャク
三	すす	掃	餅
三	正月の餅つき	晦	餅
大	海	夕	白米飯、夜——ソバ

(六) 飲食関係用具

**鉄釜** 御飯を炊くのに鉄釜を使った。鉄釜には二升炊き、四升炊きなどの種類があった。(青梨子町前原)

鉄釜は飯を炊くときに使うほか、うどんやうで饅頭を茹でるときにも使った。(古市)

**鉄鍋** 鉄鍋は、味噌汁やケンチョン汁などの汁物を作るときに使った。(古市)

**焙烙** 焙烙は薄い鍋のような形をしており、オヤキなどを焼くのに使った。鉄の焙烙と土焙烙(ドボウロク)とがあったが、土焙烙を使うことが多かった。(青梨子町前原)

**スイノウ** スイノウは、釜の中でうどんやソバ、うで饅頭などを茹でたときに、これらを取り上げるのに使った。(古市)

**シヨウギ** シヨウギは、茹であがったうどんやうで饅頭を取り上げて並べておくときに使った。(青梨子町前原)

**せいろ** せいろのことは、ドウとよんだ。(前梨子町前原)

せいろは、赤飯やボタ餅を作るときに糯米を蒸したり、ふかし饅頭をふかしたりするのに使った。(元総社町第二)

**穀櫃** 木製の箱で、大麦・小麦・アワ・ソバなどの穀物を入れて保存した。(総社町植野)

**石臼** 石臼は小麦などをひいて粉にするときに使った。石臼の上の

方に穴があり、そこから小麦などを入れてひいた。このとき、穴に沢山入れると石臼の動きが軽くなるが、粉がよくできないので、少しづつ入れた。(元総社町第二)

**水車** ムラにクルマ屋が二軒あり、この水車で米の精白をした。

精白する米の中に搗き粉(石の粉)を入れて搗いた。搗いたものはマングク(万石通し)にかけて、小糠と米に分けた。精米の他、水車で小麦を搗いたり、大麦のヒキワリを作ったりした。精米のときに出る小糠や、小麦を搗いたときに出るフスマは豚の餌にした。(総社町植野)

ムラには水車が四つあった。それぞれ、メグリ車・ヨッちゃん車・シゲちゃん車・リクちゃん車とよばれていた。メグリ車は昌楽寺めぐりという字名から、他の三つは水車の持ち主の名前からこのようによばれた。水車では米を精白したり、大麦をヒキワリにしたりした。これらの作業は、水車を借りて自分でやることもあったが、水車の持ち主にやってもらうこともあった。(元総社町第二)

**バイパス** の下のところで、滝川(天狗岩用水)の水を使って、個人で水車をやっている人がいた。クルマンチとよばれていた。精米や小麦の製粉、大麦のヒキワリなどを頼んでやってもらった。(石倉町上石倉)

**電気車** 昭和に入ってからモーターを使った電気車が登場し、穀物の精白や製粉に使われた。(元総社町第二)

**きせる** むかし、百姓には武器がなかった。

それで、きせるを腰にさしておいた。

悪漢におそわれたときには、きせるが武器になったという。(元総社町)  
**ハシ** 十五日粥を食べるのに、柳の木の枝で、ハシを作って食べた。まん中がふくらみ、端は細いはしで、使いにくかった。

(元総社大渡)

箱膳 小学校卒業くらいでそろえた。正方形で、一人ずつ使った。簡単にふいてくれた。おかずもあまるといれておいた。洗っているヒマがなかった。

夕方七〜八時に夕食で、ねぼけて碗をかいたことがある。(小相木)

### 三、住居

#### (一) 屋敷取り

ムカシの家屋 ムカシの母屋の縁側は三尺でせまかった。

家の高さも、丈四(一丈四尺)で低かった。

イロリは、台所のそばにあった。

足を使わないであたれるようになっていた。

お客は、奥の八帖の間にすわらせた。

おくりにはおこたがあった。お客はそこへすわらせた。

トリムスピはおくのままでした。

仏様がでると、三十五日だけは、仏様の位牌を、床の間に飾ってお

いた。三十五日がすめば、位牌は仏壇に入れた。

湯灌はオモテの八帖の間でした。

なくなつた仏様はゴザに安置した。

若夫婦の寝るところは二階。

よりつきの八帖の間には、としより夫婦が寝た。

盆棚はよりつきの八帖の間に飾る。

小正月の飾りものも同じ。

えびす溝のとき、えびす様をまつるのも同じ場所。

床の間には、一年中掛軸をかけておく。

お正月には、おそなえを床の間にあげる。

イロリの神様は火伏せの神様、荒神様という。三宝荒神はお棚(神棚)にまつておく。(総社町山王)

母屋 入口から入ってみて、左側に各部屋のある家を左ズマイの家、右側に各部屋のある家を右ズマイの家という。前原には左ズマイの家が多かった。(青梨子町前原)

住居 道に面した高いところに作った。(小相木)

鬼門 鬼門には出入口を造つてはいけないという。(石倉町上石倉)

土蔵 土蔵は大尽の家で建てた。一つ建てる場合は乾蔵を建てた。

乾蔵は金蔵だった。さらに余裕があれば辰巳蔵を建てた。

(青梨子町前原)

土蔵の一階には、穀物を入れる穀櫃こくびを入れていた。農具や肥料を入れていた家もあった。二階には、着物の入ったタンスを置いていた。

蚕道具を置く家もあった。(総社町植野)

味噌蔵 一階には味噌や漬物を保存しておいた。二階には機道具を

しまつておいた。(総社町植野)

木小屋 木小屋は、囲炉裏やカマドの焼料のクワゼを束にしてし

まつておくところだった。(総社町植野)

井戸 井戸は深さ三丈くらいのもので多く、釣瓶を滑車で引き上げ

る車井戸が一般的だった。井戸には水舟みづぶねが設けてあり、ここに水を汲

み上げて流すと、トタン製のトヨ(樋)を通つてオカツテのカメに水

が溜まる仕組になっていた。風呂に水を入れるときは、風呂までトヨ

を伸ばした。トヨの途中には杉の葉の束が取り付けてあり、カメや風

呂にゴミが流れ込まないようにしていた。杉の葉は、一か月に一度

くらいとりかえた。昭和初年頃から、ポンプ井戸が現われた。

(総社町植野)

井戸は家の北側にあった。車のついた釣瓶井戸が多かった。釣瓶の

繩は、二十日正月のときに共同ではしごを使ってなつた。昭和初期頃からポンプ井戸が現われたが、初めの頃は竹の管を使っていた。井戸には水神様が祭つてあり、神道さんがもつてきたお札があげてあつた。お札は年の暮につけ替えた。(青梨子町前原)

昔の井戸は、竹竿の先に桶のついた釣瓶井戸が多かつた。このあたりでは地下水が利根川へ流れ出してしまふので、深く掘らないと水が出なかつた。深さ四丈八尺くらいある井戸もあつた。水質は鉄分が多いといわれた。五、六年に一度、井戸替えをした。昭和十五年頃、ポンプ井戸になつた。福田・手島などというポンプ屋があつた。

(石倉町上石倉)

古市町には井戸もあつたが、用水路の水で鍋釜を洗つた。昭和二十二年頃に赤痢がはやるまでは、用水路の水を使つていた。(古市)

個人井戸で、地下水は高く、一丈八尺くらいで水が出る。中に鯉を入れて水がにごらないようにした。

水道は昭和三十五、六年頃で、高井に井戸を掘つて総社町へひいていた。(総社大渡)

三十七、八戸の内、いい水が出るのは、二、三戸くらいだつた。

いい水をもらいに行つたこともある。(稲荷新田)

便所 便所にはかわや神が祭つてあつた。かわや神のお札は年の暮に神道さんがもつてきた。暮の正月の飾りつけのときに、お札をつけかえた。(青梨子町前原)

便所は外にあつた。外に水槽があつて、そこに糞尿を溜めておいた。

(石倉町上石倉)

内便所は年寄りや客用で、子供は外であつた。夜はチョーチンをさげて行つた。(小相木)

タメ 庭の隅にはタメがあつた。タメには、下肥の他に流しの下水

や風呂の残り湯、糸引きに使つた水などを入れた。(総社町植野)

オモト 庭にはオモトを植えた。オモトは家のもつて、縁起がよい。

(青梨子町前原)

ツボ山 植木などは、ツボ山に植えた。(総社町植野)

カシグネ 家のまわりにはカシの木を植えてカシグネを作り、風除けにしていた。また、カシは燃えにくいので、火事の際に延焼を防ぐ火除けにもなつた。(総社町植野)

母屋の北側と西側には防風林としてカシグネが造つてあつた。時々、植木屋がカシグネを刈り込んだ。(石倉町上石倉)

## (二) 間 取 り

トボグチ 母屋の入口をトボグチという。トボグチには一間の大戸(引き戸になつてゐる)があり、それに三尺×四・五尺のクグリ(くぐり戸)があつてゐた。(総社町植野)

アガリハナ ダイドコロから座敷へ上がる途中の場所をアガリハナといい、板張りになつてゐた。(総社町植野)

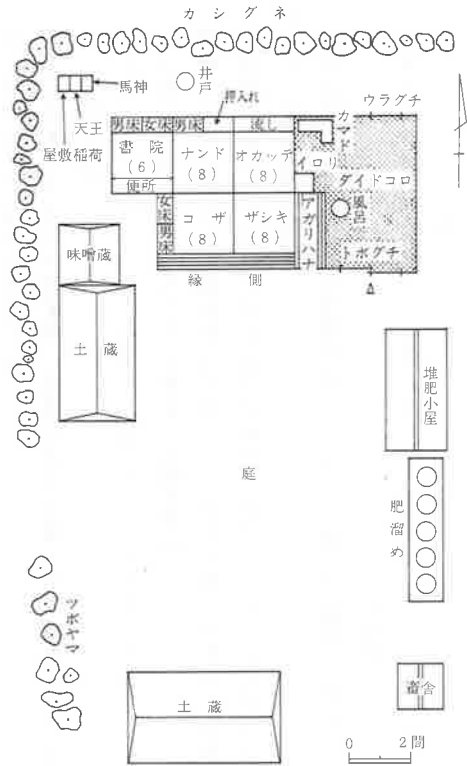
縁側 縁側は板張りで、幅三尺くらいのものが多かつた。

(総社町植野)

柱 家の中心にある柱のうち、真中を大黒柱、ダイドコロにあるものを小黒柱、座敷側にあるものを長者柱とよんだ。(元総社町第二) 馬屋 母屋の入口付近には馬屋があつた。馬屋の柱には馬頭観音の札が貼つてあつた。馬を飼わなくなつてからは、馬屋で牛を飼うようになった。(青梨子町前原)

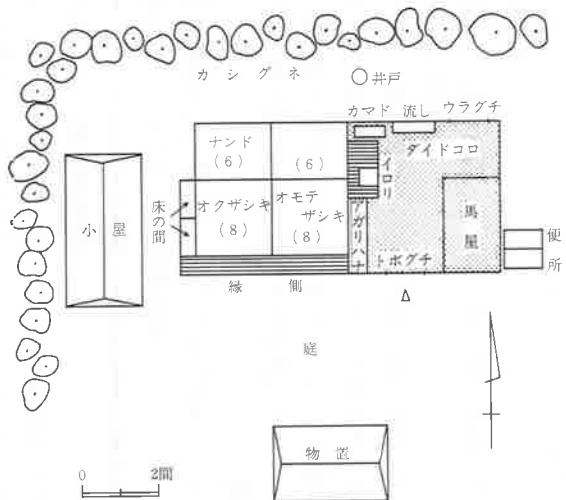
四二間 四間×二間の部屋、四二間(死二間)は造るものではないという。(総社町植野)

ザシキ 来客があつたときにはザシキに通した。(総社町植野)



総社町植野における農家の間取りと宅地利用の一例

注) 母屋の数字は畳数を示す。  
(聞き取り調査により作成)



石倉町上石倉における農家の間取りと宅地利用の一例

注) 母屋の数字は畳数を示す。  
(聞き取り調査により作成)

**オモテザシキ** 近所の人が来た時には、オモテザシキに上がってもらい、そこでお茶を出した。(石倉町上石倉)

**オクザシキ** オクザシキは、来客の寝室として使った。

(石倉町上石倉)

**ナンド** ナンドは、普段は寝室として使った。(石倉町上石倉)

サンベヤともいう。ここでお産をしたり、ニツカン(入棺)をした。ナンドの床板は、釘でうちつけてない。子どもをすぐつて(間引いて)床下に埋めたことがあったという。古いうちをこわしたとき、ナンドの床下から小骨が出たことがあった。

むかしの家は、コザとナンドの間は壁で仕切られていた。サンベヤ(ナンド)は暗かった。ナンドには西側に窓が一つしかついていなかった。(青梨子)

**オカッテ** オカッテでは食事をした。オカッテには流しがあり、ここで洗いのをした。流しの下には鍋や釜を置いた。(総社町植野)

**ダイドコロ** ダイドコロは土間になっていた。囲炉裏、カマドなどがあり、ここで炊事を行った。風呂もダイドコロに置いてあった。養蚕の時期には、ダイドコロに桑を置くこともあった。(総社町植野)

**風呂** 風呂は据風呂で、ダイドコロに置かれていた。風呂の水は、井戸の水舟から樋を通して流して入れた。(総社町植野)

昔は風呂は交代でたいて入った。一つの風呂に十五人も入った。水は川からくんだ。(小相木)

**カマド** カマドは家の北側にあつた。カマ神様を祭っており、カマ神と書いた幣束があげてあつた。(青梨子町前原)



カマドのことはヘツツイといった。ヘツツイには、カマ神様として三宝荒神を祭っていた。ヘツツイのそばの柱に台があつて、そこに三宝荒神のお札を飾っておいた。田植が終わつたあと、サナブリのときには、カマ神様に水口の苗を三株あげた。(石倉町上石倉)

ヘツツイと言ひ、土ベツツイが三つあつた。ゴハン・オツユ用であつた。(小相木)

**囲炉裏** 囲炉裏はダイドコロの土間の隅にあり、鍋などをかけて使つた。(総社町植野)

囲炉裏には鉤竹が下がつており、鍋などをかけて使つた。囲炉裏の座席名はとくにないが、だいたい主人は東向き、嫁は末座に座ることになつていた。(青梨子町前原)

囲炉裏のある家は少なかつた。囲炉裏のある家では、囲炉裏のまわりは板の間になつており、冬にはそこにガマゴザを敷いた。

(石倉町上石倉)

へつすいといろり むかしから、農家には、へつすいといろりと両方あつた。

へつすいは、いろりからすこしはなれて台所のすみにあつた。

へつすいのそばに、釜神様がまつつてあつたが、あらためて、釜神

様のまつりはなかつた。(総社町山王)

こたつにすわる位置 ダンナは、南か東向き。オジイサンがいれば、一番いい位置。

オバアサンと子供はどこにでも入つた。

ヨメさんは入る所がない。(江田)

キジリ クワゼなど、囲炉裏やカマドの燃料を置いておくところをキジリといった。「キジリのところは危ないからきちんと掃きつけておけ」といった。(青梨子町前原)

中二階 ダイドコロの上が中二階になつてゐる家もあつた。

(総社町植野)

二階 母屋の二階では蚕を飼つた。(総社町植野)

母屋の二階では蚕を飼つた。また、普段は二階に蚕具をしまつておいた。(石倉町上石倉)

コザ 床の間のある部屋。トリムスビはコザである。(青梨子町)

寝る場所 北西の奥のへやに、ジイサンとバアサンがねる。南東に若夫婦、子供は二階か土蔵にねた。奉公人はキゴヤの二階だつた。

(江田)

### (三) 建築工程と儀礼

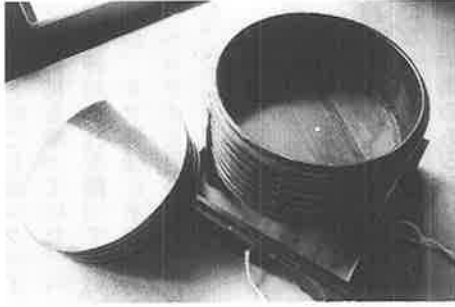
**地祭り** 家を建てる前には地祭りを行う。ムラの熊野神社の神主に頼んで、お払いをしてもらつた。(青梨子町前原)

家を建てる前に神主にお払いをしてもらうが、これを地祭りという。明神様の神主や上石倉の御嶽さんを頼んでやってもらうことが多かつた。(石倉町上石倉)

**水盛** 母屋を建てる場所に杭を打ち、杭にヌキ板を打つ。そして、水準器を使って土地が水平かどうかを見た。この作業を水盛という。

(石倉町上石倉)

**地づき** 柱を建てる前に地面を突き固める作業をジギョウといつた。まず、柱を建てる場所に切石か玉石を敷き、その上に矢倉を組んで滑車を取り付ける。そして、左右に綱をつけた大心棒を立て、綱を引いては大心棒を打ち込み、石を突き込んだ。綱は左右とも四人くらいで引き、近所の人を頼むことが多かつた。ジギョウは唄を歌いながらやるのが普通で、そのときの掛け声からヨイトマケあるいはエンヤラヤともよばれた。真中でシンドリをするのは職人の役目だつた。間



ほけい (鳥羽 西部)

仕切などの場所はタコヅキでやった。また、小さい家を建てる場合は大心棒を使わず、タコで突いて済ませることもあった。(青梨子町前原)  
柱を建てる場所に玉石を打ち込む作業を地づきという。矢倉を使つて、カネの輪のついたケヤキの棒をうちおろし、玉石を突き込んだ。矢倉の真中で棒の操作をしている職人を、シンドリまたはネドリとよんだ。(石倉町上石倉)

建前 ジギョウが終わると、柱を建てる。まず大黒柱を建て、あとは辰巳(東南)の方角から東・北・西の順で柱を建てていく。柱にはイロハの記号をつけておき、順番に建てる。柱を建てたら梁を入れ、棟木を上げる。そして屋根を張る。まずナカビキを張り、小屋バリを張る。次にツカを立て、モヤを配り、タルキを打つ。タルキにガラを張ると屋根ができる。建前は、普通の農家なら六人手間くらいでできた。(青梨子町前原)

地づきのあとは、吉日を選んで柱を建てる。もし、予定の日に雨が降ってしまったら「建前の日には柱一本でも建てる」といわれた。

(石倉町上石倉)

上棟祝い 棟が上がると、近所の人や親類などをよんで上棟祝いをした。施主や職人が屋根の上上がり、そこで大工の棟梁が幣束をあげた。幣束には麻とミズクサの枝を添え、棟木に縛りつけた。ミズクサの枝には火災除けの意味があった。また、やはり火災除けのため、破風に「水」と書いた。幣束をあげた後で、屋根

の上の人達は、ホケエに入れて持ってきたゴシ餅を投げた。ゴシ餅の形は四角で、五合餅に合わせて切ったものが多かった。その後で、職人達にはお祝いを包み、集まった人達に酒をふるまった。

(青梨子町前原)

上棟祝い 棟上げが終わると上棟祝いをする。このときは、棟梁が棟木に幣束をつけて拝む。また、施主・親類・大工・その他の職人が屋根に上り、餅・みかん・キャラメルなどを投げた。この時の餅はホケエに入れていつて投げたので、ホケエ餅とよんだ。餅の形には、正方形やヒシ形などがあった。(石倉町上石倉)

投げ餅 上棟式のときに、投げ餅をする。この餅のことは、ごしもちという。形は、真四角もあるし、菱形もある。

この餅は、近い親戚から贈られる。餅は、行器(ほけえ)に入れてもってくる。

三升一白くらいの量である。

この餅を贈ってくれるのは、施主からみて、兄弟・奥さんの実家・母親の実家・おじ・お婆の家くらいである。

行春を棟にあげて、その多いのが自慢であった。

この餅は、全部まかないで、すこしまく。あとは、近所の人たちに、くばった。

餅を贈ってくれた家へは、行器の中にうちでついた贈られたよりや大きめの餅を何枚か入れてかえしたり、何か品物をやったりした。

なお、この餅をもらった人が、うちへ帰つてやいて食べると、施主のうちに不幸があるから、焼いて食べてはいけないといった。(小相木) 棟梁送り 上棟祝いで酒をふるまった後は、棟梁を家まで送つて行った。このときは酒をもち、竜柱(りゅうばしら)をもって木遣りを唄いながら送つていった。(青梨子町前原)

昔は棟梁送りをやった。このとき柱に板をつけて矢羽根をつくった。これを棟梁が持っていた。(石倉町上石倉)

**竜柱のいわれ** 竜柱には、髪の毛・かんざし・扇子など女性に關係の深いものがついているが、それには次のようないわれがあった。昔、ある棟梁がお宮を建てることになったが、明日が建前という日に誤って柱を短く切ってしまった。困っていると、棟梁の女房が柱の下に石を入れたらよいと提案してくれた。こうして棟梁は無事お宮を建てることのできたが、女房に助けられたことが他人に知れるとまずいと思い、女房を殺してしまった。殺した女房を供養するために立てられたのが竜柱のはじまりだという。(青梨子町前原)

**屋根** 麦ワラでふくが、麦ワラは貴重品であった。コケがでるとくさって雨がもるので毎年 $\frac{1}{4}$ ずつ使いなおしていった。職人が来て作業した。(小相木)

若い職人が来てグシをしつかりしめるとワラがつまってもつが、年寄りでゆるいとすぐに雨がもった。竹ヤリでなわを通し、下でとって屋根をしばった。ハサミでワラを切りそろえ、あとでたいた。

**屋根替え** むかしは大部分の家がくずや(葦ぶきの家)だった。そのために、屋根がえをした。

このときには、隣組の人とか、うちうちの人は手伝いでた。はじめから終りまで手伝った。

手伝いのときには、朝飯を食べてからいった。昼食と夕飯は施主がだした。

なお、寺の屋根替えは、小相木と古市で交代でやった。このときは、ムラ中の人がでた。寺はかやぶきだった。(小相木)

**クズ屋** 明治の頃はかや葺の家が多かった。下敷に麻ガラを敷いて、その上にカヤを葺いた。カヤ葺の屋根は長持ちするので、一代に一回

葺けばよいといわれた。相馬ヶ原の西山にはカヤ場があり、そこでカヤを刈った。馬にカヤの束を六把ずつつけて運んだ。その後、小麦藁で葺くようになった。カラの丈夫な新田早生という小麦の藁を使った。小麦藁は、庭に干してから束にして、母屋の二階に保存しておいた。小麦藁は葺いてから二〜三年で腐るので、四年毎に一面ずつ葺き替えをした。クズ屋の屋根葺は、主に新潟から来た人が行った。家の者は、屋根裏から針を返すなどして手伝った。(青梨子町前原)

農家の屋根は、小麦ガラで葺いたクズ屋が多かった。クズ屋は夏涼しく、冬暖かかった。(元総社町第二)

切妻の屋根で、小麦ガラで葺いたクズ屋が多かった。屋根材の小麦ガラは、束ねて庭に積み上げ、ニューウにして保存しておいた。小麦ガラを物置に保存する家もあった。総社町に和久井さんという屋根葺があつて、屋根葺を頼んだことがある。(石倉町上石倉)

**板屋根** 植野には板屋根の家が多かった。屋根材の板はササ板とい、杉や栗の木を割ったものだった。植野には木屋が一軒あり、そこからササ板を買ってきた。屋根葺は仕事師(職人)に頼んでやってもらうが、施主も手伝った。屋根葺の方法には、竹オセエ(竹押え)やトントンがあつた。竹オセエは古い方法で、ササ板を半丸竹(竹を半分に分けたもの)で押え、針金で縛るものだった。トントンは大正頃から行われるようになった方法で、六分釘や八分釘でササ板を直接下地に打ちつけるものだった。板屋根は五〜十年に一度くらい屋根替えを必要とした。(総社町植野)

前原には板屋根の家もあつた。屋根材の板はツキ板といい、杉の板を二五センチメートル幅くらいに割ったものだった。ムラにはマルキヤという板屋があり、板割サンちゃんとミツちゃんがツキ板を割っていた。板屋根の葺き方は、ツキ板を並べて二つ割りの竹で押え、針金

で縛る方法が一般的だった。この他、ツキ板を釘で打ちつけるトント  
ン葺という方法もあった。(青梨子町前原)

**杉皮屋根** 杉皮も屋根材として使ったが、母屋ではなく、木小屋な  
どの屋根に使った。杉皮は木屋で売っていたので、買ってきて使った。  
杉皮は竹オセエで葺いた。(総社町植野)

物置や納屋の屋根は杉皮で葺いた。杉皮は、春と秋の二回、コテを  
使つてむいた。秋の皮の方が虫が喰わなかった。杉皮は、ヒトエツカ  
ワといつてお盆過ぎになるとよくむけた。春の皮は虫が喰いやすいの  
で川の水に浸け、その後で熱湯で殺虫した。杉皮屋根を葺くときは、  
皮通しという四寸くらいの釘で打ちつけた。グシには、六尺皮という  
長さ六尺の大きい皮を使った。(青梨子町前原)

**トタン屋根** 大正の末頃からトタン屋根が現われた。最初の頃はト  
タンが手に入りにくかったので、ブリキの石油かんをこわしたものを  
代用に使った。(青梨子町前原)

**瓦屋根** 瓦は土蔵の屋根くらいにしか使わなかった。だから、大尽  
が使った。セメント瓦は昭和二十五年頃からみられるようになった。  
(青梨子町前原)

**壁塗り** 建前が終わると柱の間に間柱を入れ、壁塗りをを行う。壁塗  
りには、荒壁・中塗り・仕上げがあつた。まず、間柱の間に割竹を組  
み、ミゴ縄という細い縄で縛る。この作業を「コマイ(木舞)を組む」  
といつた。荒壁に使う真土まつちは自分の畑から採つてくることが多いが、  
買つてくることもあつた。真土にツタとして切り藁を混ぜ、コマイを  
組んだ上に塗ると荒壁となる。荒壁は藁の職人が塗ることが多く、近  
所の人や親戚がこれを手伝つた。職人は入手間て頼んだ。荒壁のあと  
は中塗りになるが、時期的に冬になっていることが多いので、壁はそ  
のままにして家の建築を進め、半年くらい経つてから中塗りをするの

が一般的だった。冬に塗ると、凍つて落ちてしまうことがあるからで  
ある。中塗りには、たいた藁と麻ツタを土に混ぜて使った。中塗り  
のあとは仕上げで、漆喰を塗つて白壁にした。中塗り仕上げは左官  
の仕事だった。(青梨子町前原)

**壁塗り**には、荒壁・中塗り・仕上げがあつたが、すべて職人が行つ  
た。荒壁には畑や庭の土を使った。土に砂を混ぜ、藁を押し切りで切つ  
て入れる。この藁をツタという。壁土を鏝で混ぜ、足でよくこねてか  
ら荒壁を塗る。荒壁の次は中塗りをする。中塗りのあとは仕上げで、  
漆喰を塗つて化粧壁にする。このとき、中塗りがよく乾いていないと、  
シミができた。(石倉町上石倉)

**造作** 荒壁を塗り終わると、家の中の造作にかかる。まず、一階の  
各部屋に仕切りをして、床板を張る。二階の床板はすき間をあけて張  
る。これは、二階で養蚕を行うときに暖気を与えるためである。床を  
張つたら、畳や建具を入れて完成となる。(青梨子町前原)

**家移り** 家ができ上がると、親戚や近所の人をよんで新築の披露を  
し、酒をふるまう。これをワタマワシという。家具などを運び込むの  
は、いい日を選んで行う。(青梨子町前原)

家ができ上がると、新築祝いに兄弟や隣り近所の人達をよんで酒を  
ふるまつた。家移りの日は、冬至の日なら間違いないといつた。仏滅  
でもかまわなかつた。(石倉町上石倉)

**家屋の普請** 富士浅間神社の神主がおがんだ。しんせき近所があつ  
まり、モチを一ウスついた。棟梁が上よりモチ、オサゴをまいた。

(小相木)  
四本柱のヤグラをくみ、音頭をとつて地面をついた。昼はゴハンが  
出た。近所の人はいエいでつた。石は利根川からとつた。

#### (四) 暖房・照明

**燃料** 囲炉裏やカマドのモシキ(燃料)は、クワゼ(桑の枝)・桑根ツコ・薪・ボヤなどだった。たきつけには杉葉や松葉、竹の枝の笹葉などをを用いた。モシキは、束ねて家の軒下に積んでおいた。モシキが沢山積んであると大尽だといわれた。(青梨子町前原)

ヘツツイの燃料にはクワゼやソダを使った。ソダは市で売っていた。一と六の日に市が立ち、この市に渋川の人がソダを売りに来ていた。松の葉をかき集めたものも売っていた。利根川の土手の近くに畑をもっている人は、土手の木の枝も燃料に使った。(石倉町上石倉)

桑の根カブやカイコ後のクワゼを家のまわりにおいえ使った。嫁の前に見て来て、クワゼがあると生活はまあまあと見られた。

(小相木)

**モシキ採り** 相馬ヶ原に薪山があり、二月から三月にかけて、そこでモシキを採った。モシキにする樹種はクヌギが多く、ナタと鋸を使って伐り倒した。モシキ採りは共同作業だった。伐り倒した木は薪に作り、人数割りにして竹のタガに入れ、番号をつけておく。そして、クジ引きをして薪を配分した。薪の運搬には荷車を使った。一つの山を一カ月くらいかけて伐ったので、山に小屋を造って交替で泊まりこむことも多かった。小屋では十二様を祭り、床に酒を進めて安全を祈った。泊まりの夜は、小屋の中で花ブチ(花札)をしたり、鋸の目立てをしたりして過ごした。(青梨子町前原)

**練炭** 第二次世界大戦後しばらくの間、二月頃になると練炭作りをした。練炭は養蚕のときの暖房に使った。(古市)

**ランプ** 電気が引かれる前は、照明に石油ランプを使っていた。ランプは一軒の家に三本から十本くらいあった。家のあちこちには、ラ

ンプが下げられるように針金にかけてあった。ランプのホヤの掃除は子供の仕事だった。(青梨子町前原)

電気が引かれる前は、石油ランプを使っていた。ランプの掃除は子供の仕事で、新聞紙をもんでホヤをふいた。(石倉町上石倉)

**ランプそうじ** 子供の手は小さくて、中に入るので、毎日そうじをさせられた。トウスマの軸が、木綿にかわった。

手がつめたい仕事だった。(西箱田)

石油は一升びんで買に行った。

ろうそく ろうそくも明りとして使った。ろうそく立てがあった。

(青梨子町前原)

**ガス燈** 大正の中頃、元総社町第四区の村山酒造店がガス燈をつけた。酒造ったときに出るガスで灯をともしたもので、みんなで見て行った。(元総社町第二)

**電気** 前原では、大正十年四月十五日に電気が引かれた。初めの頃は夕方にならないと電気がつかなかった。当時の前原全体の電燈の数は、定時が一〇六燈、不定時が四五燈であった。定時燈は日常使うもの、不定時燈は養蚕の時期に養蚕燈として使うものだった。

(青梨子町前原)

大正の終わり頃、電気がついた。電気を引きたい人は電柱を買わされた。(元総社町第二)

電気は大正時代に引かれた。(石倉町上石倉)

**立石の発電所** 明治二十六年に作ったが、機械が古くて、電灯がつかず、高崎の小板橋が来て復活した。

総社水力電気会社といった。電灯がつかずつぶれてしまった。

橋は別名電気の橋ともいい、会社まで電球を買いにいった。

大正三年にはこんな唄がはやった。

「立石の電気工夫は大正式  
中のきかいは旧式で

ついたり消えたり、おやまつくろけ」

大正の電気は、総社町用で作ったものだった。(総社新田)

## 第四章 生産・生業

### 一、農耕全般

一人前 サク切りなら、一日一反、ウナイ切りなら一反五せできる。機織りなら一日一反がふつう。早い人で二反く一ぴきおった人もいる。

(江田)

一人前の仕事量 田植えを、一人一日五せできる。桑原をエングでなえる。女の人は、五日、十五日、二十五日の高崎の市ごとに二反出せるくらいで一人前といわれた。十日で二反ということになる。九時から十時ころまでの夜なべ仕事でやった。(西箱田)

用水 天狗岩用水からひいている。区で管理している。水量が多いから、一ぺんに田植ができる。(稲荷新田)

水利 五千石用水。水利組合があり管理している。天狗岩用水事務所。トノダセキから水が引かれている。(小相木)

分水 染谷川から中島堰を分水する所に、水門の板に五寸角の穴があいていて、完全にふさがれないようになっていて。(江田)

用水の修理と清掃 五月の第一日曜か第二日曜に、農作業の様子をみて水をあげ、堀さらいをした。(小相木)

普請 春は堰普請、秋は道普請をした。堰は、古市堰、八反田堰、芦田堰、中島堰樋がかり、田中下り(諏訪下りと昔はいった)だった。釈迦尊寺の前の小河原堰から、八反田や芦田堰は来ている。中島堰は染谷川からきている。勝呂用水も小河原堰からきている。用水がある

だけ、田がある所といえる。維持管理は自治会がやっているが、日常は利用者がやっている。費用は利用者で分担してやっている。(江田)

水車 総社の福田ヒロイチさんの前の所にあつた。米と粉をひいた。ヒキワリもついた。(元総社大渡)

#### 冬の間の仕事

ナワナイ、タワラアミ、マブシオリをした。(西箱田)

#### 農閑期の仕事

タワラ、カマス、ネコ、ワラジ、ゾウリ(ふつうのものナカアシ)ナワ、をあんだ。ナワは、二十ひろで一ぼ(一ひろは六尺)といい、一日五く六ぼもなう人もいた。ワラジは半日で三く五足くらいあんだ。(総社大渡)

夜なべ仕事 夕食後が、夜なべ仕事の時間で、夕食前までは、草むしりなどの昼の仕事が続いた。夜なべでは、たわらあみ、なわない。サンダワラあみ、むしろあみなどをやった。蚕の時は桑くれやコシリトリをした。女衆は糸とりをして機おりをした。高崎絹といったものになった。木綿を買ってきて作業着を作った。正月がすぎると、ワラ仕事になるが、その前にワラスグリをした。一日50く60ぱでできればいいほうだった。家をたてかえる時は、細いなわをたくさん作っておいて、小舞いをかくときに使った。(江田)

#### 番頭

一年契約で働いてもらっていた。二月二日が契約日で、この日は休みだった。年額十円く三十円で、前払いとし、親が受けとった。下着やひとえの着物を出した。盆と暮に仕事着をくれた。休みは、盆、正月、藪入りに契約の日だった。(江田)

奉公 生活に困った親が、子供を働かに出してお金を得ることが多かった。お金は親がとって、生活費や飲食費になった。働きのよくない親が多かったようである。(西箱田)

年雇い 一年間通して働いている人で、身元のしつかりしている人を頼んだ。口頭でたのみ、一年か半年分を前払いにした。十二月三十一日で切りかえた。下着は自分持ちだが、お仕着せを盆と正月に出してやった。モノ日は休みで、平均に一ヶ月に二日くらいあった。この日でも朝飯前の仕事はした。(西箱田)

小作 耕地が少なかったので、総社町の小作をしていた。農地開放で自作になった。(元総社大渡)

あげ米 あげ米(小作料)は、高いもので一反四俵、ふつうの田で三・五俵。一反で五俵か六俵とれた。六俵とればいい方だった。(元総社)

エイ 七月十五日に田植えが終らないと、「エイ」で手つだいにいった。エイは隣り・近所・親戚が入っている。エイのお返しは「お茶」などの物であったが戦後「金」になった。(小相木)

雨つぶりの仕事 雨が降つてるときに仕事をしていると、「雨つぶりに仕事をするようなさまじやうちをひっくりかえしにして金魚でも飼ったほうがいい」といわれる。(総社町新田)

雨つぶりに仕事をする人があると、「そんなに仕事をしてえんなら、うちをひっくりかえしにして、金魚でも飼え」とムラの人にいわれた。はたけを、草のやぶにしておくと、「ししがやぶからとびだすようになった」といわれた。(青梨子)

農作関係のいろいろ 苗代はイヌの目をさけた。田植は、タツの日をきらった。ここでは半夏の日はとくに苦にしない。ムギまきをして悪い家はない。ムギまきをしたときは、ネズミツブサギをした。

おはぎをして、うちだけの祝いをした。もみすりが終ると、アキアゲといつて、嫁が里へ帰ったこともあったが、大体はうちでお祝いをするだけ。小麦粉がとれたときは、とくに祝いはなかったが、新粉でつくったうどんのことはシンキリといった。かいこがあがつてからの祝いは、おこあげ餅をして祝った。かいこをはきたる前には、オコモチといつて、あんぴんをつくつてうちだけの祝いをした。十二月十五日には、アブラモチをついて祝った。(総社町山王)

麦のからつ田 碓氷峠には見晴台があつて関八州が見えるという。

二月か三月の頃、峠の上から峠の神主さんがこちらを見て麦があんまり青くなければ麦はあたりという。青ければはずれといった。暖冬ときは麦がほきてきて、遅霜の害を受ける。ほきないと根がはるといふ。一月二月は、麦はからつ田がいい、麦はあたりだといった。ほきると早くこやしがでてしまう。霜で葉のうらが負けてしまう。(江田)

秋あげ 秋あげのときは、ぼたもちをつくつて祝った。嫁さんは、そのぼたもちをもって里へおきやくに行つた。かえりには里でもぼたもちをつくつてもたせてよこした。(下新田)

もみすりなどが終ると、嫁は秋あげといつて、里へかえつた。(お客に行つた)(総社町山王)

作つてはいけななもの キビとサツマイモを作つてはいけなかつた。(桜が丘)

トウモロコシ、キュウリ。食べられたが、作つてはいけなといわれた。(桜が丘)

秣場 榛名の方に上石倉の秣場があつて、入会権をもつていた。

(石倉町上石倉)

機おり 二反おつて十円くらいになった。一ぴきを、十日に一度高崎の市に持つていった。(元総社大渡)



仕事休み 農休みということで「半日正月」「正月」という休みがあった。仕事と天候を見て、ジヨウツカエの人がふれてまわった。「半日正月」とか「正月」とか言つてまわった。(江田)

イチワリ・ニワリということ 一石のことをイチワリという。ニワリで五俵ということになる。これは一反歩からとれる小麦のこと。子供のころ、一反歩からニワリとれる小麦ができたということでたまげたことがあった。そのころは一反で三俵ぐらいしかとれなかった。

(青梨子町)

糸ひきのはなし むかしのくらし 糸ひきには、賃びきと、買いだりとおつた。賃びきは、人のまゆをかりてきて、これだけひけばいくらかおかねをもらえらうという約束をしてひいたもの。買いとりのころは、四・九の市日に町まで行つてまゆを買つてきて、そのまゆは高くつて買えないので、中まゆとかびしよまゆを買つてきて、いいところを糸にひき、わるいのはのしにして売った。そのかねでまたまゆを買つてきて糸をひいた。それが買いだり。賃びきは、人のまゆを借りてきて、糸をひいてひき賃をもらったもの。賃びきを商売にしていた人のところへは、店の人がまゆをはこんでくれた。そして、ひいた糸をもつていった。のしは、のし買いがきた。のしを手でにぎつてみて、よい品だと五厘余計くれた。大正のはじめのころのはなしである。そのころは、子供が、「五厘くれ、五厘くれ」と半日も泣いてようやくもらえたかねである。娘のいるうちでは、糸を買つてきて、へて、機に織つて絹の反物をしあげて前橋なり高崎へもつて行つて売つたりした。高崎のほうがいい値で売れた。なかには、反物も売つたかねを高崎でつかつてしまった男親もいた。「おとつあん、いくらになりたい」と聞かれると、なくしてしまつたとか、酒を飲んだなどというが、ほんとうは柳川町でだるま買ひをしてつかつてしまつたのである。糸ひきは、

一年中していた。むかしは、体が丈夫でも、どこへもつとめることができなかつた。あそんでいるわけにもいかねえからというので、糸ひきをする男衆もいた。大百姓のうちでは、田植、稲刈り、麦刈り、かいこなど忙しかつたから、農閑期だけ糸ひきをしていたが、百姓をあんまりしないうちは、おんなしが一年中糸ひきをしていた。娘のいるうちでは、農閑期には昼間は裁縫塾にかよわせ、夜よなべ仕事に機織りをさせた。それから時代がかわつて、前橋で製糸業がさかんになると、わかい娘のいるうちでは、糸引き工女として、住みこみでつとめにやつた。かねとりのため、借金のために工女になつたのである。そのころは女子にはつとめがなかつた。工女とか女中になつた。前橋は糸の町といわれた。腕のいい糸ひき工女は、工場ではなさなかつた。給料を高くしたり、景品をつけたりした。腕のいい工女さんが嫁に行くときには会社でダンスを買つてくれたというはなしもある。糸のひき賃は生活費にした。明治末から大正にかけての時代には、まゆの代金が一番大きい収入だつた。むかしは、かいこは春蚕、秋蚕、晩秋蚕と三回した。このうち晩秋蚕があたりと来年のお正月はいいぞといった。(九月十月)まゆがたくさんとれてかねになつた。晩秋蚕がはずれると、子供に着物を買つてやれなかつた。むかしは、米を売つて生活費にできるのは、大農家だつた。小さい百姓は売るだけの米がとれなかつた。あげ米とあつて、田でとれた米はじょうやさま(地主)へ納めた。残つた米は、一年中食うだけになつた。それだから、麦飯を食べていた。裏作の麦は自分もんなつた。それだから、麦飯を麦飯を食つて働いた。当時、麦七に米三分くらいの割合だつた。一軒で、五反も六反も借りているものはなかつた。一、二反くらい借りていた。じょうやさまの旦那さまが、「かせぎ人だから貸してもいいよ。なまけもんはろくな米をもつてこないから、たんとは貸せない」とい

われた。麦は、米助けに食うのだから小作百姓は売るものはなかった。小作百姓のなかには、ヒヨウドリといって、大百姓のところへかせぎに行つたものもあつた。一日いくらですけに行つたのである。貧しい家庭では、暮のうちに、大尽のうちに契約しておいた。かいこのときに奉公にいくとか、一年中奉公にいくとかきめておいた。そして正月を迎えるためのかねを前もって借りておいた。年季奉公の場合、給料は親もとへ届けられるので、つとめた本人が、年があけてうちへもどるときにはあまりかねをもらうことができなかつた。子供は口べらしで奉公にやられたのである。むかしの貧乏人の子供は親のたしになつた。むかしは百姓家といつても、田圃を借りて米をつくつて小作米をだして残つた米と裏作の麦を食つて生きていただけのものだった。むかし、一人前の百姓といえ、七、八反の土地を耕していたものものと。一町歩の田畑があれば、ムラでも指折りの百姓だった。「あの人は、一町百姓だ」とほめられた。貧乏人でも、利口な子ができると、学校へやつていいところへつとめさせると、「あすこのうちじゃ、子供をことういうところへつとめさせて、一町百姓をまかすようだ」といった。職人のことを、「一町百姓まかすようだ」といった。むかしは、馬は、一町百姓でないといふ飼えなかつた。共同作業のことをエエといつた。この場合は手間でかえした。これをエエガエシといつた。馬を飼つていない人は、エエのとき馬をつれていく。そのときは馬の分は三人分とか五人分としてあつた。「三人娘がいると身上がつぶれる」といふ。これは最近の言葉でむかしはこんなことをいわなかつた。今では、嫁にやるとき、嫁仕度に変なかねがかつた。それで「三人娘がいると身上がつぶれる」といふようになった。むかしはこの逆で娘がいると、「あすこんちは、かねばこがあるからいい」といった。辛抱がよく、よく働くといふかせぎになつた。年季奉公はふつう一年間だつ

た。このほかに、四日間、五日間というのがあつた。いそがしい時期だけ百姓奉公にでるといふのがあつた。この場合は給料がすこしはよかつた。年季奉公の場合には、きめた日からきめた日まで一年間、大體暮にきめた。給料はまとめてもらつた。しかし、大體は、生活がくしいので親が半分以上はききがりをして、使つてしまつた。かいこのことは、セッチョウ虫といつた。かいこを飼うにはいろいろとせつちようしなければならなかつたから、こつちようものである。そのうちに乳のみごがいると、乳くれたり、おしめをとりかえたり、いろいろとせつちようしなければならなかつたので、かいこをかつているときは、「あのうちは、おかいこのほかに一匹おこさまがいるから大変だ」といつたりした。かいこは熟蚕になる前には、桑の葉のいいところを穴をあけるようにして食べる。「おらのかいこは桑をすかりのようにくつて、きれいにくわないよ」といつた。すかりとは桑に穴をあけること。(元総社)

## 一、水 田

田の名前 アミダグ・オクラダという名の田があつた。(小相木)

田と畑 田が六割で畑が四割。畑は桑畑が主であり、屋敷内におつゆの実にする野菜を作つた。(小相木)

湿田 昔は湿田が多かつたが、利根川が流れてから田が良くなつた。(小相木)

田植 半夏生、戌の日、辰の日には田植はしない。風が吹くという。ネコの分といつて、クロのそばに少し植えておいた。大風が吹くと、誰か十五日がゆを吹いて食べた人がいたといわれた。(元総社大渡)

初田植 初田植のときは、田植をはじめると田の水口に酒をたらす。

盃についておんまける。これは、豊作を願ったこと。(元総社)

初田植のときには、酒をもつて行つて植えはじめの言の水口に酒をしんぜた。しんぜるのは男衆の役。とくに唱えごとはない。酒をついでくるだけ。(下新田)

初田植のときには、その田の水口におみき(御神酒)をあげた。わかいもんがいつて、おみきをあげた。それから田植をはじめた。(総社町山王)

田植のときの食事 田植のときには米の飯をして食べた。おにぎりにして田圃までもつていった。おかずは、ニシンと麩の煮たもの、このニシンのことを田植ニシンと呼んでいる。(下新田)

オサナブリ 田植が終ると、一番しまいに植えた田の水口から苗をとつてきた。そのあと植えかえた。その苗をかまど(へつつい)の前にしんぜた。三カ所くらいに分けてしんぜた。(下新田)

田植が終つたとき、最後に植えた田の水口の苗を七本とか五本とつてくる。それを植えかえてくる。うちでは、へつついのところで祝つた。酒をマンガ(馬鋤)にあげた。苗は七本にして、へつついの上にあげた。マンガはよく洗つて物置におく。そこへも苗を七本あげる。ご馳走はあげない。(江田)

マンガアライ 七月のはじめ、田植が終つたとき、マンガアライをした。田植を手伝つてくれた人をよんでご馳走した。酒をだし、赤飯などをして労をねぎらつた。(青梨子前原)

田植が終つてからは、酒を飲んで祝うくらいであった。これをマンガアライといった。田植が終つて苗を一二把もつてきて、よくゆすいで束ごとへつついのすみにしんぜた。これは、あととり(わかいもん)がした。このときのご馳走は、神棚にあげた。苗は枯れると捨てた。なお、田植のときには、よくニシンを食べた。かますで買つてお

いて、田植のときおかずとして煮てたべた。(総社町山王)

田植のあと、苗を三柱あらつて、神だなにそなえた。川神さまにそなえた。(元総社大渡)

田植を忌む日 田植はタツの日、イヌの日、半夏の日がわるいという。タツの日に田植をすると、頭がさがらなくなるのでよくないという。イヌの日は、犬がかきまわすからわるいという。半夏の日は、前の日に植えてあれば苦にならないという。半夏の日を初日として植えるのはよくないということ。(総社町立石)

田植をしてわるい日はタツの日、今もこの日はきらつて田植をしない人がいる。半夏の日についてはとくにいわない。なお、稲荷様をまつて悪い日はイヌの日であるという。(下新田)

タツの日 タツの日には田植をしない。タツの日に田植をすると、そのとき植えた稲が、葬式のときのタツガシラののりになるといふ。なお、タツの日には、寺の田植をするという。むかしは寺は大地主だつた。そこでタツの日には一般の人の田植をさせないでこの日は寺の田植はいいとして、手のあいている農民をよんで寺の田植をさせたのだという。(小相木)

はなどり (田かきで) しんどりはいいが、はなどりはやだつた。足に小麦のかっぱがさきつて痛かつた。しんどりと、はなどりは仲が悪いといつた。(総社町総社)

田の草取りの話 主人が奉公人の気持をためすというので、田の真中に酒一升たてておいた。奉公人が田の草取りをして帰つてきたので、田の中の一升びんに気づいたかどうか聞いてみたら、気づかなかつたという。それで、その奉公人が田のまわりだけしか田の草取りをしなかつたことがわかつたという。この奉公人はいいかげんだということがわかつたというはなし。(総社町総社)

田の草取りをするときは、ゴザを着て、手にブリキのツメをつけてやった。(元総社町第二)

初穂 初田植のときは、赤飯をふかして手伝いの人に出して食べてもらった。稲を刈りはじめるときは根ごと抜いてきて、よく洗ってながしのところのおかまさまのところに、逆さにつるしておく。初穂をあげるのは、稲のときだけ、麦のときはしない。(総社町立石)

稲の刈りはじめのとき、稲の株をこいできて、おかまさまのところにつるした。のどにものがつつかえたとき、その穂でなればつつかえものがさがるといった。(下新田)

稲刈りのとき、初穂一株とつてくる。これをお勝手の水がめのところにさかさにさげておく。(江田町)

新米 新米をたいたときには、神柵にしんぜた。(下新田)

### 三、畑 作

ねずみつぶさぎ 麦まきのあと、もちをついた。(上青梨子)

ムギのはなし むかし、「二月のからつぱたけ」といった。このような状態だとムギはとれるといった。旧二月のころのことで、このころはまだムギが生えていなかった。ムギは新の十一月から十二月にかけてまいた。三月になつてまく人もあった。ムギはそれでもとれた。小麦の春まきもあつたのである。十一月にムギまきができれば、いろいろちだといった。雪の降っているときにまいたこともあつた。そのころだと凍ってしまうのでひとさくごとにまくをたててひとさくごとにまいた。土をかけてふんだ。そうしないと凍ってしまった。株よせというのを、子供がした。稲の株がのこっているのを、子供が手でどこした。これはさくがきりよくするための仕事であつた。かぶつよせとい

た。(江田町)

ほうぼう畑 草ぼうぼうにしておく畑があると、鉄砲もつていかなければなんねえといった。(前箱田)

畑に草ばかりはえらかしていると、「鉄砲もつて行かないと入れない」といわれた。(総社町新田)

のでんぼうが生けている 畑の手入れをきちんとしてないで、草ぼうぼうにしておくと、「のでんぼうが生えると、このうちは身代かぎりになる」といった。やけたあとに生えるのが、のでんぼう。草がぼうぼうだと、「鉄砲もつていかなきゃだめだ。ししがでるようだ」ともいわれた。(西箱田)

しゅんのこと アズキのまきしゅんは、エゴの花の咲く時期がいいといった。三月の末に咲く桜がある。ほうきのように上にのびる桜である。その桜の花が咲くところに、いもを植えつければよいという。それで、その桜のことを、いもたねざくらとよんでいる。(青梨子)

### 四、養 蚕

養蚕行事 「はきたて」かいこが卵からかえると、種やさんがもつてくる。鳥の羽(キジ、ヤマドリ)の束でおろしてやる。「やすみ」初眠(しじ) ↓ 二眠(竹) ↓ 三眠(ふな休み) ↓ 四眠(にわ)と呼び、この三眠に相当する。赤飯を炊き、もちをついてかいこの成育が順調であることを祝う。「おこあげ」まぶしにおかいこをあげる。この時にも、もちをついて祝う。(上青梨子)

かいこのこと かいこが三眠のとき、ふなやすみといい、このとき、ふなもちをついて祝った。かいこがあがると、もちをついて祝った。人をたのんでいたので、そのもちを食べたり、たのんでいた人にもた

せてやったりした。うちでは、そのころ。手伝いの人を十五人くらいたのんでいた。その人たちのことをかいこびようといっていた。かいこびようの人たちは、女の人が多かった。うちに泊っていた。信州、赤城村、糸之瀬などからきた。近くは、前橋の後閑からきた。この人たちの仕事は、桑つみ、桑くれ、こしり（こくそ）とり（うらとり）などであった。根桑とりは、春先の仕事。桑の棒に葉がつく。下のほうのはつばをとった。きりやすいようにした。（江田）

養蚕 植野では、明治の頃に水害があつてから水田がなくなつてしまつた。そのため稲作に代わつて養蚕が盛んになつた。男の人は外で桑を採り、女の人は家の中で蚕に桑を与えた。（総社町植野）

昭和になつてから、蚕の種をとった。（元総社大渡）

繭 繭は、碓氷社総社組で糸にして売つた。（総社町植野）

オカイコビヨウ ケイアンが紹介して、十日や一ヶ月の契約で働きにきてもらった。川田村、新治村の人が多かった。百姓の人で、毎年来る人はきまつていた。歩いて来て、こちらの仕事をおえたあと、帰つて自分の家の蚕の仕事をした。ケイマンは、新前橋の金井旅館の人、金古あたりの人が、最近までやつていた。求職の人がいると、そこに泊り、帳面を見て必要な家へ手配した。（江田）

養蚕の時、ケイアンに頼むと、越後や福島などから、働く人をつれてきて、あつせんしてくれた。ケイマンは、前橋駅の近くに宿をして、仕事が決まるまで、とめていた。麦かり、田植、蚕と、六月から七月は、大変いそがしかった。（西箱田）

蚕のムシロ洗い フイトウサマの所の川で、カゴヤサン、ムシロを洗つた。（元総社大渡）

根桑すぐり 三月中旬から四月上旬にかけてする。桑原中あるいて、根桑をすぐつておくと、でかいずいをきるのに楽である。（元総社）

桑をはやす 桑を切ることを、桑をはやすという。しかし、この言

葉は、春蚕のときの桑切りのときにいうことで、他の時期については、桑を切るといって、はやすとはいわない。（青梨子前原）

桑うみ 桑つみは、一貫目くらいで小づかいになるので、嫁があつたり、そのお金は縁日のこずかいにした。（小相木）

桑こき 夜十二時ころまでした。夜子供にオツパイをくれながらした。子供が桑の中で寝てしまった。（小相木）

ふなもち 春蚕のとき、三度目のかいこ休みのとき（ふな休み）に、ふなもちをついて祝つた。にわやすみのときも餅をついたこともある。

（江田）

春蚕のとき、かいこの三回目の休みのときに、ふなやすみといつてふなもちをついて祝つた。これで、まゆになるといふ祝である。

（総社町立石）

おこもちとあぶらもち 蚕の前に、四月のうちににおこもちをついた。秋の仕事が終ると、十二月十五日にあぶらもちをついて祝つた。

（総社町立石）

オコアゲ 蚕が三眠のときはふなもちをついて祝つた。蚕があがると、あげ祝いをした。このときも餅をついた。新しい嫁はこの餅をもつて里へお客に行つた。「あらよめこの一晚どまり」といった。嫁にきて二、三年くらいの嫁がお客に行つた。（青梨子）

## 五、諸職その他

職人 オケ屋の仕事で草津に行つたことがある。湯泉の湯を通す管が木でつなぐのにたがにくさびを打つた。ヒノキ材だった。（総社大渡）  
屋根ふきが越後からきた。鍛冶屋は山王の都丸さんが町まできた。

ボウヤはいない。いかけ屋は来た。(総社大渡)

### 建築の順序

- ① チヨウナダテ……仕事はじめ  
竜柱立リユウバシラて
- ② 矢は鬼門に向ける。竜柱は神社に奇進するもの。イの一番を寄進

するから、番付けはイの二番からつけるのが本当。この柱は棟りょうがもらつてくる。

- ③ 地形ジゲキョウ
- ④ 上棟

- ⑤ フキゴモリ……屋根が葺きあがつたお祝い

五回のお祝いのたびに御祝儀が出た。

水盛り 大工道具で、水平を出す道具。みぞに水を入れて水平をとる。(桜が丘)

水平を出す 戸板に直角に線をひき、サゲつりで垂直の線をあわせると、水平が出る。(桜が丘)

### 大工鑑札

第一三三号

大工職業鑑札

裏 群馬郡総社町大字植野村

大谷庄吉

群馬県

表 群馬郡役所

明治二十六年十月三日

おかし屋 小林さん宅で、水あめやテッポウ玉を商なっていた。自

分の家で作って、干菓子三文あきないをしていた。お菓子を三銭もんと五銭もんとあつた。(総社大渡)

イカダ師 芸者買いでなく貧乏したのは、大渡だとよくいった。土地がない人はイカダ師になつたので、イカダ師が多かつた。沼田から小さなイカダできて、大きく組みかえて下つた。ウンソウで帰つてきた。一日三十円かせいだ。(元総社大渡)

### 特論 民具とそれにまつわる民俗。(清野)

- ① シマダイ(島台)

昭和三年に結婚した時の、取り結びの時に使つた。上に白米を敷き、炭をゆわえたものをいくつか積み、山になぞらえ、松竹梅を、山に生けているようにさした。鶴は折り紙で折り、亀は大根を丸く切り、亀甲を墨でいれて作つた。みんな隣保班の人が作つた。座敷の中央においた。近所にかしたこともある。

当時の結婚式は、まず、朝一見(ムカエ一見)で、ムコ、オジ、オバが行き、親戚の紹介とごちそうになる。これが午前中にあり、午後はおクリ一見として、嫁、嫁の近親の兄弟、オジ、オバが来る。夕方つく。

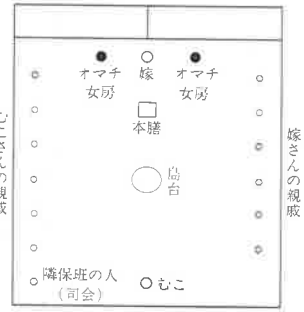
村境には若い衆が弓張ちようちんを持つて待つてゐる。酒を渡すところもある。

若い衆が先導して中宿にゆく。中宿は、近くて便利な家にゆくが、つくとおチツキとしてお茶と塗りの腕にすし(のり巻)が二つくらい出た。

お嫁さんは前帯にオタイコをして手をいれた。

家のカドのところにくると、隣保班が謡をしている。「住之江につきにけり」で縁先につく。

そこには、オガラを麻で結び、鳥居を作り、隣保の人が持つてゐる。



「生まれた家とは離れ、ここが自分の家になる」との意味である。

ここから、「オガラをぶつける」が「あきらめる」の意味となった。

縁にあがると、座敷にシユートさんがいて、そこで親子のさかずきをした。隣保班の人がサカズキをついだ。

むこさんは三三九度（取り結び）の時のみ入る。

三三九度がおわると本膳より、かえぞえの人がフタに少しごはんをとり、食べさせてくれる。

オマチ女房は、嫁に来たばかりの人が、江戸妻、丸まげですわつていて、かえぞえをした。杯をもつてくれたりした。

式の途中でむこさんが出ると、「ムコさんが逃げた」と言い、隣保班の人が仮りのムコさんになりすわつた。その後、ハカマをとり、披露宴になる。家によって違うが、長いことがある。

式が終わると、嫁さんは仕度をかえ、近所の人にお茶をいれる。座敷に「お嫁さんのお茶が入りました」と言つて呼び、お茶菓子も出した。

タル入れを「オーサン」と言うが、意味は不明である。

② 紋入りであるが、用途は不明である。

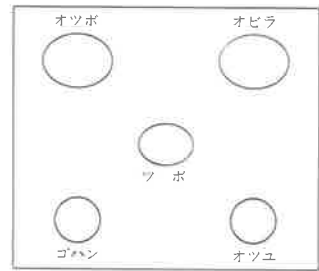
古い蔵にあったもので、結納の時に使つたものか。

③ イタアシゼン

先代の時よりあつた。

④ ネコアシ膳

昭和のはじめに昭和3年の式用に購入した。別に介席膳があり二の



- オヒラにはアツアゲの煮たものをいれた。×印のきざみをいれ、ユズの切ったものをのせた。
- オツボにはスルメ、コンブ、カマボコの煮つけたもの。
- おつゆはすんだおすまし。
- ツボには豆のいたもの。
- 葬式には、ヌッペという野菜の形ををそろえて煮て、片栗粉をいれたものが出た。

膳にした。黒で底が平らであつた。

料理は古くは隣保班で作つたが、昭和はじめころより料理のできる人に頼むようになった。

⑤ お吸物椀

膳の出たあとで運ばれる。正月にも使つた。嫁に来た時にはすであつた。各二十あり、貸し出すことがあつた。

⑥

塗りの平らかな椀は煮つけ用、鉢はお寿し用。お節句用で、おひな様にあげた。専用。

先代の時にはあり、こわれたのを直してある。

古いおひなさまが四く五あつた。

五月の節句はのぼりで、清正、シヨウキ様の絵、鯉の滝のぼりがかいてあつた。初節句でもらい、何年かたてた。孫の代でコイノボリになつた。

⑦ 湯トウ

飯をいただく時に、おつゆをいれて出した。写真の下はオヒツ。⑨はお客用で、お客の前にもつてゆき、そこでよそつた。⑦は④について

ていたもので、同色。同じ時に買ったもの。

⑧ 三ツ重ねの重箱

お米、穀をいれて近所にくれたものか。

先代は分家をして商人になった。屋号を「永屋<sup>ながや</sup>」と言い、高崎<sup>たか</sup>、渋川<sup>しぶ</sup>間で一軒の店であり、酒、呉服、葉まで扱った。

⑩ ホケー

上棟の時に、近い人がモチをいれて持つて行った。箱ごと棟に上げ、おがんでからモチをまいた。お菓子もまいた。

古くからあったもので、借し出したことがある。

⑪

三升くらい入るか。一釜分入る。結婚式などに使用した。ふだんはもつと小さいものを使用した。

⑫

穀物を袋にいれる時に使った。昭和のもの。

⑬

先代の店は子がなく一代でおわった。のち農業になった。明治九年生まれのシユートの菊次郎さんが、稲を作り、蚕をかっった。蚕は昭和十五年ころまでで、蚕糸が統制になり、その時にやめた。

番号の上に輪をおき、ガをおき、フタをして一晩おくとそこにタネを生む。それを売った。

⑭ 養蚕で桑をきざんで入れた入れもの。

⑮ 一斗ます

四斗で一俵になる。計量用。大正ころのものか。

⑯ 若水用。シメナワをはって使った。

若水はくんでカメニ入れた。

元日の朝は菜は食べない。ナクと言う。

正月の柵は、ハリのところにアキの方に向けて板をつけた。家のま  
ん中にした。

トミトクジンが来てはつた。果物をあげた。

稲荷祭は、シノの棒に紙をはさみ、入口、神柵にあげた。

マユ玉は大きいものを十六個作つたが、今は作っている家はない。

菊治郎じいさんはハナカキをした。ニワトコの木でカキバナをした。

長さは六尺くらいあり、十六マキあつた。二本ゆわえて、半紙をか  
け、水引きをかけ、床の間においた。

小さいものも作り、ミズキにさげた。ミズキは山からとつてきて、  
家に植えておいた。枝をおろして使つた。床の間にたてたり、モチを  
さしたりした。



## 第五章 交通・交易

### 一、交通

渡し 明治から大正で、元総社分に入る。三山運送のすぐ北で戸所さん宅の裏という。

明治四十三年の大水のあとから。

つなと滑車を使ったという。

大正中頃までと思われる。

料金は往復一銭で、その後二銭になった。一日二十五〜三十人くらいの利用客があった。

その頃は一日手間が、一日二十〜三十銭だった。

大八車は五人分の手間賃をとり、馬をのせては渡せなかった。

小沢氏の祖父が俗に「ハシバン」といわれていた。馬吉氏らしい。

「ウマサン」というていた。(総社大渡)



大渡船橋の帳面  
(元総社 大渡)

#### 利根川の渡し 以

前は大渡に舟があつた。群馬銀行総社支店から東へ行き、自動車教習所に切り通しを付け、吊り橋を作つて渡った。橋組合で維持・管理をし、

福岡大助さんの父与助さんが、橋本屋の屋号で橋番をしていた。

橋が流れると渡し舟を使った。最初は西側で橋銭を取り、後に東側で徴収するようになった。橋銭は二〜三銭だった。

立石橋 元は大橋といっていたが、今の橋に作り直した時に立石橋になった。(総社新田)

船橋 大渡で合資会社を作つて、船橋を作つた。お金をとり必要経費を払った余りを分配した。

人足に出た人、投資した人の帳面がある。  
人足の人が渡る人からお金をとつた。(元総社大渡)

橋のはなし 青梨子には橋が十七もあった。

明治四十三年の大水の時ときには、三つの川で全部の橋が流れてしまった。県から助成金をもらつて橋をかけた。

高井と青梨子で、費用を半分ずつ出している橋がある。半分橋である。

むかしの橋は板橋・木橋であつた。大水のとき、橋が流れると橋の材木を、ムラ中に出て拾ってきた。ムラ中の人が出て、橋普請といつて、橋の修理をした。(青梨子)

道普請 秋の農作業のはじまる前、十月に道普請をした。農家の場合、必ず各戸一人ずつ出た。

堀さらいは、田植の前、四月か五月、水路をさらつた。農家では必ず各戸一人ずつ出た。(小相木)

道路 昭和三・四年に恐慌があり、大久保〜清野〜総社を抜ける救済道路ができた。(清野)

船のかけ橋 はつみ橋の裏にあり、渡れなかつたので、稲を持って来て人を通した。(元総社第二)

三国街道 三国街道を作るに際し、幕府の命で十四軒が強制移転を受けた。八幡様の前が元屋敷である。(清野)

新道 中石倉は下石倉から分れた。新道と呼ばれていた。(中石倉)  
道 昭和十一年に四ツ角からの道ができた。(清野)

## 二、運 搬

自転車 ある人が来て、「世の中広げきつたね」という。どうしてと聞いたら、「どの家にも自転車が入ったから」といった。(総社新田)  
オートバイ 通ると、道に出て、排気ガスのおいをかいだ。(総社新田)



道しるべ

電車 高崎〜渋川間の電車が通っていた。鳶屋のテイト馬車と呼ばれていた。マブチに交換所があり、そこに供するための馬小屋があった。明治二十七〜八年までのことである。(清野)

くるま 落合にくるまがあった。(元総社第一)  
二) 航空 スミス飛行機が飛んで来て、二銭の寄付をした。  
また、軽気球が頻繁に来た。(元総社第二)

前橋ステーション 前橋内藤分ステーション跡の碑がある。

(中石倉)

## 三、交 易

買物と市 ふだんの買物物は前橋へ行った。高崎へは五のつく日に絹市が立った時と、エビス講の時出かけた。  
絹の糸を反物にして持って行き、売ってもらい買物をしてきた。

(鳥羽西部)

市 一と六の日には市が立った。この市では、渋川の方から来た人がソダや松葉をかき集めたものを売っていた。前橋の人はそれを燃料として買った。渋川の人達は、この市で藁などを買って行った。

(石倉町上石倉)

ぼや市 元総社の市は、一・六の日ときまっていた。むかしからのこと。

昭和十年代まで開かれていた。  
このとき、ぼや市も一緒にやった。  
市のたつところに、町の中央、下宿であった。  
おもに、榛東村の方の人が売りにきた。  
馬がきたり、車がきたりした。  
木の枝(ぼや)をもってきた。  
値がきまると、馬ごとひっぱってもっていった。一駄(二つ把)買った。

午前十時ごろから夕方まで市がたった。  
馬が二十頭くらい来た。

売れない人は、ぼやを(知っている人に)あずけてから馬で帰って

いった。これを次の市のときに売った。

東村方面のお客が多かった。

非農家の人がおにも買った。農家の人は買わなかった。

風呂とかご飯たきにつかった。

品物にはいい悪いがあった。

薪の車を下からのぞいてみた。悪いの中に入れてあるもの（あん

こに入れてある）もあった。太げのを買った。

ぼやとわらを交換するうちもあった。

馬のえさにもっていった。ぼや一駄にわら一駄くらいであった。

ぼや市は、毎月たつた。

三月一日には、ひな市、金魚市がたつた。

元総社の明神様の鳥居の下にたつた。

三月の節供のときには、金魚を鉢にいれて、ひしもちをならべてか  
びつた。

暮の二十六日には、みかん市、松市がたつた。この日、正月の飾り  
ものを買った。（元総社）

立場 日高の貝沢か井野に、馬や荷物の中継所があつて、前橋と高  
崎の中間地点となつていた。（西箱田）

行商人 富山の葉屋。越中越後の反物屋が小さい車で来た。味噌、  
正油を売りにきたこともある。（総社大渡）

越後から毒消屋が来た。（元総社第二）

魚屋 石倉の吉井魚店が、干物にしたものを買いにいった。正月か  
祭の時ぐらい。ほっけやにしんだつた。

他の店も石倉には集つていたので、歩いて買いにいった。（総社大渡）  
お茶屋 お茶屋が、風呂敷に包んでお茶を売りに来た。

（石倉町上石倉）

市 十二月二十六日に暮の市がたつた。松の市ともみかん市とも言  
い、笠町に店が出た。（元総社第二）

一・六日はボヤ市がたち、燃料を売つた。一駄は六把であり、箱田  
までも届けた。（元総社第二）

三月のお節句の前に金掛（鑄掛）屋が来た。（元総社第二）

## 第六章 信 仰

### 一、家の神仏と信仰

屋敷内にまつられている神様 お正月のとき、おかざりをするところ。  
ろ。

井戸神：幣束をたてる。お松をたてる

便所神： 〃

つぼ山： 〃

稲荷様： 〃

お松は一本ずつ立てる。こへは正月のごちそうを供える。(下石倉)

家の中にもつる神(屋内神) 神棚、大神宮様、歳徳神様(これは一諸のお宮の中に祀つてある)、三宝荒神、ムラノ鎮守様のお札(これは、大神宮様のお宮とはべつ)、この中には、いろいろのお札が納められている。

床の間には、正月におそなえをあげる。えびす大黒：お勝手にまつつてある。一月二十日と十二月二日があびす講、このときは、表座敷にだして、束むきにもつる。

大神宮様より下に、南むきにもつっている家もある。

初穂は、おかまさまにあげる。かまどの上の梁と梁の間に、おしめをはつた。暮のおかざりのときに、おしめをはつた。かまがみさまと違った。初穂は、かまがみさまにあげた。

田植が終つたとき、苗をはじめて植えた田から三株とつてきて、よ

く洗つて、おかまさまの下にあげておいた。なえはあとで捨てた。  
三宝荒神様を、神棚でなく、ながしの棚にもつるうちもある。

(下石倉)

神棚は、チャノマに東向きか南向きにつくつてある。南向きの家が多い。

ここに大神宮様を中心に、いろいろの神様をまつつてある。

明神様のお札

年徳神

だるまさま

三宝荒神：お勝手にまつるうちもある。えびす大黒：もとはお勝手にまつつた。床の間には、皇太神宮様の掛軸をかざつておく。

お勝手には、かまがみさまをまつる。稲の初穂は、ながしの近くにさげた。これは、かまがみさまにあげるといふ人もある。初刈りのとき、よくできた穂をえらんでとつてきて供える(穂を下にして株ごとさげておく)。

台所の小黒柱のところに、正月のおかざりをした。オサナブリのとき、小黒柱の近くに供え物をした。

天道様は、縁側の真中の柱のところにまつつた。そこに正月のおかざりをした。

馬の神様のことは、おそうでんさまといった。

かいこの神様は、おしらさまといった。(西箱田)

**井戸神** あつげにあたつたときには、菅笠をかぶせて、その上から水をかけてやる。そうすれば治るといった。

めかごができたときは、ふるいを半分井戸神様に見せて、治ったら全部見せるから治してくれとおねがいをした。

井戸がえは、水の少ない三月頃にした。近所の人が、二、三軒共同でした。かえたあと、井戸がえをした近所の水をもらってきて、井戸の中に入れた。これは、呼び水だという。水がでるようにそのようにした。

井戸がえしたあと、塩をまいたり、酒を注いで清めたりした。

井戸がえをしてから、水がたまるまで待つていた。七日間くらいでないうちもあつた。

井戸の中には、魚をいれた、井戸の中のボウフラを食うという。

井戸をつぶすときには、竹ざおに節を抜いたのをたてた。「めくら井戸」にするなといった。(西箱田)

**便所神** 正月飾りをした。

お七夜るとき、あかんぼうをつれて、うちの便所と近所二軒の便所をまわつた。おばあさんがつれていって、おさごをあげておまいりしてきた。

便所のそばには、ナンテンの木を植える。難をのがれるといった。

むかし、あるうちのおかみさんが便所へ入つたら、へびがおかみさんたをためて(ねらつて)いたという。それをそのうちのねこがへびにとびついて、おかみさんを助けたというはなしがある。(西箱田)

**馬屋の神** 馬頭さまの絵や、高井の観音さまの絵馬をかけておいた。

(総社新田)

**屋敷の神** 屋敷の中にまつてある神様に、井戸神、便所神、庭の神

正月のおかざりをするところに、井戸神、つぼ山、便所神、物置。狼田彦を屋敷内にまつるうちもある。これは三隣亡除けといった。

(西箱田)

**屋敷の中の神** 庭の北西にイナリさまとキヌガサさまをまつてい

る。イナリさまは十二月の初午↓一日におまつりをし、赤飯にお頭付をおそなえをしている。

灯明をあげておそなえしたあと、後を見ないで帰る。おみぐで少し食べる。

子供が下げたが、さがつた方がいいという。(西箱田)

**家の中の神仏** 神棚に 金毘羅、天照皇大神宮、三亡荒神、ダルマなどをあげた。

おそなえは、井戸、かまど、大神宮、お勝手にし、おしめは、馬小屋、倉、物置、便所にした。

便所の神さまは、きれいずきの神さまだという。きれいにすると、下の病気にならない、安産になる、きりよのいい子が生まれるという。

厄年の人が、厄がこないように、便所の中で食べ物を食べるまねをした。

お便所にお盆の時に花を買ってきて、あげた。(稻荷新田)

**屋敷神** 屋敷神は稻荷様である。

むかしは、わらのお宮をつくつたが、今は、石宮が大部分である。屋敷神を移動するときには、屋敷神様のまつてあるところの土をもつていく、土をもつていって、その上にお宮をたてた。

屋敷神のまつりは、家によつてちがう、鎌田和夫さんのところは、十一月二十八日。

十一月十五日にまつる家が多い。

齊藤家は、十一月の午の日という。午の日ならいつでもいいといったが、今は十五日にしている。

屋敷まつりのときの供え物は赤飯とかしらつき(イワシ二匹)。半紙を二つ折りにして、赤飯を稲荷様の近くにあげて、手前にイワシをおく。水もあげる。あかりは、あげたり、あげなかったり。

赤飯を、稲荷様にあげたあと、そこでおてのこぼで赤飯をいただきたい。赤飯は重箱でもっていつてあげた。

きりはぎは、前日にやっておく、しめをはる。なわをなつて、しめなわとし、それに四つのおんべろをさげる。これはその晩にしたこと。

稲荷様に供え物をしてから、うしろをふりむかないで帰ってくる。

供え物がさげてないと、わるいといった。つぐ日、稲荷様のところへ行ってみた。むかしは、さげてないと、やりなおし(まつりなおし)をしたという。(下石倉)

各家庭では、屋敷神として、稲荷様をまつっている。

屋敷神は、屋敷のイヌイの方角(ハルナズミともいう)にまつている。(西箱田)

古屋敷に入った場合は、そこに入った人は、古屋敷の屋敷神をうけついでまつる。

新しく屋敷をつくった場合は、神主さんにおはらいをしてもらつてからまつる。

このことは、地祭りをしたときの祭場にたてた四本の竹(ご幣束)をもつていつてまつりこむ。

屋敷神のことは、この辺では、屋敷稲荷といっている。

このまつりの日は、家によってちがう。

梅山家は、十二月一日

飯野家、中島家は十一月二十八日。

もとは、十二月の初午の日にやっていたがこれでは日がきまらないので、十二月一日ときめた。

まつりの当日が都合が悪いときは、その翌日にまつった。

まつりの当日には、わらのおかりやをつくった。これは、毎年つくりかえた。

柱は竹、屋根などは新わらでつくった。稲荷様とはべつに、屋敷神として八幡様をまつっている家がある。梅山祐吉さんのところである。

屋敷神は、それぞれの家で、屋敷のイヌイの方角にまつる。屋敷まつりのときの供え物は次のおりである。

いわしのおかしらつき(さんまでも可)が二匹、赤飯、あぶらげとしんぜることもある。中央に赤飯、はじに、いわしをしんぜる。

供え物をするときは、うちの者が一諸にいつて、おまいりをして、おてのこぶをもらつて帰ってくる。帰ってくるときうしろをふりむいてはいけないといった。

つぎの朝、稲荷様のところへ行ってみて、供えた物がなくなつてい

れば、稲荷様に手をつけてもらったものとしてよいという。手がつけなければ、つぐ日やりなおしをした。

屋敷神のおまつりのほかに、屋敷神におまいりする機会はずぎのとお

り。嫁に行くとき、嫁の仕度ができるとおまいりした。

嫁がきたときおまいりする。

ここでは、屋敷神のことを、ウジガミとはいわない。

ここには、同類の神はない。(小相木)

屋敷神様は稲荷様である、屋敷のいぬいのすみにまつつてある。

十二月一日が屋敷神様のおまつり。もと、十二月の初午の日にま

つった人もあつたが、今は十二月一日になった。

もとは、オカリヤをまい年つくりかえた。このときは、おんべろを切つてさげた。

このとき供えるものは、赤飯とかしらつき（イワシなど、二匹）

稲荷様の前で赤飯をすこし食べてきた。おまつりをしてから夕飯を食べた。

なお、供えたものは、さげられるほうがいいといった。

よそんちのをさげにいったりした。（下新田）

屋敷神のまつりは十二月一日。ふつうは一日だけだが、時には、十五日にまつる場合もある。

ここでは、屋敷神は、火伏せの神という。（青梨子前原）

青梨子の、関根、田村、桜井の三姓は関ヶ原の落人という。

関根うまのすけという人がもつてきた稲荷様を天神様へまつりこんだという。

桜井は十二月の初午の日が屋敷神のまつりの日、関根は十二月二十三日。

今は、これを十二月十三日に統一した。稲荷まつりの日には、よそへ出るなどといった。稲荷様に供え物をしたら、うしろをふりむくなどといった。ふりむくと、稲荷様が供え物に手をつけなはいといった。

関根家では、稲荷様のまつりの日が、先祖様の供養まつりの日ともなっている。

お宮はわらでおかりやをつくつた。今は石宮、屋敷のイヌイの方角にまつる。

ぐしもちのかわりに、豆腐を四角に切つてしんぜる。ほかに、いものぎくに、しらあえなど精進料理をあげた。赤飯もあげる。お灯明は火打石で口火をきる。半紙を口にくわえてやった。（青梨子）

小川家の屋敷神は、稲荷様と石宮、

稲荷祭りは十二月一日。

供え物は、赤飯といわし二匹。もう一つの石宮には、いわしはしんぜない。赤飯だけ供える。

供える者は主人、稲荷様に供えたあと、お宮の前で、家族が一諸に、おてのこぼで赤飯を食べてくる。

供え物をして帰るときは、うしろをふりかえつてはいけないという。

稲荷祭りのあと、稲荷様のところに行つてみて、供え物がさげてない場合には、十五日に祭りなおしをしなければならぬというが、そういうことは、滅多にない。（総社町新田）

稲荷祭り 豆腐は稲荷祭りのとき、ごし餅の代りにあげる。ひらべったい、マッチ箱くらいの大きさに切る（五分に一寸くらいの大きさ）。

むかしは、稲荷様のお宮を、新わらをすぐつてつくつた。お宮のことは、オカリヤといった。オカリヤを新しく棟をつけてつくつたので、ごし餅をあげた。

稲荷まつりのときには、このほうに、あぶらげと、いわしのおかしらつき（二匹）を赤飯とあげた。

おんべろをつくつて、棟にさしておがんだ。棟上げのお祝いといった。

なお、稲荷様のお宮のわきに石がおいてある。それも稲荷様と一緒にまつつた。それにはとくに名前はない。石の前におんべろをあげるだけ。供え物は赤飯だけ。

稲荷祭りは、十一月に入つてはじめての午の日、しかし、この辺は、そのころはムギまきでいそがしいので、あたり日に稲荷様をまつれなかつた。それで、町内の申しあわせによつて、稲荷祭りは十一月十五日ときめた。（元総社）

屋敷の稲荷様は、屋敷のイヌイの方角に土もりをして、その上に新  
わらでお宮をつくった。わらはは、稲荷様のオカリヤ用というので、稲  
を刈ったときに、あらかじめ分けておいた。

柱は新竹をつかった。

片屋根のお宮をつくった。中段に棚をつくって、そこにまきわらを  
のせた。

お宮をつくるのはそのうちの主人。

お宮のことは、オカリヤといった。

稲荷祭りのときに供えるのは、こわめし、いわし（おかしらつき、  
二匹）、おぎい、あぶらげ（一枚を三角に切る。三角に切ったのを二枚  
あげる）

おこわをしんせて、お宮のところで、オテノコボといって、おこわ  
を手にとつて、うちの者が食べた。

おまいりしたあとは、うしろをふりむいてはいけなないといつた。

また、稲荷様にあげたものが、さげられていないと、やりなおしを  
した。あとでおまつりをやりなおした。

○屋敷の稲荷様におまいりする機会としては、次のような場合がある。

- ・子供が生まれたとき、オボヤキのとき
- ・そのうちの娘が嫁に行くとき
- ・嫁をもらったとき嫁さんがおまいりする
- ・長い間旅行をするとき
- ・むかしは、出征するときもおまいりした
- ・子供の名前は、お稲荷様に二つ三つ候補の名をあげておいて、それ  
をひいてきめた。あかんぼうの兄などがひいた。
- ・小さい子がひいた。
- ・冬至の朝、稲荷様の屋根に水をかける。こうすると、ひごと（火事）

にあわなないといつた。

・稲荷様は日向に出すなといつた。稲荷様が日向にでるといふのは、  
そのうちの身上が終るといふことである。（西箱田）

屋敷の稲荷まつりは、十二月十五日にした。

むかしは、この日、わら宮をつくりかえた。

稲荷様にお供えするものは、赤飯とさかな（イワシ二匹）。

このほかに、網笠様、猿田彦、うしろのうち（無住）の稲荷様と四  
つのお宮がある。ここへも、おこわをあげた。

おこわは、重箱に入れてもって行って紙をしいて、さかなと一緒に  
お供えした。

家族の者が一緒に行つて、おがんで、稲荷様の前で、わらをしいて  
すわつて、主人公が、おこわを家族の者にわけてやった。それは、お  
てのこぼといつた。このおてのこぼのおこわを食べてからうちへ入つ  
た。（食べる時、またおがんで帰つてきた）。かえると、またおがんで  
帰つてきた）。かえるときは、うしろをふりむくなといつた。

お供えしたものは、オトウカサマが食べてくれるといつた。翌朝行つ  
てみて、供えたものがなくなっているのでよいといつた。これを、オ  
サゲがあつたという。

なお、主人が、火打石で、お宮の屋根の上で、かちかちとうつた。

そのあとに供え物をした。

稲荷様のおまつりは一年に一回、町内一緒の日におまつりしている。

ご幣束は江田の神主さんがくばってくれる。

これは五つあげる。おしめは三つ買つて三カ所にさげた。（江田）

関根家の稲荷祭 青梨子の関根家の先祖は、石田三成方の家来で、  
関ヶ原の戦いのときの落人という。

先祖が、ここへおちのびてきて土着した日が、十二月二十三日であつ



たので、その日に、屋敷の稲荷まつりをしていたが、今は、十一月二十三日にしている。

稲荷様への供え物は、さかな類はあげない。

あぶらげ、豆腐、ぎくに、赤飯。

この日おかりやをつくりかえるので、ぐしもちの代りに、豆腐を四角に切つて、重箱に入れてもつていつて、ぐしにあげる。(青梨子)

稲荷様 稲荷様が日なたに出るといふことは、家がつぶれたということである。(総社新田)

おそなえ 毎月一日、十五日、二十八日に、宮中にごはんをそなえ、線香をあげる。(総社新田)

## 二、村の社寺と信仰

上新田の雷電様 四月八日が、雷電様のおまつり。このとき、おくつを求めてくる。つく年おまいりするとき、新しいくつを買つて、二つ納めてくる。借りるのは一つ。

借りてきたおくつは、床の間の南の梁のところにつるしておく。雷除けと思われるが、はつきりしない。(下石倉)

雷電様 初嫁は、四月八日に、姑様につれられて、上新田の雷電様におまいりに行く。

わらじを一つ借りてきて、次におまいりに行くとき、二つにしてかえした。

わらじは、とぼ口につるしておいた。

かみなりよけという。(前箱田)

天神様 下石倉の神社は菅原神社で、進学の神様として信仰されている。

進学する子供とか親の参拜がある。(下石倉)

菅原神社 東箱田・西箱田の鎮守様であったが、昭和二十四年から、西箱田の鎮守様になった。

天神様といつてゐる。(西箱田)

諏訪様 八月二十七日が諏訪様の祭り、このときも相撲大会を開いたらしい。(西箱田)

神社 昔は中尾の天神にあつた飯玉神社だったが、今は、明神さまになつてゐる。

中尾の前中尾、天神、吹屋、原、金尾、高畑が、飯玉神社をまつてゐた。

祭日は九月十五日だった。(鳥羽西部)

鏡神社 女の神様なので、村から兵隊にとられる人がいなかった。

他の村から兵隊のがれの祈願にきた。

明治三十二か三年頃、始めて兵隊にとられた人がいてから、兵隊にとられるようになった。(江田)

稲荷神社 稲荷新田の鎮守さまで、初午と十月九日のオクンチがまつりだった。

元総社の長尾さんが、神主で来ている。

毎月一日に老人会が清掃をするが、近所の人もそうじをしている。お祝いにお赤飯を作つた時は、進ぜる。

日露戦争の時、丑の刻まわりをしていたところ、鉄砲をかついで兵隊のしたくをしたお稲荷さんの姿が見えた人がいるという。

今の建物は、理研にあつた神社の建物をもらつてきたものだ。戦争直後の話。

おそなえは、米に果物だった。  
一日に行くと、油揚とお赤飯があがつている。(稲荷新田)

王守神社 氏子は元総社大渡分から出た人であるが、総社分、元総社分のつきあいの人になっている。(総社大渡)



王守神社 (大渡)

元は南向きで、区画整理で東向きになった。まわりに池(西南)があった。道下のこの池の水をくんで飲ませると、お産が軽くなる。

お祭に進げる麻をうけて頭にまくと、お産が軽くなるという。

祭日は三月十五日と十月九日だった。サカキと麻をくれる。麻は輪にしてくれる。へその緒をしぼるためにくばった。

池が三つあったという話もある。

元は総社元総社分の両方で氏子になっていたが、合併の問題のからみで、ごたごたして、分かれるようになってしまった。

秋祭の時は、当番が寝とまりしている。まよなか十二時になるのをまって、赤飯を持っておまいりに来た。

一番になるのが誰かと競った。一番になると蚕が当たるといって競走した。(元総社大渡)

巢鳥神社 伝寿庵というお寺が元あったところ。(総社新田)

立石の諏訪神社 利根川の川欠けで、今の所に移した。(総社新田)

ムラの鎮守様 小相木の神社は富士浅間神社。

これを土地の人は、ウジガミサマ、チンジュサマとよんでいる。ここへは次のようなおまいりをする。

ムラの娘が嫁に行くとき。

このムラへ嫁にきたとき。

あかんぼうがお七夜るとき、お七夜まいりをする。

むかしは出征兵士がおまいりをした。

長旅に出かけるとき、道中の安全を祈っておまいりする。(小相木)

飯玉神社の祭 三月二十五日と十月九日が飯玉神社のお祭り、十月

のお祭りはオクンチという。

飯玉様は、西箱田と中箱田の双方にある。その位置が、西箱田の飯

玉様は、中箱田にあり、中箱田の飯玉様は西箱田にある。地域外に祀っていることになる。

このように、ムラから離れたところに祀っているのは、よそから嫁がきたときに、嫁さんを見てもらうためという。道中をして嫁さんをムラの人に見せるためという。

嫁に行くときにも、嫁に来たときにも飯玉様におまいりする。

伊勢参りをする人は、飯玉様の境内にオカリヤをつくって、そこから出発した。帰ってくると、小屋に入ってから、小屋に火をつけて燃やした。

出かけるときは、水盃をかわしてでかけた。

オクンチのときには、ムラの人は早朝に赤飯をあげにきた。一番乗りを競った。早くおまいりにくるほど、ご利益があるといった。

このとき、子供たちは、神社に泊った。祭りの世話人の人も一緒に泊った。天神様るときも、祭り世話人が一緒に泊って、子供たちの世話をしてくれた。

嫁にきた人は、うちの姑さんがつれてウブスナ様(飯玉様)へおまいりにきた。オサゴをもつてきて、おまいりした。

子供が生まれたときに、オボヤのときに、姑と嫁があかんぼうをつれておまいりにきた。赤飯をあげた。

天神様にも、嫁さんも赤ん坊もおまわりをした。

西箱田の飯玉様まで一・五キロほどの道のりがあり、中箱田の飯玉様に一キロほどの道のりがあった。田の中を歩いた。

西箱田の俳人、石原麦雷の句に

朝起きて東を見れば雨の産土

というのがある。元日の句という。(西箱田)

八幡様 八幡様のおまつりは、三月十五日、この日、おまつりにくる人は、おこわとおさい銭をあげた。

子供には、お菓子をつけてやった。(西箱田)

前箱田の鎮守様 鎮守様は稻荷様、十月九日がオクンチ、

むかしは、八日の晩に、子供たちがオコモリをした。泊ったのは、小四から高等科二年まで、兄弟がいても参加できた。布団をかついでいて泊った。

まつりのときには、世話人が神社にのほりをたてた。

とうろうをたてた。毎年とうろうをはりかえた。とうろうには、絵とか字をかけた。世話人がでて世話をした。とうろうは、参道のかどにたてた。むかしは、石油ランプであった。

元総社の総社神社から神主がきて、七日か八日に祭典を行う。

祭世話人は区長と評議員が兼ねた。

当日には行事はない。

九日の早朝、ムラの人が赤飯をふかして、神社へあげに行った。泊っている子供をおこして、おみごくだといって、わけてやった。

赤飯をあげるのが早いと、いいことがあるといった。競って早くあげにいった。

ここでは、おたきあげの行事はなかった。

春まつりは、三月二十五日、とくに行事はない。神社にのほりをた

てる程度。(前箱田)

井戸八幡 青梨子の八幡というところに、井戸八幡がまつられている。もとは無格社、一部の人がまつっている。

この井戸には、白蛇がすんでいるという。この井戸をのぞいてみると、目がつぶれるといった。

むかし、たつまきで穴があいたという。

水がたまっていて、この水を目につけると眼病が治るといった。

(青梨子町)

熊谷稻荷 元々水天宮があり、その場所に熊谷稻荷を勧請した。



熊谷稲荷 (総社 新田)

社は光巖寺の日枝神社を持つてきた。廃仏しやくの時一晚の内に新田でかいで持つてきた。社は方建造りという、一間ま四角である。

今ある碑は、遠見山の上にあったものを持つてきた。(総社新田)

桜が丘の大神宮 元、桜が丘にあったが、社殿を紅雲町の神明宮に売ってしまった。

御神体には、天照皇大神宮、安政三辰年六月吉祥日、当所世話人がある。

円墳の上に社が立っていた。(桜が丘)

白山さま 六月十五日と十月九日が祭日。今は七月十五日の農休みにあわせて日を変え、また日曜日にするようになった。(桜が丘)

神社 巢鳥づきあいをしていた。巢鳥神社と絹笠さまがあった。春

は四月十五日、秋は十月九日に祭をした。春が大祭だった。昔は十月十九日だった。

お札を配り、ハケやザルをおみくじで分けた。(総社大渡)

七観音八薬師 元総社には、七観音八薬師がある。(元総社)

神社の行事 新年祭

節分

春祭り

麦祭り

オクンチ(下石倉)

神主 熊谷稻荷の名烏神社は隠密だったともいう。(総社新田)

世話人 大神様(粟島神社)の世話人一人、明神様の世話人一人の計二人の世話人がいる。土地の人で、すいせんで選出する。お札などを配る。(鍛冶町)

氏子 鍛冶町の者は、天王様の氏子で、大神宮様(粟島神社)の氏子で、そして明神様(総社神社)の氏子である。三重に氏子になっているわけである(鍛冶町)

のぼり旗 秋のまつりに、ヒノ木の柱につけた。「奉納」と書いてあり、九月二十九日から二三日あげた。(元総社大渡)

寺 下新田の地藏さまのところは、利根向こうに寺があり、大門が下新田にのこると言う。(小相木)

烏羽西部の大部分は大福寺で、徳蔵寺へ行っている人もいる。

(烏羽西部)

富沢は光巖寺、小野里は徳蔵寺になっている。江田の長栄寺は光巖寺の末だが、無住でだん家はいいない。

尼さんが住んでいて託はつにまわったこともある。(江田)

光巖寺が十八軒で、釈迦尊寺が少し、林倉寺、昌楽寺は少ない。

(総社大渡)

だん家 常円寺が、西箱田のほとんどの寺になっているが、石原だけは東箱田といっしょになっている。

常円寺の世話人は、長井家から三人、太田家から一人、前箱田、八木家から一人入っている。

常円寺の本寺は、昌楽寺である。庫裡が焼けおちてしまった。

(西箱田)

獅子観音 獅子を江戸時代末に使わなくなり、もやして埋めてしまいい、そこに観音を立てた。(上青梨子)

三大仏 七月二十三日が縁日。(元総社阿弥陀寺)

道祖神 正月十四日にやった。子どもが一軒一軒ムラの家をまわって金を集めた。それを「ニンベツ」を集めるといった。秋から茅などを刈って用意しておき、竹などもあらかじめ用意しておいた。門松が七日をすぎると家の前に出されているので、それを拾い集め、ついで、十三日のオカザリカエで飾り物がいろいろ出るのをそれを集め、夜ひっぱりまわして集めておいて、小屋に積んで火をかけた。(鍛冶町)

天王様 天王様のまつりは、七月十五日。

キュウリのはつもんは、天王様にしんぜた。伝染病にかからないといった。(江田)

七月二十一日

明神様の裏に、各町の天王様(石宮)が祀られている。そこへ供え物をする。

そこへ代表がおまいりしてきて、そのあと、公会堂でご神酒をいただく。

七月二十一日は、祭典用具の土用干し、明神様の大祭典のときの屋台道具を干した。大祭典は大豊作のときにやる。(元総社阿弥陀寺)

七月十五日が天王様のお祭り。

この日、子供たちは、天王様の境内で土俵をつくって相撲をとった。利根川までリヤカーをひいて行って、砂利をとってきて、土俵をつくった。土俵のことは、辻といった(相撲辻)。

砂を盛って、土俵のかわりに、わらの束をまわりに埋めた。

小学生が中心で、青年も参加した。

勝ち抜き戦だった。行司は、相撲の好きな人がつとめてくれた。

賞品としては、鉛筆とか帳面がでた。ムラノ祭り番の人が世話をした。土俵をつくってくれた。

相撲は、東西の対抗戦とか、五人抜きなどがあつた。年齢を考慮して組合わせをつくった。(西箱田)

県道端に石宮がある。毎年七月十三日にまつる。十三日から十六日は農休みで、その初日にまつわるわけである。とうろうに灯をともし、きゅうり、なすを進げる。天王様は農作物の神であるという。この日に村人がおまいりする。青年会の役員が中心になってまつる。(鍛冶町)

七月二十一日が天王まつり、土用干しをしたあとにする。総社神社からご幣束をもらってきて、各町内の天王様(石宮)にかざって、おみきをあげ、おまいりする。

殿小路はべつところにあるが、ほかの町内の天王様は、総社神社の境内にまつられている。(石宮)

キウリやナスのはつもんは天王様におげてから食べた。(元総社)天王様のおまつりは七月二十一日、子供が寄っておまつりをした。

(江田町)

尾張津島の天王様を勧請。宵祭りは七月十二日。今でも毎戸灯籠を作る。

よそは十四日から農休みであるが、粟島は十三日から農休みとなる。

金毘羅様 毎月高崎の金毘羅様へお参りをする。(総社町粟島)

十二門ハ遙拝殿 お伊勢様を拝む時に、そこから伊勢へ向つて拝む。伊勢からは御師が来ている。問屋の曾我五郎兵衛宅が伊勢の御師の宿となつた。(総社町粟島)

出口の地藏様 子育て地藏ともいい、子どもの神であるという。霊験あらたかで、大きなお腹をした人がおまいりに来る。子どもが川流れをしても、地藏様のおかげで、亡くなった者がいない。八月二十三日がまつりで、青年会が中心になってまつる。公民館の前で盆踊りをやる。サントウ(香具師)が出る。サントウとは三等店の意であるという。昔は地藏様を僧が拝み、護摩をたいたこともあつた。地藏様に祈つたら足が具合がよくなつたので旗をあげた人もいる。オサイセンも最近はずいぶんあがるが、昔はあがらずに、役員が出てまかなくなつたこともあつた。ハナが出るのと紙に書いて張り出す。県道は交通止めになりちようちんがとる。この日に限つて雨が降る。それまで晴れていても、急にくもつてきて、雨になる。それでぬれ地藏の名をもつ。

(鍛冶町)

地藏まつり もとは、七月二十四日から八月二十四日まで、一か月間やった。

だんだんすたれて、八月一日から七日までとするようになった。やめになつた。

この間、一日のうちに、ムラ中をまわつた(五十七、八軒)

けえど先までいくと、うちの人ができて、地藏様をおいた。むかしはひきわりとか米をあげてくれた。また、かねを三銭とか五銭くれた。

和讃が十五くらいあつた。

地藏様のこしは、子供が二人でかついだ。交代でかついだ。

和讃は道中でも唱えた。

うちへ行くとやった。うちの人がおがんでいるあいだ、子供たちが和讃をとなえていた。

「うたあげ」といって、はじめ一人が一節をとなえると、ほかのものがそれに唱和してうたった。

たとえば、一人のものがはじめて、

「しらはと」といえば、そのあと、ほかのものが、「しらはと」とうたって、あとをつづけてうたう。

「きみようちようらい、しらはとが、」とはじめていう。そのあと、「門のとびらにすをかけて、門のとびらにすをかけて……」

とつづけてうたうやり方。

地蔵まつりに参加したのは、小学校三年以上の男の子。

兄弟が一人でも参加していると、あとのものは参加できなかつた。

地蔵つ子には一軒一人しかなれなかつた。(次男以下は参加できず)

宿は世話人のうち、蚕室とか土蔵のあるうちをえらんだ。

地蔵様がムラをまわつてくると、宿に地蔵様を泊めた。かつぎ地蔵をおいてもじやまにならないところにおいた。

地蔵様をかつぐのは、朝早くから(五時ごろ)、半日くらいかついだ。

夜は、六時から八時ごろまでやった。

地蔵様は、道をついでまわつた。

地蔵様をかついでまわる期間は、明治の終るころまでは一カ月間、かいこを飼うようになってからは一週間になった。

地蔵様のまつりは、子供が丈夫になるように、子供の健康を祈つた。地蔵様は、ふだんは、もと長栄寺というお寺のお堂に安置しておく、

そこにはむかし尼さんがいた。そのあと農家の手伝いをしていた人が住んでいたが、その人がなくなつてから無住になつたところ。寺をこ

わしたあとお堂をつくつて、そこへ地蔵様を安置しておく。(江田)

地蔵様 今地蔵様だけのおまつりはないが、もとは、三月の彼岸の入りの日と、七月二十四日にまつた。石のお宮である。

今では、二夜様と一緒にまつっている。

女衆が念仏をあげている。

女の神様として信心されている。(下石倉)

子供のときに地蔵様をかついでまわつた。おみこしのようなものであつた。

一軒一軒まわつてあつた。

大正九年に燃えてしまった。

燃ける前は、みこしに入れてかついであつたが、焼けてからは、

抱いてあつた。

小学校の四・五年生がかついだ。六年生は親方だったのでかつがなかつた。

一軒一軒まわつて、おさいせんとおさごをもらった。

夕方と夕飯を食べてからまわつた。

八月二十四日から七日間、八月一杯まわつた。

九月一日に、まんじゅうを買つて仲間に分けた。合日をする、ムラ中の子供がまんじゅうをもらいにきた。

最後のうちが宿になつた。宿は希望者がつとめた。そのうちの台所に地蔵様を安置して、供え物をした。翌日はそのうちからまわりはじめた。

ひきわりもらいをはじめにした。袋をもってまわつた。それは昼間のうち。

そのあと、地蔵様がまわつた。

まわるとき、和讃を唱えた。

きみようちようらい十七が  
ことしはじめて田を植えて  
しかもその田のできのよさ

丈が七尺 穂が五尺  
とよなんまいだ

毎日、同じことをくりかえした。

地蔵様はお寺にあり、一番ははじめにお堂からかつぎだした。  
その晩は宿に泊めた。

つぐ日は、宿からまわりはじめた。

最後は、お寺へおさめた。

昼間まわって、まわりきれないので、夜まわることになる。

ひきわりもらいは、べつの人が先にもらつてあるいた。このひきわ

りは非農家の人が買つてくれた。そのおかねでまんじゅうを買つて、  
みんなでわけた。

おさいせんは、地蔵様がまわるときもらつた。

地蔵様は二人でかついだ。ぼんてんがわりにかついだ。かついだの  
は男の子だけ。

地蔵様は、まわる順序がきまつていた。

かたおしにまわつた。

太鼓をはたいて、うたいをうたいながらまわつた。指図は六年生、  
六年生が親方。

九月一日に、前橋へまんじゅうを買いに行った。荷車に大ざるを  
けて買いに行った。店は利根橋を渡つたところにあつた。一コ五厘だつ  
た。店はびしょうけという仇名のうちだつた。そのあと、しんちゃん  
まんじゅうになつた。しょうげつ堂といつた。まんじゅうは、二つづ  
らいつづ分けた。親方は、ひとしょうごくくらいといつた。

歌（和讃）はいくつもあつた。このうちの二つか三つうたつた。  
いちにこすずめ、ににつばめ、さんにうぐいすほととぎすとよなん  
まいだ。

歌は、天神様にあつまつて、二、三回練習した。

歌は、一軒のうちで五分くらい、大体一つの歌をうたうくらい。包  
み金のすくないうちは、早くきりあげた。包み金は一銭とか五厘、多  
いうちで二銭くらいだつた。大尽のうちほどすくなかつた。（西箱田）  
覚えて、明治時代からやつている。

期間は七月二十四日から八月二十四日までの一カ月間。

小学校六年生以上の男の子が、二人でみこしをかついだ。

小学校一年から、高等科二年までの小学生全部が参加した。兄がい  
ても参加。

親方：高等科二年生

こやかた：高等科一年生

親方は一人。世話役は、上級生全部がなつた。その中の一人が親方。  
地蔵様がまわつていくと、各家では、米とか麦とおかねをくれた。

袋と箱（おさいせん箱）をもつてあるいた。

米と麦はべつの袋の中に入れた。

むかしは、米をくれるうちはほとんどなかつた。麦（米）をめし食  
い茶碗でしゃくつてくれた。

米麦は売つてかねにした。おかねは子供で分けあつたり、お菓子を買  
つて分けたりした。

おかねは、ためておいて、最後の日にまんじゅうを買つて分けた。  
その数は年齢によつて、多少の差があつた。まんじゅうは、石倉の松  
月堂で買った。しょうぎをもつていつて買つてきた。

小相木は、もとは三十三、四戸だつた。

地藏様は、はじめの日と、しまいの日には全部まわった。中間でも一、二回は全戸まわった。

ふだんは、街道を行ったり来たりするだけ、宿は北と南で、まい晩交代した。

最初は、北の宿から南の宿までいって南に一晩泊る。つぐ日は逆に南から北へとかつぐ、まい晩、宿は交代した。

この形が一カ月続いた。

各戸をまわるときに、おさいせんとか穀物をくれた。はじめとしまいの二回、おさいせんをくれたが、その間にもくれる人もいた。

子供が生まれたうちでは、通りまで出て待っていて、おさいせんをあげてくれた。むかしは物をくれるほうが多かったが、最近になっておかねの方を多くくれるようになった。

その年にあかんぼう（男の子）の生まれたうちでは、地藏様に小さい布団をつくって奉納した。数は五枚。このとき、おかねもあげた。

おかねは、一軒一軒もらってあるいた。八月二十四日に、全部の子供にまんじゅうを分けてやった。

子供のでないうちにも、まんじゅうを六コずつくばった。親方はうんととった。小さくなると、数はすくなくなつた。差をつけたのである。

ムラの中をまわるときは、和讃を唱えながら、かねと太鼓をたたいた。

かねは三つ、太鼓は一つ。

これは、交代でたたいた。親方がいいつけた。かつぐのも交代。

地藏まつりは、地区の子供が健全に育つようというこゝとでやっている。

地藏様は子育て地藏。

なお、地藏様の宿は毎年同じうち、ふだんは、地藏様は、大徳寺であずかっている。（小相木）

### 子育て地藏和讃

#### 一 帰命頂来、榛名山、

三国一の山なれば、  
野の水重ねに、清くして、  
筆にも及ばぬ、つづり岩、

とうよう、南無阿弥陀。

#### 二 帰命頂来、七つ子が、

今年初めて、田を植えて、  
しかもその田の出来の良き、  
丈が七尺、穂が五尺、  
なんたら、駒にも八穂一駄、  
八穂で一石あるなれば、

これのおおせに、倉七つ、  
倉の番士は誰だれぞ、

一に小雀、二に燕、  
三にほへきよの、ほととぎす

とうよう、南無阿弥陀。

#### 三 帰命頂来、十七が、

今年初めて旅をして、

茶やの小縁に腰を掛け、

長崎キセルに、つめ煙草、

一吹きふいては、富士の山、

二吹きふいては、筑波山

三吹きふいては、八月の、



十五夜お月の、乱れ星、

とうよう、南無阿弥陀。(小相木)

地藏様の三角巾着は安産の守りであり、子供が生まれると三角巾着を奉納した。(江田)

地藏様(かつぎ地藏)と花火、道祖神が子供の祭りであった。(後家) 薬師さま 蛇穴山の上にあった。あの山は観音山とっていた。八月二十二日が祭日。

群馬郡三十三番の内の十六番札所になる。

高井観音が十五番になる。

奉安殿を作るので移した。今公民館の西の御魂神社の石垣は奉安殿のものだ。

丁間イナリの石段にも持つていつている。(総社栗島)

大徳寺境内に薬師様がまつられている。

縁日はとくにない。

目の神様として信仰されている。

目の悪い人がお願生をかける。治ったとき、お礼まいりにくるとおすがたをつくつて奉納する。また「め」の字をさかさに書いてお札にくる人もある。

もとは、木造のお堂の中に、石のお地藏様がいつぱい奉納されていた。(小相木)

上毛野田道が、蝦夷征伐のとき、井出で戦死した。そこでその遺体を蛇穴山に葬った。

そしたら、蝦夷がはびこつてきて、田道にいじめられたというので、田道の墓(蛇穴山古墳)をあげようとした。

そしたら、田道の霊が蛇になって出て蝦夷の軍勢に毒をふりかけた。蝦夷の軍勢の中で生き残ったのは十二人だったという。

その後、その蛇は風呂沼にすんでいた。土地の人は、その大蛇が悪いことをしてはいけないというので、一年に一回、娘を人身御供にあげていた。

その娘の霊をまつたのが薬師様という。

八月八日が縁日。(元総社)

化粧薬師のはなし むかし、じゃぶみが池(阿弥陀寺と総社町の境のところにある)に大蛇がすんでいた。

その大蛇は、人のうちへ行つては、美人の娘にいたずらをしていた。

人身御供を捧げればいたずらしないという約束をした。それで名主の娘などを人身御供にしていた。そういうことが何年も続いた。

ある年、十六の娘が自分が犠牲になるといつて人身御供になることになった。

その娘を白木の箱に入れてじゃぶみが池にほうりこんだ。すると、うずがまいてきて、大蛇がでてきて、その箱をひきこんだ。

しばらくすると、その娘に、薬師

如来の姿になって、大蛇の背中に乗つて出てきた。

「わたしはこういう姿になったからあきらめてくれ。これからは、

目の悪いのを治してやる」といつて、沼の上を西北の方へ歩いて姿を消したという。

それからは、縁切りさせたい人がおがむと利益があるという。仲人はこの前を通つてはいけないという。



化粧薬師 (元総社 阿弥陀寺)

縁切りをしたい人は、旦那にわからないように薬師様のおすがたを借りていつてこつそりおがめば願いがかなうという。お願生をかけて、お礼まいりをするときに傍返しにする。

また、薬師様にお白粉をぬってやる。

それで、縁切り薬師とも、化粧薬師ともいつている。

八月八日が縁日。この薬師様は、阿弥陀寺でまつっている。

(元総社阿弥陀寺)

薬師 沼田街道ぞいに、一町ごとにあつた。(上青梨子)

十月十二日が、墓地内にある薬師様のご縁日。

この薬師様は、目の神様という。

薬師様のところへ、小屋をつくつておまつりをした。小屋は九尺まっかくの大きさ。わらでかこんだ、竹でわくをつくつて、わらを一にぎりずつからげていつた。わらの丈三段くらいの高さの小屋であつた。屋根はべつたり。

薬師様のまつりは、子供が中心で、小屋も子供がつくつた。小屋には出入り口をつくる。中に穴を掘つて、そこで火をたいた。穴のまわりに坐つてあたる。

小屋は前日つくる。

当日は、夕方からおまいりに行く。

小屋はあとで燃してしまふ。夜の十時すぎのこと。

おまいりに行く人は、だんごをもつていつてあげる。

だんごは、うるちの粉でつくつたもの、だんごは八コ、わらのつとつこの中に入れてあげた。

だんごは、おまいりにきた人がいたでいていく。四コずつ、紙につつんでもらうていく。途中にわかいしゅうがまちぶせしていつて、だんごをとつてしまふので気をつけて、とられないようにした。

この行事に、むかしは、小学校三年生から、高等科二年までの小学生がやつたこと。

小屋は共同墓地の中につくつた。

薬師様のお姿のわきに小屋をつくつた。

むかしは、この薬師様に目をなおしてくれるようにおねがいつて、治ると、お礼に、小さい薬師様のお姿を石屋さんにつくつてもらつてあげた。

小屋は、わらと竹でつくつた。この材料は、ムラ内をもらいつた。

竹やぶのあるうちからは、竹をもつた。なわとわらをもつた。

子供たちが相談して、あすこんちへ行つたらなわをもらうべえ、あすこんちからは竹をもらうべえときめいつてもらつた。

おかねはもらわなかつた。

お札もださなかつた。(前箱田)

下石倉の薬師様は、毎月八日が縁日であるが、二月八日がいちばんにぎやかである。(下石倉)

大師のまつり 十月八日(よいまつり) 九日(本まつり)で、上、下へのぼりを立てた。

元は旧曆九月だつた。(総社粟島)

豊川稲荷 日赤の西北にあり、四月の蚕の前におまいりにいつた。稲荷の像を対で借りて倍にして返した。素焼きの像はねずみ除けになるといつた。(総社新田)



薬師さま (下石倉)

稲荷様 名鳥さんのおばあさんが稲荷様を信仰していた。野村ストア一の駐車場にあった稲荷様を、おばあさんが勧請した。一寸幅で高さ一尺程の御神体であった。裏の立見さんの家に太鼓が残っている。祈禱のあとでおばあさんの股をくぐらせた。(総社町立石)

馬頭観音 馬頭観音は、京都の妙楽寺の僧が青梨子に住んでおり、その人によって出来たものである。(総社町立石)

#### 慶長七壬寅年富士浅間勧請伝来記

(富) 土山領涌出孝安天皇より御宇中古の庚申まで三十四度年来二千歳に及ぶ、これ上野国郡馬郡の内小相木村の祖梅山左近・南雲太郎左衛門は代々富士山御師の宿坊となり無病安穩に樂語す

迷語にいわく我発心ありすなわち至心えん虚して応物さえぎること無し

しかるに吾神国に月日をいだくもの神総の慈眼を仰がばあるべからずや まさに富士御師の祖

左巴屋修理・梅山左近・南雲太郎左衛門不思儀に吉祥の社地を設け神助を受け御師つつしみ敬いて富士浅間を降臨す、勧請成なり伝来おわんぬ天神地祇八百万神を再拜し供物を捧げ義膳ゆえに神靈ますます輝き福徳円満郷家月々日々赫々たり 栄窮一々願ひ求めて四海泰平方歳如意宝珠君臣無量の寿康を得る

謹言

(富) 土御師左巴屋修理

享保十一丙午曆九月良辰日

重吉花押

### 三、講と俗信

参拝場所 迦葉山、観音山、少林山、青柳大師さまに歩いておまいりに行った。(元総社大渡)

おまいり 成田山、佐野薬師、黒瀧神社、迦葉山へ行った。

(総社新田)

榛名神社のお札 榛名まいりのお札を、ニワトコでつくったかゆかき捧にはさんで、苗間の水口にたてた。(青梨子)

榛名講 榛名神社の春のまつり(五月五日)のときに一晩泊りで行ってきた。むかしは歩いて行ってきた。

代参講で、代表が交代で行ってきた。お札をうけて講の人にくださった。(江田)

四月八日、榛名神社にのぼってお札をうけた。昔は一軒一軒配りにきた。

おこもりして、神楽を奉納した。お札を受けて下った。(上青梨子) 雨乞いのため、箕輪の方をまわって榛名神社へお参りに行った。御師の家に一泊し、次の朝、神楽をあげて帰ってきた。榛名講には埼玉

県の人も多く参加していた。(石倉町上石倉)

天神様 正月二十四日が天神様で、紗島にあるお宮に字を書いて奉納した。字がうまくなるといった。男女別々に、それぞれヤドを決めて、食べ物をいただき、夜遅くまで起きていたものだった。(鍛冶町)

天神講 三月二十四、二十五日の行事。二十四日の晩に、神社の拜殿に泊った。まつり番の人が世話をした。

小学生の1く6年生の男だけが参加した。兄弟でも参加できた。

二十四日に、夕飯を食べてから集った。その晩泊って、話をしたり、遊んだりした。

各家庭では二十五日の早朝から赤飯をしんげにくる。十二時をすぎるときた。それを、子供がいただいた。

子供たちは、朝解散して、学校へ行った。天神様をまつると、字が上手になるといった。(西箱田)

二月二十四日に男の小学生が天神講をした。三十人くらい参加した。講は子供たちがきめた。

米とおかねをもち寄せた、宿になった者はただであった。五日飯をつくって食べた。泊って、ご馳走を食べただけだ。(小相木)

二月二十五日が天神様の日、前の晩の二十四日に子供たちが宿をきめて天神まつりをした。

宿は交代、米とおかねをもつていって宿ですしなどをつくってもらった。

泊ったこともあった。つく朝は、前の晩ののこりを食べて解散した。(下新田)

二月二十四日の晩にした。一軒の家に集まり、スシを作って食べた。幹部が泊り、習字をして納めた。(稲荷新田)

薬師様の祭り 十月八日の夜。目の神様で、手前の水を目のところにつけると直る。おそなえはワラズトに赤飯を入れておいた。直ると小さい石仏を作っておいた。(稲荷新田)

十二月二十五日に子供が集まり、煮たきをして食べた。(小相木)

庚申様 近所の子を一つの家にあつめ講をした。(小相木)

富士講 十二〜三軒で作り、一週間〜十日をかけて歩いて行った。明治のころで年二回おさめに行った。(小相木)

天神さま 二月二十五日に、子供たちが、天神さまのまつりをした。六年の子の家の中に当番を決めた。一合ずつお米を持ちよって、ませごはんを作って食べた。(元総社大渡)

天神講 二月二十四日の晩に宿の家に泊りこんだ。習字を書いておさめると、字がうまくなるといった。

二十五日が、おまつりの日である。(稲荷新田)

秋葉様 秋葉様は火伏せの神、火事にならないようにおまつりをし

た。

自治会の役員がやっている。時期は十月十日のころ、秋葉様をまつてからは江田には火事がないという。

秋葉様は神社の公園の北の東側にある。(江田町)

静岡県へ行き、昔はお札を配った。(上青梨子)

浜松の在の秋葉神社の神をまつたもの。三尺坊という坊さんがいて、三尺も四尺もとんで野火や家の火を消したので、秋葉さまの生まれかわれだといって、秋葉大権現もまつた。火ぶせの神である。(総社新田)

十一月十七日が祭日。日待ちで、お米ををあつめ、お札を出した。お札は木版ですつた。

この日から夜まわりをやつた。四軒一組になり、家を借りて泊りがけでやつた。(総社新田)

総社粟島の秋葉講

番号	年	月	日	備考
一	文政	八年	霜月十八日	秋葉山日待帳
二	九年	霜月二十四日		秋葉山大権現講中覚帳
三	十年	霜月	吉日	秋葉山講中帳



秋葉講帳面 (総社 粟島)

四	十一年十一月 吉日	秋葉講人別帳	三〇	六年十一月 吉日	秋葉講連名帳
五	十二年 霜月良辰	秋葉山講之帳	三一	万延 元年十一月十八日	秋葉講集米帳
六	十三年 霜 良辰	秋葉山講中控帳	三二	文久 元年十一月十八日	〃
七	天保 二年十一月 吉日	〃	三三	二年十一月 日	秋葉講連名帳
八	四年 霜月 吉日	秋葉講之帳	三四	三年十一月 吉日	〃
九	五年十一月 吉日	秋葉講米取立帳	三五	元治 元年 霜月 吉日	秋葉講連名覺帳
一〇	七年 霜月 吉日	秋葉講連名並勘定帳	三六	慶応 元年十一月 吉日	秋葉大権現講中
一一	八年十一月十八日	秋葉講連名帳	三七	二年十一月 吉日	秋葉講中帳
一二	十年十一月 吉日	秋葉講連名覺帳	三八	四年十一月十八日 吉日	秋葉講連名控帳
一三	十二年十一月十八日	秋葉山講中控帳	三九	明治 二年十一月十八日 吉日	〃
一四	十三年 霜月 吉日	秋葉山大権現講中連名帳	四〇	三年 霜月 吉日	秋葉山講連名帳
一五	十四年 霜月 吉日	秋葉山講中連名帳	四一	四年十一月 吉日	秋葉講中帳
一六	十五歲 霜月良辰	秋葉山講帳	四二	五年十一月十八日 吉日	〃
一七	弘化 二年十一月 吉日	秋葉山講中控帳	四三	六年十一月十八日 吉日	〃
一八	三年十一月十五日	秋羽山御日待帳	四四	七年十一月 吉日	〃
一九	四年十一月	秋葉講連名之帳	四五	八年旧十一月十八日 吉日	〃
二〇	嘉永 元年 霜月 吉日	秋葉講連名帳	四六	十年十一月十八日 吉日	〃
二一	二年十一月 吉日	秋葉講判別控帳	四七	十一年十一月 吉日	秋葉講人別控帳
二二	二年十一月 吉日	秋葉講入用控帳	四八	十二年十一月 一日	秋葉講連簿
二三	三年 霜月	秋葉講米取立帳、入用帳	四九	十三年十一月二八日 吉日	秋葉講連名
二四	五年十一月十五日 吉日	秋葉山講中名面帳	五〇	十四年十二月 吉日	秋葉山講連名帳
二五	六年十一月 吉日	秋葉講中控帳	五一	十五年十二月 吉日	秋葉講集米帳
二六	嘉永 七年 霜月十八日 吉日	秋葉山連名帳	五二	十六年旧十一月十八日 吉日	秋葉講連名帳
二七	安政 二年十一月 吉日	秋葉山連名控帳	五三	十二月 吉日	秋葉講連名
二八	三年十一月十八日 吉日	秋葉大権現講連名帳	五四	十七年十一月十八日 吉日	秋葉講連名帳
二九	五年 霜月十八日 吉日	秋葉講集米帳		十八年十一月二八日 吉日	秋葉講連名帳

五五	八〇	十九年十二月十三日	〃	八二	元年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
五六	七九	二十年十二月十八日	〃	八三	二年	二月十八日	秋葉神社寄付帳
五七	七八	二十一年十二月十八日	〃	八四	二年	十月十八日	秋葉講連名帳
五八	七七	二十二年十二月 九日	秋葉講連名簿	八五	三年	十月十八日	〃
五九	七六	二十三年十一月十八日	秋葉講入用控帳	八六	四年	十月十八日	秋葉講日待連名控帳
六〇	七五	二十四年十一月十五日	秋葉講連名帳	八七	五年	十月十八日	〃
六一	七四	二十五年 十月十八日	秋葉講人名帳	八八	五年	二月十八日	〃
六二	七三	二十六年 十月一七日	秋葉講連名帳	八九	六年	十月十八日	秋葉講連名帳
六三	七二	二十七年十一月 四日	〃	九〇	七年	十月十八日	秋葉講日待連名控帳
六四	七一	二十八年 十月十八日	〃	九一	八年	十月十八日	〃
六五	七〇	二十九年 十月十八日	秋葉講日待連名帳	九二	九年	十月十八日	秋葉講日待連名控帳
六六	六九	三十年十一月十八日	秋葉講連名帳	九三	十年	十月十八日	〃
六七	六八	三十一年 十月十八日	〃	九四	十一年	十月十八日	〃
六八	六七	三十二年 十月二日	秋葉講日待連名帳	九五	十二年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
六九	六六	三十三年 十月十八日	秋葉講連名帳	九六	十三年	十月十八日	〃
七〇	六五	三十三年 十月十八日	秋葉講日待連名帳	九七	十四年	三月十二日	秋葉講移転祭
七一	六四	三十四年 十月十八日	秋葉講連名帳	九八	十四年	十月十八日	秋葉講日待
七二	六三	三十五年 十月十八日	〃	九九	十五年	二月十八日	〃
七三	六二	三十七年 十月十八日	〃	一〇〇	昭和 二年	十月十八日	秋葉講日待連名並入費帳
七四	六一	三十八年 十月十八日	〃	一〇一	二年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
七五	六〇	三十九年 十月十八日	〃	一〇二	三年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
七六	五九	四十年 十月十八日	秋葉講御日待帳	一〇三	三年	二月十八日	〃
七七	五八	四十一年 十月 吉日	〃	一〇四	四年	十月十八日	〃
七八	五七	四十二年 十月十八日	秋葉講連名帳	一〇五	四年	二月十八日	〃
七九	五六	四十三年 十月十八日	〃	一〇六	五年	十月十八日	〃
八〇	五五	四十四年 十月 定日	〃				

一〇七	五年	二月十八日	〃
一〇八	六年	十月十一日	〃
一〇九	七年	十月十四日	〃
一一〇	八年	十月十六日	〃
一一一	九年	十月 四日	〃
一一二	十年	十月十八日	〃
一一三	十一年	十月十八日	〃
一一四	十二年	十月十八日	〃
一一五	十三年	十月十八日	〃
一一六	十四年	十月十八日	〃
一一七	十五年	十月 吉日	祭典入費帳
一一八	十五年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
一一九	十六年	十月	区費取立
一二〇	十六年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
一二一	十七年	十月十八日	〃
一二二	十八年	十月十八日	町内割連名帳
一二三	十八年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
一二四	十九年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
一二五	十九年	十月 吉日	町内費受入控
一二六	二十年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
一二七	二十一年	十月十八日	〃
一二八	二十二年	十月十八日	〃
一二九	二十三年	十月十八日	〃
一三〇	二十三年	三月十五日	秋葉講日待人名帳
一三一	二十四年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
一三二	二十五年	十月十八日	〃

一三三	二六年	十月十八日	〃
一三四	二七年	十月十八日	〃
一三五	二八年	十月十八日	〃
一三六	二九年	十月十八日	〃
一三七	三十年	十月十八日	〃
一三八	三一年	十月十八日	〃
一三九	三二年	十月十八日	〃
一四〇	三三年	十月十八日	〃
一四一	三四年	十月十八日	〃
一四二	三五年	十月十八日	〃
一四三	三六年	十月十八日	〃
一四四	三七年	十月十八日	〃
一四五	三八年	十月十八日	〃
一四六	三九年	十月十八日	〃
一四七	四十年	十月十八日	〃
一四八	四一年	十月十八日	〃
一四九	四二年	十月十八日	〃
一五〇	四三年	十月十八日	〃
一五一	四四年	十月十八日	〃
一五二	四五年	十月十八日	〃
一五三	四六年	十月十八日	〃
一五四	四七年	十月十七日	〃
一五五	四八年	十月十八日	〃
一五六	四九年	十月十八日	〃
一五七	五十年	十月十八日	〃
一五八	五一年	十月十八日	秋葉講日待連名帳

一五九	五二年	十月十八日	〃
一六〇	五三年	十月十八日	〃
一六一	五四年	十月十八日	〃
一六二	五五年	十月十八日	〃
一六三	五六年	十月十八日	〃
一六四	五七年	十月十八日	〃
一六五	五八年	二月二七日	秋葉様新殿落成祝連名帳
一六六	五八年	十月十八日	秋葉講日待連名帳
一六七	五九年	十月十八日	〃
一六八	六十年	十月十八日	〃
一六九	六一年	十月十八日	〃
一七〇	六二年	十月十八日	〃

この一覧表のなかで注意しなくてはならない点を何点か記してみよう。

まずNo.1の文政八年には、組合中は、四五軒で、支出高は、六二六文になっている。支出内容は、油、味噌、豆腐、塩、などになっている。

No.48は、橋上中となっているが、これは、町の中央に橋が架かり、それを境に北を橋上、南を橋下と分けた事に依る。はしうえ、はししたという。

No.87は、臨時祭、戸神啓六となっている。これは、この年に二回火事があったため行なったものではないかという。

なお、新築の家は、宿になる事になっていた。昭和四十九年からは、公民館を宿にしている。

No.119、No.122、No.125で区費町内費を集めた帳簿が一緒に綴じられているが、これは、祭典の費用を集めたためである。ちなみにNo.122の昭和

十八年には、六九軒から二〇銭〜三〇円を集め総額一一九円一銭平均一円七二銭となっている。

支出内訳は、消防費に八七円四四銭、町内費に三一円五七銭となつて、消防費にかかる費用が大きい事が分かる。

No.52は、新暦十二月吉日と旧暦十一月十八日と併記されている。この前後の記載は、十一月と十二月があり、旧暦と新暦の記載が混じっているものと思われる。十一月の場合、旧暦で、十二月の場合は、旧暦の日取りを新暦におきかえたものだろう。

No.64からは、十月十八日が続く様になるが、これは、新暦のこの日に祭典日を決めたためと思われる。

なお、この書類を入れた箱は、越後の大工の手になるものである。この地に出稼ぎに来ていたという。町内の家に間借りして、仕事にしていたという。

墨書 大正参年拾月 越後国刈羽郡石地町 大工 西村団重郎 寄贈 (総社栗島)

オシラサマ 小正月にまい玉をつくって、オシラサマにあげた。オシラサマは、かいこの神様である。(西箱田)

八十八夜になると、おしらすまが雲に乗っておりてくるといった。

八十八夜には、おこもちをついて、神棚にあげた。

(青梨子)

蚕の神さま キヌガササマ。蚕がよくとれる。マユダマはこの神様をまつて



蚕神塔 (池端町)



あげる。

(元総社大渡)

絹笠さま 巢鳥の神社へまつてあり、四月十五日が祭日だった。かいこがよく当たった。(総社新田)

びんぐし山 イナリがあり、蚕があたった。八十八夜の五月三日頃。白狐があり借りてくる。あたると白狐を返し油揚げあげた。

今は飲食店の人が信仰している。(上青梨子)

二十二夜講 年に一回、講をやっている。一人一人鉦を持っている。

(東箱田後家)

二十二夜様 二月二十二日が祭日だが、毎月二十二日に公民館に集まっている。

安産の神様で、生まれる前におねがいに行き、生まれると、お礼に講中の人に念仏をあげてもらった。

ロウソクのもえのこりをもらうていき、お産の時に火をつけると、安産で生まれた。

淡嶋さまは、二十三日だったが、いそがしい時は、いっしょにやうてしまうこともあった。(鳥羽西部)

前箱田には、二十二夜様をやる集まりがあった。(西箱田)

講 二十二夜講があった。年配の女性がやっている。

二月二十二日の朝からやっている。元は二十一日からやっていた。袋をかついで、お散米やお金を受けてまわる。

すしを作り飲み食いした。二十一日にもらった米を洗い、石臼で粉にしてダンゴを作った。

ダンゴは、子供にふれさせて、おまいりにきた若い嫁さんにくれた。今はお菓子をくれた。

ロウソクをもらい、お産の時つけておくと安産になるという。おかげで、村内では、お産で障害の出た子はいない。

二十二夜様と淡嶋さまの掛け軸がある。

昼すぎ、仏像の前でひとしきり、念仏をする。(江田)

総社町の粟島神社の鳥居は西向きであり、鳥居の内側に伊勢の御師の遥拝所がある。木造で「遥拝殿」の匾額がある。(総社町粟島)

秋葉様(火伏せの神) 観音山の上にあつたものを、今は粟島神社

の境内に置く。祭日は十月十八日であるが、もとは十一月十八日であった。

昔は伍長を中心とした世話人がいた。家を新築したり、焼失後に再建した家が宿となり、その主人を宿主と呼んだ。庚申祭りは身内で行うが、秋葉講は一戸一名が必ず出席する村の全体行事で、隣組を順番に回った。

掛軸を懸け、線香を立てる。本宮には、繩を張り、灯明を上げ、お参りを済ませて宿に戻り酒を汲み交し、また夕食を共にし、話に花を咲かせる。(総社町粟島)

秋葉様を動かしたら(土台の石を売り払いボタモチにして食べてしまった)、大正十四年五月十三日に、大門の所から出火し、三十軒が焼けた。(総社町粟島)

庚申まつり 昔は四軒であったが、今は五軒一組となって祭る。掛軸が五本残存する。庚申様は作物の神様である。回り番で宿となり、軸前に線香を立てる。

代参講

三峯様 秩父 よそ(総社町植野)の講中に頼む。

お天狗様 多野郡日野

中の宮 妙義

伊勢講

十二社参り(戦争のとき)

こぶが原＝足尾 講の風習は希である。  
相馬講 講の風習は少いが、今も待っている人がいる。

(総社町粟島)

大師さま＝元三大師 お寺(光厳寺)にあった。  
薬師さま 目の神様

昭和三年頃は、観音講があり、お寺の入口にある馬の神を祀った。  
富沢山長栄寺には馬頭講があった。

伊勢講もあった。

講神様におしつぶされると、無理強いされることを言った。(江田)  
庚申待 十二月二十日過ぎに行なわれたが、戌・亥・酉・午の日は避けた。

絹笠様(女人講)があった。

天神待ち 一月二十四日に小学生が米二合を持ち寄り、手習い等をして泊り込んだ。(総社山王)

伊勢講・天神講・道祖神等がある。(後家)

二夜様の念仏 年寄りの人が二夜待をやっている。(江田)

三夜様 十日夜の前後あたり(十一月二十三日)にお三夜様があった。

この日は、餅をついて、お三夜様へおまいりに行った。

日高の西、原というところに、三夜様がまつってあった。ここへ夜おまいりに行った。(江田)

淡島様 毎月、三日、十三日、二十三日淡島様の日として、徳蔵寺の大門のところで念仏をした。おばあさんがあつまっていた。

夜の行事、わかいしゅうが遊びに行った。

おさいせんをあげておがんできた。

淡島様は、女の神様、安産の神様。(元総社)



淡島講の掛け軸 (総社 山王)

したらふやしてあげた。(上青梨子)

昔、年寄りが集まって念仏をやっていた。(元総社町第二)

金毘羅参り うちの裏の墓には、四国の金毘羅様へ、三十三回おまいりした人がいかにっている。

三十三回目るとき、金毘羅様の分霊をもらってきて、清里小の西の金毘羅山にまつってあったが、今は、天神様に合祀してある。

むかしの金毘羅参りは、乞食のようなもんだったという。道中、農家にただ泊めてもらって行ってきたという。

暮から正月にかけて行ってきた。

二年ごしのおまいりであった。(青梨子)

琴平さま 金沢氏でもっていた。ひようてんさまといった。文造という人は行者をしており、紋造という人は祈禱をした。

十日ごとで、九日の晩にやった。(総社新田)

フイトウサマ 八坂神社、道祖神があったところで、一字一石経がカメに入って出土した。今は王守神社に移した。(元総社大渡)

三峯講 十一月二十三日に集まり、くじで代表を決め、十二月四日に秩父へ行きお札を受けてきた。(上青梨子)

三峰講 三峰講の代参がでた。クジで行く人を決め、五人くらいで

正月三日、三月三日、十月九日が縁日で、正月が一番お参りの人が多かった。  
お産の神さままで、お札も配ったし、小さい腰まきがあり、借りていって、成就

一組になり、二日ばかりで行ってきた。(石倉町上石倉)

三日月豆腐 三日月のときには、豆腐を、三日月様に供えた。

豆腐を一丁買って、それを皿にのせてつぼ山とか、庭先の石の上に供えた。

さげてから、うちの中で食べた。

雲がなかったら、三日月様を見ろといった。三日月様がおたつていれば、物(米)の値段があがるといった。(元総社)

三日月様 三日月様のとき、豆腐をあげた。

縁側にしんぜた。

おんなしゅうがまつた。おんなしゅうのおまつりらしい。

三日月様が、たてにまつすぐにでると景気がよくなるといった。平にでると、景気が悪くなるといった。(江田)

三日月様が西の方へでたとき、きれいな三日月様がおたつていと、物の値段があがるといった。

横になると、物の値段が安定しているといった。

三日月様の日には、豆腐を買って、三日月様にあげた。

皿の上に豆腐をのせて、お月様の見えるところにあげた。つぼ山など、人のじゃまにならないところにあげた。

三日月様にあげた豆腐はさげてきて食べる。おみごとといって、たとえずこしでも食べた。(元総社)

三日月様のとき、豆腐の真中に紅をつけてあげた。うちの外で、お月様の見える高いところにあげた。(下石倉)

稲荷山 毎月、一日、十五日、二十八日、稲荷山古墳の上で、タイコをたたいて、おいのりをした。(総社新田)

地蔵 六部が来て泊った時、欲待したら、一体おいていった地蔵が、根岸宅にある。イボなど皮膚病にきくという。(総社新田)

あと念仏 野辺送りのあと、念仏を申す。これをあと念仏といった。

このとき、仏様に対して、血のつながっている者が(孫とか子)が、ひとりひとり水をかえてあげた。どんぶりなどを用意しておいて、念仏の区切りごとに新しい水を用意して、前の水をどんぶりにあげた。(江田)

百万遍念仏 七月十八日、集会所で行っている。むかしは、辻でやったので、辻念仏ともいう。

厄病を払うわけ。

小学校一、六年生と年寄りの人だけで行っている。

もとは、西と東の辻二カ所で行った。はじめは西の辻で行い、その次に東の辻で行った。

むしろを敷いてやった。

珠数をのの字にまわしている。

「ナンマイダ、アタオメダ」といいながらまわす。途中にふさがついでいて、それがまわつてくると、その人はおがんだ。

おわると、お菓子もらえた。

百万遍がすむと、八丁じめをたてた。(元総社阿弥陀寺)

むかし、寮があつて、そこにムラの年寄りの人があつまって、百万遍という行事をやつたという。数珠をまわした。

寮は間口七間、奥行四間のくず屋根の家だった。お堂の中には、本尊様がまつつてあつた。留守居の人が住んでいた。

この寮は大正年間にこわした。(下新田)

青年たちが、ジユズを持って村中を「ナンマイダ、ナンマイダ」といいながらまわつた。

土足で家の中まで上つた。にくまれている家は大変だった。神社からまわりはじめて、八丁メの所を通り村中をひとまわりま

わった。

ジュズの下をくぐった。

この時、顔にどろをぬつてもらうと病気にならない。(稲荷新田)

七月十六日に総社神社の前の問屋様に集つて、ナンマイダブツ百万遍と唱えて数珠玉まわしを行う百万遍念仏が行なわれた。家内安全と無病息災を祈るもので、およそ百五十年前頃から始まったとされ、かつては奉唱念仏百万遍衆疾消除祈所のお札を子供が各戸に配り歩いたという。戦後中断したが、昭和五十六年に復活した。(総社粟島)

文明元年(一四六九)年の記録が残る百万遍念仏がある。鉦と太鼓に合わせて倉仏を唱えるが、ナンマイダー カナメメダーと唱号が変わっている。(元総社阿弥陀寺)

天道念仏 チブスが出たのを契機に行なわれた。大世話人の家を宿としたが、後に日枝神社でも行なわれた。女人が中心であった。

子供を中心とし、七月十六日に大数珠を回しながら念仏を唱える。

またこの日に八丁鉦を行った。(総社町山王)

桐で出来た大数珠を回しながら、鉦・太鼓に合わせナンマイダー ナンマイダーと念仏を唱える。

次いで大数珠を二つ折にして、若者がこの数珠を持って村境を目指して走って行き、悪疫が村内に入るのを防いだ。途中、村人はこの数珠をくぐり無病息災・悪疫退散を願ったという。現在もこの風習は続く。(大友)

春と秋の彼岸の中日に天道念仏が行われる。(後家)

百万遍塔 阿弥陀寺の薬師様のところに、百万遍塔がまつてある。

この塔は、むかし、牛池川に流れてきたものという、川に沈んでいたのを拾いあげてまつたものという。

塔には、経文みたいな文字が書かれている。今、薬師様のところにまつてある。

おまつりは、七月十六日、この日、阿弥陀寺の人たちは、公民館にあつまつて百万遍の行事を行っている。(元総社)

薬師さまの祈願のことは

ナムヤクシ

ズリコウニヨライ

オンコロコロ

センダリマトウギソワカ

これを八回くりかえして、お祈りすると、願いがきくという。

(稲荷新田)

薬師さま 目の神さまで、願をかけて、かなえた人が小さいものをたくさんあげた。(総社大渡)

三隣亡 三隣亡をまつているうちは、三隣亡の日に、よその人に物をやると、倍になつて帰ってくるといった。

畑にパンとか餅などを埋める。それが相手(畑の持主)が知らないうちに腐ると、その土地が自分のものになるという。

あるうちで、三隣亡除けとして、うちの北側の一階のげの屋根の上に、北向きに猿田彦の石塔をたてておいたという。三隣亡をまつる家の方向に向けておいてあったという。(下石倉)

正月に「三隣亡」をまつる家がある。自・小作の関係で、隣りの栄えているのがあるとその家の街道すじに米・モチをうめておいた。

モチは音をさせずに夜中に作り、夜中に田におくこともあった。

トタバを置くこともあった。(小相木)

三隣亡を祭る家では、カワリモノを作ったときに人に沢山くれたり、他人の土地にこっそりそれを埋めたりする。そうするとその土地は、

三隣亡を祭る人に取られてしまう。三隣亡を防ぐには、埋めてあるものを早く見つけ出して焼いてしまえばよい。また、カワリモノをもらってしまったときは、三隣亡を祭る家の井戸に投げ込んでしまえばよい。この他、三隣亡除けの神様である青面金剛や猿田彦大神を、三隣亡を祭っていそうな方角へ向けて祭るとよい。(古市)

三隣亡よけ 三隣亡よけとして、猿田彦大神をまつた。猿田彦の碑を屋敷の鬼門の方角にたてた。(下新田)

天道念仏 お寺で、朝陽が出てから沈むまで、鉦をたたきながら、ナンマイダといった。

鉦はそれぞれが持つてきた。

お彼岸の中日、お盆にやつていた。(稲荷新田)

春、秋の彼岸に天道念仏を寺でした。年寄りがして子供にお菓子がでた。(石倉町上石倉)

### 一、三宝礼

一心頂礼 十方法界 常住三宝 (三遍)

### 二、念仏懺悔文

我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴  
從身語意之所生 一切我今皆懺悔

### 三、念仏開闢偈

光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨南無阿陀仏(早唱百遍)

### 四、なむあみだ

### 閻魔大王御名号

十王十鉢 なんまいだー (二十遍)

### 六、融通念仏

融通念仏 なむあみだ (二十遍)

### 七、光明真言

おん あぼきやー びーろしやな まか もだら まに はんどま  
じんばら はらばりたや うん (二十遍)

### 八、回向文

願以此功德 平等施一切  
同發菩提心 往生安樂國

### 九、三宝礼

一心頂礼 十方法界 常住三宝 (古市)

念仏 長老がやつた。新仏の四十九日にやつた。十三仏、十五十体、

マウスウ念仏だった。(総社新田)

### 真言

ガシヤク ショジョウウ

シヨワクゴウカイ

ユウムシトンジンシヨジョウウ

シンゴン シヨジョウウ

イツサイガ コンカイザンゲ

ガンニチクドウ ジヨドセイ

コクボウランシン ボウジョウアンラク (古市)

念仏講 古市の念仏講には、現在十一名入っている。不幸のあつた

場合は、火葬場から帰ってきた後で念仏を唱える。三十五日や四十九

日の位牌あげのときにも念仏を唱える。また、春秋の彼岸の中日には

天道念仏をやつた。(古市)

北向きの観音様 越後から、北向きの観音様がきた。

背中へ背負つてきた。

女衆がおまいりした。

米か麦を供えた。重いからというので、お金をあげた。(青梨子)

観音講 馬を飼っている人は観音講に入っていた。(石倉町上石倉)

御霊様 長尾家 御霊様は殿小路の長尾貞治さんの家の西隣にある。



御霊神社 (元総社)

御霊様の祭神は、村岡小五郎忠造と鎌倉権五郎景政。

長尾貞治さんのところで、社の世話をしている。祭りは十月十七日、

このときは、町の当番の人を二名呼ぶ。

御米田地が一町二反あった。明治九年までは無税地であった。

長尾家はおべつとうと呼ばれていた。

神宮寺であった。修験者であった。長尾家の四男が元総社にいて、長

男は白井城にいた。御霊様の裏に池があった。お堀みたいになっていた。この池に片目のふながいたという。

長尾一家では、このしろという魚は食べられないし、あしげの馬には乗れないという。

長尾家のもと村岡姓を名乗っていた。武蔵国に長尾郷というところがあった、そこを領地としてもらったので、長尾氏にかえたものという。

村岡姓を名乗っていたころ、村岡氏は江の島の弁天様を守り木尊にしていた。

その弁天様が、あし毛の馬に乗っていたので、あしげの馬に乗ってはいけないのだという。

また、長尾郷の郷の中に九つの井戸があった。一つの井戸の中にこのしろがすんでいたもので、このしろという魚を食べてはいけないのだという。(元総社殿小路)



千庚申 (元総社 御霊神社)

千庚申 殿小路の御霊様の境内に千庚申がある。これは、元総社の

人たちと、大友、石倉の人そのほかの人が協力してたてたものである。

万延三年三月に建立。

初庚申の日がおまつり。

殿小路の人がおまつりにきた人にお札を分けてやった。おぼしめしをもらってお札をやった。

庚申様は、おかいこの神様として信仰されている。(元総社殿小路) 道祖神の子供 一番上が小学洋六年で、おやがしらという、小屋がしらである。

その次が、小学校五年生で、めえがしらという。それ以下については、名前はない。ドンドンやきるときには、小屋のそばを通る人からは、へいがみをもらった。

「おつつあん、へいがみくんない」といつてもらった。おかねのことである。

一軒一軒まわってもらったかねのことは、人別といった。(青梨子前原)

庚申様 むかしの小百姓は、春になると(食糧が終ってしまつて)うどんとかさばが食えなくなつてしまつた。



庚申講の順 (鳥羽 西部)

ところが、お庚申に行けばうど  
ん、そばが食えるところだ。

この組では、お庚申の組は十  
軒であった。宿は、春が五回、秋  
が五回つとめた。一軒一回ずつの  
宿をした。

当日は、うどんとかそばをつく  
ってだした。大体そばをつくって  
だしてくれた。(青梨子)

あかんぼうが生まれて、うぶあ  
けにならないうちは、チブクをき  
ているというので、庚申講にでて

も、庚申様にそなえつけの箸はつかわないで、箸をとりかえてご馳走  
を食べた。(青梨子)

三月か四月の庚申の日にまつた。村中でまつっている。  
舞台を作つて囲舎芝居をしたこともある。

その日は、早く寝るものじゃない、バカになるといい、一軒から一  
人ずつ当番の家に集まり、ごちそうを食べた。

掛け軸をさげて、おまいりした。

旅の人の安全祈願と、生産物を守る意味で蚕のお札を作つた。小さ  
い手箕を配りお守りにした。

大豆をいったものに黒砂糖をまぶしたものを配つた。

十時ころまでやつた。(桜が丘)

庚申様は百姓の神様、近所のうちで組んで、庚申講をしていた。  
男衆だけが参加。

宿は交代でつとめた。参加者は米だけでもちよせた。まぜご飯をした。

必要なものは宿で負担した。

時期は冬場。(小相木)

庚申講は、この地区には二組あった。十四、十五人で一つの講をつ  
くっていた。うちうちでもべつの講に入っていた。庚申様は百姓の神  
様として信仰していた。

庚申講は秋一回やつた。

米を五合ずつあつめた。宿では魚の切身を生でだした。これにをう  
ちへもちかえつた。

庚申待のときはうどんを食つた。お高盛にもつてだした。いやだと  
いっても、お高盛にしてだした。はじめのうちは、ちよつとだした。  
飯であつた。

庚申待のときは、食えば食うほど豊作だといつた。

ごろ寝をしていた。

いっぱい食べて、これでよしましよといつてやめた。

「はなしは庚申さまの晩」といつた。

宿は交代であつた。

庚申様の掛け軸をさげておがんだ。

線香をあげた。酒はのまなかつた。



庚申の掛け軸 (総社 新田)

庚申講の仲間ばば  
らばらであつた(家  
のならばなど関係な  
かつた)。(江田)

年に一回、秋にや  
つた。新米のとれた  
あと米がたくさんと  
れるようにいつた。



百庚申（上青梨子）

米をてんこ盛りにして食べさせられた。

くじをひいて、その年の宿をやる順番をきめた。

庚申のはしが用意してあり、このはしで食べなくてはならなかった。

昭和二十九年が最後だった。掛け軸やはしが一組になり、宿の家を順にまわした。

宿の家に行き、体をフロに入って清めてから、おまいりした。

米がたくさんとれるようにおいのりした。（鳥羽西部）

秋から冬の頃、庚申の日にやった。当番の家で、イツケごとによつていた。

掛け軸をかけ、イワシ、サンマ、煮物を食べた。夜、食べながらいろいろな話をした。（元総社大渡）

春、秋の二回、庚申の日にやった。早寝をしてはいけないといい、十二時頃までおきていろいろな話をした。

十二時頃、ニワトリがなくなのをきいて終了になる。

春は、近くの庚申さまにおまいりに行き、秋は、飲食をした。おしめをし、豆をいった。七色菓子そえた。（総社新田）

庚申様は、百姓の神様という。

下石倉では、庚申待はしていないし、特別の信仰をしている人もいないようである。（下石倉）

猿田彦ともいい、百姓の神様である。四月頃の庚申の日で、友だつと次の日にした。

赤飯をあげる。

来た人には、お茶を出した。

参詣の人は、村内の人は一人だけ。他は村外の人だった。

猿田彦大神というお札を出している。版木は評議員が持つていて、各家一枚、おまいりの人の分をすつておいた。

お札は、お蚕のかごに入れて用意した。

節分後のはじめての庚申の日におまつりをした。

庚申は三隣亡除けになるので、自分の家の庚申塔は、三隣亡を信仰している人の方に向けておくと、難を除けられる。

昔は、参詣の人が多かったので、祭の費用は、おさいせんで、まにあつた。

各戸一名が出て、したくをした。（稲荷新田）

七庚申といつて、七つの庚申をまわると幸せになるといふ。

庚申の講が一年一回あり、お米を集めてごちそうした。おたか盛りで食べ、早寝をしてはいけないといわれた。（稲荷新田）

石原の庚申さま 蚕道具の店が出ていた。（上青梨子）

猿田彦大神 むかしは三隣亡をまつたうちがあつた。三隣亡をまつると、財産がふえるといつた。

三隣亡をまつるうちに財産をとられないように、三隣亡よけのために、猿田彦大神の碑をたてた。屋敷の東北（うしとら）のすみにたてた。（下新田）

戦前までは春と秋の年二回、お庚申様を祀つた。十二、三軒を一組とし、当番制で宿を決め、掛け軸をかけて祈つた。

煮つころがしとご飯だけで、魚をつかうことは許されなかつた。

（江田）

話は庚申様の晩 お庚申様の晩には、近所の人などがあつまつて、夜中の十二時よごろまではなしをしていた。



ふだん、くどいはなしをすると、「しつぽの長い話は、お庚申の晩にしてくれ」といった。(青梨子)

昭和拾八年四月十一日

庚申 日待帳

昭和拾八年庚申

入費

支出の部

宿寄付 酢

金老円五十銭 佃煮

金 五銭

収入の部

金貳拾一銭 前回残金

金 七十銭 秋葉日待残金

合計 九十一銭

金拾壹銭残金

十六軒

十六軒の名

支出ノ部

金壹円也 魚

金五銭也 線香

差引金五十銭 残金

庚申箱入

(総社山王)

エビス講 春は朝まつり、秋は夕方まつる。(上青梨子)

サンマ、ごはん、天ぶらをあげ、何千万両で買いましょうといい、高く買うまねをし、身上があがるように上げものをあげる。

食べると縁遠いという。(総社新田)

地藏まわし 子供たちの行事。むかしからの行事で夜の行事、夜になると、夕飯を食べてから、子供たちが四人で地藏様を交代でかついで、ムラの道路をのぼったりくだったりした。その日の最後に、地藏様を泊めておく家をきめておいた。翌日はその宿から出発した。道中で和讃を唱えた。

地藏様がまわつていくと、近所の人がでて地藏様をおがんだ。

なお、宿をした家では、地藏様に夕飯などをしんぜた。

これを地藏まわしと呼んだ。(下新田)

地藏様祭り(地藏様かつぎ) むかし、子供が地藏様をかついでムラの中をまわった。

むかしは、七月から八月にかけて一カ月間まわしたというが、わたしのころは十二日間であった。そのあと九日間になり、さらにその後七日間(八月一日〜七日)になった。

小学生がかついだ。

地藏様は、ふだんはお寺におく。

地藏かつぎをはじめ前の日に、地藏様(こし)を中川へもって行って、子供たちが洗った。屋根には油をぬった。

地藏様は、二人でかついだ。小学六年生が、かつぎがしらであった。その下の者もかつげればかついだ。

かつぐことの交代は、親方が指示した。

地藏様のこしのあとについてあるくものが、念仏(和讃)を唱えた。鐘も二人でかついだ。

太鼓も二人でかついだ。

両方とも交代でかついだ。

一番でつかいのが親方。

そのつぎがかつぎがしら。

小僧は役なし、歌をうたえばよい。

行列は、一番先が太鼓と鐘、次に地蔵様がついて、そのあとに小僧がつく。

一軒一軒、地蔵様をおがんでくださいといつてふれてまわった。そのうちの人の人に出ておがんでもらった。

各家の人は、お米とかおひねりをだしてくれた。まいにち、ムラ中一まわりまわった。

地蔵様は、ムラの中を右まわりにまわった。一日のうち、半分まわるとおひるになった。

一週間まわりおわると、親方がまんじゅうを買ってきてくれた。最後の日にまんじゅうを分けてやった。ムラ中、まんじゅうくれるよといつてまわった。親方のうちでまんじゅうをくれた。

まんじゅうは、利根橋の近くのまんじゅう屋さんで買ってきた。

和讃をうたわせることを、あげるといふ。「おめえあげろ」というとうたった。

和讃は十種類くらいある。

地蔵かつぎの前に、お寺で和讃の練習をした。

地蔵かつぎは、戦争中一時やめになったが、戦後復活した。

なお、地蔵かつぎに参加できるのは十歳から、一軒一人ずつである。

なお、この行事のことは、地蔵まつりといった。(江田)

子供たちが、みこしをかついで家々をまわった。みこしには、丈夫になるように、夜泣きしないように、三角の綿入りのキレ(帆形)に名前を書いてあげた。

七月二十四日から八月二十四日まで出した。

家々をまわり、米やヒキワリをもらい、それを売ってお菓子を買った。

その前の二十三日には、子供がみこしと地蔵を洗い言う文句を六年生が書き、みんなで覚えた。

その日の昼と晩はお祝いで五目飯が出た。

みこしは毎晩回り、一軒一軒の入口に立って地蔵和讃をした。

願をかけた帆形はみこしにまきつけておき、みこしをしまう時にとった。(稻荷新田)

百万遍 「なんまいだ」と言いながらじゅうずをまわした。そのじゅうずの玉で目をこすると良いと言う。またそのじゅうずに付いたドロをぬると病年にならないと言い、つけられてもいやがらなかった。

「病気がたからないように百万遍」と言った。(稻荷新田)

道祖神祭り こもり小屋を作り、「道祖神が燃えますよはや夜があげます。この夜が長いのに……」と言いながらもやした。(稻荷新田)

地蔵さま 七月二十四日。ウデマンジュウを作った。時期が田の草取りのところで、ふつうなら三時まで昼休みだが、二十四日は昼も行き、夕方早くしまつてマンジュウを作った。子供は六時ごろに地蔵さまに行った。

地蔵さまは二十四日から三十一日までで、翌日の一日がタネツキになる。

四十五戸くらいの村の内を三〜三時間半でまわった。

小一〜高等二年(親方)が参加した。六年が中央親方で金をもらいに行つた。大親方が全部の金をあつめた。

みんな和讃をしながらまわった。和讃は口まねでおぼえたが、おぼえないと練習から帰れなかった。

夕方からは親がついて回るので、いっぱいついて回った。子供三十

五人と親。

はじめの日と最後の日は回ったが、あとの日は村の上から下に道があるだけ。(小相木)

地蔵をみこしにのせて、子供たちが和讃をとえながらまわった。一軒一軒まわって和讃を言い、ひきわり米をもらう。その米を売って石倉でお菓子を買ひ、最後の日に村の人にくれた。

七月二十四日から八月二十四日の一ヶ月間夕食後にやった。

(稻荷新田)

**道祖神** 終戦前(昭和十年代)のころ、どんどんやきで、子供が燃け死んだことがあったという。

今は、小屋をつくつてのどんどんやきはしていない。神社へおかざりをおかざりをつめて燃している。ことで、あつまつた人の中には餅をやいて行く人もいる。

ここでも、むかしはどんどんやきをしたという。各家のお松(正月のおかざり)をおかざりをつめて、小屋をつくつて焼いた。火をうける前に。

「はや夜があげますよ。道祖神が燃えますよ」

といって、子供たちがムラの中をふれてまわった。(下石倉)

**道祖神車** むかし、小相木に病気がはやったことがあった。

そのとき、厄病払いとして裸祭りをしたことがある。そのとき、道祖神車というものをつくつて、北(神社のところ)から南(道祖神畑というところ)へひいた。

道祖神車は、一月十四日にひいた。

道祖神車をつくるのは、十三日のこと。竹で四角の枠をつくり、それに四つの車をつけて、綱でひいた。

箱の中に、正月のおかざりを入れた。これは、どんどんやきのとき

と同じように、子供たちが一軒一軒まわってもらいあつめたもの。箱のまわりには、かざりをつけた。

この車を北から南へ、大人(わかいしゅも)がひっぱった。子供たちは、車のあとをついてあるいた。車をひっぱる者はふんどしいつちようだった。当時は六尺ふんどしだった。

わつしよい、わつしよいといながらひいた。二、三十人が車についていって、車ごと、おかざりを燃した。

道祖神車をだしたときは、小屋はつくらなかつた。

この行事は、厄病払いということである。夜の行事だった。

行事が終ると、飯野喜市さんのところで、酒とけんちん汁のご馳走になつた。

裸で綱をひいたから、はだかまつりといい、小相木のはだかまつりといつた。

明治時代に行われていた。大正時代に復活したものという。大正時代に、二、三度行われたようである。(小相木)

**道祖神** 道祖神まつりも子供の行事である。

参加者も、地蔵まつりと同じ、十歳からの小学生である。一戸一人ずつ参加。

正月のおかざりは十三日にはずす。

これを、かいどに出しておいた。(おかざりかえ)

子供たちは、むかしは荷車をひいて、これをもらいにあるいた。あつめるのはおかざりかえの当日(十三日)。

もらったおかざりは、道祖神やきをする田へもつていった。

小屋は二つ、東西にならべてつくつた。

形は円錐形のもの。

おかざりだけでは足りないので、わらとか、竹をもらいあるいた。

五本とか十本とか。

ムラの中で、新婿の婿さんが手伝ってつくってくれた。

小屋ができると、十三日の晩には、小屋に泊った。夜あかしをした。ご信心の人があまさけをつくってもってきてくれた。

小屋をつくるのは十三日で、それを燃すのは十四日の早朝。五時から六時ごろ。

朝の二時か三時のころ、太鼓をたたきながら、ムラの中をまわった。

「道祖神が燃えますよ。さあ早く起きなさい」

といいながら、ふれてまわった。

小屋の中には穴を掘って、そこで火を燃した。鍋をもって行って、

コンニャクのひっぱたきをつくって食べたりした。

桑のねっこを穴の中で燃した。それはもらったり、畑へかきに行ってもってきたりした。

子供たちは、穴のまわりに横になって寝た。小屋に一晚中いた。

**奉納道祖神大笑** 上のような紙の旗をつくって、篠の先につけて

燃した。また、餅とかまゆ玉を棒の先にさしてやいて食べた。

わかいしゅうは、この日、七小屋まいりといって、近くの七カ所の

道祖神小屋をまわった。

遊びに行ったわけである。(江田)

子供の組があった。

おやがしら、前がしら、こかたとわかれていた。

一月十三日に小屋をつくって、十四日の明け方に燃した。

子供は、小屋の中にいて、一晚中火を燃していた。

青梨子の本村では、五つの道祖神小屋ができた。(青梨子)

八丁メ 村の境の五か所に立てた。明神様からお札を受け、篠につけて立てた。

農休み前の七月十四日に立てたが、十二三日にお札を持ってきてくれた。

お札にはひもがついていて、ゆわえられるようになっていた。

農休みには、まんじゅうをふかした。(鳥羽西部)

七月二十四日に村境に立てた。神主がくれるお札を、オンベロと共にの竹につけて立てた。(江田)

にし竹につけて立てた。(江田)

**碓氷講** 碓氷郡松井田町の碓氷峠の熊野神社の講である。ムラ中の

人が参加していた。

秋のころ、毎年、碓氷峠から御師がやってきた。夜は飯野久万吉さ

んのところ(都合のわるいときは、二軒の分家のところで代役をした)

御師は黒崎さんという人。

御師はムラへ来ると、各々にお札をくばってあるいた。そのあと、

飯野家へきて泊った。

夜中の一時ごろになると、御師は床の間に峠の神様をまつて、祝

詞をあげた。そのあと、庭に出て、天上にむけて弓を射た。

なお、御師はなにか峠のお土産をもってきた。

宿からでて、次のムラへ行って同じように配札した。大正時代ごろ

までのこと。(小相木)

碓氷峠の講もあった。代参講であった。

春先に行った。(江田)

熊野の御師 碓氷峠の熊野様の御師がまわってきた。

曾根さんという人であった。女の人が袋を持ってついてまわった。

米をやった。

戦争のころまでのこと。(青梨子)

七晩やき 七夕の日から迎え盆の日まで、七晩やきをした。

子供がムギわらの小束を門先にたてて火をつけた。唱えごとはない。

小麦束の燃えた灰を、門先（屋敷への入り口）にひいた。

これは、泥棒が入ってこないためとか悪い病気がうちへ入っておかないようにするためという。

子供たちは、かいどの入り口で、まい晩、小麦束を一束ずつ燃した。

（西箱田）

七月一日から七日までの間にした。

この間の夕方、かど先でムギわらの小束をもやした。それは子供が行う行事。

唱えことはない。

ムギ束は上をしばって、下をひろげて立てて、下に火をつけた。

一晚に一束ずつ燃す。

疫病神が入ってこないようにということ。ほとんど全部のうちでやっていた。

今はやっていない。（下新田）

無縁仏 盆のとき、無縁仏は盆棚にあげない。

無縁仏への供え物は、盆棚の下で、畳の上じかにしんぜる。ぼたもちも、お椀に入れて、畳の上じかにあげる。（青梨子）

盆のときは、盆棚は二段にする。

上の段には先祖様をまつり、盆棚の下には、無縁仏をまつる。

盆棚の下にも、線香をあげたり、ぼたもちをあげたりする。

下の段の仏様は、子供の仏様という。（元総社）

チヨウのはなし 盆にとまった蝶は仏様だからとるなといった。盆のときだけのはなし。（小相木）

祭りのこと

浅間様…三月二十五日

祇園、七月十五日（十四、十五、十六）

オクンチ…十月九日

組から祭当番がでて、祭り関係の世話をした。

人数は七人。小相木には、組が七つあるので、各組から一名ずつでた。任期は一年、まわり番になっている。

オクンチのとき、のぼりのつな提灯、おかざりの紙、麻などを当番

の人が買いに行く。費用は区から出してもらう。当番は買い物のおと、一杯飲んできたというが、その費用もふくまれていたという。（小相木）

十日夜のこと 十日夜のときの唱えごと。

「あさそばきりに、ひるだんご、ようめし食っちゃ、はらだいこ」

このとき、子供たちは、鳥羽の子供たちとけんかをした。

「鳥羽のやつら、けんかに来い」

といった。

十日夜にはもちをついた。

十日夜には、高崎の清水の観音様へおまいりに行った。ユズを買ってきた。そのユズをとっておいて、十二月の冬至のとき、ユズ湯をたてた。（江田）

あめやおばさん 公民館のところに、あめやおばさんといわれ

る人がいた。

この人は、虫封じとか熱さましなどのおまじなえをしてくれた。

どこからきたかわからないが、よそからきた人であった。（小相木）

安産祈願 産秦へ行った。そこぬけひしゃくをあげた。お札をうけてきた。（総社新田）

夏祭り お祇園、七月十五日（神社の裏の石宮）この日、天王様の扉をあけておくだけで、特別の行事はない。

キュウリの初物は、天王様に供える。

ナスの初物は、捧にさして、ナス畑にたてた。これは、天道様にあ

げるといふ。あげるとき、天道様の方向にむかつておがめといった。

(小相木)

半夏様 半夏の日にはおおいそがしくつて、半夏様は、田へ行こうか、おか(畑)へ行こうかと思案して、そこで立往生したといふ。

それだから半夏の日には田植をするなといった。(元総社)

浅間山へのぼること 七月十三日(おぼんの十三日)には、わかいもんが、浅間山へのぼった。

竹の杖をついて。

「お山はすなわち、ろつこんしょうじょう」

といいながらのぼった。

昭和三十年代くらいまでのぼっていた。(青梨子)

倉賀野の馬頭観音 馬を飼っている人は、倉賀野の馬頭観音へおまわりに行った。

秩父の夜まつりにも行った。(西箱田)

十三仏の掛軸 区有の十三仏の掛軸がある。これを葬式の時、法

事のときに貸し出す。

掛軸と鉦があつて、それを貸し出す。

葬式の時、三十五日とか四十九日の法事の時。

むかしは、ムラに、念仏申しの人がいたが、今はない。(下石倉)

十三仏の話 今は十三仏になっているが、ほんとうは十二仏だった。

それで、十三仏にするには、いま一人誰がよかんべといっているところへ、不動様がきた。

「おれを仲間にいれる」といふ。

「一番あとにいれる」

といったが、一番さきに入れた。

それで、「南無不動釈迦文珠……」になった。

不動様は、体に火をまきつけて、剣を抜いて、十三仏の先に立っているんだつて。(元総社)

神棚に線香をあげること 正月の五つ日(一日から五日まで)。杉山家では、神棚に線香をあげる。仏様には二本ずつあげるが、神棚には一本ずつあげている。朝、そばをしんぜるときにあげる。

また、おもての門のところに門松をたてるが、そこへも線香を一本あげている。

むかしからやっていることである。

神棚には香炉を供えて、そこに線香をあげる。

なお、正月棚には年神様をまつっている。(下新田)

あと念仏の水を無縁仏にあげることに、線香と水をあげる。

あげた水はどんぶりにためておく。

この水を軒下にいる無縁仏にまけてやるという。

また、お盆様にあげた水も、軒下にまけてやる。(元総社阿弥陀寺)

無縁仏にお茶をやること 仏様とか神様にしんぜたお茶は、お勝手

の障子をあけて、背戸にかけた。

これは、無縁仏にあげるといった。

仏様にあげたご飯を猫にくれるとしりつくせが悪くなるといった。

(総社町総社)

講 三峯講、御嶽講があつた。山王に神主をしている人がいた。

(総社新田)

伊勢まいりは、一月十日ときまっていた。

むかしは、一カ月の上かかった。

お山つきはいつかということも、わかっていた。(青梨子)

伊勢参り 伊勢参りに行くときは、オカリヤをつくった。そこに、

旅の間は、道中の安全を祈って、うちの者がおまいりに行った。

個人で行くときには、屋敷内につくったが、団体で行くときは、鎮守様の境内につくった。

伊勢参宮に行くときには、身内の人とか近所の人がムラ境まで送っていた。

帰ってくる時も、ムラ境まで出迎えた。(小相木)

むかし、伊勢参りに出かけるときには、神社の境内にかり小屋をつくって神主さんにおがんでもらってから、水盃をかわしてから出かけたという。(下石倉)

むかしは、一月二十日にたった。

一日目はどこへとまる。二日目はどこにとまるときまっていた。

二月いく日に伊勢につく、あしたはお宮まいりだと、うちのものがわかっていた。

旅先に色町があった。そこへ行ってあそんできた。

三月のお節供には帰ってきた。

伊勢参りには、三十歳台の半ばぐらいの人が行った。

色町へ行けないようじゃ、一人前の人間でないといった。

むかしは、伊勢講という講ができていて、毎年かねをつんで、くじをひいて順番をきめた。来年いく人をきめた。

三代伊勢参りしないとうちがつぶれるといった。

伊勢参りへ行く人は、前の年に足ならしをした。旅は一日十里平均だった。

おじいさんは、ナスをつくって、せんぜえかごにナスを入れて、箕輪の市まで売りに行った。足ならしだった。

むかしは和服を着ていった。

きもんがよごれないようにあわせの上にひとえもんを着ていった。

宿屋で、天気のとくに、ひとえもんを洗濯したという。(青梨子)

むかし、伊勢参りに、コンニャクとみそこしを持って行ってきたというはなしがある。

伊勢参りに行くときに、コンニャクとみそこしを持って行って、腹がへるとコンニャクを食べて、便所へ入って、出たうんこはコンニャクべえだから、それをみそこしでうけて、洗って、また食べる。

食べてはだし洗っては食べて、それをくりかえして伊勢参りをしてきたというはなしがある。(元総社)

とぼ口 暮(正月)に受けた神社のおはらいはとぼ口のところにさしておく。

神棚にあげておくうちもある。

節分のときにやいたヤカガシをとぼ口にさしておく。

クワの木の二又の枝に、イワシの頭としっぽをさして、豆をいるときにやいてそれをとぼ口にさす。

虫よけとか、魔除けという。作物の虫よけのためである。(下石倉)

長虫成敗のお札をトビロに貼る。(江田)

川神様 川で小便すると、川神様に罰をあてられるといわれた。

(青梨子)

水神様 川だにも正月のおかざりをした。川のはたにある木に、おしめをひっかけた。

川だなでは、鍋釜とか野菜などを洗った。ここで口をゆすいだ人もあった。米もここでといた。風呂も川の水を使った。

このように、川の水をたくさん使ったから、井戸水は飲むだけであつた。

川だなは各家庭にあつた。ここには水神様をまつっていた。

むかしから、水(川)は三尺ながればきれいになるといつている。

(西箱田)

引間の妙見様 妙見様の前の池に弁天池があつて、その中に亀の子が大変いた。

ある朝のこと、近所のおばあさんが、今の妙見様のところへおまいりに行ったら、蛇と亀がつるんでいた。

おばあさんがいうには。

「今朝(妙見様へ)おまいりに行ったら、妙なものを見た」

というので、妙見様という名ができたという。(元総社)

片貝の虚空蔵様 むかしの人は、蚕をはきたてる前に、東片貝町の虚空蔵様へおまいりに行つた。

蚕の神様として信仰していた。(下石倉)

年神様 年神様があがるのは、卯の日の卯の刻(青梨子前原)

ハタガミサマ わし(関根邦三さん M39生)が子供の時分の行事。

二月になって、はじめて機をたつたうちが、近所のおんなしゆをよんだ。お茶よびであつた。

北内出のおんなしゆをうちによんだ。

「わしらがちで、機がはじまつたから、よばれてきてくれ」といつてよんだ。

このときは、きんぴら、芋のところがしをつくつたり、赤飯をふかしたりしてご馳走した。

赤飯紙という厚手の紙を紙屋で売っていた。それを買つてきておき、赤飯をこの紙に包んで四角にしてみた。(青梨子)

前原の松下家の若宮八幡 前原の松下家はトウモロコシをつくれな

い。むかし、先祖がトウモロコシ畑で死んだためという。

この先祖様は、若宮八幡として祀られている。(青梨子)

つぼ山 つぼ山にも、正月のおしめをさげた。

夫婦げんかをする、うちの神様がつぼ山に逃げるといつた。

つぼ山には、いろいろの神様があつまっているという。

あかんぼうのうぶ毛をそつたときは、それをつぼ山に捨てた。

大掃除のときには、大神宮様と仏様はつぼ山に出した。この二つは、

一番先に出して、一番先にしまった。

つぼ山は、屋敷の西南のすみにつくつた。

つぼ山には、モチ、モツコク、モクセイを植えるといつた。

ヒイラギも庭に植えた。それは、わるもんを寄せつけないためとい

う。ビワの木は屋敷に植えるものではないという。ビワの木を植えると、

そのうちに、病人が絶えないといつた。(西箱田)

生きみたま 嫁にきたてに、盆の前に、生きみたまといつて嫁を里

へお客にやつた。このときは、もらい方、くれ方双方で新しい着物をつくつて嫁に着せた。

里では、娘が帰つてきたというので、「お茶飲みにきてくれ」と近所

の人を呼んだ。うどんなどでご馳走をした。(下新田)

オサキ オサキというのは、ネズミよりちと大きい動物という。

このオサキを飼っている家がある。

隣の家の粉櫃へ入つて、粉を体につけてきて、うちへきて、粉櫃に

入つて、体をぶるぶるとゆするともつてきた粉がおちるといつた。

あすこんちは、オサキがいるので、かねがたまつたといつたりする。



丁間稲荷の利益 秋元様が、天狗岩用水を掘るとき、丁間稲荷に、  
(下新田)



丁間稲荷（問屋）

二十一日間のお願生をかけた。  
「工事が、無事うまくいくように」と頼んだという。

そして、神様（稲荷様）がいわれるのに。

「白馬が通ったあとを掘ればいい」と。

それで、白馬の足跡のところを掘ればまちがいなしというので、そのとおりに掘ったら、うまく掘れたという。（青梨子前原）

生き盆 農休みのとき、嫁は里へ

帰った。これは初嫁だけ。それを生き盆といった。（総社町山王）

十二様 山のあるところで、一年中山仕事をしている人は、正月になると十二講まつりをした。（元総社）

染谷川沿いの江田の上の中島堰があり、その東側に山の神（十二様）の石宮があったが今は不明となっている。また、その地は本来鏡神社の境内地であり、江田の共有地であった。（江田）

木福様 小野里尚雄家では、神棚に木福様をまつっていた。

これは、木製で、十五センチくらいの大きさ。お宮の中に祀られている。

大掃除のときに見るくらいである。

むかしから祀っているが、とくにどういうわけに祀っているのが説明はない。（江田）

正月棚 正月棚は、六尺×二尺の大きさ。



お供え（問屋 丁間稲荷）

両側に神様を祀った。

一つは天照皇太神宮様、もう一つは歳神様。供え物は二つあげた。

お松も二つ。

そのほかに、十二支というお棚をつくった。おそなえを十二組あげた。

おそなえは、十二月二十九日について三十日におそなえした。

大かざりは八帖の間。

神様の前にはおかざりをした。

（江田）

### 三、明神様

総社神社は秋元様の領内を氏子としており、総社五ヶ町もその中に入っており、明神様と通称している。鍛冶町では、明神様の世話人有一名置いており、お札や節分の豆などを配る。元日には初詣でに行く。春は三月十五日が祭日で、元総社だけでまつり、太々神様の奉納がなされる。ホンマツリのときには、昔は流鏝馬があった。総社五ヶ町からは馬を出し、元総社からは屋台が出た。旧国府村の塚田あたりから獅子が出た。それぞれ分担が村ごとに決まっていたわけである。秋の農間に総社神社から連絡があり、世話人が九月によつて、ホンマツリにするかどうか話しあう。ホンマツリに決まるとバカバカと太鼓を打って合図したものである。元総社から、ホンマツリに決まると、酒



総社神社 (元総社)

二升を持参の上、馬を出してくるよう総社五ヶ町へお願いにきた。十月九日・十日が祭日で、総社町の流鏝馬は最後に出ることに決まっていた。大正十三年に出たのが最後のホンマツリだった。馬は総社五ヶ町から七頭、野馬から一頭出た。総社五ヶ町から出た馬は流鏝馬で走る馬で、新田町・粟島町・巢烏町からは二頭ずつ、鍛冶町からは一頭と決まっていた。鍛冶町は小さいので一頭だったであろう。野馬から出た馬は御幣束を背中に立て、先頭を行くことになっていた。町の順も決まっていた。馬に乗る人は陣羽織を着たが、それには秋元様の紋ががついていた。当番になった者は毎日練習した。馬が町内にいなければ借りてきても出すことになっていた。お産のあつた直後の家などはケガレているというので、まつりには出られなかった。はつぴを着て、ちょうちんをもって、まつりへ行った。はつぴを着てまつりへ行けば、総社の者だということで、屋台店などでも自由に出入りできた。馬が出ないとホンマツリにならないで、総社の者は大切にされたわけである。馬は出口の地藏様の所を通って総社タンボをぬけて、総社神社へ行った。ホンマツリでないときは、神楽が出るのみである。また、節分には豆まきがあるが、その時に神社からくれる豆で、家々で豆まきをする。

(元総社)

祐天上人がこの村に来て、残しておいた軸がこの村にある。

(総社町山王)

絹笠様の石の碑がある。(後家町)

古市に和尚塚があるが、江田のものであった。その縁日には、百八灯くらい灯籠が続いた。(江田)

六・三に初茶をあげた。(江田町)

お百度参り 明神様で行なわれた。(総社町粟島)

伊勢参りの時にはお仮屋を作った。(清野)

光厳寺に御霊神社があり紅葉山と呼ばれていた。鬼門除けの神で、

本来は日枝神社であった。(総社町粟島)

昔は神明様が西北にあり、諏訪神社が南にあった。(江田)

八幡様には力石がある。(清野)

安産祈願 オグラの産泰様や二十二夜様にお参りをする。

キヤのものⅡ(半紙をまるめたものを水引きで結ぶ)を中山勇次郎

(当代は一郎)宅など借りて来て、灯明を上げ、安産を祈る。(粟島)

大屋の産泰様へ懐妊祈願に行く。(粟島)

明神さまの祭 (中山一良氏の見聞) 秋元但馬守長朝が例の天狗

岩用水を堀割を始めたが、大工事のためなか／＼その目的が達せられず、ほと／＼困って仕舞い、色／＼思案の末、神仏の加護に預りたいと総社明神に祈願をなし、この難工事を完成させ給えと二十一日の大祈願をなしたところ、二十一日目の夜秋元侯は夢枕に、白髪の老人が白装束で大きな岩の上に立ち、『汝の熱意を嘉納するであろう。今後も努力を怠るでない。』と申され、御姿は霧の如く消えた。夢から醒め夜の明けをまち現場へ馬をとばし行つて見たところ、去る日まで大きな岩があつて、如何とも出来なかつたのが一夜の中に片付いて仕舞い、実に不思議であつた。誰言うもなくこの岩を天狗岩と言うようになった。侯が見た白髪の老人は天狗の化身であつたのだからと、この用水を天狗用水と名付けられたのだと古老に聞いて居る。そこで侯は

大願成就の晩には馬を七頭献上すると言う約束なので、明神様の境内へ馬小屋（厩舎（うまや））が作られたのであるが、飼育係やら飼料などに費用がかかるので、この馬の飼育を総社城下の五ヶ町へお下げ渡しとなり、新田、栗原、巢鳥へ各二頭、鍛冶町へ一頭が割当られたのである。

私は昔のことは只話に聞いて居るだけであるが、大正十四年の二回はこの祭を見聞して居る。大正三年のときは、小学六年生でたゞ珍しい位であった。新田町では下組の番と言うのでそのときの騎手は、吉沢八郎さんと根岸与三郎さんであった。若い衆は揃いの法被（はつぴ）（看板襦袢）を着る。手拭は豆しぼりを用いたことだけは知って居たが、大正十四年の大祭はもう二十三歳のときであり、実際に参加したので大体は覚えて居るから参考にした。その年の五月十三日に粟島に大火があり、烈風のため三十戸焼失、半焼二戸、鍛冶町迄突き抜け五十七棟が焼失した。その年の十月大祭を行うので反対や非難の声もあつたが、当時の青年達が「この祭りも今年あたり執行しなければ永久になくなるのではないか」と言うので年寄り達を説得して大祭典にこぎつけたのである。他町のことはさておき新田町のことを先づ書くことにする。当時は新田町は七十戸に満たない町で、これを三組に分けて上組、中組、下組としており、そのとき上組の番であつた宿を決めなくてはならない。宿は町内の人が集まり、二頭の馬を朝夕湯で洗うのであるが、その仕事は若い衆がやり、湯を沸すのは年寄りが受けもつのである。約一ヶ月寄り合い食事を出し莫大の費用がかかる。馬も町内のもは余り上等でないと言うので、古巻村有馬の荒巻と言う家から競馬に出す立派な馬と、東村川曲の中里家の馬を借りて来て他の字に負けないようにと張り切つたものである。宿は吉田彦七さん宅で、騎手は春山藤七、中山次良の両氏が選ばれた。いづれも両親揃つ

て居る者と言うことである。午前と午後各一回粟島の本間さんの前の橋より、北へ向け走らせるので、元景寺の大門のところで止めるようにする。鞍は昔のものであぶみ（鑑）は鉄製鳩胸形のものである。祭りの当日は陣笠、陣羽織、たつつけ、袴、手甲、脚絆、白足袋、麻裏草履、鼻緒は紅白、手には竹の根で作つた鞭をもち顔には薄化粧をする。祭日のときは弓と矢をもって騎射の行事をするのであるが、鎌倉の流鏑馬のような本職でないから、的に向つてほんの型式に演ずるだけである。祭りの当日は町名の入つた高張提灯を二基、世話係や区長それに新田町は特に世話係の外に、行司と言うものを用いたのである。明神様へ行く行列は馬を中心にして高張持ち、世話役、区長は紋付袴の礼装、その他はいづれも名人の看板襦袢に紺股引に地下足袋、豆しぼりの手拭鉢巻きまこと勇ましい姿である。その外に各町に廻り番で露払いと神子馬と言うのがあつた。これは鍛冶町を除く、新田、栗島、巢鳥の持ち廻りとされたのである。そのときが露払い（二人）と神子馬の番が新田町へ廻つてきたので、上組十九戸では二頭の馬を出すのでさえ大変なので、神子馬は中組に、露払いは下組にやつて貰つた。神子馬と言うのは馬の衣裳をつけ、矢張り昔の馬具を置き紅白の手綱それに杓をはかせる。馬の背には金の幣を立てるのである。馬の口取りは左右に一人宛と後綱と言うのが二人、これも若衆が二十人程ついて行き、露払い二人は黒紋付の着物の袴を着け、白足袋、白鼻緒、麻裏草履をはき、腰には大小の脇差しと印籠を下げる。これも十五人の若衆が着いて行くのである。単に馬祭りと言うがその費用は莫大なものであるから青年は祭りをやりたがるが、一家の主人ともなれば費用の一端を荷負うのであるから、反対するのも無理からぬと思つた。陣笠陣羽織などには秋元家の定紋を付したものである。この紋は瓜番と言うので織田信長もこの紋を用い、光厳寺元景寺も寺門の外に

用いて居る。新田町では山九の中島半平さんと言うおじいさんが金銀の紙を紋型に切ってくれた。

次に各町の揃の法被の模様など参考にしたい。

新田町のもものは、背中に総の字、腰字には田の字を横斜に三字を、胸の襟に志組と入れ、股引は紺一色で履物は地下足袋であった。粟島町は神谷利一さんの語るところに依れば、背中があの字、腰は四つ目を斜に三ヶ入れ、胸の襟字は丸に『あ』その下に粟島と入れたのである。股引以下は新田と同様である。そのときの騎手は清水元之助と津田等一の両氏、その前の大正三年の騎手は曾我鹿十郎と中里七郎の両氏とおぼえて居る。尚陣羽織であるが、粟島は神明宮の宮元であるところから紫色であったとか。

次に鍛冶町のことであるが、大正三年、石井壬午郎、大正十四年が持木賢信さんが騎手に成ったことを覚えており、大正十四年のときは看板襦袢は背中に総の字で、腰字は加の字の連鎖、胸の襟字は加組、その上に秋元家の紋を配したのである。そのとき新店の佐藤さん方の若い人二人が、緑色の腹掛けをしていたと思う。

粟島は矢張り背に総の字で、胸の襟字は寿組と印し、腰字は判然としないが彎ではなかったかと思う。

野馬は背に総の字で、腰字なし、襟字は野組である。粟島の騎手は自分がおぼえて居るのは、福田和四郎、小野里信太郎、松田伝次、島田竹七さんであったようである。然し大正十四年のときは、総社町から行った若い衆の中に喧嘩早い者が二、三居たために元総社上町の神輿広前の祭の時、訳の解らないものが遂に大喧嘩にならんとしたのであるが、幸にも大事には至らなかったのである。なんにしても神聖であるべき大祭典の儀式が喧嘩の中に終ったことは良くない。神を畏れないことである地元総社も、この神事を明確にすべしと言うので、神

谷林一郎、宮下弥市さんのお二人の御尽力に依り、その月の三十日に改めて神輿広前の式典をとゞりなく済ませ、手打式となったのである。野馬は馬は出さないが、総社五ヶ町からの供え物(奉納の餅)を出車(だし)に積んで三手古囃子と言う笛、太鼓一ヶ、小太鼓三ヶ、又は四ヶと鉦を叩いて非常に浮き立つようはお囃子であった。前橋市の祭りもこの囃子を用いて居り、総社町の中、この囃子の残って居るのは野馬と大屋敷の二ヶ町である。よく前橋市の祭には頼まれて行ったことを、何回か見かけたことがある。馬祭りの行列は延々として、鍛冶町の出口から元総社の入口まで続いた。流鏑馬は七頭の馬を三頭と四頭に分けて、南の大鳥居前から北へ向けて走らせ、本殿と奥殿を西から東へ廻らせ七回位走らせたと思う。そのとき新田と鍛冶町、粟島と粟島が組んだと思つて居る。若し間違つて居れば私の考え違いである。とにかく、半世期即ち五十年の歳月が流れて居るから、地元(元総社)は実に大きな屋台が七台位と上町と稻荷台と思つたが獅子舞が出る。神社近くの空地は、軽業の小屋や見世物小屋が何ヶ所か設けられて笛、太鼓の音楽で実に賑かであったが、騎手の行列が通るときは鳴物中止の規則があつたのには驚いた。元総社屋台の囃子は大囃子と言う実に勇ましい。大人が力一杯に太鼓を打ち、笛は太物と言うがその昔は近郷まで響き渡る程であった。この祭りを本格的にやれば群馬県下でも有数のものと思われる。この祭典も昭和十五年の紀元二千六百年記念に武具馬具を神社境内へ陳列したとか言うのである。

久保原茂さんに聞いた話によると、屋台の外にお祭行列の先頭を行くので七本立て、行つたのである。この的は各町の騎手が弓に矢をつがえて的を射る流鏑馬用の的である。この祭りは地元だけでは祭りにならない地元の屋台、獅子舞、総社町の騎手騎馬が供奉して神輿の渡御を行つて本祭りとなる。(総社新田)

明神さまの祭 野馬は弓七張、的九挺を出した。(総社新田)

新田だけが、行事役で、上下をつけ、大小をつけ、せんに印ろうをさげ、つゆはらいをつとめた。三枚せつたをはいていった。

(総社新田)

明神様(総社神社) 今の明神様の本殿の裏に秋葉様がまつてある。その秋葉様は二区の人たちがまつている。

秋葉様のやしき(社地)へ、明神様がいすわつたものという。

明神様は、宮之部地(殿小路)から現在地へご神体の幣束がとんできたという。

上杉、武田の戦いするとき社が火災にあつて焼けて、その煙と一緒にご神体がこの地に舞いおりのたのたという。

宮之部のお宮の敷地をつぶして葵を植えたところ、やはり病気がでて、隔離病舎が一杯になるほどであった。そこでまた、お宮をもとへもどしたという。(元総社)

総社神社の月次祭(つきなみ) 毎月一日、十五日、二十八日、この日はとくに行事はない。

おまつりにくる人があるくらい。(元総社)

総社神社のご神木 神社のいぬいのすみにケヤキの大木がある。下の方がうちになつている。上杉、武田の戦いときに、神社と一緒に燃えたという。(元総社)

総社神社の春祭り 三月十五日、この日太々神楽が奉納される。もとは赤石一家が奉納していた。

神楽の奉納は一時中断されていたが、昭和三十二年に神楽保存会が結成されて復活した。

もとは三十六座、今は十四座奉納。

秋の祭典のときには、各町内で奉納するものがきめられていた。と



大正2年の総社神社大祭  
殿小路の屋台(元総社)

をだす。

上宿の獅子はお祭りのさかんのときに出すので人気があつた。もう一つ稲荷台からも獅子がでた。この獅子は、まだ寝ている神様をおこすということ、夜のあけないうちに神社へでておどるのだという。この時間にはまだ参拝者(見物人)もいない。この獅子のことは、「おめざめの獅子」とよんでいる。

屋台はふつうのときにはださない。大祭典のときだけだす。大正十四年の大祭典が最後である。大祭典を行うかどうかはその年の(作物の)でぎくあいによつてた。

むかしは、九月十五日の晩に、各町内の代表が、町内の大祭典についての意見をもちよつてきめた。たとえば、今年は晩秋蚕もあつたから大祭典をやろうということが多数決できまれば大祭典を行うことになる。今年是不景気だからやめようということが多数決できまればやめることになる。だが、わかいしゅうは、大祭典をやりたがる。会

ころが、赤石内出だけが奉納するものがなかつた。

それで、春の祭典のとき、太々神楽を奉納するようになったものという。(元総社)

秋の祭典 秋の祭りは、十月九日、大祭のときには元総社の町内十カ所から屋台をだす。

阿弥陀寺、殿小路、淡島、中宿、内藤分、新田、金井町、石井組、松田組、馬場。

上宿は屋台をださないで獅子

議の進行でわかいしゅうがみていた。大祭典のことが論議されているとき、大祭典に反対の町内があればふくろだたきにあつたこともあつたという。

ただ、下宿は、宮元町にあるので、どんな年であつても、大祭典について反対することはできなかった。

また、よその地区の氏は、本村の決定にしたがつた。

この九月十五日の会議のことを、大寄台といつた。

本まつりのときは当番の人数を倍にする。阿弥陀の場合は、ふだんは二名。本祭りのときは四名。宿番のうちは大い家と小さい家とを組合わせてえらんだ。

本祭りをするのがきまると、祭りの準備をはじめた。屋台の悪いところの修理をしたり、衣袋をつくつたり、太鼓の稽古をしたりした。稽古は、宿番の中で家の大きいところでした。

屋台の修理が終ると、町内の広いところに屋台をひっぱりだして、そこでおはやしの稽古をした。

十月八日には屋台を組立てて町内をひいた。

十月九日が本番、祭りの当日。

町内のわかいもんが、それぞれ役目をきめて、屋台をひいた。

うで木をかついでもりあげるうでわ木があり、屋根の上にあがつて電線除けをするもの、つなをひくもの、車がぬかるみに入つて出ないときてこ棒でわつばをこじてだすてぼうがかり。

太鼓をたたくかかり、笛を吹くかかり、当番の人は二人、屋台の前ばしらという。いちばん目立つ柱のところ座つて拍子木をもつて、高いところから見えて、邪魔もんなどがあると、拍子木をたたいて注意したりした。

宿番の人は、屋台の縁の下にもぐりこんで、油くれをする。

屋台町の道路は広がった。

屋台がぶつかる枝はこさぎりをした。どんな木でも切ってしまった。屋台の中で、元総社の五大屋台というのがいちばん先にできたので大きかった。中でも、中宿のものが一番大きく、うしろからついた。

五大屋台はつぎのとおり。

中宿、阿弥陀寺、新田、淡島、馬場。

あとからできたものは、形が小さい。

人形は本庄まで買いに行ったという。

なお、十月一日に各町内で道普請をした。

十月十日、祭りの翌日が契約。この日宿番、当番の交代を各町内でした。

新役員が選ばれると、酒をのんだり、ぼたもちを食べたりした。

祭りについてのエピソード

・元総社に本祭りができると三年たるといつた。

畑の草退治ができないので、このあと畑の草退治をするのに三年かかるといつた。

・屋台にかざる人形を本庄まで買いに行つて、人形を買わないで、だるま（私娼のこと）を買つてきたという。そのあとそのかねをもつて行つた者までだるまを買つたという。

・祭典が終つたあとのケイヤクのとき年寄の人二人が町内の代表として他出していた。その留守に町内の人たちは、ぼたもちをつくつて食べた。

年寄の人の分としてぼたもちを二つとつておいた。

年寄りの人が帰つてきた。

「ぼたもちが二つあるから食べてください」

といつたら、

「ひとを使いにやっておいて、たった二つべえしかのこしておかないとはどういうわけだ」と年寄がおこつたと。

「是非かんべんしてください」

といってだしたのが、お膳一杯のぼたもち。

「一つでわりいけど」

といってだしたと。

そしたら、おこつた年寄もたまげて笑いだしたと。

むかしの人は、そんなしゃいなしをしてたのしんだのである。

(元総社)

おかみむかえ むかしは、元総社の辺の人たちは、勢多郡の方の人のことを、むけえの人とかむこうの人と呼んでいた。

むけえの人は、信仰心があつくつて、おかみむかえの日には、団地で総社神社へおまいりにきた。

神楽殿の南に、おこもりやがあつて、そこへ、むけえの人が泊りがけでおまいりにきた。(おこもりやは、四間×二間くらい)

よく、おばあさんが、釈迦尊寺の西の道に馬の馬糞がある。早く行ってみる。神様が出雲へ行って帰ってくる時に乗った馬の馬糞だ。といわれた。

なお、神無月には、日本中の神様が出雲へ会議であつまるというところが、国中の神様が行って留守になると困るので、総社の明神様が、上野の代表で会議に出席するのだといった。

お神おくりについては、目立った行事はなかった。(元総社)

神おくり 総社の明神様に神おくりという行事があった。神おくりをすると、神様がみんな出雲へ行ってしまふので、行くまえにいい縁組ができるようにと、総社の明神様へおねがいに行ってきた。

神様が帰ってくると、神迎えの行事があつて、そのとき、お礼に行つた。

旧十月三十日神おくり、旧十一月三十日神むかえ。(江田)

総社神社 迦葉山の話「田植えが早えエなあ、お天狗様がたまげらあ」と言うほど百姓の仕事は早い。——天狗が下つてきて、麦刈り

中で、帰るころには田植えが終つている。

神迎え(オカミムカエ)には赤被をたいている。「ムケエ(むこら)の人」は(勢多の人をこう呼ぶ) 信迎が厚く、団体でくる。けやきの木の下に「おこもり」があり(昔の拝殿をこわして、おこもりやにした)(神楽殿の南) 泊りがけできていた。泊つてお百度参りをした。

娘が来ると夜ばいをしたことがあり、評判をおとすことも、結ばれることもあつた。

おこもりやは四間×三・五間くらい。

勢多の人たちが神迎えで来たなら、この辺の人は麦刈りなどの仕事をしていて、おどろかれたことがある。近くより回りのほうが熱心。

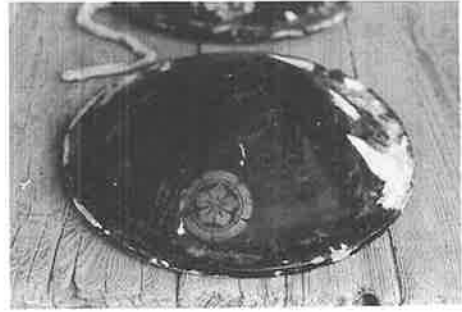
釈迦尊寺の西に道があり、よく母が昔「早くおきろ、まぐそがあれば神様の乗ってきた馬のまぐそだぞ」と言った。(神迎えの日)

神無月は留守になるので困り代表だけになった。一人だけ行くようになった。留守の神はなし。

引間の妙見さまは前に弁天池があり、亀の子がたくさんいて、近所のバアさんがヘビとカメがつるんでいるのを見た。妙なものを見たので妙見寺という。ヘビの頭と亀の頭が以ているので。

妙見神社の秘仏は神社の真下に埋まっている。年に一回お着せがえをしたが今はナシ。「交尾の姿」。斎戒沐浴をしてからする。

秋元氏が勝山に城を作り、町を「総社」にしたので、ここが元総社になった。本祭りに総社からみこしが昔は勝山に行つたが、秋元氏死



やぶさめの笠 (総社 粟島)

後上宿に行くようになった。

祭りの日は、九日元総社、十日総社。

総社より十日に御社馬が来て競馬をする。釈迦尊寺まで行った。本殿のまわりを一周したこともある。

競馬の前にはヤブサメもあった。

大正には境内を回るだけになった。

大正二年十四年と本祭りがあり、

十四年が最後になった。

夏の盆おどりは青年会に従てやる。

二十歳の兵隊検査の時。大正十五年

ころから。

そのころは豊年おどり(ずっと前からしていた)で八月の末に行っていた。

昌楽寺は昔山王前というところにあった。元のところを昌楽寺廻りという。

大鳥居は明治十四年のもので、元はもつと前にあった。

昔はお別当という占をみてる人がいた。(神社に関係なし)

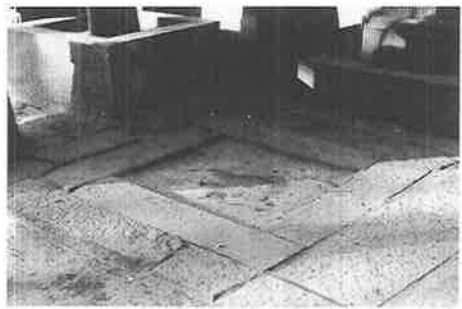
御霊社に関係のある人。

置炭の儀式、赤くやけた炭が黒くなると、そこが雨が多いという。

神主が行う。社殿に向かって置き、社殿に近いところが上旬。一〜十

二月の十二本を置く。

筒がゆ神事 二本ずつ米・麦……と種別になっている。二本で平均をとる。米の粉をいれる。いもはさといものこと。きびは含まれていない。



筒粥・置炭神事の炉 (元総社 総社神社)

金古はアワガラ育ちと言った。アワガラをもちやした。

風呂に入る時に石をだいて入った。

風呂入れや、夕食前だよ、石だいて

へえれや、と言った。体が軽くて、

浮くので石をだいて入った。

カラスが国府で、「アワカアワカ」

と鳴くので、コメだと答えると「カ

ツタンカ、カツタンカ」と言う。ま

た「オカボダ、オカボダ」と言う。

薬師さまのそばの化粧堀のところ

に追いはぎ、大蛇が出たとの話があ

る。

馬場のところは、今の馬場町で、その東はシンデン、今の農協の辺の川のそばである。

秋の大祭 神楽は昔、赤石一家でした。今は村内です。(総社東の内出の赤石家のみ)昭和三十二〜三年ごろより変わった。十数年間中

断し、神楽保存会を作った。屋台が一〇出た。アミダイジ、トノコー

ジ、アワジマ、ナカジユク、ナイトーブン、シンデン、カナイチヨウ、

イシイグミ(イツケ)、マツダイツケ(グミ)、パンバ。

五屋台が大きかった。(アミダイジ、アワジマ、ナカジユク、シンデ

ン、パンバ)

松田組、粟島、内藤分では一町で屋台が二つ出る。

上宿は獅子で、祭りのさかんなころにするので人気があった。

松田、伊藤一家はホコ。

トーカダイの獅子は「おめざめの獅子」と言い、夜明け前にする。



東国分……鳥羽はホコ。村中で奉納するものが決めてあった。

赤石ウチデは奉納するものがなく、太々をした。

都木一家はホロ。

三月十五日にした。

本祭りの太鼓の音が二里四方に聞こえたという。

九月十五日の十五夜に各町内で、祭をするか、しないかの会議がありオオヨイマイと言った。多数決で決めた。

若い衆は祭をしたがり、反対の町の代表をたたくので、夜のあつまりを昼にした。代表が結論をもってきた。

神社辺はオオシモジユク（シモジユク）シャモチといい、反対はしない。こつちが決まれば総社は反対できない。（元総社）

宿を会議所にしたので、当番の家（ヤドバン）は大きな屋敷の家とせまい家を組み合せて決めた。八月に屋台の虫ぼし。十月一日にヤドゲエ。

九月十五日〜十月九日が本祭り。毎月太鼓の練習をした。

元総社に祭りがあると三年たたると言う。草たいじがでさず苦勞するので。

八月は組みたて、町内まわる。

近所の町の大鼓の音が聞こえ、互いにはげんだ。

屋台は腕木を二本（電柱大）をしぼり、向きをかえた。ぬかるとネエコマツタ屋台を苦勞して動かした。

道に出てる庭木はみんな切った。（コサギリ）天下御免で切ってもよかった。屋台町は道が広がった。

屋台は油をたくさん使った。一斗（一八リ入り）二本は使った。

獅子は新組を作り、毎日朝より練習をした。長男で小学校二〜三年生くらいの子供あつめ、太鼓と獅子つくりをした。

十月一日は道ぶしん、契約と言ひボタモチを作った。

農家で講談、義太夫を呼ぶことがあった。座敷、縁側に村の人があつまった。

ヒガン花はカジ花とも旧はいい、刈って家に入れると火事になると言った。

ジョーダン（冗談）のことをシャイナシと言う。

ヒナゴゼンと言うものがあり（今はない）、祭り役に各町一人ずつお膳が出る。七十五人分、獅子二人、カネ太鼓各一人。

ケンザンザシキ 前が前橋様、裏が高崎様、見物する座敷で、石の上のみこしを置き、となりに座敷を作った。

トーカ台の獅子は江田で伝承している。

昔は追儺式はなかった。

昔は竹で、途中にさげた。昔は二本たてシメつくり、まん中にさげた。

若い衆には「オメエそのザマでハ丁じめの外に出られるか」と言われた。

前橋のサンビキという人があつた。一人は野中ヤスヒロと……野中興業の人で、越後より人力車で来た。クルマヒキ。一人は児童公園を牧場にし、赤城亭という肉屋をしていた。ウシを越後より引いてきた。

ウシヒキ。（あと一人不明）

塩原太助、炭のオリをウデ汁でこねてまるめた。名前がなく、太ドン〜タドンとつけた。

タドン作りは戦前はしていた。駅前にとりにゆき作った。大正十四年生の人はわずかにしただけ。他に消し炭を自家でこねたものを作った。

神社の南にミロクという地があり、小山になっていて、病氣の人を

火葬にした。

人形（ヒトガタ）は近所の川に流した。

御神木があり、武田の戦いで焼けた。

おみごく橋（前は木の橋）は下をくぐるとハシカがなおると軽くすむと言う。牛池川にかかっている。

一月十五日は月並祭でおまいりにくる人がある。

五月五日のチマキは神主さんが作る。片手でにぎり作った。チガヤでナットウ状にまいた。来た人にオミゴクとしてあげた。朝一〇に作った。

ヤブサメは大正十三年ころまでした。「騎馬七頭」と言い、総社町より奉納されてきた。

新明宮は神社の「新宅」で、工事中は神体をあずかった。

秋元氏が天狗岩用水工事に苦勞して、七夜七日の祈願をしたら、天狗がつえを指して、指図したら水が通り、その後、大祭をするようになった。当初は毎年だんだん年があいた。

祭の借金をしよってトーカダイに夜逃げだした人がいた。

祭の道具は必要で出すので、質屋で必ず金を借してくれた。

オカミ迎えの式 十一月一日（旧）の朝卯の刻に帰ってくる。それを目指して、おまいりにくる。その時に甘酒を出した。その甘酒は一月十四日の置炭の炉で作った。かまは、鳥羽の小野里氏の寄付。ユタテはしてはいないが、そういうことを言ったかもしれない。

七月十六日八丁じめをくばった。町内でもらいにくる。部落の角々においた。二区のアミダイジは道路で町に入るところ五カ所、アワジマ三カ所中宿三カ所など。

小野小町のキリガクレの〇〇という地あり、そこに来て霧にまかれた。

東京から地鎮祭には木の下の土をとりにくる。土を盛りそこにまぜた。

神社の宮の下をほしがる人がある。イボがなおる。

本殿の裏に秋葉様がいて、二区の人がおまつりする。ここに明神様がすわっているかたちになる。ミヤナベ様が火事の時に、火事とともに幣束が移ってきた。ミヤナベの裏は「オヤシキ」と言う。

元の宮の地に桑をうえ、下肥をまいたら病気がはやつたのでその地にお宮を作った。四反。ミヤナベ様は毎月二十一日に祭りする。アワシマとトノコージの間にあるので、一カ月交代でまつっている。遷宮の時本通りと二町であらそつた。三、七、十一月にまつりをして、灯ろうをあげた。オミゴクをくれる。

神社にアサウラゾウリをはいて、入ってはいけない。横にケモノの皮が使っている。で、（生ものをきらつた）

氏子かえし、氏子をぬける時はぬけつばなしではいけない。祈とうをする。親子して八年間つめた。スワの殿さまが氏子かえしせずぬけ、むこうで直会のイノシシをたべて病気になった。そこで氏子かえしをしたら全快し、金灯ろうを寄付した。戦後も釈迦尊寺經由できた。アミダイ寺の百万遍塔には牛池川にしないでいた経文の書いてあったものをまつっている。

境内に天神様（菅原神社）まつつてあるので、雷がおちない。

相馬ヶ原の太平に弘法大師が杖で水を出したところがある。

コンニャクとスイノウで食っては出して洗ひ、伊勢まいりに行った人がいた。

オサキタバコ、キザミタバコをぬらしておき、つかないと言って、人よりタバコをもらった。伊勢まで一ぶくですんだという。

オサキ大尽、大事にかつておくと、その家が困り、その家の人がウ

ドンが食べたいと言ったら、オサキガとなりのウドンコナのハコにとびこみ、家におとした。くりかえしてみんなとつてしまった。

今でも「オサキつかい」とひっこすと言われる家がある。なんでも「オサキにやらしたんだんべえ」と言う。

#### 総社神社 大拔式

一、副神主の大鼓

二、一同礼をして、副神主の祝詞

副神主が、神前、神主、参列者の順におはらいをする。

三、神主に交代

神主 瓶のフタをとる

大拔式の祝詞を読む。(毎年少しずつ異なること)

米と色紙をまく

身形札で自分の体の左手先へ、右手先へ、頭(顔の上へ)、

胸のところにあて、元におさめる。神前におさめる。

四、身形と米、色紙ののつた三宝が参列者の前へ。

神主は西にすわる。責任総代が前が出る。責任総代が神主と同じ

動作をする。(昔は総代二十数名が一人ずつ行なったが、今は二三名でおわる)

五、全員で二礼、二拍手一礼。

六、副神主が総代一人一人に五枚ずつ身形をわたす。

七、神主が瓶にフタをする。

八、神主の拝礼。

九、副神主の大鼓。

一、同別室に移り直会となる。

戦前は当日各戸より子供が自分の家族の数をとりききて、もらい、体の具合の悪いところにあてて流したものだ。早く流れるほうが

良いと言って利根川に流したこともある。戦後総代に配るだけになつた。

総社神社の祭道具 十月九日の本祭の時、総社の五か町ごとに馬の

練習し、馬でのりこんだ。

祭は、元総社の氏子総代が本祭をやりたいといつてくると、やらざるを得なかった。

馬は、新田、栗島、鍛冶町、巢鳥、野馬で各二頭ずつ出した。

三十八歳までのワカイシユが中心だった。のぼりが、上中下で各二本ずつあつて両側に立てた。のぼりは、保岡城山の書である。

(総社栗島)

陳羽織 祭の時、新田は赤で、栗島は紫の色だった。秋元様が置いて

いったものを使っている。(総社栗島)

おみこく橋 神社の東にある木の橋、中池川にかかっている。

この橋の下をくぶると、はしかにならないとか、はしかにかかっても軽くすむといった。(元総社)

やぶさめ 明神さまの祭でやった。新田だけ子供で、他の町は大人

だった。(総社新田)

地鎮祭の土、地鎮祭のときの盛り土の中にまぜる土をもらいにく

る。

ご神木の下のと土とか、明神様のお宮の下の土をもつていつて、盛り

土の中にまぜるといい。(元総社)

(資料) 秋元山壇徒定例

秋元山壇徒規定

當山八天臺宗比叡山延曆寺二屬シ宗祖傳教大師開宗ノ法華一乘ノ趣旨

ニ依リ遮那止觀ノ兩業ヲ弘通シ聖壽万歳ヲ祈リ并ニ大檀越及諸檀家ノ

各靈ノ菩提ヲ祈念スル道場ナリ

當山ハ慶長十二年總社城主秋元越中守長朝公香花院トシテ亮應法印ヲ招シ開基ス故ニ秋元家ヲ大檀主トス

檀徒ハ本宗ノ趣旨ニ基キ常ニ悔過遷善ヲ旨トシ葬祭法要ヲ依託シ寺門ノ維持興隆ヲ謀ルノ義務アルモノトス

一、新ニ入檀ヲ希望スル者ハ當山ニ申出テ檀家名簿ニ登録ヲ乞フベキモノトス

一、檀家總代ハ檀家ヲ代表シ常ニ任職ヲ外護シ寺門ノ興隆ヲ謀ルヲ任トス

一、任職ハ左の場合ニ於ヒテ宗規ニ依リ總代人及ビ檀家ニ對シ解職又ハ檀家タル事ヲ拒絕スルコトヲ得

(一) 總代人ニシテ任職ノ實務ニ關涉シ又ハ寺務執行ノ妨害者及禁錮已上ノ刑ニ處セラレタル時

(二) 檀家タルノ義務ヲ欠キ又ハ異教ヲ奉ズル時

一、當山ニ於テ法名ノ順位ヲ從來ノ例ニ依リ左ノ五類トス

(一) 永代院號

(二) 一代院號

(三) 居士大姉

(四) 信士信女

(五) 禪定門禪定尼

一、院號ハ本山當山ニ對シ功勞アル者又ハ國家禮會ニ對ニシ功積アル者ニ授與シ其他ハ從前ノ例ニ依ル

一、葬儀ニ際シ院主以下ノ招待標準ヲ左ニ定ム

但ス僧侶人員ハ檀主希望ニ依リ増減スル事モアルベシ  
一、諸奉納ハ左ニ標準ヲ定ム  
新靈回向奉納金

一、永代院號 金拾五圓以上

二、一代院號 金拾圓以上

三、居士大姉 金五圓以上

四、信士女 金參圓以上

五、禪定門 金貳圓以上

六、血脈料新靈衣服等ノ奉納ハ併前ノ例ニ依リ施物ハ時代ノ大勢ニ

ヨリ施主ノ身上ニ應ジ寄贈セラレタシ 供人ニ對シテハ時期ニ應ジ一般日賃ノ相當ヨリ下ラザル様布施セラル事ニ御配慮アリ

但シ已上ハ大畧ヲ定メタルモノナレバ依頼ノ節御相談アリタシ

當山定例法要

一月一日	修正會	
一月三日	元三會	
二月十五日	涅槃會	
三月九日	施餓鬼會	爲齊藤家
三月十二日	施餓鬼會	爲住谷家
三月十九日	施餓鬼會	爲都丸家
春彼岸中日	施餓鬼會	爲伊藤家
春彼岸終日	萬靈供養會	
四月五日	施餓鬼會	爲都丸家
四月八日	佛生會	
全日	施餓鬼會	爲藤井家
全十七日	山王會	
五月十五日	開山忌	
六月四日	傳教會	
七月十八日	施餓鬼會	爲藤井家

八月十三日 孟蘭盆會  
 全十六日 大施餓鬼會  
 秋彼岸中日 施餓鬼會  
 十一月三日 施餓鬼會  
 全月廿四日 天臺會  
 大正十四年六月 爲高橋家  
 爲都丸家  
 光巖寺十九世權僧正 宮本順良

法名	招待格	衆僧	供
院號	院主	四人	九人又八五人
居士大姉	院主又ハ院代	三人又ハ二人	五人又ハ二人
信士女	院代	一人	一人
禪定門	院代又ハ所化	一人	一人

壇家連名

總社町總社粟島 四十三戸  
 〃 新田町 十八戸  
 〃 鍛冶町 二十三戸  
 〃 巢烏 五十六戸  
 〃 野馬塚 十七戸  
 〃 大屋敷 三十四戸  
 〃 昌樂寺廻り 三十戸  
 植野立石 七戸  
 高井 二十四戸  
 植野 三戸  
 清里村池端 六戸  
 〃 野良犬 七戸

〃 前原 二十二戸  
 〃 青梨子(東) 十七戸  
 〃 青梨子(西) 十三戸  
 国府村北原 五戸  
 〃 東国分 五十九戸  
 〃 稻荷台 五戸  
 〃 引間 四戸  
 〃 塚田 一戸  
 元總社村大渡 三戸  
 〃 阿弥陀寺町 三戸  
 元總社村 一戸  
 金古町足門 一戸  
 京ヶ島村京目 三戸  
 東村江田 十五戸  
 〃 上新田 四十一戸  
 〃 下新田 十七戸  
 〃 箱田 一戸  
 駒寄村大久保 七十九戸  
 渋川町 五戸  
 横浜市 三戸  
 高崎市 二戸  
 前橋市 十四戸  
 〃 岩神町 三戸  
 東京市 七戸  
 前橋市曲輪町 二戸  
 〃 紅雲町 一戸

東地区

寺院名	所在地	宗派	本末関係	本尊	由緒
長栄寺	西群馬郡江田村字宅地添	天台宗	同郡惣社町光厳寺末	阿弥陀如来	不詳
(二十二夜堂)	西群馬郡江田村長栄寺内	天台宗	同村長栄寺持	如意輪尊	不詳
福德寺	西群馬郡上新田村福德寺内	真言宗	同郡下滝村慈眼寺末	十一面観世音	不詳
(観音堂)	西群馬郡上新田村福德寺内	真言宗	同村福德寺持	千手観世音	不詳
西福寺	西群馬郡稻荷新田村字宅地添	天台宗	同郡総社町光厳寺末	不動明王	不詳
大徳寺	西群馬郡小相木村字小山	天台宗	近江国滋賀郡坂本村比叡山末	阿弥陀如来	不詳
(大日堂)	西群馬郡小相木村大徳寺内	天台宗	同村大徳寺持	大日如来	不詳
(地藏堂)	西群馬郡小相木村大徳寺内	天台宗	同村大徳寺持	地藏尊	不詳
(念仏堂)	西群馬郡小相木村大徳寺内	天台宗	同村大徳寺持	阿弥陀如来	不詳
常円寺	西群馬郡箱田村字川西	天台宗	同郡総社町昌楽寺末	十一面観音	不詳
普門寺	西群馬郡箱田村字川東	天台宗	同郡総社町光岩寺末	十一面観音	不詳
万福寺	西群馬郡上新田村	真言宗	同郡下滝村慈眼寺末	不動明王	不詳
(薬師堂)	西群馬郡上新田村万福寺内	真言宗	同村万福寺持	薬師如来	不詳

// 桑町  
 埼玉県熊谷町  
 前橋市一毛町  
 // 向町  
 // 細ヶ沢町  
 // 国領町  
 一戸  
 一戸  
 二戸  
 三戸  
 一戸  
 一戸  
 // 南町  
 桃井村桃泉  
 碓氷郡豊岡村  
 明治村野田  
 前橋市立川町  
 // 神明町  
 一戸  
 一戸  
 一戸  
 一戸  
 一戸

総社地区

寺院名	所在地	宗派	本末関係	本尊	由緒
光巖寺	西群馬郡総社町字町屋敷南	天台宗	延暦寺末	釈迦 文珠普賢	慶長十二年当町在城秋元長朝菩提寺と定めて建立、正保年間消失、文化七年六月落雷にて再消失、よって同八年より文政三年までかけて再建。 創立縁由とも右に同じ 元禄十五年安藤出雲守先祖代々の菩提のため創立。 天正十九辛卯年旧館林藩秋元氏開基創立 不詳
(千手堂)	西群馬郡総社町字東新井	天台宗	同村光巖寺持	千手観音	不詳
(念仏堂)	西群馬郡植野村元景寺内	曹洞宗	同郡中郷村雙林寺末	弥陀如来	不詳
元景寺	西群馬郡植野村元景寺内	曹洞宗	同村元景寺持	釈迦牟尼仏	不詳
(観音堂)	西群馬郡高井村字屋敷	天台宗	同郡総社町昌楽寺末	釈迦牟尼仏	不詳
観音寺	西群馬郡高井村観音寺内	天台宗	同村観音寺持	観世音	元禄六癸酉年同郡惣社町領主安藤出雲守開基創立

元総社地区

寺院名	所在地	宗派	本末関係	本尊	由緒
昌楽寺	西群馬郡総社町字巢鳥分明神裏	天台宗	近江国滋賀郡坂本村延暦寺末	弥陀 觀世勢至	永仁年間僧弥尊開基、その他不詳
(念仏堂)	西群馬郡総社町昌楽寺内	天台宗	同村昌楽寺持	弥陀如来	不詳
徳蔵寺	西群馬郡元総社村字屋敷	天台宗	近江国滋賀郡坂本村延暦寺末	阿弥陀如来	文明三年足利氏祈願所として建立、慶長十二年より同郡総社町光巖寺において数年兼務、堂宇等なき処明治五年十一月官に請て任職を置き、同六年堂宇建立。 不詳、但し堂宇は明治四年二月消失、よって本尊は本寺徳蔵寺に安置する。
千手院	西群馬郡元総社村字屋敷	天台宗	同村徳蔵寺持	阿弥陀如来	不詳
宝勝院	西群馬郡元総社村字屋敷	天台宗	同村徳蔵寺持	阿弥陀如来	右同
放光院	西群馬郡元総社村字屋敷	天台宗	同村徳蔵寺持	阿弥陀如来	不詳
釈迦尊寺	西群馬郡元総社村字屋敷宅地	曹洞宗	相模国大住郡田原村香雲寺末	釈迦牟尼如来	朱雀元年青海羊太夫創立
林倉寺	西群馬郡内藤分村字宅地添	天台宗	同郡総社町昌楽寺末	阿弥陀如来	不詳
(観音堂)	西群馬郡内藤分村林倉寺内	天台宗	同村林倉寺持	聖観世音	不詳

(十王堂) (地藏堂) 長見寺	西群馬郡内藤分村林倉寺内 西群馬郡内藤分村林倉寺内 西群馬郡大友村字村内	天台宗 天台宗 天台宗	同村林倉寺持 同村林倉寺持 近江国滋賀郡別所村園城寺末	焰魔王 地藏菩薩 不動明王	不詳 不詳 元東学院、観応三年長尾忠房この地を領し家の息災祈願のため自願若干を祈願料とし天台修験を更起する。慶長年中にいたり長尾山長見寺と称す。
-----------------------	--	-------------------	-----------------------------------	---------------------	--

清里地区

正法寺	所在地 西群馬郡青梨子邨字正法寺	宗派 天台宗	本末関係 同郡総社町光嚴寺末	本尊 阿弥陀如来	由緒 慶長五庚子開山伝栄
-----	---------------------	-----------	-------------------	-------------	-----------------

東地区

諏訪神社	西群馬郡川曲村	健御名方命	七月二十七日	八坂社	不詳
飯玉神社	西群馬郡川曲村	保食命	九月二十九日	琴平宮	不詳
飯玉神社	西群馬郡川曲村	保食命	九月二十九日	なし	不詳
菅原神社	西群馬郡川曲村	菅原道真命	八月二十五日	疱瘡社	不詳
稻荷神社	西群馬郡稻荷新田村	神明宮、八坂社	九月二十九日	神明宮、八坂社	不詳
稻荷神社	西群馬郡前箱田村	諏訪社、天神社、八坂社、疱瘡社、神明宮	九月十九日	疱瘡社、神明宮	不詳
飯玉神社	西群馬郡箱田村	神明宮、諏訪社、菅原社、稻荷社、疱瘡社、八坂社	九月十九日	神明宮、諏訪社、菅原社、稻荷社、疱瘡社、八坂社	不詳
飯玉神社	西群馬郡箱田村	保食命	九月十九日	なし	不詳
菅原神社	西群馬郡箱田村	保食命	九月十五日	なし	不詳
菅原神社	西群馬郡箱田村	菅原道真命	八月二十五日	神明宮、八坂社、御嶽社、疱瘡社、八幡宮、秋葉社	不詳
稻荷神社	西群馬郡後家村	倉稻魂命	九月十五日	八坂社	宝曆十一年十一月十五日勸請
鏡荷神社	西群馬郡江田村	石凝姥命	九月十九日	疱瘡社、嚴島社、菅原社、八坂社、琴平宮、秋葉社	不詳



元総社地区

社名	所在	祭神	祭日	境内未社	由緒
菅原神社	西群馬郡大友村	菅原道真	二月十六日、 十月十六日	稻荷社、秋葉社、八幡宮、春日社	不詳
王守神社	西群馬郡大渡村	武日向彦八綱田王	九月二十九日	なし	勸請年不詳、上野国神名帳に正五位上毛野明神とあるは当社のことである。守の社号は八綱田王豊城入彦命に從ひて東国守護にあつたためといふ。
鏡宮神社	西群馬郡大友村	天凝姥命	九月十九日	八坂社	勸請年不詳、上野国神名帳に從五位下鏡明神とあるのは当社のことである。
諏訪神社	西群馬郡大友村	健御名方命	七月二十七日	大友社	勸請年不詳、上野国神名帳に從三位大友明神とあるのは当社のことである。未社の大友社は旧社にして所謂地主の神であろう。
菅原神社	西群馬郡大友村	菅原道真	九月二十五日	なし	不詳

神明宮	西群馬郡江田村	大日靈尊	十月十六日	なし	不詳
諏訪神社	西群馬郡江田村	健御名方命	八月二十七日	雷電社	不詳
富士浅間神社	西群馬郡小相木村	木花開耶姬命	九月二十九日	疱瘡社	慶長七年六月勸請
八坂神社	西群馬郡小相木村	素盞鳴尊	六月十五日	菅原社	寛政八年勸請
赤鳥神社	西群馬郡古市村	健角身命	九月二十九日	神明宮、琴平宮、八坂社、諏訪社、飯玉社、 <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 1em; height: 1em; vertical-align: middle;"></span> 社	勸請年不詳、社号赤鳥は明鳥の意で祭神健角身命は八咫鳥命、矢田部神主等の祖である。上野国神名帳に正五位下矢田部明神とあるのが是である。
稻荷神社	西群馬郡古市村	倉稻魂命	二月四日	秋葉社、疱瘡社	不詳
雷電神社	西群馬郡上新田村	大雷神	四月八日	金山彦社、菅原社、八坂社、諏訪社、白髪社、神明宮、稻荷社、八幡宮	天正元年勸請
飯玉神社	西群馬郡上新田村	保食命	九月十五日	秋葉社	不詳
八幡宮	西群馬郡下新田村	誉田別尊	九月十五日	八坂社、菅原社、疱瘡社、神明宮	不詳
稻荷神社	西群馬郡下新田村	倉稻魂命	九月二十三日	なし	不詳



清里地区

上諏訪神社	西群馬郡植野村	健御名方命	九月十九日	神明宮、松尾社、阿夫利社、八坂社	不詳
下諏訪神社	西群馬郡植野村	健御名方命	九月二十七日	なし	不詳
白山神社	西群馬郡植野村	菊理姫命	九月二十九日	愛宕社	不詳

社名	所在	祭神	祭日	境内末社	由緒
熊野神社	西群馬郡青梨子村	速玉之男命 伊弉冉尊 事解之男尊	九月十九日	愛宕社	勸請年不詳、上野国神名帳に従三位小奈智明神とあるのが当社である。隣村国分村に大奈智明神あり、共に紀伊国より遷座したものである。
菅原神社	西群馬郡青梨子村	菅原道真	九月二十五日	八坂社、神明宮	寛永十二年九月勸請
八幡宮	西群馬郡青梨子村	菅原道真 御田別尊	八月十五日	榛名社	勸請年不詳、本村はもと高井村と一村であつて当社に井ありて高井村の一村号となる。上野国神名帳に正五位下高井明神あり旧総社城主安藤対馬守崇敬して再建すという。ただし八幡宮と改められたのは何人の知るところではない。
若宮八幡宮	西群馬郡青梨子村	菅田別尊	八月十五日	三峯社	不詳
諏訪神社	西群馬郡青梨子村	健御名方命	七月二十七日	八坂社、妙義社	慶長十二年九月勸請
淡島神社	西群馬郡上青梨子村	少彦名命	四月二十三日	琴平宮	天保六年三月二十三日勸請
神明宮	西群馬郡上青梨子村	大日靈尊	九月十六日	八坂社、八幡宮、三峯社、瘡社、愛宕社	不詳
神明宮	西群馬郡池端村	大日靈尊	九月二十九日	小出社、菅原社、榛名社、雷	勸請年不詳、上野国神名帳に従五位池岸明神とあるのは当社のことである。池端の村名は池岸の社名に縁がある。
八幡宮	西群馬郡野良犬村	菅田別尊	九月十五日	八坂社、琴平宮、三峯社、榛名社、神明宮	不詳

## 総社神社（元総社町）

総社神社は、盤筒男神・盤筒女神・宇迦之御魂命・経津主命・須佐之男命を祭神とし、相殿一〇社、撰社五四九社を祀る上野国総社である。

社伝によると、豊城入彦命の東国下向に際し、武神として経津主命（注・一之宮貫前神社の祭神）を奉祀し、その親神である盤筒男・盤筒女の二神を合祀した。後、安閑天皇元年社殿を改築して蒼海明神と号し、天平十年九月九日国内一四郡から五四九社を奉招し、はじめに総社と称したという。このことは、「総社本上野国神名帳」前書きに「両部習合ノ神道云、惣社大明神与ニ拔鋒明神」父子一躰分身ノ弥勒菩薩、是一宮親也」のかり、また「惣社大明神者彼神之嬢也云々」、彼神者経津主神也……嬢者盤筒男盤筒女神也、是惣社大明神之正躰主也」と記されていることからわかる。上野一之宮貫前神社の親神であることが強調されている。

右のような伝承によると、総社神社は国府創設以前にこの地にあり、天平期にはすでに総社神社として国司により祀られていたことになる。しかし、各国の総社成立をみると、何れも平安中期以降である。「諸国神名帳」の初見が貞観五年（八六三）であり、「総社本上野国神名帳」奥書には「干時永仁六年十二月廿五日如正本書写之」とある。正本の如く書写したというその正本の年代は記されていないが、平安中期以後、国司が国内名社巡拝を略し、国府の近くに総社神社・大國魂神社・六所明神などの名で総社神社を創建しているから、上野国の場合でも例外ではなからう。上野国府にあった蒼海明神に、国内の名社一〇社と五四九社を併せたものであり、その時期は平安中期以後であらう。

### ① 本 祭

総社神社の本祭は、天狗岩用水開鑿の際、この地方の城主秋元長朝の祈願があり、完成後流鏑馬奉納などが取入れられ、宮元の元総社村は勿論、近隣の村々まで参加して行われてきた。明治以後は本祭りの大行事は経済的負担、その他で実施回数が少なくなり、遂に大正十四年の本祭りのあと中絶してしまった。

大正十四年の本祭りについては、『総社町誌』に詳述されているが、ここでは明治三年に実施された祭礼記録を記しておく。なお、祭礼日は、この記録では九月九日となっているが、太陽暦後十月九日に改められてきた。明治初年までは赤石家が社家であり、祭りの中心的役割りを果たしていた。

### ② 神 事

『県社総社神社略記』によると、祭典神事として新年祭（二月二十日）、例祭（三月十五日）、新嘗祭（十一月二十四日）、歳旦祭（一月一日）、射儀式（一月六日）、筒粥及火炭式（二月十四日）、粽祭（旧五月五日）、秋季大祭（十月九日）、流鏑馬式（十月十日）、御神迎式（旧十一月一日）、越年祭（十二月三十一日）、大板式（六月三十日・十二月三十日）、臨時祭（毎月十五日）などが記されている。また、毎年成人に達した若者が盆の二十四・二十五日（最近は八月一四・一五）に盆踊りを実施している。以下これら神事から特色のあるものを記しておく。

### ③ 越 年 祭

十二月三十一日から元旦にかけて行われる。午前零時を期して太鼓を打ち、祝詞奏上からはじまる。参詣者は二年参り、一番参りなどと

称し、前橋はもちろん、遠方からの参拝者も多い。神社では破魔矢と紙の旗を出している。

#### ④ 射儀式

一月六日、水的の式みづまといと称し、その年の水の多少を占う神事である。

この日は、福俵と称するものを用意し、午前から神前にお供えして拝殿で式をあげ、ついで前庭において紙で丸い的をつくったものを立て、それに向って神主がシノの矢を射る。このとき、矢が的にとどかないときはその年は水が少なく、的を越えて後にとぶと水がでる年となり、的に命中すると豊作の年であると占う。珍らしいことに、この儀式の前に必ずカブを白湯で煮たものを桑木くもの箸で食べてからする。カブは大きく輪切りにしたもので、大根ではいけないという。木食行の名残であろう。

また、福俵は、ワラを八寸程の長さに切ったものを中央を和紙でしばった小束で、正月の歳神に供えた干柿、スルメ、モチを少さく切つてワラの中に入れる。山の幸・海の幸・野の幸を意味したものとかわれる。この小さな福俵を数百個つくり、式後参拝者に投げ与える。参拝者はこの福俵を食べるとその年は病気にかからず、幸せな年であるなどといわれている。昭和四十一年の時は約六〇〇個程の福俵が参拝者に投げ与えられた。

#### ⑤ 筒粥および置炭式

一月十四日最夜中に執行される神事で、筒粥によりその年の各種農作物の豊凶を占い、置炭（注「おきずみ」と呼んでいる）によりその年の各月毎の天候を占う神事である。

準備 十四日の夕刻にはじめられ、斎場は総社神社拝殿前石畳の西

に設けられる。その場所には、一辺一尺程の細長い截石で囲まれた炉があり、その炉の周囲に笹竹の四本柱をたてて七五三繩がはられ、中央の炉の上には、青竹の三叉から中央下に鍋が吊される。また、火種の薪を用意する。

次に神前に奉納される品としては、丸炭の長さ二〇センチ程のもの二四本と、ヨシのからを一〇センチ程に切つて二二本を麻でたばねたもの二組、それに別々の紙に春、秋と書いたもの一組、モチ米の粉などが三宝にのせられてお供えされる。

開始 午後一時頃になると、まず斎場の炉で火がたきはじめられる。それより太鼓が打ちならされ、神主の祝詞奏上がはじまる。ついで斎場のお払いがすむと、鍋の湯は沸騰しているので、神前に奉納した品々を運びます鍋にモチ米の粉をいれ、長い青篠の棒二本でかきまわし、その中にヨシがらを二把入れて煮つめる。煮つめながら二四本の棒状の炭を火にくべる。ついで鍋を三叉からおろし、どろどろになつた粥の上に浮ぶ二束のヨシに春・秋と書かれた紙をそれぞれせ、再び神前に奉齋して祝詞奏上をし、粥のさめるまでお供えしておく。続いて神主は再び炉に戻り、真赤におきた炭のうちから、炉縁の石の上に一二本並べる。傍らでそれをあおぎ風を送っていると、真赤な炭に次第に黒く消えてくる部分ができる。そのころをみはからつて、社殿に向つて右から一月、二月と並んだ順に炭の消え状況を見、神殿に近い部分が黒くさきに消えたとその月の上旬は雨降り、中央が早く黒くなる途中降り、いつまでも黒くならない炭の棒は、日照りと記していく。次々と筆でそれをメモするが、その方法は〇印の中に墨をぬつて表現される。こうして一二か月分が記録し終ると、これを神前に奉納して祝詞を奏上する。これでこの年の晴雨の天候占いは終る。

次は農作物の豊凶占いであるが、さきに鍋の粥に投じたヨシの二束

を取り出し、それをひとつひとつ割って粥のしみこみ状態をしらべる。春の作物、秋の作物の順にしらべ、粥の浸透度により、その量の多いときは豊作とし浸透度の多少により何分作ときめる。

置炭・筒粥両神事の記録が終ると、それぞれ巻紙に清書され、十五日早朝に拝殿の東側にはり出す。そのとき前年の占い表も並べてはり出しておく。十五日の参拝者は非常に多く、境内に達磨市などもたつ有様で、必ずこの拝殿脇の今年の占いをみ、ついで前年の占表をみて昨年度の状況を思い浮べ、よく当たっているなどと話していた。

古くは、炭は白消の堅炭を用いたが、近年は黒消しが多く、太さの揃った長い炭が入手しなくなった。筒粥もかつては四二種を占ったが、今はその数も少なくなった。古くはこの神事を見にくる人でまわりが埋っていたが、近年は夜の神事のため集る人も少なくなつてしまった。

#### ⑥ 追儼式

節分の祭事で、この日は祝詞奏上後神官を先頭に年男が続き、枅に入れた豆をまく。かつては拝殿から棧敷をかけ、そこで大勢の年男が豆をまいた。この日は、枅、ミソコシ、木鉢などに豆を入れ、年男は袴を着用した。昭和四十一年度は、この年男としての奉納金は、特別会員、年男に分けられ、特別会員は一、〇〇〇円以上奉納したもので、御祈禱、御神酒一本、福豆枅、御神札、御供物などが与えられ、拝殿に登り祈禱を受けられた。五〇〇円以上奉納の年男も同様だったが、奉納が五〇〇円以下の年男は御神酒をはぶいた。また参詣者にはこの日各商店などから奉納された日用品、それに神社から出す福達磨、曆などを景品とした福引が催され、毎年一、〇〇〇人以上の群集でにぎわう。

#### ⑦ 粽 祭

旧暦五月五日に行われる神事で、この日神官は潔斎して、粽（ちまき）料理を神前に奉納することになっている。この粽は、ガヤで苞（つまき）をつくり、中には、モチ米を煮て握ったものを入れ、それを再びふかしたものである。今なおこのような古い姿でこの神事が実行されているところは県内まれである。

#### ⑧ 大祓式

六月三十日、十二月三十日の二回行われる。この日は紙で身代札と称するオスガタをつくって、氏子に配る。モチ切れ大の半紙二つ折りにしたものをはぎって頭部と袖をつくり、中央に身代札と朱印を押し込んだものである。人々はこれをオスガタと呼んでいる。氏子はこれをして、体の各部分をなで、家中の者が終ると身代札を川へ流した。

#### ⑨ 流鏝馬式

十月十日の本祭りの日におこなわれるヤブサメの神事は、大正十四年の祭り以後実施されていないが、古くは本祭りごとに行われていた。この儀式の由来は、総社城主秋元越中守長朝が、慶長七年から九年にかけて天狗岩堰を開鑿した折、総社町植野付近で大岩につきあたり難工事になった。たまたま、当社に祈願をして無事工事を完了したが、その二一日間の祈願は、成就後は毎年七頭の馬をたてて、流鏝馬を奉納することであった。それ以来、毎年本祭りに実施されてきた神事という。この七頭の馬立ては、前橋市総社町総社の小字である新田・粟島・鍛冶町・巢鳥・野馬・大屋敷・山王からとされ、騎士は秋元氏寄進の鞍に乗り、私元氏の紋章の入った陣笠、袴を着用して神社に乗りこみ、社前を廻りながら的を射た。騎士は祭り前は潔斎してこの儀

式を迎えたという。

⑩ 御神迎式

旧十一月一日の神事である。十月は神無月と称し、各地の神々が出雲で会議をされるため留守であったのを、十一月にお迎えする神事であるという。この日、総社神社では、「神名帳」に記された五四九柱の神々を奉迎するというので、十月三十一日の夜半から多くの参拝者があつた。今でも、この日は甘酒を出して参拝者にふるまう。甘酒は、拝殿前の火炭式を行う時に用いる石囲の炉のある位置でわかし、参拝を終えた人々に出している。

(前橋市史)

# 第七章 石 造 物

## 清里地区

### 池端町

番号	名称	高・巾・厚	銘 文
1	石祠(八坂)	86・50・70	(右側面)明治廿二歳癸卯七月吉日 (正面額)八坂神社 (左側面)總郵氏子中
2	双体道祖神	110・75・49	(裏)明和七庚寅九月十五日 池端村
3	庚申塔	158・33・23	(右側面)萬延紀元歳在庚申冬十有一月吉日建之 (正面)猿田彦大神 □□□□ (左側面)願主 神保十左衛門都次
4	石殿	86・50・80	(正面)歸峯 本山執檢 權大僧都行滿広印 尊 (左側面)三月十有五日
5	鳥居	290・25	(右正面)発起人 小曾根幸一 齋藤繁吉 (左正面) 齊藤秀吉 小曾根勘十 (裏)明治四拾貳年九月吉日建設 石工上白井猪俣栄造

6	石燈籠一对	290	(右裏面)當村氏子中 (正面)献燈 (左裏面)明治三十一年五月建
7	石燈籠一对	158・41・42	(右側面)宝曆九卯年 (正面)奉納 御宝前 (左側面)十月吉日 (裏)新保弥右門
8	石燈籠	160・41・39	(右側面)寶曆九乙卯十一月吉日 (正面)奉納御宝前 (左側面)角田伊右衛門
9	蚕神塔	160・80・11	(正面)衣笠大神 (裏)明治三十一年五月建之(十三人の名前)
10	石殿	71・32・58	(正面)秋葉大権現 (台座)願主 總村中 (裏面)天保六年歳在乙未十一月良辰 葛西静寿謹書 (世話五人の名前) 発起人一人の名前
11	秋葉大権現	142・51・20 93・110・58	
12	幸神	84・37・33	(正面)幸神



20	19	18	17	16	15	14	13
地藏菩薩	百番巡拝塔	供養塔	供養塔	石天明寺殿	石殿	石殿	石殿
173・31・22 (像高101)	142・40・21	215・36・33	154・33・33	40・27・38	46・30・42	75・49・79	83・40・71
(台座正面左)當寺主「導師法印長	(台座右正面)出生高野山「願主融元 (台座正面)享保丁酉年「解卒百人」奉造立地 藏尊「供養之印」七月十六日	(裏)享保二丁酉年「奉修造」秩父「坂東」西 国「順礼供養」九月吉日 (台座正面)同行九人の名前 中央に角田傳兵衛の名前 右當村在	(右側面)天保五年歲次「甲午三月建之(台座正面)女人講中 (台座右側面)吉沢ひさ以下十四人の名前 (台座裏)十七名の名前 (台座右側面)世話人「小曾根佐右衛門以下二人の名前	(正面)百番供養塔 (右側面)寛政七乙卯年四月 (台座右側面)當邑 (台座右側面)高瀬彌市以下六名の名前石工葛西甚之丞	(右側面)天明六年 (左側面)十月吉日	(裏)安永九庚子十月	(正面)金毘羅大権現 (側面)文化八年辛未九月吉辰 (台座裏)二名の名前 願主一名の名前 世話人三名の名前

4	3
鳥居	幟旗の台対
335・28	70・30・23
(右裏面)氏子中 (左裏面)明治三十六年癸卯年二月穀旦	(右の左側面)明治十五年歲次 壬年秋九月吉日 (左の右側面)氏子中

淡島神社

2	1	番号
庚申塔	秋葉大神	名稱
	94・50・25	高・中・厚
一四七基	(裏)昭和庚申五十五年五月	銘
	(正面)秋葉大神	文

上青梨子町

24	23	22	21
庚申塔	石殿	石祠(飯繩)	百番巡拝塔
47・28・15	51・38・35	144・69・100	81・48・30
		(額部)イ (正面)右 奉修飯繩大□□□ 鬼面アリ	(裏)元禄十一寅年七月吉日「□□□□」奉造 立百番詣願成就「□□昌也 大僧都□順院」池端村(千手観音)

8	7	6	5
燈籠	手洗石	手洗石	石燈籠
122・57	54・77・45	44・112・69	224・35
<p>(竿正面)御神燈(左右)</p> <p>(左竿左側面)願主「池端村」関口勘右衛門建</p> <p>(右竿左側面)願主「天保二年」辛卯「十二月吉日」建</p> <p>(左竿右側面)願主「池端村」関口勘右衛門建</p> <p>(右竿右側面)願主「天保二年」辛卯「十二月吉日」建</p>	<p>(左側面)寄附 馬場勘七郎以下六人</p> <p>(正面) 供漱盤 氏子中 春獻歳</p> <p>(右側面)明治十八年□□□</p>	<p>(右正面)越中新川郡湯音野村 三和小八郎 同人妻フデ</p> <p>(正面) 奉納</p>	<p>(上基壇裏) 未娘 發願人 関口あい</p> <p>(下基壇正面) 十九名の名前(左右) 十七名の名前(左) 十六名の名前(右)</p> <p>(下基壇裏) 十六名の名前(左右) 十六名の名前(左)</p> <p>(竿正面)御神燈(左右) (竿裏)明治十四年「辛乙四月大洗(左)</p> <p>(上基壇左側面)高橋元平 中郷(左) 世話人 馬場勘七郎 (以下五人の名前)</p> <p>(以下六人の名前) 池端村□□ 関口中 (左)</p> <p>(上基壇正面)寄附(右)連中(左) (上基壇右側面)石燈籠壹對(右) 池端村 関口勘右衛門娘 發願人 関口あい</p>

16	15	14	13	12	11	10	9
石祠	石祠(地神)	石祠	石祠(愛宕)	石祠 (祇園牛頭 天王宮)	石祠 (秋葉大権現)	石祠 (御嶽山大神)	燈籠
81・37・55	66・35・45	53・29・39	73・42・62	96・35・16	85・37・15	125・40・12	218・60
<p>(左側面)青梨子村「施主村中」 (右側面)享保十八年閏九月吉日</p>	<p>(右側面)地神 (左側面)寛保元歳 □□四月吉日 笠井勘□□</p>	無銘	<p>(台)施主 當村中 (台右)七名の名前 (台右)八名の名前 (右側面)文化十三年 (左)丙子九月吉日 (額)愛宕山大権現</p>	<p>(右側面)嘉永六年龍集癸丑初夏下洗三小完中 (左側面)一品准后法親王之嫡弟若一王子殿法 庶子天保「御料」御配役十五□之隨 一年行年職祈願師「長尾山王洪橋寺 権少僧智則敬書印</p>	<p>(裏)願主 内手中「文政十二年歳在」 乙丑 九月吉日建「葛西□□謹書</p>	<p>(正面)御嶽山大神 □□□□□□ (裏)明治十八年十一月建</p>	<p>(左右竿正面)御神燈 (左竿左側面)安政丙辰年初冬 (右竿右側面)明治十六癸未年初秋</p>

24	23	22	21	20	19	18	17
地藏菩薩	双体道祖神	双体道祖神	道祖神	双体道祖神	双体道祖神	石祠	石祠
32・20・12	46・24・14	63・38・18	56・24・20	104・81・26	98・80・43		66・36・63
無銘	無銘	無銘(像高42)	(左側面)寶曆十四庚申年四月吉日 (右側面)上宮組子中	(正面左)□念佛待講中 (正面右)□□年丙戌年四月吉祥日	(像高33)	(台正面)郷中 名前 (左右垣)世話人「関口勘右衛門以下十二人の名前」	(右側面)文化八(享保)年「十二月建」 願主「清中」

上青梨子神社前のお墓

25	馬頭観世音	39・20・12	(正面)馬頭観世音 (右側面)文久二(壬戌)年「六月吉日」 (左側面)湯浅亦左エ門
----	-------	----------	---

32	31	30	29	28	27	26
百番巡拜塔	如意輪半迦像	六地藏	供養塔	念仏供養塔	二十二夜塔	出羽三山塔
60・46・27 (上部欠)	50・27・15	61・33・13	113・35・55	155・90・16	215・71・67	124・55・54
(正面右)元日申歲「 (正面)百番供養塔 (正面左)祥馬 (正面上)當所」池端村」以下十三名の名前		(正面右)信女 (正面左)延享三(寅)九月七日	(台座正面)施主「先祖三十人」	(台座右正面)享保四天□亥十月日 (台座左正面)地藏念佛供養當村中	(右側面)二十二夜供養 (左側面)首文政十一年歲在「戊子三月中浣建之」 (台座)女人講中	(正面)湯殿講供養 (右側面)天明六年丙午歲次「閏十月日建立 左・裏に二十八名の名前と二十四名の名前 講世話人□□彦七以下十四名の名前

上青梨子薬師如来堂

33	薬師カ	52・37・17	
----	-----	----------	--

34	馬頭観世音	47・27・13	(上青梨子地内)
----	-------	----------	----------

36	35
燈籠	庚申塔 (百庚申)
137 40 41	
	147基 庚申・庚申塔117 猿田彦大神8 青面 金剛尊)8 猿田彦像1 青面宮1 年号 文政七年 弘化三年 寛保元年

百庚申の西

39	38	37
馬頭観世音	馬頭観世音	馬頭観世音
60 38 12	53 30 12	
(正面)馬頭尊「慶応元年七月吉日」施主「笹沢氏	(正面)治二十年	(道しるべ)右ハみすさは 左ハはるな

青梨子町

清里農協の東

4	3	2	1	番号
道祖神	石祠	馬頭観世音	双体道祖神	名称
	76 30 55	52 30 14	69 55 40	高巾・厚
(裏)無幻道人光旒書	(左側面)安永三年天「九月吉日	(正面)明治廿四年「馬頭尊」六月二日「萩原氏	(正面)□□六年子之六月吉日	銘
				文

天満宮(菅原神社)

11	10	9	8	7	6	5
石祠(八坂)	燈籠	おけ一對	狛犬一對	門柱	手洗石	鳥居
123 50 76	266 87 85	79 ・ 径95	62 45 25	312 36 23	43 115 64	283 ・ 径26
(台座)氏子中 (右側面)明治二十三年「秋九月良旦	(台座側面)文政十三年「寅□三月良辰」當村二名の名前「助願人 三人の名前」□□人」□□	(竿正面)常夜燈 (台座正面)當村講中 (台座側面)金古宿「□□」同むら「講中」前以下六名の名前「同むら」講中 (台座側面)保どた村「□□」□□「同むら」講中「當所」三名の名前「講中」二名の名前	(右の裏)昭和二十三年二月吉祥日「氏子中	(左の裏)明治四十一年一月 寄附 (左台左)明治三「庚午年」二月吉日「高崎」櫻井傳六 (右台右)明治三「庚午年」二月吉日「高崎」櫻井伊太郎	(裏)施主「當村」関根長右衛門「奉納 御寶前」元禄九天「子九月廿五日	(額)天満宮 (右柱)奉納御寶前 (左柱)元禄六年癸酉四月吉日「施主」恣下平兵衛

17	16	15	14	13	12
石 碑	筆 子 塚	庚 申 塔	馬 の 像	馬 頭 觀 世 音	秋 葉 様
55 ・ 30 ・ 33	115 ・ 75 ・ 14	100 ・ 47 ・ 14	61 ・ 151 ・ 98 (41 ・ 141 ・ 90)	100 ・ 44 ・ 10	200 ・ 99 ・ 62
<p>(正面)秋葉神「松田易直華書回」  (左側面)明治七年歲次「甲戌四月良辰」右工  目黒甚三郎</p> <p>(正面)猿田彦大神 (上部欠損)</p> <p>(右側面)奉造「明治四十四年」九月吉日「櫻  井嘉藤次」孝寿「世話」村中</p> <p>(正面)庚申塔「朝海書  (右側面)萩原講中</p> <p>(正面)筆塚「捨て」かねて「筆子の」名前や」  花□□き</p> <p>(右側面)昭和五十三年二月二十五日「氏子建  之</p> <p>(台座正面)奇石之由来「瑞祥之松字由間也」  不在五瑞而在忠「臣也我菅公為社稷之輔弼而  護」皇室也至矣不幸雖遭牙讒遷「毫衆命言獨  愛梅花傍訓於兒童」而不倦矣故距余一千年之  久猶有「餘香我祖常慕菅公之遺德」建祠宇奉  祀三百年干茲□□及移居前橋偶有印梅花之  奇石「常愛之以為瑞寶斯有年今」茲壬寅公之  一千歲而追懷「厥遺寂之紋章納最愛之奇石而」  表紀念之徵志替日「德滿四海 義二 吉香  核心為石」忠魂何亡 梅飛印石 斯表皇運」  天盡其職 令重公捐「明治三十五年三月二十  五日」櫻井傳三 謹識「木暮自榮敬書</p>					

26	25	24	23	22	21	20	19	18
旗竿(一对)	旗竿(一对)	燈籠(一对)	百 庚 申	記 念 碑	石 祠(瘡瘡)	石 祠	燈籠(一对)	石 祠
196 ・ 24 ・ 30	208 ・ 24 ・ 30	256 ・ 85 ・ 85		298 ・ 41 ・ 36	50 ・ 28 ・ 46	53 ・ 28 ・ 50	61 ・ 31 ・ 31	103 ・ 50 ・ 71
<p>(左の右側面)主敬員奏眞</p> <p>(右の左側面)絶廣怡神社  (右の正面)氏子中</p> <p>(右正面)明治二十八年九月吉  (左正面)氏子中</p> <p>(左右正面)御神燈</p> <p>(左右台)明治三十八年「九月吉日」寄進「櫻  井治三郎」世話」村中</p> <p>庚申塔68 青面金剛3 庚申供養塔1 文那  度神1 太田命1</p> <p>(右側面)菅公一千年記念碑</p> <p>(右側面)明治三十五年二月二十五日建石  子中</p> <p>(左側面)施主「當村」萩原□ハツ</p> <p>(正面)瘡瘡神</p> <p>(右側面)享保十五天「戊六月吉祥日</p> <p>(左側面)施主「當村」萩原□ハツ</p> <p>無銘</p> <p>(右)明治廿九年五月吉日「上州 前橋市」鈴  木忠造</p> <p>(左)奉納「天満宮」櫻井傳三</p> <p>(正面右)東群馬郡  (正面左)南無八幡天神  (左側面)青梨村□□□□  (台座右側面)奉造立石壇「明治元成歲」辰十  二月吉日「櫻井重兵衛</p>								

30	29	28	27
石垣	鳥居	燈籠(一对)	村名柱
		243・77・79	194・29・26
104本 前橋 同所	地名は小相木 遠州 森町 南下村 八十翁三(光力)書	(額)天満宮 (額の右側面)安政五年歳次「戊午四月良辰」 (右の台座裏「寄進」高崎「櫻井伴兵衛」世話) 村中 (右)六人の名前 (左)三人の名前	(正面)村社菅原神社 (右側面)明治四捨四年拾月廿一日内務省指定 (左側面)氏子中

公民館北

34	33	32	31
地藏菩薩	庚申塔	道祖神	庚申塔
25・19・13	77・33・10	72・38・30	82・40・28
無銘	(正面)庚申 (左側面)関根兼次郎	(正面)道祖神 (左側面)施主 北中	(正面)庚申塔 (右側面)寛政十三年庚申九月吉辰 (左側面)願主講中

八幡神社

42	41	40	39	38	37	36	35
石祠	富士講碑	庚申塔	庚申塔	庚申塔	手水鉢	鳥居	經典読誦塔
97・49・64	70・100・15	131・30・26	40・24・24	42・30・22	35・65・60	径・27	132・32・25
無銘	(正面)富士山 (裏)明治七年七月二日	(裏)青梨子村 (左側面)西上州群馬郡 (右側面)延寶八庚申年九月四日	(正面)二鶏二猿 奉造立為供養石塔願所 (正面左)嘉永七年六月(以下欠)	(正面)庚申		(右柱)大吉祥日 (左柱)子五戌辰年	(左側面)安永三甲午六月吉日「普門品講中

諏訪大明神

44	43
鳥居	庚申塔
273・径・21	117・90・31
(左柱左側面)當村下「施主」小池玄龍重郷 (三次郎)和田□□衛門 (施主組中)小池宇七「同丹五郎」同□七「同	(額)諏訪大明神「池泰重郷書」 (左柱右側面)奉造立氏子家内安全子孫繁生「 (裏)寛政十一龍□己未」講中廿六人」世話人 小池銀七 (左側面)四月吉祥日

53	52	51	50
二十二夜塔	輪廻塔	香籠上人椅像	庚申塔
150・30・24	228・65・67	99・28・24	125・52・24
(左側面)二十二夜供養 (台座正面)講中	(正面)如意輪觀音像 (右側面)文化六年巳十一月吉日 (左側面)文十八夫十月廿三日 真□妙□妙心妙祐譽□清尊唱□念佛尊□ 祐筆乃心四十八人明□尊妙幸	(台座正面)香籠上人 (裏)大正三年「十二月廿七日」桜井栄二郎	(裏)岬天文五庚申天十月吉日「施主」當村中

正法寺

49	48
庚申塔	道祖神
99・20・19	111・75・32
(正面)青面金剛尊	(正面)明和八子卯天「道祖神」九月吉祥日

清里小学校

47	46	45
石祠	石祠	石祠
51・31・59	68・33・50	106・44・71
無銘	無銘	(台座左側面)為二世安樂也 施主小池氏 (台座右側面)宝曆十一巳天七月吉日

7	6	5	4	3	2	1	番号
燈籠	石殿	秋葉大権現	石殿	双体道祖神	道祖神	鳥居	名称
	69・32・42	172・81・17	37・60・45	75・40・15	100・55・40	300・33	高・巾・厚
(正面)大正三年春三月		(正面)秋葉大権現	(右正面)五子年九月吉日 (左正面)當村 松下沢右衛門	(台座)前原村 (縁の欠損多し) (右正面)明和九甲申天 (左左面)十月吉祥日		(右正面)奉造立當社権現御寶前 (正面額)熊野山 (左正面)元禄五稔壬申孟夏一旬 施主前原村□氏	銘 文

熊野神社

青梨子町前原

55	54
念仏供養塔	三界万霊塔
139・27・30	91・42・33
(台座)念佛供養「為□□□」供捨五□	(正面)三界萬霊 (裏)享保十乙巳天「奉念佛供養塔」願主明 雲當□「十一月吉日

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
双体道祖神	道祖神	双体道祖神	道しるべ (六角)	石殿	石殿	石殿	石殿	石殿	石殿
67・33・21	112・58・64	47・34・15	88・径・22		148・44・44	74・55・60	84・59・61	77・54・60	77・47・78
(裏)安政五戊午歳八月吉日「松下治□□	(正面)道祖神 (裏)宝曆十四甲申年三月吉祥日	上部欠	(一面)經青梨子至駒寄村 (二面)經野良犬至渋川町 (三面)經金古町至桃井村 (四面)大正七年青梨子「前原」青年会 (五面)經金古町至高崎市 (六面)經総社町至前橋市	(正面)奉造立為求諸願 成就十倍 當所 前原村 松下傳右衛門	(正面)貞享二壬天 (鬼面あり) 奉納御寶前 十二月吉日		(正面)寛永六年癸未 前原村 文旋院 九月十九日		

24	23	22	21
地藏	石祠	巡拜塔 百八十八所	供養塔
	78・34・51	156・31・24	95・58・45
約七十基 内に「奉納」薬師尊「願主 石井」	(正面右)寛永二天 (正面左)酉五月吉日	(右側面)奉納百八十八ヶ所供養塔 (正面)聖観音像 (左側面)安永五丙申年八月吉日「櫻井金左衛門」	(正面)百萬遍供養塔 (裏)明和六己丑年「十一月吉日」願主念佛講中「智現

墓地

20
双体道祖神
75・42・24
(正面右)奉造立 (裏)□□□亥天七月吉日

住宅団地裏

19	18
二十二夜塔	道しるべ
282	60・19・15
(右側面)二十二夜供養塔 (左側面)嘉永七年歳在甲寅「八月吉日造立焉 (台座正面)女人講中	(正面右)北原村 (正面)經金古町至渋川町道 (正面左)金古町 (裏)御大典記念 前原青年会

集落センター



清野町

八幡宮

番号	名称	高・巾・厚	銘文
1	鳥居	268・径・25	(額)八幡宮 (右柱)享保十五庚戌印月吉日 (左柱)奉寄進鳥居一字 施主 笠井作兵衛 町田庄兵衛
2	神社名号柱	224・32・23	(正面)八幡宮 (右側面)群馬郡清里村大字野良犬 (左側面)昭和十四年七月十九日建立
3	燈籠(一对)	80・44・44	脚なし
4	手水鉢	40・52・52	

琴平神社

5	石祠	62・34・68	(正面)琴平神社 (右側面)明治三十年正月建之「野良犬村」氏子中
6	石祠	62・34・48	(正面)三峯神社 (左側面)明治三十年正月建之「野良犬村」氏子中

(正面)□ 榛名山「大権現

(右側面)明和九子辰天「正月吉日

(左側面)施主 村中

(右側面)天明六丙午年「正月吉日」施主村中

(右正面)熊野三山

(左正面)十二所大権現

(右側面)享保十七壬子天

(左側面)六月十六日「當村中」 施主

(正面右)八幡宮

(正面左)寛政□年三月七日

(左側面)□□村

(正面)金□□団

7	石祠	76・34・51	(正面)□ 榛名山「大権現
8	石祠	92・41・66	(右側面)明和九子辰天「正月吉日
9	石祠	67・30・53	(左側面)施主 村中
10	石祠	80・33・57	(右側面)天明六丙午年「正月吉日」施主村中
11	石碑	36・30・32	(右正面)熊野三山

八幡宮東

12	双体道祖神	72・64・19	(正面右)安永七戌戌五月十一日
13	石祠	92・38・70	(右側面)天明三年六月吉祥日 (左側面)野良犬村「村中」施主

集会所

18	17	16	15	14
念仏供養塔	馬頭観世音	庚申塔	二十三夜塔	供養塔
96・24・17	133・55・21	99・49・27	137・33・21	226・37・35
<p>(正面)奉造立地藏念佛供養 (正面左)子十月十一日</p> <p>(正面右)享保四天 (欠損アリ)</p>	<p>(正面)馬頭観世音 (裏)年龍集丁己孟冬土幹「當邸」高橋礪八郎 建之</p>	<p>(裏)文政四歳「辛巳之碁」建立 (台座正面)願主</p>	<p>(裏)生方家造立 (左側面)木□□独自薫□之 (右側面)安政□□九月一六日 (正面)二十三夜塔</p>	<p>(右側面)慶応二年歳建丙「寅三月二十一日」 (台座正面)職人中 (下台座左側面)廣馬場村八之海道「石工常蔵」 (台座左側面)間仁田権右衛門「世話人」木暮 鹿蔵「伊藤弥造」小暮成吉久一 (台座裏)十五人の名前 (台座右側面)十人の名前 巡次「伊勢宮」岡部富五郎「武蔵屋辰五郎」 寺木勘蔵「扇屋金五郎」松木和重郎「サクマ 福田亦市」□□佐藤富吉「九十屋職人中」 □子コ 住日重吉</p>

総社地区  
総社町野馬

番号	名称	高・巾・厚	銘文
1	光明真言塔	97・55・29	（右面）享保三己戌年 （左面）十二月 （台座）大念佛 （頭部欠） （右面）宝曆十三癸未歲十一月吉日辰日 （左面）普門品供養塔 （正面）安永三甲午年「道祖神」二月吉祥日 惣社巢鳥町同所野馬塚
2	地藏菩薩	100・44	（正面）千部供養塔 （裏面）延享元甲子歲施主「南無他法界平等利益」十一月六日 村中
3	經典読誦塔	80・39	（脚西）昭和四年十一月二十七日 （脚東）常夜燈 石井松太郎宿願「其他家内一同建之
4	道祖神		（正面）摩多離神 （裏面）安政五戊午年三月「行年二十八歳」福田□□建「世話村中
5	双体道祖神		他に地藏2 如意輪観音1 聖観音1 供養塔1 その他1
6	經典読誦塔	85・52・24	
7	燈籠（一对）	222	
8	摩多羅神	100・53・40	

総社町巢鳥

番号	名称	高・巾・厚	銘文
1	出羽三山塔	250・45・17	（正面）湯殿講碑 （左面）寛政四壬子年三月 （台座）合計二十名の名
2	馬頭観世音	114・50・38	（正面）享和二壬戌弥生良辰「惠七」浄圓
3	無縫塔	95・40	（正面）當庵弟二世金毛獅大和尚塔 （裏面）安永二己六月廿八日「明法明人」行話 拜立
4	月待塔	158・32・31	（右面）天保四癸巳歲「二月建之 （左面）地藏立像 （台座）女人講中「巢鳥町中」念佛カウ十四名の名
5	摩利支天	39・14	（正面）摩利支尊天
6	庚申塔	136・79・34	（左面）庚申塔 （裏面）寛政十二庚申歲「巢鳥町中
7	地藏菩薩	41・25・14	（正面）厄除開運地藏尊 立像
8	庚申塔	18・10・4	（正面）庚申
9	庚申塔	60・56・17	（正面）庚申塔「庚申」庚申「庚申」庚申 （裏面）明治三庚午「四月申日建之」狩野宗八 他四名

15	14	13	12	11	10
地藏菩薩	馬頭觀世音	馬頭觀世音	石垣	庚申塔	庚申塔
57・33・12	86・42・7	47・30・12	97・102・116	67・45・74	19・12・5
(裏面)昭和二年三月建之「笹沢松治郎」今井四郎治	(正面)立像 (正面)昭和四十八年十一月二十五日「馬頭觀世音」伊藤庄一之建	(正面)馬頭觀世音		(正面)明治十七年申十二月「庚申	(正面)庚申

総社町鍛冶町

6	5	4	3	2	1	番号
馬頭觀世音	馬頭觀世音	石祠	庚申塔	双体道祖神	地藏菩薩	名称
36・21・11	35・22・12	50・33・53	100・50・10	90・55・15	125・40・15	高・巾・厚
(正面)明治三十六年十二月「立像」佐藤多嘉之助	(正面)明治三十六年十二月「立像」佐藤忠之助	(八坂碑)	(裏面)寛政十二歳二月良辰	(正面)庚申塔	延命地藏尊 出口の子育地藏立像	銘文

11	10	9	8	7
馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音
59・29・16	39・32・19	45・34・17	32・22・8	36・21・10
(正面)寛保三年「立像」亥七月日	立像	(正面)安政五年「立像」四月吉日	立像	(正面)立像「願主佐藤氏

総社町粟島

神明宮

5	4	3	2	1	番号
庚申塔	庚申塔	石碑	石祠(天神)	大黒天	名称
110・97・16	138・37・21	38・43・16	65・24	72・40・41	高・巾・厚
(正面)庚申	青面金剛立像 (正面)正徳三年癸巳吉祥月	日一秋元候御居城之間有之「寛永十四歳 天明八申五月依「先例再之「川越候前絶 從御所一給則建之又伊勢殿移」此 地里正三雲長郷慎記	(正面)天神宮 (台座)明治三十一年「十一月廿五日」再建	大黒天像 (裏面)文久四甲子歳之月甲子日建之當所 虎 屋和助	銘文

12	11	10	9	8	7	6
岡象女命	經典誦誦塔	供養塔	供養塔	百番巡拜塔	廻國塔	庚申塔
103.54	160.68.42	115.68.30	135.80.35	142.90.35	140.100.44	56.46.44
(正面)安永四年「国象女命」乙未孟冬	(正面)吉祥 安永三甲午年「普門品供養」四月	(正面)月吉日 文化七庚午年「六十六部供養塔」二月吉日	(正面)供養塔「四月八日 清誓淨心」	(正面)月吉日 延享元甲子天「百番供養塔」十一月吉日 願主總社町	(正面)兵衛 寛保元辛酉天 回國「三月十有五日 惣社町大谷五」	(正面)庚申塔 (左面)寛政十二庚申霜月良辰「粟島講中建

光巖寺境内

14	13
力田遺愛碑	層塔
168.42.5	417.88.5
惟侯發政 思敢用光 決渠灌瀆 利川洋填	市重文 東覚寺層塔  上毛群馬郡力田遺愛碑 慶長七年壬寅秋九月廿二日 始城總社之邑也侯既卒富以干上毛群馬郡 數千畝無所受水九年甲辰凡獲田利為肥饒者計二 開通溝瀆利根引流凡獲田利為肥饒者計二 萬七千畝餘石於今固而有郡之事于老弟猶相與 續後侯子孫移封於他邦而勒其樹之侯廟前 謳謠其功德而不忘遂勒其事于老弟猶相與 以永示國愛方啓封 侯昔發政 思敢用光 決渠灌瀆 利川洋填

墓地内

21	20	19	18	17	16	15
燈籠	燈籠	供養塔	燈籠	墓碑	石碑	志朝公碑
185.45	195.75	300.100	205.58	141.98	135.97.7.5	180.110.13.5
(棹)明治十九年八月	(棹)石燈籠「元禄十丁己	(正面)為御先祖代々御菩提「觀光院玉妙心大姉	(右面)施主「阿部織部妻」施主「貞性院 (左面)安永四年十一月	(正面)昭和三十二年十月 秋元順朝銘文略	(正面)明治九年龍集丙子穀旦 銘文略	(正面)明治九年七月二十六日 銘文略 始播百穀 厥田惟良 制產有恒 以厚我鄉 民人所瞻 念是懿德 萬億豐年 惟侯之力 祠宇斯立 神鑒孔明 勒石永世 用垂頌聲 安永五年丙申十一月 百姓等建

25	24	23	22
多宝塔	宝塔	欠	六地藏石幢 (輪廻塔)
450.174	400.150		165.50
(正面)萬靈供養「先祖之靈 (側面)天正九年三月	(正面)皆維寬延三歲宿庚午卯月廿有二		逆修大旦那 道忠 明応四年乙卯九月二十四日

34	33	32	31	30	29	28
石祠(八坂)	石碑	燈籠(一对)	石祠	石祠	線香立	馬頭観世音
94・47・72	72・25・26	246・78・78	65・36・23	65・30・52	34・18・14	105・45
(正面)八坂大神 (側面)昭和四十八年七月「粟島町建之	(正面)総社町道路元標	(正面)御神燈 (左面)納主「総社町字野馬塚」石井松太郎全妻 石井フジ			(右面)明治四十四稔「十一月吉日」 (正面)奉納 (左面)安藤七三郎「近藤峯吉」田辺幸太郎	立像 明和九年

粟島地内

27	26
釈迦如来	聖観音
141・70	215・65
坐像	立像

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35
燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	燈籠
175・72	115・63	118・52	170・60	172・60	192・56	156・50	145・58	148・64	160・35	161・58	168・59
	正徳四年八月十四日 奉供石燈臺		正徳四年八月十四日 奉供石燈臺	奉献	奉献			寛保元年 奉献石燈籠一基 照尊院殿御廟前	寛保元年 奉献石燈籠兩墓	奉献石燈籠兩墓	

宝塔山古墳

55	54	53	52	51	50	49	48	47
墓塔(久朝)	墓塔(涼朝)	墓塔(喬知)	墓塔(富朝)	墓塔(長朝)	墓塔(泰朝)	墓塔(忠朝)	墓塔(喬房)	墓塔(喬求)
241・68	161・60	260・60	200・120	165・38	165・38	165・38	180・66	240・42
大膳完哲明久朝大居士 享德院殿從五位下 弘化四年十一月十九日	化城院殿從四位下拾遺神 関白但州刺史休院涼朝大居士 安永四年五月二十四日	兼但州吏喬知大居士 濟州院殿從四位下拾遺補 正德四年八月十四日	清巖院殿雲山元白大居士 明曆三年七月十七日	江月院殿巨岳元譽大居士 寬永七年八月二十九日	照尊院殿道哲泰大居士 寬永十九年十月二十三日	英長院殿性盛元心大居士 (宝永二年二月二十九日)	江都日比谷秩第五十才 房領武州川越城食祿六万石元文三才次成年九月五日夜而卒干 但州朝史智山義勇大居士 泰元院殿從五位下兼 元文三年九月五日	誠心院殿從五位下兼越州朝史義智實大居士兩靈

67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	58	57	56
燈籠	燈籠	燈籠	燈籠	墓塔	墓塔	墓塔	墓塔	石殿	墓塔	墓塔(礼朝)	墓塔(志朝)	墓塔(永朝)
	224・70	252・73	210・72	97・35	92・62		61・42	86・47	135・50	160・38	240・68	250・70
比企郡高麗郡入間郡埼玉郡足立郡榛澤郡村々名主百姓 奉獻 文化七年八月	奉獻 武州御領分 比企郡高麗郡入間郡埼玉郡足立榛澤	奉獻	奉獻(獻)備主 稻荷台 藤井久兵工	慶長五年十二月十九日 大沼越後藤原繁光之墓	寛政二年十一月 前轉脫畜靈	前轉輪畜靈 文政五年一月二十五日	宝曆四年十月十九日 前順淨畜靈		礼心叟道忠居士 寛永十九年十月二十四日	從四位秋元禮朝之墓 明治十六年六月十三日 從四位秋元禮朝之墓	明治九年七月二十六日 從四位秋元志朝之墓	文化七年七月九日 大隆院從四位大夫兼但州吏茲寛永朝大居士

81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68
墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	觀音菩薩 塔	地藏菩薩 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	燈籠 籠	燈籠 籠
122 ・ 35	220 ・ 140	190.5 ・ 105	172 ・ 122	210 ・ 107	250 ・ 95	305 ・ 90	165 ・ 65	140 ・ 82	280 ・ 140	200 ・ 97	246 ・ 112	218 ・ 75	260 ・ 72
享保十七壬子冬十月朔日 当寺第九世亮嶂智絶塔	富院十世法印晃覺之塔	元文五年五月四日寂 第十四世大僧都亮覺塔	安政三年歲次丙辰二月六日寂 無量光院大僧正秀順塔	昭和二年十月七日 佛乘院權大僧正觀順塔	大正三年五月三十一日 第十七世大僧都智順塔	明治二十年四月三十日 第十七世大僧都智順塔		十一世法印顯純塔 明和七年八月八日	十二世法印順海塔	第十四世權僧正廣順塔	明治十五年六月十七日 第十五世大悲院法印定順塔	奉獻 獻備主稻荷台村 藤井久右衛門 国府	奉獻 文化九年五月

5	4	3	2	1
地藏菩薩	聖觀音	道標	双体道祖神	題目塔
137 ・ 28 ・ 19	39	56 ・ 23	70 ・ 40 ・ 25	97 ・ 37 ・ 11
(正面)立像 (台座)宝曆「九年己」五月吉日	(正面)□□ 九月吉日 立像	(正面)右はるな 左白い王(わ) 同国分村	(右面)享保二十乙卯年「十二月吉日 (勘九郎地藏)	(正面)南無妙法蓮華經 坐像

総社町大屋敷

88	87	86	85	84	83	82
墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔	墓 塔
155 ・ 75	204 ・ 105	205 ・ 75	270 ・ 45	195 ・ 85	235 ・ 50	225 ・ 60
十九世僧正順良塔 昭和四年十二月	貞享五戊辰天一月十九日 四世法印亮俣塔	二世贈權僧正亮海塔 万治元戊戌天八月二十三日	初世法印亮應塔 慶長十八癸丑天五月十五日	五世法印公有塔	正徳六丙申天二月十七日 当寺七世堅者法印亮觀	享保十四年八月二日 当院第八世悲洞玄雄之墓 日課漸讀華經千部餘 享保十四乙酉天八月二日卒 每日念佛一万遍



総社町山王

2	1
馬鳴菩薩	石祠(天神)
146 84	62 32 59
<p>□□世話人」四名</p> <p>(正面)馬鳴菩薩立像 (左面)北辰靈符尊「惠園下田方拜書 (裏面)馬頭尊「毛鄙人竹崖高山敬書 (右面)秋葉大権現」法眼権律師行首拜書 (台座)絹笠大明神 慶應二年龍年「丙寅初夏吉辰 世話人」都丸善右衛門他五名</p>	<p>(裏面)天明七丁未年「七月十五日」願主村中</p>

12	11	10	9	8	7	6
馬頭觀世音	道標	道標	寒念仏塔	石祠(八坂)	庚申塔	月待塔
38 25 14	91 19 16	94 16 18	102		131 33 33	124 28 23
(正面)安永三年「九月吉日」立像	(正面)大正七年七月「大屋敷青年會	(正面)向「右群馬惣社驛」道「左大屋敷山王	(正面)地藏菩薩立像「延命地藏 (台座)寒念仏	(台座)八坂神社 (裏面)昭和十二年七月建之村中	(正面)庚申供養塔 (左面)享保十年乙己九月吉祥日 (台座)願主」村中	(正面)如意輪觀音半迦像 (右面)天保十五 <small>關逢</small> 除穢季秋穀旦 (台座)女人講中

10	9	8	7	6	5	4	3
虚空藏菩薩	石祠	一字一石塔	六観音	不動明王	富士講碑	石祠(天王)	淡島大明神
88 44 25	61 34 41	92 51 37	73 24.5 17	139 53 27	207 64 21	67 30 60	122 53 21
坐像		(裏面)元文萬年第五庚申十一月四日「南無自他法界平等利益」施主當村中 門品一石	(正面)享保十七壬子天 (右面)不動明王坐像 (左面)四月吉日「石和氏	(台正面)村中「女人講 (台左面)文政七年申年「十一月吉日	(台座)中先達「武内長左工門」都丸喜石工門 右エ門他二名の名「世話人」阿久津武 の名明治八年乙亥歲十一月吉日	(右面)寛政二戌十二月日 (正面)天王 (左面)村中	(右面)嘉永三年歲在庚戌春正月吉祥日「本村講中」定月議謹立之 (正面)淡島大明神「新田源道純拜書 (左面)女人講中

18	17	16	15	14	13	12	11
山 王 猿	出羽三山塔	道しるべ	国六十六部廻塔	石祠	石祠	二十二夜塔	庚申塔
64・53・45	35・26・23	61・30・25.5	101・82・34	98・54・83	101・53・61	80・27・23	120・49・27
坐像	(右面)安永三甲午天霜月吉日 (正面)湯殿山供養 (左面)願主 當村中	(西面)御即位記念「向テ右」総社町及元総社道「左國府村大字北原村」 (西面)大正四年十一月十日	(正面)當村願主「俗名木暮七良兵衛」天下泰平「享保二十一年」奉納大乘妙典日本廻國成就處「国土安穩丙辰天」戒名岩譽梅長大徳	(右面)為右意趣天者子孫繁昌 (正面)山奉請山王廿一社村「元禄六歳九月吉日	(正面)奇行井次品「□大上普□	(右面)寛政元年酉七月村中 (正面)如意輪觀音半迦思惟像 (左面)二十二夜待供養塔	(正面)立像「青面金剛菩薩」 (台座)元禄八歳寅九月吉日「二鶏二猿二十五人ほどの名

28	27	25	24	23	22	21	20	19
勢至菩薩	廻國塔	地藏菩薩	地藏菩薩	薬師如来	道しるべ	馬頭觀世音	双体道祖神	燈籠(一対)
					46・16・15	49・27・13	81・50・33	207
坐像	(正面)縁日七月十三日「六十六部供養塔」大正十三年三月建之	立像 子育地藏 (正面)天下和順日月曆明「南無阿弥陀佛」寂譽「風雨以時災魔不起	立像 子育地藏	(裏面)村中	(北面)向テ左耕	(西面)向テ右元総社村大渡「左総社町」 (南面)昌楽寺廻青年会	(正面)宝曆三癸酉歳「十一月吉日」	(右)享保六年辛「八月日」二十名ほどの名 (正面)奉納常夜塔 (左)慶応二歳九月吉日「都丸善右エ門信重」都丸清左エ門高親

總社町新田  
元景寺

番号	名称	高・巾・厚	銘文
1	境界石	140・43・30	(右)文政九戊戌歲十三代再建當寺十世無闕玄叟 (正面)不許葦酒入山門 (左)守護使不入地
2	經典誦誦塔	210・30・30	(右)氣雲山元景七世 (正面)經王一千部讀誦供養塔 (左)維時正愼條大龍以丙申春三月二十八日除月「大乘妙典一千部讀誦」長空月叟誌
3	燈籠	170・49・49	(脚)元文五庚申歲孟秋日「当山九世泰運代吉對施主同人 氏名が二十一人
4	墓塔	200・130・38	(正面)春光院殿氣山元景大居士 (左)天正十五年丁亥曆十一月十二日
5	宝篋印塔	350・100・100	(正面)宝篋印塔 (裏面)元景禪寺現任玄英叟代「享和三龍次癸亥穀旦
6	墓塔	150・30・30	(正面)寛永七庚午年「心窓院殿華月芳永大姉」 (左)維吾之曾祖考從五位下但馬守秋元氏藤原泰朝之母也雖不傳其氏而嘗葬送所用之乘輿之扉一片今尚在此寺画桐石菊為其紋也「今茲更造其位牌亦改削其石碑以使之不失其後監正德五乙未歲九月日孝孫武州川越城主伊賀守齋房奉祀

7	燈籠		(脚)心窓院殿逝有故不議葬礼多缺矣 初称華月芳永禪定尼濟川公贈院号改大姉而後正德五年立碑石「延享三年置祭田 寛政十一年造玉垣」享和三年建宝篋塔諡加殿字皆為薦冥福也「今茲文政九年八月墓前新設石灯籠一基以具廟制亦以徵先代追孝之道」云爾「秋元但馬守藤原久朝
8	地藏菩薩	152・25・16	立像
9	供養塔	170・50・15	(正面)圓舞見性院殿心生不処居士賞靈「南無大悲觀世音菩薩」元禄二己巳天十月十八日「施主」孝子敬白「松下惣太夫頼次
10	百万遍念仏塔	50・32	(正面)明和八辛卯十二月廿四日「百万遍」宝性地蔵像 鈴木敏松墓
11	石造地藏菩薩坐像	69.5・23・15	(正面)妙円 妙春 諸旦那敬白二位 地藏坐像 応永廿八年 八月廿四日(市重文)
12	薬師如来	45・35・15	(正面)文化十三丙子十月日 薬師如来坐像願主新田町木屋内
13	薬師如来	50・35・15	(正面)施主群馬清兵衛 薬師如来坐像 文化八辛未五月日
14	供養塔 (浅間焼供養)	190・56・35	(正面)天明四甲辰歲「奉書写大佛頂萬行首楞嚴神呪供養塔」七月初八日 (裏面)天明癸卯七月初八日山浅間百倍干尋常石火激発如烽且泥沙騰以烟而天色漸晴向午時瀨河暴発泥水漲数丈許怒涛狂奔而一時兩岸中流人畜魚龜蕩然如洗浮屍蔽河而下溺死豈鉅萬已哉嗚呼炎々火坑之狀獄苦誰加之也使我觸目傷心軀憶爰池入流之大士矣故書写首楞嚴王以伸供養仰冀浴項相涌出放光以出此業海洋泥速生彼千葉宝蓮中云爾元景十二世倫大道叟識焉

21	20	19	18	17	16	15
燈籠(一对)	供養塔	廻国塔	地藏菩薩	寒念仏供養塔	三界万靈塔	観音菩薩
	180・38・21	130・65・85	75・24・16	85・29・28	315・93・93	55・40・10
(脚)宝曆十庚辰季「奉猷御廣前」願生根岸氏 新田町根岸氏「三月吉祥日		(裏面)文政元戊寅歲六月敷旦 (正面)廻嶋供養塔 來世成佛碑者也	(右面)夫以道意亮恭居士者昔日在世之時頌課諸法觀音靈場雖然無供養塔今穀設供養造立這箇百塔而以此功德力願現當福壽 キヨ建 (裏面)昭和四十七年七月十二日「渡辺計次	(右面)元文元丙辰歲十月吉日「嘉一郎 (正面)寒念佛供養塔 (左面)文政九丙戌「善三郎」文化三丙寅五月「堅五」妻 (裏面)文化十一年甲戌正月「朝倉堅五良虎景	(右面)元文元丙辰歲十月吉日「嘉一郎 (正面)寒念佛供養塔 (左面)文政九丙戌「善三郎」文化三丙寅五月「堅五」妻 福岡勇次郎寄附者中島田助外四十名 文太郎「春山藤三郎」吉田権造「石工 明治二十五年壬辰年春三月吉日建立 真月妙光大姉「施主土井文太郎 木暮和五郎先租精靈「施主春山藤三郎 主福垣仙洲 本城主水頭「兩家累代精靈」同満定施 共成佛道 願以此功德普及於一切「我等與衆生皆 (基礎)有縁「三界萬靈等」無縁	(正面)合掌観音菩薩立像 (裏面)天保四癸巳七月吉日「村中

30	29	28	27	26
石段寄進標	水神塔	蚕神塔	薬師如来	庚申塔
300	160・100・15	170・75・55	70・20	120・65・20
(左)當社巫女「寄進周防 (右)延享元年「九月吉辰 (十一段あり)	(正面)昭和二年四月十五日「水天宮」町内中	(正面)昭和二年四月十五日「絹笠大神」町内中	薬師如来坐像	(正面)庚申 (左面)萬延元年庚申日建「蘭州川島達敬書施主猿谷六右衛門治暨

熊谷稻荷

25	24	23	22
手洗石	庚申塔	燈籠	宝妙法蓮華經塔
50・85	95・46・20	155・25	200・38・38
二月吉日	(側面)平田村施主「田中藤左衛門」奉寄進願主新田町「當山十一世代」宝曆十庚辰	青面金剛像 二鶏 三猿 浅倉國七	(右面)元景禪寺当現住牧牛代「淮衆八十六員首座台州 (正面)妙法蓮華經寶塔 (左面)講師越後沙門法龍興隆護建「享保六辛丑曆冬安居」宝塔施主「大久保村金屋九兵衛 (脚)元禄十六年癸未十一月吉日「施主新田町

31	經典読誦塔	83・28・26	(右面)元文五天庚申仲秋吉日「当院五世 清 圓法師 (正面)普門品一万巻供養塔
----	-------	----------	---

新田地内

32	結界石	95・27・24	(正面)群馬七郎左衛門源照儀
33	僧形地藏	63・80	僧形地藏菩薩坐像 (左面)元禄七天壬乙有同五日 (裏面)□永禪定門
34	僧形地藏	65・60・15	僧形地藏菩薩立像 (裏面)享保九庚辰歲「初秋七月廿二日」根岸 八左工門無縁「佛祈是立者也
35	双体道祖神	68・48	(正面)宝曆八歲寅台「正月十四日

元景寺墓地

36	馬頭観音塔	38・28・12	
37	馬頭観音塔	46・31・16	(正面)天明二年「寅三月吉日

他に熊谷稻荷に庚申が百三十七基

元景寺墓地

38	無縫塔	110・100	自然大和尚 開山
39	無縫塔	90・66	元景寺二世訣山東鎮大和禪師
40	無縫塔	100・70	元景寺三世瑞雲東鷲大和尚
41	無縫塔	34・32	元景寺四世揚国嶺播大和尚
42	無縫塔	160・82	缺松鎮大和尚(五世)
43	無縫塔	108・63	元景寺六世蘭峯觀芝大和尚
44	無縫塔	106・65	元景寺七世空月運長大和尚
45	無縫塔	41	
46	僧形地藏菩薩像	206・30	當山八世(鉄顔牧牛大和尚)
47	無縫塔	100	當山九世天量泰運大和尚
48	無縫塔	100	當山十世無閑喝玄大和尚
49	無縫塔	110	當山十一世放山梅光大和尚
50	無縫塔	115	當山十二世大道喝倫大和尚
51	無縫塔	125	當山十三世梅岩玄英大和尚

61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
墓 塔	石 殿	無 縫 塔	無 縫 塔	無 縫 塔	無 縫 塔	無 縫 塔	形 地蔵菩薩僧 像	無 縫 塔	無 縫 塔
101 ・ 30	135 ・ 56	167 ・	122 ・	139 ・	125 ・	91 ・	130 ・ 26	129 ・	122 ・
(裏面) 寛永十七年庚辰六月三日 (左面) 文化十二年乙亥春三月日秋元臣 大陽寺典膳藤原守盈増立之 元和四戊午正月二十七日	文化十二年三月 (正面) 蓮台院喜雲大階居士 峯照院月法正貞大姉 賜雲院昌山盛久居士 (右面) 大陽寺家先代墓三基名號曆年不分明 故今歳再改書千靈名新立石以為永世之 標	九月十三日 種田淨珍居士 新居仁左衛門	昭和五年七月二日 英嶽卓雄大和尚	明治三十年二月二五日 無錐卓堂大和尚 (十九世) 筆弟中	大正二年六月二五日 雲外仙州大和尚 (十八世)	當十七世滄海濃州大和尚	青白妙弥靈 (十六世日州東傳大和尚)	瑞雲拾五世頓良篤禪和尚	當山十五世泰雲高峯大和尚

69	68	67	66	65	64	63	62
墓 塔	墓 塔 (中島清兵衛)	地蔵菩薩座像	十一面觀音像	如意輪觀音像	墓 塔	宝性地蔵像 (百万遍) 像	石 殿
300 ・ 90	150 ・ 30	70 ・ 55	120 ・ 45	130 ・ 40	170 ・ 50	50 ・ 10	108 ・ 56
天明六年 元景十二世大道鳴倫叟誌焉 天明六集丙午歳孟秋愨意日 上野国群馬郡惣社町 施主中島直琳謹造之 群馬と言ふ姓は領主に対し多額の献金の功に 依り群馬の姓を許されたと言ふ。	天明六年 豊巖榮盛居士 中島清兵衛は前橋藩主松平大和守へ多額の財 宝を献上した功に依り苗字帯刀を許されたと いふ。	文政六年 (市重文応永の石仏) (別掲)	寛政三年九月十九日 妙顔知法大姉 三雲氏長御室	天和三年十二月四日 因成院殿寶相妙性大姉	天和三年十二月四日 宝永六巳歳八月二十三日	(正面) 延宝元癸丑歳十一月二十九日 月松院殿夢庭巖光居士 寿慶院殿啓巖貞長大姉 鈴木敏松墓	元和三年十二月 得勝内磨

總社町立石

立石橋東

1	番号	
馬頭觀音塔	名稱	
125・30	高・巾・厚	
銘		文
(側面) 文政七甲申拾月吉辰 (正面) 馬頭觀世音 (側面) 妙樂納書 (中台側面) 講中「當村 惣社町世話人		

諏訪神社

7	6	5	4	3	2
庚申塔	不動明王	藥師如來	二十二夜塔	鳥居	石祠 (衣笠大神)
130・47・40	140・91・100	36・31・16	123	1770・徑・24	240・60・127
(正面) 庚申塔 (側面) 寛政十二年十二月吉旦「當村中」					
(正面) 成田山「不動尊」當郭中 (裏面) 明治二十七年「十月吉日」建之「元景 卓堂謹書」世話人「八名					
藥師如來坐像 上部欠損 他立像四体					
(香台) 女人講中「奉納」文化四年丁卯三月吉日「願主了念」世話人四名 聖觀音半伽思惟像					
(正面) 正一位諏訪大明神 (左側) 寛永二八甲申天六月吉祥日植野村					
(正面) 衣笠大神 (台座) 惣郭中 (台座側面) 世話四人 (台座側面) 發起十三人					

總社町植野立石

諏訪神社

13	12	11	10	9	8
燈籠	庚申塔	百庚申	庚申塔	石祠	念仏供養塔
87・24	94・46・30		80・60・22	110・43・68	244・68・68
(脚) 明和元年甲申年六月吉祥日					
(裏面) 文久元年辛酉年三月吉日「小林八十吉他 五名					
(正面) 庚申塔「庚申」庚申「庚申」庚申 六十一基を確認					
(裏面) 延宝八年十一月吉日「村中」					
(西基礎) 町通地藏「二十四日」以下不明					
(東台座) 十方施主「一見衆生」滅罪生善「往生極樂 (南台座) 施主「立石堂主」禪心和尚「建立拜書 (西台座) 願以此功德平等施一切「南無阿彌陀佛」同父母菩提往生安樂國「觀誓」					
(側面) 南無地藏大菩薩 (側面) 南無地藏大菩薩 (正面) 天下和順日月清明 (側面) 南無阿彌陀佛 念佛 供養 元文 三年 五月 吉日					

21	20	19	18	17	16	15	14
石 祠	寒念仏塔	石 祠	石 祠	石 祠	燈 籠	狛 犬	旗 立 て
	71・24・22	83・40・76	79・44・67	69・28・46	210	79・62・32	184・24・30
(左)奉納山田早左エ門 (正面)稻荷大明神 (右)元禄六年九月吉日	(左)十月吉日 植野村 (正面)寒念仏供養	(右)明和六己丑年 (右)文久二壬戌年六月大吉日	(左)植野村中 琴平大権現という (正面)愛宕山	(右)明和四丁亥秋十一月大吉 (八幡大菩薩)	(脚)大正十二年四月十五日「御神燈」 (台座)二十六人の氏名 前橋市向町「石工本 田宮内	福岡石材店刻 金太郎七拾四歳「妻ウメ子七拾三歳」 前橋市総社町立石四五八山田 月吉日「祝金婚式記念」昭和五拾年四	(東面)明治四十三年四月吉日 (西面)植野村氏子中

1
甲子塔
270・39・11
(正面)大國主命 (裏面)明治四十四年三月中浣再建之當町中 天狗岩水利組合「庚申再建寄附連名」 十九名の名 發起九名の名 庚申塔が百五十一基

総社町桜が丘

27	26	25
双体道祖神	双体道祖神	顕彰碑
	55 20	133・43・43
	(右)明治廿八年七月吉日	(正面)豊城入彦命 (左)正三位刊部卿藤原朝臣貞直謹書

二子山古墳

24
石祠
88 66
(右)天保十四年八月吉日「発願主」榎田庄五郎「高橋原次郎 十二名」の氏名

植野勝山

23	22
石敢当	大日如来
113・70・70	44・26・15
	坐像

立石地内



14	13	12	11	10	9	8	7		5	4	3	2
薬師如来	大日如来	馬頭観世音	馬頭観世音	馬頭観世音	燈籠	大願成就	不動明王	地藏菩薩	水神塔	十二山神	地神塔	大天狗
43・27・11	93・66・34	44・28・15	50・27・15	49・20・11	202・48		106・71・17	42・29・13	69・34・20	44・36・11	38・45・16	51・29・19
薬師如来坐像 他に小石仏百基ほど 小不動明王三基	(正面) 明和四年「大日如来」六月十五日 (裏面) 寄進施主十一名の名	(正面) 明治十二年十一月十五日「立像」	(正面) 明治三十年三月廿一日「立像」平井桂五郎	(正面) 馬頭大士 (裏面) 明治十年八月三十日	(南面) 昭和十三年「三月吉日」	(北面) 日蓮宗信者一同「願主平井九工」 (東面) 御神燈	(正面) 昭和二十年十一月吉日「大願成就」 平井氏	(裏面) 明治十六癸未「十月吉日」當所諸社 (裏面) 文久三年酉亥六月吉日	(裏面) 明治三十年十月初一日建之「當村中」	(正面) 十二山神	(正面) 地神	(正面) 大天狗

9	8	7	6	5	4	3	2	1
石祠	石祠	孤(一对)	石祠	石碑	旗立	石燈籠	神社名	孤(一对)
88・48・60	69・42・67	99・42・24	138・60・75	44・19・16	205・24・31	200	286・37・29	51・43・21
(右面) 明治三年「歳在庚年」十一月良辰 (左面) 當所「願主」大井彦市	(右面) 明治三年「歳在庚年」十一月良辰 (左面) 當所「願主」大井彦市	(右面) 明治三年「歳在庚年」十一月良辰 (左面) 當所「願主」大井彦市	(正面) 蚕養嶺神社	(北面) 病氣全快「大願成就記念」 (南面) 昭和七年十二月廿六日「當村大谷綱彦」	(北面) 明治廿八年九月建 (南面) 當所氏子中	(脚) 大正十年十月十五日「御神燈」 (台) 納人當所「立見三四郎他十四人」納人當所「立見興三郎他十四人」 (台下) 前橋向町「石工本田宮内」	(正面) 村稻荷神社 (左面) 群馬郡惣社町大字植野村 (裏面) 染しみを広める菊の根分けかな「納人大谷トク	(左台座東面) 昭和貳年十月建之「永久記念社」 掌関口長吉 (右台座東面) 前橋市辨天通「間井田小三郎大谷之末子」

総社町植野  
一本木稻荷神社境内

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
秋葉大権現	手洗石	手洗石	石祠 (天神宮)	石祠	石祠	石祠(稻荷)	額	石碑	雷神塔	雷神塔
85・40・30	73・95・64	41・92・46	69・44・41	66・29・47	55・31・49	83・37・58	49・34・27	68・20・17	85・58・18	43・38・16
(左面)願主大井伊勢松	(右面)天保七年歲在「丙申二月吉日」 (正面)秋葉大権現 (左面)當所「願主」大井氏	(右面)安政六「年歲次」己未冬「十二月」良辰 (側面)前橋「汽罐機械製作所」全所主若林小市「製絲器械製造所」高全平常八 煉瓦製造所「崎全山口庄三郎	(左面)菅公「千年」祭紀念「明治三十三年寅年」十一月再建 (正面)天神宮 (右面)植野村中	(左面)植野村中 (右面)立方明治十四年「九月吉日」		(正面)正保「年十月」六日「関口	(正面)正一位稻荷大明神	(正面)神饌所	(正面)雷電王	(正面)雷電王「文久三癸亥」六月吉日

25	24	23	22	21
馬頭觀世音	双体道祖神	廻国塔 六十六部	宝塔	筆子塚
120・75・35	50 10	90 20	246	100・90・11
(台座)植野村中 (裏面)慶應四年歲次戊辰春三月上流建焉 (正面)馬頭尊「上岡武列當妙安玄明藏書		(裏面)元文五庚申天「天法山蓮心大德靈位七月二十五日」 (正面)六十六部供養	(右面)天明七丁未年「三月吉辰」 (台座)植野村中 (正面)寶德即陀羅尼經之功德廣大興不可謂矣有出羽之產釋清譽遊念者日本回国檢而寓上毛植野邑大谷氏之家而為納經供養常頭比塔造	(裏面)廿四年冬住植野村佛庵先生娶權幕臣大森邦典長女先生二男一女共天今夫妻俱住佛庵蔓次讀書援子弟同二十一年秋子弟為先生拍資建壽墓先生今老矣喜次為青山埋骨地「保岡亮吉選并書 (正面)愛縁重枝先生之墓「先生名敬照小寺豫三郎號愛縁考諱通敬称太平治本秋枝氏長州藩土萩人先生天保元年十月廿日生萩同十四年八月廿四日衷考幼弥先是詛母歲十八時安政中伏劍東行江戸就長州藩劍術師森重百合藏覺劍入川越藩儒官吾大父保岡嶺南翁覺儒維新后在職警視廳十七年矣明治廿三年秋粹東京來援前橋吾家同

共同墓地

1	番号	名 称	高・巾・厚	銘	文
庚申塔			190・82・77	(右面)元文五庚申天 (正面)高井郷「庚申供養塔」總村中 (左面)六月大吉祥日	

観音堂  
総社町高井

31	30	29	28
大黒天	青麻大明神	石祠 (天王宮)	地藏菩薩
50・35・35	65・32・28	67・32・59	93・33・22
他に庚申九基 青面尊二基	(台座)甲申大黒天 (正面)青麻大明神 (裏面)弘化五申年	(裏面)弘化三丙午年「六月吉日」植野村中 (正面)天王宮	(右面)宝曆十四甲申年 五月吉日 (台座)植野中

植野地内

27	26
念佛供養塔	百番巡拜塔
65・47・25	160・36・35
(右面)寛政九丁巳十一月吉日 (正面)如意輪観音供養 (左面)念佛講中「植野」講中	(正面)百番観世音供養塔「施主」敬白 (左面)元文五寅四月吉日 (台座)植野村九名「高井邑四名の名 如意輪観世音半迦思惟像

10	9	8	7	6	5	4	3	2	
寒念仏塔	地藏菩薩	地藏菩薩	地藏菩薩	地藏菩薩	庚申塔	二十二夜塔	二十三夜塔	日待塔	
96・25・19	82・30・23	73・26・16	44・18・14	86・28・17	96・47・20	137・31・25	91・61・37	128・35・34	
(右面)寛保元辛酉年十二月吉日 (正面)寒念佛供養塔 (台座)堀口六兵衛「高橋広口」石井□□同 嘉吉「広井」堀口「同」同「福嶋	立像 頭部欠	(裏面)元禄三庚午天□月吉日「高井郷」□□ 願主太兵衛 立像 頭部欠	立像 頭部欠 他に地藏三十六基	立像 頭部欠	(正面)青面金剛「立像」正徳四天五月吉日施主佑兵衛	(右面)嘉永四年歲次辛亥「九月二十二日建焉 (左面)二十二夜供養塔 (台座)女人講中	如意輪観音像 (右面)嘉永四年歲次辛亥「九月二十二日建焉 (左面)二十二夜供養塔 (台座)女人講中	(正面)文化紀元「廿三夜」甲子冬	(正面)延寶八年「奉造立」石塔壹個為日待供養也「庚申九月吉日」施主「敬白」 (左面)坂命日子「除衆闇事」無超月光満曜 若介者「福嶋次郎兵衛」同市右門同六 右工門「同八左工門」成弁乃至功德人 (裏面)施主等「一生安全」願「同相右門」 餘□□「同吉兵□□」同久兵□□「同相右門」 中沢九郎右門 也「覆六趣元昏衢積善」光敷昭四年道池局 同□左門「西群馬郡高井□□」小畑平右工門 同□左門「藤井架兵治」福嶋久左衛門

神明宮境内

19	18	17
鳥居	燈籠(一对)	旗立
323・ 径・ 33	149	213・ 24・ 30
(柱)大正式癸丑歲五月建之	(側面)文政六年歲次「己未二月吉日」御神鏡 (台座)當社「氏子中	(側面)明治卅年建「當郵氏子中

16	15	14	13	12	11
百番巡拝塔	三界万靈塔	名号塔	大神宮	經典誦誦塔	馬頭觀世音
78・ 29・ 25	65・ 29・ 24.5	95・ 27.5・ 25	58・ 43・ 32	155・ 28・ 23	85・ 48・ 11
(左面)高井村俗名小畑治兵衛 (正面)百番供養塔 (右面)明治五戊辛季十一月十二日	(左面)享保九申辰年十月二日 (正面)三界萬靈等 (右面)西蓮社花學淨円	(左面)眞誓淨念「入誓西念」樂善安心」石屋 孫兵衛 (右面)五千廻向佛「施主」當村中 (正面)天下和順「南無阿彌陀佛」日月清明 (左面)正徳五乙未天十月十六日	(正面)奉納大神宮	(正面)大乘妙典供養塔 (台座)寛保三年「十一月五日	(正面)馬頭觀世音 (裏面)明治四十五年三月吉辰高井村小畑一〇

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
石祠 (牛頭天王)	石祠(伊勢)	石祠	蚕神塔	石祠	石祠	石祠(稻荷)	石祠(衣笠宮)	狛犬(一对)	手洗石
62・ 29・ 52	84・ 44・ 61	67・ 25・ 25	35・ 22・ 15	92・ 43・ 78	58・ 30・ 51	61・ 32.5・ 59	115・ 75・ 81	98・ 79・ 45	70・ 56・ 48
(正面)津島牛頭天王	(正面)奉造立天照大神宮「寛永十九年壬午九月吉日		(正面)蠶影山大権現			(正面)稻荷大明神 (側面)西上州高井村「中沢九蔵右門		(裏面)石〇「駒寄村朝賀乙八」長岡村星野鉄造「前橋市樺澤國次 (右面)大正十五丙庚戌卯月十五日	(右面)安政六年歲建「己未二月吉日 (正面)奉獻御簀前 (左面)高井郷「施主」福島宗右衛門善剛

高井地内

31	30
石 祠	馬頭觀世音
	70・52・20
(左面)高井村 福嶋然兵之	(正面)大正十三年「馬頭觀世音」福嶋氏

元総社地区

元総社町

総社神社境内

番号	名称	高・巾・厚	銘文
1	石燈籠	278・102	(西) 竿南) 御神鏡 (竿北) 嘉永五年歲次「壬子暮春上浣 (台座南) 十七人の名前 (台座西) 世話人六人の名前 (東) 年号等竿の文字は西に同じ
2	石燈籠	278・102	(台座北) 惣社町「石工」福岡徳三郎「照里 (台座南) 當町「伊藤定吉」明吉「引間村」大 山藤左衛門「省門」當町「伊藤勇助」明郷
3	寄進記念塔	89・40・25	(正面) 奉寄進鳥居「梁井石階」総社大神「願 主」木部勘解由察信「享保三戊戌年四月吉日 (裏) 松田重衛「大正捨五年捨月捨日
4	顕彰碑	310・112・16	(正面) 奉納 (右側面) 御大典記念 (左側面) 昭和三年「十一月十五日
5	台石	74・161・133	(八角形) (西) 野石寄附「同郡金古駅」宮原菊 次郎 (東) 野石寄附「同郡金古駅」野村永作 (糸) 明治十四年四月吉日
6	神社名碑	340・49・42	(北正面) 大正十年十月十日寄進 (北正面上) 前橋市明治裁縫学校主「鈴木栄十 郎」文部省教員免許同校長「本多満」元群馬 縣師範学校教諭「松田福四郎」和歌山縣師範 学校教諭「松田金重
7	鳥居の台石	43 1 辺	

8	神輿の台	116・161・158	(東西) 寛保三年癸亥八月日「石倉
9	庚申塔	99・97・26	(正面) 庚申「遺刃法橋智則書 (裏) 明治二十年丁亥春「二十三人の名前
10	庚申塔	110・90・37	(正面) 猿田彦大神「清齋薰沐拜書 (裏) 明治二十丁亥歲「四月上章十渚灘日」建 立焉」上街連中
11	庚申塔	149・79・35	(正面) 猿田彦大神 (裏) 明治二十丁亥戌「四月良辰建立焉 (裏右側面) 中街連中
12	庚申塔	109・28・12	(正面) 猿田彦大神 (裏) 明治二十年四月良辰建立焉上原賢齋
13	板碑	40・18・2	応永四年卯のものか 左右に日月の形
14	石祠	67・37・40	
15	石祠	65・36・42	
16	石祠	82・45・76	(右側面) 上原家一統「赤い鉄鳥居大小付
17	六十六部廻国塔	116・70・33	(正面) 願主「峯常念」奉造立寄進鳥居「梁井 石階」總社大明神御社前「維時享保三戊戌年 四月吉日」誌日願主法師者「元惣社村」俗姓木 部勘解由為「六十」六州四国法華經供養「祈天 下泰平旅人快安
18	石祠(淡島)	63・41・52	(額部) 淡嶋社
19	石祠	69・47・71	

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
双体道祖神	双体道祖神	道祖神	双体道祖神	大山祇大神	双体道祖神	双体道祖神	双体道祖神	石祠	道祖神	庚申塔	道祖神	双体道祖神	双体道祖神	石殿
48・25・11	68・44・27	91・52・29	61・57・26	24・17・4	104・50・24	70・49・21	64・59・39	40・26・35	101・63・32	29・16・5	38・24・8	63・74・36	63・42・17	83・32・34
(正面)享保十二丁(園)天十一月□□	(正面)宝曆九年「七月吉日」	(正面)道祖神 (裏)寛政六寅「正月吉日」元惣社上町		(正面)大山祇大神 (裏)昭和廿一年「一月吉日」布施末一	場丁中 (正面)明和元甲申天十一月大吉日「元惣社馬場」	(正面)明治三庚年正月吉日「小鮎氏」		(正面)右慶応三卯「六月吉日」 (正面)左平田氏	(正面)文化元年甲辛歳三月「道祖神」藤忠敬書	(正面)猿田彦大神	(正面)奉納「昭和十八年」道祖神「石井氏」	(正面)右「天明元歳」中町「南たかさき」 (正面)左「□十二月吉日」	(正面)右「宝曆九巳卯天十二月吉日」 (正面)左「惣社前内手」	(正面)奉造立「□□□□」正九年「□□□□」

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38		37	36	35		
石祠	石祠	日待塔	石祠(稻荷)	石祠	石祠(稻荷)	石祠(稻荷)	石殿	石殿	黒髮社		社名碑	蚕神塔	庚申塔		
67・30・88	85・46・63	108・90・64	60・31・46	39・31・46	77・39・67	92・57・57	96・72・59	126・59・53	126・72・11			190・66・15	45・33・15		
(台座)上ノ下宿「安永四年」四月廿六日	(正面)右「奉造立石宮□□大権現」 (正面)左「慶安三(園)年十一月□□」	(台座)寛政九年巳四月吉祥日「日待講中」人名51名、世話係二名の名前	(稻荷)		(稻荷)	(稻荷)大正十年十一月三日「渡辺初吉」建立	余入 (裏)「一結衆」貞和五季己丑二月日「敬白」卅天正五丁丑八月吉日	(正面)奉法納惣社寶塔「湯浅」権正「貞堂」	(正面)黒髮山神社 (裏)明治三十四年二月建立「元惣社講中」		鳥仁作 (裏)組合創立者「登坂菊衛」前橋市庭師 矢	(裏)明治二十八年創立「群馬蠶業共愛組合」 (裏)大正四年三月建立 賛助員24名、有志者21名、組合員77名、世話人25人、幹事6人の合計153人の名前	書「群黄藤澤清鑄」	(正面)蠶影大神「從七位勳五等長屋鑄三郎謹書」	(正面)昭和十八年七月吉日「猿田彦大神」重田氏

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
石 祠	石 祠	鳥居の基礎	石 燈 籠	石 燈 籠	雨 滴 石	神輿の台石	石 燈 籠 一 対	石 祠	石 祠	石祠(天王)	石祠(天王)
55 ・ 38 ・ 51	90 ・ 48 ・ 53	56 ・ 57 ・ 35		271 ・ 115	112 ・ 142 ・ 13	138 ・ 158 ・ 158	259 ・ 69 ・ 69	66 ・ 37 ・ 52	59 ・ 29 ・ 42	83 ・ 38 ・ 63	80 ・ 37 ・ 59
		(北)明治十四年「四月良辰 (南)表鳥居「寄附連中」同世話人中 (一対)奉納	(竿)明治八乙亥年「九月吉日 人名55名、126名、52名、43名當所世話人清吉	(竿北西)菊城島淡拜書 (竿南西)文久四年歳在甲「子春三月吉日寄 進連名21名、世話人54名と0名、當所世話人 4名、願主伊香保一萬屋和吉」敬白「石工惣 社町」福田徳三郎照里		石倉 (正面)天文二丁己九月八日「奉寄進仰興臺」	二人の名前 (西側面)十一人の名前、世話人八人、發起人 (東側面)二十三人の名前 (西側面)十一人の名前、世話人八人、發起人	(右側面)阿弥陀寺「町中 (左側面)文化十四丁丑天」十一月吉日 (西側面)明治十年丁丑「一月吉日	(右側面)明治十一年「七月吉日 (左側面)上宮「中宿」内藤分	(天王宮) (天王宮)	(天王宮(側面)慶応三丁卯「三月吉日 (台座)下宿

69	68	67	66	65	64	63	62	61	60
置炭神事石	石 燈 籠	狛 犬	石 燈 籠	燈 籠	石 樋	石祠(庚申)	石 祠	石 祠	石 祠
(区)146 × 92 × 146 × 92	287 ・ 67 ・ 63	93 ・ 93 ・ 38	343 ・ 77 ・ 75	245 ・ 105 ・ 93	(台)75 ・ 78 ・ 97 厚3085	92 ・ 45 ・ 72	77 ・ 41 ・ 63	69 ・ 38 ・ 53	66 ・ 48 ・ 49
方形の石組	(竿)大正十年「三月建立 (台石)當所「中町」上原傳次郎「同キチ	(西)石工「本田長造 (東)當村「上原彦太郎」昭和十二年「十二月 十三日	(裏)職工「前橋市向町」石工本田宮内「とび 職」松本新蔵 (裏)納主「群馬郡惣社町」字野馬塚「石井松 太郎」妻「全」石井フジ	(東)竿「大正七年十二月十五日 (西)竿「御神燈 (裏)職工「前橋市向町」石工本田宮内「とび 職」松本新蔵	(東)人名二十人と二十五人、世話人二十人 前橋市芳町「製作人」橋本文治 九人、寄付者八人、昭和十七年十一月十日」	(正面)奉納 十月吉日 (正面)奉造立「甲庚供養祠」天文十一年「西側 面			(一対)昭和四十九年「十一月十五日」平井氏



70	石製ベンチ	31・186・44	(正面)佐波郡宮郷村宮子「井上治太郎」八十
----	-------	-----------	-----------------------

総社神社内御雲神社

78	鳥居	363 径30	昭和六十乙丑年十二月吉日建之「石工本田博康刻
77	手洗石	84 129 82	(正面)奉納「御神」前「明和四丁亥年」九月吉日「植野惣社新田町」新保一信拜上
76	鳥居	290 径25	(柱)奉納上野総社神社「宮司」内田門大夫 (柱)平成元年六月吉日「群馬町菅谷」本田博康「弘
75	石層塔	266	奉納「総社神社」宮司「内田門大夫」平成元年六月吉日
74	名号	128 32 26	(裏)昭和二十一年十一月二十三日「元総社村遺族」□□□□
73	石燈籠	153 53	(正面)御霊神社 (南)宮田石材
72	石製ベンチ	39 128 47	(一對)(北)宮司内田門大夫 (南)宮田石材
71	手洗石	60 89 51	(正面)奉納 (裏)区长他18人の名前

元総社町  
徳蔵寺境内

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
1	大日如来	95・83・31	銘文なし	
2	庚申塔	165・54・34	青面金剛像 一面六臂 二鶏三猿 (右側面)享保十甲寅歲十月吉日「馬場」新田	
3	馬頭観音	95・43・35	(正面)馬頭観世音「菊城島淡敬書 (右側面)施主「伊藤蔵之助 (左側面)安政四丁巳星九月吉日	
4	如意輪観音	77・31・27	如意輪観音像 (右側面)文化八辛未歲「五月日立之」 東内出 (左側面)講中「馬場町」金井早「新田町	
5	地藏菩薩坐像	76・34・18	銘文なし	
6	經典供養塔	111・44・31	(正面)寶曆六丙子天「讀誦普門品二十萬卷回向塔」四月吉日	

(裏)昭和四年十月三日建立  
(台座)当所1 中宿15 藤分7  
2 殿小路4 上下宿19 下宿7  
同 東内出4 金井町9 馬場10  
朝日町1 稲葉町2 石倉14 稲荷  
田野3 正親寺1 前原1 小八木1  
井野1 金尾四人講中 上石倉7  
秩父町1 山歌教導森サト 上濱尻村念佛講中  
岡田2 箱田1 應馬場1 高井1  
江田3 大屋敷1 植野1 井野1  
總社町1 駒寄村漆原1 大久保1  
木橋市23 ウナギ1 濱川1 村高1  
前橋市23 ウナギ1 駒寄村漆原1 大久保1

9	8	7
聖徳太子	巡拝塔	淡島様
123 95 10	165 40 39	353 66 66
<p>(正面)聖徳太子」法橋権少僧都智則書 (左側面)寛永六年歳次昭陽赤舊若首夏上流 (裏面)金二朱」越州ナホエツ高橋亀造」同 シハタ山口吉造」同同シヨ羽鳥万造」同同シヨ 中条倉造」同同シヨ仙八」同ウエノ」五郎 八」同右同シヨ今井長造」シハタ」岩造」同 同シヨ柳蔵造」同同」〇〇〇〇鈴木藤五郎」金 一分」當フシオカ山田國一郎」同フクシマ」 吉二郎」金三朱」イカホ堀」富吉」同」〇〇折 間蔵一郎」同」〇〇ハ」ラ」亀次良」同當町小坂 長兵衛」同カシヤ」〇〇栗山長吉」同」〇〇カハ齋藤 松五郎」同タツノ木股佐助」同カワシマ佐藤 鶴吉」同」〇〇分石井鉄五郎」同」〇〇〇〇温井松 五郎」同カワハラ平石千代吉」世話人」金一 分」カハ」〇〇タ大山鉄五郎」同越州ウエノ高井 喜譽松」同同ナカセ」ダ樋口藤助」同上シン</p>	<p>(正面)奉巡禮」秩父」坂東」西国」四国」供 養塔 (左側面)明和五戌子十一月」當村伊藤半右衛 門孝知」内藤分温井兵右衛門守春」総社町新 保蔵右衛門一信」當村伊藤清右衛門武元 (右側面)廣馬場村瀧澤吉右衛門</p>	<p>半田1 塚田村女人中二十八名 石倉3 浜 尻村世話人柳村クラ 貝沢1 當村1 立川 立川町黛翠山前橋市9 スワ町1 立川町 榎町10 横山町1 萱町1 連雀町2 神明 町1 南クルワ町1 古市2 世話人 当所5 江田1 西国分1 正観寺 1 鳥羽1 清原2 菅谷2 冷水1 小相 木1 大友3 金古町1 上日高3 高畑1 上石倉1 稻荷台1 前橋2 京目1 大久 保1 観音寺 小八木1 発起人16(数字は人数) (前面の石)奉納 昭和四年十月三日(前橋市) 石工黛石材店」納主」黛ちゑ」せん」貞子」 〇子</p>

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	
庚申塔	馬頭観世音	馬頭観世音	庚申塔	薬師如来	阿弥陀如来	馬頭観世音	釈迦如来	阿弥陀如来	三界万霊塔	石燈籠二対	十王像	不動明王	
32 17 10	49 29 14	64 35 20	58 31 16	56 39 6	61 44 22	40 20 10	63 45 17	69 45 20	58 33 20	145 61 61		88 51 15	
もとは石宮の中にあつた 三面	藤太	(裏面)明治十丁丑年十一月吉日」施主伊藤利 (正面)馬頭観世音像」明和九 辰八月吉日」 施主栗嶋町」小平」〇〇	(正面)青面金剛像	銘文なし	南北朝期	(正面)馬頭尊」明治三十一年一月」金井氏	南北朝期	南北朝期	(裏面)木村源吉」宝曆十二年五月 (正面)三界万 等	石燈籠二基」祈願成所」元総社村甘番」〇〇〇 石燈籠二基」御宝前」享保七寅 十月吉祥日」 (棹)奉寄進	10基あり(一体は別物)	銘文なし	デン大沢庄次郎」同」〇〇〇〇小山清松」同サ」 〇〇小池勘太郎」総連中」発起人」當町平林文 四郎

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
宝篋印塔	巡拝塔	宝篋印塔	宝篋印塔	十王	薬師如来	薬師如来	如意輪観音	地藏菩薩	地藏菩薩	地藏菩薩	薬師如来	石燈籠	石燈籠
110・46.7・46	86・30・24	71.2・33・32		21・21・13	22・24・11	26・24・15	35・28・11	15・13・9	24・12.5・9.5	25・15・7	29・24・9.5	145・67・67	227・62・62
銘文なし	秩父「西國」四國	応永十一歳「二月十六日	文化九壬申年「八月吉日」古平源右衛門「建之	銘文なし(11の十王像の内の一体)	銘文なし	銘文なし	銘文なし	銘文なし	銘文なし	銘文なし	銘文なし	(棟)文久四「年歳在甲」子春三「月吉日	(棟)敬白逆修石塔「一基」道本禅門「妙本禅尼」施主夫妻同心「明應五年丙辰中冬十九日敬白台座に馬の浮き彫り

7	6	5	4	3	2	1	番号
道祖神	石祠	双体道祖神	碑	手洗石	旗立て	旗立て	名称
100・81・26	90・41・61	66・53・26	183・72・14	42.5・68・45	137・25・16	138・31・21.5	高・巾・厚
(正面)道祖神 (左面)□□道八「享和紀元年酉初冬	(正面)殿小路 (正面)寛政十二庚申八月日	(正面)殿町「宝曆九己卯三月吉日	社司 馬場譽治郎以下二十七人 (元総社16石倉1総社3東国分1塚田1稻荷台1鳥羽1)	(正面)上野國總社社「柴田常恵 (裏面)昭和五年十一月二十四日建之 碑陰記 我惣社舊址從經 年所殆將歸廢滅 篤志者惜之膏諮 畫復興且建碑而 欲令知遺址尚可 尊後人其克護焉 豊国義孝 敬撰	(右面)嘉永四歳「戊午季麦」九月吉日「殿小路	(右)明治三十九年丙午歳十月二十一日 (左)納 天覽試合記念 (右)奉 昭和武道「昭和四年五月四日建」宮 内省剣道指定選士教士□	銘文

元総社町  
宮鍋様

16	道祖神	80・72・20	(正面)道祖神 (左面)明治十九戊午一月吉立
阿弥陀寺町地内			
15	庚申塔		<ul style="list-style-type: none"> <li>・奉造立千庚申供養 法眼権律師行音謹書</li> <li>・萬延元庚申中秋穀旦登坂清吉</li> <li>・寛政十二年庚申歲「正月吉日」宮田万右エ門</li> </ul>
14	石祠	69・45・49	(側面)昭和三十七年十一月廿一日「再建 殿 小路町」栗島町
13	不動明王	28・25・6	(正面)大正四年「不動尊」一月吉日 木村
12	馬頭觀世音	29・26・14	(正面)嘉永六年「立像」木村氏
11	馬頭觀世音	47・28・10	(正面)大正四年「老月吉日」馬頭觀世音」木村氏
10	庚申塔	43・31・6	(正面)猿田彦大神
9	燈籠	175・68・68	<p>(正面)常夜塔</p> <p>(左面)嘉永四念辛亥十一月八日</p> <p>(東台座)氏名 四十五人</p> <p>(西台座)新田 馬場 金井 内藤分 上宿町 中町 下町 東 阿弥陀寺 阿弥陀 寺 大友村世話人 栗島中 人名二 十一人</p>
8	双体道祖神	47・35・17	

25	地藏菩薩	119・34・22	立像 (裏面)正徳二年「四月六日」一家皆□ 成仏道」□父母成仏」仲沢太八
24	釈迦如来	116・23・20	立像 (裏面)釈迦如来
23	石祠(庚申)	77・67・77	(正面)延寶□年十二月十七日「阿弥陀寺村」 二猿「奉信待庚申神粟願
22	馬頭觀世音	38・24・12	(正面)文化四年天「立像」三月日」田野与七
21	馬頭觀世音	68・30・20	(正面)馬頭觀世音
20	塔(笠塔婆)		(正面)馬頭觀世音 (左面)文化九年「十一月吉日」木部儀八立
19	二十二夜塔	192・64・57	(正面)如意輪觀音半迦像「女人講中」阿弥陀 寺町」念佛講中 (裏面)文政二年歲在己卯二月二十二日建之
18	薬師如来坐像	53・38・21	(正面)百万返供養「文明五乙巳年九月十六日」 十方旦那「願主」忠則 (台座)天此供養「塔者如釋」刻于前面」天明 巳丑「所立也歴」救年来而」蓋跌俱旅 朱也唯身

化粧薬師

17	道しるべ	88・22・18	<p>(東面)向 右高井ヲ經テ渋川町ニ至ル</p> <p>左本村ヲ經テ金尾ニ至ル</p> <p>(南面)向 右前橋市ニ至ル</p> <p>左国府ヲ經テ金古町ニ至ル</p> <p>(北面)大正七年十一月建之」元総社村第三区 青年会</p>
----	------	----------	--

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	三大仏様	馬頭觀世音	念仏供養塔	馬頭觀世音	薬師如来	薬師如来	庚申塔	庚申塔	經典読誦塔	大日如来
28・19・9	66・52・15	50・24・8	47・25・12	133・90・27	36・28・12	90・53・35	44・15・12	43・16・11	46・27・15	46・28・13	44・44・12	26・22	45・27・14
(正面)馬頭觀世音	(正面)大正七年二月「馬頭觀世音」登坂氏		(正面)文政十三寅年「立像」二月廿七日 中沢氏	(正面)大乘妙法蓮華經「大万廣佛華嚴經大般若波羅密多經南無自他法界平等利益願主安樂秀賢律師」元文四己未十月二十五日造塔二十二人の名	(正面)馬頭觀世音	(正面)奉念仏供養「立像	立像	坐像	坐像	(正面)庚申塔	(正面)庚申「庚申」庚申	(正面)正徳三年「普門品三千觀納」仲沢新兵衛清勝	

47	46	45	44	43	42	41
庚申塔	地藏菩薩	馬頭觀世音	巡拝塔	馬頭觀世音	巡拝塔	二十二夜塔
93・47・22	83・29・19	68・56・35	100・29・24	220・138・43	102・46・33	236・73
背面金剛立像 三猿あり	立像 中町瀬下太七	(正面)寛政六寅□十月十九日「立像」元総社	(左面)寛政八丙辰十二月吉日 (右面)秩父三十四番「上宿中宿内藤分」如意輪觀音半迦思惟像	(裏面)百三人の名 世話人8 発起人3 (正面)馬頭尊 (右面)萬延紀元季龍集	(正面)西国「坂東」秩父「百番供養」施主同行二世安樂 (側面)	(側面)二十二夜 (側面)明治十三庚辰年「三月二十二日建之」明治十三庚辰年 (台座)女人講中 (台座)内藤分15 (台座)話人8 発起人18 中宿12 金井3 殿ノ町1 世話人6 御寄附「金貳圓拾五錢」前内出中 小路町「金貳圓拾五錢」上町 金貳圓林田五郎

四区公民館敷地

40
名号塔
109・60・21
(正面)南無妙法蓮華經 (裏面)明治二十四年十月建立「埼玉県武蔵国」北埼玉郡鴻巣村「施主松田長五郎」僧名日明「上大島村木暮三工」石工大原儀作

56	55	54	53	52	51
手洗石	而乗塔	葦酒塔	地藏菩薩	三界万霊塔	馬頭觀世音
81・75・48	177・38・15	153・38・24	81・27・16	114・90・48	50・28・14
識	(左面) 當山十八世從□海 謹拜 (正面) 而乗塔 (文面略) (右面) 文化八辛未年秋□ <small>(吉カ)</small> 祥日	(正面) 禁葦酒	立像 (裏面) 伊豆国「三島山法華寺弟子」願主透鉄龍関 (台座) 當村中	(裏面) 延享四丁卯天「三界萬霊等」十月初五日 (正面) 伊豆国「三島山法華寺弟子」願主透鉄龍関 (台座) 當村中	(正面) 明治三十二年「馬頭觀世音」八月三十日 富田氏

釈迦尊寺

50	49	48
道標	絵の五輪塔	地藏菩薩
55・53・13		120・38・22
(側面) 大正十寅年三月「元総社四区□□□□	(正面) 向 右東国分ヲ經テ金古町ニ至ル 後 本村ヲ經テ前橋市ニ至ル 左引間ヲ經テ金古町ニ至ル	

66	65	64	63	62	61	60
巡拝塔	三界万霊塔	十六夜塔	地藏菩薩	石幢	地藏菩薩	地藏菩薩
229・77・76	166・46・32	187・28・18	173・30・18	135・59・51	60・40・25	49・38・19
(裏面) 願主 小鮎十右衛門 (左面) 願主 我等與衆生皆共成佛道 (正面) 願主 秩父板東「普及於一切」西國 四國 (右面) 寛政四子十二月吉日 (正面) 寛政四子十二月吉日	(正面) 三界萬霊	(台座) 正徳□□十月吉日「十六日念佛供養願主 粟嶋町 下町中 地藏立像	(台座) 堂社巡礼「佛三弁」成就供養所「正徳四甲午稔」八月到彼岸「元総社(利)氏名十六人 立像	(棹) 寛延元戊辰七月吉日 以下不明 (六地藏石幢)	坐像	坐像

昌樂寺境内

59	58	57
燈籠	薬師如来	石殿
136・75・65	67・44・17	88・56・62
(棹) 献燈	立像 他に小薬師6 宝珠11 丸石3	(正面) 奉造立管東説代「寛永十四丁丑霜月日

カインズホーム裏

67	68	69	70
巡 拜 塔	地 藏 菩 薩	馬 頭 觀 世 音	二 十 二 夜 塔
220 ・ 74 ・ 74	156 ・ 45 ・ 30	44 ・ 34 ・ 12	126 ・ 31 ・ 27
(右面)奉納二百三十三所 (正面)供養塔 (左面)66に同じ (裏面)先祖代々供養「天明七丁未十二月吉日」 小鮒幸右衛門	(台座)正徳元年「一万日回向所」施主 都木 氏「三左衛門」権兵衛	(正面)明治廿年□月吉日「馬頭尊」願主 都 木氏	(右面)當栗鳴町「廿二夜待供養塔」念佛講中 (正面)如意輪觀音半迦像 (左面)寛政十一未十二月吉日

阿弥陀寺町公会堂内

71
石祠(稻荷)
59 ・ 31 ・ 46

大渡町

王守神社

3	2	1	番号
燈 籠	手 洗 石	鳥 居	名 称
215 ・ 61 ・ 61	41 ・ 31 ・ 20	206 ・ 径17	高 巾 厚
(正面)御神燈 奉納 (台座左)昭和十二年十一月二十八日 小澤馬 吉 他三名		(右脚)寛保二壬戌年五月五日	銘  文

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
薬師如来	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	坐 像	双体道祖神	石 祠	石 祠	梵 網 塔	石 殿	弁 財 天
64 ・ 25 ・ 15	49 ・ 26 ・ 15	42 ・ 29 ・ 8		73 ・ 37 ・ 20	40 ・ 43 ・ 19	49 ・ 36 ・ 17	34 ・ 30 ・ 40	75 ・ 36 ・ 67	82 ・ 24 ・ 22	36 ・ 33 ・ 30	58 ・ 22 ・ 15
(正面)立像 (左面)薬師瑠璃光如来本願功德経一字一石	(右面)宮毘羅大将 伐折羅大将 迷企羅大将 安底羅大将 頰備羅大将 珊底羅大将 因達羅大将 波夷羅大将 摩虎羅大将 真達羅大将 招杜羅大将 毘羯羅大将	(正面)馬頭觀世音「姓原松五郎	(正面)享保十乙巳年「馬頭觀世音」霜月十日				(右面)文化八年 未六月 (左面)大渡村		(正面)梵網塔 (左面)寶曆三癸酉□文月吉辰	(正面)二鶏二猿に日月 (右面)一字 一石	(正面)弁財天

16	百番巡拜塔	162・52・52	(右面) 六字幸口陀羅尼「破惠業障陀羅尼」消 (正面) 伏毒害陀羅尼 (左面) 大佛頂萬行尊積嚴塔「一字」一石 消災妙音神陀羅尼「佛頂尊勝陀羅尼」大 悲園滿無碍神咒 蛙原清右衛門他五名 (裏面) 延享乙丑大「十一月吉良辰 秩父板東」西國「百番供養 (台座)
----	-------	-----------	--

大渡競輪場駐車場

17	王山大神	56・41・9	(正面) 如□月光明「南無妙法蓮華經奉勸請王 山大神」能除諸幽冥 (裏面) 昭和十九年「捨式月吉日」福嶋氏之建
18	題目塔	41・23・8	(正面) 南無法蓮華經陀羅尼
19	八坂神社		(正面) 八坂神社 (裏面) 奉納「天下太平元年六月十五日」九百 十五年前「昭和十四年十一月」小澤馬 吉 (元) 岩神町前橋工業高校の所にあつ た。小沢氏の屋敷の南西に八坂神社があ り、今は北東の鬼門除けに立ててい る

大友町

大友神社(鏡宮大明神)境内

1	石祠(雷電)	99・50・65	(正面) 雷電宮 (左面) 明治十二年「七月吉日」施主 村中
2	地藏菩薩	70・40・24	半迦思惟像

14	石祠	38・26・23	
13	双体道祖神	54・38・10	(正面) □保元年 □ □ 十二月吉日「立像」當村家 狩野氏如孝
12	双体道祖神	58・36・16	
11	石祠	110・53・60	
10	庚申塔	42・30・10	(正面) 昭和六年七□「猿田彦大神」城田氏
9	諏訪大明神	35・26・8	(正面) 昭和六年七月吉日「諏訪大明神」城田氏
8	馬頭觀世音	95・64・15	(正面) 馬頭尊「權少講師長尾智寛敬書 (裏面) 明治三十一年三月日」發起人 岩丸反吉 城田佐重郎 狩野甚作 森駒吉 松村治郎平 狩野喜平 惣村中
7	燈籠	148・43・43	
6	淡島大明神	64・37・22	女 (裏面) 元治元年甲子九月吉日「願主岡部里喜 (正面) 淡島大明神
5	石祠	54・28・44	(側面) 明治五申年「六月吉日
4	子安觀音	101・35・19	
3	二十二夜塔	159.5・49・19	如意輪觀音半迦思惟像 (台座) 寛政六甲寅十月吉祥日「二十二夜供養塔」世話人城田永七 篠崎定七 施主 村女中



24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
碑	鳥居	手洗石	狛犬(二対)	燈籠(二対)	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
156 26 23	292 径25	39 55	70 55 29	230 76 76	69 46 59	69 41 63	57 44 48	46 39 41	42 26 44
(側面)昭和三年十一月十日・氏子中建之	(正面)御大典記念 (左脚)正徳五乙未歲四月吉祥日 (右脚)奉建立施主大友村中	(側面)明治二十一年八月吉日「願主 天笠ヤノ女」	(正面)漱 奉納 (側面)明治二十一年八月吉日「願主 天笠ヤノ女」	(台座)昭和十五年十月九日納「奉納者 狩野伊作一狩野喜代志 狩野茂 狩野光 狩野君雄 紀元二千六百申紀念 立川町黛石材店」	(台座)昭和六年四月八日「横浜市 森政次郎 森傳三郎」				

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
如意輪觀音	庚申塔	愛宕大権現	庚申塔	石祠(庚申)	石祠(庚申)	念仏供養塔	馬頭觀世音	馬頭觀世音	石祠	馬頭觀世音	庚申塔
60 27 20	60 35 19	103 39 30	42 33 11	63 39 64	70 55 56	62 35 25	66 40 26	72 48 27	29 20 8	81 50 33	102 75
半迦思惟像	(裏面)天保十二年丑二月「願主鶴沢増藏」 (正面)庚申塔	(正面)愛宕大権現 (側面)文化十三年龍集丙子春正月吉日	(正面)庚申塔	(正面)二鶏と二猿	(正面)二鶏と二猿 (左面)明曆二年拾月二日	(裏面)元文三戊午文 正月吉日 長兵衛 七助 清八 半六 七助 半七 同行六人 (正面)寒念佛供養塔	(正面)文政二卯年七月□日立 村中 右大渡 左野だ	(正面)文政二卯年七月□日立 立像「七月吉日 他に小地藏8」		(正面)寛政八年丙辰五月吉祥日「立像」施主 村中	(正面)庚申塔 (左面)文化三年丙寅十一月吉日 (裏面)城田「同藤蔵」岩丸幸助「同誠十郎天笠和田蔵」森留□工門「金井□信沢八十八

長見寺

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
門 柱	庚 申 塔	光明 真言 塔	經典 誦誦 塔	經典 誦誦 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	板 碑	板 碑	板 碑	仏 像
237 ・ 36 ・ 33		99 ・ 59 ・ 34	70 ・ 43 ・ 33	86 ・ 50 ・ 21		120 ・ 39 ・ 20	53 ・ 26 ・ 2.5	92 ・ 26 ・ 2.5	50 ・ 30 ・ 2	62 ・ 20
(右)天台宗寺門派 昭和四年拾二月建立之 (左)長尾山長見寺 富寺十四世法橋智忠代	(正面)青面王 (側面)萬延元年庚申十二月「世話人」總郎中「 岩丸金七以下九人	(正面) 光明真言十千萬遍供養 寛保二壬戌年「光明真言十千萬遍供養 塔」九月吉祥日」施主 村中	(正面) 大般若経塔	(正面) 普門品供養塔 (裏面) 安永九庚子歲霜月吉日	(正面) 延享四丁卯「青面金剛供塔」十二月吉 日 下は三猿	(正面) 元禄二己巳年「奉供養庚申二世安樂九 月吉日	板碑	板碑	板碑	

61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
石祠(庚申)	三 尊	馬頭 觀世 音	馬頭 觀世 音	庚 申 塔	庚 申 塔	水 天 宮	馬頭 觀世 音	豐受 比賣 神	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔	庚 申 塔
67 ・ 58 ・ 61	15 ・ 24 ・ 8	36 ・ 25 ・ 14	38 ・ 27 ・ 12	47 ・ 31 ・ 7	53 ・ 28 ・ 4	51 ・ 25 ・ 14	43 ・ 25 ・ 7	89 ・ 66 ・ 11	60 ・ 35 ・ 13	39 ・ 19 ・ 12	93 ・ 31 ・ 18	48 ・ 32 ・ 12	42 ・ 24 ・ 8
(正面)二鶏と二猿				(正面)明治四十三年「猿田彦大神」二月吉日	(正面)時明治四十三年三月二十九日「猿田彦 大神」平井一統建之	(正面)水天宮	(正面)明治卅年三月吉日「馬頭觀世音」岩丸 氏	(正面)大正四年九月建之「豐受比賣大神	(正面)明治十六年「庚申塔」未三月吉日 平 井氏	(正面)庚申	(左面)文久三年十月建之 (正面)庚申塔	(右面)明治十六末年三月吉日 (正面)庚申塔「平井氏	(正面)明治十六年三月吉日「庚申塔」平井氏

大友町地内

菅原神社  
下石倉

8	7	6	5	4	3	2	1
石燈籠	鳥居	旗竿石	庚申塔	双体道祖神	由緒書	名号	石橋
220	256 径25		180 100 47	82 100 40	36 73 6	293 42 35	78 272 225
(台座)當村中 (竿裏)天治二乙丑年「正月吉祥日」	(額)天満宮 (額側面)宝曆三癸酉天「九月二十三日」 (竿正面)常夜燈	(裏)昭和三年十一月吉日 氏子中(左右同文) (正面)御神社記念 群馬縣會議長都木重五郎 謹書(左右同文)	(裏)寛政四年安去莫春「願主村中」 (正面)庚申塔	(裏)寛政十一回未年「三月吉日」村中 (正面)玉垣 手水舎「建設委員」委員長 都木重五郎「他七名の名前」昭和三年十一月十日「近藤八郎書		(裏)寄進 元総社村長□職中 福田徳太郎「御即位記念 大正十四年二月□□指定」昭和三年十一月建之 (正面)菅原神社 子爵前田利□書	(西)大正十二年七月二十五日「氏子中 (東)刻小峯光明 六枚の床板 側面に梅の文様

17	16	15	14	13	12	11	10	9
石殿	石殿	三峰神社	石祠	手水盤	石硯	狛犬	石燈籠	石燈籠
79 52 64	94 49 64	110 36 8	85 47 66	84 111 66	150 62 13	79 58 29	205	206
		(正面)三峰神社「碧雲敬書」下に狐の絵 (裏)明治四十三年九月「納主都木嘉六」 (台座)當村中	(額)八坂神社 (右側面)明治三十六年「七月吉日」	(右側面)御大禮記念「昭和三年十一月十日」 石工小峯織三郎「大工本多百三郎」 (左側面)水鉢 寄附者芳名 十五名の名前 (裏)二十八名の名前	(正面)奉納「平成元年一月十五日」本田石材 (台座裏)昭和三年「十一月十日」須田茂平治	(一對)(台座正面)奉納 (基礎裏)石倉新道青年勇進會「下石倉青年尚徳會	(一對)(竿正面)御神燈 (竿裏)大正十三年一月廿六日 (台座正面)奉納 (基礎正面)御成婚記念 (基礎裏)石倉新道青年勇進會「下石倉青年尚徳會	(竿正面)常夜燈 (竿裏)大正十四乙丑年「三月七日」 (台座正面)奉納 (台座裏)御燈門料「一、金貳拾五圓也」一、十七歳記念「當村」一、十七歳都木嘉六「一、十五歳都木ナミ

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
經典読誦塔	三界万霊塔	石 祠	庚 申 塔	庚 申 塔	地蔵菩薩	庚 申 塔	仏 像	石 祠	石 殿	石 祠	石 殿	庚 申 塔
82・33・25	95・43・25	101・46・78	80・26・21	37・28・13	37・14・10	44・28・19	67・27・15	50・30・43	82・46・43	94・49・54	102・51・50	35・19・10
(左側面)十月吉祥日 願主一圓未	(右側面)明和五年戊子宿新田村 (正面)奉納大乘妙典供養	(正面)三界萬靈有無霊 (左側面)享保十八癸丑九月吉日「施主當村中」 (右側面)當村中	(裏)施主六人の名前 日 (正面)享保元年「奉造立庚申供養」申十月吉日	(一部欠損)		(正面)庚申塔	勢至菩薩?			(欠損あり)		(正面)□□三年「 <small>彦</small> 田彦大神(上部欠損)

1	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
鳥居	如意輪観音	地蔵菩薩	石殿	阿弥陀如来	馬頭観世音	地蔵菩薩	馬頭観世音	地蔵菩薩	馬頭観世音	馬頭観世音	地蔵菩薩	馬頭観世音
350 径30	150・30・23	163・34・20	114・62・58	66・20・14	43・23・16	51・22・13	44・25・12	37・23・15	42・24・13	64・26・17	27・12・10	57・24・15
(右脚)御即位記念 (左脚)昭和三年十一月十日 氏子中	文政七甲歳「四月吉日建		(台座)地蔵尊		寛政七壬歳「十一月吉日							

神明宮境内  
石倉町

9	8	7	6	5	4	3	2
庚申塔	狛犬	燈籠	双体道祖神	石祠	手洗石	旗棹立	社名碑
	68・56・29	197・71・71	65・37・18	59・36・37	93・73・56	199・33・24	204・31・25
百四基 庚申八十九基 青面王十二基 青面金剛像一基 青面尊一基	(右台座) 皇紀二千六百年紀念「發起人 齊藤邦太郎他二名 十七名の名」 參宮者參拜順「明治三十一年三月齊藤和三吉以下十七名」	(左台座) 氏子中 (左裏面) 大正十三甲子年 一月二十六日 (左面) 御成婚紀念 (正面) 常夜燈 (右面) 文化元甲子年「六月吉祥日」		(正面) 道祖神	(正面) 奉納 (左面) 參宮者連名 明治八年一月 淺見氏以下三十五名 發起人福田德太郎以下三名	(右面) 伊勢參宮紀念「大正拾參稔」壹月貳拾六日「建代」 (正面) 明治廿三庚寅年「九月吉日建之」當村中	(正面) 神明宮 (裏面) 昭和十五年十一月十日「上石倉農事實行組合 十周年 建之」

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
庚申塔	庚申塔	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠(三峯)	石祠(淡島)	石祠(秋葉)
103・56・36	123・50・42	29・15・18	69・37・59	65・29・49	34・24・35	66・35・51	59・42・49	70・32・46	101・40・68	90・44・75
(正面) 庚申塔 即明書 (裏面) 安永六丁酉四月吉祥日	(左面) 天保十三壬寅「四月十一日」 (正面) 庚申塔 (右面) 願主 村中					(正面) 日月の形 奉造立飯倉白天子供養 □「寛文七丁未年十月十七日」□□敬白		(裏面) 昭和三十九年四月三峯講一同建之 (台座前) 當村中	(正面) 淡島宮 (台座右) 明治九年「丙子初夏」吉日建之	(正面) 秋葉山 (右面) 維時「文久二」壬戌年「四月」 (左面) 世話人「淺見榮五郎 他二人」 (台座) 願主「當村中」

24	23	22	21
蚕神塔	三峯大権現	石尊大権現	寶登山大権現
155・65・12	103・83・21	103・63・31	90・37・15
合 (裏面)昭和十八年四月十五日「上石倉供繭組」	(正面)蠶影大神	(正面)石尊大権現 (左面)施主 村中	(正面)寶登山大権現 (左面)願主 邑中 (裏面)慶応二丙寅年「四月建」

石倉五丁目

25
阿弥陀如来
48・24・15
坐像

下石倉

27	26
燈籠	薬師如来
130・38・38	36
(棹)延享元甲子天九月十一日 木暮氏	坐像 (二月八日の旗)

石倉町  
林倉寺

8	7	6	5	4	3	2	1
馬頭観世音	石祠(庚申)	念仏供養塔	三界万霊塔	馬頭観世音	百番供養塔	月待塔	地藏菩薩
75・72・12	115・54・68		126・52・32	92・46・31	115・40・32	167・36・33	210・50・46
(文化八辛未年)畜生為菩提「願主 温井重二郎	村中 三猿 (正面)奉造立庚申供養「一字」現當二世處 干時元禄九丙子天「霜月吉辰」願主石倉	(右面)念佛講供養 (台座)延享五戊辰歲「四月吉祥日	(右面)享保三戊戌三月日「義譽蓮鉄	(右面)弘化二乙丑年「正月吉祥日 (正面)馬頭観世音 (左面)願主「當邨」浅見氏	(右面)明和四丁亥年十一月吉日 (正面)百番供養塔 真峯圓如 (台座)女人講中	(右面)文政十歲次丁亥「十一月吉祥日 (正面)如意輪観音半迦思惟像	坐像 (台座)願主 當院二十一世醫者法印香昌 願以此功德「普及於一切」我等與衆生「皆共成佛道」 為「兩節兩親」 文久二歲「次壬戌年」仲冬穀旦

16	15	14	13	12	11	10	9
石祠(山王)	百番巡拝塔	六地藏	一字一石塔	六地藏石幢	巡拝塔	六十六部廻国塔	石殿
97・61・73	121・35・34	80・26・15	112・30・32	151・95	130・34・31	160・33・33	98・58・56
(内部の板)山王権現 (台座)當院「廿二世」香禪代「再建 (裏面)嘉永七甲寅年」九月吉祥日「願主 門」香昌	(裏面)正徳元壬卯十二月吉日 台座に十七名の名 (右面)及至普門 (正面)南無觀世音菩薩 (左面)奉巡礼秩父坂東西国百番「回国二世安 楽	六体 (右面)宝曆十二壬午天四月吉辰 (正面)大乘妙典 一石一字 供養塔 (左面)慧海謹書	(脚)施主内藤新田村「木暮照左衛門」	(右面)願以此功德 普及於一切「我等與衆生」 皆共成佛道 (正面)大乘妙典 日本回国 供養塔 (左面)弘化二歲次乙巳「九月吉祥日 (台座)當邨行者」高津倉八「同志	(裏面)造立 享保十八癸丑天仲冬吉日 十名の連名 (右面)願以此功德 普及於一切「我等與衆生」 皆共成佛道 (正面)奉納大乘妙典六十六部供養所 (左面)於我普所願「今者已満足」化一切衆生」 皆令入佛道	(右面)願以此功德 普及於一切「我等與衆生」 皆共成佛道	

5	4	3
笠塔婆	大日如来	阿弥陀如来
82・44・21	74・56・27	68・40・24
阿弥陀三尊 坐像(市重文)	坐像(市重文)	坐像

鳥羽町東部公民館内

2	1
宝篋印塔	五輪塔
175・50・51	146・58
	(基礎)右志者一結諸衆「參為或先忘滅」或 各々逆修者也「酬願七分全徳出離衆生 法界平等敬白」応永廿五年戊戌二月十 五日(市重文)

鳥羽町  
大福寺

19	18	17
地藏	大日如来	經典読誦塔
	60・27・19	115・42
身代り地藏 頭部欠 他に地藏一 観音二	(裏面)享保十六辛亥「甲八月八日」信心施主 石倉村中	(右面)乃至普潤「於板」宝永五戊子九月吉日 (正面)奉読誦大乘妙典千部処 (左面)古精勤吉意趣者天長一地久処敏尔昌信 心願主道「者念文母離昔得業遠日」 (裏面)祈子篠寿福繁栄福 上州群馬郡石倉村「貫井兵右衛門藤貞

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
蚕 神 塔	手 洗 石	燈 籠	石 祠(菅原)	石 祠(八坂)	燈 籠	庚 申 塔	馬 頭 觀 世 音	庚 申 塔	庚 申 塔	百 番 巡 拜 塔
199 77 11	49 70 45	117 46 48	82 53 68	71 41 52	93 37 37	121 41 25		46 38 15	29 32 8	77 40 25
(裏面)大正八年四月建之 金井藤太郎以下四 十人 発起人九人	(正面)蠶 靈大神 (裏面)奉獻 (左面)女人講中	(右面)明治十年一月吉辰 月吉日 (棹)奉納御廣前「村中」 文化四年丁卯年 八		(右面)文政三「寅辰」六月吉日 (左面)村中		青面金剛立像 二鶏 二猿に日月あり 他に庚申塔74 十二神一 年号は文政二年 と万延元年	(正面)天保十四年「馬頭觀世音」十二月吉日	立像	三猿あり	(正面)百番供養「聖觀音立像」宝曆三癸酉五 月吉日 (他に小薬師坐像62馬頭1)

25	24	23	22	21	20	19	18	17
如 來	宝 篋 印 塔	燈 籠	石 祠(秋葉)	双 体 道 祖 神	馬 頭 觀 世 音	馬 頭 觀 世 音	日 待 塔	淡 島 様
149 57 54	223 70 69	113 47 48	97 60 82	65 44 30	44 27 11	49 33 19	197 58 58	258 71 70
坐像	羅尼一千卷紙 年馬統持功德 述願主之志以 記昭經今唯 此塔中備之永 既昭經今唯	佛之金言也邑 遍為三有悠之 羣迷潤澤法雨 書寫寶篋印陀 長小野里氏某 六趣范々塵利	(側面)寛政元巳酉仲冬 願主小野里道孝 夫天覆無外地 弟將聖之美談 相宛然三界吾 清濁不異而性 千本師釋迦文 秋元山十二世「順海」	(棹)奉獻御廣前「世話人」 盤郎「日和田龜吉」 小野里磯松「金井	(右面)慶応二年八月吉日「村中」	(正面)明治〇七年「馬頭尊」 金井氏	(右面)享味二壬歲十一月吉日 (正面)如意輪觀音半迦像 (左面)願主「廻國傾心」 奥州安達郡本宮 (台座)鳥羽村「金尾村」 女人講中	(右面)慶応四戊辰四月吉祥日「當村中」 (台座)女人講中



鳥羽町西部公民館

32	31	30	29	28	27	26
馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	經典誦誦塔	如意輪觀音	不動明王	如意輪觀音
(側面)永祿三年九月二十八日 大福寺末 常樂院住職	(側面)宝永五年七月二十五日	(側面)元文四年十二月二十三日	(左面)寶曆十二壬辛年十一月吉日 (正面)觀音 (右面)奉誦誦普門品供養塔 願主七人の名	(台座)當村中 女人講中 (正面)如意輪觀音 (右)大正十三甲子年四月良辰	(正面)成田山 不動明王 (側面)明治十七甲申年初冬吉辰 當邑中建立	(右) 文久二壬戌年三月良辰 (台座)當村中 女人講中

問屋町

丁間稻荷境内

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
11	石祠	59・33・38		
10	石祠	93・47・80	(正面)元禄八亥年 霜月吉日	
9	石祠	58・29・38	(右面)明治十五年 十一月吉日建之 (左面)岩丸若治郎	
8	稻荷神社	40・29・12	(正面)稻荷神社	
7	石祠(稻荷)	61・31・50	(側面)新潟縣刈羽郡 下宿村 村山福治郎明 治廿七年 辰日□ 一月十五日 立之 朱塗	
6	石祠(稻荷)	51・29・44	稻荷	
5	石祠(稻荷)	64・33・42	稻荷	
4	石祠(稻荷)	48・48・39	稻荷 朱塗 棟に宝珠	
3	石祠(稻荷)	61・29・42	稻荷	
2	石祠(稻荷)	64・35・41	稻荷	
1	石祠(稻荷)	44・29・38	稻荷	

15	14	13	12
燈籠(一对)	手洗石	笠葉師塔婆	石祠
162 70	35 56 44	112 37	75 34 50
(棹)石灯籠両基	(左面)願主 安藤篤忠	(右面)文政二己卯年 未十月冬良日 (正面)石盥	市指定重要文化財

東地区(一部)

箱田町

東箱田

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
1	庚申塔	62・30・22	(正面)明治四支天「庚申塔」十一月吉日	
2	庚申塔	58・28・19	日々と三猿あり	
3	石祠	61・39.5・42	(正面)延宝八年「庚申正月吉日」 (左面)箱田「梅沢」門 以下五人	
4	宝篋印塔	73		
5	宝篋印塔	71		

東箱田観音堂

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
6	百番巡拝塔	64・46.5・27	(正面)「明和五戊子年」百番供養塔」十月吉祥日	
7	六十六部廻国塔	92.5・26.6・22.5	(右面)文政元年「寅十二月」東箱田村」講中 (正面)天下泰平」當邑」奉納大乘妙典六拾六部供養塔」日月清明」行者一順 (裏面)法蓮社界譽一順大徳 (台座)備後」武州」常州」ヒゴ」伊与」武州」肥后」常州 助願主	

萬日堂

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
8	百番巡拝塔	96・58・35	(右側)文化二年乙丑歲十二月良辰 (正面)西國」板東」秩父」百番供養塔 (左側)當村願主 重田勝右衛門	
9	馬頭觀世音	34・26・13	(正面)明治廿三年「馬頭觀世音」二月十日新井氏	
10	馬頭觀世音	32・48・15	(正面)天明七丁未年」立像」十二月吉日	
11	地藏菩薩	41.5・28・14	明応期のもの	
12	地藏菩薩	39・15・13	(裏面)宝曆七丁丑七月十一日 立像	
13	地藏菩薩	28・19・82	坐像	
14	地藏菩薩	61.4・20・13	六地藏	

萬日堂

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
15	如意輪觀音	101・27.6・23.6	(右面)天保十五年 辰三月 (正面)半迦像 (台座)女人講中	
16	地藏菩薩	159・34・30	立像	
17	三界万霊塔	112.5・57・26	(正面)享保十七歲子 村中惣施主」三界萬霊皆成佛」九月吉祥日	三

18
百番巡拜塔
93・26・21.3
(右面)宝曆八戊寅十月 (正面)百番供養塔 (左面)息譽休心敬白

西箱田公民館

番号	名称	高・巾・厚	銘文
19	双体道祖神	63・45・33	(正面)元文五年庚申十一月吉日
20	双体道祖神	49・34・19	(正面)享保十二年十一月吉日
21	道祖神	97・45・35	(正面)道祖神 (左面)西箱田村
22	道祖神	40・33・9	(正面)道祖神
23	石祠	99・38・72.5	(右面)文化十一年甲戌年十二月吉日 (左面)惣村「巳待」講中「世話人」長井忠助
24	石祠	82・48.5・66	(右面)文化十一年甲戌年十二月吉日 (左面)惣村「巳待」講中「世話人」長井忠助 石原新兵衛
25	御嶽大神	157・54.5・22	(右面)皆明治九年第三月良辰 邑村 世話人 十九人(石原寅吉他) (正面)御嶽大神 松易宣謹書
26	鳥居	290・18	(正面)菅原神社

常円寺

番号	名称	高・巾・厚	銘文
27	六地藏	91・29・26	金剛界 (台座)世話人「石原新兵衛」同伊三郎「太田与工門」重野弥三治「文政十一戊子」十一月吉日「世話人」長井武太夫「五兵工」四良右工門「代治郎」源右工門「係右工門」忠左工門「久左工門」
28	三界万霊塔	88・50・30	(右面)奉造立村々箱田村中且那諸靈菩提取當寺十代「長規」 (正面)三界萬靈皆成仏道 (左面)享保十七歲壬子九月吉祥日「願主教譽」圓西敬白
29	二十二夜塔	138・30・25	(右面)文政六年龍集癸未八月吉日 (左面)二十二夜供養塔 (台座)女性三十人の名 世話人石原新兵衛 長井武太夫 大島左内 長井五兵工
30	地藏菩薩	67・27・14	立像 室町期
31	馬頭觀世音	96・48・34	(右面)文政十一亥載「七月吉日」武井齊書 (正面)馬頭觀世音 (左面)十八人の名
32	馬頭觀世音	60・36.5・22	(右面)嘉永七甲寅歲閏七月十七日 (正面)馬頭觀世音 (左面)西箱田村「長井氏」
33	庚申塔	62.5・30・14	(正面)庚申塔「柳沢」

川曲町  
町内

1	番号	41	40	39	38	37	36	35	34
地藏菩薩	名称	三尊仏	輪廻塔	巡拝塔 百八十八番	燈籠	大日如来	庚申塔	庚申塔	庚申塔
65・30・15	高・巾・厚	30・22・12	102.5 56・56	103 31.6 27.3	77・58	71.5 51・32	115 77・50	73 26.4 23.5	71 37・19
舟型光背	銘文	善光寺型	(樟)明応□□年四月吉日□□禪門	(右面)文化十四皆生歳在癸卯四月吉日 (正面)禮拜百八十八番供養場 (左面)當邸行者 長井忠左衛門 (台座)道しるべ	(台)常夜灯 講中	(台座)文化九壬申天「霜日吉日」大日如来 施主 柳沢彦八	金剛界 坐像 (右面)文化九壬申歳 十一月良辰 (正面)庚申塔 八十二 堀越問明	(右面)享保十二歳丁未 (正面)奉造立庚申為菩提也祈所 (左面)霜月吉祥日 箱田村 (台座)氏名あり	(正面)元禄□□三年「奉造立庚申供養所安永十 二月四日」二鶏三猿あり 道しるべ

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
道祖神	六地藏	馬頭観世音	地藏菩薩	馬頭観世音	馬頭尊	馬頭観世音	燈籠	燈籠	板碑	双体道祖神	道祖神
115・73・34		53・23・11	32・19・9	125 41・16	61 30・15	112 46・21	119 41	120 47・	64 26・3	56 33・8	163 34・8
(裏面)寛政四年	(正面)道陸神	(正面)天保十三年「立像」寅八月吉日	舟型光背	(台座)世話人「岡田武八」小島吉吾「飯塚九 右衛門」寛政十年八月吉日「両村中 十一月吉日 三面六臂の立像	(正面)明和元年甲申年「奉建立 三面六臂の立像	(正面)三面六臂の立像 (台座)願主「信誓浄念」政右中 施主 両村中	(竿)火燈 中里家 他は不明	(竿)火燈 建立柳井家 他は不明	(正面)武井		(正面)道祖神 (裏面)文久元年辛酉三月吉日 願主柳井源三 郎「南山馬場昇謹書

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
庚申塔	庚申塔	廻国塔 六十六部	庚申塔	名号塔	三界万霊塔	地藏菩薩	女人像	二十二夜塔	百番巡拝塔
112・25・24.5	68・23・16	77・24.5・18		95・41・22	106・54・42	41・12	49・17・14	118・32・20	99・48・30
(正面)元禄九丙子天「奉建立勝面金剛供養十月吉日」敬白 二鶏三猿あり	(正面)享保元年丙申天「 <small>之</small> 青面金剛供養」八月吉祥日 台座に二猿	(右面)延享三丙寅歳「霜月吉日」 (正面)六十六部供養塔 (左面)鐵相自船庵主	十八基あり 一基に弘化三丙午年「庚申塔」三月吉日とある	(正面)南無阿弥陀仏「徳兵衛」 (裏面)文政三庚辰十一月「願主」実覺「講中	(正面)天文三歳戊午「有衆両縁萬霊塔」十月吉日		立像	(台座)川曲村講中 宝曆十一年己年「二十二夜待供養」十一月吉祥日「願主心休	(正面)百番供養塔 (裏面)堀周明書「稻荷新田村」今井平蔵 上 新田村「倉林弥惣兵工」大澤村 袋田 □右工門「同幸吉」同三郎治 當村 柳井三右工門「中里金九工門」享和三 癸亥年極月日「同文兵衛」岡田惣八

35	34	33	32	31
釈迦如来	板碑	石幢	燈籠	燈籠
123・94・29	52・27・4	162	77・43・41	91・43・41
坐像	石	(竿)延宝六年「奉造立施主中里氏」戊午八月十一日「 <small>之</small> 石	(竿)御寶前「奉納 願主 茂手木氏」	(竿)御寶前 火袋を欠く

中里家墓地

30	29	28	27	26	25	24
道標	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	諏訪神社 記念碑
53・19・16	50・57	83・49・60	93・42・45	77・57	77・36	148・79・13.5
(正面)大正十年六月三日御歸朝記念建設「川曲青年會」	(正面)寛永拾四年三月吉日「岩田由蔵」			天王様という		(正面)昭和十一年四月九日「神社合祀記念碑」群馬縣書記官從五位勲五等水谷秀雄書

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
観音	板碑	墓誌	地藏菩薩	庚申塔	三界万靈塔	巡拝塔	經典読誦塔	双体道祖神	石祠	文珠菩薩
62・28・14	80・27・2	105・66・13	132・24・18	98・40・40	88・40・20	85・40・11	65・22・18	64・36・19	63・48・55	105・49・25
立像	飛月形	明治十五年に天菴道慧先生のために弟子の吉邦が立てたもの	菩薩の立像 〔台座〕明和七「庚寅天」八月吉日「願主」中里鍋八「母」當院「祖海代」建之地蔵	〔正面〕青面金剛塔	〔正面〕安永四乙未天「三界萬靈等」六月吉日	〔正面〕奉納順禮供養塔「寶曆十三癸未十月吉日」聖観音立像	〔正面〕寛延二己巳年「奉納大乘妙典供養塔」二月朔鳥 施主妙観		〔左面〕中里□□ 正面下に二猿	坐像

10	馬頭観世音	110・56・38	〔正面〕馬頭観世音 〔側面〕寛政六甲寅年四月吉日
----	-------	-----------	-----------------------------

西福寺

9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	双体道祖神	道標	無縫塔	名称
38・18・13	51・31・19	40・23・10	41・27・16	61・32・6	56・26・20	55・36・17	80・23・17	54・21・25	高巾厚
〔正面〕青面金剛の立像 二猿か二鶏あり	〔正面〕元禄十四年辛巳年八月「村□□」青面金剛の立像 二猿か二鶏あり	〔正面〕庚申塔 〔側面〕安政元年申三月吉日	〔正面〕弘化二己年「庚申塔」一日吉	〔正面〕庚申 〔裏面〕天保□□年「□三月吉日」	〔正面〕庚申 〔裏面〕高橋嘉十郎「明治三十年三月建」		〔左面〕稻荷青年同志會「大正七年七月」 〔正面〕左下新田 径大沢道 右新田 径高崎道 左箱田 径前橋道 右箱田 径岩鼻道	〔正面〕泉蔵法印	銘文

町内 稻荷新田町

18	17	16
庚申塔	蚕神塔	庚申塔
66・33・11	72・31・9	54・23・9
(正面)猿田彦大神」高橋氏	(正面)大正五年」絹笠神社」六月」高橋氏	(正面)猿田彦大神」高橋

町内

15	14	13			12	11
御嶽講碑	庚申塔	(宝性)(鶏亀)(地持か)(法印)六地藏			念仏供養塔	二十二夜塔
40・20・8	106・31・10	134・38・23	128・39・20	133・39・24	133・42・23	127・38・25
(正面)武尊山大権現」御嶽山座主大権現」意波羅山大権現」木食 普覚	(正面)享保十四年」奉納庚申供養」西九月廿九日 (台座)九之丞」市野右之門」□左之門」□之丞」金之丞」次右之門」西福寺 下に鶏と三猿あり				(右面)干時宝曆十二歲壬午八月初六日」講中 (正面)融通念佛供養塔 (左面)當寺十二世」惠純代	(正面)如意輪觀音半迦像 (右面)時明治廿三年」庚寅三月吉日」再築彩色 (左面)干時 文政十二己丑年二月吉日 (台座)女人講中

29	28
馬頭觀世音	墓碑
105・44・6	177・72・13
(裏面)昭和七年十月二十九日」豊晴號」鹿毛十才	(正面)馬頭觀世音 明四三十四年に辻玄周の門弟が立てたもの

町内

27	25	24	23	22	21	20	19
石殿	石仏	石仏	石碑	石碑	阿弥陀如来	燈籠	のぼり旗柱
75・33・42	61・22・14	53・29・16	57・31・13	60・32・14	102・62・12	55・19・19	245・30・27
	立像 観音か	坐像 延享元年甲子天	判読不能	判読不能		(竿のみで)一对 (右のもの)御燈」弘化二乙巳年」長月吉辰當 (左のもの)御燈」弘化二乙巳年」長月吉辰當 村 中里 紋兵衛 村 中里 紋兵衛	一对

共同墓地



41	燈籠	172 48 47	(竿)奉納御寶前「寛政元年己酉十一月吉日 當村旋主 柴田藤藏
40	庚申塔	37 26 62	(正面)猿田彦大神
39	蚕神塔	63 29 9	(正面)大正四年十一月十日「鬻影神社」今井富五郎
38	庚申塔	38 20 10	(正面)庚申塔
37	庚申塔	56 30 9	(正面)昭和九年六月十五日「猿田彦大神」今井富五郎
36	庚申塔	55 24 7	(正面)昭和三十三年「猿田彦大神」高橋家
35	庚申塔	97 43 34	(裏面)文政元戊寅九日「吉辰飯塚九兵衛」衛建之 (正面)庚申
34	庚申塔	49 13 10	(正面)猿田彦大神
33	庚申塔	48 10	(正面)猿田彦大神「明治卅八年七月」柴田氏
32	庚申塔	59 20 9	(正面)猿田彦大神
31	庚申塔	56 30 15	(正面)明治四拾壹戊申歲「猿田彦大神」五月吉日 柴田氏
30	庚申塔	51 20 11	(正面)猿田彦大神「柴田氏

52	石祠	85 56 65	(正面)寛政辛亥三年三月吉日
51	石祠	74 38 50	□□新田高橋
50	石祠	59 36 46	(左面)稻荷新田村中
49	石祠	150 43 64	(右面)大正五丙辰歲 七月吉日 (正面)八坂神社
48	記念碑	214 65 9	(裏面)東京飯塚徳太郎外74人 町内氏子稻荷新田町柴田正美外50人 昭和三十年十二月 宮司長尾一央 世話人 建設委員長 高橋經次郎外18人
47	狐	186	(正面)稻荷神社新築記念之碑「群馬縣知事北野重雄書 (台座)供 柴田正美 昭和五十四年五月吉日
46	手洗石	50 79 50	一対 (正面)奉納
45	のぼり旗柱	83 19	(側面)奉納 稻荷神社新築記念「亀戸高橋照信」十條 吉沢幸太郎
44	燈籠	177	(竿)品川英三
43	燈籠	177	
42	燈籠	175 52 50	(竿)奉納御寶前「天明七丁未九月日」旋主當村 高橋常七

町内

53	石祠	655 42 65
----	----	-----------------

下新田町  
八幡宮

5	4	3	2	1	番号
七夜待塔	燈籠	燈籠	石祠	燈籠	名称
131 50 54			40 57	185.5 67	高・巾・厚
(裏面)當村 目村 大澤村 橋島村 新田村 川曲村 上京目村 上野村 上高村 宿日高村 中京村	(正面)七夜待 (側面)明和二乙酉 寶院 牛込松蔵 関根嘉吉	(正面)御神燈 (裏面)昭和九年十一月二十二日 之輔 (側面)石工 本田長造 刻	(正面)御神燈 (裏面)記念 永井八太郎 本田邦造 永井三 之輔 牛込好五郎	(正面)淡島大神 (背面)明治十三年三月二十三日 (台座)當村中	(竿)八幡宮「萬人講中」世話人 牛込勤太郎 石尊宮
					銘 文

町内

11	10	9	8	7	6
幟石	天神	石祠	經典読誦塔	庚申塔	庚申塔
191 24.5 27.5	38.5 26 11	92 47 61	116.5 28.5 24	92 45 66	33 31 7
(側面)昭和三年十一月十日 下新田青年會	(正面)奉獻御大典記念 (裏面)文政癸未年二月廿五日	(正面)天神宮	(正面)安永五丙申年 願主「大乘妙典經二千 部供養塔」三月吉日 清宝院 台座に人名 10 主3 目8 下新田3 上京目6 川曲3 當村施 目1 中京	正面に二鶏と三猿	(正面)庚申 (裏面)明治二十一年戊子歲三月吉日

15	14	13	12
馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	道標
51 34 9	48 19.5 14	41 22 9	64 18 13.5
(正面)馬頭觀世音「杉山氏	(左面)二月吉日 施主 村中	(正面)馬頭觀世音 牛込氏	(右面)大正七年十一月吉日 (正面)向上新田ヲ經テ前橋市一前橋稻荷 新田ヲ經テ新高尾村通」左萩原ヲ經テ 玉村町 (左面)東村大字下新田青年俱樂部

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
地藏菩薩	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音	馬頭觀世音
124・31・28	32・27・13	41・24・11	41・28・14	38・23・12	58・45・11	45・28・23	32・27・16	41・30・20	41・24・15	48・32・12.5
立像	立像	(正面)馬頭觀世音 (側面)堀口氏	(正面)文化十二乙亥天「立像」正月吉日	(正面)馬頭觀世音 (裏面)明治三十七年三月吉日「杉山吉太郎	(裏面)新井氏 (正面)明治三年「馬頭觀世音」庚申二月吉日	(側面)明治三十年五月新設「牛込久五郎	(裏面)明治廿八年十二月八日「施主」新井氏 (正面)馬頭觀世音	(裏面)慶應二歲 當所 丙寅正月吉日 今井満蔵	(正面)馬頭觀世音 (裏面)明治十九歲戊八月「堀口淺蔵拜	(正面)大正十二年三月吉日「馬頭觀世音牛込氏

墓地内

35	33	32	31	30	29	28	27
日侍塔	三界万霊塔	燈籠	六地藏	不動明王	百番巡拜塔	月待塔	觀音講供養
114・27.5・22.5	87・35・30	110・37・22	76・28.5・61	102・63・30	77・52・29	169.5・47・44	83・41.5・21
(台座)女人講中 (右面)天明八戊申龍星十一月吉祥日 (正面)如意輪觀音 半迦像 新田長吉 正觀寺升二郎 世話人牛込助左エ門 喜三郎 母 茂代	(正面)享保九天「 <u>三</u> 三界萬靈」六月日願主 本學淨心	(竿)享保九辰年「奉納念佛供養」八月日願主淨心	一体の背に 寛政五癸歲「施主當村中」願主淨心とある。 倉民蔵	(裏面)享保十二未歲十一月建「願主學寶院 時明治廿二年十二月再興 栢齋書 藤	(裏面)十二人の名 (正面)享保十二丁未天「 <u>三</u> <u>三</u> 奉納秩父坂東西国為二世安樂」三月吉祥日	(台座)女人講中 (正面)如意輪觀音 半迦像 (正面)嘉永五歲有壬子十一月二十八建	(裏面)當村5上新田3川曲2京目2 辛卯霜月吉日 (正面)觀音講供養娘塔「觀音立像」明和八

41	40
道祖神	手洗石
84・50・41	42・79・94
(正面)道祖神 (裏面)天明八戊申季「正月吉日	(正面)萩原村「施主」西河氏

稻荷神社

39	38	37	36
墓石 165	百番巡拝塔	巡拝塔 百八十八番	五輪塔
165・48	149.5 30 22.5	121.5 27 21	184 55 55
牛込大膳の墓 (南面)寛永九壬申天「繁屋院涼月浄詠居士」九月十五日……當村牛込大膳 (西面)寛永十二乙亥天「昌光院歆秋妙善大姉」八月十七日……大膳妻 (北面)正保四亥年「西禪院齋運道照居士」十二月二十六日……同名大學 (東面)慶安元戊子年「德嚴院養護妙珍大姉」二月二十三日……大學妻 同名清兵衛 同名九郎兵衛	(正面)百番供粮塔 (左面)安永四乙未四月吉日「當村願主」二十名の名がある 以上敬白	(正面)奉納 四國西國秩父坂東供粮塔 獨覚道住信 (右面)文化十一甲戌十一月十九日 (左面)坂口作古文 (台座)世話人 本田嘉兵衛 長井辰五良 杉山伊左工門	(正面)道隨「大誓」法師 (正面)阿弥陀堂「一字建立」施主道隨 (右面)文化十四丁丑「四月」廿八日 (裏面)生國紀州僧

6	5	4	3	2	1	番号
馬頭観世音	三界万霊塔	念佛供養塔	如意輪観音	寒念仏塔	燈籠	名称
42・24・13	109・61・39	66・46・21	70・51・20	61・47・33	203・57・55	高巾厚
(正面)元治元酉年「立像」	(正面)安永二癸巳年「三界萬霊等」三月吉祥日	(背面)享保二丁酉天六月五日「奉造立供養念佛講中」上州古市村「総」 地藏菩薩坐像	半迦思惟像	大日如来坐像 (背面)寛保三癸亥天「寒念佛供粮」閏四月吉日	(脚)文政二己卯歲十一月吉日「奉納常夜燈村中」	銘文

古市町 古市町公民館

44	43	42
石祠(庚申)	燈籠(一对)	双体道祖神
106 55.5 71	182.5 56 56.5	88 72 49
(左面)上州下新田村 正面に二猿ある	(正面)奉造立庚申宮「而二世安樂也」 (右面)寛文十二天九月日 (左面)牛込勘太良	(裏面)文化十二乙亥歲 村中 (竿)常夜燈村中「文化十一申戌十一月吉日世話人 牛込勘太良

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	
寒念仏塔	馬頭観世音	馬頭観世音	寒念仏塔	馬頭観世音	馬頭観世音	馬頭観世音	百番巡拜塔	百番巡拜塔	巡拜塔	馬頭観世音	
59・43・18	58・43・20	51・30・18	79・45・19	144・24・14	38・24・11	32・26・10	88・37・31	63・24・20	129・66・38	63・31・33	
(正面)寒念仏供養 施主村中 双体道祖神 □ 三月吉日		立像 黒崎新兵衛	(正面)寒念仏 観音立像 供養	(右面)文政十三季寅正月吉日 (正面)馬頭観世音 (正面)當村中	(正面)明治二十四年 立像 二月一日	坐像	(正面) 寶曆二壬申 奉須禮 板東 西國 秩父 百番供養塔 十一月吉辰	(右面)黒崎善次郎 飯野兵左衛門 (正面)百番 巡拜 観音供養塔 (左面)文政六年癸未春 月 踏雲外史清成書 (台座)右真政 玉邑 左大渡 惣社	(左面)嘉永七年歳次 黒寄常右衛門 甲寅中 秋上流 飯野安五郎	(正面)羽黒山 湯殿山 月山 御嶽山 恐山 高野山 立山 富士山 天下泰平国土 安穩 奉巡拜百八十八ヶ所 供養塔 日月青明邑中安全	立像

27	26	25	24
燈籠(一对)	狛犬	燈籠(一对)	鳥居
186・66・68	63・58・38	184・70・70	306 径31
(正面)古市村中	(台座)東京市京橋區月島 西中通三丁目三番地 飯野忠次郎家 大正九年九月	(裏面)常夜燈 願主 (裏面)安政五歳次 (東の裏面)戊午九月良旦	(額) 赤鳥大明神

赤鳥神社境内

23	22	21	20	19	18
宝篋印塔	淡島様	淡島様	宝塔	燈籠	馬頭観世音
178・56・56	129・59・43	214・70・70	52・66	118・50・58	54・29・19
(裏面)施主 講中 願主 慧眼 他に石仏三十七体	(右面)寛延三庚午歳十一月廿五日 (正面)光明真言 一億萬遍 (左面)願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道	(脚)文政十一年 十二月吉祥日 女人講中 如意輪観音像	(側面)明治廿六歳三月十三日 (台座)女人講中 如意輪観音像	四方仏あり 和尚塚	(正面)明和七庚寅天 立像 十一月吉日

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28
庚申塔	雷電宮	石祠	石祠	琴平神社	庚申塔	庚申塔	庚申塔	管原神社	八坂神社	秋葉大神	道標	鳥居
217 39 33	79 52 30	66 49 59	54 45 53	79 24 15		75 23 14	74 24 14	117 45 10	118 40 8	103 59 7	69 15 18	280 徑 26
(左面)十二月朔日 施主 村中 (正面) 奉造立庚申供養現當立業 (右面) 寶永五戊子歲	(正面) 雷電宮			(正面) 琴平神社	二百基(内青面王10) 享和三年と天保十年	(左面) 東箱田 五人 (正面) 青面王	(左面) 西箱田村 十二人 (正面) 金剛王	(裏面) 大正十三年三月再建 (正面) 管原神社	(左面) 大正十三年三月再建 (正面) 八坂神社	(裏面) 明治十七年三月再建 (正面) 秋葉大神	(左面) 向 右高崎市 左前橋市 道 (正面) 御大典記念 会	(右面) 大正四年十一月十日「地元古市村青年 (脚) 享保十九□天十月吉日 (額) 正一位稻荷大明神

3	2	1	番号
燈籠	鳥居	道標	名称
144 46 47	251 徑23	221 33 28	高・巾・厚
(裏面) 昭和十二年七月十四日 (正面) 御神燈	(額) 八坂神社 同	(脚) 昭和二十六年十月建之「新前橋氏子一 第三區自□會 (裏面) 大正十五年十月吉日建之「元總社青年 (正面) 縣社總社神社入口 自是北□	銘文

新前橋町  
八坂神社付近

47	46	45	44	43	42	41
手洗石	觀音	如来坐像	熊野山	石祠	石祠	石祠
50 91 48	40 14 12	30 23 16	41 26 10	43 40 52	35 45 53	53 42 44
(正面) 奉納		坐像	(正面) 熊野山			

## 第八章 民俗知識

### 一、しつけ・作法・禁忌

オコワ オコワにお茶をかけて食べると結婚式に雪や雨が降ると言う。(巢鳥)

食べあわせ 天ぷらとすいか

ウナギと人参(桜が丘)

うなぎと梅干は食べるな。

てんぷらとすいかはよくない。

うなぎと酢はよくない。(鳥羽)

食事の作法 ごはんに箸を立てるな。

ごはんをおたか盛りにするな。

ごはんを押しもるな。

最初に汁を一口飲んでからごはんを食べろ。

汁を左に、ごはんを右にするな。

うつりばしをするな。

はしをなめるな。

茶碗をたたくな。

から白をつくな。縁起が悪い。(元総社)

衣の作法 たっこ帯にするな。

左前にするな。

洗濯物を裏返しに干すな。

洗濯物は南向きに干せ。

洗濯したものはたたんでから着ろ。(元総社)

住の作法 敷居、畳の目、座ぶとんは踏むな。

つめをもすとへびが来る。

髪をもすな。

きたないものをかまにもすな。

竹やぐみの木はもし木にするな。

ビワを植えるな。病人が絶えない。

イチヨウは植えるな。

もし木 ふろをわかすときに竹を使うな。火力が強いがふるはなかなかわかない。(清里)

栗の箸

栗の箸で食べれば中風にならない。(清里)

ユズ湯 冬至のときにユズ湯に入るとカゼをひかない。(上新田)

シヨウブ湯 五月五日のシヨウブ湯は厄払い。(清野)

ナス ナスを食べてはいいが、作ってはいけない。(元総社大渡)

作物禁忌 にんじんを作れない家がある。この家は、先祖がにんじんを作って不幸があったから。(鳥羽)

禁忌 七夕の日に、つるもののある畑に入ってはいけない。ウリ、

インゲンなど。(元総社大渡)

かま 空のかまをかけると、空の子ができる。(総社新田)

油モチがつけない お赤飯をふかして食べ、オイナリ祭と交代にし、

オイナリ祭にモチをついた。

ケガをしてからだという。(元総社大渡)

あまだれおち 縁側の前の、あまだれおちのところでは、おしっこをしてはいけないといった。(総社町新田)

あまだれの落ちるところは庭だから、小便するなといわれた。

庭つききには、小便するなといわれた。(元総社)

さまとあがり あわいさ(縁側のところ)から、あがりおりをしてはいけないといった。うちの者は、玄関から出入りしろといった。そうしないと不法法だといわれた。

あわいさからあがりおりする人は、和尚さんと一見客という。

これを、さまと(さまも)あがりといった。(総社町新田)

ご祝儀のとき、嫁と一見客は、縁側からあがった。

嫁が縁側からあがるとき、くわぜの鳥居をくぐらせた。

このとき、嫁と姑は、そこで水盃をかわした。そのあと、姑が縁側へ手をひっぱってあげた。

このほか、坊さんも、縁側からあがりおりをする。

仏様の出棺も縁側から。(総社町立石)

つぼ山・軒下 つぼ山とか軒下には小便をするなといった。

軒下のことは、あまおちといった。

盆のとき、軒下のところに水を捨てた。(江田)

軒下には、小便をするなといった。

お茶は軒下に捨てろといった。軒下には無縁仏がいて、お茶を待つているという。

人がなくなつたあと、としよりの人があと念仏をする。そのとき、念仏を申しながらあたらしい水を供える。その水をいく杯もかさねていく。あたらしく汲んでは、念仏を唱える。水はどんぶりにあげる。

十三念仏をすませてから、その水を軒下にあける。

無縁仏は、念仏の鐘の音を聞いて、軒下にあつまってきた、のどをかわかしている。水が飲みたたくつてしようがねえという。

それで、念仏が終つてから、仏様に汲んであげた水を軒下にまいてやる。その水を無縁仏が飲むという。(西箱田)

縁側から入る人 坊さん

嫁さん

一見客

仏様……盆のときは、縁側からあがる。(青梨子)

縁側から出入りするの坊さん。

ご祝儀のとき……嫁さんはごぞの縁側のところからうちへ入った。

このときにクワゼでつくつた鳥居をくぐらせた。(江田)

嫁さんは姑さんが縁側にいて、水盃をかわしてから抱きあげた。

坊さん

仏様

一見客(青梨子前原)

縁側から入るのは嫁さん。

縁側から出入りするのは一見客、仲人。(下新田)

縁側から出入りするの、嫁さん、一見客、坊さん。

あらたまつた人が縁側から出入りした。

縁側からあがると、坊さんみただといわれた。よそのうちへ行つて、縁側からあがるものではないといわれた。(元総社)

縁側から出入りする人がいた。

一月四日の坊さん。ご年始にきた。

嫁入りのとき、姑さんが縁側のところにおいて、オガラ鳥居をくぐらせてから手をひいて座敷にあげた。



結婚式のときの、一見客も縁側から出入した。死んだ人も縁側から出す。(総社町総社)

嫁が来たときは、縁側からあがった。

死んだ人は、縁側から出た。

一見客とか坊さんも、ごぞの縁側から出入りした。

なお、嫁にきたとき座敷へあがる時、オガラの鳥居をくぐらせた。

死んだときも、オガラの鳥居に、棺をくぐらせた。(青梨子)

嫁さんがきたとき(入家式)には、縁側からあがった。

一見客も縁側から出入りした。

坊さんも、法事などにきたときは、縁側からあがった。

祝儀・不祝儀のとき、上客は縁側から出入りした。

奥座敷の前の縁側から出入りする。

おかいこのかごを縁側の前にたてておいて、下駄とかぞうりの鼻緒

にひもをとおして、かごにさげておいてあがった。

このように、縁側からあがって、奥座敷に入ることを、げんかんあ

がりといった。

むかしの家には、くつぬぎ石が縁側のところにあつた。(江田)

住の禁忌 青竹を燃すな。自分が青くなる。

ビワの木を植えるな。病人のうなり声が絶えなくなる。(鳥羽)

屋敷のまわりにビワを植えるな。

オモトの木を植えると財産をかきわけられる。

榊は家に植えろ。

サルスベリは墓に植える木。

ツバキはお寺に植えるもの。

エンジの木は縁起よい。

センダンの木は縁起良い。(中石倉)

敷居を踏んではいけない。

たたみの目を踏んではいけない。

イロリにつばを入れるな。

ビワの木を植えると病人が絶えない。

イチヨウの木を家に植えるな。

モチ・モツコク・ナツデの木は、火事のときに火を防ぐ。

柘は魔除けで植える。

ナンテンは難のがれだから植える。(巢鳥)

ビワの木を植えるな。夜いびきが絶えない。

ザクロを植えるな。ザクロは人の味がする。

墓に植える木を家に植えるな。

墓に松を植えるな。

ツゲの木は植えるな。(植野立石)

敷居やたたみを踏むな。

しょうじは座つて開け。(清里)

山椒の木は自分で植えるな。

ビワは病人のうなり声が好き。

ユズは家に植えるな。

イチヨウやモクレンは屋敷に植えるな。

南の松は難を待つので良くない。

娘がきたら桐を植える。

桐の露は毒。(清里)

かまどの禁忌 かまどで不純物をもすな。

かまどで髪の毛をもすとへびがのる。(清里)

二つ子 伊香保へは、二つ子(二歳の子)をつれて行くなといった。(前箱田)

二ツ子(二歳の子)は、伊香保へつれて行くなといった。

二ツ子は、やきばへつれて行くなといった。子守りをたのんでも、小さい子は、葬式の場所へはつれて行くなといった。(総社町新田)

むかしから、二ツ子(二歳の子)は、伊香保へ行くなといわれている。

むかし、伊香保の湯がでなくなったことがあった。そのとき、二ツ子をつけにえにしたら湯が出たという。だから、二ツ子は、伊香保へやるなどいつている。(青梨子前原)

七つまでは子供は神様 子供は、七つまでは神様という。

子供は縁側から(軒下に)小便をひようぐるが、子供だからいいといった。(青梨子)

田植を忌む日 田植は、半夏の日とタツの日にしてはいけないといった。

半夏の日(七月二日ころ)に田植をするようでは、ものぐさ田植といわれた。

タツの日については、たつまきがおこるといった。

最近の水次第で、とくにわるい日のことはいわなくなつた。

ムギまきについては、悪い日はいわれない。(青梨子)

タツの日に田植をするなどという。

半夏の日についてはとくにいわない。(江田)

タツの日をきらつた。(下新田)

この辺では、田植はタツの日が悪いという。この日に植えると、たるとか、苗つきが悪いといった。タツの日には田植をしないで、苗とりをしたりした。

半夏の心については、とくに聞いていない。

ハンゲさんのことについては、次のような話が伝えられている。

ハンゲさんという人は、半夏の日に田植にいつて、土手で倒れたので、この日には、田植をしないといっている。(前箱田)

田植をして悪いのは、イヌの日とタツの日といった。この日には、苗代もしなかつた。

イヌの日に田植をすると、その米がイヌダングになるといい、タツの日に田植をすると、その米が、葬式のためのタツガシラをつくる糊になるといった。いずれも、人が死ぬということである。

とくに、年寄のいるうちでは、この日は絶対田植をしない。今でも、この辺ではこのことを守っている。

ムギまきの悪い日はとくにいわない。(下石倉)

タツの日に田植をすると、あれるという。嵐がくるといふ。また、そのときつくつた米は、葬式のときのたつがしらののりになる(人が死ぬということ)という。今も、この日には田植をしない。

半夏の日についてはとくにいわない。(西箱田)

田植をしてはいけない日は、辰の日と戌の日と半夏のときである。

辰の日になると竜頭になるといわれ、戌の日になると犬団子になるといわれた。(元総社)

田植をしない日は、半夏と辰の日と戌の日である。辰の日に田植をすると竜頭が立つといわれ、戌の日になるとまくら団子になるといわれる。半夏の日には、昔はんげと呼ばれる人が、仕事好きで仕事のしすぎで死んだから。(鳥羽)

田植をしてはいけない日は、半夏と戌の日と辰の日。辰の日になると米粒が団子になる。半夏に田植をすると穀物が半分になる。(中石倉)

田植は、辰の日や戌の日や半夏の日にするなどいわれている。辰の日は竜頭になるのでだめ。戌の日は枕団子になるので田植はしな

い。半夏は農作業はしない日と決っている。(巢鳥)

半夏田植はバカがする。(植野立石)

カマノクチャケ 子供のころ、セミの幼虫がどてからはいだし、それを、盆にはとるなといった。

この日は、地獄のかまの口があいて仏様が地獄から出てくるといった。

だから、この日から(盆の間は)生き物をとるな、とったものは、放せといわれた。(殺生をするな)

黒いでつかいチョウチョウがいると、あれは、お寺のつかい、お寺のさらばといった。このチョウは、お寺の使いだからかまうなといった。(西箱田)

俗信 七つまでは、子供は神様といった。

新宅は、本家よりかみに出すなといった。本家より前に出した。

子供がよそへ行くときは、仏様にあげたものを食べて行けといった。

猫が死ぬと、三本辻に、めしじゃくしをたてて埋めた。

投げ餅は、おもやをつくる場合にはひしがたで、土蔵の場合は四角につくる。

西風のことば、アサコツという。(西箱田)

墓へ行つて小便するな。

墓でころぶな。

まんじゅうの皮をむいて食べるな。

茶碗のふちをたたくな。オサキがくるという。オサキを飼っているうちで、オサキを呼ぶとき、茶碗とかお鉢のふちをたたくという。

むかし、あるうちで、かいこをとられる。かいこが減るといふので、かいこの頭に赤いしるしをつけておいた。そしたら、となりんちへ、そのかいこが行つていたという。

あるうちで飼つていたオサキが隣のうちのかいこをひいていったといふはなしである。(下石倉)

ナスを植えて、六カ月おくもんではないといった。ばちがあたるといふ。

ナスのはつもんは、天王様にあげる。天道様にはあげない。

六算除けには、一把線香をあげる。庭に線香をあげた。

一三が足、二六がよこはら、四はら八つまたといった。

自分の年齢を九で割つて、わりきれたときは、総身六算といった。

どこが痛くても、六算様におねがいすれば治るといった。

秋ナスは、とてもおいしくつて、嫁にはくれるなといった。

ムラの中のひとつのしるしの人が死ぬと、耳つぶさげをした。

馬糞を紙につつんで、耳をおさえた。

生まれつ子で、六カ月くらいで歯が生えた子は、鬼子といつて、三本辻に捨てた。

近所のとしよりの人など、拾ってくれる人をあらかじめ頼んでおいて、拾ってもらつた。

拾つた人は、その子を拾い孫といつて、縁がつながつた。拾つてくれた人がなくなつたときは、見送りした。(元総社)

江戸見えたか むかし、小さい子の両頬を両手でおさえて体をもちあげて、江戸を見せられるといった。(総社町総社)

川で小便するな 春先、川で蚕具類を洗う。そのとき、子供が、川の中へ小便することがある。

川の中へ小便するとおちんちんがはれるといった。(青梨子)

石のこと まいしはやわらかい。

かたいのは硬石。

石の名前は、出たところによる。

たとえば、大谷石、棚木石（勢多郡赤城村）

石の大きさは、小さいものから順に、砂、ビリ、マナゴ、バラス、  
グリ、玉石。（元総社）

衣の禁忌 左前に着るな。

たて結びにするな。

北向いて干すと死人と同じ。（巢鳥）

左前に着るな。

たつっこ帯にするな。

洗濯物は北に向けて干せ。また干し場は庭の南側か東側につくれ。

そでたたみにするな。

洗濯物はたたんでから着ろ。そうでないと中気になる。

出さき針はするな。

出針をするときは糸をくわえてからしろ。

着物を縫うときは、そこから縫え。（清里）

食の禁忌 正月三日は、四ツ足の肉を食うな。

茶ワンをはたとオサキが来る。

ごはんに箸をたてるな。

赤飯に汁をかけるな。こじきになる。

木の箸と竹の箸をいっしょにするな。

三杯汁はバカがすう。（鳥羽）

箸と箸とで食べ物を運ぶな。

ごはんに箸を立てるな。

朝ごはんにお湯やお汁をかけるな。

朝茶は必ず飲んでいけ。（中石倉）

茶わんをはたとだめ。

ごはんに箸を立てるな。

お汁とごはんの位置に気をつける。

しゃべって食べるな。

早く食べて、早く仕事しろ。

一杓盛は良くない。

赤飯に汁をかけると雨が降る。

生味噌は食べるな。ぜいたくだ。

食べてすぐ寝ると牛になる。

焼き餅を焼くと、米を余計に使うので貧乏になる。

ごはんに箸を真直に立てるな。新仏のようだ。

箸で茶わんをたたくな。

茶わんを置いたまま食べるな。（植野立石）

きゅうすややかんの口を北に向けるものではない。

白の口を北に向けるな。

から白をつくな。

ごはんを残すと目がつぶれる。

だんなに先盛をやる。

茶わんをはたとオサキが来る。

しゃべらず早く食べろ。

仏様のお膳にすると天気が悪くなる。

ごはんに箸をたてるな。

ごはんを盛るときは二回以上盛る。

仏様にあげるごはんに偶数回盛れ。

仏様のお茶は、二回つぐ。

ままつ子一杯盛は良くない。

三杯汁はばかが飲む。

おつゆの実は二色以上入れる。

赤飯に汁をかけるとご祝儀に雪が降る。

竹箸は使うな。

お祝にはらみばしを使え(清里)

トロロメシ トロロメシのお茶わんでお茶を飲むと中気になる。

正月三カ日にトロロを食べれば胃の調子は良くなる。(清里)

針仕事をしてはいけない日 針仕事は、一月十四日の針休みと二月

二十四日の針供養の日はしてはいけない。(元総社)

妊婦の禁忌 妊娠した人に、兎の肉を食べさせるな。食べさせると

兎のような三つ口の子ができる。(元総社)

柿の木の下を通つてはいけない。(元総社)

獅子舞のときに女性はでてくるな。(元総社)

イナリの禁忌 イナリ様の近くの竹をもすと、竹の節のはねる音を聞いてオヒヤクが飛んでくる。

イナリ様にあげたものが、次の日までであると縁起が悪い。(清里)

イナリ様にそなえものをしたら、後は振り向かずにもどる。(清里)

葬式の禁忌 葬式するとき、ころがると死人の枕になる。(清里)

墓の禁忌 墓でケガをすると手間がかかる。

子どもが石塔を触つてはだめ。(清里)

## 二、医療・衛生・保健

医者 医者を呼ぶ時は生きるか死ぬかの時。(小相木)

大正ぐらゐまで、元総社には医者は三軒ぐらゐいしかなかった。また医者を呼ぶのは、よほどの重病のときでないと頼まない。そのために医者が来ると、まわりの人はたまげた。また「医者が来ると人が死ぬ」といわれるぐらゐ、最後まで医者と呼ばなかった。なお「医者の勘定

は益・暮勘定」といわれた。(元総社)

ウジガミサマ 病気になったらウジガミサマのところに行き拜む。

(巢鳥)

富山の薬売り 富山県から、熊の肝・風邪薬・毒消しなどを売りに

来る。(元総社)

酒 けがをしたときに酒をぬるとき。(元総社)

家伝薬 耳が悪くなると、上石倉に行き家伝薬をつけてもらおうとよ

い。(中石倉)

タコの干物と干したカブと綿の実を焼いて砕いたものをまぜて、腎臓の薬をつくる。この家伝薬の作り方は、昔宿に困っていた旅人を泊めたお札に教えてもらった。(上新田)

便所 きれいにしておくと、お産が軽い。(総社新田)

便所そうじ きりょうのいい子が生まれる。安産になる。お産が軽

いという。(元総社大渡)

ほうそう除け アカネ染めの着物をやると、ほうそうにかからない。

(総社新田)

ほうそうになつたら、ほうそう棚を作り、三本辻に持つて行く。

(中石倉)

死の予兆 住職は、足音で、死んだ人が男、女か事前にわかつたと

いう。(稻荷新田)

頭痛 頭痛のとき、軽いときは梅干をこめかみにはる。それより重

いときは、頭を氷で冷やす。それでもだめなときに、富山の薬売りが持つてくる鎮痛薬を使う。(植野立石)

頭痛のときは梅干をこめかみにはる。(巢鳥)

頭が痛いときは梅干をこめかみにはる。(鳥羽)

頭が痛いときは、はつかをこめかみにはる。

頭痛のときはハツカがいい。(清里)

頭が痛いときは、こめかみに梅干をはる。(清野)

目が痛いとき 目が痛いときは、笹熊の薬師様に願をかけに行く。

なおつたら一把線香をあげる。(清野)

眼の病気 眼の病気ときは、ほうさんを湯にとかして、それで眼を洗うと良い。または薬師様に願をかけてなおしてもらおう。(植野立石)

眼が悪いときは、母乳で洗えば良い。(鳥羽)

メツパ メツパのときは、井戸に半分ふるいをのせて、なおれば全部みせますと願をかける。(上新田)

メツパになつたら、井戸にめかごを半分かぶせて、「なおつたら全部みせますから、早くなおしてください」と願をかける。(菓鳥)

ものもらいのことをメツパといい、メツパになつたら、古井戸に行きふるいを半分かぶせて、「なおつたら全部みせます」といつて拜む。

(鳥羽)

ヤンメ ヤンメのときは「やんめ大売り出し」と紙に書いて外に貼る。これを見た人がヤンメになり、なおる。(中石倉)

やんめになつたら、三本辻に出て、「やんめ大安売り」と紙き書いて竹にはさんでおいておくといひ。(菓鳥)

るりこ薬師 眼が悪くなると、るりこ薬師にのぼり旗を持ってお参りすれば良い。(中石倉)

鳥羽の薬師 眼が悪い人は鳥羽の薬師様にお参りする。眼が良くなつたら、八月八日の縁日にとうろうを進ぜる。石仏を作つてもらい進ぜる人もいる。(鳥羽)

薬師様(小八木) 目の悪い人は、高崎市の小八木の薬師様にお参りに行き、そこで水をあげ、その水で目を洗うと良い。(元総社)

ものもらい ものもらいのことをメカゴともテツパとも呼ぶ。この

ときは、近くの薬師様にお参りに行くか、または井戸にざるをかぶせ半分だけみせて拜むと良い。(元総社)

歯痛止め 便所にそなえたおそなえを食べるといい。(元総社大渡)

マユ玉をしんぜた紙を食べると、歯痛が止まる。(元総社大渡)

歯痛 歯が痛いときは、ユキノシタやヨモギを塩もみにして、痛いところにつける。(菓鳥)

歯が痛いときは、石倉の魚屋で水をもらつてきて、冷した。(鳥羽)

歯が痛いときは、ゴマを炒つてつぼ山に持つていき、ゴマをまいて「おし虫歯にしてくれ(いたくない虫歯にしてくれ)」と祈る。(清里)

夜泣き 子供が夜泣きをすると、半紙におんどの絵を書いて、次のようなうたを書いて、うら口のところにはつた。

猿沢の 池のほとりに 鳴くきつね

昼は鳴いても 夜は鳴くまい

こうしておく、夜泣きがなおるといった。(青梨子)

夜なきがとまらないとき、勘九郎地藏にお参りに行き、願をかけてくる。なおつたらお線香を持つていく。(菓鳥)

子どもの夜泣きが止らないときは、「猿沢の池のほとりに鳴く鹿の」とおまじないを書いて、その紙をつつんで子どもの寝る部屋につるすといひ。(清里)

耳だれの家伝薬 上石倉に耳だれの薬をつくつて売つていた家が あつた。

むかし、弘法大師がつくり方を教えたという。

徳利のようなものの中に薬(液)が入つていて、箸をつつこんでつけた。(下石倉)

耳の病気 耳の病気ときは、冷やして耳だれを出してなおす。または、屋敷稲荷に願をかけて、なおれば七色菓子をお供える。(清野)

中耳炎 中耳炎のときは、「黄門様の水」と呼ばれている家伝薬をも  
らってきつくと良い。(巢鳥)

耳だれ 耳だれになると家伝薬をつけてもらう。(鳥羽)

耳に虫 耳に虫が入ったときは、たばこの煙で追い出す。(元総社)

耳の病氣 耳の病氣には、桃井の柳沢寺に底抜けひしゃくを持って  
いき、それを進ぜると良い。(元総社)

鼻血 鼻血のときはちんげ抜け。(清野)

鼻血のときは、ちんげの毛を抜くと良い。そのため昔の人は、ち  
んげの毛を残した。(巢鳥)

鼻血がでたときは、ちんげを抜けばなおる。(鳥羽)

のどが痛いとき のどが痛いときは、ネギを焼いて、手ぬぐいにま  
いてのどに押しあてておくとき良い。またネギは細く切って手ぬぐいに  
包んでも良い。(清里)

せき せきが出るときは、かりんやきんかんを煎じて飲むとき良い。

百日せき 手に墨をつけて、半紙に手形を押しつけて、これ以上百  
日せきが入らないように、トボロに貼る。(清里)

あせも あせものときは、桃の葉を風呂に入れる。(巢鳥)

アセモになったら、桃の葉を釜でゆでて、そのお湯をお風呂に入れ  
る。(上新田)

汗もには、桃の葉を袋に入れて、風呂に入れるとき良い。(鳥羽)

デキモノ デキモノができたとき、ドクダミを温めてもめば良い。  
(巢鳥)

デキモノができたときは、ドクダミを取ってきて、日陰干しにし、  
それを煮て、塗れば良い。(鳥羽)

やけど やけどのときはみそをぬる。(上新田)

やけどのときは、ジャガイモをすってつけければ良い。(清里)

打ち身 ジャガイモかサトイモをすって、玉子の白身とうどん粉を  
入れてこね、油紙につけ、患部にはった。(巢鳥)

打ち身のときは、冷たい氷でひやし、スイセンの根をすって、うど  
ん粉と酢を混ぜたものを貼りつける。(中石倉)

打ち身のときは、ジャガイモをすり、酢と黒い粉を入れてこねる。

これを布につけて打ち身の場所にはる。黒い粉は、近くの桑道の先生  
が持っていた。(鳥羽)

打身のときは、梅酢でうどん粉をけねて、手ぬぐいなどにぬり、そ  
れをはった。(清里)

凍傷 凍傷になったときは、カラスウリと杉の葉を鍋に入れて煮る。  
その汁をつけるとき良い。また症状の重いときは、ギンナンを砕きこは  
んに混ぜたものを紙に塗り、凍傷の場所にはると良い。(清里)

ハチさされ ハチにさされたら、越後の毒消し売りが売りにきた毒  
消しをつける。(巢鳥)

蜂にさされたときは、齒クソをつける。(中石倉)

ハチにさされたら、齒クソをつけるか小便をかけるといい。(鳥羽)

虫にさされたらドクダミをもんでつける。(巢鳥)

食あたり かつおに当たったら黒砂糖をなめる。

腹くだし 腹くだしは、キハダやゲンノショウコなどを煎じて飲む  
といひ。(中石倉)

胃 胃の悪い人は、磯部温泉の水を飲めば良い。(元総社)

十二指腸潰瘍 十二指腸潰瘍は大根おろしでなおる。(元総社)

腎臓 腎臓の悪い人は、生にんじんをすって飲めば良い。

腎臓の悪い人は、すいかを食べる。(清里)

足にマメができたとき たばことごはんをませ合わせ、黒糸につけ  
てマメのところを通すと良い。(清里)

イボができたとき イボができたときは、イチヂクの汁をつけるか、吉岡村大久保のイボ神様にお参りに行き、その石でこするとなおる。

(清里)

イボができれば阿弥陀様にゴマボタモチを供えると良い。

コウデ ナベのつるの下に手を通して、末子の女の子に糸でその手をしばってもらうと良い。(植野立石)

中氣 年寄りで太った人が中氣になる。

三カ日にトロロを食べると中風にならない。

冬至にトウナスを食べると中風にならない。

冬至に風呂にトウナスを入れると中風にならない。(巢鳥)

正月三カ日にとろろを食べると中氣にならない。

トロロを食べた茶わんでお茶を飲むと中氣になる。(中石倉)

中気には、安中から家伝薬をもらって来ればなおる。(元総社)

正月三カ日にトロロを食うと中氣にならない。(元総社)

トロロを食べた茶わんで茶を飲むと中氣になる。

正月三日にトロロを食べれば中氣にならない。(鳥羽)

神経痛 神経痛のときは、タロツペの根を煎じて飲むと良い。(巢鳥)

ヨモギを陰干しにして煎じて飲むと良い。(巢鳥)

神経痛には、サイカチの実をくだき、紙に塗ってはるといい。川に

あるサイカチはきかないが、山にあるサイカチはきく。(中石倉)

神経痛は、酢とうどん粉と玉子の白身を入れてこねたものを、紙に

ぬりつけて、患部に貼り付ける。(元総社)

湯に入つてよく温まればなおる。(元総社)

アツケ 管笠をかぶせて、杓で水をかぶせる。ぶるぶると一回ふる

えるとなおった。(植野立石)

アツケのときは、管笠をかぶせて水をかけると良い。またキューリ

を食べさせても良い。(巢鳥)

七月二十七日の天王様に清酒を進せて、それを飲むとアツケにあたらない。(元総社)

アツケにあたったときは、管笠をかぶせて、その上から杓で水をか

けると良い。(鳥羽)

てんかん てんかんになったら水をかける。(清里)

ひきつけ ひきつけを起したら冷水で頭を冷やす。(巢鳥)

子どもがひきつけを起したら、へソのまわりに灸をすえると良い。

(巢鳥)

毎日一回、粉類(めん類)を食べるといい。(巢鳥)

カツケ カツケのときは、朝露の上を歩くと良い。さらに小豆を食

べると良い。

牛馬の病氣 牛馬の病氣で軽いものは、梅酢を飲ませた。(清里)

家畜の病氣のときは、黒砂糖をやる。黒砂糖は下熱に良い。(巢鳥)

馬の病氣には、ビールを鼻から飲ませる。

馬の糞つまりは、石けん水を溶いて、かんちようをしてやるといい。

(中石倉)

馬の病氣は、赤飯を持って馬頭観音を拝むと良い。(元総社)

馬の風邪は酒を飲ませて、あたたかくする。(元総社)

高血圧の時は、ボンのクボに蛭をつけた。(江田)

まじない

頭痛 管笠に水をかける。

こうで(甲手か。手首の痛み) 輪つかの先に手を入れて、左前に

結わく。(総社町立石)

薬

ミミズ 熱さまし。



ドクダミ アセモに効く。

オンパコ(車前草) すり傷。

げんのしょうこ 下痢止め。

モモノ葉 あせも。

夏土用に採った薬草を日干しにしておく。

菖蒲とモチグサの湯に入る。(総社町立石)

接骨 竹の皮を焼いた、混ぜ物の膏薬を塗る。(総社町立石)

明神さま 明神様にたまつた鉄の水溜めの雨水で目がなおつた。

(元総社第二)

### 三、卜占、まじない

位牌の赤い絹の袋 馬のたずなの所につけると、おとなしく、丈夫で、力づよくなる。(総社新田)

まゆにつばをつける まゆ毛の数をきつねに数えられるとばかされるので、数えられないよう、つばをつける。(上青梨子)

耳ふさぎ 同年の人が死んだ時、鉄びんのふたを二つあわせ「耳つ止」という。(上青梨子)

イノリ釘 神社の裏の杉の木に、イノリ釘を打った跡があった。人に見られないように行き、見られると効きめがなかった。(元総社大渡)

節分の豆 初めて雷が鳴った時、投げるという。(稻荷新田)

字が上手になる おそなえを上げた紙に字を書くと、字が上手になる。(元総社大渡)

三隣亡 むかし、はたけをうなつていたら、はたけから、おそなえ餅がでてきたことがあった。それは、三隣亡をまつたものという。

三隣亡をまつたうち(まつりそうなうち)の方にむけてたてるという。

三隣亡をまつることがほかの人にわかると、だめになるといった。(青梨子前原)

三隣亡の日の夜に、お赤飯を二つ折りの半紙に包んで、欲しい田に埋めると、やがてその田が自分のものになる。三隣亡除けは、赤飯がなくならない前にお赤飯を取れば良い。(上新田)

三隣亡の日に、餅を隣の家にこっそり埋めると、隣の財産が流れ込んで来る。人にもつかると効果がなくなる。これを除けるためには猿田彦をまつれば良い。(巢鳥)

猫の分 田植のとき、すこし余つた場所があると、猫の分、犬の分といつて植えた。(下新田)

へビ除け 小正月のときの小豆がゆを煮た釜とか鍋を洗った水を、うちのまわりにまけといつた。そうすれば、へビがうちの中へ入らないといつた。(前箱田)

へビはたばこの煙をやがる。

へビは紺のももひきをやがる。(元総社)

へビに出会いたくないときは、お線香をたくと良い。(巢鳥)

ネコさがし うちで飼っているネコがいなくなったときは、ネコの茶碗を稲荷様の前にかぶせておけばよい。(下石倉)

縁起 朝ぐもは縁起がいい。一升杓に入れて神棚にあげろ。

晩ぐもは縁起が悪い。

ツバメが巢をつくると、円満になり縁起が良い。(元総社)

店をやつていて、女が先に来ると縁起が良い。

カラス鳴き カラスが鳴くと人が死ぬ。しかし施主になる人には聞えない。(鳥羽)

縁起 朝ぐもは福ぐもといひ縁起が良いので、手に取つてオイベス様にあげる。逆に夜ぐもは盗つとぐもと呼び縁起が悪い。(鳥羽)

茶柱 茶柱が立つと縁起が良い。(中石倉)

ほうき星 ほうき星がでるときは縁起が悪い。(巢鳥)

朝茶 朝茶はその日の難のがれ。(清里)

夢 正月二日の夢は縁起良い。

悪い夢をみないように、紙に「ばく」と書いたものを枕の下に入れておくと良い。

人が死んだ夢は縁起良し。

田植えや水の夢は縁起悪い。

火事の夢は縁起良い。(元総社)

良い夢 青竹の夢はいい。

墓にふとんを敷いて寝ている夢はいい。

へびの夢はいい。

こけらの夢はいい。

葬列の夢はいい。

夢 火事の夢をみると赤アザの子ができる。(鳥羽)

天然色の夢は良くない。(中石倉)

へびの夢は金がたまる。

ナスの夢は良いことがある。

葬式の夢は縁起が良い。

夢は逆夢。

元日、二日の夢は縁起良い。(巢鳥)

へびの夢をみると縁起が良い。

ウナギの夢をみると縁起が悪い。

便所の夢をみると縁起が悪い。

親の夢をみるときは難がある。(清里)

人魂 人魂をみると不幸がある。(巢鳥)

人魂は、出世まえにみなければ、もうみない。

多くお金をためると火の魂が飛んでくる。

人魂が飛ぶと誰かが死ぬ。(清里)

十二支と生まれ 子の年生まればまめに働く。

寅年生まればけんか好き。

巳年生まれば金がたまる。

未年生まれば、おとなしい。(元総社)

歯 上の歯が抜けたときは縁の下に投げ、下の歯が抜けたときは屋根の上に投げる。(中石倉)

イボ イボができたなら、「イボイボ渡れ」と言つて人の手にさわる。

(中石倉)

メカゴ ザルをかぶるとメカゴになる。(中石倉)

雷除け 麻かやをつつてその中に入る。

雷電様にわらじをかつてきて、トボ口につつておくと良い。(元総社)

雷がきたら麻のかやの中に入って、「トウクノクワバラ、トウクノクワバラ」と唱えると良い。(巢鳥)

ワバラ」と唱えると良い。(巢鳥)

雷が鳴つたら、かやの中に入って、お線香をたてて、「遠くのくわばら、遠くのくわばら」と唱える。(上新田)

雷鳴が聞えたら、かやの中に入る。

上新田の雷電神社で、雷除けの小さいわらじを買ってくる。(中石倉)

雷が鳴ると、部屋に麻かやをつつて、線香をたいて、その中に入り

「トテウゲノクワバラトウクノクワバナ」と唱えていた。(清野)

魔除け 豆まきの晩に、いわしの頭だけ切り取り、それを黒く焼き

柀にさす。このとき「あらゆる虫の口を焼いてくれ」と唱え、最後に

つばきをひっかける。(元総社)

獅子舞は魔除けになる。(元総社)

地震除け 地震がきたらヤブに飛び込み、「マンザイラク マンザイラク」と唱える。(巢鳥)

地震のときは「まんげろく、まんげろく」と唱える。

地震のときは竹やぶの中に入れ。(上新田)

盗難よけ 夜寝るとき、鈴びんの口を北に向けて寝ると、どろぼうが入ってきて目が開く。(清里)

#### 四、天文・気象

天気 夏の北風は、じょう降りのもと。(大雨のもと)

南に雲がかかると明日は雨。

みかほ山に雲がかかればすぐに雨。(三束雨ともいう)

榛名のひょうは悪いことをする。

赤城から雲がくると長いこと雨になる。

赤城と榛名の雲がぶつくと大雨。

月がわつかをかぶると雨。

月がわつかをかぶってその中に星が三つあれば三日雨。

夕日がまっ赤になるとひでりになる。

朝日焼けは雨が降る。

へびが多いと雨が降る。

朝へびが出るとその日は雨。

竹の子がうんと育つと大雨。

蜂の巣が高いと大雨で、川淵でも大雨。(元総社)

猫が耳越しに顔を洗っていると雨が降る。

しけの夕やけは天気がもどらない。

朝やけは天気が変わる。

朝雨と女とのまくらはたまげることはない。

月に笠がかかると雨。

朝雷のときは橋を渡るな、大雨になる。

小幡の三束雨。

赤城の雲はこつちに来ない。

榛名おろしは直撃される。

梅の花が下を向くと雨が多く、上を向くと雨が少ない。

しもが降ると桑があまる。(鳥羽)

持病の場所が痛くなると天気が悪い。

朝やけは雨。

南風はつなみ風といい天気が悪くなる。

台所が濡れてくると雨。

川瀬の音が大きいと天気が悪く、小さいと天気が良い。

猫が顔を洗うと雨。

蜂が巣を陰にかくれた場所につくると台風が多く、高い木につくると少ない。

南から来る雷は被害が大きく、赤城からの雷はよく逃げる。

沼田の雷は涼しくなる。(中石倉)

榛名と赤城に雲がかかると強風。

利根川の橋の電車の音がよく聞えると北風。

川の音が聞こえたと雨。

雷は御荷鉾からくる。

御荷鉾の三束雨。

夏の北風は三日もたない。

水がめが汗をかくと天気が変わる。

ケヤキの古木が一斉に芽を出すと霜がふる。(上新田)

小幡の三束雨。

御荷鉾の三束雨。

蛭が鳴くと雨。

持病のある人が、悪いところが痛むと雨。

蛇がでると雨。

月にかさがかかると雨が降る。

夕焼けがでると翌日は晴。

榛名山に黒い雲があると次の日悪くなる。

大きな夕立は榛名から。

雲が赤くなると雹が降る。

朝やけは良くない。

雨の夕上りは翌日は雨はなく、朝上りは良くない。

朝雨と女のうでまくりは恐くない。

夜雨が上ったときは数日後にまた雨がくる。

つばめが低く飛ぶと雨が降る。

ありがでると雨が降る。

越後夕日は雨が降る。

赤城の夕立は降らないが榛名の夕立はくる。

小幡の三束雨。

夜道を歩いていくもの巣が顔にあたると雨になる。

夕方、竹の葉に夜露で玉ができると明日は天気。

虹が旧市から利根川を渡ってこちらがわまでくると百日干照り。

雨降りに蛇いない。

夜利根川の瀬の音が聞えると晴れ。

霜はムラの前だけふる。

下りの新幹線の音がぶつた音が聞こえると天気が悪くなる。

ひょうは馬の背を分ける、といわれるくらい部分的にしか降らない。

そらが赤くなるとひょう。

トウモロコシの木のねばりがあれば地震がくる。(植野立石)

朝北の谷川岳に雲がかかれば曇。

夕日が榛名山の北にまわると雨になる。(榛名の北夕日ともいう)

榛名山全体が夕日に照らされると晴。

イワシ雲は雨。

小幡にまつ黒い雲がでるとすぐ雨。

赤城の雲は乾をまわつてくると、雨の降つそこないといわれる。

榛名に雲ができればすぐ雨に。(清野)

朝日やけは雨になる。

戦車が来るような音がしたらひょうがくる。

霜は夕方寒くて風がないときにふる。

月がかさをかぶれば雨。(清野)

どす赤い夕焼けは天気がよくない。

寺の鐘の音が聞こえると天気がよくない。

雷三日。(清里)

天候を知る ケヤキの芽がまばらだと霜が降る。

竹の子が親竹よりのびると、水が多い。

蜂の巣が軒に巣を作ると台風が来る。外に巣を作るとよい年である。

(上青梨子)

天気の子兆 朝、鳩がなけばその日は天気になるといった。

カエルがなくと、雨が降るといった。(下新田)

この辺からみて、赤城山にこけら雲がでると、かならず雨が降ると

いった。(元総社)

浅間のけむりが北へなびいていれば天気だといった。

御荷鉾の三束雨という。御荷鉾から出たかみなりは、ムギを三束ま  
るかないうちにやってくるという。

朝雨と女のうでまくりにはたまげるなといった。

雨は馬の背を分けるといった。(小相木)

雨が降る前 神経痛がいたむ。ワラタタキが汗をかく。利根の川瀬

音がきこえる。浅間山の雲からの見え方。へびに出会う。(上青梨子)

夕立 夕立はサンゾク雨といい、桑三本たばねる間くらい早さで  
くる。ミカボの三束雨という。(小相木)

榛名からでる夕立は、この辺をあらすけど、赤城からでる夕立は下  
へ行くという。

下夕立といって、二つの夕立があうと、からりと晴れないで、つく  
日も雨になるといった。(元総社)

船尾から渋川の方へたつた夕立は、赤城へひっぱられて、伊勢崎か  
ら栃木の方へながれるという。

この辺の夕立は、小幡の方から来るのが早い。

小麦の束を三束まるめないうちに降ってくるといった。(青梨子)

雷の火 ふつうの火ではないから、タメをかけると消えるという。

入口が小さくて、中が大きくなっている。麻カヤの中には入らず、  
まわりを火の玉になってまわったが、火事にはならなかった。

雷電神社のワラのクツをあげ、代りにうけてくる。雷除けになる。

一つ借りて、二つにして返す。(稻荷新田)

落雷 雷が田に落ちたら、その場所にオシメを張り、人糞をまくと、

稲の回復が早い。(上新田)

田に雷が落ちたあとは、タメぶてば良い。またはゲ縄を張って、榛

名様に拜んで貰う。(清野)

赤城のかみなり 赤城のかみなりは、この辺には降らないという。

(総社町立石)

かみなりのこと 榛名と赤城のかみなりがあわさるとひどいかみな  
りになる。

赤城のかみなりは、こつちへは来ない。

榛名山から来るかみなりは、大正橋を渡ると消えるといった。

「小幡の三束雨」とか、「御荷鉾の三束雨」といった。西南の方から

くるかみなりでムギを三束まるめないうちにやってくるといった。

(総社町総社)

雷除け 節分の豆をとっておいて、

「遠くの桑原、遠くの桑原」

といった、その豆を年の数だけ食べると雷除けになるといった。

(前箱田)

小幡の三束雨 小幡の方にはじまったかみなりは、ムギ束三束しば

る時間もまにあわないほど早く来るといふ。ぼやぼやしているなど

いった。(総社町立石)

天気のことわざ 越後夕日は雨が降る。

オバタの三束雨。

竹の夜露と夕蜘蛛の巣が張ると晴れる。

利根渡りの虹は百日の日照。

ヒヨウは馬の背を分ける。

空が赤くなるとヒヨウが降る。

トウモロコシの根張りが良いと台風が来る。

蜂の巣が高いときも台風が来る。(総社町立石)

小幡の三束雨 ここからみて西南の方向に出たかみなりはよくき

た。小幡の方へたつたかみなりは、小麦を三束まるめないうちに降つてくるといった。

伊香保から船尾の方へでたかみなりは渋川から赤城の方へながれてしまう。(青梨子)

小幡の方からくる雷は早くくる。小麦の束を三束まるめないうちにやってくるというので、「小幡の三束雨」といわれている。(下石倉)

雨乞い かわきで水不足のときには、榛名へ雨乞いにのぼった。

榛名神社のちよつと手前に岩屋のわれ目から、たつくんたつくん出ている湧き水を、雨乞い水として、瓶に汲んできて、うちへもつてきて、井戸水とまぜて、水のぶつかけてこをしたという。(元総社)

長い間日照りが続くと雨乞いをした。

榛名まで水をもらいに行つた。御師の家へおかねを包んで行つて水を一升もらつてきた。

雨乞いに行く者は、えらばれた若い者が二名。

榛名からもらつてきた水を元水もとみづにして水を加えて、神社にムラの人が寄つて、水のかけっこをした。そのあと酒を飲んだ。そうすると、雨が降つた。

青梨子の神社の境内に天神様が祀られている。天神様が雨の神様といわれた。

青梨子の天神様の雨乞いとして有名であった。(青梨子)

榛名神社に若衆が水をもらいに行つてきてそれをまくと雨が降る。

(元総社)

榛名神社へ水を貰いに行き、その水を八幡様の御神木(松)にかけた。

ピングシと呼ばれる鳥居をかついで行つた。(清野)

陽気正月 照りが続いて、おしめりもちょうどいいとき、百姓にとつ

ていい陽気だというので名主(区長)が、陽気正月というふれをだした。

実際には、名主のさきぼうがふれてあるいた。

「今日は、陽気正月だよ」

と、ムラ中なつてあるいた。

そうすると、女衆はすぐに小豆をつつかけた。ご馳走(かわりもん)の用意をしたのである。

陽気正月のときは、半日、しつかり休んだ。(青梨子)

長い間雨が降らないでいて、久しぶりに雨が降つたとき、陽気正月といつて半日仕事を休んだ。

むかしは、名主が「陽気正月だよ」とフレをまわした。それを聞く

と、おんなしゆはすぐに小豆を煮た。まんじゅうなどをつくつて、半日仕事を休んだ。(青梨子)

方角の呼称 この辺では、東西南北の間の方角について、次のよう

な呼び方をしている。

西北……はるなずみ

東北……あかぎずみ

東南……(なし)

西南……みようぎずみ

それぞれ、山を目あてにしていつているもの。(江田)

西北……榛名ずみ

東北……赤城ずみ

東南……東京ずみ

西南……とくに呼び名はない。(前箱田)

イヌイの方角……ハルナズミ

ウントウの方角……アカギズミ

タツミの方角……トウキョウズミ

ヒツジサルの方角については特にいわない。(西箱田)

西北のすみのことを、イヌイズミといい、東南のすみのことは、タツミズミという。

東南から吹いてくる風のことには、ツナミカゼという。

西風のことには、アサマツという。(総社町総社)

七夕 七夕のとき、畑へ出ると、作物がみられないといった。どういうわけかわからない。

七夕には、雨が多いといった。

七夕の日に、午前十時ごろまでに、七回水浴びすると丈夫になる。

ネブタで目をこすると、目薬の代りになる。(江田)

しも しもがふると養蚕はあたる。(元総社)

地震の予知 地震の前には地震雲が出る。

なまが騒ぐと地震がくる。(巢鳥)

## 五、動物・植物

ネコの子 ネコの春子は、ネズミをとるという。夏子は、トリをとるという。(元総社)

ホウジロの鳴き方 ホウジロは空高くから地球をみて、「山三、海六、

里一分」(さんさん、かいろく、さといちぶ)と鳴くという。(元総社)

ヒバリの鳴き声 ヒバリは一日働いても、一両しかならないので

ヒイチリヨウ、ヒイチリヨウ

と鳴くのだという。(元総社)

ホウジロの鳴き方 ホウジロは

サンサン、カイロク、サトイチブ

地球上は、山が三分、海が六分、里が一分に分けられているという。それを鳥(ホウジロ)は知っていて、右のように鳴くのだという。そのことを、人間は知らなかったという。(元総社)

スズメとツバメ お釈迦様がご臨終のとき、生きものがあつまった。そのとき、スズメははじめのほうに行ったんで、穀を食えといわれた。

ところが、ツバメはお釈迦様が最期だというときにかけつけた。それで穀を食べてはならぬえといわれたつて。(総社町総社)

ツバメ ツバメが巣を作ると縁起が良い。

ツバメの巣を子供が棒でつつくと目がつぶれる。(鳥羽)

ツバメは縁起がいい。

いつも来るツバメが来ないと不幸になる。(中石倉)

ツバメが巣をつくると縁起が良く、つくらないとはりあいが悪い。(巢鳥)

ヒバリ ヒバリは、「ヒイチブ」と鳴くといった。一分は二十五銭。一日に二十五銭働くといった。

ヒバリは、農作物につく虫を食うのでそういったもの。(青梨子)

カケス カケスという鳥は、よくクリをかくした。冬のえさに、土の中に埋めておいた。(青梨子)

ウグイス ウグイスが鳴くと縁起が悪い。(巢鳥)

カラス 病気が悪くなると、本人や家族は聞えないが、まわりはカラスの鳴き声が聞える。(巢鳥)

セキレイ セキレイは縁起がいい。

セキレイをとると目がつぶれる。(中石倉)

コウモリ どっちつかずの人、いいとこめぐりをする者のことは、

コウモリといった。(青梨子)

モズ モズは、ホトトギスのえさをしまっておくという。

アマガケゲエロなど。これを、モズツパツケといった。(青梨子)

コガネムシ コガネムシは殺すな。殺すとかねがたまらなくなる。

(西箱田)

ゴキブリ ゴキブリのことを、おかさまのおつかいだといった。

(西箱田)

ミミズ ミミズは怠けもんで、何もしなくもいいもんだから土かぶつてるんだという。(総社町新田)

ミミズに小便をひっかけると痛くなる。痛くなったら、ミミズ三四

を水で洗えばなおる。(上新田)

ミミズに小便をかけるな。

(ミミズは干して熱さまし。(巢鳥)

ミミズは干して煎じて飲むと熱さましになる。(中石倉)

ミミズは、干して熱さましの薬にする。(元総社)

夜のクモ 夜のクモは「ヨクモキタ」と言い、縁起がわるいと言い、

焼いてしまえという。

朝のクモをつかまえると縁起が良いと言う。(小相木)

クモ 朝くもは縁起が良く、一升枿に入れて神棚にあげ拜む。夕ぐ

もはどろぼうぐもなので、殺せという。(中石倉)

朝グモは縁起いいが、夜ぐもはどろぼうぐが入る。(巢鳥)

朝くもがでるとお客が来る。夜くもは縁起が悪い。(清里)

サル サルの悩みそは、高血圧に非常に良いといので、人に頼んで

捕ってきてもらった。このサルの頭を灰の中に入れて蒸し焼きにして

から食べる。昭和の初期には、片品の方から売りに来た。(巢鳥)

馬の油 馬の油は、やけどにいい。(元総社)

馬肉 肺炎には馬の肉。(元総社)

イノシシ 明治の終わりまで、イノシシが出たのでシシ土手をつ

くった。(巢鳥)

赤かえる 赤かえるは寝小便の薬、焼いて子供にくれる。(中石倉)

赤かえるは、寝小便の薬。味は鳥肉のようであまかった。(鳥羽)

ムカデ ムカデをみつければ、ナタネ油の入ったビンの中に入れて

溶かす。これがキズ薬になった。(巢鳥)

ムカデを食用油に入れておくとキズ薬になる。(中石倉)

ムカデを捕えて食用油の入ったビンに入れておく。これをおできが

できたときに、鳥の尾の羽につけてぬる。(鳥羽)

ケガをしたとき、ムカデを食用油の中に入れておき、それをつける

と良くきく。(元総社)

イモリ イモリの黒焼は薬になる。(鳥羽)

イモリにかじられると雷がくるまで離さない。(鳥羽)

デンデンムシ カタツムリをデンデンムシといい、よだれや寝小便

にきくという。(清里)

モグラ たむしができると、モグラをつかまえてきて、その血をつ

けると良くなる。

モグラの黒焼きは、やけどの薬。(元総社)

ネズミ ネズミがいなくなると火事になる。(中石倉)

シマヘビ シマヘビが多かったときは、食べていた人がいた。(鳥羽)

シマヘビは、結核にきくし、栄養剤になるので、山に行く人がいる

ときに捕ってきてもらう。食べ方は、皮をむいて、焼いて食べる。肝

は、肋膜の悪い人には良いので、肝を飲む。(巢鳥)

シマヘビは、昔は薬屋にもつていくと買ってくれた。(元総社)

アオダイショウ アオダイショウは、屋敷の守り神だから殺しては

いけない。(清野)



へビ 夢枕にへビがでて、その場に行ってみるとお金が落ちてい  
る。へビを殺してはいけない。殺すとたたり、恐しい。(元総社)

へビは精力剤になり、特にシマへビは肺病にもきくのでよく食べた。

へビは金運の神なので、巳年生れの人は金運にめぐまれる。(中石倉)

へビは、線香やタバコを嫌い、へビ除けには線香をたいたり、タバ  
コのやにを使ったりした。(清野)

へビは、肺病に良くきき、また精力剤ともなる。(元総社)

へビの皮をむいて、砂糖しように油をつけて食べると体力がつく。ま  
たへビの血は病気のときに飲むと良い。

お蚕の糞 お蚕の糞は、干して飲むと熱さましになる。(単鳥)

ナマズ ナマズは栄養剤になるので、ドウを使つて捕つた。(単鳥)

ナマズは、さいて、串にさし遠火で時間をかけて焼く。(鳥羽)

ドジョウ 川にザルとバケツを持って行き、ドジョウをたくさん捕  
えた。夏のドジョウはもたないが秋のドジョウは長もちする。食べる

ときは、なべに水を入れ、そこに生きたままのドジョウを入れて煮込  
む。味はしょう油でつける。このときなべにふたをしておかないと、  
ドジョウがはねて逃げ出す。(鳥羽)

フナ 川で取つたフナで、大きなものは串にさして焼き、小さなも

のは煮込む。(鳥羽)

金魚の黒焼 肺炎のときは、金魚を黒焼きにして、それをすり鉢に  
入れて粉にして、それを飲む。(元総社)

ヤツメウナギ 目が悪い人には、ヤツメウナギを食わせる。また土  
用の丑の日うなぎを食べても目に良い。

ヒル ヒルを焼いて食うと伝染病が逃げる。(元総社)

南天の葉 南天は不浄よけになるといった。

お祝いごとのときには、重箱に赤飯をつめて、おくばりするとき、

南天の葉を赤飯の上にのせてやった。(元総社)

竹のはなし 竹のまるみが、五寸以上で一本。

竹山師のかんじようである。

くずやねをふくときのおしよこ竹一把は、二十五、六本。

桶屋さんが、桶のたがをつくるのに竹を割る。

まるみが、一寸か二寸のやつが十本くらいで一把とする。(元総社)

竹の花は縁起が悪い。

竹の花が咲くと変事がある。

八月に竹をきるな。

地震のときには竹やぶに入れ。(鳥羽)

竹の花が咲くと凶作。

地震のときは竹やぶに入れ。(元総社)

竹の子 新の竹の子が、旧の竹の子より低いと災難がある。(清野)

ヒガンバナ マンジュシャゲのことを、むかしはカジバナといった。

この花をとつてくると、うちが火事になるから、とつてきてうちの  
中に入れるなといった。

今はカジバナといわずに、ヒガンバナとよんでいる。この根っこが

くすりになるといふ。(元総社)

マユミの木 切つて陰干ししておき、せんじてのむとトゲ抜き

薬になるといふ。戦前まで作つている家には買いにきた人がいる。

八月七日頃、とりに行つていた。(元総社大渡)

トウモロコシとキュウリの交換 山口家では、トウモロコシをつ

くつてはならない。松下家では、キュウリをつくつてはならない。そ  
れで、むかしは、おたがいにつくつたものを交換しあつたという。

土用のミツメ 土用の三日目に、センブリ、ドクダミ、ゲンノシヨ

(青梨子前原)

ウコウを採りに行く。そしてそれを干して薬にする。(清野)

ゲンノシヨウコウ 下痢のときは、ゲンノシヨウコウを煎じて飲む  
となおるといわれている。(植野立石)

腹下しには、ゲンノシヨウコウを取ってきて、日陰干しにして、煎  
じて飲むと良い。(鳥羽)

ゲンノシヨウコウは胃薬になる。(元総社)

ゲンノシヨウコウを土用の三日のうちに取ってきて、日陰干しにし  
て、腹痛のときに飲む。(元総社)

ドクダミ できものができたときは、ドクダミを煮て汁を出して、  
その汁をたらいに入れてできものができた場所をつける。いそいでい  
るときは、ドクダミをもみ出して使う。また、ドクダミを袋に入れて、  
それを風呂に入れて薬湯にしてもきく。(植野立石)

ドクダミのお茶は胃の薬。(清野)

おできができたときは、ドクダミを煎じて飲むといい。(鳥羽)

蓄膿症には、ドクダミを鼻に入れると良い。(元総社)

ドクダミは、万病にいいといわれ、鼻の悪い人や便秘の人には特に  
良いといわれる。(元総社)

ドクダミは、毒下しの薬。(元総社)

ドクダミは、体がかゆいときに煎じて、コップ一杯ぐらい飲むと良  
い。(元総社)

ユキノシタ 歯が痛いときはユキノシタをかむ。(巢鳥)

虫にさされたらユキノシタをもんでつける。(巢鳥)

はれものができるときは、ユキノシタをもんでつけるといい。(鳥羽)

ユキノシタは耳だれのときにつける。(元総社)

ヨモギ 手ぬぐいで袋をつくり、その中にヨモギを入れ、風呂に入  
れると良い。

ヨモギを桃葉を入れ煮たった湯の中に入れると皮膚の薬になる。

ヨモギは寝小便の薬。(清野)

傷口にヨモギの葉をもんでつける。(上新田)

血止めにはヨモギをもんでつける。

ヨモギと大根を干したものをガーゼに包んで、それを風呂に入れる  
と温まる。(中石倉)

手を切ったときの血止めに、ヨモギの葉をもんでつけると良い。

(元総社)

キハダ キハダは、はやり目や胃腸に良い。はやり目のときは、キ  
ハダを煎じたものを衣につけて目にあてると良い。(中石倉)

キハダを酒につけて飲むと体に良い。適量は、毎日盃に二杯ぐらい。

(元総社)

ザクロ ザクロの実は痔に良い。(巢鳥)

ザクロの実は腎臓に良い。(元総社)

センブリ センブリは胃弱の人が煎じて飲む。(巢鳥)

センブリは胃の薬で、胃潰瘍もなおる。(元総社)

トウモロコシ トウモロコシの毛は、干して煮出して、それを飲む  
と腎臓に良い。(巢鳥)

松 お墓に松を植えるな。お墓で人を待つといい縁起が悪い。

(元総社)

白ナンテン 白ナンテンは、腹痛や目が痛いときにきく。(巢鳥)

カキ カキの木は折れやすいので登るな。

カキを妊婦にくれるな。腹が冷える。

カキは酔さましによい。(巢鳥)

ドドメ ドドメは甘くておいしくて滋養剤になる。ドドメ酒にして

も良い。(巢鳥)

桃 桃の新芽を取っておき、土用の丑の日の風呂に入れておくと、汗もの薬になる。(植野立石)

サイカチの実 八幡様のサイカチの実を拾ってきて、それを風呂に入れておくと、冷え症や婦人病にきく。(清野)

梅干 梅干は熱をとるので、歯や頭がいたいときにはると良い。

(中石倉)

セブガラシ セブガラシという蔓の根を、肋膜の悪い人や肺に水がたまる人が、煎んじて飲むとなおる。(元総社)

カラスウリ カラスウリは、ひび薬。(元総社)

ミイロノ草 手を切ったときに、ミイロノ草をもんでそれをつける  
と良い。(元総社)

モチ草 モチ草を汲み取り便所に入れると、ウジがわかない。(清野)

ナツメ ナツメは利尿に良く、腎臓の悪い人にいい。(巢鳥)

ジャガイモのクス湯 ジャガイモをすって、それでクス湯をつくる。  
これは、ごはんが食べられないときに良い。(巢鳥)

ギンナン ギンナンはあまり食べないが、栄養剤になる。(巢鳥)

トウガラシ 赤くなったトウガラシを焼酎のびんの中に入れてと打ち身などの薬になる。しかし、つけるのは一日一回で、何回もやると  
ひぶくれをする。(中石倉)

スイカ 腎臓の悪い人には、スイカを食わせる。(元総社)

## 六、その他

一人前 縄ないは、午前四房、午後四房で一日八房。

むしろは、一日で五く六枚あみあげる。

田植えは一日三畝。

さく切りは一日七畝。(元総社)

エンガと田植えは一反。

稲刈り四畝。

縄ないは一日で八百ひろ。

筵は二人で十枚。(中石倉)

田植えは一人七畝。

エンガは一人一反で、エンガを使えて百姓の一人前。

米一俵かつげて一人前。

女しゅうは、おはぎが上手にできて一人前。

はんでんは半日で一人前、でも実際はなかなか縫えない。

縄ないは、晩に四十ひろをなえて一人前。(巢鳥)

俵を一俵かつげて一人前。

女性は絹織一反で一人前。

青年会に入ると一人前。(植野立石)

一単のひとつきり、はんでんの半日。

かや刈りは、一日一駄六束。(清里)

筵あみの競争 正月に筵あみの競争をやり、一日朝から晩までに十

枚をあみあげる。普通でだいたい一時間で一枚あみあげる。(元総社)

縄ないの競争 二十ひろを一房として、それを二十房なう競争をした。

(元総社)

力くらべ 十一月の品評会のために、青年会で俵のかつきっこをし

た。このとき一升枡の上でやる。また十五貫ぐらゐの石のかつきっこ

もやった。(元総社)

食い競べ うでまんじゅうを二十五個を夏休みに食べくらべをし

た。(巢鳥)

鼻 鼻の穴が大きいと体が良い。(清里)

耳 耳たぶがでかいと福がある。

耳がたつているとりこう耳。

カラス鳴き カラスが朝から変んな声で鳴くと不幸がある。(清野)

蜂の巣 蜂の巣が木の根元にあると何か災難がくる。(清野)

線香 お線香をあげるとき、四本あげるのは悪い。一本もあまり良

くない。二本か三本あげるのが良い。三本のときは、親戚の仏様に一

本、無縁仏に一本、全ての仏様に一本という意味がある。(植野立石)

友引 友引の日に葬式を出すな。(元総社)

オサキ オサキは目に見えないが、住みつくると財産をみんなもって

いく。(鳥羽)

盆暮勘定 ハルゴは借金返し、ナツゴ・アキゴは収入になる。

(元総社)

見合い 嫁は、親みてもらえ。(清里)

## 第九章 芸能・娯楽

### 一、神楽・獅子舞

総社神社の太々神楽は、代々赤石一家が伝承して来た私の神楽であった。かつては、正月十五日と三月十五日に奉納されたが、今は三月十五日のみに舞われている。

その起原については定かではないが、赤石氏の祖先が平中清から受け継いだといわれている。元治元（一八六四）年の文書大神楽次第によれば神道管額名の通達が見え、「湯立て」や「巫女舞」が記載されている。「湯立て」の文字からは、伊勢流の神楽があったものと推定される。



総社神社 太々神楽（元総社）

一家一族で神楽を伝承することは非常に困難なことであり、戦後には存続を危ぶまれたが、現宮司内田門太夫の甚力により、元総社町全域から有志を募ってその復活伝承がなされて来た。

元来三十八座の演目があったというが、今は十六座のみが伝えられている。

その囃子は高く繊細な音色の笛と、しっかりとした太鼓を伴う優美繊細な

ものである。全般的に品位を備えた舞である。

この太々神楽は、上新田や片貝、植野一本木稻荷等々の神楽の祖である。

上新田の電雷神社の祭日は、四月八日であり、神楽が奉納される。

明治二十三年頃、総社神社から伝わり、総社神社側では、「電雷神社の神楽が最初の分家」と言う説もある。今では保存会長利根川勝男の甚力により、立派な組織を持ち、倉賀野神社へ指導をする程になっている。

舞・囃子ともに総社神社に比べて骨太で、やや間の早い演じ方である。

#### 演目

- |        |         |
|--------|---------|
| 一、大平   | 十一、角子舞  |
| 二、神招   | 十二、一本刀  |
| 三、伊奘諾  | 十三、水上   |
| 四、荒神舞  | 十四、方盾   |
| 五、刀舞   | 十五、八幡太郎 |
| 六、扇子水上 | 十六、二本刀  |
| 七、猿田彦  | 十七、扇舞   |
| 八、岩戸   | 十八、国固め  |
| 九、塩撒   | 十九、鍛冶屋  |
| 十、白狐   | 二十、太蛇   |

植野の一本木稲荷は勝山城の乾に当り、その守り神として秋元氏の守護神として崇敬された。この祭日はかつては四月一日であったが、昭和五十五年からは、四月の第一日曜に変更された。この日に、代々神楽十八座が奉納される。一説には総社神社から、また別の説では、江戸時代の末に高崎小埜町の小埜神社の大和流神楽を習い伝えたといわれる。

植野一本木稲荷	太々神楽舞順
大 麻	二ツ狐
神之舞	道反大神
三 舞	誉田別之命
猿田彦大神	瓊々岐之命
劍 持	盤長姫之命
伊佐那岐之命	経津主之命
伊佐那美之命	日本武之命
天之児屋根之命	蛭子之命
天之太玉之命	岡 持
天照大神	八幡大神
宇受目之命	稲田姫之命
手力雄之命	手名槌之命
保食之命	八俣大蛇
一ツ狐	素盞之雄之命
鍛冶之命	大国主之命
天目一之命	

等が舞われるが、保存会の面々がそれぞれ家の芸的に習得し、ダイナミックな舞と囃子である。また、それぞれの演目の前に必ず解説が付き、神楽の物語りが理解できるように配慮がなされている。

江田の獅子舞 江田の鏡神社の祭日は三月十九日と十月九日であり、その折に獅子舞が奉納される。

一人立ち三匹の獅子にカンカチが付き四人で舞う。大地を踏みしめ、悪魔を鎮める動作である反閉を思わせる足の運びが中心の穏やかな舞の繰り返しであるが、そのことがむしろ古格な舞である印象を強く与える。

しかしながら、その起原伝統については記録がないが、慶応の頃、群馬町の稲荷台<sup>トウカグダイ</sup>から伝授されたといわれている。

また、獅子の舞を褒める褒め言葉と、それに答礼する形の返し言葉の掛け合いがあることが、特記できる。山づくしや川づくし等でその場の当意即妙で行うというが、江戸時代に流行したといわれる連辞<sup>つらね</sup>がここに根づいているという印象を受けた。

カンカチ一人、前獅子、中獅子、後獅子の舞い手は役者と呼ばれ、氏子のうちで総領だけが受け継いだものであった。しかし、後継者難から、女の子を入れたり、小学校の学年で決めて演じたこともあった。これには、頭合わせが非常にむずかしかった。

今では、獅子舞保存会が結成され、その伝統保持と技術の練成を行っている。

獅子の稽古は一ヶ月程続き、師匠格の長老が後ズサリで獅子の腰鼓を叩きながら、厳しい稽古を重ねた。

かつての本祭りの時には、渡り拍子で自治会長宅、祝い事等があった要請をした家、町内一円(上図参考)、寺の順序で回って歩いた。

祭りの外に、染谷川の河川改修や公民館の新築等大きな工事が完成した時にも獅子を出したという。また、石倉や高崎の神社等の要請のあった場へ出ることもあり、門付をしたこともあったという。

獅子が出る時は村中総出で準備をした。

中獅子だけは雌であり、頭の品格は角と毛で決まるが、鶏の毛を染めたものは駄目だったという。頭は桐製と思われる。

舞は七部十六曲の構成であるが、細目については、次の獅子笛音譜に記載されている。

### 獅子笛音譜

#### 1 振込之部

イ トーリー

『トリーチャーリトロ、チウレトレトレ』以上三回返す『チリト

チートロ、トローチートロロ、チャラーリトローガヘウヘート、

チウレトレトレ』以上三回返す

ロ 台門襷り(ダイモンカガリ)

吹き出「トントトガトロリウーヒャーヒャロロヒャー。」トロー

チーリトロン、トローチウレーエ、トローヒャリトロ、

チウラレーウレーエ、トローヒャラーリトロ、チウラレー

ウレーエ、チリトリートロンヒャーヒャロロ、ヒャーヒャ

ロ。トローントーガトロリウーヒャーヒャロロヒャー」

ハ 頓当百(トントヒャ)

吹き出「トントヒャヒートヒャロントヒャロン、リウーチャーリー

トリウレー。」チャーリトリウレー、チーリトヒイト

ヒャーロントヒャロン

#### 2 仲庭之部

一、岡崎(オカザキ)

吹き出「チーリリーチャーリトガトロリウーヘウヘー」オー

カーヒャーウヒャーヒ、オーカヒャーウヒャー、オーカヒャーヒャ

ヒャローガ、トロリウーガヘウヘー

#### 二、岡崎もどり

吹き出「チリトチウーヒャーヒャトヒャヒャロ、ガトロリウー

ガヘーヘウヘーエ」オーガザキヒャーウヒャーヒ、オーガ

ザキーヒャーウヒャー。オーカザキチウーヒャーロガトロ

リウーヘーヘウヘー。

#### 3 入葉之部

##### 一、天狗苗子

吹き出「トローガチリトロリウーヒャーヒャウヒャ」ヒャーヒャー

ウ、ヒャーヒャウ、ヒャーヒャウヒャー。ヒャーウヒャーヒート

ロヒ、ヒャーウヒャーヒートロヒ。トローガチリトロリウーヒャー

ヒャーウヒャーヒ。

##### 二、長兵衛殿

吹き出「トローガトローガチリトロリウーヘウヘ」大引チョーベードン

ノー、チョーベードンノー、チウラレーウレーエ。チウラー

ラレーウレヒートロ、チウラレーウレーエ。チョーベードンノー。以下吹き出しに同じ

チョーベードンノーチリトロリウーガトロー。大引トローガトローガチ

リトロリウーヘウヘーヒ。大引リトロリウーヘウヘーヒ。

##### 三、雀切り

吹き出「トローリウートローガトローガ、トロリウーヘウヘー。」

チウーヒャーヒャロコ、チウーヒャーヒャロコ、チウーヒャーヒャー

ウヒャーヒャー。チウーヒャーヒャロコ、チートローガ、トロリウー

ヘウヘーへ。

##### 四、文字の切

吹き出「トローリウーチャーリトローガトロリウーガヘウヘーエ」。

チャウリヤーリートーロ。チャウリヤーリートーロリウ。チャウ  
ウーリアー、チャーウーリア、チャーチャーウ、チャリーコロチ  
トロッココ、チートロッココ、チウチャーリコロチートロリウガ  
ト。

トーロリウチャーラリートーガトロリウガヘウヘーヒ。

4. 引揚之部

イ 久里(クリー)

吹出「チャーウリヤーチートリヤーチャーウリヤーチリートーリ  
」

『トーロチートウーヒヤハトーヒ<sup>本引</sup>チャラリートーロントロ  
ロ。ヒーチャラリートーロントロロ、トロロンロンロ、チートロン  
ロンロ、チーチャラリートーロントロロ。チーチャラリートーロ  
ントロロ、トーロチウーリヤーウーリア<sup>②</sup>』二回繰返す

(ヒーヒーチャーウーリヤー<sup>②</sup>ヒーチリートーチー……ヒーチャウ  
リヤヒチリートーヒ)「2回繰返す時にのみ吹く」

チャラリートーロリウチャーラリート。トーロリウチャーラリート  
ヒョーヒ<sup>②</sup>……チャーウチャーウチャヒヒトロ。チウーラレウ  
レレレ、『チーリートヒヒトロ、ヒーチャラリート、ヒヒチャーラ  
リート、ヒヤーヒトーローオガヘウヘーヒ』。以上括弧内は数回繰返  
す

ロ 廻り振り

吹出「トーロリウチャーウリヤー<sup>本引</sup>リートロ、チャーウラー<sup>本引</sup>リー」チャ  
ラーリートーガートロリウ、トーガトロリウヘウヘーヒ。トーロー  
チリートロリウ。トーガートロリウヘウヘーヒ

5 渡り拍子

一、とろろ

『トーローロロ、ヒートヒヤウーヒヤ<sup>①</sup>』二回繰返す『トー

ロチート。チウーヒヤヒヤローガ、トーローリウガヘウヘー<sup>②</sup>  
二回繰返す

二、とろりうひやりころ(廻り振りのもじり)

トーロリウヒヤリーコロヒヤ<sup>本引</sup>リートーロ、ヒヤリーコロリ

ヤー<sup>本引</sup>ヒ、チャラリートーガートロリウ、トーガトロリウ。ヒヤ  
リーコロ、ヒヤーヒ。トーローチリートロリウ、トーガートロ  
リウーヒヤリーコロヒヤア。

6 まてい之部

吹出「チウ……チャラ……ヒ……チウ……チャリコロ……チウ……

チャラ……」ヒ……ヒヤヒヤ……ヒヤヒヤ……ヒトロチーリートーロ、  
チャラリートーガヘウヘーヒトロヒヤ。『ヘーヘヒト、ト  
ーヒヤラリートーガ、チリートーロ、チャラリートーガヘウヘ、  
へーヒトロヘー<sup>②</sup>』吹出「ヒーヒヨロヒーヒヨロヒーヒヨロ  
ヒーヒヨロ」ヒヤヒヤウーヒヤウーヒヤートーロー<sup>①</sup>』トーヒ  
ヒヤヒヤウーヒヤヒヤウ、ヒヤウーヒヤヒートー<sup>②</sup>」

二回繰返す  
『1「……」2「……」』チウーラヤラー<sup>本引</sup>チウーラヤラー。  
チウーラヤラーウーラヤラー<sup>本引</sup>チウーラヤラー<sup>本引</sup>』トーヒヨヒ  
トーガトヒ<sup>①</sup>』チャラリートーガヘウヘ。リートー<sup>本引</sup>リート  
ヒヤロー、トロリウガヘウヘーヒ、

飛出トーリートヒヤロガヘウヘーヒ、(1)トーローガヘウヘヒ。(2)チャ  
ラーリートーガヘウヘヒ。(3)トヒヤローガヘウヘヒ。(4)トーリート  
ヒヤローガヘウヘ。

7 まてい入葉之部

註 入葉の場合は右の(1)〜(4)の順序で接続する



一、天狗拍子

『トーチーチートロッココ、ロッコココ』<sup>二回返す</sup> チートロチートロ、チー  
トチート、チウラリートリー『トーチーヒョヒョヒートーガトヒー』<sup>二回返す</sup>  
チャラーリトーガヘウヘーへ。

二、長兵衛殿

『リートン、リートン、リートーロッコココロッコココ』<sup>二回返す</sup> チウラリー  
ト、リートロリウトローロリートロリウリー<sup>大引</sup>トローラー<sup>大引</sup>ガヘウヘー  
へ。

三、文字の切

『チャーウラーリーチウーララウラリートロ、チートロ。トーチー  
トロ、チートロ』<sup>二回返す</sup> リートローラーガヘウヘーへ。

四、雀切り

『トローロッコココロッコココ』<sup>二回返す</sup> トーロロチートーロロ『チウー  
ヒヤーチウーヒヤーヒートーロッコココロッコココ』<sup>二回返す</sup> チート  
ロ、チートロ、チートチートチウーヒヤリトヒー、トーチーヒョヒョヒー  
トーガトーチーヒヤラーリトーガヘウヘーエ。

8 歌 上

- 一、天狗拍子 奥山、緑ノ木、蔦ノ葉、「切り子花」くく
- 二、長兵衛殿 七ツ拍、八ツ拍ケ子、九ツ拍「三拍ケ子」くく
- 三、文字ノ切 白サギ、海ノ途中ニ、巢ヲ機ケ、波ニ寄ラレテ「パー  
ト立チ」くく
- 四、雀切り 天笠、連々雀ガ、羽先ヲ揃ヘテ「パート立チ」くく  
前記各二回目には 今ノ木、又君帰ヘシテ「三拍ケ子」くく
- 五、鎮神社 参り来テ、此ノ御庭デ、獅子振レバ、神モ悦ブ氏子  
繁昌

六、諏訪社

此ノ宮ハ、飛驒ノ匠ノ建タルカ四方堅メタ楔一本  
七、寺 参り来テ、奥ノ仏壇眺ムレバ、黄金仏ガ光リ輝ク

八、区長宅

廻り来テ、奥ノ一間ヲ眺ムレバ、磨キ揃ヘタ、槍五  
千本

九、宿

棧川ノ、宿ノ娘ニ目ガ呉レテ、立ニ立タレヌ棧川ノ  
宿

獅子舞ノ褒言葉

1 褒メ方

シバラクシバラクシンシバラクナドトオトメシテ止メハ止メタガ  
拙者奴ハホメル様ハ知ラネドモ止メテホメヌハ無礼ナリ 従ガイマ  
シテ 少々バカリ ホメマシヨウ 先ハ花笠眺ムレバ 花ハ吉野カ  
八重桜カナ 笛吹キ様ノ笛ノ音ハ小栗判官政清公ノ吹イタル笛ニモ  
勝ルラン カンカチ様ノ出立ハ鞍馬ノ山ニ住カナス大僧正ノゴ指南  
カ牛若丸ノ五条ガ橋ニモ勝ルラン ホウガン(前獅子)様ノ出立ハ  
天ニ竜虎ノ恐リナリ 中獅子様ノ出立ハ獅子ニ牡丹ノ恐リナリ 後  
獅子様ノ出立ハ竹ニタケキ虎一夜ニ千里ヲ走ルトノ恐リナリ 七ツ  
何事モ無イヨウニ 八ツ屋方ハ賑ヤカデ 九ツココハ当所ノ鎮守ノ  
才庭ナリ 十デ当所ノ祭ハ大当リ村内安全家内一同ノゴ健康ヲオ祈  
リ敬ツテ申ス

1 返シ方

処レワ処レワ何処ノ御客様カワ存ゼネド、当所獅子舞ヲバオ  
褒メ口上下サルル段、拙者ハ申スニ及バズ、獅子組一同有リ  
難ク存ジ厚ク御礼イヲ申ス。

2 褒メ方

コレハコレハ私風ゼイノ奴メガ勢イ盛リト舞フ獅子ヲ打止メ 鶴ノ

一声ニテオ叱リデモ受ケヨウカト存ジマシタ処 却ツテ返礼等トハ  
 恐レ入りタル御言葉 ササアオ構ナク右獅子舞ニ取り掛ラレマシヨ  
 ウ

2 返シ方

此レワ此レワ付キマシテワ宿元ニ御案内ヲイタシ、酒ワ名酒カ  
 牡丹酒カ、山海ノ珍味ヲ取り揃へ、前橋、高崎ノ芸者ヲ総上  
 ゲデ、婦人会衆ノ御酌ニテ御ユルリトハベラスベクノ処、今  
 宵ワ格ノ事クニ取り込ミ故、マコトニヒツレイナ事トワ思へ  
 ドモ、平ニ其ノ儀ヲ御免ヲ蒙リマシテ、不調法ナル拙者メガ、  
 七重ノ膝ヲバ八重ニ折り、格ノゴトクニ厚ク厚ク御礼イ申ス

3 褒メ方

竹笛主、獅子主イザ頼ミマシヨウ

3 返シ方

コレハコレハ然ラバ御言葉ニ甘ヘマシテ右止メ置キ箆ラニ取り  
 掛ラセマス、御所望、笛ノ者、獅子組頼ミマス

鏡神社祭礼太鼓譜

ガラ ガットン ドンドコドン ガラガラガットン ドンドコドン  
 ドドン ドドン ドン ドン ドン ドン 左手撥は大鼓を抑  
 えて  
 ドドドン ドドドン ドドドン ドドドン カラカラカッカ カラ  
 カッカ  
 ガツ ガツ ガツ ガツ  
 トン トン トン トン  
 ドン ドン ドン ドン  
 ドン ドン ドン ドン

スツ スツ  
 トン トン  
 カラ カラ  
 カラ カラ  
 ドガ ラツ  
 ラカ カ  
 ガツ ガツ  
 トン トン  
 ドン トン  
 ドン トン  
 スツ スツ  
 トン トン  
 カラ カラ  
 カラ カラ  
 ドガ ドガ  
 ラカ ラカ  
 ガツ ガツ  
 トン トン  
 ドン トン  
 ドン トン  
 スツ トン  
 ガ  
 カツ カツ  
 カラ カ  
 ドガ ドン  
 ラカ カ  
 ガツ ノ  
 トン トン  
 ガラ トン

獅子舞 獅子舞は、もとは、春と秋のおまつりのときにした。  
 春まつりは三月十九日、秋は十月九日である。  
 今は一年おきに行っている。  
 獅子舞は、本まつりのときにやる。これは、ムラの会議できめた。  
 獅子舞の会議があった。  
 ふつうのまつりは、しゃくしまつりで太鼓をたたきだけ、獅子舞を

やるのは本まつりのとき。

獅子舞は子供がやった。

今は十二、三歳からやる。

むかしは、長男でないと獅子をまうことができなかった。十歳とか十二、三歳のころから仕立てた。今はやりてがないので、長男とはかぎらない。

獅子舞をする人は、獅子組というのをつくった。

踊るのは四人、

男獅子が二人、雌獅子が一人、かんかちが一人、あわせて四人である。

獅子組をつくると、次の者がでるまで何年でもやった。今は上の人は七十歳をこえている。下は十歳台のもの。

踊るものと、笛を吹くものという。

笛吹きは四人くらい、できるだけ多くの人に吹いてもらった。

踊りをおどるときに、ほめことがある。

これは、獅子組でない人がやる。誰がやってもよい、よそムラの人がやるのがかえってよい。

それをやられると、誰かが返事をする。

それは獅子組の人がやる。

それぞれの役をほめた。自由にほめた。

笛吹きが踊りをリードした。

笛を吹けば踊りさせた。

今は、獅子頭などは、獅子組で保管している。もとは、区長が保管していた。(江田町)

野良犬の獅子舞 清野には関白龍天流といわれる、一人立ち三匹の獅子舞いがあり、かつては八幡宮で四月十五日の祭りの時と十月九日

のオクンチに舞われた。今は不定日となっている。また、他村へ出かけて行って獅子舞を奉納した。

まず社前で舞い、上の秋葉様、中央の祇園、村はずれの道祖神の前で舞われた。神社にはガス灯を建て、蚕が当るように赤飯を供えた。

一人立ち四人で舞い、竹の花傘二本が先導し、ササラ棒つかい、ホラ貝、天狗様、カンカチ、ハナ、ナカ、後獅子、笛の順である。

稽古は庭の広い家で、御馳走つきの夜稽古であった。藪の乾燥場で行ったこともあった。一ヶ月程の猛稽古であった。演者は土地ツ子の長男でなければならず、四、五組が舞った。小学校二、三年から練習を始めた。

祭礼当日は、獅子印の提灯と囀の提灯を各戸が吊す。神社までの道筋に数十の灯籠が灯され、通り太鼓を打ち、お練りをする。通り太鼓は出の笛、三つ揚、花岡崎等九種。

舞は、一組で宮巡り、飛入り、伊勢切、天狗、拍子、大山切、眺め、二組に塩汲み、岡崎、雀切、文珠の切、ササラ三拍子、八つ切、狂いなどが舞われる。

獅子の特徴はハナが正面向きで角が湾曲し、ナカは女獅子、後獅子は大きな口を開けている。獅子保存会があり、その倉に通常は獅子頭等を保管し、役員を設け管理をしている。

なお、別の資料にこのことは詳述されている。

野良犬の獅子は、「いもを食って屁をたれる」といった。

ここは、米のないところ、

この辺の人は、ふだん、アワを食っているのです、石を抱いて風呂に入らないと浮かんでしまうといった。

畑方のことをオカチといった。(青梨子)

「野良犬の獅子は、いも食っちゃ屁たれる」

といわれた。

野良犬には、むかし、水田がなかったもので、そういつて馬鹿にしたもの。(青梨子)

清野町は、もとは野良犬と呼ばれていた。(ここはアワドコだったの  
で)

「野良犬の獅子は、アワ食っちゃ、屁たれる」といわれていた。(青梨子)

野良犬獅子舞唱歌昭和58年4月編

舞の部 13種類

〈前庭の部〉

〈後庭の部〉

- |        |          |
|--------|----------|
| 1 宮巡り  | 1 塩汲み    |
| 2 飛入り  | 2 岡崎     |
| 3 伊勢切  | 3 雀切     |
| 4 天狗秒子 | 4 文珠の切   |
| 5 大山切  | 5 ササラ三秒子 |
| 6 眺め   | 6 八ッ切    |
|        | 7 狂い     |

1 宮巡り 〈前庭の部〉

トローラロ、リウーリウ、チーリート、レー。  
チーリートトリ、チャアロ、レー、リー。  
トローロヒ、トラン、トオロ、チイトロガ  
トローガレーエロレーエレ。  
トラントローロ、チイトロガ、トローガレーエロロ、レー  
レ。

以上3回繰り返す。

2 飛入り

トトリ、チャアロレーリ、トリ、チャアロロ、レーヒ。チエー  
レ、ロリ、トン、トリ、トンレーエガレーエレ。  
チエレ、ロリ、トン、トリ、トンガレーエガレーレ。

3 伊勢切

我々は京生まれ、伊勢育ち、伊勢のほーはおる。

トラン、トーヒヤ、トーヒヤ、トーヒヤ、トローロ、ロツココ、ロツ  
ココロ。

(トラン、トーヒヤ、トーヒヤ、トーヒヤ、トローロ、ロツココ、  
ロツココ。二回)

トローロ、ロ、リイイトラロ、トローロ、ロ、リイイトラロ、トロー  
ローラガ、レーエロレ、リ、チイートンガレーエガレ、リ、トンロー  
ラガ、レーエガレ。

4 天狗秒子

今やはやー、天狗びようし〜

トッピー、チエレ、トリ、トロロ。トッピー、チエトリ、トロ  
ロ。チイローレ、チイローレ、ヒイロヒイロ、ヒイレリ、  
チエレト、レートン、レーエガレリ、トンローラガレ。

以上3回繰り返す。

5 大山切

大山ではやる三秒子

チイ、リイ、チイトロ。チイ、リイ、チイトロ。  
チイトロ、リイ、トローロ、トローロ、ロ、リイ、トローロ。チャ、

ウ、リヤ、リヤ、ウ、チャ、リヤ、リヤ、ウ。  
レーエト、ロツコ、レーエト、ロツコ、レーエト、ロツココ、ロツコ  
コロ。

チャ、ウ、リヤ、リヤ、ウ、レー、リーイ。

トー、ローラガ、レーガレリ、トン、ローラガ、レーエガレ。

以上3回繰り返す。

## 6 眺め

とーからい、からいとほ、一重にしよ、一重にしよ、敷山下。

トーヒーヒー

トートリ、トローウロ、トートリ、トローウロ、レーレ、レーエレ、

トロレー。

チェーレ、トー、トー、ヒーレーリ、トー、ヒーヒ。

トートリ、トローウロ、トートリ、トローウロ、レーレ、レーエレ、

トロレー。

チェエレ、トート、ヒーレーリ、トーヒーヒ。

トートリ、トローウロ、トートリ、トローウロ、レーレ、レーエレ、

トロ、レー、ヒ。

ヒーレーリツ、トローロ、レーロ、レーエロ、レーリ、トロー。

ヒーレーリツ、トローロ、レーロ、レーエロ、レーリ、トロー。

チャア、ハラ、トーハラ、トーハラ、トローウヨウ、レーロロ、レー。

チャア、ハラ、トーハラ、トーハラ、トローウヨウ、レーロロ、レーヒ。

ヒーレリ、トローロ、レーロ、レーエロ、レーリ、トローロ。

ヒーレリ、トローロ、レーロ、レーエロ、レーリ、トローロ。

ヒーイロ、レーロ、ヒーイロ、レーロ、ヒーイロ、レーロロ、レーロ

ロ、レーリ。

トコロリートラン、トリー、トコロリト、トリ、トローウロガ、レー  
エガ、レリ、トン、ローラガ、レーエガレ。

\*

トラーラロロリュト(三回目) トラーラロリウーレーエウレー  
リイ、トラーラロリウーレーエウレ、レーエリ、レーエリトトトリ、  
レーエリトロ、ヒ。

## 〈後庭の部〉

### 1 塩汲み

チェレロレー、レーレ、チェレロレー、レーレ。

ヒヤ、トローラガ、レヒヤ、トローラガ、レヒヤ、トローラガ、レーロロ、  
レーエレ。

トラートートン、トヲヒヤ、トローラガ、レーロロ、レーエレ。

抜鉢トート

以上三回繰り返す。

### 2 岡崎

オーカザキ、ジョーシユ、ニ、オーカザキ、ジョーラシユ、オーカザ  
キ、ジョーオシエ、ハ、ヨイ、ジョーオシユシヒヤアト、ヒヤア  
ヒヤ、ジョーオシユハ、ヨイ、ジョーオ、シユ。

以上三回繰り返す。

### 3 雀切

村々を、雀がホ先を揃えて、ちりと申す。

トツピー、チェエレ、トリー、トロロ。

トツピー、チェエレ、トリー、トロロ。

ヒイロロ、ヒイロロ、ヒイロ、ヒイロ、ヒイレリ、トロロリト、  
トリ、トロローウ、ロガ、レーエガ、レリ、トン、ローラガ、レーエ  
ロレー。

以上三回繰り返す。

#### 4 文珠の切

白鷺が海の真中へ巣を立てて、波に打たれて、ぱつと立つ。

チャウ、リヤ、リヤ、ウ、チャ、リヤ、リヤ、ウ、トリ、トロ、チイ  
トロ。

チャウ、リヤ、リヤ、ウ、チャ、リヤ、リヤ、ウ、トリ、トロ、チイ  
トロ。

トリ、トロ、チイトロ、ヒイロ、ヒイロ、ヒイレリ、トロロ  
リト、トリ、トロローウ、ガ、レーエロレリ、トンローラガ、レーエ  
ガ  
レー。

以上三回繰り返す。

#### 4 ササラ三秒子

ささあさら、三秒子。

チャロロ、レリ、トローロ、チャロロ、レリ、トローロ、チャロロ、  
レー、チャロロ、レー。

チャアー、リヤウ、チャ、リヤ、ウ、レエト、ロッコ、レエト、  
ロッコ、トリ、トロ、トロ、ロ、トロートリ、レーエリ、トガ、  
トロ、レーエロ、レーレ。

トララン、トリ、レーエリ、トガ、トローロガ、レーロ、レーレ。

以上三回繰り返す。

#### 5 八つ切

天神林の梅の花、蕾盛りにぎよく葉をすく。

トローロ、ロッココ、ロッココ、トローロ、ロッココ、ロッココ、  
トローロ、トローロ、チュウヒヤ、チュウヒヤ、  
トロー、トロロ、ヒイロレー、ヒイロレー、ヒイロ、ヒイ  
ロ。

ヒイレリ、トロロリト、トリ、トローラウロガ、レーエガ、レリ、  
トン、ローガ、レーガレ。

以上三回繰り返す。

#### 6 狂い

① 雲が立つ、雨が降る、おいとま申して、羽を休め。

② 雲が立つて、雨が降る、おいとま申して、日高いな。

トウーロ、リウー、レーエウ、レー、  
チイー、リーイト、レウ、レー。

レーウ、リイーイト、レウ、レーリ、トローラ、リイーイト、レーリト、  
トローラ、リイーイト、レ、リ、トリ、トローラ、ロ、ロ、リントー。

リ、トローロ、ロ、リントー。  
トローラウ、ロ、ウ、ロ、チイーロ、チイーロ、レウ、レウレ、  
リ、トローロ、リントー、リ、トローロ、リントー。

トウーラロ、リウー、レーエウ、レー、  
チイー、リト、レウレ、レウリーイト、レウ、レリ、トローラ、  
リイト、レーリ、ト、トローリーイト、レリ、トローロ、  
リントー。

リ、トローラ、ロ、リントー。  
トローウ、ロウロ、チイーロ、レウ、レウ、レリ、トローロ、リ

トー。

リ、トローロ、ロ、リントー。

トラーラロ、リウー、レーエウレ、ヒイ、トラーラロ、リウー、レーエウレ、レエリ、トリ、レーエリウ、トートリ、レーエリトロ、ヒ〜。

(チイリイト、レッエートロ、トツラロロ、レーエト、トリ、トローロロ、ヒ、レート、レート、ヒ、レエト、レーエレ。)

以上カッコ内三回繰り返す。

通り太鼓の部 9種類

1 トラーロリウ 6 トートリトン

2 出の笛 7 チュウラツリチイイトロ

3 三つ揚 8 ヲリレーリト

4 チュウヒヤヒヤロ 9 チイリトリリト

5 花岡崎

1 トラーロリウ

トラーロリウ、トラーロリウ、レーエリトラロレー、

トローラリ、トラーロリウ、トラーラロリウレーエレ、

トラートラーリ、レーエレトラロ、トローラロ、レーロ、レーレ、

トラーヒー、レエリトラロ、トラロレーロ、レーレ、

レエー、トローリ、トラーロリウ、レーエリ、トラロレーエロ、

レエーリ、トラーロリウ、トラーロリウレーエリトラロ、レー。

以上三回繰り返す。

2 出の笛

ヒーレーエリ、トツラロ、トツラロ、レーエロ、レーエレ、

ヒーレーエリ、トツラロ、トツラロ、レーエロ、レーエレ、

チイリイト、レッエトロ、トツラロ、レーエトロ、  
トリトローロロ、レート、レート、ヒーレーエト、レーエレ。  
以上3行目から三回繰り返す。

3 三つ揚

3 三つ揚

ヒイイロレー、ヒイイロレー、ヒイイロレーロロ、レーエレリ  
レーエリ、トリレーエリトリ、レーエリトロ、トラロラロ

トートリレーエリトラガ、トラロガ、レーエロ、レーエレ  
レーロロ、レーエレ。

以上三回繰り返す。

4 チュウヒヤヒヤロ

チュウヒヤヒヤロ、チュウヒヤヒヤロ、チュウヒヤヒヤロ、  
ヒヤーヒヤ

チュウーヒヤ、ヒヤーロ、チイイトロガ、トラロラ、レーロレーエレ。  
トン、トローラロ、チイイトロガ、トツラロレーロ、レーエレ。

以上三回繰り返す。

5 花岡崎

トラヒヤロ、ヒヤーリ、ヒヤヒヤコロ、ヒヤヒヤ、

トラヒヤロ、ヒヤーリ、ヒヤヒヤコロ、ヒヤ、

トラヒヤロ、ヒヤーリ、トラヒヤリコロ、

トラロガ、ヒヤリコロ、ヒヤー、ヒヤ。

以上三回繰り返す。

6 トートリトン

トートリトン、トリトン、レーガ、レーレ、  
トートリトン、トリトン、レーガ、レーレ、  
トートリ、チャロロ、レーエレ、トリ、チャロロ、レーエレ。  
チエレロリ、トン、トリ、トンレーエガ、レーエレ。  
以上三回繰返す。

7 チュウラアツリチイトロ  
チュウラアツリ、チイトロガ、ヒイロレーエロ、レーレ、  
チュウラアツリ、チイトロガ、ヒイロレーエロ、レーレ、  
チュウラアツリ、チイトロガ、トローロー、レーエレ、  
トン、トローロ、チイトロガ、トローローレーエレ。  
以上三回繰返す。

8 ヲリレーリト  
ヲリレーリト、ヲリレーロレーエレ。  
ヲリレーリト、ヲリレーロ、レーエレ。  
チエト、レート、レリ、トローロ、  
チート、レートロ、トリ、トローロー、  
レーリ、トローロ、リウ、レー。  
以上三回繰返す。

9 チイリトリリト  
チイリト、リリトヲツロ、トツラロ、レーロロ、レーエレ、  
チイリト、リリトヲツラロ、トツラロ、レーロロ、レーエレ、  
チエト、レート、レーリ、  
トローリ、トローラツロ、チイイト、レーエトロ、トリ、トローラ

ロロ、レーエトローロ、リウ、レー。  
以上三回繰返す。

上宿の獅子舞 総社神社の本祭りに際して他の十二の町では山車を  
だすが、上宿町では山車の代りに獅子舞を奉納した。寛永十一年の本  
祭りから、総社神社の神輿が本殿から出て上宿へ渡御することになっ  
たが、この時に上宿の仮の神輿殿前で、供物とともに獅子舞を奉納す  
ることになったという。

獅子の行進順序は、新しい竹をのべ紙で包み、麻で結んで杖を持つ  
警固二人。⑤の印に獅子と書いてある高張提灯二張。頂部を巻き藁で  
巻き上げ五尺程の花を数十本さし、傘の先端部に五色の切り紙を垂ら  
し、骨には五色の花と短冊を付けた花傘二本。次いで笛方四人。そし  
てカンカチ・前獅子・中獅子・後獅子と続き、四神を描いた弓張提灯  
四本が獅子を守護する。本来は、「明神前」「神主前」「検断前」の三庭  
を振ったという。流派は判官流と呼ばれ、宝曆四（一七五四）年の御  
祭礼覚帳に記されている。

この獅子は、秋元氏が天狗岩用水の完工した時に総社神社に奉納し  
たことに始まるといわれるが、花傘の様相等から判断して、より以前  
の風流獅子の流れを吸むものと思われる。（元総社町上宿）

総社立石の獅子舞 十月九日の諏訪神社祭礼に獅子舞が奉納されて  
いた。（現在は日曜日）

獅子道具を入れておく長持のふたにおよそ二百五十年前の年号が墨  
書きされているという。

諏訪神社は諏訪安芸守頼忠が文禄元（一五九二）年に総社城に封ぜ  
られた際に、上・下諏訪神社が勧定されたと考えられることから、そ  
の時にこの獅子舞が奉納されたとも思われる。カンカチ、一人立ちの  
前獅子・中獅子・後獅子の構成で、高張提灯一对、花傘一对、警固四



人、笛、大うちわとなる。舞は宿の庭を舞い、町内の各辻々で辻振りとなり、反閉を実に丹念に行っている。町の下から中・上へと舞い上げている。

各獅子は腰鼓、両手に撥、襦袢に唐草の裁着袴に手甲脚絆、白足袋に草鞋ばき。腰には五色の幣束を麻で結び、黄・赤・萌黄の襷がけである。

最後に社の周りを一回りし、境内で舞って後、頭を神社に置いて終了となる。

現在では獅子と共に神輿が繰り出される。(総社町立石)

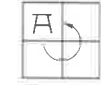
三人の振り子と一人のカンカチがおどる。昔は家持ちの子供で長男のみ(衣装が自前で高いものであったので)錦の布で作ったこともあった。

今は二組作り、六年生組と五年生組(二軍)で技術の伝承をはかっている。

上の宮本と下の上と大の四組で交代に宿をつとめる。

三十年ほど中断して、再開したため曲の音(最近持譜した)はあるが曲名はない。

よい祭りでは神社からまもるが、本祭りでは宿に行き、そこからまもる。



おどりおわつてからおサイセンをあつめる。途中でもおさいせんがあがる。◎回り順は図参照

## 二、歌 謡

うた 「一ツ酒屋でドン」数え唄らしかったが、きいた時は、おじいさんが孫をあやしながらくりかえしていた。(総社大渡)

麦打唄はあつたが、田場であるが故に、田植唄を唄う余裕は無かつた。(江田)

祭文 御嶽さんを信仰していて、祭文をとなえた人がいた。(桜が丘)

子守り唄 ねんねん、猫のけつがにがはいこんだ一匹だと思つたら

二匹はいこんだ。おつかさんがたまげてお茶こぼした。(総社町新田)

元総社町の盆踊り唄

でつかいねえちゃん どうしたね

ちっちゃいねえちゃん どうしたね

どっちかおいらに くれとくれ

音頭とりやどうしたね

死んだか 生きたか 沙汰がねえ

死んだら 棺桶買ってやる

でつけえバケツが十五銭

ちいせえバケツが十三銭

安いと思つたら 底ねけだ

おつせえ おつせえ おつせえな

押してもいいけど つつつくな

つつつきようじゃ はらむよ(元総社町)

盆踊りの唄(口説節)

いちにや いっけられ

にはにや にくまれて

さんにや 酒屋へ酒買いに

四にや 叱られ

五には ごんごん泣く子をだまし

六には ろくなもんを食べさせられないで

七には 質屋へ使いにやられ

八には はつとばされ

九には くだかれ

十には とうとうだまされた(元総社)

桑つみ唄 おかいこ三十日つらくはないが、ぬしとわかれがわしは  
つらい。

おかいこ終れば沼田の城下。つれて行くからしんぼしな  
おかいこびょうでも坊主じゃないよ、たまにやさかなも出すがいい。  
(元総社)

### 数え唄

ひとつとせ 人のいるのに毛をかきわけて はさんでいれます うれ  
しげにあのまあ かんざしを

ふたつとせ 二人はだかで 手と足組んで おしりなげたり まわし  
たりあのまあ おすすめさん

三つとせ 見れば見るほどしたくなる 娘心のせつなさよ あのま  
あ 針仕事

四つとせ よいのくちからかみもんで はさんでしめます きゅう  
きゅうと あのまあ 箱枕

五つとせ いやがるものを無理やりに とつつらまえていれます  
かわいそに あのまあ かごのとり

六つとせ 無理にはめよとするけど 痛くて かたくて はまらな  
い あのまあ 指輪かな

七つとせ なんでもこんばんさせにくる いちばんしなけりや 眠  
れない あのまあ へぼしろうぎ

八つとせ やつてもらった気持よさ もう一つその手で やつとく  
れ あのまあ あんまさん

九つとせ こんなぐあいにつかって 気のゆくままでも かじを

とる あのまあ いかだのり

十とせ とてもいいからやってみな いちどやったらやめられぬ  
あのまあ たたみがえ

(注) 酒の席とか、バス旅行のときなどに歌う。(元総社)  
東地区の盆踊りとして、箱田、前箱田、後家、川曲では、「十二足

と「石投げ」が唄い踊られている。唄は語り物で、八木節の源流の一  
つともいわれ、踊りは、十二足は大きく腕を振り上げることなく連続  
的に動き、石投げでは路上の石を拾い、肘先でそれを投げるような動  
作で切れるのが特徴である。

菊地将五、吉本友好の唄、高橋広通の笛そして柳沢章三、長井親春  
の太鼓と、比較的若い人が、しっかりした伝統で保たれている。

八月十三、十四日には明神様の境内で盆踊りをした。徴丘検査の年  
令が中心だったが、今は成人式を中心としている。伊藤・押尾の二つ  
櫓が出来た。今は一つである。(元総社第二)

### 十二足

セーノ

へ出たよ出ました 出鱈目野郎が

出たよ出ました 出鱈目野郎が

四角四面の櫓の上で

音頭取るとは 恐れ乍ら

音頭取るとは 恐れ乍ら

音頭取るとは 恐れ乍ら

ハイ オセオセ

何か一言おしゃべりします

何か一言おしゃべりします  
何か一言おしゃべりします  
オセオセ

わしの音頭じゃ踊りにくかろが  
わしの音頭じゃ踊りにくかろが  
わしの音頭じゃ踊りにくかろが  
オセオセ

わしの音頭じゃ踊りにくかろが  
わしの音頭じゃ踊りにくかろが  
わしの音頭で 宜敷く頼む  
オセオセ

わしの音頭で宜敷く頼む  
わしの音頭で 二回り三回り  
わしの音頭で 二回り三回り  
オセオセ

おあと大先生がお茶飲むあいだ  
おあと大先生がお茶飲むあいだ  
許しなされば 文句にかかる  
オセオセ

八百屋お七を読み上げます  
八百屋お七を読み上げます

八百お七は可愛想で読めぬ  
オセオセ

八百屋お七は可愛想で読めぬ  
八百屋お七は可愛想で読めぬ  
八百屋お七は可愛想で読めぬ  
オセオセ

おあと大先生に宜敷く頼む  
おあと大先生が控えてなさる  
おあと大先生に宜敷く頼む  
オセオセ

かわりましたよ かわられました  
かわりましたよ かわられました  
かわりましたよ かわられました  
ハ―オセオセ

前橋帰りにちよつと寄つて見たら  
前橋帰りにちよつと寄つて見たら  
花の蝶々が賑やかなれど  
ハ―オセオセ

ちよいと先生のお茶飲む間  
四角四面を借り受けまして  
何か一言おしゃべりします

ハ オンドリヤドウシタネット

田中田んぼの稲穂が靡く

田中田んぼの稲穂がなびく

靡くはずだよ箱田の娘

ハーオセオセ

箱田娘は 器量が良くて

てんできれいで働き者で

竹を割ったようで 良く気がきいて

ハ ドウシタドウシタ

嫁に来るなら 箱田へおいで

嫁を取るのも箱田の娘

嫁にくるなら 箱田へおいで

ハーソレカラドウシタ

何というても 俄かにこうで

うまい訳には読めないけれど

故郷の訛は お許しなされ

アー オセオセ

許しなされば文句にかかる

わしのおはこの十八番で

まま子三次で宜敷く頼む

アー オセオセ

故郷はどこよと尋ねたならば

故郷は武蔵で秩父の郡

真門村にて百姓の喜八

アー オセオセ

もとはよしある百姓なるが

親の代より零落致し

田地田畑皆売りつくす

アーオセオセ

いまじゃ小作の日傭ひよちばかりで

送る月日も貧苦にせまる

送る月日も貧苦にせまる

ア オセオセ

もつともつともつともつともつともつと

(繰り返し)

もつとこの先あの先までも

ア オセオセ

読んで見たいはやまやまなれど

読んで見たいはやまやまなれど

見れば音頭取りも疲れた様子

アオセオセ

野郎やめろの声ないうちに

ここらあたりで段切りまして

野郎やめろの声なきうちに  
アー オセオセ

水の流れば土俵でとめて  
わしの音頭もここでとめて  
今日の踊り子後悔なさる  
アオセオセ

石投げ音頭

セーノ

かわりましたよ かわられました  
かわりましたよ かわられました

さつき出たのが私の師匠  
今度出たのは 出鱈目野郎で

先生程には読めないけれど  
何か一言 おしゃべりします

愛染かつらを読み上げましょか  
愛染かつらは映画で読めぬ  
ア エイガデヨメヌ

まま子三次を読み上げましょか  
まま子三次は可愛想で読めぬ  
ア オセオセ

読めぬ読めぬじゃ文句にならぬ  
読めぬ読めぬじゃ文句にならぬ

ア デツカイウンコカワナガレト

八十婆さん豆かむように  
ポツラポツラとつまんでしゃべる

秋の大根うろ抜くように

あちらこちらでつまんでしゃべる

ア デツカイバケツガスイスイ

ヤサイトオモツタラ ソコヌケダ

さてさてさて皆さんよ

さては上州の踊り子さんよ

ア ドウシタドウシタ

わしが今晚文句じゃないが  
四角四面を借り受けまして

何か一言おしゃべりします  
何か一言おしゃべりいたす

さつき出たのが箱田で一よ

今度出たのが前橋で一よ

前橋どころか群馬で一よ

群馬どころか関東で一よ

関東どころが日本で一よ  
日本どころか世界で一よ

ア ソウカイ ソウカイ ソウカイネ

一は一でもあとから一よ

一は一でもおしまいから一よ

さてさてさて さて皆さんよ

毎度毎夜じゃ踊り疲れにて

見れば踊り子も疲れた様子

見れば音頭取りも疲れた様子

ア ソウカイ ソウカイ ソウカイネ

水の流れば土俵でとめて

赤子泣くのは おちちでとめて

わしの音頭もここらでとめて

あとの踊りと交替なさる

盆踊り むかしは、石投げ踊りをした。縦樽音頭であった。四斗樽

とか一斗樽をたたいた。ほかに、笛・鉦・太鼓があった。(前箱田)

八月十六日は盆踊りで、石投げ、十二足が踊られる。樽はこの界限  
一の物だった。(後家町)

八月十三日は盆踊りを行い、トヨベットの敷地や石倉保育所、高架  
下で納涼祭を兼ねて実施され、石倉音頭が唄われる。(中石倉)



盆踊り (元総社 総社神社)

### 正月の唄

へお正月が来る来る唐土きとの山から飛んで来る。(総社町粟島)

へ七草なずな 唐土の鳥が渡らぬうちに芹たたけ 芹たたけ

(下石倉)

### 鳥追唄

へおーほんや おーほんや

鳥追だ 鳥追だ

ありやだーが 鳥追だ

頭切つて尻切つて

さーらーどえ さーらべこんで

佐渡ヶ島へ つん流せ。

おーほんや おーほんや (大友町)

へ鳥追いだ 鳥追いだ ありやだれ

が鳥追いだ 地蔵(次郎) どんの

鳥追いだ 頭切つて尻切つて し

ようゆだるいさらべえこんで 佐

渡ヶ島へぶん流せ おーほんや

おーほんや じらんぼつくりおつかねえー



鳥追い (総社 山王)

(総社町山王他)

十日夜の唄

十日夜はいいもんだ

朝ソバ切に 昼団子 夕餅食つては腹太鼓 トントンと鳴らかせ

(江田)

十日夜

十日夜はいいもんだ

朝ソバ切の昼団子

夕餅くつちや腹太鼓

と唄いながら、藁鉄砲を叩いた。特に明神様の水沢石で叩くと良い音がした。(元総社第一)

和讃 二月二十二日は二夜様で、和讃を唱えた。個人宅で信仰して

いたが、今は二区公民館で行っている。栗島でもやっている。(元総社第二)

城田タケが二十二夜和讃を唱える。(大友町)

お茶和讃・絹笠和讃がかつてはあつた。(下石倉)

江田の二十二夜さま等念仏集

懺悔文

がしやくしよざう。しよあくごうかい。

ゆうむじとんじん。ぢうしうしんごん。

しよじゃういつさい。がこんかいざんげ。

二十二夜さま

きみよう、ちようらい、ありがたや。二十二やまちまつひとは。ひみづあらため、しようじんし。こころにあくしん、もたづして。しんじんけんごに、みもちて。ぼさつをはいし、たもうべし。によいりん

ぼさつの、ごがんにわ。あまたのよにんの、みがわりに。ちのいけぢごくえ、をちんとて。すでにいらんと、したまへば。あらありがたや、ふしぎやな。いけよりれんげがあらわれて。しうんたなびく、みほとけに。そのままれんげに、ざしたまひ。さゆふのをんてに、みどりごを。いだしあげさせ、たまひつつ。みぎのをんてを、かをにあて、よにんを、すくわんほうべんに。かんじたまいて、ありがたや。ひだりのをんてで、まねきつつ。われをねんずる、ともがらわ。ぜんせみらいを、たすけべし。さてまたぜんせの、ごがんに。ちしやくけつかい、ちのやまい。ながちしらの、やまいでも。やくしかんのを、ましまして。たちまちかいき、いさすべし。このなきによにんに、こをさづけ。かいたいしたる、によにんにわ。さんぜんさんごの、だいなんを。あんざんさせて、えさすべし。すえちようきゆうと、まもるべし。

御詠歌

ここにさえ、あまねくかどわ、しばはしの、しばちやうさとえ、ひとわたすらん

「あわしまさま」

きみようちようらい、いせのくに。だいじんさまのいもうとご。はるひめさまと、もうせしわ。十三さいの、をんとしに。をんなのやくを、はつにみて。すみよしさまえ、ごえんだん。十六さいで、かねをつけ。をやまをけがした、そのとがで。かみ十五にちが、ながちなり。しも十五にちが、しらちなり。ながちしらの、わづらいで。あわのみふねえ、のせられて。きしゆうなぐさえ、ながされて。よにんをすくう、ほうべんに。かたであわしま、だいまようじん。つきのみつかに

十三ち。二十三ちが、ごえんにち。をいもわかきも、もろともに。いかなるちかたの、やまいでも。しんじんなさる、ひとびとを。すくいとるとの、ごせいがん。ごせいがん。

### 御詠歌

ちはやぶる、月よりほかに、つきわなし。ちちとははとが、ちのみち、たのむ、ちのかみさま。

(注)コレダケヒトクダリ

### さんたい様

きみようちようらい、ありがたや。さんたいさまと、もうせしわ。をんな一だいの、まもりがみ。わけてしんじん、するひとわ。ふくとくじみようを、さづけべし。かいたいしたる、によんにわ、さんにむかいし、そのときわ。一心こめて、てをあわせ、五しきのみすがた、あらわれて。さつそくあんざん、えさすべし。うまれきたりし、そのこにわ。めめよくうぢを、さづけべし。あんざんしごの、をんかみが。ちよまんさいに、いたるまで。まもらせたもうぞ、ありがたや。

### 御詠歌

なにわづや、さくやこのはな、ふゆぐもり。いまわはるべと、さくや、このはな。

### 薬師さま

きみようちようらい、やくしさま。やくしのほんぢを、たづぬれば。やくしのほんぢわ、これにあり、一のきだはし、のほりつめ。二のきだはしにて、ながむれば。きんのみどうの、をんなかで。十三ばかり

の、をんちごが。あまのはごろも、めされつつ。ほだいのづつを、えりにかけ。むらさきすずりに、ゆえんずみ。みずをながして、すみをする。ひだりのをんてに、をりがみ。みぎのをんてに、ふでをもち。すみたふたふと、ふくませて。つきのように、十二日、二十二日が、ごえんにち。しんじんなさる、ひとびとを。いちにんのこさず、ふでにとめ。すくいとるとの、ごせいがん。

### 御詠歌

めのくもり、やがてはれゆく、ゆををさん、これぞ日本、いちはこのでら。

### 氏神様

きみようちようらい、あきはさま。こをりのぢふくに、しもばしら。あめのたれきに、ゆきのやね。むねにあきはを、まつりをく。きみようちようらい、うぢがみの。ゆらいをくわしく、たづぬれば。むかしかみよの、そのときに。いなりとなづけ、たまわりて。これのをんえの、きづくとき。まつだいやしきの、まもりがみ。こうさくかいこも、みのりよく。しそもはんじよで、こもさかえ。いのちわ、なをさら、すえながく。かないふつきで、むつまじく。としどしほかごと、をもないなく。としに一どの、ひまちびを、めでたくまちて、あるならば、ふくとくじみようを、さずくべし

### こかげさん

きみようちようらい、こかげさん。かいこのゆらいを、たづぬれば、てんじくみかどの、おんむすめ。たまやのひめと、もうせしわ。七つどきに、ははおやに。わかれてけいほの、てにかかる。ししくまや



まえ、すてられて。ししぐまひめを、くわずして。きじんがたけえ、すてられて。きじんもひめを、いたわりて。もとのわがやえ、かえさる。ちちだいおうの、じひふかく。うつろのふねに、つくりのせ。あらきなみぢに、うちふれて。ながれながれて、つくばねの、とよらがみなとえ、つきにけり。うらびとそれを、あわれみて。そだてかいほう、よういくし。十六さいの、なかのはる。はつのうまびに、ひめぎみわ。むじうのかぜに、さそわれて。ついにむなしく、なりにけり。ひめわこにわえ、うづめられ。ふうふもともに、わすれかね。なげきふしたる、ばかりなり。まくらのもとに、たちたまい。ひめわゆうよう、ありありと。いととりわたとり、こだねとり。せじようのかんくを、すくわんと。かいこのむしと、なりにけり。ふうふもろとも、ゆめさめて。ひめのはかしよえ、まいりしが。すまんのむしが、おるゆえに。くわのはとりて、あたえれば。みないつさんに、うちわたり。ししのやすみが、ししくざん。きじんがたけが、たけやすみ。うつろのふねが、ふなやすみ。うずめられたが、にわやすみ。よどのやすみも、はやすぎて。こばにあがりし、あがりこや。まぶしわたりも、いつさんに。いちにち、いちやに、みなかくれ。たまをならべた、ごことくなり、かないにまゆわ、まんまんと。ゆきのつもりし、ごことくなり。かいこえんまん、いのるなら。ひたちのくにの、こがげさん。おくのいんに、たちたまを。十六せんじん、きねんせば。ねずみもとらず、ひにまけず。かいこわとしどし、ごくじよなり。

### 御詠歌

くわのはわ、こがねのはなの、さきはじめ、かねのなるきわ、くわのひとえだ、三十一ばん、たんぼのくに、あのをさん

御詠歌  
かかるよに、うまれををみの、あのうやと、をもわでたのめ、とこえひとこえ

### 七福神

きみよう、ちようらい、ありがたや。七福神の、ふなあそび。きさらぎやまの、くすぬきを。ふねにうたせて、いまをろす。きんのほばしら、うちたてて。あややしきの、ほをあげて。きんだんどんすの、まくをはり。さてもかみがみ、のりたもう。一にだいく、ほていさま。三にびしやもん、じろうじん。五つわいづもの、わかえべす。六つわほくろく、なかにのり。七つなにわの、べだいてん。びやをしらべて、をわします。ふくろくじんが、ろをもんで。びしやもんでんが、かじのやく。このふねどこえと、ながむれば、ほうらいさんも、はやすぎて。これのをにはえ、つくふねわ、をんえはんじよう、たからぶね。さてもめでたい、をんえかな。さてもめでたい、をんえかな。

### 御茶

きみやようちやうらい、これにきて。ちやのまぎしきを、ながむれば。きんのちやがまに、きんびしやく。なんきんちやわんで、おちやひとつ。しんちやかこちやか、うちのちやか。やどえかへりて、ものがたり。

### しよぶつ念仏(忌中仏)

なむだいじ、たいひの、かんぜおんぼさつ。じゅじゅちうざい、ごきやくしようめつ。じたびようどう、そくしんじようぶつ。なむあみだぶつ、なむあみだなむあみだ、なむあみだ

(一) なむあみだ、なむあみだ、なむあみだんぶつ、なむあみだ(十べ

ん

(二) なむあみだぶつ (十ぺん)

(三) なむ、ふどう、しゃか、もんじ、ふげん、じそう、みろく、やくし、かんおん、せいし、あみだ、あしく、だいにち、ごくそう、

なむ十三ぶつなむあみだ (十三ぺん)

(四) おんあほきやあ、べいろしや、のうまかほだら、まにはんどま、じんばら、はらはりたやうん (十五ぺん)

(五) 十おを十たい、なむあみだ (十ぺん)

(六) にしわざいほう、ごくらくじやうどの、しよじがいけの、はずのれんげわ、一ぺんもうせば、一ぼんひらいて、にしのこうやえ、

かがやきわたりて、すなわちほとけに、うたがいなアし、ゆうづうねんぶつ、なむあみだ (一ぺん、一ぼんより十ぺん、十ぼんまで) (十ぺん)

御位牌

きみようちやうらい、これいきて。このやのいはいは、ながむれば、一にこうたて、二にわはな。三にやしきびの、えだをりて。しでのやまぢを、わきにみて。ごくらくじやうどえ、いそがるる。ごくらくじやうどの、二のものわ。せにでもかねでも、あきやせぬ。なむのろくじで、さらとあく。なむあみだぶつ、なむあみだ。

善光寺

きみようちやうらい、ぜんこうじ。によらいのものとわ、てんじくのもの。かくかいちやうじやのごんりゆう。えんぶだごんの、みだによらい。もりやのだいじん、あくしんで。なのかななよの、たたらふみ。それでもによらいがとけないで。なんばがいけえ、しづめられ。そのとき

ほんだの、よしみつが。ほとけのみすえを、すくわんと。かわなかじまえ、かんじようし。もりたてまつるわ、しなのなり

御詠歌

「みわここに、心はしなの、ぜんこうじ、みちびきたまえ、みだのじようどえ」しなのでかわなか、ぜんこうじ。むさしでかわぐち、ぜんこうじ。かいでこふうの、ぜんこうじ。さんぶつあわせて、みだによらい。みだのらいこう、ありありと。おがむころの、ありがたや。

御寺

きみようちやうらい、をてらさん。まがりまがりて、ななまがり。ものそにて、ろくぢぞう。もんをはいりて、ながむれば。しよこくしよだんを、かざりをく。あみだによらいが、ひとひかり。なむあみだぶつ、なむあみだ。

天台宗在家念佛

先 三礼

一心頂礼十方法界常住三宝

次 懺悔文

我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋癡  
従身語意之所生 一切我今皆懺悔

次 焼香文

願我心淨如香炉 願我心如智慧觀  
念々焚焼戒定香 供艱十方三世佛

三遍 丁

丁

次 觀經文

光明遍照 十方世界  
念佛衆生 攝取不捨  
南無阿彌陀佛

三遍 丁

次 回向文

願以此功德 平等施一切  
同發菩提心 往生安樂國

二十一遍

早唱念

百遍 丁

次 三礼

一心頂礼十方世界常住三宝

三遍 丁

次

ナムアミダ ナムアミダ  
ナムアミダ ナムアミダ  
ナムアミダ ナムアミダ

次 十三佛名号

南無不動・釈迦・文殊・普賢・地藏  
弥勒・薬師・観音・勢至・阿弥陀・阿閼  
大日・虚空蔵  
南無十三佛ナムアミダ  
ナムアミダアミダアンプ

二十一遍を三回

次 閻魔王名号

十王十体ナムアミダ

二十一遍

三、生者必滅會者定離

仏の教えありければ

まぶたにうつる面影の  
心と心うつさばや

二十一遍

四、

華散る浄土に迎えられ  
日夜に弥陀の法をきく  
蓮のうてなしろきはな  
尽させぬ香華のかしこさよ

二十一遍

次 光明真言

オンアホキヤビロシヤナマカボドラマニン  
ウツクハ山不レトクハカニ 五クハハク  
ドマジンバラハラハリタヤウン  
五クハハクハクハクハクハクハクハクハクハク

次 融通念佛

融通念佛ナムアミダ

五、いざ甲いのこのつどい

万徳まんとくふくむ念ねん仏ぶつを

唱となえて菩提ぼだいを祈いのるべし

唱となえて菩提ぼだいを祈いのるべし

#### 四方固め

婦命頂礼有難や

四方固めの曰くには

東は千手觀世音

南は薬師の十二身

西は西方弥阿如来

北は釈迦牟尼如来さま

御中決は不動さま

四方固めを致すれば

魔のさすことはなかりけり

南無阿弥陀仏

#### 二十二夜様和讃

婦命頂礼有難や

二十二夜様待つ人は

火水改め 精進し

胸に悪心持たずして

信心堅固に身を持ちちて

菩薩を押し給うべし

如意輪菩薩の御願には

数多の女人の身代りに

血の池地獄に落ちんとて

己に入らんとし給えば

あら有難や不思議なり

池より蓮華が現れて

紫雲むらさき霞かすみく御佛ごぶつが

其の儘蓮華に座し給う

左の御手に嬰兒みどりごを

抱き上げさせ給いつつ

右の御手を願に当て

女人を救う方便と

感ぜ給うて有難や

左の御手で招きつつ

我を念ずる輩は

現世未来を助くべし

さてまた現世の御願には

子なき女人に子を授け

懐胎したる女人には

安産にして取らすべし

ちしゃくけつかい血の病

永血白血の病には

薬師観音在しまして

忽ち快氣を得さすべし

未長久と守るべし

さてまた未来の御願には

死出の山路や三途川

血の池地獄に至るまで

如意輪菩薩が手を取りて

阿弥陀如来の御来迎

勢至菩薩も諸共に

慧光灌頂の華散りて

極楽浄土へ引撰する

助け給えや有難や

南無阿弥陀仏

#### 淡島様和讃

婦命頂礼伊勢の国

大盡様の妹子は

春姫様と申するか

十三才の明けの春

女の月約つきやくを初に見て

住吉様へ初の縁

十六才で鉄漿かねを付け

上十五日が永血なり

下十五日が白血なり

永血白血の患いで

社を汚したその罪で

阿波あわの小舟こぶねに乗せられて

紀州渚に流されて

賀多の浦へと上げられて

賀多で淡島大明神

月の三日や十三日

二十三日が御縁日

老も若きも諸供に

如何なる血型の病でも

信心なざる人々は

救いとるとの御誓願

助け給うて有難や

助け給うて有難や

南無阿弥陀仏

#### 産(三)体様和讃

婦命頂礼有難や

三体様と申せしは

女一代の守り神

別けて信心なす人は

福德壽命授くべし

懐胎したるその時は

産に向いしその時に

一心こめて手を合わせ

五色の御姿現れて

早速安産得さすべし

生れ来たりしその子には

見目よく氏よく授くべし

安産せし後御神は  
千代万代に至るまで  
守らせ給え有難や

南無阿弥陀仏

薬師様和讃

帰命頂礼薬師尊

薬師の本地をたずぬれば

薬師の本地は此れにあり

一つの階きざし登りつめ

二つの階にて眺むれば

金の御堂のその中に

十三ばかりの御稚子が

天の羽衣召し給い

菩提の数珠を襟にかけ

紫硯ゆえんぼくに油煙墨

墨とるとるとすりながら

右の御手に筆を持ち

左の御手に折紙を

月の八日や十二日

二十三日は御縁日

その日を念ずる輩は

一人残らず筆に止め

助け給うぞ有難や

南無阿弥陀仏

(鳥羽西部)

(古市)

二十二夜和讃

がしゃく しょじょう

しよわく ごうかい

ゆうむ しょんじん しょじょう

しんごん しょじょう

一切が今回懺悔

繰り返し(2反)

がんちちふどう じよどせい

こくぼう らんしん

ぼうじょう あんらく

二十二夜様

帰命頂来 有難や

二十二夜様 待つ人は

秘密改め しょしんし

胸に悪心持たずして

信心堅固に身を持ちて

菩薩を拝し 給ふべし

女人菩薩の ごかんに

あまた女人の 身替りに

地の池地獄に落ちんとて

既に入らんとし給え

あら有難や不思議なり

池より蓮華が現れて

紫雲たなびく御仏の

そのまま蓮華に座し給へ

左右の御手にみどり子を

いだき上げさせ給うべし

右の御手を顔に当て

女人を救わん方便に

感ぜ給いて 有難や

左の御手で 招きつつ

我を念ずる輩ともがらは

前世未来をたすくべし

さてまた現世のごかんに

ちしやく けつかい 血の病

ながち しらちの病でも

薬感応ましまして

たちまち快気を致すべし

子のなき女人に子を授け

上野總社御和讃

實にも尊とや難有や

委しくこゝに尋ぬれば

崇神の帝の其砌り

其を平定ぐる其為ふ

豊城入彦の御命

此地小御下降ましまして

其時御武運長久を

末長久と守るべし

かいたるしたる女人には

産前産後の大難を

安産させていさすべし

なおまた未来ごかんに

死出の病や産づかば

血の池地獄に至るまで

女人菩薩が手を取りて

阿弥陀如来が来迎し

勢至菩薩ももるとともに

回向くんじのはなふりて

極楽浄土へ引導し

来世は一蓮託生で

有難かりし次第なり

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀

(古市)

總社明神の御由来を

遠き人皇十代の

東の蝦夷は叛きけり

時の御帝の御長子

貴き御身を持ち乍ら

悪人等を討ち給ふ

祈らせ給ふ御精心を

神代ながらに此土地を  
主神の経津主命より  
合せ祀りて後世迄も  
今ぞ吾等の参詣するも  
厚き情を偲ぶなり

御詠歌

大神小向ひてはぢぬ心もてつかへ奉らむわれひと共に  
實にありがたやあな總社神  
降りて人皇二十七代  
上毛野君小任られし  
改め築き其の御名を  
蒼海明神と稱へけり  
光り輝やく其が為めに  
慕ひ参る者限りなし  
實に難有やありがたや

安閑天皇元年に  
小熊の王は御社殿を  
土地の名前ふ因まれて  
神の御稜威と御社殿の  
遠近人や郷人の  
救はるゝ者数知れず  
あな總社神總社神

御恵ふあふみの神の坐せば社渡る浮世も心安けれ  
其後人皇四十と  
聖武天皇天平の  
上野國內十四郡  
總ての神を奉招り  
上野總社の大神と  
國小司は朝早く  
其後政治を見ると云ふ

平空げ給ひし武神  
其の父母の御神を  
子々孫々に傳へけり  
神の御稜威と御祖先の  
あな畏しやかかしこしや  
あな總社神總社神

御詠歌

あな尊と國の總ての神坐せばあしなへも立つ總社大神  
あな畏しやかかしこしや  
抑も吾人等の上ふ坐す  
先づ父母を始めとし  
神は我等の祖先なり  
後吾事を勤むるは  
又神々は吾人等をば  
あな難有やありがたや  
我が上野の鎮守ふて  
比の大神小参詣するは  
一度に禮拜する如し  
其の御恵の深きこと  
あな難有やありがたや

あな有難やありがたや  
神の御数多けれど  
身上の祖先は皆神ぞ  
左れば祖先を禮拜し  
人の人たる道ぞかし  
氏の子として恵まるゝ  
まして總社の大神は  
全國民は氏子なり  
全國内の神々越  
其の御利益の験きこと  
稱へ奉るも限りなし  
あな總社神總社神

再拜 拍手二

御宇多天皇御製  
天つ神國つ社をいはひてぞわが葦原の國は治まる  
明治天皇御製  
わが國は神の未なり神祭るむかしのてぶり忘るなよ  
け行く世を見ることも導く神のあればなりけり  
光格天皇御製  
神様の國小生れて神様のみちがいやなら外國へ行け  
孔子此道釋迦の教も捨てずしてつくゑの島の片端ふ置け

拍手二再拜

### 三、門付其他

祭文 せえもんがたりといった。

ほらの貝をふくと、でろれんという音がでた。

リズムは浪花節と同じようだが、節まわしがちがう。

祭文は語りながら、ほら貝をでえれんでろれんとならした。文句によつて錫杖をかちんかちんとならした。祭文語りは一人でやる。

このムラにも、大正の初めころに、祭文語りの人がいた。高山さんといった。わしが十五、六のときのことだった。高山さんの商売は、左官屋さんだった。

陽気がよく、おかいこも、米もとれた。今年は豊作だというときに、「やえもんを聞くべえじゃねえか」という声があると、「いいだんべ、たのんべえ」ということになって、大きい農家の座敷を借りて、祭文を聞いた。

近所の人が、二十人も三十人も寄つて祭文を聞いた。主催者が祭文語りにいくらかお包みをするくらいで、聞き手はただだった。

「般若おさん」など、女の侠客の一代記のようなものを語つた。

(元総社)

ごぜ ごぜさんの宿はきまっていた。おかねをおひねりにしてもつていってごぜ歌をきいた。物語をうたつた。

ごぜさんは、大正五、六年のころまでやつてきた。新潟からきた。

女の親方が、三人か四人ひきつれてきた。

あかいこしまきをして、白足袋でわらじをはいてきた。髪はいちようがえしであった。(青梨子町)

むかしは、ゴゼさんがよく来た。ゴゼさんは。目が不自由であった。三味線を持つてきた。四、五人くらいできて、ゴゼ宿で、あつまつた人から、いくらかおかねをもらつて、歌をうたつた。おもに口説をうたつた。ゴゼ宿は、寺の敷島内にあつた中島さんという家であつた。

ゴゼさんは寒いころにやつてきた。ゴざと三味線を背負つてきた。仲間に目あきが一人いて、その人が手をひいて近所をつれあるいた。人んちに行つて、歌をうたつて、いくらかおかねをもらった。

百姓家に泊めてもらつて、その晩、十二時ごろまで歌をうたつて、聞きにきた人からおかねをもらった。(元総社)

警女Ⅱ北向きの観音様が三、四月頃来た。(清野)

警女が来た。ハンカチ屋のカズさんの家が警女宿だった。(後家)

越後蒲原から警女が来た。(元総社第二)

警女宿は三国街道沿いに分布し、新治村まで三十人位でやつて来て、さらに十人づつに分かれて所定の宿へ行くという。小相木は言うまでもなく、古くから交通の要衝とも言える地であり、ここに警女達が集まる宿が存在した。

中島健一郎さんの曾祖母ヌイ、祖父源太郎祖母ツネさんの代までは、中島家は十人程の警女の拠点となる宿であり、ここから二、三人のグループとなって、あちらこちらに門付に出かけ、ここに集つたという。もちろん門付の途中で一泊する宿は他にもあるが、中島家の場合は、長期滞在の拠点である。

昭和四十五年に人間国宝に指定された。警女の伊平タケ(レコード・書籍が出版されている)も、この宿を利用し、彼女の話では、伊勢崎方面までも出かけて行つており、群馬では特に蚕繁盛の唄が望まれ、「警女さんが来たから蚕が当る」と言われたという。

ヌイさんは、漬物や、曼頭、ヤキモチ等を警女達に振る舞い、親身な世話をした。

伊平タケは、昭和五十一年夏に中島家を訪れ、三人の墓前で温かい人情に対する礼を述べた。これはTVで放映されている。

旧街道沿いの五四〇番地にあつたカヤ葺きの大きな家は今は無くなっている。(小相木)

警女が泊つた家がある。(江田)

その他 昭和八年頃初午に演芸があつた。(粟島)

結婚式に謡いがついた。(粟島)

蚕唄を力石のおじいさんが唄つた。(粟島)

小屋掛け芝居があつた。(粟島)

神谷考一のおじいさんは、野田の松本錦枝(地芝居役者)だつた。

(粟島)

三河万才が来た。丁重にもてなした。(清野)

お獅子が来た。(バカバカ)(清野)

石倉の劇場(石倉館)から人力車に乗って口上振れが来た。

悪魔払いと称して、厄年その他の時に浪曲師等呼んで、自宅で語らせた。(後家)

今のパチンコ屋の所に芝居小屋があつた。(中石倉)

新潟の警女、祭文語り、丸一、三河万才、門付け、物もらいが来た。

木暮キヨは獅子で生計をたてていた。

反町のおじいさんは義大夫を語つた。(中石倉)

三河万才、猿まわし、獅子、春駒が来た。(後家)

獅子には餅をやつた。(後家)

祭文が来た。

富田のおりんさんは琵琶を弾いた。

三河万才が来た。

春駒が来た。(江田)

金古の浪曲語りの金龍亭が来た。

広沢豆蔵というのも来た。(江田)

お寺を宿とした比丘尼が来た。(江田)

芸人 越後獅子、ごぜ、獅子舞、万歳、春駒、が来た。

万才は「西の海から東の海(宝殿がく)」といった。二人組で、つづ

みをたたきながら、まわつた。(桜が丘)

正月の門づけ 獅子舞が新潟・埼玉から来た。金のもらえる家はあ

がつて神棚でした。子供を頭をかむので子供はこわくてにげまわつた。

芸人 十二の節語り、祭文、浄るりがいた。新高尾の吹屋に祭文師

がいて、語つてきかせた。総社大渡)

## 四、その他

総社神社本祭り お祭り宿で、本祭りをやるかどうかを決めた。費

用がかさむので、豊作の年でなければやれなかつた。この町では山車

を出した。(元総社第二)

明神様にはお籠り屋があり(神楽殿の手前に現存) 勢多郡から祭り

に大勢がやつて来た。(元総社第二)

各町内には杉柱を使った幡竿があり、大きい幡があつた。下宿町は

杵木に彫り物がある。

本祭りには御神馬がでたが、二階から見ると言われた。

稻荷台から獅子が、総社町からは馬が出、他の町からは屋台が出さ

れ、その折の囃子装束は今も残っている。



上の下宿と粟島は交替で総代を出し、下の下宿町と赤石が総代となっていた。

松田一家だけの屋台があった。明神様の披露宴の下に屋台が置いてある。また石井一家にも屋台があった。

鳥羽町金尾は大鉾を出した。(元総社第二)

総社神社祭太鼓 武田信玄が蒼海城を攻略した折に、総社神社は焼失したという。これを元亀年間に再建したのを機に、氏子連が喜んで太鼓を打ちならしたのがこの太鼓の発祥であるという。

大太鼓一、太鼓二、笛一からなり、その音は、山伏神楽の太鼓に相通じるものがある感がある。昭和六十二年九月四、五日には国立劇場で公演した。

明神様の祭り太鼓は、きちがい太鼓、馬鹿囃子と呼ばれた。

(元総社第二)

その昔、総社神社周辺では祭り太鼓が盛行したという。古市の祭り太鼓も総社神社への奉納太鼓の一つであり、大太鼓、小太鼓だけだったものに笛と鉦を加え、今でも祭りには欠かせないものとなっている。

(古市)

その他 八坂神社の夏祭りに、藤岡に伝わった秩父の夜祭りの流れを汲むもので、笛を少し変えて鉦・太鼓・笛の祭太鼓を奉納している。

新前橋囃子・籠丸・三てこの三曲である。(新前橋)

日枝神社の春の祭典は、中の庚申の日と定められていたが、四月三日の神武祭、四月十五日の八十八夜のオコモチ等の影響を受け、後に四月十五日となった。(総社町山王)

明神様 総社神社の十月十五日の祭りには、幣束を背負う馬(神馬)の提供がこの村の役割である。(総社町山王)

七月二十一日は灯籠祭りを行った。妙見様の前日に祇園を出した。

八月七日は化粧業師の縁日だった。(元総社第二)

屋台があったという話だが、子供の頃には既に無かった。(後家)  
お倉から飯玉神社へ屋台が出た。飯玉神社の天井には屋台の一部が残っている。(後家)

八月五、六、七日は七夕で、石倉の七夕として名をはせ、盛んに飾り付けをした。昭和四十年の頃には知事賞や市長賞を受けた。(中石倉)

七月二十四、二十五日に石倉祇園囃子が行われる。小学校四、五、六年を中心としている。昭和三年には下・中石倉で賜チブスが流行り、その時山車・天狗・おかめ二人の渡御が行われた。樽神輿が出たこともある。無病息災、五穀豊穰を祈る祭りである。町内十団体で夏祭りを実行する。(中石倉)

八幡様の舞台 八幡様の境内に舞台があった。

ここで芝居をしたという。この舞台は組立式で移動できたのでよそムラへ貸したこともあった。鳥羽、川曲などへ貸したという。

最後に西の田圃でやったようだ。間口十間、奥行二、五間くらいの小屋をつくって、そこに舞台をしまっておいた。また、神社ののぼりざおもこの小屋へしまっておいた。

なお、当時の芝居は買い芝居であった。ここの舞台は、まわり舞台で有名であったという。今はなにも残っていない。(下新田)

地芝居 昔は盛んで、義太夫付の芝居をやった。(上青梨子)

地藏様 八月二十日に後家箱田の運動公園でかつき地藏と盆踊りを行う。(後家)

息災除けとして桐の念珠があった。「お地藏様の賽銭くんない」と子供達が回って歩いた。松月庵で曼頭を買った。二十日間程かつき地藏を行った。その間二、三種あった念仏を唱えた。(後家)

七月二十四日、今は数珠は無いが、地藏様を洗う時に数珠まわしを

行った。地蔵様をかついで町内を巡り、各辻々で鉦・太鼓を叩いて御詠歌を唱えた。このかつぎ地蔵は昭和六十三年に復活した。(後家)

地蔵様(かつぎ地蔵)は八月の十四、十五日に行われる。二日間米五合麦一升を持ち寄った。お寺が世話人の宿となり、高等二年が世話人となり、下世話人、かつぎ頭(六年)がいた。かつぎ頭は太鼓も叩き、小学四年くらいが太鼓をかついだ。八才から加入し、一年目が曼頭七つ、二年目には九つ貰った。

旧道を中心に回ったが、もとは一ヶ月くらい続けた。(江田)

江田のかつぎ地蔵 今から三百年程前、箕輪城下で疫病により多くの子供が死に、城主が地蔵にすがり、かつぎ地蔵を始めたといわれる。

太平洋戦争で一時中断したが、昭和五十四年に復活した。今では、八月十四、十五日の早朝に、二人の子供が、輿に乗った地蔵様をかつぎ、鉦・太鼓で地蔵和讃を他の子供達が唱えつつ、町内を巡って行く。辻々では人々が線香を上げ、子供の無病息災を祈り、米や賽銭を上げた。

この行事は、小相木町や後家町でも近年復活されている。この輿には、三角形の綿の入った布を縦に連ねたものを、いくつも下げている。

### 地蔵和讃

婦命頂らい 地蔵尊

何が 諸願で、門に立つ

あまりこの世が邪険さに

念仏すすめに 天下る

ナンマイダ ナムマミダ ナンマイダ

和讃には他に十七とかエビスさんというのもあった。(稻荷新田)

### 東箱田の地蔵様

地蔵様の行事については、記録はなにも残っていない。従って、語

り継がれた伝承だけが頼りである。

次のことも正確かどうかは判明しない。ただ、今後語り継ぐために材料を提供したに過ぎない。このことについて、何か知っている方は是非情報として頂きたいと思っている。

### 1 由 来

地蔵様がいつごろ、どういう事情によって発生、或いは伝播したかははっきりしていないが、民俗学者都丸九一氏の著書「村のことも」の「地蔵行事の概要」の中に「宝暦」「天明」という年号がたびたび出てくること。「東村村誌」に正徳五年に箱田の地蔵神輿を後家の八兵衛という大工が作ったという記録が残っている。

これから推定すると、二百年〜二百五十年前には何らかの形ですでに存在したようである。後家の八兵衛については、左甚五郎に似た名人伝説がある。

水沢寺の六角堂や大徳寺の総門(萱ぶき)を作ったという。

行事の主体は誰だったのか

行事の内容から見ると部落全体―青年と子供―子供の行事と移って行ったものと思われる。当地域でも、古老の話は、子供の行事として強く印象つけられているようだ。

地蔵行事の分布をみると、高崎を中心として旧群馬郡に広がり、その他は勢多、多野の一部に限られている。これは高崎を中心とした鉦打ちの輩の奨励によったものと思われ、当地区はその真ん中にあつた。

この行事は、子育て、安産、延命、等の信仰と結びついたものらしく、飾りの三角布の裏には子供の名前を書く風習が今でも続いている。古老の話によると、運営は小学生を中心に一月つづき、神輿は村のつじつじで和讃を唱え、小さい子供達は家いえを回り寄付を頂いた。

最後の日はそれを饅頭にかえ、村全体に振る舞ったという。

2 和 讃

和讃は前記都丸氏の著書から一つ、あとの三つは重田克己氏、石坂岩雄氏に記録を見つけていただいた。

この他にも一く二あると思うし、次に掲げるものも一部違いかもしれないので、ご存じの方は教えていただきたい。

(1) 橋和讃

帰命頂礼この橋は

いかなるひとの かけた橋

かねで 中ろうをつみ上げて

善人とうれば 広き橋

悪人とうれば 狭き橋

唯 念仏にて「そりゃ」通るべし

とよ なんまいだ

(2) 白さぎ

帰命頂礼 白さぎや

岩のちゆうろに 巣をかけて

十二の卵を産みそろえ

驚 鷹 熊にさらわれて

おちる涙は 三井寺の

庭の千草の「こりゃ」露となる

とよ なんまいだ

(3) 日出の山

帰命頂礼 日出の山

登り のぼりて あとみれば

峯にやお地藏の「そりゃ」お立ち会い

とよ なんまいだ

(4) 極 楽

帰命頂礼 極楽や

さいの川原を見渡せば

一つや二つ 三つや四つ

十より下のおさなごが

小石を集めて 塔を組む

一ぜんくみては 父のため

二ぜんくみては 母のため

三ぜんくみては 兄弟我が身の

「そりゃ」ためとなる

とよ なんまいだ

この村には地藏様があるので、子供の水死が無いと言う。八月廿三日は地藏祭りが行なわれる。宵祭りに花火を上げる。また灯籠を飾る。

(総社町山王)

子育て地藏和讃

こともよう

一 きみようちようらい はるなさん、

さんごくいちの山なれば、

野のみずかさねに、きよくして、

ふでもおよばぬ、つづりいわ、

とうよう、なむあみだ。

二 きみようちようらい、七つ子が、

今年はじめて、田をうえて、

しかもその田のできのよき、

たけがひちしゃく、ほが五しゃく、

なんたら、こまにも八ほいちだ、

八ほでいちこくあるなれば、

これのおおせに、くら七つ、

くらのばんしは、だれだれぞ、

一にこすずめ、二につばめ、

三にほへきよの、ほととぎす、

とうよう、なむあみだ。

### 三

きみようちようらい、十七が、

今年はじめて、たびをして、

茶やのこえんに、こしをかけ、

ながさきキセルにつめたぼこ、

ひとふきふいては、ふじの山、

ふたふきふいては、つくばさん、

みふきふいては、八がつの

十五やお月の、みだれぼし、

とうよう、なむあみだ。

### 大人用

一 婦命頂来、榛名山、

三国一の山なれば、

野の水重ねに、清くして、

筆にも及ばぬ、つづり岩、

とうよう、南無阿弥陀。

### 二

婦命頂来、七つ子が、

今年初めて、田を植えて、

しかもその田の出来の良さ、

丈が七尺、穂が五尺、

なんたら、駒にも八穂一駄、

八穂で一石あるなれば、

これのおおせに、倉七つ、

倉の番士は誰だれぞ、

一に小雀、二に燕、

三にほへきよの、ほととぎす

とうよう、南無阿弥陀。

### 三

婦命頂来、十七が、

今年初めて旅をして、

茶やの小縁に腰を掛け、

長崎キセルに、つめ煙草、

一吹きふいては、富士の山、

二吹きふいては、筑波山、

三吹きふいては、八月の、

十五夜お月の、乱れ星、

とうよう、南無阿弥陀。

この地藏和讃は、飯野久万吉さんが記憶されていたものです。

道祖神祭り 高等二年を親頭とし、六年生を小頭とした。小学校二

年生から参加した。ドンドン太鼓といっていた。ヘイガミと呼ばれる

賽銭を集めたが、嫁を貰ったり祝い事のあつた家は余計にハイガミをくれた。

繭玉などをこれで焼いたものを食べると風邪をひかないといった。

(清野)

昔は大通りの真中に用水が流れていた。この川をまたぐように櫓を組み、盆踊りを行った。

小学校のプールの辺りに櫓を組んで盆踊りを行ったが、鍛冶町の地藏様の祭りと重なり、これに押されて人出は少なかった。(粟島)

八月十九、二十日は盆踊りである。男は仮装をして踊った。(江田) 遊び 映画館は、電気館、帝国館、前館とあつた。芝居では柳座があつた。

映画は無声で弁士がついていた。チャンバラや喜劇、「チャップリン」「パール・ホワイト嬢」などがあつた。

洋画一、邦画一に喜劇とマンガを合わせて三本で二時間くらいだった。

六時から九時ごろやつた。昼夜一回ずつの上演で、一週間同じものがつづいた。

ポスターを決まった所に張りにきて、それを見て、見物にいった。

柳座には、人情劇とチャンバラがかかった。榛名山麓の田舎芝居で(不明) 錦糸一座といった。

人によつては、夜あそびに每晚いった。のぞきや夜ばいなどをした。夕飯を食べると出かけた。

祭があれば、そこまで歩いていった。遠くは明神様や引間の妙見さまの祭まで行った。(西箱田)

カツドウ 電気館、大和館、帝国館、柳座(芝居) で見た。

ジャンバルジャンや連鎖劇を見た。芝居では金色夜叉や国定忠治

だった。

芝居が来る時はピラが張り出された。(元総社大渡)

ナレ芝居 村の中に芝居をやる所があり、そこでナレ芝居をやるといった。

屋根から雪が降る芝居があつたことを覚えている。(江田)

ホタル 子供のあそびで夜ホタルとりに出た。ホタルをカヤの内にはなして子守りにした。(小相木)

夜遊びの話 むかし、わかいしゅはよく夜遊びをした。行った先で、おやじさんにおこられたりすると、わかいしゅは仕返しをした。

五人も七人も行って、四間八間のうちの土台に手をかけて、うちをゆすぶつて、「地震がきた」といってさわりだりした。(総社町立石)

竹馬のはなし むかし、竹馬がはやった。昌楽寺廻の竹やぶから竹をぬすんできて竹馬をこしらえた。

しまいにみつかつて、そこのおやじさんにおっかけられたことがあつた。

竹を切るのに、包丁をもちだした。そのあと刀をもちだして竹をわつた。そして、竹細工の講習会するとき、その刀で、なたをつくつてもらつた。(元総社)

子供のけんか 阿弥陀寺と山王の子供がけんかをした。阿弥陀寺の子供が、山王の子供にむかつて、

「山王のやつはけんかに来い」といった。

石の投げっこをした。しまいには、弓をつくつて弓を射た。くねのしの竹をとつて弓をつくつた。(元総社)

十日夜には喧嘩をした。(中石倉) わかいしゅの夜遊び

石倉にはカフェがあつて、酒を出していた。

わかいしゅは夜遊びに行った。

娘が風呂に入っていると障子に穴をあけてのぞいた。娘がそれに気づいて、風呂から出られないで、湯気にあたつたという話もあつた。

わかいしゅが夜遊びに行つて、娘のうちをまわるので、下水まわりといった。

娘と仲のいいわかいしゅは、娘の家へ行く、口笛を吹いて合図したという。

夜遊びに行つて、その家のおやじさんにもおこられると。石塔を家の前にならべておいたという話もあつた。(下石倉)

わかいしゅの夜遊びのことを、下水まわりといった。

むかしは、ながしのあかりとりのところをさまといて、障子紙がはつてあつた。そこからうちの中をのぞきこむので指の先をなめて、障子紙をやぶいて中をのぞきこんだ。

さまのところから、中をのぞきこんでいたら、ちようど、ながしで水をこぼして、それが出口のところから一度に流れでた。その水が、ふところにながれこんで、こりたことがあるという。

夜遊びに行つて、柿もぎに、木にのぼつた。友だちと二人でのぼつた。

そしたら、柿の木のうちのおばあさんが、湯入りから帰つてきた。

その柿はおばあさんが大事にしていたものという。

おばあさんは、柿の木にあがつているのを見て、長さおもつてきて、木にのぼっている二人をつついた。木の上で逃げたが、もうこれ以上のぼれないところまで来た。

一人のわかいしゅは、おばあさんのうちの新宅のわかいしゅだから「おばあさん、おれだから勘弁してくれ」

とあやまつた。

「なあんだ、おめえか」

というわけで、許されたという。

外風呂をたてていたうちがあつた。庭に風呂桶があつた。

それを四人でとんでもないところまでかついでいった。そして、かくれて見ていた。

そしたら、そこんちの人がでてきて、

「あれ、せえふろがねえや」

つていったつて。

外風呂に入っていた娘さんの着物をかくしてしまつたこともあつた。

娘さんが風呂からあがつたら着物がない。「きやあきやあ」つてうちの中へ逃げこんだ。西国分のはなしである。

わかいとき鳥羽へ行つた。わかいしゅ同士仲がよかつた。風呂のたつているうちへのぞっこみに行くべえということになつた。風呂に入る番を知つていて、娘さんの入る番になつたら、わかいしゅが娘さんより先に風呂の中に入つて、ふたをしめておいた。むされるのをがまんしていた。

娘さんは、自分の番がきたというのでたらいの上にあがつた、ふたとつてみたら、中にわかいしゅが入つてるんで、

「わあい」

とおどろいた。

むかしだから、そんなことをしても、警察沙汰にはならなかつた。

(元総社阿弥陀寺)

わかいしゅのいたずら　むかしのわかいしゅは、よくいたずらをした。

植野のわかいしゅは、ムラの製糸工場の煙突の上に、まっかのふん  
どし(こしまき)をなびかせたという。

また、半鐘のところに、荷車の車をはずしてあげておいたこともあつ  
たという。

夏は外風呂であつた。娘さんが風呂に入っていると、下水まわり(夜  
遊び)に行ったわかいしゅが、その風呂桶をよそへもっていったつて。  
Yちゃんは、夜遊びに行つて、Oさんのうちのつぼ山の、だきつけ  
ないほどの大きい石を、たね屋の玄関のところへもっていつておいた。  
しばらくどかせなかつたという。

むかしのわかいしゅは、娘のあつまるころへ行つては、悪いこと  
をしていた。(総社町総社)

夜遊びのいたずら むかし、江田にTという柔道のつよい男がいた。

この人がわかいしゅのとき、前の田中へ夜遊びに行つた。

そしたら、ある家で外風呂がたつていた。それを庭につっこくつて、  
きれいにこぼしてしまつたつて。

また、箱田へ行つて、ちようどどんどんやきの日、道祖神小屋に火  
をつけて燃してしまつた。

箱田の区長さんが江田へおしてきて、えらいさわぎになつたことが  
あつた。(江田)

女のヨバイ 「後閑朝倉女のヨバイ、男後生楽、寝て待ちろ」

後閑も朝倉もかせいだところという。(前箱田)

力くらべ むかし、わかいしゅがあつまつて、力くらべをした。  
石をもちあげたり、土俵をもちあげたりした。

むかしは、米俵がかつげなければ一人前じゃないといわれた。

ふげえしといつて、俵のはしをもつて、肩へもつていくやり方だと  
か、たすきがけという方法もあつた。

また、一升枥の上にあがつてかつぐ方法もあつた。(江田)

自動車が通ると、タイヤの跡の息いを嗅いだ。(元総社第二)

最初のバスの後を追いかけて遊んだ。(元総社第二)

四月八日に、春の露を集めて墨をすり、卯月八日は吉日よ、神長虫  
の御成敗かな、と書いた。(後家)

ランプ掃除が子供の日課であつた。

伊藤の杉山と明神山へメカイを背負つて杉葉拾いに行つた。当時  
の燃料は桑デが主であつた。(元総社第二)

男の子の遊びは、兵隊ゴツコ、ブツツケ、ビー玉、魚とり、コマ、  
行軍、陣とりなどであつた。

女の子は、きしゃご、竹なんご、石けり、おつたま(お手玉)、国取  
りであり、お手玉は、白布にエゴの実やアズキを入れて作つた。

日本の国は松の国(教科書にあつた)

へ一つ松 浜辺は

へ一番始めは 八幡宮

などと唄いながら遊んだ。(後家)

子供の遊び 凧あげ、竹馬、スキー、めんこ、おはじき、お手玉、  
羽根つき等である。(清野)

武将と桜の額があり、石を投げると桜が散ると言つて、子供の時に  
石を投げ、ひげの馬場神主に叱られた。

副宮司に関口さんという人がいて、いつもゴロン下駄(ホウバ)を  
はいていた。(元総社第二)

鳥羽まで蛭を取りに行つた。

明神様の西に石垣積の川があり、きびしよの壊れたものでガンドウ  
を作りウナギ等を取つた。蛭や蟹がいた生活用水であつた。

(元総社第二)

明神様の神の木二本と樺で木登りをした。(元総社第二)

江田の花火は有名で、グループごとに花火作りを競った。その為江田の古文書は花火に使い果され、残っていない。文政十三年の花火帳があった。花火筒もあった。江田の洋がらくりは有名で、ハチビ・玉コロガシ等の花火の名前が残っている。

エンガを削り、鉄粉にして火薬に混ぜた、石灯という花火があった。上越線が開通した時に本祭りがあり、硫黄がらくりを出した。本祭りに対しては、しゃくし祭りと言った。(江田)

明治三十九年頃より大正五年頃まで、少年音楽隊があった。数え十六から二十二才までの青年が、シンバル付大太鼓、小太鼓、トライアングル、手風琴、縦笛からなる楽器を用い、入営兵士や出征兵士の見送り時等に往時の国道九号線を演奏して送った。(江田)

おくんちには、子供が太鼓を叩いて夜明かしをした。上がり物の赤飯を分けた。

大太鼓を満足に叩けるのは二、三人で小太鼓は一人(話者の齋木さん)だけだった。(後家)

日高のやつら喧嘩に来い、日高の学校はポロ学校、つつかい棒が十三本(江田)

コマ、ネックイ、ブツツケ、ビー玉、じいこ隊で遊んだ。コマは木鉢の中でやり、ビー玉はホントッコといって、勝つとビー玉を取り上げる時と、ウソッコという玉を取らないのがあった。(江田)

### 野良犬今昔

#### 目次

- 1 三国街道
- 2 高崎・渋川間の電車
- 3 野良犬の起り
- 4 野良犬の地名
- 5 野良犬村の変遷
- 6 八幡宮の由来

7 野良犬獅子舞

8 神宮寺・集会所

9 学校用材の供出

10 秋葉様

11 三界万霊塔

12 天王様

13 道祖神

14 道祖神祭り

15 お伊勢様

16 庚申待

17 薬師様

18 二十三夜様

19 馬頭観音

20 大日如来

21 屋敷祭り

22 寺小屋

23 野良犬からの県会議員

24 芝居と活動写真

25 活動写真上映中の惨事

26 精武館 野良犬にあった

27 柔道教授所

28 方言と訛語

29 俗説

30 年中行事

31 清里尋常高等

小学校の経緯

32 あとがき

#### 1 三国街道

現在の清野町は、昔「野良犬村」と呼ばれていた。明治二十二年の町村制施行後は、清里村が誕生、「清里村野良犬」となり、これが昭和三十年一月の前橋市への合併まで、六十三年間にわたって続いた。

この野良犬の町並の中心を貫く高崎Ⅱ渋川線の道路(土地の人たちは往還と呼んでいた)は、旧三国街道である。関東と越後を結ぶ三国街道は、上信越三国の国境、三国峠を通過するので、その名が生まれた。古くは三国越、三坂越えなどとも呼ばれた越後道である。昔、越後から都(京都)へ貢物を運ぶには、この三坂越えをして、東山道を京へ上って行ったのである。

その後、鎌倉に幕府がひらかれると、この道は越後道と呼ばれ、鎌



倉から河越、鉢形を経て上野の藤岡へ入り、倉賀野―総社（元総社）

―八木原―白井―三国峠―越後という道が定着した。江戸時代になると、幕府は街道整備に力を入れはじめ、特に三国街道は、佐渡の金銀鉱を慶長六年（一六一〇年）に公収し、越後との往来が重要となってきたこともあって、整備されたのである。慶長以前には、まだ高崎から金古を通って渋川に達する道は、開かれていなかったが、慶長三年（一五九九）に、井伊氏が箕輪から高崎に移城し、関ヶ原の戦いで徳川家康が天下の実権を握り、諸街道の整備のなかで中山道が整えられると、高崎經由の三国道が、しだいに本街道となってきたのである。

やがて、三国街道は宿駅も整えられ、慶長十四年（一六〇九）には、正式に道中奉行の支配下に入るようになった。こうして三国街道は表日本と裏日本の物資の流通路として欠かせない街道となったが、さらに幕府にとっては、佐渡金山を管理する佐渡奉行の往来、北国大名の参勤交代、新潟奉行の往来に欠くことのできない重要な街道となった。いっぽう、街道の宿場は、北国大名が数が多いため、その輸道が大きな負担となってきた。この頃の越後大名は十一、そのうち北国街道を通過する高田藩・洲崎藩を除く九藩が、この三国街道を通過した。このような大名往来は、普通百数十名といわれ、ときには三百人を超える人数が通ることになると、金古宿のような宿場の混雑は大変であった。宿屋はもちろん、その輸送による近郷の駄賃稼ぎや助郷もさかんであったといわれる。

当時の街道往来は、現在の自動車時代と異なり、旅人がさまざまに文化を運び、時には宿場やその近郷に影響するような文化を伝播させていった。また、雪の越後から上州へ入り住みつく人も多く、田植え、養蚕の農繁期には、季節労働者が多数上州入りをした。毒消売り、金物売り、あるいは屋根屋、酒屋の職人も越後からくる者が多かった。

こうして上州に住みつき、持ちまへのねばり強さと勤勉さで、上州で産を成した越後の人たちも少くない。

しかし、三国街道は、東海道・中山道・日光街道・甲州街道・奥州街道などの五街道に比べると、脇往還である。北国大名の往来はあつても、中山道に比べると宿駅の整備も、途中の街道幅も相当の差がみられた。

道幅は、高崎から渋川宿までの平坦部の金古宿では現在と大差はなかったが、一歩宿を出ると狭い道で、幅三メートル程度であった。それも両側から桑などが伸びてくると、二メートルもないくらいとなり、片側に土下座でもしていると、籠での往来もやっという状態だったという。

野良犬の南には、「金古宿」があり、上宿・中宿・下宿に区分され、代官所、本陣、脇本陣、木戸などがあつた。旅籠屋、茶屋、問屋なども軒を連ねていた。金古宿の略図は次のとおりである。

金古宿の成立は「金古宿年代記」によると、「慶長七寅年―御検地縄入候、孫六繩此時也、往来初る。慶長十三申年―新開発。慶長十五戌年―伊奈備前守忠次為郡代新開発之事。」とあるから、慶長頃にある程度の宿場機能をもつようになったと思われる。ところで、江戸末期の金古宿の長さは十一町三十八間二尺で、その南北端には木戸が設けられていた。宿場用水は二か所から取水され、上宿から土俵の北までは蟹沢川から、中宿以南は西諏訪地内から牛池川の水を取り入れた。その中央に牛頭天王を祭り、非常の場合の退避場所になる広場としては常仙寺と本光寺が宿に面して建てられている。

本陣、脇本陣のほか、一般旅籠、また休み場としての茶屋もあり、荷物輸送のための問屋も三軒あつた。人馬の往来も盛んになり、宿場は栄えていたが、正徳年間に大火があり、宿場のほとんどが焼失して

しまった。この大火以後は、なかなか復興ができず、天明年間には九軒となつてしまい、さらに天明の浅間焼けて一段とさびれ、寛政の頃には六軒となった。その上、渋川・高崎宿に泊り客はとられ、百姓に転業するもの、宿から他所へ移ってしまうものも少なくなく、金古宿の人口も減少していった。高崎・渋川の宿にはさまれた金古宿のような宿場で、一般の旅人の足を止めさせ、宿泊させるのは容易でなかった。その打開策として文政十年（一八二七）頃からは、客引女を置くようになった。するとたちまち有名になり、近郷の遊び場として栄えるようになった。文政十一年、役人の手入れがあつたが、飯盛女として客引きをさせなければ宿が成り立たないこともあつて、関係者は再三の入牢にもかかわらず、それを繰り返して明治を迎えた。明治維新当時は旅籠屋・茶屋が二十三軒に増え、遊廓化し、近村の若者の遊び場の中心となつていたのである。野良犬にも、田村屋、鳶屋という同種の店があり、近郷の若衆の遊び場となつていた時代もある。

野良犬は鍛冶屋、建具屋、板割職人などが多く住み、職人のまぢともいわれ、集会所に残っている太子塔（聖徳太子塔）には「職人中」の文字も見える。この太子塔は、慶応二年（一八六六）の建立である。こうして、幾多の変遷を経て、三国街道は明治の時代に入る。

## 2 高崎・渋川間の電車

旧三国街道は、明治に入り、次第に整備されてきた。しかし、現在に比べれば、まだまだ狭く、この狭い道路に馬車鉄道が通つたのが明治二十六年四月のことであつた。高崎から渋川までの間にレールが敷かれ、車体を馬に曳かせて走らせたのが最初である。この馬車鉄道は、群馬鉄道株式会社が開設したのであるが、のち明治四十年十一月に電力に変更、翌四十一年八月からは高崎水力電気株式会社の所有に移つ

ている。さらに、大正十年十二月に東京電燈株式会社に合併、ここが経営していた。ちなみに、前橋・渋川間の馬車鉄道の開設は、これより三年ほど早い明治二十三年七月で、経営は上毛馬車鉄道株式会社である。さらに渋川・伊香保間は明治四十二年十二月、伊香保電気軌道株式会社の創設によるものであつた。

大正八年四月、法律第五十八号によつて「道路法」が公布された当時、群馬郡内を通る国道は中仙道と、新潟道（旧三国街道）で、この新潟道は起点が高崎で、経過地は六郷村、中川村、堤ヶ岡村、金古町、清里村（野良犬）、明治村、古巻村、豊秋村、渋川町、長尾村、金島村、白郷井村、利根郡川場村を通り、終着は新潟港となつている。大正八年四月の道路法発布以降は県道となつた。なお、鉄道の上越線の布設は高崎から渋川町を経て沼田町に至る区間が大正十三年三月三十一日に開通し、高崎以南はこれより三年早く、大正十年七月の開通となつている。

明治二十六年の馬車鉄道から、十四年を経て明治四十年十一月に「チンチン電車」となり、これが大正・昭和と続いた。昭和二年九月、東武鉄道株式会社の経営に移り、終戦後の昭和二十七年ごろまで、この電車が走つた。

清里地区内では、青梨子（橋向うの間瀬のところ）と野良犬（鳶屋前）に停留所があり、高崎や渋川方面へ通学する中学生や村人が、多数これを利用した。しかし、次第に自動車時代を迎え、ついに運転を休止、廃線となつてしまった。現在より狭い道幅にレールが敷かれ、チンチン電車が走つていたので驚きである。しかし、自動車はめつたに通らず、道路は荷車、自転車、歩く人が主要、まことにのんびりしていた往還だったのである。

### 3 野良犬の起り

大化の改新によって、国郡の制が立てられ、四十里を大郡、三十里（三十里以下四里まで）を中郡、三里を小郡と定めた。この「里」というのは、のちの「郷」に当り、五十戸をもって一里としている。

このときできたのが十三郡で、群馬郡の中には「桃井里」のほか、十二の里ができたという。これらは、のちにいずれも「郷」となるのだが、この「桃井郷」に含まれたのは山子田・長岡・水沢・伊香保・新井・広馬場・柏木沢・野良犬・池端等で、これらは「桃井庄」ともいわれた。

大化の改新が七世紀であったが、八世紀には上毛野国が上野に改められ、国分には国分寺が建立されている。十世紀に入って、上野に有馬牧（現在の古巻付近）、その他、いわゆる上野九牧が設けられ、各地に荘園ができた。十一世紀になると御厨ができ、十二世紀ごろから上野に源氏の一族が興り、新田氏一族が台頭してきている。

十五世紀になると、上野国は乱れ、やがて戦国時代に入ってくる。十六世紀の大永五年（一五二六）には、長野氏が箕輪に城を築き、この地方一帯を領するようになった。野良犬は、この頃、長野氏に属していたとされる。関東管領上杉氏の衰退によって、北条・武田・上杉の三氏が上野を侵蝕し合い、そのうち永禄六年に武田信玄の軍勢によって、箕輪城は落城し、長野氏は亡んでいる。

野良犬という聚落の起りはさだかではないが、この付近が箕輪城主の領地として記録の上にあらわれてくるのは、天正十八年（一五九〇）頃からである。この野良犬が、多少の郵落をかたちづくり、野良犬村を形成したのは、更にさかのぼることができるものの、慶長期に三国街道がひらかれ、北越との交通の要所となるにつれ、街道沿いに生活することが便利となったため、現在の町筋より「四町ほど辰の方角に

あった」旧野良犬の家々は、現在のように沿道ぞいに移転、居住するようになったと伝えられる。現在でも、野良犬の家々の屋敷は、街道に面して細長い区割がされていて、当時の面影をとどめている。

野良犬の元村は、現在の集落の東方、約四〇〇メートル八幡川（若見橋）の東に当って在ったと推定される。ここに「元屋敷」「鍛冶屋」などの小字名が残っている。三国街道の宿制が慶長十四年（一六〇九）に実施され、それと呼応して現在地へ移り住んだと思われるが、野良犬の古地図などに、現在の街道沿いを「西通り、野良犬村」と記していることから、東の旧村に対し、西通りと呼ばれていたことがわかる。

明治七年十一月十日付太政官達第一四七号をもって、各府県に「府県史料」の提出が命ぜられた。全国各府県で統一した書式で編纂されたが、このとき、村資料も各村から提出された。これが「上野国郡村誌」として合冊され、三十巻が群馬県議会図書室に所蔵されている。

勢多郡六巻（一六四町村分）群馬郡五巻（二〇二町村）多野郡二巻（緑野郡四四町村、多胡郡二七町村）などとなっている。この中に、「上野国群馬郡野良犬村」という資料が残されていて、これをみると明治初期に記された野良犬の現況が、ほぼ推察できる。戸数は四十七戸、人口は百七十六人となっている。以下、「上野国郡村誌」から、「野良犬村」の項を抜萃する。

#### 上野国群馬郡野良犬村

本村古時桃井郷ニ属ス、後高井郷桃井ノ荘ト唱フ、慶長元年三国街道ニ就テ村落ヲナシ野良犬村ト称ス、往昔ハ今ノ地ヨリ東北ニ離ル、四町許如来堂アル所ニ村アリ、如来野村ト旧称す、後街道ニ就テ移転セシガ当初曠野山林ニ連リ狼尤多シ、因テ狼字ヲ析ツテ野良犬村ト称スト伝フ

疆域 東ハ青梨子村ト蟹沢ノ小流ニ界シ西ハ新井村ト野径ヲ以テ

界シ、南ハ金古駅ト金古沢ノ中央ニ界シ北ハ池端村ト小渠ヲ以テ界ス

幅員

東西四百十三間南北三百三十八間

天正十八年井伊兵部太輔直政箕輪城主ニテ之ヲ領シ、文祿元年直政ノ子兵部少輔直之安中城主ニ支封セラレテ之ヲ領シ、寛文二年水野備後守元綱代テ之ヲ領シ、天和二年ヨリ

代官支配地トナリ、元禄四年ヨリ旗下土酒井三左衛門采地タリ、同十六年ヨリ復代官支配、安政元年ヨリ徳川氏清水

領、文久元年ヨリ関東郡代木村甲斐守支配、同年岩鼻県知事大音竜太郎管轄、明治二年前橋藩ニ属シ、同四年ヨリ旧

群馬県管下ニ帰ス

里程

群馬県庁橋ヨリ西一里廿五町、四隣金古駅ヨリ十二町、青梨子村ヨリ五町、新井村ヨリ十八町五間一尺、池端村ヨリ

地勢

三町、以上揭示場ヨリ起算ス

三国街道ニ居ヲ列ネ運輸ノ便アリ、東北ニ耕圃ヲ連ヌ、菜蔬アリ、米穀少シ、南北ニ沢流アレ共雨漲ノ外洒レテ水利ヲ缺ク、薪炭ハ僅ニ村中ニ供スルノミ

地味

其色ハ黝ニシテ淡赤其壤ハ中等、麦粟蘿蔔芋魁ニ宜シ

税地

畑反別廿四町五畝三步、総計同上、改正反別、畑三十三町、宅地三町六反九畝十五歩、山林雜種地三町九反二畝二歩

飛地

本村ノ東北上青梨子村内へ畑三七畝廿六歩

字地

石塚 東西二百一十間南北百七十間、村東  
八幡前 東西二百七十五間南北百廿五間、村北  
欠端 東西四百二間南北百八十間、村東

貢租

鍛冶屋〇元屋敷〇下田〇関南〇原地〇上宿〇屋敷〇十二地租 金六十円二銭七厘、総計金同上

戸数 本籍三十七戸民平、寄留八戸民平、社二戸社小、寺一戸寺夫、総計四十七戸

人数 男八十八口民平、女八十八口民平、総計百七十六口、外寄留男五口、女四口、合計九口

牛馬 牡馬十頭

川 上蟹沢川 深六尺ヨリ五尺広一丈四尺ヨリ一丈、村西池端村界ヨリ本村字元屋敷欠端迄長サ六百三十間、下蟹沢川ニ入ル

道路 下蟹沢川 深一丈一尺ヨリ一丈広一丈三尺ヨリ一丈、村中上蟹沢川ヲ受テ長サ百七十五間、青梨子村界ニ至ル

社 三国往還 国道一等、村南金古駅界ヨリ村内長五町九間道巾二間、池端村界ニ至ル

揭示場 本村南入口ヨリ一町五十九間ノ処字屋敷ニアリ

寺 八幡神社 村社、社地東西三十一間南北十六間、面積四百九十六坪、村ノ中央ニアリ、祭神品陀別命、祭日八月十五日、寛永二年乙丑創建スト、旧記詳ナラス

古跡 神宮寺 東西十三間南北廿四間、面積三百廿六坪、天台宗本郡総社町光嚴寺末派、村ノ中央ニ在リ、慶長三年僧亮慶開基、創立ノコト旧記不詳

如來堂趾 本村字元屋敷ニ其殘礎アリシガ慶長ノ比蟹沢川暴奪シ遺趾皆陥テ川トナル、由緒詳ナラス

物産 繭 五十貫匁、近町ニ輪売ス

民業 男農業ヲ業トスル者四十戸、女養蚕紡織ヲ業トスル者五十二人

4 野良犬の地名

「野良犬」の地名のいわれについては、いろいろな説がある。一つは、村の傍らに如来堂にょらいどうがあったため、古くは「如来野村」と称していたが、長い間にその呼び名が転じて「野良犬村」と呼ぶようになったということである。このことは、この近郊の古い人たちは、方言として「野良犬」のことを、「のれ、の」と呼んでいたことから、むしろ「如来野」の方に近い訛言とも考えられる。

さらに、もう一つの説は、昔、この辺り一帯は街道が開かれる以前は荒野で山林が続き、狼が多く棲みついていたため、「狼の野」と謂われていた。狼の字の偏をとると「良」となり、狼の住む「野」ということから「野良」とし、狼を別名「やまいぬ」といい、「犬」の化身としたことから「野良犬」を村号としたことである。昔は「やまいぬ様」とあがめたほどで、これを村名に冠したことに、意味のあることと思われる。

また、吉田東吾という学者が、明治三十六年十月に出版した『大日本地名辞書』にな「野良犬は金古駅の北隣り、植野の西方に在り、野良犬の北なる下村、野田、小倉は、今は相合はせて明治村といふ。高崎、金古より渋川に通ずる駅路は、此村里を貫けり。野良犬とは並野の訛言なり。」と記している。

このほか、江戸の国学者奈佐勝なつたかが、天明六年四月十六日に江戸を出立し、同月二十五日上野国に入り、付近を訪ね歩き、五月二十三日に江戸へ帰着するまでの旅日記を書き残しているが、この中に「右の方に越後路あり。この道をとりにて赤坂、飯田、しも小鳥、大八木、中泉、福島、足門、冷水など、そこらの村さとをこえて金古になりぬ。いと広き村にて、家も多し。野良犬といふ野を通る。昔この野中に阿弥陀仏の堂ありければ、如来野と呼たりしをいつしか言ひたかひてかくはよふなりとぞ。南下村、いけの端をもこえつへし。」と書かれて

いる。これは、如来堂が野にあったことによる「如来野」説をとつて  
いる。いずれも定説となつていませんが、なかなか意味深い村名である。

## 5 野良犬村の変遷

旧幕府時代の野良犬村には、名主が置かれ治められていた。名主は各村に一名、組頭は町村の大小により一人乃至七人、長百姓（百姓総代）は村の大小により一人乃至二人が命ぜられていた。名主は普通の場合公選で、奉行から命ぜられた。勤務に年期はなく、その給与は年給金三両のほか、村方一町五反歩までの夫銭が免ぜられ、外に米一俵が支給された。組頭及び長百姓は村人から選ばれ、名主がこれを命じて奉行に届け出た。勤務に年限はなく、組頭・長百姓とも名主を補佐し、村方は五反歩の夫銭が免除され、かつ日当が支給されるのが普通であった。

野良犬村の名主として判明しているのは、間仁田権右衛門（博）（現在）、蜂巣源平（進）などである。また、現在までわかっている野良犬村の戸長は、木暮善次、木暮喜惣太、蜂巣源平、木暮義一郎、木暮平造などの名が見える。これらの戸長は、明治五年に「大小区別」が施行されたことによつて、大区に区長、小区に戸長が置かれることになり、野良犬村は小区のため「戸長」が命ぜられたものである。

最近、間仁田博さん宅から発見された古地図は、明治四年のもので、当時の野良犬村の住居が、明瞭に記されていて興味深いので、次に記すことにする。

前地図でもわかるとおり、明治四年七月の西通り「野良犬村」の戸数は三十五戸、住人なしの住居が三戸、合わせて三十八戸となつてい  
る。屋敷の区割は、現在とほとんど変わらない。神宮寺がかなり広い

寺域をとっているのは、大火等の非常の場合の退避場所となる広場として、宿割りの際に考えられているもので、これは金古宿における常仙寺・本光寺の存在と同様である。

明治十八年、野良犬村、池端村、上青梨子村、青梨子村の四か村が集まり、「野良犬外三ヶ村聯合戸長役場」が置かれた。このときの役場は、野良犬村神宮寺を借り、寺の本堂がこれに当てられた。

明治二十二年、町村制施行とともに四か村を聯合して「清里村」ができた。村名の起源は、大字池端の池の扁「シ」と、大字上青梨子、青梨子の「青」とを結合して「清」とし、大字野良犬の野の扁「里」をとり、土地肥沃、風光秀麗なる所から「清里村」の名称としたとされている。

清里村誕生ののちも役場も神宮寺に置かれ、村長一名・助役一名・収入役一名・書記二名によって村治に関する諸般の事務が執られていた。その後、大字青梨子に役場庁舎が建設され、移転したのである。

慶長期、三国街道ぞいに移転して村落が形成された頃は、わずか二十数軒に過ぎなかつた戸数も、街道のにぎわいにつれて増え、明治四年には三十八戸、大正八年には五十二戸、大正十一年には五十五戸となっている。ちなみに、大正十一年の他字の戸数も掲げると、

野良犬	五五戸	池端	六九戸	合計	三五四戸
上青梨子	五八戸	青梨子	一七一戸		
(自作農七八・小作農八五戸)					

となつてゐる。参考までに、明治二十二年の町村制施行以後の村長の氏名をあげると、次の通りである。

野辺	三左(官選)	松下治大夫	木暮定吉	木暮善次	木暮喜
緑	松下治大夫(再)	桜井和四郎	神保宗四郎	桜井和四郎(再)	
小曾根幸一	松下政右衛門	木暮定吉	桜井栄三郎	湯浅又三郎	

蜂巢伴作 木暮播一 木暮喜禄(再) 小曾根幸一(再) 齋藤繁吉 齋藤繁吉(再) 木暮播一(再) 松下政一郎 齋藤秀吉 神保孝三郎 神保武雄 湯浅泰吉 木暮晋一 松島浅次郎 小池寛一 神保武雄(再) 前橋市へ合併。

こうして、大正・昭和を経て「野良犬」は昭和三十年一月二十日、清里村が前橋市へ合併した時まで、その名が続いたのである。一月二十日の合併にあたって、部落集會が再三にわたつて開かれ、町名が検討されたが、消えてゆく村名の「清里」から「清」の字をとり、「野良犬」の「野」を合わせて「清野町」と改名された。明治二十二年の町村制施行以来の清里村の「清」の字が、こうして「清野町」に引き継がれたのである。

昭和二十六年から三十四年にわたつての九か年間にわたる中群馬用水事業は、清野町地域にも、大きな変革をもたらした。中群馬用水は、榛名山東南の利根川右岸で、駒寄村、総社町、清里村、国府村、金古町、堤ヶ岡村、中川村、新高尾村、元総社村等、合併前九カ町村にわたり、利根川の水をポンプ揚水で流下させるといふ一大事業であった。昭和二十六年十二月二十日、駒寄地区の工事現場で起工式が行われ、昭和三十四年十一月二十一日、金古小学校講堂で竣工式が行われ、九年の歳月を費し、総工費二億九千五百三十二万七千円の工事を完了した。反当り事業者七万二千七百六十八円だった。この事業によつて、田の全くなかつた清野地区の八幡前・欠端・十二・下田・原地・関南などに開田された。当時としては画期的な事業であったが、その後、国の政策で米作が減反されたこともあつて、この事業の恩恵は高められなかつた。さらに、昭和三十八年から水資源公団による群馬用水事業が進められ、昭和四十四年にこの事業が完成と同時に、中群馬用水は群馬用水に移管されている。

この事業によって開田された清野町区域に、県立前橋西高等学校が設置されたのは、昭和五十八年である。用地買収等にも、いろいろと曲折があったが、約四町歩の校地が買収され、同年四月、開校の運びとなった。昭和三十三年・四年の開田区域も、二十数年を経て学校用地に変貌したのである。時代の急速度の進展は、この清野町区域にも大きな変化を生じさせている。清里地区全体からみれば、関越自動車道の青梨子・池端地区の通過も、大きな変革のひとつである。

### 6 八幡宮の由来

野良犬部落の北端、八幡川の流れを背にしたところに、野良犬村の村社とし品陀ほんだ和氣命わけのみこと（応神天皇）を祭神とし、寛和二年三月創建といわれる「八幡宮」がある。この神社の「由緒書」によると、次のように記されている。

清里村野良犬に在り、当社は上杉謙信の驍將長野信濃守上野国箕輪城に在り、偶々甲斐国武田信玄と戦闘す、永祿六年癸亥正月信濃守大に敗れ在城の将卒或は死し或は散じ該城全く陥落の止むなきに至れり。夫れが散土数名本村に來り農夫となり榛原を開拓せしに邱上一の小石祠あり、表面には八幡宮、側面には寛和二年三月の刻字あり、於是散土中の一士京師に赴き男山八幡宮の靈串

を請得て帰來し数名所持の弓矢をして其邱上祠辺に埋め鎮守として奉祀したり、是即ち方今鎮守八幡宮の元宮にして現に社地内に建立奉祀せり。

当時本村は榛名山の東麓荆棘凸凹なる原野にして開拓耕地に野狼の如き出没夥しく耕作を障害する甚だしかりしに八幡宮奉祀後は其神徳に因り狼も亦影を失ふに至れりと、此時に當りて狼の字を分割し、原野に成る所の村落に依り創めて野良犬の名称を附するに至れりと云ふ、是即ち往昔よりの伝説なり。

爾後星移り歳替り文化六年己巳八月に至り本殿及び拜殿改築竣成せり、氏子の如き漸次其の戸数を増加し、明治六年四月を以て村社に列し猶大正二年十月を以て全体の社殿を改築す、大正八年五月九日神饌幣帛料を供進し得べき神社に指定せらる。

このように、創建は寛和二年三月、最初の社殿改築が文化六年八月、大正二年十月に現在ののような社殿に改築されたのである。

野良犬に居住する人達は、殆んどがこの神社の氏子である。正月元旦の朝、四月十五日の春の祭礼、九月十九日の秋祭りには、この氏子連中が神社に集って拝礼を行うのをきまりとしている。（旧暦で現在の祭礼日は異なる）

社名	祭神	所在地	創建年月日	例祭日	神饌幣帛料供進年月日	神職名	氏子戸数
八幡宮	品陀和氣命	野良犬	寛和二年三月	九月十九日	大正八年五月九日	桃井大泉	五三戸
熊野神社	速玉之男命外二神	青梨子町(前原)	不詳	九月十九日	明治三十九年十二月廿八日	中島綱五郎	一〇九戸
菅原神社	菅原道真公	青梨子	寛永十二年九月	九月二十五日	明治四十四年十月三十一日	中島綱五郎	六二戸
神明宮	大日靈命	池端	不詳	九月十九日	明治四十三年十二月廿三日	桃井大泉	七九戸
大木神社	大日靈命外二神	上青梨子	平長年間	九月十九日	大正十年一月二十八日	馬場誉次郎	五四戸

## 7 野良犬獅子舞

野良犬八幡宮に、慶長の頃から伝承されているという「野良犬獅子舞」がある。流派は関白龍天流といわれ、八幡神社の本祭りに社殿前で奉納される。関白龍天流の獅子舞は、隣村の明治村南下(現吉岡村)の下八幡宮に伝わるものが古く、野良犬獅子舞は、ここから伝受されたものと考えられている。いずれも八幡宮氏子によって舞い継がれている伝統的なものである。

獅子は一人立ちで、前獅子・中獅子・後獅子の三頭で舞い、これに天狗・カンカチ・ササラ・棒使い・笛などを加えると、構成員は三十人近くになる。他に万燈持ち、氏子連中が加わり獅子行列は、かなりの多勢となる。

獅子頭はキャップ型で、角は鹿型である。貌は鹿型の特長を持つ格調ある表情をしている。竜系統・猪系統の多い中で、異彩を放っている。

野良犬獅子舞は九月十九日(旧)の秋の祭礼に、村社八幡宮に舞を奉納、疫病除け、雨乞い、五穀豊饒を祈って舞われた。昔からの伝承方法は部落の長男を主として演者として選んできた時代が続いた。次男以下は、苦勞して舞を伝受しても、村外や遠くへ出て行ってしまふものが多く、伝承者を失うこととなるため、この規律があつたのである。

昔の練習方法は、秋の本祭りが近づく一か月ほど前から、部落の主だった家の庭を借り、宿というものを設け、酒食の接待を受けながら、夕刻から夜まで、連日練習が続けられた。宿は一日ごとに順番で他の家へ移っていき、祭礼の前日は宵祭りが行われる。これが練習の総仕上げである。太鼓を打つ手に肉刺ができ、それが毎夜の練習でつぶれて血をにじませながら打ち続ける。休みなく吹く笛もなかなか大

変である。良い音色を出すために、ときどき酒で湿りをくれることもある。舞方に対して、古老たちの厳しい激がとぶ。

野良犬獅子舞は首を左右に振り上げるのが特徴で、生き生きした表現方法とされている。首を上下に振ることは少ない、首を横に振ることから、動感がよく獅子頭に伝わり、勇壮さを現す。このため一貫目(四キロ)に及ぶ獅子頭をかぶって、首のほか全身の動作を繰り返す舞方は、肉体的にもかなりの苛酷さを強いられることになる。特に少年期に修練をはじめなければならない者にとっては、なかなかの頭の重さであった。このため、獅子頭の重量を減ずることになり、昭和二十年代に獅子頭の内部をくり抜き、軽量にする処置がとられている。このとき、頭の製作年等がその部分に書かれていたとすれば、惜しいことである。現在では、製作年月日は不明である。

いよいよ祭礼の日には、神社までの道筋には二十メートル置きに燈籠が灯される。橘屋のわきから木暮四郎さんの東を左折、木暮利雄さんの東わきを大日様の前へ進み、桑畑の間の道を八幡川の方へたどるのが、本道である。

宿で勢揃いした獅子行列は、氏子連が作った大万燈を先頭に、通り太鼓を打ちながらお練り(道行き)をする。秋葉様(上の宿)天王様(中の宿)道祖神前(下の宿)で帰る。

獅子行列は、通り太鼓と笛の音色の中を神社まで進む。女の人や子どもたちが、ぞろぞろとその後に続く。獅子場は八幡神社前の境内地である。獅子を踊ったことのある人達は、口をそろえてこの獅子場が一番踊りやすいと云う。演者たちにとって、ここが獅子舞奉納の晴れの場であると同時に、幼時より親しんだ遊びの場でもあつたわけである。草鞋履きで、激しい動作の連続である獅子舞にとっては、土の上が最も踊りやすいのである。



八幡神社の獅子場では、社殿に背を向けるかたちで笛吹き連が並び、棒使いの演武によって神前が潔められたのち、鳥居から振り込まれる。こうして獅子舞が一庭、二庭と間断なく続けられるのである。舞いは勇壮活発、しかも華麗で格調高い要素も含む。「野良犬のあばれ獅子」といわれるほど動きのはげしい「狂い」と、古来の舞いの要素を持っている。「眺め」など、優雅さを併せ持った各種の踊りがある。重い獅子頭をつけて、激しい動きを繰り返す舞方は、かなりの重労働である。一区切ごとに大団扇で風をもらう。舞が最高潮になると、村中の見物客も演者もひとつにとけ込む。舞のあと、神前でご神酒を汲み交し、獅子舞を神前に奉納、秋の豊作を寿ぐのが獅子舞奉納の順序である。現在保存されている獅子舞用具は次のとおりである。

- |       |           |         |       |
|-------|-----------|---------|-------|
| 獅子頭   | 三個（前・中・後） | ヒヨットコ面  | 一面    |
| 獅子用太鼓 | 三個        | カンカナ鉄製棒 | 二組    |
| 大太鼓   | 一個        | 衣裳      | 三十点以上 |
| 棒使い   | 木製棒 二本    | その他付属品  | 長持二棹分 |
| 天狗面   | 一個        |         |       |
| 天狗下駄  | 一足        |         |       |

これらの獅子用具は、火災等の焼失を除くため、長年にわたって暮時治宅の土蔵（倉）にお願いし保存されていたが、昭和五十一年八月に集会所わきに「具庫」が完成、（工事費四十万円、うち十万円は市補助）現在は具庫に保存されている。

野良犬獅子舞の「通り太鼓」と「舞」の種目は、次のとおりである。

- |          |                |
|----------|----------------|
| 通り太鼓種目   |                |
| 1 トウーロリウ | 4 チユウヒヤヒヤロ     |
| 2 出の笛    | 5 花岡崎（トウヒヤロヒヤ） |
| 3 三つ揚    | 6 トートリトン       |

- |              |           |
|--------------|-----------|
| 7 チャウラツリチートロ | 9 チイトリトリト |
| 8 ラリーレエエリト   | （以上九種目）   |
| 舞の部種目        |           |
| 1 宮巡り        | 8 雀切      |
| 2 塩汲み        | 9 八ツ切     |
| 3 伊勢切        | 10 眺め     |
| 4 文珠の切       | 11 狂い     |
| 5 天狗秒子       | 12 飛び入り   |
| 6 大山切        | 13 岡崎     |
| 7 ササラ三秒子     | （以上十三種目）  |

この野良犬獅子舞は、昭和四十八年十月、「前橋市重要無形文化財指定」を受けている。群馬県選抜獅子舞大会、護国神社奉納、郷土芸能大会などに出場、あかぎ国体にも出場予定である。昭和五十七年秋から五十八年五月まで、小学校六年生までの子ども全員に（男は舞・女は笛）獅子舞を伝授、前橋市郷土芸能大会等に披露し、好評を博した。

#### 8 神宮寺・集会所

現在の「清野町集会所」は、もと「神宮寺」の本堂跡に建てられたものである。神宮寺は、慶長三年二月、総社町光巖寺の末寺として建立された。山号を八幡山といい、寺名を神宮寺という。当時の寺域は極めて広く、周囲は鬱蒼たる杉の森で、三国街道を通る旅人は、山門のかなたの本堂を拝しつつ、厳粛の感にうたれたろうことは想像に難くない。

開基は阿闍梨亮慶という僧で、人望も篤く、寺の威勢も奮い、當時はかなりの檀徒を持っていたといわれる。次に「神宮寺」のあらましを記すと。

八幡山神宮寺 清里村大字野良犬大字屋敷七〇一一  
(旧番地野良犬村四十五区二六六番地)

宗派 天台宗 (現在、天台宗群馬教区所属)

本尊 阿弥陀如来像

本寺 総社町光厳寺

総本寺 近江国延暦寺

創立年月日 慶長三戊戌年三月吉日

開山 阿闍梨亮慶

以下は神宮寺裏手の墓地にある歴代僧の墓石から判読したものであるが、かなりの和尚が脱落しているものと思われる。慶長期より元禄九年(一六九六)まで約百年間にわたつての脱落もそれである。神宮寺無住となるまでの最後の住職は明治十年七月没の「徳間和尚」であることは、間違いないものと思われる。

光道口寛定門

元禄九丙子天四月八日歿  
(一六九七)

嬰兒山然信女

享保十一丙午年六月十八日歿  
(一七二六)

道空清律師

宝暦十一辛巳天五月十九日歿  
(一七六一)

大阿闍梨法印謹慶

明和八辛卯年三月朔日歿  
(一七七二)

道生禪定門

寛政三辛亥年五月十八日歿  
(一七九二)

大阿闍梨乘宥和尚

寛政六甲寅年五月十五日歿  
(一七九四)

阿闍梨法印妙惠覚位

寛政十一巳未天九月初五日歿  
(一七九九)

大阿闍梨法大寂順

文政元戊寅年六月十九日歿  
(一七九九)

鏡知法子

文政十丁亥天八月廿四日歿  
(一八二七)

権大僧都大阿闍梨宥相法印 天保三壬辰年四月十九日歿

権律師法印宥海和尚 安政三丙辰年八月二十三日歿

当国碓氷郡上里見村字神山生協曾根氏

権大僧都徳間和尚

明治十丁丑年七月十有七日歿  
(一八七七)

神宮寺は、開基阿闍梨亮慶より二百八十年、無住となる前の最後の住職権大僧都徳間和尚は明治十年七月十七日にこの世を去っている。当時の檀徒は野良犬村でわずか六軒、隣村の笹熊で数軒、こうした少数の檀家で寺を支えていたとされている。

住職の死後無住となった神宮寺建物は、明治十八年に「野良犬外三カ村聯合戸長役場が設けられたとき、その本堂を役場として貸与、役場建物が青梨子に出来るに及んで、野良犬の集会所として使われてきた。しかし、長い年月の間に建物の傷みがひどく、これを建て替え集会所とするため、清野町住民の寄付と三年間の拠出金によって建設工事が進められた。昭和五十五年三月八日日本堂の取り壊し、三月十二日起工式、七月二十日落成式となった。工事は集会所本体工事費一千三百三十万円、本堂工事費百八十万円、物置工事費百万円、外構工事五十万円、排水・解体・備品購入・借入金利息・落成式費用などを入れて一千九百五十万円にのぼっている。

清野集会所新築のあと、青梨子、池端、上青梨子、前原でも相前後して集会所(公民館)が建設された。(清野町集会所建設に対しては市補助二百四十五万円、県より二百万円の助成があった。)

### 9 学校用材の供出

八幡宮境内地には、かつて杉の太木が鬱蒼と茂っていた、二双に分

かれた大木もあって、子供がよく登って遊んだ。その中には落雷で空  
洞になった巨木もあった。

昭和二十三年に清里地区に新制中学校が誕生する際、地区内の神社  
の杉が伐採され、これが学校の建築用材として供出された。各字のこ  
神木は、おおかたこの時伐られている。その時建てられた校舎は、現  
在の鉄筋コンクリート建ての前、清里小学校の南校舎（平家建て）の  
東半分であった。その後植えられた杉の若木と桜が、今ではかなり成  
長している。先年の台風で、桜の大枝が折れ、八幡宮の古い石鳥居が  
倒れてしまったのは惜しまれる。

## 10 秋葉様

昔は、どこの家も屋根は藁ぶきか板ぶきで、ひとたび火事が起きる  
と、ひとたまりもなく燃えひろがったものである。しかも、自分の家  
だけにとどまらず、隣家から隣家へと燃え移り、風の強い日などは全  
村が燃えてしまうほどの恐しさであった。そのため、領主から敵命を  
受けていた村役人などが、各家庭の火の取り扱いについては、厳重に  
取り締ったといわれる。

明治二十八年四月二十六日、高崎通町より出火、折しも東北風烈し  
く延焼十一ヶ村六百三十三戸に及んだという。この時、連雀町西群馬  
片岡郡役所は遂に焼失と記録されている。また、明治三十二年三月九  
日、明治村大字下野田に大火があり、延焼二十一戸に及んだとある。  
さらに大正九年八月三十日午前二時、伊香保温泉中央部より出火、焼  
失百二十戸、三百五十棟に及んだという。

このように、風の強い日など、いったん風上などで出火すると、街  
道筋などは火が舐めつくし、宿全体が焼失してしまいかねない。そう  
した火防の神として祭られたのが秋葉塔である。

秋葉山神社は、室町時代に山伏によって開かれ、悪火の火防の神と  
してあがめられてきたこともあって、村人たちは火防のためにそれぞ  
れの家で火元に注意することと合わせて、秋葉塔を建てるが多  
かった。野良犬村でも、町の上の方にこれを祠り、風上からの火事を  
防ぐまじないとしたのである。蔦屋前隅に残る「秋葉塔」は、明和八年  
辛卯八月に建立されたもので、昔は、ここが野良犬村の人家の一番上に  
当たっていた。ここに秋葉塔が建てられたのは、理由があることなので  
ある。

## 11 三界万霊塔

仏教用語の中には「三」の字がつくものが多い。たとえば、「三尊」  
といえは阿弥陀如来、釈迦如来、薬師如来のことをいい、「三宝」とい  
うのは、仏宝、法宝、僧宝をいう。また、「三世」は、過去、現在、未  
来、あるいは前世、現世、来世をさす。「三途」といえば、火途（地獄  
道）、刃途（餓鬼道）、血途（畜生道）をいう。

そこで、「三界」とは、欲界、色界、無色界をさしている。「三界万  
霊塔」は、当時の人々が「現世」というところが、「三世」の人々によつ  
て、いかに苦の娑婆であつても、「三宝」の教えをよく守って、死後だ  
けは誰もが「三途」で苦しむことなく極楽浄土ができるように、との  
願いで建てられたのである。

清野町集会所北、墓地入口にある「三界万霊」は、こうした当時の  
人々の願いが込められたものである。清里地区に現存している三界万  
霊塔は次のとおりである。

清野町集会所北墓地入口 建立年不詳

青梨子町前原上屋敷 寛政十一年四月吉祥日

上青梨子町瑞雲寺境内

建立年不詳

青梨子町正法寺前

享保十年十一月吉日

(一七二五)

池端町八塚墓地内

明和二年十一月二十日

(一七六五)

12 天王様

野良犬宿のほぼ中央、高橋千代吉(文男)宅の屋敷の片隅、高い石の台座の上に天明三年六月建立と刻まれた天王様がある。もとインドの祇園精舎の守護神「牛頭天王」を祭った除疫神である。この牛頭天王は、日本へ伝わって、京都祇園神(八坂神社)などに祭ったのが有名で、その後全国各地に祭られ、各地の祇園祭りとして現在に残っている。

天明三年といえは、浅間山の大爆発により大きな被害のあった年で、これ以上災害が起らないよう願って、この除疫神「天王様」を祠つたものであろう。

この「天王様」の祀りは、毎年七月十七日(農休み)で、この日は氏子総代や氏子当番、正副区長(自治会長)などが、この石宮の前に集まり、二本の青竹を建て、七五三縄を張り、赤飯やきゅうり、なすなどを納め、神主に祝詞をあげてもらう。このあと総代の家で、そばやうどんをごちそうになり祭事を終ることになっている。昔は、天王様前に大太鼓が出され、子どもたちは交替で太鼓を打ち、農休みの小使いを貰い、浴衣などを着て祭りに集ってきたものである。

13 道祖神

道祖神は塞神、岐神などとも呼ばれ、古くから信仰されてきた。ま

た、旅の神、子供の神、疫病除けの神としても庶民信仰の対象とされてきている。道祖神を大別すると、文字塔と双体型とに分けられる。文字塔は、碑面に「道祖神」などという文字が彫られているのが普通で、双体型は男女の二神が仲よく浮き彫りにされているものが多い。もつとも、東京や伊豆半島などの道祖神は二神像ではなく、単身像のものばかりといわれるが、これは例外である。

群馬県は隣りの長野県とともに、全国でも道祖神の多い地域とされている。その殆んどが江戸時代のもので、これらの信仰が起って、民衆に広まってきた年代がほぼ推察できる。

清里地区の道祖神は、次のとおりである。

青梨子町豊前	道俣神	享和年代	光梳書
青梨子町八幡	道祖神	明和八年辛卯九月	保育所内
青梨子北内	道祖神	建立年月不詳	施主北中
清野町下蟹沢川端	双体神	宝暦六子年	
上青梨子町三ツ屋	道祖神	明和二乙酉天十一月	吉祥日
笠井清明宅			
上青梨子町淡島神社	双体神	享和三年	
前			
上青梨子町淡島神社	双体神	明和三年丙戌四月	吉日
前			
青梨子町前原上宿	双体神	安政五戌年	
上青梨子町三ツ屋	双体神	安永七戌成歳五月	吉日
池端町神明宮前	双体神	蜂巣門弥宅前	
青梨子町前原上宿	道祖神	明和七庚寅九月	十五日
		宝暦十四年三月	吉祥日

青梨子町前原上宿 双体神 安政五戊年  
 青梨子町前原新田 双体神 寛保三亥天七月吉祥日  
 青梨子町前原熊野神 双体神 明和元甲申天十月吉祥日  
 社境内

同 右 道俣神 建立年不詳  
 青梨子町前原上屋敷 双体神 明和乙酉七月吉日

小池潭宅前

このように、清里地区には文字塔六基、双体型十基、合わせて十六基が現存している。双体型のものは、二神の外側の手で神酒を汲み交しているものが五基、握手をしているのが二基、二神のどちらかがご幣を持つているものが三基に分けられる。

一方、文字塔のものは、「道俣神」一基、「道祖神」五基である。青梨子町豊前の文字塔「道俣神」は、無幻（光梳は同人）の書で、特に達筆である。

清野町の道祖神は、部落の南端の下蟹沢川端、間仁田権六（建一）宅屋敷端にあり、宝暦六年に建てられたものである。古くは、この道が前橋へ行く本通りであり、やや下った川端に道祖神場が残っている。

#### 14 道祖神祭り

道祖神祭りは、子どもの行事である。道祖神焼き、道ろく神焼き、どんどん焼きなどと呼んだ。どの村にも昔から「道祖神場」と称するところがあり、たいがい部落の東方か東南方の三本辻か四本辻にあった。野良犬村の道祖神場も、宿の東南端に当り、下蟹沢川が蛇行した曲り鼻にあり、道から一段低くなった段地にあった。

古くからの道祖神の行事は、正月の七日から、子どもたちが毎戸の門に立てた松竹や室内の棚飾りや七五三飾りを、道祖神場に引き寄せ

ることからはじまる。これを松曳きという。子どもたちのなかの最年長者が親方となつて先に立ち、竹や薪や藁・縄等をもらい、人別をもらい回る。家族の一人に何銭とし、子どもの生れた家や新婚の家からは、さらにご祝儀をくれる。昔から道祖神の親方が、身上回しのはじめといわれるように、こうして貰いあつめた金の配分、酒や菓子や必要なものを買う金銭の出し入れは、親方の裁量である。

いよいよ正月十三日は道祖神小屋つくりである。村中の大人が出て来て、小屋づくりがはじまる。太竹を使い、松の枝や竹、藁をくくつて、大きな道祖神が組み上がる。小屋の中央に、大いりりが作られ、鍋がつるされ、その周囲には、人が泊れるほどである。道祖神小屋が出来上ると、酒一升がお祝いとして親方が買い、小屋作りを手伝った大人たちにふるまわれる。お菓子やミカンが子どもたちに配られる。おみごとといって、村中の子どもたちが貰いにくる。

道祖神の晩は、にぎやかである。小屋の真中の大いりりにつるされた大鍋には、こんにやくや里芋等が煮られ、集った人たちにご馳走される。ご馳走を食べ、わいわい話しているうちに、夜となる。若衆たちは、七小屋めぐりといって、七か所の道祖神小屋をお参りして歩くのである。

こうして十四日の早暁を迎える。午前三時、子どもたちは眠い眼をこすりながら太鼓を担ぎ、叩きながら野良犬の宿を下から上へ、上から下へとふれ歩く。昭和に入つてからは、リヤカーに太鼓を積んで年長者が引き、年少者が叩いて廻った。

道祖神が燃えますよ はあや夜があけますよ

と大声で声を合わす。無邪気な子どもたちの歌声と、せき立てるような太鼓の音に、野良犬の人たちは急いで起き出す。赤ん坊は、はんでんで背負われ、子どもは手を曳かれ、寒気のきびしさも忘れて、道

祖神場へ急ぐ。

「道祖神大笑」と書いた旗を篠の先につるし、餅やするめ、繭玉を竹の先に刺したのを持って、あちこちから往還に出て来て下つて行く。

道祖神小屋の回りは、人だかりで混雑する。

隣り村の道祖神小屋が火を噴き上る。竹の節のはじける音が、あちこちで聞えはじめる。野良犬の道祖神にも火がつけられる。めらめらと紅い焰が上つて行き、小屋全体に火がひろがる。爆竹の音が、耳をつく。道祖神大笑の旗は空高く燃えながら舞い上る。遠巻きにした人たちの顔が真赤にほてる頃、東の空に暁の色がきざしてくる。さしも火勢をほこつた道祖神小屋も、どつと燃え崩れる。人々は持つて来た繭玉や餅を焼いて家に帰る。道祖神の火であぶると、できものができない、風邪をひかないといわれ、この日は野良犬じゅうのほとんどの人が、火にあたりにくるほど、にぎわつたものである。川端の道が、ぞろぞろ歩く人でいっぱいになったほどであった。道祖神祭りは、まさに子どもたちの天下であった。

戦後、この道祖神祭りは中断されて、子どもたちの遊びの世界から消えて久しい。最近、清里地区全体の道祖神焼き（一か所にまとめたもの）が復活されてきたが、大人たちにとっても郷愁を呼ぶ行事である。

## 15 お伊勢様

伊勢信仰にもとづいて結成された信者の集団を「伊勢講」といった。大別して、伊勢神宮への参拝を目的とするものと、そうでないものとに分けられる。しかしながら、大部分は参宮講で、また神明講ともいわれた。参宮を希望する人たちが組織をつくり、旅費などを頼母子講方式で醸出預金をして集めた。伊勢に近い地方では講員全員が参宮す

る惣参方式がとられたが、上野国などのように遠隔地であり、個人の資力で費用の負担ができない場合は、クジ引きで二、三人の代表者をえらぶ代参形式をとった。

代参は、多くは春先の農事始めの前か、秋の収穫作業が一段落したあとの農閑期に施行され、二年参りといつて歳末・年頭にわたることもあった。代表者の出発に際しては、講中が伊勢講宿に集まって、出発の祝いをする。まず、天照皇大神の掛軸を床の間に掲げ、礼拝してから宴を張り、餞別をおくる。全行程を徒歩にたよつたところのことだから、水盃を交して訣別した。潔斎を重んずる所では、家の周囲に注連縄を張り、連日水垢離をとり、特別に建てた小屋で精進してから出発した。そのとき講中や縁者・知友などが村境まで見送る慣行があった。

留守宅では参宮道中の無事を祈つて鎮守様に日参したり、疲労を癒すため門口につくつた藁人形に湯水をかけて、かげながらねざらつたりした。また、講員、親類からは留守見舞が届けられた。遠い上州から伊勢まで百十里の道のりを、徒歩で往復するのだから、参宮する人も、留守をあずかる者も、容易なことではなかつたであろう。途中で、ケガをしたり、命を落すこともあった。持金をなくしたり、奪われたりすることもあったろう。現代のような気軽な旅ではなかつた。

参宮道者が伊勢に着くと、講ごとに指定される御師の宿坊に泊り、御師の引道で内宮・外宮を参拝し、また太々神楽を奉納した。一生に一度、伊勢参りをしたいというのが、当時、庶民の夢であった。家内・講中・部落の平穏無事と息災延命、五穀豊穰、福德円満を祈願した。これによって、豊産が招来され、すべての禍厄が除かれると信じられた。このように民間における伊勢講は、元来、こうした部落共同体に根をおく素朴な信仰形態を基盤にしながら成立し、やがて、参宮方式

をとる組織へと発展したものとされる。そして、その媒介役を果たしたのが伊勢御師であった。伊勢神宮は、もともと民間の私幣をかたく拒んでいた。そのため律令体制下の古代では、民衆の参宮は不可能であり、ほとんど無関係な存在であった。それを民間に紹介し、国民の各層に滲透させ、日本各地に「伊勢参り」を普及させたのが伊勢御師であり、その時期は中世以降である。古代国家によって生活が保障されていた神宮の祠堂たちは、その崩壊によって自活の道をえらばなければならなくなった。そこで多くは伊勢神宮の靈験を説き、その信仰を伝道するための御師となつて諸国を巡回し、その代償として米銭などの初穂料を徴収しながら神符・神札・暦などを配付した。これが神宮経営の経済を支え、祠堂の生計を維持することとなった。

また一方、御師の地方檀回によつて、はじめて伊勢神宮の存在を知つた民衆は、その指導のもとに伊勢神宮崇拜の信仰集団を組織するとともに、御師との間に緊密な師檀関係を結ぶに至つた。この傾向は、江戸時代に強まり、地方住民の遠隔地参詣の要求とも合致して、伊勢参りの風潮を助長した。特に六十年ごとに訪れる御蔭年を期しての御蔭参や、青年子女・小前・奉公人などの抜参が流行し、江戸時代中期には、参宮道は人で往来が狭くなるほどの盛況を呈したといわれる。

こうして、伊勢へ参拝に出かけた人たちが帰省のときは、また、村中が村境まで出迎えに出た。それをサカムカエと称し、出会つた所で持参の酒食を開き、無事を祝福した。また華やかに飾つた馬に参宮者を乗せ、伊勢音頭を高らかに歌つて村入りをする所もあった。その晩はデタチ（出発）と同様、講中が集まつて賑やかな祝宴を催した。旅装を解いて道中のほこりをことごとく洗い流すという意味で、ハバキ、ヌギという。その席上、勧請した祓札や伊勢土産を各人に配付する。参宮を直接の目的としない伊勢講も、このとき開かれるところもある。

多くは、毎月日を決めて講宿に参集し、大神宮の祓札や掛軸の前で神事を行い、そのあとで直会の酒食を摂る。このとき伊勢から配付された神札を講員に配付する。この神札は、おのおのの神棚に収めて朝夕礼拝するのを常としたのである。

野良犬部落の東の方、欠端がけばたに近く間仁田一家が祠る「お伊勢さま」の石宮がある。この石宮の側面には、

嘉永六癸壬歳九月吉祥日再建之 間仁田権右衛門孝幹 氏子中

と刻八五三まれている。ほかに、「弘化四年春二月吉日建」とあるものと

「天保期」二八三〇「明治二十年五月」二八四七の刻字の見える石宮と、衣笠さまがある。

これから推察すると、間仁田家の先祖が伊勢参りしたのは、天保期と思われる。嘉永六年建立の石宮は再建とあるから、それより少くとも二十五年はさかのぼることができると推定を「天保」としたのは、伊勢参りの風習が群馬に入つてきて、流行しだしたのが天保初年からであるからである。

清野町には、現在、間仁田家が十数軒ある。この家々で集つて「当番表」をつくり、お伊勢様の祭りの準備一切をする宿番が決められている。お祭りは、昔は十一月十六日と決められていたが、秋の取り入れや勤めの人の立場も考えて、今では十月十六日前後の日曜日としている。この日は朝から石宮の前に日の丸の旗が立てられ、午前十時ごろ同族の人たちが集まり、神官を招いてお祈りがされる。このあと宿番の家に皆が集まり、赤飯やうどん・そばなどを会食するのを習わしとしてゐる。

こうした伊勢講は、昔は間仁田家に限らず、どこにでもあつた風習である。代参講として盛んであつたのは、この伊勢講を筆頭に、反町薬師講、相馬講、熊野講、御獄講などがあつた。講員は代参者の路銀である講銭を積み立てて、その共同出資金で抽籤によつて代表者数名

を順廻りに代参させ、お札を受けさせる方法で、講員は普通十人一組程度であった。時代を経て、こうした講もすたれたが、間仁田一家の、こうしたかたちでの先祖祀りは、今の時代にあつては珍しいこととなった。

#### 16 庚申待

庚申待は、一年の行事として、古くから民間に行われた。村々には、六戸を単位とする庚申組があつた。曆の上では、一年に六回庚申（かのかのえさる）の日がある。そのつど祭ると、ちょうど六戸が毎戸巡番がくるわけである。

庚申の夜は、組内の男子が一人ずつ招待される。これをお当の衆といい、宿をする家をお当の番といった。お庚申は、血ぶく（出産等）を忌み、死ぶく（死亡）を忌まないといわれ、出産のあつた家は、宿を遠慮する習慣があつた。また、庚申の夜は夫婦間の交わりを忌む風習もあつた。

庚申待の晩は、宿の家では風呂を立て、お当の衆の来るのを待つ。お当の衆を先に入れ、家の者はその後で入浴することになっている。庚申待には、本家や分家や親しい間柄の家を家中招待する。夕食は白米のご飯である。大正以前は、普通どこの家でも白い飯など食べなかつた時代だから、庚申待に呼ばれると、子どもたちは喜んでくれるのである。お庚申待で食べた分の米は、神様が余分に収穫してくれるといわれ、お当の衆をはじめ、みんなに沢山食べてもらうようにすすめた。

その夜は、夜半過ぎまで眠らずに話をするのが例であつた。若い人たちは、いろいろな耳学問ができた。仕事などのとき、長話をするとお庚申の晩にしろといわれたくらいである。

お庚申の儀式は、茶の間の上座に庚申の掛軸をかけ、線香を供える。

その前にお供への膳をすえ、縦に平行して六人の膳を並べる。二列のお膳には、長い箸と普通の箸が二ぜん付いている。長い箸は一箸つけるだけで、後は普通の箸で食べる。この長い箸と庚申の掛軸は、箱に入れられ、お当の家ごとに順番に組内を廻る共有の道具である。

庚申組は、五人組や隣組などよりも親近度が深く、明治以後五人組や隣組が組み交えられても、庚申組は固く結びあつていた場合が多い。遠くの親類より近くの他人ということわざどおりの結びつきであつた。

清里地区では、青梨子の北内の庚申待は、昭和十年頃まで続いていた。秋に庚申待ちをする組と、春にする組があつた。また、上青梨子には、講組が上組、中組、下組とあり、長く続いている。野良犬にも、いくつかの講組があり、それぞれの組で庚申待が行われてきた。野良犬の庚申塔は、集会所わきに移された天保十五年甲辰二月良旦建立のものがある。そのほか、個人の家にあるもの、猿田彦などがある。また、上青梨子の庚申塚には、大小合わせて百三十基の庚申塔が今でも残されている。しかし、長い年月に欠けたり、倒れたり、かなり損傷しているのは惜しまれる。

庚申信仰を具現化するために建てられたものが、庚申石像であつた。また、文字で庚申供養塔、青面金剛塔、庚申塔と書いたものも多い。石碑の上部に日月を配し、下部に三猿を画いたものも少なくない。これらの塔を年代ごとに見ると、寛永の頃から始まり、寛政の年代のものが多い。百体庚申は、天保の頃から、嘉永、万延年間に及んでいる。信仰の盛んだつたことが、ほぼ推測される。また、寛政時代から、著名な学者や書家の揮毫したものが少しずつ増え、安政、万延の間には部落間で、筆者を競い合う風潮がうかがえる。青梨子天神様境内の光流書（無幻）の庚申塔などは、その例である。



## 17 薬師様やくしさま

昔、病気などの際、祈願をする神仏は数多くあった。その代表的なものが薬師信仰である。どこの村にも、薬師尊を祭った遺跡が多くみられるのは、その信仰の度の深かったことの現れである。

古く、薬師で有名なのは箕輪原中の「ぐのめ薬師」同・柏木の「桜薬師」などがあるが、野良犬では集会所南の隣接地にあった「虎屋の薬師様」や、縁日には出店も出て、たいへんな人出があった「笹熊の薬師様」が有名であった。薬師堂の前には、小さな薬師の石仏が山積していた。これは病気が快癒した願果しに納めたものである。また、白い布や赤い布を薬師尊に掛けたら、幟を立てたりしてお願いがんかけることもあった。この信仰は戦後すたれ、今では見る影もない。

薬師信仰は、日本には飛鳥時代に伝わり、奈良に薬師寺が建てられ、一般大衆にも信仰されるようになったのがはじまりである。その後、道端や小高い丘陵地、墓地などに薬師堂が建てられた。石造りで左手に薬壺を持った像を多くみかける。「何々薬師」と呼ばれているのが普通で、眼病を治す薬師は「め」と書いた木札や紙片が奉納される。

## 18 二十三夜様にじゅうさんやさま

淡島様の信仰と共に、婦人の信仰が深く、安産をはじめ、婦人の病気を除き、治してくれると信じてお祈りするものが、二十三夜様である。これは月待ち信仰の一つで、毎月旧暦二十三日の夜、講中の婦人たちは宿に集って二十三夜様の像をかかげ、お供えものをして、茶菓などを食べながら話に花を咲かせたものである。江戸末期から明治中期まではこの風習はさかんで、おまわりは昭和のなかごろまで続いた。

野良犬近辺では、「金古のお三夜様」が有名で、よく連れ立ってお参りに行ったものである。野良犬の集会所端には、安政年間に建立され

た三十三夜塔があり、このお祭りは、野良犬の婦人たちによって旧暦の二十三日に行われていた。

## 19 馬頭観音ばとうかんのん

昔は、農山村の運搬耕作に、馬が欠かせないものだった。そのため、馬は家族の一員として扱った。村の割当や人別料を取る場合、何人に馬一頭と数えた。正月のお飾りや屋敷祭りにも、馬屋の飾りを欠かさなかつた。馬具の古い廃物は、馬頭尊の前に納めた。馬が病気やケガのために死ぬと、「馬頭尊」を建ててねんごろに供養した。正月三日には馬に乗って観音堂にお参りし、お礼を受けてきて馬の無事を祈った。野良犬村から、遠く白岩観音まで行ってお礼を受けてくる人もあつたほどである。

馬頭観音の仏像は、顔面が忿怒ふんぬの相をし、尊像の宝冠の上に馬の頭を戴いたく観音様である。昔、天輪王の馬が、急に四方から攻めかかってきた敵を、みごとに蹴散らした。このことから、仏法に逆う一切の悪魔や煩惱ぼんごうを、たちどころに催伏してくれる仏だといわれている。馬は動物の中で、最も利口だといわれるように、すべての人々の願意をききとどけてくれるために、姿を三十三まで変えられた観音様の中でも、特に優れた智慧の持ち主だとされている。それが頭上に馬頭を戴くため、江戸期のころには馬をはじめとする家畜の守護仏のように考えられ、馬を飼う家々や街道筋の馬子たちにも、盛んに信心されるようになった。

野良犬部落の家々でも、昔は馬が沢山飼われていた。終戦ごろまで飼っていた家もあつた。馬頭尊の石塔は、野良犬では清野町集会所端に残っているほか、三本辻や屋敷の片隅にひっそりと残っている。

## 20 大日如来だいにちなるい

野良犬の家並を過ぎて、八幡様へ行く昔の本通りの、蜂巢家の桑畑の中に、寛政九丁巳年閏七月建立の大日如来様がある。

大日如来には、金剛界の如来と、胎藏界の如来があるが、ここに祀られている石塔は、金剛界の大日如来像である。この石像は、廻国供養塔を台座にし、施主は野良犬の三軒の蜂巢家で祀っている。

昔、一人の巡礼僧が蜂巢家を訪れたとき、家族が鄭重にもてなした。その親切に感激した僧が、大日如来を祀ることを推めた。そこで蜂巢家でこれを祭ると、次第に身代が上ったという。

大日如来というのは、もともと真言密教の本尊仏で、宇宙の一切を哺育してくれる慈母仏である。

蜂巢一家では、昔から、毎年土用の丑うしの日に、金古の桃山稻荷へ行つて、青竹に二握りの藁わらを結むすわえた「ぼんぜん」というのを作つて、これを大日如来わきの椿つばきの木の天辺てんぺんに飾りつけ、そこに米の粉で作つたおだんごを供えて祀るまつのが、ならわしであった。

昔は、野良犬の人たちも、この前の道が八幡様の本通りに当つていたため、神社への行き帰りにも、よく大日様だいにちさま（だいにちさま）を拜まがんで通つた。今は桑畑の中におさまつて、訪れる人たちも珍らしい。

## 21 屋敷祭りやしきまつり

野良犬近辺では、昔から十二月一日を屋敷稻荷として祭る家が多い。木や石で祠ほこりを設け、家によつては祭日に藁わらや萱あしはらで仮屋かりやを設ける。家々がそれぞれ屋敷神をもつ場合と、特定の家、たとえば本家や旧家だけがまつる場合とがある。

その日は、昼のうちにお仮屋を藁わらで作り、七五三しちごさん縄なわをはり、おんべろを篠しのの先にさしてあげる。夕食の時、赤飯あかひんにイワシの頭かぶをあげる。

お供えをして帰るとき、後を振り向かないで家に入る。翌朝、お供えしたものが何もなくなつていないと、縁起が悪いという。そんな時、家によつては、やりなおす家もあった。

お供えが終ると、重箱に残つた赤飯を、その場で食べる。おてのこぼという。昔は綾入りのちようちんを持って行つた。家へ入るとき出るときと同じく裏玄関から入ることが禁じられていた。それから、赤飯、さんま、けんちん汁、さんびらなどで、一家そろつての夕食となる。

屋敷内に祭る神としては、屋敷稻荷のほかに、庭にはコンジンスマ、外便所にオヒガシサマ、井戸神様、猿田彦さるだひこ（三隣亡さんりんむしよけ）や、ケエニワ様けえにわさま（堆肥場）などがあつたが、今では忘れられてしまったものも多い。

## 22 寺小屋てらこや

昔、学問を必要としたのは、公家や武家など、支配階級の一部に限られていた。こうした人たちが、学問のため寺院に入ることを「入門」といい、入門して学問をする人を「寺子」といった。

江戸時代に入つて、産業や諸制度が進むと、百姓・町人も文字や計算の知識が必要となつた。このため、近くの寺院に入門して、教育を受ける者が多くなつた。この人たちが、後には近隣の者から請われて、その子弟に初歩的な読み書きや珠算そろばんを教えるようになった。その施設を「寺小屋」と呼んだ。

寺小屋の先生は、名主、組頭など村役を勤めた人達、また僧侶や神主、医者など職業柄、自分も小さい頃学問を身につけた人たちが多かつた。この先生たちを、子どもたちは「お師匠ししやうさん」と呼び、入学した子どもたちを「手習い子」とか「筆子」とか呼んだ。さらに高度な学

問を勉強する人たちを「門人」とか「門弟」とか呼び、この人たちは師匠のことを「先生」と呼んだ。

寺小屋の維持運営はお師匠さんの私財でまかなわれ、筆子たちの父兄が師匠に送った謝礼は盆、暮、年始、節句などに、餅、赤飯、酒などを持参したり、自分の家で作った野菜や初物などだった。

寺小屋の学習は主として冬から春にかけての農閑期で、入学する年齢は七歳から十歳までが多く、なかには十五歳を過ぎて入学する子もあつた。修学年限にはきまりがなく、二、三年でやめる者もいれば五、六年と続ける者、なかには八年、十年という者もいた。

寺小屋の教育は朝八時ごろから始まり、午後三時か、四時ごろまで行われた。日常の礼儀作法のしつけから始まり、いろは村名尽し、各種の往来物、実語教、童子訓等から、四書(大学、中庸、論語、孟子)五経(詩経、書経、易経、春秋、礼記)等の読み書きや珠算などが教

名称	学 科	時 期	師 匠	所 在 地
耕学舎	修身・読書・文章 ・農学	文政・天保期	笠井玄冲 (葛西)	野良犬村
神宮寺	読書・習字・珠算	明治初年	望月徳間 (神宮寺住職)	野良犬村
神保塾	漢字・珠算	文久年間	神保要造	金古宿
馬場塾	読書・習字・珠算	嘉永・安政期	馬場勘左衛門	上青梨子村
斎藤塾	同	安政・文久期	斎藤吉右衛門	池端村
田村塾	同	慶応・明治初年	田村庄平	青梨子村
松下塾	同	同	松下善四郎	同(前原)
正法寺	読書・習字・珠算	安政・慶応年間	僧 暢 堅	青梨子村
湯浅塾	同	明治二十年	湯浅文吉	上青梨子村
濯来社	読書・詩文	同 十三年	志村彪三	野良犬村

外数人・林学斎・堀口監園時々出張教授せり。

えられた。筆子たちの師匠に対する敬慕の情は厚く、終生親に対するように接したという。師匠没後、筆子たちによって碑や墓石などが建立された例も少なくない。

野良犬村および近辺の寺小屋には、次のようなものがあつた。

### 23 野良犬からの県会議員

明治期、野良犬から初の県会議員が出た。安政六年生まれ、昭和四年没の木暮喜禄である。喜禄の父喜惣太は養蚕を業としていた。喜禄は幼少時から渋川の堀口藍園（おんえん）や金古の神保雪居について漢籍や書を修い、名を成した。特に書家としては近在に名を知られ、「神保源十郎之碑」や「堀口藍園贈位之碑」（渋川町八幡神社境内）などの碑文を遺している。

明治十一年、野良犬村戸長となり、明治二十四年西群馬郡から県会議員として当選、明治二十七年まで在任した。県会議員在任中はシカゴ世界博覧会総代渡航調査員や決算委員として活躍した。県会議員退任後、明治四十二年再び清里村長に選任され、村政に参与、その後は群馬郡会議員として地方自治発展に尽した。昭和四年七十歳で没した。

### 24 芝居と活動写真

昔は、芝居小屋というのが、あちこちにあつた。大正期になると、下野田に勇楽座というのができ、松本錦枝の芝居や活動写真を見に、野良犬の人たちは、よく出かけたものである。

松本錦枝というのは、田舎廻りの歌舞伎俳優で、文久三年生まれ、本名岩崎亀太郎といった。埼玉県児玉郡字沖町の生まれ、小さい時から芸事が好きで歌舞伎役者を目ざして十八歳の時から八代目松本幸四郎の門に入り修業を積んだ。厳しい芸道に精進、松本錦枝の名を許された。三十歳で一座「錦座」を旗揚げした。明治村北下を永住の地と

定め、下野田の「勇楽座」を本拠とし、県内各地はもとより越後、駿河、甲斐、信州などへ巡業、大衆に親しまれた。得意の演しものは「仮名手本忠臣蔵」「恋女房染分手網」「伽羅先代萩」などがあった。大正十三年、芸名を長男にゆずり錦翁と称して一門を続けていたが、昭和三年六十三歳で死亡した。その後、二代目錦枝が渋川の「市松座」を買ひ、そこを本拠とした。

勇楽座では、この松本錦枝の芝居のほか、活動写真も興行した。近郊の人たちの娯楽といえは、芝居と活動写真が最も花形だった時代である。

このほか、金古には金盛館や金城館という活動写真館があった。戦後、お代官の南のあたりに、松本（半助）館というのが、ときどき活動写真を上映していた。にわか造りの広い土間を板敷きにした写真小屋のようなものであったが、上映日には近在の村々からの観客で、いっぱいになった。

## 25 活動写真上映中の惨事

昭和六年五月十六日、金古の絹市場で活動写真上映中に火事が起り、多くの犠牲者が出た惨事を覚えていてる人も多いだろう。当時の新聞は、全面をつかい、大きく取り上げている。そのあらましを新聞記事（上毛新聞）から抜萃してみる。

活動写真上映中に出火

無惨、観客十三人焼死

十六日夜金古町火災の大惨劇

〔金古にて小林特派員発〕十六日午後十時四十分頃、群馬郡金古町絹市場で「高崎の孝女みえ」を映画化した「昭和のおふさ」の活動写真を上映中、発火したので大騒ぎとなり、観衆は悲鳴をあげて出口に殺

到して逃げ出そうとしたため大混乱を呈し十三名の焼死者と数十名の重軽傷者を出して近來稀有の大惨劇を演出し、同市場と隣のお森稲荷を全焼して十一時半鎮火したが、焼死者十三名は別項の如く判明したが重軽傷者はそれぞれもよりの病院へ入院して治療を受けているので係員に於て目下それぞれ調査中である。

感激のあらし、俄然 焦熱地獄化して

阿鼻叫喚の修羅場現出

〔金古にて小林特派員発〕十一日午後十時四十分、群馬郡金古町上ノ絹市場で催された関東日日新聞社前橋支局主催、県下各郡市教育有志後援の教育映画会に於て高崎東校の孝女富澤ミエ子を映画化した「昭和のおふさ」を上映中、突然二階映写室から発火し火焰は忽ち天井に燃え移つて黒煙は渦巻き、感激の涙に咽んでいた観衆は総立ちとなつて泣き叫び、俄然会場は阿鼻叫喚の修羅場と化した。この夜の観衆は階上約五百十人、階下約六百人であったが、逃げ場を失つた人々は一時に東方出入口に殺到し階上にあつた観衆は折重なつて階下に飛び降り東側の雨戸を蹴破つて場外に逃れたが、火焰はたちまちこの出入口をも封鎖したので黒煙をくぐつて西方の非常口に辿りついた人々は辛うじて障子一枚を蹴破り濛々たる黒煙と共に吐き出されたが、すでに此頃は南北両側にある二階は墜落し場内は全く火の海と化して逃げ遅れた人々はここに一團となつて焼死した。

女子供が多かつた 無惨な焼死者

姉妹、つれだったのが多いのも悲劇の一つ

判明した十三名の身許

出火と同時に市場東側を警備していた青年団員は、出入口付近の雨戸を蹴破り逃げまどふ婦人子供の子供の救護に努めたが、西方非常口に群がった人々は出入口狭隘のため黒煙に捲かれて遂に出口を失し一団と

なつて焼死するに至つたが焼死者の氏名は次の如くである。

▽桃井村新井三、三三二

湯浅磯吉二女

ふじ (一五歳)

同三女 ゆり (一五歳)

同五男 徳夫 (一〇歳)

同村同字

湯浅新作次男

善一 (一〇歳)

同村同字

湯浅福蔵二女

つよ (二二歳)

同三女 ひで (一三歳)

同四女 とめ (一〇歳)

▽金古町大字金古

天田弥藤次孫

きよ (一七歳)

同町同字

小暮房太郎妻

いち (五九歳)

同町大字足門

飯島光太郎三女

さだ子 (一〇歳)

同町同字

岸三郎次二女

しげ (一六歳)

同町同字

飯島金平長女

てるよ (一二歳)

同二女

まさよし (一〇歳)

なお瀕死の重傷を負つたものも多数ある見込みであるが、現在係員に於て調査中である。

水利の便悪く大事を惹起

高崎、前橋を始め近接各町村

消防組出動も甲斐なく

急報により金古消防組は勿論隣接町村の消防組は総出動で現場に馳せつけ高崎、前橋の消防自動車隊も急を聞いて応援に出動したが、相憎此の付近は水利の便極めて悪く、ポンプは二、三台をつらねて引水する有様で十町乃至十五町を距てた辺りから導水する状態であった為、消火の自由を失い徒らに付近の人家を防護するのみで手の下しやうもなく遂に近來になき悲惨事を惹起するに至つた。

何故ファイルムに点火したか

出火原因に就いて高崎署で嚴重取調べ

大事になる迄観衆は案外平氣

群馬郡金古町上ノ絹市場に於ける映画会の大悲惨事に就いては所轄署たる高崎警察署より森原署長以下係官現場に急行して現場の調査を行なつたのは勿論、県保安課からは十七日午前十時半篠原課長、植松警部補以下自動車を飛ばして現場に至り、詳細の調査を行ったが、当日は第一回を午前九時に、第二回を午後一時、第三回を午後六時から映写していたもので、映写機を扱っていた高崎市外佐野村田中の青木某(二〇歳)は、三回に亘る映写のために疲労も加わり、映写機の取

扱に欠点を生じ自然不注意に流れた結果、出火前も再三故障を生じた程であった。最終の映画が終りに近づいた十時四十五分、俄然フィルムに点火したので警いた技師は二階東側一坪の映写室から脱兎の如く飛び出して場外に逃れ去ったが、観衆は映画が再三中断して居たのでまたまた映写機の故障かと案外気で出火に気づかず、その間火焔は忽ち周囲に燃えひろがり手のほどこす術なく間口七間奥行十一間の建物を全焼、かかる悲惨事を惹起するに至ったか、何故フィルムに点火するに至ったかに就ては目下森原署長以下金古町駐在所に止り極力真因調査中である。

このように、映画フィルムに引火して火事になる惨事が、あちこちの映画館でみられた。勇楽座の火事も、死傷者はなかったが同様原因のものであった。昔のフィルムは可燃性で、熱を持つと発火しやすかった。今は不燃性材料でつくられており、発火の危険は薄らいだ。こうした惨事が原因で、のちに研究されたのであろう。

## 26 精武館

野良犬村に「精武館」という柔道教授所があった。木暮徳太郎・木暮武平・木暮武司と続いた。古い文書に次のように記されている。

天神真揚流の柔道教授所にして、前教師木暮徳太郎氏は斯界の名人大字池端神保源十郎の門下なり。現主任教師木暮武平氏其の後を継ぎ、子弟を集めて教授す。氏は東京田子信重氏の門に入りて修練したるものなりしといふ。

八幡神社には、天神真揚流の献額がかかっている。この他に清里村には、次のような「陽武館」という剣道場があった。

荒木流の剣客松田定四郎氏先考渡辺菊之進氏は夙に剣道に達し、淀稲葉に従ひ長州征伐に向ひ、帰りに道場を開き子弟を教授

せり。松田氏其の後を継承し初め国府村大字北原に在りしが、後清里村大字池端に移り本館（陽武館）に於て三百余人の子弟に教授しつあり。

このように清里村内をはじめ各地で武術が盛んであった。なお、隣村の桃井村には「明信館」（山子田・田中義苗師範）「精武館」（野良犬精武館と同名・神保源十郎門下・飯塚永三郎師範）などがあった。

## 27 野良犬及び周辺の災害

天災は忘れた頃にやってくるというが、野良犬及びその周辺にも、昔からさまざまな天災があった。諺にも「地震、雷、火事、おやぢ」といわれるが、おやぢは地頭のこと、年貢取立ての役人をさすのであるが、落雷、地震、大風、水害、火事、冷害による不作は、昔から何回となく繰り返されてきた。なかでも飢饉は一村だけでなく、上州一国から他州にひろがり、国全体に影響を及ぼすほど被害を大きくさせた。寛保期からの主な災害について、各種の文献、資料等から抽出してみることにする。

一、寛保二年（一七四二）八月、利根川大出水土地家屋を流失せしもの多く、それが為め、利根川周辺の人家転住の止むを得ざりに至りしもの甚だ多し。上野国内のみならず、武・総両国にも大洪水及ぶ。

二、明和八年（一七七二）大旱魃のため植付反別僅かに二、三分に止る。

三、安永二年（一七七三）三月末頃より疫癘流行し、人多く死す。

四、天明三年（一七八三）七月七日浅間山大噴火、吾妻川流域に泥流、上野各地降灰により被害甚大、引続き天候不順、飢饉、各地に打ちこわし騒動起る。当時、数十か村数十戸悉く熱泥の底とな

り、数万の人命と無数の人馬とを失へりと。

(1) 天明三年六月浅間山噴火、七月に至り吾妻山も亦震動し、浅間更に噴く。砂を降らし、石を飛ばし、泥水溢れ、家屋崩れ、人畜の死傷甚だ多し。西群馬郡北牧村、川島村の如きは被害甚しく田三千八百五十石余、人家千百九十戸を没し、男女死するもの一千三百七十人に及べり。(上野志)

(2) 天明三年七月信州浅間山噴出のことあり、人家は埋没し、人畜の死傷算なく而して焼土積ること数尺に至る。金銀什器悉く焼失又は流亡、全村殆んど衣食住の存するものなく瀕死の境に呻吟するもの数百人、領主の救助を得て僅に餓死を免れたりと。旧中村の跡は利根川の沿岸にありしを今は耕地又は石河原等となれり云々。(豊秋村郷土誌)

(3) 天明三年七月浅間山噴火大洪水を起し、半田村過半熱泥中に埋没し、人馬の死傷家屋の流失耕地の被害甚だしく其の惨状見るに忍びざるものあり、狩野平六氏の日記に浅間大焼上州・武州砂降り候事、七月には碓氷郡坂本迄深五尺、板鼻より高崎まで一尺二寸、武州深谷より下にて深七寸積る。四月七日より振動し、八日に至り九ツ時吾妻川より一時に押来り候火石砂泥高二丈、煙立ち恰も火事の如く人馬の流死候事何程計り難しと。

(古巻村郷土誌)

(4) 天明三年浅間山の噴出に際し焼熱したる土砂を利根川筋に流出し、人畜の死傷夥しかば、総社住民相議し上流より押流されたる惨死者を引き揚げ、其の身元不明の者は利根河岸なる植野村字勝山内地内に合葬し、墓上に一の供養塔を樹てたり。(総社町郷土誌)

—総社・曾我鹿十郎氏所蔵「浅間焼砂一件日記」より抄録—

(5) 天明癸卯年初秋七月初日浅間の焼砂少々降来る。

(6) 同三日・四日、山の鳴声折々聞之、砂降る。

(7) 同六日、夕方より段々土砂少しつ増降り、昼夜震動甚し。

(8) 同七日、浅間山震動雷電国中に聞之砂石降ること大雨の如し。家居戸障子明渡し貴賤老若驚き騒ぎ夜中眠らず夜の明るを待つ。

(9) 同月八日弥々震動激しく雷電閃き渡り土砂小石降り下り折々泥の雨降る。依て此段御領主松平大和守様御陣屋へ訴ふ。

(10) 同日町中の大小百姓名主等罷出、身をきよめ鐘太鼓を打ち天を拝して土砂の雲を追ひ払ひ郷村安穩ならしめ給へと祈る。此段寺々へも御届申上げ本院方にて大警若等御祈禱あり。

(11) 此節御領主御役所より当町去寅納米江戸御廻米に付津出し申来候へども、甚だしき天変にて昼も夜の如し、依之名主晴天仕候迄日延を願ひ出づ。

右の御届申上げ蔵前へ相詰め候人馬を返し御米出し申不、若し此の日出し候はば米は勿論人馬共に流失いたし、村方の難渋無此上所先づ以て此義を相止め大悦致し候。

(12) 七月八日午の刻頃利根川へ泥土満水押来る、左も此の水色は黒色水中より煙もえたち、川辺の家居並に大木其の外一面に流れ来り、人馬泥水に溺れて浮沈する様見ゆ。

人体は家の屋根又は大木の類に取つきて流れ行き、声々に我を引き上げ助け給へと手を合せ泣き叫ぶ、見る間に火石焼砂水中より燃え立ち流れ行く人につき当り、忽ち目前にて溺死する有様、実に仏者の地獄と云ふとも是には増しがたく相見え、見る人皆涙を流し無常を感ず、実に稀代の大変なり。

(13) 七月九日にも土砂は止み候へども煙り立ち上り鳴動す。

(14) 十日、十一日、十二日、十三日も同様。

― 総社町曾我鹿十郎氏所蔵日誌より ―

#### 五、天明の飢饉

天明三年浅間噴火の影響著しく、加ふるに氣候不順のため、穀物稔らず稀なる不作にして米価騰貴し、細民の窮状甚しく、各藩救助に努めたれど到底この惨状を救ふこと能はざりき。

六、天明六年七月十六日利根川筋大洪水沿岸の被害頗る多し。

七、天明七年五月、近来凶作続き加之前年出水のため此頃に至り米

穀別て高値民大に困窮す。

八、安政五年八月暴瀉病全国の死亡凡そ三十万人郡内死者亦なからざりき、当時名主より毎戸へこの予防及び治療法について告示あり。一、樋に湯を入れ芥子の粉を五勺許りも其の中に混じて折々両足の三里の辺まで浸入すべし、一、家内にて焚火をし一、湿気を除くべし、一、一切果物を食す可からず。

#### 九、天保の饑饉

天保三年より不作つづきの所、同七年は未曾有の凶歳にて翌八年春に至り米価暴騰し各地大に飢ゆ。民草根木皮を食し為めに発病して死すもの頗る多し、餓死するもの亦道に横たはる。酉年の飢饉と称するもの是なり、加之比年夏疫癘猖獗を極む。

一〇、文久二戌年九月大旱魃のため米穀熟せず民困窮す。

一一、慶応二年三月十二日、渋川村(現在の市)に大火あり二百戸焼失す。

一二、明治二年五月一日より九日まで強雨引続き、加ふるに七月十三日暴風雨あり米穀稔らず五万石騒動起る。

一三、明治三年庚午利根川其の他諸川出水、田畑家屋の焼失人畜の死傷夥し。

一四、明治十年十月中本郡中部地方に雹降り、明治村・桃井村・古巻

村・清里村(野良犬)の稻收穫殆んど皆無となる。

一五、明治十五年七月、群馬県にコレラ流行、其の勢猖獗を極む。村民は徒らに村の入口にて鐘太鼓(カネウタ)をたたき、或は発砲などして、一々通行人を誰何せり、手拭を石炭酸に浸し頸部に巻くを以て予防策とせり。

一六、明治二十年五月二十三日降雹、山野に青いものなし、雲雀、雀、鴉など死骸おびただし、室田、相馬、金古、清里附近被害激甚を極む。

一七、明治二十二年十二月二十四日午前三時浅間山鳴動、山頂より火を吐くこと約三丈、噴烟甚しく、群馬郡一帯に焼砂を降らす。一時は中々の騒動なりしも午後四時に至り鎮静す。

一八、明治二十三年八月、大洪水。

一九、明治二十五年七月二十二日より同二十五日に至る間、大風雨のため諸川大氾濫、農作物の損害、家屋の流失、道路橋梁等の破壊頗る多し。

二〇、明治二十五年七月二十二日午前十時ごろ、陣場に大竜巻。野良犬の端から池端の裏にかけて起った竜巻は、ゴーツという音と共に、陣場の小出神社めがけて襲いかかった。人々は恐しく思わず木や桑の根にしがみついた。家十一軒を巻き上げ、南下から北下、長岡の方まで民家をなぎ倒した。

二一、明治二十六年旱魃のため田用水路なき天水場、陸稻、各町村中收穫皆無。

二二、明治二十七年五月二十四日、二十六日両日、雷鳴大雨と共に雹を降らす。其の大きさ団子の如く、被害地十二ヶ町村に互り惨害甚し。

二三、明治二十八年一月十九日午後十一時大地震あり、家屋今にも倒



壊せんとする有様にて土蔵其の他亀裂生ず。当地方にて稀なる強震なりといふ。

二四、明治二十八年四月二十六日、高崎通町より出火、折しも東北風烈しく延焼十一ヶ町六百三十三戸に及ぶ。

二五、明治二十八年五月二十四午後四時雷鳴驟雨と共に降雹あり、群馬郡中部八ヶ村最も被害多かりし。

二六、明治二十九年九月七日より十一日まで引続き大風雨のため諸川出水被害頗る多し。近年になき大洪水なりしといふ。

二七、明治三十一年九月六日暴風雨襲来し、諸川出水、被害激甚を極めたり。

二八、明治三十二年三月九日明治村大字下野田大火あり延焼二十一戸。

二九、明治三十五年九月二十八日暴風雨、出水被害千五百町歩に及ぶ。

三〇、明治三十八年風雨時を得ずして、その結果大凶作となる。(平年作の三割六分)

三一、明治三十九年四月三十日大降霜あり、為めに養蚕飼育不能に終れる地方多し。

三二、明治四十三年八月始めより霖雨連日に涉りしに、俄然六日夜より七日に及び暴風雨となり、各河川大氾濫となる。悲惨の状、各地に生じたり。

三三、大正三年六月、旱魃、農家の困難甚し。

三四、大正五年五月九日近年稀なる大霜害あり。被害地二十三ヶ町に及ぶ。

三五、大正五年七月四日午後強雨のため群馬郡内西北部より諸川氾濫、被害町村十九ヶ町村に及ぶ。道路埋没流失八十八ヶ所、堤防決潰八十二ヶ所、橋梁流失二百三ヶ所。

三六、大正七年以来特種の流行性感昌、全国に涉り猖獗を極め、未曾

有の惨害を与へ、一家全滅悲惨の例尠からず。群馬郡内の患者数半ヶ年間に一万五千九百九十八人、死者合計九百六十五人なりき。

三七、大正八年四月二十九日大結霜あり。被害は二十一ヶ町村に涉り、桑園一千百余町歩に及ぶ。

三八、大正八年九月十五日爆風雨あり。被害、郡全域に及び田畑七千余町歩惨たり。

三九、大正九年八月三十日午前二時伊香保温泉地中央より出火、見る見る紅蓮の焰は町の大部を嘗めつくし、殆んど灰燼に帰し午前四時に至り漸く鎮火せり。焼失戸数百二十戸、三百五十棟。

四〇、大正九年九月四日元総社村に大旋風起り、家屋の倒潰三十五、死者一名、負傷七名を生ず。

四一、大正十年七月十二日駒寄村に旋風生ず。倒潰家屋十二、半潰一、負傷三名。

四二、関東大震災、大正十二年九月一日、当日午前十一時五十八分、関東地方に大地震、家屋崩潰五十九万二千二百戸余、罹災人口二百七十四万人余。

四三、昭和三年七月十日雷雨害あり。落雷死者二十名に及ぶ。

四四、昭和十年九月二十五日旋風豪雨甚し。被害町村二十五か村に及ぶ。

四五、昭和二十二年九月九日より十三日まで本格的風雨、十四、十五日、カスリーン台風襲来、流失田一八〇町歩、埋没田二五三町歩。

四六、昭和二十四年八月三十一日、九月一日にかけて県下全域を襲つた「キティ台風」は、最大風速三二・四<sup>ミ</sup>、降水量三〇〇<sup>ミ</sup>を超えた。死者四四名、傷者八九名、家屋全壊三二六戸、半壊一、八三四

戸、水田流失四九四町歩、道路損壊五五五所、橋梁流失三三三九<sup>ミ</sup>に及んだ。

に及んだ。

28 方言と訛語

方言というものは、その地方だけに使われた独特の言葉で、俚語とか、土語とかいうものことで、よそへ行っては意味の通らないことが多い。なまりは、訛と書き、訛言、訛語などといい、標準語にくらべ発音のし方、言い方が違っていて、これもよそでは意味が通りにくく、聞きにくいものである。

大正十一年頃、野良犬付近で使われていた方言、訛語には、次のようなものがあった。主なものを掲げてみる。

狼	おおかめ	見舞	みめー
危い	いぶせー	振舞	おふるめー
いたずらをした	てんごうした	腰掛	でー
井戸	えど	銭	ぜね・せね
おこられる	おつされる	街道	けーどう
軟かい	やつけえー	みみず	めめず
かまきり	かまぎつちよ	のこぎり	のこずり
蚕	けーこ	蛙	げーろ・がんとく
さうす	きびしょ	駅(停車場)	てんしゃば
めかご	めかひ	ほかい	ほけー
太鼓	てーこ	草履	じょーい
敷居	ひきー	さいふ	せーふ
手拭	てねげー	来い	えべ
野良犬	のれーぬ	前原	めーはら
ごぼう	ごんぼー	大根	でーこん
箕 <small>み</small>	けでー	雷(夕立)	ゆうだちさま
御幣	おんべろ	乞食	はちつびらき
		同	どうしんぼー

度々 とうつびょー 同 おもらい

自然 うぬがでー

枯れ株 ねつこー ございます がんす

屹度 じょうや 納豆 おせー

やられた へし 母 おつかー

お前 にし 父 ちゃん

奥座敷 奥座敷 巡査 かんく

きゃはん はばき 風呂へ入る ゆへへーる

29 俗説

昔から迷信・俗説は、どこにでもあった。家庭に不幸があると、加持、祈とう、呪まじないなどが行われた。その一例として六三除けなどがあった。どこか身体に悪いところがあると、一束の線香を道祖神さまにあげて、六三除けをもらった。

次に呪いや俗説のいくつかをあげてみる。

白(うす)の上にあがると背丈が伸びない。

雷の鳴る時裸でいると、臍(へそ)をぬかれる。

雷の鳴る時蚊帳(かや)をつつて入ると落ちない。

雷の鳴る時「遠くの桑原、遠くの桑原」といえば落ちない。

八の日に医者にかかり始めると病が長引く。

げじげじにはわれると、禿(はげ)になる。

ちん毛を三本抜くと、鼻血が止まる。

七十七歳の誕生日(たんじょうび)に作った火吹竹で、近火の時に、

火事に向って吹くと火がむこうへ向う。

仏の夢をみたら線香をあげる。

猫が死ぬと三本辻に埋める。

道祖神子供を叱ると、厄病神（やくびょうがみ）が入る。道祖神焼き

の燃え残りを屋根に上げて置くと、火災を防ぐ。

風邪にかかったら、するめを焼いて送り出す。

御符（ごふ）を呑むと病気が直る。

朝蜘蛛（あさぐも）が下ると、お客が来る。

夜の蜘蛛は泥棒蜘蛛といって、つかまえて殺す。

出生三日目に近所三軒の便所詣（もうで）をすると、丈夫に育つ。

子供が火わるさをする、寝小便をする。

子供が夕方さわぐと、翌日は雨になる。

子供のチンポの先がはれることがある。みみずが小便をかけたからだ

といって、みみずを洗うと直る。

やん目（はやり目）になつたら「め」の字を紙に書いて薬師さまへ納めれば直る。

やん目（はやり目）になつたら「やんめ大安売り」と書いて表にはつ

て置くと直る。

嘘（まぶた）に物もらいができたら、井戸に篩（ふるい）を半分見せ

て、直つたら全部見せるといふ。

耳がかゆいと良いことを聞く。

他人に噂（うわさ）されると、くしゃみが出る。

枇杷（びわ）を植えると、その人が死なないうちは実がならない。

地獄（じごく）の釜（かま）の口あけ（八月一日）から盆（八月十三

日）までに死んだ人には摺鉢（すりばち）をかぶせて埋める。

風邪が長びいて、仲々直らない時は、いり豆を作つて三本辻に捨てて

くる。

キリギリスは釜の口あけ（八月一日）まで逃がせという。

くさ（皮膚病）ができたら、草で患部をなで、馬に食わせると直る。

百日咳（ひやくにちせき）は三夫婦揃（そろ）っている家の飯を食べさ

せると、軽くすむ。

百日咳は子無しの婦人の腰巻をかぶせると、軽くすむ。

赤飯に汁をかけて食うと、お嫁に行くとき雪が降る。お茶をかける

と雨が降る。

暑氣（あつけ）に当たつたら菅笠をかぶつて柄杓（ひしゃく）で水を三

度かけ、笠から水がもれると直る。

火事の前には鼠がいなくなる。

晴天に雨が降ると狐の嫁入りがある。

燕（つばめ）をつかまえると、目がつぶれる。

蝶が家の中に入ると、仏さまがお客に来たという。

土用の丑の日にうなぎを食べると、夏やせしない。

六三除けをすると、病気が早く直る。

附六三除けの法

自分の年を九で割り「残りの数」によつて当り場所を知る。当り場

所は次の通り、

「九が頭、五、七が肩、二、六が腹、八股、一、三の足」但し女の

場合は肩と腹とが反対になる。

爪を火にくべると、氣違ひになる。

猫を殺すとたたりがある。

山藪の着物を着て、舟に乗るとサメに海に引き込まれる。

川の中へ小便をすると、川神さまのたたりがある。

「こうで」を直す秘法。

男の「こうで」には、女の末ッ子、女の「こうで」には、男の末ッ子

に障子の棧（さん）の間や、鍋（なべ）鉄瓶（てつびん）のツルの間

から腕を出し、木綿糸で手首を結えたらうと痛みがなくなるといふ。

「しゃっくり」が出たら、茶椀に箸を十字に渡して湯か水を飲むと直

る。

写真は三人で撮る(とる)ものではない、真中の人が死んでしまうから。

「三隣亡」(さんりんぼう)を祭ると、その家は財産はできるが向う三軒両隣はつぶれてしまう。三隣亡を祭る家に向けて、猿田彦大神を祭れば、自分の家の衰亡(すいぼう)を防ぐことができる。

「辰の日」と「戌の日」の日には田植をするものではない。

辰の日に植えて出来た米は、葬式の「辰頭」用の糊になる。

戌の日に植えて出来た米は、「枕団子」になつて犬に食わせるという。歯が痛む時は、南天の根に針を刺すと直るという。

子供が「こぶ」をこしらえた時、そこをなでて「烏のこぶになれ」というと「こぶ」が引きこむ。

下の抜け歯は便所の屋根へ、上の抜け歯は、台所の下に投げると、丈夫な歯が生える。

丙午(ひのえうま)生れの女を妻に持てば、食い殺されるか火にたたりという。

結婚式は「寅の日」を避けた方がよい。寅は千里行つて、千里帰るといつて嫌う。

子供がからだの一部を打ったり、ころんだりして痛くなつた時「チンバイバイ」といいながら、吹くと痛みが直るといふ。

鍋(なべ)や釜(かま)を「しゃもじ」でたたくと、「おおでき」が来て、身上(しんしょう)を運んで行くといふ。

恵比須講(えびすこう)の日に天婦羅(てんぷら)を揚げて供えようと、身上(しんしょう)が上がるといふ。

恵比須講の日に供えたものを子供に食わせると、縁遠いといふ。

恵比須講の日にお金を供えようと、お金がふえるといふ。

暮の二十九日の餅搗(もちつき)は苦餅(くもち)といつて嫌う。

一夜飾りはするものでない。

半夏(はんげ)の日に田植をすると、半げしか収穫がないといふ。

くしゃみ一ツほめられて、二ツにくまれ三ツほれられて、四ツ夜風を引くといふ。

「しゃっくり」はびっくりさせると止まるといふ。

からだに垢(あか)をつけておくと、雉(きじ)が御年貢(ごねんぐ)取りに来るといふ。

箸(し)をついで物をはさむな、火葬場で骨拾いの時のやり方。

紙(し)つぶて(紙をかんで小さいかたまりにする)を仁王さまに打ちつけると、(己の病のある場所)病気が直るといふ。

七夕(たなばた)の日には、めづら畑に入るな、七夕さまのあいびぎの邪魔(じゃま)になる。

風邪が流行した時に「久松は留守」と書いて、門口に貼(は)つておくと、風邪が入(はい)つて来ない。

寝観音(ねくわん)から枕(まくら)を借りて赤ん坊(あかこ)に使わせると、夜泣(よなき)がとまる。二回(にわい)続けて葬式(そうしき)があると、人形(にんぎょう)を埋(う)めて三度目(さんどめ)とした。

神さまのお札(しるし)を玄関(げんかん)にはつておくと、魔(ま)除(よ)けになる。家の戸口(とぐち)にニンニク(にんにく)をつるして、病(びょう)気が家の中(うち)に入(はい)らないようにする。

ウツギ(うつき)の枝(えだ)を三角(さんかく)にゆわえ、腰(こし)につると、はやり眼(はやりめ)をわすらわれない。風邪(かぜ)をひいたとき、風呂(ふろ)に入(はい)つて背(せ)中に塩(しほ)をすりこんで冷水(れいすい)一パイ(いちぱい)飲むと直(ただ)る。

朝(あ)みた夢(ゆめ)は運(う)がよい。

夢(ゆめ)はさかさま(さかさま)すべて反対(はんたい)である。

富士山(ふじさん)の夢(ゆめ)は運(う)がよい。

高い所(たかいところ)から落ち(おち)る夢(ゆめ)はわるい。

水の夢はすべてわるい。

蛇の夢はよいことがある。

魚をとつた夢はわるい。

蜂の夢は運がよい。

死んだ人に夢であうと運がよい。

歯が抜けた夢は親戚（しんせき）に不幸がある。

下駄の歯がぬけた夢はわるい。

櫛（くし）の夢はわるい。

天に昇る夢をみると大成功をする。

着物を裁つとき、吉日を選んで始める。自分の生れ年の干支の日に裁

巳ごとをすると、身を切るというのでさけた。

己の日、申の日、さんりんぼうの日にも着物は裁たない。

仏滅の日にはよい着物は仕立てない。

一反の布を三ツに切つてはいけけない。

着物を縫うとき横布はいけけない。

横つぎは、当ててはいけけない。

着物は必ず袖から縫いはじめなくてははいけけない。

出かける時、針を使つてはいけけない。出針といつて良くないことがお

きる。

仕立あがらない着物に手を通し着てはいけけない。

仕つけ糸をつけたまま、着物を着てはいけけない。

着物のえりをつけないうちに着てはいけけない、死んだ人が着るものだ

から。

新しい着物は夜着始めてはいけけない。

着物は左前に着てはいけけない。死んだ人を左前に着せるから。

単衣を重ね着の上に着たり、着物を裏返しに着てはいけけない。

洗たく物は、北向きに干してはいけけない。

たて膳、左膳はいけけない。

汁椀を左に置いてはいけけない。

箸をごはんに立ててはいけけない。

左手で箸を持つたり、箸から箸へ食べものを渡してはいけけない。

迷い箸、おかずからおかずへと箸をうつしてはいけけない。

茶わん、釜、鍋のふちをたたいてはいけけない。

食べ物をまたいではいけけない。

食べ物を粗末にすると目がつぶれる。

食べ物は音をたてて食べてはいけけない。

熱い湯をぬるくするとき水に湯を入れてはいけけない。

春はカマド、夏は井戸をいじつてはいけけない。

カマドの口を北に向けてはいけけない。

鬼門の方向に入口を作らない。

屋敷神は陽なたはいけけない。

新しい履物を畳の上からはいて降りてはいけけない。

家の中から傘をさして外へ出てはいけけない。

家の中では帽子、手拭をかぶらない。

家の中で口笛を吹いてはいけけない、夜は盗ッ人のさきぶれとなる。

家の中に動物を上げてはいけけない、馬が床の間にあがると不幸がある。

夜爪を切つてはいけけない。

友引の日に葬式をするとまた人が死ぬ。

生木に釘を打つてはいけけない。

コタツは申の日に出してはいけけない、申の日に出すと、やけどをする。

初物を食べると、七十五日生きのびる。

冬至に南瓜を食べると、中気にならない。

噂(うわさ)をすれば、主が来る。

箒の先に手拭をかぶせて立てると、お客が早く帰る。

大晦日の晩に早く寝ると、顔に皺(しわ)が出る。

鳥が近くで啼くと、人が死ぬ。

犬の遠吠(ほえ)は不吉。

足袋(たび)をはいて寝ると、親の死に目にあえない。

夜爪を切ると親の死に目にあえない。

初雷の時に節分の豆を食べると、雷にあたらぬ。

妊娠中火事を見ると赤あざのある子供が生れる。

妊娠のいわた帯は五ヶ月目の犬の日にする、お産が軽い。

妊婦は夫の禪(ふんどし)を腹帯に巻くとお産が軽い。

うそをいうと閻魔(えんま)さまに舌を抜かれる。

### 30 年中行事

#### 正月

#### 元旦

〔朝湯〕朝、零時ごろに風呂をたきつけ、隣近所、親戚など組内へ呼びに行き、二時ごろには皆入った。きんぴら、いなり、酒などを出した。三ガ日の間、組内の家が順番に朝湯をたてた。七日にした家もある。三ガ日は、夕湯もたてて子どもたちが集って入った(大久保)

〔若水〕元日の朝、井戸から最初に汲み上げられた水を若水という。

新しい手桶にしめ縄をはり、年男が水を汲み、年神様に供える物などをつくるのに使った。若水をびんなどに入れ、かぎ竹につるしておく

と一年中くさらないといい、葉を飲む時などに使った。(大久保)  
〔年男〕年神様に灯明をあげたり、供え物を供えたりする役で、普通長男が小学校二、三年になると年男とされ、お供え、拝み方などを父

親から教わりながらした。長男のいない場合は、主人がなった。陣場では主人がするのが一般で、主人にさしつかえがある場合だけ長男がこれに当った。

〔初詣〕除夜の鐘が鳴り終るのを待つて氏神様や恵方(古くは正月の神の来臨する方向、歳徳神のいる方向、えほう)に当る神社仏閣に参った。一番参りともいった。戦争が終つてから一時衰えたが、最近また盛んになった。一五歳を先頭に水沢山に登るところもある。初日の出を遥拝して来る。

〔年始〕近所、隣組、友人宅等、皆あいさつをして廻った。また、地区中が一カ所に集つて新年のあいさつや、万歳三唱などをした。神社やお寺へも御年始に行つた。戦前までは、神社でも「□□神社御年頭」などと大声で家々を廻つた。

〔食事〕三ガ日の食事は、それぞれ家例があつて家々によつて異なつていた。朝そば、昼自由、夜御飯が多い様である。五日の間家例を続ける家もあつた。三ガ日の中にとろろ飯を一回食べる。とろろ(山芋)を食べると中気にならない「お正月はいいもんだ、お米のごはんにと(魚)せて(添えて)」などと歌つた様に、白米の御飯に塩鮭がつくのは、正月ぐらいであつた。

〔お供え等〕大みそから三ガ日を通じて、朝夕、神だな、仏だんに灯明をあげ、その時の食事をほんの少しずつ、器に盛つて供える。また家の内外のお飾りのある所へは、門松にいたるまで供えた。皆、年男の役目である。

#### 二日

〔仕事始め〕朝早く起きて半日分ぐらいの仕事をして、それから遊ぶだ。しまだまぶしを百個ぐらい折つた。しまだまぶしを使わなくなつてから、仕事始めもだんだん少なくなつた。

〔初買い〕初売りなので、年始用のお茶や紙などを買いに行った。景品がついたり、安売りがあるので早くから出かけた。

〔初夢〕寝る時に子どもたちは、良い初夢を見るといので、紙で宝船を折って枕の下に入れた。高崎の清水きよみずの観音様にもいった。

### 三日

〔大師参り等〕三日には特別な行事はないが、青柳の竜蔵寺や青梨子の淡島神社などへお参りに出かけた。

### 四日

〔おたなさがし〕三ガ日のお供え物を年男が下げ、雑煮にして家中揃って食べた。お供え餅も一しよにさげた。

〔寺の年始日〕それぞれの壇家をまわり、お札、しゃもじ（食べものに困らぬ様に）、しゃくし、つけ木、半紙などをくばった。

〔嫁よめ婿〕の年始日三ガ日の間年始客の接待など、嫁の労をねぎらい、休養させるため、夫婦そろって嫁の実家へ御年始にゆく。婿は当日帰り、嫁は「ふたとことし」をとらない様に六日の日までには帰る様にお客をした。

### 五日

〔せりつみ〕「一夜飾りは良くない」といって、七草に使うせり、なずな、大根等を用意した。

### 六日

〔山始め〕（六日山、若木迎え）三段下りに切ったおんべろ（御幣）をつくり、餅、おさげ、ごまめ等を持って十二様や木に供え「ぜひ木を切らせて下さい」と拜んで切った。ぼくに限って他人の山の木を切つてもとがめられなかった。山のない人は立て通しの桑を切つてぼくにした。これを六日山、若木迎え、ぼく切りなどという。

〔年とり〕（六日どし、お松の歳とり）ふたとことし（二所蔵）はとつ

てはいけないといわれ、実家へお客に行った嫁も帰って来て、家族皆そろって年とりをする。六日からは平日になるので、朝食には麦を入れ、昼は六日年だからといって、あらためて白米の御飯にした。夜は、厄払いという門付けが来た。

〔六日づめ〕この日、おたなに供えたせりを水にひたし、その水をつめにつけて切った。

### 七日

〔七草がゆ〕早朝、神だなの前で、年男が供えたせりと他の野菜を切り、白がゆに入れて塩味をつけて食べた。せりなどを切る時、唱える言葉は、地区や家などによって少しずつ違っている。

七草なずな唐土の鳥と日本の鳥が渡らぬ先になにたくせりたたく。

七草なずな唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ内にせりたたくせりたたく。

七草なずな唐土の鳥が渡らぬ先に七草なずなのせりたたくせりたたく。

七草なずな唐土の鳥が日本の国へ渡らぬ先にストントン（戸室和三郎）

五日間おたなに供えたものをさげ、せり、なずな等と共に、オジヤ（雑炊）にして食べた。

〔初卯〕正月になって初めての卯の日に、歳徳神が天に上るといい、赤飯をふかして神仏に供えた。

九日

〔前橋の初市〕多くの人が遊びに行く。達磨や熊手などの縁起ものを買ってくる。また鮒なまも売っていて、これをかけぶなといい、物をかけで買える（信用がある）ようと縁起をかついだ。

十日

〔金びら様の日〕高崎までお参りに行った。朝早くからわらじばきで、一五キに余る道を歩いて往復した。銭を借りて来る、倍にして返す。

十一日

〔炊たて〕おたなの松におんべろをつけて畑の真中に立て、餅やおかしらつき（魚）、おさぎ（米）などを持って「今年もぜひ豊作にして下さい」と拜んで、六尺（約二丈）ぐらいずつ、三さくのさく切りをした。

〔倉開き〕正月はこの日まで倉を開かず、この日初めて開き、そうじの上にのり、かつおぶしをかけてそなえた。

〔小正月の餅つき〕

十三日

〔飾りかえ〕大正月の内飾りを取り、小正月の飾りつけをする。六日に切ったほくに、米の粉でつくった蕪玉をさし、にわとこや、こめごめの木を二〇程ぐらいに切つてはなをかき、共に飾つた。座敷か床の間には大きなほくを立てまゆだまをさし、特に「十六」といって、まゆ型をした大ぶりのまゆ玉を一六個つけた。また、まゆ、糸、まり、打出の小づち等の形をした赤白黄色などの花菓子（五銭に一〇個ぐらい、昭和初期）をさげた。床の間には衣笠様の掛軸をさげた。まゆ玉の側でさわぐと糸口が切れると止めた（小倉）。まゆ玉の十六は、蚕の足（腹足）が一六本あるところから、それにちなんだものだろう。この夜、丸め歳といって、めんばに御飯を山盛りし、箸をたくさん立てて歳徳神に供えた（陣場）、にわとこを水引きでしばつて鴨居かみいにかけた。にわとこは、一年に一間（六尺）以上ものびるので（一軒以上にかけて）勢よく家運がのびるように願つた。

〔はらみ箸〕（おたきあげ）にわとこや柳の木ではらみばし（はらみつ

とばし）をつくつて床の間にあげた。普通一二（二四本）つくつた。

あとで水田の水口へ持つていつてさした。

十四日

〔小正月〕十一日か十二日に餅をつき、十三日に飾りかえをすませ、十四日から十六日までを小正月といつた。小正月は、家例についてあまりやかましくいわないようである。

〔道祖神焼き〕十四日の早朝、ドンドン焼きをした。祭りの組織は親方（小屋頭）は、数え年一五歳の男子で、あとは年齢順に二番頭、三番頭（普通、カシラをとつて二番、三番と呼んだ）となり、下は小学校へ入つた年ごろから男子のみ仲間に入ることができた。子どもの階級の呼び名は、地区によつて多少異なつた。親頭、中頭、小頭、芋頭、豆頭（下野田）小屋頭、中頭、前頭、新兵の親方、古い新兵、新しい新兵（陣場）等である。

七草ごろから道祖神子どもが集まつて、小屋頭のもとで組織的な行動をとりながら、遊んだり、道祖神用のたきぎ集めをしたりする。十一日ころから人別もらいに歩く。これは各戸を人数割で一人何銭（昭和五年ころは一人五銭）と決めてもらう。そのほかは道祖神祭りのところで詳記した通りである。

十五日

〔成人の日〕この日は、国民の祝日として満二〇歳になった人々が、法律的にも社会人として成人の仲間入りをする祝福された日であることから祭の中に含めたのである。

〔小豆がゆ〕〔十五日がゆ〕朝、小豆がゆを炊く。ニワトコかノデンボウの木で作つたケエカキ棒（粥掻棒）で小豆がゆをかき回して食べた。小豆がゆは吹いて食べると「田植の時に風が吹いて苗が倒れる」といつて熱くても吹かずに食べた。ケエカキ棒はニワトコなどを二本、四〇



ぢぐらいの長さに切り、花をかき(削って)水引でゆわえ、蕪玉をは

さんだ。かゆをかき回すめは、田植の代かきにちなんだものといわれ  
苗代をする時に水口(みなくち)に立てる。(注・上野田、漆原では、  
ケエカキ棒に、蕪玉をはさむかわりに榛名山嵐除けのお札(ふだ)を  
はさんだ。)キネやテング(手鋏)などをノデンボウの木で作って供え  
たあとは子供のオモチヤにした。夜になってボクにさした蕪玉ははず  
した。これを蕪かきといった。(注・大部分は十六日に蕪かきをやって  
きた。)

## 十六日

〔千匹がゆ〕サンダワラをあみ、灰をのせ、豆をツトツコに入れて三  
本辻(三差路)に持って行った。牛馬を飼っている家がやった。

〔蕪ねり〕朝、蕪ねりといって蕪玉を雑煮にして神々に供えた。

## 二十日

〔二十日正月〕桑なわ、いつらなわ、背負いなわ、つるべなわなどを  
作り、下大黒(柱)にしぼり、ケエカキ棒を供えた。

〔えびす講〕(おいべすこう)朝、座敷に恵比寿大黒を神棚から下して  
かざり、ソロバン、大福帳現金などを供え(一升まずに入れて供える  
家もあった。)お膳をつくり、お雑煮を供えた。このお供え物は、子供  
が食べるとなかなか嫁に行けない。嫁ももらえないといわれ結婚した  
ものが食べた。晩はそばを供え老人が食べた。天ぶらを揚げて供える  
家もあった。

## 二十八日

〔不動尊縁日〕この不動縁日が終ると土地の人々は「不動のぼんばら  
い」といって正月も終り、春仕事の準備を始める。

## 二月

〔節分〕夕方豆なげをする。年男が「福は内、鬼は外」と叫びながら、  
神棚から順に家中をまき、納屋、いなりさままでまく。年の数だけ豆  
を食べるとその年の間、厄やからのがれるといって食べた。年の数だけ  
井戸に入れるとハヤリ目にかからない(大久保、陣場)。この時の豆を  
鬼の豆といって、雷の鳴った時食べると、雷がおちないといって、し  
まって置いた家もある。節分の豆をいりながら正月さまに供えたイワ  
シを二つに切り、柀(ひいらぎ)などの二た股の枝先にさして焼いた。  
「よろず作物を食う虫の口を焼く」といってツバをかけながら焼いた。  
焼いたイワシはトボロ(戸口)の上にさした。これをヤツカガシとい  
う。

## 八日

〔おこと〕(事始め)竹ざおの先にメケエ(目籠、目ざる)をつり下げ  
庭に立てる。メケエ一杯金がたまるといった。天にオコトババアとい  
う眼のたくさんある魔物がいて、メケエを見て、自分より眼の多い者  
がいると驚いて金を入れるのだという。又、晩は、オコトババアにお  
こられるといて夜なべ(夜の仕事、よなべしごと)は早じまいにし  
た。

〔初午〕(はつうま)節分から数えて始めての午の日に祭るが、丙午(ひ  
のえうま)の場合は「火に立つ」といって二の午に祭った。

## 二十五日

〔天神待ち〕二十五日が天神さまの祭だが、実際には前日の晩に祭っ  
た。子供達が集って五目飯(ませ御飯)をつくって会食し、天神様の  
かけじ(掛字、主として文字を書いた掛物)を掛け、字が上手になる  
ように祈願をした。二十五日はみんな近く天神さまへお参りに  
行った。「奉納天満宮」の紙のぼりを上げた。

三日

〔雛祭〕（女の節句、上巳、桃の節句）雛人形を飾り、菱餅を供える。海苔巻、稲荷ずし、煮しめなどを作って供えたり食べたりする。初節句には、嫁の実家、親せき、仲人などから雛人形が贈られる。お返しに菱餅やあん餅が配られる。新嫁はサンマの開きと菱餅を持って実家へお客に行く。

八日

〔八日節句〕この日まで雛人形は飾られて、すしを作って供えてからしまう家が多い。

二十三日（二十二日） 彼岸の中日

〔春彼岸〕彼岸は春分の日を中日といい、その三日前が彼岸の入り口、三日後が走り口である。入り口には、小豆飯、しょう油飯、赤飯などをつくり、仏壇に供えたり馳走になった。「中日ポタモチ、走りだんご」といつて中日にはポタモチ、走り口にはダンゴをつくる。そのダンゴを持って彼岸中お客に来ていた仏さまの霊を送って墓参りに行くのである。

ダンゴはあんこ汁の中に落して家族が食べそれを「ススリネジ」などと呼んでいる。秋の彼岸から春の彼岸まで夜の長い間、夜なべ仕事をするのが一般のしきりで「暑い寒いも彼岸まで」というように春の彼岸が済めば農家では「こたつ」も片づけ、春の農作業が始めるのである。

〔社日〕春分及び秋分に最も近いあと先の戌（つちのえ）の日を社日といって土の神を祭り春は成育を祈り、秋は収穫のお礼をする（感謝する）。村では地鎮さまのお休みの日といって畑仕事など土を動かすことをしなかった。「彼岸と社日はついてまわる」といった言葉ももつと

ものである。

〔庚申祭〕庚申待、庚申会、御申待（おさるまち）などともいつて節分の日から数え、初めての庚申（かのえさる）の日に祭る。地区の世話人が大豆やトウモロコシなどを各戸回って集め、マメイリモチやトツカンマメに加工し、地区の庚申様の所で、お参りに来た子供達に分けてやった。子供達は、何カ所も庚申さまを回って豆もらいをした。

四月

〔春祭〕鎮守さまの春祭は神社によって日が違うけれども四月十五日が野良犬八幡様のお祭りであった。

八日

〔灌仏会〕この日はお釈迦さまの生れた日で、どの寺院でもお釈迦さまの像に甘茶をかけて降誕を祝う法会が行われる。「釈迦が生れた時、九竜が天上から香水をふりそそぎ、洗い浴びせた」という伝説によつて、この日、花御堂に安置した仏像に甘茶をかけることが行われるようになったので灌仏会という。これをお花祭といい、又は仏生会ともいつている。

十二日

〔十二さま祭〕十二さまは、山の神さままで昔は村中、かなり広範囲にこの祭は行われ、山仕事の安全をおいのりした。十二さまの石祠や石塔は、大山祇神を祀ったもので、現在では祭行事もすたれ、個人で祭る人もある。

〔衣笠さまのお祭〕四月十五日、小出神社と同じ日でオコモチをついてお祭りした。

五月

一日

〔八十八夜〕節分(豆まきの日)から数えて八十八日目まで苗代の適期といわれた。昼が長くなり、暖かさも加わって大分しのぎよい季節となつてあたりの景色も緑の色を増してくる。オコモチ(お蚕餅)をつき、蚕の手伝いに來てくれる家に配つた。(漆原)

五日

〔男の節句〕(端午の節句)鯉のぼりを立てたり、雛人形を飾り、赤飯をたいて子供の健やかな成長を祈りまたお祝いをした。初節句には武者絵を書いたのぼりが嫁の実家から贈られた。軒端にはよもぎや菖蒲などをさした。風呂にも入れて菖蒲湯しょうぼ湯といい、この湯に入れば邪氣を払うのだという。新しい夫婦は夕方の干物を持って嫁の実家へお客に行つた。

〔フナ餅〕蚕の三眠を舟休みといい、その時に餅をついた。嫁はお客に行つた。忙しい養蚕の中休みともいえる。

〔アゲ祝い〕春蚕の上簇が終ると餅をつき、近くの親戚せきや蚕の手伝をしてくれた人に配りその労をねぎらい、蚕の無事終了を祝うのである。

六月

一日

〔氷餅〕正月のお供え餅を水に漬け、出して氷らせて干したものを油で揚げて食べる。神仏にも御飯を供える時、上に乗せて供える。

七月

二日頃

〔半夏〕(はんげ)半夏生(はんげしょう)ともいって夏至から十一日

目に当る日。「半夏には田植をするな、半夏さまにおこられる」といった。大体、梅雨が明けて田植も終りに近い。昔は小作をあげたり、田畑の売買の時も半夏を区切りとし、新田の耕作者が交代した。

十四―十六日

〔農休み〕中に祇園をはさんで三日間遊び日があつた。農休みまでに畑仕事に区切りをつけられるように働いた。この日、うでまんじゅうをつくつた。十四日は農休みという名だけで夕方早く仕事を終る程度だった。

旧八月十三日

〔生盆〕(いきぼん、いきみたま)旧暦七月八日から十三日までの間に児女が生存している父母、尊長者に祝いの物を贈り、又御馳走してあげた行事であるが此の地方では、イキボンブルマイともいって新しい夫婦が新しい粉を持って、嫁の実家へ行つた。後には、うどんと酒を持って行くようになった。

〔八丁じめ〕青竹にオンベロをつけて村境に立てた。村境にしめなわをはつた。小倉では七月二十八日にコモノヤスミ(あわ、ひえ、きびなどを小物といった)と一緒に八丁じめをやり仕事を休んだ。

〔陽気正月〕長くひでりが続いたあとに良い雨が降つた時又、陽気がよくて、仕事が順調に進んだ時、陽気正月といつて仕事を休んだ。

〔土用の丑の日〕曆で立秋の十八日前を夏の土用といい、その頃の丑の日を土用の丑の日という。この日、スイガズラ、ネンジングサ、ドクダミ、ヨモギ、モモの葉などを取つて湯に入れて昼湯につかつた。これを丑湯という。又、うなぎを食べるならわしが、ドジョウでも食べれば上等でテンプラなどで一杯やる人もある。

一日

〔カマノクチアキ〕八月一日には地獄の釜かまの口があき、仏さまが盆に出かけて来る日だといわれている。うでまんじゅうをつくり、半日休みにし、お盆の用意に墓の掃除をした。つかまえたせみなど生き物に「盆にポタモチくれるからとつと飛んで行け」といつて逃がしてやった。

七日

〔七夕〕（たなばた）五節句の一つで星を祭る年中行事で六日の晩にまつる。その日の午後、新竹に短冊や五色の網かざり、折り鶴などをつるして庭に立てる。短冊には天の川、和歌、俳句、願いごと、家族の名前などを書いた。又、反物や着物をかけて、それに供えものをして機織りが上手になるよう願った。七日にはうでまんじゅうをつくる。子供達は七回水浴びをする。又、ねむの葉で顔を洗うと一年中眠くないなどともいった。七夕様がメズラ畑へ降りるのだから、メズラ畑には入るなどいい、朝一〇時前は瓜畑にも入ってはいけないといった。

〔七晩焼き〕七日の夕方から十三日の迎え盆まで、毎夕麦がら（特に大麦がらは良い音がするので喜ばれた）を束ねてカイドで燃やした。燃え終わろうとするとき、その家の墓のある方向に倒した。子供達は寄つて来て近所の家々のみ燃やしたりした。

十三日

北下では、盆行事として山下さんげの提灯畑に大高張をあげ、浅間山（水沢山）の頂上に登った人達と呼応する行事が行われていた。

八月十三日—十六日

〔お盆〕孟蘭盆うらぼん 七月十五日に種々の食物を祖先の霊に供えて餓鬼に施し祖先の冥福を祈り、その苦しみを教うことである。村では、普通

八月十三日（太陽暦）の迎え盆から十六日の送り盆までをお盆とし、初秋蚕の都合などで十日延ばしにお盆行事をやることもあった。盆棚たなは十三日につくる。座敷に茅かやの縄と新竹とを使って盆棚をつくり、ここに仏壇から位牌いはいを移す。盆迎えは、最後のナナバンヤキ（迎え火）をたいてその火で線香をたき、お墓へ行く。お墓まいりを済ませ、帰りは提灯に火を入れ、その火を盆棚たなに用意されたロウソクに移す。夕方お寺にもお盆さま迎えに行き、寺の盆棚たなから火をもらつて帰り、家の盆棚たなに移す。子供たちは「盆だ盆だ提灯だ、あしたの朝はぼたもちだ」と歌いながら提灯をかざして遊んだものである。この日には浅間山（せんげんやま）に登った。七日、たなばたの日から門にシメ縄（オシメ）を張り、水を浴びて体を清め竹ぼらを吹き鳴らしながら登るのである。

十四、十五日には朝ポタモチ、昼ウドン、夜御飯をつくり、それぞれ毎日お盆さまにお供えする。親類、縁者などお互いにお棚たなまいりに往来した。

十六日は送り盆、お団子をつくり、なすでつくった馬（ナスを胴体として畑の葉をさして脚とし、トウモロコシの毛でたてがみと尾をつくり里芋の葉に乗せる。）を持ってお盆さまを送って行く。門口（かどぐち）でナナバンヤキと同じ様にわらで送り火をたき提灯ちようちんや線香に火を移してお墓に行く。銘々の墓石に、線香、水などを供えて帰る。

なお、新仏あらぼたけができて四十九日たない家ではお盆行事をやらない。又、盆棚たなの下はメン仏（無縁仏）といつて、身寄りのない人や犬、猫の霊が来るといつてそこに供えたものは犬や雞などに食べさせた。

九月

一日

〔八朔の節句〕新しい嫁は鱈の干物と葉生姜（はしょうが）を持って実家へお客に行く。八朔（はつまつ）というのは陰曆八月朔日のことで、お節句とは天皇（特に皇后、皇太子、將軍などにもつかった。）が、その式の日（に召し上がる食べ物ということだ）で、干物や葉生姜も何かそれにかかわりがあるのではあるまいか。

二十三日（二十二日）

〔秋の彼岸〕ちょうど晩秋蚕の上簇期（さく）に当るので忙しい農家では春彼岸のようにやれないから略式で通すことが多い。走り口には団子をつくり、花、線香、水などを持って彼岸（ひがん）さまを送って墓参りをする。下野田には、彼岸中、走り口以外の日に墓参りをする家もある。文字の意味からすると「お彼岸さまを送る」ことは少し変な所もあるが、この辺一般にそういつているのでそれに従って書いた。春分、秋分の日を中日として前後一週間を彼岸会（ひがんかい）といってこの七日の間に仏事供養を営んだことに始まったのだそうである。

〔十五夜〕旧曆（陰曆）八月十五日、満月を祭る。窓ぎわに芒（すすき）を飾り、里芋、柿、栗、大根、甘藷等のほか、うでまんじゅう、お手丸などを作って供えた。子供達（こども）が竿（さお）の先に釘など取り付け、そつと忍びよって供え物をそれ突きさして下げたこともあった。良く下げると翌年運が向いてくるともいわれた。

十月

十月は各字にある神社の秋祭が行われる。「おくんち」といつて九日を指すようであるが、十九日、二十九日も「おくんち」といつて、この日、神社の秋祭が行われるところも多い。

七日

〔薬師さま〕この日の晩に道ばたに燈籠をかかげて薬師さまにお参りに行った。薬師さまは無病息災を祈る仏さまである。

十九日 八幡神社秋祭り

〔秋祭〕（鎮守さま）鎮守の秋祭はこの日やる所が多い。どの家も赤飯をたいて此の日をお祝いする。神社によって多少の違いはあるが、前日に年番とか祭世話人、氏子総代を初め、一般氏子の人達も集まって、境内を掃き清め、幟を立てしめなわを張り、あるいは幕を張り、海の幸、山の幸を供えて明日を待つところ、宵祭（よひまつり）をするところと様々である。祭の当日には、一般氏子が参拝することはもとより、氏子総代、区長、区長代理、議会人、敬神婦人会員等が集まって、神官は祝詞（のりと）を奏上し、皆が玉串奉奠（たまぐしほうだん）をして、御神酒をいただき五穀豊穰（ごこくほうじょう）を感謝し、氏子の無事安穩を祈るのである。

十一月

〔とうかんや〕旧曆十月十日をいう。子供達は稲わらを小手縄（こてづな）でぐるぐる巻きにし、みこ（穂先の部分）の所を輪に作った藁鉄砲（わらてつぱう）を持って「トウカンヤいいもんだ、朝そばきりに、昼だんご、夜餅（ようもち）食っちゃ腹でえこ」といたいながら地面をたたき、地域を回った。歌の文句のように朝はそば、夜は餅をそれぞれ作った。二股大根が大根二本を藁で結えて築山の所に供えた所もある。そばきり、だんご、餅など昔は御馳走（ごちそう）だった。

十日夜（ちうかんや） いいもんだ

朝ソバ切りに 昼団子

夜う餅くつて 腹デイク

と唄いながら、ドシン、ドシンとわら鉄砲で地面をたたきながら、

子どもたちは、庭や道端で遊んだものである。十日夜は、旧暦の十月十日のことで、太陽暦の今では十一月になる。大小麦の蒔付の丁度盛んなところで、夕方になると、子どもたちは、家の庭から往還に出る。その当時は、道路といつても、夕方になると自転車さえ余り通ならなかった。わら鉄砲をたたくには、道路の中央の小石の余り敷いてない処を選んで、ドタン、バタンとたたいたものである。一人、二人と集つて、一〇人以上の子どもが揃つてたたいて歩つた。

「ねずみつぶさぎ」麦まき作業が終つた祝を「ねずみつぶさぎ」といつたり、「穴つぶさぎ」ともいつた。餅をついて手伝つてくれた人に出したり家中の人が食べて仕事が一段落したことを喜び、感謝の意味を表わすものといえる。又、麦蒔が終つた事を「ねずみつぶさぎになつた」ともいつた。

## 二十日

〔恵比寿講〕正月の恵比寿講と同じである。昔は旧暦十月二十日にやつた所もある。

〔あきあげ〕取り込み、仕着け（収穫と種蒔）が済むと嫁は新米を持つて実家へお客に行った。

## 十二月

### 一日

〔屋敷祭〕（いなり祭）この日、各戸で行なう屋敷祭は、屋敷内に祀る稲荷さまが多いようである。竹と藁とで作つたお仮屋を新しく作り換えて晩に赤飯とお頭つき（いわし）を供え、この屋敷内が平穩無事でありますように祈願をかけるのである。お供え物をした後、戻る時に後を振り向くなといわれてきた。また、夜ふかしをしてはいけなともいわれた。供え物に手がつかないでその儘になつていた時は、十五日に再度お祭をする。家によつては十五日と大掃除の晩とつごう三回

行なう家もある。

〔おこと〕（ことじまい）十二月八日にやる。二月八日のこと初めと同じ「おこと」である。竿の先にメケエ（目籠、目ざる）をさかさ吊して庭に立てる。

〔あぶら餅〕夫婦餅ともいう。一夫婦の家では一臼、二夫婦の家では二臼の餅をついた。男女にかかわらず「やもめ」の家はつかなかつた。〔大掃除〕（すすはき、すすはらい）。二十日前後で暦の上からよいといわれる日、天気の良い日を選んで行なう。養蚕などのためにあげておいた畳を敷き込んだり、正月のための建具類（冬季の生活に相応しい）に入れ替えたりする。この夜、お正月の飾りに使う縄やこじつこめを作つた。

〔せちびぎ〕十二月に入ると正月用の米や粉について用意する。これをせちびぎという。

〔お歳暮〕せいぼともいつて無事に一年が過せたことを祝い、あるいは一年間いろいろお世話になつたことに感謝を表わす意味で贈り物を持つて挨拶に出向く。一般には、後者の意味が強く、嫁の実家や仲人の家、世話になつた人に届け物をする。嫁の実家へは鮭を持つて行く場合が多かつた。仲人のところへは子供が生れて誕生餅を届けるまではお歳暮を持つていくものといわれた。子供の生まれた家に男の子なら破魔弓、女の子ならば羽子板を届けた。

〔冬至〕十二月二十二、三日のころが冬至の日に当り「とうじとうなす」といつて、この日には、とうなす（南瓜）を食べた。中風にかかれないというのである。ゆず湯をたてる家もあつた。暦の上から二十四節気の一つで北半球では一年の中で日照時間が一番短く、夜が一番長い日である。この時分に咲くので、この日にちなんでつけた「冬至梅」というのがある。

〔餅つき〕普通、二十八日頃までに正月の餅をつく。二十九日は苦餅といつてつくのを嫌った。

〔飾りつけ〕二十八日から三十日までには正月のお飾りを飾る。内飾りは神棚とは別に正月棚を作り、あくる年の悪方に向ける。大掃除の晩に作ったお飾りと松をつける。棚の前には、昆布、いか、みかん、柿、栗、ふき、南天、手ぬぐい、お金などをつるした。

また、神棚、仏壇、床の間、台所、土間など松飾りをつけ、白、風呂桶、若水桶、かき竹にまでしめなわを張ってお飾りをした。「一夜飾りは悪い」といってお晦日まで延ばすことを嫌った。外飾りは門松を初め、庭、倉、物置、屋敷稲荷、築山（つぼ山）、井戸、家畜小屋、堆肥舎（こやな）まで松飾りを立てた。お墓の石塔一つ一つから、道祖神、庚申様、薬師様、二十二夜様などにもこじつこめを供えた。

〔大みそ日〕（大晦日）暦の上からいえば一年の最終日であるがこの日から正月の行事が始まる。食事の家例もたいてい大晦日からきめられている。お供えも正月と同様にする。なすの木や豆がらを燃やして食事を作った。

「借金をナス」「マメに暮す」と縁起をかついたのである。この夜は早く寝ると白髪になるといい、夜ふかしをした。夜、歳払い（厄払い）が来て良い年を迎える様にと厄を払って行った。「みそかさば」といって、この日朝食には「そばきり」を作って食べた来年へ続いてよい年であるようにと庶民のささやかな願であつたらう。

31 〔付〕清里尋常高等小学校の経緯

明治六年学制頒布に基き、同七年小学校を設立し、青梨子正法寺を以て校舎に充つ。

明治十四年五月正法寺焼失の為前原製糸場に移転す。当時学級編制

一年を前後期に分け、八年後期修了を以て小学校卒業とす。

同十八年四月金古小学校に合併す。

同二十一年四月金古小学校より分離し、青梨子井草藤太郎宅を校舎に充つ。

同二十四年四月関根泰三郎宅に移転す。

同三十一年十一月校舎新築成り之に移る。

同四十二年十一月校舎増築成る。

高等小学校は明治二十三年金古小学校より分離し、大字池端天明寺に仮校舎を置き桃井村との組合学校とす。三十六年四月組合を解き高等科は尋常小学校に併置し、清里尋常高等小学校と改称す。

尋常高等併置以後の学校長左の如し

職名	位勳氏名	就職年月日	転任休退職年月日
訓導兼校長	小島武直	明治三十六年四月一日	明治三十九年三月三十一日
同	八木豊作	同 三十九年三月三十一日	同 四十一年三月三十一日
同	佐藤貞蔵	同 四十一年三月三十一日	大正七年三月三十一日
同	井野門彌	大正七年三月三十一日	同 十二年二月十七日
同	大沢半作	同 十二年三月三十一日	現在職

あとがき

各種資料、古文書、当時の新聞記事、古老の話などから、野良犬を中心としたいろいろなことを抜き書きしてみた。記憶違い、誤りなどもあるかも知れないが、それらは追て補足したい。この記録によって古き野良犬を知り、郷土愛の一助ともなれば幸いである。

昭和五十八年七月二十四日

有坂淳識

# 第十章 人の一生

## 一、産育儀礼

### (一) 子授け

子授け祈願 産泰さまや沖の大黒さまに行つた。産泰さまでは底のぬけたヒシヤクで安産になつた。また日光(東照宮のそば)に行つた。そこで石を買つてきてタンスに置いておくと生まれた。

伊香保などの湯治場に一人で送つた。冷えているからできないと言つた。これできない人はない。(巢烏)

特になし(植野・池端)

明神様に行く。伊香保の温泉に行く。下引間の福守様におまいりする。そこで男の道具を借りてきて、子供ができると新しいものを桐の木で作つて返した。(元総社四区)

高崎の小祝神社に行つた。また、田中の福守様から男のかっこうをしたものをもらつてきて、寝床の下においた。(稻荷新田)

産泰様や、寺のすぐ裏の富士浅間神社に行つた。(小相木)

二十二夜様が女の神様なのでお産のおねがいをした。(前箱田)

お産 社日におつたむしろに、こうじの種を入れて、お産の床の下にしくと、子宝がふえる。生まれてすぐまくりをのませると邪気を払うと言う。(総社新田)

### (二) 妊娠から出産まで

妊娠を最初に話した人 ダンナさん、次に親。(巢烏)

ダンナさん。(植野・池端)

ダンナ(石倉町上石倉)(小相木)

ダンナに話して、次に親に話をした。(元総社四区)

ダンナさんへ。産婆さんが言つてくれる。(稻荷新田)

ダンナに。「子供ができたげだよ」と言つた。(前箱田)

妊婦の呼び方 ミモチとかハラランダと言つた。「ハラランダそうだ」と

いう。「ニンブ」は戦後。(巢烏)

ミモチとか、ミオモになつたと言つた。(大屋敷)

ミオモとか子ができたと言つた。私生児は「ハラランダ」と言つた。(植野)

ニンブとかニンシンしたと言つた。(池端)

ミモチ。(元総社四区)

ハラミ、ミモチ。(石倉町上石倉)

ハラミ。(小相木)

ミモチ、ハラランダ。(稻荷新田)

ハラミ。ハラランダと言う。(前箱田)

安産祈願の神社、寺、まじない 産泰さまにひしゃくをあげた。また、六地藏さまのローソクをもらつてきて、つけると、消えるまでに



生まれた。そこで葬式があるともらつてきておいた。(巢鳥)

なし(大屋敷)

下大屋の産泰さまに母が行つてくれた。吉岡村小倉の産泰さまに太々神樂があり、寄付をして安産祈願してもらつた。

重労働するほうが安産であり、動くのがよいと言つた。(植野)

小倉の産泰さまに行つた。おがんでもらい、岩田帯(腹帯)をもらつてきた。「働いて動くのが安産」と言い、ミモチになつてもよく使われた。(池端)

地藏さま。産泰にゆく。山名の八幡様に行く人があつた。ニワ(十二夜)様のローソクをもらつてきてたてる。小さいほど早く生まれるので良いという。(元総社四区)

神明宮や総社神社に行つた。キューリのツルを半干しにして、せんじてのませると「スバコバナレ」が良いという。軽くできるという。

(破水の時に)(石倉町上石倉)

二十二夜様(ニヤサマ)。お腹に赤ちゃんがいる家では特別におさめた。二月二十二日の夜はニヤサマ念仏をしている。二十二夜まちという。女の神様という。(稻荷新田)

浅間神社にくる。(小相木)

二十二夜様のもやしたローソクをいただき、陣痛の時に火をつけてたてておがむと、焼え終えるまでに生まれると言う。(前箱田)

妊娠中の禁忌、諺

葬式や火事に会つと、手があつたところに、

葬式は黒アザ、火事は赤アザができると言つた。そこで、外に行く時には鏡を持つて行つた。にぎやかな所に行くところでも生まれるので行くくなくとも言つた。(巢鳥)

火事や葬式に会つとアザができると言い、鏡をふところにいれた。

(大屋敷)

死に顔や火事を見てはいけなと言ひ、懐中鏡をもつてゐる。葬式では青アザ、火事では赤アザと言つた。(植野)

火事で赤アザ、葬式で青アザができると言ひ、妊娠すればいつも鏡をいれておいた。重い物は二〜三カ月もたず、高い所にも行かなかつた。(池端)

一年の内の一部屋で二人生まれると勝ち負けがつくと言ひ、生む部屋は変えた。また、部屋により格の差があり、床の間のほうが座敷より良かった。(大屋敷)

フリマンガはよくない。重たいものをもつこと、高いところに手をあげるのは良くない。葬式は黒アザ、火事は赤アザができるのでふところに鏡をいれた。(元総社四区)

火事、葬式は見えてはいけない。(石倉町上石倉)

重いものもたない。(乳)線が切れるので高いところに手をあげない。葬式は黒アザ、火事は赤アザができるのでふところに鏡をいれておく。子供ができたあと二十一日間は神まいりをしない。(稻荷新田)

特にそのような考え方もなくその日まで仕事をしていた。そのほうが安産に生まれると言つた。高いところに物をあげないようにとは言つたが蚕を飼つていたので手をのばさざるをえなかつた。(小相木)

重いものに気をつける。火事は赤アザ、葬式は黒アザができるのでふところに鏡をいれておくといひと言つた。あまりできなかつた。「出産は一生の遊山」と言つた。(前箱田)

胎児の性別の見分け方 強く腹をけるのは男、階段をあがるのに左足からあがると男、右足からは女である。腹の外につき出ているのは男、双子はまん中にミゾができるという。(巢鳥)

男の子はおなかが重かつた。(大屋敷)

男の場合は顔がきつく、やせた。女の場合はやつれず、かわらない。

おなかがつノになり、顔がやせるのが男と言った。(池端)

お腹がとんがり、ツノのようになり、顔がきつそうになると男。

(植野)

(元総社四区)

妊婦がやさしい顔だと女、きつい顔は男という。(石倉町上石倉)

お腹がつっぱっていると男。出産予定の十日前に写真をとると顔つきが違うのがわかった。きつくなり、いやげな顔になると男。それで男女がわかった。

予定日よりおけると男、予定日で生まれると女。(稻荷新田)

腹の中で動きが良く、元気なのが男。顔のやつれ具合が、やせてくと男。腹がとがつてくると男、丸くなっていると女。(小相木)

顔がきつくなると男の子。(前箱田)

腹帯 五カ月のはじめの戌の日にした。犬はお産が軽いので。(巢鳥)

五カ月の戌の日にお産婆さんにしめてもらった。(大屋敷)

五カ月の戌の日にお産婆さんが書いた。サラシは自分で用意した。

「寿」と端に産婆さんが書いてくれた。赤飯を作った。(植野)

戌の日。(五カ月目)お産婆さんがしめてくれた。サラシは自分で用意した。(池端)

五カ月の戌の日にサラシをまいた。姑さんが買って来た。

(元総社四区)

五カ月の戌の日にサラシをまいた。(石倉町上石倉)

五カ月の戌の日にサラシを産婆さんがまいた。サラシは家の人を買った。(稻荷新田)

五カ月の戌の日にお産婆さんがサラシをまいた。サラシは町で買ってきたもの。(小相木町)

五カ月の戌の日にサラシをまいた。サラシは実家の親が買って

れた。産婆に行くとお産婆がまいてくれた。自分でもまいた。おなかをつるしあげ、仕事に支障のないようにした。今はゆるくまいてる。

(前箱田)

臨月の妊婦への配慮 仕事は生まれるまで同じにした。働いていると軽くできると言われた。重いものは持たせなかった。(巢鳥)

生まれるまで仕事をした。特に軽いこともなかった。(大屋敷)

一人目は一カ月前に実家に帰った「アカウミは一生の遊山」と言い、他に気がねなく休めることはなかった。二人目からはすぐ前まで仕事をした。(植野)

生まれるその日まで仕事をした。稲刈りやサクを切るのは腹がじゃまであった。(池端)

生まれるまで仕事をした。そのほうが安産になると言った。稲刈りは大変であった。(元総社四区)

ふつうの仕事は当日までした。動いているほうが安産であると言った。(石倉町上石倉)

その日まで仕事をした。動いているほうがうまく生まれる、安産であると言い、痛くなるまで仕事をした。生まれる時が、大そうじ中で「下」のところはフトンを敷いて生んだことがある。(稻荷新田)

その日まで仕事をした。(小相木)

生まれる日まで仕事をした。「良く動くほうがお産が軽い」と言う。(前箱田)

(前箱田)

出産前後の妊婦の食事 青いものは青い便が出る、油は目ヤニが出る、甘いものは乳が切れる、ホウレンソンは血がさわぐと言つて食べられなかった。カツプシとミソを混ぜたものにお粥を一杯たべた。カンプイウやフの煮たものがおかずであった。薬は実母散をのんだだけである。産後一週間で麦の飯になり三杯食べた。モチ米は乳が出る。

ボタモチ一コでも出がらう。(巢鳥)

カツブシにお粥が産後三日続いた。あとは普通であった。三日では体が大変であったが仕事がいそがしい時にはあまり寝ていられず仕事を始めた。実家の米を食べると肥立ちがいいと言った。実家からしよって持って来てくれた。三升は多いほう。(大屋敷)

産前は同じ。産後は、梅干しはオリモノが強くなる、トロロイモはいけないと言われた。ミソづけとカツブシミソとお粥で一週間すごした。のち煮たての御飯になった。一週間すぎると乳が出るので栄養のあるものになった。(植野)

産前は食事は同じである。好ききらいが出た。産後はお粥とカツブシミソであった。ホーレンソウは血をさわがす、天プラは目が悪くなる、トナスはオデキができる、と言ひ、毒であると言った。鮭の缶詰、鰯の缶詰をお産見舞としてもらい食べた。一週間は床にいたが、体は大変で、内仕事よりはじめた。自分の体の都合で仕事をはじめた。

(池端)

産前は食事は同じ。子供の歯が丈夫になるようにニボシを食べた。産後は二十一日間安静がきまりであるが農家でいそがしく十日くらいの家もあった。食事はからいものがだめでオカユであった。オカユははじめだけであとは御飯になった。おかずはケズリブシ、ミソ、カンヅメ。フがおみまいにきた。(元総社四区)

食事は同じ。産後油ものはひかえた。(石倉町上石倉)

産後は二十一日間は床についていた。梅干しとおかゆで一週間ですごした。からいものは刺激をうけるので良くなかった。(稻荷新田)

産後一週間はおかゆと梅干し。刺激するものはなかった。(小相木)

前後とも食事は同じ。後は少しやわらかくした。(前箱田)

産産時に用意するもの オシメ・着物は前に準備しておいた。産

がわかってから用意をした。オシメは布団のボロの皮をとり厚く縫っておいた。厚く縫ったので、洗うとすぐにかわかず、ぬれてもそのまま干した。産まれるのが自分でわかったので、自分で湯をわかし、トリアゲバアサン(産婆)を呼び、髪を洗った(二十一日間洗えないため)。しばらく食べられない卵・魚を食べた。(巢鳥)

布団に油紙か蚕座敷を紙いた。着物とオシメを用意しておいた。

(大屋敷)

布団に油紙を敷いた。布団は薄いもので、あとで布団ごとすてた。

(植野)

畳をあげ、ワラを敷き、蚕座紙を二〜三枚敷き、そこに床をとった。のちに畳の上になった。(池端)

湯をいれたタライ。布団皮の古いものを洗って敷き、下に油紙をおいた。上に布団をしいた。別にオシメなどを用意した。(元総社四区)

油紙を敷き、上に布団をしいた。オシメを用意した。(石倉町上石倉)

オシメ(布団皮やゆかたの古いもの)。サラシは配給でなくて、オコシが一枚配給された。(稻荷新田)

布団の上に油紙をしいた。むしろの上に油紙をしいたこともある。

あとはもしてしまふ。(小相木)

畳をあげて、シビ(ワラ)をしき、ゴザをひいた。お産がすんで畳の上になった。(前箱田)

### (三) 出 産

産産をするところ ナンド(納戸)。北西の暗い部屋。ランプが明かりで、手燭でトイレに行った。部屋は出入口だけがあった。(巢鳥)

普段はオクリにいて、その時はザシキ(座敷)に出た。(大屋敷)

床の間の座敷で産んだ。神棚の前で産んではいけないと言う。(植野)

ナンド(納戸)

北西の「ヘヤ」、ナンドとも言った。自分の寝起きする部屋。(元総社四区)

一番奥の部屋。「ヘヤ」。(稻荷新田)

北西の部屋。「ヘヤ」という名の部屋。夫婦の部屋。明治以前では下が竹のすのこになっていたとの話。(小相木)

実家では床の間で生んだ。婚家では北西の「ヘヤ」で生んだ。

(前箱田)

昭和二十一年ころ、庭のクス屋根の物置で生んだ例があった。座産であった。(石倉町上石倉)

お産の方法 フラプトン(布団)の厚き三十cmくらいのものを敷き、ポロキレの上に敷いた。ポロキレにはノチノモノ(後産)をつつんですてた。お産の軽い人は生まれた子をトイレに落としした人もいた。すぐあげて洗った。子ができそうになるとトイレに行きたくなる。一番はじめの子は四ツン這いで、ハチマキをして、やぐらにつかまった。のちに寝て産んだ。手をつかんでくれた人がいた。ポロを敷き、ポロをあてた。

高枕をおいた。今でも高枕をおくと、「お産するみてえだ」と言う。

(巢鳥)

枕に手ぬぐいを通してつかみ、寝て産んだ。(大屋敷)

すわつて産んだのは話にはある。枕の下にてぬぐいをかけ、ひっぱつて産んだ。布団をもつた。(植野)

お産婆さんはあおむけで産ませた。お産婆さんの手をつかんだ。昔はうつぶせになり一人で産んだ。手助けはなく、産まれると近所のオバアさんと呼んで、湯をわかつてもらった。自分でヘソのオも切った。

(池端)

寝産。生まれる前はおつかかっていた。(石倉町上石倉)

フトンを四つにたたみ、その四すみにつかまった。(お産で力がはいるので)昭和に入ってからにはなかった。ワラをしいて、上に薄いものをしいてその上で生んだ。生んだあともそのままそこに寝ていて、食事もそこでした。(稻荷新田)

寝産が多かった。(小相木)

フトンを積んで生んだ例があった。(前箱田)

子を産む時期 あるとき、お釈迦様が、動物たちをあつめて、子を産む時期を決めていた。

人間の番になったとき、お釈迦様は、

「四季にしろ」

といわれた。

ところが、そのときお釈迦様のところへ行つたものが、

「好きにしろ」

と聞きまちがってきた。

それで、人間は、いつでも自由に子どもを産めるようになったのだという。(総社町総社)

お産に立ち会う人 トリアゲバアサンと二人だけ。(巢鳥)

実家の母とサンバさん(初産の時)。二、三人目はサンバさんのみ。

(大屋敷)

一人目はオサンバさんと実家の母。二人目からはオサンバさんと姑。

(植野)

オサンバサンだけ。(池端)

オサンバさん、おしゅうとさん。(元総社四区)

助産婦。(石倉町上石倉)

オサンバさん、シユート、兄弟がいる。(稻荷新田)

サンバさんが立ち合った。明治く大正のころはトリアゲバアサンという経験者が立ち合った。(小相木)

オサンバさん。(前箱田)

お産を取り扱う人 トリアゲバアサンと言ひ、近所の年を取った人がやった。オサンバさん(何人かいた)になったのは昭和になつてからで、戦後医者に行くようになった。(巢島)

オサンバさんと言ひ、新前橋・前橋にいた。(大屋敷)

植野にはオサンバさんがいた。(各村にいたわけではない)前にはトリアゲバアサンがいた。村には二人おり、大正末までであった。(植野) オサンバさんと言ひ。明治のころは近所の人や、母がやった。(池端) サンバさん。明神様の西の「金井さん」。近所のオバアさんでする人もいた。(交代でしたことがある)(元総社四区)

サンバさん。新前橋への通りの八木さんに頼んだ。(石倉町上石倉)

サンバさん。(稻荷新田・小相木)

トリアゲバアサンという器用な人。(前箱田)

お産 とりあげばあさんにたのんで、生ませてもらった。(総社大渡) お産時の夫の役割とお産のいい伝え 男は何もしない。男が初産の時にそばにいと、あとの子の時もそばにいと産まれなくなるので、家にはいてはいけないと言った。昔、石臼をもって家の回りを回った人がいたと言ひ。障子の目が見えるうちは生まれないといい、お産は「片足棺桶」と言ひた。(巢島)

サンバさんと呼びに行くことくらい。(大屋敷)

お湯をわかすくらい。(植野)

昼間は仕事にいつているので、留守。産まれてからお湯をわかすこと。(池端)

お湯をわかす。石臼をしょって家のまわりをまわった話がある。そ

ばにいてるものではないと言ひ。(元総社四区)

湯をわかす。(石倉町上石倉)

夫は家ウチにいない。畑で仕事をしていた。仕事がいそがしくていられない。(稻荷新田)

夫はそばにいてるものではないと言ひ。仕事は産婆さんに連絡すること、ウブ湯をわかすこと、あとしまつで墓地にすてることなど。

(小相木)

ノチザンを墓地にいけること。湯をわかすこと、産婆をよびに行くこと。(前箱田)

擬婉 お産のとき、女衆がおおごとするのが気の毒だということで、旦那さんが、石臼を背中にしょつて、うちのまわりをまわった。

女衆と同じおおごとをするということであるという。

(西箱田)

ウブタテメシ オボタテゴハンとかウブタテゴハンという。作り、神棚にそなえ、みんなで食べた。家の人とサンバさんが食べて行った。

(巢島)

ウブタテゴハンと言ひ、神棚にそなえ、オサンバさんに食べてもらった。(大屋敷)

オボタテゴハンと言ひ。子供の枕元にお膳によそつておいた。ほかに、ソロバンや本をおいた。ゴハンはさげて、みんなで食べた。

(植野)

ウブタテゴハンと言ひ、サンバさんと子が食べた。特にあげるところはない。(池端)

ウブタテメシといい、神だなにあげた。(元総社四区)

ごはんを食べた。(石倉町上石倉)

なし。(稻荷新田)

ウブタテのゴハンという。お産に立ち合った女衆が食べた。まずお産婆さんにごちそうをし、神ダナ・仏だんにあげた。(小相木)

なし(前箱田)

後産の処理 ノチザンと言ひ、墓にいけた。昔はトボグチにうめた。トボをまたいだところで、人にふまれるほうがいいと言った。(巢鳥)

ノチザンは墓にいけた。(大屋敷)

墓地にすてた。トボグチにうめるのは話に聞いたことがある。(植野)

自分の墓の隅にいけた。(池端)

ニザンは墓にいけた。(元総社四区)

ニザンはふまないように庭のスミにうめた。「人にふまれるとよくない」と言う。(石倉町上石倉)

産婆さんが片づけた。ツポ山にうめた。ツポ山には御飯をあげたり大事にした。(稻荷新田)

ニザンは墓地にすてる。(小相木)

墓にすてた。(前箱田)

産湯 サンバさんがいれてくれ、方位をみて捨てた。(巢鳥)

一週間はサンバさんがいれてくれた。(大屋敷)

オサンバさんが一週間来てくれた。その後は自分でいれた。(池端)

シュートさんがいれてくれた。のちタメにすてた。(元総社四区)

助産婦、産婆さんがいれてくれた。のちタイヒバ(コヤナ)にすてた。(石倉町上石倉)

産婆さんが一週間はいれてくれる。湯はタメヤ(コヤナ)タイヒ舎にすてた。(稻荷新田)

産婆さんがいれてくれる。トリアゲバアサンのこともある。お七夜までいれてくれる。(小相木)

産婆さんがお七夜までいれてくれる。湯はのちタメにすてた。

臍へらの緒 七〜八cm残し、四ツに麻でしばってからハサミで切った。もいだものは桐の箱にいれて、嫁に行く時に持たせた。薬になるとの話があった。子供のうちに死んだ時は一緒にいけた。(巢鳥)

紙にくるみ、紅白の水引きでしばっておいた。(大屋敷)

オサンバさんが切り、しまっておいた。いつまでもしまっておくわけではない。(植野)

オサンバさんが麻でしばってから切った。とれたものはしばって、しまっておいた。(池端)

小刀?で切り、しまっておいた。(元総社四区)

産婆さんが切り片づけてくれた。(石倉町上石倉)

一節おいてハサミで切り、紙につつみ、とっておいた。葬式に一緒にいれる家があった。(稻荷新田)

一週間でもげる。墓地に入れる家もあり、とっておく家もあった。(小相木)

ハサミで切って麻のひもでしばっておく。もげたらしまっておく。(前箱田)

新生児の呼び名 アカンボウ。双生児(双子)は、昔は、先に生まれたのは後に入ったので、弟(妹)と言った。今は生まれた順。(巢鳥)

アカッコ。双生児はフタゴ。先が弟で、後が兄であった。(大屋敷)

アカンボウ。フタゴ(双生児)と呼んだ。(植野)

アカンボウ、アカチャン。双生児はフタゴ。(池端)

アカッコ。(元総社四区)

アカンボウ。(石倉町上石倉)

アカッコ、アカンボウという。(稻荷新田)

アカッコ、アカンボウという。(小相木)

アカッコ、アカンボウという。(小相木)

アカッコ、アカンボウという。(小相木)

アカッコ、アカンボウという。(小相木)

アカッコ (前箱田)

異常分娩 例はなし。(巢鳥)

臍の緒をまいた例があり、ケサハチなどの名前になった。ケサッコと言った。サカサッコというのもあった。(池端)

ヘソの緒をまいた子をケサカケゴという。名前に「ケサ」をつける。

足から出たこはサカサッコと言う。(元総社四区)

なし (石倉町上石倉)

サカサッコとは言った。(稻荷新田)

サカサッコと言った。「ケサ」の名のついた子はヘソの緒をまいて出た子。(前箱田)

サカサッコ。ケサカケゴにはケサの名をつけるものだと言う。

(前箱田)

初めての授乳・乳不足の時の対策 マクリと言う黒いものを、杯に入れてすわせた。また、砂糖水をくれた。

四日目くらいまでは乳の目があかず、はじめはすわれても痛い。初産の時にダンナさんがすってくれたが出にくかった。

出はじめると、風呂あがりに噴水になるほど出た。出るのに出さないと病になる。

乳不足には餅米、鯉がいいといった。それで鯉コクを食べたり、産後に良いと言い、ナマズを食べた。また、途中で子をなくした人のところにモライチチに行った。

乳がない時は、米をシラジですって白くしたものに砂糖をまぜて煮たものを、フキンでこしてのませた。

ヤギの乳をのませたこともある。(ヤギの乳は消毒しなくてもよいので) (巢鳥)

子供はすぐに吸いつかないので、三〜四日たってからマッサージを

した。

また、乳が出るように、鯉、鳥肉などを食べた。

「隣りの家の亀子タワシを知られないようにして借りてきて、熱くしておつけると良い」と言ったが、効果はなかった。チバレモノ(腫れ)に効くとも言った。(植野)

はじめは砂糖水を子供にくれ、一日くらいたってからくれた。二日目にマッサージをした。

乳の少ない人は、麺類や、お餅を食べると出ると言った。

乳が足らない人は、砂糖と重湯をまぜたものや、ミジンコの粉をかけたものをくれた。(池端)

乳房をよくもんだ。鯉は乳の出が良くなると言った。(元総社四区)

乳が出すぎたので、飲んで「帰れ」と言ったら次の子の時に乳があがってしまった。(石倉町上石倉)

産婆さんがあたためた布でもんでくれた。鯉、餅を食べると乳の出がいいと言う。(稻荷新田)

ナマズ、鯉を食べると乳の出がいい。(小相木)

鯉を食べると乳が良く出るといい、実家で食べた。乳房をもんだ。二番目からは実家よりカツブシと米がくる。それを食べると肥立ちがいいという。

カツブシミソで御飯を食べた。(前箱田)

産婦の食事 同じ。(巢鳥・大屋敷・植野・池端)

同じ。(元総社四区・石倉町上石倉・稻荷新田・小相木・前箱田)

食事は一年中麦飯で、麦七分の米三分。麦飯だけ食べる「バッカリメシ」と言った。昭和初期のころ。(小相木)

出産後の禁忌や諺 女なら二十一日間、男なら三十五日間は外に出られず、終るとウブヤアケと言ひ、ウブスナ参りをした。町内の神社

に行った。その後神参りができた。

また、生まれて一週間目にお茶呼びをした。豆をホーロクでいり、黒砂糖をまぜて黒豆にしてお茶うけにした。(マメに育つように)お産後は腰巻を裏にほした。ふだんもほさず、カラツとしなかった。テントウさまにあてなかった。(巢鳥)

男なら、二十一日間は体がけがれているので神参りができないと言われた。(大屋敷)

二十一日間はオボ(生)アキまで神まいりできなかった。血がのぼるので二十一日間は体を洗えず、洗たくは日陰ぼしにした。二十一日目がお宮参りで、赤飯をたいた。(植野)

二十一日目がオボアキで(男女とも同じ)床あげをした。神参りや台所に行くこと、髪を洗うことはできなかった。

お産の腰巻は、人に見えず直射日光のあたらない裏にほした。(池端)川を渡っては悪い。針仕事をすると目が見えなくなるといふ。

(元総社四区)

普通と同じ。(石倉町上石倉)

二十一日間は、外に出ない、橋を渡らない。(稻荷新田)

お勝手にはすぐ入れない。二十一日(三七夜)たつと入れる。それで仕事もふつうになる。ウブヤアケと言う。(小相木)

オボヤキ前は橋を渡れず、神様にも行けない。頭も洗えない。「チブクを着ている」と言う。男三十一日、女二十一日。

七夜あけて洗たくをするようになる。(前箱田)

避妊や中絶の方法 避妊はなし。子が七人でも作った。中絶はできず、すると罰金であった。(巢鳥)

姑さんから木の根を使った中絶法を聞いたことがある。(大屋敷)なし。(植野・池端)

なし。(元総社四区・石倉町上石倉・稻荷新田)

前の時代のことで、生まれてから声が出ないうちに産婆のひぎの下にかうと、それですんだ。(子が多いと) (小相木)

なし、黒鯛を食べると流産すると言ったが流産はしなかった。名前で、「スエ、トメ」の名をつけることがあった。(前箱田)

スグリ 子供(あかんぼう)を間引くこと。今から四代前のころに、スグりをしたという。障子紙をへがしてぬらしてあかんぼうの口(顔)にはったとか。ひぎを口におしつけて、すぐたという。

むかしは、鬼絵といつて、スグりにつかう紙を売っていた。鬼を書いてある絵を買ってすぐたという。

なお、すぐた子の墓は墓石をたてなかった。(青梨子)

流産・死産の場合 流産は墓にいけただけ。死産や産み月の流産は手足があるので届けた。(巢鳥)

例なし。(植野・池端)

自分の家の墓地にうめた。百日たつと一人前という。(石倉町上石倉) 5カ月以上はおがんでいけた。一人前とした。それ以前は産婆さんをたのんで処置した。(稻荷新田)

寺にほうむった。例は少ない。「嬰兒」としてほうむった。(小相木) ミカン箱で墓地にいけた。(前箱田)

子供は三年に一人の割合でできた。多いと十二人も生んだ例もあるが、育つのは半数くらいであった。(稻荷新田)

ハンケツ 昔は、生まれた子供の半分くらいしか育たなかった。これをハンケツ(半欠)という。(元総社第二)

流れ灌頂 お産をしたあとでその人が死ぬと、川に赤い布をおき、川の水で白くなると生まれた子が丈夫になると言った。(群馬町の生家近くでの例) 巢鳥ではなかった。(巢鳥)



難産で死んだ時に作った。川に赤い布を四本の棒でつけ、竹のひしゃくで水をかけた。色がおちると良いという。大正のはじめころにあり、水をかけた記憶がある。(植野)

例はなかった。(池端)

棺におひな様をいれた。川に赤いキレがおいてあり、ヒシヤクがおいであつた。(元総社四区)

なし。(石倉町上石倉)

赤いキレをおき、ヒシヤクで水をかけた。子がお腹にあるままいけるので、子供が楽になると言つた。(七十年くらい前の高尾の例)

(稲荷新田)

二人死んだので、人形を一請にいかした。「二度あることは三度ある」と言つた。(小相木)

なし。(前箱田・石倉町上石倉)

産毛 百日目ごろにすつた。チン毛はのこした。産毛は、ツボ山の人の入らない、踏まないところにおさめた。それで、ツボ山にはめつたに入らない。チン毛は鼻血がでたときにぬくと血が止まると言つた。

(巢鳥)

一回すつた。姑さんが、チン毛をのこしてすつた。毛はツボ山にすつた。チン毛は神様がいざというときにひっぱってくれるので、ころがつてもケガをしないと云う。(大屋敷)

オサンバさんがすり、その後真綿で作つたぼうしをかぶせた。(植野)

オサンバさんがすつたが、人により違う。まわりを切つただけで、上の毛は丸くのこした。(池端)

すつて坪山にいかした。産毛ははみんなすつた。(元総社四区)

そらない人もいた。そつた人ではチン毛をのこした人がいる。盆のクボをのこした。ムシ切りという。(石倉町上石倉)

チン毛をのこしてすつた。鼻血が出た時にぬくと止まつた。頭の横のこめかみにも毛をのこした。すつた毛は坪山の木の根にすてた。

(稲荷新田)

切つたツメをもすとバカになるといふ。(稲荷新田)

少したつと、チン毛を少しのこしてすつた。(小相木)

チン毛をのこしてすつた。鼻血が出たときにひっぱつた。すつた毛は坪山の松の下にうめた。

あまつた乳を「あずかつてくれ」と言つて松の木の下にすてた。次の時にまた良く出るように「松の木にあずける」といつた。母がしてくれた。(引間の例) (前箱田)

新生児の命名

家でつける。町内の古い人、サンバさんがつける、昔の人の名をとる。などがある。家でつける時は、三つ神様にあげ、

子供にひかせた。その名前は神棚の下にはり出した。(巢鳥)

おじいさんか、名まえをつけてくれる人がいて作つた。名前は大神宮様、床の間にはり出した。(大屋敷)

家の人やシユートさんが作つた。長生きした人の名をもらつた。決まつた名前は床柱や長者柱(家の中央の柱)に目の高さにはつた。4

寸くらいの中の紙に「寿名〇〇〇」と書いた。(植野)

おじいさんが作り、神棚の下や床柱にはつた。(池端)

稲荷に名を書いた紙を三本おき、子供たちが引いた。名前は紙に書き床の間、神棚にさげた。(元総社四区)

時期でつけるると春子・夏子、はじめての子でハツ、五番目の子だが、もう子供を止めたかつたのでトメとつけた。しかし、六番目ができたのでその子にはロクとつけた。

名前の字格や、縁起のいい字の松・竹・梅・鶴・亀をつけたりした。寅年で寅雄にした例がある。また、寅年で名をトラとつけたら同じ

名が多かったのでヒデヤになおした例がある。(稲荷新田)

年寄りや神社でつけてもらった。

先祖の名の一字をもらうことがある。ひいおじいさんの人の名をまたつけることもある。

決まった名はお七夜に、神棚の下やかもの下にはった。(小相木)

初めで初江・末っ子でスエとつけた。

近所でない名前を三つくらい書いて屋敷稲荷にあげ、上の子にひかせた。決まった名前は座敷の柱にはった。

先祖の名を一字もらうことがあった。(前箱田)

命名の一つのやり方で、名前をいくつか書いたものを、名が見えないようにして、家族がひいて決めることがあった。(元総社大渡)

**お七夜・見舞い・初外出** 初外出は三日目。ヘツツイの墨を、まゆ毛のまん中のやや上に「一」にぬり、橋は渡らないようにして三軒のセツチンまいりをする。オサンバさんか姑がつれてゆく。セツチンでは粗々のないようにオサゴをなげる。

初外出の後に届け出になるが、一年でも早く働けるように、四月初旬生まれを三月生まれで届けたことがある。

結婚しても子供ができない時は、できるまで籍の入れないことがあった。

**お七夜は七日目。** しないこともあった。近い親戚やオサンバさんがきた。「お茶よび」といい、豆イリをした。子供の名ひろめをした。

出産見舞いは「フ」がほとんどの、鯛の缶詰、イナゴのツクダニ、ノリの缶が来たが嫁ゴの口に入らないこともあった。(巢鳥)

一週間目に豆イリをしてオヒチャをした。三日目のこともあった。赤飯を作った。お祝いには木綿の一丈のキレがきた。

マメイリの豆は便所にしんぜた。(大屋敷)

七日目に「お茶よび」をした。豆をいり、近所の人や親戚を呼んだ。布の一丈くらいのキレをもってきた。

三日目くらいに近所の便所三軒をゆく「セツチン参り」があった。おばあさんがだいてゆき、豆を黒い砂糖をつけていったものを、紙につつんでおいた。(植野)

七日目に「お茶よび」をした。近所の人に来てもらった。マメイリの豆は大豆をいり、砂糖をつけたもの。

その日に、近所三軒のセツチン参りがあった。姑さんがつれてゆき、便所をあげ、マメイリの豆をまいた。(池端)

赤飯をたいた。隣の便所につれてゆき、米をまいた。(元総社四区) 赤飯をたいた。三日目の「セツチンまいり」で、自分の家の外便所にだいてゆき、オサゴをまいた。

近所からはお金が五銭く十銭きた。品物が不足のところで、品物はあまりなかった。(稲荷新田)

赤飯にお頭付でおいわいをした。神社とお墓に行った。

両どりの三軒のセツチンまいりをした。塩と米をそこにおいてくる。橋を渡つてはいけないという。

見舞いには産着や麻の葉の柄の反物(一丈二尺六寸)などで、主に反物ももらった。(小相木)

床あげをし赤飯をたいた。(前箱田)

**便所まいり** 赤ん坊をつれて、近所の家三軒をまわるが、橋がある所では橋をわたつてはいけなかった。(総社新田)

子供が生まれて、七日目にだいて近所三軒の便所をまわった。男の子はひたいに墨、女の子は紅をつけた。

オサゴを持っていき、まいた。(元総社大渡)

**おばやき** 生後二十一日目。この日、あかんぼうをおばあさんがつ

れて、神参りをする。

はじめ屋敷神様におまいりし、そのあと、鎮守様におまいりする。

(下石倉)

産婦の床上げと就労 二十一日目まで床上げはさせなかった。その

間髪はとこさず、麻でゆわえておいた。(巢鳥)

一人目の時は、一カ月は実家にいた。二十一日たつとふつうの労働になった。それまでは、お勝手にあまり入らないように、水に手をいれないようにといった。

床はとつてあり、くたびれると休んだ。(植野)

一週間くらい。(石倉町上石倉)

二十一日より普通になる。(稲荷新田・小相木)

七日あと。(前箱田)

#### (四) 子供の成長と祝

出産祝 出産祝はウブヤがあけた7日すぎにきた。ウブ着は生まれてから縫うので三週間すぎてから来た。麻の葉の文様で、男は青、女は赤色であった。(巢鳥)

二十一日目にゴシンメイ様に行った。(大屋敷)

二十一日目に鎮守さまに行った。実家よりウブ着とネンネコが届いた。(植野)

祝いにキレが一丈届いた。一丈は赤ちゃんの着物になるくらいの長さ。

また、お宮参りの着物のヒトカサネが届く。赤飯をお返しにした。

二十一日目には姑さんと神社に行った。(池端)

産着や、子供が着物を作れるほどのキレが届いた。のち金になった。

(石倉町上石倉)

七日たつと名をつけ、二十一日たつとお宮参りをして、近所に赤飯を配った。

二十一日目にはお茶よびをして豆をいってくばった。(マメになるように)

産着は一番はじめの子だけ実家より届いた。あとの子は前の子の古着を着た。(稲荷新田)

出産祝はみんな物で、キレが一丈くらい届いた。着物にした。またお産見舞いとして縄でしばつてあるフが二つ届いた。

キレは麻の葉の文様のもので、男は青・黄で、女は赤いものであった。

オボヤキになるとお宮参りをした。おばあさんがつれて行った。寒ければなかった。(前箱田)

オボヤキ 子供が生まれて二十一日目に神社におまいりにいった。おばあさんがだき、赤飯をたいて、神様にあげた。(元総社大渡)

生後三日目 豆をいって、砂糖に塩をつけたものを、子供にくばった。今日は生まれて三日目だなどといってもらいにいった。

(元総社大渡)

産婦の里帰り 子供が生まれてから二カ月目までには行く。「三月ガカリするな」と言った。初めての子だと一カ月目までに行った。

同じような言い方に「七日ゲエリするな」というのがあり、旅行に行っても七日で帰るものではなく、六日か八日にする。

里帰りは、ダンナか姑さんが送ってゆき、一週間か十日はいた。お産は「一生の遊山」といい、ゆつくりできるのはこの時だけで、あとは仕事に追われた。五十日もとどまることがあり、半月前に行き、

一カ月はとどまる。(巢鳥)

二十一日目すぎに行き、ふつうよりは多目にとまった。姑が送って

くれた。(植野)

三月がかりにならないうちに親が送ってくれた。三日くらいはいした。

一人目の時は二〜三カ月は実家にいた。「一生の遊山」と言った。(池端)

一人目の時は「三月かかりは良くない」と言つてその前に婚家に帰つた。産後二十一日たてば帰つた。

二人目からは、ダンナに送られて一週間から十日は泊まった。(元総社四区)

一人目は「三月がかりは良くない」と言つた。二十一日は安静にしろというので、一カ月くらいで戻つた。

二人目からの里がえりは特に決まっていなない。(石倉町上石倉)

一人目は、予定日の四〜五日前に帰り、ゆつくりしてこいと言うが、二十一日目には帰つた。

二人目からは二十一日がすぎてから実家に親が送ってくれた。(稲荷新田)

一人目は二十一日間のウブヤアケで帰ってくる。三月にまたがらない。三月がかりにならないようにする。

二人目からの里がえりはアケになつて丈夫になつてから帰る。農家でいそがしいと、ヒマになつてからヒマをみつめて帰る。冬の農閑期になる。姑さんが送ってくれる。(小相木)

一人目の時はオボヤキになつてから婚家に帰つた。二人目からはオボヤキになつてから行つた。子供をつれて歩いて帰つた。(前箱田)

拾い親 生まれて六カ月前に歯の生えた子をオニツコと呼び、すてた。(歯は普通十カ月が多い) すぐに拾ってもらつた。(巢島)

特にないが聞いたことはある。(大屋敷)

ダンナが厄年の年に子が生まれると「ヤクにたたない」と言い、三本辻にすてた。

近所のオバさんや長生きの人に拾ってもらつた。その人は豆をいり、子供につけて帰した。

歯が早く生えた子もオニツコと言ひ三本辻にすてた。歯が早く生える人は歯が弱いと言つた。(植野)

育ちが悪い子供、親が四十二の時の子供、歯が早く生えたオニツコの時に三本辻にすてた。その家の子供がひろつた。(池端)

なし。(元総社四区) (小相木)

十字路にすて、身内の人に拾ってもらつた。人にひろつてもらうと丈夫になると言つた。(石倉町上石倉)

子供が弱くて育たない時に拾ってもらつた。七〜八カ月たつても歯が生えないので、三本辻にすて近所の人に拾ってもらつた。ヒロイツコという。(稲荷新田)

歯がなかなか生えない子供がいると、オニツコといひ三本辻にすて、近所の人に頼んで拾ってもらつた。(前箱田)

オジゴ 生まれて四か月か五か月に歯がはえてしまつた子はオジゴといひ、三本辻にすてて、ひろつてもらつた。(元総社大渡)

食い初めの祝い 百日目に行なつた。茶碗のセットは自分の家で準備した。また、石を拾つて洗ひしんぜた。石をかじつてもいいほど歯が丈夫になると言ひ。(巢島)

百日目に行く。普通のお膳を用意した。(大屋敷)

百日目に行なつた。自分の家でお膳を用意し、石をおいて、食べさせるまねをする。石につついてから一粒くらいのお米を口にいれるまねをした。お膳はあとでその子が使つた。(植野)

百日目にした。実家の親が来た。茶碗などは自分の家で準備した。

一粒でも口にいられた。(池端)

百日目。ダンナが道具を用意した。御飯をやらかくして口にはいられた。(元総社四区)

百日目。鯛などのお頭付を用意した。口のところにもつてゆくまねをするだけ。(石倉町上石倉)

百日目。一人前にお膳を作った。(稻荷新田)

百日目。やらないこともある。少し口にいられてやるくらい。(小相木)

百日目。石のおかずをおき、御飯を食べさせるまねをした。椀はありあわせのもので、盆の上においた。女にはものさし、男はソロバンをおいた。(前箱田)

生児へのお歳暮 掛軸が届いた。金太郎・武士・鐘旭・高砂などが描いてあった。

正月の間はおいてあった。床の間にかけて。初子には親戚・近所などから届いたが、三々四人目になると実家から届くくらい。(巢鳥)

武者絵の掛軸やキレが届いた。(大屋敷)

はじめての子供の時には親戚・仲人さんより、女には羽子板・破魔弓(箱入り)、男には掛軸(まげ帽子の人形・静御前の絵)が届いた。

(植野)

掛軸が男へ。(武者の絵。)羽子板が女に届いた。(池端)

破魔弓(男)、羽子板(女)。実家より届いた。また、親戚より掛軸が届いた。男は武者絵で、女は女のもの。(元総社四区)

掛軸や破魔弓(男)、羽子板(女)が届いた。掛軸には「太陽に鶴」、「松竹梅」「高砂」などがあつた。(石倉町上石倉)

掛軸が届き、正月にはつた。「高砂」など。

また、正月には子供が書きぞめを書いてはつた。書きぞめを親戚に配るとお金がもらえた。(稻荷新田)

暮に掛軸がきた。男は武者絵で、女は高砂の絵であつた。(小相木) 鐘旭さまや子供の絵の掛軸が届き、正月の間かけておいた。キレも届いた。

実家からはみんなきたが、親戚、近所からは、はじめての子にきた。

(前箱田)

ダイシヨ 初めての子が生まれた家に、掛け軸をおくり、たなの下にかけておいた。女の子と家では、きれいな女のかいた掛け軸だつた。(桜が丘)

初節句 三月は鯉や餅を作つた。菱餅は赤・黄・白の三色で雛段においた。一番下が四十〜五十cm大のものでピラマッド型に積み上げ、高さ四十〜五十cmの一番上に梅の花をさした。

五月は幟と座敷幟をおいた。幟は旗さしもので、庭先におき、家の紋と実家の紋を上下につけた。乳を二十つけた。

おかえしには赤飯とタラの干物をくばつた。昭和から柏餅をくばつた。(巢鳥)

三月は実家からお雛様、近所や内々より人形が来た。おかえしには紅白の桜餅を配つた。

五月はのぼりをたて、人形をかざつた。のぼりは一つずつ乳をつけ、竹につけ、かざつた。乳をつけるのは大仕事であつた。

おかえしには柏餅を配つた。(大屋敷)

三月は雛段の用意をした。人形が一軒ごとに届いた。菱餅をかざりにおいた。

おかえしにはスルメとノリをつけた。

五月はのぼりが届きた。外幟で、乳をうけ庭にたてた。鐘旭、大神、加藤清正、子供をだいた神宮皇后の絵柄が多かつた。戦中にキレが足りない時は子供の夏の服にした。

ウチカザリには人形でもらった金時などをかざった。(植野)

三月は人形が届き、菱餅とサンマの開きをおかえしにした。

五月は、のぼりが届いた。それはあとで色をそめて、帯しん、モンペにした。

おかえしには柏餅とタラの干物を送った。(池端)

三月には高砂のおじいさん、おばあさんが届き、菱餅を配った。

五月には、のぼりや吹き流し(十五尺近いものもあった)(これは最近のもの)が届いた。のぼりには鐘旭さまが描いてあった。赤飯を配った。(元総社四区)

男は武者絵ののぼりをもらった。たてきれないと物干しざおにかけしておいた。戦中に物がなくなると布団皮になった。柏餅にタラの干物をくばった。

女はひな人形がきてかざった。お返しは桜餅。(石倉町上石倉)

三月は実家よりおひな様きた。内裏がきて、他はそろえた。親戚からも届いた。

お返しは紅白の餅で、初節句の家は一日に菱餅をつき、三つ返した。普通の家は三日にした。

五月はオコワをたいておいわいした。のぼりをもらって竹につけ、かけた。上に紋が入っていた。木綿製の武者絵で、乳をつけてかけた。のちになると決っておしめや帯の芯にした。

たくさんののぼりをもらうと二階から手すりに下げたり、ロープをはってさげたりした。餅をおかえしにした。(稲荷新田)

三月は盛大にした。大きい内裏様が二つ届いた。ケースなしの裸びな。親戚、近所よりは小さい人形が届いた。お返しは紅白の餅。

五月はのぼりが届いた。(大正のころ)武者の鐘旭などで、上に家紋が入っていた。五月は簡素であった。

お返しはタラの干物(台にする)と赤飯であった。干物は武者絵の描いてある版画ずりのものでつつんだ。餅は最近で。それもはじめは自家製であった。(小相木)

女にはおひなさまが届き、餅をかえした。

男にはのぼりと座敷ののぼりが届いた。乳をつけ竹につけたが、仕事であった。お返しはスルメをつけた赤飯。(前箱田)

誕生祝い 紅白のしょっぱいアンコの餅を作り、祝いをくれた家

にくばった。しょっぱいのは甘くみられないため。子供には一白(一

升餅)をしよわせた。なかなか歩けなかった。「誕生三月」と言い、一

年三カ月くらいで歩くことが多かった。(菓鳥)

丸いしょっぱいアンコの餅を作り、一軒に五、六個ずつ配った。餅

はしよわせたが、しよえる子は少なかった。(大屋敷)

塩味の餅をつき、産着などのお祝いをもらった家にお返しをした。

三時におき、双親のある人についてももらった。

その餅を箕に入れてしよわせ、のち神棚にあげた。そのモチで子の

シリをたたいてはわせた。餅は半紙でくるみ、水引きでしばっておい

た。(植野)

紅白の餅を作り、しよわせ、箕の中に立たせた。そして子の尻をポ

ンとたたいた。

餅は子守りが食べた。あまり立てた子はいない。(池端)

餅をついた。小さい餅を二つか三つくらいしよわせた。いくつしよ

えるかしよわせてみた。誕生で立てる子は少なかった。一歳半くらい

が多かった。

祝いには親戚が集まった。赤と白の餅を配った。しょっぱいアンコ

も作った。(元総社四区)

そろそろ歩くだろうと言ってクツを贈った。お誕生祝いは紅白の餅

に四合びん。

また、子供に餅をしょわせた。二升臼でついて、フロシキにつつんでしょわせたが、立てる子はなかった。(石倉町上石倉)

アンコの餅を作り、箕に入れ、子供のケツにぶつけた。

また、一升餅を作り、重箱に丸めて入れ、しょわせたが、昔の子は成長が遅く、なかなか立てなかった。(稲荷新田)

餅をついて重箱にいれ、子供にしょわせた。しょえない子もあった。餅をついてしょわせた。農繁期の子供は粗末になってしまふ。(小相木)

餅をついてしょわせた。大きい塩あん(甘く見られないようにした)。しょえない子が多かった。歩くのは「誕生三月」といい、一歳二〜三ヵ月が多かった。

誕生返しは、はきものでゲタをくれた。うしろにヒボをつけて足につけた。(前箱田)

子守りと子守唄 「イジメ」というのを蚕の間使った。その中に子供をいれ、乳もそのままくれた。外にだいて出るとクセになると言われた。

子はオブイヒモという、シンをいれた太丸いヒモでしよった。子供がいれば男の子でも赤ん坊をしょわせた。いなければイジメにいった。赤ん坊をしょって学校に行くことも多かった。そういう子供も多かった。

唄は「ネンツンコロリヨ……」の唄。(巢鳥)

おばあさんが、帯、モリッコ帯でしよった。シンがあり丸い帯。唄はネンネンコロリヨ……。(大屋敷)

年寄りが子守りをした。イッコオビやショイオビを使った。イッコとはむすびつける意のイツケからきている。帯は一丈より長く、男の帯より長かった。

ほかに、シンのある丸い帯やヘコ帯を代用にした。白い大巾のシンモースはよそ行に使い、ふだんはよぎれの目立たないものを使った。

唄は「ネンネンコロリヨ……」。(植野)

おばあさんがユツケ帯でしよった。外に行く時はキャラコやサラシの白いものを使った。唄は「ネンネンコロリヨ……」(池端)

おばあさんがいると、仕事がいそがしい時には子守りを頼んだ。

子供がしよって学校に行くことも、帰ると子守りをさせられることもあった。

子供をしよう時はサラシの太いもので作ったモリッコオビでした。

また、子供が動かないうちは、ワラで作ったイジメにいたり、実家から持ってきたカゴにいられておいた。

子守唄は、子供の名を呼んで「いい子だからねんねしな」と言った。

(元総社四区)

兄弟が子守りをした。学校にもしよって行つた。(石倉町上石倉)

おばあさんが子守りをした。モリッコバアサンと言う。また、上の兄弟がしよったりした。

子供をしようのは、モリッコオビというヒモの長いものでしよった。

昭和二十四年生まれの子にも使っていた。

子守唄は「ネンネしな」と言ったり、デンデンダイコを使った。(昭和になつて)

また、「ネロツテバ ネナイノカ コノガキャノイ(コノガキメ)」

という唄もあった。(稲荷新田)

兄弟に子守りを頼んだ。(長男・長女)

デンデンタイコを使つたり、「ネンネンコロリヨ」と唄った。

子供をしよう時は、長さ八尺くらいで巾五cmくらいの綿入りのモメンの帯「オブイヒモ」を使った。(小相木)

おばあさんが子守りをした。モリッコオビでしよった。子守り唄がわりに念仏を言ったりした。そのために子供がオンチになった。

子供はイジメにもいれた。径八十cmほどで、ワラで作ってあり、フトンがしいてあった。泣いても入れておいた。(前箱田)

七・五・三の祝い なし。戦後より多くなった。五十年前にはあった。(巢鳥)

いい家以外はなかった。オコワを作るくらい。(大屋敷)  
なし。(植野)

したけれどハデではなかった。着物を作るくらいで近所の神社に行った。(池端)

七五三はなし。(元総社四区) (小相木・前箱田)  
三十年代後半からはじまった。それまではやらない家が多かった。

三十年代でもやると評判になるほどであった。(石倉町上石倉)  
昔はなし。戦後はじめた。(稲荷新田)

幼少年期の習俗 七ツ坊主というのがあり、七歳までは呑竜さまに願をかけ、カミソリでそっていた。よくあった。五ツ坊主は少なかった。

また、丈夫になるようにお茶坊主(大五郎カット)があった。(巢鳥)  
呑竜さままで五ツ坊主で願をかけた。(大屋敷)

弱い子は太田の呑竜さままで七ツ坊主にしてつれて行った。願をかけた。  
呑竜さまは子育てで良く行った。(植野)

七ツ坊主は聞いたことがある。三十三軒着物はない。(池端)  
女の子を丈夫に育つように、太田の呑竜様で七ツ坊主にした。

なし。(石倉町上石倉)  
(元総社四区)

病気の子がいると、近所からつぎを少しづつもらい、あわせて着せると丈夫になると言った。

体の弱い子は、女の子でも、太田の呑竜様に行つて、七つまで「七ツ坊主」にした。七つになるとお礼参りをして髪をのばした。そのため、八つになつてから学校に行く子もあつた。

また、山名の八幡様に行き、張子の獅子をかってきてかぶせた。厄除けの神様で四歳で行つた。祭りは四月と十月の十五日。この辺からは歩いて行つた。下佐野より山名への木の渡しがあり渡つた。阿久津より倉賀野への木橋があつた。(稲荷新田)

体の弱い子は女の子でも七ツ坊主にした。(小相木)  
三十三軒着物。十〜二十cmくらいの小さいキレをあつめ着せた。子供の小さい時に着せるもの。

また、呑竜七ツ坊主にした。正月がきてお礼に行く時には少しのぼしておいた。

名前をかえることもあつた。戸籍はかえず呼び名をかえた。(実例あり) (前箱田)

二、厄年・年祝儀礼

(一) 厄年・厄除けと呪法

幼少年期の厄年と厄除け。正月の四日に龍藏寺に行つた。また、男女とも四歳の時(初めての厄年)に反町の薬師に行つた。朝日町(百軒町)の高岑院で厄除けをした。(巢鳥)

呑竜様に行つた。毎年行く家もあつた。(大屋敷)

四歳の時に主人が反町の薬師につれて行つた。(植野)

四歳の時に太田の呑竜さまにつれて行つた。(池端)

なし。(石倉町上石倉)



特になし。(元総社四区)

呑竜様に厄除けのお参りに行った。(石倉町上石倉)  
四歳になると鬼子母神様に虫ふうじに行った。(夜泣きの子)

(小相木)

4歳で反町の薬師でお願所をかけた。

日をきって「日ギリ地蔵」に行った。あした、あさつてまでとか、  
すぐと言つて頼んだ。なおつたらお礼をした。

屋敷の稲荷さまに七色菓子あげた。肩がいたいとか頭がいたいとか六三だろつと言う時に。「酒一荷(二本)あげます」と言い、切つた竹に二本あげた。(前箱田)

病気に対する呪法

夜泣き—鍛冶町の子育て地蔵にお参り。

カンの虫—三河町の成田山で四歳の時に墨で字を書いてもらった。

山名の八幡様で虫切り鎌を買いさげておいた。

ハシカー—外氣にあてる。有馬にハシカの神様の二石があり、ハシカの前にくぐると軽いと言つた。

ホウソー—二歳の時にキョッパシを別に作り、赤(中)、白(左右)の三本の棒をたてた。

カクラン—菅笠で水をかぶつた。水がむるようにボロのものをかぶつた。土用の牛の日にモグサを頭にいけると良い。土用の丑の

日にドクダミをフロにいれる。(巢鳥)

夜泣き—カサマ様のお礼をさげた。

ハシカー—なし

ホウソー—俵の端(チョッパシ)に棒をたて屋根にあげた。

カクラン—菅笠で水をかけ、むると良い。(大屋敷)

カンの虫—葉屋さんが来ておまじないをしてくれた。

ハシカー—ウサイカクという薬をのんだ。カニをせんじてのませた。

ホウソー—チョッパシ(俵の蓋)を作り、赤い幣束をつけた。神棚にあげ、赤飯をあげ、鎮守の裏のホウソウ様の祠にあげた。屋根の上にあげる家があった。

カクラン—菅笠をかぶり、水をかけ、むると良い。もつたら良くなる。(植野)

夜泣き—天井に「猿沢の池のほとりに鳴く鹿の昼は鳴けども夜は鳴

くまい」とおじいさんが書いてはつておいた。

カンの虫—おがみ屋が金古にあり、虫封じをした。

ホウソー—チョッパシの上に二本の棒に赤と白の幣束様の紙をはさんだ。チョッパシはあんで、端の突のついたところの端が上におつたつている。

三本辻においた。

チョッパシは人が亡くなつた時にはモシキの灰をのせ三本辻においた。(池端)

夜泣き—夜泣き地蔵にお参りした。

カンの虫—山名の八幡様の虫切り鎌をうけた。

ホウソー—棧俵にオンベコをたて、三本辻にたてる。

カクラン—菅笠をかぶり、上から水を3回かけ、そのたれた水をのむと良い。キューリのタネを足につけると良い。(元総社四区)

カンの虫—節分の時に、カマドでイワシの頭をヒイラギの小枝にさして焼いた。虫の強い子がいると「カンの虫を焼く」と言い、ツバを吹きかけて焼いた。焼いたのち門口にさした。

耳鳴り・耳の痛み—民間薬で耳だれの薬(油)があり、たらしめてらつた。耳鳴りなどは夏の水遊びでなつた。

ホウソー—棧俵に字を書いた赤い小さい紙を三本さして道祖神にあ

げた。(今は神社内、昔は村はずれ)

カクラン—ハダカで菅笠をかぶり、井戸端で水をかぶる。笠に水が通ると直った。たれた水をのむと直った。(石倉町上石倉)

農休みに、村はずれの四ヶ所の三本辻に幣束をたてると厄病よけになった。はやりの病が入らないように。二〜三年前までしていた。(稲荷新田)

夜泣き—アメ屋のオバアさんにタイコをたたいてもらおうと良い。

寝小便—メメズをせんじてのむ。(昭和はじめころ)足の小指の先にお灸をすえる。

カクラン—菅笠をかぶり、井戸ばたで上から水をかぶる。梅干しを

こめかみにつけておくと暑気にあたらぬ。(小相木)

夜泣き—田中の夜泣き地蔵に赤い旗を作り奉納した。

カンの虫—呑竜さまのお守りの鎌をもらう。山名の八幡様に二ツ子になると虫切りにつれてゆく。鎌のお守りがある。

ハシカー—あたたかくして寝かせておく。

ホーソー—チョッパシに赤いオンベロをつけたホーソー神様を作り屋根におんあげる。(あとはそのうちにおちる)

あつけ—笠をかぶり、井戸水をかぶる。水がむると直る。

抜けた歯は「早く生える」と言いながら、下の歯は屋根に、上の歯は流しの下にいった。

同い年の子が死ぬと、豆をいって三本辻においた。(高尾での例)

(前箱田)

生涯の厄年と厄年 前厄・本厄・後厄があり、佐野や川崎大師に行った。節分に豆をまくと厄おとしになる。(菓鳥)

女は十九・三十三。男は二十五・四十二。成田山や川崎大師に行った。(大屋敷)

女は十九・三十三。男は二十五・四十二。正月三日に厄除けの薬師様に行った。川崎大師にも行った。春の祭りに酒をあげると厄おとしになった。(植野)

女は十九・三十三。男は二十五・四十二。女の人はあまり厄ばらいには行けなかった。(池端)

女は十九・三十三。男は二十五・四十二。青柳大師に行った。

(元総社四区)

男四十二、女三十三。青柳大師に行った。三十年代半ばまでは人が多かった。明神様にも行った。(石倉町上石倉)

女は十九歳で、京ヶ島の厄除け観音に行った。祭りが八月十八日で、

十七日の晩に行った。男は二十五。(稲荷新田)

女は十九・三十三、男は二十五、四十二。あまり苦にせず、行かなかった。働くほうが中心であった。正月に青柳の竜蔵寺に行ったり、

京目の北向き観音のお祭りに行った。(小相木)

女は十三・十九・三十三。男は二十五・四十二。女の三十三の時は

実家の観が腰巻きを買ってくれる。上にかけるまねをする。(引間の例)、帯を買ってくれる(足門の例)。前厄の人はセリを食うものではないという。節がわるいと言う。(前箱田)

## (二) 年 祝 い

男女の年祝い 特になし。(植野)

なし。(元総社町四区、石倉町上石倉、小相木、前箱田)

初潮 今は早い、遅いと十八くらい。普通は十五・六歳くらい。三十三年間はある。十八からだとなんか五十五歳までになるが、それは遅かった。四十八のハジカキッコとかウミバチとかいった。四十八くらいでおわりになった。クミアゲるといふ。祝いはなく、かくしておいた。

「ハチベ」と言った。(巢鳥)

十六歳くらい。祝いはなくかくしたほう。母には言った。(大屋敷)

十六〜十七歳くらい。母や姉に言うくらい。(植野)

十六歳くらい。あまり話はしなかった。(池端)

十六歳くらい。赤飯をたいた。(元総社四区)

十八歳くらい。おそかった。赤飯をたいた。(引間の例)(前箱田)

一人前の条件 学校卒業くらい。特になし。嫁もらって。(巢鳥)

女はお針、ウドンぶてること。男は徴兵検査で一人前。(大屋敷)

女は祝いの着物が縫えると一人前。(紋付袴)。オソバがうてると一人前で、嫁に行けた。男は二十一歳の兵隊検査がおわると酒・タバコ

がのめた。(植野)

手打ち・縫い物はみんなした。子供のころからみんなした。できて

嫁に行つた。(池端)

兵隊検査(元総社四区)

社会に出る。夕飯後に<sup>きん</sup>俵をすわつた時の高さ分作ると百姓が一人

前と言つた。(石倉町上石倉)

俵をかつぐ。十六貫六十kgをかつぐと男で一人前。女は着物ができ

ること。「力石」が浅間様にありかついだ。十五〜十六貫あつた。

(小相木)

女ははた織り、イトハタができること。できないとオテンポウと言

われた。男はウシのスキオコシができること。桑原のスキカケをした。

牛のハンドリをしてスキオコシをするオナイッコトができれば一人

前。(前箱田)

年祝い 特に祝いはしなかった。五十〜六十歳で死ぬ人が多く、祝

いもなかった。(巢鳥)

一般的にはなし。(大屋敷)

七十七は吹き竹を配つた。火事の時にそれを吹くと火事がこない。

八十八は赤い帽子とチャンチャンを作り鎮守さまに行つた。紫・赤で

「寿」の字入りの座布団を作つた。(植野)

六十代で死ぬ人が多く、特になかつた。(池端)

八十八で赤い帽子・着物を作つた。七十七で火吹き竹を配つた。(あまり例はない。)(元総社町四区)

七十七で吹き竹を配つた。八十八で赤い着物(チャンチャンコ)を

作つた。(作らないこともある。)(小相木)

### (三) 余暇と娯楽

床屋での将棋指し。村の祭り、節句、恵比須講が楽しみであった。町

には金がかかるので行かなかつた。若い衆は映画に行つた。映画が出

る前には幻燈会があり、乾板に絵をかいたものがありうつした。のち、

弁士付の活動写真になり、モノ日に弁当もちで行つた。その後トキー

になつた。電気館に行つた。上毛館の辺はクヌキ林で、カプトがいた。

(巢鳥)

お蚕がおわると、映画を見に町に行つた。歩きで行つた。電気館や

帝国館に行つた。(植野)

カルタ会や正月くらい。あとは使われた。(池端)

子供の娯楽 子守りをしながら、女の子はオタマ、荒縄でナフトビ

をした。会戦というつかまえて。オシクラマンジュウ丸より出た

ものはまけ。遊びの道具はなく、クワゼの間を走りまわつたくらい。

カンヅメで、はくものを作つたが、そのカンヅメのないこともあつた。

タケウマ。桑の実(ドドメ)を食べた。棒でついでつぶして食べた

が、口のまわりがまっ青になり、色がおちにくかつた。水あびはハダ

カで行つた。手ぬぐい一つで行つた。河原の石があつく、水たまりに

入りつつ行った。(パンツのない時代。)キシヤゴ(オハジキ)は買った。ブツケ(パス)は男がした。ひっくりかえるとれた。コマはペーゴマ。ドングリに木をさしてコマを作った。ナイフで竹トンボを作った。水鉄砲はクワゼにボロをまいて作り、水のかけっこをした。

(巢鳥)

オテダマ、ナワトビ、マリツキ、イシケリ、ハネツキをした。天狗岩のむこうの、中ドテから利根川を「ゴルフ場」まであるで行けた。七夕には七回およぐもので行われた。コマ、ニチゲツボール、自転車の輪をまわしてあそぶ。竹トンボ、竹ウマ。およぎは利根川や天狗岩用水に行った。半日はあそべる。川原の桃畑で桃をとった。買いに行ったこともある。川原まであるで行けたことがあった。(植野)

オテダマ、石けり、マリツキ、キシヤゴ、オテダマ、レースあみ、カルタ。(池端)

タコあげ、根ツクイ、竹馬、コマ、ブツケ、兵隊ごっこ。(男)お手玉(小豆入り)、アヤトリ、マリつき。お手玉でエゴの実入りは音が良かった。(女)(元総社四区)

オハジキ、お手玉(女)。ネツクイ、メンコ、竹馬、ドロボーごっこ、兵隊ごっこ、行軍戦(陣とり)。行軍戦は、二人の上に一人が乗る。大将と地雷と工兵があり、工兵はうしろをまくって印とした。工兵は地雷に勝つが工兵に負ける。(稻荷新田)

オテダマ、ギンナン、キシヤゴ(女)。男はブツケ、メンコ、竹トンボ。(前箱田)

### 三、婚姻儀礼

#### (一) 青年期の動向

青年会(団) 「若い衆」組織があった。三十八歳まで。十七歳〜二十五歳までの青年会の上の組織。(巢鳥)

青年会があり学校卒業後の十七歳〜四十五歳まで入っていた。のち三十五歳になった。戦後解散した。仕事としては村の八幡川の提防なおし、道路普請(おわったあとオハギを作った)、祭りの旗をたてる、耕地で耕作(畑をうけおい、収入にした)などがあった。会長、会計、小世話人(四人)がいた。戸数は三十八軒で、長・二男関係なく入った。口頭で役員は受けてもらい、受け手がない時は投票になった。正月に「ケイヤク」||懇親会をした。二〜三日は自炊をした。四月十五日の網笠大明神の祭(蚕の神様)にはその宿が毎年まわり番になった。青年会が主に役をした。一戸一人が出るきびしいきまりがあった。ふだんは神明様にしまっておいた。この日は餅をつき、神にそなえた。神様は夕方五時三十分〜六時ころしまった。小さいおそなえの餅をオミゴクとして二個ずつ一戸にくばった。七月に天道さまのナンマイダ(百万遍)があった。(今の八幡様)。念仏をとなえ、桐の木のジュズをまわした。総社神社の八丁じめのお札を四枚もらって東西南北にたてた。十月十五日は、鎮守さまのお祭り、幟を建て、サンテコを神社で若い衆がやった。のち、近所の村が十月九日なので、十月九日になった。(大屋敷)

青年会があり、その年結婚した家での正月の「ケイヤク」で、一升酒をもつて入った。学校卒業後の十七歳〜二十五歳で入った。長男が中心(二・三男は他に出てしまいいない)。職業はいろいろ。役員は会

長一副会長―会計一人に幹事(会員数により若干名)。役員は総会で、二十五歳でぬける前の人が話し合いで決めた。行事・仕事には、旅行・マキ切りがあった。桑園のうけおいがあり、一反くらいをきれいにし、五円くらいもらい、会の費用とした。天狗岩の堰の両側にコーゾがあり、年に一回切り高崎も持って行った。危険物の回収や、二カ月に一回そうじをした。旅行は伊香保に歩きで行ったり、四万に行った。中之条まで列車で、後は歩いた。「ケイヤク」は、青年会と同じくらいから三十九歳まで入った。酒一升はらって入った。区長の下で働き、「当番」が六人いた。一人が当番長をした。当番はケイヤクから選んだ。当番は五年に一回くらい回ってきた。箱があり帳面が入っていた。「ケイヤク」は昭和四十七〜八年まであり、その後自治会になった。仕事は祭典のシンシヨウまわしで、金がかかるとテンワリをして徴収をした。例えば五十円かかると一点いくらで割った。祭りは多く、六〜七あった。多目に金をとって遊びに行くことがあった。ダイマツで使いこんだり、イチヨウを売り芸者遊びをした人がいた。祭りには、天四祭(元日の会)、初牛祭、春季祭典(渡御)、新嘗祭、レイフ祭(様)(個人の祭りのてつだい)。(植野)

青年会と言ひ、学校卒業後入った。やめる年の制限はない。入会のきまりはない。役員は会長・副会長二人・会計一人と班ごとに連絡員の幹事がいた。役員は話し合いで決めた。仕事には、道路修理やコサギリがあった。コサギリとは道まで出ている枝を切る仕事で、それで得た金は青年会の会費とした。村の祭りの天道さまを中心とした。正月六日が地区の祭りなので、六日が御年始日になった。春の花見に相馬ヶ原のオオヒラ山に行った。並木があった。旅行には香取や大洗に行った。着物でゲタバきで行った。大洗は掘っ立て小屋があっただけであった。戦中は出征した家へのてつだいをした。昭和十八〜九年こ

ろ青年団になった。(池端)

青年団とは別に興成会(四区のみ)の会)があり、馬頭さま、稻荷さまの祭りをした。この石仏は今はなくなってしまった。祭りには近所からお金をあつめ、おそなえも集まった。おそなえは小さく切つて配った。そうするとまたお金がきた。他に興成会の仕事としては、道しるべを作った。五十年くらい前に作り、二十年間くらいはあった。役員は会長、副会長、会計で、各町に役員があり、会員は三十人くらいであった。会の行事では一泊の旅行に行ったり、桑園の手入れをして金を得ることなどがあった。三十歳くらいまで入っていた。(元総社四区)青年団があり、神社の石垣直しをした。学校卒業後入った。

(石倉町上石倉)

青年会があり、卒業後二〜三年で跡とりが入った。十八〜九から二十で入り、二十四、五歳まで入っていた。結婚でぬけた。十六歳になると若い衆の仲間入りがあった。正月の五日に初会合があり、父につれられ、一升酒を出して仲間入りした。これで村で一人前として扱われる。村や神社の役が付き、祭の世話人にも入るようになる。青年会の仕事は特になが、滝川の砂をとり、リヤカーで道にまいた。(稻荷新田)

仲間入りは自然。「若い衆」とは言った。青年会は途中で団になった。大正ころは役場の指導で作った会。役場に青年を集め、群馬郡役場の指導で、道路工事、柔剣道、講座を聞いた。(小相木)

処女会 処女会があったらしい。(大屋敷)

処女会と言ひ、小学校卒業から結婚するまで。仕事として敬老会でアヤメタンゴを作った。白玉ダンゴの長いものを切り、糸切りダンゴにしてアンコをつけた。会費は三十銭くらいずつ。総社町全体で一つで、植野に支部があった。学校の先生が応援してくれた。四月はじめ

ころに自分達が考案した余興をした。(植野)

男女合同の青年団があり、手のない家に行つてつづいをした。田植えが天水なので、よその団の人にも応援をたのんだ。処女会では裁縫をした。(元総社四区)

処女会があった。(石倉町上石倉)

処女会があった。女子は家にてつづいをしていた。あまり活動はなかった。(稻荷新田)

処女会があった。(小相木)

処女会があり、卒業して入った。あまり仕事はなかった。婦人会には結婚して年がたつて入った。竹ヤリの練習などをした。(前箱田)

夜あそび 盆おどりがあると近所の村に出かけた。金古や高崎、吉岡村の三の宮や、東は江田の辺まで行った。夕飯を食べてから出かけた。昔はあちこちに屋台が出て見に行った。町のカフェにも行った。冬に利根川の工事の土方をやって金をかせいで行った。娘さんがいる家に行ったこともある。行ったら娘が風呂から出られなくなったり(風呂が土間にあったので)、雨にふられてその家で笠をかりたり、家に行ったことがキツカケとなり結ばれることもあった。お勝手からのぞいたりした。製糸工場の碓氷社があり、十三夜の夜にコエオケを煙突の上においたり、そこで働く娘の腰巻をつなげておいたりした。そこで洗たく物は夜出さないようになった。大みそかの夜に「ヤクハラライ」があった。モチをもらうと帰ったが、村の青年が同じような声で「ヤクハラライ」と言つて回る。そしてモチはとらないで笑つてにげてしまつた。お勝手から女の人の台所の仕事の様子をのぞいていたら下水にフンゴンだり、オキリコミの汁をかけられたりした。盆踊りにはよく行った。いたずらで、ズロースを火の見にかけたり、腰巻を竹の先につけ碓氷社の煙突の上につけたりした。また、仲間で、センベイの食いく

らべをしたり、手にいっばいにつかんだコウセン棒を高井の半鐘のところまで(約五百m)走つて行つてくる間に水無しで食べられるかを競争した。そのほかに、玄関にコエ桶をさげたり、明治のころは据え風呂で外で入っていたが、若い娘が入るとそのままかいついで持つて行つたりした。また、大久保まで暗くなつてから梨をとりに行つたりした。(植野)

歩いて金古の二十三夜様(オサンヤサマ)に行つた。毎月二十三日が祭り、出店があり、人出が多かつた。女の家に行つて下水に足をフンゴンだり、風呂に入っているとそのまま運んだり、夜ばいをしたり、屋根にほしてあつたキリボシをとつたりした。家の中にはつて行つたら、足がナベツルにひつかりツユをこぼしてしまつたことがあつた。(明治時代にはこんなことでイイナカになつたことがあつた)引間の妙見さまは二十三目が祭り、行つた。(池端)

盆おどりなどの近所の村の祭りに行つた。よその村とケンカしたこともある。小屋掛けの芝居や、あやつり芝居などを見に行つたこともある。スイカ畑でスイカを割つたり、ナシ畑でナシをとつたりした。番人小屋の入口にはクギをおいたりした。夜あそびは一里四方に行つた。総社・群馬町・新高尾町などに行つた。一晩に三カ所くらい回るので、夕方生タマゴを三つものんで行つた。(元総社四区)

前橋に映画に行つたり、富士見辺まで娘さんを送つていつたりした。自転車でかけた。(石倉町上石倉)

川曲や貝沢、新保、日高、京目、大沢辺に自転車で行つた。ムスメのいる家に行き、桑モギをてつだつてお茶をもらつて帰つた。新保あたりでも結婚した例が多い。行つた若い衆同士でけんかになることがあつた。ここはもともと川曲の一部で、昔は地番も川曲であつた。

(稻荷新田)

昔は町にはあまり行かず、村の商店にたむろしていた。夕方草カキ後、村の店に四〜五人あつまり夜あそびの相談をした。町で酒二合が十銭のころ、村では七銭。五十銭で飲んで二十五銭で映画、シナソバを食べた。町には歩いて行つた。たまにはムスメさんの家に行くこともあった。利根東にはヨバイがあつたのでは？ かけごとはセンペイをたくさん食べる競争や、かけっこをして早さを競うことだった。育英高校のできた時に商店が一軒しかなかった。食事ではサンマは上等ではなかつたがあまり食えず、メザシくらいであつた。風呂は川の端に木製の据え風呂を置き、川水で入つた。川の水をバケツでくんで入れた。少しあたたかいのでタキビも少なくてすんだ。川棚をおき、そこにおいた。上流で伝染病がはやくとすぐに伝わつた。川端の据えフロには川の水があたたかくなると入つた。雨が降るとフロに番笠をうけておいて入つた。今六十代の人の小さいころには石倉で追いはぎが出た。旧道でさびしい所、育英の北のヨシの生えている所。(小相木)

娘の家に行き、ナガシダメにフンゴンだり、障子に穴をあけてのぞいたりした。夜バイもあつた。(前箱田)

関東大震災直後の東京 関東大震災(大正十二年九月一日)は十七歳の時でした。三日の日に東京に行つた。ハッピを着て、カンパンの売っているのを持つて行つた。一円三十五銭で上野への券を買つた。列車は川口の手前で橋が落ちていて止まつた。そこで、赤羽の工兵隊が橋を作つていた。雨の中窓から外におりた。トビロを持つた人が番をしていて行けないので、鉄橋にあつた細い橋を一行で通つた。日暮里のいとこの家にとまつた。蚊が多かつた。その夜は朝鮮さわぎがあり、「あっち行つた、こっち行つた」と一晩中さわいでいた。朝はペンチでイワシの缶詰をあけて食べた。姉が美髪学校に行つており、さかしに行つた。警察官がたくさん召集されていたが、地方から来ている

ので聞いても道がわからず、やつこのことで神田についた。缶に「小石川に行つていゝ」とあつたが地理も良くわからなかつた。あたりの電柱はまだくすぶつていた。小石川の植物園では青年団が荒縄に刀をさして番をしていた。玄関に娘がいたので聞くと「帰つた」とのことであつた。姉は偶然いとこの田中氏に会い、そこで無事がわかつた。小石川は火事がなく、オコシを食べつつ上野に帰つた。途中で見ると、コンクリの家があちこちにあるだけで、他はなかつた。浅草の神社が見えた。千住に回つて王子にもどり汽車に乗つたがすぐには動かなかつた。列車はまわりも上もみんな人がいっぱい列車のつぎ目にし

がみついて行つた。(小相木)

恋愛の呼び方 クツツイタとかスイツイタと言う。イイナカになると仲人を頼んだ。(大屋敷)

イイナカになつたと言う。(植野)

レンアイ。(池端)

あまり例はない。レンアイとかクツツキアイと言つた。(元総社四区)

クツツイタとか、デキテル、デキタ、ナレアイになつたと言う。

(石倉町上石倉)

クツツイタとかクツツキ夫婦と言ひ、いやがつた。県外の人はいやがつた。(稻荷新田)

イイナカと言う。大百姓の作番頭同士がくつついたことがあつたが、世話役の人が仲人をした。あまり歓迎されない。(小相木)

クツツイタといい、評判が悪い。(前箱田)

## (二) 婚姻の条件

結婚適齢期 男は二十五歳まで、女は二十三歳くらい。(巢鳥)

男は二十四〜五歳、女の二十三歳は年をとつた感じ。(大屋敷)

男は二十五歳までだが、二十五歳にはせず、その前後にした。女は二十すぎであったが、オイエベスコウはおそいと言った。(植野)

男は二十五歳くらい、女は二十二〜三歳くらい。(池端)

二十二・三から二十六歳くらい。女で十六歳や、男十六歳、女子十二歳の例もあった。嫁さんに来たのにオタマをしていたり、夫婦でオモチャのとりっこをしていたこともある。(元総社四区)

男は二十四〜五歳。女は二十すぎれば。(石倉町上石倉)

男は二十五歳くらいまで、二十八歳はおそい。女は二十三〜四歳まで、二十五歳はエビスコウでいやがられた。(稲荷新田)

男は二十四歳くらいまで、女は十八〜九歳。二十四歳は晩婚。結婚を決められてもいやで、ハカマを持って逃げた例がある。(小相木)

男は二十五歳くらい、女は二十二〜三歳くらい。樽入れ前に話かわれると「樽返し」をする。もらった以上に返す。「オッコレタ」と言う。(前箱田)

見合い 仲人が知らない間につれてゆき、顔合せをさせてしまうことがあった。「見合い」と言わない。(巢鳥)

男をつれて行ってお茶を一杯出す。遊びに行きたければ前橋の活動にゆく。(例は少ない)顔を見せるくらいが多く、良く顔も見られなかった。本人がお茶を出す、自分の顔を見せにゆくようであった。見合いになると決まったも同じで、そこまでゆくとたいがいぶちこわれない。おわると仲人が聞きにきた。男でもらいたいと言いにきた。

(大屋敷)

仲人さんの家でした。嫁さんの家にダンナさんが連れられて行き、お茶をのむこともあった。二人だけをのこして外にやった。(植野)

仲人さんがつれて嫁の家に行き、話をした。あとで「どうだった」で決まった。両方とも下調べをした。親が気に入れば決まった。

(池端)

女の家に男が行った。事前に下見をしておいた。女の近い親戚が来ていて逆に見られたこともある。見合いは代替がきいた。見合いと本人が違うことがあった。見合いの時よりも男が小さく違っていたことがあった。女が大きかったがまとまった。見合いになると仲人のお茶を出してくれた。妹が出すと、「妹がいい」と言うので、「妹は出すな」と言う。見合いは親の言うなりで、出たウドンを食べたり、飲めば承諾したものとした。返事はあとで家内相談によると言い、あとでした。おつきあいは三カ月はいいと言う。(稲荷新田)

見合いは、それとなく会った。あまり会わなかったため、当たりハズレがあった。妹を見て、式は姉であった。ドタンとすわり、ペタンと礼したので興ざめして、返事はあとで手紙でといい、はっきり返事しなかったことがある。親同士で決め、式まで会わないことがあった。(小相木)

女の家に来た。お茶を出した。食事をしたり、飲むと承諾とした。事前に親が盗見をして決めておいた。(前箱田)

見合いのかえ玉 男つぶりもよくなく背も低い男と、体格がよくって、働きもんで、器量よしの娘と見合いすることになった。

そこで、どうして仲人がこんなえらび方をしたというので、見合いのとき、男にかえ玉をだすことにした。

それで、見合いしたところいいでしょうということになった。縁談が成立した。

いよいよご祝儀ということになり、嫁さんと婿さんが床に入ることになった。

仕度をとるかえ、普段着になったら男がちがうという。嫁さんは一晚中泣いていたという。



しかし、嫁さんも、いやいやながらそのうちに居すわったという。

(元総社)

仲人 仲人は「仲人ナナデンボウ」と言った。仲人親ということも言った。片方の人と良く知っていて話ができる人がなった。頼まれ仲人を頼む時は、〇〇にくれたいがどうしようという時に頼んだ。できていて、話のしようがないので頼んだ。この場合、頼まれ仲人なのでウソは言わない。また、仲人のゾウリツキラシと言った。ゾウリがずれるほど行ったり来たりしないとまとまらない。(巢鳥)

頼まれてする。「家に〇〇の娘がいるけれどおねがいます」と言われ、頼まれた。いろいろ下調べをして、様子を聞いて仲人をした。仲人のナナデンボウと言った。少し大げさに言うほうがまとまる。

(大屋敷)

話の上手な人がした。いろいろと話を聞いて会わせた。(植野)  
世話好きの人がやった。どちらかの家に結婚したい人がいると、相手がしを頼み、仲人をたのんだ。恋愛の場合には頼まれ仲人を頼んだ。昔は仲人の好きな人や、頼まれることの多い人があった。仲人のナナデンボウと言った。いいことばかり言うので、ハメられたということもあった。(池端)

シャバの広い人、口の達者な人。仲人のナナデンボウと言った。

(元総社四区)

世話好きな人。親の知り合いで、人柄によった。「〇〇さんが話をしてくれるのだから大丈夫だろう」と言った。(石倉町上石倉)

専門にする人もいた。親のどちらかを知っている人がなった。人絹バアサンという専門の人がいた。売りながら帳面に年と希望をつけておき、まとめた。正式には人を頼み式をした。話がまとまれば反物が売れた。(稻荷新田)

商売にする人がいた。帳面に名を書いておいて組み合わせた。あちこちに持って歩いていった。(小相木)

商売の人もいたが、世話好きの人。ふだんから見えておき、話をした。

(前箱田)

むかしの仲人は、

仲人七でんぼう

仲人のぞうりきらし

仲人の足袋きらし

などといわれた。

仲人はうそがいえなければつとまないといわれた。

仲人は機をへるといふこともいわれた。

仲人は話をまとめるのに、くれ方へ行ったり、もらい方へ行ったり

した。何回も双方へ行ったりきたりするので、そういわれた。

仲人礼には、足袋をきらしたというので、足袋を台にして、おかね

を包んでいった。(元総社)

### (三) 婚姻の成立

婚約の成立 口がため(樽入れ)と言う。仲人がモライ方に一升あげ、減つたものを一杯にして片方にゆく。(二升を一升ずつ)戦中は五合ずつ分けた。一緒になるので一升ずつおいた。近い親族など四く五軒があつまつた。(巢鳥)

樽入れ(口がため)と言う。昔はオーサンと言った。仲人が両方に

一升ずつもってくる。近親者があつまつた。(大屋敷)

樽入れと言う。両方の家に酒をもって行つた。一升を両方に分けた。

クレ方に行き、のこりをもってモライ方に行つた。近い親戚があつまつ

た。(植野)

樽入れと言う。仲人が酒一升買ってクレ方に行く。「そこにイッショウおさまるように」と言った。両方に一升ずつ持って行く。近い親類が集まる。(池端)

「オーサン」と言う。樽入れに同じ。仲人が五合ずつ一升持って来た。昔は柳樽。クレ方にお昼に行き、親戚が集まり五合使った。モライ方に夜ゆき、五合使った。この時に結納金その他、日どりも決めた。

(元総社四区)

樽入れと言う。モライ方では親族をあつめ式をもうけた。酒を両方に持って行った。(石倉町上石倉)

樽立てと言う。兄弟、親戚を呼んだ。結納品を書き出しておいだ。

コンブ(よろこぶ)、麻(トモシラガはえるまで)と白無垢が入った。仲人が行って目録の領収を持って来た。(稲荷新田)

口がためと台う。仲人がクレ方に一升酒を持ってゆき、モライ方にも酒を一升持って行った。そこでは親戚、近所の人十二く三人がよばれており被露をした。(小相木)

オーサンと言う。親戚、隣保班を呼んだ。モライ方に二升、クレ方に二升の酒を仲人が出した。(前箱田)

オウサン 結婚話がきまると、オウサンをした。

これは、口がためとも、タルイレともいった。

この辺には、アシイレということはなかった。(下新田)

口がため この辺では、口がためのことを、オウサンともいう。

近い親戚の人と仲人が立ちあう。

仲人が、はじめに婿のうちへ行って、つぎに嫁のうちへ行く。

嫁にやります、もらいますという約束がととのったこと。

もとは、一升の酒を、もらい方、くれ方へ、それぞれ半分ずつもって行って飲んだ。今は一升ずつもっていく。

むかしは、樽入れといって、酒を樽でもっていったという。このあと、日をおいて、式をあげる。

二月に口がためをして、四月に式をあげるというのもあった。

三月に口がためをして、秋に式をあげるというのもあった。

四月のなかばから九月中旬の間の間は農作業が忙しかったから、オウサンはなかった。(下石倉)

結婚式の日取り 親の相談で決めた。十月〜四月の寒いところで農閑期にした。十月や四月はめつたになかった。当時の式には呼び札があり、一人呼びは主人のみで、みなさん呼びは家族みんなでごちそうになった。(巢烏)

家で相談をして(口がための後で)暦をみて決めた。十月〜三月が多かった。四月ではおそかった。(大屋敷)

口がためころに決めた。だいたい月を決めておき、のちに「オンナの都合」と大安で決めた。(植野)

女の人の都合を聞いて決めた。(池端)

女の体の都合による。春三月の大安の日にした。(元総社四区) 農繁期を避けて、春か秋にした。暦をみて大安の日にした。

(石倉町上石倉)

樽入れ後に相談をして決めた。女の体の都合を聞いた。(稲荷新田) 仲人さんが両家の話を聞き決めた。クレ方の意向が重視された。大安をとる。生理的なものがある。(小相木)

女の人の都合優先。日を見た。(前箱田)

婚家への出入り 式の当日までは行かない。(大屋敷・植野・池端) 式ではない。(元総社四区・石倉町上石倉・小相木)

アシ入れ婚 なし。(巢烏・植野)

なし。(元総社四区・石倉町上石倉・小相木)

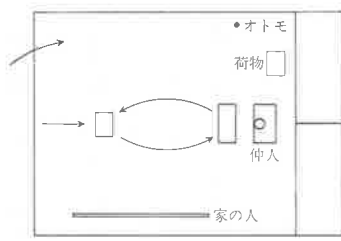
デヨメ アシイレできた嫁のこと。ご祝儀のときはおなががでつかい。(青梨子町)

アシイレ 式の前に嫁をつれてきてそのままいった場合に、アシイレといった。(下石倉)

結納 式の前日(親戚で結婚の時)か、もつと前日。着物等を(櫛、こうがいまで)目録に書いた。結納金が決めてあり、つけた。一緒に鯉節、扇子、スルメ、麻をつけた。結納がえしは半返しであったが、したことも、ないこともあった。結納には仲人が行き、ごちそうになる。帰って報告をした。結納金は昭和はじめが百円くらい、後妻は五十円で安かった。結納の内容は事前に相談で決めておいた。(巢鳥)

結納おさめと言う。式の前日にした。仲人が目録を作って行った。結納金は二百〜三百円くらい(大尽の家) 百円でたまげた。結納品には黒無垢の着物・江戸褌・道中着が二枚(お客に行く時に着る柄のもの)・上着・長ジュバン二枚・白無垢二枚・帯・履物。程度がいいと内掛、振り袖をくれる家もある。(大家敷)

式の前日を結納おさめといい、仲人が紋付、袴で、荷物持ちと行って。荷物持ちは、肩に前が祝い樽、後が着物をいれた箱をかけてもって行った。結婚式の嫁さんの着物などが入っていた。「めでたく申し受けました」と三下り半にならないように書く。のち宴会になる。(植野)



式の前日にした。仲人とお供(近所の人)がハサミ箱(ヤナギゴオリ)と祝い樽(朱塗り)を二つを両がけにして持って行った。ノシ・鯉節・スルメ・末広・昆布に道中着・白無垢・下駄・草履をつけた。住

所録があり、施主の兄弟が書いてあった。(池端)

勢多ではタンスを、もらう家がクレ方にやる習慣であった。結納金は昭和七年に五十円であった。二十円が多く、昭和八年の女学校出で八十円であった。前日を持ってくる場合と、良い日を見て持って来る場合があった。一式が目録になっており、印を押して返した。家に近い人が寄った。(元総社四区)

式の少し前に日を選んで行った。仲人が目録を読み行った。目録は全部自筆で記した。(石倉町上石倉)

式のいく日か前にした。おじさん、おばさんなど近い人が何人か集まった。スルメ・麻・昆布などが書いてある目録を渡し、嫁方で「受領いたしました」と書いてよこす。江戸褌(紋入り)、無垢、帯、道中着を贈った。結納金は多い家で五百円くらいであった。(小相木)

すこし前の人とずつと前の人があった。四月に結納で十二月に式。例は少ないが、お金のない家の例で「オーサンゴシューギ」と言うものがあり、普通の仕度でそのまま家に入るものがあった。(前箱田)

利根むこうとの縁組 利根むこう(利根東)から嫁さんをもらうときは、もらい方でたんすを買ってやらなければならぬ。

こんどは、うちから嫁をやる時にはうちで買って、嫁にもたせてやる。

それだから、勢多郡の方と縁組みをすると、損をするといった。

(下新田)

ムケエダンス 利根川のむこう(東側、もとの勢多郡のこと)から嫁をもらうと、もらい方からタンスを買ってやらなければならなかった。こつちから嫁に行くときには、むこうでは買ってくれない。

それで、勢多郡との縁組みのときその嫁に買ってやるタンスのことを、ムケエ(むこう)ダンスとっている。(元総社)

婚礼のこと 石倉町の辺では、婚礼のとき、女一見というのではない。たんすは、嫁のうちでもたせてやるのが、この辺のしきたりである。勢多郡の方から嫁さんをもらうと、もらい方で、たんすを用意しなければならなかった。そのために、勢多と縁組みをしようと、たんす一さお損するといった。(下石倉)

仲人まわり 御祝儀のあとで嫁さんの近所を回った。親戚や親しくしていた家を回り、手ぬぐいを配った。(巢鳥)

特になし。(大屋敷)

昔はてつだいに来ている隣組の「クミアイ」の家を回った。(植野) 近くの家に仲人と嫁の親が回った。「この人が仲人で樽入れになりました。」とあいさつをして手ぬぐいに名を書いて配った。(池端)

隣組を「オーサン」の時にまわった。手ぬぐいを持って行き、「○○さんの仲人でつとめます」とあいさつをした。(元総社四区)

樽入れの時に嫁さんをつれて回った。手ぬぐいを置いてゆく。

(石倉町上石倉)

樽入れの後に、婿の父と仲人で、隣保班と親類を回った。名入れの手ぬぐいを配った。(稻荷新田)

式の前日の一見の時に、婿とゆく、クレ方の父がつれて近所まわりをした。

当日は嫁と一見が来る。婿は里がえりの時に、身内の近い人と回った。(小相木)

樽入れの時に回った。(前箱田)

結婚が許されない場合 カケオチの例は少なかった。万に一つくらい。(人に知られるほどはない)(巢鳥)

カケオチをした例があり、親子の縁を切った。そうなる道で会ってもあいさつしなかった。(大屋敷)

あまり例がなく、親戚や近所が中に入った。(植野)

逃げてしまった。あまり例はない。(元総社四区)

あまり例がない。カケオチをしたことがある。(石倉町上石倉)

逃げたり、一時隠れたが、なかなか結婚ができず、親の言う通りになった。(稻荷新田)

カケオチの例もあるが、あきらめてしまうことが多い。(小相木) カケオチをして、日がたつともどる。子ができるとあきらめる。

(前箱田)

通婚圏 群馬町、元総社、吉岡村、東地区が多い。川原町は昔は地続きの群馬郡とつきあいが多い。(巢鳥)

吉岡村、群馬町、東地区が多い。利根川の東は少ない。国府と引間  
は方位が悪く「間が悪い」と言い、一緒になることは少なかった。

(大屋敷)

吉岡村、清里、元総社。勢多は少ない。

(植野)

村内は少ない。吉岡村の明治、駒寄。総社、群馬町、金古、榛東村。昔はあるいてきたので(大尽は人力車)あまり遠くないところ。

(池端)

二里四方くらい。群馬町も多い。榛東村など。(元総社四区)

群馬町、箕郷町までの辺、吉岡村、田口、川原。敷島辺ともつきあ  
いがある。町の南や、利根西が多い。(石倉町上石倉)

利根西が多い。群馬町や新高尾、川曲、新保。(稻荷新田)

利根川の西側で、群馬郡内が親戚になっているところが多い。滝川、  
岩鼻、清里、駒寄、新高尾、中川、長野村(やや遠い)など。(小相木)

群馬郡が多い。(前箱田)

#### (四) 結婚式

結婚式の日 十一月から三月ころ。(巢鳥)

十一月の麦まき後から四月ころまで。四月末まではカイコのススハキがはじまるのでおそい。また、あたたかいと料理がいたみやすいので寒いころにした。(植野)

秋から春。おそくも四月までにする。(池端)

三月ころ。(元総社四区)

春か秋。(石倉町上石倉)

春。いそがしくなる前の二、三月ころまで。春はヒマである。春蚕はほつておいても育つので春に式が多い。春は四月十五日のオコモチ前、秋は十一月十五日のアブラモチ(麦まき後)の後。(稻荷新田)

十一月く三月ころまでで、一、二月ころが多い。四月は春蚕になる。

(小相木)

一月く四月が多かった。四月の人は「蚕よび嫁ゴ」と言われ、嫁入りすれば番頭さんで仕事をさせられた。蚕前に結婚する人をそう言った。(前箱田)

結婚式の呼び方 ゴシユウギ(巢鳥・大屋敷・植野・池端)

ゴシユウギ

(元総社四区、石倉町上石倉、稻荷新田、小相木、前箱田)

嫁迎え 前の晩に行った。モライ方がゆく。一見の顔合せ。兄弟、

おじ、婿など男だけで行った。床柱を背に婿がすわり、クレ方があい

さつに出た。オチツキに生菓子が出た。(大屋敷)

前の日にムカエイチゲンが、婿、おじ、お婆と兄弟で行った。(植野)

当日ムカエイチゲンが行った。午後一時ころ行き、3時間くらいで

帰った。婿、兄弟、おじ、お婆で行った。(池端)

仲人さんがお供をつれて、むかえ一見としてつれてくる場合と、若い衆がむかえ一見として、提灯をつけて迎えに出る場合がある。

仲人さんが行く時には婿さんをつれてお昼に行った。(元総社四区) 村はずれまで車で来て、仲人さん嫁さんが降り、子供が提灯でむかえにゆく。(石倉町上石倉)

当日、式に呼ばれた人や、おてついでで手のあいた人が、夕方提灯を持って村はずれまで迎えに行った。

そこまで嫁さんは人力車で来る。降りて、仲人さんが先頭で歩いてくる。

嫁のおじ、お婆、兄弟が十人くらいで一見として来ることもある。当日の式のあとで宴会をした。

てつだいには親戚が家中で来ていた。足らないと隣組も頼んだ。庚申講の家は親戚扱いで呼んだ。(稻荷新田)

朝一見ができない時には、前日に婿がむかえ一見をした。その時に、むかえ一見が九人なら送り方は十三人と人数を多くした。また、お吸い物も、むかえ一見の座敷に三つなら、送り一見の座敷は五と多くした。(前箱田)

一見 はじめに、もらい方から迎え一見が行く。くれ方でご馳走になつてくる。

くれ方から、送り一見が嫁と一緒にくる。

トリムスビより先に、一見座敷がある。

それが終るまで、嫁は中宿で待つていた。トリムスビのときには、嫁しか出席しない。(下新田)

嫁が実家を出る時の作法 縁側から出た。(大屋敷)

出たあとでほうきではいた。(帰つてこないように)玄関より出た。

(植野)

ほうきで縁側よりはき出した。(元総社四区)

ほうきではき出した。(石倉町上石倉)

縁側よりほうきではき出した。もどつてこないようにと言う。そこ

で、「人の行ったあとをホーキではかないように」と言う。(稲荷新田)

縁側より出て、その後をほうきで座敷をはき出す。(小相木)

縁側より出て、二度と帰らぬようにほうきではき出す。葬式も同じ。

(前箱田)

嫁入り行列 嫁方のおじ達と人力車で送られてきた。(財産家)昭和

のはじめはタクシーできた。(大屋敷)

嫁と父、兄弟、オジ、オバがきた。(池端)

仲人と、親戚・兄弟の送り一見と一緒に来る。仲人が婿と少し先に

出て、少し遅れて送り一見が来る。(元総社四区)

仲人さんと来る。(石倉町上石倉)

門に出て、提灯をつけ、迎えが出ている。仲人と入ってきた。

(小相木)

送り一見ととくる。送り一見は中宿で、とり結びの間、待っていて、

のちにのりこんだ。(前箱田)

一里くらいだと歩きで来た人もいる。昔は人力車で来た。近所の若

い衆が待つていて、その提灯のあとについて入った。嫁さんはお菓子

をおみやげに持って来てくばった。(元総社四区)

中宿 事前に決めてあり、寄った。そこで、仲人も嫁も前帯にして

手をいれた。(巢鳥)

近い家か身近かな家にした。もどれないように道途中の家にした。

縁故のある家を使った。帯を前帯にして、手をそこにいれた。チュ

ヤドからホンヤドに入った。(大屋敷)

近所の「クミアイ」になつてゐる家。仕度しなをかえた。道中着から前

帯にして帯に手をいれ、上をみないように綿帽子をかぶった。オマチ

女房(結婚した人)が二人待つていた。つれになる人。(植野)

チュウヤドは隣か前、新宅を使った。そこで式の仕度にする。チュ

ヤドではオチツキにお茶がでる。知らせが来てから出発する。チュ

ヤドは通りを越さない手前におくきまり。(池端)

親戚の家が多い。チュウヤドと言ひ、むこうの一見が来て休む。オ

チツキと言つて生菓子がでる。仕度はそのまま。(元総社四区)

(石倉町上石倉)

隣りで近い家をチュウヤドとした。ちよつと休んで、かつこうを直

し、綿帽子をつけた。準備ができたら入る。(稲荷新田)

チュウヤドを置いて、したくをととのえた。(小相木)

家の手前で通りすぎないところに置いた。嫁さんと仲人でゆき、嫁

さんは江戸うま褌から前帯の打ち掛けにして、アトマルの下駄をはいた。

(前箱田)

御祝儀の服装 嫁の仕度は島田に角隠し、綿帽子で門をくぐった。

エンバナで親子の盃をした。婿むこは羽織・袴はかまで、紋付。親戚は普通の仕

度。(大屋敷)

婿は紋付・袴。嫁は島田に角隠し。中宿から綿帽子をかぶった。

(池端)

男は紋付・袴。ござ付の下駄で高いもの。女は島田に角隠し、江戸

褌。振りそでは少なかった。一見の人は紋付きに袴。(元総社四区)

男は羽織、袴に草履。女は島田に江戸褌で草履。親戚は羽織・袴。

(石倉町上石倉)

男は紋付に仙台平の袴と桐のこま下駄。女は綿帽子に江戸褌で、高

いアトマルのござ付の下駄。村の人は普通の着物に羽織。おしゃくと

りやいい家の人は袴。一見様は紋付でいい着物。婿のみ袴。(稻荷新田)

男は仙台平の袴に五ツ紋の羽織。桐のこま下駄。ござ付。女は江戸袴。白タビ。黒ウルシのござ付の下駄。一見は男は紋付、袴、女は江戸袴。(小相木)

男は紋付に袴。ござ下駄。女は江戸袴から打ち掛けにして、アトマルの下駄をはいていた。(前箱田)

むこのあいさつまわり モライ一見の間にむこさんのみ回った。手ぬぐいに名を書いてくばった。(植野)

嫁むかえの時に隣組に手ぬぐいを持って回った。(元総社四区)  
樽入れの時に仲人と回った。(石倉町上石倉)

式の前の一見に行った時。(稻荷新田)

式後の里がえりの時に婿がゆき、あいさつして回る。身内の近い人がついて回った。手ぬぐいに名を入れて回った。(小相木)

里がえりの時に手ぬぐいをもって回った。(前箱田)

嫁の入家の儀式 村中の若い衆が出た。嫁さんの中宿へ若い衆が迎えに行かないと式にならない。若い衆が「タカサゴノー…」と本唄を唄った。5人で5曲。観世流か宝生流。子供がいて、はじめに「タカサゴノー…」と言うと若い衆が続けて唄った。子供にはあとで祝儀があったので、みんなやりたがった。入口にはクワデで鳥居を作って入った。「これ以上を見るな」と菅笠をかぶせ、縁側より入った。(巢鳥)  
桑で門を作った。家に入る所でおしゅうとさまと水盃をかわした。入る時に嫁に菅笠をさしかけた。「フリコメヨメゴ」と言い、嫁が逃げないと言った。また、入る時には謡をした。それは正月に練習した。

(大屋敷)

入口にオガラで鳥居を作り、水引きでしばった。シュート、シュートメと水盃をかわした。入る時には「上を見ないように」菅笠をかぶ

せた。(植野)

ニワトコで門を作り、麻でしばった。門口にはタイマツをたいた。入る時にシュート、シュートメと盃をする。入る時に「上を見るな」と、菅笠をかぶして入る。ケエドからカドウタイが入った。ウタイコミという。「高砂や…」で入り、「ツキニケリ」で縁側についた。(池端)  
カドウタイがあり、「高砂や…」とうたつた。「ツキニケリ」のとのろでトボ口(ちま)にきた。大正まではケエド(カド)でたき火をして来ると燃した。大正以前は、弓張チヨーチンで若い衆が迎えに出た。むこうの若い衆が送ってきた。「無事に渡したぞ」「受けとつたぞ」ということになった。(植野)

嫁はチヨーチンをもち、村境まで送って行った。紋付きであいさつをし、樽(た)を渡して、嫁を送った、受けとつた印とした。(巢鳥)

クワゼで鳥居を作り、角隠しをかぶつてくぐる。入口では豆ガラを燃している。縁側より仲人さんに助けられて入る。五人組のカドウタイがいて、「高砂や…」と謡をうたつた。(元総社四区)

桑の木で鳥居をくぐって入る。縁側より入る。入口の両側ではクワゼ、根株をもやした。青年団が縁側に並び高砂の謡をした。式の時にも並んで謡をした。(石倉町上石倉)

クワゼで鳥居を作り、両側で持つている。鳥居をくぐり、縁側の前に置いてある杵(きね)をまたぐ。(太いのを見てもたまげないように)片足が杵をまたいだそのかつこうで、姑と一杯かわす。(家風にそまるように)のちカラ笠をかかげ(上を見るな)縁側より入る。綿帽子は上を見ないように。(稻荷新田)

クワゼを燃し、麻の木(のち桑の木になる)で鳥居を作り縁側より入る。姑さんが手をひき、もう一人が菅笠をかけて(これ以上をみるな)入る。(小相木)

クワゼを水引でしばった鳥居をくぐり、縁側より、取り結びの後に入った。入口でクワゼを燃した。縁側より姑さまがひっぱって入れてくれた。その時に、上を見ないように笠をかぶせた。上にあがる前に杵をまたぎ、親子の杯をした。(前箱田)

嫁が家の中に入るときは(祝儀のとき)、縁側からあがる。このとき、姑が嫁の手をひっぱってあげてくれた。(青梨子)

むかしは、嫁さんを迎えるときは、近所の人が、ムラの境まで行って待っていた。クワデ(クワゼ)など燃して、あかりをつけて(提灯をつけて)待っていた。おもに、組合の人(隣組の人)であった。

嫁さんは、人力などに乗ってきて、そこからおりてあいさつをして、こんどは組の人が嫁さんをうちまでつれてくる。

提灯をつけて、仲人さんがついてうちまでくる。

うちへ入るときは、むかしは、クワデの鳥居を、こぎの前の縁側のところにたてておいて、それをくぐらせて、ざしきへ入った。そのとき、菅笠をかぶせるようにした。

おくざしきでは、嫁さんは、床柱を背にして、東向きにすわる。待女房が二人いて、嫁さんの手をひいてすわらせ、仕度を直してやりした。

待女房はざしきの北側に南向きにすわる。女仲人は、嫁さんとならんで東向きに坐る。

組合の人はざしきの南側に、北向きに坐る。この人たちが謡いをうたう。

嫁さんがすわると、すこしおかれて婿さんが座敷に入ってきてすわる。ざしきの東側に西向きにすわる。男仲人が婿さんとならんですわる。

一同が席につくと、「所は高砂」のうたいがはじまり、トリムスピの

さかづきをかわして、近所の男の子と女の子が、酒をついでやる。

このとき、かざりもんをそろばんの上にのせたものを、嫁さんの前へころがしてやる。これには、男女のもちもんがかざってある。

また、高砂のじいさんばあさんの飾り物もおく。これは座敷の中央。「所は高砂」のあと、「四海波」のうたいになる。このときも、嫁と婿とで盃をやったりとつたりする。

そのあと「千秋楽」のうたいをうたう。そのときも盃のやりとりがある。

その終りころに、男仲人が婿さんをつついて逃がす。婿はその場からいなくなる。婿さんがいないというので、近所の人がさわざだす。男仲人に、

「婿さんをどこへにがした」

とせめる。仲人さんは

「知らない」

という。

そこですこしさわぎがあつて、それでは仕方がないというので、かわりの婿さんをすわらせる。そして式を進行させる。代りの婿は近所のわかいしゅ。

三度目の盃がすんでから、おたかもりがでる。これは、女仲人さんが、嫁さんにすこしはさんでくわせる真似をする程度。

式がすむと、近所のこえが、

「嫁さんの名前はなんというのか」

と聞く。女仲人さんがおしえると、組の人は

「いいお名ですね」

といってほめる。

このあと、嫁さんは着がえをして、夕飯を食べる。



そのあと、近所の女衆にお茶をだし、もってきたお茶菓子を出して顔合わせをする。

待女房は近所の中年の嫁さん二人。嫁さんがざしきへあがる時の手ひき役。前帯をしめている。

親は式には出ない。式がおわつてから、男親が、「ごくろうさまでした」とあいさつに顔をだす程度。

近所の人は五、六人。うたいをうたう役。うたいをうたえなければ、よその組からうたえる人をたのんでくる。

男のものは大根でつくった。女のもののはさけの頭でつくった。

島台は、高砂のじいさん、ばあさんをかざった。じいさんはほうき、ばあさんは熊手をもっている。隣保班の人がつくった。

むかしはろうそくであかりをつけた。(江田)

嫁が家に入るとき、縁側から入る。このとき、嫁に杵をまたがせる。これは、旦那のもんはこのくれえ大きいけどたまげるといふこと。

クワゼの鳥居をくぐつて、縁側から家の中に入った。

縁側はあがるとき、縁側のところに姑さんがいて、嫁と親子盃をかわす。女仲人が世話をした。盃を口のところへやって、飲む真似をした。

縁側の前に台をおいて、そこからあがった。そこから奥座敷につれていって、トリムスビになった。(下新田)

クワデで鳥居をつくった。

嫁がきて、座敷へあがるのは、縁側から。そこへ、鳥居をたてておく。

嫁が屋敷へ入ると、菅笠をかぶせるようにした。縁側の前では、杵をまたがせた。(男のものがでつかくともたまげんということであるという)

縁側はあがるとき、鳥居をくぐらせ、姑様が縁側のところにおいて、嫁を抱きあげる真似をした。(西箱田)

式のときには、嫁がくると縁側からあがった。ここに姑がまつていて、手をひいて座敷へあげた。縁側へあがる時、クワゼの鳥居をくぐらせた。

なお、屋敷の内へは、かど口のところでたき火をして、嫁にすげ笠をさしかけて、うちへつれこんだ。(下石倉)

むかしは、嫁いでくるときは、すぐにうちへは来なかつた。中宿があつて、そこへ寄つてからきた。

嫁さんは、うちを出るときは江戸褌、中宿でまえむすびにしてみらつた。手を前帯のあいだに入れてくる。

つのかくしできて、中宿でわたぼうしをかぶらせた。

縁側のところで、嫁が待っている。

ここで、二人は水さかずきをかわした。

嫁はさきにやつた。

縁側からざしきに入った。

そこには、待女房が二人待っていた。

両側に待女房がすわり、その間に嫁がすわつた。

それからトリムスビになる。

トリムスビが終つてから、嫁の顔が見えないと、まわりのわかいいしゅ

などが、

「顔見せてくれ、名前開かせてくれ」

などといった。

なお、このとき、婿と嫁の名が同じようだと、

「××と××では困る。名前をとりかえてくれ、○○にしてくれ」  
などという。

そうすると、嫁さんの俗称は〇〇さんになった。そんなこともあった。(青梨子)

待ち女房 なし。(大屋敷)

江戸褌で、嫁と同じ緋の帯。丸まげ。(植野)

玄関に入る時に前帯で待っていた。(池端)

帯を前にしたオマチ女房が二人いた。五人組の人で、江戸褌、帯に手を入れていた。何もしない。なぜいるのかわからない。(元総社四区)

江戸褌の待ち女房が中宿に来て、仕度をかえるの手つだつてくれた。帯の前をタイコにしていた。式の時にはいなかった。

(石倉町上石倉)

両親が丈夫な人が二人、江戸褌ですわっていた。前帯のタイコオビにしていた。(稻荷新田)

オマチ女房は、式で両側に江戸褌の正装でいた。帯を前に結んでいた。三三九度の介添えをした。「若い人をオマチ女房にするな」と言う。まちがえるからだと言う。(小相木)

オマチ女房が二人いた。式ではすわっているだけ。翌朝一緒にごはんを食べた。お腹に子のない人。「子がいると出てしまう」と言った。

(前箱田)

トリムスピの席には、おまち女房が二人すわった。

これは、これから、嫁御につれになるような人がえらばれた。

おまち女房は、はじめは中宿で待っていて、トリムスピになると、その席にも出た。

トリムスピの席には、女性が四人出席した。

待女房が二人、女仲人と嫁である。

ここでは、男仲人はトリムスピの席には出ない。(青梨子)

嫁の道具送り 荷物は村で決めて、先にリヤカーで送った。鏡は割

れると縁起が悪いので、子供が一人しよつてきた。荷物をしよつて来た人にはカネツケにも赤飯をもつていく。村はずれに若い衆が待つており、荷物の案内をした。タンスはならべた。(大屋敷)

荷物は先に近所の人を頼んで送った。荷物はかざつておいた。(植野)

荷物は、ムカエ一見がつくころには出られるようにしておき、先に行つた。近所の人が荷車で持つて行つた。長持(あると大尽と言われる)、下駄箱、布団が入つた。(池端)

リヤカー三台くらいで来た。タンスが長持、下駄箱、鏡台。運んだ三人にはお祝い。一杯のませ、引き物をつけた。一見と同じ扱い。

(元総社四区)

リヤカーに積み、近所の若い衆が運んだ。式の当日に嫁より先に向こうの家に行つた。むこうの身内が座敷に並べて見せた。運んだ人にお膳と、お祝いの金がもらえた。(石倉町上石倉)

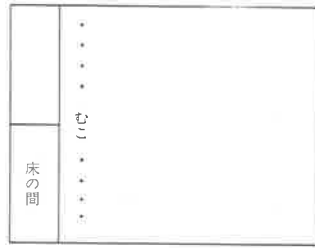
式の当日、嫁さんの来る前に荷車で運び嫁さんのうしろに並べておいた。荷物は若い衆が頼まれ2台で運んだ。タンス、長持ち、鏡台、下駄箱、タライ、洗たく板、張り板があつた。運んだ人は、ごちそう、酒、お祝いを出した。(稻荷新田)

当日近所のタンス引が運んだ。若い衆が嫁さんの来る前に荷車で引いてきた。二〜三台になった。運んだ人には金一封(御祝儀)と酒、サカナがついた。一台に、引き手、押し手がついた。立候補するほど希望があつたが、隣組班長よりの指名があつた。金や料理についての帰つてからの話が楽しみで、少し誇大な話をした。使う物一式を持つて来た。タンス、長持ち、下駄箱、鏡台、張り板、タチ板、タライ、衣桁、寝具一式、マナ板、洗たく板など。もう一方で結納金を出す、それによつて持つて来るとのが買えるくらい。昭和はじめに百円くらい。(桐タンスが五十円くらい)三日目の里返りの日の留守の時に、近

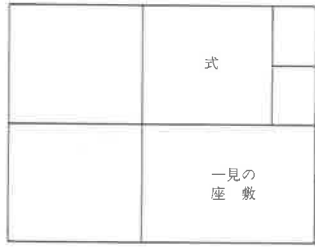
所のオバさん連中がタンスを引っばり出してみる。カギは承知してあけていく。(小相木)

荷物は送り一見と一緒に、前の日に来る。一見が中宿にいる間にかざりこむ。取り結びのまわりに並べた。牛で引っばる運送かりヤカーで運んだ。タンス引きの他に、「手箱しよい」二反ふろしきで裁縫道具をしまった。結納で納めた(作った)道中着、江戸棲はジョーガケで持って行った。他に、夜具、タンス、三ツ金輪のタンス、タチ板、ハリ板、小タンス、などがあり、運送なら一台で、リヤカーなら二〜三台で運んだ。運んだ人には別座敷で、包み、引き物が出た。運ぶ人は隣保班長より選ばれた。(前箱田)

一見座敷 前の晩にモライ方で、男だけで行った。一見の顔合せ。クレ方があいさつに出た。(大屋敷)



(大屋敷)



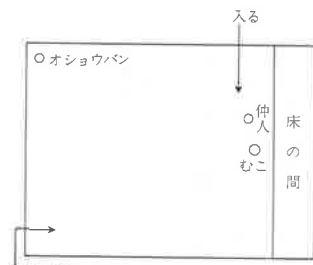
(植野)

前の日にムカエ一見で、婿、おじ、おば兄弟が来て、当日、オクリ一見で、嫁、おじ、おば、兄弟が行った。または、当日の朝にムカエ一見が来て、夕方の座敷は式の間はしめておき、のちいっしょにした。

当日、ムカエ一見が一時ころに行き、3時間くらいで帰った。婿、(植野)

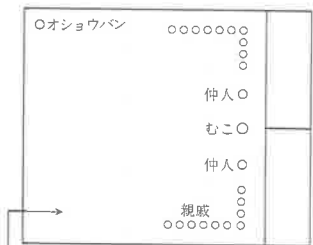
兄弟、おじ、おばが来た。(池端)

迎え一見の座敷 迎え一見はお昼ころに来る。婿と仲人が行き、や遅れて送り一見がゆく。(元総社四区)



親戚が酒をつぎに入る。仲さんが酒の前に紹介する。

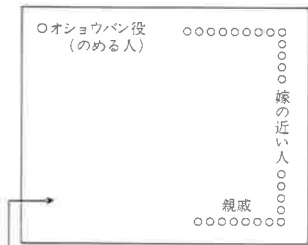
迎え一見の座敷



クレ方が1人1人出てきてあいさつをする。おわって酒になる。

迎え一見の座敷

送り一見の座敷



モライ方の親戚があいさつする。

送り一見の座敷

お茶とおちつきのと2時間くらいかかる。あいさつのおち袴をとる。「オタイラに」と言う。ハカマをジョーガケにたんで入れる。終ると隣保班の座敷になり嫁さんはお給仕に出る。(前箱田)

(前箱田)

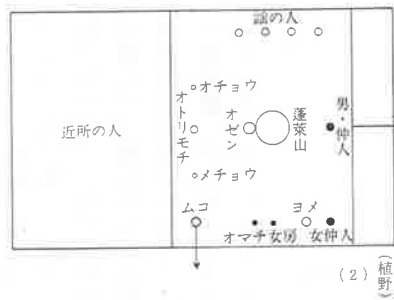
婚礼儀式の配列 座敷に蓬莖山を作った。米、小豆、大根、ネギを並べた。高砂の人形はネギを昆布でまき、ネギの根をシラガにして作った。三三九度の容器も紙で作り、水引きで結んだ。(巢烏)

一見様に娘が二人でつく場合と、男の子が女の子の方へ、女の子が

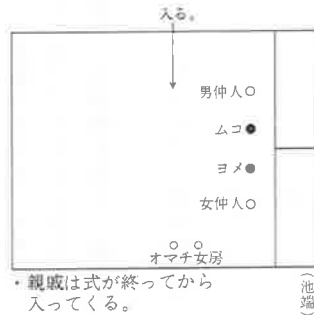
男の子の方につく場合があった。娘の場合、その時に「うちの嫁に」という話がまとまることがあった。

座敷の中央には、お膳の上に米を置き、上に鶴、亀を置いた。男の道具、女の道具を作って置いた。(二元総社四区)

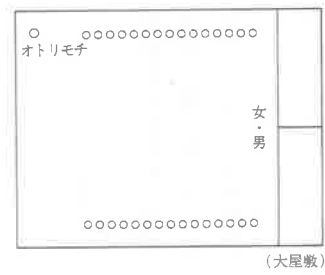
中央に大根で作ったものを、二見が浦式に置き、コブの細く切った



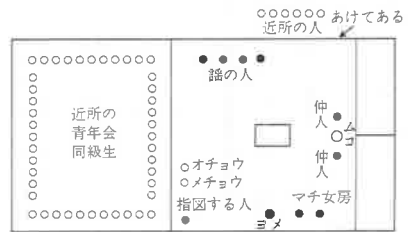
- ・蓬萊山は豆、米で作った。
- ・ムコはサカナもらうと、謡の三番目に出てしまう。



- ・親戚は式が終わってから入ってくる。



(大屋敷)

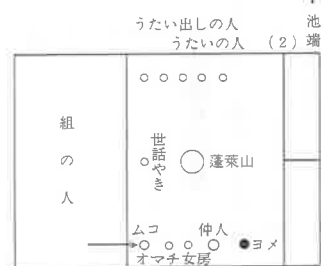
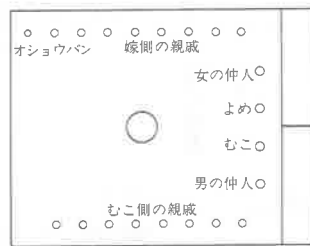


- ・見物人が多かった。
- ・荷物(は)は式場に並べてあった。奥の障子の前においた。

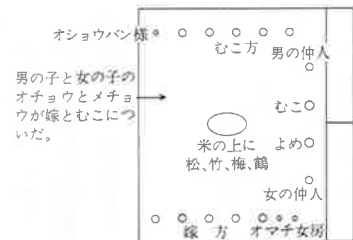
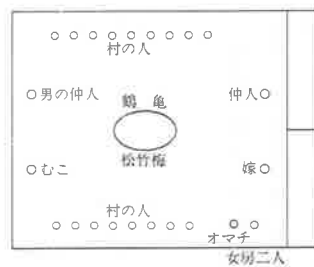
(1) (植野)

ものをまわりに置いた。先に唐ガラスをはさんだ。(石倉町上石倉)

はじめに口の達者な人が口上をのべる。三三九度がおわると、ソロバンと大根を使った儀礼になる(後述)。しめは「シャシャシャンシャン」の3回。婿逃げはない。のち一見客の親戚が来て2時間くらいで帰る。(早く来て早く帰る)のち村の人の宴会になる。大根とそろばんを使った儀式は今八十年代以上の人の式にあった。大根で男のもの、女のものを作った。コブをつけたり、松の葉をつけたり、えぐってトウガラシをおいたりした。作ったものをソロバンにのせて、嫁さんの



(2) 池端

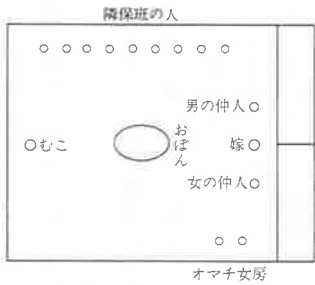
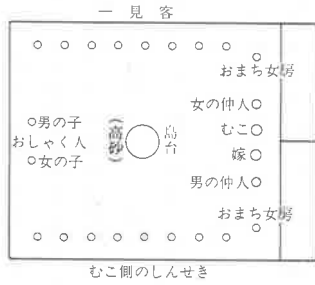


- ・男の子と女の子のオチヨウとメチヨウが嫁とむこについた。

裾の間にころがした。(裾はすわりやすいようにまくってあり、そこを目がけた。)また、男のものに竹で車をつけ、女のものに向けて動かし、二つあわせたりした。端においてあり、参列者がまわした。倒れないように赤白の水引でしばってあった。また、膳の上に米をならべ、松竹、梅や高砂のじいさん、ばあさんを作って置いた。ネギの顔に、のりの着物であった。(稻荷新田)

一見客、嫁は縁側より入った。はじめに三三九度があつた。式がかわると被露宴になつた。嫁さんは仕度をかえた。逃げ婿はない。近所の人は別の部屋に宴席がある。身内の年長者よりオショウバン(口のたつ人で酒ののめる人)をつけた。一見の座敷は三時間かかった。近所の人の座敷も十一時ころまでかかった。一見もだれを選ぶかはたいへんであつた。一見客は十人以上つれてくるなど言う。器がそろわないから。町内で三々五軒で十人分の二の膳までの器がそろつた。島台には白米をしいて池にした。ネギに顔を描き、昆布が上下に、水引が帯になつた。根が髪になつた。これを高砂のジイババにした。(小相木)

隣保班の人が大根と鮭の頭で男と女の道具を作り、ソロバンにのせて嫁さんころがした。謡は入りきつてからにした。婿が三三九度の



おわりそうな時に逃げて別の人がすわつた。中央のお盆には昆布の着物で、ネギの顔で竹の笹を使って作った「高砂」があつた。三三九度のおしゃくとりは、オショウ、メチヨウと言ひ、交代で三回ついだ。男は嫁に女は婿へ。(前箱田)

親子盃 三三九度のあとで親子の盃をした。その場でした。式の時、に姑さんもいれて六人で並んでいたことがある。南端におばあさん、北端におじいさん。(元総社四区)

取り結び(三三九度)の順序 嫁がすわり、仲人がすわる。婿が来る前にかえ婿を決めておいた。式の途中で突然婿がにげ、嫁がおどろくとかえ婿がかわつてすわる。謡に入り三三九度を五回する。タカサゴからニワのイサゴまで五つの謡をする。婿が逃げ、代わる。手ばたきで式が終り、飲みはじめ、余興になる。

式の時仲人が紹介するが、聞こえないふりをしていて、三々四回は名を言わせる。

三三九度・親子の盃があり、オショウとメチヨウ(三々四歳の子)はいくつも指示をされて回る。(巢鳥)

婿さんは式の途中で普通の仕度で出てくる。三三九度をするときすぐに出てしまう。座にいた人のうちで代わりの人がすわる。(大屋敷)

すわるとお茶が出る。お茶を片づけたのちに蓬萊山を出す。次に謡の人が、「○○の式を○○の仲人ではじめます」と言う。次に謡があり、一番の「四海波」で、嫁・仲人・婿に、四番の「千秋楽」でオマぢ女房のところ、サカナ(ノシイカをまるめて煮て切つたもの)をくばる。酒をついだところに持つてゆく。次に婿がいなくなる。婿は出てきて酒をもらひ、サカナをもらふ。婿がいなくなると「どこにいったんだろっ」とさわぐ。

「千秋楽」の謡でおわり、嫁は別室に。オマぢ女房は帰る。別室で

一見と仲人を紹介して酒をのむ。一見は式のおわるころに来ていて、オクリの座敷に入る。近所の人は宴会になる。一升カンドックリに作つても間に合わないほど。

式の途中で、ソロバンの上に大根をのせたものが飛び出てゆく。お膳の上に大根をおき、大根は半紙でまき、水引きでしぼる。お膳はソロバンの上のせておき、嫁さんの方へ動かした。

近所の人は、イモ出し、ススはき等の準備で一杯、式で一杯、親類はカネツケの夜に一杯、あと片づけで一杯のめた。(植野)

はじめにオチヨウ、メチヨウが位置につく。三三九度のちに謡となる。謡は四つある。(池端)

蓬萊山 式の途中に、男女の物をつくつて、そろばんにのせて、隣組の人が、嫁さんのひざをめぐけて、ころがしてやった。

それを女仲人がかえしてやる。

また、ころがしてやる。

それをまたかえず。

それをくりかえした。

これを蓬萊山といった。隣組の人が寄つてつくつたもの。(下新田)  
かわり婿 むかしの婚礼の場では、式の途中で婿がいなくなった。そうすると仲人が

「どうしても、婿がめっかんねえから、誰か婿の代りをしろ」といって、代りの婿をすわらせる。

その婿は、ひょうげてすわりこんでご馳走になった。

嫁さんは、しきたりのことを知らないで、たまげたといい。(下新田)  
婿がにげること 婿はトリムスピの席に坐っているが、途中で逃げだす。

うたいがはじまると逃げる。

あとは、お相伴役の人が世話をやく。(青梨子)

おたかもり トリムスピのときには、嫁の前におたかもりをだす。

これは、ふつうのおわんにご飯を山もりにもつて(ご飯をねる)二本の箸をたててだす。ふたをのせてだす。

すえのかさ(ふた)に、女仲人が二粒くらいとつてやる。それを嫁さんに食べさせた。

おたかもりは、あとで、若夫婦がおじゃにして食べた。

なお、このとき、お膳は女だけに出る。(青梨子)

披露宴 式が終ると嫁の親類が来て、一見座敷になる。その場所にはオシヨバンがいる。

オシヨバンは酒を早く飲ませて早く帰るのが役で、たくさん飲みそうな人には早く飲ますようにした。酒の強い人がオシヨバンをした。二三人はつぶれるほどに飲ませた。飲む、飲まないはオシヨバンの腕したい。(池端)

親類は昼ころに来て宴会をしてしまう。嫁さんは夕方来る。式のおわつたのちに、仕度をかえて、訪問着に着がえ、お茶出しをして菓子を出した。(大屋敷)

式がおわると嫁さんは仕度をかえ給仕に出た。(植野)

その場所では嫁さんの紹介があり、お茶をついだ。(池端)

式には四日かかった。(一週間のこともあった)四斗樽が二本あいた。普段飲むことがなく、一番の楽しみであった。若い衆は村中どこでも行った。(菓鳥)

三三九度とは別の部屋に入り、そこで披露宴になる。そこに一見がまっていた。一見が十七八人のこともあった。(元総社四区)

披露宴は約2時間。親戚からオシヨバン役がついた。様子を知っており、酒がのめ、調子のいい、いろいろの話ができる人。のち村の

人の座敷になった。式にでた人もこのつており、二間あけてなごやかに飲んだ。あとは長く、十二時〜一時ころが片づけになった。一斗だるでは足らなかつた。嫁さんは仕度をかえておしゃくをした。また、「嫁さんの手みやげ」というみやげを相手の兄弟にわたした。

(稻荷新田)

一見の座敷のあと、一〜二時まで近所の人が飲んでいて、嫁さんがさしに出た。それがおわると嫁さんがおみやげの菓子くばつた。嫁さんはあまり寝ていられなかつた。(元総社四区)

むかしのご祝儀　むかし(大正時代〜昭和六年ころまで)は、ご祝儀は三日間あつた(三日ご祝儀)。

一日目は、一見のとりひき。

二日目は、ご祝儀(トリムスビ)。

三日目は、かねつけ。里帰りをする。

もらい方の一見が前の晩にくれ方へ行く。一見座敷でご馳走になつてくる。

これは男だけの一見。おじさんとか、男の兄弟など。(ご祝儀の日のこと)

三日目の里帰りのとき、男だけの一見が行く。男親とわか夫婦の三人で行く。このときは、婿と男親は帰ってくる。

嫁をおくつて、女親とか女の姉妹がついてくる。(青梨子)

#### 式の日程

・第一日目…トリムスビ。

・第二日目…カネツケ。

神社へのおまいり。

近所まわり。

このときは、婿の親がつれてまわつた。

・第三日目…里帰り。ミツメという。

このときは、婿も一緒に行つた。

くれ方のおじさん(嫁のおじ)が婿をつれて、ムラ内の親類とか近所をあいつつまわりした。

このときは、泊らずに帰つてきた。

・第四日目…あとかたづけ。

このときは、うちうちの人とか、近所の人をよんでご馳走をした。

(下新田)

婚礼いろいろ　・むかしの婚礼はつぎのとおり。

式の前の日…一見がいく。

式の当日…トリムスビ。

式の翌日…カネツケ。

三日目…里がえり。

女衆は一見には行かなかつた。あとでお客に行つた。男一見が行つた。式の前の晩に、もらい方の一見が行つた。

かねつけの晩に、くれ方の一見がくる。

三日目の里帰りのときには、もらい方の男親が嫁婿についてくる。

その日のうちに帰ってくる。

ひぎなおしは、式のあと、三日たつてから、嫁婿が里へ行く。嫁だけ泊ってくる。

明治三年うまれの人のかねつけなし。慶応元年うまれの人のかねつけをしたという。(青梨子)

結婚式を見に来た人への振る舞い　なし。(大屋敷)(植野)(池端)

床入れの風習　なし(大屋敷・植野・池端)

話で父の代にはあつたと言う。立ち合つた。(稻荷新田)

前の代の話として、仲人が同じ部屋に寝たということがあつた。

(小相木)

みとどけ むかしは、新夫婦が床入りするのを、仲人がみとどけたという。(青梨子)

料理番 近所の人。(大屋敷・植野・池端)

近所の器用な人に頼んだり、魚屋さんにも頼んだ。(元総社四区)

近所の器用な人がした。(稻荷新田)

料理番と呼ばれる器用な人がいて頼まれて作った。サシミ切り、卵を焼いた。いつも回りに酒、サカナがあり飲んでいて、よつばらって最後には味がかわつてくることがあった。(小相木)

隣保班みんなで作った。(前箱田)

本膳の料理 ヒジキにアツアゲ。(巢鳥)

オヒラに煮物(ザクニ)をのせたもの。イモ・ダイコン・ニンジンがあった。サカナは鮭の塩びき一切。酢のもの。チョコに豆。ヒジキは葬式。(大屋敷)

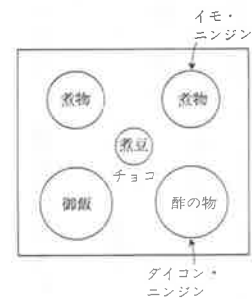
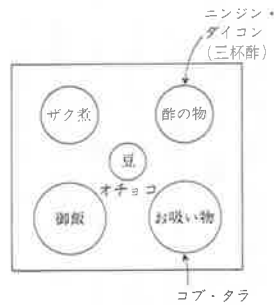
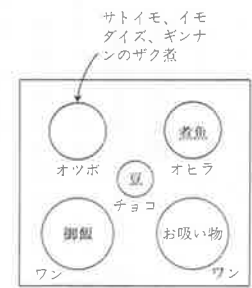
その時によるが、鯛の頭付。サシミ。(植野)

オカラ・キンピラ・オカシラツキ・イモ・野菜の煮たもの。(池端)

本膳 お吸い物はコブにタラ。カマボコも使った。お吸い物を五種出した時にはキジも使ったが五膳例は少ない。クレ方が二種のお吸い物を出すと、モライ方は三種のお吸い物を出した。三種なら五種出した。本膳はネコアシの膳で、二品でも二の膳になった。(一の膳に入ららないと)他に、ニンジン・キンピラを使った。(元総社四区)

カマボコのお吸いものはあとで出た。ニンジンや昆布にタラ(コブタラと言う)も出た。数の子は大きな皿に盛りまわした。シヨージに一つ分。キンピラも別にあり、とった。(稻荷新田)

酢の物、サシミ、豆とイモの煮つけ、カマボコ、タラ、コブ、タマゴのお吸い物が出た。御飯はあと。また、一見のまん中に鯉の二匹煮



たものを夫婦にして大皿に盛り、見せてから小皿にとつて配った。終る時にはネギのヌツペ(アンかけ)が出た。これが終りの会図。(小相木)

オカラはキラズ・キラワズと言つてつける。ザク煮は野菜の煮たもの。ノツペは面どりをしたニンジンの煮もの。キンピラはお盆にのせておき、とつた。二の膳付でもお吸い物が別につくくらい。(前箱田)

祝儀膳 ホンケカブが持つといい、本家が持つて新宅が必要に応じて借りた。

今も六尺の長持ちにしらべてある。(西箱田)

結婚式の引き出物 ミジンコのお菓子。鯛、亀、鶴の形になっていた。普通の家はそれだけで、一見だとその上にイカが10枚ついた。

(元総社四区)

イカ(スルメ)とミジンコの菓子。竹、亀、鶴の形をしていた。中にアンコが入っているのは良いほう。(稻荷新田)

ミジンコの打ち菓子。松、竹、梅、鶴、亀の形であった。金があるとカツオブシをつけた。(小相木)



ミジンコの菓子。鯛、海老、貝などで、金によりさまざまになる。金のある家は固くしっかりしたものだ。ない家はやわらかいものであった。昔は甘い物がないので楽しみにしていた。(前箱田)

### (五) 婚礼後の習俗

嫁の村廻り 次の日に丸マゲにして村を回った。手ぬぐいに名を書きしておく。(巢鳥)

なし。(昔はあったらしい)(大屋敷)

カネツケの日にオバさんと近所を回った。手ぬぐいをくばり、道中の仕度で回った。(植野)

カネツケの日に村まわりをした。(池端)

式の次ぐ日はカネツケで、シュートさまがつれて回った。隣組、手つだつてくれた家。名入れのものを配った。(元総社四区)

その家の都合で日を選び、シュートがつれて隣保班や親戚を回った。

(稻荷新田)

式の翌日はカネツケで、嫁仕度ですわっていた。顔を見せ、道具を見せた。三日目に近所を回った。また実家にかえった。実家からはその日に帰った。回っている間「タンスのカギを開けておいてくん」と言われ、持ってきたものを見せた。近所でみんなで見て「今度の嫁はこんなもの持って来た」とか「こんなに持って来た」とか言ったもの。この日は、「ゴシューギが終つたらオシロイつけねえでくんないなあ」と言われるほどいそがしく、化粧する間もなかった。(前箱田)

カネツケ オハグロと言ひ、祖母の代の人でつけている人がいた。マユ毛をすってしまった。オコワを朝早く、ふかして実家にふた重箱もってゆく。梅のつけたのが入っている。(巢鳥)

翌日、仕度をして、座敷にすわられた。顔みせと言った。来た人に

お茶出しをした。夜までした。カネツケは話にあつた。二代上の祖母はそうであつた。明治はじめ生まれの人。時々ぬつていたが、きれいであつた。カネツケの日にはオコワの本膳を朝早く作つた。午前二時ころ来た人もいる。そのころはまだオコワの準備でおきていた。

(大屋敷)

次の日島田を丸まげにした。歯を黒くしてマミ毛をすつた。オハグロの木を買い、イロリ端でそめていた。(祖母の代)

式の次ぐ朝は三時おきで赤飯をたき、朝食をいっしょに食べた。赤飯は嫁さんの家に持つて行つた。(植野)

カネツケと言つた。山から実をとつてきてそれをつけた。明治中ごろの人でした人もある。その頃はチョンマゲもまだあつた。その日は朝三時ころおき、赤飯を作り、重ねの重箱で実家に持つていった。

(池端)

式の次ぐ日に、赤飯をたき、嫁さんの家にふた重箱送つた。昔はホケイにいれてしよつて行つた。カネツケは話だけである。明治の人がつけていたのを見たことはある。(元総社四区)

式の翌日をカネツケと言ひ、赤飯を重箱につめて朝早く実家に行つた。オハグロは母の代にはつけていた。祭りなどのモノ日や家に行く時など、普通は白い歯を黒くした。結婚した証拠につけたもので、マユ毛もおとした。(稻荷新田)

式の次ぐ日にカネツケと言ひ、赤飯をもつて行つた。また、マユをおとした。これで結婚したことがわかつた。(小相木)

カネツケは祖母の代でしていた。オハグロをつけマユをおとした。赤飯をたいて実家にしよつて行つた。お供が持つて行つた。赤飯のつめようで、シュートの根性が知れると言ひ、入れものがこわれるほどに、フキンできつちりとつめた。また、梅干しを紙でつつんでそえた。

「ともにしなびるまで」という意味。(前箱田)

式の翌日、むかしは、嫁はおはぐろをぬつてから、赤飯をもらい方から嫁の里へかねつけのおこわを届けた。

かねつけのおこわは、なるべく早くもって行くものだという。持つて行くのは、もらい方の近所の若い衆。ちかしいうちのものにたのんだ。

かねつけのおこわの持つて行き方で、もらい方の気持がわかるという。

使いの者には、いくらか祝いのおかねをくれた。

くれ方からのおかえしとしては、麻と梅干しが入っていた。これは、麻のようにしらがなるまで、梅干のようにしわがよるまで、二人は一緒にいるようにということであった。(総社町新田)

かねつけのおこわ かねつけのおこわは、式の翌日、もらい方からくれ方へ届けた。大きな重箱にかさねでやった。

このおこわがくれ方へ届かないと、嫁と婿がうまくいかないといった。赤飯が届けばうまくいった知らせであるという。(青梨子)

むかしの結婚式ときには、式の翌日に、もらい方で、朝早くおこわをふかして、嫁の家へもっていった。若い衆(弟)には先方で心づけをやった。

これを持つていくのは、嫁さんの弟とか、近所の若い衆、ホケエに入れてもっていった。

このおこわのことを、かねつけのおこわと叫びた。これは、なるべく早くもって行くものだという。

このおこわが届くと、嫁のうちでは近所の人を寄せておてのくぼでおこわを食ってもらった。

「かねつけのおこわがきたから、食べにきてください」

といって、近所の人をよんだ。

おかえしは、ホカイの中に梅干を入れてよこした。しわがよるまで、丈夫ですごせるようにということ。(下新田)

式の翌日、かねつけのおこわをふかした。でつけえ重箱に入るだけのおこわをつめて、嫁の里へもっていった。

里では、そのおこわを近所へくばった。

かねつけのおこわがいかないと、娘をもらってもらったことにはならなかった。(青梨子)

髪結いさん むかしは、くれ方で費用を払って、嫁さんに髪結いをつけてよこしたという。

仕度をしてくれたり、髪を結ってくれたりした。

(式の翌日には、かねつけでお客にくるから)

嫁にくるときは、島田まげできたが、式の翌日には、ほんだに結いかえた。(青梨子)

式の翌日の行事 片づけくらい。一見に男女まじってくるので女一見はない。(巢鳥)

ゴテイギブルマイがあった。午前中片づけを行い昼より行った。料理のこりにお吸い物とサカナを用意し、一杯出した。式は、前日、片づけで四日かかった。(植野)

前日、当日、カネツケ(村まわりをした)、片づけ(里がえりをした)。親が送ってゆき泊った。四日かかった。モライゴシューギだと四日は飲めた。(池端)

式の翌日の行事 ゴテイギブルマイといい、式の行事がみんなおわってから手つだててくれた人にごちそうをした。前日が結納で、本日、二日目(ミツメ)が里がえり、四日目(ゴテイギブルマイ)になった。カネツケの日に嫁さんの家から一見がくる

こともある。家によりまちまちである。(元総社四区)

式の翌日は、着物を着がえ、座敷にすわっていた。着物の被露と村の人に顔をみてもらうためで、タンスをあけ見てもらった。着物も三回着がえ、頭もなおした。(稻荷新田)

式の次の日はあと片づけをして宴会をした。(小相木)

嫁の里がえり 三日目に行く。里がえりと言う。すぐに帰ってくる。

(巢鳥)

次ぐ日がカネツケで、三日目が里がえりになる。行ってくるだけ。

婿さんが一緒に行き、むこうでごちそうになる。三、四日目ヒザなおしになり何日かとまる。あと片づけの人が帰ったあと。親が送ってゆき三晩くらいとまる。その他の里帰りは、三月の節句—紅白の菱餅をもってゆく。五月の節句—タラの干物をもって行く。七月の農休み、九月のシヨウガの節句—シヨウガを持って行く。「シヨウガない嫁」だが、シヨウガがあるので「シヨウガがある嫁さん」になる。正月、春祭り、アキアゲ、オカイコマゲ—餅を持ってゆく。暮—お歳暮にシヤケを持ってゆく。それぞれおかえしはない。(大屋敷)

里帰りは一週間目で、シュートさんが送って行った。菓子折りを持って行き、泊ってきた。その他の里がえりは、祭り、三・五月の節句、農休み(生き盆と言ひ、近い親類を呼んだ)、九月一日は八朔の節句で、芽シヨウガの節句でシヨウガを持って行った。(植野)

里にはモノ日、祭りに帰った。三月の節句—菱餅を持って行った。

五月の節句—タラのヒラキの干物もって行く。農休み、お盆、正月、九月のシヨウガの節句—シヨウガを持って行く。十月の祭り、暮—お歳暮にサケを持って行った。(池端)

一週間目にヒザナオシで実家に二晩とまった。お菓子をもって行き、また別の菓子をもって帰る。(親心で、もってきたものよりも多くかえ

す。かわいがってもらうために)祭りの日、節句、農休み、正月の四日、九月一日(八朔)、暮に帰った。三月には菱餅、五月にはタラの干物を持って行った。九月一日はシヨウガを暮には塩引きを持って帰った。(元総社四区)

初里帰りは家の都合による。一週間から十日目までくらいに帰った。ヒザナオシといい、向こうのおかあさんが送ってきた。おかあさんは本家や親戚にあいさつをすわっていた。あとは、春の初午、秋のオクンチ、節句、八朔の節句、盆、正月に帰れた。八朔にシヨウガを持って行くのは、「これ以上あげるものがないのでシヨウガがない」とも、「子がたくさんふえるように」とも言った。(稻荷新田)

式より少したってヒザナオシに行く。婿側で、向こうの親、兄弟へものを用意した。嫁方よりのおかえしは「ザル」。めの大きいもので、大目にみてもらいたいとの意味。八朔の節句にはシヨウガを持って行った。(小相木)

節句には餅をもつて帰った。「ヤツタリトツタリ節句の餅」と言い、もつと大きいものを持たせて帰した。五月にはタラの干物を持って行った。八朔の節句にはシヨウガとアジの干物を持って行った。ゆくと、スミとウデマジョウを出してくれた。歳暮は塩引きが決まりものであった。(前箱田)

仲人に対するお礼 お盆。額は家による。四(クレ方)、六(モライ方)の割合で相談して渡してきた。(巢鳥)

酒を一升とお金。相談をして、クレ方四分、モライ方六分とした。(大屋敷)

お酒とお金。お金は結納の一割。モライ方の出す割合がやや多かったが、今は同じ。(植野)

仲人礼は結納金の一割くらいで、お金で持って行った。折りをつけ

た。(池端)

酒と金に餅をつけて、十日くらいたってから行った。金はモライ方六分、クレ方四分でわけた。(元総社四区)

お金と酒一升を持って行った。身内の人の場合はかんたんで、他の人は多かった。(稲荷新田)

酒二本(両方で一本ずつ)とお金(結納金による)。あまりお金がないものもある。(小相木)

酒とお金をつつむ。額は結納金による。金額はモライ方のほうがクレ方より多い。(前箱田)

離婚 あまり例はない。人に頼んでエンキリにしたことがある。よく頼まれる人がいた。(菓鳥)

例はあまり多くない。エンキリと言う。(大屋敷)

エンキリと言う。(植野)

イキワカレ(エンキリ)と言う。(池端)

エンキリと言う。三区に縁切り薬師があり、(化粧薬師)顔に化粧をしておいた。酒とリンゴなどをそなえている人を見たことがある。願意文をあげる例もあった。(元総社四区)

エンキリと言う。(稲荷新田・小相木・前箱田)

再婚 様子の同じような人で再婚した。「死に別れには行くものではない」と言う。良いところだけ言われて苦労する。生き別れが無難。デアトの人は大事にされる。(植野)

再婚も式は同じようにした。(池端)

姉をもらったが亡くなり、妹をもらい「ナオル」例がある。戦中の例で弟とナオル例があったが、あまりうまくゆかない。(元総社四区)

ナオルと言う。兄が戦死のあと弟が入った。嫁さんがずっと年上であった。嫁さんは労働力であり、「良く働く」のが良い嫁さんであった。

(小相木)

後妻・後夫と言う。(前箱田)

未婚の人 ワケエモン、ワケエシユといった。ワケエシユの中の若い人をコワケエシユといった。(江田)

#### 四、葬送儀礼

##### (一) 葬式の習俗

葬式の呼び名 ソーシキ。ジャンボン(天台宗はジャンと鳴らすので)。(菓鳥)

ソーレイ、ジャンボンと言う。「ジャンボンができた」と言う。

(植野)

ソーシキ。(池端)

トムライとかジャンボンと言う。(元総社四区)

ソーシキ・ジャンボンと言う。(石倉町上石倉・稲荷新田)

ジャンボンと言う。(小相木)

死の予兆 カラスの鳴き方が悪く、弱々しく鳴くと「シニガラスだぜ」と言った。「カー」の「カ」を長くのばした。「シーニー」と鳴く

ように聞こえる。光巖寺のカラスが「コーヨー」と鳴くように聞こえる。シツポの向いたほうの家で人が死ぬ。夜、人のけはいがあり、お

きたら人が立つており、姿が見え消えた。某氏の母。次ぐ朝聞いたら亡くなっていた。亡くなった人は、寺へは、女の人はお勝手から、男の

人は玄関から入る。お勝手に水の音がすると女の人で、本堂でカネが鳴ると男の人。亡くなったのはあとでわかることが多く、戦死した弟

の場合、広報の前に、稲荷の白狐の首が高ヤブで欠けていた。(菓鳥)

「カラス鳴きが悪い」と言った。本当の親の人には聞こえない。グウ

ア、グウアアとへんな声で鳴く。寺で、玄関でガタガタとあいた音がすると、翌日必ず「お願いします」との話があった。本尊さまにへびが出ると知らせがあった。(植野)

カラス鳴きが悪い(少し声が割れたようなもの)。その声を感じる人は死なない。カラスのシッポの向いたほう。死んだ人の方からトリが来る。人玉がとんだ。飛ぶと「亡くなるのではないか」と言うと言死んだ。(池端)

カラスが鳴くと人が死ぬ。鳴き方がちがうと言う。死ぬ人も、その家の人もわからないと言う。皿がかけると人が死ぬと言う。夢に姉が出てきて二三日たったら死んだとの知らせがあった。死んだ夢であったが目がさめて、あんなに元気な姉が死ぬはずがないと思った。家に人が来たような気がしたら、死んだとの知らせがあった。あいさつに來たと言った。田植えの夢を見ると人が死ぬと言う。

(元総社四区)

カラスの鳴き声(石倉町上石倉)

カラス鳴きがすると「死人が出るのじゃないか」と言った。ヒトダマがとぶと「長いことはないなあ」と言った。ヒトダマが屋の棟をこすくと亡くなる。外湯をたてて入っているときにヒトダマが飛んだのを見た。十五〜二十cmの大きいもの。(稻荷新田)

カラスが鳴くと、寝ている人がいると「ことによると……」と言った。ヒトダマがでると、「亡くなるんじゃないか」と言った。「あそこの家の屋根で消えたのであぶない」と言った。男の人は寺の本堂の柱にゴツンとぶつかる音がする。女の人は流しにくると言う。(小相木)

ナオシ 重病人が、なくなる前に、一日か二日丈夫になることがある。病人が、いいてえことをいったりする。

娘さんなどが心配してかけつけて、これなら大丈夫と安心して帰ると、なくなってしまうという。

手鏡をみるとあぶないという。病人が手鏡をみるようなことをする、手を横にふるとあぶないといった。(西箱田)

魂呼び、死水 死水は、脱脂綿で口をぬらした。(巢鳥)

井戸に向かって大声で「病気をなおしてくれ」とさげんだ。井戸はその時に言うので、ふだんは、「井戸に向かってものを言うな」ということを言う。死水は、脱脂綿で、茶わんに水をいれ、ぬらして、口をぬらした。(植野)

死水は、脱脂綿で口をぬらした。(池端)

脱脂綿でつける。(元総社四区、石倉町上石倉、稻荷新田、小相木)人は生まれるときは満ち潮で、死ぬ時は干き潮の時といい、夜ときをしていて暦を見て警戒した。(稻荷新田)

安楽死(ポックリ観音)。話に聞いたことがある。母が行くので訳を聞いたら「月の十日に高崎の琴比羅さまにお参りして『ポックリ死ぬるように』とお願ひする」と言った。よい待ちの九日の晩に行ったこともいる。昔はよく行つた。(元総社四区)

善光寺の砂(オスナ)をもらつてきて(ドシヤと言う)、苦しい時に、置いて「なんまいだ」と言うとき楽に死ぬ。(稻荷新田)

死後の対応 右手の指が上になるようにして手を組ませる。親戚が来ると北向きにする。体の上に刀物、金物をおく。(ネコは魔物なので、またがないように)。兄弟、親戚が来ると、枕ダンゴ(皿の上に中央に一個とまわりに五個、まん中がくぼんでいる)と、御飯の高盛に箸二本さしたものの、線香を用意する。仏壇はしめ、神棚は笹でおおう(オカオカクシ)、さらに、半紙に「宮川」と書いてはる。(巢鳥)

北向きにして手を組ませる。アゴがあくので固まるまでしばつてお

く。キレモノを上におく(死人を守る)。線香を置き、お膳に箸を一本たてる。神棚に笹をあげ、列が出ると笹でススをとリ、キヨッパシにのせて三本辻に置いてくる。今は「宮川」と書いた紙をおく。(植野)

北向きにして手を組ませる。魔物がつかないように刀物をおく。線香や使っていたツエなどおく。枕ダンゴは亡くなつてすぐに作る。水飲みダンゴとも言ひ、まん中をくぼめる。六個。神棚に笹を一、二本ひいた。(池端)

向きを北向きにして(枕なおし)、刀や鎌を体の上におき手を組ませた。枕元には線香、花、盛りあげの御飯にはしを一本さしたものをさした。米の粉のダンゴを六個おいた。(元総社四区)

体を北向きにして、薄いものを上につけ、鎌や刀の刃物を上においた。枕元には線香、花、御飯、団子をおいた。入口には「忌中」と書いた黒いフチの紙をはり、神棚、仏壇はしめておいた。(石倉町上石倉)

北向きにする(マクラなおしと言う)。枕はとつてしまう。体の上には鎌などの刃物を置いた。動物が来るとホトケ様が立つので切れるように置くとする。枕元には線香と高盛りの御飯にハシをさしたものの、米の粉の団子を六個ずつおいた。(稻荷新田)

神棚には「宮川」と書いた紙をさげる。ササをあげた。亡くなった人は、他人が北向きにして、手を組ませ刀物を置いた。仏壇はしめた。

(小相木)

通夜 葬式の前の晩にするが、家により異なる。亡くなった日であったり、その次の日であったりする。ツヤは自治会長がするが、昔は「ワカイシユウ」(青年会の上の人)が中心で裁配した。のち自治会長になり、隣組長が中心になっている。昔、行き倒れがあった時には、コメ代として六文を集めた。のち二〜五銭になり、二十銭になり、今は五十円である。行き倒れの人に対して村中でお金を出してコシ(箱形の

タテガン)におさめ、無縁仏でうめ、念仏をとなえ焼香をする。(巢鳥)

通夜は亡くなった時間により、その日もしくは次の日になる。お坊さんが来ることもある。(植野)

昔はなし。(元総社四区、石倉町上石倉、稻荷新田)

湯灌 湯灌の湯は、三本のクワデを組ませ、上を麻でしぼり、下にナベをつるし、湯をわかした。その時に「ナベにフタをするな」と言う。湯はぬるくてもいい。そこで、ふだんフタをしないうでナベで煮ると「湯灌の湯になる」と言う。湯はシヨイダルにあげ、酒をふきかけてから体をふいた。ふいた人はハダカになり(寒中は寒かった)川で清め、オケなどをやした。もえにくいので石油を使いもした。あとでフロに入った。死んだ人に湯をかけるやり方は「テフリカケ」と言い、指だけで水をぱつとはらうやり方で、ふだんそんなことをすると、「死んだもんみてえにするな」とか「テフリカケ」にするなど言った。湯灌する人は、ひたいに三角のキレをつけてした。近所の人線香を一輪つけておいた。のこった湯は川ですてた。(巢鳥)

湯灌の湯は三本柱をたて、ナベをつるし、近所の人わかした。モシキには花カゴ等を作った竹のクズや紙のクズを使った。湯灌する人は、ハダカになり、フンドシ一つで行った。キレはサラシを切ったもの。ふいたキレやぬがしたものは人里はなれた川つべりで石油をかけてもした。(植野)

亡くなった日の夜に、近い人がハダカでやった。三方にナベをかけた湯を庭でわかした。昔のシヨユ樽に一ぱい作り、サラシを切つてふいた。のこった湯はタメにすて、亡くなった人のフトン、着物は川のそばでもした。ナベ、三方も使わないですてた。ふいた人は湯灌後に「ユツカン湯」に入った。(元総社四区)

次ぐ日に湯灌をした。近親者が酒を脱脂綿につけてふいた。使った

ものは川原にすてた。ふく人は六尺フンドシのハダカで、川原へもハダカで行った。(石倉町上石倉)

亡くなった日の早いうちに近親がした。仏をおこしてワラを敷き、足を前に出した。ふく人はサルマタひとつになった。ハチマキをして、手ぬぐいにお湯をつけてふいた。亡くなった人の着物はみんなぬがしてフトンも墓地で焼した。ふいた人はのち風呂に入り、清めもした。

(稻荷新田)

話に聞くと、かなり前に風呂に入れて洗ったことがあるという。湯灌は、庭に竹の棒で三脚を作り、つるしなべを下げて湯を作った。湯は水でうすめてふやした。亡くなった人は外でハダカにして体をふき、着物を着せてから納棺した。(小相木)

死者の装束 普段の着物に、キセルなどを持たせ、六文は裾をとつていれ、麻でしばった。カクシゼニと言う。

足袋(底を抜いてはかせる)、手甲、脚絆は身内の年寄りが作り、兄弟がつけた。足袋は逆にはかせ、結び目はつけない。ひもの結び方で、結びがたつてしまう結び方をタチムスビとかタツコギと言ひ死んだものの結びと言ひやがった。着物の襟はみんなとつた。(巢鳥)

いい着物の襟をとり裏表をかえ、襟をヒモにした。

足袋は底をとり底なしにした。足袋はかぶせるだけ。男はワラジで、女は草履にした。手甲、脚絆をつけ、昔は愛用していたものを入れた。百年もたつと金物のみのこる。(植野)

持っているもので一番良い着物を使った。襟をとつて、その襟を帯にした。その上から経カタビラをかけた。

底のない足袋、ワラジ、脚絆、手甲、三角のキレをつけた。道具は葬儀屋さんが用意した。カクシゼニを着物の裾に入れた。(元総社四区) ユカタ。襟はとつておく。手甲、脚絆、底ぬけの足袋、ワラジをつ

けた。裾には、極楽への足代としてお金をいれてしばつておいた。

(石倉町上石倉)

昔は本人の一番良い着物の襟をとり着せた。襟で結んだ。足袋の底をぬいてはかせ、手甲、脚絆、ワラジをつけ、タテ棺用に手を組ませた。お金六文を下前にかくしておいた。「カクシガネ」と言ひ、三途の川の通行税。なくさないようにしばつておいた。十三仏の前に一つずつ置いてゆく。(稻荷新田)

白いサラシのカタビラを女衆が一反の布でぬった。左前に着せた。お腰も新しいものにした。

足袋は底をとり、サカサにはかせ、ワラジをつけた。手甲はのせておいた。三途の川を渡る時の渡し銭として旅の六文銭をつけた。(小相木)

納棺 良い家は甕でいけた。水が出るので甕にした。木の棺は杉で作った。タテガンと言う。高さ一mで、広さは座布団より一回り大きい。頼んで作った。作るのに使った道具は一週間使えない。ハカコサエに使った草けずりの鎌、あさ鎌も川で洗わないと使えない。そうじのほうきも家にもつて帰れないきまりがあった。棺は輿に乗せていった。上に笠が付き鳥がついていた。竹の棒をつけ、かついで行った。先に縄がつき、引っぱつて行った。(巢鳥)

タテガンと言ひ、縦、横が二尺五寸で、高さが三尺。外に紙をはつておいた。葬儀屋より来たが、昔は大工にたのんだことがある。本人の希望で水甕を使った。穴は六尺く七尺ほつた。(植野)

タテガンと言ひ、大工が松で作った。

納めやすいように、手ぬぐいで足が曲がるようにしばつた。胸に足がつくようにした。早目に曲げないと大変であった。曲がらずにネガンになった例がある。棺には、メガネなどの持ち物や、お酒・タバコ、長キセルをいれた。また、ワラジ銭をすそにいれた。(池端)

棺は四角の長いもので、二尺×二尺で高さ四尺。松の板で作ったり、葬儀屋で作ったりした。甕の棺を使う家もあった。棺には本人の使っていたものを入れた。酒の好きな人には罎を入れたりした。タバコなども入れた。足の悪い人が亡くなつて、夢に出て「歩けないので」と言うのであとで杖を墓にたてた。(元総社四区)

タテ棺。葬儀屋さんが作った。輿があり四輪車の台があり、それにのせた。棺には身の回りのものを入れた。葉まで入れた。(石倉町上石倉)

タテ棺(座棺)に長男が入れた。入れ方がある。ヒザをつかみ入れないと入らない。入れるのにつめたくてふるえてしまう。背からだき入れた。(小相木)

タテ棺。死んですぐに手とひざを組ませておく。地下水が高いので、重しをいれておかないと浮いた。輿にのせて運んだ。昔は掘る人がいて「番太」といった。身内の人が指示するとその人が掘ってくれた。

その人は夜、火の用心やドロボウよけの見回りもした。(稻荷新田)

かめ棺 かめ棺をつかった人はごくまれ。特別の人でないとかめ棺を使わなかった。

一般の人は木の棺で、たて棺であった。火葬になつてから寝棺になつた。(青梨子)

#### 葬儀までの準備

孫が花籠を作り、撒き<sup>ま</sup>錢をいれ、撒き<sup>ま</sup>錢をした。

シカバナは近所で作つた。告げは二人ずつでした。自転車やあるきで行つた。昼を食べる家は指定しておいた。「〇〇が死んだ、葬儀は〇〇日〇〇時、ねがいます」と言つた。告げの御飯は生メシでもいい、来るとすぐに清めの酒を出し、すぐ生米をたいて食べさせた。(巢鳥)

坊主に連絡をする。次に区内の人が近い親戚に二人ずつで、自転車で告げに行く。近所はついでに来た。住所を知らされ、たずねて告

げに行くとお昼が出された。煮てすぐ出すのであつて食べにくかつた。まずトーフ汁と酒が出て、酒の間に飯をたいた。(植野)

告げは親類に二人ずつ、近所の人が連絡に行つた。施主から頼まれ、一組で四ヶ所回る。昼は親類で告げに行つた方の近い家に寄り食べた。告げに行くとき清めとねづけ(煮えてすぐでむれていない御飯が出た)がでた。ねづけで御飯を出すと告げみてえだと言われた。また、告げ

の飯は食べて、ねづけでも文句は言えない。ふだんは麦メシでも告げが来ると米のメシをたいた。花籠・竜頭<sup>たがびら</sup>・シカバナ・弓矢は近所の人分担して作つた。(池端)

親戚には二人ずつで告げに回つた。告げには一罎出し、煮たての熱い飯が出た。隣組が相談をして決めた。花籠は作るが他は寺からかりた。(元総社四区)

告げには二人組で行つた。「〇〇が亡くなり、〇〇日〇〇時が納棺、〇〇日〇〇時出棺」と話をしてくる。(石倉町上石倉)

告げは二人で組んで行つた。日どりを言い、食べものを出された。食べてから行つた。(稻荷新田)

葬儀の道具 ハナカゴ、カンオケ、シカバナ、イハイ、オユミまで、すべて大渡の町内で作つた。今は借りたり、買ってきたりしている。

(元総社大渡)

棺代 総社町の鍛冶町では、クルワの中に葬式があると、各戸から棺代を出し合つた。

人がなくなると、すぐに、責任者があつてもつて行つた。一戸でいくらときまつていた。大正時代、一戸あたり十錢くらいであった。

このしきたりは、昭和十年代くらいまでのことである。(総社町山王) 祭壇 じかにタテガンを置き、前にそなえものをした。通夜は最近のもので、してからも坊さんは来なかつた。(巢鳥)



棺箱があるのみで、前に花びんやお膳があるのみである。花輪はなかった。棺が出たあとで、位牌を置き、三段の祭壇を作った。花と念仏供養の十三仏の掛軸があった。(植野)

白布を段の上にかけて、位牌がおいてあるくらい。昔は棺があれば棺のみであった。棺は輿こしではこんだ。個人でも作ったが、大変なので寺や村で作った。棺をいれ、かついで持つて行った。その昔は白木のかつぐものがあり、近所の人がそれにのせてかついだ。また、サラシのシロツナで引いた。(池端)

寺に四角の箱で屋根のついたもの(輿)があり、それを借りた。四十九日まで墓に置いておいた。車付きの台になっており、すぐ金をはらいかえした。祭壇は「輿」をそのまま置き、前にシカバナを置いた。前に焼香台を一つおいた。「輿」にはヒモがあり、女衆が白ムクでひっぱった。五十年くらい前のこと。戦後黒になった。(元総社四区)

「輿」が座敷のまん中に置かれる中に棺桶が入っている。「輿」のまわりにその他のものをかざった。(石倉町上石倉)

四人でかつぐ台(輿)があり、棺をのせ前に線香をたてた。四本旗などは借り、シカバナは作った。墓の両わきに百目ローソクを三本ずつつけ、六地藏とした。(稻荷新田)

チカラメシ なし。(巢烏・植野)  
箸で一つかみ配った。(池端)

墓に行く時に御飯を少しずつくれた。食べると力持ちになるとか頭が良くなると言った。(元総社四区)

竹のハシで少しずつくれた。チカラゴメと言う。式で並んでいる時にお勝手の人がくれた。(稻荷新田)

穴掘り アナホリは昔は「番太」と言う専門の人がした。のち隣組で交代でした。する人は奥さんのお腹に子ができていない人。酒一升

とトーフで清めてから掘った。六尺で真四角に掘った。棺は四人でつるして入れた。(巢烏)

区内の近所の他人がした。酒、飯を運ばせて掘った。三日かかることもあった。場所は施主の指示で、掘ったのち、そこで清めをした。墓掘り用の短かい唐鍬があった。墓を管理する「リョー」があり、坊主がいた。食べる物は、毎日家々をまわり、経をあげると食べられ、米、麦、お金などをもらえた。元は作官屋で引退後に寺で経を習い坊主になった。「リョー」に穴掘りの道具があった。輿をリョーに置き、坊さんがおがみかえした。リョーの庭を三回まわり棺台にすえておがみ、そので総領が弓で鬼門にうった。(植野)

穴を掘る「番太」と言う人がいて、地区の穴を掘った。葬式が終ると塔婆とうばを建てる前までしてくれた。番太のいないところでは、近所の人が掘った。掘りあがると酒を持っていつており、清めをした。(池端)

隣組の人が四人で掘った。番太に頼んだ家もある。施主が酒一升用意して頼んだ。飲みながら掘った。隣組で掘る時には、掘る順があったが、嫁さんのおなかの大きい人はダメであった。シャベルと唐鍬の柄の短かいもので掘った。深さは一mくらい。道具はすぐに次に使わずしばらく外においておいた。(元総社四区)

アナホリと言う専門の人がいた。人夫手間のお金をはらった。

(石倉町上石倉)

隣保班で穴掘りをした。昔は番太がいた。秀節により地下水がでて大変であった。ニギリメシと清めの酒が出てそこで食べた。兵隊検査の前の人は穴掘りはしなかった。掘ったあと、穴の上に「ヒブタ」と言う、梵字で「バン」が書いてある布をはった。三尺角で四すみに麻のヒモをつけて張った。座棺が入る大きさになった。お経が書いてあるのは魔除けにするため。棺をおさめるまで張っておいた。棺を埋め

る時はまるめてはじにおさめた。棺をいれる時は太い竹をわたし、それにさげて入れた。その竹はあとでさいいて、土マンジューにさした。畜生ちくしょうの目をはじくため。この辺は水位が高く棺がしずまないで近くちかくの石塔をおもしにした。そのため石塔が不明になることがあった。(小相木)

葬式に係ること カンオケをかつぐ人は、妊婦の夫はだめだった。穴掘りは、縁の遠い人がやった。使った道具は、四十九日の間他には使えず、その場所においておいた。

死人の油がついて、つかえなかった。

墨で書いた白の絵があり、たらいで墓に行ってきた人が塩を使って清める所にはってあった。

向きはふつうの向きだった。

棺をかつぐ人には、新しいワラジ・ぞうりを出した。出棺のあと、座敷をホウキではき出した。

土葬は、四十年代の区画整理まで、やっていた。

清めのあと、後念あと仏を全員でやった。知っている人が音頭とりをした。六回くりかえした。

お念仏まんじゅうを作つて参加した人で食べた。

ナムマイダブツ ナンマイダ 二十回くらい  
ナムマイダブツ 二十回くらい

ナム、フドウ、シャカ、モンジ、フゲン

ジゾウ、ミロク、ヤクシ、カンノン、セシ

マミダ、マシク、ダイニチ、コウゾウ

ナム十三仏ナンマイダ

センシヨノシヨセツ、ナンマイダ 十三回

ペロシヤノ、マク、ハンナ、マジン、バラダ 二十回くらい

十五十体ナンマイダ 二十回くらい

マンズウネンブツナンマイダ 十回

三回やって中入りでお茶で茶わんで二杯のんでのどをしめしてまたやったものだ。

出棺前後の習俗 葬列は寺の庭を三回りしてからおがみをした。宝

篋きょう印塔の前で、昔は石があり、まわりはきれいであった。読経の間に

回り、その時に弓を射た。(巢鳥)

葬列は家でかんたんにおがんで出てゆく。(植野)

葬列は庭でお経をしながら三回左回りをする。年寄のあと念仏があった。(元総社四区)

葬列が出てゆく時には読経で出てゆき、その後年寄りが鐘をたたき

念仏をした。(石倉町上石倉)

列が出てゆく時に鐘をならす。夜念仏をした。(小相木)

くわぜの鳥居 葬式のときにも、クワゼの鳥居をつくつて、仏様を

くぐらせた。(出棺のとき)

重病人がいると、近しい親戚の人が、病人のところへ看病(夜とぎ

という)にきた。(下石倉)

盆中の死者 お盆うちに人が死ぬと、たわらべしをかぶせてやった。

盆になると、仏様があの世からお客にくる。盆になって死んだもん

は、こちらからあの世へ行く。

それで、通りすがりに、先祖様に、石ころで、あたまをぶたれると

いう。

そのために、仏様を棺に入れてから、たわらのちようばしをあたま

にかぶせてやるという。(青梨子)

野辺の送り 四旗に「諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為楽」

と書く。庭を回るのは死んだ人が家に来られないように、目を回すよ

うにまわした。ネコをもらう時もそうした。葬列は先頭が六地藏で、ローソクをたてておき、先に行き墓地の入口にたてておいた。次は輿で、親族が頭に三角の布をつけ、サラシで引いた。輿のつぎには天蓋持ち。次に位牌、お膳持ち、写真、見送りの人(町内の人)と続いた。また、一週間ごとに団子を作り、墓まいりをして墓にそなえた。お盆中の死人にはシラジをかぶせた。みんなが帰るのに来るから。八月一日が釜の口あけという。そろそろ仏様がでかけると言う。門口で麦わらを八月七日〜十三日までたいた。十三日は寺に提灯を持って行き、火をもらい、その火でたいた。八月十四日はナスの馬を作り、トウモロコシのシツポをつけた。エサとしてキュウリをつけた。提灯に火をつけて墓に行き、消して帰った。十四日は朝オハギ、昼ウドン、夜御飯であった。一年に二度死者の時た時は人形を棺にいれた。「二度あることは三度ある」と言った。昔は葬式にウドンは使わなかった。「あとを引く」と言い御飯にした。戦後物がなくてウドンにした。清めの膳は、昔は生ぐさはなかったが、今はいろいろである。トウフ、ゴマヨゴシ、ナマアゲ(お皿に一つずつ)、ヒジキ、(生グサをきらったが)イワシの頭付きをつけた。(巢鳥)

オガラでタイマツを作り、赤い紙で火を形どり、屋根に、少し燃して消し、はたきあげた。弓を作り、列が出る時に総領か婿が戌の方向に打った。家では、おがみがはじまる時に寄せ鐘をうった。列は、六地藏・灯籠、四旗(竜頭)、花籠、位牌、お膳、香箱、棺、天蓋、(出た家の人か一番近い人)の順に行った。オガラ(麻の皮をむいたもの)で鳥居を作り、アガリハナにおいて棺はここを通って出ていった。死者には金鋼杖をもたせた。木に紙を巻き、坊主が字を書いたもの。リョーに行き、焼香をして引導をわたした。(植野)

葬列は、灯籠、四旗(竜頭)、花籠(お金が入っており、まく)、弓

矢、位牌、お膳、輿、天蓋、墓標、参介者の順。こしは昔は白のサラシをかぶってひっぱった。(池端)

庭は三回り半回った。墓でも回った。列が出る時には鐘をならした。三番鐘が鳴ると出る会図であった。

列は灯籠二つに六地藏、四旗に竜頭、隣組のかつき、ひもでひかれた輿、輿の上に天蓋、跡取りが位牌、お膳を持ち、近い人が続いた。

盆中も葬式は同じであるが、盆前になくなるとシラジをかぶせ、三十五日まではお盆をしなかった。また、仕事がいそがしいと仮葬をしておいて後で本葬をした。

一年に二回葬式があると棺に人形をいれた。(元総社四区)

灯籠、六地藏、お膳、位牌、輿の順で、輿にはキレがかけてある。

キレは寺での読経の時にとった。六地藏は寺に先入りローソクをうけておいた。(石倉町上石倉)

一年に二回葬式があると人形をいれた。(稻荷新田)

葬式は、六地藏、四旗、竜頭、弓、六角塔婆、墓標、七本塔婆、シカバナ、花籠、位牌、お膳、みこし天蓋、の順で、あとに葬列が続いた。

竜頭は紙でジャバラをつけた。弓は寺を出る時に鬼門に向かつて2本うった。また出棺時に鐘をならした。

六角塔婆は墓に石で打ちこむもので、七本塔婆は七本を七日ごとに欠くもの。

位牌は跡とりがもつ野位牌で、お膳は嫁がもった。

みこしは、はじめは二人でかついだが、のち車をつけて引くようになった。女衆が白い布をひたいにつけて10人くらいで、みこしにつけた白い布をひっぱった。(昭和二十年の例)天蓋はおじさんにあたる人がもった。

別に、タイムツがあり、住職が引導を渡す時(経をあげる時)に使った。道を照らすの意味。

棺は家の縁側より出て、竹の鳥居をくぐらせた。

本堂の前でお経と野辺の送りをした。左回りで三回半した。その後埋めた。その時に撒き銭をした。埋葬あると、ひとにぎりドロをかけた。のこりは隣保の人がした。

昭和二十年の役割例(肩書きは故人に対してのもの)

- 一 灯笼 いとこ
  - 二 四旗 おい
  - 三 花かご 孫(男の最年長)
  - 四 四カ花 孫(女の最年長)
  - 五 香箱 故人の一番上の子(長女)
  - 六 弓 おい
  - 七 天蓋 長女のむこ
  - 八 膳 嫁
  - 九 位牌 相続人(小相木)
- 灯籠、四旗、竜頭、四カ花、位牌、花かご、輿の上に棺、天蓋の順に並んだ。
- 先頭に弓があり、一番遠い人が持ち、三回り半回る時にたがいちが

いの二方向にうった。金もまいた。

四旗はいとこもった。

花かごは子供に金をひろわせた。孫の数だけ作ってもたせた。

輿は、サラシを頭にまいた親類の女衆がひっぱった。サラシのひもでひいた。

列が出る前に鐘をうち、全部出終つてからホーキではき出して、カンカンカンと鐘をならした。

出る時は麻で竹をしばり入口を作った。(稻荷新田)

辰の日に田植えをすると竜頭の米になるので、辰の日には田植えはしない。

香奠と香奠返し 香奠返しはまんじゅうが多かった。四十九日もまんじゅうにした。香奠はお金。(巢鳥)

香奠はお金で、台に線香を使う人があった。お金は紙にくるみ、白黒の水引きでしばり、字を書いた。お金は二十〜三十銭で、ツブが出ないように紙はよく折り曲げた。

親戚は「みなさん」で呼ばれる。近所は朝食によばれ、お膳にまんじゅうが五個ついた。お客は箱に入ったまんじゅうがついた。箱には蓮の紙が書いてあった。お膳には、アツアゲ、ヒジキがオヒラに、豆に飯に汁がでた。(植野)

香奠は半紙につつみ、白黒の水引きでしばった。香奠返しはまんじゅう五個が紙でつつんであった。のち箱入りになった。お膳には小ぶりのものがうついた。それ以前はカルケット風のパン二枚であった。

お金や座ぶとんなど。布もおさめた。布は五色のもので「ゆずり」の時に一枚とか半分くれた。

(池端)

引き物はマンジュウ九個や瀬戸物をくれた。(元総社四区)

品物で座ぶとんや座卓、香代としてお金を納める家があった。

お返しはマンジュウが出たり出なかったり。(石倉町上石倉)

引き物には小判形の大きいマンジュウを六個入りでくれた。一個五錢のもの。

また、ザルにマンジュウをいれ三十七戸の村を上から順に六個ずつ若い衆がくばった。(小相木)

物資のない時期にはお金を納めた。親戚は五色の旗をあげた。それはあとで腰ひも半分くらいずつ分けた。

お返しは来た人にマンジュウをくばった。

葬式の時には二つくらい空地にカマドを作るくらいであった。御飯たぐの間合わないうくらいであった。三升ずつ御飯をたいた。

隣保班にはみんな食べてもらった。両隣りの家と前の家は親戚扱いで、「ウチジューヨバレ」といわれ家中で行き膳についた。

三歳の子供でも一回はアツアゲのついた本膳がつくため子供も行った。また、そのためアツアゲは一晚中煮ていた。

大尽の家はアツアゲにマンジュウ二つずつつけた。行くと「本膳についたか」と聞かれ、食べていないと用意された。

学校に行く子はその家で弁当を用意してもらって行った。アツアゲはあまれば自分の家に持って帰った。アツアゲは楽しみにしていた。

たくさんの人が本膳につくため膳がたくさん必要であった。

(稻荷新田)

葬式の服装 親戚は黒で、他の人はふつうのしたくであった。(巢鳥)

紋付き、袴であった。(植野)

紋付き、羽織。

昔は、蚕を飼っていた時に葬式が出た時は、生き物でほっておけないので、仮葬をしておき、すずしくなった十月ころ本葬をしたことがある。(池端)

地味な仕度で行った。親戚は男が黒紋付で女は白無垢であった。

(元総社四区)

近い人は、男は黒、女は喪服であった。(石倉町上石倉)

一般の人はふだんの着物で良いものを着た。(小相木)

身近かの人は、男が黒、女は黒である。白無垢の人もいた。

一般の人は地味な着物であった。(稻荷新田)

## (二) 墓 制

葬法 土葬。火葬にしたのは避病院に入った人の場合のみ。赤痢・

肺病で家で死んだ人は六地藏のむこうの穴で焼いた。(巢鳥)

土葬。火葬はほとんどない。ジフテリアの人を墓のそばでマキを積

んで燃した。(植野)

火葬はなかった。(池端)

伝染病は火葬にした。みろく山に大きな石があり、そこで焼いた。

(六十〜七十年前か)

それで、そこに煙がたつと「だれか死んだのか」と話をした。

(元総社四区)

病気で死んだ人などは火葬場で火葬にした。(石倉町上石倉)

伝染病の時は火葬にした。(小相木)

火葬は市に合併して少ししてからはじまった。伝染病の人は火葬に

した。(稻荷新田)

土葬の方法 穴にはみんな土をいれた。土の山にしてメツパジキ

を作り、花籠をたてた。

棺の縄はそのままいれてうめた。(巢鳥)

棺の荒縄は六本を2本ずつ3本により、棺に十文字にかけ、おろしていった。

棺をになつてきた六尺の竹で、土の山にメツバジキを作り、さした。昔、オオカミ、犬などがいて掘りにくると、ピンとはじけるようにした。

花籠、四旗の竹も上にさした。(植野)

棺は南に向けていけた。縄は十字にかけた。縄は穴の中にいれ、身内の人が砂をいれた。穴にはお膳の中身を一緒にいれ、土まんじゅうにした。

道具作りの竹で上にメツバジキをつくった。魔物が掘るとはじくようにする。

お膳を置き、石を置いた。(池端)

火葬で、仮埋葬してしまい、本埋葬の時に輿をわざわき作り(鳳凰付)、棺がないので空をかついだ。(植野)

縄で棺をさげていれた。縄は入れてしまった。近い人が少しずつ砂をいれ、あとは穴を掘った人が埋めた。(元総社四区)

棺に縄をかけ北向きにしていれた。石と土を置き、竹で押した。縄はいれ砂でうめた。

一本の竹を刀物は使わず石にぶつけて割り、細かくしてまわりにさし、ハジキにした。

前に七本塔婆(屋根付きで七日ごとに折った)と膳をおいた。

まん中に六角塔婆を置き、七日七日に石でたたいた。四十九日すぎに全部片づけて、おたきあげとした。

のちに墓標の大きいものをたてて、墓なおしにした。

塔婆のたてはじめは百日目で、おがんでもらった。人寄せはなかつ

た。(稻荷新田)

墓つくり 上に石を置き、竹を割ったハジキをまわりにさした。(隣組の人がした)

前にお茶碗などの膳をおいた。

小さい子も同じで小さいだけ。(元総社四区)

花籠を墓に持つてゆき、棺をうめて砂山になり、上に石の置いてあるまわりに、バラしてひろげ、イヌオドシにした。(石倉町上石倉)

輿をとり、竹を割り、犬に掘られないようにまわりにさした。

(稻荷新田)

浄めの塩 アシアライという。皿の塩で浄め、タライの上で足をまわした。紙に白の絵をかいて置いた。(巢鳥)

入口に白の絵をかいた紙をおく。下にタライを置き、塩を置き、足をタライにいれるかっこうにした。(植野)

塩をまき、白の絵を書いておき、タライを置いて、はきものまま足を洗うまねをする。(池端)

塩をまき、入口にあるタライ(空)の上で足を洗うまねをする。そばに、白が横になっている絵をかざしておく。(元総社四区)

タライで足を洗うまねをする。白の絵をはっておく。(石倉町上石倉) タライを置き、足を洗うまねをする。そして、塩をまきながら入る。

近い人は縁側より入る。木の白の絵を置く家がある。(小相木) タライを置き、そばに塩を置く、墓より来ると、塩をなめてタライで足をいれるまねをして塩をふる。

正月に来るおはらいの札をトボ口にさしておき、おはらいをしてから入った。

家に入ると「キチュー(忌中)バライ」になる。生の魚と塩の膳をまわし、順に飲んでもらった。次にゴマメをまわし、少しずつたべた。

夕食後念仏になる。マトネンブツとかオタイヤ（オツヤ）念仏とか言う。村の四十戸全部がよばれた。その後念仏ダマという念仏のマンジュウを2個ずつくばった。（稲荷新田）

初七日 近所の人が十三仏の念仏をした。念仏のできる人が中心になってした。念仏は冬に御祝儀の謡うたとともに練習した。（植野）

あいさつをして、清めが出る。カシラツキ（ニボシみたいなものので可）のホオザシとトーフが出た。

その後、お念仏（十三仏）「アトネンブツと言う」をした。村のカネをたたいて、村の人が念仏をとなえた。

内々の人は初七日までは毎日来た。（池端）  
葬式は朝が本膳で、厚あげ、ヒジキ、オツボにマメで、マンジュウ付であった。

昔、ヒジキのところパン、お菓子があった。（池端）  
団子を作り墓に行った。昔は麻のヒモでつけてあった石で六角塔姿をたたいた。これは「オレが来た」というしるし。（元総社四区）

一七日までは毎日墓前に行った。初七日には近所の人<sup>ひとのかみ</sup>がきた。  
（小相木）

### （三）死後の供養

法事 家により異なる。

七日ごとに墓まいりをして、塔婆をかえした。ヒトナノカまでは毎日行った。

墓には六角棒と石があり、麻で石がゆわえてある。その石で棒を打ちこんだ。カラスがとまらないようにという。四十九日までした。

法事には、入口の両方にコーガンジローソクという短いローソクをつけた。

法事は四十九日でおわり、納骨となる。今は三十五日になっている。百カ日は自分の家でした。百カ日は「塔婆のたてはじめ」と言い、寺で塔婆を作ってもらった。

今は一年たないと正月をしなかったが、昔は四十九日で忌あけになる。そこでモチをついた。甘くもしよっぱくもないもの。そこでモチをつかないと正月につけないと言われた。

盆柵は新仏もいっしょで、チガヤをなつて作った。（巢鳥）  
ヒトナノカは近所の人やお坊さんがあつまった。四十九日（今は三十五日）には近所、親類、坊さんがあつまった。（植野）

初七日は近所や近い人があつまった。七本塔婆は本当は七日ごとに置いておくものだが、今は四十九日にまとめておさめた。

墓には三十cmほどの六角の棒があり、石が縄でついてさがつている。墓にゆくたびにその石で棒をたたいた。その時のお経があつた。四十九日にみんなもした。

盆柵はチガヤで作った。新しい仏様が中心になるので一番前において。盆にはヒヤクハツトウといい、百八本の竹のクシにコーガンジローソクをつけ、墓から家まで道々たてた。（池端）

四十九日（昔）、三十五日（戦後）がおたなあげ。七日七日におまいりをした。（元総社四区）

四十九日には親戚や隣保班がより、お坊さんを頼んで一杯のんだ。引き物をつけた。（小相木）

四十九日のあいだは、新しくなくなった仏様の魂は屋の棟にいるという。（下石倉）

念仏供養 葬列のあとで、アトネンブツを近所の人<sup>ひとのかみ</sup>がした。十三仏をとなえた。となえた後でドンブリに入れた水をかえ、また十三仏を

となえた。十三回した。六回おわったところでキンピラとお茶が出た。おわったあとでオネンブツダマというマンジュウをくれた。四か六個だが巢鳥は五個。(巢鳥)

特になし。(元総社四区)

近所の人がした。(石倉町上石倉)

十三仏の念仏をすんだその晩にした。「送り念仏」と言った。参加した人には子供から女衆までみんなに「念仏だま」と言うマンジュウをくれた。(小相木)

はじめのことばがあり、

① ナムアミダ (年寄り42回、若い人33回)

② 十王十体の念仏

③ 念仏 十三、十七、二十四回。

④ 十三仏様 一人一回で十三回。

⑤ 融通念仏 人により十三回以上三十三回くらいまで。

⑥ 念仏 (身はここだが心は善光寺に行っていて……導きたまえ、弥陀の道という意味のもの。)

⑦ ナムアミダブツ (善光寺念仏の節で言う)(稻荷新田)

後念仏 葬式のあと、隣組で後念仏をやった。鉦はお寺で持っているものを借りて使った。(西箱田)

あと念仏は四十九日、一周忌のとき、最後の念仏は十三仏。

野辺送りが終つてから、うちでやるのがおたや念仏という。

町内のよばれてきた人が全部申ししてくれる。

念仏を申し立て、一区切りごとに、なくなつた人の孫など身近かな人が、水をしんせてくれる。線香も一本ずつたてる。

やかに水をいれておいて、一区切りごとに水を汲んであげた。かえた水はどんぶりにあげてとっておいて、つく日墓まいりのとき、墓

へもつて行つてあげてくる。(元総社)

水掛け着物 北向きにほしておいた。洗うのは子がする。(巢鳥)

なし(植野・池端)

なし。(元総社四区、石倉町上石倉、稻荷新田)

なし。着物はおもしてしまった。フトンその他は川にながした。

死者の形見分け ユズリとか形見分けという。四十九日に座敷にひ

ろげて分けた。兄弟や子にわけた。

今はほしがらず、やっていない。(巢鳥)

ユズリと言ひ、四十九日にした。兄弟や子に形見を分けた。(植野)

四十九日に兄弟と子にわけた。家による。(池端)

四十九日か、式の次ぐ日に「四十九ベエ」と言ひ、米やユズリの着

物を寺に持つて行つた。今は金になつてゐる。

花輪はみんな寺に持つて行き、本堂に置いた。今は葬儀屋が片づけ、

金を寺におさめた。

花輪を送るのに寺で買って送つたこともあつた。花輪屋では高く、

寺のは安かつたので。(巢鳥)

ユズリは位牌あげの四十九日にした。子供が相談して配つた。

(元総社四区)

位牌あげの日にした。(石倉町上石倉)

四十九日に形見分けをした。タナオロシと言う。(小相木)

四十九日にした。位牌を子供の数だけ作つたが、「カライハイ、ハダ

カイハイをかえすものではない」と言ひ、本人の着たものをつけた。

(稻荷新田)

喪中の禁忌と忌み明け 一年間は神さまに行けない。ブクをしよつていふと言ひ。その他、高い木に登ること、年始に行くこと、遠出を



することもしない。

結婚式、家作りもひかえた。(一年忌すぎるとすぐに三年忌なので)三年忌まではできなかった。その前にもならなかった。(巢鳥)

親の喪は一年間。神まいりはしなかった。祝い事はひかえ目にした。親戚は四十九日すぎならかまわなかった。(植野)

喪は四十九日であける。その間神まいりはしなかった。施主は一年間になる。

正月は受けなかった。(池端)

百日は外に出られない。一年間は神にまいらない。(元総社四区)

百日であけるといふ。ブクを着るといふ。それまでは、神社、旅行、お祝い事には行かない。(小相木)

四十九日までは棟むねにいるといい、神棚はそれまで半紙でかくしておき、四十九日ではずした。

四十九日には餅をつき、その音ではじめて墓に移ってゆく。

四十九個の小さい餅を膳ぜんにいれ寺に持って行つた。(稻荷新田)

モチつき 葬式での四十九日と百か日には、もちをついた。

(元総社大渡)

年忌 忌ごとに「念仏もうし」をした。念仏じいさんと言う人がいて呼ばれた。その場合寺はこない。

三年忌はするが、七年忌はあまりしない。(巢鳥)

一、三(子とか近い人です)、七、十三年、十七年とした。三十三年をする人もある。そこで神さまになりおわる。(植野)

三・七・十三・三十三年忌。お坊さんに来てもらった。三十三年では塔婆を書いて、神になりおわりになる。(池端)

三十三年忌まで、三、七、十七、二十三とやった。年忌には塔婆をたてた。(元総社四区)

年忌は三十三回忌までした。(石倉町上石倉)

三年までは毎年になる。あとは七、十三、十七、二十三、三十三年とやった。お坊さんを頼んだ。三十三年がたておさめといい、塔婆に杉の葉をさかさに麻あしでしぼりあげた。

また、寺で新盆供養をした。四十九日までにお盆おぼんがきて重なる年にした。(小相木)

一、三、七、十三、十七、二十三、二十七、三十三回忌をしたが、一、三が多い。

三十三回忌は神さまになるので、杉をはじにしばった塔婆をあげた。

(稻荷新田)

#### (四) 死 霊

死霊が家を離れる時 早い人は輿こしのまわりから出てゆく。その時火の玉が二つ出たという。

火の玉は「二十歳前にみないと一生見ない」と言う。フワフワと上下にとぶか、見える人、見えない人がいる。(巢鳥)

一年間。四十九日。ヤノムネにいる。(植野)

四十九日に離れるが、一年間はヤネの棟むねにいますと言った。(池端)

四十九日はヤネムネにいる。

位牌あげの時に餅をつくと、餅の音でヤネムネより離れると言う。

アンなしの四十九のモチを寺に持って行つた。おそなえの形になっていた。

また、念仏もうしに来た人にくばった。(元総社四区)

四十九日はヤネの棟むねにいる。(小相木)

四十九日までは家をまもっている。(稻荷新田)

死者の生まれかわり 死者の足の裏に字を書くと、生まれた子に出

るので書くものでないと言う。

子や孫が親の死後に生まれると生まれかわりと言う。(巢鳥)

生まれかわるとは言った。(池端)

子供ができると、オジイさんの生まれかわりとは言った。

(元総社四区)

生まれかわりとは言う。おじいさんがなくなり男の子ができると男の子でよかったと喜ぶ。(稻荷新田)

# 第十一章 年中行事

## 一月

正月行事 おかざりがえは十三日。七日、十一日…お松ひき。十一日…くらびらき、くわだて。

土蔵のあるうちは、戸をあけて供え物をする…くらびらき

畑へ出て、さくを切るまねごとをする。うちの近くの畑へ行く。年男がする。お松をたて、おさご、ごまめなどをあげる。てんがを持って行ってさくを切ってくる。

庭のお松をひいて、畑へ持って行って立ててきた…さくたて。

十二日が小正月のもちつき、十三日がかざりがえ、十三日の朝もちをつくうちもある。

もちは粉もち、うるちの粉をひいてついた。もち米をしたぶかしにしてついた。

十三日には、まゆ玉を作つてあげた。まゆ玉の大きいのを十六コ作つてボク（ミズナラ、六日山に切つておく）にさす。これを床の間にあげる。

まゆ玉をさした枝には、かざり菓子やをさげた。これは売りに来た。

ニワトコでかき花を作つた。これをお松をさしたところにあげた。

かゆかき棒はニワトコで作つた。ニワトコを一尺くらいの長さに切つて三がいにかいて、上を四つ割りにした。そこにまゆ玉をさした。これで十五日のおかゆをかきまわした。

かゆかき棒はとつておく。水ひきをかけて神棚にあげておいた。稲の苗間をする時に嵐除けといつて苗間のすみに二本立てておいた。（苗間の神様にあげる）

ニワトコで作つた花をこやしに立てた。

十五日のあずきがゆは、食べる時に熱いといつて息をふっかけて食べると田植の時に風が吹くといつた。

十五日は新しい年になってはじめて小豆を煮る日である。この前に食べると縁起が悪いといつた。この小豆がゆはとつておいた。

十八日の朝、十八がゆといつて十五日の小豆がゆをとつておいて水でのばして、うちのまわりにまいた。今でもこの行事をやっているうちもある。このことは、へびなどがうちへ入らないようにというおまじないである。

これをまくのは、子供とか、年寄とか、おんなしゆなど、誰がまくとは特に決まっていない。まき方は、のの字まわりにする（神様まわり）（元総社）

一月の行事（つづき） 四・五日の朝はぞうに。夜は白飯、昼は余りもん。

六日はとしとり。夜がとしとりで白飯、しゃけの切身を食べた。

六日は六日山といつて、この日、箕輪の方の大平山へ行ってかど木を切つて来る。しかし、ほとんどそこへは行かないで、畑のくわのたてどおしを切つて来た。

桑の木に小正月の飾りかえのときに、めえ玉をさすのに使った。  
十六日はツバキの枝を切つて来て、だんごの大きいのを十六コさした。これは、まゆの形をしたもの、かいこの縁起をかついだもの。

七日は七草がゆを作った。セリ、ナズナ、大根、にんじん、こぶ、豆などを入れて作った。

八日は、江田の年始めの日。よそから年始めに来た。この日は八日だめ。この日、便所をきれいにした。そのため(下肥)をかついで行つて麦畑にうわびきした。

九日は、前橋の初市。

十日は、高崎の田中のこんびらさまの縁日で、おまいりに行つた。親類へ年始に行く。

十一日は蔵開き。くわだて。くわだては畑へ行つて三さく切つて来る。そこへ一升枡に入れて下げて行つたものを少しあげて来る。おさご、スルメのさいたもの、干し柿、ごまめなど。

門松の枝を持つて行つてさした。その年のあきの方へむかつて五穀豊穰を祈つていろいろのものをしんぜて来た。

十一日はまた、島村の年始うけの日。

十二日は出しそびれた下肥をくんたりした。はなかきをしたり、小正月の飾りかえの用意をした。またもちつき。

十三日は飾りかえ。この日は道祖神小屋を作った。正月のお飾り材料にして三角錐の小屋を作った。道祖神子供は、十歳から十六歳まで。男の子がこの日組から出て小屋を作った。材料が足りないので子供がうちからわらを一、二束持つて来たり、ムラ内の人からもらった。竹やぶのあるうちからは竹をもらった。子供の組は、一番上が世話人、その下の下世話人、あとは道祖神子といった。世話人が昔の高等科の者、下世話人に高等科一年生。リヤカーをひっぱつて、ム

ラ中をまわつてお飾りを集めた。わたしが子供の時には十三日にそれぞれのうちで正月飾りはずして束ねておいてくれた。それをリヤカーに乗せて集めて来た。リヤカーの前は荷車をひいてお飾りを集めたという。むかしは七草の日が門松をはずす日であった。

十四日の朝、どんどんやきで小屋を燃した。小屋に火をつける前に、たいこをはたきながらムラの中を回つた。その時「道祖神が燃えますよ、はや夜があげますよ」といつて回つた。ムラの中を二、三回まわつた。二時とか三時ころ。三時ちよつと過ぎてまわつて来ると、ムラの人が小屋の所へ集まつて来た。ムラの人が集まつて来ると火をつけた。子供たちは各自が「道祖神大笑」と書いた紙のはた(のぼり)を竹の先につけて持つて来て、どんどん焼きの火で燃した。もちを持つて来てそのはたの竿(竹)の先にさして焼いて食べた。このもちを食べると風邪をひかないといつた。

十四日は漆原のざる観音の縁日。漆原は年始だつた。

十五日には朝、小豆がゆをした。かゆかき棒を作つて小豆がゆをかきまわして食べた。ニワトコの木で作つた。かゆかき棒はとつておいした。苗代の時にそれを水口に二本立てた。それははつきりしないが、稲の病気がでないようにといふ意味であつたらしい。

十六日に鬼の首も許されるといつて奉公人が自分のうちへ帰つた。

十七日は堤ヶ岡の観音様のご縁日。そこには馬頭観音がまつつてあつた。むかしは競馬があつた。この日、年始に行くとか、競馬を見に行くとかした。

十八日は、高崎の大類の柳原観音のご縁日。ここにも競馬があつた。ご年始がてら競馬を見に行つた。十八日の朝、十五日の小豆がゆの残りを屋敷のまわりにまいた。長虫がうちの中に入つて来ないようにといふことであつた。



オーホンヤオーホンヤ)

総社町の唄(鳥追いだ 鳥追いだ

あらあ だれの鳥追いだ 地とう尊の鳥追いだ

頭切つて尻切つて 佐渡が島へ つん流せ)

五 上石倉の「つるぞ」

つるぞ つるぞ しの田の森の道楽狐 つる釣つてみようか

つられてなるまい 釣つた 釣つた 釣つた

六 道祖神祭り

阿弥陀寺の唄(どんどん道祖神が燃えますよ はや夜が明けますよ

この夜のながいのに さんざべべこきやがつて  
はやくおきろよ)

道祖神様の伝承

七 白の風習

八 節分の言葉 不苦者有智 遠仁者疎途(上石倉)

初申の日 大黒柱(の上の方に) 麻のなわをまきつけた。二十日の

家もある。(総社栗島)

正月様 中沢家ではお正月様がお帰りになる前(卯の日の卯の刻の

前)に赤飯をふかして正月棚にあげる。家族の無事などを祈った。

(元総社)

正月様は元日に来て、卯の日の卯の刻に帰るといった。正月様は卯の日の卯の刻にその人の運を定めるといった。(元総社)

正月三が日の家例 長尾家では正月三が日は、朝はそば、昼は何んでもよい、夜はご飯。三が日の間、夜一回だけとろ飯を食べることになつてゐる。四、五日の朝は餅を食べる。夜はそばを食べる。朝は餅を焼いて雑煮にして食べる。神棚には餅を小さく切つて汁と一緒にあげる。汁だけの中に餅を焼いて入れて食べた。七草までは野菜を食べ

てはいけないといった。(元総社)

江田の小野里家では、正月三が日は朝は雑煮。餅は焼いて入れる。汁の中には大根、さといも、にんじん、しいたけ、あぶらげなどを入れるが、ねぎは入れない。また、七草までは野菜を食べてはいけないという。(江田)

一日〜三日の朝は雑煮。神の鉢に大根、にんじん、いもと餅を入れて神様にあげる。餅の大きさは、幅が一センチで長さが三、四センチくらい。これを二枚焼いてあげる。片側だけ焼いて包丁で切つてあげる。各神様に餅を二枚ずつあげる。お松にもしんぜた。三が日にあげるものは、もとは四日まであげておいた。四日の朝がお棚さがしで下げる。下げたものを四日の朝、おじやにして食べた。(四日の朝はおじや、昼はもちなど、夜はご飯)(江田)

松下家の正月三が日の家例 一日と三日の朝は雑煮。餅は焼いて汁の中に入れて食べる。汁の中には具として大根、にんじん、里芋、しいたけなどを入れる。神様にあげるのは具だけで、神の鉢に入れてあげる。これを下げるのは五日の朝。おじやにして食べた。

(青梨子 前原)

一日から三日まで朝はそば、夜はご飯、三日のうち一回とろ飯を食べる。一月四日頃の再始の来る前に、三が日供えたものを下げた。

(元総社殿小路)

大晦日の朝はそば、神様のお松にしんぜた。

三が日は暗いうちに外までしんぜに行つた。それは子供の役であつた。ヤナギの箸を作つてそれでしんぜた。三が日の間は朝：そば、昼：食べたいもの、夜：ご飯。餅は二日の朝雑煮にして食べた。野菜は三が日は食べない。七草まで青菜を食べさせなかつた。三が日はそばとめし。

三が日はそばとご飯。昼は残ったもの、餅とかそばとか。四日は雑煮の食べはじめ。昼はあらたまらなかつた。

三が日は朝はそばで夜は飯。昼は雑煮とか餅を焼いて食べた。三が日はそばとご飯。三が日の間夜とる飯を食べた。とる飯を食べると中風にならないといった。四日、五日は雑煮。三が日あげつばなし、四日の朝これを下げて雑煮の中に入れて食べた。四日はお棚さがし。四日の午前中、医者と坊さんがご年始に来た。「けんさいご年始」といって医者が来た。坊さんは「とくぞうじご年始」といってくる。お小僧を連れて来て庭でどなる。

門松はとほ口からまっすぐ南の所に立てた。(元総社)

トロイモを三が日の内に食べたもの。中気にならないようにとの意味。(小相木)

朝はそばきりに昼はだんごといひ、夜ご飯を食べた。餅は六の日になつて正式に食べられた。(桜が丘)

牛込家は正月三が日は雑煮家例である。餅は四角に切つて焼いて汁の中に入れる。汁の中には大根、にんじん、なつば、いもなどを入れる。餅はさいの目に切つたのを野菜と一緒に神の鉢に入れて正月様にあげる。

朝は雑煮、夜はご飯を食べる。昼は何を食べてもよい。三日の間は供え物はさげないで前日供えた物の上につけていく。三が日あげたものは、四日の朝さげとつておいて七草のおじやの中に入れて食べる。なお、お供えの餅は大晦日にしんぜる。(下新田)

下石倉の近藤家、都木家では元旦に朝風呂に入つてからお正月様が六時に来るので、餅の間にいわしをはさみこんで家族全員が食べる。元旦の時だけのことである。(下石倉)

(石原家の場合)

正月三が日 朝うどんを作つてあげる。餅は食べない。餅は四日から食べ始める。うどんをゆでてあげるのは男衆。

(長井家の場合)

一日の朝はそば

二日の朝はご飯

三日の朝はそば

めんばに入れて供える。

四日の朝、坊さんがご年始に来ないうちに、三が日供えたものをさげておじやにして食べた。

(反町家の場合)

三が日の間、朝雑煮をあげる。四角の切餅を細く切つて焼いて二きれずつ、めんばに入れてあげる。

それを七草の朝までさげないでおく。七日の朝下げて七草がゆの中に入れる。(西箱田)

正月三日間 梅山家の場合：三が日のうち一回は赤飯をふかす。元日はのぞく。二日か三日は赤飯、あとは雑煮。

飯野家の場合：三が日雑煮家例。他はご飯。餅は長方形。焼いて二切れずつあげる。汁をつけないであげる。具は箸でとつてあげる。餅をおしらさまにあげ、その上におたま(しゃもじ)で具をすくつて箸ではさんであげる。里芋、大根、にんじんなど。毎日積み重ねてあげる。これを四日の朝下げてとつておいて七日の朝、七草がゆの中に入れて食べる。

梅山家の場合、四日に坊さんが年始にまわつて来る前に、三が日供えたものを下げるといった。(小相木)

杉山家の場合：正月三が日はそばがよいである。十二月二十九日が餅

つき。一番始めの臼の餅は、のして切り餅にする。二番目の臼はのして切り餅にしたり、おそなえをとったりする。おそなえは元日の朝、お灯明、お茶と一緒にあげる。なお、五か日に正月棚の真中に香をあげる。これは朝だけのこと。正月棚には、年神様と大神宮様をまつている。三が日は、朝はそばを神の鉢に入れてあげる。夜はご飯をその上に乗せてあげる。これを三日間続ける。三が日の朝は、家人はそばを食べる。昼は何を食べてもよい。餅を食べてもよかった。四日の朝、三が日正月棚にあげたものを下げてとっておく。これを七草のおじや（おかゆ）の中に入れて食べた。四日の朝は雑煮を食べる。このあと、食べ物については自由になる。三が日の間、そばを作るのは嫁さん。器用な人は男衆が作った。供えるのは年男である。（下新田）

並木家：並木家では、年男が三が日お膳に食事をのせ、便所に行つて食べた。（元総社大渡）

粟島では、大半が元日にソバ、二日は雑煮、三日もソバを食べる家例であるが、小鮎家では元日にソバ、二日に雑煮を食べた。また三ヶ日の間にトロロを食べることになっていた。

七草までは菜を食べず、紙を燃やしてはいけない風習であった。

（総社町粟島）

富沢一家は大正月にしか餅をつかない。武田の子孫として徳川に追われていたからという。（江田）

三ヶ日の家例としてソバの家と雑煮の家の二種ある。（清野）

## 一 日

一日の朝のしきたり 小野里家：江田で小野里家の主人だけが正月の一日の朝、いわしを餅にくるんで食べる（二匹）。他の者は食べない。餅に一匹だけ焼いたものをくるんで食べる（矢島でも同じ）。訳はわか

らない。今はしていない。（江田）

年始で、近所（隣保）にあいさつをする。

「おめでとう、よろしく」と言う。

お雑煮を作り神棚に進げる。

若水を井戸から汲んで来る。お供のお餅を若水に入れておき、三が日毎日水をかえる。水につけ、出し、流しに下げておく。その後干しておく。六月一日に油であげて食べる。水モチという。（池端）

初参り 十二時すぎて神社に一家で行った。（小相木）

朝湯 元日の朝湯は、朝暗いうちから来た。たくさん来るので十一時ころまでになった。三が日の間は本家新宅の間で朝湯に入った。

（小相木）

元日の午前零時にわくようにお風呂をわかし、暮のお飾りを手伝ってくれた人と呼ぶ。親せきの人も来る。湯に入るとすぐ帰る。

明神様にお参りしてから入る人と、お湯に入ってからお参りする人と

いた。その頃、光厳寺で百八つの鐘をたたいた。（総社粟島）

朝湯組といい、組内でお湯に入り

まわった。午前三時頃だった。

（上青梨子）

お正月は隣りの組の三〜四軒で、回り持ちで朝湯をたて全員が入浴する。当番になった家の嫁が最後に入る時は、外で身体を洗う習慣がなかったたので、お湯は真黒であった。

（総社粟島）

若水 年男がくみ、風呂をたてて



若水桶（清野）



朝一番に入った。(小相木)

元日に水を初めてくむ。桶にしめ縄をはり、桶の使いはじめにした。

(総社新田)

家長が朝早く若水をくみ、神棚にあげた。その水でお茶を入れた。

(桜が丘)

年男 長男。三が日は食事ごとにそれをあげる。雑煮も三が日はあげた。若水をくんでわかす。家により料理を作るところもある。

(小相木)

年始まわり 元日に寺に行った。お参りをした後にお金を包んだ。

御年始日は九日の前橋の初市の日で、年始に来て帰りに初市でクルマを買った。

年始日は朝十時頃から夕方までかかった。一日がかり。その日には砂糖やウドンを持って行った。食事を来る人数分用意して待っている。朝十時くらいから仕度をして行った。

酒が飲めるのでうれしくて、前の日は寝られなかった。年始参りは地区で違うので、その日に行った。(小相木)

五人組がそろって村中の家をまわってあいさつをした。その後神社に集まるようになり、あいさつにまわらなくなった。昔は通り沿いに並んでおり、六十軒ほどだったので順にまわった。(総社 粟島)

神谷家へ町内の有力者、教員、警察官などが集まり飲食した。もとは学校でやり、元景寺に替ってやっていた会が、神谷家に替って続いた。一日で一斗の酒を飲んだ。(総社粟島)

一月一日に檀家が寄って年始会をした。(西箱田)

互礼会。(総社新田)

## 二 日

うたいぞめ 二日がうたいぞめ。昔やったということで、おぼえてはやらなかった。(元総社)

正月二日 初売りでくじびきをした。景品名を紙に書きこよりにしてくじにした。十円買うと一回引けた。官製品のたばこや塩はもうけが少ないので、余り引かせたくないが、何回も買いに来る人がいた。くじの代りに景品をくれる店もあった。午前一時ころから寝巻で買いに来る人がいた。くじは元日の夜作った。この日の夜、二そう舟をおって枕の下に入れて寝る。紙に「……波のり舟のこの良きかな」というような文句を書いた。いい夢を見ると一年中よいことがあるといつた。おじいさんが作り、家族中の枕の下に入れた。「富士、二鷹、三ナスビ」の順で良いといわれた。(総社粟島)

初夢 暮に売りに来た初絵を枕の下に入れ、正月二日の晩に見た夢が初夢である。宝船などの目出たい絵だった。(元総社大渡)

## 三 日

正月三日 御年始日。神社では太々神楽を奉納した。総社神社から来てもらった。(上青梨子)

光巖寺の御年始 正月三日の朝、お寺で御年始にまわって来る。番頭が先ぶれて「光巖寺御年始」といってまわる。番頭は光巖寺の半破を着ている。家のものは家の門の外まで出てあいさつをする。元景寺まで行く。(総社粟島)

光巖寺の御年始。(総社新田)

清里の淡島様、青柳大師へお参りした。(桜が丘)

#### 四 日

正月四日 お棚さがし。正月のお供えを下げた。お供えは紅白の丸餅の上に紅白の四角の餅を二枚のせ、松の木をさしておく。紅い餅は小豆で染めた。(上が赤、下が白になっていた) (総社栗島)

三が日あげておいたものを四日の朝はさげる。これをとっておいで七日の朝おじやにして食べる。四日の朝はうどん。昼は何んでもよい。夜はご飯をして食べる。(下新田)

一月四日は婿の御年始 このムラの旦那寺は元総社の徳蔵寺。和尚さんは四日にご年始に来てくれる。四日は婿のご年始といった。新しい婿は、四日に嫁の里へご年始に行った。一晩泊ったら帰って来いといった。持って行くものは餅とスルメ。(江田)

一月四日は婿のご年始といった。この時は、嫁さんも一緒に行った。新しい嫁婿が行ったもの。次の年は自分のうちで年始受けをする。

一月十五日は古い嫁さんが里へご年始に行った。番頭さんもこの日うちへお客に行った。(江田)

四日は嫁の里帰り 四日は嫁のご年始日。婿に来た人もこの日ご年始に行った。嫁は一日くらい泊って来た。「六日年だから泊って来るな」といわれた。四日に里に帰って二晩泊るものではないといった。

(元総社)

坊さんのご年始 一月四日は坊さんのご年始日。この日は、うちの者は縁側の所で立って待っていた。お供の者が「元景寺ご年始」といつて来た。餅、おかね、米などをやった。坊さんは縁側の所で接待した。(うちへ入れない) なお、この日は坊さんがご年始に来るまでに、お正月に供えたものを下げるといった。(総社町総社)

四日は坊さんのご年始という。正月様の前に飾ってある塩びきは、坊

さんがご年始に来る前に下げた。この日は、婿のご年始と違って、嫁は嫁の里へご年始に行った。(下新田)

元景寺の御年始 正月四日。三日の光蔵寺と同じようにまわった。檀家でない家は出て出なくてもよかつた。(総社栗島)

元景寺の御年始。お札とおしゃもじを配った。つのがら大師(元三大師)百観音のお札で、玄関に飾っておいた。(総社新田)

お寺の年始まわり 正月四日にお寺の年始まわりがあつた。子供が先に立ち「常円寺御年始」と大きな声を言いながら歩いた。(西箱田)

#### 五 日

正月五日 出入り。新しく木を切つてその木に網で男むすびでしはり、おしめを下げた。山に入つてけががないようになどと祈つた。

(桜が丘)

仕事始め 正月五日に、畑へ行つておしめのついたテンガのあとをつけて来る。(桜が丘)

せりとり。七草粥に入れるせりを採つて来る。採つてしぼり正月棚にしんせておく。(総社栗島)

七草とり。一月五日に七草とりをする。ナズナ、セリなどをとつて来る。あとはなつば、大根などを七色選んでかゆの中に入れる。七色の中に必ず大豆を入れる。これは一年中まめ(達者のこと)に暮せるようにとすることである。採つて来た七草は、わらでも麻でもしぼつて正月棚の所に下げておく。なお、その年に厄年のものがある場合には、セリはうちの中に入れるなどといった。

七日は七草。この日、お松を下げて屋敷のはたへまるめておく。十二日になるとお飾りを往還のはたに出しておく。これをお子供が集めに来る。(下新田)

六 日

六日年 六日爪といって、セリ、ナズナなどをひやした水に爪をつけてから切った。夜、爪は切ると「世をはぎる」といっていやがった。

六日山といってこの日、近くの山へ行っておまい玉をさす木(ボク)を切りに行った。六日山はじめ。山の木をこの日切られても、文句は言えないといった。ボクは年男が切つて来た。(元総社)

六日年・六日山 一月六日、この日のことは女の年とりというが、特別の行事はない。山を持つている人は、六日山といって、山へ行って小正月にまゆ玉をさす木を採つて来た。年男(おやじさん)が行つて採つて来る。(下新田)

六日山。ミズブサの木、ニワトコの木を切つて来て、マユダマ飾りに用意する。竹も切つてきておく。庭にはやしておいた。利根川へのナラの木を使う家もあった。(総社栗島)

六日山にボクを採りに行き、十三日に飾りを作る。(上青梨子)

大根のとしとり えびす講は大根のとしとりといった。えびす講が終えたから、大根とりをしてもいいといった。えびす講は今は新の十一月二十日。十二月に入って大根とりをする。(元総社)

年始まわり 六日に年始まわりをした。朝湯に入り朝飯を食べてから出かけた。一番始めに八幡様へおまいりをする。そのあと、上新田の福徳寺へ行き、ムラの親類をまわり、墓地、南の稻荷様をまわった。ムラ内では、一番はじめに本家へ行く。その後、うちうちを歩いた。おぼえて十五軒くらいはまわった。何も持たずにまわった。昭和十年代まではあさげ酒を出してくれた。一軒で盃に二、三杯くらいは飲んだ。戦争後は酒を出すのはよしになり、お茶だけになった。今では兄弟といとこくらの所までまわっている。年始まわりをすると、昼過

ぎの三時ごろまではかかった。(下新田)  
山入り 正月六日に年男がカゴギとニワトコを採つて来る。十二様を拝むのは自分の家の山で、切るのは木が足りなければどこの山でも良かった。



山入りのお供え (上青梨子)

山の主木に縄を二巻しておしめを下げ、おさご、お頭付きか鯉節をますに入れて供えた。おしめは半紙を二つ折りにしたもので、四垂れ幣を作った。

鋸と鉋、桑きり鎌で切る。みずき、ニワトコ、えごのき、こめごめ(紫式部)を切つて縄でしばって担いで来た。

庭の坪山神様に預け、樹木に立掛けておいた。二三日前に外皮をむいて、影干ししておいた。特に供えるものはない。(上青梨子)

七 日

七草 セリ、ナズナを切つておじやを作った。

七日の朝、四日のお棚さがしのとこに下げたもの(三が日、お棚にあげたもの)をおじやに入れた。

「七草ナズナ、唐土の鳥が日本の国へ渡らぬうちに、たたけ、たたけ、セリたたけ」といいながら庖丁のみねの方でセリ、ナズナをこんこんたたいた。

まな板をひっくり返しにして、庖丁のみねの方でたたいた。

セリ、ナズナを切るのは、正月棚の下、それをおじやに入れて神棚とか正月棚に備えた。

七草はぞうすいの炊きはじめという。また、七草が過ぎれば青菜を食べられるといった。

お松ひきは七日の朝（石井家・中沢家）

中沢一家では、昔お正月に不幸ができた。お正月様をけがしてはならないといつて、外飾りのお松を七草の日にひいたのが家例になったという。

くいは残しておく。お松の芯を切つてくいの所にさしておく。小正月までおく。（元総社）

七草のおじや 七草のおじやの中には、三が日正月様にあげたものをとつておいて入れて作る。

おじやの中には、セリ、ナズナ、大根、にんじんなど七種類の野菜を入れた。おじやは正月棚に供える。なお、セリなど七種類のもは、まな板の上のせて、庖丁で次のようなことを言つてたく。

「ナクサナズナ、トウドノトリトニホンノトリガ、ワタラヌウチニ、ナクサナズナノセリタタケ」（下新田）

一般的にはセリ、ナズナはこの家でも使つていたらしいが、ピタミンを補うことが重視されており、七種類の草は、必ずしも一様ではなく、各家により異なつていたらしい。

この地域では、七草がゆを作る際、また板で七草をきざみながら「とうど鳥の渡らぬうちに七草のナズナのセリたき」と言いながら料理した。（上青梨子）

七草粥を作つた。（総社粟島）  
七草粥を作る。七草の粥は生米から煮て作つた。下にイモを入れてこげないようにした。

元日から七草まではナツパを食べない家例だった。他の家で食べるのはかまわなかつた。この日に門松をとつた。（総社粟島）

七草は「イチヤ」ではと言ひ、前の日にとる。（小相木）

おかざり 七草の日に正月の飾りをとつて道祖神で燃やした。（桜が丘）

八 日

正月八日 タメを出す。大ダメにタメと下水が入れてあり、どんなに少しでも出した。畑に行つてかけてきた。この日が仕事はじめのわけだった。（総社粟島）

九 日

正月九日 前橋の初市。町へ御年始に行った。（総社粟島）

十 日

正月十日 高崎の金毘羅さま。毎月十日にはよくお参りに行つてた。（総社粟島）

十一 日

さくたて・くらびらき くらびらきに、鏡餅をほぐして雑煮にした。焼いて食べた。朝のうちの行事。

さくたては、お松を一枝折つて、田に立てて来る。ゴマを二匹そこへしんせて来る。さくを六尺ほど切るまねをして来る。そこへお酒、おさごなどを持つて行つた。その年の恵方の田へ行つてさくを切るまねをしたり、供え物をした。 （下新田）

一月十一日は蔵開きである。歛立てをこの日に行う。(江田町)

倉開き 朝雑煮にしてあげた。また、入口の戸の前にオサゴをあげた。(小相木)

くわたて 一年報の農道具の初おろしをした。作番頭が十一日に実家より帰って来て、麦の手入れをした。終るとシルコなどのごちそうをした。

畑では寒くとも凍っていても一間でもサクを切った。(サクタテと言う)

大正月のオシメをとっておき畑に立てた。(小相木)

サクタテ、クワイレと言ひ、松を立て一サクくらい切る。

蔵開き。それまで使ったり開けたりもした。お膳に雑煮を作り蔵を開け進めた。(池端)

粟島の御年始日で、年始を受ける日だった。

光厳寺の元三大師の縁日だったので、この日が粟島の御年始日になった。(総社粟島)

## 十二日

小正月の餅つき 一月十二日につき、この地域ではゆずしと呼ばれる混ぜ餅をついていた。ゴマ、唐がらし、山芋、里芋等を入れていた。

(上青梨子)

小正月の餅つき。(総社粟島)

モチツキをする。(上青梨子)

小正月の飾りかえ 十二、三日が飾りかえ、十四日朝に道祖神でもした。十二日に小正月のモチをついた。(小相木)

## 十三日

小正月 マユ玉木に飾り菓子を下げた。初市で売っていた。この木に本物のフナを二匹下げた。(元総社大渡)

小松といい、十三日から十五日までをいう。松の穂を採って小正月の小松飾りを作った。家のあちこちに飾り、ご飯をあげた。(桜が丘) 飾りかえ 十三日に大正月から小正月の飾りにかえた。マユダマを作り飾った。道祖神を焼いた火で燃やして食べた。

ミズキでカザリバナを削って作り飾った。二段か三段のもので、玄関や屋敷稲荷に飾った。

マユダマは丸い形とマユの形で、米の粉で作った。(元総社大渡) 神棚に竹とミズブサでマユダマ飾りを作った。ハナガシを売りに来て飾った。(総社粟島)

カドマツをとり、モチでマユ玉を作り飾った。神棚にも飾った。マユ玉はエゴの木、ミズナラ、ヤマクワ、ナラの枝につけた。(池端) 門の外に出した。マユ玉飾りを飾った。神棚にあげた。オシラサマを六畳座敷に飾った。竹の二本にしぼり、お供えをあげた。掛け軸を下げた。十六段のハナを二本作った。マユ玉を十六作り二本作った。



ケヅリバナ (上青梨子)

粉を二斗ふかした。ニワトコの木を削って飾った。大黒柱にはヤシの木をしぼり、綿のわけにした玉をさした。イモの形だった。

(総社粟島)

正月十三日が飾り替

えの日である。



繭玉飾り (総社 山王)

んで立てた。墓地には松杵に縄で結んで立てた。これ以外には、便所、おそうぜんさま、臼、倉、納屋がある。

まゆだま飾りは、正月十三日の朝食後早めに作った。粉は残米、屑米を暮にひいて使った。黄色はコウケンを表した。コウケンは糸が丈夫だが染色しにくかった。木には普通のまゆだまのほか、餅の十六という、倍くらいの大きさがあるものもつけた。

米の粉で、ノデンボウという綿の花を作り、大黒柱に檜の木の枝をしぼって枝にさした。

大きさは後で下げにいけない所は小さいもの、他は大きさは同じだった。

まゆだまは、しょうぎやお鉢に入れてさした。まゆだま以外には、まぶしの意味で、ハナや飾り餅、そばをつけ、飾り菓子下げた。ま

ハナを飾った。十六段の皮をむかないものを堆肥場に、むいたものを室内と坪山神様にあげた。部屋に鴨居にあげておく室内用は特に吟味したという大きいものである。二段のものは、大正月のゴジツコメをあげた所にあげた。神棚には四隅に藁で結んだ。仏壇やおしら様は花瓶にさした。稲荷様、えびす様、石造物、神社やお堂などは前に立てた。釜神様はお勝手の棚に二本飾った。井戸神様は井戸小屋の二本の柱に縄で結

んで立てた。山の神は山神様と兼ねて立てた。これ以外には、便所、おそうぜんさま、臼、倉、納屋がある。

まゆだま飾りは、正月十三日の朝食後早めに作った。粉は残米、屑米を暮にひいて使った。黄色はコウケンを表した。コウケンは糸が丈夫だが染色しにくかった。木には普通のまゆだまのほか、餅の十六という、倍くらいの大きさがあるものもつけた。

米の粉で、ノデンボウという綿の花を作り、大黒柱に檜の木の枝をしぼって枝にさした。

下ごしらえとハナカキは家の軒場で、お飾りは床の間でやった。道具は木はさみ、鋸、鉋、ハナカキナタ、桑きり鎌を使った。台はチャブ台で、昔は桑きり板を使った。作ったものはコザ、あるいは箕に入れておいて床の間においた。

ハナはニワトコの木で作った。十六段のものと二段のものがある。

カユカキ棒はニワトコの木を削った。片方をとがらせ、もう一方は四つに割り、まゆだまをはさむ。二本一組。笹沢家では、このカユカキ棒をハラミ棒といっている。

箸は柳の木を使う。暮に採って来た。ゆでて皮をむいて作る。元日

た、てまり、折り鶴を下げた。干支の動物をだんごで作って、根元においた。

まゆだまをさす木は、桑、みずき、かりん、えご、こめごめである。



マユ玉飾り (上青梨子)

びつける。お宮には、脇に二本立てかける。

お正月の飾り付は、おそなえを十二乗せ、中央に年徳神を安置し、その前方に天井から飾り棚を下げ、アキの方に向ける。この組になったものを大飾りと呼ぶ。

小正月の飾り付も、八畳間一杯に飾った。(江田)

モノツクリ 正月十三日が飾り替えといつて、大正月のお飾りをとって、小正月のお飾りをした。作るのは十二日で、午前中餅つきをし、午後ツクリモノを作った。

カユカキ棒はニワトコの木を削った。片方をとがらせ、もう一方は四つに割り、まゆだまをはさむ。二本一組。笹沢家では、このカユカキ棒をハラミ棒といっている。

箸は柳の木を使う。暮に採って来た。ゆでて皮をむいて作る。元日

た、てまり、折り鶴を下げた。干支の動物をだんごで作って、根元においた。

まゆだまをさす木は、桑、みずき、かりん、えご、こめごめである。

から使いはじめる。

ハラミバシ、福俵、アワボ・ヒエボ、木刀、農道具は作らない。

(上青梨子)

ハナ ニワトコの木の六尺ほどに切り、二本たばねてタイヒバの上に立てておいた。この木はハナはかかない。白紙でくるんでしぼった。

(元総社大渡)

ハナカキ ニワトコの木や桑の木で「ハナ」を飾った。神棚に飾った。魔除けという。

ニワトコの根元(メドキ)に二本おき、もう二本は紅白の水引きで束ね門松の所においた。(小相木)

マユ玉 十二日に米の粉で作った。形はマユ、ナス、キュウリ、カボチャの形で養蚕、農作を祈ったもの。紅白のものもある。

桑の大きな木(タテドオシ)につけた。室内に立てるのに正月の麻ひもでひっぱった。枝ぶりの良いものをさがした。モナカのような飾りもつけた。十三〜十四日に飾った。頭つきを飾る家がある。(小相木)

道祖神とどんどん焼き 道祖神は二人で立っているが、兄妹で夫婦になったのでみせしめのために道端に立っているのだという。

道祖神は恋愛の神であり、また、旅の安全を守る神であるという。どんどん焼きは、一月十四日朝の行事。正月のお飾りをまとめて小屋を作る。小屋を燃やす前に子供たちは、太鼓をたたきながらムラ中をまわった。

「道祖神が燃えますよ、はや夜があけますよ、小旗持ってとんで来い」

「こんな夜が長いのに、さんざべつちよしがって、早く起きろ」

どんどん焼きの小屋の所へ行く時に「道祖神大笑」と書いた紙の旗を持って行く。

十三日の午後に小屋を建てる。この時は子供たちで作るように「道祖神の小屋つくりに出てくるね、やあい、やい」と言いながらムラ中をまわった。

道祖神の仲間は、小学校一年生から六年生まで。小学六年生が親方、小学五年生が小頭、あとのものは兵隊といった。

十一、十二日の二日間は竹をもらいながらお金ももらった。「人別帳」を持ってもらい歩いた。それを人別もらいた。

お金については、差をつけない所もあつたが、大人が二銭で、子供が一銭というのもあつたし、嫁さんをもらったうちは五十銭ということもあつた。お祝いのあつたうちは余計出してくれた。十銭から二十銭出してくれた。

道を通る人に「おじさん、へいがみくんない」といってお金ももらった。人が通ると通せんぼこしてお金をもらったこともあつた。

十三日の晩、若衆が七小屋まつりといって、近所の道祖神の小屋を七カ所まわって来た。

七小屋まわりは、一人でも仲間と一緒でもまわった。どこの小屋でも、七カ所の小屋をまわった。一銭とか二銭、おさいをあげて来た。おさいをあげると小屋の子供が、おはらいとおみくじをくれた。

(青梨子前原)

どんどん焼きに参加するのは男の子だけ。十日より前から小屋作りの材料集めをはじめた。学校から帰って来ると、少しづつ材料集めをした。

竹は竹やぶのある家からもらって来た。親方があのうちからは何本もらつて来いと命じた。竹は全体で二十本から三十本くらいもらつた。すすきは竹もあつた。親竹を真中に入れて、すすきは竹はその間に入れた。まわりおさえにした。わらは全戸からもらった。馬を飼って

るうちからは、なわを一束ずつもらった。そのほか、お飾り、古いお札、だるまなどもあった。

お飾りなどは十四日の朝はずして束ねて、つぼ山の所とか、かいどの所へ出しておいた。それを子供が集めて歩いた。

なお、お飾りを集める時、各戸からおさい銭(おぼしめし)をもらって歩いた。この金で、豆腐などを買って食べた。

小屋が出来ると中に泊った。小屋の中にはわらを敷いた。小屋の真中に炉を掘った。大きさは普通の座布団くらい。炉の中に桑の根この枯れたものなどを持って来て燃やした。そこで餅などを焼いて食べた。豆腐汁を作ったり、雑煮を煮たりして食べた。大人は干与しなかった。子供の仲間の中の親方が世話をやいた。年長者が相談してやったこと。

一月九日がお松ひき。飾ったお松をひく。それをまとめてつぼ山におく。お松などを子供が十日頃から集めて歩く。

また、わら、なわ、竹などももらい歩いた。これを道祖神燃きをする所へ持って行った。その場所は、梅山一平さんの田圃と決っていた。十一、十二日に小屋を作る。十三日の午前中に仕上げ。十三日と十四日は小屋の留守番をする。十四日の晩に、小屋に火をつける。火をつける前に、子供たちがムラの中をふれてまわる。子供たちは

大太鼓をたたいて

「道祖神が燃えますよ」といいながらふれてまわった。

十四日の晩に火をつけて燃やした。

町内のまつり当番の人が火をつけた。小屋の建っている所の入口に、太鼓をおいて、その上に盃を並べて、酒(おみき)を出した。おまつり当番の人が酒を出した。お参りに来た人がそのおみきをいただいた。お参りに来た人は、餅を焼いて食べた。

子供たちは「道祖神大笑」と書いた紙の旗を、竹につけて来てどんどん焼きの火で焼いた。この燃えさしが高く上がるほど習字が上手になるといった。

また、お松の燃えくじをうちへ持つて行く。これをうちの屋根にあげておく。こうすると、その家は一年中火災などの災難にあわないといつた。

小相木で、どんどん焼きが復活したのが平成元年。

その前やめたのは昭和四十年代のこと。二十年間ほど中絶していた行事を復活したものである。(小相木)

一月十四日の朝の行事。参加者は小学校三年生から高等科二年生までの男の子。

十三日が飾り替えて、この日十時ごろから小屋を作りはじめ。竹とわらをムラ内からもらい歩いた。なわは買った。

一月七日には門松は倒してつぼ山におく。門松をとったあとにはお松の芯をとってさしておく。

十三日になると、子供たちがはずしたお飾りをもらいに来る。

「かざりもんをもらいにきたよ」  
つてリヤカーをひいてもらい歩いた。

道祖神の小屋は毎年同じ所に作る。川のおちあう所に三坪くらいの空地がある。ここを道祖神場と呼んでいる。馬入れてわきに堀のあるところ。

もらってきたお飾りは、小屋のまわりにおつつけた。円錐形の小屋で、十三日十時ごろから作った。三日間くらいかかって作った。わらを編んでまわりから寄せた。竹は二十本くらい使った。

葉師様の小屋より中は広く作った。小屋の中には穴を掘っていろいろにした。そこへ道祖神小屋へお参りに来た人が坐った。



豆腐汁を作った（親方のうちで作ってくれた）。それは子供たちが食べた。

小屋に火をつける前に、子供たちがムラ内を知らせて歩いた。太鼓をかついで、それをたたきながら

「道祖神が燃えますよ」

といってまわった。

夜明けに水をつけた。

お参りに来た人が餅とスルメを焼いたりまい玉を焼いたりした。

半紙をなげて「奉納道祖神大笑」と書き、年月日と〇〇氏と書いたのを竹の棒の先につけていつてもやした。この半紙はお供えものをのせたもの。

この火で焼いたまい玉を食べると、病気をしない、かぜをひかないといった。

なお、道祖神焼きの時のもえくじを持って行って屋根の上にあげておくと火事にならないといった。

### 奉納道祖神大笑

年月日 〇〇氏



どんど焼（川曲）

一月十四日どんど焼きをした。

子供たちの行事。

親方は小学校六年生。

こやかたは小五、あと

は兵隊。

ムラの中の正月のお

飾りを集めた。リヤカ

ーをひいて各家をもらい歩いた。わら、なわなどをもらった。

どんど焼きの当日は、小屋のそばを通る人に「へいがみをくれ」といってお金をもらった。ご年始に歩いている人からももらった。

どんど焼きの時は、お飾りをつかかって道祖神小屋を作った。これはムラの大人がいく人か手伝って作ってくれた。小屋を作るところは毎年決まっていた。三角錐の小屋を作った。

火をつける前に、子供が合図してまわった。夜中の一時か二時ごろ、太鼓をたたいてまわった。寝ている人をおこしてまわった。

「道祖神が燃えますよ、はや夜が明けますよ」

とくりかえしてまわった。二回まわった。ムラの人は二回目になると起きてきた。

餅とまい玉とかお供えを持って行ってどんど焼きの火であぶって食べた。

習字を書いてきてどんど焼きの火で燃やせば上手になるといった。

「道祖神大笑」と書いた。

小屋のてっぺんの「大笑」をとりっこした。それをとると、そのうちはいかいがあたるといった。（西箱田）

どんど焼きの終りに火を消して片づける時、お松の燃えくじをうちへ持つてきて、うちの屋根にほうりあげておく。そうすると火事にあわないといった。（元総社）

一月十五日に、利根川原で子供会がドント焼きを行っている。

（中石倉）

道祖神は小学校卒業後一年の人が世話人となった。

一月十三日がヨセで十四日に燃やした。その年に結婚した男がお籠りをし、小屋掛けをした。

「道祖神大笑い」の幡を各家で一対ずつ作った。

石屋の所にある石仏が道祖神である。(江田)

道祖神祭り 一月十三日の夜中から翌朝にかけて行なわれる子供の行事。

六年生を親方(親頭・大頭とも言う)とし、五年生を幣神とし、小頭の下にヒラがいる。小屋作りにはお飾り松を使い、カッポン刈り(篠切り)をして大人の協力を得て行う。大人の手伝いが必要とする時に、「道祖神が燃えますよ」と呼びかける。

親方は天狗の面をかぶる。他に、金太郎・オトウカ・桃太郎・八幡太郎の面をつけ、ヒラはおかめの面をつける。

人別で金を集め、オミゴクを買う。親方の家で五目飯を作り、講中で食べる。

鳥追い 五色のオンベロ(幣束)を作る。親方は大きなオンベロを持ち、外で指揮をとる。太鼓を合図に宿から出て上から下へ回る。一月十四日に行なわれる。

天神待ち 赤・青・黄の旗を作る。ヤド・ミソ・木損と一口に言い、宿になる家にミソや燃料を持ち寄って御馳走を作つて過ぐす。

(総社粟島)

道祖神子 正月十三日の晩に子供たちのお祝いがあった。村中の家をまわり、お金なりをもらい、そのお金でおでんを作り、食べたり遊んだりして一晩をあかす。

一番年の上の子の家が宿になった。小屋を作つたこともあつたが、火事になつたことから、泊らせないようになつた。

十四日の朝早く、道祖神でお飾りを燃やした。ダンゴを桑の木にさしたものを飾つて、道祖神で焼いて食べると、幸せになるという。だんご型より蚕がよくとれるよう繭玉型が多かつた。

この木に飾る小判やマスの形のハナ菓子売りにきたものを飾つた。(桜が丘)

正月十三日の午後、お飾りを集めてまわる。同じものだけまとめていった。音がするようウツギも入れた。

親方と高等一〜二年の子がまわつた。昔は責任者だけが宿に泊つた。清里だけで、昔は十五も作つて燃やした。十五歳が親方、十四歳が小頭、十三歳は人足まわし、他は道祖神子といい、小学校に入ると参加した。

準備への参加の様子により、道祖神菓子の量が違つた。この時は一升の酒に水を入れ、三升にふやして二回配つた。

小屋がけする所はドウロクジンバといつた。親方は五目めしをふるまう。四人いれば四晩ふるまつた。

十一〜十二日に集めてまわる。もし木も集め、人別でお金も集めた。これ以外によい事があつたからといつて、お金をくれたこともある。お金は十四日の漆原の観音に行つて親方がごちそうした。

この道祖神が身上まわしのはじめだといつた。(上青梨子) 道祖神小屋は組ごとに作つた。十三日に大人が作つてくれた。竹を六本くらいよせて、正月のお飾りで作つた。青梨子で小屋が五つくらいできた。

小屋の中に子供が泊つた。十三日に泊つて十四日の朝壊した。子供の仲間の親方のことはオヤガシラ、コガシラといつた。その下については呼び名はなかつた。

組の中を毎戸まわつてお金をもらつた。各戸からは家族一人につきいくらと決めて、人数分だけもらつた。これを人別といつた。その家にお祝いごとがあつた時は、お金を余計くれた。

また、通りがかつた人からお金をもらつた。小屋の所に子供が寄つ

ていると、お年始の人が通る。子供はその人に

「おっちゃん、へいがみくんない」

とねだつた。親方が下の子供にへいがみもらえといいつけた。

十四日に、もらつたお金を子供全体に分けてくれた。

道祖神様の親方ができれば、うちの身上まわしができるといった。

道祖神小屋を焼く前に、子供たちは組の中をまわつて歩いた。夜明けの頃のことである。

「道祖神が燃えますよ、早や夜が明けますよ」

オヤガシラのうちを宿にして、小屋へおこもりをする前にご馳走を作つてくれた。

赤飯とかあずきめしとか、五目飯などをこしらえて食べさせてくれた。夕飯を食べてから小屋におこもりをした。

小屋を焼く時は、そこへまゆ玉とか餅を持つて行つて焼いて食べた。道祖神様にあげるまゆ玉を持つて行つた。これを小さい子に分けてやつた。

一軒のうちで一人以上はお参りに行つた。

なお、わかいしゆが、近所の道祖神小屋を七つお参りする七小屋まわりというのがあつた。銭を持つてお参りに行つた。

なお、字の八幡では、人別のほかに小屋まわりといつて、十三日の晩に、大人が道祖神まいりに行つた。この時おさいせんをあげた。また、酒を買つて行つてお子供たちにお酒を飲ませたりした。おみきを出す所もあつた。(青梨子)

正月のお飾りは、十二日に往還に出しておく。それを子供が集めて川原の道祖神小屋を作る所へ荷車に乗せてはこんだ。大きい子供が車をひいて、小さい子供が後押しをした。

ムラの当番(年番)の人があつて子供たちを使つて道祖神小屋を作つ

た。

十三日は小屋を仕上げた。この日は小正月の準備。小屋は三つも四つも作つた。

小屋の中は泊れるようになっていた。むかしの子供は泊つたという。番をしてくれるのが世話人(年番)の人たち。

小屋に火をつけるのは、十四日の朝。火をつける前に、子供たちがムラの中をどなつて歩いた。

「道祖神が燃えますよ」

といつてまわつた。

ムラの人がお参りに来た。ドンドンヤキの火で、まゆ玉を焼いたり、餅を焼いたりした。これを食べると風邪をひかないといつた。(下新田)

十三日(小屋を作つた日)の晩に、七小屋まいりをした。

どこの道祖神小屋をお参りしてもよかつた。おさいせんをあげてきた。(青梨子前原)

鳥追い 道祖神を十三日の晩に立て、十四日の朝に燃やした。そのあと、てんでに面をかぶつて「鳥追いだ、鳥追いだ」といいながらまわつた。

戸を開けて中に入る、オンペロをもつてまわつた。

十三日の晩には泊つた。(元総社大渡)

竹の先を割つて御幣束をはさみ、それを手に持つて鳥追いをやつた。正月十四日に、道祖神が終わつてからやつた。太鼓を外でどんどんたたいた。子供がやつた。お面をかぶつたこともあつた。(鍛冶町)

火伏せ 一月十四日のどんどん焼きの時、道祖神のもえくじを拾つて来て、屋根の上にあげた。火伏せになるといつた。(下石倉)

十四日

正月十四日 道祖神でお飾りを燃やした。暮のうちからシノを切つて乾かしておいた。



どんど焼 (総社 山王)

線路むこうの村岡の田に、粟島と鍛冶町と並べた。

「奉納道祖神」「道祖神大笑」と書いた半紙に、家族の名を書き、シノにつけて持って行き焼いた。餅を焼いて食べた。

その時酒をふるまったが、一升の酒に水を入れ、三升にも四升にもふやしたので、道祖神の酒は水っぽいついた。

午前零時ころから親方の家に集まり、一時ころから太鼓をたたいてまわった。

「道祖神がもえますよ、はや夜があげますよ」といった。

イナリグルワに集まったが、家がなくてさびしい所だった。

太鼓の音が聞こえない離れた家へは起こしに行つたが、さびしくてこわかった。(総社栗島)

鳥追い。子供が中心で十五歳の子が親方だった。

道祖神でお飾りを燃やした後まわった。それぞれお面をかぶった。お面は今井のおもちゃ屋で買って来た。

一番が天狗で親がしら。次がおとうかまでへいがみ、一番下がおかめだった。その間に、ばんやくという桃太郎の面をかぶつた子が入った。

色紙でオンベロを作った。「鳥追いだ、鳥追いだ、じんのとんの鳥追いだ、柱切つてしり切つて、こぶでしりのぼつた」といいながらまわつた。

新田では「佐渡が鳥へつん流された」という文句だった。

(総社栗島)

一月十四日の朝、元総社の各町内ごとにどんどん焼をやる。

子供たちがわら、竹、木、お飾りなどをもらつて歩く。この時土産があつたり、ご祝儀があつたりした家からはお金をくれた。

集めたお飾りやわら、竹などで小屋を作った。これは町内ごとに作つた。

小屋の近くの道を通る人からは「へいがみくれ」といって、お金をもらった。そのお金で、夜、豆腐とかコンニャクを買つて豆腐汁をしたり、コンニャクの煮つけをしたりして食べた。

小屋の中に入つてお子供たちは一晩中起きてご馳走を食べたりしていた。

小屋にお参りに来る人もいた。その人はおさいせんをあげた。

むかしは、七小屋まわりというのがあつて、七つの道祖神の小屋をまわつた。こうすると、病気になるまいといつた。

小屋に火をつける前に、子供たちが太鼓をたたいて町内をまわつて歩いた。

「道祖神が燃えますよ、はや夜が明けますよ」

といいながらまわつた。太鼓はリヤカーにのせて、たたいて歩いた。むかしは、太鼓をかついで歩いたこともあつた。

なお、子供たちはお供えをあげた半紙を三枚にはりあわせて、それに「奉納道祖神大笑」と書き、自分の名も書いて棒の先につけて持つて行って、ドンドン焼きの火で燃やした。これを燃やすといいといつ

た。燃やして(道祖神様に)天にあがってもらうのだという。(元総社)  
道祖神は六日から準備に入る。数え十五歳を小屋頭、十四歳を脇とうりよう、十三歳を人足まわしといった。頭が材料集めや、人別貰いをし、お菓子や酒の用意もする。

十三日の午後、小屋作りの触れにまわる。太鼓をたたきながら「小屋作りに出てきてください」といいながらまわる。一軒から一人が縄と鉦かねを持って、小屋作りに来た。親竹を十六本使って作る。中に囲炉裏を作る。小屋祝いのお酒を配るが、水で半分うすめてある。その晩は、頭の家で五日飯をごちそうになる。

十四日の午前四時ごろ燃やす。三時半ごろから太鼓をたたいてまわる。

小屋には良く燃えるように、木やそだを二階部分に入れておく。また、良い音がするようにうつ木もいれてある。

また、お供えにしいた半紙をつないで、道祖神の幟しぼりを各家で二つ作った。幟には奉納道祖神大笑何々氏と書いた。

また、この火で餅を焼いて食べると風邪をひかない、皮膚病にならないという。焼いたものを持って帰り、食べさせたりさわらせたりした。(上青梨子)

一月十四日、道祖神祭。

三時に起きて松などの飾りをもした。(池端)

オシラマチ 正月十四日の夜はおしらまちで下げたまゆ玉を煮てあんなころがしを供えたり、食べたりした。(上青梨子)

一月十四日の晩、おしらさまをまつる。おしらさまは蚕の神様。おしらまちという。

この日は餅をついてお飾りする。ナラの木の枝を切つて来て、たまゆ玉と丸い玉とあられを適当に枝にさして、座敷一杯に飾る。

それとは別に、桑の根っこをとって来て、大きいまゆ玉(四、五センチくらい)の大きさ)を十六日、大きい丸い餅を十六コ、小さいまゆ玉(三センチくらい)のものを十六コ、合わせて三十六コといって、これを桑の根っこにさして、座敷のすみに、根っこをさかさにしてつるしておく。

小さいまゆ玉(ナラの枝のもの)のものには、売りに来た飾り花もさした。

これは十六日の朝さげる。これをまゆ玉飾りといった。まゆ玉などは、さげてあとで食べる。

大きい方の三十六は、二十日の朝さげる。それも後で食べる。

(下新田)

正月十四日 漆原のザル観音の縁日。蚕の道具を買つて来た。何か買つて来ないとならないといわれた。(上青梨子)

ハダカまつり 十四日の晩にした。厄病ばらいという。ドンドン焼きを作り、下着一枚で道祖神の車をひっぱった。ケンチン汁、トーフ汁を食べた。(小相木)

一月十四日の行事。疫病払いのための行事。

わかいしゅがムラの北から南へ道祖神車をひっぱった。下着一枚でひいた。途中、自治会長宅へ寄つて、豆腐汁をご馳走になった。

(小相木)

## 十五日

小正月休み。マユ玉と小豆オカユを作った。ニワトコの木にマユ玉をさしてオカユをまぜた。田植えのおいわいという。木をけずつてあり、ささりやすくしてあった。

稲の実入りがいいと言った。

オカユは熱くて、それを吹くと田植えに風が吹くので吹いてはいけ  
ないと言う。

ヤナギバシも作った。(池端)

小豆粥を作った。吹いて食べると田植えに風が吹くといわれた。

(総社粟島)

ニワトコの木を短かく切り、十三日に飾ったマユ玉をはさみ、粥を  
かきまわした後、神棚に半紙でくるんであげた。(元総社大渡)

小豆粥 正月十五日に作った。七草粥と両方食べるとよくない  
といわれた。吹いて食べると嵐になるといわれた。(桜が丘)

正月十五日に粥を作った。カユカキ棒をかきまわし、今年の豊作を  
占う。飯つぶがつくほど豊作である。その後、カユカキ棒は床の間に  
飾ったが、田植えの時、田の水口に柳の箸と一緒に立てた。

正月十六日、まゆだまをお飾りから取った。取ったまゆを煮て正月  
様に供えた。朝食前にやって、供えたほかに食べた。

まゆだまは小ざるに入れた。

この日、小正月のお供えなどをかたずけた。

鴨居にかけた十六段のものは、すすはきの頃までかけておいた。

ほかの木は、赤飯や餅を作るときのもしきにした。みずきは初午の  
ときに使った。(上青梨子)

正月十五日の小豆粥を吹いて食べると稲がたおれると言う。(巢鳥)

十五日に作った。吹いて食べると田植えに風が吹くと言う。(小相木)

この地域では、あずきがゆ<sup>〃</sup>を作り、特別に食べる際の作法はない  
が、おかゆの食べ残しに水を混ぜて庭にまくと、へびやムカデ等の動  
物や虫、あるいは病気になるいとされていた。(上青梨子)

十五日の朝、小豆がゆをする。

ニワトコの木でかゆかき棒を作って、それにまゆ玉をはさんで、小

豆がゆをかきまわす。そのあと、神様(年神様)にしんぜる。うちの  
者も食べる。

小豆がゆを食べる時、熱いからと吹いて食べてはならない。吹いて  
食べると、田植えの時に風が吹くといった。

なお、この小豆がゆはとっておいて、一月十八日に食べた。また、  
かゆかき棒はしまっておいて、苗代をした時に、苗間の水口に二本た  
てた。

十六日には特に行事はない。

この日の朝、十四日に供えたまゆ玉をさげた。このことを、まゆか  
きという。(下新田)

はらみばし 暮に作り大正月で食べる時に使った。柳の木で作った。  
十五日の道祖神で焼いた。(小相木)

嫁の年始 十五日〜二十正月のころに行った。ダンナから小づかい  
をもらい、オバさん、メイ、オイ、妹、弟へのみやげを買った。親戚  
にあいさつまわりをした。(小相木)

正月十五日 カキイジメをして、カキの実がなるようにナタで傷を  
つけた。(上青梨子)

## 十六日

十六日の行事 まゆねじといって、小正月のまゆ玉をいって、雑煮  
のようにして食べた。まゆ玉をおつけの中に入れたもの。

十五日の夕方がまゆかき。供えてあるまゆ玉をとること。  
十六日がいとひき。そのまゆ玉を煮て糸にひくわけ。

このまゆ玉をきれいに食べると、まゆのたちがいいという。糸がいつ  
ぱいよく出るといふこと。それをたちがいいという。糸がいつ

この辺では、十六日にうまやで立ち出すことなし。

一月八日には、八日だめと云って、ため(下肥)だしをした。畑へ持って行ってムギにくれた。

一月十四日に、ドンドンヤキをした。

子供たちが正月のお飾りをもらって歩くのは、いつと決まっていな  
い。十四日より、三日も四日も前から歩いた。

この辺では、道祖神小屋は作らなかつた。むかしは、小屋を作つた  
というが、わしらが覚えては小屋を作らなかつた。

むかしは小屋を作つて、鍋釜を持って行って子供たちが食べたとい  
う。近所の畑へ行って、野菜を採つて来て煮て食べた。畑の持主は、  
野菜のためをぶっかけておいたが、子供はそれを洗わないで食べた。

道祖神はときには、ネッコをとろかが、竹をとろが文句を言われ  
なかつた。

道祖神子供が荒しほうだい荒した。

むかしのしきたりでは、十三日の晩に、七小屋まわりと云って、道  
祖神小屋を七つおまいりした。おさごをもつて行つた。このようなこ  
とは、むかしのことで、明治の末からはやらなくなつた。

道祖神子供は、お金をもらつたが、上級生がこのお金の分配をした。  
これが身上まわしのはじまりだといつた。

親方の子供が、目下の者にあれ買つて来お、それ買つて来おといひ  
つけたりした。

山王では、この日、鳥追いがあつた。十四日に(ドンドン焼きの後)  
ムラ中を「鳥追いだ、鳥追いだ」といいながらながして歩いた。

(元総社)

一月十六日は、小豆など豆類の食べはじめである。

また、この日は、道具休みと云って、風呂桶を休ませ風呂をたかな  
い。(青梨子)

まゆかきの日。まゆ玉飾りからまゆをとり、お雑煮にして食べた。

(総社栗島)

マイカキといいマユ玉をもいで、煮て食べた。(上青梨子)

## 十八日

十八がゆ 一月十五日の小豆かゆは、少しとつておいて、十八日の  
おかゆの中に入れてお正月様にあげたり、うちのものが食べたります。

(下新田)

アツタメゲエ。十五日の粥を残しておき、ふやして食べた。かゆを洗つ  
たかたくちに入れ、水を家のまわりにまくと、魔物除けになつた。

(総社栗島)

正月十八日には、十五日の小豆粥を取つておき、足して粥を作つた。  
お粥をお湯で薄めて湯筒に入れ、子供が家の周りをとぎれることなく  
撒いた。長虫と魔除けである。

大寒の朝早く、炊きたての飯を持つて行き、柿の木を鉋ノコで少し傷つ  
けて、「今年は成る木か成らない木か、成らねばぶつたぎるぞ」「はい  
なります」といふ。更に「そうかそうか」といひ、柿の木の傷に飯を  
付ける。

桑は蚕の命の元、みずきは火伏せ、かりんは銭をかりん、ニワトコ  
は新芽が良く、身上が伸びる縁起の良い木だといつた。(上青梨子)

初観音 この日は十四日にあげた三十六をさげて食べる。また、十  
五日に作つた小豆かゆをとつておいて、この日の朝、十八がゆを作つ  
て近くの馬頭観音様のところへあげに行つた。これは、女衆がしんぜ  
た。

この日は初観音で、高崎市南大類の柳原の観音様の縁日。むかしは  
競馬があつて、それを見に行つた。(下新田)

高井の観音様の日で、馬を連れて行った。(総社粟島)

成り木責め 一月十八日に成り木責めをする。成り物の木の前で、大声で成るか成らぬかと言う。(江田)

## 二十一日

二十日正月 この日、むかしはようなわをなつた。

つるべに使うので、それに使うなわをなつた。また、桑をしぼるなわもなつた。はようなわは、近所の人が寄つて共同でなつた。

なつたなわは台所の下大黒のところへ飾っておいた。

二十日の夜はえびす講をした。

正月のえびす講の時は、えびす様がかせぎに出かけるといった。ご飯を山もりしんぜた。

正月えびす講は朝早くまつる。かせぎに行つてもらうためという。

秋のえびす講は、かせいでもらったのだから、夜の行事にするのだという。(元総社)

二十日正月で、井戸のつるべなわや馬のひきなわをなつた。植野の神社に行つてなつて来た。三つ穴があいた板があり、何軒かで行き共同でなつて来た。

朝五時頃から始め、七時ころまでに行つた。朝でぬれているうちが作りやすかつた。五時ころワラをたたく音が聞えた。(総社粟島)

二十日正月。(下新田)

一月十五日の飾りをとる。マユ玉はとり、煮たり焼いて食べた。

(池端)

二十日エビス エビス様のお祭り。小さな俵を作り、俵形のおすし(オイナリさま)を作りのせていわつた。(小相木)

正月二十日 エビス様が働きに出る日なので、エビス講をした。十

二月二十日のエビス講にはサンマをあげ、ご飯をテンプ盛りにしてあげた。(桜が丘)

## 二十八日

しまい正月 この日正月が終えるという。しまい正月という。

朝は雑煮をして神棚にあげた。不動様にあげた。

不動様をまつつてるところでは、二十八日を年始日している。

「今日は二十八日、しりまくじんのご向心」といいながら、女の子のしりをまくつた。

年始には、塩釜というお菓子をたらいまわしにした。そのために、しまいには塩釜の形がなかつた。(元総社)

しまい正月、初不動の日。(下新田)

フドウ様 棚下の不動様。店が出てにぎやかだった。横野村にも不動様があつた。(池端)

不動のザバライ。ご年始に行つた。不動様のおまつりだった。

(総社粟島)

不動様。力餅といって、お雑煮を作つた食べた。(総社新田)

## 二 月

二月の行事 二月のはじめ節分の「まめまき」

豆はよくいれといつた。なまのないように余計にこがした。

二月の初午の日には、まゆ玉を作つて祝つた。

八日は針供養の日。

この日はコトハジメという。竹の竿の先にめけえをしぼりつけて庭先にたてた。めけえの中にたくさん金がたまるようにといつた。(十二



月八日はコトジマイ)

豆まきのとき、まめがらの二人にイワシの頭としつぽをさして、豆をやきながら、つばをかけ、稲の害虫の口をやくなどと唱えながらやいた。

豆は座敷からまいた。はじめは床の間、「鬼は外、鬼は外、福は内」といつてまいた。旦那がまいた。うちの中をまき終ると戸は閉めた。

そのあと、外へ出て、井戸神、便所神、稲荷様もまいた。

まいた豆を拾って食べた。

また、豆をきゆうすに入れて福茶として飲んだ。

この日は赤飯、けんちん汁、煮物、魚(イワシ、サンマ)を食べた。この時豆をとっておいて、初雷の時に「遠くの桑原、遠くの桑原」といつて食べた。これを鬼の豆といい、雷除けになるといつた。(江田)

### 三 日

節分の行事 一般家庭では午後四時頃から節分の豆まきを行う。子供のころは、神社(白山様)で待っていて投げられる豆を拾ったものです。

家庭の中で家長が年男をやり、くぐりを開け、福は内、鬼は外、と大声を出して叫ぶ。

投げる場所は、神棚、仏間、稲荷様、神社へ行き投げて来る。

年取りの豆は、自分の年の数だけ食べる。

年取りの豆を神棚に保存して五月頃に雷が初めて鳴りだしたら、その豆を「マンゼラク、マンゼラク」といつて食べる。(雷除けのおまじない)

二月中の午の日の初午の祭典が稲荷の雷電神社に於て祭が行われる。雷除けのマジナイに小さなわらじを買って来た憶えがあります。

(桜が丘)

豆をいる時、イワシを焼く。稲の虫の口をさます。麦の虫の口を焼きますといつた。耕作の虫の口を焼きますともいつた。

イワシは二つに切り、ヒイラギにさして、焼きながらつばきをかけた。

マメがらを燃やし、ホウロクでいつた。

ヒイラギはトボグチにさしておいた。

豆はとつておき、初雷の時食べた。

年男がまいた。

夜、家の人の年の数だけ三本辻にまいて来た。(総社栗島)

「〇〇の虫を焼きます」といつながら、ヒイラギの枝にイワシをやき、ツバキをかけた。

豆はとつておき、「遠くのクワバラ」といつながら雷除けにした。

(元総社大渡)

ヒイラギの木にイワシをさして焼く。作物の虫除けになる。

「四十二色の虫の口を焼きもうす」といつ、ツバをかけつつ焼く。豆をいる。トシトリという。水沢にトシトリに行く。おがんでもらう。

豆まきは、福は内。二回、鬼は外を一回言う。これを何回か部屋ごとにする。(池端)

この地域では、生活基盤である養蚕にちなみ、この日、豆まきと同時に、いわしを二つに切り、ひいらぎの木にそのお頭部分と尾の部分とを別個にさして『かつくい(しゃくとり虫)の口を封じます』といいつながら、いわしにつばきを吐きかけ、桑の順調な成育を願う習慣がある。(上青梨子)

節分の時に、ヒイラギの枝にイワシの頭をさして、焼いて、玄関に



節分の魔除け (川曲)

さした。魔除けのためという。

(総社町総社)

ヒイラギにイワシの頭付きでおい  
た。ヒイラギのない家は、豆の木の  
家もあった。

はやり病にならないようにとの意  
味。

年をとるのに、年をとつても頭カシラ  
に  
ならないと困るので、頭付きにする。

(小相木)

豆は豆の木でいった。年の数だけ  
食べた。

福は内二回で3鬼は外二回。戸は開けてはすぐに閉めた。ホー  
キではき出して閉めた。その後豆を食べた。

豆はひとにぎりを半紙につつみ、体全部をそれで清め、家族全部が  
やっつから三本辻に持つて行きおさめた。(小相木)

豆をいる際、水虫にならないようにと手を使い、豆をいる家もあつ  
たらしい。一般的には豆を神棚に供えた後、惣領が「福は内、鬼は外、  
鬼の口を封じます」といい、投げたらしい。順序は家々で多少異なる  
が、神棚、座敷、玄関、便所、庭の順である。また、豆を年の数だけ  
食べる習慣もある。(上青梨子)

害虫の名をいいながら豆を焼く(炒る)。豆は七回炒るものという。  
豆をかきまわすのは、正月はお棚の前にしんぞておいたイワシを、  
ヒイラギの枝にさしたもの。虫の名をいいながら炒る。

へっついで「十二虫耕作の虫の口をやく」といい、イワシにつばを  
ひっかけながら焼いた。

「九尺八尺下の虫の口を焼く」といいながら、イワシの頭としつば  
をヒイラギの枝にさしたものにつばをかけながら焼く。豆も同時に焼  
く。

「アピラウケンソワカ」を三回いう。

豆を炒るのは男衆、年男である。ふつうは、そのうちのおやじさん  
である。

ほうろくで豆木で焼く。豆木がない時は、クワゼで焼いた。それで  
も、いく本か豆木をもらつて来て焼いた。(元総社)

大神宮様の前から、神様にむかつてまく。

「福は内、福は内、鬼は外、鬼は外」といつてまく。

戸は開けておく。鬼を追い出して、福が入ってくるように、開けつ  
びらいておく。最初は神棚、そのあと各部屋別にやる。おくりの座敷  
からよりつきへ追い出すようにまく。

そのあと、座敷稲荷、便所、物置へ戸の閉まるようなところは全部  
まく。

まいた豆は自分の年の数だけ拾つて食うもんだといった。

自分の年の数だけ井戸の中へ入れたこともあつた。こうすると、めつ  
ばなどを病まないようにした。(はやり病気)

なお、豆は一にぎりほどしまつておく。初雷の時、これを出して食  
べた。豆は袋に入れて神棚にあげておいた。

豆まきのことは、年とりといった。

この日は(夜)ご飯にさかな、けんちん汁でも作つた。年とりざか  
なといつて、イワシを買つて食べた。

豆に関する俗信 節分の際にいった豆を袋に入れ保管しておき、初  
夏の最初の夕立ち頃に袋を開け、夕立ちによる落雷で大きな事故がお  
きないようにと、その豆で福茶を飲む。(上青梨子)

年取り 節分で年をとったような言い方があった。(桜が丘)

## 八 日

コト八日。メカゴを竹の棒にさして立てた。こわめしを食べた。

ことはじめといった。十二月がこじまい。(総社 粟島)

事始め 二月八日に、竹の先にザルをつけ庭先に据え付けておくと、その家が経済的に潤うといわれている。またこの日は、針を豆腐にさして川に流す針供養等も行なわれていた。(上青梨子)

二月八日、つぼ山にみかいをつるした。竹竿の先に桑つみかごをつるした。この日は小豆めしをした。

天からかねが降ってくるといった。(総社)

## 十四日

寝積<sup>ヒシヤカ</sup>迎様。(総社 粟島)

天神様 二月二十四日に天神待をした。

子供と裁縫をしている娘たちが、それぞれ天神待をした。

米とかねを集めて五目飯をして祝った。

このムラに仕立屋があつて、そこで二月二十四日に針供養をした。その日、わかいしゅが遊びに行つてすしなどもらつて食べてきた。

(元総社)

## 十五日

天神講 天神講は二月十五日に、小学校三、四年から高等二年までが宿に集り、手習いをし、寿司(のり巻)を食べた。(江田)

二夜様 二月二十八日、二夜様をまつた。二十二夜様は、女の人がつまつた。安産、しものやまいを病まない、子が授かるともいう。

この時に念仏を申す。宿は今公民館であるが、むかしは交代で宿をした。

二十一日の晩に宵待ちをした。

二十二夜様の掛軸をかけ、線香をたてておがんだ。

念仏をしたり、はなしをしたりした。これは女衆のいこいの場であつた。阿弥陀寺、殿小路とべつべつにした。

三夜様はうちでやつた。

高崎の天神に二十三夜様があつて、縁日の日に、夜おまいりに行つた。お月様をまつる行事である。

二夜様は年に一回、二月二十二日。(元総社)

二月二十二日は二夜様で、念仏婆さんが念仏を唱えた。お婆さん部屋というのがあつた。

月に一度くらいは、ニワマチをした。二夜様のロウソクは安産の神である。

二十二夜様には、嫁に出た娘が里帰りをする。(江田)

二月二十二日は二十二夜様で、江田町から習つた。(後家)

## 二十二日

二十二夜様 十二月〜四月まで二十二日に二十二夜様をした。今は二月二十二日。

大豆をいり、砂糖をつけ砂糖ころがしを作り、重箱に入れしんぜた。毎月、交代で作つた。掛軸をまわした。

当日は午後集まつた。昔は一軒の家に交代で集まつたが、今は公民館。(前箱田)

初午 初午には、稻荷様をまつる。

この日はおまい玉を作り、赤飯をふかして町内のお稻荷様にあげた。

屋敷稲荷様にもあげた。

おかいこ神様といって、稲荷様をまつた。

豆なげが終えないうちに初午がくると、火にたつという。この時は二の午をまつた。

この時も米の粉のだんごをあんこでまぶして食べた。これをしょくしんといつた。(江田)

ダンゴにアンコをからませて、オイナリ様にしんぜた。養蚕がよくとれるようにお祈りした。

丁間稲荷にザルや養蚕道具を売る店が出た。一月十四日にザル観音にも行つた。

丁間稲荷はおまいりするとクジをひかせてくれて、何かしら景品があつた。

素焼きの稲荷を借りて来て、あつたら二つにして返した。(元総社大渡)

丁間イナリは田んぼのイナリといって、粟島の分だつた。沢山おまゐりに行つた。

粟島の人が開こんしたから粟島分になつたらしい。(総社粟島)

節分すぎの始めての午の日。屋敷内にのぼりを立て、アンコをまぶしたダンゴを食べた。(マユ玉と言つた)

お稲荷様にお供えをした。蚕があたると言う。色の紙に字を書いて奉納した。(小相木)

二月始めての午の日(二十日ごろ)マユ玉を作る。蚕ができるように。(池端)

庚申 個人でやり春、秋にやつた。おでんを食つた思ひ出がある。(総社粟島)

## 三 月

三月の行事 三月一日 金魚市。三月三日 おせつく。すしを作つたり、餅をついたりして祝つた。

初節供には、近親者や近所の人などからおひなさまが贈られた。

お返しに、紅白の餅を重箱に入れて配つた。これは一日まで(二十日)から)にするものという。

八日を八日節供という。この日、おひなさまをしまう。すしをあげてからしまう。

古いひなさまは神社へ納めたり川へ流したりする。おひなさまをしまいばらいにしておく、おひなさまが泣くといつた。

お節供には菱餅をもって嫁は里へお客に行つた。餅(三枚)を台にして、いくらかお金を包んで行つた。一晚くらい泊つた。(元総社)

節句の餅つき 紅白の菱餅を切つて雛段に飾る。女の子のいる家では、お友達を呼び合つて賑やかに遊んだりする。彼岸には先祖様のお祭で、中日をはさんで前後三日といつて、入りから走りの日までお祭をする。新しい食事を供える。(桜が丘)

## 三 日

春まつりの日。明治六年以前は旧の三月三日だつた。(上青梨子)

お節句(総社粟島)

節句、ひな祭り 二月末に飾る。段々飾りで、ひちもち(十二単衣にちなみ赤白で十二枚)や、あんころもちを供える。親戚や兄弟が集まり祝う。八日節句でお寿司を食べ、この日には必ずひな送りをする。

女性がしまう。

また、この日(三月三日)にこの地域では春まつりも並行して行う。

(上青梨子)

ひしもちを作った。また、アンコのモチも作った。おひなさまを飾ったが、古くなったものは利根川におさめて流した。

御殿のおひなさまは昭和になってから。(小相木)

## 八 日

薬師さま 三月八日は薬師様で、富沢一家だけの講であった。団子を上げた。(江田)

## 十五日

ヒガン。中日にオハギを作る。ヒガンのイリの日とハシリ口にアズキゴハンを作る。

ハシリダングはアンコにオシンコウ(小麦粉を固めてゆでたもの)をいれた。(池端)

梅若 言葉を聞くくらいで行事はない。(元総社)

三月十五日は明神様の春まつり。

各家では赤飯をふかして祝った。明神様では太々神楽の奉納がある。

この日(前の晩)むかしはお客がいっぱい来た。町内中でのぼりを立てた。(元総社)

彼岸 寺に来るので迎えに行く。墓に行つて線香をあげた。供え物にダングを作り、仏様を送る時を持って行き送った。(小相木)

三月十八日ころが彼岸の入り。中日、走り口と仏様に供えものをする。ぼたもちをしてあげる。

春の彼岸には、お彼岸様は草餅をよばれたいという。

秋の彼岸には、大根葉のごまよごしが食べたいといったという。

彼岸の入り口と走り口に墓参りする。よそへ出た人は中日に墓参りに来る。(元総社)

三月十八日に花を持ってお墓参りに行く。四日目の中日には、おはぎを作つて食べる。走り口には、すすりねじといって、おしんこをゆで、あんこをゆるくした汁の中に混ぜ合わせたものをすすする。最後の送りには、供え物を全部持つて墓参りに行く。(上青梨子)

しよくしん 春と秋の彼岸の時には、走り口の日にしよくしんを作った。

里芋のゆでたもの(サツマイモを代りに使つたものもあった)と、だんごをあんこでまぶしたものである。

だんごはくず米の粉で作った。しよくしんは、走り口の朝作つた。仏様にあげたり、うちのものが食べたりした。あんこは甘いあんこ。

(江田)

春祭り もとは三月二十五日が春祭り。今はしていない。(下石倉)

## 十八日

二夜様 七月二十四日に二十二夜様(地藏様)を祀つた。出産の家で行つた。(下石倉)

## 四月

四月の行事 桜が丘地域にはもとから住んでいた部落があつて、天狗岩庚申(百体庚申)といつて、三月、四月のかのえさるの日に庚申祭りする。

昭和十年前後は、田舎芝居を行い、近村の人々をお誘いして夜半迄

賑やかにお祝いしたことがありました。

現在では猿田彦大命のお札を作り交通安全、家内安全とお札を祭りのお返しに出している。(桜が丘)

## 八 日

お釈迦さま。(総社栗島)

おしゃかさまの祭り。柳沢寺で。(池端)

四月のその他の行事 四月八日には、お釈迦様という行事があり、地区の集会所で甘茶がふるまわれ、ビンを持って行き入れてもらい、各家のお釈迦様の像にかけてやる行事がある。また、四月十五日には、おこもちといひ、おかいこをまつるため餅をついて、中にあんこを入り神棚にまつた。(上青梨子)

四月八日は仏様のおまつり。お寺へ行くと甘茶をくれた。

子供のころ、この日お寺へ行つて甘茶を飲んだ。自分の年だけお釈迦様に甘茶をかけた。

旧四月八日に、次のように書いて便所の柱にはつた。

「千早振る 卯日八日は吉日よ

かみなが虫の成敗ぞする」

長虫除けの呪いという。

四月十五日にお餅をついた。この日、草餅をついてかいこあげなど、かいこの手伝いをしてくれた人のところに配った。

この餅のことは、地獄餅といった。これから農作業が忙しくなるからという。(元総社)

四月八日に百万遍念仏をした。今も数珠が残っている。(江田)

四月八日と八月十七日は観音堂の祭りで、地藏様を出す。露店がでる。(後家)

## 九 日

祭り。赤飯を作った。三時に起きて早くに赤飯をふかし、重箱に入れて神様にあげた。チョーチンを持って行つた。蚕があたりと言つた。

(池端)

オコモチとアブラモチ 四月十五日にオコモチをついた。これから

かいこなどが始まって、苦勞するといふのでついで食べた。

すすはきをして、かいこの用意をした。十二月五日には、アブラモチをついた。仕事が終わつた祝いである。(江田)

地獄餅、極楽餅 四月十五日にお餅をつく。これから仕事が忙しくなるといふのでついた。この餅のことを、地獄餅という。

十二月十五日にあぶらもちをつく。一年中の農作業がすんで、餅をついて遊んだ。この餅のことを極楽餅という。

この時は餅をついてうちの神様にあげるだけ。嫁に行つた子のところへあぶらもちを持って行つてやつたり、むこ

うからもらつて来たりした。

今(平成元年)から五十年ほど前までやつていたこと。(下新田)

四月十五日に餅をつく。これをおこもちという。これからおかいこがでて苦勞するといふので苦勞餅ともいふ。

十二月十五日に餅をつく。この餅のことは油餅という。一切の農作業が終つたので、これで楽になるといふので、極楽餅ともいふ。(小相木)

四月十五日におこもちをつく。

この餅を食べると、今日の餅は地獄餅といった。このあと農家は忙しくなるという。餅は普通のあんぴんで、近い親戚に配つた。おばあちゃんの実家とか、妹の実家などへ配つた。

重箱に十五、十七、十九と奇数の数を入れてやった。お返しは別に決っていない。志程度。この辺では、むかしはつけ木を入れもんに入れてよこした。(江田)

## 五月 月

五月の行事 五月二日は八十八夜。この時草餅をついた。遅霜にあわないように祈った。

五月五日。この時初節供の家では早くのぼりを立てた。のぼりをしまうのは、八日節供といって五月八日。

初節供の人はのぼりなどお祝いにもらつてあるので、柏餅をお返しに配った。むかしは、初節供のお返しは、赤飯とたらの干物であった。一般のうちでは赤飯をふかして祝う。

五月の節供の時、嫁さんは里帰りをした。たらの干物の上にお金を包んで行った。

むかし、節供の日に働くと「ものぐさもんの節供働き」といつて笑われた。(元総社)

ヨモギ、シヨウブの由来 むかし、ある家の嫁さんが、蛇の子を宿した。神様だかに見てもらつたら

「シヨウブとヨモギをお風呂に入れて、お湯に入ると、蛇の子がでてくる」といつた。それで女の人は五月五日シヨウブ湯に入るもんだという。(元総社)

五月は五日の節句で、男の子のお祭りです。手を切るような菖蒲をヨモギと一緒にくぐりの上にさして、悪病除けのためにつけた。イワシの頭を二ツ又の桑の木を使ってこれもくぐりの上にさしておいた。

(桜が丘)

八十八夜 八十八夜の別れ霜という。モチをついたことがある。

(小相木)

この日(五月二日?)には、その年のおかいこが当たるように、かしょう山にお参りに行った。また、この時期には、この地域で、すずめがくれという言葉があり、晩霜が降りると桑の中にすずめが隠れ、桑の順調な成育を意味し、おかいこが当たることを意味していた。

(上青梨子)

オコモチ、アブラモチ 八十八夜の日、オコモチをついた。これは地獄餅といつた。これから養蚕もはじまつて、お仕事をしなければならぬのでそういつた。

十二月には、アブラモチをついた。これはつくうちとつかないうちとあつた。農作業が一段落したので、極楽餅といつた。(青梨子)

## 四 日

シヨウブ、モチグサを三本ずつ採つて屋根にあげた。お湯を立てて中に入れた。神様にもあげた。(総社粟島)

五月四日の晩にヨモギとシヨウブを束に縛つて、長虫(へび、ユカデ)が入らぬように、屋根ふきにさしたという。また、それを風呂に入れて入浴したらしい。そのいわれは、昔、美しいお姫様がへびが変身した男との間に子供ができたが、その子供をヨモギ、シヨウブの入つた風呂に入れたら、もとの人間になつたという話が伝わっている。

(上青梨子)

## 五 日

五月五日は榛名から伊香保へまわつた。ガラメキ通りから浅間(セシジ)さまにのぼつた。

青年会と処女会で行き、女衆をふじつるで縛つてのぼらせた。

物貝塚からヒマガリを通りスルス峠をのぼつて行く。(上青梨子)

シヨウブ湯をいれた。モチグサとシヨーブを風呂に入れ、トックリにシヨウブをいれた。シヨウブ酒を飲んだ。

モチグサとシヨウブを束ねて「ヤネフキ」といい屋根にあげた。神

棚、その他にもあげた。(巢鳥)

赤飯をふかした。またシヨウブ湯をたてた。

神棚三カ所と入口の三カ所にシヨウブとヨモギを合わせたものを下げた。

男の子の節句なので、刀と止血剤である意味をこめたもの。(小相木)

親類等からのぼり、こいのぼり、ばれん等を贈られ、そのお返しには、柏餅、するめ、たらの干物、酒などを返したらしい。(上青梨子)



端午の節句ののぼり (総社 大屋敷)

養蚕行事 五月五日すぎはすぐにカイクがはじまる。

九日はきたて。三眠でモチをつく。(フナ休み)モチを食べるととてもおいしかった。

六月十日ころにあがりモチをついた。手伝ってくれた家にモチを配った。大麦ができる頃で大変だがモチをついた。マユの豊作を祈るもので、田植えの腹ごしらえの意味もある。(小相木)

## 六月

一日

氷餅 正月のお供えを水の中に入れてしみらかせて、それをとって置いて、この日ぼうろくでいって(油をひいて)味をつけないで神の鉢に二、三コずつ入れて、神様にあげた。これを氷餅といった。この日、天皇陛下に氷があがるといった。(元総社)

十五日

十五日は天王様で白山神社の燈籠をつけてお祭りをする行事があった。(桜が丘)

おかいこあげ祝い 六月中で、かいかがあがった時お祝いをした。

(総社栗島)

農家のかいか祝い。

上蔭が終ると、すぐに餅をついて祝った。この餅をかいかを手伝ってくれたところへ重箱で配った。

嫁は里へお客に行つた。

蚕が終ると、麦の穫り入れになった。(元総社)

六月十日、おこあげ祝いといって、あんびんを作つて祝う。

かいかがあがって、麦の穫り入れに取りかかる時に餅をついた。この餅も重箱に入れて、近い親戚に配った。(江田)

オサナブリ 田植が終ると、苗を採つて来て、台所の小大黒柱のところに箕をおいて、箕の中に三本並べた。マンガをそこへおいて箕の前に供えた。特になに様に供えるというとはいわなかった。

オサナブリといって、田植を手伝ってくれた人を呼んで、ご馳走し



てやった。

「馳走は酒と赤飯、うどん、おかずは数の子とかニシンの煮付けなど。(西箱田)」

## 七月

七月の行事 七月十四、十五、十六日の三日間は農休み。三日間仕事を休んだ。ふかしまんじゅうをして祝った。

十五日に、新しい嫁は新しい仕度(着物)を作ってもらってお土産を持って里へお客に行つた。一晩くらい泊つて来た。これを生き盆といつた。

十六日に百万遍をした。町内の子供と年寄りがやる。もとは辻々でやつたので、辻念仏といつた。今は公会堂でやっている。

当日、昼食を食べてからはじめる。二時ごろから一時間くらい。そのあとお茶を飲んで終りとなる。

庭にむしろをしいて、輪になつて数珠をまわす。真中に太鼓と鐘をおいてたく。

辻でやった時は、くぬなどに百万遍の掛軸をかけて、百万遍を唱えた。数珠をまわしながら太鼓と鐘をたたいて「ナンマイダ、ナンマイダ」と唱える。

このあと、ムラ境に明神様のお札をうけてきて、竹の竿につけてたてる。五カ所に立てた。悪魔ばらいという。

殿小路の場合は、「ナンマイダ、カタマメダ」と唱える。

むかし、農家でソラマメを作つていて、百万遍が終ると、ソラマメ(カタマメ)をおみこくとして子供たちにやった。それで子供が「カタマメダ」というようになったのだという。

七月二十一日は土用干し、八坂様

この日はおまつりの屋台道具(旗、幕なども)の虫干しを公会堂でやる。二時ごろしまつて集まつた人が飲んだ。

この日は八坂様もまつる。各町内にあつた八坂神社が明神様の裏にあつた。八坂様にはおみき、野菜、おさごなどをあげる。八坂様にあげたおみきをさげて、参会者のご神酒として飲んだ。この日、各家でふかしまんじゅうをする。

七月二十三日は三大仏の日。この日はおまつりをするだけ。三大仏様は、薬師様の境内にある。三大仏のありがたいお経がある。町内に当番の役員がきまつていて、世話をする。

石碑の前に灯籠を立ててまつる。むかしは参道に灯籠を立てた。三大仏様は病除けの神様という。(元総社)

七月の行事 農休みといつて十五日が中心で、十四日が宵祭り、十六日が八丁で悪病を地域に侵入させないために地域のはずれに竹笹につけて立てた。一般家庭では、出来たてのフカシまんじゅうを食べ、て祝う。七月でもここは八月を盆月にしていきますので、盆行事は八月行われます。

宵祭りの時は各家庭の門口に燈籠をつけて賑わいを示した。燈籠にはキュウリ、ナスビの絵を描いて子供達も夜まで廻つて見て歩き、楽しみであった。(子供会のお祭りにその名残があります。)(桜が丘)

カマノクチアケ 七月一日(盆月の一)のことをカマノクチアケといつた。この日に焼き餅を焼いて仏様にあげたり、食べた。うどん粉の焼き餅である。まんじゅうも作った。(青梨子)

田植え 七月に入つてすぐに始めたが、かなり長くかかった。十五日は農休みでモチをついた。(小相木)

オサナブリ 田植えが終るとゴチソウをした。お手伝いの人に食べ

てもらった。(小相木)

田植えの後のおいわいで食事をする。そのあとが農休みになる。

(元総社大渡)

七夕 七夕の日の十一時までに七日水あびをすると、体が丈夫になるといった。

ムラにしようじんばという所があつて、そこへ水浴びに行った。

(江田)

農休み 七月十三、十四日。(総社新田)

七月十四、十五日で、ゆでまんじゅうを作つて食べ、町に遊びに行つて、氷水を飲んだりした。(元総社大渡)

七月十二日から十六日までを農休みといつた。十二日からやるのは粟島だけで、他は十三、十四日が多い。

十二日は天王祭、十五日は祇園、十六日は百万遍だった。

十二日の天王さまにはトウロウを立てた。(総社粟島)

七月十三日はまんじゅうを食べて働いた。七月十四、十五日は仕事を休んだ。七月十六日は年前中仕事をして午後に仕事を休んだ。

(総社町総社)

七月十五日。農事組合の人が(休みの連絡で)家を回つた。ウデマシージュウをして、隣、親戚でお菜のいれっこ、マンジュウの味くらべをした。(小相木)

七月十三日から十六日にかけてが農休みである。田植えが終え、一段落してからやつた。田植えは病人などがあるとスケるものだった。農休み勘定といつて、農休みの期間に種代や小麦代などを精算した。農休みは区長がフレを出し、それを口伝えてまちの家々に順々に知らせた。(鍛冶町)

七月十五、十六日が農休み。この時はふかしまんじゅうをした。ム

ラ中仕事を休んだ。(元総社)

七月十四、十五、十六日の三日間。この日は仕事を休んだ。十六日に百万遍と八丁じめをした。(元総社 阿弥陀寺)

トウロウ 七月十四、十五日は農休みだった。王守神社の八坂神社のおまつりで、神社からの道にトウロウをつけた。

八坂神社氏子とトウロウに書き、中にロウソクをつけた。

(元総社 大渡)

祇園 七月十五日が祭日。天王様。(総社 新田)

七月十五日(旧六月二十八日)。富士浅間社。(小相木)

十五日

オギオン。(池端)

春・秋の祭りの他に、七月十五日の宵祭りとして、天王様に灯籠を上げた。(江田)

十六日

農休み。マンジュウを作つた。(池端)

百万遍 七月十六日にやつている。(総社新田)

七月十六日。外でやり、じゅうずをひっぱつてまわす。今は十月初旬で、みこしと一緒にやる。(上青梨子)

百万遍をした。中休みに五千石用水で水あびをした。道祖神の親方が同じ親方をつとめた。

問屋の曾我家の板の間(八畳二間)でやつた。お金をもらい、花菓子を買に行つて配つた。(総社粟島)

百万遍をする。殿小路の公民館で行う。むかしは辻にむしろをしいてやつたという。そのために辻念仏ともいう。また、十六念仏ともい



殿小路の百万遍 (元総社)

う。

もとは子供が主体の行事であったが、今は年輩者が中心になってやっている。

太鼓と鉦をたたき、輪になって数珠をまわしながら

「ナンマイダ、ナンマイダ」をくりかえす。それを適当の回数唱えて一区切りをする。それを十三回繰り返す。区切りのところでお経を唱える。

十三仏の掛軸をかかえる。数珠をまわしていて、あたり(結びめ)がまわってくると喜んだ。数珠は「の」の字まわりにまわす。むかしは数珠をまるめて、人のくびにひっかけたりしたという。

むかしは三本辻のようなところにむしろを敷いて、電柱の掛軸をかけて、念仏をした。それで、この念仏のことを辻念仏ともいっている。電柱の前は坑を立てて掛軸をかけたという。

むかしは、数珠で輪を作って、人のくびにかけたりした。そんなふざけっこをしたこともあった。

唱えごと「ナンマイダ、カタマメダ」といったこともあった。今から三十年ほど前から言わなくなった。

一区切りするごとに、十三仏の名を唱える。(元総社殿小路)  
農休みのあと、七月十六日の昼の行事。むかしは寮の坊さんとか、ムラの古老が中心になって、子供も男も女も加わって、県道のつじでやった。

道にこもを敷いて、その上にすわって数珠をまわした。

坊さんが鉦をたたいて「ナンマイダ、ナンマイダ」といっている。大きいわらじを坊さんの頭の上のせておいて、数珠を持ってまわりながら、数珠をわらじの上からぶっつけた。

そのあと、わらじをムラ境につるした。これは、ムラへ疫病が入ってこないようにということ。

その大きいわらじを見て、疫病神がこんなでつかいわらじをはく人がいては、かなわないというので逃げて行くといった。

わらじは人間のわらじ(大きさは三メートルくらい)と動物のわらじ(大きさは二メートルくらい)の二種類作った。人間のわらじは細長いもの。動物のわらじはまるい形をしていた。

これを、ムラ境に片方ずつあげた。(総社町総社)

諏訪神社の境内で百万遍念仏が行なわれる。(総社町立石)  
八丁じめ 七月十六日に各町内(小字)で八丁じめをたてる。



八丁(元総社 阿弥陀寺)

小字の代表が総社神社へお札もらいに行つて来る。それぞれの町内でムラの出入口に八丁じめを立てた。むかしは道にしめをはって、お札を下げた。

阿弥陀寺…五カ所

淡島…三カ所

中宿…三カ所

これは、やはり病除けという。悪病神が町内に入らないように立てたもの。

むかしはわかいしゅがしつかりし

ていないと、としよりの人に「おめえ、そんなぎまで八丁じめの外へ出られるか」などといわれた。  
(元総社)

七月十六日は八丁じめをムラ境にはった。オンベロをはった。

(元総社)

幕の虫干し 七月二十一日、屋台の幕の虫干しを公会堂でしている。

屋台の前と後にかける幕を出して干す。弘化三年製のもので、女の人木綿をつむいで織ったものという。(元総社殿小路)

七月二十一日に、町内の什物品の虫干しをする。

のぼりとか屋台の幕などを集会所に出して、土用干しをする。

のぼりが三月十五日、七月二十一日(祇園まつり)、十月九日(オクンチ)の三回たてる。(元総社 阿弥陀寺)

七月二十三日、宝蔵庫の中の物を出してかわかす。(江田)

七月二十一日が土用干し。

屋台道具、獅子の道具などを公民館で土用干しをする。係りの人が朝から出て、土用干しをする。

これが終るとひき続いて天王様のおまつりになる。そのあと一杯飲んだ。(元総社)

土用 このころにドジョウを食べた。(小相木)

つなぎやどじょうを食べ、ドクダミをかげ干ししたものを飲んだ。

(ウシ湯) またドクダミ、ゲンノショウコ、桃の葉の湯に入った。

(上青梨子)

夏至 七月二十一日ころで、この日にトリーナスを煮て食べると病氣にかからない。(小相木)

引間の妙見様 七月二十一日が引間の妙見様のおまつり。まわりのムラでも祝った。この日はふかしまんじゅうを作った。(江田)

祇園まつり 七月二十一日が祇園まつり。阿弥陀寺の天王様の石宮

は、明神様の境内にある。そこへ町内の代表がおまいりに行って神酒をあげてくる。

ご幣束を作って新竹二本を立てて、おしめをはってそれに下げて来る。(元総社阿弥陀寺)

諏訪神社のおまつり 七月二十五日。この日、ムラ境に疫病除けのお札を立てる。竹に神社からうけたお札をはさんで、ムラ境四カ所に立てている。道のはじに立てる。諏訪様のおまつりの終ったあとに立てる。

むかしは区長が立てたが、今は神社の役員が立てている。ムラに疫病が入らないようにとということ立てた。(下石倉)

地蔵様 地蔵様は神社のわきの小屋に安置しておく。

七月二十三日に出して、八月一日にしまう。この間、七日間、朝と晩の二回ずつ地蔵をかついでムラの中(本村だけ)まわった。全部で二十三軒くらい。一軒ずつまわった。

一番はじめの日は、神社から出発して親方の家へ行く。米と麦をくれた。茶碗などですくってくれた。袋を持って行ってその中に入れてもらった。

地蔵様は二人でかついだ。適宜交代した。まわって行くと米と麦をくれるので袋は二つ用意した。

最後におわる時に、お金をくれた。かねをたたきながらまわった。みこしを交代でかついだので、交代要員がみこしのあとをついていった。

お金は五十銭くれるのはムラでも二軒から三軒、三十銭とか二十銭がふつう、十銭が最低だった。

もらった米と麦は、予約した人がいてひきとってくれた。

もらったお金でまんじゅうを買ってわけた。むかしはまんじゅう一

コが二銭だったが、特別に一銭のまんじゅうを作ってもらった。  
お金をたくさんくれたうちへは、まんじゅうをお返しとしてやった。  
その残りのお金で、まんじゅうを買ってわけたのである。(前箱田)

## 八月

八月の行事 盆月で一日の日をカマの口あけといった。

私共の寺では、赤城山の地藏岳にある地藏尊を檀家の人々がお祭りをしてお釜の中に経文が納まっているので、その口を開ける事で釜の口あけと言うのだといって居ります。

七日は七夕様で、竹笹に短冊を下げて和歌を詠み七夕様に因んだ言葉を書いて下げた。

七日の日から七晩焼といって、門口で夕方から麦葉を束にして各家々で焚くわけです。盆迎えの迎火の事です。

十三日に迎え盆をするのですが、家の中では盆柵を作ります。筒と違ってすすきより小さい茅で、これで縄をなつて盆柵を作ります。盆柵の一番中心には、阿弥陀様の掛軸を下げる。その前にお位牌を並べこの前にお供え物を置く。

盆がらの十六日には盆に使用した諸材料の残物を川に流しに行つた子供達はそんな事を親から言いつけられると利根川に遊びに行けるので、喜んでいたので。(桜が丘)

盆月 八月一日：カマノクチャケ。各家では、ふかしまんじゅうを作った。この日、仏様がお客に来る(でかける)という。

七日：七夕。各家でまつる。竹に短冊を作つて下げて庭に立てる。短冊には自分の願いごとを書いた。この日、ネムタのはっぱで、川で顔を洗うと目が覚めるといった。この日、メズラ畑へ入つては悪いと

いった。男の神様と女の神様が、天の川をはさんで、七夕の日に一年に一回会うのだという。

七日～七日間(十三日まで)七晩焼きをした。七晩焼きは今もしている。ムギわらの束をかど口を立てて燃やす。このあかりをたよりにご先祖様がうちへお客に来るといった。

小麦束(むかしは大麦)を墓の方へ、頭を先にして倒した。

この火(灰)を棒の先でかどにいつぱいに広げる。こうすると、ムカデとかへびがうち(屋敷)へ入つて来ないといった。

八日：薬師様の縁日。

この薬師様は化粧薬師、縁切薬師といわれている。この薬師様について、次のような話がある。

むかし、困難年が続いたことがあった。そのために薬師様に人身御供をあげた。まだ大人にならない年頃の娘を薬師様にあげた。年端もいかないうら若い娘が、嫁にもなれない、紅白粉もつけずに悲しんでいる。そういうことがあるので、仲人がその薬師様のところを通ると、若い娘がたたつて、結婚話をだめになる。だから、結婚話をする人(仲人)はそこを通るなといった。

また、不仲の夫婦の場合には、この薬師様へ総願をかければ、縁が切れるといった。願いが叶えば薬師様の顔に白粉をぬつてやつたり、口紅をあげたりした。

この薬師様は北小の近くの道端にある。八月八日のご縁日で、阿弥陀寺の人が世話をしている。

十三日：盆迎え。はじめは寺へ行き、そのあと墓へ迎えに行く。

無縁仏は柵の下にまつる。

空になった仏壇には、杉の葉を半紙の上のせておはぎをあげたりする。

十四、十五日：新盆のうちへは、この時に新盆見舞の人が来る。

十五日に早い人は盆送りをする。

十六日：盆送り。墓まで送って行く。寺へは行かない。

十七日：むかしはこの日を盆がらといって、仕事を休んで遊んだ。

盆中のご馳走は次のとおりである。

朝はおはぎ。昼はうどん。この時ひるうどんのことを、ひるばへと  
いった。ナスの馬を作つて盆柵の所に飾っておくが、生のうどんをた  
づなとして馬にかけておいた。

新盆のうちへは、むかしは寺へ、仏様が身につけていたものをあげた。  
今は、寺へはうどんとか、菓子折、お金などを持って行く。(元総社)

カマノクチアケ 八月一日で、ふかしまんじゅうを作つて食べた。

(元総社大渡)

八月一日は釜の口あけという。(西箱田)

カマの口あき。お盆さまのおでかけ。マンジュウを作つた。(池端)  
一日。お盆さま。仏様が自由に食べられるようお供えをした。

(小相木)

ふかしたまんじゅうを焼き餅にし。仏様に供えると、仏様が口を開  
けて食べるため、死んだ人が帰つて来ると思われていた。また、八月  
の盆前に亡くなった人は、みんなが帰つて来る時に死の世界に行くた  
め、帰ってくる人に頭をたたかれ(バカにされて)も大丈夫なように、  
しらじをかぶせて葬つたという(上青梨子)

盆月の一日のこと。

この日は、むかしはうでまんじゅうを作つて、仏様にあげたり、う  
ちのものが食べたりした。このあと亡くなった人には、埋葬する時に、  
しらじを頭にかぶせてやった。

盆に入ったら、生きもんは殺すなといった。(下新田)

八月一日(盆月の一日)がカマノクチアキ。

この日は地獄のかまの口が開いて、亡くなったもんがこの日だけは、  
えんまさまにおこられないで休めるといふ。

ふかしまんじゅうとか、赤飯を作つて仏様に供える。(元総社)

盆月の一日を、カマノクチアケという。この日、地獄のカマノクチ  
が開いて、仏様がお客様に出かけるといふ。

年神様にあげたお供えをとつておいて、その供えをくだいて焼いて、  
雑煮にして、七つ鉢に入れて、仏様と神様(神柵)、えびす大黒、屋敷  
神様にあげる。(小相木)

この日、まんじゅうを作つて神様、仏様にあげた。この日は仏様が  
あの世から出かける日という。(前箱田)

八月一日の行事。

朝うでまんじゅうを作つて仏様にあげた。この日は(盆月のはじめ  
の日で)地獄の釜のふたが開いて仏様が(家へお客様に来るので)出か  
けてくるといふ。(西箱田)

八月一日。ウデマンジュウを作つて、仏様にあげる。この日、仏様  
があつた世から出かけて来るといふ。この日から七日間、かど口でム  
ギわらの小束を燃やした。これを七晩焼きといふ。

この日からは、生き物をとるなといふ。とつてあるものは、逃が  
せといふ。盆中も生きもんはとるなといふ。(下石倉)

この日、地獄のかまのふたが開いて、仏様(先祖様)が地獄から出  
て来るといふ。お客様に出かける日といふ。

ふかしまんじゅうをして、仏様にあげた。

お盆になったら、生きもんはとるな、とつたら放してやれといふ。

(元総社)

八月一日(盆月の一日)がかまの口あけ。

この日はまんじゅうを作つて、仏様にあげたり食べたしたりした。むかしはゆでまんじゅうであつた。あとでふかしまんじゅうになつた。(江田)

盆月の一日は、カモノクチャケといつて、まんじゅうを作つて仏様にあげたり、うちのものが食べたりした。

群馬町足門は、盆月になるとつておいたムシは殺すな、放してやれといつた。(江田)

此の行事は昭和二十年頃を契機に行われなくなりました。戦前迄は当地で行われて居りました。

私の村では八月一日を「釜ノロアケ」と呼んで居りました。それは八月十三日からお盆に入るわけで冥土の亡者(祖先の霊)が懐かしい自分の家へ向かつて旅立つ、所謂地獄の釜の蓋があく日なのです。実際の所八月一日から十三日迄に死んだ人には埋葬(土葬)するに當つて菅笠をかぶせてやりました。地獄からゾロゾロ皆さん帰つて来るのにこちらは只一人地獄に向かう。行き会つと「間抜け」だ「トンマ」等と言われ、持つている棒で頭をはたかれる。頭に菅笠をかぶせるのはせめてはたかれても痛くないと言う遺族の思いやりと言つとの、此の話は私の祖父が八月三日なくなつた時もそうであつた。併し前申しましたようになり今は昔語りになつた次第です。(上新田)

七夕 八月七日で、この日の夕方、飾りを利根川に流した。まんじゅうを作つて食べた。

この日、墓そうじをし、七夕のあとから十三日まで、毎晩七晩<sup>ナナ</sup>焼きといつて、毎日火を燃やした。(元総社大渡)

八月七日。門口に飾りをした。竹に飾りをつけた。橋下は川のふちに立てたのできれいだった。川のふちにはアオイを植えてあつた。

(総社粟島)

月遅れのタナバタ、旧でした。赤飯をたいた。七夕飾りは願いを経<sup>シ</sup>き、エホウに立てた。(池端)

八月七日。農作業の様子により七夕をした。

新竹を使い、家でとれたものを飾つた。短冊をつけた。あとで利根川に流した。(小相木)

八月六日。新竹に七色の紙を使って、自分の思いや願い事を書いて結ぶ。八月七日の夕方に川に流す。きゅうり、ナス、とうなす、メロン、すいか等を供える。また、おまんじゅうを作つた。この日は、豆、ささぎり等つるのある畑には入るなという、言伝えがあつた。

七日びに水沢山にのぼつたこと むかしは、七日びに精進場<sup>シヨウジンバ</sup>(なかつ川というところにあつた)で水をあびて、伊香保の水沢山へのぼつた。ここにのぼるのはうちの主人。

水沢山へのぼるのは盆に仏様がうちへお客に来るのに、迷わないように招きに行つたものという。盆月の七日の行事である。(江田)

盆のこと 墓掃除は、盆の七日か十日前の頃にする。今は盆の近くの日曜日の朝にやつている。

むかしは、七晩焼きをした。盆月の七日から十三日まで、大人のやつたこと。小麦わらを小束にして、かど口で七日間夕方焼いた。これは泥棒よけといつた。

十三日が盆迎え。この日の朝、寺へ迎えに行く。夕方に墓へ行つて、墓から仏様を迎えて来た。

盆棚は、上にご先祖様をまつり、下に無縁仏をまつた。供え物は上下同じである。

仏壇におるすい様をまつるといつて供え物をした。盆の間のご馳走は、次のとおりである。

十三日の晩はご飯。

十四日、十五日は朝はボタモチ、昼はうどん、夜はご飯。

十六日は朝はごはん、夜は特になし。昼間のうどんのことは、ひるばるといった。

盆迎えの時に、うちから提灯を持って墓まで行く。その時は火をつけていかない。墓の地藏様の所であかりをつけて来て、かど口の所でムギわらを燃して迎え、そのあと盆柵のご先祖様のところへあかりをつける。

盆送りの時は、ご先祖様のおあかりで提灯に火をつけて、墓まで持っていく。かど口で火をともして墓へ行く。この時は提灯に火をつけて送っていく。

盆の間供えた物を墓まで持つて行く。墓では線香をあげて来る。送っていくのは、朝飯を食べてから。(江田)

盆行事 盆迎え：十三日。寺へ迎えに行った。提灯を持つて行き、寺のおみあかしからあかしを提灯にうつして迎えて来た。そのあかりを盆柵にうつした。

十三日の晩には、じゃがいも、とうなす、いんげん、ふ、きりこぶなどを煮付けたものとご飯を食べた。

十四日、十五日は、朝はぼたもち、昼はうどん、夜はご飯である。

この時昼うどんのことを、ヒルバテといった。ふだんはいわない。

十六日の朝が盆送り。墓まで送っていく。ナスの馬を作る。クリの木で足を作り、トウモロコシの毛でしっぽを作る。この馬には、盆の間にササのほうきで水をうける。この馬は、盆送りの時、墓へ持つて行く。墓の入り口にある六地藏のところにおさめた。

盆柵は、上には先祖様をまつり、下には無縁仏をまつった。

仏様には、朝と晩に供え物をした。これは、朝晩あげたり下げたり

した。下の無縁仏には、先祖様より少しあげ、盆の間はあげつばなしにしておく。上と下は同じものをあげた。(江田)

盆の月になったら、トンボを殺してはいけないという。前にとつてあつたトンボとかセミは、盆になったら放してやれという。(前箱田)

盆の迎え火は七晩焼と呼び七日の夜に行う。ナスで馬を作るが、そのカイバは里芋の芯である。(総社町立石)

八月一日はカマの口開けと言ひ、うで曼頭(ゆで曼頭)を作つた。

(総社町立石)

昼バテ||昼のうどん。(総社町立石)

生き盆 新しい嫁は、その親が丈夫な場合には、盆の前に生き盆といて、里へお客へ行つた。この時は、新しい着物を作つてもらつて着て行く。里では、うちうちの人を呼んで一飯ご馳走してやつた。初

嫁だけの行事。(江田)

盆中の食事 迎えた夜はご飯。あとは毎日同じで、朝ボタモチ、昼ウドンかソバ、夜はご飯にトーフ汁。(小相木)

十三日の朝と昼は忙しいため、あるもので済ます。晩にうどんを食べる。

十四日の朝にはおはぎ、昼にはうどんやそばを食べ、夜はご飯を食べる。

十五日は朝、昼、晩ともにおはぎ。

十六日の朝は、おはぎやおまんじゅうを食べ、昼と晩はあるもので済ます。(上青梨子)

盆の日どり 二十三日からしたことも続いたが、合併後は十三日からになった。(小相木)

盆の用意、買い物 八月の十日過ぎから前橋に買い物に出かけ、盆に着るゆかたを作るため、布を買い、徹夜で蚊帳の中で女性が縫つ



たという。だいたい八月の十三日まで続くという。(上青梨子)

盆おどり 昭和十年代はしていた。毎年ではなかった。昭和二十六年が最後。寺の境内でした。その年に大徳寺をワラぶきから改築した。

(小相木)

仏壇 盆中は仏壇はしめきりにしておく。(小相木)

盆中、仏壇はしめておく。そばやばたもちを供える。空の仏壇は「おるす」とか「する仏」とか呼ばれているらしい。(上青梨子)

盆の十三日 盆の十三日(迎え盆の日)には、水沢山(浅間山)へ登った。むかしは人がつながっていたという。

「お山はすなわち六根清浄」といいながら、山へ登った。明治二十四、五年ころまでは登ったという。ここへ登ったのは中年の人たち。

(青梨子)

(八木原では)盆の十三日に、「盆の十三日に登らぬやつは、親が死んだか、しょさんでもしたか」といいながら浅間山へ登った。

七晩焼き

盆月の七日から十三日までの間、かど口で小麦わらの束を燃やした。これは大人のやったこと。唱え言はなかった。灰を入り口いっぱいひいた。

十三日の晩には、かど口で火をたいて、弓張提灯に火をつけた。仏様はその火のつてうちへ来るといった。

トンボにのつて仏様がやって来るといふ人もあった。

八木原でも七晩焼きをやっていた。八木原は宿だったから、焼きはじめるときれいだった。

七夕の晩から盆までの間にした。小麦のわらを束ねて燃やした。小麦わらがどかどかとはねて、いい音がした。入り口のところに小麦わらを焼いた灰をまっすぐにひいた。唱えごとはなかった。

(総社町総社)

盆迎え お寺に盆の火を提灯を下げてもらいに行った。もらった火は盆柵に移した。(元総社 大渡)

大人、子供共に提灯を持って行く。墓で火をつけて家まで来る。

(総社栗島)

お寺に行きお包みをする。本尊のところへ迎えてから墓地に寄り、六地藏に寄り家に帰る。家で麦ワラに火をつけた。(小相木)

盆迎え、墓に麦ワラを持って行き、束ねてカドで燃やす。その火を提灯につけて来る。(池端)

新盆の年は、チョーチン(文様入り)と白の墓地のチョーチンの二つをおいた。(小相木)

八月十三日。お寺に迎えに行く。お金(千円程度。昔は五百円)を持って行く。新盆の場合はお酒等も。お寺からおみごく(みじんこ二枚)をもらって来る。麦わらをしばって火をつけ迎え火をたく。

(上青梨子)

盆迎えのために、八月七日〜十三日まで麦わらを門口で燃やした。毎晩燃やした。(総社 栗島)

七晩焼き 盆月の七日から十三日までかど口で小麦の小束を燃やした。小麦わらの小束の先をしばって、下をひろげて立てた。下から火をつけた。一晚に一束ずつ燃やした。大体子供がやる。

なお、燃やした灰で門口に線をひいた。唱えごとはなかった。現在はしていない。(前箱田)

もとは盆月の一日から七日間、その後七日から十三日まで、七晩やきをした。

昭和四十年ごろまでやっていた。小麦わらの小束を作って、かいどで焼いた。毎晩一束ずつ焼いた。子供のやったこと。唱えごとはなかった。

た。

燃えた灰をかいどのところにひろげて、どろぼうが入らないようにまくといった。(江田)

**盆棚** 新竹を使う。組み立て式のものがある家は、初めての仏さまの年に作る。

棚は四すみが新竹で、チガヤでしばった。ナワを下げ、松の葉、半紙を下げた。

位牌は新しい盆ゴザに全部並べた。

ナスのゆでたものや、三度三度の家族の食事と同じもの(おやつも)を供えた。

盆棚を作った日の夕食は、新しい盆棚のところで夕食を食べた。

八月十三日に、座敷のすみにゴザを敷き盆棚を置いたらしい。そこに、全部の位牌をおき、花(各家に咲いている花)、スイカ、ぶどう等をお供えしたらしい。また、無縁仏は、盆棚の下にスギの葉を入れ、同様にお供え物を置いたらしい。スギの葉は、とがっているため、子供がいたずらしないようにと考えられている。(上青梨子)

**無縁仏** 盆の時、盆棚の下に無縁仏をまつ。先祖様には、ご飯と汁とは別々に供えるが、下の無縁仏には汁かけ飯を供える。これを犬かけめしという。

三が日、昼にうどんを作って供える。この時も上の先祖様にはうどんと汁をべつべつに供えるが、無縁仏にはかけうどんをあげる。

仏壇には、おるすいといって供え物をする。

なお、昼うどんのことを、盆の時だけひるばてという。(総社新田)

**ガキダナ** 盆棚の下に小さい棚を作り、これはムエンさまの棚だといつた。(元総社大渡)

**盆のウマ** ナスで馬を作り、毛はトウモロコシの毛でウドンでたず

なにした。

ナス、キュウリを細かく切つて、サトイモの葉に包んで無縁仏のおみやげにした。

イモガラ、ナス、メブラを重箱に入れて六地藏にあげたりした。

(総社新田)

**盆送り** 麦ワラを燃やして送る。燃やした後六地藏と墓をまわる。供え物はナスの馬。(小相木)

はすの葉の上にナスやキュウリで馬で作り、尾をとうもろこしで飾り、はすの枝を細かくきざんで、葉の上にえさがわりに置き、家の主人が屋敷の入口にわらで火を燃やしてお墓に送る。(上青梨子)

**来客** 親類、縁者。お花や包み物を持って来る。「結構なお盆でございます」「結構なお盆でございます」とあいさつをかわす。

(上青梨子)

**十五夜** おてまるさまという、あんこ入りのおまんじゅうを作ってお供えした。子供が下げてまわる。竹竿の先に釘をつけて、まんじゅうをさしてとった。(元総社 大渡)

十五夜の日に、床屋に集まって総社神社の祭りの決定をした。元総社から申し入れがあれば断われなかった。

大正十四年は、元総社から酒一升持って、祭りが立ったからお願いしますといわれたので、大火のあとだったが、断われず馬を出した。馬が出るので馬まつりといつた。(総社粟島)

特別ないわれはないが、「十五夜に雨が降ると小麦がはずれる」といわれている。

供え物はおてまる(だんご)十五個と採れた野菜(なす、とうなす等)をみに入れて、かやや、ちがや等を供える。(上青梨子)

十五夜の時には、縁側に机を出して供え物をした。ススキ(何本で

もよい)、里芋、大根など、あるものを供えた。あかりもあげた。

今はまんじゅうをあげているが、むかしは、だんごを山にしてあげた。それを子供がつきに来た。

お月様の中で、ウサギがもちをついているといった。(江田)

縁先に、うでまんじゅう、さつまいも、里芋、なす、きゅうりなどを台の上ののつけて、お月様にしんげた。カヤをあげた。

十五夜突きといて、子供たちはときつちよのついたものを持って、供え物を突き歩いた。

この日は、どこのうちのものをついてもよいといった。(元総社)

十五夜の晩には、それぞれのうちで、まんじゅうとか、クリ、柿をお月様にしんげていた。

これの子供たちがいってさげてくるのが、むかしのならわしであった。

ところが、そのことがこうじて、よそのうちの柿があまいといて、柿の木へのぼってとつてくることもあった。(江田)

十五夜と十三夜 旧八月十五日が十五夜。

ススキを五本、花瓶にさしてあげる。月見だんごは十五コ供える。

その他野菜、果物などを供える。縁側に机を出して飾る。

彼岸中の十五夜になることがあるが、その時はまつらない。彼岸すぎにまつる。

むかしは、だんごでなく、ふかしまんじゅうをあげた。子供がやりをこしらえてきて、供え物をつきに来た。

そのうちのの人にめつかるとおこられた。そのうちのの人に見付からないようにして食べた。そうすると、供え物をとられたうちは運がいい、蚕があたるといった。これは(子供がさげるのではなく)お月様がさげるのだといった。

元総社の西の方に、高見沢長三さんという人がいた。この人は、農家だが、畑にスイカとかマクワウリをうんと作っていた。秋になると、瓜小屋を畑の真中に作っておく。そこへ買いに行く店よりと安く売ってくれた。

寒くなっておしまいの時、うらなりの瓜を来年の種とりにする。スイカ、マクワウリなどとおく。十五夜がくると、それをしんげると子供がやりを持ってそれをつきに行った。長三さんが

「おい、おい、子供、子供、それはたねだからおいてけや」という。子供は他のものをもらって逃げてきた。

トウモロコシも、ウリもスイカもたねにするのは、十五夜様にあげておいた。

やりは竹の先をわって、釘を笠ごとはきんで、針金でしばって作った。長さは六尺くらい。

十三夜には、だんごは十三コあげる。ススキは何本でもかまわない。十三夜にも同じようなものを供える。子供たちは、十三夜にも供え物をつきに行った。

「十三夜にくもりあれども、十五夜にくもりなし」

十三夜にはくもるはず、晴れると今年はお麦があたるといった。

(元総社)

## 十六日

朝、麦ワラをもし、ナス、キューリの午を作る。トウモロコシの毛を尾にした。作ってカドや墓に持つて行く。カイドといて、イモガラ、ナスの切ったものをおいた。

盆棚はチガヤを縄でない、四本の竹をつけ作る。新盆は前のを捨て、新しい棚を作る家もある。(池端)

百万遍 八月十六日は百万遍で、子供が中心になってやった。「百万遍ナンマイダー」と唱えながら、ザシキで大きな数珠をまわした。数珠は使わなくなったので燃やしてしまった。(鍛冶町)

## 十七日

この地域では、盆送りの翌日を「盆空<sup>ボンカラ</sup>」と呼び、特別行事はせず、遊びを中心として過ごしている。(上青梨子)

## 九月 月

九月の行事 旧八月一日：八朔の節供、新しい嫁は、シヨウガが持つて里へお客に行つた。この日のことを、シヨウガの節供といつた。

旧八月十五日：十五夜、ススキ、花、野菜、果物、おてまるかまんじゅうをあげる。十五夜が彼岸になると、別の日に十五夜をした。(新の九月十五日など)

秋の彼岸：おはぎを作つて仏様にあげて、墓参りをする。(元総社)  
十五日の夜の行事は、ススキを採つてきて、秋の七草のフジバカマ、尾花等を花瓶に挿す。

オテマルといつて、米の粉を丸めただんごを作つてお供えをする。後には、おまんじゅうを供えるようになった家々もあり、色々あります。

子供達はそのお供えを宮の者に気付かれないように取ると、運がよいといつて取りに行つたものです。

昔の話で、今はそのような事はありません。(桜が丘)

八朔の節供 旧八月一日の行事。実際には九月一日にしている。

この辺は、新婚の夫婦が嫁さんの里へ葉シヨウガを持って行つた。

おこわも一緒に持つて行つた。この時、泊つてきたものもいた。(江田)  
八朔の節句。花嫁さんはお客に行ける。シヨウガを持つて行く。こずかいをくれ、ダンナさんも一緒に行く。(池端)

九月一日。しよがの節供という。旧八月一日。嫁がしよがを持つてお客に行く。(総社栗島)

九月一日。結婚して初めての年に、シヨウガを持つて行く。お返しに目の荒いザルをもらい、養蚕に使つた。(小相木)

結婚したはじめての年の九月一日に、男性が嫁の実家に「しよが」を持つて行く。(上青梨子)

九月一日が八朔の節供。はじめての嫁(初嫁)はシヨウガを持つて里へお客に行つた。お返しは特になし。(下新田)

十三夜 供えものは、十五夜の時と同じように、縁側に机を出して、その上にした。ススキ、まんじゅう(むかしはだんごであった)、果物、野菜など、数は七・五・三として特にいかなかった。

「十五夜にくもりあれども、十三夜にくもりなし」

といつた。十三夜にくもると、小麦がはずれるといつた。(江田)

十五夜と同じようなものをしんぜた。供えたものを、子供に突かれたほうがいいといつた。

十五夜にカヤを十五本あげた。十三夜にはススキを十三本あげた。

「十五夜にくもりあれども、十三夜にくもりなし」といつた。

十三夜にくもっていると、小麦がはずれるといつた。(元総社)

九月十五日にススキ、オテマル、カキをあげた。子供達はよその家のおそなえをさげに行く。知らないうちにさげられると縁起が良いといふ。暗くなつて行つた。(小相木)

かや 九月十五日からはつらない。(総社栗島)

秋まつりのことは、オクンチという。月のはじめの九日がしよてぐ

んち、十九日がなかぐんち、二十九日がよそぐんち、あるいはおとぐんちという。この三日のうちの一日をまつる。(元総社)

## 十月

十月の行事 旧九月十三日：十三夜

一日：町内の道ごしらえをする。町内ごとに誰が出てもよい。九日：オクヲチ、秋まつり。神社にのぼりを立ててまつった。この日は、赤飯をして神様にあげた。

むかしは、オクンチは親類の者がお客に来た。(元総社)

十月八日に薬師まつりをする。(稻荷新田)

十日：クルワごとに公会堂で町内会を開いた。この時、町内の当番と宿番をきめた。役員をきめなおした。当番は、町内の行事を先にたつてやる人である。宿番は、町内の神社やまつりの世話人、ともに二人ずつ選んだ。(元総社)

ワラデツポ― 十日夜。新藁で藁を丸めて細い縄でぐるぐる巻いて、ゆるまないよう堅く巻き付けて作ります。

これを振り回してトントンと音を出す。(桜が丘)

秋まつり 十月九日に芝居や屋台が出た。(上青梨子)

オクンチ 十月九日。神社にオコワをあげおがんだ。十二時になつてすぐにあげると、みのりが良いという。村中であげたが、今は三軒くらい。

八日の晩には子供達が神社に寝とまりした。夜、なり物をぬすみに行って夜食にしたり、あげられた赤飯をさげて食べた。(小相木)

秋のまつり。(池端)

十月九日、オクンチという。(下石倉)

オクンチは十月九日。前の晩(十月八日の晩)に子供達が神社の中におこもりをした。

子供達が泊っていて、十二時すぎると、ムラの人たちが赤飯を供えに来る。その赤飯を分け合つて食べた。朝になつて子供たちはそれぞれの家に帰つた。

オクンチの日に、早くおまいりすれば縁起がいいといった。赤飯はそれぞれの家で重箱につめて持ってきた。(小相木)

十日夜 わらでつぼうで土をたたきながら「十日夜、十日夜、朝そばきりに、昼だんご、夕もち食っちゃ腹でえこ」という。(上青梨子)

十日夜 十日夜は いいもんだ

朝そばきりに 昼だんご

トーン トントン

といつてたいてまわつた。(稻荷新田)

「十日夜はいいもんだ 朝そばに昼だんご 夕めしくっちゃはらでえこ」といいながら、イモガラをしんにしたワラデツポウで地面をたいてまわつた。

この日は、高崎と観音山の下の清水の観音さまがにぎわつた。歩いておまいりに行った。(元総社大渡)

十日夜には餅をついた。その時、白の洗い水をうちのまわりにまいた。それは、餅をついた男衆のやること。モグラが土をもちあげないやうにということ。

また、このあと、子供たちがわらでつぼうで、うちのまわりをたいて歩いた。モグラがもぐらないやうにということであつた。(下新田)

十月十日。わら鉄砲をすると畑にモグラがでない。また、そのわらでぞうりを作ると、ぞうり作りが上手になる。あんずの木に、そのわらをかけておくと、たくさん実がなる。

「からみモチ」と呼ばれるモチをつくる。

ふたまたダイコンを八幡様に供えると、丈夫ないい子ができる。

「十日夜いいもんだ 朝ソバ切りに昼ダンゴ、夜モチ食べちゃ腹だいいこ」(上青梨子)

十日夜の時は、とうかんや(わらでつぼうのこと)を作つて、うちのまわりをたたいて歩いた。わらでつぼうでモグラをたたくということであつた。

「十日夜 十日夜はいいもんだ 朝そばきりの昼だんだん夕飯食つちやはらだいいこ」

といいながら、はたいて歩いた。(下石倉)

古市と小相木とも子供がけんかをした。この時、きまりの文句はなかつた。

「生意氣いうと、ここを通さねえぞ、あとでみてる」  
などといった。

古市と小相木の子供たちが、前橋の町へ行くのにここを通つた。その時、そんなことをいって、いじめたのである。

紅雲町とは、石ころを投げ合つた。理由のねえのに、けんかをしたのである。(下石倉)

十日夜には餅をついた。子供は、わらを束ねてどじべたをひっぱつて歩いた。

餅はあんもち、神の鉢にニコザつ入れてあげた。

子供がわらでつぼうでどじべたをはたくとこの唱えごと

「十日夜はいいもんだ、あさそばきりにひるだんご、ようもち食つちや、はらでえこ」

ドカンドカンとはたきながら道路へ出て行って、兵隊ごっこをしたこともあつたし、けんかをしたこともあつた。(元総社)

子供のころ、十日夜の日に、日高(高崎)の方へ行ってけんかをした。

「日高のやつら、けんかに来い」といつてわらでつぼうたたきに行つた。

十日夜の時には、わらでつぼうをたたきながら  
「十日夜はいいもんだ、あさそばきりにひるだんご、ようよちくつちやはらだいいこ」

と唄つた。それは、モグラ退治だといつた。

十日夜の晩には餅をついた。ひとかさね、神棚にあげた。あんこが入つたもちを作つて食べた。外へはあげなかつた。(江田)

前箱田の薬師祭り 祭りの起源はわからないが、前に西にあり、そこから移したものという。そのため、南に向けてもいつのまにかやや西(観音様の方向)を向いてしまうという。毎年天候にかかわらず十月十二日に行つている。

昔はあちこちから歩いて来た。新高尾、新保田中、大類辺からも来た。今は村内のみで六時〜七時半ころに来るが、昔は八時〜九時まで来た。昔は暗いのでローソクをつけて来た。道の入口には角の灯ろうがおいてあつた。前はこの墓地ももつと広くて、大きな小屋を作つた。敷地の東側に小屋を作つたが、麦ワラで作るならわしがあつた。(道祖神は稲ワラ)

子供二〜三人が入れるような大きさで、道祖神とは違ひにはしない。□の小屋形にする。

来る人は八個ダンゴを持つて来て、薬師様に供える。そして、供である小さな石仏(お弟子さまという)をなおしてほしいところにつけるなどする。八個のダンゴのうち四個はおみごく(御供)として持ち帰る。今はそれにお菓子をつける。

東にある弘法大師の石仏（天明三年十二月銘）は齒の神様。西にある稻荷社入口の石仏はお産の神様である。

昔は参詣人が数百人、今は一五〇人ほどか。子供会が協力している。年寄りと子供が多い。七時半ころに小屋を燃やしておわりになる。

ここは墓地で、昔は北に堀があり、南にもあった。共同墓地である。この地区にも三十年ほど前まで地藏まつりがあり、町をまわった。

四、五人が最後の経験者。（前箱田）

アナツプサゲ ムギまきが終ると、ムラ中で一緒にアナツプサゲをした。

この時は悪いこなでやきもちを作った。モグラが来ないようにと、やきもちを田圃へ持って行ってあげてきた。モグラをふせぐわけ。

（江田）

ネズツプサゲ：ムギまきが終ると、おはぎを作つて祝つた。（元総社）  
アキアゲ ムギまきが終つて、秋の仕事がかたづくつと、嫁をお客にやつた。嫁さんは子供を背負つて泊つてきた。仕事につかれたからと  
いふので行つてくる。

この時持つて行くものはうでまんじゅう、お返しは場所によつてちがう。（江田）

麦まきの終了した後、モチをついて、それを土産にして嫁が実家に里帰りをする。（上青梨子）

## 十一月

十一月の行事 旧十月十日：十日夜。

わらでつぼうを作つてどじ（庭とか道）をはたいて歩いた。「十日夜はいいもんだ、あさそばきりにひるだんご、ようもちくつてはらだ

こ」といいながら、うちのまわりを三回たいてまわる。そうすると、モグラがもぐらないで、うちがしつかりするといった。

十日夜は餅をついて、神様、仏様にあげた。

十日夜のこと、大根のとりにとるといった。十日夜がすむと、大根をとつてよいといった。

えびす講は十一月二十日にやる。

正月の時よりさかんになる。すしを作つた。かますを積みあげるといつて、あぶらげのすしを作つた。てんぷらもあげた。サンマも供えた。

膳立ては二人前。床の間の部屋でまつる。

身上をあげるといつつので、かきあげをあげるのだという。

嫁に行く前の子供には、えびす様にあげたものは食べさせるなと  
いつた。えびす・大黒はひとりもんだからという。

おばあちゃんがつまんで食べたあとでないと娘には食べさせなかつた。

屋敷稻荷の祭り：十一月十五日。七五三の日にまつる。

この日、お宮をたてかえた。わら宮につくりかえた。今は、きりはぎをとにかえるくらいである。

供える物は、赤飯、あぶらげ、イワシ（かしらつき）、豆腐。これらを二人分ずつあげる。

豆腐はやしろをたてかえたごしもちという。

供え物をして帰る時、あとをふりかえると、稻荷様があげた物を食べないという。

また、翌朝稻荷様のところへ行つてみて、食べてない時は、また祭りなおしをしなければならぬという。つぐ日やりなおしをする。

屋敷神様は、屋敷のイヌイのすみにまつつてある。稻荷様は生き神

様という。お宮は、むかしはおかりやで、わら宮だった。

なお、屋敷神として、稻荷様のほかに、猿田彦をまつる家もあるし、若宮八幡をまつる家もある。

七五三の祝い：この行事はむかしはなかった。ここ三〜四十年くらい前からの行事である。

三十日：ツジュウダンゴ。

新しいシノ竹に、だんごを二つずつさして、とほ口のところに飾った。これは悪魔除けという。だんごは米の粉を石臼でひいて作った。

二十日にはエビス様が仕事から帰って来て下さるので、きれいに神棚のエビス様を清掃してお供を作り、御馳走を供えます。特別な行事はない。(桜が丘)

## 一日

屋敷神のワラ宮を作った。ワラをグシにして、竹で骨にしてワラを並べた。(池端)

## 十日

トウカンヤ 子供会でした。モチをついた。

ワラでたたくものを作った。モグラがムらないようにシンにイモガラを入れ、家のまわりをたたくまねをした。

「トウカンヤはいいもんだ、アサソバキリ、ヒルダンゴ、夜モチ食っちゃーブツタケ」といった。今でも作ってさせている。(池端)

十一月十日ころ。径十センチくらいとイネワラにサトイモのクキを入れて作った。クキを入れると音が良いという。

「トウカンヤはイイモンダ」と言いながらたたいた。イネコモグラ、ネズミを追いはらうといい、オーカンでたたいた。イネコ

キをしていないとワラがないので、子供のために稲をこいで作った。

(小相木)

十一月十日。イモガラのワザデツポウで地面をたたいた。トウカンヤはいいもんだ、ソバキリに、昼ダンゴ、夕モチくっちゃ腹デエコといいながら、たたいてまわった。(総社 栗島)

十一月十五日。ワラ鉄砲を作り、まんじゅうを食べながら、土をたたいてならしながらモグラたいじをしてまわった。

「十日夜、十日夜、朝そばきりに、昼だんご、夕めしくっちゃぶつたたけ」と言った。(桜が丘)

オイナリさん 十一月十五日が祭り日。イワシをあげるか、あげたあとはふりかえらずに帰る。

さがらないとよくないので、その時はもう一度あげ直した。

(元総社大渡)

稻荷祭り 十一月十五日の稻荷祭りは、拜んだ後を振り返るなど言われている。振り返ると不魔がはえると伝えられている。(江田)

家により十一月二十八日から十二月一日。

竹を立てワラをすくって縄をない、屋根にした。シノの棒にオンベロをさして立てた。オコワやオカシラ付をおいた。

あげた後はふりむかないで帰るものという。そうしないと食べてくれないという。

赤飯はあげる時に、子供を連れて行き、そこで一口「オテノクボ」と言い食べさせた。毒見という。(小相木)

ツジュウダンゴ 十一月三十日晚。ツジュウ(くず米)を粉(おしんこ)にして、1の棒先にダンゴにしたツジュウをさし、家々のカギの手にさしておくと、その家に病気や災害、どろぼうなどが入らないとされていたらしい。(上青梨子)



十一月三十日にはつじゅうだんごを作った。

米の粉をこねてにぎって作った。このだんごを二つ、篠竹にさして、台所に積んである俵にさした。

これはもみすりが終えた祝いといった。(江田)

## 十二月

十二月の行事 一日：カワビタリ。名前を聞いているだけで、具体的な行事についてはわからない。

二十三日ごろ：冬至。トウナスとコンニャクを食べる。コンニャクは体の中の砂をはらうという。夜ユズ湯をたてる。

冬至十日前は日が短かいという。それから、だんだん日が伸びていくといった。

二十六日：すすはき

三十日：餅つき。正月のおかざり。

三十一日：大晦日。みそかのそばを食べる。

八日：コト八日。コトジマイという。竿のうらにかごをつけて、庭先に立てる。

この日、天からかねが降ってくる。それをめかごで受けとめるのだという。

二月八日のことを、コトハジメといい、十二月八日のことは、コトジマイという。

十五日：油もち。この時の餅のことは、夫婦もちといって二白つく。

これは農作業が終った祝いである。この餅のことは極楽餅といった。

この餅は、親戚とか懸意なうちに配った。(元総社)

行事のこと 十二月八日はオコトジマイ

二月八日は、オコトハジメ

二月六日は六日年という。

一月八日は、八日だめといって、男衆はためだしをした。ためは桑原にまけるとか、ムギにくれたりした。(総社町総社)

十二月：師走。やたらと毎日が急がしく感じる月です。そんな事でもみな何かする事等は特にない。個人的に餅つき。松飾り、家の廻りを整えるか、垣根の手入れをする、樹木の手入れ、落葉焚き。

大掃除、大晦日。「夜番」：子供達の役目のように、大きな鈴を腰につけて歩いた。ジャランと鳴って夜番が廻っている。そんな火災に対する小さな村落の共同事業もあった。(桜が丘)

## 一 日

屋敷稲荷 屋敷稲荷をまつた。晩に赤飯とサンマ、豆腐、油揚げあげた。おまいりした人が赤飯を食べた。ケンチン汁も作った。オシメをはり、灯籠を持って行く。屋敷を守ってくれる。(総社新田)

ヤシキマツリ。オコワをふかし、イワシをしんぜる。戸所だけは二日早く、十一月二十八日にやる。

丁間イナリに行く人があり、供えも多かった。(総社新田)

十一月三日。オイナリ祭り。

屋敷神のまつり。赤飯とカシラツキ(イワシ)にトーフ(モチのかわり)を供えた。イワシは「祝う」の意味。(池端)

## 八 日

ことじまい オコワをふかし、朝早くおきてメケエを棒につけてあがる。金在中にたまるという。(総社 粟島)

コトジメといい、赤飯をふかした。(小相木)

事八日 十二月八日と二月八日をオコトマツリといった。

この日はさおの先にざるをしぼりつけて、庭先に立てた。天からかねがふつてくるといった。(総社町総社)

## 十五日

油餅 アブラモチ(フウフモチ)をついて食べる。夫婦仲よく、豊作を感謝してついて食べた。(総社新田)

十二月十五日。このころには麦まきも終わるので、農作業のおわつたということでモチをついた。重箱に入れて手伝ってくれた家に配った。体の油になるという。(小相木)

十二月十五日には、おぶら餅をついた。農作業がかたずいて、これからはいくらかあぶらがうれる(菓ができる)ということである。そのため、この餅のことは、極楽餅ともいった。

ムギまきや稲のとり入れで骨をおつたので、腰をのばすということ。この餅も近い親戚に配った。(江田)

エビス講 メシを山もりにし、サンマ(昔はタイ)をあげた。十二月二十日。(総社 栗島)

十二月二十日ころ オセイボのシャケを売りに来た。クシガキを売り、シャケを買った。

## 二十三日

大そうじ 大そうじをして、夜はお飾りをした。(総社 栗島)

すすはき 十二月二十三日ころ、冬至のころにした。(小相木)

お松を買いに行くこと すすはきが終えてから、お風呂に入って、みんなしてお松とかかざりもんを市まで買いに行った。

買ってきたお松は、ツボ山においたり、物置においたりした。

(元総社)

十二月二十三日に大掃除をする、その晩お飾り作りをし、甘酒をつくる。また、コロコロ柳を取って来て、火にかけたり水で煮て柳箸を作る。

くずかきの時に松迎えをする。(お飾り用の松の準備)

餅搗きは、大半が二十八日であるが、神谷・安藤・蟹谷の三件は、ふくもちを搗くといって、二十九日に餅搗きをする。また、小鮒・石井家では三十日の朝に餅を搗く。

油餅 十二月二十五日。この地域では夫婦もちと呼び、夫婦が両方とも健在の家でもちをつき、神棚や仏様にお供えしたらしい。そのいわれは明確ではないが「一年、ご苦労様でした」と言つて、お互いの健康そくさいを確かめ合つた。(上青梨子)

十二月二十五・六日 こよみを見て大掃除をした。(池端)

すすはき むかしから十二月二十六日。すすとり、すすはきともいう。

ほうきは竹の枝を束ねて作つた。これをすすはき竹、すすはきぼうきといった。

コザからはきはじめた。(これはうちによつて違うが)この年のアキの方からはきはじめた。これをするのは、おとつあん。

すすはきは二十六日の朝からはじめて、夕方までであった。うちの家の財道具などは、全部外へ出した。

一番はじめ外に出すのは、神様と仏様、箕の中に入れてつぼ山へ出した。日陰へ出した。

大物から出した。たんす、長持、お勝手のものなど。朝食でたご飯を夕食の時も食べた。お昼は物置など外で食べた。

この時使つたほうきはとつておいて、一月十四日の時、ほかのお飾

りなどと一緒を持って行って焼いた。

ほうきには特に供え物をしない。使ったあとはつぼ山に立てておいた。(元総社)

もちつき 十二月二十八日に米とぎをし、二十九日にもちつきをした。(総社栗島)

二十八日にする。二十九日のクモチはつかない。あとは三十日にく。三十一日の一夜モチはつかない。(小相木)

十二月二十八日か三十日が普通だったが、二十九日につく家もある。

(元総社大渡)

十二月二十八日についた。フクモチといって二十九日につく家もあった。(桜が丘)

しめなわ ごぼうじめ、おしめを作った。

ごぼうじめは庚申、神社、松飾り、仏壇、墓、井戸、便所、釜神様、テンガにあげた。おしめは神棚にあげた。(桜が丘)

松飾り 門口に二つ、家の正面に三つか五つくらい、稲荷様に一つあげた。

朝、新しいものができると、お供えをした。(桜が丘)

正月飾り 二十八日か三十日に作り、その日のうちに飾った。ワラの太いものをあんだお顔をかくしという飾りがあった。二本の棒の間にスタレ状に縄があんであった。(小相木)

お飾りは大体三十日にする。一夜飾りはするなといった。

うちによつては、すすはきできれいになった座敷で、お飾りないといつて二十六日の晩に、しめ飾りをしたうちもあった。おやじさんがした。

大神宮様のお札は、明神様の庭掃きの方が配った。すすはきが終つたあと、大晦日までの間に配った。この人が毎戸配つて歩いた。元総

社から近村の氏子のところへ配つて歩いた。お札は、行李に入れて、大風呂敷に包んで背負つて歩いた。お札は三方の上のせて受けとつた。お金を払つた。

十二月三十日の餅つきとお飾り。

不幸のあつたうちは、餅つきをしない。むかし、餅つきをしていて、手合わせをしていた奥さんをつき殺したので、臼をお寺へ納めてしまったうちがある。そのうちは、それから(正月の)餅つきをしないという。

三本杵でつくうちもある。近所のうち三軒で共同でつくうちもある。餅をつく時は、臼の下にすぐつたわらをしく。二把くらい。根元を外して丸く敷く。真中に臼をおいた。

手合わせをする人は、はきものをぬいだ。餅は台所であつた。はじめの臼は、臼あらいといつて、よごれているといふので、お供えをとらない。二臼目の臼からお供えをとつた。

うちによつて、お供えの数はちがう。大神宮様のもの、稲荷様のもの、えびす様のもの、釜神様のものなどがあつた。

うちによつては、床の間にあげるのと、大神宮様にあげるのを大きくして、あとは少し小さめで、同じ大きさのものを作つた。お供えはかさねにした。

三十一日の晩、除夜の鐘が鳴り終ると、お正月様がくるといふので、お供えとおみきを正月棚にあげた。あげるの主人。(三十日にお供えをあげるうちもある)

正月棚

恵方の方にむけてつるす。

棚の先の方に歳徳神様を飾り、反対側に大神宮様を飾る。二つの神様を相むかいにして飾る。

二つの神様に、小さいお供えを二かさねずつあげるうちもある。

(元総社)

元旦 正月棚 神棚の前に作った。ワラをさげて竹の棒をつけた。

そこに麻、コンブ、スルメ、干柿、

ホーズキ、ミカンをさげた。

(小相木)

各家の座敷(床の間のある部屋)

の中央部に飾り、正月棚を天井から

つるし、天照大神を祀る神様として、

伊勢神宮のお札なども飾る。

(上青梨子)

シメナワと松で内飾りと外飾りに

した。小さいおしめを、トイレ、井

戸(水神様)、エビスさま、大黒さま、

便所、お勝手(カマ神様)、入口、屋

敷稲荷においた。(小相木)



正月飾り(川曲)

三十日

カドマツを飾った。「一夜飾りは良くない」といった。(池端)

餅つき 十二月三十日。臼の下にわらは敷くようだが、そのいわれ

は定かでない。お正月の供え餅は、十二重ねと呼ばれ、十二個作る。

一般的には、神棚が三つ、床の間に二つ、仏様、勝手、玄関、稲荷様、

トイレ、えびす様、へびの神様?等に飾る。(上青梨子)

餅搗きは五軒位の回り番であった。二十九日と三十一日以外で、二

十五日頃から行う。七五三に餅を搗く。

注連縄や松飾りをし、座敷内に飾り付を行なう。水木でお顔隠し、

十二手を作る。飾るものは、

よろこぶ いわし いかばかり

と言う三つの海の幸、山の幸として柿、みかん、栗、末広、回青橙、

ます、ふきのとう(寿)である。(後家)

三十一日

白、手おけに七・五・三のしめをまき、元日から使った。

(総社 粟島)

大みそか ソバを作る。となり近所がフロに入りに行く。フレをし

てから入る。嫁さんは世話が大変であった。(小相木)

大晦日の行事 近藤一家では、一年中のものを集めて食べるという

ので、三十一日の朝おじやをして食べる。

朝はそば(みそかそば)、ひるはあまりもん、もちのきればしなど。

夜はご飯、神様にあげる。おかずとしてきりめぎのなを食べた。

大晦日に便所で食べるうちもあった。これはむかしの人が、借金取

りからのがれるためにしたことだという。

大晦日の晩に早く寝るとしつぽがはえるといった。この日は大きい

はなしをしていろといった。

元日のこと。夜が明けると、朝湯をたつて入った。酒をひとちよつ

こたらして入った。近所のもんを呼んで入った。

本家新宅のあるうちでは、順番を決めて入った。本家が一番先にたつ

た。

若水は年男(惣領)がくんだ。三が日の間は男衆が料理を作り、神

様にしんぜた。

うどんをおんなしがうって、年男がうでてあげた。たいがいのうち

がそうだった。

元日には、町中、一軒一軒あいさつまわりをした。からてでまわつた。

「あけましておめでとうございます」とあいさつをしてまわつた。

一日には、寺と医者へ新年のあいさつに行つた。寺へはいくらか包んで行つた。上原さんという医者がムラ内にいた。(元総社)

大晦日のしきたり 新井一家(元総社町)では、大晦日の晩に便所で飯を食べるといふ。

このうちに借金があつて、借金とりがくる。借金とりに会わないように、飯どきにはきつとうちのものがいるだろうと、借金とりが思つて来るだろうといふので、便所にお膳をもつて行つて隠れて食うのだといふ。

先祖様がきれいとしてやっていたので、守つてやっていたといふ。

昭和のはじめごろまでのこと。(元総社)

大晦日は、富沢一家はそば又はうどんだが、他の家ではそばでなく、御飯の年越である。

元日はうどん、二日三日に雑煮を食べる。

年男が正月の炊事をする。(江田)

大正月の準備 大正月のお松は、暮のうちにとつておく。餅をつくころに切つておく。お松は物置にしまつておく。

お飾りは三十日までにする。

すすきはき、おそくも冬至までにやる。すすきはきがすんでから、お松をとつてくる。(下新田)

暮市 石倉に行つた。スルメ、コンブ、麻、砂糖を買つた。(小相木)

冬至のユズ湯をいれた。カボチャを食べた。(巢鳥)

冬至 トーナスを食べると、カゼをひかないといふ。(小相木)

この日は、とうなすを食べ、ゆず湯に入る。そのいわれは、ちゅう

きにならないためとされている。(上青梨子)

戌の日 冬にコタツを作るのは戌の日にする。

田植えは戌の日、半夏、タツの日にはしない。半夏は、昔半夏といふ名の人が、田植えて死んだのでさういふ。タツの日は荒れる。(巢鳥)

清野の年中行事

十二月二十三日 お飾り、縄作り

二十七日 お松(赤松)を取りに行く。

二十九日 餅搗きはしない。

三十一日 晦日そば

一月 一日 若水汲み 歳男の仕事である。

八幡様への初詣

四日 嫁のお客日

六日 年始日 六日歳

六日山と言つて木取りをした

秋葉様の祭り

七日 七草粥

八日 八日溜

十日 小正月の餅搗き用意

陣馬の代々神楽を見に行く。

十一日 餅搗き

十二日 飾り替え(花ごさえ) エゴの木やミズキで花を作

る。

十三日 道祖神

十四日 漆原の観音様(ザル観音)へ学校帰りに行つた。

十五日 小正月 あずき粥

二十日 小月 朝祝いと言ひ、これに対して十一月

二十日を夜祝いと言う。

仕事始め、つるべ縄・マブシ作りをして、ガイド  
コの大黒柱に縛りつける。(清野)

正月の飾りつけは神棚の他に棚の間といわれる所に、天井から丸棒  
を下げ水平に平板をすえ、恵方を向けて十三飾りをした。

くるくるとはねくりまわって(かきくりまわって(まわり)ふつき  
(富貴か)代々回常松手ぬぐい  
といった。

### 総社粟島の年中行事

正月 二日 初買

三日 坊主年始(光厳寺の壇家回り)

四日 元景寺年始

嫁の御年始 実家への里帰りであるが、六日まで  
に帰って来いと言われた。

五日 柳沢寺観音祭り

芹摘み(七草の用意)

芹を浸した水で爪を切ると良いと言われる。

六日 六日山と称し水草切りを行う。

七日 七草

植野の少林山で達磨市

八日 八日だめ(下水の溜出し)

九日 初市 鮎と飾り菓子(売りに来た)を神棚に上げ  
る

十日 金毘羅様

十一日 元三大師縁日

御年始日 塩釜の持ち回りをした。別の町内では

七日が植野、十一日が巢鳥・鍛冶町、十九日高井、  
二十五日青梨子・野郎犬、二十八日野馬の年始日  
であった。

十二日 小正月の餅搗

十三日 餅の飾り替え 十六枝の割り花かき、繭玉作り、  
孕み箸作りをする。門松の跡に穂だれをさす。

十五日 あずき粥 吹いて食べると田植の日に大風が吹い  
て、苗を倒してしまうと言われる。

成る木責め 実を結ぶ木の前で、成るか成らぬか  
と木を責め、その年の実りを願う。

村契約

十六日 繭かき 繭玉を取る。

十五日〜十六日 小正月 やぶ入り・嫁正月

十八日 粥 長虫が入らないようにと願い家の周り  
にやかんやカタクチで粥を撒く。

二十日 粥かき棒を田の水口に立てる。

井戸縄・桑縄・肩かけ縄を綯い、束ねて大黒柱に  
かけておく。一軒で三本位作る。

恵比寿講 この日と十一月の二十日と年二回あ  
る。一月に出て十一月に帰って来ると言う。従っ  
てこの日は背中を向けて恵比寿を飾り、十一月に  
は正面を向けて飾る。

二十八日 不動様 しまい正月(番払い)

二月 一日 次郎の正月(一日だけ) 契約 奉公人の出替り

節分 ヒイラギの枝にイワシの頭と尾をさし、ト  
ボ口にさす。これを焼く時には、唾を吐きかけな

がら害虫焼の唱えごとを言う。耕作の害虫は四十種いると伝わる。

年男は、光厳寺大師様や明神様、水沢に詣でる。初午 丙午の年は二の午を祀る。田圃の丁間稲荷に参る。蚕が当るようにマブシ・縄等の道具を持って行き、クジ引きで参詣者に譲る。

光厳寺から角大師のお札を貰い玄関に貼る。二年中払いのお札

二月 十五日 涅槃様 甘い団子を仏様に進げる。

結婚式は三月の彼岸までに終る。(農繁期を避ける) (総社町栗島)

総社山王の年中行事

十二月二十六日 大掃除。元総社に松市があり、夕方買いに行き、縄作りをした。

三十日 餅搗きと飾り付け。一夜飾りは避けた。家によっては苦を搗き込むといって二十九日に餅搗きをした。

大飾りⅡ神棚の顔かくしといって、半紙を折ったものを立てて置く。大神宮は女神だから赤いものを付ける。

お棚といつて、天井から棒を下げ、回転できるようにした板を水平に留める。天照皇太神と歳神を祀りアキの方に向ける。細い竹を切つて、ゴマメ・カツオ節を刺して、山の幸の上に、海の幸を下におく。

これらは寺の年始前に下げる。

一月 一日

若水樋にシメを張り七・五・三に汲み、神棚に茶を備える。

若水は元日に七杯、二日に五杯、三日に三杯と汲みわたる。

門松に総領Ⅱ子供が、飾り初穂として御飯を備える。

まわり持で湯Ⅱ風呂をたてる。だれでも良く、きまつた順はない。

二日 初買(町まで)

この日の晩に区長宅で謡い初めを行う。四海波と高砂・千秋楽を謡った。

またこの日はお祝い日である。

三ヶ月のうちにトロ口を食べる。

四日 お棚さがし お供えを集めて七草の準備をする。

嫁正月 実家へ帰るが、六日は年取りだから六日までに戻る。

六日 六日歳と言われ、年取り日である。

六日山と称し、木取りを行った。

桑の木は三年木が大半であったが、土手木等も取った。ニワトコを切つて来てカキ花を作り、また十五日に炊くお粥のための粥かき棒も作つた。

七日 七草 オマツ(門松)の芯を抜く松ひきを行った。

八日 八日溜め また初市を兼ねて市内の御年始まわりをした。

十一日 欽立て(サク立て) オンペロ(御幣) オサゴ(白木) ゴマメを持って行きそれを備えた後に三サク

うなう。

十二日 餅搗き

十三日 繭玉を作る

十四日 道祖神・小正月はこの日から

十五日 鳥追い出

道祖神と鳥追出は親頭を筆頭に、小頭を何人かおき、年少者は三厘係りと呼ばれた。

十六日 繭玉をこの日の朝までにする(マユカキ)。この繭

玉を入れて小豆粥を作る。

十八日 ゲー(粥)を庭に撒く。

二十日 恵比寿を飾り、つるべ打を行う。桑を縛るためのもの、麦打ち用のものとして、朝のうちに三本(十把)のイヅラと呼ばれる縄をない、下大黒(台所の大黒柱)に縛っておく。

朝恵比寿。十一月二十日は夜に祀る恵比寿講であるが、この日は朝に祀る。二銭程で買って来たサンマを備える。

二十三日 青年の契約。満十七〜四十二歳までの組織で酒一

升を持参して入会した。後には昭和四十三年までは青年会となった。大世話人三人と小世話人二人の役員が構成され、誰でも参加でき、四十二と四十三の者は客分として会費免除の扱いであった。不動の座払い(しまい正月)。年始はこの日までであった。

あった。

二月三日 節分。

お寺で豆撒きをした。マメガラ・クワデを燃やしてイワシの頭を焼き、トブ口に刺す。(11年中払い)

二月

八日

事始め。竹竿の長いのに、先端にミケを付け、家敷の高い所に立てかけて唱で唱てごとをする。(十二月八日が事じまいである。)

初午 赤飯を炊き、繭玉を作る。ハネ上げる(11蚕が当る)ように繭玉を付ける。

粟島のお稻荷様11丁間稻荷で草競馬があった。丁間稻荷は博奕の神様であった。

正月二日は葛細工が中心で、マブシ折り、縄ない、俵作り、チョウツパシ作りをしていた。

三月

三日

節句 紅白のシシ餅を雛に備え、寿司(のり巻)を作って食べた。(総社町山王)

後家の年中行事

若水は、主人が十二支を唱えながら七五三に汲む。

正月

一日

朝湯をたてた。掃き出すものではないといって、ホウキで掃き込む掃除をした。

飯玉神社や稻荷神社へ初詣出をした。

ソバを食べる家が大半である。

二日

初市

四日

お棚下げ 坊主(田中延命寺 昌楽寺 釈迦尊寺)

の年始が来る前におそなえを下げた。

七日

七草粥を食べた。

十日

道祖神祭りの小屋掛け

十一日

くわだて

十三日

飾りかけ 桑・櫟・水木を使う。水木は蚕が当るといわれた。さくばなという色菓子を使った。

餅搗き



十四日 道祖神小屋に火をつける。とうふ汁を作つて子供にやつた。

十五日 あずき粥

十八日 粥を炊き、建物の回りに撒いた。

二十日 正月 おしるこを作り、牛馬にもやつた。

はよ縄 はようち かたかけにする縄をない、大黒柱の東側にある小黒柱にかけておく。

二十八日 不動の番払い 正月がこの日で終る。

節分

芋の煮つころがしを作る。鯛の尾頭つきを焼き、マメの木かヒイラギに刺したものを竹筒と一緒に軒下にさした。鯛を焼く時に、万の虫の口を封じますと唱えたり、いいこときくがら借金なすがら身体はきくがらと言つた。

二月

八日 仕事始め 赤飯を炊いた。婿と八日は仕事始めとい

われた。竹の竿の先に籠をつけ、半紙を敷いた中に錢を入れ、竿を振つて錢を撒く家があつた。

初午

赤飯を炊いた。

二月 十五日

釈迦の涅槃

二月二十四日 天神講(後家)

## 第十二章 口頭伝承

### 一、昔話

姥捨山 むかし、あるところに、年寄りのきらいな殿様がいたつて。

それで六十になると年寄を姥捨山に捨てさせたんだつて。

そんなときは、年寄をもつこに乗せて、子供がかついでつれて行つたんだつて。

あるところに親孝行の兄弟がいて、六十になるおばあさんをもつこに乗せて姥捨山へ連れて行つて、そうすると、おばあさんが、行く道すがら、もつこから手を出して、木の枝をおしより、おしより行つたつて。

それで山の頂上へついて、おばあさんをもつこからおろして、子供たちがもつこを持って帰ろうとしたら、おばあさんが、

「おまえたちはまだ若いんだから、一生懸命世の中のために尽して生きてくれ。帰り道迷うと困るから、わしが道しるべに木の枝をおしよつておいたから、それをたよつていげ」

そして、おばあさんは、

「姥捨や、わが身をたどる道しるべかな」

という地口をうたつてくれた。

子供たちは、おばあさんの折つてくれた道しるべをたよりにうちへ帰つてきたつて。

それから何日かたつうちに、殿様から難題が（城下に）だされたつて。

それは次のような問題であつた。

火を紙に包んで来お

風を紙に包んで来お

灰で縄をなつて来お

梅の木のしんとうに糸をとおして来お

殿様はできそうもないことをいつけたわけだ。

せがれたちは、殿様のいうことが出来ないで弱つていた。

そしたら、おばあさんに聞いたたらよからうということに気がついて、

山へ行つて、おばあさんに聞いてみた。

そしたら、こんなことは雑作はないといつて教えてくれた。

火を紙にくるんで来おというのは、提灯をつけていけばいいという。

風を紙に包んで来おというのは、うちわであおぎながら行けばよいという。

灰で縄をなえというのは、わらで縄をなつて、それを燃して、そつ

ともつていけばいいという。

梅の木に糸をとおせというのは、梅の木の薪にみつをぬつて、アリがみつをなめながら、芯を食つて穴をあける。その穴に糸をとおせば

いいという。

それで、せがれたちは、こういうことを知つているおばあさんを山

へ捨てるわけにはいかない、といって、おばあさんを山からつれてきて、かくしておいたつて。

殿様からの問題を解いて、殿様のところへ持っていったら、殿様が、「それは、おまえたちの考えではないだろう。」といった。

そこで、せがれは仕方なく、

「山へぶちやつた年寄に聞きました」と答えた。  
すると、殿様も目がさめて、それから年寄を大事にするようになった。

それで

「(山へ捨てた)おばあさんを、山からつれて来お」

といった。

せがれは

「いや、実はおばあさんは山からつれてきて、ナンドにかくなしておきました」  
つて。

それで、せがれも許されて、年寄を山へ捨てなくなつたんだつて。

(元総社)

むかし、信州の姥捨山に、そんなときの殿様が、年寄はきれいで、年とつたら山ぶちやつれつうんで、それで、みんな山へぶちやりに行つたんだつて。

そしたら、おばあさんが、もつこに乗つて、せがれ二人がかついで行く、姥捨山へぶちやりに行くときに、もつこから手をだして、行く道の小枝を、ぼきん、ぼきん折りながら行つたつて。

それで、せがれが、おばあさんに、

「おばあさん、なんで木の枝を折るんだ」

といったら、

「山へぶちやられるおらあこれで死ぬんだからいいけど、おまえたちがうちへ帰るんに道に迷うからおれが道しるべに、木の枝を折つてきたから、それをたよりに行けば、うちへ帰れる。」それで、それが姥捨山わが身をたどる道しるべかな

という文句になつた。

それで、そのせがれでえは、こんなに心配してくれる親を、山に捨てるとはもつてのほかだつうんで、うちへつれてきて、押入れにかくなして寝せておいたつて。

そしたら、殿様はそれ知らねえで、こんどは住民に、灰で縄なつてこおつう難題を申しつけた。そうしたら、そのせがれでえも、灰で縄がなえるわけはねえが、どうしたらよかんべつうんで、おばあさんに聞いた。

そしたら、

「わらをよくたいたいて、縄なつて、それを燃して、盆の上へのつていげ。」そうしたら、わらでなつた縄だから、本当に灰が縄になつていたつて。

それで、殿様の前へつんだしたら、

「なるほどそうだ」

つう。

それで、こんどは殿様が。

「火を紙にくるんでもつて来お」

つう。

ところが、火を紙にくるめば燃えちゃうに相違ねえ。

それでまた、おばあさんに聞いたたら、おばあさんが、

「提灯をつけてげ」

つて。

そしたら、殿様が今度は、

「風を紙にくるんでもつてこお」  
つて。

それも、わからねえておばあさんに聞いた。

おばあさんが、

「うちわであおぎながら行け」

つて、風がつつまるといふ。

それで、それから殿様が、

「としよりは、そういうことを知っていたか。これは、余が悪かった」

つて、殿様があやまつて、それから、としよりを大事にするようになった。  
（元総社）

むかしは、年寄を姥捨山に捨てたという。

あるところで、息子がおばあさんを背中におんぶして捨てて行った。

そしたらおばあさんが、一丁ごとに木の枝を折って行った。

それで、せがれがどうしてそんなことをするのか聞いたところ、

「おまえが、うちへ帰るのに、道をまちがえないように、枝を折って

おいた。その枝をたよりに帰れ」

といったつて。

それを聞いたせがれは、死ぬまぎわになつても、子のことを思つて

くれる親はありがたいと、うれしくなつたという。（西箱田）

むかし、信州に、年寄のきれいな殿様がいて、年をとると山へぶちや

れつうんで、みんな山へぶちやりに行ったんだつて。

あるところにせがれが二人いて、おばあさんをもつこに乗せて姥捨

山へぶちやりに行った。

そのときに、おばあさんがもつこから手を出して、行く道の小枝を  
ぼきん、ぼきん折りながら行つたつて。

それでせがれが、

「おばあさん、なんで木の枝を折るんだ」

といつたら

「山へぶちやられるおらあはこれで死ぬんだからいいけど、おまえ  
ちがうちへ帰るんに、道に迷うといけねえから、おれが道しるべに木  
の枝を折ってきた。おまえたちは、それをたよりに行けばうちへ帰れ  
る」

つて、

それで、せがれでえは、こんなに心配してくれる親を山に捨てる  
はもつてのほかだつうんで、おばあさんをうちへつれてきて、押入に  
かくなして、寝せておいたつて。

そしたら、殿様はそれを知らねえで、こんどは住民に、「灰で縄なつ

てこお」つう難題を申しつけた。そうしたら、そのせがれでえも、灰

で縄がなえるわけはねえが、どうしたらよかんべつうんで、おばあ

さんに聞いた。

そしたら、

「わらをよくたいたいて、縄なつて、それを燃して、盆の上へのつけて  
いげ」そのとおりにしたら、わらでなつた縄だから、本当に灰が縄に  
なつていたつて。

それで、殿様の前へつんだしたら、

「なるほどそうだ」

つう。

それでこんどは殿様が、

「火を紙にくるんでもつて来お」

つう。

ところが、火を紙にくるめば燃えちやうに相違ねえ。それでまた、おばあさんに聞いたら、おばあさんが、「提灯をつけてげ」

そのとおりにして殿様のところへ持つて行った。

そしたら、殿様がこんどは、

「風を紙にくるんで持つて来お」  
つて。

それもせがれにはわからねえでおばあさんに聞いた。

おばあさんが

「うちわであおぎながらいげ」

つて、そうすれば風がつつまるといふ。

これも、殿様にそうしてみせた。

そしたら、それから、殿様は、

「としよりはそういうことを知っていたか、これは、余が悪かった」  
つて、殿様があやまつて、それからとしよりはを大事にするようになった。  
た。

(元総社)

灰で縄をつくる話 殿様が年貢のとりたてをしたとき、「灰で縄をなえ」といった。しかし、どうしてもできない。年寄りに聞いたら、「そんなものは一番簡単だ。縄を燃せばできる」といった。そして、殿様にそれを出したところ、年貢が少し安くなったという。そして、年寄りを大事にするようになったという。(鳥羽)

猿婿のはなし むかし、むかし、山の中におじいさんと娘三人いたんだそうだ。

ある夏のあついときに、(おじいさんが)畑へアワの草むしりに行っ

たんだつて。

あんまりあついで、おじいさんやになつちやつて、木のかげ入つて、ひとりごとといったつて。

「この畑の草をむしつてくれれば、おれとこに娘が三人いるが、どれでも好きの娘を嫁にくれる」  
つて一人ごとといったつて。

それをたまたま、木の上で猿が聞いていて、ちよろちよると猿がおりてきて、「じいさん、じいさん、今なんていった。」  
つて。

「なにもいわねえ」

「いやいったわけだ。」

そこで押し問答して、最後は、おじいさんが、

「実は、うちに三人娘がいるけどこの畑の草をきれいにしてくれれば、どれでも一人くれる」  
つて。

「じゃあ」

つうんで、猿が

「じゃ、おれがきれいにしてやるからその娘をくれ」

つうんで、猿がたちまち(畑を)きれいにしちゃつたつて。

それで、さあおじいさん、うちへ帰つてきたけど、娘が返事するか、しねえかと、ずい分心配顔でいたんで、一番大きい娘が、おとつあんのそばへきて、

「おじいさん、顔色が悪いけど、どっか具合がわりいかい」  
つて聞いたつて。

そうすると、

「うん、うん」

つうわけで、返事しずいにて、あんまり娘が心配して聞くんで、  
「実はこういうわけで、猿と約束してきたから、山の猿んどこへ嫁に  
行ってくれ」

つておじいさんがいったら、

「くそじい、ばかばかしい」

つうんで、一番上の娘は逃げちゃったつて。

それで、こんどは二番目の娘がきてやつぱり同じようなことをいっ  
て、真中の娘もやつぱり娘さんと同じで、

「くそじい、ばかばかしい」

で、いっちゃったつて、

それで、おじいさんは、あと一人だと思つて、心配していたら、そ  
こへ三番目の娘がきて、やつぱし、前の姉さんと同じようなことをいっ  
て、

「こういうわけで、猿のところへ嫁に行ってくれ」

つていったら、

「喜んでいきます」

つうわけで、最後の娘が嫁にいったつて、

それで、たまたま、いくんちか一緒にいて、ムラのおまつりがある  
んで、そこへ、おじいさんのところへ、お客に行くべえつうわけになっ  
たつて。

で、猿が娘に聞いて、

「おじいさんのお土産はなにがよかんべ」

つていったら

「おじいさんに餅がいちばん好きなんだから、餅を土産にもつてつて  
くれ」と、

それじゃわつきやねえつうんで、猿がついて、さあ、重箱につめて

もつてぐ」つていったら、

「おじいさんは、重箱なんかつめれば重箱くさくつて食べねえ。」

「じゃ、紙に包むか」

つていったら、

「紙に包めば、紙がくさくつて食わねえ」

「じゃ、どうしたらいいんだ」

つていうと、

「おじいさんが一番喜ぶ、白のまんまもつてつてくれ。そうすれば、  
なんのうつり香もねえから」

つうわけで、猿がついに白ごとしよつて山からおりてきた。

で、途中で、たまたま、川の淵にきれいな桃の花が咲いていたんで。

「その桃の花を、一枝おじいさんにもつてつてやりてえ」

つて、娘が猿にいったつて。

で、猿が木にのぼつてとろうとして、白を土の上におろそうとした  
ら

「おじいさんは、白を土におろすと、土くさくつて食わねえ」

つていったら。

猿が白を背負ったまま桃の木に、花とりにのぼつていったんだつて。  
で、さいしよに

「この枝か」

つて、娘に聞いたら、

「うん、その一つ上だ」

つうので、一つのぼつて、

「この枝かい」

つていうと、

「その上だ」

つう。

だんだん、上へ行っちゃったもんだから、木が細くなって、白を背負ったまんま、枝がおれて、猿は川へおちてしんだという。

(総社町総社)

ミミグクの紺屋　むかし、ミミグクが染め物屋(紺屋)をはじめたつて。

そしたらそこへスズメがいった。

「こうやさん、こうやさん、わしは田圃の稲や麦をえさにして食ってるんで百姓の人に叱られる。それで、なるべく百姓の人にめっからねえように染めてくれ。こうやさん、どういう色がよかんべ、羽根の色を染めてくんろ」

それで、スズメは、ミミグクに、

「あんなのような色がよかんべ」

つていった。

ミミグクは、

「そうか」

といつて、スズメは茶かつしよくの色になつたと。

そこへ、カラスがいつて、

「こうやさん、こうやさん、なるべく人間にめっからなような色に染めてもらいたい」

とたのんだ。

ミミグクは、

「ようがんす」

と承知した。

ミミズクがいよいよ染めようとしたが、どのようにしていいか、が

らり忘れてしまった。

それで、黒でよかんべと、黒に染めたつて。

そしたら、カラスがおこつて、ミミズクがあやまった。

「それじゃこうしましょう。わしはスズメをとつて食べるけど、あんなには危害を加えないからかんべんしてくれ」カラスも、

「ようがんす」

といつたと。

ところが、スズメははしっこい。カラスとミミズクのはなしをかげで聞いていた。

それで、スズメは、カラスのいるところに行けば、おれをとつて食うミミズクは来ないというので、安心して、カラスのあつまるところへ、スズメはあつまるという。

人間は利口で、カラスのおとりでスズメをあつめて、ひきあみでスズメをとつてしまふという。

また、カラスをとるには、ミミズクをおとりにもつていけばいいという。

ミミズクのあつまるころへ、カラスは安心だというのであつまる。それを人間がひきあみでとるといふ。

ミミズクは、おれはスズメをとつて食うので人間にさらわれている。だから、なるべく昼間はでないことにしている。そして、夜でて、スズメのねぐらへ行つて、スズメをとつて食うんだという。

だから、ミミズクは夜だけしか行動しないのだという。(元総社)

迦葉山のお天狗様のはなし　むかしは、迦葉山へおまいりに行くのに代参講がたつた。

あるとき、代参の人が迦葉山へ行つて坊に泊つた。

坊で夕食のとき酒がでた、みんなでまろくなくて酒を飲んでいた。

そしたら、その中の一人が、

「この酒は、うちの方の〇〇の酒よりうすいし、味が悪いな」といった。

お酌にでた坊さんが、

「そうですか、あんたがたの酒はなんというのですか、」

「これこれこういうのです」

といった。

「それじゃ、ちよつと待っててください、今、わかいしゆをとりにやらせます」

といって、坊さんが太鼓をたたいて、呪文を唱えた。

そしたら、何分もたたないうちに、講の人たちのいった酒と同じ酒を持ってきて、

「これでしよう」

といって、さっきのお客にはなした。

「ああ、これです。どうしてもつてきたんですか」

「わかいしゆがもつてきました」

そのわかいしゆは、酒をとりに行ってあんまり寒いんで、さっき、酒の悪口をいった人のうちへ行って、物置に火をつけてあたつてきたって。

燃されたうちでは、それがわからなかつたって。(元総社)

あるとき、迦葉山講の人たちが、迦葉山へ代参に行った。そのとき酒がでた。その酒を飲んでちた人が、

「この酒は水っぽいな」

とささやいたと。

すると、和尚さんがきて、

「ちよつとお待ちなさい。べつの酒をわかいしゆにとりにやりまするか

ら」

といった。

夜のこと、酒を本堂にとりにやつたようだった。

お天狗様が酒屋へ酒をとりに行ったわけだが、あんまり寒かったので、酒をさげてくる途中、酒のわるくちをいった人の物置に火をつけてあたつてきたって。

そして、さっきの人たちの宴会の席に出て、

「おたくの酒をもつてきました」

といって、その酒をだした。

それを飲んだ人が、うちの方の酒だといったまげたって。

「あんまり寒かつたんで、お宅の物置に火をつけて、あたつてきました」

つていったって。

近所の人も、うちの人も、火をつけられたことは、全然知らなかつたという。

迦葉山のお天狗様の仕業であつた。(元総社)

天狗様のおどろき 天狗様が山から里へおりてきた。

ムギが実つてまつきいろになつていた帰りに同じところを通つたら、その田が青くなつていた。

天狗様がたまげて、

「百姓は仕事が早い」

といったって。

ふだん、ムギを刈りとつて、すきおこしをして、田をかいて、田植をする、「天狗様がたまげるぜ」といった。(元総社)

お天狗様が山から里へくだつてきたとき、麦畑がまつきいろになつ



ていた。

帰りに同じところを通つたら、全部の田が植わつていてまっさおであつた。

田植が早いと、お天狗様が、

「百姓の仕事はずい分早いなあ」

と云つて、お天狗様がたまげらあといつた。(元総社)

用水が完成して、そのあとのこと。

天狗様がどこかへでかけた。

帰つてきて田を見てお天狗様はたまげた。

出かけるときには、田はきいろかつた。(これはムギが稔っていること)

ところが帰つてきてみると、田が青くなつていた(田植がすんでいたこと)。

お天狗様は、それをみて、

「百姓は仕事が早えなあ」

とたまげたつて。(元総社)

(天狗様が山から里へおりてきて) 麦畑をみてまっさおのところをみた。

そして、そのあと、同じところを見るとまっさおになっている。

お天狗様は、人間は自分より(仕事が)早いとおどろくという

(江田)

豆なげの由来 むかし、あたたかい南の国の山かげに十軒の農家が  
あつた。

それで、その農家には、おふくという娘がひとり、きれいな娘がひ

とりにいて、それで、おとうさん、おかあさんと、三人ぐらしだったと。

それで、あたたかい山かげの、平らのところで畑をつくつて、もう、米でも粟でも麦でも、なつば類、なり果物、不自由なく作つて、生活  
ができていたつて。

ところが、ある年、旱魃の年で、かわいて、かわいてどうしようも  
なくつて、畑の作物がみんな枯れちまう、それでそこんちのおやしざ  
ん

「弱つたなあ、こんなに雨が降らねえんじや、弱つたなあ、なんとか  
して天の神様、雨を降らせてくれねえかな」まい日畑へ行つて、空を  
あおぎながらくどいたつて、

それである日、同じく畑へ行つたら、いつも畑の真中に石つころが  
なかつたんが、でつかい石が横たわつていて、

「ああ、ああ、だれがこんなおもてえ石をもつてきたんだがな、じゃ  
まっけししようねえや、どうせ山奥の鬼どんに相異なかんべ」

つて、その石つころに腰をおろして、それで、いつものように、

「天の神様、雨を降らせてくれろ、天の神様、雨を降らせてくれろ」  
つて、おがんでた。

そのうちに、そのおとつつあんが、

「天の神様、雨を降らせてくれれば、おれは、おふくというきれいな  
娘があるから、それを嫁にやつてもいいから、だから雨を降らせてく  
れ」

つて、そうにたのんだつて。

そうしたら、腰かけていた石が、むっくりおきて、

「おい、こらこら、百姓どん、今、おまえは、雨を降らせてくれれば  
娘を嫁にくれるつていつたが、」

「ああ、いつたよ」

「じゃ、おれが、雨を降らせてやるから、娘をくれろ」

それで、起きたところを見たら、それが、山奥の鬼だったつうんだいね。

それで、約束どおり、その鬼が天にあがって、黒雲を呼び寄せて、雨を降らせた。そんなときの雷が、今のマンガ本にあるような、鬼が雲の上で大鼓をたたいていた。そのときの雷だった。

それで、いく日かたって、その鬼が娘をもらいに来たんだ。

そしたら、そのおふくろが、

「おふくなあ、てめえ鬼どものところへ嫁に行つてもなあ、どうせいらねえんだから、家にもどつてくるのに、道に迷うと困るから、この菜種をやるからまきながら鬼どもの家へ行げ」

つうんで、それで、娘は鬼にうぶさつて鬼に知れねえように、菜種をまきながら鬼の家まで行つたつて。

そしたら、婿になる鬼一人だと思つたら、いつのまにか八人も鬼が出てきたつて。

そこでその嫁は、

「ああ、世間でよくいうなにか、小姑一人に鬼八人つていったのは、このことか」

それで、そのおふくは、そこにいるんがやで、菜種が、あつたかいところだから生えて、それでたよりに家にもどつてきて、それつから、家へひっこんだつきり、外へ出ねえんだつて。

そしたら、鬼がいくんちかたつてきて、それで、

「おふくがきたろう、おふくをかえせ、おふくをよこせ」

つて、

三日の日で、それを春と冬の分かれめだから、そこで、節分という名前をつけた。

それで、その節分の日には、おふくろが豆をいっていて、豆をいってるところへ鬼が

「おふくをけえせ」

「なにけえさねえ」

それで

「けえせ」

「けえさねえ」

で、押し問答で、それで、

「けえせ、けえせ」

つうんで、おふくろが、

「けえさねえよ、鬼は外だ、ふくはうちだ、出てげ」

つて、豆をぶつてたんだつて、

それで、鬼は豆をぶつけられたから、ほうほうのてえで山へ逃げ行つた。

その前におふくろが条件をつけた。

「じゃ、それだけ、おふくをつれて行きてえんだら、条件をつけるから、その条件どおりにいつたら、おふくをかえす。」

といつて、いった豆をひとつかみ鬼にやつて、

「この豆を山へもつてつて、土にうめて、いっしょうけんめい雨を降らせて、それで、芽が出たら、ふくをかえすから」

そういう条件をつけて鬼をかえしてやつた。

それで

「ふくはうち、鬼は外だ。でてげ」

つうんで、追いだされて、鬼は山へきて、それで、考えて、どうして

も、あのおふくをとりもどさなければ。だけど、この豆を雨を降らせ  
て、この豆が生えれば、おふくが帰ってくるから、よし、この豆を一  
生懸命はやそう、つうんで、それで三日か四日かして、天にのぼって、  
夕立で雨を降らせた。

それで、おかげさまで、畑の作物は、まんべんなくできて、それで、  
その日がちょうど、二月の三日だったから、それが節分になったんだっ  
て、

畑の作物は、雨が降ったので、よくできて、ムラの人たちは安楽に  
くらせたんだって。

そういうおとぎばなし。(元総社)

山のつくりっこ　むかし、富士山の天狗様と、榛名の天狗様が山の  
つくりっこをした。

あとひとつこあげれば、榛名山の天狗様が勝ったというが、(その  
前に夜が明けて)、富士山の天狗様が勝ったという。

なお、仕事が早くやれる人のことは、天狗様のようだった。

(総社町総社)

ひとつこ山　むかし、榛名の天狗様と富士山の天狗様が、時間を  
きめて、山のつくりっこをした。

天狗様はもっこに土をいれて山をつくっていたが、いまひとつもつて  
あげればよかったのに、時間がきて、ひとつこ分あげられなかった。

いまひとつこ分あげれば、富士山と同じ高さになったって。

それで、榛名富士の下にひとつこ山があるという。(江田)

むかし、榛名山のお天狗様が、沼の土を榛名富士に積んでいた。土  
をもっこに入れて積みあげていた。

ところが、おもくなつたので、最後のひとつこを

「ここにおくべえ」

といっておいたんだって。

それがひとつこ山であるという。(青梨子)

むかし、榛名の天狗様が、榛名の沼を掘って、土をもっこに入れて  
かついでいって山をつくっていた。

ところが、お天狗様は、途中でくたびれてしまつて、もっこに入れ  
た土をおんまけちゃつた。その土の山がひとつこ山。

もうひとつこあげれば、駿河の富士山と同じ高さになったという。

(青梨子)

むかし、榛名のお天狗様が夜中に、一生懸命に富士山(榛名富士)  
をつくっていた。

そしたらニワトリが鳴いたんで(朝になったんで)、山をつくるのを  
やめた。

そのとき、土をひとつこ分、山の上にのせられなかった。それを  
のせれば、駿河の富士山と同じ高さになったという。

山の上にあげないで、残つたのが、ひとつこ山であるという。

(江田)

へまたというあだ名の人　むかし、あるところに、屁をするのが上  
手で、へまたというあだ名の人があった。

なにつけても、屁で返事をするくれえ、屁をするのが上手であつ  
た。

あるとき、殿様があまりにも有名なので、へまたを呼んで、屁をひ  
らせてみることにした。

まず、城の屋根にはしごをかけて、

「はしごをのぼりおりしながら屁をひれ」

といつた。

「ようがんす」

「といって、はしごのそばへ行って、でかい尻を二つした。」

殿様が、

「それはなんだ」

というと、

「これは、はしごの親木です」

という。

その次に、はしごを

「ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶっ、ぶっ…」

しながら頂上までのぼって行った。

「それはなんだ」

と殿様がいった。

「これは、はしごのこです」

といった。

それで、こんどは（おりながら）、ちっちゃい尻を

「ぶ、ぶ、ぶ、ぶ…」

しながらおりてきた。

殿様が

「今ひつた小さい尻はなんだ」

「これは、くさびです。これで、はしごができました」

殿様も、そんなに尻の名人で、はしごまで尻にしちやったんじゃと  
いうので、

「予がためしてみる」

といって、刀をだして

「これを尻でやれ」

といった。

「へえ、承知しました」

「といって、はじめにでかい尻を一つした。」

「それはなんだ」

「刀のさやです」

そのつぎにまたした。

「ぶっ」

と、中くらいの尻をした。

「それはなんだ」

「刀の柄です」

また、ちゅうくくらいの尻をした。

「これは、にぎりです」

その次に、小さいのを二つした。

「それはなんだ」

「刀の目釘です」

それで、刀が大体おわった。

「殿様、これからは中味ですよ」

というと、

「いや、この中味だけは勘弁してくれ」

「って、殿様があやまったって。（元総社）

尻を質草において金を借りた話 青梨子に、屁徳というあだ名の人  
がいた。

おおく尻をひるのでそういわれたのである。

ムラに、松下治太夫という人がいて、このうちは地主で、質屋をし  
ていた。

あるとき、徳さんが困って、地主さんのところへ、かねを借りに行っ  
た。

「旦那、かねがいりようになったけど、貧乏人で、尻を質にいれても

いいかい」

「いいよ、うけるよ」

「それじゃ、これから尻をひるからよく聞いておくれ、

まず、ブブって、両方の柱をつくって、こんどは、横棒を九つひる。

ブブって九つひった。

「さんをぶたなきやなんねえ」

徳さん、十八、屁ひった。

「これではしごができた。」

次に、梅の老木をするからって、ブウブウって高低をつけた。

「これが幹です」

「これが、枝です」

次に

「花を咲かせなければ」

って、無数にやって、

「これで仕上がり」

って。

「これで、二両貸してください」

「屁二つで二両か」

とって、名主さん、徳さんに一両貸してくれた。そして、

「たしかに、質物として尻をうけた」

って。

徳さん、それから一年あまりたつてから名主さんのところへ行つた。

「実は、旦那、二両と利息をつけてお返ししますからとってもらいた

い。ついでには、昨年やった尻の質物を返してもらいたい」

つていった。ところが名主さん、尻の質物を返してくれっていわれて

も、尻がひれねえ。名主さん、困ってしまった。

「尻をあずかつたけど、現物がなくなつてけえせねえ。尻ができねえから、貸したかねは、屁代としてあなたにあげるからって、名主さんにいわれて、徳さん、（かねをそのままもらつて）帰つてきたという。

（青梨子町）

へつぱり 有馬（渋川市）にへつぱりがいた。

はしごつぺをした。

はじめ長い尻をする。それが両側のさお。

そのあと、こ（横木）を短くひる。

さんまでうつていくらか長くなって、

いちばんあとにくさびをうった。（総社町総社）

石芋のこと むかし、あるとき弘法大師がやってきた。そのとき、

おばあさんが芋をあらつていた。

弘法大師が

「この芋をもらつていつて、煮て食べたい」

といつたら、そのおばあさんが、

「この芋は、石芋で食べられない」

といつた。

そしたら、そのうちの芋はみんな石芋になつて、食べられなくなつ

たつて。（江田）

道祖神は兄妹夫婦 むかし、兄と妹がいて、年をとつても嫁、婿が

いなかった。

それであるとき、二人は、両方へわかれて、相手をみつけに行つた。

夜になつて、男と女がでつかわした。

二人は、夫婦になつた。

あさみたら、兄と妹だつた。

道祖神は、兄妹夫婦だという。（青梨子）

道祖神は兄妹だった。

兄さんと妹の兄妹だった。村はずれに小さな家をたつて住んでいた。それで、妹の方は、いい男と一緒にいたい。兄さんの方は、いい女と一緒にいたいというので、世間中たずねても自分のきになった人がいねえつうんで、それで、むかしのことで、道になるようなところがねえつうで、なんでも道にたくさん人が通らなければ、気に入った人も通ってくれねえつう。これは、道を開くんが第一だつうんで、その神様が道を開いた。道の先祖で道祖という。

それで、妹は西、兄さんは東と、自分の相手をさがしに出た。ところがいつくらさがしても見つかることができず、しょうねえうちへ帰るべえつうで、家へ帰ったとき、むこうからいい男がくる。こつちからいい女がくる。ああ、あれにきめたつうんで、寄つてみたら兄妹だった。

それで、うちへもどつてみたら、村はずれで、子供のわるさで家をもされてしまった。

それが正月の十四日だった。

それから（二人は）道を開いて、道の先祖様で道祖という名前をつけて、神様にまつられたつて。

だから、子供が主体で道祖神をやつて、そこへ子供が寄つて、さわりで道祖神を笑つたわけ。

道祖神様は、すさのおのみことだという。兄妹で夫婦になったという。（元総社）

あるところに兄と妹がいて、どっちも相手が見付からず、うちを留守にして、相手を見付けに出かけた。右と左に出かけて、暗いところに出合った。

空屋の中ですごして、翌朝見たら、兄妹だったという。

道祖神は、兄妹夫婦になつてすごしたという。（青梨子）

ネコが十二支に入らない理由 お釈迦様が病気になったとき、天の神様が、天から薬をさずけてくれるというので、薬をおとしたつて、そしたら、それがお寺の木にひつかかつてしまった。とることができないで困つていたら、ネズミが、

「おれが行つてとつてくる」といつて木にのぼつたつて。

そしたら、そばにネコがいて、ネズミをとつて食つてしまった。

それで、お釈迦様は、二月十五日に死んだ。

お釈迦様が、十二支をきめるとき、ネコは入れなかつたと。（元総社）  
ネコとネズミの不仲 むかし、お釈迦様が十二支をきめるとき、その日付を、ネズミがネコに、あしたというのを、わざとあさつてといつた。

ネコはネズミにうそをいわれた。それで、ネコはまたあわなかつた。そのうらみで、ネコとネズミは不仲になつたという。

十二支の順番は、子丑寅の順になつた。

ほんとうは、ウシが一番はじめに行つた。ところが、ネズミがウシのあたまの上のつかつて行つて、むこうへついたとき、ひよこんとおりて、一番先になつた。

それで、子、丑、寅の順になつたのだという。（総社町総社）  
いもばたけ あるところに若夫婦がいた。

うちには家族がたくさんいて、二人だけにかなかなれなかつた。それで、ある日のこと、芋畑へ草むしりに行つていいことをした。それで、嫁さんは、芋畑でなければできないと思ひこんでしまった。それからというもの、嫁さんは、なにかにつけて、

「芋畑へ行ぐべえ、芋畑へ行ぐべえ」  
つていったつて。(元総社)

馬鹿息子 むかし、あるところに馬鹿息子がいた。

嫁さんをもらったけど、おんなしゆげえあがることを知らねえ。やりかた知らねえんで、ほかのもんじゃ教わったつて。(元総社)

馬鹿婿 むかし、あるところに馬鹿婿がいた。

嫁さんをもらつて、夜寝ていても、嫁さんのところへ、婿がはつて来ねえつうんで、嫁御が歌を詠んだ。

その歌は、

岸辺に船がつけども、乗り手なし

そしたら、馬鹿婿が

荒海なれば、乗るに乘られず

そういう歌をけえしたつて。(元総社)

馬鹿婿の話 お客に行つて、あまいだんごを大変おごつつおになつてうんまくつて、うちへ帰つてきて、おつかあにそれをこしらえさせ

て食べべえと思つて、お客に行つた帰りに、忘れないようにと、

「だんご、だんご」といながらきたら、途中に、ぬかるみだがなあつて、

「どっこいしょ」

つてふつとんだつて。

そしたら、だんごを忘れて、うちへきて、

「どっこいしょこしらえろ」

つていった。

それで、おつかあが、

「どっこいしょなつて知らねえ」

つていったら

「なにがなんでもこせえろ」  
つう。

それで、なかなかその話を通じねえもんだから、

「このあま」

つうんで、あたまなぐつたと。

そしたら、おかみさんが、

「おとうさんは、ひとのあたまなぐつて、だんごのようなこぶがでた」  
つていったつて。

そしたら、

「うん、そのだんごだ」

つて、そういったつうはなし。(元総社)

どっこいしょ あるとき、子供に買ひもんをいいつけた。その子は、その名前を忘れないように、道々いいながら行つた。

ところが、途中で川があつて、

「どっこいしょ」

といつてまたいだ。

そしたら、それからは、

「どっこいしょ、どっこいしょ」

になつて、店へ行つて、

「どっこいしょくれ」

といつたつて。(総社町総社)

むかしあるところに、馬鹿婿がいて、ある日、嫁さんのうちへ行つて、だんごをもらつて食べた。

だんごがうまかつたので、(その名前を聞いて、忘れないようにと)

「だんご、だんご」

といいながら帰ってきた。

「そしたら、途中に、堀があったので、」

「どっこいしょ」

ついでついで、その堀をとんだ。

そのあと、こんどは、

「どっこいしょ、どっこいしょ」

といいながら帰ってきた。

うちへ帰ってきて、かみさんは、

「どっこいしょつくつくしてくれ」

といった。

そしたら、嫁さんは、

「そんなもん、わかんねえ」

といった。

婿どんは、すりこぎで嫁さんの頭をなぐった。

そしたら嫁さんが、頭をなげて、

「あれ、だんごのようなこぶがでた」

ついでついで、婿さんが、

「それだ、だんごだ」

ついでついで。 (西箱田)

むかし、あるところに、馬鹿婿がいた。うちのもんに、「酒買って来  
お」ついでいわれた。

それで、婿さんは、忘れないように、「酒だ、酒だ、酒だ、酒だ」  
といいながら買いに出かけた。

ところが、途中に堀っこがあったんで、

「どっこいしょ」

といつてとんだら、どっこいしょになって、

「どっこいしょ、どっこいしょ」

といいながら行つて、店の人に、

「どっこいしょ売ってくれ」

ついでついで

「そんなもんは売ってねえ」

ついでいわれたつて。 (総社町新田)

半殺し むかし、ある宿屋にお客が泊った。

宿の人が、今夜、なににすべえかと相談していた。

「半殺しにすべえか」

といつていた。

それを聞いたお客は、たまげて逃げだしたつて。

半殺しとは、ぼたもちのことである。 (青梨子前原)

手打ち半殺し 旅の人が、ある家に泊った。

そしたら、そのうちの人が、

「手打ちにすべえか、半殺しにすべえか」と相談していた。

それを聞いた旅の人は、たまげて、そのうちから出て行つたつて。

手打ちはうどんのこと、半殺しはぼたもちのこと、うちの人がご馳

走の相談をしていたわけだ。 (総社町新田)

おはぎの話 客がきたとき、「半ごろしがいいですか」「みな殺しがい  
いいですか」と聞いたそうだ。客はみな殺しではないやなので、「半殺し  
がいい」といつたら、それは「おはぎ」のことだった。みな殺しとは

「おもち」のことだ。 (鳥羽)

聞きちがい むかし、旅人が宿屋へ泊った。

そしたら、宿の人が

「今晚、手うちにしましょうか、半殺しにしましょうか」と相談して



いた。それを聞いた旅人は、おっかなくなつて逃げだしたという。

店の人は、ご馳走の相談をしていたわけ、手うちはうどん、半殺しはぼたもちのこと。

旅の人が宿に泊つたら、宿の人が

「半殺しにしようか、皆殺しにしようか」とはなしていた。

それを聞いた旅人は、殺されるんじゃないやなかうかと、宿からこそこそ逃げだしたつて。

半殺しはぼたもち、皆殺しは餅のことである。(総社町総社)

エンガとテンガ エンガを、畑へ持つて行つて仕事して昼食にうちへ帰つてくるときは、畑におきっぱなしにしてもいい。エンガを盗むと、いんがな目にあうといつた。

テンガは、昼食にくるときには、うちへかついでもつてくる。

エンガは、夕方畑からあがつてくるときもつてきた。(総社町総社)

ミヨウガの話 むかし、ある宿屋で、お客にミヨウガを食べさせた。ミヨウガを食べると、物忘れをするといふので、おかねを忘れていくかもしれないといふのでそうしたもの。

ところが、宿の主人のほうに、宿賃をとるのを忘れてしまつたといふ。

子供には、ミヨウガを食べさせるなといつた。馬鹿になるからといふこと。(青梨子前原)

仏様のお怒り むかし、あるうちで、子供がやけどした。仏様がいうには、

「ひとがお客にきても、ろくなものをくれない、なんのもてなしもない、夫婦げんかをして、みちやいられない。

子供をいろいろにふんごんできた」

つて。

仏様が、帰りがけにそうはなしながらいつたつて、仏様同士でそう話していつたつて。

お彼岸でも、お盆でも、仏様のお守りをしていれればいいといつた。

(元総社)

千枚田 一反の田が三十六枚に分かれていた田の、田の草取りをたのまれた人がいた。

「ようがす」

といふので、田圃を教わつて行つた。天氣がいいけど、その人はみの笠を持つて行つた。

大小三十六枚あるとおそわつて、持つて行つたみの笠をおいて田の草を取りはじめた。三十五枚までの田の草を取つたが、あと一枚がない。あと一枚あるはずだが、田圃らしいところはない。

その人がさがしたあげく、みのをとつたら、その下に一枚の田があつたと。(元総社)

大蛇の話 大正のなかごろのはなし、元総社にバンタがいた。

あるとき、心中もんがあつて、その穴掘りをしたあと、道具を洗いに薬師川へおりていつたときのこと。

大蛇が橋になつていつたといふ。

そのへビは、三升樽くらいの大きさであつた。

そのバンタは、大蛇にむかつて、

「見ねえことにするからのまないでくれ」といつたら、大蛇はほつくりをして去つて行つたといふ。

そのあとも同じようなはなしがあつたので、町内中ででて大蛇狩りをしたことがあつた。しのを切つたり、杉を切つたりしたが、へビのあともなかつた。

けふがくしというところのはなしで、大正七年ごろのことである。

(元総社)

ふるいふるかね あるとき、魚屋さんが、

「魚、魚」

と売りあるいていた。

そしたら、そのあとを、ふるいやが、

「ふるい、ふるい」

と売りあるいた。そしたら、魚が売れなかった。

それで、魚屋さんとふるいやさんがけんかになった。

そこへ、ふるかねやがきて、

「ふるかね、ふるかね」

といてあるいて仲裁したって。(元総社)

お天道様とお月様の借金 金貸しが、お天道様とお月様におかねを

貸した。

お天道様に

「おかねを返せ」

といったら、

「日に一両ずつなす」

つていつたつて。

こんどはお月様に、

「おかねを返せ」

といったら。

そしたら、

「月に一回しかけえせねえ」

つていつたつて。(元総社)

月と太陽と夕立の三人旅

あるとき、お月様とお天道様と夕立様の

三人が、旅をして、宿屋へ泊ったつて。

それで、夕立様(雷様)が寝坊して起きなかった。

お月様とお日様は、朝飯を食べると二人で出発した。

そしたら、そのあと夕立様が起きてきて、

「お天道様とお月様はどこへ行つた」つて、宿の人に聞いた。

「とつくに立ちましたよ」

「ああそうかい、ずい分早いね。月日のたつのは早いもんだ。おらあ、

夕立ちにしよう」

つて、夕方たつたつて。(元総社)

運のいい猟師 山の中にキジがいた。

猟師がそのキジをぶつた。キジが谷の上の土手のところにおちた。

猟師は、それをとりに行くのに、土手にかけてあがるべえと思つて、

根っこにつかまった。そしたら、それがウサギの足だった。

その猟師に、キジをとりに行つて、ウサギもとつてきたつて。

(元総社)

才智がなくて死刑になった男の話 むかし、えらい悪いことをして、

つらまって、しばらく、洞窟の中へつれていかれた男がいた。

世話をしてくれる人がいて、その男におむすびを持つてきてくれた。

手をしばらく食べているので、むすびを食べることができないので、む

すびを食べるときだけ、手の縄をといてくれた。体は自由にならなかつ

た。

その役人がいうに、

「おれのいうことをさつて、そのようにすれば逃げられる。」

つて、役人がなぞをかけた。

ところがその男には、その意味がわからない。

「このむすびを手のひらにのせて食べ、このむすびをきれいに食べな

いで、すこし残しておいて、縄にむすびをこすりつけておきなさい。そうすれば、ネズミがきて食いつくから、そういうことはするな」といった。そうすると縄がきれるから、そんなことはするなといって、その裏のことを教えたわけ。

しかし、その罪人の男には、そのなぞがとけなかつた。それで、とうとう逃げることもできずお仕置きになつたつて。

あとで、その役人が、おれのなぞがとけずかわいそうなことをしたとなげいたつて。(元総社)

おばあさんと蚊の会話 となりのうちには、おばあさんと息子がいた。息子の名はぶんやん。

ぶんやんは、わかいときになくなつてしまつた。ある夏のこと、蚊がとんできて、おばあさんの耳もとで、

「ぶん、ぶん」とささやいた。

そしたら、おばあさんが、「ぶんは死んでいねえや」といった。

蚊は、

「ぶん」といつて、とんで行つたつて。(元総社)

蚊のいい分 蚊のいるところは、あつたかいし、物もとれる。仕事もできる。

ところが、蚊がいなくなると、仕事もできなくなるし、物もとれなくなる。

それで、蚊はいなくなるときに、「おれがいねえのちはみろ」

つていつて逃げるといふ。(元総社)

正月の餅 あるところに、大変たまか(まて)の人がいた。そのうちでは、番頭を雇つていた。

主人公は、正月餅を番頭でえに食わせるのに、餅をやいて食わせるわけだが、やくにも、こがさないようにやくのが経済的だといつて、

「餅をこがすようじゃ、ろくな出世はできねえ」といつた。

ところが、番頭が餅をうっかりこがしてしまつた。そしたら、主人公にうんとおつたあれた。

それが、番頭は、仇をとつてくれべえつうで歌をつくつた。正月にめでためでたし、もちこがしんで、あとじゃ、二人がなげきをする。

餅をこがしたことを、「もちこがしんで」ともじつて、めでたいときに、わざと縁起のわるいことをいつたんだと。

これは、ほんとうのはなしである。(元総社)

頓智のはなし 曾呂利新左衛門と一休和尚が問答した。

新左衛門が一休に、

「和尚さん、和尚さん、仏様に花をあげるのに、こつちむきにあげるけど、仏様にあげるもんか、自分で見るもんか」といつて聞いたつて。

そしたら、一休が、言葉をつまらせてもじもじしていつた。

新左衛門は、こりやおれの勝ちだと、鼻高々でいつた。

新左衛門は一休に、

「和尚さん、和尚さん、仏様をおがむのに、なむあみだぶつとおがむのがふうつなのに、それを、なまいだ、なまいだとおがむ人がいる。

なかには、なむあみだぶ、なむあみだぶという人もある。それでも、

仏様の耳に通じるのか」

一休は答えずにもじもじしていた。

新左衛門は、今日の間答はおれの勝ちだと、悠々と帰ろうとした。

そしたら、一休和尚が、

「こらまで、曾呂利新左衛門殿」  
と呼んだ。

新左衛門は、

「なにかご用ですか」

とどつてきた。

「いや、べつに用はない。よんでみただけだ」

新左衛門は、また行こうとした。

そしたら、一休和尚が、

「こらまで、曾呂利氏」

と呼んだ。

「はあ、なにかご用ですか」

といつてもどつてきた。

「いやべつに用はない、呼んだだけだ」

新左衛門にまた行こうとした。

すると、一休和尚が、

「こらまで、曾呂新」

とよんだ。

「はあ、なにかご用ですか」

「用があるからよんだのだ」

「用というのは」

「あなたは、仏をおがむのに、

なむあみだぶつ

なむあみだぶ

なんまいだ

というのがどうかとたずねた。三つとも、

あなたのことを、

曾呂利新左衛門

曾呂利氏

曾呂新

というのが同じだ。

みんな、あなたの耳に通じているのだ。あんたも、三回とも耳に通じたからどつてきたであらうに」

それで、新左衛門が、こりやまいつたと帰ろうとした。

そしたら、一休和尚が、

「ちよつとまちなさい、もう一つある。あんたは、仏様にあげる花が、仏にあげるのか、自分が見るためかといわれた。曾呂利氏むこうへむきなさい。羽織の紋所は、背中にあるが、自分で見るんか、人に見せるもんか、それと同じ意味だ」

と、花のあげ方も、仏のおがみ方も、みんな答えをだしたつて。

新左衛門は、これは完全におれの負けだと思つて、

「どうか和尚さん、お弟子にしてください」  
といつたら、

「弟子にしてもよいが、人を捨ててこい」  
つていつたつて。

曾呂利新左衛門も、さすがに学者だけあつて、自分はさむらいだ、さむらいが坊主になるには、人偏に寺という字(侍)から、人偏をと

れば寺に入れると。

それで、新左衛門と一休の回答は、一休の勝ちだった。(元総社)

一休和尚の頓智 一休和尚が頓智もきくし、頭もいいので、殿様が一休をためそうと思ひ、ある日のこと、一休を殿様のところへ呼んだ。そのとき出たご馳走が、全部なまぐさだった。

一休は、そのご馳走をかたつぱしからみんなたいらげたつて。

殿様がそれをみて、

「おまえは、僧侶の身でありながら、なまぐさを食うとはどういうわけだ」つていうたら、

「いや、和尚だからなまぐさを食べるんだ。ほかのもんには食べらんねて、なぜつていうと、お経の文句に、引導をわたして、食べている。おまえは元来枯木のごとし。」

ふたたび水にいつて泳ぐあたわず、むしろ愚僧のはらに入つてうんとなれ、

そういう引導をわたして食べるから、僧侶がなまぐさ食つても不思議でない」

つて、

それで、殿様が、

「それじゃ、これが食えるか」

つて。なにかまた和尚が食べちゃわりいものを食べさせたつて。

そしたら、

「これはどういう引導をわたして食べた」

つて、殿様がきいたら、

「いや、人間ののどは関所のごとし、町人も通れば、武士も通る。馬も通れば牛も通る。だから、愚僧ののども、関所と同じように、なんでも通るんだ。」そうしたら殿様が、

「うん、左様か、なんでも通るか、それじゃ、これを通してみろ」つて刀ひっこぬいて、和尚の前かたへこう刀をむけた。

そしたら、和尚はその刀にかじりついたつて。

そしたら、殿様が、

「和尚なにをする」

つていつたら、

「いや、口は元来関所のごとし、武士も通れば町人も通る。ただし、危険とみなすものは通すことあいならん」

つて、刀のかんだのはきだしたつて。

それで殿様はまいったつて。(元総社)

機織りの名人 これは、足利の機屋に聞いた話。

あるうちで、わかいしゆに嫁をもらつたんだつて。

その嫁が何が一番達者だといつたら、機織りが一番達者なんだつて。それでそのわかいしゆが夜遊びに行つちゃ、その娘が機を織つてるのを見ていて、機織りが達者だもんだから、是非嫁にもらいてえつうんで、その人にほれこんじゃつて、嫁にもらつたんだつて。

それで機織りが達者だつうんで、もらつた先でやつぱり機を織らしたわけだ。

そうしたら、一反の反物を一週間かかつても織りきれねえだつて、それで姑様があきれて、

「うちの嫁は機織りが達者だなんつうけど、一反の反物を一週間かかつてもまだ織りあがらねえつう。どういふわけだんべ」

つて、仲人に聞いたんだつて。

そしたら、仲人が、

「まあ、まつてない。今にたまげるようなことができるから」

つうんで、それで、そうに仲人にいわれたから、いつたまげるようになるかと思つて、見ていたんだつて。そしたら、十日目に、機を織らせるもとから人がきて、

「もう仕上がりしましたか」

「うう、はい」

「ええ、ほちほち仕上がりです」

「今日で十日目だいね」

「そうだいね」

「うう」

「ああ、割合早かった。あんたの反物はいい反物だからねえ、まあ今日はこれだけあげましょう」

「うう、なんでも男の人が、一カ月働いたより余計かねもらったって。十日間の機織りで。」

「なぜつうと、まあ、今でいえば、うき織りつうんか、ただふつうの機じゃねえんだと。」

「やたらの人には織れねえような機なんだと。」

「それをその娘（嫁）は技術があつてその織を織ってるんで、まだ、十日で仕上がったのは早いほうだつて。」

「それで、それつからこんどは、姑が、はじめのうちは、一反の反物が十日もその余もかかるんで、あきれけえつていたところが、こんだ、機屋から勘定もらうときには、一カ月の男の給料より余計もらうようになつたんで、こんだは、なんたら嫁だかしんねえだつて。」

「姉御様さだつて。」

「そういう話を聞いた。（元総社）」

## 二、伝 説

王渡のこと むかし、王様が都からここへやつてきて利根川を渡るために橋をつくつた。

それが大渡橋である。

その近くに神社をたてた。それを王森様という。

利根川をはさんで西東に大渡という地名のところがある。

大渡はむかしの戦場であるという。

そこには堀が七つあつたという、今は一つのこつているだけ。

大渡の南には王山があり、むかしそこから宝がでたという。（大渡）

大渡の由来 王（トヨキノイリヒコ）が巡視に行つたおり、利根

川を舟で渡り、その渡し場があつたので、『王の渡し』が大渡になつた

のである。（大友）

王守神社 王さまの一行が、ここを通りかかった所産気づいたので、

仮の建物を作つてお産をした。無事に生まれたので、お宮にし、お産

の神様になつた。

池の水はわき水で、この水で湯あみをさせた。

手洗石の水で目を洗うと、目の病気がなおるといつた。（元総社大渡）

榛名の名の由来 むかし、ある人が、榛名の山へのぼりながら、

「ああ、さみい、さみい」

といいながら、のぼつて行つた。

山へ着いたらなたねの花が咲いていたつて。

「ああ、さみい、さみいといつても、やつぱり、はるやなあ」

といつた。

それで、山の名がはるやになつた。（元総社）

赤城の地名の由来 むかし、ある夫婦もんが、山の麓に世帯をもつ

ていた。

毎日夫婦して、山仕事に出かけたつて。

山仕事に出かけるんに、その日にかぎつて、かぎをしめるのを忘れ

ちやつたつて。

それで途中まで行つて

「おつかあ、あ、かぎ忘れた」

というので、自分たちの通う山の名が、あかぎという名になったんだつて。(元総社)

箱田 木曾義仲の家来が、戦いに負けて逃げる時に、ここに来て休んだ。これは何だと聞かれたら箱だ、箱だと言ったので、箱田という名になったという。

家来は木曾義仲の骨を箱に入れて持ってきたという。

北橋の木曾神社に納めたという。(西箱田)

昔は東箱田・西箱田・中箱田・前箱田・後家箱田の五つの部落だった。したがって、五箱田、五京目、七大類、八新保と呼ばれた。(後家)

おれんが岩 勝山城の殿様がおれんを自分のいうままにしようとしたが、おれんをきかなかつた。

それで、おれんを棺箱に入れてそれに蛇をつめて、勝山城の下の利根川に沈めた。そして、そのあと、おれんが、「おれの妄念で城をとりこわしてやる」といった。

それから、毎年利根川が大水になつて利根西がだんだんかけて、勝山城が流されてしまった。

勝山城は、おれんの妄念で流されてしまったという。

なお、おれんが利根川に沈められたところに大きな岩がある。それを、おれんが岩といっている。(元総社阿弥陀寺)

おえんが岩のはなし むかし、勝山城の殿様が、腰元を寵愛すべえと思つた。

その腰元は、大坂城が落城したときおちのびてきた者だった。

殿様は、その女性を淀君だと思つたが、それはそうではなくて、おえんという女性だった。

ところがおえんは、一万石の殿様だったのでいうことをきかなかつた。

それで、殿様はおこつて、

「こんな女は打ち首にしてしまえ」と命じた。

それで、今の大渡の教習所の東(利根川のほとり)のおえんが岩のところまで打ち首にして、川へほうりこんだ。

ところが、そのあとたたる。

そこで殿様は元景寺の和尚さんに相談した。

そして、和尚さんが、

「あんたも罪をつくつたんだから、一生命とられるぞ、それをのがれるには奥さんと同じ院殿大師の戒名をくれるから供養してやれ」といったので、殿様は和尚さんのいうとおりにして、おえんの石塔を、

奥さんの石塔より一段下にたててやったという。(元総社)

おえんどん石 敷島公園のところに、おえんどん石というのがある。

むかし、淀君が、おちぶれて、秋元侯の妾になつてきた。

あとで、利根川のむこう(東岸)に生き埋めにされたという。

(総社町新田)

坂東太郎岩 二十八年にはこちら側で渡れ、つりができた。しばらくどこかに行つたという話がある。(小相木)

天狗岩用水のはなし むかし、この辺の人は水不足で困つていた。

総社の城主秋元様が、天狗岩をきりひらいて水をひこうと考えた。

それで住民をオテンマで動員して、堀を掘ろうとした。そして、土地の測量をした。

その測量は夜した。

長い竹竿の上に提灯をつけて、今の丁間稲荷のところが高い丘に

なっているのです、そこへ提灯をたてた。それを目あてにして測量した。こうして用水が完成した。

完成の祝いに、丘の上に稲荷様をまつた。それで、その稲荷様に、どういふ名前をつけたらいいか、提灯をつけて測量した。むかしは長さの基準を、一丁、一間というのをういた。それで、丁間稲荷という名前がついたという。

ところで、堀を掘っているとき、大きな石にぶつかつた。みんな困っていた。

困つた、困つたといつていた。

そして、つぐ朝そこへ行つてみたら、その大きな石がなくなつていた。みんなたまげた。

これは、たしかに、天狗様のしわざだということになつた。

天狗様のおかげで用水は完成した。

それで、秋元侯が田を植えさせた。

天狗様は、急に田が青くなつたのでたまげたというはなしがある。

(元総社)

天狗岩用水を掘つていたときのこと、一本木稲荷様のところ(桜が丘団地)まで掘ってきたら、大きな石につかかつてしまった。秋元様も困つてしまつたが帰るわけにはいかなかつた。

すると、いづこともなく、白髪の老人がでてきて、こういうふうになせと教えてくれた。

「あなたはどなたですか」

と聞くと、まもなくどこかへ行つてしまった。

ムラの人たちは、あれは天狗様のしわざだといつたという。(青梨子)

総社の秋元侯が、用水工事をさせていたとき、でっかい石がでた。

その石がどうにもならず、困つていた。

そしたらそこへ、ほっこかぶりをしたおじいさんがでてきて、

「この石は、やたらなことでは動かせない。これには方法がある。石の片方に、大きい穴をあける、石が動きはじめたとき、一人の者がさしずしろ」

といつて教えた。

「おじいさんのいうとおりにして、石を動かすことができ、工事を進めることができた。

ところが、そのあと、そのおじいさんの姿を見たものは誰もいなかった。

それで、これは、天狗様の仕業だということになつた。

その用水のことを、天狗岩用水とよぶ。(青梨子前原)

岩をどかしたという天狗は、実は幕府の隠密で、山伏の姿をして、元景寺にやつてきていた。技術者であつたので、岩を動かしてそのまま姿を消したという。



羽階権現 (総社 元景寺)

南光坊天海の一行であつたという。

(総社新田)

水が通るようになって、どんな作物をとつても、三倍の増収になつた。それまでは、雑草の方が力がつよいくらいだつた。

(総社新田)



天狗岩開削の苦勞 夫が出られなくなると妻が出る。肩にあてるき  
れがなくなら、粟やひえ畑が草になった。

日がしずんでからのぼるまでが、自分たちの手間だったので、ろう  
そくや月あかりで草むしりをした。

収入も半減になってしまった。

子供の着物のすそを切つて、つぎあてにしたほどだった。(山王の都  
丸高親家の言い伝え)(総社新田)

越中ふんどのしの由来 天狗岩用水の工事をしているとき、秋元様が、  
工事の視察にきた。

ところが、人夫は、まっぱだかで工事をしていた。

それを見た秋元様は、みっともないというので、きれを買つて、ふ  
んどしをつくつて、人夫の人たちにしめさせた。

秋元様は、越中守といわれたので、そのふんどのしのことを、越中ふ  
んどしとよぶようになったという。(青梨子前原)

天狗岩用水を掘っているとき、人夫がまっぱだかで仕事をしていた  
ので、越中守様が、みっともないといつて、ふんどしをかけさせたの  
が越中ふんどのしのはじまりだという。(総社町総社)

虎が測のはなし むかし、前橋城の殿様がお虎という腰元を大愛寵愛  
されていた。

毎日、お虎のさしだすご飯でないと食べないというくらいであった。  
あるときそれをねたんだ腰元たちが、殿様のお腕の中に針を入れた。

それを

「お虎さんが入れた」

といつた。

お虎が

「わたしじゃない」

といつても、他の腰元が皆、おとらがやったことだといいたてた。

それで、お虎は利根川の測へほうりこまれた。

その後、お虎が

「くやしい、くやしい」

で、利根川の崖がかけたという。(元総社)

豊臣秀吉が人の妻を横恋慕した。その女の人はそこにはいられない  
ので、上州の勝山城へかくまわれていた。

そしたら、勝山城の殿様も、その女がおおくい女なんで、好きに  
なつてしまった。それで、殿様がその女にいうことを聞けといつた。

女はことわつた。それで争いになつて、一国の殿様がはじをかかされ  
たというので、かわいさあまつてにくさますで、その女は、棺桶に、

へび、ムカデと一緒にめられて、利根川へしずみにかけられた。

そのときに、その女は、

「おれの妄念で、この城は流してくれる」

といつた。

女は利根川にしずみにかけられて死んだ。

勝山城は、女の妄念で、利根川の流れがかわつて、流されてしまつ  
たという。

女の名はお虎といつた。

今、敷島公園の西のあたりの利根川の測のことを、お虎が測とよん  
でいる。(元総社)

マミサン河原 間見さん河原といい、マミ大明神がまつつてあつた。  
最近のものである。一本杉があり、ここでだまされた人がある。

(元総社大渡)

オマミさん河原 オマミさんはムジナのこと、たぬきと同じであ

る。

製糸に行っていた女衆がばかされて、おみやげをとられた。河原ま  
で案内された。

ないはずのちようちんがついているようにみえ、みやげをわたした  
ら、気がついた。

そのあとムジナツキになり、はうまねや俳優のまねをしたりした。  
油あげ、イワシをごちそうして、ようやく追い出した。

だまされそうな時は、タバコをすうといい。(総社大渡)

**榛名湖の主** むかし、あるムラの庄屋の娘が、女中さんと一緒に榛  
名へきて、湖のところで水が飲みたいといって、沼のそばまで行って、  
水を飲もうとして、するするっと湖の中へ入って、沼の主になったと  
いう。

榛名湖の主は、鯉だという。(江田町)

**木部姫の榛名湖入水** 木部の娘が、榛名湖へ行きたくって、行って、  
湖水の中へ入って、竜になって沈んでしまった。

娘のおそばに行っていた腰元たちも湖水に沈んでカニとなって、  
落ち葉などが落ちると、湖水の中を掃除しているので、榛名湖はきれ  
いだといった。(江田)

**木部一族榛名湖入水伝説** 元総社に木部姓のうちの、五、六軒ある。  
むかし、木部の先祖様が戦に負けて榛名へ逃げたんだって。

そこで、もうこれで一族は全滅だということで、殿様が榛名湖へ身を  
投げて死んでしまった。そしたら、ヒゴイになって湖に浮いてきたっ  
て。

家来がそれを見て、殿様が自害したんじゃ、もう生きていられねえ  
と、湖にとびこんだ。そしたら、カニになつてはいだした。

だから、木部の人は、カニが食えない。

さて、木部の一族の人は、五月の節供の日(榛名の山開きの日)に  
は、ご馳走をつくって、お膳にのせて、湖にはなす。そうすると、見  
るまに波にのまれて沈んで行く。

そのご馳走をヒゴイが食べるんだんべ。

お膳は沼に沈んで、それが長年寺の井戸へうきあがるんだって。

五月の山開きの日、木部の人たちがご馳走を榛名湖に投じるのは  
毎年のこと。

長年寺の井戸と榛名湖の水底は平らであるうといっている。

井戸にお膳が浮いてくることは、今はない。(元総社)

**榛名湖入水の話** むかし、木部の大尽の娘が、

「榛名へ行ってえ、榛名へ行ってえ」というので娘をお駕籠に乗せて、  
番頭さんが一緒に行った。

そして、沼のところへ行ったら、すうっと、沼へ入って、しばらく  
たつて、沼の蛇になって、姿を見せた。

番頭さんは、お嬢さんがこういう姿になったのでは、うちへは帰れ  
ないといって、自分たちも沼へ入ってカニになって沼の掃除をすべえ  
といって、沼に入ってカニになったって。

だから、カニを食べると、榛名へのほれないという。(前箱田)

**千葉常政の娘榛名入水** 千葉常政が、娘を(山子田の)柳沢寺へ、  
丈夫になるようにとたのんでおいた。

十五歳のとき、娘は、榛名神社のおまいりしたいといいだした。

榛名湖のところへいくと、「水が飲んでえ」という。沼のところへ行っ  
て飲んでいるうちに、どんどん深みに入って、沼の中ほど姿をみせ  
た。

下半身は人魚の姿だった。

常政は、そのはなしを聞いて、非常におこった。

そして、船尾山の一山をやきはらったという。

それから、十五歳の娘は榛名まいりをするなといってゐる。(青梨子)  
榛名湖水伝説　むかし、木部のお姫様が、榛名まいりにおともをつれて行ったつて。

そうしたところが、沼のところまで来たら、お姫様は「休ませてくれ」

といって、お駕籠からおりて、水飲みに行った。すぐに帰ってくると思つたら、来ない。

駕籠かつぎがたまげていた。

そのうちに、沼の真中で、蛇じやになつて首をだして、

「おれは、この主ぬしになつたから、みんなうちへ帰つてくれ」といつたつて。

それで、駕籠かつぎは、うちへ帰れないで、かになつたつて。

娘は、榛名へ行かないほうがいいといわれた。(青梨子前原)

むかし、船尾には高野山の別院があつた。千葉常政がそこへ体が弱いので自分の娘をあずけておいた。

その娘が十六歳になつたとき、榛名山へ行きたいといつた。そして榛名湖へ行つて、沼へそのまま入つてしまつた。

そしたら、常政は、

「おれの娘が殺された」

といつて、船尾の寺をやきはらつてしまつた。

そのとき、九十九谷がやけたという。

寺の坊さんは、一寸八分の観音様を燃すのがつらいので、観音様を弓の矢に結んで射たら、それが漆原までとんだ。それが漆原の天落観音である。俗にざる観音といわれている。

さて、十六の娘が榛名湖へ沈んだので、十六の娘は、榛名まいりをするなといつてゐる。(青梨子町)

高崎方面で、立派なうちの娘が、あるとき、榛名の湖へ行きたい、行きたいといつたので、お伴をつけて連れて行つたつて。

湖のところへ行つたところ、みんなのすきをねらつて沼へ入つた。おともの人たちは、さてさて困つていたら、沼の真中から蛇になつて出てきて、

「わたしは、こういう姿になつたから、あきらめてうちへ帰つてくれ」といつたつて。

そのうちでは、それからは、毎年娘が湖に沈んだ日になると、赤飯をおはちに入れて榛名の湖に持つて行つて供える。そうすると、おはちは一度沈むが、しばらくすると、からになつて、おはちだけがあがつてくるという。

むかしは、十六歳の娘は、榛名の湖のところへ行くな、ひきこまれといつた。(総社町新田)

赤堀道元の娘赤城小沼入水のこと　むかし、佐波郡(赤堀村)の十七歳になる娘が、(赤城の)小沼へお駕籠で行つたんだつて。

そして、水が飲んでえといつたので、小沼の土手へおりて、水を飲みに行つた。

そしたら、小沼の中へすべりこんで出てこない。

そのうちに、沼の真中あたりに、ポカンと浮かびあがつて蛇の姿であつた。

そして、すうつと(沼の中へ)沈んだぎり姿を見せなかつた。

それでおともの者は、からの駕籠でうちへもどつたつて。

それから、五月五日になると(赤堀の家では)、赤飯をふかして娘の

ところへ納めにくるんだって。

(重箱に赤飯を入れて持ってきて)沼へ重箱を投げ入れてやると、重箱にいったんは沈んで、空になって浮かんでくるといふ。(前箱田)

九十九谷伝説(その一) むかし、お天狗様(弘法大師)が、高野山を榛名山に築こうつうんで、もっこをかっいで、土方をはじめた。

夜があけねえうちに、人間にめつからねえうちに百谷にすれば高野山になれるというのであった。

ところが、九十九谷まで山をこしらえたら、夜があけたんで、ひともっこおいて逃げたって、

お天狗様は、夜があけたんで、榛名富士の下へひともっこ土をうんまけてすつとんだ。

そのとき、片足ついたので、半田(渋川市)の早尾様の境内にある石。お天狗様はその石に片足ついて、どつかへふつとんだって。

早尾様には、今でも、お天狗様の足跡のある足があるって。

九十九谷伝説(その二) 榛名山に、紀州の高野山のはじめての末寺(新宅)ができるわけだった。

そして、昌楽寺と桃井の柳沢寺ができた。

そうして、お天狗様が、どうしてもこの山には、千谷ない、九百九十九谷しかない。どうも、この山は高野山には敷地が不相当だと、弘法大師は、自分の生まれた紀州へ(高野山を)もって行ったって。

このことは、昌楽寺の檀家の人は知っている。

だから、昌楽寺と柳沢寺は、高野山よりちよつと古いのだという。

(元総社)  
むかし、弘法大師がこちらへやってきて、寺をつくろうと場所をさがしていた。

百谷あれば、そこへ寺をつくろうと考えていた。榛名山の中の相馬

山のところで谷を勘定したら、百谷に一谷たりなかった。それで、ここに寺をつくるのをよしたという。(江田)

弘法大師が船尾滝のところに、別院をつくろうとしたが、谷が百谷に一つたりない九十九谷しかなかったので、工事を中止したという。

(青梨子)  
むかし、弘法大師が榛名山へきて、高野山をつくろうとした。

百谷あれば高野山がつくれたのを、一谷足りなかったので、高野山ができなかった。高野山がくるわけが来なくなつたって。(江田)

猿谷橋 天狗岩用水に橋がなかつたので、猿谷ロクザエモンが橋をかけたので、この名がついた。

ロクザエモンは元は中島という姓で、秋元侯が甲州谷村へ行く途中、休んでいた所、近づいてきた猿を追いはらつたことから、猿谷の名をもらつた。

この橋は縁切り橋といい、お祝い事の時は通らなかつた。イチゲンも通り道として使わなかつた。(総社町栗島)

和尚塚 二十mか三十mくらいの山があつて、木がはえていた。オシウツカバアサンがいるといつてこわがつていた。

新前橋駅を作る時に、土をトロッコではこんだので、今は平らになり、田になつてしまつた。

今は古市分で、江田の人が住んでいる。(西箱田)

江田(古市)に、和尚塚があつた。こんもりした山になつており、和尚塚はばあさんが生きたまま埋められ、カネを叩いてならなくなつたら死ぬといわれていた。(東箱田)

井戸八幡の水 青梨子の八幡様には井戸がある。それで、井戸八幡とよんでいる。

井戸は、直径一メートルくらい、深さは二十尺くらい。

井戸八幡の水は、目につけると眼病が治るといった。

よそからおまいりにくる人があるので、一夜宿を近所の農家でやっ  
たという。

前は、井戸のところへ自由に出入りができた、明治のはじめのころ  
にくらぶぐりにして、出入りができなくなった。

八幡様は、むかしは青梨子中でまつた。春まつりは三月二十五日  
(ほんとうは三月十五日)。

今は、小字の八幡というところの人たちだけでまつている。もと  
は十五軒、今は二十一、二軒。(青梨子)

漆原のざる観音 むかし、弓の名人がいて、戦さに負けて、榛名へ  
逃げて、水沢の山から、自分の守り本尊である観音様を、矢しりに結  
びつけて射た。

そしたら、漆原の田圃へその矢がおちた。

それを、子供がざるをもつてつみ草に行つてその矢を拾つてきた。

みると矢じりに観音様がゆわいつけてあるので、その観音様をムラ  
の人がまつた。

子供がざるに入れてもつてきた観音様であるのでざる観音とよん  
だ。

そして、その観音様をみつけたのが一月十四日なので、この日を縁  
日としている。また、漆原では、一月十四日をムラの年始日にしてい  
る。(元総社)

後家の八兵衛 大工で、親子で八兵衛といい、親は右京大夫といっ  
た。京へ行き紫宸殿を作りに行つて、帰つてこなかった。清水寺の六  
角堂を作つたという。(東箱田後家)

後家の(田村) 八兵衛という大工の名人がいて、水沢の清水の回り  
舞台、伏見稲荷、前箱田の稲荷、大徳寺山門、水沢の六角堂等を作つ

たという。京都の紫宸殿を作りに行つて、帰つて来なかったといわれ  
る。正徳から享保の頃に活躍した人で、後家のかつぎ地蔵も八兵衛の  
作と伝えられている。八兵衛父子の墓はあるが、八兵衛の位牌だけ無  
い。(後家)

一光斎輝艶 明治の絵かきで、松浦の姓だが、元は高野といった。松  
浦へ養子に入った。

掛け軸 一幅の絵の書き賃が、五円した。頼んでおくと、気分のいい  
時に書いてくれた。

公民館に行列をえがいた絵がかけてある。(鳥羽西部)

富沢作衛門 最後の名主で、五万石騒動にかかわつた。肝煎名主を  
しており、村から「ニゲツサリ」になり、手入れがあるという話で、  
沼田へ逃げて、帰れなかつたという。

七ノ八町の田畑を持ち、大きい屋敷である。(江田)

オニ ミヨウザエモン 天明の銘の二ツ割りの石がある。この石は  
榛名よりかついで来た石で、休んだところで縁側においたら縁側が抜  
けてしまつた。

その石を二つに割つて自分と妻の石にした。

三国街道を通つていた時に馬にのつた武士が来たので通れず、馬の  
下に入つて、そのまま馬ごと掘をまたいだ。

娘がいれば嫁にほしいと言われた。嫁に行つた娘は夕立の時にしゅ  
うとの入つている風呂おけを入つたまま家に持ちこんだ。(総社町上石  
倉)

八幡太郎義家 八幡太郎義家が、東方征伐に行く時に箱田を通つた。  
車道か、東北へ行く街道だったので、ここを通つた。

足利で、軍備を整えるため、何か月か休んだ時、生ませたのが、足  
利氏のはじまりだという。

この八幡太郎をまつたのが、公民館前の八幡様である。

この前の一角を御新造口という。

御新造は、新宅に出た家がいい、こういう人たちで守っている所の意味である。

この人たちだけでまつており、天神さまと同じ日におまつりしている。(西箱田)

落人 落人が三人来て、薬師を作ったという。武田信玄の家来という。

右馬丈、内蔵丈、ジブスケの三人の名が伝わっている。(江田)

先祖 富沢と小野里の先祖は、武田信玄に味方して、長篠の合戦で負けて逃げてきたものという。(江田)

行人塚 池端に行人塚あり。

角田という家の主人が、生きたまま穴の中に入って竹の節を抜いて、穴にさしこんでおいた。穴の中の首がしなくなったら死んだと思えていて、穴の中に入ったって。(青梨子前原)

あがたの箱のはなし むかしは、六部がきたり、ごぜがきたり、うらない師がきたりした。

あるうちに、あがたがきて泊った。  
うらないをみて、よくあたたった。

あがたは箱をもっていて、箱をおがんで、おじいさん、おばあさんがどうだったとあてた。

そこんちの大将は、それを不思議に思つて、その箱のふたをあけてみた。

そしたら箱の中に人形が入っていたという。(元総社)

上新田の由来 上新田の前身であったスエカゼ村(末風)があり、その村の人々の姓は「斉藤」「萩原」「藤倉」「佐藤」の四姓があり、二

〇〇三〇軒の小さな村であった。ところが、元文年間に利根川が大洪水をおこし、流れが変わつてしまい、スエカゼ村の人々がいなくなつてしまった。その後、埼玉の八幡というところから、鋳物師が移り住んだ。(上新田)

開村の話 利根川がまだ笹川とよばれていた小さな川であったころ、その川のほとりに「藤倉」「佐藤」家が家をはじめてかまえた。

(上新田)

お墓町 「お墓町」とよばれる家があり、その家に行く道がお墓ばかりだったので、そうよばれていた。(鳥羽)

大屋敷の由来 王(トヨキノイリヒコノミコト)が住んでいた屋敷があつたので、「王屋敷」とよばれこれが「大屋敷」になつた。(大友)

大友町の由来 昔、トヨキノミコトが京から関東の総督として赴任してきた。そのおり、トヨキノミコトの供に大伴のながしがやつてきた。そして、王の南に一族が屋敷をもつた。そのため「大伴」とよばれ、「大友」になつた。(大友)

箱田の由来 昔、義経があづま道を通つて奥州へ行くとき、持っていたものを聞かれ、「これは箱だ」といったので、この地が箱田という地名になつたという。(東箱田)

後家の由来 昔は五軒しか家がなかつたので、「五家」といつていたが、それが「後家」に変化したという。(東箱田後家町)

ミロク山 ミロク山というところに碑や薬師様があつた。その山に「キンムシ」(小さな虫)や「カックイ」(しゃくとり虫)をとりに行つた。虫を竹の筒に入れた。また、若い者が休みにそこに行き、みんなでさわいだ。(鳥羽)

馬頭観世音の由来 明治中頃に馬頭の碑をたてた。その由来は、石倉の林倉寺から元総社の昌楽寺に一直線に通じる道があり、競馬が行

われていた。田植の後に競馬が行われていたが、馬頭観世音のたつて  
いるところで、馬がたおれて死んでしまった。かわいそうなのでこの  
供養塔をたてたのである。この馬頭観世音は区画整理後に大友神社へ  
移された。(大友)

寺の伝承 弥勒寺(ミロク寺、ヤキン寺)は現在の日鉄の東工場の  
北側にあったという。(鳥羽)

ホウシヨウ院という寺が、今のホウシヨウイン畑のところにあった  
という。そこに、石の井戸があったという。鳥羽一四番地である。

道場寺の伝承 大友の西北に「道場」という地名がある。そこには  
「道場寺」があったらしい。その場所を掘ると古い石塔がでてきた。

だから道場という。(大友)

王山古墳の由来 総社小学校付近一帯に古墳があった。その中に「王  
塚」とよばれる塚があった。それは王が埋葬されたのでそうよばれて  
いる。(大友)

郷倉 大友の年貢を入れておく倉があった。大友の人はその倉をに  
くらしくみていた。昔から「大友に嫁に行くか、はだらでバラをしよ  
うか」というくらい、年貢が高く、嫁がおおごとした。(大友)

郷倉の名 ゴルフ場の駐車場のところを「ゴグラ」(郷倉)とよんで  
いた。昔、殿様が飢饉のために米などを貯蔵していた倉があったとい  
われていたから。(上新田)

お花ヶ池の由来 新田小学校の東に「お花ヶ池」があった。その名  
の由来は、ある上新田の家で御祝儀があった。そのとき、お花という  
女中がいて、客のご馳走をつくっていた。大切なお客なので、猫あし  
おぜんに盛り運んだところ、何かにつまづいて、それをこわしてしまっ  
た。お花はとても怒られると思い、利根川の淵で考えたあげく、かん

ざしで土を掘りはじめ、それが池となった。(上新田)

池の伝承 ベンゼ池という池が福島文蔵さん宅の近くに区画整理前  
(昭和二七、八年頃)まであった。(鳥羽)

雷電神社の由来 上新田の福德寺の開祖、覚伝という和尚が、雷を  
こわがっていた。それを観音様を知り、「雷がおそろしいのなら白馬に  
またがった風神雷神をお祭りしなさい」といったという。これが雷電  
神社の由来である。(上新田)

お検見台の話 村の東南、大田地区にお検見台とよばれる二坪ほど  
の場所があった。高崎藩から待がきて、「今年は豊作だ」といった。そ  
のため、大友の年貢は高かった。(大友)

馬捨て場 死馬の処理場で、染谷川の川敷に捨てる場所があった。  
(鳥羽)

しよう塚 塚におばあさんが生きながら入り、鐘を鳴らしていたが、  
二一日後に鐘の音が聞こえなくなったという。(大友)

カネ塚 小林市治氏宅はもと「カネ塚」といつていた。もと石坂氏  
宅の田んぼなりに庚申塚があった。(東箱田)

雲雀街道 雲雀街道とよばれる道があった。なぜかはよくわからな  
いが、田が多かったので雲雀が多くいたからだろうか。(大友)

二本杉の話 雲雀街道の南の村山地区に二本杉があった。昔は榛名  
からでもこの二本杉がみえた。それだけ大きかった。最近まで、その  
切り株があった。(大友)

あづま道 あづま道は村の中を通っていた。公民館の前の道である。  
(東箱田後家)

刎渡橋 昔、橋がなかったので、はねて渡ったから「はねつ」と  
いう。(大友)

天神橋の名 天神橋とよばれる橋があった。その名の由来は、橋の

南に天神様があり、その名をとっている。今は滝川橋になっている。

(大友)

**染谷橋の由来** 染谷橋は石橋で徳川末期につくられたという。今は現存しないが、小野里さんの先祖が寄附してつくったという。地域で一番古い石橋であった。(鳥羽)

**五千石堰の由来** 五千石堰の名は、その周辺の田で五千石の米がとれたというのでついたそうだ。(鳥羽)

**不浄石の由来** 倉林(本家)はいぜん名主をしていた。当時、三〇センチ程の「不浄石」とよばれる石があった。悪人はその上でとり調べをうけた。今でもその「不浄石」があつて、名主の名残りをとどめている。(上新田)

**鬼岩** 利根川に鬼岩という岩がある。この岩は川を除々にのぼり、五〇年に百メートル川上にのぼるといふ。(上新田)

**利根川** 利根川は、笹川とよばれていた小川でいどの川だった。

(上新田)

**染谷川の由来** 昔、戦争があつたとき、激しい争いになり血がさうとう流れたそうだ。川の淵で切り合いをしたため、川が血で染つたさうだ。だから染谷川といつたそうだ。(鳥羽)

**お花地蔵の由来** 今からおよそ二百二、三〇年前の頃、上新田村の庄屋の家に年の頃、一七、八歳の美しい女中が奉公しておりました。名前をお花といい、気立てが優しく、毎日よく働いたので、庄病やその家族の者から、お花お花と大そうかわいがられておりました。

ある日のこと、お花は何時ものように腕によりをかけてご馳走をつくり、庄屋へさし上げておりましたところ、食事の中に一本の針(一説には毛髪)がはいつておりました。これをみな庄屋の火のように怒つてお花を大そう厳しく叱りつけました。お花には勿論心当りもないし、

大事な主人の食事にこんなことをするわけもありません。誤つて入つていたのか、あるいは同輩の者がお花をにくんでしたのかもしれない。その夜、遅くなって主人から叱られたお花は身に覚えのない口惜しさと悲しみに耐えられず、とうとう村はずれの池にとびこんで淋しく死んでしまいました。あとになって庄屋は、お花の心を察して池の端に石地蔵をたて村人達と一緒にお花の霊をなぐさめてやって、その後、この地蔵をお花地蔵とよぶようになったといふ。(上新田)

**地蔵の話** 福徳寺の入口に地蔵尊があつた。関東大地震のとき倒れ、首が折れなくなつてしまった。あるとき、地蔵尊が村人の夢まくらにたつて、「オレは首なしではこまるので、首をみつ付けてくれ」といふお告げがあつた。家族そろつてみつつけようとしたがみつからない。そのため、石工にたのんで首をつくつてもらつた。胴体と首のふつりあいはそのためである。(上新田)

小野里さん宅付近にお地蔵さんがあつて、子供ができない場合はなせると、「子供ができる」といつたといふ。(鳥羽)

**宮鍋さま** 宮鍋様は明神様の元宮であり、武田と上杉の戦禍で焼失し、その火が飛んで行つた地が今の社地である。(元総社第二)

**ガタクリ** 総社町出口の地蔵(鍛冶町)、大渡橋の地蔵をガタクリと呼んだ。(元総社第二)

### 三、世間話、怪異

**ムジナの話** 朝見たらクロの上にすわつているので「どうした」と言つたら「馬に乗つていゝのだ」と答えた。

帰り道に美人がうしろからすつと抜いた。おかしいと思つてぬくと向こうを向いて顔をみせない。そしてまたぬく。そこで追いこしてぬ



くと、またぬく。用の近くで「これはキツネだな」と思い、ドンとつくと、「キャン」と言い、姿が見えなくなった。あとはふるえながら家に帰った。

ムジナの嫁入り 火の玉がつらなつてつく。次々につき消える。ちやうちんが一つつき、山に入つて消えた。

キツネがつく キツネがつき、スミが食いてえといい、ショーゴインに帰ると言うので、ごちそうをさせたら、食べて入口でたおれて死んだ。

魂の旅 魂が孫娘と草津に行つた。本人は病気で寝ているのに写真にうつつていた。(稻荷新田)

オトウカ 油アゲを買つて帰つたら、いい家があり、入れといつて入り、フロに入つたらタメであつた。

ヒトダマ 「葬式があるのか」と言う。屋根を越すとその家。フワフワとシューシュー飛ぶのがある。(前箱田)

人の名前 二人ではなし合つていて、半兵衛という人と、忠吉忠という人が、二人で話して、

「おい、世の中には、せんべえ、まんべえあるなかに、一兵衛とはなさけねえなあ」

つていつたら  
「一兵衛すらあねえ、なあ、おらあ半兵衛で、おめえは忠吉だ」

つて、  
しまいには、ただになつちやあんだつて。(元総社)

大橋ワタル 福島だつたが、大橋のたもとで、屋号のようになつていたので、大橋で、渡るところなので、あわせて大橋ワタルと名のつた。(総社新田)

艶平艶さんののはなし むかし、店へ行つて食いつくらの賭けをした。

五分間に、鉄砲玉(あめ玉)がいくつ食えるかということであつた。

艶平艶さんは、  
「百や二百は食えるだんべ」

といつた。

わけえしが鉄砲玉買ってきてだしたつて。

艶平艶さんは、鉄砲玉を両手でかかえて口の中へ入れてかまらずにうのみにした。

それで、艶平艶さんが勝つた。

艶平艶さんは約束どおり金一両と酒一升もらつたつて。

あるとき、わけえしが、艶平艶さんに

といつた。艶平艶さんは、

「一白分食えると思う」

といつた。

そして、艶平艶さんは、三升白の餅を一白分食つた。

そして、

「まだたんねえからよこせ」

といつた。

「もうない」

といつたら

「餅がなければ、その水飲んべえや」といって、手合わせの水を飲んだつて。

これも、艶平艶さんの勝ちであつた。(元総社)

近藤艶平つやひさんのこと 近藤艶平つやひさんは、石倉にいた人。

力もあつたし、食べもんもつよかつた。

むかし、わかいしゅが夜遊びに出て、人の寄る菓子屋とかまんじゅう屋など、わかいしゅの寄場があつた。

そこへ寄ると、わかいしゆが賭けっこをした。

艶平さんは、そんなときも、たいがい取る方へまわった。

あるとき、こんなはながあった。

二十六貫秤のはかりの玉を、ちんぼの先にひっかけて、うちのまわりをまわれるか、まわれれば、かね一両に酒一升つけるといふ。

艶平さん、それをとるんで、自分の品物をおったって、はかりの玉を、そのあたりにひっかけて、うちのまわりをまわりはじめた。

ところが、半分くらいまわったところで、つかれてしまつて、はかりの玉がおちそうになつた。

そしたら、艶平さんのおかみさんが、それを見かねて、

「おとつあん、しつかりしな。これ見な」

つて、自分の前をひろげて、あとしやりにくおとつあんと一緒にうちのまわりをまわつたつて、とうとう、賭けに勝つたつて。

大正のはじめのころのはなしである。

艶平さんが、蚕日傭として、よそムラへ働きに行つていたときはなし。まゆを百貫もとる大蚕をする家に働きに行つていた。

一日働いて、さあ夕飯だといふときに、夕飯にうどんをぶつたんだつて。

艶平さんはうどんが好きだつた。

やとい人とうちのものをおわせると十五人もいたつう。

そのとき、艶平さんは、おんなしゆと相むかひに座るんだつて。

おかいこ時期であつた。夏の日ざしのあついとときだから、ふんどしいつちようで裸で、おんなしゆと相むかひで座つてうどんを食べはじめた。

そしたら、艶平さん、人にはくれないで、自分がみんな食つちやう。

人にはくれないつうのは、ただくねえじゃなくつて、ふんどしをちよいとよこへよけて品物を前へぶらさげておくんだつて。

そうすると、相むかひのおんなしゆうに、それがよく見えるんだつて、おんなしゆうはそれを見てくすくす笑つていてうどんを食べないんだつて。

艶平さんは、おんなしゆうがそうやつて食べないうちに、自分でみんなうどんを食つてしまつたつて。

艶平さんは、こややつて、ひとしようぎ分のうどんを一人で食べしまつたつて。

おかいこの桑くれは、かごのぬきさしで、二人一組になつてやる仕事だつた。

ところが、あるとき艶平さんはぐになつてしまつた。

そしたら、うちの人は、艶平さんに

「あんたは、今夜（かいこに）くれるだけの桑を二階へかつぎあげておけばやすんでもいいよ」

つていわれた。

艶平さんは、

「そうかい、そうすべえ」

といつて、桑を大ざるに入れずに、縄をもつて桑場へ行つて、桑をつくねて、それを縄で一つにしばつて、あるつたけの桑を一度に二階へかつぎあげたつて。

ところが、桑くれをすませてみたら、桑が半分くらいあまつてしまつた。

それをまた、下の桑場へもどすのに、おんなしゆがえらいおおごとしたつて。

艶平さんは、そのくらい力持だつたと。

それで、そのうちの旦那が、ある日艶平さんに、桑の根っこ掘りをしてくんなどいった。

艶平さんは、それを聞いて、

「ああそうかい、掘ってくるよ」  
っていつて、

そして、細びきを持って桑原へでかけようとした。そしてそれを見た旦那さんが、

「根っこを掘るんに、唐鍬持っていがなけりやしよがあんめえ」といった。

そして艶平さん、

「そんなものはいらねえや、細びきがあればいいや」という。

旦那さんは、不思議に思つて、どんなことをするかと、あとをつけ桑原へ行つて見ていたと。

そしたら、桑根っこに細びきをからめて、そのはしを肩にかけて、しゃがんでから、えいと立ったと、そしたら、根っこがひっこげた。

艶平さんは、そのくらい力があつたと。

むかしは、ながしのところにかめがふさつていて、そこにながしの下水をためておいた。それを、朝晩けえだすのが例であつた。

朝飯を食べていたとき、旦那さんが艶平さんに、

「飯を食べたら休みながら下水をけえてくんない」といつたつて。

そうしたら、艶平さん、

「ああ、そうかい」

つうんで、けつの下に敷く敷物をちよいと持つて、下水のところへ行つ

て、ぶつてずかつて休んだ。

それから、ひとつびしゃく汲んじゃ休んだ。またひとつびしゃく汲んでは一休み。

旦那さんがそれを見て、

「早くけえたらよかんべ」

といつたら

「旦那さん、休みながらけえてくれといつたから、休みながらけえてんだ」といつたつて。

わけえしはよく賭けっこをした。

あるとき、夏のあついとき、夜、わけえしが涼みに出た。

わけえしが店に寄つて遊んでいると、そこへ艶平さんがきた。

そうすると、賭けっこがはじまる。

「お正月のときにあげたこじつこめを墓へ行つてめつてこお」ということになつた。

めつてくれば、かね一両に酒一升やるといふ。

艶平さんは、それを先にめつてどこかへかくしておく。

こうして、これも、艶平さんにとられてしまつたと。

わけえしは、そんなことで、賭けごとは、艶平さんとはできないといつていた。

こんなはなしがある。

あるとき、広い墓の中の、一番でつけえ石塔をここへかついで来<sup>こ</sup>おといふことになつた。

兵隊さんの石塔がいちばんでつけえ、艶平さんは、それをかついでもつてきたつて。

また、この賭けも艶平さんにとられてしまったって。

ところが、艶平さんだつて負けることもあった。

あるとき、わけえしが、豆腐を五十きれに切つて、それを一口ずつ食べるということになった。

ところが、むかしの豆腐はでっかつた。

わけえしは、豆腐を切るのに、すみをすこし切つて、それを四十九にこまかく切つた。残りは大きいのでひときれで、あわせて五十きれだという。

わけえしは、それを艶平さんに出してひとくちずつ食えといった。

さすがの艶平さんも、四十九きれは食つたが、残りのひときれを一口に食うことができず、さすがの艶平さんも、このときは一本とられたつて。

お菓子を食べる賭けつこをしたときのこと。

お菓子を、一銭から十回、倍くりかえしに買ったのを食うという賭けだつた。

倍くりかえしだと次のようになる。

一銭、二銭、四銭というように倍になっていき、十回目のところでは五円十二銭になる。

艶平さん、甘党でなかつたもんだから、これだけのお菓子を食うことができなかったと。

これも艶平さんが負けたはなし。

ぬいとおす（縫い糸）を、おや指の一番太いところに七まわり半まききつつける。それをほぐして、それでわかをつくる。

その中に、むかしのあめぼうを入れる。

ちょうど、薪を束ねるようにするわけである。

それを艶平さんになめろといった。

さすがの艶平さんも、これもなめられなかつたと。

ミカン箱には、ミカンがぎっしりつまっていた。

また、ムラのわけえしが、艶平さんに「このミカンを釘ぬきでみんな食えるか」といった。

それを艶平さんがみんな食つたという。どのようにして食つたか。

ミカン箱は木でできている。

箱にかかっている縄はわらでできている。

艶平さんは、ミカンをまず二つだけ残して食べてしまった。

箱と縄は燃して灰にした。

そして、その灰をなめた。

そのあと、口なおしに、残しておいたミカンを二つ食べた。

これで、釘ぬきでミカンを食べたことになった。

むかしは、馬を飼っているうちには、草刈り用のしよいかごがあつた。

こんどの賭けはこうだ。

そのしよいかごの中に、スイカを入れられるだけいれて、そのスイカを全部食えるかということだつた。

艶平さんは食えると思うといった。

艶平がいうには、

「スイカは、包丁で割つて、赤いところを食べることだ」

と。

艶平さんは、スイカを二つに割ると、手をつっこんで、かんまわした。とけるのは赤いところだけ。種はだして、その水だけを飲んだ。皮は食うほうにまわさずに、中味だけ食ったわけだ。

このようにして、艶平さんは、しょいかご一つのスイカを全部食べてしまった。

そして、酒一升とかね一両(一円)をもらったという。

大正の終りのころ、農休みのこづかいが一円だった。そのころのことだ。

今度は、東京まで荷車をひいて行けるかということだった。

このときも、艶平さんは行ってきかたって。

どうに行ってきたかというと、荷車のうしろに三、四貫匁の石をつける。この石があとつかじの役目をして、荷車をひくのに楽だった。

こうすると、荷車をひいていても、ふつうに歩くようだという。

艶平さんは、中山道を荷車をひいて、東京まで行ってき、やつぱり、酒一升とかね一両とったって。

艶平さんが賭けに負けた話がもう一つある。

このときは、豆腐を四つに切ったのを食えるかということだった。

艶平さんは食えるといった。

わけえしは、こんな細工をした。

豆腐屋のおかみさんから髪の毛をもらって、その髪の毛をつかって豆腐を四つに切った(十文字に切った)。切って髪の毛をひきぬく、そうすると、髪の毛についていた油が豆腐にうんとつく。

その豆腐を食べるとはいてしまうという。腹におさまらないという。

それで、艶平さんは、その豆腐を食うことができずに負けてしまったという。

近藤艶平さんは、石倉(前橋市)の近藤家の生まれ。

正業にはつかないで、日傭とりのような仕事をしていたという。長屋住まいをしていたようだった。奥さんはいた。

体格のいい人だった。

人なみでないようなことをしていたので、親類の人からも敬遠されていたようである。

この人はなしは、この近在の年輩の人ならよく知っているという。墓には、石倉の町はずれの、上越線の踏切りの北、線路の東側にあ

る。墓石には次のようにある。

真道平案居士 昭和三十一年八月二十日、近藤艶平七十二才(元総社)

引間の源六 引間の源六さんは、持ち物がでつかいので、うしろへまわして、背中に背負っていた。

それをみたカラスが、

「子か子か」

つていったと。

そしたら源六さんは、

「子じゃねえ、せがれだ」

といったって。(西箱田)

この人は、もちもんがでつかくって、

「だれだ、おれだ、ひきまのげんろくだ」

といいながらにぎるほどであったという。(西箱田)

この人は、もちもんがあんまり大きいので、またの間から背中へまわして、ひもでしばって仕事をしていた。

ムギのさくを切るのにも、そうしないと、おちんちんの先がムギにぶついでしまう。

それで、ある日、源六さんがそうやって、ムギのさく切りをしていたら、カラスがそれを見て、

「子か、子か」

と鳴いたんで、源六さんは、カラスに、

「子じゃねえ、せがれだ」

といったって。

あるとき、源六さんが銭湯へ行った。

体を洗っていたら、隣の人が、源六さんのものをつかまえた。

「おいおい、なにするんだ」

「なに、これはせつけんじゃねえんだ」

「これは、おれのだ」

と、源六さんがいったって。(下新田)

引間の源六はもちもんがでつかい。

八帖敷あったという。

あんまりでつかいので、ふだんかつかいでいた。

それをひきずって通ったあと、あとがついたという。(江田)

後引間の源六じいさんは、えてもんが大きかった。

(青梨子の)熊野神社へおまいりにきたとき、えてもんをずつてき

て、源六道があいたという。(青梨子)

引間の源六という人はもちもんが大きかった。その大きさについては、次のようにいった。

「だれだ、おれだ、引間の源六だ、ぼたもちやきれえだ、食うときや好きだ。おっと、ちやづか」

それで、ある夏の日、田の草取りをしていた。えてもんがでつかくつて邪魔になるので、尻より背中へまわしてシャツを着て田の草はつていったって。

そしたら、カラスがそれを見て、

「子か、子か」

と鳴いた。

源六さんは、

「子じゃねえ、せがれだ」

といったって。(元総社)

子供のとき、

「だれだ、おれだ、引間の源六だ。」

といった。

引間の源六は、もちもんがでつかいといった。(江田)

源六さんが、ある日、自分のわざものを背中へまわしておんぶして、ねんねこを着せ、帽子をかぶせて仕事をしていた。

そしたら、そのわきの道を通った近所の人がそれを見て。

「源六さん、いつ子供が生まれたんだい」

と聞いたら、

「このあかんぼうは、わしと同じ年だ」とすましていたと。

(青梨子前原)

引間の源六さんは、自分の持ちもんが大きくて、(股のところをくぐらせて)背中へまわして、首のところ、帯でしばっておいたって。

ある日、源六さんが畑で仕事をしていると、カラスがそれを見て、「コカア、コカア」

って鳴いたって。

そしたら、源六さんが、

「子じゃねえ、せがれだ」

っていったと。

源六さんの品物については、次のようにいわれている。(にぎりこぶしで、にぎったときの様子)

だれだ、おれだ、引間の源六だ、ぼたもちや、きれえだ、食うときや好きだ、おっとちやづかみ

(ちやづかみというのは、品物の先を上からつかむこと)

源六さんは力持ちでもあつたという。

むかし、祭文などの人寄せのときは、農家の大きい家を宿にした。

近所の人が聞きに行つて、座敷にあがるとき、履物をそれぞれの人持つてあがつた。

ところが、源六さんは、そこんちの大黒柱をちよいと持ちあげて、履物をちよつとつっこんでおいたって。そしたら、すぐあとからきた友だちが

「おれのも一緒にいれておいてくれ」といったので、一緒にいれておいてやつたって。

さて、祭文(寄席)が終つて帰るとき源六さん、自分のだけ持つて出ていった。

あとで帰ろうとしたその友だちは自分のはきもんがとれなくて困つたって。(元総社)

源六道 前原から引間へぬける近道があつて、それを、源六道と呼んでいる。

むかし、あるとき、前原に持ち物の大きい人がいるというので、引間の源六さんが他流試合にきたって。

源六さんはもち物を袋に入れてきて、試合になつて、自分のもち物を両手で捧げて相対した。ところが相手のもち物があんまりでつかいので、もち物を袋に入れることもできず、あわてふためいて逃げてきた。そのとき、源六さんがひきずつたあとが道になつた。それを、源

六道とよんでいる。

べつの話、あるとき、女の人が道を通りかかった。源六さん、それをみて、したくなつて、自分のもち物をのぼして、その女の人にはめてしまつたという。(青梨子前原)

引間の源六さんは、大物の持ち主であつた。

あるとき、源六さんとますまんえもんさんのえてもんのせりあいがあつた。

(場所は今の蚕業試験場のあたり)

二人が出会つてくらべつこした。

ところが、源六さんの方が負けてしまつた。

それで、あわてた源六さん、くるときはきちんとしてきたのだが、帰りは、持ち物をしまわないもんだから、道中ひきずつてきたって。

そのために、源六さんが帰つてきたところが、持ち物をひきずつてきたので、くわねつこも、草もなくなつて道になつたって。

それが、蚕業試験場から妙見様へ通ずる道のもとならしい。

(総社町立石)

前原の下から引間へ行く道がある。西国分の前に弁天様があり、そのわきを通って引間へ抜ける道は細い道で、幅は三、四尺くらい。この道を源六道と呼んでいる。

むかし、前原に某という大物がいた。いつもおれと同じくらいのものをもっているものはいないとじまんしていた。

引間の源六さんが、その話を聞いて他流試合にきたと。自分のものを袋に入れてかついできた。双方とも両手でささえて出会った。

ところが、前原の御仁のものがあんまり大きいので、さすがの源六さんも、自分のわざものをしまうのも忘れて、ひきずりながらうちへ帰った。

そのあとが道になった。それが源六道である。(青梨子前原)

力持ちのはなし　むかしは、浪花節、祭文、義太夫など寄席が、百姓家の広いうちを借りてあった。

引間にえらい力持ちの人がいて、友だちと寄席を聞きに行った。

座敷へあがつて聞くのに、履物をとりかえられちゃ困るというので、そのうちの黒柱をもちあげて、その下へ履物をつっこんでおいた。そしたら、友だちも、

「おれのもいれてくれ」

といったので、友だちの履物も一緒に黒柱の下につっこんでおいた。

寄席が終つて帰るときはばらばらだった。力持ちの人は、自分の履物だけもつて外へ出た。

そしたら、履物を黒柱の下へ入れてもらった友だちは、それがとれぬえでこりたつて。(元総社)

大力の人　立石の人、福島新次さんという人。

天狗岩用水の立石橋の下に水車があった。

そこから往還までは五十メートルくらいあった。

その人は、下の水車から上の道まで三俵の米俵を背負いあげたという。

一俵は首にさげ、あとの二俵は背中に背負つてはこんだという。

四、五年前に、八十六歳くらいで亡くなった人のこと。(総社町立石)

力持ち　つるさんという人がいた。この人は力持ちで、風呂をたてると、翌朝、その風呂桶を、水の入つたまま運んで、ためますにおんまけてきたという。(総社町総社)

兄責は力持ちだった。

一度に三俵の米俵をもつた。

一俵は口でくわえた。

あとは、両手に一俵ずつ持った。(総社町総社)

深津の斧八　深津(勢多郡粕川村)の斧八という人は、もちもんがでつかくつて、下からまたの間をまわして背中へ出しておんぶして、

畑でエンガで、畑うないをしていたつて。(前箱田)

高井の立見万右衛門さん　この人の道具も大きくつて、じゃまになるので、あとにまわしてうぶつていた。

それを、カラスが見て、

「子か、子か」

つてないつたつて。(青梨子)

大物の話　あるところにもちもんのでつけえ男がいたつて。かみさんとするときには、もとに手拭をまいていた。

やりながら、かみさんが文句いったりすると、ひとまきははずすとという。かみさんは、そんなことをされると、腹の方まで痛くなるというので、文句いふのをやめにしたという。(元総社)



群馬さんのはなし 総社町植野に、群馬さんという人がいる。その人があるとき、自転車に乗って町へ行ったが、日が暮れてしまった。

ところが、無灯火だった。

交番のおまわりさんにつかまってしまった。

「てめえはどこだ」

「総社町です」

「名はなんつうんだ」

「群馬です」

「名はなんつうんだ」

「群馬です」

おまわりさんがいく度聞いても「群馬だ」という。

「うそだと思うんだら、総社町の役場に聞いてみる」  
っていったって。

群馬大吉とかいう人のはなしである。(元総社)

馬に縁のある人 相馬村に馬場さんという人がいた。

その人が、あるとき、住所氏名はどういうんですかと聞かれた。

こう答えたって。

「群馬県群馬郡相馬村大字広馬場、馬場馬太郎、午年」

馬という字をたくさん書いたって。(元総社)

八兵衛のはなし 八兵衛は上新田の人。

伊勢参りに行ったとき、京都へ行ったら、東本願寺で釣鐘をつくっていた。

それを見た八兵衛は

「そのやり方ではまともらない」といった。

「おまえやってみろ、生意気いうな」といわれた。

そこで、八兵衛が釣鐘をつくったわけ。

それが、京都の東本願寺の国宝になっている釣鐘だという。

同じものが下新田の寺にあるし、高崎の寺尾の寺にもあるという。

(下新田)

船尾の天狗様 友達の親が、屋敷祭りのとき、イワシを二匹ずつしんぜるのを、食べてしまつてしんぜなかつた。

そしたら、男親が病気になった。そのころは水がなかつた。船尾の

滝の上に氷が張っているというので、そこへ氷を取りに行った。

船尾の滝には天狗様がいて、氷を取りに行った人が、天狗様にほか

しだされた。

その人は、滝の上から下までおとされて、死んでしまったという。

それで、船尾の滝の上はあらたかなんだから、あんまりへんなものを捨てたりしないようにといわれている。(総社町総社)

川のみ 船尾滝のところへ川のみをとりに行った。滝のところのう

えんてら(上の平)へ行つてとつてきた。

この川の水を汲んでお茶をわかしてのんだという。とくに朝の水はうまいといった。

また、この川の水がとまると、火事があるといった。だから、火事をはじめたというのと、その川の水はとまっているという。

その川は、五輪平を通つて、八木原へ流れてくる。(総社町総社)

六部膏のはなし むかし、群馬郡のあるうちで、六部を泊めてやつたら、できもんの薬のつくり方を教えてくれたという。

それを六部膏といって、この近在ではよく知られていた。

上石倉のあざみという家では、耳だれをなおしてくれる薬があつた。これも六部がつくり方を教えてくれたという。

六部に親切にしてやったお礼だという。(元総社)

六部大尽 むかし、六部がやってきて泊った。その六部はおかねをたくさん持っていた。そのうちで、六部を殺しておかねをとって、大尽になった。そのうちのことを、六部大尽とよんだ。(青梨子前原)

水酒の話 ムラの会合のとき、みんな酒を持ち寄せることになってしたが、ある人が一人、水を持っていった。

そしたら、飲んだ人に

「水の入った酒だなあ」

っていわれたって。(青梨子)

でんぼうばなし 人がたずねてきて、子供がいたので「おとつあんどこへ行つた」

っていったら、

「富士山が倒れそうになったんで、線香を一本もって、つつかえ棒しに行つた」

といたって。(総社町総社)

うそつき むかし、あるとき、うそつきが、うそつきのうちへ来た。すると子供がいたんで、

「おとつあんどこへ行つた」

と聞いたところ、その子供は、

「おとつあんどこへ、富士山が倒れそうになったんで、線香三本持って、つつかえぼうしに行つた」

っていったと。(総社町新田)

お米は神様よりえらいということ 土岐様の領分、沼田領はアワジ(粟地)の多いところ、そのため、お米のありがたさは、神様よりえらいといった。(青梨子町)

大尽のはなし 上新田には、とんがらし大尽というのがある。この

うちは、とんがらしを売って大尽になったという。

松の木大尽というのもある。

小相木には、ひいらぎ大尽がある。(西箱田)

とんがらし大尽 むかし、上新田のあるうちで、とんがらしをうんとつくって、大名が通つたときに、大名にそのとんがらしを見せたって。(大名がおかごに乗ってきて見た)

そしたら、

「これはいいとんがらしだ」

とほめたので名がでて(たくさん売れて)とんがらし大尽になったって。(下新田)

神かくし あるとき、子供が友だちとどつかへ行つて、帰ってこなかった。近所の人がでてさがしたら、その晩のうちにめつかった。

(総社町総社)

ひとつきにいつべん むかし、あるところに娘がいた。

この娘さん、尻をひるというので、嫁に行けないでいた。

どのくらい尻をひるのかというと、ひとつきにいつべんだという。

それで、隣村のわかいしゅが、その娘さんを嫁さんにもらった。

ところが、わかいしゅが、夜になって、ひとつきすることに尻をひる。

こりや、話がちがうっていつて、その娘さん、破談になったという。

(青梨子前原)

ものぐさもんの両成敗 あるところにもものぐさもんがいた。

ふところやきもちを入れておいて、ふところをやっていった。

すると、むこうからも同じかつこうをしたものがやってきた。

「ふところのやきもちを出してくれ」といつたら、相手も同じこと、ことわられたという。

これを、ものぐさもんのりようせいばいといった。

子どもがものぐさをしていると、「ものぐさもんのりようせいばい」といった。(青梨子)

千本松原 ある商店で小僧をつかっていた。

その小僧が悪がしこくつて、夜になるたあ、主人公夫婦を寝せねえだと、うるせえべえことをいってて。

それが主人夫婦は、とてもこの野郎がいたんじゃ、夜もろくろくやすむことはできねえ、なにもしてえこともできねえって口説いてるんだって。

それである日その小僧にひまくれるからお客に行つてこおつて、小僧をお客にやつたんだと、そしたらその小僧が悪ばしつけえもんだから、お客に行つたふりして縁の下もぐりこんでいた。日が暮れるのを待っていた。日が暮れたら、主人公夫婦は、今日はじゃまもんがいねえから、おつかあ、ゆつくりやるべえやつて、それで二人でねどこへ入つて、おやじがおつかあ胸をなではじめたんだと、

「おつかあ、おつかあ、ここんとこはなんつうとこだ。」

「ここは胸板」

それをだんだんくだつてきて、腹なげた。

「ここはなんつうとこだ」

「ここは大原つうとこだ」

それで、だんだん、だんだんくだつてきて、

「ここはなんつうとこだ」

「ここは下つばらつう原だ」

それで最後にまたその下なげて

「おつかあ、こりゃなんだ」

「ここは千本松原だ」

「それでどうだおつかあ、今夜は野郎もいねえことだから、よかんべ」

つていつたら、

「ああいいよ、いいけどおとうさん、今日はお庚申様の日だから、お庚申様の日には、そういうことを禁じられてんだから、一つだけにしてくんろ」

つて。

そしたら、

「うん、よし」

つて、

それで、のつかるべえと思つたら、縁の下で、

「やあやあ、やあやあ」

という声がする。

「あれ、野郎帰つてきて、縁の下に入つてるんかな」

それで、小僧ひつぱりだして聞いた。

「てめえ、お客に行つたと思つたら、行つたんじゃねえんか」

そしたら、小僧が、

「いや、行くべえと思つたら、胸板橋という橋に出て、それで、その橋渡つて、ずつと下つたら、大原つうとこへ出て、その大原つうとこ下つたら、下つ原つうとこへ出て、それでその下つ原のそばに、千本

松原があつて」

といつたら、

「この野郎、人のいうことみんな聞いてやがつた」

つうんで、主人公がなぐるべえと思つたら、

「旦那、旦那、今日は、お庚申様の日だから、一つにしてくれろ」

つて。(元総社阿弥陀寺)

干しもんのこと　うちにいる時分、親に洗濯もんは、さおにさした方へ抜け、通り抜けにしてはいけないといわれた。

干しもんをとりこんでくれるとき、

「この干しもんは、どつちからさおに通した」と聞かれた。

おんなしゆの下着は、太陽にあてるなといった。

また、夜は干しもんをしまえといわれた。(総社町総社)

雑巾の話　立見さんのところへ越後から奉公にきていた者がいた。

あるとき、主人が風呂に入っていて、あついでいというので、その奉公人が水をうめた。

ところがその奉公人は、雑巾桶の水を風呂に入れた。

そしたら、主人が、一首詠んできかせた。

ぞうきんと、あてじにかけば蔵と金さだめしそれは、ふく(福、拭)ものである。(総社町総社)

ムリドン珍説　むかし、むかしのこと、山ん中におじいさんとおばあさんが住んでいた。

雨のしよぼしよぼ降る晩、泥棒がおじいさんのところへ馬盗みにきた。

ところが、山奥から、オオカミサマが獲物もなく、腹がへつてしようがねえ、馬盗みにきた。

じいさん、ばあさんが夜なべ仕事をはじめたつうんだいね。

「ばあさん、入ったか」

「まだ入らねえ」

泥棒は前のムギ畑にかくれた。

「ばあさん、入ったか」

「まださくへ寝てる」

泥棒は、いよいよ、おれが来たのを知っているとと思った。

そんなことをしているうちに、ばあさんの枕許に雨もりがしてきた。

「じいさん、じいさん、ムリドンがおつかかねえなあ」

オオカミサマがそれを聞いていた。

ムリドンがいちゃあつうんで、オオカミサマがふつとびだした。

そしたら、泥棒は、馬がとびだしたと思って、オオカミサマの背中にぶちのつた。

そしたら、オオカミサマは、ムリドンがのつたと思って、山ん中じゅうかけずりまわった。

泥棒はとうとう谷底へふりおとされた。

それをサルが見付けた。友だちに

「人間がおつこつてるから助けべえ」

サルのボスが木の根元につらまってはしごのようにつらまつて谷底へおりていつて泥棒を助けた。

そのとき、サルがうんといきばつた。

それで、ザルの顔が赤くなつたつて。

これでおしまい。(元総社阿弥陀寺)

ケヤキの木が水を吸いあげる音　わしが十八、九のころ、八木節をやつていた。時期になると、夜遅くまでやつていた。

小野沢林作さんの屋敷は広く、半分くらいは竹藪だった。その中に大きいケヤキの木が二本あった。

林作さんのおとつあんの豊さんは、八木節が好きだった。

「おい青年、おらあちの庭へきて踊れ」といつてくれた。

ムラのわかいしゆは、毎晩のように、林作さんのうちへ行って夜ふかしをしていた。

そのうちに、竹藪にお化けがでるというはなしがでた。

「この世の中にお化けなんかいるか」

などといっていた。

夜中になると、井戸の底でうなり声がするという。かすかにうなり声が聞える。

ところが、小野沢さんの親戚の人がきて聞くと聞こえない。

昼間は聞こえない。

夜、夜中、みんなが寝静まって、風もやみ、雑音もなく、あたりがしんとすると、アブかハチがうなるような声が聞こえてくる。

あるとき、青年たちが

「よし、今夜は、お化けの正体を見届けてやるべえ」

というので、林作さんのうちへ寄って夜ふかしすることにした。親類の人は帰ったり、ねぶったりした。

真夜中になると、うなり声が聞こえてきた。七、八人の青年がいろいろのものを持って数人中へ入っていった。

そしたら、たしかに、アブの鳴くような声がする。近寄ってみたら、ケヤキの木だ。中になにかいるにちがいない。

豊さんに、

「ケヤキの中に、なにか入っているようだ」

というと、

「なにも入っているわけではない」

という。

「ケヤキの木に音がある。耳をおつけてみな、ケヤキのしんとうで音がする」

といった。

その晩は、そんなことですませた。

つぐ日、赤門の先生が

「わしがしらべてみましよう」

といって、前橋の豊国覚堂という人のところへ行つて聞いてきた。

「それは珍しい話、何万本に一本、春先に水を吸いあげる音だ。それが外まで聞こえるのだ」

と教えてくれた。(元総社)

道教え 旅の人がやってきて、道をたずねた。

その旅人は、笠をかぶったまんま聞いた。

そしたら、道を聞かれた人は

「ちよつとまってくれ」

といって、家の奥へ入って、旅の人と同じような帽子をとってきて、かぶつてから、道を教えたつて。(総社町総社)

キツネの提灯 夜、五〇〇メートルくらい先のところに、ふらふら

動いていた。

それがどうも、人間の動作とはちがう。

それは、きつねの提灯であつた。

人間がきつねに化かされているときにそう感じるものという。

(西箱田)

オトウカと遊んだはなし 小さいとき、小学校の前の人のはなしである。

藪の中にオトウカが住んでいたという。そこへ遊びに行ったことがあるという。オトウカと遊んだわけである。

わしのおじいさんくらいの年令の人のはなしである。(西箱田)

キツネに化かされたはなし 最近のこと、わしは、かみさんの実家へ用事があつて行ったとき、元総社町の釈迦尊寺の南の堀のところ

(キツネに化かされて) 一カ所をあるきまわつて夜があけてしまった

という。一カ所を六時間くらいあるきまわっていたということだ。

いい女がでてきて、案内するといつてつれまわった。

これは昨年（昭63）のこと。前橋の日吉町へ製つて、帰ってくるときすぐして帰るべえと思つたら、まちがって、敷島の老人センターの方へ行つてしまつて、石倉まできて気がついたら朝になつていた。でかけたのは午後一時ごろで、石倉まできたのが、朝の五時ごろだった。

気はあせつても、足がすすまなかつた。

同じところを、行つたり来たりしていた。新聞配達や牛乳配達の人に道を聞いて、やつと帰つてきた。

このときも、いい女がでてきて、案内するといつて、あつちこつちつれまわつた。

キツネに化かされたことでしょう。（前箱田）

豆腐屋からアブラゲを買つて帰ると、むじなにだまされて食べられたという話をよく聞いた。場所は前箱田の稻荷様の近くであつた。そこは、むじながたくさん住んでいたので、「トウカ森」とよばれていた。

（東箱田）

元総社に釈迦尊寺がある。鳥羽からそこへ行く途中に染谷川があり、そこから五千石堰が流れていた。釈迦尊寺まで繭を売りにいった帰りにまんじゅうや酒を買つてくると、そこら辺でなくなつてしまうことがあつた。狐やたぬきがいたらしくなくなつてしまう。実際に体験した人もいた。（鳥羽）

人魂とオトウカのよめどり 六〜八尺くらいの高さのところをとんでいた。人魂は大きくなつたり小さくなつたり、波うつていた。いつのまにか遠くへ行つて消えてしまう。

色は紫でやや黄色味がかつていた。

道灌堀のところに、オトウカのよめどりがあつた。それをみんなして見ていた。

提灯をつけていくように、いくつもいくつも、あかりがならんでいった。

パツ、パツとところどころ消えて、そのうちに一度にパツと消えて、パツとついた。

人が地面をあるくように見えた。

オトウカのよめどりが見えるのは、秋から冬にかけてが多い。

提灯のようなものがならんでいただけだった。それを、またはじまつたと見ていた。（江田）

滝川、利根川にキツネがいて、息が光に見える。その光を「キツネの嫁入り」と言つた。（稻荷新田）

キツネに化かされた話 むかしのこと、ある人が畑にためだしをしていた。

下肥を桶に入れて、天秤棒でかついで畑へ持つていつて、畑にくれていた。

一日仕事をしていて、夕方しまうべえと思つたら雨が降つてきた。

まごまごしていたら、足許からオトウカがとびだした。

オトウカが、おつぽをため桶の中に入れて、おつぽをしめして、上へはねあげて、ためまきをしていた人にあたつて、雨が降つているようにみせかけたんだつて。

その人はおこつて、天秤棒でキツネを追いかけてなぐるうとしたら、キツネがなんとかいつてないたつて。（元総社）

オトウカの嫁どり 嫁をもらうと、七月十五日に、嫁の里へお客に

行つた。

それで、今日は、一日遊んだから、夜なべ仕事で一日分をつけえすべえって、田へ行つておんがかけた。

そうすると、木部さんのところの背負つたへ、あかい提灯がついた。木部のうちじや、病人のはなしはなかつたが、今日はなんだんべつて、不思議に思っているうちに、火の玉が、馬が田のひとつかどまわらねえうちに、馬の足もとへきた。

これは、オトウカだつうんで、馬をはたくむちで火の玉をたたいた。そしたら、イヌみてえのが、ひよこひよここととんでいったつて。

山王のうちのはなし、そういうことが事実あつたつて。(元総社)

狐の嫁入 馬場より南の田んぼ道で狐の嫁入があるとよく聞かされた(大友)

狐 狐の嫁入り、火の玉がとんだり、油揚をとられたりした。

タバコをすつたり、マユゲにつばきをつけたり、犬の名をよぶとだまされない。

フロに入つたらこえだめだつたという話もある。(上青梨子)

昼間、子狐をかまつたら、夜になつて誰かが戸をたたいて「与次衛門、与次衛門」とよぶ。

のぞいてみたら、狐が出で戸をたたいていた。(上青梨子)

オトウカ山 狐が穴を掘つてすんでいた。(総社大渡)

ムジナが化けたはなし ムジナが女に化けてきたという。

裏の川から笛を吹いてきて、つば山のところ、笛の音がとまった。そしたら、きりっこ、きりつこと、ざぐりをまわすような音がしたという。

うちのおばあさんは、ムジナがそんなふうにして毎晩くるので、提

灯をつけて待つていたという。

「こんちくしょう、また来たか」

と、あとを追いかけて行つたら、川を渡つて逃げて行つた。

むかし、あるとき、二人のわけえしが夜遊びに行つてきて、うかし(下肥をくむとき、桶のふたの下に、わらをまいてうかしておいたもの)を燃してあたつていた。

そこへ、きれいな娘がきた。

「あてさせてくれ」という。

あてさせてやつたら、うかしの稲わらについている糶をとつて食つていた。

わかしいゆに、どうもおかしいなというので、よく見た。

そしたら、その娘はムジナが化けたものだったという。(西箱田)

タヌキのいたずら 勢多郡赤城村の津久田駅と敷島の間のはなし。

(上越線)

汽車が通ると、タヌキが娘になつてでてきては邪魔をした。娘だと思つて列車を止めてみると、なにもない。

それで、しまいには、かまわずひいて鉄橋の下へおとしたという。

そしたら、そのあと、タヌキがお化けになつてでたというはなしがある。(総社町総社)

オサキ大尽 むかし、オサキという動物がいた。ちょうどイタチのあにいぐらい。

そのオサキを大事に飼つていたうちがあつた。そのうちは非常に始末だつた。

うどん粉がなくなつて弱つた、ということになると、オサキがでてきて、となりんちへ行つて、粉箱に入つて、体に粉をつけてきて、う

ちの粉箱に入つて、体をぶるぶるふるわせると、粉がはこべたという。なんでも、オサキにはこぼせたという。

こうして、そのうちは大尽になつて世間では、そういううちのことを、オサキ大尽といつた。

そのうちのことは、オサキづかいともいつた。(元総社)

むかし、おさきという動物がいた。おさきは、ねずみのようなかたちをしている。

ところが、ねずみとちがつて、目がたてについている。

どこんちにしたというはなしは聞かない。

おさきを大事にしてやると、そのうちに利益をもたらすという、よそんちの粉箱に入つて、毛に粉をつけてきて粉をはこんだりするといふ。

おさきを粗末にするとだめだといふ。

急に大尽なつたうちのことは、おさき大尽といつた。(青梨子前原)

おさき煙草 もらつてすう煙草のことを、おさき煙草といふ。

よそのうちへ行くとき、煙草をもつていかないと、行つたさきでもらつてすう煙草のことで、ずるいとみられている。

「やつは、おさき煙草だ」といわれる。いつもそうするので、そういうられる人がいた。

うまいことをいつて、もらつてすつた。

自分では、はじめからもつて行かない。(青梨子前原)

よそのうちへ行くとき、わざと煙草をもつて行かないで、行つた先で、煙草をもらつて吸うことをいふ。(総社町新田)

オサキ大尽 オサキといふのは、ネズミのようなもの。

しつぽは、猫のしつぽのように短いといふ。

このオサキを、オサキヤといわれるうちで飼っているといふ。

オサキは、よそへ行つて、しつぽに物をからんでもつてくるといふた。

あすこんちは、オサキヤだから身上が残るといつた。

オサキが、ひとんちの粉びつに入つて、粉を体につけてきたといつたり、おかねを借りれば、なさない工夫をオサキがおしえるといつた。

また、物をはかるとき、はかりにのつかつて物をおもくしたり、はかりのたまをおもくしたりするといつた。

ムラにも、こういうふうにいわれていたうちが、四、五軒あつた、代表的なオサキヤといわれるうちは、金貸しをしていた家。

オサキヤといわれるうちは、急に身上をのばしたうちである。また、そのあと急に没落したうちもあつた。

オサキヤとは、結婚ばなしがでてもさけたといふ。これは、明治末期までのこと。(青梨子)

おさきや むかし、大尽で、おさきを飼っているうちがあつた。そういううちのことを、おさきやといつた。

おさきは、そのうちの人が、なにか欲しいといふと、(それがあるところへ行つて)毛の間に入れて、なんでも持つてくるといふ。例えば、粉が欲しいといへば、隣のうちへでも行つて、毛の間に粉を入れて持つてくるといふ。

おさきやと知らずに嫁にやつたが、あとで先方がおさきやだとわかつて、離縁になつたといふ話もある。

おさきやといわれるうちは大尽である。(総社町新田)

オサキヤ 八木原にオサキヤといわれるうちがあつた。ネズミ(オサキ)がよそんちへ行つて(粉などを)体につけてきて、自分のうちのいれもんの中へはたくといふ。



このうちは、それほど大尽でもなかった。  
むかし、茶碗のふちをはたくと、オサキがくるぞといわれた。

(総社町総社)

むかし、オサキという動物を飼っているといううちがあった。そのうちのことをオサキヤといった。

たとえば、ひとんちの粉箱に入つて粉を体につけてもつてきたといつたりした。

あすこんちは、オサキが、なにをぬすんできて大尽になったといつた。

そういう大尽のことを、オサキ大尽といつた。

明治の末ごろまでの話である。(青梨子)

オサキのはなし　むかし、オサキという動物がいた。

ネズミのような小さい動物だった。

オサキをかわいがあると、そのうちのためになるといつた。

あるうちでオサキをかわいがつていた。あるとき、おじいさんが「はらがへつてしようがねえ、うどんであつて食べてえが、うどんがねえ」つてくだいたら、オサキがそれを聞いていて、となりのうちへ行つて、そこんちの粉箱へ体を入れて、体のげえへうどん粉をうんとなすりつけて、そのうちへ帰つてきて、粉箱の中へ入つて、うどん粉をおとした。一晩中それをくりかえして、となりんちの粉箱からうどん粉はこんで、そこんちの粉箱をいっぱいにしたつて。

それで、おじいさんのところではうどんをぶてたというはなし。

キジとり　わしのひいおじいは、鉄砲ぶちだった。

(元総社)

よく、とやをつくつてきじをとつた。

人間の入れるだけの小屋(とや)をつくつて入つていた。小屋の前

にきじの好きなもの(ソバの実など)をおいた。

ソバをこなしたからをもつていつて、小屋の前にはちらかしておく。

おじいさんは小屋の中に入つていて、きじ笛を吹いた。

きじのおすのなわばりがきまつていて笛を吹くと、おすがくる。おすがけんかしにやつてくる。そこを、とやの中からうつた。

一日に、きじを六羽くらいとつてきた。ひいおじいさんは、きじ笛のつくり方と吹き方を、清里の人たちに教えた。

今はきじ笛は禁じられている。(青梨子)

きじ　きじは垢が好きという。あまり風呂に入らず、週に一回呼ばれて入るくらいだし、はだしでいるから、あかがついていて、きじがきてつつつくといわれた。(総社大渡)

カラスと弁当　むかし(野良犬辺の人が)畑で野良弁当を食べている人がいた。

カラスが木の上から見ていて、

「アワか、アワか」

と鳴いたという。(青梨子)

猫のはなし　むかし、青梨子にお民さんというおばあさんがいた。

旦那さんに死に分れて、そのあとは、特に財産もなかったので、物乞いをしてあるいていた。

お民さんは八匹の猫を飼っていた。猫が好きで、自分の食べ物へずつて猫にくれていつたつて。

あるとき、年をとつていたので、老衰で死んでしまった。

お民さんには身寄りがなかったから、なくなつて二、三日のあいだ、ムラの人も知らなかった。

近所の人が行つてみたら、なくなつたお民さんの体のまわりに、八匹の猫がよりそうようにして体をあつためていた。

それを見たムラの人は、猫といえども人間にかわいがられれば、その情がうつるのだというはなしをしたという。

青梨子に伝えられるむかしのはなしである。(青梨子)

妄念による事故 マーキュリーホテルの下あたりの産業道路でよく事故がある。

よくしらべたら、産業道路をつくるときに、その敷地に墓地があった。そこに道をつくった。

おがんだり、骨を掘りだしたりしたが妄念があるんじゃないかといつている。(元総社)

不思議な話 わたしのせがれが戦地へ行っていて、斥候に出た。そのとき、道に迷って友軍のいるところがわからなくなってしまう。西も東もわからずにいた。

そしたら、はるかむこうに、ほおつとしたあかりが見えた。そのあかりを頼りにして行ったら、友軍のところへ行けた。

せがれが斥候に出た晩、おふくろ(わたしのかみさん)はムラの鎮守様に提灯をつけてお百度をふんでおがんでいた。(あとで聞くと)せがれが斥候に出た時間と、おふくろさんがお百度をふんだ時間がぴつたりだった。

その提灯が戦地へ行つて、あかりを見せたんべというはなし。

(元総社)

人魂のこと 私の祖父(関根源重郎)は大正六年になくなった。男四人、女二人の子があつて、三番目の子を榛東村の長岡へ養子にやった。

そのうちに大きな杉山があつたが、おじいさんがなくなつたとき、青い火の魂が、尾をひいて、その三男の家の方へとんでいったという。

(青梨子)

人魂を見たはなし わしが小学校の高学科一年のときのこと、夜よそのうちへ行つて、かいこの桑くれの手伝いをしていた。

桑くれが終つて、氷水を買に行つた。

帰つてくるときけえちゃんの前二十センチくらいの玉が、ふらふら青光りを放つて、上へあがつて、南の方へとんで行つた。

わしは、

「ああ、ここちのおばあさんがなくなつたなあ」

と思つた。おばあさんが病氣であることを知つていたから。

それで、手伝つていたうちへ帰つて、桑くれをやつていた人に、人魂を見たはなしをした。

そしたら、それは聞いた人は、

「それは、おけいさんに相違ない」

といつた。

そして、わしを、そこちの人がうちまでおこつてくれた。

つぐ朝、おけいさんがなくなつたという知らせを聞いた。

ゆうべのうちに、魂がとんでいたのである。(元総社)

人だま むかし、道祖神のところまで遊んでいたら、お月様とそっくり同じくらい大きさのものが、青い色して、すうつととんできて、下でおつ消えた。

あつというまに消えた。

うんと仏様がでて、化けもんやしきといわれているうちで、おかみさんがいくらか具合がわるかつたが、急になくなつてしまつた。

おかしいというので、のりきやさんに見てもらつた。

そしたら、仏様が大勢きて、のどしめるものに、鼻おつべすもんにいて、それでおかみさんが死んだんだつて。

仏様がやつてきてそうしたんだつて。

それが、日の暮れもと、十日夜のお月様くらいの大きい火の魂がとんできたわけだ。その火の魂の消えたところは、墓だった。(元総社)

火の玉の話 小学校五、六年生の頃(昭和九年頃)、天神様の裏にお墓があつて、夕方、火の玉がでて、それが何かにあたつて途中で消えてしまった。火の玉の大きさは二十センチほどで、五十〜六十センチ尾を引いていた。(鳥羽)

十歳くらいいとき、夕方、村はずれのところから村の方をみたら、元総社の方から「火の玉」がボヤーと、またその玉にくつついて、六十センチくらいの青火がゆれてとんできた。玉は黄色だったが、白っぽいような青いような尾を引いていた。(鳥羽)

死の知らせ わしが小さいとき、穀屋に奉公していた。お寺へ米を持つてお使いに行つた。

昌楽寺のおばあさんに葬式まんじゅうをもらつて食べた。

そんなとき、わしはおばあさんに聞いた。「人が死ぬとき、鐘をたたくというがほんとうかい」

「いや、鐘はたたかないね。なにかしらせがある。おんなしが死ぬと(寺の)ながしものがきれいになっている。昼間飲んだお茶がらをながしのすみにはたいておく。お茶がらは、ウサギにもつていつてくれるのだが、そのお茶がらがつぐ朝見るときれいになくなつていふことがある。そういうことがあつて不思議だと思つていふと、寺へ、女の人がなくなつたというつげがある。

男が死んだときは、鐘ははたかねえが、本堂の方でがたんとか、物が棚からおちた音がする。あれと思つていふと、つぐ日、つげが来る」(元総社阿弥陀寺)

お化けのはなし もう四十年以上も前のはなし。

勝山小学校の東、利根川の水面に、白装束を着た女の姿がうかぶと

いう。そして、かすかに鐘の音が聞けるといふ。

そんなはなしが、当時、前橋市にひろまつた。

お虎が淵の近くの川原が夜中に見物人のにぎやかだった。

それを、前橋に豊国覚堂という人がいて研究に来た。

それは、利根川の水がながれて、その波が白装束の女のように見えたと、波と波がぶつかつて、鐘の音が、なにかにひびいて、鐘の音のように聞えるに相違ないと説明したことがあつた。

(元総社阿弥陀寺)

わしが小学校六年生のときに上越線が開通した。

光厳寺の墓の一部のところを上越線の線路がしかれた。

それで、幽霊が出て、汽車を追いかけたといつた。(元総社)

お化けさわぎを解釈した学者先生 人がなくなると、町内の人がでて、順番に穴掘りをやつたもんだ。

むかしは土葬だったから、先祖様を掘りかえしてしまふことがある。

骨がでてくるとそれはそのままにしておく。

いくんちかたつて雨が降ると、墓から青火がでる。

それを見て、みんな大さわぎをする。

お化けがでたという。

学者がきてみて、

「あれは、人骨からでた燐が、しつげをくつて燃えて青火がでたんだ」といつた。

これで、お化けさわぎも一段落したといふはなしがあつた。(元総社) お寺へあいさつにいつたゆうれい 徳蔵寺のだん家に入ることになり、夕方、世話人の人などにあいさつにまわつた。

そのよく朝、急死してしまつた。

世話人の人は、寺へ知らせなくてとはと、一人で、寺へ出かけた。

寺の住職と奥さんは、二人づれが入ってくる様子を見て、二人分のお茶を出した。

おつれの人はどうしましたときかれ、しまの洋服を着ていたなどと言われ、世話人は、びつくりしてしまった。(稲荷新田)

生まれかわり あるところで、子供が死んだので、その子の名前を足の裏に書いてやった。もしたら、よその家へ生まれかわったという。

死人に呼ばれた話 これは、ある大工さんの話である。(青梨子前原)

あるとき酒をご馳走になつてきた。おかねをふところにしていた。家へ帰ろうとして、途中まで来ると、どんちゃんさわぎをしているところがあつてそこで、女の人が呼んでいた。

大工さんは、持っているおかねが苦になつて、おかねを置きにうちへ帰った。

そして、おかみさんに、「うちへ帰ってくる途中で、女の人が呼んでいたからこれから行くんだ」

といった。もしたらおかみさんは、「そこは、人がうんと死ぬところだからよせ」といった。

といった。

それで、その人はそこへ行かずに、助かったという。そこは、うんとさみしいところだという。(青梨子前原)

あの世を見た話 大病した人がいった。「ほんとに、あんなにきれいなところはなかった」

川があつて、きれいな花が咲いていた。死んだ人が、来いと手招きしていたが行かなかつた。(総社町新田)

あの世のこと 大病した人が見たのは、池があつて、そこにハスの

花が咲いていた。

きれいな人がいて、おいでおいでをしていた。

その人は、川を渡らずに帰ってきたという。(総社町総社) 大病の人が、夜寝ていたら、きれいな娘がいて、お花畑がたくさんあつて、娘がお花畑のむこうで、おいでおいでをしていた。

お花畑へ行くのに、橋を渡つて行かねばならなかつた。その人は、橋に足をふんがけたら、自分の名を呼ぶ人がいる。

「そっちへ行っちゃいけない」という。

それで、呼んだ方にひきかえした。そして、生きられたつて。(元総社)

モノグサモン ふだん仕事をきちんとやらないと、モノグサモンセックバタラキといわれた。(西箱田)

飯が仕事する 本家の番頭さんが、あるとき、旦那さんに、「てめえ、飯が桑原うないをするんだ」といわれた。

もしたら、その番頭さん、おんなしゆにむすびをにぎつてもらつて、畑へ持つて行つて、エンガ(柄鍬)の柄にくくりつけて、つくばりこんで、いつまでたつてもうちへ帰つていかない。

旦那さんが心配になつて畑へ行つてみたら、エンガを畑につつとおして、そのそばにあぐらをかいていたつて。

「どうした」

つて、旦那さんがいつたら、

「旦那が、飯が仕事をすつていつたんで、エンガに弁当くくりつけておいたが、飯は仕事をしてくんねえね」

つていつたつて。(前箱田)

飯をたんと食うものほうが仕事をたくさんするという。

越後から米つきにきていた人があって、一升飯をきれいに食って、一日中米をついていたという。この人は、田の年取りも早かった。

(西箱田)

むかし、農家で番頭さんをつかっていたうちがあつた。そんなうちでは、番頭さんにしきわり飯をくれていた。

ところが、あるうちで、その日は、米の飯をたいて、番頭さんにもくれた。

そのとき、旦那さんが、番頭さんに米の飯をくれるとき、

「今日は、米の飯をくれたんだから、米の飯が畑をうなうんだ」といったつて。

そしたら、番頭さんは、米のむすびを畑へ持つて行って、エンガの柄にむすびをぶらさげておいて、自分では仕事をしないでエンガを一日見ていたつて。

そして、夕方うちへ帰つてきて、旦那さんに。

「旦那、米の飯しや、エンガは動かねえよ」

といったと。(下新田)

坊さんの問答　むかしは、寺へ旅の僧がきて問答をかけた。その問答に答えられなければ、住職をやめさせられる(その坊さんと交代する)んだつて。

あるお寺へ、えらい坊さんがきた。

その坊さんもえらかつた。

旅の僧が、

「おまえの心はどうか」

と聞いた。

そしたら、その寺の住職はあちんべをした。

これは、「心は目にある」ということであつた。

そしたら、旅の僧は、

「よし」

といつて、その寺の僧は、住職を交代させられなかつたという。

山門は問答をかけられるからしまつていいる。(総社町総社)

しめた坊主　上郊村の井出の坊さんは、まえから坊主とか、しめた坊主といわれる坊さんがいた。

この坊さんは、お葬式がなくて野良仕事べえしていた。

昼休みをしていたら、葬式の知らせがあつた。

そしたら、思わずうれしくなつて、

「しめた」

と手ばたきした。

それで、あだながしめた坊主といつたという。(元総社)

嫁の齒　むかし、あるところで、仲人が双方の話がまとまつて、結婚式だというときに、仲人がまず嫁のところへ行つてこういつたと。

「旦那さんのものはでつかくつて、ひざくらいあるから気をつけろ」つて。

こんどは、婿のほうへ行つて、

「嫁さんのものはでつかくつて、両手をひろげて爪たつたくらいあつて、齒がはえているから気をつけろ」つていつたつて。

式もすんで、床に入った。

嫁は、旦那のものがどんなにでつけえのか見べえと思つていた。

婿も、嫁さんのもんには、齒がはえているつうから見べえと思つていた。

両方で見つくらしたつて。

男の方は、ひぎを折ってつんだした。

女の方は、両手のつめをたつてつんだしたつて。

しかし、あとで二人とも大したことはないということと一緒にたつて。(元総社)

大物の話　むかし、わかいもんが結婚した。

ところが、二人とも、相手のもちもんのことを聞いていた。

男のもんはでつかいという。

女のものには歯があるという。

二人は式の晩警戒しあつた。

男は、女のものには歯があるというから、本物でなくひぎを折つてもつていつた。女は、男のものがでつかいというので両手をだした。

女がさわつてみたらでつかい。

男がだしてみたら、爪があつたんで歯があると思つたつて。

二人とも、たまげたというはなし。

そのあとのはなしは知らない。(総社町総社)

大火　山屋火事と八百屋火事。八百屋火事は百二十年前という。

(総社新田)

アワガラ育ち　清野(野良犬)は、おかちで田のすくないところ。

ここではアワをつくつて、アワを食べていたから、アワガラ育ちといわれた。

清野には獅子舞がある。子供はこの獅子のことを、いもを食つてへをたれるといつた。

いもはへろくじゅうといつた。いもを食べるとへがでることをいつたもの。

この辺では、吉岡とか榛東村の方をかみごうという。こちらは、天水場で、田があつても、ふんだんには米がとれないといつた。

総社、東村方面のことは、しもごうといつた。こちらは、天狗岩用水があるので、米場であるといつた。(青梨子)

正月の門松のことなど　門松に、けえどの入り口にたてる。

門松のもとのころには、薪をまわした。

斉藤別当実盛は、長井家の先祖という。

長井では、松は縁起が悪いといつてゐる。むかし、実盛が松の木によろいをひつかけて、殺されたためという。(西箱田)

人力の乗り賃をまかしたはなし　むかし、あるおじいさんが、わかいころ、友だちと二人で迦葉山へあるきでおまいりに行つた。

帰りはあるいて来られねえ。

それで、沼田の人力車をたのんで乗つてきた。

それで人力屋も、お客様を人力に乗せて、歩く人と一緒にきたんじや意味がねえから、人力屋が歩いてゐる友だちに、

「あんたとわしと、前橋まで競争すべえじゃねえかね。」

それで、

「あんたが勝てば、あんたの友だちの乗つた賃金はいらぬ。わしが勝てばその賃金の倍もらいます」

てんで、約束して、それで、ヨイドンで沼田から人力屋ととびだし

た。そしたら、歩いてゐる友だちつう人は、足が強くつて、とびつ

が強くつて、沼田から前橋までとんでくるんに、腰にさしておいた煙草入れ(ドウラン)をおつことしたんのを拾うまがなかつたと、拾つてりや負けるから、拾うまがなかつた。

それで、とうとう人力屋を負かしちやつて、賃金をやらなかつたつて。

そのくらい足の強い人がむかしいつたつて。(元総社)

二階で米をとる (総社町総社) ムラが百戸あった。このとき、田のあつたうちが五戸ぐらい。

ほとんどのうちで、養蚕で生計をたてていた。かいは母屋の二階で飼うことが多かった。

それで、この辺の養蚕のさかんなところは、「二階で米をとる」といった。

うちによつては、棚のあいだに寝ていた場合もあった。

一晚中桑もぎしていて、そのまま寝てしまったという話も聞いた。かいはをしているところは、寝る時間はせいぜい、三時間か四時間だった。

十一時半ごろまでくわもぎしていて、そのあと風呂に入つて寝て、三時には起きた。桑つみに出て、まだ暗いというので、ざまの中に入つて寝ていたこともあった。あかるくなるのを待つていた。

夏蚕はあつくつて蚊がいたり。

晩秋蚕は雨つぶりが多かった。(総社町総社)

群馬町の辺は田のないところ、

かいはを、うちの中で飼った。

二階でもかいはを飼った。

まゆを売つたかねで米を買つて食べていた。

それで、「二階で米をつくる」といったもの。(元総社)

欲ふかの話 もらうもんなら、元日のとむらいでもいいという。

口にいれるもんなら、あんまの笛でもいいという。

だすんなら、領を監獄から出すのもいやだという。(元総社)

犬も忙しければ道端の糞にもくれず あるとき、人が畑で一生懸

命仕事をしていた。

そしたら、そこを人がいそがしく通つたんだって。

そしたら、畑の人が

「人がここにいるんに、じんぎもいわねえで黙つて通る。」

それを犬にたとえた。

「今、ここんここに、犬が通つた。」

つていつたら、そしたら、その犬にされた人が

「犬もいそがしいときには、道端の糞には目もくれねえ」  
つていつたつて。

そういうに、いいかえしたつて。(元総社)

犬と道端の糞 ある人が道端の畑で仕事をしていた。

そしたら、その人が急がしく通りすぎた。

すると、仕事をしていた人が、

「今、犬が行つた」

といつたつて。

そしたら、道を通つた人がそれを聞いて、やりつけえした。

「犬も、いそがしいときには、道端の糞にも目をくれねえ」

といつたつて。(元総社)

大岡様のなぞとき 大岡様がおおか利口なんで、なんでもとくとい  
うので、ある日、いたずらの人が、お寺の大門のところにしてあつた

糞を紙にのつてきて、

「大岡様、大岡様、この糞は男の糞か、女の糞か」

と聞いた。

そうしたら、大岡様は、その糞を見ていて、

「この糞はどこにひつてあつたか。」

「お寺の大門にしてあつた」

大岡様は、

「それは、比丘尼の糞だ」といった。

「男にも見えるが、女にも見える」と答えた。 (元総社)

**半夏の話** 半夏の日には田植をするなといった。

むかし半夏の日には半夏さんという人がいて、おおく忙しいので、畑の仕事もしなくっちゃならない。田の仕事もしなくっちゃならないと、気をもんで田と畑に片足ずつつこんで死んでしまったという。

それで、半夏の日には、田植をするなといった。

半夏のたけのこは食べられない。虫がわくといった。 (青梨子前原)

**ハンゲ田植** ハンゲ田植はするなといった。

ハンゲさんという人がいた。

あるとき、ほかの人が、ハンゲの日には田植をした。そしたら、ハンゲさんが若死してしまった。

それで、ハンゲの日には、田植をするなといった。

イヌの日にも田植をするなという。

そうすると、早死するなといった。 (青梨子)

**半夏の日のこと** 半夏の日には田植をしない。

いくら忙しくても、半夏の日には田植をするなといった。

また、タツの日にも田植をしなかった。

この日に田植をすると、そのとき植えた米がタツガシラののり (葬式ができる) になるといった。イヌの日に植えると、イヌダングになるといった。

むかし、半夏さんという人が、半夏の日には田植をしていて、おおくあつい日で立ち往生するほど働いたという。 (江田)

**ごぜさんの話** むかしはごぜさんがめくらで三味線をもって、人の

うちの座敷へきて、歌をうたって、いくらかのお鳥目をもらって収入を得た。そういう人がきて、それである農家の家へ泊るんに、泊りつけの家があつて、そこんちへ泊つたら、その家の旦那が女癖が悪くつて、ごぜさんの泊つた寝床へはいこむんだつて。

そしたら、おかみさんが気をきかせて自分の寝床へごぜさんを寝せて、自分はごぜさんを寝せる寝床へねていたつて。

そしたら、案の如く旦那がはつてきて、それで、

「ごぜさん、ごぜさん」  
つて呼んだ。

おかみさんだもんだから、だまって物いわず抱かれた。

それで、あかるくなつてみたら、自分のおつかあだつた。 (元総社)

**ヨバイの話 (失敗談)** 東国分はむかしから養蚕のさかんなところであつた。そのために、ほうほうから、わかいしゅやむすめが手伝いに来ていた。

わしもわかいころ東国分へ手伝いに行った。

わしが手伝いに行つたすぐ隣のうち (糸さんのうち) にきれいな娘さんが働きに来ていた。そのうちには、番頭さんもいた。わしは、その番頭さんと懇意にしていた。

初秋蚕のころ、二番蚕がすこし残つていた。おくれつこにくれる桑つみに行つた。

実は、糸さんの畑とわしのいつている家の畑は隣り合つていた。

わしは、畑の境際で桑つみをしていた。

そしたら、隣の畑に、半田あたりから仕事にきていた娘がいた。

わしが、

「もう、おかいこあがつたんですか」  
つていつたら、



「一棚くらいおくれつこにくれる桑つみにきました」といった。

わしがじようだんに、

「今夜遊びに行つていいかい」

というと、

「だめですよ」

といった。

娘さんをはからかつて、桑をつんでうちへ帰ってきた。

夕飯を食べてから、うらのあきないやへ遊びに行つた。

娘と同じところに奉公している番頭さんが遊びにきていた。

「寅ちゃんいいかい」

「来うやれ」

寅ちゃんに昼間のことを説明した。おたくの娘さんと話し合つたといつた。

「うまくいつたらおごるからな」

わしは、寅ちゃんと約束した。

わしは、夜の更けるのを待つて娘のところへ行つた。

番頭さん(寅ちゃん)が気をきかせて大門のくぐり戸の鈴の中に紙

をつめて、音がしないように細工をしていてくれた。

わしはそおつと屋敷の中に入り、お勝手の方へまわつた。

蚊帳の中に娘が三人べて寝ていた。

蚊帳まくつておいて、昼間の娘さんはどれだつたんべえか、きりよ

ういい娘さんだつた。

「この人だな」

わしは、その娘さんをゆすぶりおこした。いくらおこしても起きねて、寝巻の上から股へ手をつつこんでも起きねえ。

三回目鼻つまんだ。

そしたら娘さんが目をさました。

おたがい顔を見合させた。

「きやあ」

といわれたら逃げようと思った。

ところが、

「きやあ」

ともいわない。わしの顔を見て、

「あなたは昼間の人だね、ほんとに来たんかい」

「約束だもん」

「今夜はどうだ」

「今夜はだめだ。明日の晩来お、今度は恥かかせね」

わしは、それからすんなり帰つたよ。

つぐ日は日の暮れるのが待ちどおだつた。

その日、寅公にいきあつた。

「ゆうべはこういうわけだつた」

「馬鹿だなあ、無理にやればよかつたのに。おめえは馬鹿だよ、あの

女は、今日、給料もらつて帰つたよ」

利口な女にや、男もだまされるつう話だ。(二元総社)

あめつぷり正月 雨が降ると、仕事を休んだ、そんなときは、あめつ

ぷり正月といつた。

雨が降っているのに仕事をしていると「うちをさかさにして金魚を

飼え」

といわれた。

「同じぬれるのなら金魚をながめているほうがいい」

といつた人がいたという。(西箱田)

門松のたたき むかし、あるうちで、門松につかうお松をとるのが面倒なので、杉の木をお松の代りに使った。

そしたら、そのうちの主人が病気になる。渋川のお稲荷様にもてもらったら、松の代りに杉をお松として使ったのが悪いということがわかった。

それで、おわびしたら、主人の病気も治ったという。(青梨子前原) 前原とアワ むかし、前原ではアワをつくって食べていた。そのために、まわりの人が、

「前原のやつは、アワべえ食っていて、体が軽いから、大渡橋を渡るとき石を抱いて渡れ」といわれた。

また、風呂に入るとき、石を抱いて入るんだんべといわれた。まわりのとしよりにさわがされた。(青梨子前原)

水酒のはなし むかしの酒屋のはなし。

ある酒屋で、酒を売るとき、水をすこしうすめて売っていたという。ところが、親類の家へは、うすめないでやっていた。

そしたら、親類から、

「よそんちへは、うんめえ酒売って、おれんちへは、まずい酒売るんか」とおこってきたって。

それで、酒屋の主人が

「本当の話すべえか」といって、はなしたら、

「そうか」といったって。

酒は、ちよつと水を入れたほうがうまいという。(下新田)

オコトの日 二月八日がおことはじめ。

十二月八日が、おこしまい。

二月八日には、メカイを竹の竿の先に結いつけて、庭先にたてた。この日、天竺からかねをさずけてくれるといった。天からかねが降ってくるといった。(西箱田)

吉沢家のたきおこわ 総社の吉沢家は、この芝おこしである。

同家では、毎月、一日、十五日、二十八日の三日、たきおこわを炊く。

これを、朝御飯のときに家族で食べる。

そのとき、旦那さん分を一杯残しておき、これを旦那は昼食のときに食べる。

家族はふつうの食事をする。

なお、おかみさんが、たきごわめしを屋敷内の神仏に供えてあるいた。(総社町新田)

もりつこ湯 むかしの嫁さんは、風呂の世話をしたり、近所の人に對してお茶番をしなければならなかった。

そして、しまい湯に入るので、嫁さんが風呂に入るときは、みんなが入ったあとで、風呂の中にはあかが浮いていた。

風呂からあがるときには、あかをしょってでる(体中にあかをつけてでる)。

それで、しまい湯のことをもりつこ湯といった。(元総社)

夜泣石 子供が夜泣きをするときは、石神様におがんしようすると治るといった。

お札に、青竹で手桶のようなものをつくって、二本あげる。(元総社) 虚空蔵 むかしは、貧乏人の子供は、よく、親のたしになったもんだ。

あるところに、利口な子供がいた。

「おとつあん、おつかさん、十三仏の一番しまいはなんたっけ」と聞いた。

そうしたら、

「こうくうぞう」

と答えたって。

「子を食う」ということである。(元総社)

**給料のきめ方** あるとき、主人と奉公人が一年中の給料をきめることになった。

そしたら、奉公人がこういった。

「雨が一日のう、たとえ一粒でも降ったときには、給料はいらない。朝っから晴天でいい日だなというときは給料をもらうときめましよう」

これどうなったかという、雨がすくなつて、余計働かなければならなくて、奉公人は負けたということだ。(元総社)

**伊勢参りの話** 伊勢参りをするのに、コンニャクとみそこし一つをもつて行ったという。

コンニャクを食べて旅をすると、食いもんがいらねえんだって。

コンニャクを食べて、でたのをみそこしでうけて、それを洗って、また食べるという。

それをくりかえしているうちに旅が終るんだって。

伊勢参りができるという。(元総社)

**コンニャク一つで伊勢参り** むかし、コンニャク一つ持って行って伊勢参りをした人がいた。

コンニャクは食べても消化しないでそのまま出る。それを洗つてまた食べる。

こうして、コンニャク一つで旅をしたという。(元総社)

**伊勢参りのはなし** むかし、とんがらしを持って行って、それを売りながら伊勢まいりをした人があつたという。

また、コンニャクとすいのうをもつて伊勢まいりをした人もあつたという。

コンニャクをたべてはだして、すいのうでうけて、洗って、また食つて、出して、それをくりかえしながら、伊勢まいりをしたという。

上石倉の忠助さんという人は、伊勢まいりに行くとき、わらじをいっぱい持って行って、それを売って、帰ってきたときには、えらい大尽になつていたという。

世間には、忠助わらじとか、忠助大尽といっている。(元総社)  
**鏡をはじめて見た人のはなし** 鏡をはじめて見た人が人にわらわればなし。

あるところにおばあさんがいて、娘を嫁にくれることになつたので、いい鏡を買つてきてやった。

そしたら、その鏡をおばあさんが見た。

その鏡はうつりがいいといつていたので、おばあさんも見た。

そしたら、おばあさんは、

「てめえは妹じゃねえか」

といつてたまげたつて。

妹はよそむらへ嫁に行つていたが、おばあさんにそっくりだった。

せがれが、

「おばあさん、それはおばあさんの顔が映つてるんだよ」

といつたが、

「妹だ」  
という。

そして、自分に似ているという。

「似ているはずだよ、姉妹だから」

といったって。(元総社)

番頭さんが参ったはなし　むかし、あるところで、番頭をつかつている家があった。

えびす講の晩に、番頭さんにうんとご馳走をした。

「今日は一年に一回のえびす講だからうんと食べ」  
つて、食わせたつて。

番頭さんたち、それはそれは食ったつて。

夕飯がすんでからのこと、主人が番頭さんたちにこういったと。

「みんながなあ、夕飯食べたら、はなしを聞いてくれ。おらがちじや、先祖の時代からかれないになっていることだが、えびす講の晩には、この秋とれる俵の教だけちようばしをこしらえることになつてるんだ」ところが、番頭さんたちは、欲をかいて食ったもんだから、どうにもごめない。

「旦那様、是非かんべんしてください。明日の晩から、二人分でも、三人分でもつくりますから」

とあやまつたつて。(元総社)

ちようばしつくり　むかし、奉公人があるうちで、えびす講の晩、主人が

「今夜は、えびす講だから、ご馳走をうんとつくる。うんと食べる。」  
つていった。

あいだ(ふだん)は、ひきわりめしになつぱにこうこうくらいしか食べていない。

奉公人は、主人にそういわれたもんだから、欲かいて食べた。

ごめることができないほどうんと食べた。

夕飯が終つてから主人が、

「今夜は、まい年のかれいでやつてるんだが、ちようばしをつくつてもらうことになつてゐるんだ」といった。

奉公人たちは、おおか欲かいて食べたもんだかうごめない。ちようばしづくりなどできない。

それで、主人にあやまつて、ちようばしづくりをやめてもらつたつて。(元総社)

俵つべしの話　ある大尽のうちで奉公人をつかつていた。秋のこと、おえびす講の晩だつた。

奉公人たちは、えびす講だといふので欲かいてうんと食つた。ふだんはご馳走など食べていないので、立つていられないほど食つた。

そしたら、旦那さんが、  
「今晚、うちでは、親の代からかれいとしてきめられてゐるんだけど、たわらべしをあんでくれ」といった。

たわらべしをつくるには、ごごならないとだめ、たくさん食べているからそれができない。

奉公人は逃げだしたと。(元総社)

田の草取り　むかし、あるところに、田圃をうんとつくつてゐる人があつて、奉公人をたのんで田の草取りをさせていた。

ところが、その奉公人、田のまわりの草しかとらない、そこで、主人は考えた。田の真中に酒の瓶をおくことにした。

夕方、奉公人が帰つてきたので聞いてみた。

「田の草取り、みんなやつたか」

「やつたよ」

「田の真中になかなかつたか」

「なかつたよ」

「おめえ、田の草、きちんをとらなかつたな」

それで、奉公人が、きちんと田の草取りをしなかつたことがわかつた。つて。(青梨子前原)

田の草取り異聞　むかしは、田の草取りははつてとつた。

広い田圃があつた。番頭さんたちが、その田の草取りをした。

ところが、田のクロに立つて、見えるところはきれいにとつて、田の真中のほうは水をにごすくらいのものであつた。

それを旦那さんは知つていた。

それで、旦那さんは、酒一升とぼたもちを風呂敷に匂んで、田の真中においた。それを飲んだり食つたりしてもいいことにしていた。

夕方になつて、番頭さんたちが帰つてきた。

「旦那、田の草取りが終りました」

「そうか、ところが、田の中に風呂敷包みはなかつたか」

といつたら、番頭さんたちは、

「なにもありませんでした」

と答えた。

「てめえら、田の草取りをごまかしたな」

つて、旦那さんにおつちあられたつて。

きちんと田の草取りをしていなかつたことが、それでばれたつて。

(元総社)

田の草取り異聞　番頭さんが、広い田の田の草取りをした。そして

ら、田のまわりだけしか田の草取りをしなかつた。

それを旦那が知つていた。

ある日、旦那が、その田の真中に酒の一升瓶をおいた。

番頭さんが、夕方帰つてきたので旦那が聞いた。

「田にいいもんはなかつたか」

「なかつた」

それで、番頭さんが、田の草取りをきちんとしなかつたことがわかつてしまつたという。(小相木)

ひろい、何反という田圃を、ある大尽のうちでつくつていた。

むかしは、田の草を手ではつてとつていた。

旦那さんが、その田の真中に酒一升とご馳走をつくつておいておいた。ご馳走のあるところまでとれば、のんだり食つたりしてもいいとした。

ところが、奉公人は、田のクロにたつて見るところまでしかとらない。真中の方はとらないでいた。

夕方になつて、

「旦那、田の草取りが終りました」

「ご苦労様。田の真中になかなかつたか」

「なにもみえませんでした」

それで、田の草取りをごまかしたのがわかつたつて。(元総社)

奉公人と田の草取り　むかし、あるうちの奉公人が、田の草取りを

するのに、田のまわりだけとつて、きちんをとらなかつた。

それを主人が知つて、あるとき、田の真中に、酒徳利をそつとお

ておいた。

そして、夕方になつて、奉公人がうちへ帰つてくると聞いた。

「田になかなかつたか」

「なにもなかつた」

これで、奉公人が、きちんと田の草取りをしなかつたことがばれた

という。(総社町立石)

越中さんの田の草取り 養蚕をさかんにやっている時分には、田の草取りをやっているひまがなかった。

そのために、田の草取りをたのんだ。

年々きまつていて、手紙をやるときにくれた。富山県からくるので、越中さんといった。

まゆの乾燥場に宿をとって、ムラ中の田の草取りをした。

夏秋蚕をするので、田の草取りをやつていられないのでたのんだ。

五く七人くらいの人 came。一カ月くらい泊つていた。順にたのんでとつてもらつた。たのんだうちで食事をだした。

一反歩いくらで支払つた。

昭和の初めごろまできていた。(小相木)

奉公人をよく働かせる方法 朝、主人が奉公人に、

「今晚は、おらちじゃあわごわめしだ」という。

そうすると、奉公人は、飯がうまいようにと、日中うんと働くという。

奉公人は、食べただけ余計に働いたという。前触れをしておいて余計働かせたという話。(青梨子)

給料を減らされた話 沼田の方のはなし。

奉公人をたのむというので、給料をきめることになった。

それで奉公人が雇い主のうちへ行つた。

そしたら、ひえやきもちをやいてだされた。その人は、そんなものを食つたことがない。

それで、まづくつて食えなかつた。

そしたら、給料がすくなかつた。

そのやきもちを、

「おいしい、おいしい」

といつて食えば給料をたくさんもらえたという。(元総社)

ある番頭さんの話 むかし、わしのうちで長く使つていた番頭さんがいた。

そのおじいさんは、十日というとき、どんなに忙しくとも、高崎の金毘羅様へかならずおまいりに行つた。この日が金毘羅様のご縁日であつた。

おじいさんは、そこでかなづちとかのこぎりなどの大工道具を買つてきて、大工仕事の真似をしていた。しかし、あまり上手ではなかつた。

このおじいさんは、お茶が好きで、朝早く起きて、鉄瓶で湯をわかして、それを一人で飲んでた。

また、このおじいさんは、アオイの花が好きで、買ってきて自分で手入れをしてた。

このおじいさんは、あずきを食ると休めといわないのに、この日は休み日だというので休んでいたということ。(江田)

将棋湯 二人で風呂に入つていた人がいた。

一人の大将が先に湯からあがるべえと思つてたつた。

そしたら、しずんでいる者のあたまに立つた者のきんたまがぶつかつた。

しずんでいるものが、立つている者のしりをひつかいた。

「なに人の尻をひつかくんだ」

といつたら、

「てめえが、てつぺんきんをくれたから、おれはしつかく」といふたつて。

将棋になぞらえたはなし。

てっぺんきん：王様のあたまたに金をはるること。

しっかく：相手の王様のあとの方に角をはること。(元総社)

字の読み方 ある田舎のおじいさんが、娘を東京に嫁がせたんだと。そこへおじいさんがお客に行くんに、紋付羽織袴で、土産を持って出かけたって。

そうしたら、せがれが、

「おじいさんのう、東京つうところは生き馬の目を抜くにぎやかなところだから、気をつけて道を渡りな。安全地帯のところまで歩いていて、そこでよく左右をみて、また、のこりの道を渡れ」と教えたよ。

おじいさん、そのとおりにやったと。

ところが、うちへ帰ってきていうには「東京は、せがれがいうほどのことはなかった。安全地帯というところもなかった。看板が出ていたからそれを読んだ。帯地が全き安いとあったから、買っていくべえと思つて、店をさがしたがなかったよ」

おじいさんは、「安全地帯」というのを、逆に読んだわけだ。

(元総社)

イナゴの夫婦 あるところに、イナゴの夫婦(旦那さんのほうがおかみさんより小さい夫婦)がいた。

ある日、夕立がしてくるんで、おかみさんが急いで、畑へおしんのみをとりに行った。

子供がそばにいたんで、その子をおんぶして行った。

おかみさんが、ナスをもごうとしたら、

「おつかあ、そりゃ、たねナスだからとるんじゃないやあねえ」  
つて背中であつた。

よく見たら、それが旦那だったって。(元総社阿弥陀寺)

ノミの夫婦 あるところに、ノミの夫婦がいた。

ある日のこと、雨が降りそうなので、おかみさんが、子供をおんぶして、いそいでナスもぎに、ナス畑に行った。

おかみさんが、ナスをもぎはじめたら背中で

「おつかあ、それはたねナスだからもぐな」と

いってつた。

おかみさんがみたら、子供だと思つておんぶしてきたのが、亭主だった。(元総社)

むかし、あるところに、かみさんのほうが亭主より体の大きいノミの夫婦がいた。

あるとき、雨が降りそうだ、子供はわんわん泣いていた。

それで、おかみさんは、子供をおんぶして、畑へおしんのみをとりに行った。

そして、ナスをもぐべえと思つて、ナスに手をかけた。もとなりの

いいナスだった。

そしたら、背中で、

「おつかあ、そりゃたねなすだい」と

いってつた。

みたら、あかんぼうじゃなくつて、亭主だった。(元総社)

のみの夫婦(なすもぎの話) むかし、あるところにのみの夫婦が

いた。

あるとき、おかみさんがナスもぎに行くといふので、旦那を(子供だと思つて)うぶつて、畑へ行ってナスをもごうとした。

そしたら、背中で、

「おつかあ、そりゃ種ナスだい、もぐなや」  
っていったって。(元総社)

あるところにノミの夫婦がいた。

ある日のこと、おかみさんが畑へナスもぎに行くのに子供をおんぶしていったと。

そして、畑へ行つて、ナスをもごうとしたら、背中で、

「それはたねナスだ」

という声がする。

みたら、それは旦那さんだつたつて。

「なんだ、おめえか」

といって、おかみさんは、旦那さんを畑へほうりだしてきたつて。

(下新田)

子をつくる時期について　むかし、伊勢の大神宮様のところへ、ネコと犬と行った。

「大神宮様、大神宮様、一年にいく度子をこしらえたらよかんべ」と聞いたつて。

そしたら、大神宮様が

「てめえらは、人に飼われてかわいがられている立場だから、一年に四回くらいでよかんべ」といった。

ネコとイヌは、一年に四回ときめてもらつて、「はあよかつた」つて帰つてきたつて。

そこへ馬が行つて、

「大神宮様、大神宮様、一年にいく度子どもをつくつたらようんべ」と聞いた。

そしたら、大神宮様が、

「てめえは、図体がでつけえから、一年に一回でよかんべ」といった。

馬は一年に一回というのでおこつて、はねたんだつて。そしたら、大神宮様の目に砂がとびこんで、

「目が痛い」

と、かんかんになつておこつた。

そこへ、こんどはニワトリが行つて、

「大神宮様、大神宮様、わしらは、一年にいくら子をうんだらよかんべ」といったら、大神宮様が、

「やかましい、勝手にしやがれ」

といった。

それで、ニワトリは、勝手に子(タマゴ)をうんでいるんだつて、毎日のようにタマゴをうんでいる。

馬の子は十二カ月腹の中にいるもんだから、人間が妊娠しているときに、馬のたずなをとるとか、馬に乗ったりすると馬にかせて、子供が腹の中に十二月いるという。馬月になつてしまふといわれた。(元総社)

ネコと人間　ネコはふけると、近所中にぎやかにさわぐ、それで、

子供をうむときは内緒でうむ。

ところが人間はちがう。

子供をつくるときは内緒でつくつて、うむときは人だのみでさわぎをやるというつて、ネコが笑うという。(元総社)

ネズミのお産　ネズミは、子をつくる時にはにぎやかであるが、子を産むときはこつそり産む。



ところが、人間は、子をつくるときはこつそりつくつて、産むときになると大き過ぎるといふ。(総社町総社)

本焼きだ 瀬戸物屋のおじいさんが、市日に道端に店をだしたつて。道にむしろを敷いて、瀬戸物を並べて売っていた。

むかしのことから、おじいさんは六尺ふんどしをしめていた。

おじいさんは立ひぎして売っていたがふんどしから、大事なものがころがりだしていた。

お客のひとりが、それをみて、こんなことをいった、すると、おじいさんも答えた。

「でたのう」

「市日なもの」

「でっけえのう」

「いちばんだ」

「色がいいのう」

「本焼きだ」(元総社)

一番えらい人 あるとき、えらい台風があつて、山のでっかい石が道路にころがりおつて、交通もできなくなつちやつたつて。

それで、「石屋がきて、ちんかん、ちんかん、その石を割つてこまかにして、道をあけて、馬や車を通したつて。

そしたら、そこへおまわりさんがきて、

「なんだ、こんな道端で仕事していちや、往來止めになる。いますこしはじ寄つて仕事しろ」

つて、おまわりさんにおつつあれた。

そしたら、石屋さん

「はじよつて仕事しろつて、台風で山から石がころがり落つて、道をふさいだのを、おれがおつかいて、道を返すべえと思つて、親切にやつ

てるんにはじによれつて、おらあがまんが出来ねえ。石屋やめておまわりになる」

といつたつて。

そうしたら、そこに石屋さんのおかみさんがいて、

「だめだよ、おとうちゃん、おまわりさんの上には署長さんがいて、署長さんが駄目だといえばおまわりさんにもなれねえよ」

「そうか、それならおらあ署長になる」

「署長さんになつたつて駄目だよ、その上には県知事さんというえらい人がいて、その人が駄目だといえば、署長さんにもなれねえよ」

「それじゃおらあ県知事になる」

「県知事になつたつて駄目だ。こんだその上に総理大臣という人がいて、総理大臣が駄目だといえば、その県知事も駄目だ。」

「じゃ、おらあ総理大臣になる。」

「総理大臣になつたつて駄目だよ。こんどは、天皇陛下という人がいて、その天皇陛下が駄目だつていえば総理大臣もなれねえ」

そしたら、石屋さんが

「おらあ、それじゃ天皇陛下になる」

「天皇陛下になつたつて駄目だよ。お天道様つうもんがいて、そのお天道様が、天皇陛下だつて駄目だつていえばどうにもならねえだ。」

そしたら、石屋さん

「それじゃ、おらあお天道様になる」

「お天道様になつたつて、雲つうもんがあつて、雲が仲間をうんと寄せて、雲があつまりや、天道様はかくねてしまふんだから、天道様も駄目だ」

つて。

「じゃ、おれは雲になる。」

そしたら、

「雲なつたつて駄目だよ、風つうもんがあつて、風が一吹き吹きあ、雲はふつとばされちゃつて、駄目になつちまうんだ。」

「じゃ、おらあ風になる。風になつてうんと吹いて、雨降らせて、あの山の石をまた道路へころがりおとせば、人が通れなくつておもしろかんべなあ」

つて。そうに石屋さんがいつたつて。

「駄目だよ。風になつて、石ころがりおとしたつて、石屋つうもんがいて、ちんかん、ちんかんおつかいて、それをこまかにして、どかせりや、道も通れるよ。」

「じゃ、おらあ、石屋になる」

そしたら、おかみさんが

「あんた、もともと石屋じゃねえんか」  
つていつたら、

「うん、そうだったなあ」  
つていつたつて。

いじやじばつたん むかしは、機を織るのに高機でなく、いじやじばつたんを使つていた。これはうしろへのけぞつて織るようになった。

あるところで、おばあさんが、座敷のすみで、布団皮を織つていた。近所の人があつてきて、それを見て、

「よくごせいがですすね」  
といつた。

「ええ」

「くらやみでよく見えるね」

「ええ、なれてればねえ」

「それにしてもでつかいねえ」

「布団皮なもの」

「布団皮にしちゃあ長いね」

「二反つづきなもの」(元総社)

隠れ霧 神社の西では隠れ霧がでた。小野小町の顔に傷があつたので霧隠れをした。(元総社第二)

#### 四、その他

よく聞いた話 カノウ(金尾、鳥羽西部)のやつらケンカにこい。ふんどしがじゃまなら、つかぶつてこい。金玉がじゃまなら、ひんにぎつてこい。(鳥羽)

総社の学校 ボロ学校 つつかえ棒が一本(鳥羽)

東の学校はボロ学校つつかえ棒が一本。

西(箱田)のやつらケンカにこい。金玉じゃまならひつかついでこい。(東箱田)

言葉のいろいろ じんじく：：つりあいがとれていること。「じんじくしている」という。

似合つていふこと。

だくねえ：：だくねえやろうという。

働きのない者のこと。

「あのやろうは、だくねえだ」という。

かがやく：「かがやいてみる」ということは、「さがしてみる」ということ。

おこえ：：午後のおやつ(間食)のこと。

はやす：「桑はやし」というつかい方をする。これは、「桑切り」のこと。養蚕のときにかぎっていう。

おきりこみ：めんを幅広く切ったものを、生のまま汁の中に入れて煮たもの。野菜をたくさんいれて煮る。

あずきぼうとう：盆のときにする。

めんを幅広く切って、あずき汁の中に入れて煮たもの。

十五日の朝あずきぼうとうをつくって、盆様にしんぜて、そのあとうちの者が食べた。昭和二十年代のころまでやっていった。

なお、彼岸のはしりくちのときには、小麦粉をこねておしんこをつくって、あんこの汁の中に入れて、仏様にあげた。

これは、おしんこといった。

おこもち、油もち

前原では、八十八夜の日に餅（あんびん）をつく。これをおこもちという。

よそでは、四月十五日につく。

もちは、神様、仏様にあげる。

この餅を食べると、おおごとの仕事をしなければならないといった。秋の仕事がおわると、油もちをついた。この辺ではしなかった。

ふなもち：蚕のふな休みのときについた餅のこと。

あげもち：蚕が上簇したときにつく餅のこと。

すすりねじ：お彼岸のはしりくちのときに、すすりねじをする。

小豆の汁の中に、小麦粉をこねてつくったつみつこをして入れたものの。

しんこ：小麦粉を水でこねて、つまんで、汁の中に入れて煮たもの。今はすいとんといっている。（青梨子前原）

ことば二題 ムラハチブのことは、帳外しといった。

夜遊びのことは、下水まわりといった。

むかしは、娘が台所（ながし）で洗いものをしていた。ながしのころは、さまで、障子紙がはってあった。

わかいしゅうが夜遊びにきて、さまの障子紙をなめつつあばいて、顔を見て名を呼んだ。

さまの下には下水をためておくかめが埋けてあった。わけえしが、そのかめに足をふんごんだというはなしもある。（元総社）

いろいろのこと 一月十一日さくたて、はたけへ行つて、三さく、さくを切つてご幣をあげてきた。

日でのときは、雨乞いをした。わかいものが、榛名神社へ行つて、水を一升もらつてきた。

ムラの人たちが、神社へよつて使いの者が帰ってくるのを待つていた。

五月二日の八十八夜の日にもちをついた。おこもちという。

かいこが三回やすむと、ふなもちをついた。これを地獄もちともいった。

かいこのあげいわいには、おこもちをついた。

あぶらもちは、十二月十五日に、田場の方の人はついたが、この辺ではつかなかつた。

田のないうちでは、かいこの収入にたよつていた。それで、「二階で米をとる」といった。

ご祝儀のときは、田の米を買つてだした。

小作米は、一反に三俵だった。小作米のことは上納米といった。

地主のことは、じょうやといった。（青梨子）  
言葉の遊び そうかこしがや、しんじゅの先  
しょうゆうこととは、つゆしらず

たいしたもんだよ、いなごの小便

とんまがはしれば、あんまもはする。

まぬけでぬければ、けぬきはいらぬ。

なにかようかい、ここのかとおか。

けつこう毛だらけ、ねこはいだらけ

みあげたもんだよ、やねやのきんたま。

とんだはなしだ、ひこうきだ。

銚子の浜でいわしがとれる 調子のいい人のこと。

ははの三年忌。

ありがとうなら、いも虫ははたち。

おおけい、おおけい、しょんべづおけ。

日暮門の東照宮。(総社町総社)

オニッコ 親に似ない子のこと。(西箱田)

地口 おじさんごっこだ。実正かい。

後閑、朝倉、女のよばい。男後生楽寝てまちろ。(下石倉)

いろいろのいい方(方言) クワハヤシ：桑切りのこと

コジョウハン：おやつのこと。田植のときは、オコエといった。

オウサン：口がためのこと。タルイレともいった。

オコモチ：四月十五日につく餅、これから蚕がはじまり、農作業が

忙しくなるといった。

アグラモチ：十二月十五日につく。農作業が一段落したことを祝う。

(下石倉)

いろいろの言葉 あぶのそうだち：集っている人が一度に席をたつこと。

千三：うそつきのこと。千いった中で三つしかほんとうのことがないという。万三とか、万からという言葉もある。

半鐘泥棒：背の高い人のこと。

放送局：おしゃべりの人のこと。NHKともいう。

せえふるむこ：婿にきて、何度もでたり入ったりする人のこと。

共用便所：尻軽女のこと、誰とでもつきあう女のこと。

風呂敷嫁御：ふつう、嫁に来るときはたんす長持を持ってくるとい

うが、風呂敷一つで嫁にくる者もあった。

のみの夫婦：いなごの夫婦：旦那さんの方が小さい夫婦のこと。

(下石倉)

いろいろのこと 謎

朝早く起きて、一本道通るものなあに：雨戸

この辺は、養蚕がさかんであったので、「二階で米をとる」といった。

道祖神は兄妹夫婦という。

オサキ大尽といわれるうちがあった。

オサキを飼っていて、粉箱の中に入って体に粉をたけて、粉をはこ

んでくるといった。

オトウカに化された話

オトウカに化かされた人は、あめおけを風呂だと思って入ったり、

馬糞をばたもちだといって食ったりしたという。

オトウカの嫁どり

子供のころ、本家の山のあたり、提灯がならんで通ったことがあつ

た。

それを、オトウカの嫁どりといった。

もりっこ湯

むかしの嫁さんは、しまい湯に入った。

しまい湯はあかが浮いていた。それでしまい湯に入ると、体にあかをたけて出てくる。あかをしょって出てくるので、むかしの人は、も

りっこ湯といった。(青梨子前原)

諺 お犬のたねとなすびの花は、千に一つのむだがない。(元総社)

「女のよばいと越中ふんどしはずれっこなし」(総社町総社)

などなど なんぞといった。

「なんぞやるべえや」

といって、子供たちが、こたつにあたりたりしてやった。

出題者と解答者がいた。

「おれがかけるなんぞがとけるか」

といつてだした。

おふろの中のおならとかけてなんととく。おつきさまととく。心は、

あがつて草木をあらわす。

芸者の借金をかけてなんととく、鉛筆ととく。心は、しりで消す。

池にそりはし、だんごちんこなあに、てつびん。

おたけさんのはらから、でたり入ったりするものなあに、かぎ竹。

一里きて、二里きて、三里さきの大火事なあに：きせる。

なぞがわからないときは、「しつぽをまいた」という。

交代で問いを出した。

ルールのようなものはとくになかった。

自分の番でなくも、答をおもいつくと「こういうのはどうだ」と横

からいつたりした。(元総社)

湯の中の屁とかけて、なんととく、お月様ととく。

心は、あがつて、くさきをあらわす。

芸者の借金とかけて、なんととく、鉛筆ととく。

心は、尻でけす。

冬のうぐいすとかけて、なんととく、破れ障子ととく。

心は、はるをまつ。(元総社)

朝早く細道をとおるものなあに：雨戸。(総社町総社)

なぞときをするときには、はじめに、「なぞなぞなあに、なつきりぼ

うちょうきりぼうちょう

といった。

いっくら切つても切れないものなあに：水

けずればけずるほど太るものなあに：穴(西箱田)

なぞなぞあそびをはじめるときにいうことば

「なぞなぞなあに、なつきりぼうちょうきりぼうちょう、その上はな

あに」(小相木)

なぞをかけるときは、

「なんぞなんぞなあに、なつきりぼうちょうきりぼうちょう」

といった。(江田)

「なんぞ、なんぞなあに、なつきりぼうちょう、きりぼうちょう」と

いった。(江田)

なぞときをするときには、はじめに、

「なぞなぞなあに、なつきりぼうちょうきりぼうちょう」

といった。(西箱田)

「なんぞなんぞなあに」といった。

なんぞをはじめるときは、じゃんけんをして、かけるものと、とく

ものをきめた。

なんぞがわからないときは、「まいった」といった。

1501

あたったときは「あたり」といった。

お正月のときなどは、なんぞを一つとくひとに、みかんとか、から  
まめ(落花生)をかけたこともあった。(元総社)

謎のことは、なぞといった。

わからないときは、「わからない」といった。

わかったときは、出題者が、「ご名答」とか、「よかった」などといっ  
た。

きりをつけて、つぎにいった。(江田)

子供があつまると、

「なぞかけすべえ」

といつてはじめた。

さきに口をきいたものがはじめになぞをだした。

「なつきりぼうちようきりぼうちよう」

といつてはじめた。

なぞをかけられると、みんなで答えた。

そのなぞをあてた者が、次になぞをだした。

なぞは、おもに寒いときにした。

とけないときはだまっていた。

なぞがあたると、出した者が、「あたり」といった。(川曲)

謎のことは、「なぞ」といった。

なぞをはじめるときは、なぞなぞなあと、なつきりぼうちようきり  
ぼうちよう、きつてもきつてもきりきんねえ」といった。(総社)

お竹さんの腹から出たり入ったりするものなあと：：かぎ竹。

(元総社)

一里先二里先三里先の大火事なあと：：きせる。(元総社)

一里行つて二里行つて三里先の大火事なあと：：きせる。(元総社)

いくら切つても切れないものなあと：：水。(西箱田)

朝別れ夜一緒になるものなあと：：門の扉。(元総社)

赤い帽子かぶつてだんだん小さくなるものなあと：：ろうそく。

(元総社)

朝早くはだしであるくものなあと：：二ワトリ。(元総社)

朝早く細道通るものなあと：：雨戸。(総社)

はやす よそへ行くと、「クワハヤシ」という言葉を聞く。

ここではあまりハヤスという言葉をつかわないが、聞いたことはあ  
る。おもにクワの木を切ることをいった。(江田)

じんじく あれとこれと、つりあいがとれているとき、じんじくし  
ているといつた。

似合いの夫婦だというようなきにいった。(元総社)

はやす

はやす：「はたけでものをはやす」といった。切ること。(青梨子)

はやす：桑を切ることについていう。

桑をはやすといつた。

五月のころ、桑を切つたあと、残桑がある。それを「みんなはやし  
てこい」といわれたりした。(江田)

はやす：蚕のとき、桑を切ることという。くわはやしという。養蚕  
のとき、桑を切ることだけにいう。(元総社)

かがやく としよりの人が、そこらやたらかがやいているといつた。  
ろくなことをしないこと。

なにか、さがしているとか、かたづけていることについていった。

(江田)

ぐれぐれ、なにかしていること。  
年寄りの人のことについていう。

みしめた仕事ではなく、ちよいとなにかさがしものをしているとか、草むしりとか、かたづけごとなどしていることについていう。

なにか、さがしていることを、カガヤクといった。(下石倉)

物をつけたり、その辺、ちよいと物をかたづけたり、草をむしたりすること。大きな仕事でなく、こまごました仕事をやっていることをいう。

また、わかishiゆが夜遊びにきて、のそっこみをするのもかがやくという。(小相木)

これは、なにかをみつけているとか、かたづけているということである。(下新田)

かがやく…うちのまわりをあっちこっちみつけて、仕事でもしていること。あっちかたづけたり、こっちかたづけたりする。はつきりした目的なくすること。

かたづけこと、さがしたりすること。うちのまわりを、めつけめっけ仕事をする事。

「おしいさんいるかい」

「その辺、さっきまでかがやいていたよ」(青梨子)

かがやく…「わかishiゆがあすこんちのまわりをかがやいていた」とか、「あやししい男がそこいらをかがやいていたよ」という。

ふらふらしていることをいう。

かたづけごととか、かたづけごとについてはいわない。(江田)

かがやく…そこいらに、なにも用はなくも、なにかさがすように、そわそわあるいていること。「なに、そんなにそこらかがやいてるんだ」

という。そうすると、「いや、この辺に手拭をおいたんだがめっからねえでさがしてるんだ」という。あてもなくさがすこと。

わかishiゆが夜遊びに行つて、うちのまわりをうろろしているのめかがやいているといった。

ふきのとう、きのこ、竹の子などがいつも同じところになるので、そこをかがやいてみたけどなかつたといつたりする。さがすということ。

「からつちやはやすみじうないよりおおごとだ」という。(元総社)  
ダクネ 物ぐさとか、気がきかないこと、彼にたたないこと、能なしということである。

「あのやつはダクネだ」

といういい方をする。(青梨子)

ダクネエ ダクネエということばは、むかしはよく使つた。

「あれは、だくねえだ」

というようない方をした。

気がきかないとか、のろまとか、人間的にしまりのないということを意味した。(青梨子)

おかしいこと、馬鹿なこと、道理にあわないうことをいうと、「だくねえことをいった」といわれた。

「ろくなことをいわない」ということ。

「ろくなもんじやない。あのだくねえは」

といわれた。(総社町新田)

わかishiゆのいたずら むかし、西横手あたりのわかishiゆが夜あすびに行つて、風呂の湯をまけて、水を入れておいたという。

わかishiゆが五人ほどであるところへ夜遊びに行つて、外風呂がたつていた。

くわくれが終つて、娘さんが風呂へ入ろうとしたら水。

「とうちゃん水だね」

「ばか、わかつておいた」

つていったと。

それを、わかいしゅは、遠くの方から見ていたつて。

わかいしゅが夜遊びに行つて、とぼ口のところへ石をなわでしばつ

てさげておいて、そのさきになわをゆわえて庭のすみの方までなわを

ひっぱつてきて、そのなわをひいたりはなしたりする。すると、石が、

とぼ口のところで、「がったん、がったん」と鳴る。

そんなことをして、よろこんでいた。

おやじさんが出てきて、どなるという。

ムラの中にかねをうんとのごすうちがある。そういううちをためて、

宝船を夜のあいだに、かど先につくつておく。

かいこのかごで船をつくり、からの俵の中にぬかをつめて、俵にの

せて、宝船をつくる。

つぐあさ、そのうちの人がみて大きわざをする。

仕方なく、わかいしゅにかねをやつてひきとつてもらうという。

えんぎがいいというので、わかいしゅにおひつてやつたり、かねを

つつんだりする。(下新田)

中山道の裏街道(佐波街道) この街道は、江戸時代から、これ

だけの幅であつたという。

中山道の裏街道であつた。

江戸から佐渡ヶ島への罪人が通つたという。(下新田)

宮之部(みやなべ)様 みやなべさまのおまつりは、毎月二十一日。

みやなべさまは、淡島と殿小路の境目にまつつてあるので、一カ月交

代で両地区でまつた。この日燈籠をたてたり、のぼりをたてたりし

た。

なお、のぼりわくは二つある。

おまいりに行くと、おみごくをくれた。(元総社)

弥勒山 神社の南、小高いところにある。むかし、赤痢、チブス、

肺病など、当時悪い病氣と考えられていた病いでなくなった人を、そ

こで火葬にしたところ。

そこをムラの青年会で借りて開墾した。(元総社)

たどんの由来 塩原太助がたどんをつくつたとき、なんという名前

にしようかと考えた。それで、自分の名の「太」をとつて、たどんと

名づけたという。(元総社)

仏のたたり あるうちのおばあさんが、彼岸のときに、糸をひいて

いた。

そしたら、子供がまゆを煮ている鍋の中に手をつつこんでやけどし

た。

そしたら、仏様を大事にしなかつたから、仏様が、子供の手を鍋の

中に入れてやけどさせたといわれたという。

やけどは、仏のたたりと、むかしからいつている。(小相木)

大きな鯉のこと 下新田の利根川と備前堀の合流点のところに洄が

あつて、そこに、大きい鯉がいたという。

しつぽがしぶうちわくらしいの大ききであつたという。

その鯉が浮いてきて、しつぽを見た人があつたという。(小相木)

うんと働くところ うんと働くところがある。そういうところのこ

とは、

「〇〇へ嫁に行くか、裸でバラしようか」

といった。(前箱田)

ことわざ 桃栗三年柿八年、梨の大馬鹿十八年。



「××へ嫁に行くか、裸でバラしようか」

うんとかせぐムラがあるとそんなことをいって、嫁にやるのをさげたといい。 (下新田)

ドロブ検査の話 第二次世界大戦後に、ドロブをつくってのんだことがある。空の樽を買ってきて、その中にドロブをつくって置いて、ご祝儀のときに飲んだりした。

検査官がきたら、近くまで来たというときに、塩をおつこんだ。そうすると、甘酒になった。アルコール分がでなければよかった。

サンバをぶつ なにかをはじめのことを、サンバをぶつという。 (前箱田)

柿ぬすみ あるときわかいしゅが、柿ぬすみに行った。木にのぼってとついたら、そのうちの旦那さんに見付かった。木にのぼってわかいしゅは、木の上の方へと逃げた。

もうこれ以上あがれねえとこまでのぼって、旦那さんにあやまつた。 (元総社)

村名づくし 「半田がらすに、八木原ぎつね、有馬かどたち、野田どじょう」 (総社町総社)

ラジオのはなし 清里でラジオを一番はじめに入れたのは桶屋さんだった。二番目がうちの本家だった。

嘉永四年生まれのおばあさんが、中気で長く寝ていた。おばあさんがラジオを聞いていて、

「いつまでたつても、太夫さんにお茶もださねえ、休めといわない、太夫さんがくたびれる。お茶をもつていってやれ、休んでもらわなければわるかんべ」といった。 (青梨子)

電灯のつきはじめ 青梨子に電灯がついたのは、大正十年四月十日のこと。

その時分は、蚕の催青をうちでしていた。それで、すすはきを四月十日にした。

そのころは、アワをつくっていた。

アワともちごめをませたせきはんを食べた。すすはきが早く終えたので、せきはんを食べていたら、電気がついた。

「あかりいや」

といった。おじごがそういった。

そのころの人は、ランプの火で煙草の火をつけていた。それで、電灯になつても、電灯で煙草の火をつけようとした。

つかなかつたので、「電灯は不便だ」といったという。よくそんなことをいっていた。 (青梨子)

ラジオ 関根の本家では、大正十四年にラジオを買った。清里村で二番目だったという。

ラジオというものはどういふもんだいと聞いたなら、「東京で歌をうたうと、ここまで聞けるもんだ」とラジオが説明した。

本家のおばあさんが病気で寝ていたので、おばあさんに聞かせた。おばあさんは、ラジオを聞いていて、

「太夫さんに夕飯を出せ」

といったという。 (青梨子町)

むかしの電気のはなし 小さいとき、電柱が立てられ、外灯がついた。

そしたら、年寄の人が、外灯をみて、

「これは消えねんだんべか」といって、うちわをもつていってあおいだつて。 (元総社)

むかしの電気は、夜ついで、朝になるととで電源を切ってしまった。  
た。

それで、とりよりが

「電気は昼と夜の見分けがつかあ」といったつて。

今まではランプだったが、電気になったので、としよりの人が、

「こりゃあかりいや」といったつた。

そして、きせるに火をつけようと電球につけてみたがだめだつたといふ。(青梨子)

畜音機のはなし 畜音機をはじめて聞いた人が、

「この中には人形がいて歌をうたつていふ」といったつら、べつの人が、

「人形じゃねえ、小人が入つていふんだ」といったつて。(青梨子)

ラジオのはなし うちには、嘉永三年（一八五〇）生まれのおばあさんが寝たきりだつた。それでかわいそうだといふので、ラジオを買つてやつた。清里では二番目に早かつたといふ。昭和のはじめのころだつた。

その時分、ラジオの放送は、浪曲とか義太夫などであつた。

寝ていたおばあさんが、ラジオを聞いていて、

「いいかげんで夕飯をだせ、のどがつかれちまうぞ」といったつた。

電車のはなし 電車をはじめて見た人が、馬がひくもんだと思つていて、前に行つたり、後へ行つたりして、「なんで動くんだんべ」といったといふ。(青梨子町)

カミを粗末にする あるとき、神社の境内で男女が交つていた。

それを見た神様が、

「神を粗末にするな」といったつた。

そしたら、交つていたものか

「紙でふかずに、ぼろでふく」と答えたといふ。(総社町総社)

うすい茶のこと うすい茶のことは、ござの小便といふた。

(総社町総社)

びりそうどう 男女の関係で裁判さわぎになつたことをびりそうどうといふた。

びりそうどうの傍聴に行くとおもしろえといふた。しかし、その席で笑うわけにはいかなかつた。(元総社)

さげじゅうでくる 女のところへ男がヨバイにいくのがふうつの形。

ところが、女のほうがわせつて、いせいがいいと、女のほうでヨバイにくることがある。

そういうことを、さげじゅうでくるといふた。

女のまたのしなもんのことを、じゅうといふた。(元総社)

道祖神小屋を燃す前のこと 道祖神小屋を燃す前に、子供たちがムラの中を、太鼓をたたいてまわつた。

「道祖神が燃えますよ、はや夜があけますよ、さんざべべちよてきやかつて、やあい、やい、小旗をもつてとんでこい」

あつまつたかねは、親方が中心になつてわけた。これが、身上まわしのはじまりだといふた。

道祖神小屋は一つ。

竹は十六本たてた。かいこの足が十六本あるのでそれにちなんで十六本たてるのだという。十六の中を四つわりにする。(青梨子前原)

料理屋で塩を玄関におくいわれ むかし、中国の秦という国に、始皇帝という王様がいた。この人は千人の妾をもっていた。妾町ができていて、そこへ牛に乗って、毎晩通つたという。

毎晩一人ずつということだから千人の妾だと、三年もかかって一まわりするということになる。しまいの者は待つていらねえ。

なんとか、皇帝を早く呼びよせる方法はないかと考えた。

妾どもがさわぎだした。

そこで、方法をかえることにした。

「わしが好きのところでなく、牛に乗って行ぐんだから、牛の止まつたところへ寄ることにしよう」

ということになった。

そこで、妾たちは、牛をとめる方法を考えた。

中に利口な女がいた。

牛は塩が好きだ。だから、玄関のところに塩をおけばいい、玄関のところをきれいに掃除してそこに塩をおく、そうすれば、牛が塩をなめなくて玄関のところにとまる。皇帝がおりてうちへ寄ってくれる。

ということ、それから玄関のところに塩をおくようになったという。

それが、だんだんに日本に伝わってきて、客商売のうちでは、玄関先に塩をおくようになったのだという。(元総社)

下水まわり むかしは、夜遊びのことを、外水まわりといった。

(江田)

柿もぎ 友だちと二人で夜遊びに行つて帰りに早稲の柿の木のあるうちがあつたんで、二人でその木にはいあがつた。

ふところにいっぺえ柿もいでいれていた。そしたら、そこんちのおばあさんが近所へ風呂もらいに行つて帰つてきた。

そして、

「柿の木にだれかあがつている。誰だ柿もぐんは」

つて、長さおもつてきてつづいた。

それだから、わしらはめためた柿の木の上へあがつて、これ以上あがれないところまでのぼつた。

それで、

「おれだからかんべんしてくれ」

と、柿の木の上でおばあさんにあやまつたことがある。

「人の女房と柿の木は、のぼりつめれば命がけ」

というたとえがある。(元総社)

コクゾウ虫 コクゾウ虫は北へむかうといった。

北極へむかうといった。(下新田)

上州名物 上州名物かかあ天下にからつ風という。

かかあ天下というのは、亭主のほうがかみさんの尻の下にしかれてゐること、亭主のほうがおとなしいといった。(下新田)

金古の屋台 金古の屋台は、雨乞い屋台といわれている。

日照りで、おかぼの葉がよれてくると、雨乞いをした。屋台をだしで、わかいしゆがもんだ。

青梨子では、榛名神社まで一升瓶をもって、神水をもらいに行つた。朝早く出かけて、お昼には神社へ帰つてきた。

その水を、神社でかけ合つた。(裸になつてかけ合つた)(青梨子)

怠けもん 怠けもん、遊んでいる者のことは、「うちをひっくりかえしにして金魚を飼え」といった。(青梨子前原)

雨の降つたときに働く人のこと ふだんろくに働かないでいて、雨

が降ると働きだすような人のことは、「うちをひっくりかえしにして、金魚飼え」といった。(前箱田)

下滝の井田姓 滝川(下滝)あたりの井田姓は、新潟あたりから来た六部がおちついたので先祖だという。玉村の井田はことはちがうという。(青梨子)

もえぼこり 火事にあつたあと、身上が前よりよくなる場合がある。そういうことを、「燃えぼこり」といった。

これは、火事のあと、一生懸命働くためという。火事のあと、身上がにこるといった。火事見舞については、特別のいい方を聞かない。

(青梨子前原)

百円札の一尺まつり コンニヤクをつくつていたところで、むかし、百円札の一尺まつりをした家があつた。

うちでも、まゆを百貫とつて、百円札の一尺まつりをしたことがあつた。(江田町)

震災成金 関東大震災のときに、金を手に入れた渋川の北の方にそういう人がいたという。

焼あとにごろごろしていた金庫をあけたり、なくなった人のふところに手をつっこんだりして、かねをためたという。(江田)

光厳寺大門 大正十四年の大火で焼けて黒くこげた。(総社粟島)

桃中軒雲右衛門 あかぎれ権十というのを聞いた。

雲右衛門のことを、あかぎれ権十といった。これは雲右衛門のあだなであるかどうかわからない。

雲右衛門は、このムラへも来たことがある。大正はじめごろのこと。農家の広いうちを借りてやった。体格のいい人だった。太い声だった。女の三味線ひきをつれてきた。

雲右衛門と名のついていた。(元総社)

金竜亭幾之助 金古に金竜亭幾之助という浪曲師がいた。

この人が語った言葉。

「大久保小久保なが高井、そのま上が植野村、梨子はあかくも青梨子で、かんさつあれども野良犬だ」

奥さんがていちゃん、

「ていちゃんのしらべによつてやる」といつて語つた。このことばを最初にいつた。(総社町総社)

高井のTさん 高井にTさんという欲深の人がいた。

かあちゃんをもらいに行つたが、かあちゃんをもらえば食わせなければなんねえからやだといつたつて。

ぼろやに入つていて、夜は布団の代りに、めんば板を布団の上のせていつたつて。

井戸がえも、人をたのめばかねがかかるといふので、自分で井戸の中に入つて汲みあげたという。

この人は、かねはもつていた。いつも風呂敷に包んで腰にしばりつけていつた。

うちは、壁がおちちゃつて、うちの中がみんな見えるようだった。

(総社町総社)

トウモロコシを作つてはならないこと 松下、松島家では、トウモロコシをつくつてはならないという。

むかし、トウモロコシばたけで人を殺したからという。たつてはならないというので、べつのところ、若宮八幡をつくつてまつた。

いつのころか不明。この八幡様は、前原の中組でまつている。

松下、松島両家は、先祖が兄弟で、兄が松下家を、弟が松島家を名乗つたという。先祖は、松井田城主大尊寺駿河守の家老をつとめてい

て、天正年間に、前原に住むようになったものという。

戦時中に、トウモロコシの供出の割り当てがあったとき、神主をたのんでおがんでもらって、それからつくるようになった。(青梨子前原)

番太のこと 人がなくなったとき、土葬だったときは、穴を掘って埋葬した。

墓の穴掘りは、コヤといわれる人の仕事であった。この人は番太とよばれていた。

葬式の前の日に掘った。施主に指示されたところを掘った。掘り終るとうちへ帰って風呂に入ってから、施主のところへよばれてきた。人がなくなると、近所の人が二人で組んで、寺とコヤへ連絡に行っていた。

コヤがやめてから近所の人が交代で穴掘りをするようになった。コヤのいないところは、近所の人が掘った。

コヤの人は、穴掘りのほかに、ご祝儀のときの嫁御おくりという役もあった。

近所の人と一緒にムラ境まで嫁さんを送って行ったり、迎えに行ったりした。

昼間でも提灯をつけて行った。嫁さんの護衛役であった。仕度は作業着で地下足袋をはいていく。

番太はよばれてくるときも、作業着で来た。あがりはなに腰かけて食事をした。

おちやがしとか、お膳についたもので余ったものは、うちへもっていった。はじめからたくさんのご馳走をだした。

日当もだした。これは、施主がだした。

番太は、ムラと警固役のようなことでしたので、ムラからも手当てがでた。

また、オサンニチの日とか、盆、正月、おまつりのときなどは、ムラをまわって餅とか赤飯をもらってあるいた。このときは、番太ぎるというのを背負ってきてその中にもらったものを入れて行った。

赤飯をもらったときは、赤飯を乾燥させて、もち米とあずきを分けて、米はこうじやへ売り、あずきはあんこやへ売って、生活費のたしにしたという。

正月などには、餅が十白分もあつまったという。

この人は、土地もなく農業もできなかったから、ムラの人の手伝いをして生計をたてていたものである。伝承よるとこの人たちはもとは士族であったという。(青梨子)

火事のはなし 赤城山に火事があると、前橋に火事があるという。

榛名山に火事があると、高崎に火事があるといった。

勢多の火事は見もんだといった。(総社町総社)

総社の大火 大正十四年の五月十三日。元景寺から南はみんな焼けたと新聞に出た。

東京から上越線にのつたが、夜は新前橋まできり走らなかったので、あとは線路道を歩いてきた。

火事みまいに反物一反とにぎりめし十個をやけた家に配った。

神谷さん宅で、火事の時のたきだしに米四俵たき、にぎりめしをつかった。

本間さん宅で二俵たいてもらった。

本間さん宅では、増田のレンガ屋が、エントツを作っていた時だった。(総社粟島)

生活の折り目 盆、彼岸、おまつり、お蚕祝い、田植え祝いなどが、

生活や仕事の折り目だった。(鳥羽西部)

大物の話 昭和二年に軍隊に入ったときはなしだ。

同年兵に神奈川県愛甲郡の男がいた。

この男は、ちんぼこがよくおつたつやろうで、雑囊ざうぶくろをよくちんぼこにぶらさげて歩いていたよ。(青梨子町)

モモンガア 小さいとき、おばあさんから、

「おおく遅くまで遊んでいると、モモンガアが来る」といわれた。(総社町新田)

大食漢 青梨子に桜井熊次郎さんという人がいた。明治の末頃の人という。

総社町に駄菓子屋があつて、そこへわかいしゆが寄つて、駄菓子の食いつくらをした。

菅笠にもれるだけ駄菓子を盛つて、食べれば優等賞ということにした。

そしたら、熊次郎さんが、水を飲みながら、それを全部食べきつて、優等賞をもらったという。

何人かのわかいしゆが挑戦したがだめだったという。(青梨子)

話は庚申待の晩 ふだんはなしをしていると、

「話は庚申待の晩にしろ」

といわれた。(総社町立石)

まんじゅうが好き へびがわかいしゆに助けられた。その恩返しになんでもあなたの好きなものをあげるからといった。

その人は、貧乏人で、おかねが欲しいっていった。小判をうんともつてきて、枕もとへうんまけていった。

それで、その次に、こんどは、なにが食べてえつていったら、まんじゅうが食べてえつていった。

ところが、そのまんじゅうを枕もとへうんともつてきてくれたら、  
「まんじゅうがこわい、こわい」

といった。

それで、へびに、まんじゅうはこわいって、布団つかぶつて、寝たふりをして、それで、へびが帰つたあと、布団から首だして、みんな食つちやつたつて。(元総社)

嫁と姑の仲なおり ふだん、嫁さんと姑さんは仲が悪いという。

ところが、盆の間だけは、二人の仲がよくなるといった。

盆にぼたもちをつくつて、あつちい時期だもんだから、ぼたもちがいたんでしまふ。

かねかけてつくつたぼたもちを、すえらかしてはもつたない。

そこで、余つたものを、嫁さんに姑さんが、

「それ食え、やれ食え」

とすすめる。

それで、盆のときは、嫁さんと姑さんが仲なおりするのだという。

あいさは、ナスを嫁にくれるなというくらい不仲だという。

あきナスは嫁にくれるなといった。

あきナスはともうまいからという。(元総社)

いろいろのこと 口がためのことを、オウサンといった。

あしいれのこと、デヨメといった。式をしないで、嫁さんがくること。

へソクリのことは、ホマチといった。ホマチガイコという言葉がある。

うまれた子をすぐもろうことを、わらの上からもらうといった。

ミョウガのことは、バカといった。市場でもそう呼んでいた。

「後閑朝倉のよばい、男後生楽寝てくらせ」

「娘三人いれば、身上が終る」

子守唄に次のような唄がある。

ねんねん、ねこのけつ、かにがはいこんだ。一匹だと思ったら、二匹はいこんだ。二匹だと思ったら、三匹はいこんだ。三匹だと思ったら、四匹はいこんだ。四匹だと思ったら、五匹はいこんだ。五匹……

(青梨子前原)

普請は四月くらいまでで、夏なかの普請はなかった。

ムネアゲのときのナゲモチは四角だったが、三月をすぎるとヒシガタにする。

グシモチ(ナゲモチ)を大工さん、仕事師、主人(施主)。

グシモチをやいて食べると、たてまえをしたうちが火事になるといった。

ヤキモチは、小麦粉でつくった。コメの粉でつくったことはない。

おにぎりは三角にむすんだ。まるくむすぶことはない。

お盆のとき、朝はぼたもちで、昼はうどんをつくった。この昼うどのことを、ヒルバチといった。

五穀とき、米、麦、小麦、大豆、アワ、ヒエ、ソバなどは五穀に入れなかった。(総社町山王)

いろいろのこと(その二) おたかもりを嫁が食べると、そこちにいられないといった。

口がためのごとは、オウサンといった。たるいれのこと。

むかし、おかみさんがお産のとき、旦那が白を持って、うちのまわりをめぐりあるいたという。

式をあげないで嫁にくることを、デヨメといった。

ふつうは、春に口がためをして、秋に式をあげた。

でたり入ったりする婿のことを、せえふろむことといった。

たんすを持って来ない嫁のことを、風呂敷嫁御という。

地獄餅：四月十五日、この日、絹笠様をまつる。この餅を食べると、

かいこをしたり、田の仕事をしたりしなければならぬので、地獄餅という。

極楽餅：十二月十五日につく。夫婦餅ともいう。二夫婦いれば二白つく。油餅ともいう。仕事が一年間、無事すんだことの祝い。

おこあげ祝い：春蚕のとき、上蔭の祝い。このとき、餅をついて、嫁(婿)の里へ持ってくる。里からも餅を持ってくる。やりとりをした。

八月一日(盆月の一日)。かまのくちあけ、やきもちをつくった(あんなり)。

八朔の節供：九月一日、初嫁は、赤飯とシヨウガを持って里へお客に行つた。

元総社の石井家では、人にならないでなくなった者の墓は、大人の墓とべつにある。石塔はあまりたてない。

どんどんやきのとき、ムラ内から、人別といって、一人あていくらときめたお金をあつめた。

よその人からは、へいがみをくれとおかねをもらった。

子供が生まれたうちは、鳥追いの祝いとして、酒一升と米一升をだした。

小六がおやがしら。小五がこがしら。

このときあつめたかねを子供たちが使うのが身上まわしのはじまりという。

なおどんどんやきの小屋は、一月十三日の晩にたてた。小屋は十四日の朝燃す。

燃す前に、子供たちは、ムラの中をふれて歩いた。

「道祖神が燃えますよ。早や夜が明けますよ」といってあるいた。

どんどんやきに行く人は、

奉納道祖神大災と書いた紙の旗をもつて行って燃した。この旗をつくるのに使った紙は、お正月のおそなえをのせた半紙をはりあわせたものである。(総社町新田)

むかしの便所は、いたみわるを土中にふせたもの。その上に板をわたしたたもの。

タツの日には、田植をしなかった。

ツバメは、子を二回はやす。

早い年は、四月四、五日のころにくる。帰るのは、盆すぎ、八月の二十日すぎになると、ツバメはいなくなる。

おさき煙草という言葉がある。

自分では、煙草をもつて行かないで、よそのうちへ行つて、もらつてすう煙草のことである。

おさきや、明治のなかばごろまでのことだが、努力して、人より急激に資産をふやすと、あすこんちは、おさきを飼っているといった。

(青梨子)

おてえ：三時のおやつのこと。

ちやぞつぺ：おちやがし、とくにつけものこと。

かね玉：いくらか知恵遅れの者がいると遊ぶことを知らずに働く一方なので、世間ではあすこのうちには、かね玉があるという。

やけぼこり：火事になって、身上がよくなることをいう。

やきもちっこ：子供がいないので養子をもらうと、子供が生まれることがある。その子のことをいう。

おさき大尽：おさきを飼つて、よそんちからいろいろのものをはこばせて大尽になつたうちがあつたという。そういううちのことを、おさき大尽といった。

七晩焼き：盆の前七日から十三日までの間、小麦わらの小束を、門口のところまで燃した。これは子供のやること。

小束を、墓の方に向けて倒した。一晩に一束ずつ燃した。唱え方はなかつた。

農休みと百万遍：七月十五日。

百万遍は、自治会長がおんたいでやる。もとは、天王様の前でしたが、今は寺でやつている。

子供がすずをまわし、大人が鉦をたたく。「ナンマイダ、ナンマイダ」といながら、すずをまわした。

神社からお札をもらつてきて、お札を竹につけて、三本辻にたてた。厄おとしという。

くわぜの鳥居：嫁入りのときと、葬式のときの出棺のときに、くわぜの鳥居をくぐらせた。(総社町新田)

バクチの話 昔、バクチなどをしていた役人にみつければ逃げ場は大友の「長見寺」であつた。前橋藩の役人には手がだせなかつた。

(大友)

昔はバクチが多かつた。上新田は住みごこちがいいので、三日いと帰るのがいやになつたという。(上新田)

上新田は昔から遊び人が多いと他村の人からいわれた。(上新田) カツパの話 「一人で川に遊びに行くな」「カツパがいろいろ危害を

与えるから」とよくいわれた。(鳥羽)

大友の尻つぶり 昔、高崎藩の年貢が高かつたので、米で食べられなく、芋類を食べていた。するとどうしてもガスがたまるので、尻をうんとしてしまふ。だから「大友の尻つぶり」といわれた。(大友)

結婚の話 利根川の西と東(川西と川東)では縁組するなといわれていた。それは、雨が降ると利根川の舟がとまり、親の死にめにもあ



えない。だから、結婚はするなといわれていた。(大友)

カラス 身内の者が死にそうなときでも、近親者にはカラスの鳴き声はきこえない。ガアガアと鳴くときは人が死に、うるさく鳴くときはケガ人がでるといふ。(鳥羽)

夜泣き子供 赤ん坊が夜泣きをすると病気のはじまり。行人様(中尾町)に子供をつれておまいりに行くと治るといふ。(鳥羽)

忌避 「お墓で遊ぶもんではない」

「お墓でケガをすると直らない」といわれた。(鳥羽)

縁起が良いこと 茶柱がたつ。

朝茶とうめぼしを食べると、その日の難のがれられる。

朝茶を飲むと、その日の交通事故にあわなない。(鳥羽)

茶柱が立てば良い。

朝茶は縁起が良い。

ウメボシを食べるとその日の難をのがれる。(東箱田)

縁起の悪いこと カラスの鳴き声。

人玉が飛ぶ。

ゲタのハナ緒が切れる。(東箱田)

カラスが鳴く。

ゲタのハナ緒が切れる。

はしが折れる。

北枕にする。

洗たく物を夜ぼしする。(鳥羽)

まじない 水遊びのあと川から上がるとき、「今晚ギリギリ……ま

た、あした来るからスッポンに引かれねえように」といって手を合わ

せ、水からでた。(東箱田)

カナクソ スーパーマーケットの「セーブオン」の前から、今でも「カナクソ」がでる。(上新田)

中林重吉氏宅からも「カナクソ」がでてくる。(上新田)

春さき、天気の良いとき、ムギがしなびてくるところには、必ず「カ

ナクソ」がある。(上新田)

カナ山様の祭り 中村家では九月一日、カナ山様の祭りを行っている。雷電神社の裏にカナ山権現という石宮があり、そこで行っている。九月一日に祭りをすると、「一族が繁栄するから」といい伝えられ、今でも行っている。(上新田)

家の大きさは、八間×四間が普通である。(清野)

## 第十三章 前橋利根西の民家

### 一、総論

#### (一) 調査の目的

建築は、その時代における伝統文化の本質を、だれにでも分かり易い形として表現してくれるので、造られた時代を大変よく象徴するものである。しかし、最近は何地造成、区画整理、道路建設、諸公施設等の大規模な開発事業の進行により、我々の社会生活はかつて経験したことのないほどの激しい変貌を来している。従って郷土の心を知り、祖先の知恵や技術を私達が直接知ることの出来る古民家は、ほとんど記録されることもなく、つぎからつぎへと取り壊されつつあるのが私達の身の回りを見る現実である。

このままでは近い将来、江戸時代から明治時代に竣工した由緒ある伝統的な民家は全て消滅してしまい、気付いてみたら何の記録も残されていなかったということになりかねない。したがって、これを調査し、せめて記録だけでも採取して、その資料を未来に引き継ぐことは、よりよい未来社会を創造するために重要であり、文化財保護行政の重要な課題でもあらうと考える。

ここに収録した民家は、昭和六三年〜平成元年の間に調査したもので、どれも私達の祖先が数千年にわたる永い間追い求めてきた結果として造り上げた血と汗の結晶であり、自然と風土と祖先の心が融合し

有形化したその土地固有の大切な造形作品であると言えよう。

伝統的な民家が地域の環境に潤いを与え、その土地の個性を豊にしてくれるのは、数千年にわたって追い求めてきた祖先の血と汗の結晶がそこにあるからであろう。この報告書が、こうした滅び行く伝統的な民家を、少しでも見直す一助になれば、筆者としてこの上ない喜びである。

#### (二) 調査対象民家

この調査で対象とした地域は、元総社・総社・青梨子・箱田・上新田・下新田・大友・江田などの、いわゆる前橋の利根西地区を取り上げた。また、この調査で対象とした民家は、そこに残る江戸時代から大正時代までの間に竣工した農家・町家・武士の家・本陣・脇本陣など、広範囲にわたるものとした。しかし、このたび実際に調査するこゝとのできた民家は、農家二二棟、町家二棟、旧武士の家（調査当時は農家）一棟の合計二五棟であった。

#### (三) 調査の方法

この調査は、第一次調査と第二次調査の二回に分けて実施した。第一次調査は、土地の古老より聞き取りした遺構を文化財保護課でリストアップし、それを基にして筆者及び事務局員が、調査地域内をくまなく歩き、遺構の外部と土間部分などを直接拝見させていただきなが

ら、建造に関する簡単な聞き取り調査を行った。こうして第二次調査遺構の二五棟の民家を選定した。

ここに、第二次調査民家を選定した際に留意した事項を掲げて置くと、以下の六項目のようである。

- ① その土地で特に古いと伝えられている家
- ② 昔から由緒のある家
- ③ 建築手法や意匠等に特徴のある家
- ④ 古くから養蚕をたくさん行っている家
- ⑤ 旧街道に面した古い家
- ⑥ 以上の①～⑤に該当し、復元の可能な家

ここで、第二次調査で実施した内容について記しておく、主家については現状平面図・痕跡図・配置図等を必ず採取し、断面図もできるだけ採取するように心掛けた。しかし、このたびの遺構は多くの場合土間を改造しており、土間の下手側から大黒柱を見た断面図を描くことが困難であったため、断面図を描いていない遺構がかなり多く存在する。写真は、屋敷構えを始め主家の外観及び内部を一棟当り約三〇枚程度撮影した。しかし、古文書等を残している家では、極力それらも写真に収めたので、写真資料の枚数はさらに増加した。

聞きとり調査の内容は、竣工年代、移築年代、各種の改造年代、建てた時の先祖の名前、工事に携わった大工の氏名、各室の昔の名称及び、各室の昔の使い方、柱や各部材の名称、屋内に於ける神祭りの場所・種類・方法及び禁忌作物・正月三カ日の食べ物及び、正月神へのお供え物等数多くの種類に及んだ。

## 二、農 家

### (一) 平面の形式

このたび調査を実施した二三棟の農家は、総て大小の修理及び改造をおこなっていた。そして、修理及び改造の特徴を外観すると、多くの民家が竣工当初より室数を増し、しかも間仕切り境の壁や柱を取り除くなどして開放的になっていた。特に改造が目だった個所は土間であり、旧ウマヤの跡に子供室や若夫婦の寝室を造っていたり、また「アガリハナ」の部分大きく張り出して一室設け、その裏側の「オカッテ」も建具で囲い、その中央にテーブルを据えて食堂としている例を多く見受けた。

以上のような調査遺構でも、痕跡を頼りにして竣工した当初の姿に還元すると、次のような七種類の平面形式に分類することができた。

- ① 三間取りの民家
- ② 喰い違い四間取りの民家
- ③ 不整形田字間取りの民家
- ④ 整形田字間取りの民家
- ⑤ 五間取りの民家
- ⑥ 六間取りの民家
- ⑦ 多間取りの民家

### (二) 編年の指標

第二次調査を実施した二三棟の農家遺構のうちで、普請帳・あるいは裏付けのはっきりした伝承等によって、建造年代を明らかにすることができたものは、松島輝代家・安藤徹哉家・石坂栄男家・磯田茂家・

仕上げ・設備・寸法等							遺構の建造等についての記録及びその他					
大黒柱の 仕上げ ナ	併用 ナ	カ ン	トコ 有 無	書 院 有 無	ウ マ ヤ 有 無	二 階 の 柱 間 寸 法 (単位:尺)	建 造 し た ま ま	不 明	移 築 し た も の	江 戸 時 代 の 職 業 家 柄 等	建 造 年 代 推 定 を 含 む (世紀)	遺構の建造についての記録等
		○	○	○	○	12.05		○		農 業	19初	養蚕の影響を受けていない草葺平家造りの民家
		○	○	○	○	12.05		○		〃	19中	明治9年3代前の宗作がすでに建っていた当遺構に分家に出た
		○	○	○	○	12.00	○			〃	19中	3代前の幸之助が新宅に出る際、本家の山の木を切って新築したもの
		○	○	○	○	12.02	○			〃	19末	昭和31年に79歳で没した先祖が生れた時建築中であった
		○	○	○	○	12.04	○			〃	同上	明治23年に建造したもの。当初は板葺であった
		○	○	○	○	11.98	○			〃	20初	明治38年に古市町に住んでいた一木という大工が建てたもの
		○	○	○	○	12.00		○		〃	〃	大正2年に水沢から移築したもの、初代の清作は峰城と号し画家であった
		○	○	○	○	12.02		○		名主?	19初	建築年代不明、当初は草葺と思われる。屋号を「ダイジソ」という
		○	○	○	○	12.05		○		名 主	19中	明治18年に立家を買って移築したもの。その時の売渡証文あり
		○	○	○	○	12.05	○			〃	〃	当初は草葺入母屋造りであった
		○	○	○	○	12.03		○		農 業	19末	明治17年生れの人の親が妙神様の神主赤石家を移築したもの
		○	○	○	○	12.05		○		〃	〃	養蚕の影響を強く受けた民家形式となっている
		○	○	○	○	12.00		○		〃	〃	慶応年間の建造と伝える
		○	○	○	○	12.02	○			〃	〃	明治3年風呂屋から出火して類焼し、明治5年に新築したもの
		○	○	○	○	11.92	○			〃	20初	大正年間に建造したもの
		○	○	○	○	12.04		○		組 頭	19中	嘉永7年(1854)立家を買って移築したもの、その時の売渡証文あり
		○	○	○	○	12.05		○		農 業	〃	板鼻にあった女郎屋を買って移築したもの、移築年代不明
		○	○	○	○	12.01	○			名 主	19末	明治初年火災にあい、その後建造したもの
		○	○	○	○	12.00	○			〃	〃	明治3年生れの人が数え年19歳の時に建造した
		○	○	○	○	12.01		○		〃	19中	当初は草葺前兎造り、昭和41年に切妻造り瓦葺に改造した
		○	○	○	○	12.00	○			農 業	19末	明治24年に建造した
		○	○	○	○	12.00	○			〃	20初	大正15年の普請帳あり
		○	○	○	○	12.00		○		〃	19中	当初は幕府勘定奉行小栗上野介の住居として造った家を農家として移築したもの

は、コザ(オクリ)の梁間方向の実測値によった。また、コザの梁間寸法も実態不可能な場合はザシキの桁行き方向にお

表一 前橋市利根西地区における民家遺構の形式分類及び形式別編年表（農家）

番号	所有者氏名	所在地	間取りの形式							柱間装置						構造等								
			三間取り	喰い違い四間取り	不整形田字間取り	整形田字間取り	五間取り	六間取り	多間取り	町家造り	コザの表測	コザの裏測	サシキの表測	サシキの裏測	エンガワの状況	ワダの表測	コザの裏測	土台	軒構	裏の造	二階の有	階の無	大黒柱の逃げ	柱の有
											無	有	無	有	外エンガワ	内エンガワ	イトザマ無し	イトザマ有り	無	有	葺き下し	セガイ造り	無し	有
1	桜井和実	青梨子	○							○	○	○	○	○	○	○	○						○	
2	松下徳一	〃	○								○	○	○	○	○	○	○						○	○
3	松下音三	〃		○							○	○	○	○	○	○	○						○	○
4	松島輝代	〃		○							○	○	○	○	○	○	○						○	○
5	安藤徹哉	総社		○							○	○	○	○	○	○	○						○	○
6	石坂栄男	箱田			○						○	○	○	○	○	○	○						○	○
7	磯田茂	元総社			○						○	○	○	○	○	○	○						○	○
8	木部茂雄	〃				○					○	○	○	○	○	○	○						○	○
9	金井正治	〃				○						○	○	○	○	○	○						○	○
10	牛込喜内	下新田				○						○	○	○	○	○	○						○	○
11	堤伊和喜	上新田				○						○	○	○	○	○	○						○	○
12	関口要	元総社				○						○	○	○	○	○	○						○	○
13	佐藤守	総社				○						○	○	○	○	○	○						○	○
14	斉藤松太郎	元総社				○						○	○	○	○	○	○						○	○
15	伊藤典子	〃				○						○	○	○	○	○	○						○	○
16	都丸耕治	総社					○					○	○	○	○	○	○						○	○
17	松下利夫	青梨子					○					○	○	○	○	○	○						○	○
18	城田幸喜	大友					○					○	○	○	○	○	○						○	○
19	富沢千尋	江田					○					○	○	○	○	○	○						○	○
20	牛込勘太郎	下新田						○				○	○	○	○	○	○						○	○
21	神谷雄二	総社							○			○	○	○	○	○	○						○	○
22	都丸甲子郎	〃								○		○	○	○	○	○	○						○	○
23	都丸茂雄	〃									○	○	○	○	○	○	○						○	○

※コザ（オクリ）の桁行き方向における内法寸法の実測値。但しコザ（オクリ）の桁行きが一間半あるいは二間半の場合ける内法柱間の実態値によった。

金井正治家・斎藤松太郎家・都丸耕治家・富沢千尋家・神谷雄二家・都丸甲子郎家の一〇棟であり、約四三、五%を占めた。また、伝承等によって建造年代をほぼ推定できた遺構は、松下徳一家・松下音三家・堤伊和喜家・佐藤守家・伊藤典子家・城田幸喜家・都丸茂雄家の七棟であり、約三〇、四%であった。したがって、建造年代の判明した遺構及び、ほぼ明らかにした遺構は合計一七棟となり、建造年代の判明率は全調査遺構の約七四%に達したことになる。

そこで、これらの遺構を復元した原形に見受ける各種の特徴と、建造年代の不明な遺構の原形に見る柱間装置・構造及び細部の示す各種の特徴等と比較、検討して編年の指標を求め、調査民家全体を平面形式別に区分し、かつ階層差をも考慮に入れて編年の系列をつくと表一のようになる。表一に示したように、このたび調査を実施した農家遺構は、復元した間取りの形式（平面形式）によって、七つの型に区分することができた。したがって以下においては、これらの平面形式別に各調査民家の建築的特徴や伝承等を記述することとする。

なお、各形式の復元平面図に記してある室名及び各部の名称等は、その家の呼称を尊重して発音に忠実に記すよう心掛けたものである。したがって同じ位置の室名でも、調査対象が異なれば呼び方も異なることを、あらかじめお断りしておかねばならない。

### (三) 三間取りの民家

#### ① はじめに

この形式に属す民家は、二棟（約八、七%）を調査しただけであった。それは、桜井和実家と松下徳一家であり、復元平面図は図一に掲げた通りである。次にそれら二棟の建築解説を、建造年代の古い順に述べることとする。

#### ② 調査遺構の建築解説

##### 桜井和実家（写真1、図1）

当遺構は桁行き七間半、梁間四間の規模である。外観は草葺き入り

母屋造りとし、二階を有しておらず屋根裏の利用も考えていない。また、ガイドコロにおいてもイトヒキバが無く、後世においてイトヒキバを設ける位置にウマヤを備えていた。即ち当遺構は、養蚕の影響をほとんど受けていない民家の造りとなっているのである。



写真1 桜井和家（青梨子）

等を頼りにして詳細に検討すると、竣工当初のザシキは一室の大きな空間であった。

一般にこのような平面形式の民家は、民家研究者の間で「広間型」と呼称されるものであり、古民家の示す平面の特徴とされている。前橋市の場合、芳賀・南橋・桂萱地区に多く残っており、一七世紀に遡る遺構も三棟を発見している。

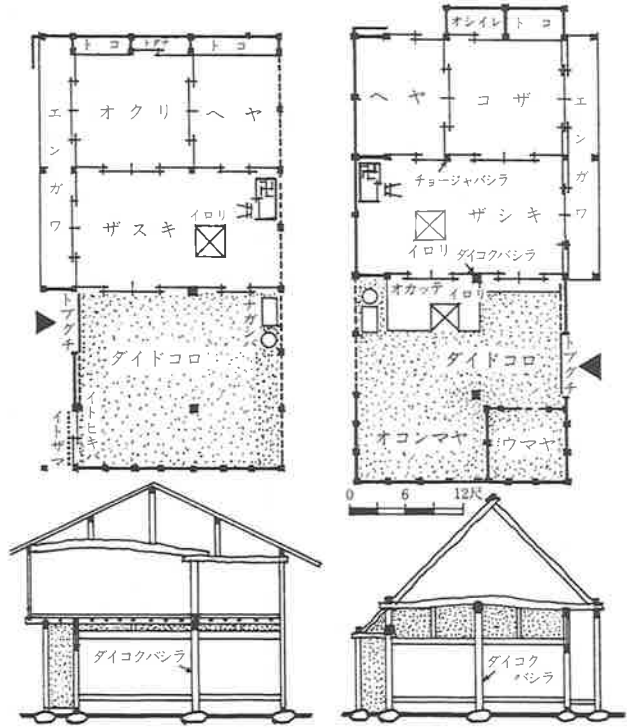
ところで当家は、当遺構の前面に別棟の主家を新築し、そちらに住まいを移した昭和四八年以来、当遺構を物置として使用してきた。したがって、当遺構は現在も空き家となっており、竣工時の記録や伝承等も残していない。そこで、復元した当遺構の示す各種の特徴等から竣工年代を推定すると、およそ一九世紀初期頃まで遡るものと見てよ

いものと考える。

松下徳一家（写真2・3・4、図1）

当遺構は桁行き七間一尺五寸、梁間四間の規模である。外観は、現在切り妻造り鉄板一文字葺きになっている。しかし建造当初は、板葺きであったという。平面を見ると、前述の桜井和実家と異って長者柱と大黒柱が対応して桁行き方向線上に立っている。この両者の間に敷居・鴨居を入れれば、「ザスキ」を容易に前後の二室に区分できる構造になっている。しかし当遺構は、現在もザスキを一室の空間として使用していた珍しい例である（写真3）。

写真4は、当遺構の東側を見た様子である。当遺構に接して小さな



松下徳一家 桜井和実家  
図1 三間取りの民家（復元平面図・断面図）



写真4 主家の東側に突き出た「十能瓦」をのせた納屋（松下徳一家）



写真2 松下徳一家（青梨子）



写真3 松下徳一家のザスキ（電灯の向こうに見える梁が長者柱と大黒柱間の梁である）

と次のようである。

昭和三〇年代の頃までは、東毛地方を中心に十能瓦で屋根を葺いた

小屋が突き出ており、その屋根に現在あまり見受けられない変わった瓦をのせている。この瓦は「ジューノーガワラ」と称するもので、東毛地方の古い瓦屋根によく見受けられるものである。それが、利根西の地区にも見受けられたことは、記録に値すべきことであろうと考え、特に写真を掲げたわけである。

ここで、ジューノーガワラ（十能瓦）について少し述べておく

民家が多数存在した。この十能瓦は、邑楽郡大泉町字小泉を中心として生産されたもので、その姿が十能によく似ていたことから名付けられた名称であり、別名「ホウロク瓦」とも呼んだ。

十能瓦の歴史を簡単に記すと、十能瓦は大泉町間田地区まのたにおいて始まった「小泉焼」を起源にしている。小泉焼は寛文年間（一六六一～一六七三）に始まり、下って十能瓦の製造も享保年間（一七一六～一七三六）には始まっていたという。

小泉焼とは、大泉町小泉地区の畑で採取した粘土を使用し、主に火鉢やコンロ（七輪）などを製作し、一般に販売していたものである。焼き方に、素焼きと黒焼きの二種類の方法があり、黒焼きは一回火を通した後、炭で黒くいぶす焼き方であるという。なお、十能瓦は素焼きの方法で焼き上げたものであるという。

小泉焼きの製造は、戦後間もなく中止となり、同じ頃十能瓦の製造も中止となった。しかしその昔、生産地であった大泉町を中心に、広く東毛地方に十能瓦が普及していったのであった。

ここに十能瓦の長所を上げると以下のものである。

- ① 瓦としては大変安価であったこと。
- ② 葺き上げる時、単に屋根面に同一型の瓦の表と裏を、交互に並べて置いて行くだけで葺き上げることができたので、素人で簡単に葺き上げることができ、葺き賃が節約できたこと。
- ③ 本瓦や棧瓦に比べ軽くて扱い易いこと（厚さは一二㎝）。
- ④ なお、欠点としては次のようなことを上げることができる。
- ⑤ 薄くしかもちろ粘土質があまり良くなく、かつ素焼きなので割れ易い。
- ⑥ 軽くしかもちろただ置いてあるだけなので強風に飛ばされ易い。
- ⑦ 割れ易いので人間が葺き上げた瓦の上に乗ることができない。

十能瓦は、今日の瓦には見ることでできない独特な形をしており、しかも全国的に見ても主に群馬県の東毛地方にしか流行しなかった珍しい瓦である。最近では、この十能瓦で葺いた屋根を見ることも少なくなってしまう。十能瓦で葺いた屋根を見ることは、今後ますます困難になると思われるので、いまのうちに十能瓦の保存対策を考えていかなければならないことを痛感している。なお自家の建造年代は、柱間寸法及びその他の特徴等から、一九世紀中期頃と推察する。

#### ④ 喰い違い四間取りの民家

##### ① はじめに

第二次調査を実施した二三棟の農家遺構のうち、この形式に属す民家は三棟（約一三％）であった。これら三棟の農家遺構の示す復元平面・復元断面図は、図2に示した通りである。次にこれらの三棟の民家について、竣工年代の古い順に建築的な解説を行うことにする。

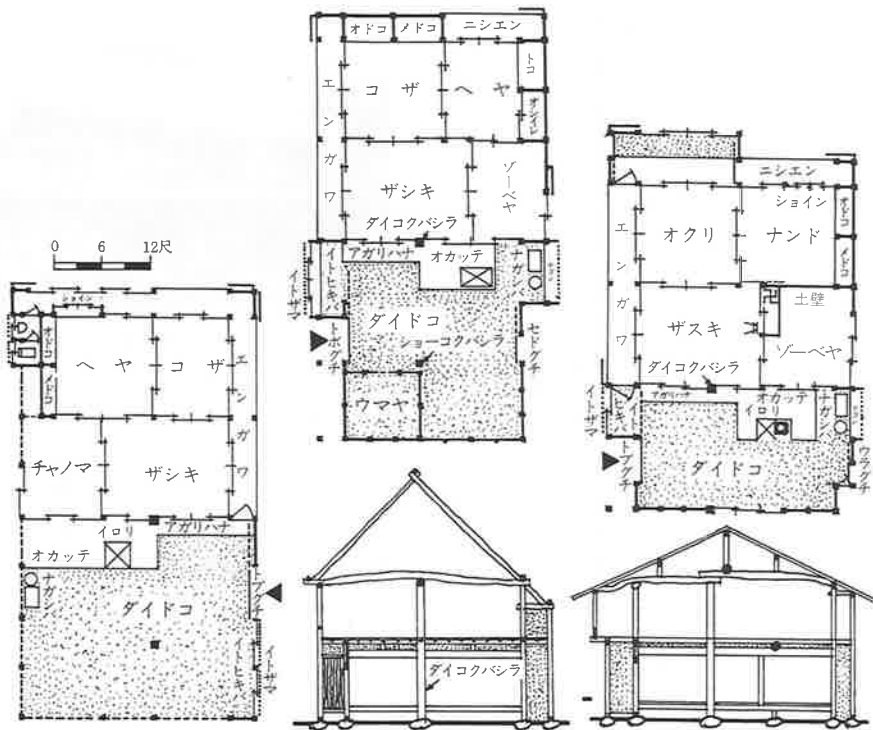
##### ② 調査遺構の建築解説

###### 松下音三家（写真5、図2）

当遺構は桁行き七間、梁間五間の規模である。外観は、切り妻造り総二階建てとし、現在屋根をナマコトタン葺きになっている。しかし竣工当初は、ササイタ（笹板）を重ねて葺いた板葺き屋根で「イタヤ」と称していたという。

当遺構の平面を見ると、桁行き七間のうち下手の二間半までを土間とし「ダイドコ」と称している。ダイドコの表側の出入り口は「トブグチ」と呼び、裏側の出入り口を「ウラグチ」と呼称している。ウラグチの上手は「ナガシバ」といい、壁側にナガシと水甕を据え、その前面を一尺五寸程出窓のように張り出して棚を兼ねた窓の「デゴシ」





安藤徹哉家

松島輝代家

松下音三家

図2 喰い違い四間取りの民家（復元平面図・立面図）



写真5 松下音三家（青梨子）

としていた。ナガシバは立ち流しとし、その表側寄りに板床を張り出してオカッテと称し、その中にイロリを設けていた。なお、当家のイロリは、その片隅に土製のカマドを据えていた。オカッテは、家族の食事をとる場所であり、またイロリの周囲では近隣の軽い来客の接待なども行った。

ガイドコの上手は表側に一〇畳大の「ザスキ」を配し、その裏側に六畳大の「ゾーベヤ」を設けていた。

ザスキは、家族の居間として使われた室であり、ゾーベヤは主にオカッテまわりの道具や食料品などの雑貨用品を収納しておいた室であった。したがって、漢字を当てれば「雑部屋」と書くものであろう。

ザスキの上手は「オクリ」と称して八畳の室とし、オクリの裏側即ちゾーベヤの上手はやはり八畳の室として「ナンド」と呼称した。そしてナンドの裏側には、奥行き二尺の「オドコ」と「メドコ」及び書院まで備えていた。

当遺構の竣工年代については、当主の三代前の先祖幸之助が分家に出るとき、本家所有の山林の木を切りだし、すべてその木を使って新築したものとして伝えている。そして、幸之助の長男が明治六年に生まれていることから、その頃に竣工したものと考えられている。

松島輝代家（写真6、図2）

当遺構は桁行き八間半、梁間四間の規模である。外観は、前橋地方では珍しい草葺き前兜造りであり、現在は草葺きの上にナマコトタン



写真6 松島輝代家（青梨子）

を被せている。平面を見ると土間は、桁行きのほぼ半分までとし「ダイドコ」と称している。ダイドコの表側のほぼ中央に出入り口を設け「トボグチ」と称し、その下手にウマヤを設けていた。トボグチの上手は、幅一間半にわたって三尺程張り出して「イトヒキバ」と称し、その前面を低い縦格子の付いた窓としている。これは、イトヒキバの採光用に設けた窓であるところから、当地方においては「イトザマ」と呼称している。

ダイドコの上手は、表側に一〇畳大の「ザシキ」を配し、その裏側に六畳大の「ゾーベヤ」を配置しているのは、前述の松下音三家と同様である。しかし、当家のゾーベヤはその上手のヘヤとの境を建具にしており、松下家のように土壁で閉鎖していないところが新しい特徴である。ザシキの上手は八畳の室として「コザ」と称し、上手側に奥行き三尺のオドコとメドコを備えている。また、コザの裏側は六畳の室として「ヘヤ」といい、その裏側に奥行き三尺のトコとオシイレを備えている。

ところで、当地方の民家においては、表側の上手の室を「コザ」と呼称するのが伝統的な古い呼び名である。コザを前述の松下音三家のように「オクリ」と称する場合もある。しかし、オクリの名称はコザよりも新しい呼び名であると考えている。なお、コザの語源については不明であるが、一般的には民家の中で最も良い室、即ち客室を指すものである。

当遺構の竣工年代については、昭和三十一年に七九歳で没した先祖が生まれた時に、この家を新築中であつたという伝承から計算すると、明治一〇年の竣工ということになる。

安藤徹哉家（写真7、図2）



写真7 安藤徹哉家（総社）

当遺構は桁行八間半、梁間四間半の規模である。当遺構も桁行のほぼ半分までを土間とし「ダイドコ」と称している。当遺構のダイドコで特に注目すべきところは、トボグチの下手である。ここは旧来の遺構においてはウマヤを設けた場所である。しかし当遺構においては、ウマヤを省き桁行き二間にわたってイトザマを設け、その内側を広大なイトヒキバとしていることであり、民家の示す極めて新しい特徴である。

ダイドコの上手における床上四室の配置は、前述の松島輝代家と同様である。しかし、ゾーベヤを「チャノマ」と称するのは、この室の新しい呼び名であろうし、エンガワを上手の方まで回しているのも、民家に見る新しい特徴である。以上のいくつかの点から見ても、当遺構は極めて新しい特徴を示している民家といえる。

なお、当遺構は明治二三年に竣工したものと伝えており、過去の記録によれば明治四三年の時はイタヤ（板葺き屋根）であつた。

### (五) 不整形田字間取りの民家

① はじめに

第二次調査を実施した二三棟の農家遺構のうち、この形式に属す民家は二棟（八、七％）であった。これら二棟の農家遺構の示す復元平面図は、図3に示した通りである。次にこれらの二棟の農家遺構について、竣工年代の古い順に建築的解説を行うことにする。

② 調査遺構の建築解説  
石坂栄男家（写真8、図3）

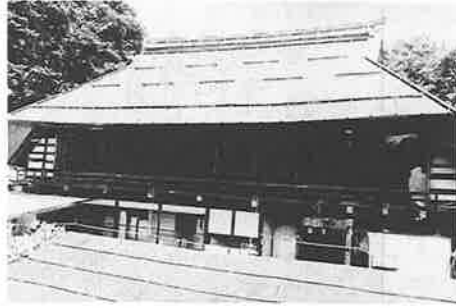


写真8 石坂栄男家（箱田）

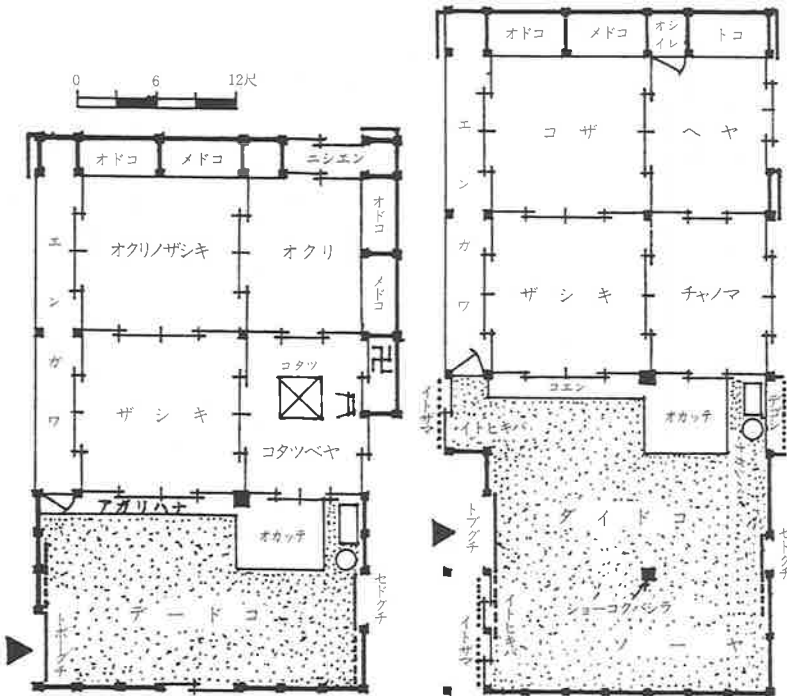
当遺構は桁行き九間、梁間四間の規模である。桁行き九間のうち丁度半分にあたる下手の四間半までを土間として「ダイドコ」と呼称する。ダイドコの表側中央部を出入り口として「トブグチ」と称し、この上手と下手にイトザマを設け、その内側のダイドコをイトヒキバにしていた。したがって当遺構の場合、ダイドコの表側はトブグチ以外の総てをイトヒキバの空間に当てること出来るように考えられていた。

ダイドコの上手は表側に八畳の「ザシキ」を、その裏側には本来板の間として使用した六畳大の「チャノマ」を配している。そして、ザシキの上手には八畳の「コザ」を設け、さらにその上手に奥行き三尺の「オドコ」・「メドコ」を備えていた。コザの裏側の室は六畳の広さで「ヘヤ」と呼称し、その上手にトコとオシイレを備えている。

即ち、不整形田字間取りの民家に見る平面は、田字の間取りを表しているものの、表側の二室を八畳の広さとし、裏側の二室を六畳の広

さにしているために整った田字を示していないことになり、次の項で述べる整形田字間取りの民家と区別する意味において「不整形田字間取り」と呼称するわけである。

各室の機能について見ると、コザは上等な客室でありまた、冠婚葬祭や集会の際にはその主室として使われる室である。冠婚葬祭や集会



磯田 茂家  
石坂栄男家  
図3 不整形田字間取りの民家（復元平面図）



写真9 磯田茂家（元総社）

時におけるザシキは、コザに付随して使われる室であり、また日常においては軽い来客があつた時など、ザシキに上げて応対していることから、日常におけるザシキの機能は比較的軽い来客に対する応接室である。

チャノマの機能は、家族がお茶を飲みながら団らんする場であるから、言わば家族の居間である。なお、チャノマの下手に張り出した一段低い板張り床の部分を「オカッテ」と呼称し、ここで家族が食事をしたのであつた。

ヘヤの機能は家族の寝室であり、この室のより古い名称はナンドである。当遺構のヘヤは開放的であり、上手（西側）には奥行き三尺のトコを備えているなど、民家として極めて新しい特徴を示している。

当遺構は、昭和一〇年六月に六九歳で没した二代前の治平の代、即ち明治三八年に竣工したものと伝えているので、その通りと見て妥当であろう。

#### 磯田 茂家（写真9、図3）

当遺構は桁行き七間、梁間四間の規模であり、切り妻造りの瓦葺きの総二階屋である。桁行き七間の内、下手の二間半までを土間とし「デードコ」と称している。なお、当遺構の土間は大変狭小となり、ウマヤも設けられていない。そして出入り口はトボーグチ、セドグチの他に下手の妻側にも設け、合計三個所になっているなど新しい特徴を示している。デードコの上手は、表側を「ザシ

キ」と呼びその裏側を「コタツベヤ」と称している。ザシキの上手は「オクリノザシキ」といい、その裏側の室を「オクリ」と呼称している。当遺構の場合四つの室名のうち、伝統的な室名で呼んでいたのは、ザシキの名称だけであつた。

当遺構の建造年代については、当初水沢にあつた家を現在の土地に大正二年に移築し、そこに分家した初代が住み付いたものといわれている。そして、初代は俗名を「清作」号を「峰城」といい、山水画を得意とする画家であつたといいい、昭和五年に五五歳で没している。

#### (六) 整形田字間取りの民家

##### ① はじめに

第二次調査を実施した二三棟の農家遺構のうち、この形式に属す遺構が最も多く、八棟に達し約三四、八%を占めた。これら八棟の農家遺構の示す復元平面は図4に示した通りである。次に、これら八棟の遺構について、竣工年代の古い遺構から順に建築解説を行うことにする。

##### ② 調査遺構の建築解説

#### 木部茂雄家（写真10、図4）

当遺構は桁行き九間、梁間五間の規模であり、竣工時は草葺きであつたと推察する。なお、竣工時は平屋であつたと伝えているが、大黒柱が二階の小屋梁まで伸びているので、当初から二階造りであつたと見るのが妥当であろう。

桁行き九間のうち、下手の四間半までを土間として「ダイドコ」と呼称し、その表側のほぼ中央を出入り口として「トブグチ」と称している。ダイドコ内のトブグチの下手に「ウマガヤ」を設置し、トブグチ上手の外壁には、低い位置に縦格子窓を設け（写真11）、その昔この



写真10 木部茂雄家（元総社）

内側で糸を曳いた。ここでの糸曳きは、七厘の上にのせたナベで繭を煮て、座操り器を使ってナベの繭から糸を紡ぐもので、この仕事は主に婦女子によって行われた。従ってこの場所を現在でも「イトヒキバ」と呼んでおり、またイトヒキバ前面の格子窓は「イトザマ」と称している。このイトザマが大変低い位置に設けられる理由は、その内側で行う糸曳き作業の姿勢に由来するのである。

前述したよう



写真11 トブグチ脇のイトザマ（木部茂雄家）窓の高さが低いのを特徴とする

そこでは高さ一尺（約三〇cm）位の椅子に腰掛けて行う手作業を主体とするのである。実は、この作業の姿勢に合わせて地上一、五尺前後の高さに設けた格子窓が、写真11に見るイトザマの姿なのである。また、グイドコの上手は、八畳の室を田字の形に四つ配置し、グイドコに接した表側の室を「ダスキ」と呼称し、その裏側の室は「オコタノマ」と呼んでいた。

ダスキの上手の室は「コザ」と呼称し、この裏側の室を「オクリノマ」と呼んでいた。ここで、以上の四室における昔の使い方について当主の祖母に当る明治三十七年生まれ「うめ」さんから聞いた話を記しておく以下のようなものである。

「うめ」さんは、大正一五年に当家に嫁に来た。その時は、コザとダスキ境の建具を取り払い、コザとダスキを一つの室として、結婚式や結婚披露宴を執り行った。まず、結婚式の際はコザにおけるオドコの前に東を向いて婿が座り、メドコの前には同じく東向きに嫁が座った。そして婿の脇には男の仲人が、嫁の脇には女の仲人が婿と嫁を挟むようにして、やはり東を向いて座ったということである。

なお、嫁側の一元客はメドコ側に南を向いて座った。その際は、嫁に血縁の近い者ほど嫁の近くに座り、逆に嫁から血縁が遠くなるほど座るようになったということである。

また、婿側の血縁者はオドコ側に北を向いて血縁の近い者から婿に接して座ったので、嫁側の一元客と婿側の血縁者とは、互いに血縁の近い者同士が向かい合って座る結果となったということである。このようにして両者が互いに整うと、まず三三九度の盃が交わされる。その後は、両者の血縁客に盃を回し、やがて宴はたけなわとなる。

以上のことからわかるように田字間取りの民家におけるコザの機能は、まず冠婚葬祭や村の集會にそれを執り行う最も重要な主室となるものである。このようなところからコザにおいては、四室のうちで最も早くオドコ・メドコが備えられるのであった。

また、うめさんが嫁に来た直後における各室の使われ方は、以下のようであったという。

① コザの使い方（機能）について

○コザには普段、舅夫婦が寝た。

○大事な客人があつた時は、コザに案内しコザでもてなした。

○大事な客人が宿泊する時の寝室に当てた。

○病人が出るとコザに寝かせた。

○葬式の時は棺をコザに安置し、コザを主室として葬式を執り行った。

○村人が大勢集まる寄り合い（集会）の時、コザとダスキ境の建具を取り払い、この両室を一室として使用した。この時もコザが主室となつた。

○養蚕時には蚕棚を組んで蚕室として使用した。特に稚蚕飼育のための蚕室としたので、コザは養蚕の最初から最後まで主要な室として使用した。

㊦ ダスキの使い方について

○冠婚葬祭や村の集会などの時は、コザに付随した空間、即ちコザを延長した室として活用した。

○普段は、ダスキの中央にちよつとしたテーブルを置いて、軽い来客があつたときここで応対した。

○この室の縁側寄り（南側）は、主婦や年頃の娘がお針仕事をする場所として使用した。

○沢山の宿泊客があつた場合、若い者や朝早く起きる者がダスキの方に寝た。

○養蚕時には、蚕棚を組んで蚕室にした。

㊧ オコタノマ（一般的にはチャノマと呼称する）の使い方

○冠婚葬祭時は、オカツテと共に食事・飲酒・お茶などを出すための準備をする室として使用した。

○普段は家族の居間であり、団らんのための室であつた。従つて

この室には必ずコタツを設け、仏壇や神棚も備えている。

○大勢の客人が宿泊した時は、家族の寝室として使用した。

㊨ オクリノマ（古くはナンドまたはヘヤと呼称した）の使い方

○若夫婦（うめさん夫婦）の寝室であつた。

○うめさんの子供は、中学校まで親と一緒にこの室に寝た。

○お産をする時は、この室に籠もつて子供を生んだ。なお、この

室の中央は畳一枚分の床を竹スノコにしてあり、産気付くと中央の畳を一枚剝ぎ、竹スノコに縊切れを敷いて、その上に子供を生み落とした。子供が生まれると、この室でただちに産湯につけ産湯の残り湯は、竹スノコから床下に捨てた。

○コザで病んでいた人が死ぬと、ただちにこの室に連れてきて棺に収めるまで安置する。なお、湯灌もこの室で行いその残り湯は中央の畳を剝いで、竹スノコから床下に捨てた。

当遺構の昭和初期頃における各室の使い方方は、うめさんからの聞き取り結果によれば大体右記のようである。

なお、当遺構は一階の床面積より二階の床面積を拡大するために、二階の表側を一階の表側より約一尺五寸程張り出して造っている。当家では、このような造りを「ダシバリヅクリ（出し梁造り）」と呼称している。また、棟の上ののつている連続した小屋根を、うめさんは「キカン（気換）」と称していた。

ところで、当遺構の竣工年代はいつ頃であろうか。残念ながら竣工年代を示す古文書や棟札などの資料を始め、確たる伝承も残していなかった。そこで復元した建築の原形に見る各種の特徴等から推定すると、当遺構はおよそ一九世紀初期頃に竣工したものであらうと推察しておけば妥当であらうと考える。

なお、地元では当家の屋号を「ダイジン」と称していることから推



写真12 金井正治家（元総社）

察すると、江戸時代においては名主あるいは組頭程度の村役を務めていた家柄と見てよいであろう。また、当家の正月三日の食べ物ソバであり、正月神にもソバをお供えする習わしであるという。

金井正治家（写真12、図4）

当遺構は桁行き九間、梁間五間の規模であり、現在切り妻造り鉄板瓦葺きにしている。しかし当初の屋根は、板葺きであったという。当遺構は、桁行きの丁度半分までの下手を土間とし「ガイドコロ」と呼称し、ガイドコロの表側中央部に幅一間の出入り口を開いて「トブグチ」と称している。そして、ガイドコロの下

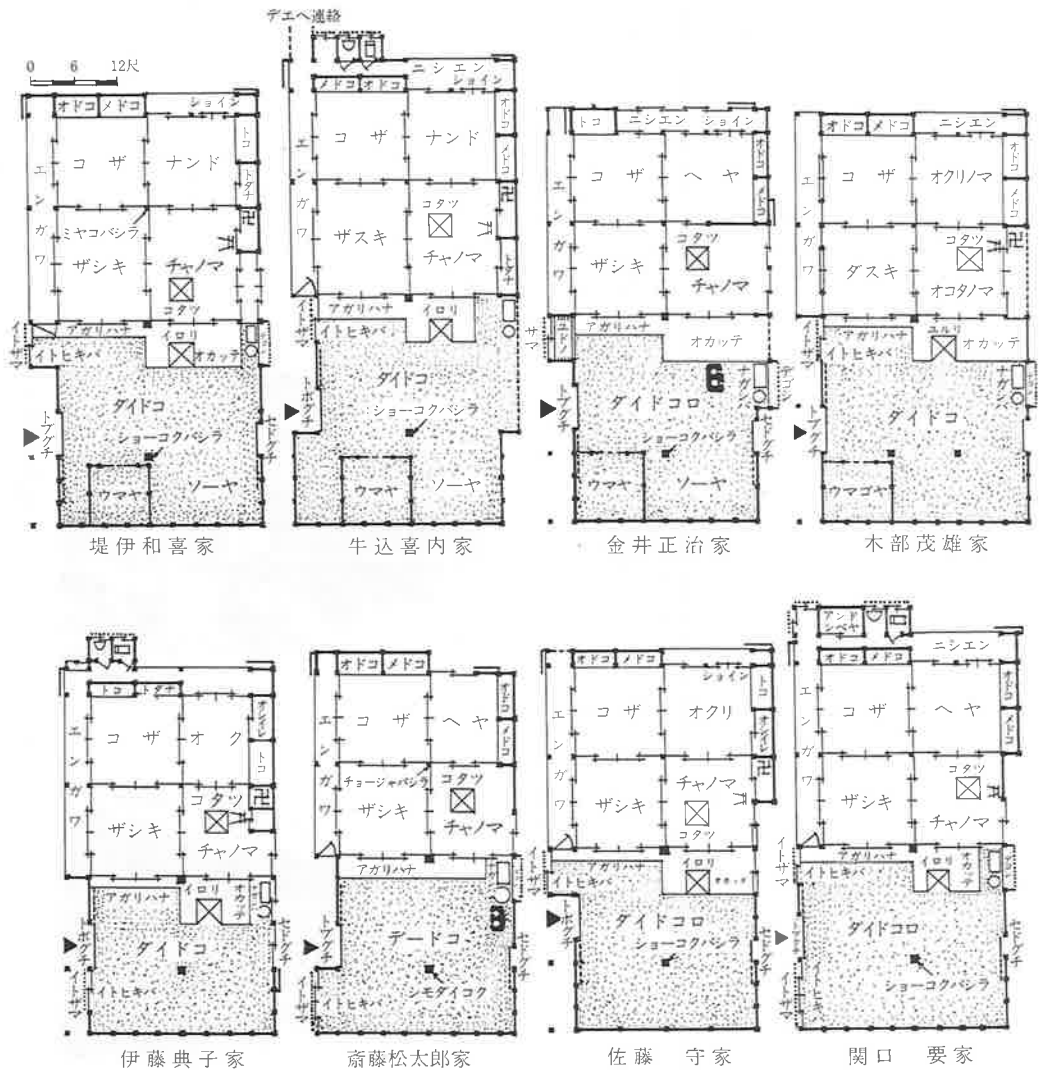


図4 整形田字間取り民家（復元平面図）

手表側寄りに「ウマヤ」を設け、その裏側の土間空間を「ソーヤ」と呼んでいる。

ダイドコロの上手は、四つの室を田字の形式に配したもので、ダイドコロに接した表側の室を「ザシキ」と呼び、その裏側の室を「チャノマ」と称している。そして、ザシキの上手は「コザ」と称し、その裏側の室を「ヘヤ」と呼称している。これら四室の使い方は、前述の木部茂雄家の場合とほぼ同様である。

ダイドコロのソーヤには味噌樽・醤油樽・漬物樽を壁際に置き、壁から離れた所には米俵を積んで置き、またすぐ食べられるように精米した米は、米びつに入れてやはりソーヤに置いたという。なお、オカッテで使う道具類などもソーヤに保管して置いたという。

チャノマの下手には「オカッテ」と称する一段低い板張りの床がある。このオカッテは家族の食事場であったが、当遺構のオカッテにはイロリを設けていなかったという。

当遺構についての伝承は、三代前の先祖次郎吉（大正一三年八六歳没）が、総社町の立見建設のすぐ北にあった家を、明治一八年一〇月に買い取り、その後移築したのが現存の当遺構であるといひ伝えており、その時の売買証文を残している。このことから推察すれば、移築した年代は明治一九年頃と見て置けば妥当であろう。

当家の屋号は「ジロエモンサマ」と称し、江戸時代に名主役を務めていたという。当家に残る古い位牌や過去帳を調べてみると、明治三年に八〇歳で没した「次郎衛門」の二代前から次郎衛門を襲名すると共に、初代の次郎衛門から院号付きになっていた。このことから推察すれば、恐らく一八世紀末期頃から名主役を仰せつかり、以後明治に至るまで名主役を務めた家柄と見てよいであろう。なお、当家の正月家例も「ソバガレイ」であるという。

牛込喜内家（写真13・14、図4）



写真13 改造前の牛込喜内家（下新田）



写真14 現在の牛込喜内家（下新田）

当遺構は桁行き一〇間余り、梁間五間の規模であるから農家としては大型の部類に入るものである。当初の外観は写真13に見る通り、二階建ての大規模な草葺き入り母屋造りの形式とし、屋根の正面中央部を突き上げ屋根（椽名型）にしていた。しかし、昭和四二年に屋根を大改造し、現在のような切り妻造り瓦葺きに改めた（写真14）。

建造当初における屋内の様子（復元平面）は、図4に示した通りであり、主家の西側には少し離れて別棟の「デエ」と称する建物而建て添え、エンガワでつながっていた。このデエは、八畳の室を二つ南北に配したもので棟も南北方向とし、南側の日当りの良い室を「デエ」と呼称し、そこにはオドコ・メドコ及び書院を備えていた。この「デエ」に接した北側の八畳の間は「デエノキタノマ」などと称し、言わば主室である「デエ」の控えの間であった。

このような離れとしてのデエは、前橋・赤城村・富士見村・宮城村



など、主に赤城西麓く南麓地方における旧名主の家に見受けるものである。ここで、このデエについて若干考察を加えておくと、江戸時代においては主に穀物の収穫期になると、代官あるいはその手代が村内を検分に来た。こうした時には、村内を取り仕切っている名主役の家で休憩したり、宿泊するのが習わしであった。したがって、そのような時に提供される建物が、名主の家に存在した別棟のデエであったのである。

ところで、デエのある家でデエの使用法について話を聞くと、その昔日常において家人によって使用されることは全くなかったと答えた家が大多数であった。即ちデエは、その家で最も上等な室を備えた建物であったにもかかわらず、日常家人によって使用されることはなかったのである。その大きな理由は、幕藩体制下における封建的格式が、名主という最下層の役人にも強く影響していたことを示すものと考えてよいであろう。

当遺構は、残念ながら建造に関する記録や伝承等を、全く残していなかった。そこで、建造当初の姿に復元した平面を始め、各種の特徴等から建造年代を推定すると、およそ一九世紀中期頃に竣工した遺構と見ておけば妥当であろうと考える。なお、当家の屋号は「オオホンケ」と称する。それは、当家が当地における牛込姓の大本家であるという意味から来ているものと伝えている。また、草葺き時代の屋根は「代々越後の小千谷から出向ってきた屋根屋が葺いていったもの」という。

#### 堤伊和喜家（写真15、図4）

当遺構は桁行き九間半、梁間五間の規模である。屋根を見ると現在瓦葺きになっているが、建造当初は「イタヤ」で棟の頂部に長い「イキヌキ」をのせていた。



写真15 堤伊和喜家（上新田）

復元平面（図4）に見る特徴は、前述の牛込喜内家と大変よく似ている。しかし、コザに設けているオドコ・メドコの奥行きを見ると、牛込喜内家の場合は一、八二尺（芯々）であるのに対して、当遺構の場合は三、一〇尺（芯々）にとっており、それだけ当遺構の方が新しい特徴を示しているものと見て間違いない。

当遺構は建造年代を示す古文書・棟札などを残していなかった。そこで伝承を頼りにして推定すると、明治一七年生まれの先祖の親が総社妙神様の宮司赤石家を買取り移築したものというから、移築年代は明治中頃と見ておけば妥当であろうと推察する。

なお、当家の屋号は「トーガラシ大臣」といい、禁忌作物はショウガとアサガオである。また当家は、昔から正月に門松を立てない習わしであるという。その理由として、次のようなことを言い伝えている。

「当家もその昔は大きな門松を立てていた。しかし、ある時その門松の下で落ち武者が殺された。それ以後、正月が来ても門松を立てないことになった」ということである。

また、当家の正月三日の家例は一日にソバを食べ、二日はゾーニを食べ、三日になると再びソバを食べる習わしであるという。このように当家の家例の場合、二日にゾーニを食べることになっているが、本来は三日間ともソバを食べる「ソバ家例」と見て良いであろう。

関口 要家 (写真16、図4)



写真16 関口要家 (元総社)

当遺構は桁行八間四尺、梁間四間半の規模であり、建造当初から屋根を瓦葺きにしていた。当遺構の示す新しい特徴は、トブグチ下手の従来ウマヤを設けていたところを、広々とした「イトヒキバ」に開放し、その前面の外壁にはイトヒキバの採光窓として、地上二尺位の低い位置に格子窓を設けた「イトザマ」にしていることである。

また、二階は前面を一階よりも張り出した「ダシバリツクリ」(出し梁造り)とし、棟の頂部に養蚕時における換気のための総檜そうひのを上げているなど、養蚕の影響を強く受けた民家形式となっている。

当家は現在、当遺構のすぐ前面に新しい主家を新築し、そちらに移り住んでいる。従って当遺構は現在空き家となり、物置として使われていた。また、当遺構は建造年代についての記録や伝承も残していなかった。そこで建造当初に復元した各種の特徴などから建造年代を推定すると、当遺構はおよそ一九世紀末期頃に竣工したものと見ておけば妥当であろうと考える。

最後に当家の正月家例は「ソバガレイ」であるという。  
佐藤 守家 (写真17、図4)

当遺構は桁行き八間二尺、梁間四間半の規模である。屋根は、現在鉄板一文字葺きになっている。しかし、昭和初期まで「トントンプキ」であったと伝えており、勾配が比較的緩いことから竣工当初は、石置



写真17 佐藤守家 (総社)

き屋根であったとも推察できる。当家の家業は本来農家である。しかし、大正一〇年に四二歳で没した先祖の代まで質屋をやっていたとい、かつて屋敷内に土蔵が三棟も存在したという。

なお、当家に残されている初代と思われる最古の位牌を見ると、次のような墨書を認めることができた。

「毒翁倉竜信士 承応三年(一六五四) 甲午天十月二十三日

孤峯一白位女 寛文十年(一六七〇) 庚戌天九月二十九日」

右のような位牌を残していることなどから、当家は少なくとも一七世紀初期頃から、当地に居住していたものと推察してよいであろう。ところで、当遺構の建造年代については、慶応年間に竣工したものと伝えている。しかし、ここではその裏付けがとれなかったため、一九世紀末期頃に竣工した遺構と推定しておいた。

齋藤松太郎家 (写真18、図4)

当遺構は桁行き八間半、梁間四間二尺の規模である。屋根は現在切り妻造り瓦葺きになっている。しかし、竣工時は板葺きであったという。デードコにおけるトブグチの下手は、桁行き一間半にわたってイトヒキバとし、その前面は低い位置にイトザマと称する格子窓を設けていた。また、棟の頂部には養蚕時の換気のため、小屋根を三個上げている。これは「三つ檜みつひの」ともいい、明治の末年に上げたものという。

当遺構の建造についての伝承は、明治三年近くにあつた風呂屋から



写真18 斉藤松太郎家（元総社）

失火してもらい火で、当家は土蔵一棟を残しただけで、総ての建物を類焼してしまった。なお、この火事は元総社町一帯を類焼する大火事であったという。

当家はその後普請にかかり、明治五年に竣工したのが現存する当遺構であるという。そして、当遺構を建造した時の当主は、三代前の三代吉（大正六年七三歳没）であったという。

なお、当家の正月家例は「ソバガレイ」といい、正月三カ日はソバを食べ正月神にもソバをお供えする習わしであり、昭和三〇年代までこの習わしを守っていたという。しかし、現在は総てがいい加減になつてしまい、ソバガレイの習慣も忘れられつつあるという。

#### 伊藤典子家（写真19、図4）

当遺構は桁行き八間、梁間四間半の規模である。建造当初から切り妻造り瓦葺きで、棟上に「二つ檜」を上げている。当遺構は、桁行きの下手三間半までを土間として「ダイドコロ」と称し、その表側のほぼ中央に幅一間の出入り口を設けて「トボグチ」呼称し、面積にして一坪ほどもある大きな板戸を引きかたてていた。

トボグチの下手は「イトヒキバ」とし、その前面における外壁の低い位置に、縦格子の入った「イトザマ」を設けている（写真20）。このイトザマは、この内側で糸を曳くときの採光用の窓として、座操り器を手回しする人間の姿勢に合わせて、地上一、五尺前後の低い位置に開いた窓であり、前橋とその周辺地域の民家に限って見受ける極めて特



写真19 伊藤典子家（元総社）

徴的な採光窓である。即ち写真20に見るイトザマは、幕末から大正期に流行したその土地の産業と密接に結びついて出現したもので、前橋とその周辺の民家に見る特徴ある建築意匠と言えるのである。

なお、当家は老人がいなくなつてしまったので、当遺構の建造年代についてはあまり良く判らないという。しかし、亡くなった親からは大正期に建造したものと聞いているということであった。外観や柱間寸法及び復元した各種の特徴などから推察して、やはり大正期に竣工した遺構と見て妥当であろうと考える。

#### (七) 五間取りの民家

##### ① はじめに

このたび調査した農家遺構二三棟のうちで、この形式に属するものは四棟（約一七、四％）であった。これら四棟の示す建造当初の平面（復元平面）は図5に示す通りである。ここでまず、図5の平面をよく観

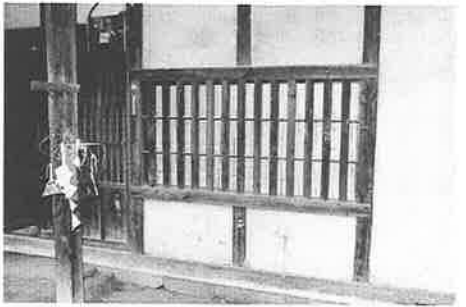


写真20 美しい意匠を見せるイトザマ（伊藤典子家）

察すると、同じ五間取りの民家でも二つの形式に区分できることが判明する。その一つは、ザシキの裏側において桁行き方向にナンド・ゾーベヤと二室並べる形式及びザシキの梁間方向にチャノマ・ゾーベヤと二室を配置する形式である。

次にこれらの四棟について、建造年代の古いものから順次建築的解説を行うことにする。

## ② 調査遺構の建築解説



写真21 都丸耕治家（総社）

### 都丸耕治家（写真21、図5）

当遺構は桁行き一〇間半、梁間五間半の規模である。建造当初の屋根は、草葺き入り母屋造りであったという。しかし、八〇年程前に小屋組を大改造し、現在見るような瓦葺き屋根とし、棟上にも「テンソウ（天窓）」を上げたものと伝えられている。

当遺構は前述の「はじめに」の項で述べたように、ザシキの裏側において桁行き方向に二室並べた五間取り民家である。復元平面（図5）を見ると桁行きの下手五間までを土間とし「ダイドコ」と呼んでいる。ダイドコの表側と裏側の中央部に出入り口を設け、表側の方を「トブグチ」といい、裏側の方を「ウラグチ」と呼称する。そして、トブグチを入るとすぐ右手（下手）にウマヤを設けていた。またトブグチの上手には「イトヒキバ」があり、その前面に「イトザマ」も備えていた。

ザシキは一五畳の広さを有し、その裏側に二つの小部屋を設けてダ

イドコ寄りの室を「ゾーベヤ」といい、その上手の室を「ナンド」と呼んでいる。ゾーベヤは雑貨用品を収納しておく室であり、ゾーベヤの下手に一段低く張り出した板張り床の場所を「オカツテ」と称してここに家族が集まって食事をした。また、ゾーベヤの上手の室であるナンドは、家族の寝室であった。しかし、当遺構の場合はコザの裏側にもナンドと呼称する室があるので、当遺構においてはザシキ裏のナンドと合わせて二つの寝室を有していたことになる。

当家は屋号を「ホンケ」といい、当地における都丸姓の本家に当るものという。なお、当遺構の建造年代については、嘉永七年（一八五四）旧長岡村に建っていた家を買取って移築したものという。従って、その時の「売渡申居宅證文之事（嘉永七年七月）」と墨書のある売買契約書を残している。従って当遺構は、買取った翌年あたりに移築竣工したものと見ておけばよいであろう。

### 松下利夫家（写真22、図5）



写真22 松下利夫家（青梨子）

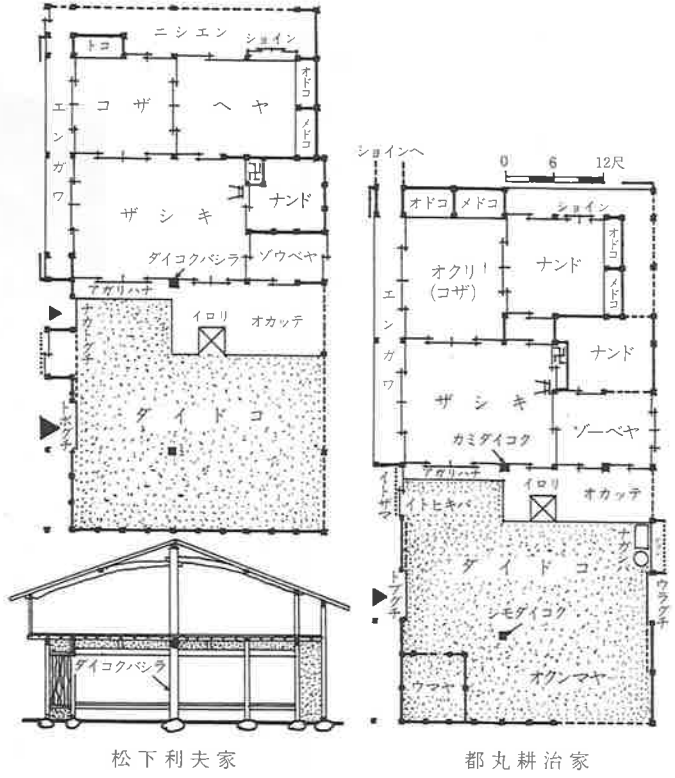
当遺構は桁行き一〇間半、梁間五間半の規模である。屋根は現在切り妻造り鉄板一文字葺きになっている。しかし、屋根勾配が二〇度（三寸七分）と緩いことから考えて、当初は板葺き屋根であったものと推定する。復元した平面（間取り）の様子は、前述の都丸耕治家の復元平面とほぼ同様である。

当遺構は、建造に関する墨書や棟札等を残していない。しかし、次のようなことを伝承していた。

「当遺構は最初板鼻に女郎屋として建っていた。それを当家の先祖が買い取って現在の地に移築したものである。また、棟上のテソウ（総槽）は移築当初なかったもので、いつの頃か不明だが明治九年生まれの先祖政一郎が上げたもの」と伝えていた。

しかし、残念ながら移築した年代については、先祖から何も聞いていないので、皆目判らないということであった。そこで、復元した建築に見る各種の特徴などから推察すれば、およそ一九世紀中期頃に移築した遺構と見ておけば妥当であろうと考える。

なお、当家の正月家例は「ゾーニガレイ」であり、禁忌作物はトー



モロコシであるという。トーモロコシを作らない理由として、その昔当家の先祖が、トーモロコシ畑で切り殺されたためであると伝えていた。しかし、終戦直後からは作って食べているという。

城田幸喜家（写真23、図5）

当遺構は桁行き九間四尺、梁間約五間の規模であり、屋根を現在切り妻造り鉄板一文字葺きにしている。しかし、竣工当時は板葺きであった。当遺構の復元平面は「グイドコ」に接した床上の室を梁間方向に三室並べたもので、その室名は表側から「ザシキ」・「チャノマ」・「ゾーベヤ」と称している。そしてこれらの室の上手には表側に「コザ」を、

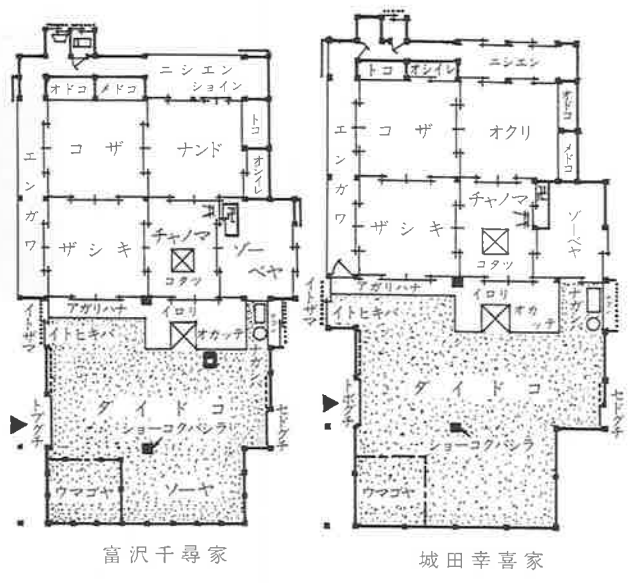


図5 五間取りの民家（復元平面・断面図）



写真23 城田幸喜家 (大友)

その裏側に「オクリ(寝室)」を配したものである。

従って当遺構は、同じ五間取りの遺構であっても、前述の都丸耕治家や松下利夫家とは、ダイドコ寄りの室の配置に若干の違いを見せているのを特徴としている。

伝承によれば当家は、明治の初年に火災にあい、前身の主家や附属屋を総て焼失してしまったという。従って、その後建造したのが現存の主な家であり、大友に住んでいた大工が建てたものという。以上のような伝承から当遺構は、一九世紀末期頃に竣工したものと見ておけば妥当であろうと推察する。

なお、当家は江戸時代に名主役を務めていたため、焼失前の主家の上手には、代官やその手代が来村した時に休憩したり宿泊するための場所として、縁側でつながった別棟の「デエ」があったという。

当家の正月家例は「ソバガレイ」で、一日〜三日まで毎日ソバを食べ、正月の神棚にもソバをお供えしたという。しかし、当主の幸喜氏が子供の頃、三日間ソバばかり食べているのでは飽きてしまうので、中日の二日だけゾーニを食べるようになり、現在でもそのようにしているということである。

#### 富沢千尋家 (写真24、図5)

当遺構は桁行き九間二尺、梁間五間の規模であり、二階の前面をダシバリツクリ(出し梁造り)とし、屋根を現在切り妻造り瓦葺きにしている。しかし、建造当初は板葺きであったと伝えている。



写真24 富沢千尋家 (江田)

当遺構の復元平面をよく観察すると、前述の城田幸喜家のそれと大変よく類似している。当遺構の屋内を見ると、桁行きの下手四間半までを土間として「ダイドコ」と呼称し、ダイドコの表側出入口を「トブグチ」と呼んでいる。そして、トブグチの下手に「ウマゴヤ」を設け、トブグチの上手には「イトザマ」の痕跡を残していることから推察して、その内側を「イトヒキバ」にしたようである。

なお、ダイドコの上手表側の室は、畳を敷いた八畳間とし「ザシキ」と称している。そして、ザシキの裏側の室は畳敷きの六畳の広さとし「チャノマ」と呼び、その中にコタツを備える。さらにチャノマの裏側の室は、六畳大の板敷きの室とし「ゾーベヤ」と呼称する。そして、チャノマとゾーベヤの間には仏壇を備え、その手前の鴨居上部では棚を吊って神棚を設けている。ここで、各室の機能について述べておくと、以下のようである。

チャノマの機能は、ここに家族が集って団らんする場所であり、いわば家族の居間に当たる室である。従って、チャノマに向かって仏壇と神棚を備えているのもうなずけることである。

ゾーベヤは、雑貨品やオカッテ用品などを収納しておく室である。コザは、「整形田字間取りの民家」の項で詳しく述べたように、冠婚葬祭や村の集会などを行う時に主室となる室であり、ザシキはコザに付随した接客室である。従って、大勢の人が集まる時は、コザとザシキ

境の建具を取り払い、この両室を一つの室として使用した。なお、この両室に見るその他の用途（機能）は「整形田字間取りの民家」における木部茂雄家の項で詳しく述べているので、そちらを参照されたい。ナンド（ヘヤまたはオクリとも称す）は、主に当主の寝室に当てられた室である。その他産室にも使われ、また死人を一時この室に寝かせたり、湯灌もこの室で行う習わしになっていたというから、やはり「整形田字間取り民家」の木部茂雄家の項において、ナンドの機能について詳しく述べているので、そちらを参照されたい。

最後に、当遺構の建造年代について考察すると、明治三年生まれの先祖が、数え歳一九歳の時に竣工したものと伝えていることから計算して、明治二一年に竣工した遺構ということになる。

なお、当家の禁忌作物はキュウリであったという。しかし、終戦直後からは自らキュウリを作り、それを食べているという。また、当家の正月三カ日の家例は「ソバガレイ」である。その他、正月三カ日は年男といって、当主かその長男がまだ夜の明けないうちに朝風呂に入って身を清め、井戸から若水を汲んで正月神に供え、炊事も総て年男が行ったものという。しかし、最近では総てがいい加減になってしまい、こうした伝統的なしきたりも行われなくなってしまうという。

## (八) 六間取りの民家

### ① はじめに

このたび、第二次調査を実施した二三棟の農家遺構のうちで、この形式に属するのは三棟（約一三％）であった。これら三棟の示す復元平面は、図6に掲げた通りである。ここでまず、図6に掲げた復元平面をよく観察すると、室の配置に二通りの方法があるのを知ることができよう。即ち、その一つは牛込勘太郎家のように、桁行き方向

を二列とし、梁間方向に三列の室を並べて六間取りとしている場合と、（神田雄二家・都丸甲子郎家のように桁行き方向を三列とし、梁間方向に二列の室を並べて、六間取りとしている場合の形式である。次に、これら三棟の遺構について、建造年代の古い順に建築的解説を行うことにする。

### ② 調査遺構の建築解説

#### 牛込勘太郎家（写真25・26、図6）



写真25 改造前の牛込勘太郎家（下新田）



写真26 昭和41年の改造後の牛込勘太郎家

当遺構は桁行き一〇間半、梁間五間の規模である。当遺構の当初の外観は、草葺き前兎造りであった（写真25）。しかし、昭和四一年に主として二階部分を大改造し、現在見るような切り妻造り瓦葺きの姿に改めた。

当遺構の平面を見ると、桁行きの丁度半分までを土間として「ダイドコ」と称し、ダイドコの下手に「ウマヤ」を設け、「トボグチ」の上

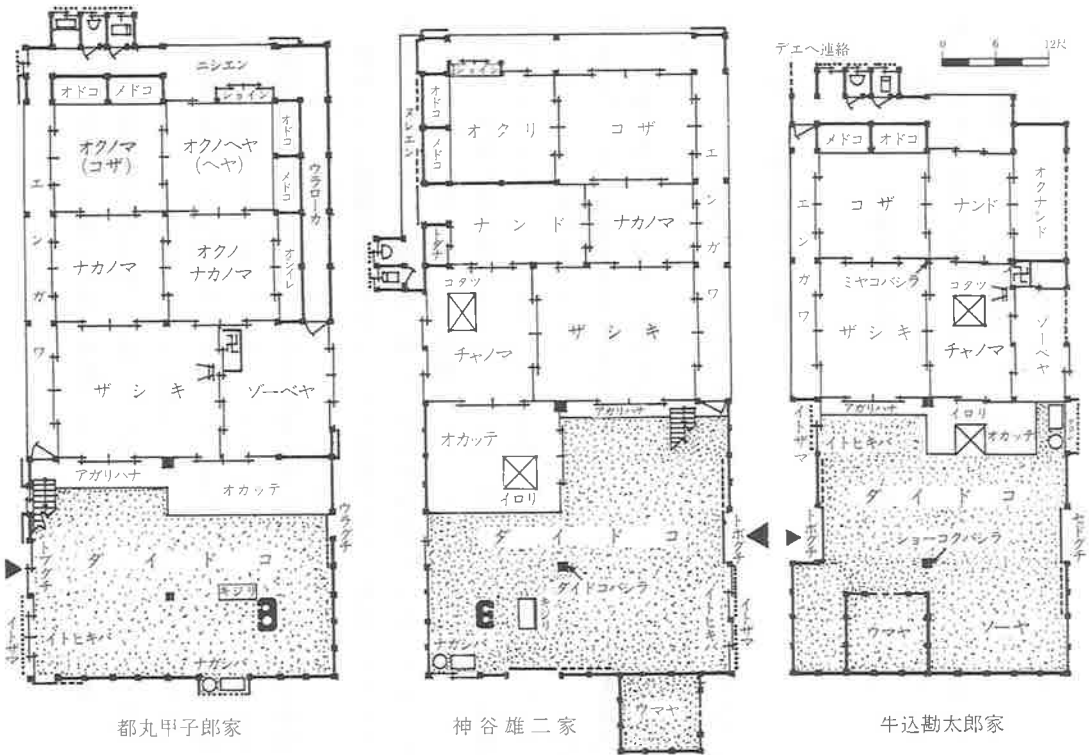


図6 六間取りの民家（復元平面図）

手には「イトヒキバ」も設けていた。

ダイドコの上手は、桁行き方向に二列の室を配し、梁間方向に三列の室を設けた六間取り民家である。そして、ダイドコに接した列は表側の室を「ザシキ」といい、その裏側の室を「チャノマ」と称し、一番裏側の室を「ゾーベヤ」と呼称する。そして、チャノマには「コタツ」を設け、チャノマの下手には一段低い板張り床を張り出して「オカッテ」と呼称し、その表側に寄った位置に「イロリ」を設けていた。ザシキの上手の室は「コザ」と称し、その裏側の室を「ナンド」といい、さらにナンドの裏側の室を「オクナンド」と呼称する。ここで各室の使い方について述べておくと以下のようである。

コザは、これまでも述べてきたように、冠婚葬祭や村の集会などを催す時に、それらを執り行う最も重要な室（主室）として位置付けられた室である。また、そのような時にザシキは、コザとの境の建具を取り除き、コザと一続きになった室として使われるのである。

チャノマは、ここに家族が集って団らんを楽しむ場所であるのでいわば、現代の居間に相当する空間である。従って、この室にはコタツを備えたり、現在においてはテレビなどを設置しているのである。

ゾーベヤは、家庭用雑貨品や普段あまり使わない物などを収納しておく室である。従って、ゾーベヤという室名に漢字を当てれば「雑部屋」と表記するものであろうと考える。

ナンドは、当主とその子供たちの寝室として使われた室であり、お産をしたり、湯灌をする時もこの室であった。なお、オクナンドは主に布団や寝具類などを収納しておいた室であった。

当家は、江戸時代に整形四間取り民家の項で述べた牛込喜内家（名主）から分家に出た家と伝え、仏壇に安置している初代の位牌を見ると「宝聚院水節澄安 文化一〇年二月一六日 勘太郎右又」と墨書



してあり、以後代々院号付きの戒名となっている。また伝承においても名主役を務めた家と伝えているので、それを信頼してもよいものと考えている。

ところで、当遺構は建造年代についての記録を全く残していなかった。そこで、復元した建築に見る各種の特徴等から推察すると、当遺構はおよそ一九世紀中期頃に竣工したものと見ておけば妥当であろうと考える。なお、当遺構は上手（西）側に少し離れて、棟を南北に配した「デエ」を設置し、当遺構のエンガワでつながっていた。このデエは、八畳の室を南北方向に二つ接続したもので、南側の室にはオドコ・メドコ及び書院を備え、主家より立派に造っていた。このようなデエを有していることから、江戸時代においては名主役を務めていた家柄であろうことを知ることができる。

#### 神谷雄二家（写真27・28・29、図6）

当遺構は桁行き一間四尺、梁間五間半の規模である。外観は、建



写真27 神谷雄二家（総社）



写真28 明治43年4月撮影の神谷雄二家



写真29 大黒柱と下大黒柱間の梁に荒縄を巻いて魔除けにしている様子、右の柱は大黒柱（神谷雄二家）

造当初から切り妻造り「瓦葺きで、棟の上には見事な「総檜」をあげている。間取りは、前述の牛込勘太郎家と異なつて、桁行き方向に三列の室を配し、梁間方向に二列の室を配置して六間取りとしたものである。なお、当遺構は明治二四年に蚕種屋の主家として竣工したものと伝えている。

当遺構に使用した木材は、吾妻郡大戸の名士加部安左衛門所有の山林から切り出したもので、中之条の太田村からイカダに組んで吾妻川から利根川へと流し、それをゲンケイ寺の裏で引き上げたものという。普請に当たった大工は、当家の二軒裏に住んでいた越後国刈羽郡石地村出身の西村という棟梁であった。

当遺構を道路側から見た現在の外観は写真27のようであり、写真28は同じ方向から見た明治四三年の様子である。明治四三年の写真では、門に接した小屋の屋根をトントン葺き（板葺きの一種）にしていたり、裏の家の主家の屋根もトントン葺きにしているなど、この部分の様子は屋根葺き材料の一部を変えているだけで、八〇年前の景観と余り変わっていない様子が驚かされるのである。

写真29は、大黒柱と下大黒柱の間に渡された梁の大黒柱と接する位置に、荒縄を幾重にも巻いた様子である。これは、毎年正月の初申の日に二巻きずつ巻くもので、魔除けや泥棒除けの呪いになるということである。

都丸甲子郎家（写真30、図6）



写真30 都丸甲子郎家（総社）

当遺構は桁行き一間半、梁間五間半の規模である。屋根は当初から切り妻造り瓦葺きとし、棟の頂部に「総檜」を上げている。屋根瓦は「ドイブキ」と称し、野地板の上に粘土を部厚くのせ、その上に瓦を並べたもので、古来からの葺き方であるという。当家では、当遺構を建造した時の次のような墨書のある普請帳を残している。

表 紙Ⅱ「建築普請備忘録 大正拾五年冬一月吉日」

裏表紙Ⅱ「主人 都丸 繁」

当遺構は、右の普請帳から大正一五年に竣工したことを知ることができた。また、棟梁は総社町総社字新田の地に、現在でも子孫が住んでいるという、通称「マタバン」という大工が務め、彼の息子長八も職人として関与したという。なおマタバンとは「又番」と記し、大工高橋又右衛門の通称であったという。

ところで、当主（大正一三年生）の話によれば、当地においては昭和の初め頃においても大工のことを番匠ばんじょうといい、通称としては名前の最初の一字と番匠の最初の音である「バン」をくつつけて「くバン」と呼称して大工を呼ぶのが普通であったという。

当家は屋号を「鴻池こういけ」といい、その昔金貸しをしていたという。また、昔からタニシをたべてはいけないことになっているという。その

理由としては、昔先祖が病気になる時、タニシをたべないから病気を直してくれるように、神様に願を掛けたことによるものと伝えている。

### (九) 多間取りの民家

#### ①はじめに

このたび、第二次調査を実施した二三棟の農家遺構のうちで、この形式に属すものは、以下に詳しく述べる都丸茂雄家の一棟だけであった。しかし、建造当初の当遺構は農家ではなく、武士の家として造られたものである。これについては次の項で詳しく述べることにする。なお、都丸茂雄家の復元平面は、図7に示す通りである。

#### ② 調査遺構の建築解説

#### 都丸茂雄家（写真31、図7）



写真31 都丸茂雄家（総社）

当遺構は桁行き一間二尺、梁間六間四尺の大規模な農家遺構である。外観を見ると、前面の二階を出し梁造りとし、屋根は切り妻造り瓦葺きで、棟の頂部に総檜を上げているので、これだけを見ると養蚕造りの農家遺構とまったく同様な意匠を示している。しかし、当遺構は上手の表側に低い板張り床を突き出し、その上に切り妻破風をつけて、高級な武士の家にしか見受けられることのできる立派な式台（正式な玄関を付設し



間四尺と墨書されており、現存する当遺構の規模と全く同様であることから推察して、権田に建築中の小栗上野介の居宅も、そっくりそのまま持木へ移築したものと見てよいであろう。

即ち、現存する都丸茂雄家の主家は、二度の移築を経ているものの規模や各室の配置を見ると、小栗上野介の居宅として最初計画したままの様子を大変よく伝えているものと見てよいであろうと考える

### 三、町家

#### (一) はじめに

平安時代においては、すでに座して物を売る舎としての店家なる名称があり、仁平元年(一一五一)博多津では、資材を運びとられた店房在家があり、宇津保物語にも棚たなを構えて物品を陳列する店があり、土佐日記にも「山崎の棚」がある。また、久安六年(一一五〇)には「四条革座の棚」がある。なお、この時代の店屋は主家の前面に棚を突きだし、その棚の上に物を並べて売っていたことから、この時代の「棚」は、店屋の意味を含んでいたのであった。

以上のような点から考えて、平安時代の末期に至ると、年中行事絵巻きに見受けるような家の前面に棚を突き出した町家が、農家とは別にひとつの建築類型として、成立していたと考えられている。

また、一般に町家とは町筋において、住居の一部に物を並べて売っている店家をかねた住居をいう。しかし、広い意味においては、町に住む町衆の住居も含めて町家と称している。従って、必ずしも店家に限らず、町筋に建つ町衆の専用住宅も含めて、町家の類型に入るものである。

ところで、このたび利根川西部地区において本調査を実施した民家

は、農家の場合二三棟にも達したが、町家は二棟だけであった。この町家造り民家の示す復元平面は、図8に掲げた通りであり、これまで見てきた農家の平面とは、全く異なる様相を示している。その最大の特徴は、片側に寄せて表側から裏側へ通り抜けできる細長い土間を有することであり、また「ミセ」と呼称する床上の空間も存在することなどである。以下においては、図8に示した二棟の町家について、建築的な解説を行うものである。

#### (二) 調査遺構の建築解説

##### 本間富恵家(写真32、図8)



写真32 本間富恵家(総社)

当遺構は桁行き一〇間半、梁間五間半の規模である。しかし、裏側の中央部を梁間方向に二間程突き出し、そこに「シヨイン」と「ナンド」を設けている。そして、この部分は平屋とし棟を南北方向に架けている。当遺構は、造り酒屋の店屋を兼ねた主家として、関東大震災のあった年即ち、大正一二年に竣工したものと伝えている。

当家で醸造した酒の銘柄は「惣嬉(そううれし)」と称し、昭和四三年の生産高は八〇〇石であった。しかし、近代化の波に押されて設備投資の先行きに明るい見通しが得られず、昭和四四年で生産を打ち切って酒造業を廃業し、現在に至っているわけである。

当遺構の建築工事を担当した大工は、現在も総社町高井に存在する

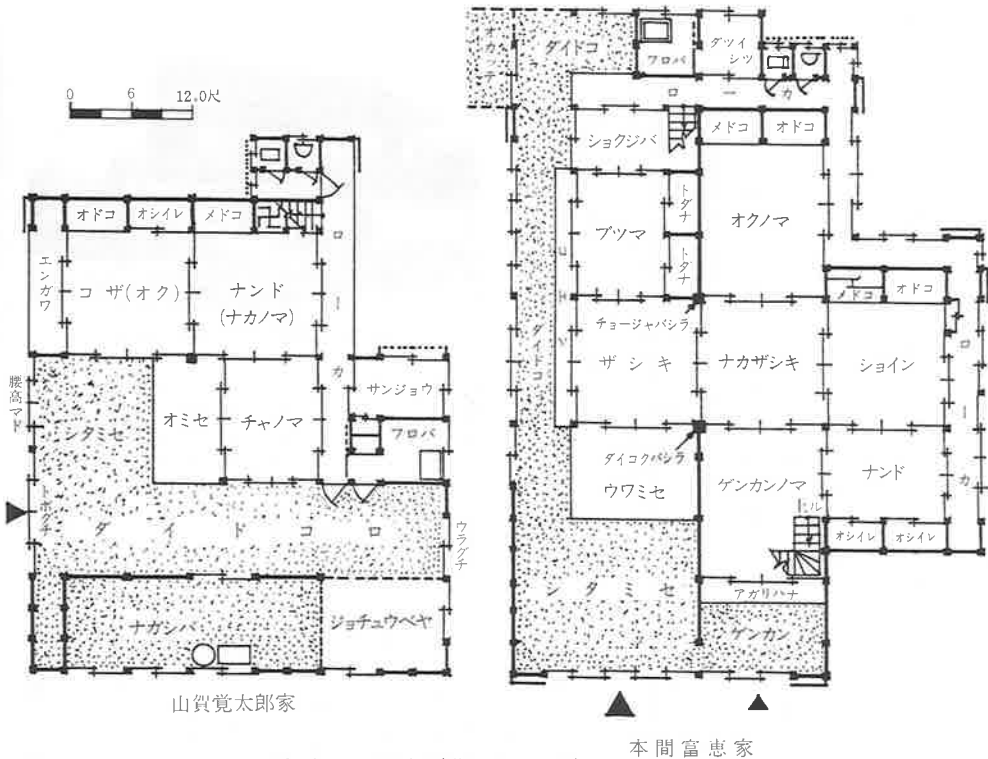


図8 町家造りの民家（復元平面図）

ある。ところ、当家の先祖も新潟県柿崎の出身であるといい、三代前の喜平治（大正五年七五歳没）が初代で、現在の土地もこの初代が買ったものという。なお、当家の屋号は「福田屋」と呼んだということである。

張り出して、その先端に二階の柱を建て一階より二階の床面積を増加する架工法を「ダシバリヅクリ」と呼び、またその上部の二階の軒裏には、水平に板を張って軒裏の見映えを良くしてこれを「セガイヅクリ」といい、この両者を合わせてダシバリセーグーヅクリと呼称するのだということであった（写真33）。



写真33 出し梁船柵造りの様子（本間富恵家）

当家においては、表側の造りを「ダシバリセーグーヅクリ（出し梁船柵造り）」と称している。その理由を聞くと、二階の梁を一階の外壁より一尺五寸ほど外側に

「株式会社小島建設」の社長、小島重男氏の父親の故留治が建造したものである。なお、留治は新潟県刈羽郡西山町甲田の出身で、昭和四八年に八三歳で没している。

当遺構に見る平面の特徴は、妻側を道路に面して建て、道路に接する妻側部分を全て土間とし、その南側部分を「シタミセ」にし、その北側部分を家人のための玄関としていることである。そして、シタミセの奥には六畳の広さの「ウワミセ」を設け、来客との商談等はここで行った。

山賀覚太郎家(写真34、図8)



写真34 山賀覚太郎家(総社)

当遺構は桁行き七間半、梁間五間の規模を主家の主要部分とし、その裏側に一間半の下屋を張り出し、この上に片流れ瓦屋根を架けたものである。外観は、二階建て切り妻造り瓦葺き平入りとし、下手側を土間としている。土間は「ダイドコロ」と呼

称し、その表側を広く取って物品を並べて置く「シタミセ」にしている。そして、シタミセの奥は床上の四畳の広さとし「オミセ」と称して、商談の場所としている。ところで、当遺

構も造り酒屋の店及び主家として竣工したものである。具体的には、昭和三年一〇月に竣工したものといい、大工は総社町字総社新田に住んでいた高橋又右衛門とその息子長八であった。

当家は屋号を「田中屋」と称し、造り酒屋として「山瀬川」という銘柄の酒を醸造していた。しかし、やはり近代化の波に押されて、昭和四五年に酒造業を廃業したのであった。

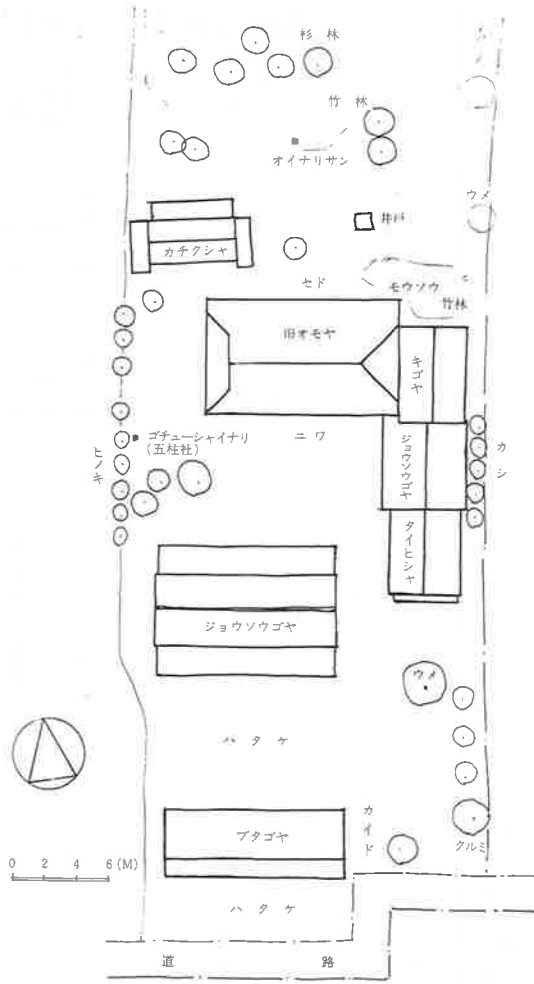
当家の裏側へ廻ると、大きな煉瓦造りの倉庫及び醸造小屋が残っており、酒造業を営んでいた時代の様子を偲ぶことができる。この倉庫は、上棟時の棟札を残しており、それによれば昭和二年七月に上棟したものであり、大工棟梁は主家と同じ高橋又右衛門であった。また、棟札によれば煉瓦職人は増田牧太郎、瓦職人は亀倉梅吉、鳶職人は高橋登代吉であった。

なお、当家は現在も酒屋の看板を上げて店で酒を売っている。しか

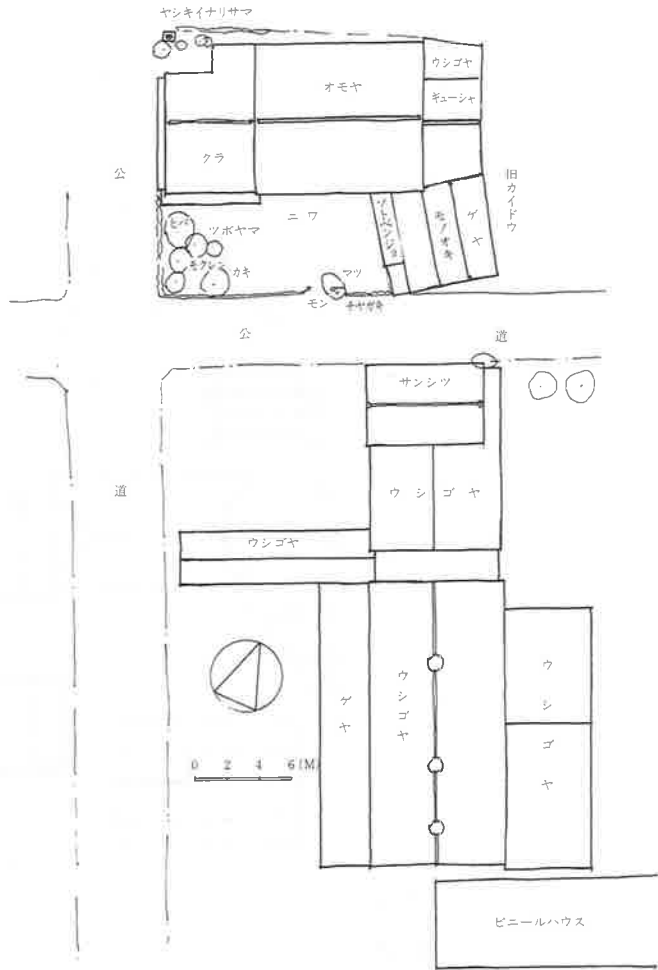
しこれは、小売店として酒を売っているわけであり、以前のように造り酒屋としての店ではない。

註

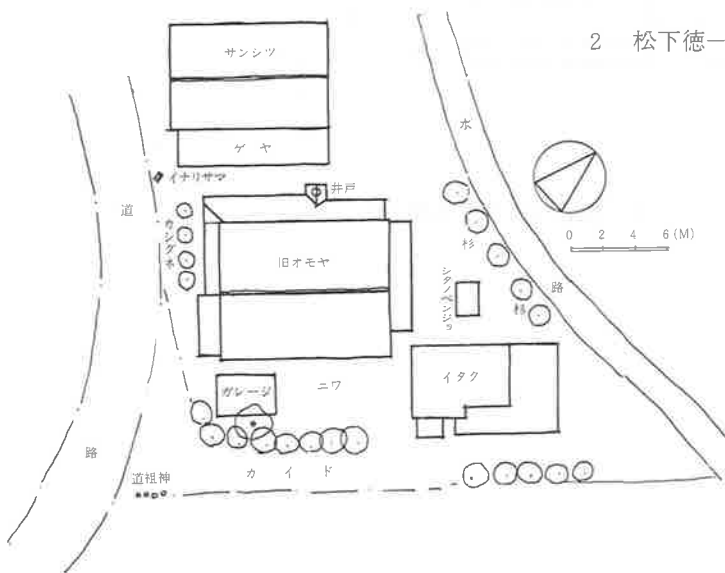
- (1) 前橋市教育委員会編「赤城南麓の民俗」前橋市教育委員会発行、平成元年三月三〇日。
- (2) 境町史編さん委員会編「境町の民家と洋風建造物」境町発行、平成元年三月二九日。
- (3) 桑原 稔著「住居の歴史」現代工学社発行、昭和五四年四月二〇日。



1 桜井和実家 (青梨子)

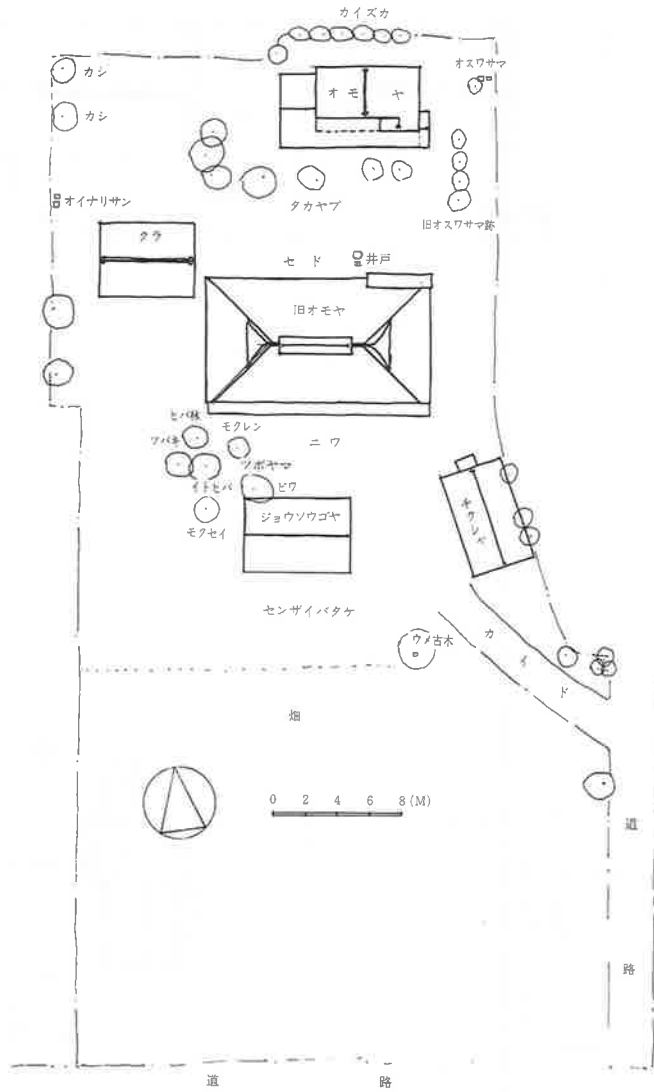


2 松下徳一家 (青梨子)

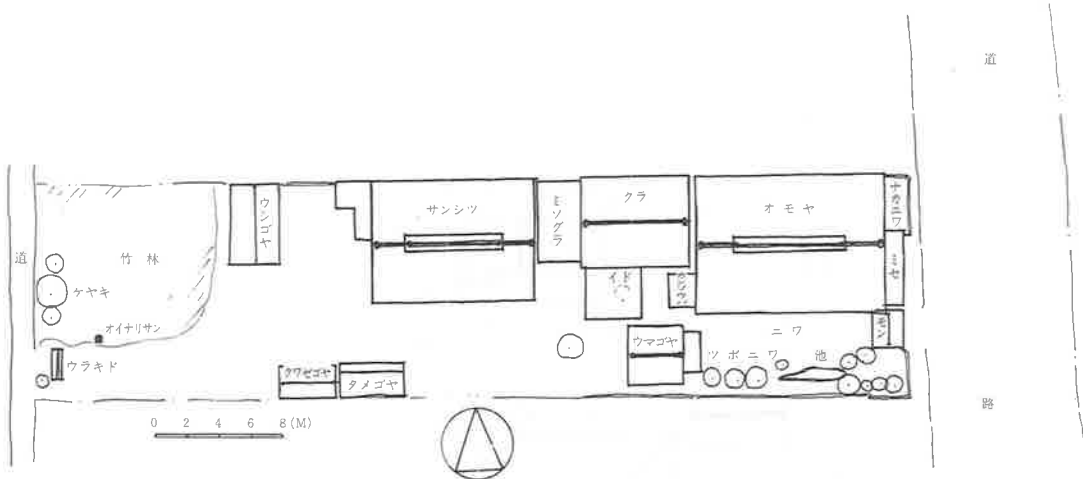


3 松下音三家 (青梨子)

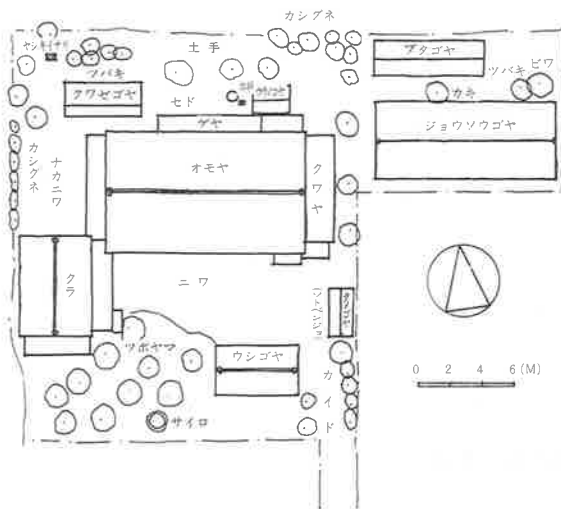




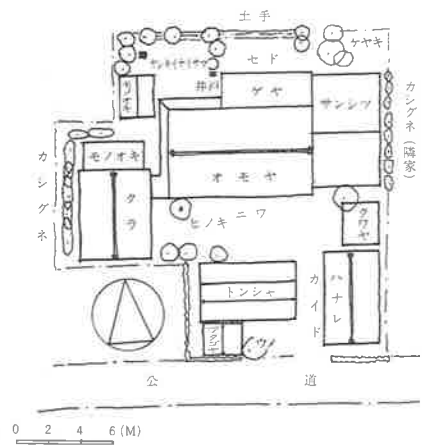
4 松島輝代家 (青梨子)



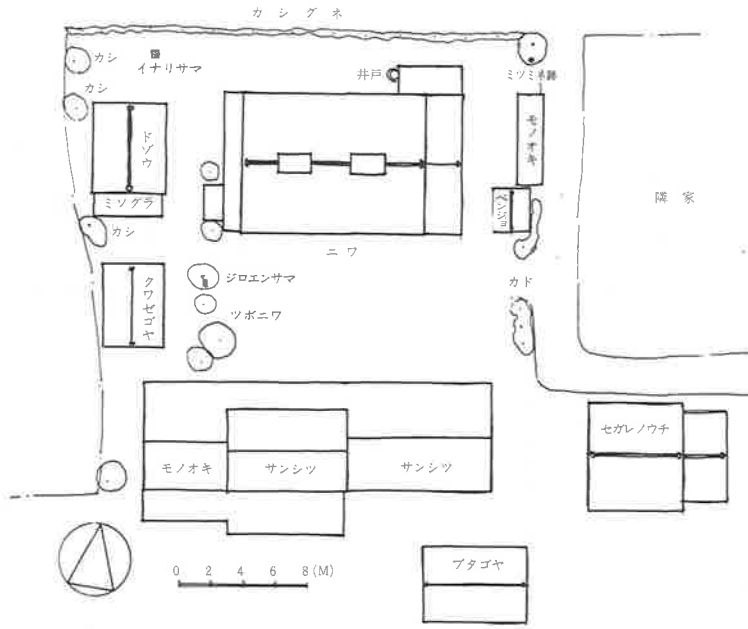
5 安藤徹哉家 (総社)



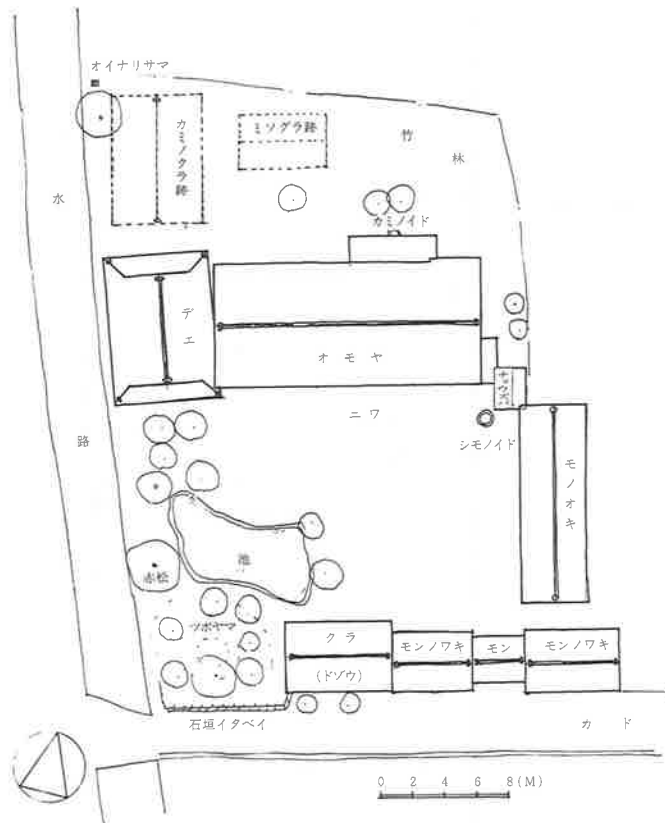
8 木部茂雄家 (元総社)



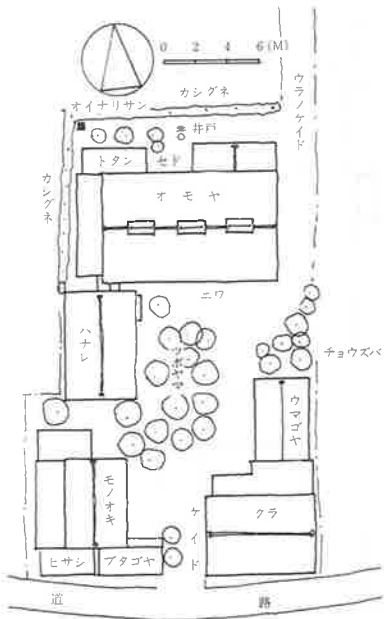
7 磯田茂家 (元総社)



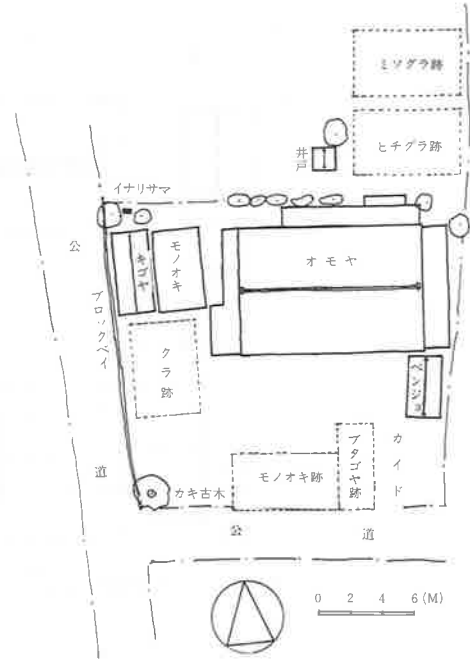
9 金井正治家（元総社）



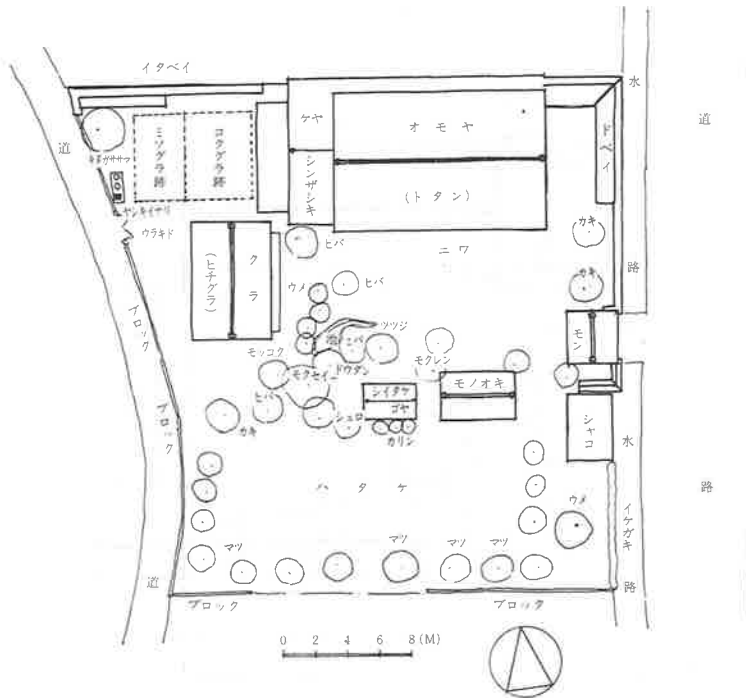
10 牛込喜内家（下新田）



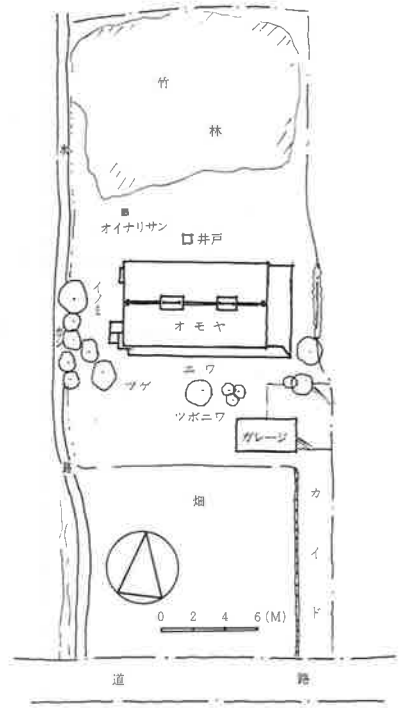
14 斎藤松太郎家（元総社）



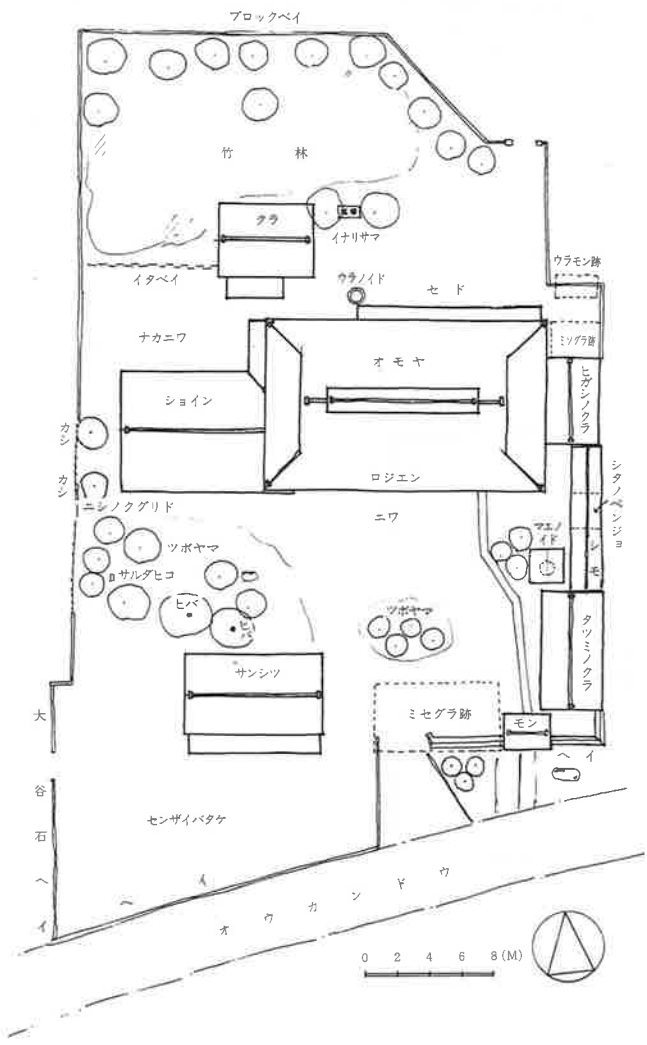
12 関口要家（元総社）



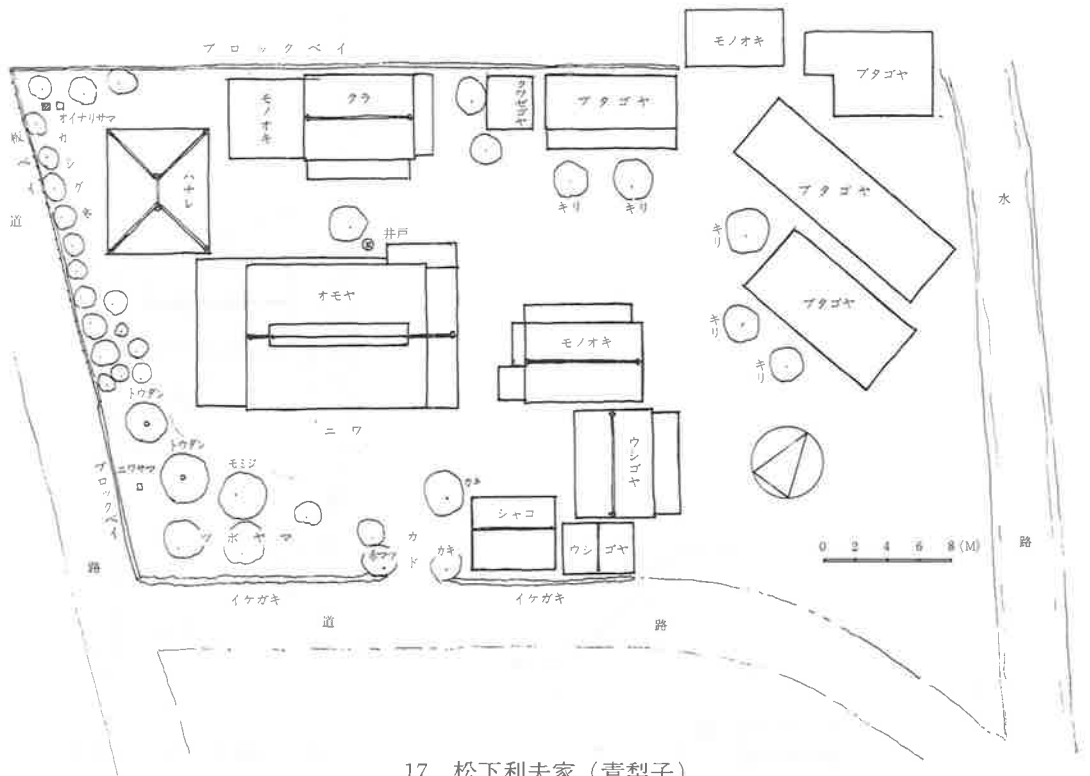
13 佐藤守家（総社）



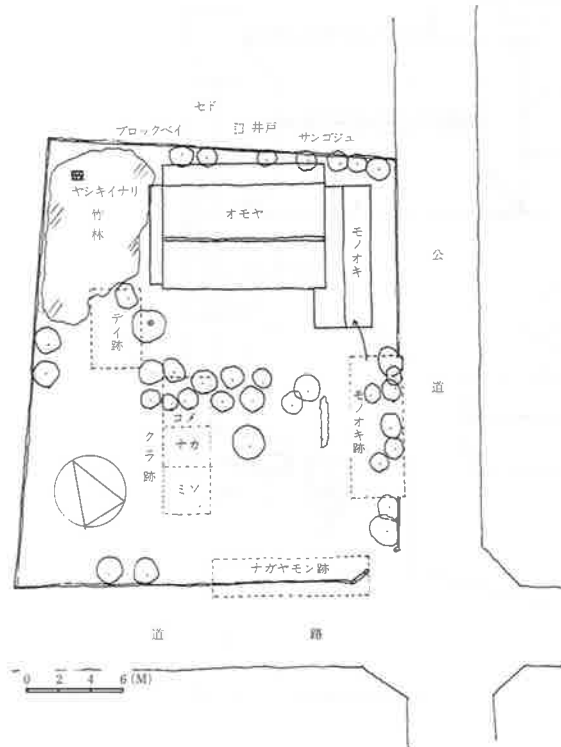
15 伊藤典子家（元総社）



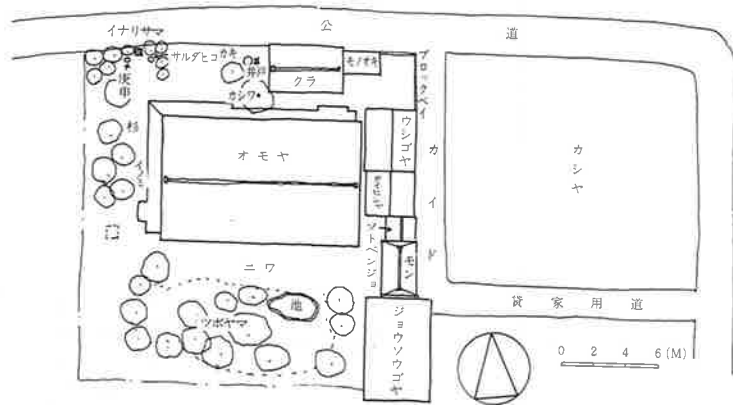
16 都丸耕治家（総社）



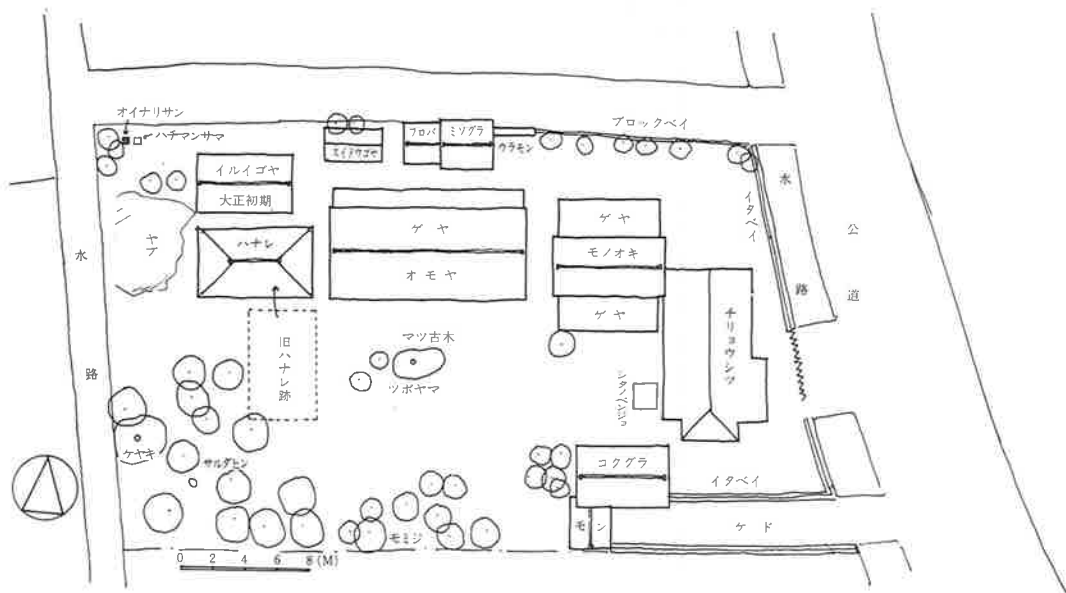
17 松下利夫家 (青梨子)



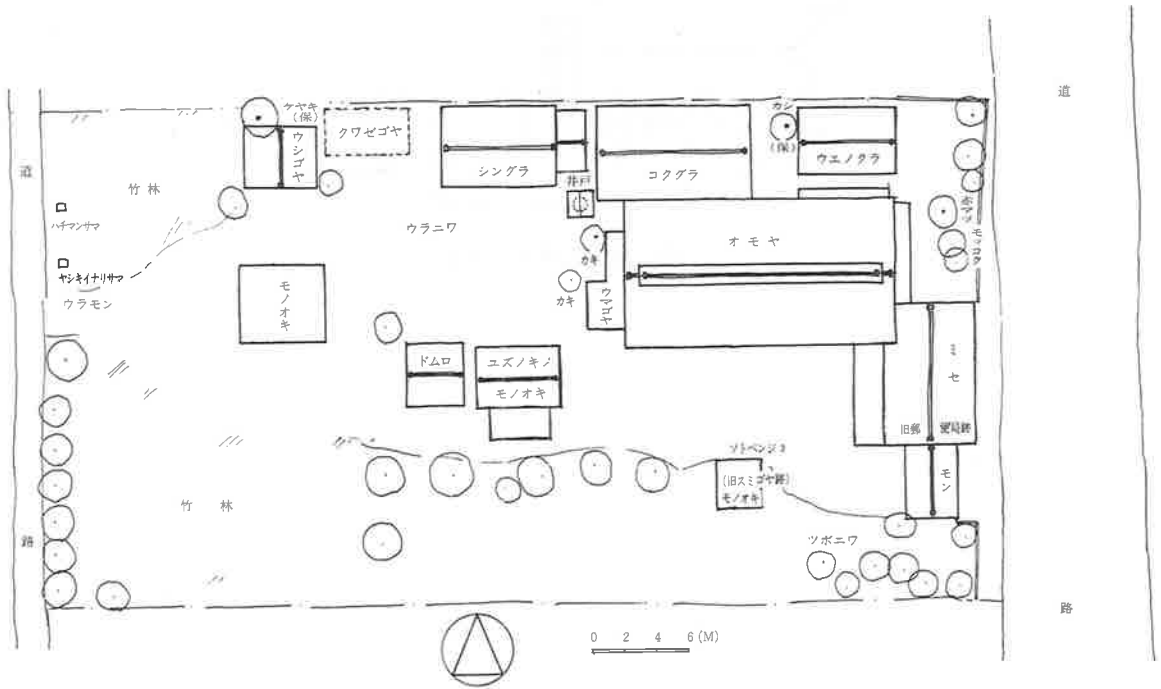
18 城田幸喜家 (大友)



19 富澤千尋家 (江田)

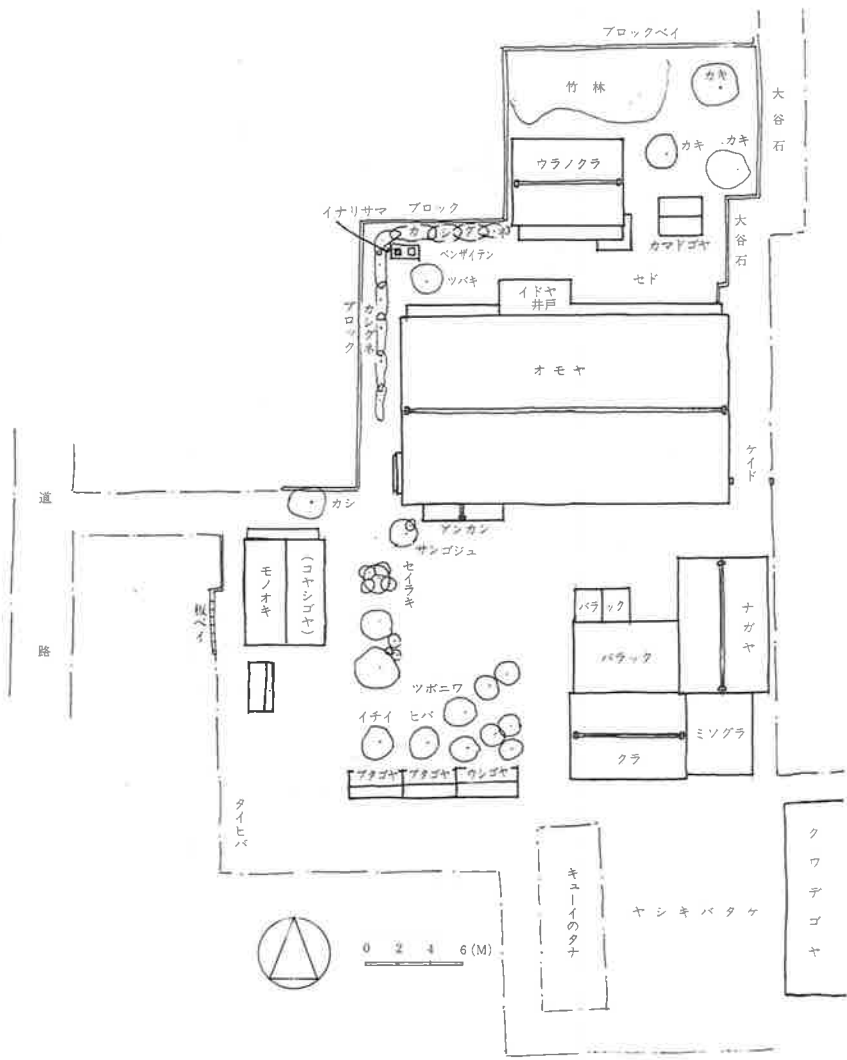


20 牛込勘太郎家 (下新田)

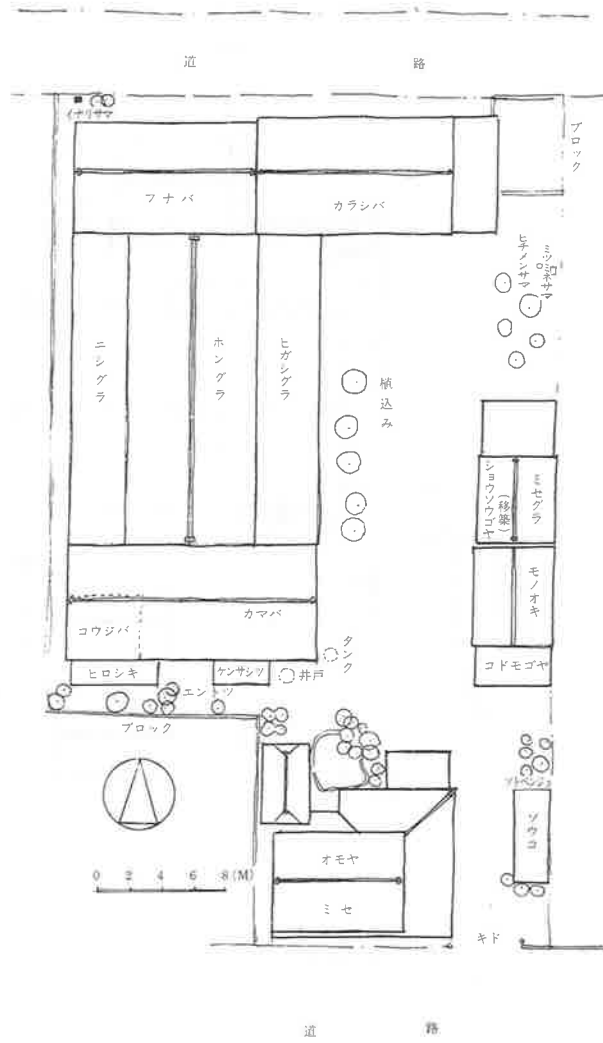


21 神谷雄二家

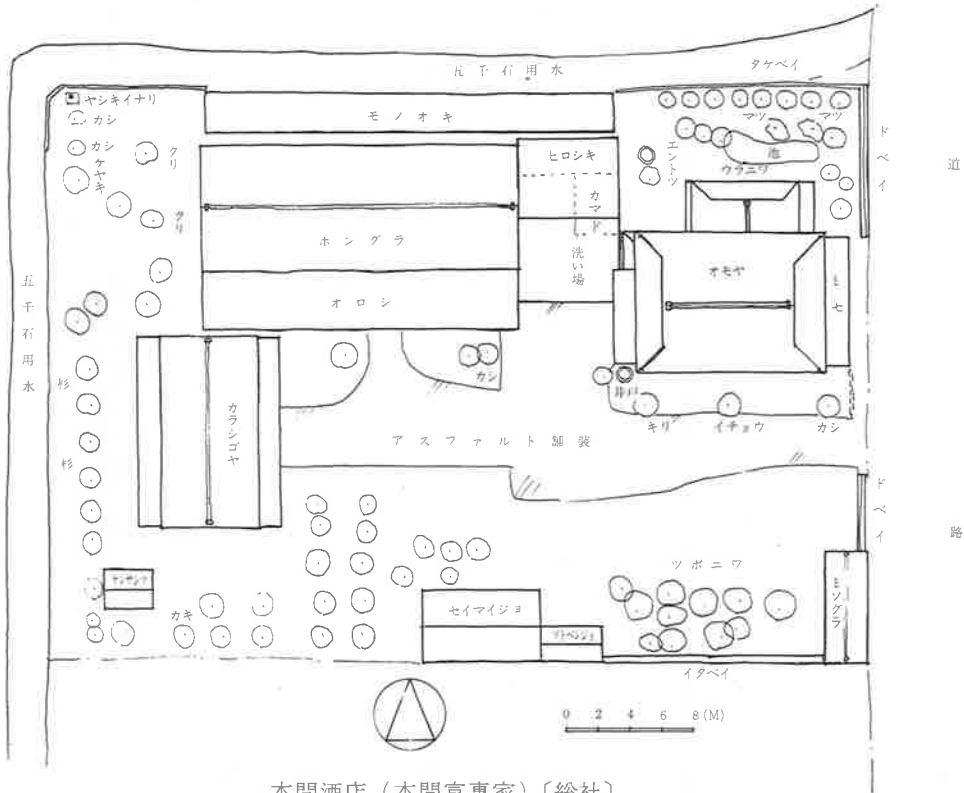




23 都丸茂雄家（総社）



山賀酒店 (山賀覚太郎家)〔総社〕



本間酒店 (本間富恵家)〔総社〕

## 第十四章 江田の習俗歳時記

小野里 照親

### お正月の憶い出

子供の頃の正月は実に楽しいものであった然しそれは小学校へ出てからの話で、小学校へ上る前の正月の事は殆んど覚えていない。

今は僅にその名残をとどめるだけとなったが、その頃の正月は、ほんとうに種々の村の習慣の上になつて、何事も年の始めの、お目出度づくめのエンギを担いでいたものだ。

村中に朝湯の組と云うのがあつて、小野里のうちうちでも三組もあつた。お元日から大正月おほご小正月は無論の事、二十日正月の恵比寿講の日まで朝湯行事があつた。

朝風呂をたてる順番は決つて居り、私の家の組は直接の本家大本家とは別で、元日の朝が小野里尚雄、二日が揆十郎、三日が自宅、四日が小野里蔵七、五日が定次郎、六日博司と云う具合になつて居り、尚大晦日の夜は小野里房治宅で七日七草の朝は房治氏宅で尚前の順序で小正月も朝湯の招びっこをしていたものである。

今はこの家でも立派なタイル張り等の風呂場があるが、以前は据風呂であるから沸すのが容易でない。朝湯をたてる事は既に徹夜を意味するようでもあつた。夜中一時頃井戸水を風呂にくみ入れて火を焚き始める。榎や桑ネツコを山の様に風呂桶の側にもつて来て之を燃す。年により薪のない時は暮に碓氷郡鼻高まで亜炭を荷車（大八車）をひいて買いに行つて来た事もあつた。

だから朝湯をたてる番になると夕食後殆んど友達遊びに来る、百人一首のカルタ取りをやつたり、トランプに興じたり、又楽器なぞ持寄つてかきならしたり正月の夜を思う存分楽しむのだが風呂に水をくみ入れる頃になるともう皆疲れてねむくなつて炬燵こたつに皆ねむつてしまふから結局一人で風呂をたてる事になる。寒い暗い台所の隅に据風呂が据えてあるので、その釜の前にむしろを敷き、火燃し番をする。台所の土間の冷えが下からあがつてきて火を燃しても少しも暖かくはならない。

時々風呂のフタをとつては手を入れて湯かげんをみる。上の方が暖まつても底の方はまだ水である。時々小フタで攪拌かんまわす。一生懸命燃しても二時間半位かかる。風呂加減がよくになると朝湯の組の家や組以外で平素特別につきあつてる家へ起しに行く。

「お湯が沸いたからおいでなすつて下さい」朝三時頃である。ねむつててなかなか返事がないから声を段々張あげて返事のあるまで呼ぶ。揆十郎さん宅を起す時などは、すぐ側に水車があつて、その音で呼ぶ声も返事の声もよくききとれない事があつた。

風呂よびに行つて家へ帰つてみるともう幾人かの人がつめかけて居る。風呂は来た者順だから遅くなると明るくなるまで二時間も三時間も待つてなければならぬから成可べく早くもらいに行つたり来たりするのだ。

炬燵は子供で一杯になつてるから、とに角朝の三時半頃から七時頃

までひっきりなしに風呂はふさがって居り、ひっきりなしに火を燃し続けなければならぬ。朝食前に殆んど男がすませて朝食過ぎになると女連が入るようになる。だから朝湯が恰度昼位まであり、女の這入る頃の風呂は流しがないのだから、汚れて垢の湯へ入るようなものだ。私は十才で父親が亡くなったから父親と一緒に朝湯へ行つたのはほんの二三度の記憶である。父が亡くなってから朝湯へ行くのに一、二年は隣の権平さん親子に誘われて一緒に連れて行って貰つたものだ。

汚い湯、朝起る事がつらくつても朝湯へ行つて子供の時は炬燵にあたり乍ら、お伽噺をきくのやトランプや双六を、又友達と活動(写真)へ行く相談をしたり楽しさが一ぱいであつた。

風呂に入つて出ると時間をみはからつて家へ帰る。帰ると男手で雑煮を作るのだ。

前の晩に女達が用意しておいた大根や人参の千切りにしたのを炊いて雑煮の汁を作り、炭をおろして餅を焼いたり忙しい。朝食の用意が出来ると門松や屋敷稲荷様やら井戸神様やお正月の神棚仏壇等へお燈明をあげて進ねばならないから、こまごました用事におわれて炬燵へあたるひまもないようである。朝食の雑煮をたべて初めてのんびりと正月気分になる。

因ゆゑに正月中は座敷の中央に正月用の特別の神棚をつるして(その年の干支えとによつてつるす棚の方向が違う)そこへ寿留女、鯉節、鮭、海老、田作、密柑、橙、干柿、露の臺、ほおずき、繭、末広等海のもの山のもの、縁起のよいものを水引で結へて吊し供へた。

元日の大人達は近所といつても殆んど村中の各戸を訪れて年賀の挨拶廻りをする。正月の事故ことゆゑどこの家でも酒肴を整へておくから相当酒に強いおとつあん達もしまいにはまわりきれないで寝込んだり途中で家へ帰つたりする人が多かつた。

従て婦人達は朝から晩まで年始客相手に茶や酒の饗応で容易ではなかつた。

この風習は大正八、九年頃まで続けられたが村に公会堂が出来てから、ここへ元旦には村中の男衆が集り、区長が用意した御神酒と特志家奉納の酒によつてお互いに冷酒を酌み交して年始会となり、各戸訪問は廃された。

初荷 初荷は二日の朝早くからである。若い人達は平常お得意の商店と契約して高崎から前橋まで荷車ニゲルで運賃稼ぎをする者もあれば、又米をお得意先の穀屋へ初売りに行くのもあり、又正月の食料品やら、年始用の贈答品その他日用品を景品めあてに買物に出る人達も大勢いて町は物凄い人出で賑う。

初荷(主に米俵)を売りに行くとな入れの手拭一本、酒や甘酒等が振舞はれて、七福神や、宝物の刷つてある紙幟を貰つて来るのが染しみであつた。

穀屋は米俵を雑貨屋は木炭や榎などの他商店によつて店前へ商品を山と積みあげて、それに初荷の紙幟をたてて景気をつけていた。

正月も三日ともなると、貰つた小遣は大体使いはたして残り少くなつて来る。もうこれからは平常フダシの様に毎日一銭ずつねだつては店屋へ一本五厘のくじをひきに行く。

一等が当れば大きな招猫や鎧武者或は恵比寿大黒等の型の金花糖がとれるが、一等から七等まであるくじは滅多に一等なぞ当る事はなく、ケツ曲りの七等をひいて、ビスケットの小さいのを一つもらつてガツカリして帰るのがおちだ。それでもいつつかいつかと思つてはケツ曲りのみひいてばかりいた。

地工大じこうだい その頃は今と異つてテレビもラジオもない。農村の娯楽と言へば夏は盆踊り、年によつては出来たり出来なかつたりする。盲こぜ

の祭文や、何かで頼む義太夫、浪花節位のものであるが何はなくても子供は子供同士の遊びがあった。

それがこの「地工大」と云う遊びである。地は地雷、工は工兵、大は大将を意味して居る。ルールは工兵は大将にまけ、大将は地雷にまけ、地雷は工兵にまけると云う事である。この地工大は着物の尻端折りの形によつて表して居る。即ち大将は着物の裾を総まくりり腰までまくりあげ、工兵は後の裾の真中を一ヶ所腰の背骨の処までまくりり両端の裾が左右に缺状にたれ下つてるもので、地雷は全然裾はまくりり着流しのままで。

地雷と大将、工兵と地雷、大将と工兵と云う工合に二人一組にくみ合つて敵と向い合ひになり、例えば私が地雷であれば工兵になつた私より幼い子の後衿をもつてお互い左右に位置を交換しあい乍ら敵の大将の居る組と向い合ひ、早く敵の大将の手なり袖なりに触れて「シンダイ」と叫べば敵の大将は戦鬪力がなくなるのである。又同じ者同志では味方が幼く敵の方が大きい場合などドーヤクをさせる。ドーヤクとは同役の義か？、同じ者同志が接触した場合敵も味方も戦鬪力がなくなるのだ。そうして段々戦鬪力がなくなりて戦斗人員の多い方が勝つという事になる。

この遊びやネツクイ遊びは金はかからず面白くあそべるので殆んど毎日これで日暮も知らずに遊びまわつたものであつた。

四日、五日ともなると流石朝湯も珍らしくなくなつてくるが、矢張り密柑がもらえたりお伽話や頼光の話に魅せられて暗いうちに出かけに行く。

五日の日は朝蚕種洗ひと云う行事があつた。この行事は幾年もなかつたが大正時代の名残の行事である。

大正時代は蚕種は粹製と言つて厚い台紙が二十八割になつて居り、こ

の一区劃の中は丸く蛾の産んだ卵が並んでいた。

今では蚕種は蚕種家が秋から越冬して春蚕の前、催青して蟻蚕になつたものを自動車で運搬して養蚕家に配るようになってるが、その頃は秋のうちに養蚕組合長の処へもつて来る。それを養蚕組合長が鼠などに喰れないように箱などに入れて、天然温度で保護しておいたものだ。

それを五日には大きな桶（ハンギリと云つた）に流れ川の水をくんで蚕種を浸し、ノリ刷毛で卵面を洗い蚕室へ蚕架をたてて蚕籠に藁を敷いて、その上へのせて乾すのであつた。

又五日には、セリやナヅナを取りに行つて之を正月棚に進ぜたものである。

六日は六日山と言ひ山仕事を始める日である。山仕事と言つてもカゴ木を切つておくだけだが、その昔は榛名山の方へ薪を馬で取りに行つたとの事で、勿論カゴ木も榛名から採つて来たのだが、そうした骨折仕事も段々敬遠されて竹藪や土手の木、河原敷の立木の枝を伐つてカゴ木にした。

カゴ木とは、小正月十三日に座敷に繭玉を飾る木の事である。このカゴ木は山クワや水くさの木が一番よいのであるが、これは山へ行かなければないので、里では専ら桑の木や竹が使われた。

七日は七草で朝は雑炊（七草がゆ）である。朝湯へ行つて来ると、五日とつておいたセリやナヅナを組の上で

七草ナヅナ とうどの鳥と日本の鳥と

わたらぬうちに なにたたくセリたたく

と云う事を口ずさみ乍ら刻んで、七草がゆの中に入れて煮たものだ。

それから正月の七五三飾りを取りはずし、門松をひきぬいておく。

門松をぬくと急に正月が過ぎた感じて淋しくなつたものであつた。

八日は年始受けの日である。

大正二年か三年頃まで江田には年始受日と言うのはなかったが、年始客が、のべつ幕なしに来たのでは非常に不都合の事が多かった。即ち主人の留守に来るとか、客が来る度に魚や吸物を用意して無駄をするとか、今日は来るかと待って待ちぼうけをくうとか、誠に不都合であるので、村の人達が相談して年始受日を八日に制定したのだ。この八日と云う日は他町村に年始受をする処がなかった事でこの日に決ったのだ。

この日以外の日であると、他町村の年始受だとか飾りかえの日だとか具合の悪い日ばかりであった。

始めた何年かは八日には打上花火などあげて江田年始受を近所村へ知らせたり又客引の為に養蚕時に使う箆や籠の市を開く為に籠屋へ店を開く様招聘状を出したり、又露店や籠屋で買物した客に福引券を出してひかせるなど、又神社の境内で農産物や産繭の品評会を開催したり、なかなか客寄せに一生懸命であった。

以上のような熱の入れ方だから年始客も当然大当りで親類中この日一日で年始客がすむようになった。

その後長く(五六六位?)も続かなかつたが、それでも江田の年始日は正月八日と言う事になって、現在でも八日に来る年始客は多い。

九日は前橋の初市である。

私がこの初市へ行つたのは十二才位の事であつたらうか、伯母が嫁いた先、即ち大友町の岩丸家へ新宅の叔父に連れられて行つたのが最初であった。

大友の年始をすませて上石倉の林倉寺という寺の北側の道を通り、総社町大渡より利根川添いに石倉郵便局の処へ出る南北道路を突つ切ると利根川に向つて、道は急に下り坂になる。

すると吊橋がかかつて居てこれを渡つて前橋県庁南へ出る近路である。

八番線位の針金でテスリのようなものが出来て居るが網目は疎く又踏板も細く、然もグラグラ前後左右に揺れるので私は怖ろしく途中でテスリの針金につかまつたまま真蒼になつて座りこんでしまつたものだった。

目まいがする様な気がして歩く事が出来ないので、齒を喰いしぼるように叔父に手をひかれてやつと渡つた時は、ほんとうに命拾いをしたように思つた。二度とこんな橋は渡るまいとも思つた。

県庁前から真すぐ電車通りの曲る処が急に人の群れが多くなつて、本町通りは両側にエンギ類やら達磨の店やその他種々雑多な露店が並んで広い通りは人で埋まつて居る。

現在でもそうであるが、前橋で種々の祭やその他の催し物などを年に何回もするが、正月の初市、即ち九日の日程賑やかな事はないであろう。今では少くなつたが私が初めてこの初市に行つた頃は、鮒や鯉を売る露店が多く、鮒を二尾藁で吊つて売つてる店が多かつた。

これを買つて来て、正月の棚へ進めるので一名鮒市とも言つたようである。

又福だるまも前橋近辺の人は、この市で買って来る人が多かつた。

十日は高崎の初市であり、田中の琴平様の縁日である。この日は又中居へ嫁いで居る叔母の家の年始である。年始をすませて琴平様へお詣りする事もあれば、琴平様を詣つたあと中居へ年始をする事もあつた。炬燵で伯母がくんでくれる汁粉はうまかつた。

又この日母が織つた正絹の反物一匹をもつて高崎の、かわち屋と云う絹宿へもつて売る事もしばしばであつた。

十一日は蔵開きである。蔵開きと云つても特別の行事はなかつたよ

うだが、此の日百姓は鍛立てと云う行事をした。

朝湯へ入って来て正月棚や神棚へ神酒や毎朝進ぜる物の行事をすましてから、恵方に当る自分の家の田畑へ行き、門松のつたものをもつて行って、新しく耕しお糞米や寿留女のさいたものや田作などを供えて、天神地祇に本年の五穀豊穡を祈願するのである。

この行事をする時は一升枿へ十文字に縄をかけて、此の中へ種々の供物、例えばお糞米やスルメ、昆布、田作、等を入れて行った。

それが段々世の中の進むにつれて、朝食後行くようになったり、又全然此の行事も忘れられて最近では行う者が稀になつてゐる。

十二日は小正月の用意である。

小正月には門松の処へ接骨木の木を削つて、花のようしたのを飾る習慣で、之をつくるのだ。接骨木の木を伐つてきて表皮を取り除き、長いままのもの（主として二米位）を二本と、あとは十吋位に短く切つたものをハナカキと云う尖端の曲つた小刀で、細く木部をひくとクルクルと輪に縮れる。これを木の囲り全部にやると恰度花卉のようになる。これがお正月の松にとつて替るのだ。

それをつくつたり、又明日の飾り替えに備えてカゴ木の整備をしておく。

十三日は飾り替えである。朝早く起きて餅をつく。お供餅は十六組こしらえる。朝食後は座敷へカゴ木を飾りつけておき繭玉をつくる。繭玉は梗ち米を搗いて洗つて乾かしてから粉に挽く。即ち米の粉をねつて手でまるめる。まるめたものをセイロに入れて蒸す。それをカゴ木にさして飾る。座敷のカゴ木以外に正月棚や神棚、又は仏壇にも皆飾りその他鎮守や道祖神、墓地へも皆供え歩く。

又大黒柱には椿の枝、椿のない家では樫の木の葉のついたものを伐つて来て、結えつけてこれにも花の様な形につくつたのや、繭の形

につくつたものをさして祝うのだ。これは昔つくつた木綿がうまく花咲くようにエンギをかついだのだとかであつたが、今では之をつくる家はないようだ。

又この日は道祖神作りで、子供は忙しかった。村では惣領十才以上十五才までの男の子は道祖神作りにかり出される。

小学校が日曜か或は学事会等休日であれば朝から、小学校が休みでなければ学校を早退してくる。そして村中の家からお正月に飾りつけた七五三縄飾りや、門松や竹を集めて来た。尚一戸一束の藁や竹、薪などを貫い歩つて、道祖神小屋を作る。道祖神小屋とは、竹の梢を縄で結え此の竹を四方八方へ張つて三角型の家形をつくり、之にさきを集めた七五三縄飾りや藁をまわりに壁代りに結えつけて風や寒さ除けとなし、中に炬を掘つて火を燃し乍ら一晩中その中に泊つて居るのである。炬には各自が持ち寄つた餅を焼いて喰べたり、鍋をかけてコンニャクのおでんをつくつたり、又特志の村人の奉納のうどんを煮て喰べたり、楽しい一夜をすごすのである。又此の道祖神小屋をたてるのには子供だけでは容易でないで、その年結婚した新婚さん達が手伝いに出る慣しになつてゐた。

道祖神にお詣りすると、その年の危難が除かれると云うのでお賽銭をあげる者、密柑や落花生を、或はうどん、コンニャク等種々雑多の納め物があり、之を一々世話人が受入れて、道祖神子供に分配したり、又お詣りに来た人達にサービスした。

道祖神子供は一晚中開放された気分になつて、道祖神の中の炬を囲んで他愛ない話に興じつくすのだ。

夜も更けて十二時過ぎる頃になると流石に疲れて居ねむりを始める者や、藁床の上へマントやらハンテンやらをかむつて寝込む者も、十四日の午前三時頃になると世話人に起される。そしてある者は太鼓を



かつがされて村中へ

道祖神がもえますよ

はーや夜が明けますよ

とふれ歩くのである。この「ふれ」が三回まわると、村中の人達が道祖神場へ集まって来る。道祖神は大中小と大体三棟出来て居り、小さいのから順次に火をつけて燃し始める。

柱になつていた竹のはじける音が冷い空気を破つて、まだ暗い夜空に鋭い冴えた音を吸い込ませる。星はキラキラ冬の空のまだ暁には遠い凍つた空気の中に輝いてる。

道祖神の燃ゆる時は顔のみあつい。背後から首すじにかけてはかみそりの刃をあてられてるような苛烈な寒さである。

道祖神大笑

と書いた紙職を皆持つて来ては、道祖神の火で燃す。これも病氣にならない呪いだとか。

此の道祖神の燃えさかつた時の火の壮観さは格別である。紅蓮の炎焰とはこういうのをいうのであろうか。真暗な中空に紅橙色に幾筋か黒煙を交えて、モクモクと盛り上つて行く火の美しさは、言葉で表せないものがある。

火が盛りを過ぎると道祖神大笑の旗竿の篠竹の先へ餅をつきさして、火で焙つて焼いてたべる。これも風邪の神を追払う、おまじないの一つであった。

道祖神子供は、十才から数え年十六才までの男の子であり、一戸一人だから、その範囲の年令の子でも兄の出で居る者は仲間になれなかつた。

道祖神小屋が燃え落ちて、集まった人々も寒さに皆帰つてしまつても、尚煙はいつまでも白く立ちのぼつて居る頃、段々と明るくなつて

来る。それでも燃す時に来られなかつた人が代る代る来ては餅をやいたり、スルメを焼きに来て午前十時近くまで道祖神場に人は絶えない。私達は昨日一日がかりでたてたものが、一瞬の間に燃えてしまった物足りなさに、まだ残つてる藁なぞを集めて、小川の中へ敷き土手に横穴を掘つて煙突を立て、近所の桑畑へ行つて枯根っこをかいて来て火をつくり、家から餅や繭玉団子をもつて来て、互いにたべたり、くればあつたりして遊んだものだ。

正月十五日十六日

この二日は鬼の首もゆるされると云う例え話をよく年寄からきかされた。囚人でもこの日は作業を休むとか、又年季に行つてる丁稚や番頭も休みで、皆村から町へ出て行つてる人は帰つて来る。藪入ともいつた。

私の友達には丁稚に行つてる者は一人もなかつたが、村には幾人か居て、盲縞の木綿の着物に角帯をしめて、手に風呂敷包みをもつて自分の家へ帰つて来る姿は、何か一寸淋しく見えた。

だから此の日は誰でも朝から家を外にして遊んだ。町へ活動写真を見に行く、又はネットクイや土工大、板をけずつた、恰度羽子板の様な形をしたラケットでテニスをやる。テニスボールをつかつて、今の野球のようなもの、竹馬にのつて歩き難い所を乗り越える競争等、誠に原始的な遊びが山ほどあつた。

つるな 「つるな」という事はどういう事を意味して居ることか、そうして「つるな」がいつ頃から初まつた事かも私は知らない。ただ「つるな」といいつがれ、それがこれから記す様な江田町の一つの正月の行事として行われ、明治末期まで行われて来た事は事実である。

江戸時代のいつの頃からか、この江田（今は前橋市江田町）の若い衆、或は道祖神子供の間に起り段々それが受つがれてきたものである

う。

「つるな」は一月十四日の夕刻の行事である。正月十三日は飾り替えと云つて、正月に張りめぐらした門松や、縄飾りを取りはずして一ヶ所に道祖神子供（数え年十才以上十六才迄の男児にて一戸一人）が集めて道祖神小屋をたてて、この小屋にこもり夜を明して十一日の払暁、今年の災危消除の祈りをこめて燃やすのであつたが、これは別項の行事の項（一月）で記した通りである。

さて道祖神小屋を燃して、あとかたづけをして、その午前中は太鼓をたたき乍ら村内をねり歩く所謂鳥追行事である。

その夕方から「つるな」は始まるのである。

「つるな」の行事は前年の一月から歳末まで江田へ来た嫁即ち新婚家庭が対象になる。

従つて新しい嫁さんにとつては誠にいやな一日である。

ヒョットコ、お多福、狐の面を被つた若者が新婚家庭の座敷の正面に坐り、尚其の他の子供が左右後正面に一列或は二列に座つて、其の家の本年度の家内安全、家運隆昌、災難消除の口上を述べると、主人や主婦が茶や菓子接待をするのである。

以上の事だけでは極めてありふれた事で何の変哲もないが、そのうちに世話人の者が当家の嫁さんのお茶を頂きたいという。

尚屋敷には予め用意された細綱を、東西或は南北に畳の上に置くのである。

その家の嫁がお茶をもつて座敷に出て来てその綱をまたぐ瞬間、両側の綱を持つてる者がその綱をひきあげる。綱は嫁さんの股間まであげられて両脚の膝頭まで見える様になる。

嫁さんは驚いて色を失うが、面を被つた者その他の者が飛び出して嫁をおし倒す様な乱暴を働くのである。

村内に於て平素信用ある家だとか、又相当の実力者の家には少なからず手心が加えられ、綱をまたぐ時形式に綱をひく位であるが、平素憎まれて居る様な家ともなれば、おし倒されたあと、ランプやローソク等が消されて嫁さんは可成り難渋するのであつた。

こんな事が他の村々にもきこえていて、近所村から此の行事見物に来るとか、又江田へは嫁にゆかぬ等と云う娘もあつたという。

又此の難儀をのがれる為に親達は早くから若い衆仲間や道祖神子供に何等かの贈り物をなし、前もつて軽く済ませて貰う様話をつけておく家が多かつたともいう。

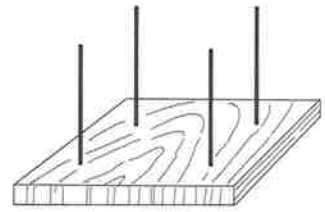
たまたま或る家の嫁さんが、そんな事少しも怖くない、といったところが若衆達に聞え、尚又その家の人が平素村の嫌われ者である事と重なつて、若者達に飛びかかれて陰毛までむしりとられたと云う話も今では古老の語り草になつて居る。がその後その両親の激しい怒りが区長にまで及んで、こんな習慣はよくないとこの事に一決して、それから「つるな」は廃止されるに至つたという。明治三十五、六年時代の事である。

小正月が終ると、もう皆どこの家でも藁仕事を初めるが、最初に始めるのは藁すぐりである。

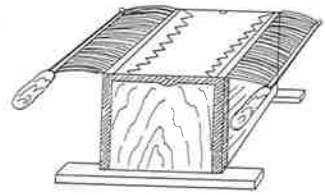
俵を編む、縄をなう、簇をつくる、この藁をすぐる。すぐるとは藁の基部の葉（「シビ」と云つた）を除く作業である。

その頃は、養蚕簇をつくる事が先ず第一であつた。簇も時代によつてつくり方が段々と進歩してきているが、私が最初につくつたのが手折簇であり、次にこの手で折る簇を機械でつくるようになり、次いで昭和二、三年頃より徐々に改良簇が出まわり、尚昭和七、八年頃から回転簇が出るようになった。

手折簇は厚板の四隅に四本細柱をたてた。この棒の中へ一掴みの藁



手折簇器



簇器機械

を並べて、矢張り細い竹ひごを入れて藁を右に折り曲げ、同じように左へ折り曲げ、何度もこれを繰返して結えて一箇が出来るのである。又機械簇は竹ひごを入れる必要はなく、この機械を適當の台に縛りつけて立つたまま左右についた羽把手で藁をおさえつけてつくるので、この機械が普及されてからは手織の五倍位の能率があがった。

尚序に改良簇が普及し初めると、三〇番線の細い針金でグルグルまはしてつくるものや、手で把手を圧すと藁をきくつくしばった針金をくい切るものや、大々的に上に喇叭枚のものの中に藁をさし入んで長く織り出すものや、その他種々の式のものが出来たが、現在は藁で一山の一区劃だけつくって行くが主に使われている。

話を元へ返して、手折簇の時には春中一杯簇折りのみであった。現金収入と云えば養蚕のみで、米は小作米に出したあとは売る程は残らないから、養蚕には特に力を入れた時代である。藁すぐり簇つくりの春の毎日であった。

二十日正月 二十日は又遊び日であるがこの日は朝の行事があった。矢張朝湯に入ってから朝食はお雑煮で祝うと、イツラないとハヨイ縄ないである。

イツラとは蚕が出て桑を伐つて運ぶ時に桑を束ねる縄の事で、ハヨイ縄とは、田植や麦蒔の時馬に万鈎を索かせる太い縄の事である。イツラは一人で手で縛うが、ハヨイ縄は三人がかりで藁を撚りながら縛うので、男手の少ない家ではユイに行ったりきたりで縛った。

この縛ったイツラをキレイに束ね、ハヨイ縄を桜花模様にもすんで台所の小黒柱へ飾りつけると、此の日の行事の終りとなる。

又此の日は恵比寿講である。小野里兵市さんの裏に池があつて、厚い氷はつていたので、此の氷を小さくかいて氷にのつて足でゆすつてると鮒が氷の穴へ浮きあがる。これをとつて来て、恵比寿講に進ぜたりした。

若い衆制度 若い衆制度というものがいつ始まったか、そして、いつの頃廃されたのか私は知らない。

然し乍此の若い衆制度というものが、可成り根強い封建的野蛮な行為をして威張りちらし、排他的な行動に終始し、一見専制的圧力を以て村の若い衆を束縛していた事は事実であつた。

然も亦た此の制度は、村の若い衆の団結を強固なものにして、リーダーたる世話人、その下の下世話人等年令別に判然とした階級制度をつくつていた。此の年令別階級は、後々までなかなか崩れずにいて、農村の根強い封建制度の根幹をなして居るようであつた。

世話人の命令は至上命令であり、此の命令は可成り無理と思はれるものが数々あつた。

その無理というものが、主に春夏秋の鎮守の祭典の獅子舞や、花火つくりによく見られた。

即ち、例えば花火つくりに行つて昼になり一応各自家に昼食に帰るが、まだ遠くの人は家へ帰りつかぬまに、もう集合の大鼓を叩くとか、この大鼓二度叩いて集まらなかつた者には一応脱会しろとかの注意が

あり、続けて二度も遅刻すると退会を言い渡されると云う処分があった。村の娘の処へ養子、或は婿に來た人には特に差別的待遇で臨み、無理を強いたとか、又平素の憎まれ者の家に対しては、女子供等に嫌やがらせをするとか、下らぬいたずら等もしかけたりした。

前記の脱会の事を村では「さげられる」といった。一端不都合な事があつて、「さげられ」と事は面倒になる。村八分といった様な按配であるから、近所の年輩者、有力者を頼つてその復帰を願うのである。幾度かお願いして、やっと復帰が免された時、どうしても酒一升二升は持参しなくてはならない。

だから留守居の婦女子は、さげられない様にいつも何事につけても、気を配つておかねばならなかつた。

**江田実業会** 若い衆制度が、野蠻な時代にそぐわない制度であるという事で廃止されたのは、いつ頃の事か私は知らない。多分明治三十七、八年の日露戦後の前後ではあるまいか？

その後、そうした青年の横に連絡をとる組織は、しばらく跡絶えて居たらしいが、大正二年頃、江田実業会と言う会が誕生し創立された。この実業会は村中一戸一名が会員になつてゐるようであつたから、区長の行政に対する執行機関のような性格を幾分もつていた。

役員はお定まりの会長、副会長、会計といった工合で村の長老格の人が交替で司どつていた。

仕事としては春の水路の堰普請、秋の道路プシン、野鼠退治をしたり、村内の辻々に導標を建てたり、兎に角進歩的な仕事をなし、悪弊を矯正し、専ら公益事業を進めたのであつた。

たまたま時代の推移により、関係当局が農事指導に農事改良組合を、養蚕指導に養蚕改良組合の設立普及されるに及んで、さしも功績があつた江田実業会も発展的解消に至つたわけである。

正月の憶い出の頃に記した八日の年始受日の設定なども、この実業会が制定したのだったのかも知れない。

私が覚えて昭和十四、五年までは正月の年始往来が誠に繁忙で、殊に、八日に年始日が制定されるまでの間は、正月一杯いつくるかわからない年始客の為に、ろくに遊びに出られない程であつた。主人が他所へ年始に出払つたあとへ年始客が来る。昨日も一人、今日は二人、明日は幾人来るかわからない。いくら寒い時期でも買った魚はいつまでもとつて置けない。又買に行く、と云つた工合で心の休まる暇がない。尚その頃は殆ど年始に往来の手みやげが「塩がま」という菓子で、之が羽子板の様な形をしたものや長方形のもので紙に包んであるのだが、貰つたものを自分で行く時に、これをもつて行く。所謂親類中をグルグルまわつてあるから、しまいにはかけて包装紙ごとグズグズになつて来る。

今でも仙台、松島方面への旅行者が、塩があたりで買つて来る、甘塩っぱいミジンコの様な菓子である。

そんな工合で、終には進物の役にたたなくなつて、やむを得ず家で喰べる段取りとなると、何となく損をした様な気になるので、之をまた余り古くならないうちに、貰つてもまだ充分に役に(進物用として)たつ頃でないとなかなかないと、種々協議の結果が八日年始受になつたときいて居る。

明治時代の封建性に多少でも大正の新風を贈つたのが、此の江田実業会であつた。

**節分** 二月になつて最初の行事は節分である。

正月ののんびりした気分が去つて、何となくうら淋びしい感じのする時だ。別にこの日は遊び日と云うのでもないが、愈々年令を一つとる日だと教えられて居り、俗に年取りの日とも云つた。

今でもそうであるように、よい年が来るように、と祈って大人達は遠く下総の成田山や川崎の大師、或は武州高尾山へ祈願に行つて来るとか、太田の吞龍さんや水沢観音、前橋や高崎の神社、仏閣へ皆豆撒きに出かけたものである。

夕方になると大豆殻を燃して焙烙で大豆を煎り、柀の枝の二又になつたものに、お正月に供えた鯛を胴から二つ切りにして頭と尾の方をその二又柀の枝にさし、豆殻の火にかざして「農作物の害虫の口を焼く」と云うような事を唱え乍ら、トツ トツ と口から唾をはきかけて焼いたものである。

この焼鯛の事をヤカガシと云う。

ヤカガシは、トブグチ（出入口所謂玄関）の処の柱へ挿して、一年そのままにしておく。

大豆が煎りあがると、戸障子を全部開け放ちて大声で

福は内 鬼は外

と叫び乍ら豆撒きをする。

夕食にはケンチン汁や菜ツ葉の胡麻合え、鯛、或は鮭の切身の御馳走が並び、夕食後は炬燵で、豆を入れた福茶を呑む。

正月が終わると、平常米暮しの家は殆どなく、皆麦の挽割、或は押麦を入れて常食として居たから「物日」の麦の入らない飯は非常にうまいものであった。

初午祭り 節分が終わつてからの午の日の日が、初午祭りであつたようだ。従つて二月に入つても節分前の午の日は祭らない。

初午の日には、あやめ団子か或はお赤飯が出来る。これをたべて一日仕事は云いつけられずに遊べる。

鎮守様の拝殿は開かれて、側らの稲荷様の前には幟が建てられ、太鼓も出されて祭日気分になる。区長を初め区の役員、伍長（今の隣組

長）が集つて神社で式典がある。式の前にその人達は石倉の菓子屋へ一文菓子を買いに行つて来て稲荷様へ供えておく。これを「おみごく」と云つた。このおみごくを貰いたくて、私達は学校がひけると急いで帰つて来て神社へ集る。大人達は「菓子をくれるからふれてこい」と私達に言いつける。すると私達は一斉に飛び出して村中の道を大声で「菓子くれるよう」

と走り回つて来る。そして息をはづませ乍ら、俺らア回つて来たんだよう

と云い、我先に菓子をくれる人の所へとんで行く。すると、回つて来た者には幾つか多く貰えるのだった。

その幾つか多くもらえる事が、どんなにか嬉しかった事か、今思い出しても裸足で息をきらせ乍ら飛んで来て、菓子をもらった幼い自分が目にみえる。

二十二夜待講 二十二夜待講は二月二十二日、村のお婆さん方によつて行われる。

これは安産ができるとかで、若い女達にも人気があつた。いつの頃からか、お婆さん達の念仏講があり、年令には制限なく、或る程度の年をとつた人が希望によつて、之に加入出来る仕組の自由団体である。念仏講の人達（お婆さん）は、村の誰彼が死んだあと葬式の夜は殆ど後念仏に頼まれて、亡くなった人達の後生菩提を弔つてやる。

此の組の人達が宿を順番に決めておいて二月二十一日朝から集り、村中一戸一戸しらみつぶしに廻つて米や金銭の喜捨を受ける。

この時、近々にお産がみえてる若妻などは、姑にかくして米や金品を沢山に喜捨するのもあり、可成り沢山の米や金銭が集る。

此の米を洗つてから粉に挽き、団子をつくるのである。  
鎮守「鏡神社」境内の側に二十二夜堂があり、二十二日午後、此の

お堂の前にくだんの団子を供えて種々の和讃を奉唱し終ると、団子をくれるのである。

この時は、村の老いも若きも殆どの女性は団子貰いに集る。家から他へ嫁いだ者等も、此の日は団子を貰う為にわざわざ里帰りする者が多い。これ程、江田の二十二夜待は賑やかである。だから各家々では、勿論お客がどの家にも来て居るので、夜は皆海苔巻やいなりずしの御馳走である。

懇意な人だとか知人をたよって、この団子を貰いたさに知らない人からの幾何かの寄進もある。

然し乍ら此の行事も、昭和三十六年位を境にお念仏講に加入する人もなく、人数も減る。又年令的に病氣等になって、団子をつくる事が出来なくなつて雑菓子をくれるようになってきた。これもいつしか村(町)から忘れられてゆくのではあるまいか。

二月の農作業 二月は寒い時期でもあり野良仕事は殆どない。ないのではなくて、皆家に籠つて藁仕事である。簇作りは此の前、正月の頃に書いた通りだし、俵編み、小手繩或は太縄ないである。

私達は近所の友達と一緒に台所に筵を敷き、その上に並んでアグラをかいて小手繩をなうのである。朝藁たたき石の処へ行つて藁で藁を柔くなるように丁寧にたたき、余り乾かないように皆川筵でまいておく。

下から段々上へ積み上げるように絢うのだ。縄緬い仲間は裏ん宅の藤助君隣の彦太郎君、それに近所の元久君の四人で、毎日順番に宿をかえて絢うのだった。朝、小学校へ行く前も、又学校から帰つてもすぐ縄ないを始める。私達が両手を抜けて、ひろいて六〇数えると一ボとして、これが筵一枚を織る縦縄になる。

此の縄を使って母が裏ん宅の藤助君の母オシヨウさんと二人で、梭

を使うものとオサを上下するものとに分れて筵を織る。

一ボ小手繩をなうと金一銭を貰えるので一生懸命であった。貰った金はためておいて私は学生辞典を買つたり、小年雑誌、或は立川文庫の猿飛佐助や霧隠才蔵等を買つたものであった。

夕方になるとコンロに消炭をおろして、正月についておいた堅い餅を焼いて醬油をつけて喰べるのが楽しみであった。

大縄は二十ヒロで一ボである。垣根を結つたり、桑ゼをまるつたり、俵を結つたり、農家は一年中縄なしでは生活が出来ない様なものだ。

この縄ない俵編み以外に藁草履、草鞋、フゴ、ミノ等も時によつてつくつた。

又家によつてはネコと云う厚い筵をつくる家もあった。これは太縄又はこれに近い中縄を縦につかい、叩いた藁で手で一目ずつ編んでゆくもので、藁のジュータンの様なものだ。

是は主に小麦や粃干しに使うのだが、又座敷の敷物、或はゴザ(花ゴザ)の下敷等にした。このネコをつくる事をネコカキと云つた。

ネックイ遊び 私達は小手繩ないにあきると、よくネックイ遊びと云うのをやった。今の子供のように夢中になつて宿題の勉強をしなくてもよかつたから、この点誠に倅せであった。

ネックイと云うのは根杭とも書くのか、手頃の細い小枝の基部をトンギラ(尖らして)にして、之を振りあげて地面目がけて突立てる。地面へ突きさつてるネックイを他の子が倒そうと、地にささつているネックイを目がけて戦をいどむ。二人でやる時は交互に、三人以上の時は「チツカ」(チツカッポツ)即ち「じゃんけん」で順番を決めて争う。地面へ突立てる時うまく当るとネックイは倒れる。完全に倒れるとネックイは倒した者のものとなる。

又手元が狂つて地面に突立られないで横倒しになつてる時は、之に

ネライをつけて「カチッ」と音がして多少動いた時はとれる事になつて居る。

このネツクイをつくるには、木の種類により尖端がまくれるのや折れ曲るのがあるので、木の選択に苦心したもので、エゴの木や樫の木等が細く尖らしても折れる事が少いので、よく染谷川端などへ伐りに行ったものだ。

手袋は勿論はめる事はなく、素手で大上段に振りあげては力をこめて振り下すので、手の甲は紫にはれあがつたり、無数にヒビが切れたり、又指にはアカギレが切れて時によると血が流れるような事もあった。

それにもかまわずに私達夕方になると、公園地の東の窪い土の軟い所でネツクイをやりつづけたものだ。

子供の遊びも一つことのみではあきるので遊びは次々にかわつて来る。

メンコ遊び、篠鉄砲、これは細い篠竹の筒に、その穴に透る位の心棒をつくり、新聞紙や帳面の古い紙を口で軟かにしたものを之につめて心棒で筒の先へ押し込み、再び同じ事をくりかへして心棒を強く押すとポンとして先の紙玉が飛び出すのだ。これが極めて細い筒の場合には杉の実をとつて来て、三尺帯にはさんでにおいては撃ちあつたものである。

今の子供が玩具のピストルをほしがる心理と同じであつたらう。

又うすいガンピと云う紙を買つて来て、今の飛行機の落下傘のような（ツリガサ）と言つたのをつくり、この中へレンゲの花やタンポポすみれ等の花を摘んで入れて空中へ投げあげる。すると傘が開くと共に内に入れた花が空からちつて落ちるのが美しいので、その美しさに魅せられて、日の暮れるのも知らないで遊びまわつたものである。

今は田浦も麦田で空地になつて居る処はないが、その頃は一寸湿田の処えは麦は時かなくなつたから、レンゲの花が毛氈を敷いたように美しく咲いていたし、又もつと湿田にはエゴの草が一杯生えて居た。よくこのエゴを掘つて根の丸い所を皮をむいて喰べたりもした。

手毬唄 又女の子の遊びは毬つきか、お手玉遊びである。日当りのよい縁側や土蔵の壁際、又は学校の窓の下で、古風なチゴ髷に結つた髪、ハイカラはお下髪で、ナギナタ袖の羽織を着た小女が手毬唄を唄い乍ら毬をついたり、お手玉やオハジキ遊びに興じて居た。

#### 毬つき唄一

あああらしんでんまつやまの

まつやのこまちゃんわづらつて

いしやアよぶほかほんびやくしや

いしやもはるしやもわしやいらぬ

こんにちこんばんしぬならば

あかいたすきをねえさんに

てつぼなぎなたおとちゃんに

ばらおのせきだおかちゃんに

あめのふるひもチャラチャラと

ヒイフウミイヨイツムウナナヤ

とうからくだつたおおもやさん

おいもいっしょういくらだね

三百三十三もんめ

いまちとまけねかヒチャラカポンよ

おまえのことならまけてやる

ああうれしユウうれし

となりのおばやんちよとおいで

となりのおじやんちよとおいで  
めうたかめうねかめのかアクウシ

毬つきうた二

むかうやまでなくとりは  
チューチューどりかめんどりか  
ちゅうぎぶろうのみやげ

なになにもろた ぎんのかんざしもろた  
かまくらかいどのまんなかで

一ぬけ二ぬけ 三ぬけさくら

ごよまつやなぎ やなぎの下のぼうさんが  
ハチにちんこさされて

いたいともいわず かゆともいわず  
ただなくばかり

毬つき唄三

一ばんはじめはいちのみや

二またにつこうちゆぜんじ

三またさくらのそうごろう

四またしなののぜんこうじ

五つはいづものおおやしろ

六つはむらむらちんじゆさま

七つはなりのふどうさま

八つはやわたのはちまんぐう

九つこうやのこうぼうさん

十でとうきょうしんがんに

これほどしんがんかけたのに

なみこのやまいはなおらない  
たけおがせんちにゆくときに  
しろいましろいハンカチを  
うちふりながらネーあなた  
はやくかえってちょうだいな  
しやくヨツチャンはこじき わんもつてかどにたつ

毬つき唄四

一かけ二かけ三かけて

四かけて五かけてはしかけて

はしのらんかんでをかけて

はるかむかうをながむれば

十七八のねーさんが

はなやせんこう手にもちて

もしもしねーさんどこゆくの

わたしは九州かごしまの

さいごうたかもしむすめでず

めいじ九年のたたかいに

うたれてしんだちちうえの

おはかまいにまいます

おはかのまえでてをあわせ

なむあみだぶつなむあみだ

兵隊ごっこ 冬空に美しく輝くオリオン座をみると、私は今でも必

ず小学生の頃を思い出す。それは私が小学三年か四年生の頃だと思っ  
し、またもつとあとの事かも知れない。村の子供の中で兵隊ごっこが



流行って、夜、夕食を喰べると、上級生にかり出されたものであった。その頃は秋になると、よく兵隊の機動演習があつて、紅白軍に別れて小銃や機関銃を勇ましく撃ちあい、軍馬に乗った将校が馳け歩つたりして、誠に子供達の好奇心をそつたものであつた。その昂奮が去りやらず少年らしい武勇伝の中に自分を置きたかつたのだ。そうして秋から冬正月にかけて兵隊ごっこが流行り、時々その仲間にも馳り出されるのであつた。

学生帽に赤軍は赤い布をまき、白軍は同じく白布をまいて区別し、細竹を銃床の形をした板切れに釘で止めたり、針金でしばりつけた銃を持ち。ローソク箱という今では全然みられない櫃ひらの木の蠟ろうでつくつたのだらう褐色の太い紙の芯のローソクの入つた箱に黒或は褐色の布の丸細い袋に糲糠をつめたのを、外被をつけたようにくくりつけて背ノウとして、戦争ごっこをするのであつた。敵と遭遇すると畔はなや藁陰、或は堀の中に散兵して、口でドーン、ドーンと鉄砲の音を出して戦うのであつた。

寒い時期なので藁ニユウの中に屯ろしたり、敵の背後へ遠まはりをして、敵に気づかれないように水のない小川の中を腹ばいになつて進んだりして居る時、早く家へ帰つて寝たいなあと思ひ乍ら、ながめる空に光つてる星、その頃あのオリオン座を誰か大きい人達に教つたと思ふ。

私の母達はあのオリオンをサンジヨ様と教えた。又サンジヨの星とも教つたあの星が段々に中天に上つてくると、夜は更けてつくつく兵隊ごっこがいやになつて来るのだつた。

ブリキでつくつた喇叭が響きわたると、ヤレヤレ今晚もやつとこれて家へ帰れると思つてホツとするのだつた。

こばい 寒い冬も過ぎて一雨毎に暖かさがましてくる。花見も終つ

て農家も段々忙しくなつて来るのだが、私達子供にはまだその忙しさも余り苦にはならない。学校も新学年になつて、風呂敷に包んだ教科書もまだ余り汚れないで新しい季節である。私達は竹筒の浅いのや、まだその頃極めて珍らしかつた缶詰の空缶などもつて、近くの畑や屋敷内の庭の隅や野菜畑などを見まわる。

暖い日光の中に、春の匂いがいっぱいする新鮮な黒土のあつちこつち、目を皿のようにして「こばい」を見つげに巡り歩く。

「こばい」とは、ゆすらうめや桃、梨、梅、柿等其他の果樹類の実生の事である。

一番早く芽を出すのが、ゆすらうめである。小さな細い貝割れの中へ鋭い三角形をした、まだ開かない嫩葉わかがうす桃色を交ぜて浅い緑の芽を出しているの見つけると、「めつけた」と叫ぶ。声の早かつた者がそれを取る権利がある事は、子供の仲間同士、誰も言はず語らずに約束された事であつた。

「こばい」が生えるのは「ゆすらうめ」皮切りで次いで梨、梅桃あらず等は晩春からであり、一番遅いのが柿である。

梅と否は貝割れも葉の状態も非常によく似ていて一寸見分けがつかないが、貝割と葉の色が如何にも好ましい紅色を帯びたみどり色で、之れをあんずと断じ普通緑色のものを梅と見た。

こばいを見つけると竹のトグシで根を傷つけないように、殊に軟い細い根について居る種子は落さないように念入りに掘つて、手にもつて居る竹筒やカン詰の空缶に植えかえて帰るのだ。

家へ帰つてから庭の隅に小石をならべたり縄を張つたりして、もつて来た「こばい」を自分でその大小により配置を考へて植え込むのだ。

小さな砂山を作つて綺麗な小石を築山風に並べて、その間へ植え込み、又これを友達同士見せあつて自慢しあつたものである。

私はこの「こばいめつけ」にゆく事は特に興味が深かったようであった。尤それは私の友達二人が矢張り好きであったからかも知れない。

それは隣の音英君と、ずっと遠くの巻沢和夫君がいたからである。

音英君は父が、和夫君は祖父が植木が好きで、どちらの家へ行つても庭に立派な築山や池があり、奇岩怪石と云う程でもなかつたらうが幼い私の目にはそう見えたが据えられて松や「どうだん」その他名も知らない数々の植木が沢山植えられて美しく手入れがしてあり、これをいつも私はうらやましく見ていたものであった。庭に植木らしいものは一本もない私の家であるから、せめて、こばいの小さな坪山をつくつて満足していたのである。

三月の節句雛祭り 二月の月は、あつと云う間に過ぎてしまふ。雛祭りの三月三日には、海苔巻や油揚げのいなり寿しが出来るので、これも楽しみの一つであった。

母親達は二日の夜は、お節句の煮物で忙しい。里芋や人参牛蒡、干瓢やコンヤク、チクワや鳥賊の足なぞを煮つけたり、又時によると小豆を煮てアンコをつくり、カンテンを溶かして手製の羊羹をつくつたりしていた。

私の家では妹が節句にお雛様を買ったが、何れも座り雛で、お内裏様は一つもなかった。今で思えば不思議の様な気がするが、立雛の中には五月人形の様な金時が鯉を抱いたのや、長いあごひげをたらした神武天皇が弓をもって、その弓の先に金の鳶がとまっている雛なぞもあった。

これは今になって考えてみると、五月人形をまちがって買つてくれたのではなかつたかと思う。

その頃の三月雛祭りには運動会か、学芸会が小学校では催されたものだ。

現在の様に高校進学に夢中で勉強してる時とは違つて、一級で一人か二人の上級学校進学者であれば勉強に夢中になる事はなかつた。

私は唱歌が上手であつたので、学芸会には大体唱歌を唱はされたものだが、小学校五年時、受持の先生が謡曲を習つたのか宝生流の謡曲をやらされたものだ。

正月頃から学校の放課後、先生に指名された六人の友達と、教室にある大きな箱火鉢のまわりに椅子をもつて来て、羽鳥先生が一口謡うと、そのあと一口謡うと云う工合に

「昔ながいの斉藤べつとう実盛は

このしの原のかつせんにうたれぬ(中略)

これは平家のさむらい 弓とつての名将(中略)

二百余歳の程はふれども

うかみもやらぬ篠原の 池のあだ浪よるとなく、昼とも

わかつ心の闇の(中略)

現れいでたる実盛が 名をもらし給ふなよ なき世語りも恥じ

とて 御前を立去りて 行くかとみれば篠原の 池の辺りにて 姿はまぼろしとなりて失せにけり

と云う所であつて、毎日先生の用のない日は日暮れ頃まで教つて帰つたものであった。

この謡曲をやつた動機は五年の国語教科書に、斉藤実盛が白髪を黒く染めて合戦に出て手塚太郎光盛に討たれた事が載つたので、やつたのではないかと思う。

これを教えた羽鳥先生は中尾町深沢家の生れで、大類へ養子に行き羽鳥姓になつた人であつた。

今で考えると、その頃大類では謡曲が沢山流行つていて、その大類から私の村まで先生が来て謡曲を教えた様であつた。

学芸会について特に印象深かった謡曲の事を書いたが、運動会と学芸会が隔年毎位で秋に運動会が催される事はなかった。

**春蚕を飼う頃** 野も山も新緑に包まれる、麦も穂が出揃って、各家々では春蚕飼いで忙しくなると急に村では知らない人が増えて来る。男は桑切鎌を腰にさして、荷車を引いてる者や、又桑を一束ずつ背負って運ぶ者、皆お蚕日庸といわれる人々である。朝早くから男は桑伐り桑運び、背負いこ、と云うので一束ずつ背負うのや、荷車で運ぶのや、又馬につけて運ぶのやである。又女子は桑を蚕にくれたり、こしり取りと云って、蚕の喰残した桑や糞を取除く仕事、或は桑扱きと言って、桑こき鉢で桑の葉を桑条クワゼからもぐ仕事で忙しい。

私達は、そうした忙しさも知らず、西川と云う染谷川の岸に咲いてるエゴタの木に登って、木をゆり動かしてラクチンをしたり、螢狩りをする篠竹をとったり、桑篠竹をヒゴにこいて螢籠をつくったり、ほんとうに夢の様な平和な日課であった。

竹筒の中に、とって来た桑の実ドドメを入れて桑の木を適当な長さに切り皮をむいて、これでドドメをつけて赤い汁をなめたり、すすったりして唇を紫色にしあったりした。

ドドメも桑の品種によって種々あり、在来桑のは小さく、魯桑系のは大きくて紫色が美しく、田胡早生と云う桑のみモチドドメと云った。母にねだって貰った五厘か一銭の小使いで、アカペロと云う四角な砂糖でつくったうす板の菓子を買って来て、ドドメの竹筒に入れ汁を甘くしてなめるのは最高であった。

**休み餅** 蚕を飼う事は、農家として今でも同じであるが、その頃は現金収入の最たるものであり而も飼育技術が幼稚な時代であったから、神様に頼るような宗教的な結びつきが割合に多かった。小正月、繭玉団子をつくる事から初まって、二月の初午祭り、四月の庚申祭り

等何れも蚕が間違ひなく当るようにとの祈りがこめられて居る事は否定出来ない。

従って催青に着手する日、或は掃立する日等も皆曆をみて吉日に掃立てが出来るように予定されたものだ。

だから蚕が繭をつくるまでの期間に四回脱皮するが、此の脱皮中を専門語では「眠」と呼ぶが俗に休みとも云う。

第一回をシジ休み、二回目をタケ休み、三回目をフナ休み、四回目をニワ休みと云う。此の休みになると養蚕農家は必ずかわり物をして蚕に進ぜるのである。

而も三回の休みには殆どの家が餅をついた。オシラ様、絹笠大明神（何れも蚕神）へ進げて養蚕倍盛のお祈りをするのである。

時にはモチ草を取って来て草餅にもして近所へ配り歩きもする。

此の休み餅は、人間は休まないが忙しい時毎日働いてる時だけに楽しい行事の一つであった。が今でも多少此の名残りがあって、変わった料理なぞして喰べるが、餅を搗く家は殆どなくなった。

**農事作業の移り変り** 私が幼い頃の農作業と、現在（昭和四十年）の農作業の変化についての私が覚えてる概略の事を少し記してみる。結局は自身で作業し、又両親等が作業していたのをみて記憶に残ってるものだけで、然もその範囲は自分の家、村、近郊での事で、作物は普通耕種農業（稲麦作）と養蚕に関するもので、それ以外の事は知らないのである。

これを正月から順に月をおって仕事別に（田畑）記してみる。前にも述べたように、正月が終ると藁仕事で縄ないや筵織り、俵編みやら簇作り等は前述したので略すが、何れもこれ等の仕事は一月から三月までの間の仕事であり、所謂農閑期でもあるので特別に多忙な仕事ではない。

が、二月下旬から三月になると、麦踏みや麦の中耕が始まる。

前年十月下旬から十一月に蒔きつけた麦は春めいてきた日ざしをうけて、一斉に青々と伸びたつて来る。

私は小学校から帰つて来ると、よく母から「麦踏みに行つてこい」と言づけられて、風の吹く日は顔に手拭いて頬かむりをして「今日は箱田分だけでいいかい」「今日は古市分だけでいいだんべえ」と母にとわつて麦踏みに行つたものである。

成可く早く終して遊びたいのであるから、一足でも一ヶ所を二度踏まないよう、そして足の運びも荒く早くしたものであったが、とに角その頃の麦作りに対する麦踏みは重要な一つの作業であった。

この作業は今でも続いているが、今では石ローラーで麦の上を、ころがすだけであるから、一足一足遭遍なく麦を踏むのと違って、労働力や能率から言つて三倍〜五倍位い楽に出来るようだ。

それから麦の追肥である。これは殆ど寒い時季、矢張り三月頃に行う下肥撒きである。

荷車（大八車）のある家は荷車に下肥桶を積んで運ぶが、それも荷車がひける道がある場所だけで、荷車の入らない細い野道（馬入れ）と言う三尺道路に沿つてある麦田には、矢張り天秤棒で肥桶をかついで運んだものである。その頃は農村にも大百姓の家には年傭いの百姓番頭等が居て、ツギ肩と云うので運んだものである。

家の肥溜から途中まで担いで行くと、田圃で肥を撒いた人が途中まで来て、かついで行く、即ち中継運搬をする。

又馬に荷鞍をつけて、ヤナ（樋の大きい物）で運ぶのもあったが、荷をつけたり、下ろしたりする時には馬が何かに驚いて飛び跳ねてヤナをこわしたりして神経の休まらない仕事であった。

そのうち昭和初期になり、リヤカーと云うものが流行つてきて荷車

は不用のものとなり、野道も大体リヤカーが入る様拡げられて、そのリヤカーで運搬される様になり、リヤカーは農家の運搬車としての重要な役割りを果す事になり、何事によらず、小型耕耘機の運搬車が出来た現在もなおリヤカーは必要農具として活きて居る。

然し担いで下肥を運んだ苦勞を皮肉つたものか「下肥出しは半日正月」と云はれていたのは、帰りが空ツポの桶を担いでくるからだろう。三月になると麦の中耕が始まる。中耕の事を「サク切り」と云つた。サク切りは一番から三番サクで終る。サク切り前に麦を蒔いた直後冬サクと云うのが切つてあり、これを四ツ子と云う柄のついた万鋏のような農具で土塊を粉碎し乍ら幾分か畦を平らにしておくのだ。これをケブリオトシと云つた。



この作業をすませてから、手鋏で腰を曲げて、一鋏一鋏後ずさりしながら畦おこしをするので、腰が痛んだり、全身に力を入れるので疲勞の度も激しかった。然し乍ら青ばんだ麦に、むせかえるような春の土の匂いが黒々と直線に田圃を彩つて、空には長閑にヒバリが囀り、切つたばかりの麦サクからはゆらゆらと陽炎がもえ、レンゲ草の咲く畔に腰を下ろして疲れを休めて居ると、何とも言えない好い気持ちになつて、つい、うとうと眠気を催したものであった。

一番サク、二番サクを終し、麦の畦間へ緑肥用の大豆を蒔いて、三番サクを切り麦の手入れは終るのだ。

大正末期頃から或は昭和になつての頃か覚えはないが、この麦の畦間へ蒔いた緑肥用大豆も蒔く人がなくなつてきた。

これは肥料事情が蒔いた頃より好くなつてきた事、緑肥用大豆が田植仕事のジャマになる。麦の栽培方法が變つて畦蒔きでなく桁蒔き等になつた事。麦蒔の時に田を整地しないで田の稲の刈りあとへ直接蒔きつける等に変つて来た為と思われる。

今では下肥を麦に撒く者も殆どなく、二月頃、化学肥料、例えば硫酸、塩安、尿素等を自転車の荷台へ積んで田圃へもつて行き小さなバケツに入れて僅かずつ指から落として歩くだけであるが、麦を沢山収穫する事は夏の収穫時期労力が不足なものと、麦を沢山とつても金にはならないの等と、種々社会事情の為にその生産意欲は殆どみられない。

サク切りも耕耘機で一、二度、スズメのテッポウと云う草(俗にピー草)おさえにするだけである。

だから麦の手入れと云つても今は一月から四月までの間に耕耘機で一、二日出る位のもので、あと年寄りの男の居る家、或は主婦がピー草の除草をする位、一家の主にたつて農業をする男子は殆ど日傭かせぎに出るのである。

最も日傭稼ぎに出ると二日三日で小麦一俵代金位はとれるからでもある。

**肥料** その頃化学肥料と云えば、硫酸、カリン酸、硫酸加里と言う単肥だけきり知らない。

それ以外の肥料といえ、大豆粕、油粕、魚粕、蛹粕、米糠と云つた類いの現在から云えば最も貴重な飼料で肥料とは云えない様なものであつた。

その中でも最も代表的なものが大豆粕であり、肥料と云えば大豆粕を連想する程である。この大豆粕は厚さ十二、三センチ、直径六〇セ

ンチ位と思われる丸い板状になつていて、これを鉋で砕いて、細かくなつたのを石臼や、タチ臼で杵でついて細粉にする。

大正二、三年頃と記憶するが、この大豆粕を回転させながら細かく削り取る豆玉削り機と云うのが出来て来た。(大豆粕の事を普通豆玉と云つた)

この豆玉削り機は、大豆粕の中央をナットで押えて、両側の支柱にはさみ刃のついた把手を上から下へ押す事によつて、豆玉を回転させ乍ら薄く周囲から削り落すもので、段々削りつて最後の直径十五センチ位の丸さは残りとなり、矢張り鉋や臼でこまかくせねばならなかつた。

そのうち肥料商で動力により粉碎機械が出来て、豆玉を農家自身が粉碎する用事になつたのは大正十年頃か？

魚粕は主に鯨粕が多く大きな筵の俵に入つて一俵が二十四ヶ位あつたようだ。

今で思うともつたない様だが数の子が三分の一位入つていて、肥料につくつてあるのだからうまくはなかつたが多少喰べられもした。然し数の子の入つてるものは余りよろこばれなかつたようだ。肥料としての価値がわかつたのだろう。

序に肥料商人が備えてつけた大豆粕粉碎機は直径三吋位の鉄軸に歯がついて居り、之の軸が回転して大豆粕を粉碎するのだが或る程度の重みがないと、その軸が空転するので、上からいつもいつも大豆粕が流れて圧力を加え作業を続けるようになっていた。

**尺取り虫駆除** 尺取虫、カックイと云つた桑喰い虫である。この桑喰い虫がなまつてカックイになつたのだろう。

四月桑の芽がふくらんで来ると、竹ンボやピンを持って桑畑へ行つて、桑の枝を一々みてはカックイを一匹ずつ拾い取る作業で如何にも

原始的なやり方であったから、殆ど女子や子供の仕事であり、大の男でやる人はなかった。

私達は小学校へ行って朝礼の時、校長先生から今日はカックイ取りをやるから各村々へ行って監督の先生の言う事をよくきいて沢山とる様に言われると、わっと喚声をあげたものであった。勉強より田畑を飛んで歩くのが、はるかに面白かったからである。

部落毎に尋常三年生以上男女生徒徒が先生に引率されて部落へ来て区長宅へ寄る。

すると部落の区長其他役員の人が付添って何班かに分れて桑畑へ出てカックイ取りをする。弁当は区長家の庭などで喰べて午後も取りに出かけるが二時間位桑畑を端びまわって区長宅へ帰って来て、その日取ったカックイの数を数えて先生に報告する。一日中で二〇匹のものもあれば一〇〇匹を超える者もあるが別に責任もないので、それにお互いケン制しあつてるので数をうその報告するものもなかった。

序だがこれと同じ事が六月の稲の苗代にも行われた事だった。

麦が黄色く熟れて苗代の苗が伸びて来た頃「明日は蛾取りだから篠笹を各々一本宛もつて来るように」と先生が言われる。

翌る日はカックイ取りと同じように各々部落へ帰って田圃の苗代へ行き稲の害虫二化螟虫の蛾を取る行事であり、取った蛾を数えて先生に報告するのもカックイ取り同様であった。

が、いつの頃からかこんな事も廃されてしまつて、忘れられた昔の小学校の行事の一つになつたようだ。

尚蛾の数を調べる時、稲の葉裏に産みつけられた卵を採つて来た者は、卵一つが蛾二〇匹に換算された。

麦の収穫 四月末になると大麦の穂は出揃つて、五月五日の節句ともなれば小麦の穂も出揃う。

大正から昭和初期へかけて、大小麦作付の分付は、大麦が六〇%〜八〇%、小麦が四〇%〜二〇%位であつて、昭和七、八年頃よりその作付割合が段々逆になつて来た。

現在（昭和四〇年）では小麦が八〇%〜九〇%、大麦が一〇%〜二〇%位のものである。

その大麦の種類も白麦、水晶麦、万力、関取と云う風に変化して来て居り、農家の食生活に深くつながりがある。

白麦、水晶麦等は搗精して色沢が白く、又食味もよいものであったから農家の常食として重要視されていた。

明治・大正・昭和初期頃迄の農家の食生活は極めて悪く、米麦半々の家が普通であり、米のみ炊ぐ事は何か祝事や特別の場合でなければなかつた。

それが段々世の中の文化の恵みによつて、麦の需要が衰えて（戦争中は別として）食糧事情の好転すると共に、麦を喰べる農家は殆ど無くなつたと言つて好いだろう。

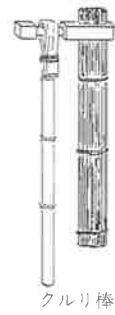
又大麦の沢山作られない原因？ の一つに田植仕事にも深い関係がある。

即ち大麦は早生で六月初旬には収穫が出来る、従つて梅雨期になるまでに作業が終るが小麦は六月中旬、梅雨期になつて収穫に非常な困難が伴う事が多い。

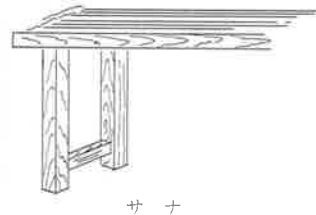
尚田植になつてから小麦の切株は固いので、跣足で作業をした当時としては、足に傷が多く出来る等種々の条件が大麦作付に合つていたからであろう。

尚又脱殻の場合でも、脱殻機械がある筈もなく、サナと云う肉の厚い割竹を二本宛組み合せて、長さ二間（四米）或は九尺（三米）位の長い枠に張つてあるものに、麦の穂を力まかせに打ちつけて、実を落

すか、センバと云うマンガで穂先だけくびり落してから、前者も向者もクルリ棒でクルリ打ちしてノゲ落しをするのである。



クルリ棒



サナ

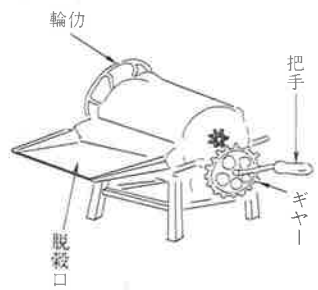
以上のように農業を経営する上に機械力と云うものが殆どない。人の労力のみを主とする農仕事であつてみれば、麦作が大麦耕作を主体にしていた事もうなづかれる。

大正六年頃か脱穀機と言うものが出来た。新潟県新津市の製品で新津式と云うのを大本家等、うちうちで共同で買ったのが機械力導入の第一歩であつた。

此の機械の構造は現在の脱穀機と余り型の違いはない。唯だ頗る小型の簡単なもので人力手廻し脱穀機であつた。

だから脱穀の太鼓胴の中心についた歯車を大きな動輪のついた大きい歯車で廻転させて脱穀するもので、非常に力の入る仕事であつたが、然し乍らサヤやセンバでやった仕事からみると二倍も三倍の能率がある。この機械の次にできてきたのが足踏み式脱穀機であつた。

これは動力源を片足で踏んで太鼓胴を廻転させ上から稈藁をかけて脱穀するもので、手廻し機械からみると、又簡単で手廻しの人が不要となり能率がまた倍加された。



輪効

把手

ギヤ

脱穀口



脱穀機

踏板

この脱穀機は第二次世界大戦後までも使われたが、農村に農業電力が入りモーターが簡単に入手出来るようになってからは、影をひそめて、今は動力による脱穀機以外見かけない。

話が脱穀機の変遷にそれしてしまったが、クルリ棒で打った麦柱は小さな麦篩にかけて唐箕で吹いて粒だけにするのだが、尚芒だけ落ちて穂のままになっているものがあり、これを再参クルリ打ちをして、粒にする唐箕にかける事を繰返す。

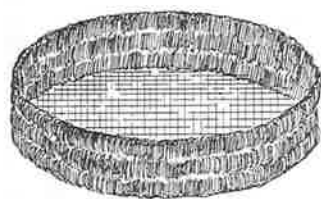
又クルリ打は麦穂が乾いてないと落ちにくいので炎天の日盛りに庭一杯拡げて、男子は真裸に、日除けの菅笠をかぶり、着ゴサを着て、左右に別れて交互に打つのである。

一通り打ち落とすと足で上下を攪拌して又うち、之を麦篩にかけ、麦篩は木のフチに針金の網を張ったものとアケビの蔓の様なものでフチも網も出来たものもあつたが、蔓製のものが手に当りが柔かくよろこばれたものであつた。

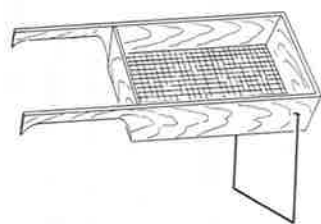
一人が箕にすくつて来たのを篩の中に入れてと篩う人は中腰になつて一生懸命ふるうから腰が痛くなる、実につらい仕事であつた。

この篩も昭和十年頃から四角の両側に持ち手のついた、立ったまま篩えるものになり、又脱穀機が動力用のものであつたからはこの仕

事は忘れられてしまった。



麦製麦篩



取手篩

麦の品種の変遷 農業の進化と云うものは、他の科学産業と違って、実に微々たるものである。農業試験場で品種試験をして一般に優良品種として普及されるのに三年や五年はかかるだろう。

一年に一回の栽培であれば、耐病性が多収量のもの等試験結果をみるだけで五年も十年もかかるのではあるまいか。

私達が小学校へ通つて頃よく小麦の余り熟さないのを口の中で噛んで粕を吐きだして鳥モチの様に粘着力のあるものをつくった事がある。この種類は赤坊主と云うのであって、これが明治末期から大正の半ばまで主に作られていたと思う。

それから新田早生となりスネキリや埼玉と云う品種（戦中戦後埼玉二九号?）、次で農林何号と言はれるものが作られるようになり、今では農林六一号と言う品種が主なものようだ。

又大麦は白麦と言うのがつくられていて、これは収量は少かったらしいが食味や搗き上りの白さからいって、麦を常食とした時代にはうつつけの品種であったようだ。

それから水晶麦、万力、関取なぞ多収性のもの、或は多収性と食味

も幾分好いと云うようなものが出まわるようになったが、とに角大麦の需要というものが漸次減少の傾向をみせてきて、十年一日の如く余りその進歩はみられて居らない。

## 稲作り

田植え 麦の収穫がすむと、直ちに田植えの仕度である。

脱穀の済んだ家は、座敷から台所、縁側とすべて雨のかからない処には大麦、小麦の粒が熱の出ない様に三〇吋位の厚さに拵げられて、天日乾燥する日を待つて居り、又脱穀の終らない家は寝る所と飯を喰べる所を残して、麦束が積まれて、昼間でも家の中は真暗になっている。これは田植が終わるまでこのままでおくのだ。

昨日まで熟麦で真黄色であった広い田んぼには、一かけらの麦田も見えない。

麦の脱穀稗を燃す煙が、重い湿った空気の中に長くたなびいているのが、点々と見え、その中に馬で鋤をかける人、畔根をはがす人、田のまわりの草を刈る人、一見のどかな風景ではあるが、疲れを忘れたように夢中で仕事を続けている。

俗に「七ツ泣きはんどり」とよばれて、男の児は七才になると馬の鼻取り（ハンドリ）をさせられる。

今の流儀でいえば児童保護法?違反であり、子供惨酷物語であり、とても可哀想で今の両親ならみて居れないであろう。

然しその頃はそれが普通であつたらしい。私が鼻取りをしたのが十一才の田植からだ。

前に書いた様に私も十才の夏、父に死別れ母一人と叔母。それに母の実家から父が死ぬと同時に妹の子守りとして手伝いに来ていた私よ



り二才年上のオダイ、従つて男の働手は一人も居なかつたので、馬も飼わなくなつたから、本家とユイ（エーと云つた）で田植えをするので、このハンドリが私の受持ちになつたのだ。

今でも私は余り家畜は好きでないしするから初めて、鼻取棒を握つた時の気が今でも思い出される。

それまで馬は既の中にはばかり居て、少しも運動に連れ出された事がないからとても威勢がよく、歩くのが早くて、走つてもかなわない、無論走つたのでは鋤もかからないわけだから鋤かけの人（シンドリと言ふ）は、ヒットメロ ヒットメロと私には言ふし、又馬にはドウ ドウツ と声をかけるのだ。

而し馬の足は依然として早駈けの様であるし、私は力いっぱい鼻取り棒をおさえるのだが力はないし、馬が恐いので、とても馬を引とめる事が出来なかつた。

尚馬が多少おとなしくなつてからも、初めての事で、馬をどこを歩かせて好いやら、さつぱり見当つかずで、シンドリはたえずツイテツイテ とか ヒイテ ヒイテとか私に怒鳴るのであつた。

このツイテ と言ふのは馬の鼻取棒を左の方へ突いて少し左を歩かせる事であり、反対にヒイテは馬を自分の居る方、即ち右を歩かせる事である事がわかつたのはよほど沢山鼻取りをしてからの事であつた。

又シンドリは曲る時によく、ヤリマワシテと言ふ。これが矢張り田の端で曲る時なるべく大廻りに曲らないと畔の端まで鋤かけが出来ないので言うのだが、鼻取りは子供であり疲れているから一歩でも楽なようにすぐ曲りたがるのである。

それから鋤かけが終ると田んぼに水かけが始まる。水のかかつた処から荒代をアラクレと云つた。

水の中を馬は容赦なく歩くから一足毎に水の跳ねが鼻取の腰から下にかかる。馬の歩く跳ね水だけではない、馬につれて自分もかける様に歩くのだから、自分の歩つた足の跳ね水も自分の下半身にかかるから顔からは殆ど泥水でゾブ濡れである。

又水の沢山張つてある田は馬を通す処がわからないから見当で歩つてると、絶えずシンドリからはツイテとかヒイテとかどなられる。

田植の鼻取りのつらさは、その仕事の経験のある者でなければわからない。この事は何の仕事にでもあてはまる事だが。

夕方鋤かけ、或は代かきの仕事が終わつて帰つて来ると、二銭物の菓子一つ貰えるのが又とない楽しみであつた。

二銭物とは、生菓子一個の値段のもので、一日貰う小使銭が金五厘の頃であるから二銭の菓子は自分で買つて喰うべきでない珍しい物であつた。

足を洗つて座敷へ上ると、傷のある足は一日水に漬つていて忘れていた痛みが甦えつて、ホテリと痛さで風呂へも入れないようになる。夕食後疲れて足の痛さも忘れて、死んだように寝てしまふが翌朝起きるのがつらい。起こされても起きられないのを、仕方なくいやいや乍ら起る。床をふむ足が痛くて踵が踏みつけられない。ツマ先やかかとで歩くようにして、昨日着ていた濡れた野良着が肌に冷く氣持悪くしみとおる。

屠所の羊の如きと云う、たとえがある。又首切場へ引出される様だ、とよくいう。少しおおげさであるが、そんな言葉があてはまるような鈍々した動作で、田圃へ向う。馬も毎日の仕事で疲れてか、田の中へひき入れられるのが嫌で、鼻取が田圃へ入つて引かないと田へ入らない。

シンドリか鋤犁、或は万鋤をつける間もじつと立つて目をつむつて

居る。

それ位だから、初めは畦道に生えてた草を喰べたがったのが、草を喰べさせようと思つて草のある所へ連れていつても喰べようとしなないでいる。

地獄の血の池へでも入る様な心地で田圃の中へ入ると、不思議なもので段々足の痛みがうすらいで来て、しまいにはわからなくなつて来る。

何かゴム足袋のようなものがあれば好いなあと、其の度毎思うのだったが、その頃はそれは空想に過ぎなかつた。

それでもまだ大麦の田は好いのだが、小麦田になると小麦の刈つたあとのカツパが足にささる事が度々である。ふるえあがる様な痛さをこらえて足を下ると又同じ処へカツパが刺さる事がある。そんな工合だから足の裏は数えきれない程小さな傷でイッパイになる。

アラクレ（荒代）が終えりと中代を掻き、又上代を掻いてやつと田が植えられると云う事になるのであるから、一つ田圃へ四回は行く事になるのである。

又荒くれが終ると、一たん水を切つて畔塗りをし中代をかいてから肥料をまいて上代をかき、所処マンガの土や堆肥、緑肥大豆を払つて高くなつてゐる所を手で平らにならして（ジバシリと云う）田を植える。

田植えは主に女子が多く、どこでも近所村、或は親類、懇意の処から早乙女（スートメと云つた）を頼んできて植える家が多かつた。

早乙女は麦の収穫中、夜なべ仕事で、白木綿で脚絆をつくつたり、赤いタスキを縫つたりして田植えに備えたものである。

だから当時早乙女は、菅笠をかむり、娘は赤いタスキに黒木綿の手甲、着物は膝より上にまくつて半巾帯に前垂も半分折つてかけ足には白脚絆をはいて、赤い腰巻きの美しい姿であつた。

田植にはゴザ、笠をはなすな例えにいつでも菅笠と着ゴザを持ち歩いた。

又針金に赤毛糸の星のついた張繩を使つて（所謂正条植）を始めたのが大正二年頃からで、それまでは張繩はなく見当で盲滅法に植えたものであつた。

だから正条植になるまでは一人当り八畝から一反まで位植えたこの事であるが、正条植になつてからは大体一人当りの面積は一生懸命やつて五畝位ではないか、それも植える稲の間カクに依りけりだが。

田植の朝は四時頃から田んぼへ出て、夕方七時半、或は張繩の星がみえなくなる午後八時頃まで働く。

天気が続けば暑く田の水が温つて汗は絶えまがないし、又雨が降れば着ゴサを着ていても首すじから雨がしみ込んで濡れそびれて、午前午後の休みも腰を下ろして休む事も出来ないみじめさである。

それでも午後の休みは、コジョウハン（お八ツ）が出るので楽しみであつた。主に握り飯であつたが、お鉢やお櫃の中の温い握り飯をみると疲れも忘れるようであつた。隠元や馬鈴薯、イカの足や切昆布、厚揚げや身欠鯨の煮付物が主なおかずであつた。

僅かに高い草の上に腰を下ろして、皆して円座になり、冗談に笑いこけ乍ら喰べるコヂョウハンは又夕方までの仕事に元気づけた楽しい一時である。

又時には家で作つたウデマンヂューだとか、ぼた餅だとか、時ならぬ思いもかけない御馳走の時は皆な嬉しくて冗談も一段とはずむのであつた。

田植の時期は早いものは六月二十五日頃から始まるが、重に六月二十八日九日から七月二日頃までが主である。

この頃になると決つて戌の日や辰の日があると田植をしなかつた。

この戌や辰の日に田を植えると不幸が来るといふ迷信があつたから  
だ。

この迷信の謂れは戌の日に田植えをすると米が戌の喰べる団子の粉  
になる(即ちお墓へ団子を供えたと犬が喰べる)。辰の日のものは龍頭  
(葬式の時四旗と云う葬列の旗の上に龍頭がつく)になるとかいつて。

だからその日は田植えをする家はなく、苗取りをするとか代掻き、  
田の畔塗り、肥料撒布等の仕事であつた。

然し乍らこうした迷信も、よく考えてみると毎日の田植えでは疲れ  
るので、一日位息ぬきした方がよい。それにはこんな縁起でもつけな  
いと、誰も田植えを休まないで、始めた事かも知れない。

こうした田植風景も昭和十二年頃の日支事変の長期化から第二次世  
界大戦後と三十年四十年の歳月を経て、多少の変化を来したが、そ  
れはほんの僅の変化で、腰を曲げ一株一株手で植る田植えそのものは、  
少しも変わらない。

変つたのは代掻きが、馬耕が牛耕になり更に小型耕耘機、或はテー  
ラに変つた事、早乙女の服装が腰巻きがみられずにモンペ作業衣にな  
り、早乙女が頼めなくなつて爺さん婆さんのスウトメが増えて娘の早  
乙女がみられなくなつた。コジョウハンの握り飯が主にパンになりと  
言つた所である。

田植がすむと誰もがゲツソリと瘠せ細る。それでも尚、遅い田植の  
家へ、又は村へ、スウトメに頼まれてゆく。スウトメに行くと自家の  
田植の様に神経を使う事もなく、又炊事の心配もなく気楽に田植えが  
出来て、上膳据膳で御馳走になり日当が貰えて、これが農休みの自分  
の小遣錢になるから之が主婦も娘もスウトメに出る人々の魅力でも  
あつた。

## 稲品種の変遷

明治末期 愛国 タマムラ  
大正初期 改良愛国 シメハリ  
昭和中期 改良愛国 撰一 新関取

農林一号 群交三号(昭三八)

〃 二九号 山彦 〃

〃 三六号 金南風 〃

春の養蚕 麦の手入れから収穫、引きつづいて田植の事を書いたが、  
之は田圃の事が一貫して居るので尚田の草取の事も書かねばならない  
のであるが、これは又後述する事にして、群馬の農家とは切り離せな  
い春蚕の事を記してみる。

四月桜の花も散つて、葉桜の候になると、桑の芽も段々ふくらんで  
くると、もう春蚕の用意である。

養蚕の飼育技術も至つて幼稚であり、現今の養蚕とは比較にならな  
い。

今の養蚕は掃立て上簇までに大体二五日であるが、大正初期には飼  
育日数が三十日以上三五日まで位かかったから六月の麦の収穫時田植  
等の田圃仕事とニラミ合せて、どうしても早目に、少く共四月中には  
掃立てねばならなかつた。従つて桑の葉はまだ未成熟にあるから、時  
にはメド木という喬木の桑の花(ドドメと云つた)を取つてくれたり  
した。

第一其の頃の養蚕学は蚕の栄養学が進んで居らず、聖徳太子の養蚕  
遺訓にある

蚕を養は 父母の赤子を育てるが如く

蚕を思ふ事 吾が児を思ふ如くせよ

寒暖陽氣の加減 平生吾身にならいて

暖か過ぎず 寒からず 平和なる様

陽気を廻し 昼夜間断なく 精力を  
尽くすべし

というように之を實行したのであった。勿論蚕種の保護なぞと云うものはなく、前年種枠へさして天井裏へつるつて置くとか、種枠のない家では掃立紙に包んで鼠に喰われぬようにタンスの引出の中、或は長持や戸棚の中へ、しまっておいたものである。

その位であるから催青なぞ無論ない。

春蚕期前の大掃除の時、初めて蚕種を出してみてまだ種が赤いからすぐには出なかんべいと云う状態であった。

どうかすると、包んだ紙が黒くみえるから拵げてみたら、ゾックリ蚕が出ていたのであわてて桑をとつて来てくれたり、蚕の室を温めた話も時々あった。

蚕種は今の様なバラ種でなく、美濃半紙判位の厚紙に一面に産みつけられてあって、紙には繭の形や製造者の住所氏名が印刷されてあった。この蚕種の事を平付けと言ひ、この平付けが蚕糸業法によつて蚕病予防の為に二八蛾の枠製になったのが、大正三年か四年頃であつたろう。

その頃在来種（平付時代の日本種）から日支交配種に移つたと記憶する。

在来種の品種では主に、「又昔」と云うのが飼はれていたがその他、千代鶴、白鶴、小石丸、等といったものがあつた。

蚕の飼育方法としては主に高山社流であつたが、それ以外に共進社、一倉飼い等と云うのもあつた。

兎に角春蚕を掃立てると、村中養蚕気分が旺盛してくる。

蚕日傭といわれた蚕時期だけの手伝人が入り込んで来て、村には未知の男女が沢山になる。

蚕には一日に十回〜十二回位給桑する。桑は蚕の令に依つて、掃立当座は三ミリ角位に、二令、三令と令の進むに従つて大きく切るが、之の桑を各令毎に異なる桑篩で給桑するのであり、又除沙の網も各令毎に、シジ網、タケ網、フナ網等の網目も細かいものから順次大きい目になり、四眠（ニフ休み）から繩網を使う様になる。

桑をとるのも掃立当時は極めて軟い。孀葉を採り、令の進むに従つて固いものをとる。という様に極めて当時としては親切丁寧な扱いをした。

蚕には湿けたり、むれたりするのが一番悪いとの事で、日に十回以上給桑するのを成可く蚕座を湿けらかさぬ様にするには、時々除沙をするとか生糠をまくとか、白焼きの堅い炭火を裸にして空気を乾燥せしめるとか、あらゆる乾燥手段を構じた様である。だから壮蚕期には決して何軒かの栄養不足による違蚕者が出た。

又蚕を掃立てた当座は量も少いから暇なものである。然も蚕飼育技術の自信はないから皆親戚やら近所の蚕を飼つてる家へ行つたり来たり、往來が賑やかである。お互に温度や桑の硬軟、刻み工合、蚕の休み工合などを観察しあつて、心配したり安心してみたり、気をもんでみたり、なかなか御苦労な事であつた。

こうして行き来して居る間に、正月搗いて固くなった餅、かき餅にしたのやアラレ餅に切つたのを蚕室の保温用の炉の中で焼いたり煎つたりしてお互にお茶を呑みあふ事も養蚕時の一つの風物詩である。

甘藷の切干も出て来る。時には大根切干や蒨の煮付等が主なお茶時の菓子がわりであつた。

又蚕が休む毎にお祝いをする。

これは大体に於て平常喰べる物でない喰べ物で、例えば茹饅頭とか、団子だとか、餅だとか、総じて砂糖を使った甘い物で、殊に三度

休みにはフナ餅といって、必ず餅をついて蚕神様へシンゼて祝つたものである。

三度休んで起ると蚕飼も愈々本格的に忙しくなつて来る。荷車もリヤカーも少なかった頃である。皆切つた桑は一束宛背中で



背負コ

背負つて運ぶのだから、大蚕の家はいくら切つても運んでも忙しい。切つた桑は新梢をもぎ取らなければならぬ。桑切り、桑もぎ、桑くれ、蚕糞取りと夜は皆十二時まで働き、朝は四時半頃から初まる。蚕の上簇 掃立てて後三十二、三日もたつと蚕は繭作りに入る。蚕が桑を喰べなくなつて身体全体が明るくすき透る様になると、これを一匹ずつ拾つて簇をくれるのだ。

簇は春正月から四月頃までかかつて作つておいた藁の島田簇、蚕泊に簇を敷いてから、小手繩本籠の縦に張り、繩の両端に十二吋位に伐つた桑棒を柱にたてて、拾つた蚕を撒きその上へ張繩に簇が倒れない様に、成可く厚薄のないように簇藁をちらして、蚕架へさすのだが飼育籠の二倍〜三倍位の籠数になるから、三階のある家は三階から二階、台所から座敷と、せまい家では寝る所の上へも上簇籠をつるす様な事になる。

蚕を拾う仕事は女子で上簇籠の受持は主に男である。忙しいので休む暇がない様なのと仕事の時間が長いので、口の中で長くシャボツテ居られる様な鉄砲玉と云う飴玉やら、甘藷切干が配られて、皆口をモグモグし乍ら仕事にたずさわつてる。

蚕上げは大体一日、長くても二日位であるが手数のかかる仕事であつたが、今は改良簇、或は廻転簇が使われて繩を張る柱棒をたてる。

島田簇を払ける手間はなくなり、大分楽になつたものの熟蚕の捨い取りは以前と余り変らない。

ただ条桑育の場合は主として条払いにする様になつたが、尚残つた下の蚕は一頭拾いであり、手間のかかる仕事である。

繭かき 繭かきは質繭かきの人が入つて来るのが多かつた。蚕飼育で身体が疲れて居て、じつとして繭をかいけると、ねむ気が襲つて来るものである。男子は大麦刈りに出るのが多いから女、子供の仕事になる。前橋や石倉等、仕事をしないおかみさん達が毎朝いくらでも稼ごうとして繭掻きにやつて来るのをつかまえて連れてくる時あれば、小学校の子供を頼んでも来る。

藁簇の中から一粒ずつかき取る繭は、上繭、中繭、玉繭、ピジョ繭と分けて、私達子供は半日に一メ目(約四疋)位きりかけなかつた。

かき賃は一メ目で金三銭位、段々時勢によつて高くなり五銭、或は八銭、十銭とあがつたが、私達が始めた頃は三銭位であつた。

金ほしさに始めは一生懸命かくのだから半日もたつと飽きてしまつて、悪ふざけたり、いたづらをしたりで長くつとまらず、一日五銭位貰つて帰りには駄菓子を買つて喰べてしまふ事が多かつた。

繭販売 繭かきが始めると町から繭商人が入つて来る。何々製糸と名の入つた印半纏を着たのや如何にも金持ちらしく粧つて金指輪などはめた洋服の紳士等。

繭商人は近所の誰さんの家のを、糾らで買つて来たのだから、同じ値で売れとか、繭がよいから一メ目で五銭高く買うとか賭け引きをして買つて歩き、竿秤で目方をみて代金を支払つて行くのだが、時によると手金だけ支払つて繭を引取り、種々の口実をもうけて繭代金をふみ倒す様な不徳漢もあつた。

又繭商人がお互いに連絡をとつて、横浜の生糸相場が暴落の為に買

止めになったと農家をおどして安買いをしたり、全然幾日かは繭を買わない場合もあった。

だから蚕を飼い繭をつくっても、自分の懐ろに金が入るまでは安心出来ない当時の繭販売であった。

こうした悪徳商人に対抗する為、或は養蚕技術の向上を図る為、養蚕改良組合と言うのが出来たのが大正四年〜五年かではないかと思う。そうして有力な製糸工場と特約取引契約を結んで繭を共同販売する様になった。

これを正量取引と云い、従来の肉眼で繭の良否をみて繭代を決めた売買と違って、繭を繰糸して糸量によつて値段を決める様になった。画期的な取引をする様になった。

尚この繭の取引の事については、農家の経済に直接深い関係があるので、種々の変遷があり、出荷先の交水社や共同組の支払能力が無くなり、これに関係した多くの養蚕家が繭代金が取れなくなったり、又昭和二年頃、農村工業化の風潮によつて（それ以外に繭販売に付て製糸から迷惑を受けない事）自分の繭を生糸にしてより高く現金収入を得る為に出来た組合製糸群馬社の設立、そして群馬社の赤字倒産、或は繭の正量取引が国の法律によつて検定取引により各府県に繭検定所が設置された昭和七年頃からの事等、一寸の紙面では書ききれないものがある。

それでも製糸との特約取引は戦争前続いて、戦争中は日本蚕系統制株式会社へ一本にまとめられたものの戦後再び蚕糸業の発達に伴い今尚特約取引契約は続けられて居る。

**農休み** 村中の田植えがすむと農休みになる。

農家で一年中一番、苦にして居る仕事は何といつても田植えである。この田植えをすませておおかたの家は麦も俵に入り、手まわしのよい

家では一番除草(田の草)、そして桑畑の除草手入れも終わして、おおかたの農仕事片づいた時の村中こそつての二日半日の休日であるから、全く楽しい行事である。

区長が村の辻々に「何日何日農休み」と書いた札が張出される。

町では、この農休みの買物をねらつて夏の大売出しが初まる。

春の蚕、麦の収穫、田植え等一日も休みなしに働いてきた久し振りの農休みである。近所の主婦達は何れも誘い合せて、前橋へ農休み買物に出かける。

長い忙しい養蚕、農作業の間、農休みにはあれもこれも買つてやると約束され、約束が果さなければならぬ時が来たのだ。

買つて貰う約束の品物は主に、シャツ、兵児帯、サルマタ、下駄等で子供の物は決つていたが、娘や新嫁の居る家では他所行きの着物、襦袢等それ相応の物を買わねばならない。

私達は時によると、母の買物と一緒に行く事もあった。自分に似合ふサルマタや下駄等を買つて貰い、なおねだつて、これから小川で魚取りに使う網などを荒物屋へ寄つて買つたりした。

買物について行くと、決つて豎町の新井屋と云う弁当出し屋へ寄つて、お昼食をたべたものである。

縄ノレンをくぐつて入ると大体座敷になつて居り、下駄をぬいで座敷へ上り、煮物とか煮魚、或は鯉こくとかを注文するのであるが煮物が一番安いので、主にこればかり喰へ他の物を喰べた事はなかった。

足のないお膳に、小さなお鉢に飯がつめられて、皿には切昆布に里芋、或はその時期とれる馬鈴薯とか隠元とかの煮たものがあがつて来るのだ。その飯を入れたお鉢の小ささと古風さが、今でも印象深く記憶に残つていて微笑しくなる。

序に呉服屋の模様なども一寸今とはちがつて居た。

私の知って居る呉服屋は豎町通りに、小川屋、沢屋、横山町の角の麻屋でその他沢山あつただろうが余りよく覚えていない。

之等呉服屋には出入口以外に軒下から道にかけて、その家の商標を白く大きく染ぬいた紺のノレンが張り出されて(沢屋の命 麻屋のは

① 小川屋は記憶なし)看板の役割をはたしていた。

店へ入ると客は木製の椅子に腰をかけるか座敷のあがりかま櫃に腰を下すのだった。この上り櫃がその店の経済力を表す如く、樺の五寸七寸角の様な大きなもので角は銅板で合せ目を閉じてあつたりした。

番頭は主に角袖袂の着物に帯をしめて前垂れをかけ客と向いあつて座り客からの好みの品や注文の品物を持って来る様小僧に言いつけるのだ。

この番頭の小僧に言いつける荷牒を入れた声、そしてそれに答える小僧の長く尾を引いた声、誠にノンビリした店頭風景である。

小僧は筒袖の着物に前だれをかけ店の中をコマ鼠の様に走りまわつて、あつち、こつちの番頭から、何どんとよばれ敬称が「どん」であつた。

一日久し振りで出て来た町で昼食を喰べたり、銭湯へ浸つたり、氷水をのんだりして夕方、流石涼しくなつた石ころだらけの国道を背中に買物の大きな風呂敷を背負い、手には呉服屋や荒物屋で貰つた何本もの団扇をもつて満ちたりた心で一步一步、村へ近づくと、帰り道は幸福そのものであつた。

又こうした買物について行かなかつた時は母の帰るのが待ち遠しく、日暮頃村外れまで迎えに出たものであつた。

帰つて来ると風呂敷包みから品物を出して、これが誰の下駄、これは誰の物だと渡される。そして農休みの朝になって身につける農休みの買物は農家の主婦達の一年中の楽しみの一つでもあつた。

主人なり舅なりから当時の金、拾円札の一枚も渡されて晴れて街へ行き、一家の者の品物を自分のより好みで買つて来られるのだから、その開放感は想像以上のものである。

農休みの前の晩は小豆を煮る。そして黒砂糖やら玉砂糖を入れて餡をつくるのだ。

今の人は黒砂糖も玉砂糖も知らないが、その頃は普通が黒砂糖で、その上が玉砂糖。中双、ザラメと云うのはめつた使用せず、上白の砂糖はユキジロと言つて最も高級品で贅沢品であり、病氣見舞だとか、病人が葛湯でもといて呑む時以外は余り用られなかつた。

農休みの朝は「うでまんじゅう」である。小麦粉に炭酸を入れて、フックラと熱いがふかしたての饅頭を喰べて朝食とする。

新しい下駄やサルマタをはき、新しい三尺帯をしめて学校へ行く時、お互い買つてもらつた物を自慢しあつたり品定めをしたり、貰つた小遣金の金額を教えあつて、少い時には「誰々はいくらもらつたんだから俺にもそれと同じにくれ」とねだつたりもした。

小学校から帰つてくるとすぐ水浴びに行く。国道端に本家と大本家の池があつて、ここが村の子供の水あび場所であつたが、又古市堰の竹太郎さんの東の流れや、龍造さんの裏。時には染谷川へ行き、唇が紫色になつて寒さにふるえる程水泳したり、神社の境内で線香花火を楽しんだり、ナガラミと云う貝の煮付けたのを桑の葉をちぎつてもつて行き一銭買つて喰べたり、ほんとうに楽しかつた。

尚これは農休みであつたか否か明らかではないが、大本家の池で水泳をしている時、私はまだ泳げなかつたが、富沢嘉蔵さん宅のチーと云う男の子と、小野里谷造(後に福田谷造となる)に深みに連れてゆかれてアップアップを可成り永くやり、随分水をのんだ事があつた。泣き乍らもがきながら水面へ顔を出したり、沈んだりしていた時、そ

の二人が来て又浅瀬へ連れて来られたが、今で考えると今五分もあのままでいたら私はあの時溺れ死していたかも知れないと思うと何か背筋に寒いものが走るのを覚える。

農休みは皆二日であるが、八丁めめと云うのがあり、これが半日休みである。

八丁めめは農休みの前日やる処と、農休みが終えてからやる処とあつて、私の村では後者であつた。

八丁めめと言う事の謂は私もよく知らないが、村はずれの主要な道路へ注連竹をたてて村内へ災厄病魔が入らないよう、又これ等を村から追放する行事の様で、区長が之を取り行い、又別に念仏講の婆さん連中は当時お寺へ集り（長栄寺）百万遍を唱へて村の無事稲作の豊穰を祈つた様だが、いつの頃からか長栄寺が余り破れはてて汚くなつたのと、又余り村の西方へ片寄り過ぎてゐる等の不便もあり、大正の半頃からか、或は公会堂が出来たその頃からか、今では殆んど公会堂が使われて居る。

てんのう祭り 農休みが過ぎると七月十五日、此の日は八坂神社の祭であり、てんのう祭りといつた。

十四日の午後になつて小学校から帰つて来ると、前にも記した地藏ツ子供、道祖神子供、所謂十才以上十五才まで一戸一人の男児は十五才になつてゐる世話人の指揮に従つて神社の境内や公園地の草むしりや掃除をし、又夜は箱灯籠を点けるので燈籠の紙張りや、絵の具をとりてポンチ絵（今の漫画の様なもの）を書いたりする行事があつた。

この「てんのう」祭は時により田植が遅れた年は農休みと重なつたりした。

然し乍ら太平洋戦争後は、殆ど農休みがこの十五日を中心に行われる様になつた。

十五日が過るともう七月は遊び日と云うのはない。田の草取りは越中（越中の国の人）が田の草取りを請負いで賃金取りに出稼ぎに沢山来たのを越中と云つた）に渡しても桑畑や野菜畑の草取りや手入れ又初秋蚕飼育で忙しかつた。

この越中の出稼ぎの人達は組をつくつて農家の蚕室の空室や二階の隅等を集団で借りて住んで居り、夜なぞは今流行の越中小原節を盆踊の夜に披露した。

この晩は近所村は勿論、遠く離れた処からも若い衆や娘が集り、夜更けるまでゴツカかえたものである。

妙見様の参道には大きな桜並木が五百米程長く続いて、この両側にはアセチレンガスのランプをつけて、種々な屋台店が並び、西瓜や桃を又氷をかくイセイのよい鮑の音、小さなノミを金槌で調子をとり乍ら白い鮑、赤い鮑をかく音、チョイチョイ節の三文玩具屋、扇子のたたき売り、小暗い一寸した広場には大学の角帽をかぶつて袴をはいた演歌師のヴァイオリンの響き、行き交う人達は皆白地のゆかたで娘は帯をおたいこに結び、男は黒い三尺の結び目を尻にたらし、田の草や畑の除草に陽にやけて真黒の顔もアセチレンガスの青い光をうけて何れも美しくみえた。

境内に入ると、お堂の前へ近づくのが容易でない程の人出で、鏝口が絶えず鳴り響いて、誠によき時代の懐しい情景であつた。

この妙見様の祭りの夜は、鮑屋と桃屋の店が特に多かつたが、この桃をコロガシて来ると云う事があつた。

路傍の戸板に桃を並べて売つてたその戸板に、余り賑やかな人出でおかれた人が突き当り、或はつまづいて戸板がてんぶくして、桃が路にころがる。之を拾つて持帰る。偶然の出来事の事もあれば故意の事もあつたらしく、又故意の事が多かつたかも知れない。



又桃屋の店先へ大勢並んで、その後からスキをみて万引きしてもつて来る。こんな事が随分公然と行われたようであった。

暑い夏の妙見様の宵祭りは若い衆と娘の楽しい逢びきの夜でもあった。

八月・行事 田の草が終らないのに、どこの家でも初秋蚕の掃立てある。

蚕種は風穴種とか生種とか云つて、今の人工孵化種と云うものはなかった。

掃立は七月二十日頃から二十三四日頃まで、今（昭和四十年）はお盆が八月の二十三日が迎え盆になつて居るが、その頃大正五年頃までは月遅れ盆の八月十三日が迎え盆であつたから、お盆と蚕の上簇がぶつつかるので、お盆どころではなく忙しく、お寺や墓地へ行くのも、ほんの暇をみて行つて来る様な状態であつた。

その為に月遅れ盆を更に十日延ばして、八月二十三日からの盆に変更したのは、大正五、六年の事であつたらう。

今年からお盆が十日延びたので、仏様に手紙を出しておかなくつちちあなるめで、なんと冗談口がきかれたものだ。

八月一日は「釜の口開き」と云つて、朝うで饅頭をつくつて遊び日である。

釜の口あきとはどう云う意味か私は知らないが、老人達の口伝えに地獄の釜の蓋が開いて、仏様が開放されるのだとか。

八月七日が七夕祭りで、宵の六日には笹竹に色紙を短冊に切り、之を笹につけて星祭りをした事は今も昔も変わらない。

七夕の宵から七晩焼きと云う行事である。暑い長い夏の日も昏れて、夕暗が迫る頃私達子供は門へ麦稈を一掴み束ねてもつて出て之を燃す。

極楽西方浄土から来る仏様が、まちがわれない様に、焚く道しるべの迎火である。

この火で桑の葉を焼いて喰べると疫病にかからないとか、この灰を門口に一面にならしておくと泥棒が入らないとかで、私は心のうちにそれを念じ、それを信じながら灰になる前の桑の葉を口に入れたり、灰をならしたものであつた。

斯うした行事の間にも蚕は一日一日と大きくなり、桑取りは日増しに忙しくなる。

朝早く四時頃から起されて、ねむい眼をこすり乍ら左右の人差指に桑摘鉢をつけて、メケーと云う竹籠を背負つて桑摘みに出かける。午前中一生懸命摘んでおかないと午後は暑かつたり、又雷雨で桑摘みが出来なくなる事があるからだ。

今の桑と違つて群馬赤木とか柳葉とか葉の小さい品種の桑だから一日一生懸命摘んでも一人で二十貫〜三十貫位のものであつた。

夕方になると桑畑の中は、むれて暑い上に蚊柱がたつて、ワーンと云う音をたてて居る苦しさである。

こうした事を数え年十三位からやつたのであるから、今の子供達の思いも及ばぬ事である。

摘みためた桑のメケーを背負つて、桑原から家へ一日に何回も往復する。然も桑を台所へまけて又桑原へ向う時は必ず蚕のコシリ（蚕糞Ⅱ蚕沙）を入れて行くのだから、桑原への往復共に荷があるのである。

地藏ツ児 八月七日より、十三日までの一週間地藏様の行事があつた。十才から十五才迄の男児で一家一名の子供が集まつて、神輿形の地藏輿を村中一戸一戸担ぎ歩き、金銭或は米穀の寄進を得るのである。

地藏堂は恰度神輿型で屋根は方形、中央に擬宝珠があり、方形の四隅は、わらびがまいて居つて櫂の漆塗りに真鍮の金具をふんだんに

使った美しいもので、子供が担ぐには少し重過ぎる様であった。

地蔵様を出す前、五日、七日、毎夜夕食過ぎになると寄せ太鼓が鳴る。これは地蔵児が和讃の練習するので、村の西の端れにある小ッぼけな寺、長栄寺へ集まれとの合図である。私達は、素肌単衣物を着て、腰に団扇をはさみ、近所の地蔵ッ児を誘い合して長栄寺へ集る。

長栄寺は総社町の光厳寺の末寺で、檀家はなく、ただ村の費用で運営されていて、私が初めて地蔵ッ児になった時には、カドヨと云う姓か名か知らないがそうよんでいた尼さんが住んでいたが、まもなく居なくなり無住の寺となった。

うす暗い豆ランプがともされてジメジメした畳に座るのは何だかうすきみが悪く、そして座っているとモゾモゾ蚤があつちこちからときあがつて来るのであつた。

世話人が（と云つても十五才の男児）和讃の文句を一口いうと、地蔵児全体が之を口真似するやりかたで教わるのだが、蚤にかじられたり蚊にくわれたり、昼間桑つみの疲れと夜のむし暑さで、ほんとうにつらい和讃の練習であつた。

六日の午後は、寺の庭へ地蔵輿を出して水車から米の搗き粉をもらつて来て、堂に張つてある真鍮の金具を磨いたり、堂を洗つたり、油雑巾をかけてキレイにして世話人の家へ担いで行く。

地蔵ッ児は、世話人が十五で十四才が下世話人その下の十三才が担ぎ頭と云つた。世話人になれば、ほんとうに何もしなくてもよかつたが、下世話人から下は地蔵輿を担いだり、太鼓や鐘を担いだりしなければならなかつた。

地蔵輿を担ぐのは二人で担ぎ、両側に輿が横へ傾かないよう、一人ずつ堂を支えてなければならなかつた。鐘も太鼓も無論二人で担ぎ、側にはたたく人がついているわけだ。

八月は学校は恰度夏休みなので、学校へ行く心配はない、が初秋蚕を飼っているので、どこの家でも子供にも皆桑摘みを手伝はせるのであるから、地蔵様を出すのも夕食後出す事が多かつた。

家から新しい手拭を一本貰つて、之を縦に四ツ折りにして、皆威勢のよい向う鉢巻きをし、幼い者を先頭に中央に輿や鐘や太鼓が並び、村の道々を家の門々に輿を下ろして地蔵様を拜ませるのである。

地蔵様を門口に下ろさぬ先に、幼いまだ鐘も太鼓も担げぬ二三人が「地蔵様がきたから拜んでくんな」

と各戸毎に先ぶれに行くのだ。すると居合せた家人は、米なり、挽割麦、或は一銭二銭の金を供えて拜むのであつた。こうした事が一週間続くので、ほんとうに早く地蔵様が終つてくれればと思つたりした。

地蔵様の行事は一週間、だから十三日で終る。十三日は朝、まだ寝て居るうちによせ太鼓が鳴る。それでも地蔵様が今日で終るのだと思つと、ねむいながらも元気で起きてすぐに集る。大体朝食前で村中を巡りきるが巡り終らなくても午前中九時頃までには終えた。

世話人は、地蔵様でもらつたお金や米、麦の挽割等を村の必要な家、或は穀屋へもつて行つて売り、此の金をもつて下世話人に荷車をひかせて、前橋まであらかじめあつらえておいた饅頭を取りに行く。

利根橋を渡つて県庁で曲る。真直ぐゆけば前橋駅の東角に前田屋と云う饅頭屋があつて、主にその饅頭屋であつらえた。

四角い大きなセイロを七ツも八ツも重ねて台所で、ふかしていて、ふけあがると座敷へ敷いてあるゴザの上へバサリとあける。うらがえつてる饅頭の熱いのを一つ一つ手で又かえして表を出してきます。

うまそうな匂いが私達の食欲をそそる。大皿に山盛りになしてくる饅頭を喰べ乍ら、詠らえた数の出来上るまで待つて居る。出来あがつておおかたさめた饅頭を数えながら入れものにもつて来た大ザルにつ

めて村へ帰って来ると、それまで早く来ないかなと首を長くして待っている担ぎ頭以下の地蔵ツ子や地蔵ツ児以外の子供達までが皆出迎える。

饅頭が宿の世話人の家へ着くとすぐに、世話人は下の地蔵ツ子に「なつてこい」といつける。

待つてた子供は口々に「饅頭くれるヨツ」と、どなり乍ら村中を駆け歩いて来る。

すると村中の子供、女兒も男児も地蔵ツ子以外の子供は勿論、子供の居ない家では大人の人も貰いに来る。之に皆二ツ宛の饅頭をくれてやるのだ。そして地蔵ツ児には年令によって差をつけて、初めての地蔵ツ児には五個位、一年上る毎に二個位増してくれる。世話人は残りを等分に分配し、又夕食等一緒に喰べ地蔵様の行事が終るのであった。

#### 地蔵様和讃

しらはと

婦命頂礼しらはとが

門のとびらにすをかけて

門のあくたび いち となく

トヨなんまいだ

かやかり

婦命頂礼かやかりが

かやをせんだんふねにつみ

ひとせのかわをとほりすぎ

ふたせのかわのまんなかで

ふねはしづむし荷はくづれ

そのときたのむは じぞうそん

トヨなんまいだ

じぞうそん

婦命頂礼じぞうそん

ちようちはながさ さしかけて

かねやたいこにふえをいれ

ねんぶつそろえて まうしけれ

トヨなんまいだ

えびすさま

婦命頂礼えびすさま

いわのてばなに こしをかけ

ひちこのたけを おてにもち

きんさのいにて ぎんのはり

めでたく たいをつりあげて

おさかもりにていわいましょう

トヨなんまいだ

こうやさん

婦命頂礼こうやさん

ひちりだいもんなまがり

まがりまがりにもんたてて

つほきやにわをながむれば

ぼたんしやくやくきりしまに

おだいどころをながむれば

きんきらちやわんにきんびしやく

おくのひとまをながむれば

さんじようのたかがかけてある

トヨなんまいだ

いととり

婦命頂礼十七が 柳の下で糸をとる

糸をとって何にする 糸をとってコモにおる

こもにはなるまい機はたにおる

はたにおつて何にする

これもおじぞうのぜんのつな

トヨなんまいだ

たうえ

婦命頂礼なつごが

ことしはじめて田をうえて

しかもそのたのできのよき

からが七しやく ほが五しやく

なんたら 二まにも やほいちだ

やほではちこくとれるなら

おれのおせどにくらななつ

くらのぼんしはたれたれぞ

一にこすずめ二につばさ

三にうぐいすほととぎす

てんじく トヨなんまいだ

婦命頂礼てんじくの

いわふねおじぞがあまくだる

なながしよがんであまくだる

なにもしよがんはなけれど

あまりせけんがじやけんゆえ

ねんぶつすすめにあまくだる

トヨなんまいだ

四ぼうがため

婦命頂礼四方がため

四方がためのいわくには

東西南北いたします

東は千手観世音

南は薬師のじゆうにじん

西は西方みだによらい

北はしやかむに によらいさま

てんちてんおうはふどうさま

四方がためをいたすれば

魔もなき事もながりけり

トヨなんまいだ

ぜんこうじ

婦命頂礼しんしゆうの

かわなかじまのぜうこうじ

おかむとすればくもがでる

なんたらじやけんのくもたやら

くもはじやけんじやなけれども

わがみがじやけんでおがまれぬ

トヨなんまいだ

さいのかわら

婦命頂礼さいのかわら

さいのかわらの地蔵ボサツ

一つや二つや三つや四つ

十にもたらないおさなごが

むじようのかぜにさそわれて

さいのかわらにゆくぞかし  
さいのかわらのおきてには  
ひるは三どの石のとう

よるは五たびのはなのやく  
一れんつんではちちのため  
二れんつんではははのため  
さんのとうまでつみあげて  
よろこぶさいのなさけなや  
あおおにあかおにいびられて  
つんだるとをうちくづし  
またつめつめとせめられて  
この時おさなごおどろいて

かわらをくだりてなくもあり  
いちじないては母をよび  
にじないてはちちをよび  
そのときふしぎやしそうそん  
みなこいこいとよびよせて  
けさやころもとりすがる  
うぬらがふぼはしやばにあり  
そこでわれはふぼじやもの  
かわらをのぼりてはなけんぶつ

トヨなんまいだ

和讃の数ほもつと沢山あつたと思うがこれ以上思い出せない、尚記  
憶ちがいもあると思う。

尚つつ欠のような

帰命頂礼この橋は

帰命頂礼この橋は

まはりがレンガでくるがねで  
なかはしらかねじほしかね  
キンのギボシにギンのいた  
これもお地藏のかけた橋  
あまたしよにんのたすけばし  
これもおじぞのホラヨイヨイ

かけたはしトヨナンマイ  
アイダ アイダ アイダ  
太鼓 ドドトントン  
同時

鐘 カカカンカン

お盆 お盆は昔と今と比べても、その行事には少しも違わない。ただ  
だ祀る日が以前は八月十三日から十六日までが、現今は八月二十三日  
から二十六日までと変っただけだろう。

八月十三日にお盆だなをつくる。場所は大体座敷の中央より南の隅  
である。

私の家ではお盆棚と云うのがなくて、蚕の柶棚を代用に長く之をつ  
かっていた。仏壇より位牌を盆棚へ移して、座の上下に四方へ小手縄  
を張り囲らし、杉葉と短冊型に切った白紙で一間三ヶ所ずつはさみた  
らした。

位牌の後ろには、善光寺や比叡<sup>ヒキ</sup>本山等から買って来た小さな掛軸、  
即ち阿弥陀如来や十三仏をかけて仏前には生花や蓮華の造花を飾り菓  
子やら梨、葡萄、その他家でとれた茄子、胡瓜、トウモロコシ、南瓜  
等供える。

十三日朝、元総社の徳蔵寺へ金貳拾銭を包んでお盆迎えに行くと、



地藏様興

寺では元三大師のお札と、ミジン粉の菓子（寺の絞と名の入った）のを三ヶ包んだのと、お茶をお膳にのせてお小僧が銘々に運んで来てくれる。

本尊様の前へ行つて、お焼香をすませて、お札と引物の菓子をもらつて帰つてお盆棚へ供える。

夕方日暮頃忙しい蚕の用事の暇をみつめて墓地へ霊迎えに行つて来る。

七晩焼の最後の迎え火をたき乍ら

「さあさ この火で先祖様おいでなさいまし」

お婆さんなどがこんな事をつぶやいているのを耳にしながら、家へ帰ると提灯の火をお灯明へ移す。そしてその晩の夕食は、盆棚の前で家中賑やかな食事となる。

お盆中の食事は、朝がボタ餅、昼がうどん、夜が米飯と決つてゐる。この食事は十四日から十六日まで続くのであるが、ボタ餅は毎朝の事ではあきるので一朝位省略される事もある。

秋蚕の盛り、或は上簇等でお盆が来ても遊ぶどころかそうした決りの食事さえも出来かねる時であるので八月十三日を十日延ばしの二十三日盆になったのが、大正初期ではなかつたらうか？

十五日になると茄子に四本細い棒をつきさし、トウモロコシの毛を尻尾にして茄子馬をつくり、手綱がわりに生うどんをかけ、胡爪や茄子を賽の目に切つてカイバとなし重箱に入れて、団子や水、線香をもつて盆送りだが、今では十六の朝盆送りをする様になった。

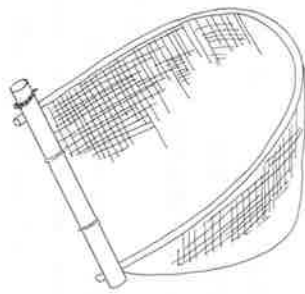
これは、お盆を迎えるも送るも夕方、この時期は非常に雷雨にあう事が多く思う時間に送られない事、一つには人間のずるくなつた事にもよるらしい。

お盆を送つてきて盆棚をこわすと、又公然と遊べる目標を失つた心

の淋しみをかみしめるのであつた。

魚とり 田植えが済んで小川の水が澄んでくると、川底にはゲロツパと私達が言つた水草が生えて、その広い葉が水の流れにゆらゆらゆれている。その葉かげから小鮒の影、小さな黒い鯰の子がひらひらと見える様になると私達子供は、それをとりたくて仕方がない。

街の荒物屋の軒先には、麻で織つた網が吊り下げられる。私は母にねだつて一尺五錢位のを四尺か五尺買つて来て、之を三角網につくる。



昼休みは大体三時までであるから昼食をたべると弟と二人、時は一人で、麦稗帽子にサルマタ一つで網をもつて出かけるのだ。

毎日毎日出かけるものだから、どの川のどの辺に魚が居るといふ事が凡そわかつていたから、そこへ真ツすぐに行く事が多かつた。

「晩方又夕立だぞ。早く帰つて桑つみにゆくんだけ」

母の言う事を気にしながら川へ飛び込むと網を片方の岸へつけて、魚を追込む様に片足で水をジャブジャブさせ乍ら網をあげる。すると、たいてい三吋位の鮒やどじょうの何尾かが白い腹をみせてはねているのである。これを拾いとつて、弟のもつてるテンコザルの中へほうり込む。時には十五吋位の大鮒やどじょう、鯰やうなぎ等の大きいのがゴトゴトと云う快よい跳ね音をたててかかる事があつた。

こんな時には大急ぎで網をもつたまま岡や道へあがつて逃がさないように、しっかりとつかまえてテンコザルの中へ入れるのだつた。こんな大きなのがかかると早く家の人にみせたくて、どうしても帰りが早くなりがちだ。家へ帰ると冷い井戸水をくんで、水をとりかえてやる

と、魚達は急に元氣をとり戻した様子にみえる。

大きな鮒などが、死にかかると尻尾をもって水中に逆さにつるして  
「鮒々さかきみづのんでいきろ」

と何度もくりかえしくりかえし言い乍ら元氣づけるのであった。こんな事をして生きかえるのもあったから妙なものであった。最も一時だけで一晩もたつと大体死んで浮上つてゐる事だった。

**流し針** 夏もだんだんに深まって樹木の青葉が暗むように繁り、油蟬やデージー蟬の声も何となく激しきなかにも劣えを感じる。その頃になると、ツクツク法師や日暮し蟬がかわつてなき始める季節である。小川の水は澄んで、ひらひらとゲーロッパの葉が流れにまかせてゆれて居るが、雷雨で明けた朝などは褐色な泥色に濁つてゐる事がしばしばある。

この時期、即ち八月中旬から九月中旬頃まで、よく流し針をかけたものだ。店へ行つて一銭に三本位の針を買い、一くり三銭の細い括糸を買つて来て、針に糸をつけて餌のみみずを取つて来る。畑の堆肥の下や井戸端の下水流しの所なぞ掘るとメメツ（ミミズの事）はいくらでも取れた。これを半分に千切つて中の糞を指でこいて押し出し、針にそっくりにさして、あらかじめ用意しておいた細い篠竹に、糸を結びつけて夕方小川のおちこちへかけておくのだ。

一夜たつて朝早く、大体午前五時頃起きて針をあげにゆく、針をかけた所には、川の水を一つかみ草の上におくとか、又草を踏をつけるとか等何等かの印しをしておく。朝露に濡れて、その印がわからなくなつたり、又夜来の雷雨で印の土塊が流れたりしてわからなくなつたりする事もしばしばであった。

川の中へ手を入れて針をあげる時、少しでも針に手こたえがあると、アツかかつたと胸がはずむ。この瞬間の心地は何とも言えないよろこ

びである。二〇〇グラムも三〇〇瓦もある鰻や鯰が、まだ何とかして逃げたいと、のたうつ姿や又にげようと一晩中、魚体をくねらせて釣糸でよけいに結ばれて身動きの出来なくなつたもの等。総じて流し針にかかる獲物は大きかった。又、かけた所の地盤が軟くして篠竹をひきぬいて針をくわえたまま逃げられるのもあったが、幾本あげても一尾もかかつていない朝なぞあつても、流し針の面白さは格別であつた。

「ドウ」かけ 八月になると、田の草取りも三番子がとりあがる。そうすると一応田の水をおとして、一端田を干す事になる。この田の水を掘へ落す所を尻水口という。

ドウはこの尻水口へかけたり、又田の用水堀なぞへ時期によつて上りドウ、下りドウにかけて、主にドジョウをとるのである。が又大きな型のは鯰や鮒、細長く鰻専門のものもある。私等子供がかかるのは専らドジョウ専門で、鯰ドウは多少かけた事があつたが、鰻ドウは、かけ方がむずかしいとかで、全然手をだした事はなかつた。そこでここでは主に子供遊びのドジョウの事を書く。

ドジョウドウは、長さ三〇吋、直径七吋位竹籠の様な巾二吋位の平たい竹で横編みしたもので、形はビールビンを一周り大きくした位で、鯰、鮒ドウはこれよりずっと大型で、大きいのは長さ一米、直径一〇吋〜二〇吋位のもあり、細い竹びこを麻糸或は棕櫚縄で簀の様に編んで丸ダガにまきつけコシタをつけて作つてある。



又鰻ドウは、長さは七、八〇吋もあり、直径は三吋位、ドジョウドウの様な横綱作りで尻は丸く作りつけになっているが、コシタがはづ

せる様になつてゐる。

夏の昼休みに田浦へ行き、バケツに一杯「たにし」を拾つて来ておき夕方になると石の上で金槌や小石でたたきつぶして、これに焼米糠や薬種屋から、せんきゅうと云うのを買つて来て交せてドウの中へ入れ、背負籠にドウを入れてかけに行くのだ。田の水口とか「どじょう」が寄り集る様な所をみつけて、七月中から八月上旬にかけては、ドウの口を川下へ向けてかける。即ち上りドウであり、八月中旬頃から秋口へかけては、ドウの口を川上へ向けてかける。即ち下りドウである。尚田の尻水口はすべて下りドウである。

このドウあげも、流し針と同じく朝早く跣足で朝露に濡れながら行くのである。シャツの袖を腕にまくりあげて、水の中からドウをあげる時、すでドウの中でドジョウが跳ねる音が聞えると、ドウの口まで一杯に入つてゐる事がある。ゴシヨゴシヨと云う快い響きが今でも思い出される。がこうした事は極めて僅かで大半はからであり、二三尾位入つてゐる事が普通であつた。

それでもとれると面白いので続けてかけていると、いつしか沢山のドジョウがたまつて、飼つておく甕やバケツがふさがつて母に小言を言われる事もあつた。母は川魚は全然口にしなかつたし、私も魚取る事は好きでも、その頃は余り喰べもしなかつた。又売るなぞという事もなかつたから、時々水を取替えてやる程度で正月から春頃までもドジョウがあつた事だつた。

さかな、けえ（かえどり） さかな、けえ、といつても一寸わからぬ。方言のようなものであるので説明すると、川や池の水を桶やバケツの類で、かえ出して魚をとる事である。

九月も彼岸になると、水田の稲の穂は出揃つて出穂水を田へかける人もなくなるので、秋彼岸の中日には用水堀の水ぎれになるのである

るが、殆んど中日の前夜、堰（天狗岩堰）の水門は閉じられて、利根川の水は殆んど来なくなるのが永年の慣わしであり、それは現在でも同じである。この断水をねらつてとる漁法とでも言うか、まだ相当量流れる水を主な用水堀へ流して枝葉の用水堀の「かえどり」を行う。日頃仲のよい友達同志何人が組になって魚の居そうな場所、例えば用水堰だとか、岸に柳の沢山生えてる処だとか、橋の下なぞを物色して、その上下流をせきとめてバケツで水を汲み出すのだ。私達子供は、一つ二つと数え乍ら五〇杯目毎に交替する事が多かった。

減水するのが楽しみで、水の中に棒を立ておき、印をつけておいて、もうこれだけ減つたと、にらめっこをしていたものである。水が段々減つてくると魚を汲み出す事があるので、流れには網を張り、側についていて大きな鮒や鯰が下つて網に入ると、手づかみにして入物のバケツの中へほうり込むのだが、それが何ともいえない楽しみで、もうこうなると水をかえ出す事よりも魚をとる方にばかり気をとられてしまふのである。魚は水がなくなつて、背中をみせ初めて少しでも水を求めて跳ねまはり藻の下なぞに隠れたがる。こうなつてくると、もう水を汲み出すのがいやになつて皆手ががね（手で魚をさがす事）で魚を取りはしめる。主に鮒や鯰が多いのだが、鯉や鰻なぞもよく交つていたものだ。時によると鱒やヤマメなどがいた事もあつた。

一ヶ所が終わると又次の個所と、次々に疲れて動けなくなるまで位、続けたものであつた。然し乍ら、ここは大丈夫沢山いると思つて永い時間かけやてかえほしてさつぱり獲物がなかつたり、又折角骨を折つて、いざ手ががねを初めようとする時になつて上流を堰止めた土堤がたまつた水を支えきれなくなり、くづれて骨折損のくたびれもうけもしばしばであつた。



「オーイ 上が おっぱれたぞ」

と心配になって上流のとめた処を看に行つた者が大声で叫ぶと水をケーてる者もバケツをおっぱり出して飛んで行き「芝くれ」なぞ切つて、とめようとするのだが、止る所か一時にとめた土砂が崩れ落ちると折角かえ出した所が、どつさん水（一度に来る水で）でもとのままの姿になった時は、ただ茫然として、水をみながら立ちつくすのみのむなしさであった。

「あれがおっぱれなけりやあ 随分とれたんだがなあ」と話し合い乍ら、疲れとむなしさですっかり元氣を失つて、すぐ帰つて来る事もたびたびであった。

魚の分配は、例えば組の人数が三人だとすると、魚入物を三つ並べて、一番大きなものから一二三の順に入れ、逆に三二一と言う工合に種類別に入れ分けて、小さなものは両手ですくいあげて入れる。そして魚の入つた入れ物の番を決めておいて、草の葉や柳の枝の長さの長さによるクジをこしらえて、之をひいて自分の取るのを決めるのだつた。

以上長つたらしく魚取りの種々を書いたが、こうした魚取りも川に魚の居なくなつた現在では、知つてる人が少なくなつたようだ。

極めて平凡な毎日毎日やつていた事が、時代の変遷と共に忘れられてゆくのだ。私は魚とりは好きであつたが、その頃喰べるのは余り好きではなかつた。

殊に私の母はナマグサものは大嫌いで、私がいくら沢山とつて帰つても余りよい顔はしなかつた。従つて魚取りに行きそうになると決つて叱言をいわれるので、かくれて出かけるようにしていた。

よその家では、とつて来た魚は父母等が嬉んで串を削つてやくやら洗つて煮るやら天ぷらにする話だが、私は弟を相手に破れ傘の骨を

削つて串にして、コンロに炭をおこして焼いてから巻き藁をつくつて之にさし軒下なぞに吊して乾かすのだった。

尚釣りの事、或はひぼり等の魚取りもあつたが、私は釣りは余り好きでないので殆んどやつた事がなかつた。弟は釣がすぎで田植えが終つて水が澄むようになると、よくやつていたものだった。好きこそもの上手のたとえかよく鮒や鯰をつりあげたものだ。

ひぼりは私の村は河が深いので殆んど駄目で、秋水がひけてから幾日か位のものであつたらしい。

いなごとり 秋彼岸になると、畔道には真紅な曼珠沙華の花が列をなして咲き競つていた。私達はこの花を、ほとけ花とよんでいた。余りに花の色が紅く鮮かなので、かえつて毒々しく、その名からして氣味悪い思いで、これが咲いてると美しさより、ぶきみさで踏みじつたり鎌で刈りたおしたりした。

空は蒼く澄んで川の面の埋めて繁つてる露草には赤とんぼや目の青い真黒なはぐろトンボがとまつて居り、野路には無数の大山トンボがユーユーとしたのやすチツスイツと飛び交えて、ほんとうに秋の感が漂ふ季節である。

どんな小さな草花も実を結んだ。野路をゆくと、いつのまにか、すっかり形をととのえた蝗イナゴがバラバラ稲田を飛び立つ。この「いなご」とりも当時の田園風物詩である。

幾分黄色つぼくなつた秋の陽光をあび乍ら、小学校から帰る途々、今日は「いなご」取りにゆくべいと誰ということなく約束する。家へ着くなり学校本を包んだ風呂敷をおっぱり出して、母に「今日はいなごとりに行くのだから 袋をつくつてくれない」と頼む。魚は嫌いな母も、いなごはすきなので、すぐ古布、古手拭いでつくつてくれる。いなごは田甫の畦のどこへ行つても沢山いるのだし、余り動かなく

でも取れるのだが、矢張りとれてもとれなくても、新しい所へ移動しなければ気がすまない。ただ小さな路より大きな路や土手がとりよかつた。又日中、いなごの羽が乾いている時は飛びたつのが早いので、夕方夜露があがつて来る頃とか朝露のあるうちがよくとれる。稲や草にとまっているのをチョイチョイとって袋に入れる。初めは袋の角に僅かなものも、とる程に段々とたまって半分になり、七分になり、袋のふくらみを手でさわつてみるのが楽しみであつた。よく交尾してのがあつて、之は飛びたつのがのろく、二匹一度にとれるので、このオツルミを専ら目につけた。

この「いなご」は焙烙で煎つて羽と飛び足をもいで、天日乾燥し醬油で煮て佃煮のようにし、又夏つくつておいたナメセーと云う麦麴のナメ味噌の中へ入れて食事のお菜にしたものである。

いなごとる人一人なし村の秋  
いなごとり子供はしらず村の秋

老人の郷愁にしていなごとり  
いなごとり昔語りとなりにつけり

私の母は魚類は余り喰べなかつたが、いなごは好物で、いなごとりにはよるこんだものだつた。又稲を刈る頃（十月下旬〜十一月上旬）になると、いなごの体色が茶褐色になつて肉が充実し特別味がよい。

秋の収穫（稲刈） 秋の明るい陽ざしに稲は段々穂先から黄色に熟れてきて、直立していた穂先がたれ下る。その頃は冬の前ぶれのように時々北風が吹いて、稲全体が南むきにこごなつて（曲る）くる。十月下旬、この頃から稲刈が始まる。稲刈になると家族総出は勿論であるが、その頃は労働力も豊富で、一町百姓の家では何人かの日傭取り（今の期節労務士）を頼む家が沢山あつた。

私の地方は乾田である為に稲を稲架にかける事はなく刈つた田へそ

のまま地干しにするのであるから割合作業は楽で早い。

昔はウス鎌（草刈鎌）を砥石で磨いては刈つたそうであるが、私達が覚えてからはウス鎌を使った事はなく、鋸鎌という鋸り目のたつた鎌で柄を直角に曲つていてのはなく四五度位に刃先が曲つてゐるものである。だから研いでは使うという事がなかつた。

此の稲刈も初めの一日は珍らしくもあるので一生懸命刈ると一人で約一反（一〇アール）位は刈つたものである。然し乍ら一日刈ると腰が痛く股がつつたつて、しやがめない様に痛むので、永年百姓になれた人は、こうした事のないように半日位で身体をならしてやるとか、休み休みして決して無理な仕事をせぬ事だつた。

稲刈りが終ると、その夜は刈りあげ祝いで麦の混じらない飯をたいて塩鯛或はめざし等が食膳について、楽しい夕食であつた。

尚収穫の秋は前記刈上祝の外にあげあげ祝、稲の扱きあげ祝、靱摺り祝、その他屋敷祭りや恵比寿講、十日夜、お十夜、二十三夜祭り、ツヂユードゴ、カビタリ餅等、夜の喰い祭りが続々とあつたものだ。

稲まるき稲あげ 稲を刈り終つて二三日天気が続くと稲あげである。最も稲を刈り終さなくとも天気が崩れかかるとみれば、まるつて稲を家へ運ばなければならぬ。これを稲あげという。

稲まるきは、一掴みの稲を中央で一ねじりして、穂を内側に二つに折り曲げて、二本敷いたイツラ（稲を束ねる縄）の一本上へのせる。その上へ一かかえの稲をのせるのだが、先に記した折り曲げた稲に、この一かかえの穂先が、くるまる様に置くのだ。尚この上に一かかえづつ互いがいに二度重ねて一束にまるくのであつた。この稲まるきの仕事は専ら女の仕事で、男は結束された稲を家へ運搬する役目である。

馬に荷鞍をつけて、その左右に三束ずつ結えつけて運ぶのであるが、

馬の居ない家では檜ん棒という九尺（三米）位の両端の尖った棒杉の棒に一束ずつ突きさし肩で運ぶのであったが、荷車（大八車）が出来てからは、主に荷車、その後ずっと大正十四年頃からはリヤーカーで運搬する様になった。

この稲束六束を一駄といい、一反歩何駄あったから、およその米の収穫が何俵位と予想されたものである。

尚背負しよいこ。と云う運搬具もあつた。前に春蚕の桑運びの処でも書いたが、稲を運ぶ時は背負梯子と云つて、足が長く背伸びすると背負子の足が地について休むのになかなか都合がよく、然も稲を二束つけて運べるもので力のある人は三束もつけて運んだりした。あげた（運び込まれた）稲は納屋や台所、母屋の軒下か縁側、時には座敷まで積み込まれて、稲扱きは殆ど女子の仕事であつた。

まだ脱穀機がないので、センバと云う一吋位の平らな先端の尖つてゐる、長さ35センチ位の鉄の歯が五六十枚並んだ稲扱きマンガと云つたものに足と刃モミの落ちる処に箕をつけたの相向いにおいて扱あくのだ。



稲扱きマンガ

一掴みづつ余り沢山持つと力が入り疲れるので、適当にもつて朝早くから夜は暮れまでかかつて、一日に強いものでも三駄位しか扱けなかつた（一駄は六束）。そして扱いた稲は稲穂のままぬけたのと粒になつたのがあるから之を篩ふるで分け、粒は又唐箕にかけてよい粒とシイナになる様な悪い粒とに吹き分ける。尚稲穂のままのものか他の藁（シビ）と一緒にになつてるので、適当に風の吹く

朝や夕方を見はからつて穂とチリ藁を吹きわけるのである。これをチリタテと云つた。

秋の日は段々短くなる。扱いた稲は一日も早く天日乾燥せねばならないし、稲扱きも早く終りたいのが人情である。藁も「ニユウ」に積まなくてはならない。その間男衆は田甫の鋤かけやら「まんが」かけ等麦蒔の準備で忙しいのだ。ほした稲は俵に結つて台所へ積をあげ、雨の降る日なぞをみはからつて扱ありもせねばならぬ。仕事はそれから、それへとつながつてはてしない。

女子達は毎日藁をつかんでの稲扱きに手の皮は減つて熱い茶碗はもてぬ様になり。ヒビや皸あかぎれが出来て、夜になると皸に膏薬を塗つたり、烏爪と柚子と酒にリスリンを交せたキメ藁を手にこすりにけて手の荒れを防いだりした。又男衆は夜になると、明日はかなくてはならない草靴をつくるとか、女子が夕食のうどんをつくる、かまどの前で火を焚き乍ら破れた野良足袋を繕つたりもした。

雨でも降りそうな曇り模様になつてくると家の中は、ほんとうに寝所だけが空いていて、座敷は殆ど台所も縁側も扱ありや俵、稲で一杯つまつてしまふ。藁は一年中の馬の餌料や俵、縄、或は蚕の簇等、藁無くしては成立たない農業の大切な資源であるから二階や納屋へ積込むとか、又冬日陰になつて何も作付出来ない様な処へニユウに積まなくてはならない。このニユウに積むのが技術の入る仕事で、下手につむと曲つたりして、雨水等が込み込んで腐らかす憂があるので年季をこめた人が積むのを、私達は提灯をつけて積む人の手もとを照らしてやつたり、一束ずつ藁を積む人に手渡してやつたりする。

もうその頃になるとすつかり腹はへつてくるし夜も更けてくるので、闇の中にただ藁をつむ音のみが静寂を一層つららせるのみだ。ニユウを積むのは、初め三把く五把を結えて立てて置き、之を芯に一

束ずつ周囲へ結え付け、更に積み重ねて円錐型に形づけるので、此の方法でやると雨水も藁の中を透さず、又多少湿気を帯びて藁も冬期の乾燥した空気が通すので腐る事もなく、尚僅の面積で長く保存出来る。最良の保存法であった。

然し乍ら現今では殆どこれをつくる人は居なくなつたから、農村の一つの風景として画題になつた藁ニユウも今は見る事も出来ない。

わびしい夕暮れ 毎日毎日が、こうした苦しい労働の連続であつたから、幼児や子供は両親にあまえるなんて事もない。男女を問わず十才にもなれば、幼い弟妹の児守りで食事時と授乳時以外は背中がからっぽになる事はなく、赤ツ子(赤ん坊)をおぶつて遊んでいた。

日が暮れても尚神社や公園地で、赤ツ子の泣く以上に大声で子守唄を唄うやら、はては泣きやまぬ幼児をあやしてゆすつたり、はては足なぞつねつて、うつぶんをはらしたりして時の過ぎるのを待つという次第である。月が出て中天に上つて白い雲が東へ流れて行くのを見守っていると、恰度月が西の方へドンドン走つてゆく様に見える。随分遅くまで子守をして家へ帰つてみると、まだ両親は軒下へランプをつるして唐箕吹き(とんびき)をしていたり、糶櫛(あざびき)をしていたりして夕食の気色にはまだ遠い。

「まだかいの ハー よかんべー」

「今からなんだ まだまだこれを しきらなけりや 駄目なんだよ もツと 遊んで来う」

「ハー 腹(はら)が へっちゃつてどうしようもねーや」

こんな事のやりとりは毎夜の事で、背中におぶつたまま、母は立つたまま、胸をはだけて子供に一寸乳をふくませて、またせつせと仕事にかかるのであつた。

真ッ闇になつた路を、もう誰もいない路を又とぼとぼ神社の方へ行

くと、大かたの者は帰つてもまだ同じ仲間が幾人かいると幾分心強くなつて、又小一時間位時が過ぎるのであつた。

後年私が、若山牧水先生の創作社友となつて投稿した。

十六夜の月は森よりのほりたり

遠くきこゆる児等の唄声

と云う歌も當時を追想して、つくつたものであつた。

むぎまき(まわりごしらえ) 稲の収穫の、あいまにも男は麦時の用意をしなければならぬ。女に出来る仕事は、女に委せておいて、男は稲があがつて空いた田を先ず、まわりごしらえから始める。田の周囲の畔に沿つてエンガ(桑園耕作用鋤)か鎌で筋切りをしてから、エンガで一筋、畦立てをする。尚中畔(なかべ)も同様に筋切り筋立をするのだが、鋤かけの都合に周囲から始めるのと、内から始めるのとで、そのまわりごしらえが違つて居た。まわりから始めるのを外(そと)がけ、内から始めるのを内(うち)がけと云い、これによつて、まわりごしらえをしなければならぬ。



エンガ



浅鋤(あさぐわ)

これは後に馬で鋤かけの時に、馬が田の端へ行った時や畦をまたいで次の田へ入る時に鋤が土へ速かに、くい込む様にする為で所謂耕起残し（かけッぱづれ）が出来ない様にする為である。

尚外がけ、内がけは昨年外がけにしたものは今年内がけに、又昨年内がけにしたものは今年外がけにと云う様に、年々交互にやり田の面の一方的凹凸をさける為のものである。尚田が平でないとき翌年田植の際の水かけが困難となり、田植時の労働や田植後稲の出来にも関係する事であるので、成可く田面が平らになる様に心を配ったものである。

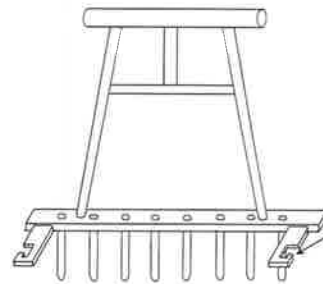
**田こなし** 田のまわりごしらえのあとは、すぐに鋤かけが始まる。馬に鋤を引かせてハンドリとシン取りとは田植の時と同じである。ただ田植と違って水田でないので、ハンドリもシンドリも水に濡れる事もないし、又足袋や草鞋をはいてるから足に傷の出来る心配はない。田植時からみれば楽なものであった。

鋤かけがすむと田の土が乾くの待つて居る。その頃は北風が吹いて空気が乾燥してるので田の乾きは早いのだが、年によると秋の冷い雨が降り続いて、いつまでも田が乾かない事もある。こう云う年は雨あがりの具合をみてコギリオンガと云うのをかける。小型の軽い鋤で、一度鋤起しある所を今一度荒目に鋤をかけて、早く乾かす算段である。田が乾くと今度は馬に万鋤を縦横にひかせて大きな土塊を砕き、更に今度は人が振万鋤や手鋤で尚細く粉碎する。

こうして凡そ平になった田は再び馬で万鋤でかき、埋まっている大きい土塊を掘り出す様にして、更に人力による振万鋤で細粉し、これで仕上る。

二人用振万鋤の出来たのは、大正七年頃か？ それまでは一人万鋤で、幾人でも揃って左右に振り乍ら後退して成可く麦の蒔付に良い様

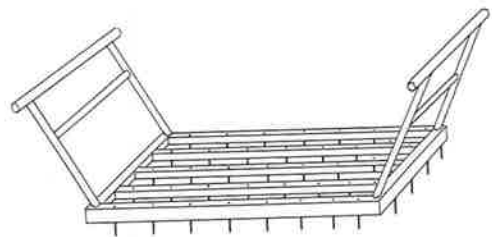
ここへ牛馬にひかせる綱をかける



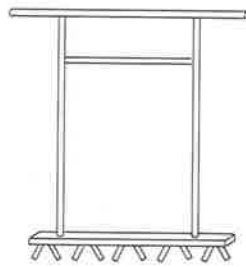
マンガ



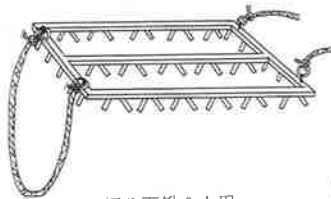
オンガ



振マンガ(夫婦マンガ)



一人用 振り万鋤

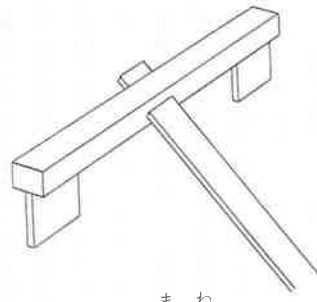


振り万鋤 2人用

に図つたものであった。尚此の一人用の振万鋤の出来る以前は手鋤をふりまはして碎細したものであったとか。又二人用振万鋤が出来てからは能率がよいので急にこれが普及して、此の振万鋤は第二次大戦後、小型動力耕耘機が普及するまで重宝された。

**まねひき** こうして仕上つた田には、まねひきをなす。まねひきと

は麦を蒔く溝引きの事である。が長さ一米三〇位、二〇糎角材の中央に二米位の柄がついて、両端に二〇糎位の溝開け板がついているもので、これを「マネ」と云った。



まね

まねが引かれたその溝に麦を蒔くのであるが、学校へ行く前、朝早く起きて私達子供は、株ッ寄せをしなればならない。まねで索いて出来た蒔溝の片側（重に北側）に稲株を一例に寄せて行く仕事である。之の仕事は足で畦間にある稲株を一株ずつ寄せるだけの仕事であるが、大抵朝早いのと寒いのと、頭から頸にすっぱり衿巻をかぶって、懐ろ手をして乍らやったものである。又この仕事の目的は蒔いた麦に土を被せるのを手鋏でやるのだが、この手鋏が稲株にあたると切れなかつたり、又稲株が麦の上にあがると生え際が悪かつたり、生えなかつたりすると、又、麦に土をかける作業が早く楽にさせる目的があつた。

**麦種入れ（麦まき）** 麦の種入れも朝四時頃から始まる。まだ外は真暗なので軒下にランプをつるして、藁に火を点けて燃したりする。

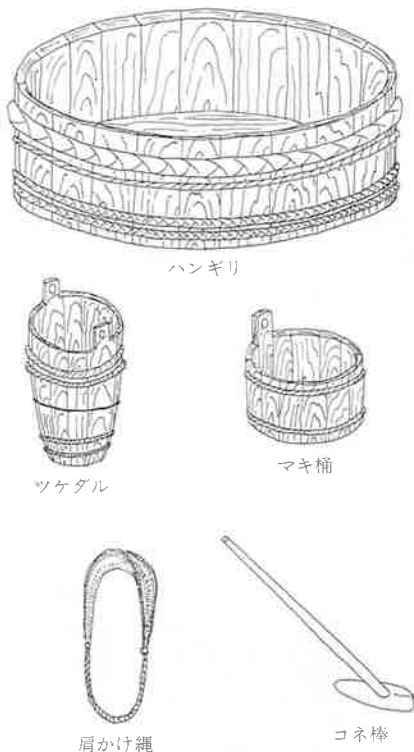
手鋏を横に使って堆肥を成可く細かく切り、之を直径二米高四〇糎位の大きなハンギリと云うタライの様な桶に入れ、麦種や金肥を計つて入れ、尚之に下肥を汲んできて、古手鋏や四ツ子等でドロドロにするまで攪き交せて煉肥としてつくりあげる。

この煉肥をツケダルにシャベルで移す。これを馬に片方三本宛計六本つけたものを田甫へ運ぶのである。

**煉肥の運搬** 煉肥の運搬は主に馬方の仕事である。荷を馬につけさ

えすれば子供でも馬のあとを追って行けばよいのであるが、その通りに桑畑がある場合などは、よほど気をつけなければならぬ。葉の落ちた桑の棒がツケダルに当たるとパラパラ音をたてる。その音に驚いた馬は急に駆け出す事があるからだ。駆け出すと、積んである荷のツケダルが荷縄のゆるみ等で落つちこちて、ツケダルをこわしたり、時には馬が怪我をする事もあるので、だから運搬にはいつも馬を使って馴れてる者が当つたものである。

**種蒔き** 種蒔きは主にその家の主人がやる。蒔桶と云う直径四〇糎高さ五〇糎位一ヶ所手がついている桶を肩かけ縄で抱いて、運ばれてきたツケ樽から手で移して、マネで引いてある蒔き溝へ、手で煉肥を掴み乍ら溝を目がけてブツツケルのである。だからその煉肥を地面（ブツツケラれた瞬間飛沫となつて足へ飛び散るので右の膝から下へは筵の切れたのを股引の上へ巻いておくとか丈夫な紙の様なもの巻きつけて蒔いたものである。一反（一アール）当り大体六七駄位で蒔いたものである。尚麦蒔は主に午前中、田甫の凍つてる間の仕事で、



午後は明日午前中蒔く田の整地作業（即ち田ごなし）であった。その頃は今と違って十一月中旬頃から毎日氷の張る寒さでもあった。

朝早く蒔き始める時は暗いので蒔溝がわからない時が多くて、予め蒔溝に粃糠をまいておき、之を目標にぶつつけたり、粃糠を蒔いてない時は、私達子供が提灯をつけて側から照らしてこの光で見当をつけて蒔いた。

**あげつこと** あげつこと、とは蒔いた麦の上に土を被せる仕事である。先に記したネリ肥づくりは主に女子達の仕事で、煉肥作りが今日の分が終ると、女子等は皆手鋤をもって田甫に出てくる。そして蒔いた麦に土を被せるのである。長いサクは「継ぎざく」と言つて二人で半分宛、短いのは一人ずつでやる。こうして一応蒔が終るのである。尚ネリ肥を蒔いた手は下肥で煉る為に真黄色になつて石ケンで洗つてもなかなかおちず、又汚い話だが下肥の臭気が手にこびりついていて二日位は、おちなかつた。

**鼠ぶさぎ** 蒔の済んだ夜は「鼠つぶさぎ」と言うお祝である。台所に据風呂をわかつて、入つて身体を浄め、先づ神棚や仏壇にお灯明をあげて御馳走のポタモチを供、蒔いた麦の豊作を祈念する行事である。

どうして、蒔の終つた祝を鼠つぶさぎと言つたか知らない。野鼠の這入る道をポタモチで塞ぐ意味からかも知れない。

**ふいっさく** 蒔が終ると師走である。十二月になつても大百姓の家、又は手遅れの家はまた蒔の残つてる家もあるが、大かた十二月二日三日頃には蒔は終る。

息つく間もなく、冬作をきらねばならない。その頃の麦田は主に東西に長く麦が蒔いてあり、「ふいっさく」をきつて蒔いた所が南に面し日光を充分に受ける様にする仕事である。

蒔は、本家、新宅等共同（エーと云つた）でやるが、冬ッ作からは個人でやるので、私は馬がなかつたから、手鋤で一鋤ずつやつたものである。それでも一生懸命やると一日に一反位は出来たものであり、若かつた故か腰の痛む事もなかつた。

**油餅** 師走になると忙しかった二年の仕事も一段落となる。十二月の十五日が油餅である。この日は村中が餅をついて遊び日である。油餅とはどういう謂か、今迄汗水たらして働いて油を絞つて来た事が、逆にこれから油をうつて楽々として居られる謂か。どちらでもよいが一日村中が仕事を休んでノーノー遊べる日である。それだから四月のお蚕餅を「地獄餅」、十二月の油餅を「極楽餅」とも言つたものである。町へ活動を見に行くものもあり、神社の境内で日頃は弟妹を背に遊んで居た子供も皆カラ身で思う様一日の遊日を満喫し楽しんだものである。

**自治体の役員交替慣習** 江田には独自の区長（自治会長）の交替についての慣例がある。こうした事がよいか、わるいかは罪半ばだろうが、長くそれに従つてきたその習慣の一端を記してみる。

村（今は町）を大体西部、中部、東部に区切つて、その境目は村の中を流れ、村前を流れる小川（なかツ川と言う）の西を西部、又鎮守境内東の道を新保田中へ下る諏訪下りの道を境目に、それより東を東部とし、前記西部東部の間を中部とした、何れも二三〇戸で、東部西部の姓が富沢、中が小野里である。昔区長その他議員等の名誉職について村内に内紛があつて、そうした事がないようとの心くばりから斯うした事が決められたらしい。

即ち例を挙げると、例へば西で区長（自治会長）が出たとすると西の評議員一名と中、東で評議員一名宛で計四人で区を構成し、西部で区長の任期が過ぎると中へ区長が廻つて来て、評議員一を出し、西と

東は評議員一人ずつ、次に任期が終った時は東で区長と評議員一人を又西部中部で評議員一人ずつ出す。以上の様にいつ斯した事が決められたかさだかでないが今もその儘守られて居る。但し最近では以前の戸数の六、七倍にも膨れ上ったので評議員が一人増えた様である。

こうした事が他の役員にも及び、農協の理事監事、農業委員の選出、農事組合、養蚕組合（今は解散）等にも用いられた。

明治二十二年、町村制が敷かれた後に、この申合せができた事と察せられる。又戸数が増加はしたが、西又東の区域へ新宅に出ても、以前の東の人は東、西の人は西、中の人は中という工合に本家の跡を継いでいるのが多い。

**鏡神社祭典** 鏡神社のご祭神は三種の神器の一つの八咫鏡をつくられた、石凝姥命という神さまである。

元総社の総社神社のご祭神ともされた、上野国神明帳に従四位鏡明神とある。明治六年村社となり、明治三十九年神饌幣帛料供進神社に指定され、明治四十年神明宮、祭神大日靈命、又諏訪社、建御方命を他に雷電神火雷命を合祀された。

明治二十五年社殿を改築され、大正二年本殿葺屋根を亜鉛板に葺替へ其ノ後大正十四年玉垣を、昭和十五年、昭和二十五年、昭和二十七年と屋根葺替其他宮繕修理が行われ、昭和四十二年には大鳥居を新築、石鳥居となり、昭和五十八年には拝殿本殿弊殿共に銅板屋根に葺き替へられた。

明治から大正初期迄の祭典は春祭は三月十七日、秋祭は九月十九日に執行されたが、その後は養蚕や農事作業の關係に依り変更を余儀なくされ、今は春祭が三月十九日、秋祭りは十月九日となった。

祭典は三通りの祭りがあった。本祭り、鎮守詣り、杓子祭り、の三種である。

本祭り。この祭りは私が明治三十六年生れであるが、覚えて居るのが二度か、三度位であろうか、まあ出来ないに等しいものである。

村中で何か大事業を完成したお祝いの様な事でもない限りは出来ないのに等しい。私が覚えて居るのは、鎮守の外苑ともいふべき公苑地に大正八年頃、公会堂が出来た時、又大正十年上越線新前橋駅が出来て渋川まで開通された時、然しこの時は神社境内や村内や区長宅の獅子舞は省略された。

この祭りを執行する時は、伍長（隣組長）会議の後、一村会議を経て実施されるのであるが容易の事ではない。先ず神社へ獅子を奉納するのは勿論の事、江田に伝わる花火をつくり、余興として催すのである。本祭りが出来たとすると花火つくりに一ヶ月余り家業をなげうって男衆はこれかかわる。

材料の調達、火薬の調達の為、警察への許可願ひ、而も花火屋への連絡等、一様のものではない。而も獅子組は連夜の稽古練習等であるから女子も厨房作業に加えて家のまわりの掃除等、種々の作業が倍加される。

殊に区長宅は自宅に於て獅子舞が執行されるので豊替え、襖の張替等もせねばならない場合もある。村中の人がその時区長宅に一時休憩する時、村人獅子組は勿論、酒肴を餐して供応せねばならない。

尚、祭りが済んでからも公会堂の無かった頃は、笠脱ぎと称する慰勞を兼ねた直会が兼ねた直会があった。

以上簡単に記したが、この事に付ては群馬県史26民俗2の第四章830頁に北群馬郡陣場の花火の次に掲載されて居るので参考にみて頂きたい。

以上本祭りのあらましで、花火造りの作業工程述べると余り長くなるので省略するが、各家に火薬の調達に秘伝があつて、区で保管して



あつた火葉調合伝書に依り花火はつくられなかつた様だ。

次が鎮守まいり(詣)の祭典である。これは簡単な祭りである。

祭日の前夜、即ち宵祭り、或いは祭典当日も含めて獅子舞を鎮守の境内に於て奉納し、終るもの、又時に依り村内の主要道路を行列を組んで流し歩き、其の間往来の妨げにならない場所に於て、ひとに獅子舞を催すのだ。ただし調達物は大体本祭りに準じた。

杓子祭り この祭りは、何の催しものもない行事である。以前の農村には娯楽というものないので、獅子舞の催しに人が集つたが、現在、テレビが普及され、加えて若い人達も会社や工場へ殆んどが通勤して居る有様だから獅子組の後継者、子供の外は家庭に居る者少なく、何事も祭り事なぞに拘束され度くない気持が大きく何事もない方がよるこばれるので、朝お赤飯をお重に詰めて鎮守その他末社へ供えて来る。これが杓子祭りの語源の様である。

然し乍ら何れの祭事にも神官が災害除け、五穀豊穣の祝詞を参する事に変更はない。尚、この祭りに付随して幟立てという事と幟倒しの行事が、今は忘られたが有つた事を附記する。

祭り前日又終つた翌日朝食前一戸一名出て、20米位の幟をたてるのだ。この幟がたつと誠に春は春、秋を急に感じ、心に響いてくのであつたが今は神社の拝殿に、日の丸の国旗一对、斜に交差してあるだけで味気ないものだ。然し朝から夜を徹して祭太鼓が響き、稲は黄ばんだ穂をたらして、里芋の煮ころがしや焼豆腐、車麩貝のへりや、いかや切昆布の煮付等、余りお目にかかれない煮ぐめや塩鮭の焼いたのをお菜にお赤飯を喰べて、一日を農良仕事から開放されるのは此上ない享楽で今では誰も味う事のできない極楽であつた。

江田村 音楽隊 江田村音楽隊のできたのは、日露戦争に大捷利をおさめ、日本も列国に、その名を知られる様になり文明開化の波にのつ

てその欧風化に始つたと思われる。盆踊や祭文等の古い娯楽以外に新しいものを取り入れたのが、此の楽隊であつたらしい。

楽隊は、大太鼓同小太鼓、明笛、三角鐘と言つていたトライアングル、縦笛他に手風琴があり、尚大太鼓には、喇叭の先を平らにした様な真鍮製のものが付いていて、たい鼓を叩くと同時に叩く物がついていた。この音楽隊が出来た詳しい事は今はわからない。少年の為に区で費用で購入したのでは有るまいか。私達がこの仲間に入ったのは大正五年頃で、備品の明笛や手風琴も演奏できる状態でなく明笛を自分買つて吹いたものであつた。矢張り一戸一名の少年隊員で有るが、入脱会は自由であつた。

隊長というものはなく、年長者が指揮をとり、練習を重ねた曲目は「四面海もて囲まれし」「すめらみくにのものふは」「勇敢なる水兵」や「燎よう城頭夜が更けて」というようなもので、現在小学の鼓笛隊の原流でもあつた様だ。

その頃は徴兵制度で、秋十一月末日近い頃必ず幾人かの入営兵が有り、此の入営兵は一応村役場へ勢揃し、村長の激励祝辞を受け、兵事係に引率され高崎駅より入営先の兵営に向うのであるが、其頃は東小學校では、尋常三年生以上の男女児童は、あづま道と称する道を永々と列をつくつて新高尾村上日高まで送る例になつて居り、その送別行列の先頭にたつて勇ましい曲を奏して送る習しであつた。最も大正十年、上越線新前橋駅が開設されてからは新前橋駅までであつたが、入営兵のあとを列の先頭に江田村音楽隊の旗をたてて進むのは一種の晴がましい誇らかな気持ちでいっぱいであつた。

秋葉 初午 庚申祭等 秋葉社祭り、初午祭り、庚申祭、其他屋敷祭り等の祭祀日は一定して居ないものが多い。

秋葉祭りは農耕作業の了へた十月十八日に行われたと思うが、今は

神官が来て石碑前に注連縄を張り、神主のお払い、祝詞奏上だけで、立会人は社総代の区長、評議員の四、五人だけである。以前、即ち大平洋戦争前には隣組長全員が出て、おみごとと称する一厘菓子を買って神前供へ祭りが終ったあと村の子供に頒ちくれたので、子供はそれを目当に鎮守境内を離れず遊んでいた。

初午祭りは二月立春後の午の日に末社の稲荷社の前に稲荷神社の幟を立てて、前に記した秋葉祭りと同様な祭事を執り行い、又庚申祭りは四月以後の庚申の日に前記同様な祭事が行われた。

この庚申祭り行事については、村内に何組かの庚申講の組があつて当番に當つて居る家では、夕食に組内の者に夕食を饗する行事が多く行われた。

この庚申講夕食の模様を略記してみる。組内の人を「おとうにんず」とよんでいた。おとうにんず、大体十人以上であるが十人以上の組も有つた様だ、但しチブクに汚れている家、即ち出産が百日以内に有つた家の者は参加する事を遠慮して欠席した。

出席の早い順に宿の据風呂に入り、講員全員入浴が終わると夕食に移る。その前に宿の床の間に庚申様の軸を掛け穀類や時の野菜果物が供えられて線香と香立が用意されてある。軸には日月や赤鬼青鬼、鶏や三猿三戸の虫が画かれてある。これに香をたき礼拝して、夕食を頂く。夕食一通りすんだ後、宿の主人が炊事場の方の飯、或はそば、うどんの用意が半分も空かないので今一骨折つて余り残さぬ様にして頂き度い旨の申し出である。ここで少し押問答の末、再び「強いこ」と言つて会食の真似をするのである。

話はお庚申の晩と言ひ伝えられていて、夕食後は皆、強いコウで腹かくちくなつてるので、ながながとねそべり時局や米麦、野菜等世間話に夜を更かすのだ。

三戸の虫は鶏が時を告げると、出なくなるといふので鶏がときをふくまで寝入らずに居るならわしであるが、今は鶏を飼っている家もないので早々に鶏が啼いたといつて解散する様になつた。三戸の虫とは人間の身体の中に三匹すんでいて、人間の睡眠中に身体から脱け出るので庚申の夜は、ねむらず話をして居るのだという。

堰普請と道普請 春三月彼岸過ぎると、今まで枯草色だった野や畑も新緑に被われて、秋冬の間、埋もれた野の小川も冬期中水の流れの止つたままの堰川も一樣に若草がしげつて、浅くなつて居る。この小さな小川から主川の灌漑用水路の土砂を堀りあげて野道のこわれを修覆しながらの堀上げしてなおすのが堰普請である。

この行事は、農耕を営む者は春一日の作業奉仕の義務であつた。朝寄太鼓の会図と共に、公民館の広場に集り、個所割りされた場所へ行つて堀上げ、或は、こわれた堰の修繕作業にたざさわるのである。区の当局者は、その前村内の堰全体を調査して、こわれた堰の有る箇所には用意して置いた材料をあてがい、簡単な指示をあたえて完成を期する。勿論、箇所割は各農家の耕作者一番関係深い所に割当られる事が通常である。この堰普請は又昼食も夕方作業打切も太鼓の合図により行われた。

次に道普請、これは大体稲が黄色に熟れて暴風雨期を脱し、秋祭りが話題にささやかれる頃、施行された。

田圃の水かけも終り、水の通りをよくする為に埋もれた堰の崩れや種々の理由により道路がいたんで居るのを復元して、冬場の交通を円滑にする為の作業で、すぐ目前に熟れた稲が刈られて運ばれる。又麦時という、農家とすれば最も重要な作業を控えて居るので、道路の善悪は直接自分の労力に影響するので真剣あつた。

今でこそ主幹農道はアスファルトの道となり、その道をトラックやコンバインに乗っての作業も、その頃馬牛耕にて荷車やリヤカー農業をふり返ってみると、よくあの苦しい労働が出来たものと今昔の感に耐えないものがある。

**掃除番と夜警番** 掃除番行事は年間を通して行われるものであった。鏡神社の境内を掃除する当番で、毎朝竹箒にて境内を掃除する当番である。江田の戸数が大体六十五位で、雨雪の日に当たった人は掃除の出来るまで延ばして置き掃除が済まして次の番の家へ渡すのである。

**掃除番(板)** という長さ90cm、巾20cm位の杉板に横に長く各戸主の姓名か書連ねてあり、姓名の上に廻す順番号が記されてあった。この板がまわてくると忙しい時でも、又何か都合の悪い時でも神社の庭の掃除後次へまわす義務があった。但し不幸が有つて喪に服している時は免除された。

次に夜警番の事に移ろう。

夜警番は大体年の暮、十二月半ば頃か翌年三月末日まで位までであった。夜警番も、さき書いた掃除板と同じ位の大きの板に横書きに四名を一括一夜とし、大体二十番位で終りになる。従つて一ヶ月に一回或は二回の番で済むのである。

大正八年頃か(記憶が判然せず)村の公会堂ができるまでは、現在は道が異つているが富沢千尋氏の裏道が中尾村へ斜めに通路があり、その道の交錯しておる処に三角形の空地があつて、其処の空地に私達が消防小屋と言つたポンプ置場が有り、その南の端に続けて六尺四方位の板張り小屋が造られてあり、これが夜警小屋であつた。

夜警番は午後十時、十二時、午前二時、夜四時と四回、四人で分かれて火の用心を拍子木を叫き乍ら村中を廻るのでねむらない様に狭く

つくつたとの事であつた。一時期は各戸返事の有る迄呼起す時もあった。中央に掘炬燵があり、櫓は備へられて有つたが、蒲団や薪や炭は当番に当つた者が順次手提げで持参した。そんな狭いコタツに夜遊びに出た若衆達が少し遅く、あててくんと二、三人入つてくると、身動きも出来ない状態になる事もしばしばで、夜警番は実につらいものであつた。

それが神社の側に公会堂が建設され、ポンプ置場も公会堂の庭前に移されて、夜警回数は依然四回であるが畳の上に長々とねそべられる様になつたので、夜警番も以前程、苦にならなくなつた。それがいつの頃からか、多分日支事変の激しくなつた頃からか、掃除番も夜警番も絶えて、今でそんな事があつたのを知らない人のみとなつた。

尚、前項掃除番の項で書き落したが喪に服す事に就て、江田村内に祖父母或いは父母等、近親の者の亡くなつた時は、七七忌がすむまでは鎮守の境内に入れない、入らないという慣しがあつた。

**お蚕餅と油餅** 春四月の十五日が大体お蚕餅で、この日は大体、餅を二臼搗いた。四月八日の花祭りもすみ桜の花も散り、春蚕の種(卵)の催青も始まるうかという季節であり、麦は伸びたら桑の芽もふくらみかけて、空には雲雀が囀り季節は春の好い時期だから農家はもう遊んでいられないぞと警告されてる様の時である。

二臼搗く餅は初めは糯米のみのもの、二臼目のものは、半分秋にとれた屑米をついて洗い、それを更に石臼或は水車等で粉に挽いたものを糯米と半分位、即ち同量に蒸して、之にあらかじめ採つておいた、もち草を同時に蒸かして搗き交せて草餅をつくるのが通例であつた。

蚕神、蚕影山やおオシラ様へ供え、養蚕倍盛を祈りこの日をもの日を休日の後として、これから来向う春夏の農作業に取くむけじめ日で、お餅は俗に地獄餅とも、養蚕、農事に対する農家の覚悟の程が

示唆された。

秋の日は短く、朝暗いうちから夜も八時九時までも働きづくめで、稲刈り脱穀、籾摺り、又は籾の乾燥、田圃の耕起、田こなし、麦の蒔付等、秋の取り込み、仕付で少しも休む間もなく働きづくめの身も細る思いのつらい労働も、一段落ついてホッとするが大体十二月十五日とされる。油餅である。油餅も大体、二臼搗いて、新嫁のある家は餡の餅を重箱に詰めて、実家へ一、二泊の客にやる事が多かった。

その前九月、八朔の節句に葉生薑しょうがのみやげを持たせて、実家へ客に行かせるのであったが、その行事も晩秋蚕の飼育や桑採りで思うにまかせないのが現実の姿であったから、その替りの様なものとして十二月油餅に行われた。

これから正月を迎へ、多少の農作業その他の仕事があるものの炬燵の中で縫い物の針仕事をする位であるから、油餅は極楽餅ともいわれた楽しい休日であった。

講 榛名講、峠の講、御嶽講、庚申、観音、伊勢講、二十二夜講、等もつと有ったかも知れない。之等の講も組織はさまざまであるが、主なるものを二、三記してみる。

榛名講及峠の講は、講元が区長の様であったから講員は大体、村中農業を営む家は入っていた。榛名講も峠の講も農業の災害を防ぐ神として信仰の度合が厚かった様だ。即ち、風水害、旱害や病虫害を防ぎ、殊に雹害、旱害にご利益があるとされた。

何れも五月、抽籤に依り、代参人を決め、人数は五年なり、七年なり最後に残る人員が余り大勢でなく寡少かしょうにならない様に配慮されていた。勿論一度代参した人は満講になるまで二度の代参はできない。

榛名講は五月、山々が新緑に輝いて山には盛んに鶯が囀り、日当りのよい所では蕨も首をもたげて誠によい季節である。朝、鎮守様の鳥

居前に代参人が勢揃して出発する。腰に日の丸弁当をぶら下げて、元総社から金古町箕輪を経て松の沢、愈々山の中へ入って地蔵峠を越え榛名神社の側を榛名町のお師の家へ辿りつく。大体午後三時頃だ。

当日はこのお師の家へ泊るので日暮までの間神社参拜して来るもの、或はみやげ物屋なぞ見廻るなど、思い思いに時を過し、入浴を又夕食を済ませて寝床に這入る。

朝、朝食後神主に連れられて神社へ至り、拜殿で神酒を頂いて代々神楽をあげて宿へ帰り、講員の数だけ祈禱札、お守り、災害除のお札を承けて、帰途につくのだが、夜まで帰ればよいので、神社側から天神峠へ出て榛名湖畔で少し遊び、伊香保へ下り、入浴昼食後、電車にて渋川より新前橋へと帰るのがおおかたの代参人のコースであった。

峠の講というのは群馬県と長野県の境にある。熊野神宮である。筆者も大正末年一度この峠の代参に加って一夜、峠のお師の家に泊って来た事があった。若い頃の事で同行代参人は五人、日の記憶も年号も定かでないが、寒い時期であった。行く時は軽井沢駅で下車し、碓氷峠へ登り、宿に着いても陽まだ高いので碓氷川源泉といわれる湧水の処や又神社の南の造成された広場へ行ってみたりして刻を過し、入浴夕食後、代々神楽を奉納し終って、榛名講同様、神社のお札等を承けて、帰途は坂本宿まで、信越線の北側と思う。旧中仙道を下った猫柳が芽ぶいて居りマンサクの黄色花が咲いていたのが瞳にうかぶ。

磯部駅で途中下車して昼食、入浴も印象に残ってる。小さ旅であった。(又庚申講は別稿に掲げてあり、尚、群馬歴史散歩誌43号 昭和55年11月号にも掲載されているので参照されたい。)

観音講は、農耕馬を飼育している家か主で恰度庚申講の様に宿を定めて一夜の飲を尽し、又代参を決めて、武州松山の馬頭観音に参詣し

た。

次二十二夜講の話にうつろう。

これは女性の信仰で、二月二十二日に行われる。年令には関係はないが、主に五十歳以上のお婆さんのお祭で、鎮守社の側らに有るお堂に淡嶋さまと二十二夜様(如意輪観音)の半肉彫の立派な石仏があり、このお堂のお祭りである。お婆さん達は二十日の午後頃より集って、手分して村中、戸毎にお賽米或は賽銭の寄進に歩く。集ったお賽米は洗って古くは石臼で近世になつては水車にて粉を挽き団子をつくるのだ。沢山つくだ団子をセイロにふかし、飯台に幾つも山のようにふかしたのを二十二夜さまと淡嶋さまに備へ、其前に蓆ゴザを敷いて、その和贊や念仏を二時間以上も申し終つて、この団子をお詣りにた人、婦人子供男子にもくれるのである。団子は普通の団子の三倍位の大きさであるから飯台に山盛りのものも、たちまち無くなる。

江田にはこのお祭りのために、片端の児や盲目や聾啞の児が生まれないと言われていた。従つて新嫁となつて村へ入つて来た者、又他へ嫁に行つた者は皆客に来るのだ。

又、江田の二十二夜祭のご供物或は燃え残りとローソク等が、ほしいと知人等を頼つて申込んで来るのが、毎年の事何件もある。

この行事も第二次大戦の食糧供出の厳しさに、自然消滅の形で中止のやむなきに追込まれたが、昭和六十年正月江田町長寿会が創立され、その会員の婆さん方によつて、復活され以前と異り、団子は菓子や蜜柑等に趣きをかへて継承されて居る。

其の他の御嶽講等は特別の信者の集りで春祈禱と称し各家々を廻り、先達と中座という祈禱者が座をたてて、神のお告げを吉凶の判断を予言したり、又七、八月頃、木曾御嶽登山の導きをする。

其の他は、前記各講に準ずるものが多いので省略する。

事始め事じまい 二月八日が事始めの日であつた。この日は天から、お金かねが降ると言い伝へられて長い。竹竿の先端にメケイと言つた桑摘籠を上向きに結えつけ夕方屋敷内の何れかの場所に立てておいた。朝は小豆飯を炊き祝つたが、筆者もその謂を知らない。推定するに農作業の本格的に入る事の始ではないだろうか。又十二月八日が事じまいと同じ事の行事を繰返した。ただ異なるのは春は上向きのメケイを下向に伏せて立てた。又二月二日は奉公人の出替りの日である。年決めの傭人が、この日を以て一応期限切りとなり、開放される者、或は再契約して継続して居る等、傭われ人の一日の休養日である。

結納おさめ 仲人の樽入がすむと、結婚式前に結納おさめをする。吉日を選んで種々の目出度いもの、嫁の身に着く髪のもの、衣裳、帯等、又化粧用品を奉書紙五枚、或は七枚、水引で綴ちて目録をつくり、長熨斗、祝樽等、芽出度きものから始めて髪のもの、身に着けるもの等、イチイチ全部書き終り結納金額と末広を書き、住所氏名捺印したの、終りの方から挟み箱へ入れて、仲人がお供の者に持たせて嫁方へ渡すのである。

嫁方では、机を並べる毛布或は毛氈を敷き、その上に目録を読上げ順に並べ置き、目録と同じに書き、幾久敷目出度申納候也 住所氏名捺印 宛名で終る。

蓬萊山 結婚式の調度として五人組や近所の人は、シマ台というのをつくる。30位高さで三本脚のある白木の膳の様なものであるが、形がハート形の尖りの無い形のもので、まわりに細く巻いた綿を米糊で貼り付け中に小豆と白米をうすく敷きならして、その中央に木炭を縦に束ねたのに松の枝、竹、梅の枝を挿す。尚松の枝には紙の折鶴を二、三羽とまらせ、台の米、小豆には、大根の円を利用して亀の形に切り、亀甲形を描き、之を這わせる。

尚、太い葱の根を白髪に見立てて、いく分反つてるのを翁に、前こごみになつてるのを姥にと顔を書き、蓬萊山を作り床に飾っておく。又、銚子は柄の付いたのではなく鉄瓶の様なツルがついているので、これに男蝶、女蝶を半紙でたみ、水引で結えて盆にのせてシマ台と共に飾っておく。この二つが結婚式の時に、台は中央に、銚子は三三九度用に使われるのだ。

終いに、蓬萊山の地に這わせる亀の頭は、田作り、即ちゴマメの胴体を上、頭の付いたのを足と尾はゴマメで尾を利用し挿し込んで利用した。

尚高砂の老翁と老嫗に持たせる竹箒と熊手は、細い竹の枝に松葉を挿込み、熊手はこの松葉を折つたものを昆布で作つた上下をしめた腰の水引に挿んでおいた。

尚、大正五年頃までは算盤の背に、大根にて男根をつくり、鮭の頭を女陰に仕立て周囲を切昆布にて覆つたものをシマ台と共に床の間に飾っておき、これを挙の時に婿と嫁の前に押出してみせたものであつたが、大正何年頃か、余りにあらわで見苦しいと村の申合せにより廃止された。

**結婚式** 結婚式は個人のお祝で、村を挙げての祝日とか祭というものではないが、おのずから村々に慣わしがあり、その習慣に従がわねば往々にして五人組や其他から苦情が出たり、円滑を欠く場合の生じる事がある。

戦前までは今と異り、大方見合結婚が多く、今の様に相手を自分で見付ける様な事は極めて稀れといつてよかつた。

年令、財産、教育程度等を勘案して仲人がたち、双方へ話して乗氣であれば仲人が見合の日時を決めて、婿になる者を連れて相手の女性の家、或は其の指定された場所へ行く、女性の家へ行った時はお茶の

接待、或はおそばの接待をなす場合もあり、其他の場所に於てする時は二人で心おきなく對話の場をつくつてやる機会を与へる配慮もする。

結婚式の事を、とりむすびと言つた。先ず時を見計つて近所の衆五人組の人達が村はずれまで迎に出る。かがり火を炊き、弓張り提灯をもつて目印しとする。タンス長持等嫁の道具が来る。嫁は大体仲人と車で来て先ず中宿へ入る。着くずれや化粧をなおして綿帽子をかぶり、婚家へ玄関でなく縁側よりあがる。その時、舅姑になる二人と盃事を交しあがる。

嫁は床柱を背にして座し、右脇に女仲人が座る。右には曲手かまにお待女房と云う三人の裾模様衣裳に前帯に結んだ近所の女房が座る。又嫁の右側にお待女房に向い合つて、五人組や近所の人が六七人の人達がならび嫁に向い合つて婿と男仲人お相伴の人、尚その両脇にお酌取りの男女児が控える。お相伴の指図より、このお酌取りの銚子の酒口ののサシツササレツの酒により式は始まる。

お酌取りの男児は嫁に、女児の方は婿に、三度宛酒を注ぎ、初めの一駄目の盃をおくとお相伴が五人組に、お祝いをお願い致しますの声に應じて、謡曲所は高砂の謡う。お酌取りが位置を替え、三度目の元の位置で酌取りが終ると、二度の時の謡曲は四海波しづかにてを、三度目は君と神との道直ぐにと、千秋楽の謡を終ると結婚式は終り、嫁は座を替え女仲人とお待女房共々、夕食膳に向ふのだが嫁の親おや枕にはお高盛りの飯が盛つてある。これを女仲人が、腕の蓋に箸はしで少し移し嫁の口に移して、喰べさせる。お待女房の方も一所に夕食後、座敷をかえて花嫁衣裳を脱ぎ普通着物に着替えて近所の女衆にお茶を注いだりして了る。

**鉄漿付** 婿方では此の日が大騒ぎで朝暗いうちから近所、親戚の女

衆が寄つて赤飯を一俵近くもふかし、定紋のついた重箱の重ねに押しつぶす様に赤飯を詰めて、先ず嫁の実家へ届けるのだ。

嫁の実家でも、この赤飯を近所の人に頒ちて頂くのであるが、自宅でも赤飯をたいて招待者に馳走するのが普通の様だ。又婿方では、イチヂン客に加わらなかつた人親戚友人知己をこの日に招待してあるので、その接待の馳走作りや、酒のカンをするやら膳ごしらえ、給仕等てんやわんやの大騒ぎが夜迄続くのだ。

嫁はこの日、近親の者、或は姑さまに連れられて鎮守様、先祖の墓、親戚五人組に手拭一本の名刺を配つて挨拶まわりをするのだ。

昔、女房になると鉄漿で歯を黒く染めたので鉄漿付けだとか、私の妻なども高嶋田をくずして丸鬚に結び替えた。

一見客は結婚式前夜、婿側が嫁方へ行くのが普通であるが、何等かの場合、結婚式当日午前に行き接待に預かつてくる事もあり、これを朝イチゲンと言つた。又、嫁方が婿方へ出向くイチゲン客は、結婚式の翌日、即ち鉄漿付の夕方にゆくのが本来であるが、結婚当夜行く事も有り、之を送りイチゲンといった。又、一見客の人数は婿方より嫁方の方が一、二人多いのが普通である。尚、一見客にはお供が付き、お供は一見客の袴を入れた挟み箱を担いで行くのだが、近世洋服になり、いつしか廃された。

一見客は一応指定された中宿にて休み、袴をはき威儀を正して案内に従つて乗り込み、お相伴の介添にて父母兄弟伯叔父母等を紹介され、簡単な盃事の後、袴を脱いで身軽になつて折角のご馳走をいただく。

参宮講 参宮講とは、伊勢の皇大神宮参拝を兼ねて一生に一度の京、大阪その他の名所旧蹟を訪ね有名な神社仏閣を参詣する旅行の事である。江田に於ては大正七年にも実施されたのを少年の頃で記憶があるが、その前、明治になつて二回ばかり催された事を古老の話に聞いて

る。大正七年の旅行に何人かの人達が、今度は毎年春秋二回少額の金を積立てて実行に移そうと貯金組合をつくつた。その時の人数が二十七名、内途中死亡した人を含めて七名の方が脱落し、当初の十ヶ年計画が種々の事情から旅行実施するまでに十六ヶ年もかかつた。昭和六年秋頃より折々話がはじまり、正月になつて急速に話がすすみ具体化した。

昭和七年頃の年は農村は不景気で、疲弊のどん底にあり、加うるに日支事変も益々風雲急を告げる時代で、戦争にならないうちに行つて来ようと言う説が、今少し景気の回復を待つてからというより圧倒的に多くなり、実施に移されたのだ。然し乍ら二〇人の団体では乗車賃に關係するので会員を募集する事となつた。

さきに書いた通り不景気で農村の疲弊はその極に達して居り、観誘も当初は容易でなかつたが、出発日が近づくにつれて加入者が多くなり、この次の旅行は雲を掴む様なものである不安もあつて、初め二〇名が恰度二倍の四〇名、他村から一名加つて四一名の堂々たる団体となつた。

出発準備 出発前は種々準備に忙殺された。村の戸数が七〇戸余り人口四〇〇名内外のうち、屈強の男子が四〇人も約二〇日も留守になるのだから、火災や泥棒の用心押売等区長の指揮下に万全の体制を整えた。又此前の参詣団体は、羽織を黒三絞付、衿巻下駄を揃えて行つたので、今度も服装の話もでたが服装は自由とし持物をトランクにする事に決した。トランクは中型のズック製の四角に皮張りて手頃のものである。又みやげ用として、酒徳利と盃を同じ模様の物に参宮記念と年号を入れて貰い、之を各人から必要数量を申込みせる用意しておいた。これは九谷焼の立派な物であつた。又、人事に就ては団長、副団長二人、会計二人、その神社仏閣のお札を受ける係とか、集印帳係

とか旅舎の交渉係とか衛生係とかを決めて出発に備えた。

**出発** 出発の朝は神主の長尾宇多丸氏が来て、鏡神社々頭に一同のお祓いを受け、道中安全祈願の祝詞をあげられ、二拝二拍手の参拝の手順を教えられ、新前橋駅まで多数の見送り人に送られて旅立った。

高崎駅にて信越線に乗替え長野へ向う。長野駅で下車、善光寺参拝す。長野駅出発は日暮頃になるので四時間以上の間がある、思いおもいに長野出発まで時間を過すのだ。私達は揆重郎さんの親戚があり、石竜町という処に居るので、そこを訪ね思わぬ待遇にあづかつて楽しく過す。

中央線各駅停車で、宇治山田着、駅にはお師宿の三日市太夫次郎家番頭さんが旗をもって迎えに出てくれた。車内で朝食はすませてあるので宿でお茶を飲んですぐ、荷物は宿に於て鳥羽へ向う。初めてみる海岸の美しさは、山国育ちの上州ッ子には驚き以外何物もなかった。殊に日和山より見下した海岸線の美しさは六〇年経った今でも彷彿としてうかんでくるのは、その印象が余りも強かった故であろう。鳥羽ホテルでの昼食、写真で馴染の二見ヶ浦等、思うさま旅の楽しさを満喫し旅の二日目を終った。

第三日、今朝は四時半起き出して宿の心づくしか朝湯に入り身を浄める。今日は内宮外宮に参拝し太々神楽をあげ、尚みやげ物なぞ買い整えて、マンドウという箱のお札やその他お札、又天照皇大神の掛軸等一活荷造りして郵送する。又、宇治橋の袂での記念写真は後日一活団長あてに送る事になつてゐる。その夕、宇治山田発奈良へ向う。奈良へ着いたのは夕刻だった。見物をする間もなく奈良の宿に入り、食後町の中を歩いて見たが古都の影が濃く、すぐ宿へ帰て休む。

旅行第四日は奈良の大仏、春日神社、興福寺猿沢の池等見物後、檀原市檀原神宮参拝、檀原陵、桜井より談山神宮参拝後、長谷寺に詣り

橋本よりケーブルを利用、高野山に登り其の夜は清浄心院に泊る。

第五日、金剛峯寺、奥の院参拝下山、紀州和歌山へ向う。紀三井寺へ参詣、この日は恰度節分の日にて門前にて大豆を買い生大豆にて豆撒きをした。その夜、宿は新和歌の浦である。

和歌の浦に汐満ちくれば片男波

あしべをさして田鶴啼き渡る

赤人の歌が憶われた。

第七日、今日省線ではなく南海電車で大阪に向う。私鉄に初めて乗った所、車掌が本日は南海電車をご利用下さいまして誠に有難う存じました。この車〇時〇分大阪難波駅に到着予定でございます云々の挨拶されたのには、ビックリしたものだ。群馬では乗物に乗ってこうした挨拶をきいた事はなかったので。

途中堺市で下車し、蕨鉄と土佐藩士？十数人が外人立会の下に切腹させられた有名な寺（名を忘れた）に立寄り、正午頃大阪ナンバ駅に着に、駅のレストランにて昼食をしたためた。

先ず大阪城へ行き石垣の石の大きさに驚き、城の華麗さに一驚を喫しつつ城の天守閣へは時間の都合上外観のみで帰る。

北野天満宮、豊国神社、四天王寺等見物参拝し、其夜は道頓堀を前に見る旅館に泊る。

其の頃、大阪松島遊廓疑獄というのが社会問題になって、しばしば新聞の社会面を賑やしていたので場所だけ見て来ようと大勢で出かけてみたものだった。

第八日、大阪梅田駅より神戸にて下車し、湊川神社を又明石に下車、明石公園や人丸神社詣で、岡山へ向う。岡山では今夜の宿の番頭さんが迎え出て居り、後楽園や岡山の鳥城へ案内してくれた。城の側の流れる川（失名）で渡船様なのに乗った様な記憶があるが、それもおぼ



ろだ。岡山よりは宇野線に入り、四国高松へ連絡船にて渡り、栗林公園を見物後琴平町に向い金刀比羅宮に参詣する。

旅行者のおほかたの者は、金比羅詣の後は琴平泊りになるのが多いのだろうが、私達はお詣りも慌ただしくすぐ明朝の船の出発時間の関係で多渡津泊りで、多渡津へ引返した。多度津は昔からの港町で、賑やかなの街である。冬の日にしてはまだ陽は高かったので、街の見物やら港を見下す公園に行ってみた。

日支事変が益々拡大の様相が濃くなり、世は騒然たる有様であったが旅行者には、新聞も疎遠であり、そうした世間の騒ぎも遠い世界の事に様に吾れ関せずエンであった。

多渡津の公園に行ってみて、その頃小学校読本教科書にも載ったと思われる、また映画にもなった「いち太郎ヤイ」のお婆さんの銅像ができてあつて賑やか人出であつた。

世に金波銀波という言葉があるが、夕陽が西空に没せんとして、瀬戸の穏やかな汐波が正に金波銀波にいろどられた状は、私の貧しい筆にては伝うべくもない。

又、ここに一つ団体としての失敗談がある。

当初からこの旅行の時間は省線の旅行案内に依つたもので、新前橋駅の協力により作製されたものである。が此処に来て宿の番頭の忠言？により乗船する汽船の時間を替えたのだ。初めのA会社の出発は午前四時頃であつたのが、替えたB社の抜錨は午前三時と一時間早いのである。番頭の話では早く出発すれば当然目的の宮島に早く到着する。冬の短日一時の遅速は名所宮島見物に貴重な時間である。然も船賃も当初の汽船より安い、と好いことづくめの話に乗ってしまったのだ。

宿は半旅籠で夕食だけで暗いうちに乗船し、夜の明けるま船底の様

で毛布にくるまって寝てみたが、私は汽灌の音かスクリュウの音が苦になつてねむれない。そのうち気分が悪くなり居てもたつても居られない様になり、いままでも乗物酔いした事は経験がないので、船室から甲板に出て寒い風に吹かれていた。船員があそこが暖いと教えてくれたので行ってみると、汽灌の上らしく床板が暖つていて寒さは防げたが、気の悪いのもいく分治つたものの今度寄港地尾の道で一人下船して鉄道で宮島へ行かうと覚悟した程だつた。

長い夜が明け、船底で寝ていた人達も見物もない下から甲板に出て来て瀬戸内海の移り変わる景色に、又稀に蹴り上る魚など見ているうちに気分もグングンよくなり、尾の道で下船の必要もない様になつた。ただ食欲はなく、皆が船の中の食事の悪さなぞ話し合つていて、下の朝鮮人労働者にオカズを喰べられてしまつた話なぞ旅行中のみやげ話である。

やがて船は広島島の宇品港に着いたのは午後二時半頃だつたか、船は錨を下し貨物の積替えがはじまた様である。荷を下ろす、又積込む、ここで約二時間程停泊している。さきに書いたA社の汽船が遅く入つて来てまもなく出発したのに、吾等の船はいつ迄経つても発つ気配がない。甲板からは目隠しの上に銃を白布で被つた兵、多分召集兵の列であろう。運送船に乗り込むのであろう。この船が宇品港へ着いてから、白布に被れた銃列は絶える事がなかつた。冬の陽が没せんとする頃、ヤツと船は抜錨エンジンの音が聞へ出した。

宮島へ着いたのは、夕暗に引汐の海の中に大鳥居判別できる程で、回廊を歩き乍らも徒らに板の音のみで景色も何もあつたものでない。神殿も御神燈の光の印象に残るものは淡い御燈明のみ、神社前の宿に着いて、明朝五時に駅までの連絡船に乗込む事を思えば、一何の為に遙々宮島迄来たのかわからない。かえすがえすも多渡津の宿の番頭

の忠言？ にのつたのが、うらめしかった。

第十一日目、旅の朝立は早くて寒い。朝食もそこそこに宮島駅への連絡船といつても笹ツ葉船に毛の生えた様なものになり、宮島駅より岩国駅にて下車、まだ戸閉めの多い岩国の町を錦帯橋まで歩く。

錦帯橋は流石に名橋であつて、段々のあるのを手前から向う端まで渡つてみたり、又河原へ下り立て橋桁の桁組みを見て、その桁組の複雑さに感心したりして時間を費す。ここには又珍しい白蛇が博物館に居る由の看板がたつていた。外に岩国に於ての予定はないので駅へ戻り山陽本線にて小郡駅に向い、午前十一時頃同駅に到着す。今日は島根県出雲大社へお詣りの予定、一日中汽車の中で暮す予定である。

小郡では発車までに二時間近く間があるので、各自勝手に昼食をと事と、発車30分前に集合する事に申合せた。

私達グループは駅近くのうどん屋五、六人に入る。他にも二、三組のグループが入り、一度に賑やかになる。うどん屋だから飯物はなく、うどんだけのお品書きである。其の中に、かやくうどんというのがあり、グループの人に聴いても誰も知らないとの事で、関西旅行のみやげ話にもと私はそれを注文した。

岡山へ泊つた時、夜の街のうどん屋で矢張り、ききなれないメニューにぜんざいというのがあり、うどん屋だから多分うどん類だと思つて注文して、持ってきた物をみたらこちらの汁粉で、これにはとまどつて箸で中の餅だけ一口たべて出た事が二三日前の事だから、又おなじ様な物かも知れないと覚悟という大げさだが、運ばれてきたのはうどんの中にカマボコの細切とチクワの斜切が二切入つていただけの物であつた。

今でこそテレビやラヂオで関西落語等にてカヤクうどんなどと、こちらでも聴いたり、そば屋のメニューなどに見かける事もあるが、当

時珍らしい名のものであつた。

出発時間になつても一人富沢さんが見えないので一寸騒ぎになつたが、それでもまもなく弟の寿次郎さんが連れて来て予定通りの列車で出発する事ができた。

この山口線は島根県益田市までは、中国山地や平野部を通つていて、関東地方の景と別して変化のない車窓の景色である。乗客も少なく、又列車の速度も遅いのでダンダン車内が飽きてきて、小さな声で流行歌など、口ずさむ者がはじめる。すると他の人がそれに唱和するという工合に、外に乗客の居ないのを幸いに大声に遠慮ない大合唱が始つた。赤城の子守唄、島の娘、波浮の港、草津節、佐波おけさ、三階節や十日町小唄、俺は河原の枯すすき等、あとから次々と出てくる。そしてダンダン唄い疲れて、今度はむねくなり居眠りがはじまる。いつしか列車は山陰線に入り速度も増してきて今度は海が見える。冬の日本海の荒波が遠くからいかり立つて左に岬が見えたり、右に見えたり、そのうちに隧道の中へ入つたりで、小学唱歌の様に、替る景色の面白さもそのうちに見飽きてくる。

出雲市(今の)へ着いたのが夕暮時で、今朝五時頃から乗物で暮し、昨日は朝四時からの汽船の旅、ソロソロ旅の楽しさも中くらいになつてきた。

出雲での旅宿の名は忘れて、出雲ばかりでない思い出せない。参拝は大宮司千家大社の拜殿の大広間に於て行われた。(十二日目)

その前に、真白な水干を全体を着物や洋服の上に着せられ、弥が上に牡蠣さを植付られ、笙や琴羯鼓奏楽の中に厳肅に行われ思つてもみなかった有様に感激一シヲのものもあつた。直会にカワラケを一枚ずつに一献頂き、福引の催しがあつて、四一人団体員のうち五人当つた人には、ご神木で創つた5ミリ程の大国主命のお姿お守を進呈すると

いうものである。私は籤に当たった事はなかったが、どうしたはずみか、この時ばかり籤に当り益々気をよくした。

出雲大社には、遠く神代の昔より大社の官司である千家と北島家が連綿と続いて居り、一は大社教、一は出雲教という神道教団を統括して居るとの事で、その教団本部が神社境内に可成離れた距離の処にあり、お札や恵比寿大黒の御神体（木彫）も又掛軸等も頒布しているの  
で、そうしたものを皆請けてきたのだ。

又、前後したが今朝々食前に希望者を募り日御碕神社へ参拝してきたのだ。断涯絶壁の下には日本海の波が砕けちつて、一寸ハンド  
ル間違えば海中に呑まれる様な細い曲りくねった道をノロノロとバスは走って、往きも帰りも同じ道で、これでは残っていたのがよかつたと思つた位であつた。官幣大社で、小名彦名の命が鯛を釣つた処だといふ、恐ろしい思いをして行つ来たからこそ話も出来るのであるが、残つていたのは富沢幸太郎さん一人だつた。

出雲駅を昼食後出発で、今夜の泊りは兵庫県の城崎温泉町である。旅に出て初めて泊る温泉町であつたが余り好印象が残つてない。

幾年か前に山陰の大地震に見舞われ漸く復興の緒についた処で、宿も内湯というものはない。共同風呂が20米間隔位に七、八ヶ所あつて、宿で入湯券をもらつて、その共同風呂へ行くのだ。又どうした手違いか宿の夕食の飯が少なくて、一度ならず二度も追炊きする始末だつた。

十三日目、城之崎を発つて綾部に下車して、一人も信者は居ないのだが、大本教本部を訪ねる。当局のヒドい弾圧にもかかわらず、その本殿や其の他の付属建築物の壮大さ立派さは目にあまるものだつた。教祖のお筆先とかの印刷物を配られて、説教が始まつた時間の理由で退去して、今度は最初からの目的の天の橋立に向う。宮津で下車してすぐ文珠堂を参拝、橋立の両側の松の間を歩く。然しその両側が海で

ただ歩つたのでは誠につまらない。向う岸に着いて成相山に上り、股のぞきするとその全貌がみられると聞いていたが、その希望者幾人もないのであきらめて帰る。

この宮津の土産屋で売つていたするめ鳥賊の大きいには驚いた。山国育ちの無知さである。

いよいよ丹後から山城国京都に向う。

京都は二泊の予定で、バスで名所神社仏閣を廻る事になつて居る。宿は三条大橋通にあつた伏見屋別館。京の名所は、皆誰も知つて居るので略す。(十四、十五日目)

伏見の稻荷様、男山の岩清水八幡宮、住吉神社、桃山御陵というよ  
うな処へは行った人が少いのではないだろうか。ただし此旅行で行かなかつた処が二三ヶ所あり、残念であつた。京観光の大目玉である嵐山と苔寺、金閣寺、京都御所等で、これらは後日、拝観し得た処もあるが、まだ行かれずにいる所もある。

十六日目、二泊した京都の朝、まだ戸を開けた家が少い街を、出町柳という所から大原でケーブルに乗つて比叡山に登る。団員全員が伝教大師を宗祖とする天台宗の門徒である。回廊の外にて根本中堂を拜み、ケーブルの比叡山駅より、今度は滋賀県の坂本に下る。信長の比叡山焼討後再建されたという本殿が、いくつ有るのかわからない日吉大社を拜み、石山寺に行く。近江八景も見られず、弁慶が引ずり下したという梵鐘も見ず、坂本駅、恰度昼時で早い人、遅い人でバラバラの昼食である。

連日の旅行で、名所中毒で何処へ行つても有難い神さま、お寺様へお詣りしても、感激がうすらいだ様だ。

今夜は名古屋泊り。名古屋では、何といつても金の鯨の城である。城をみたあとは、草薙剣を祀つた熱田神宮で、城と神宮は可成離れて

居るので列車で行って来て宿に入った。夜の名古屋は記憶にない。旅も愈々終りとなった。

十七日目、名古屋から東京までの間、豊川稲荷へ参拝の声もあったが、帰心矢の如し、豊川稲荷神社は後日の事にして東京へ直行、上野にて自由行動という事となり、但し明日は希望者は成田不動山参詣に行く事になる。私は弟が神田にて商売しているので、その夜は弟の家へ泊る、成田へは京成電車で行ってくる。又、家族や其他へ、三越へ行きみやげ物を買ひ整えたり、団長畜雄、本家の兼祐さん、弟元広と四人で、近衛二聯隊へ従弟の誠一君に面会に行ったり忙しい日。

十八日目、上越線にて午後二時新前橋に到着。全員無事長い旅を終る。

二月十七日、旅行中村の治安に少からぬ苦勞をして頂き留守を守ってくれた人、又村中の一家一名を公会堂に招待して、下向祝を兼ね、又直会という意味を含めて、粗酒、粗肴ではあるが、一飯を村民一統と共にした。

この旅行中、大蔵大臣井上準之介が暗殺され、又日支事変は益々激しくなり、帰宅後、いく日も経たないのに、富沢近太郎、小野里藤助、小野里尚雄氏の三人に召集令状が来て送り出す世状だった。

これは私事で恐縮だが、二月二十二日妻伊久の兄陸軍々医中尉秀雄も出征の途についた。

更に後日参宮記念として、鏡神社ฯ前に三段の台に載った高麗狗耆対を奉献し、台石に参宮した氏名が20名宛にわかれ誌されている。これは大正七年に実施された参宮団体の方々が境内入口右側に花崗岩の33m角高1.7cmの村社々標を建つたのに、ならつたものであった。

以上で参宮旅行記の記憶にあるだけを書いたが、尚後日参考の為に左に旅行費を書き止めておく。

一金壹百〇四円八拾九銭也 参宮貯金  
 一金五拾円也 第一回旅費払込金  
 一金 五円也 第二回目払込金  
 旅行中の宿泊料は金八拾銭、金壹円也。内団長及副団長二名、計三名は無料宿泊。又、鏡神社奉納高麗狗代は旅行費に含まれる。  
 旅行に揃えて買ったトランク代金壹円五〇銭也

昭和七年参宮団氏名

◎小野里 畜雄	小野里 松平
○富沢 直彦	小 鮎 長太郎
○富沢 鹿造	富沢 和五七
富沢 和二郎	小野里 吉郎次
小野里 虎吉	富沢 秋太郎
倉林 弁造	眞下 福太郎
服部 喜作	富沢 豊太郎
富沢 萬吉	小野里 兼祐
富沢 平八	富沢 金市
小野里 藤七	富沢 寿次郎
富沢 武徳	富沢 栄太郎
富沢 文四郎	小野里 照親
富沢 孫作	富沢 和夫
富沢 善平	富沢 久吉
富沢 好太郎	富沢 幸太郎
富沢 竹太郎	小野里 彦太郎
富沢 梅吉	富沢 辰之助
富沢 喜内	小野里 揆重郎
小野里 藤助	富沢 近太郎

小野里 尚雄 富沢 春太郎

以上四〇名 内◎印团长 ○副团长

葬儀 葬式も個人の不幸に依つておきるものであるが、おおかたこの近辺の村々に於ての式次第に大差はないが、多少の差のある事は否めない。で、吾が村で行われてきた葬儀の模様を略記してみる。

先ず不幸にして逝去された人が出来ると、直ちに親戚の人達が寄り曆をめくり、友引の日を除けておおかた葬儀の日取を決める。又、隣保班の方々にもお寄りを願つて、出棺の予定日を申し上げ、それに依つて準備を進めて頂きたい旨を依頼する。そして各部所の当事者に當つてもらふ。

医師の死亡診断書 役所の埋火葬証 寺僧侶の依頼 之は三件を一組で(二人)で当る。

葬儀 葬具の調達 これは四、五人で当る。古き時代は棺以外に屋根付の輿に四方鳥居四十九院の塔婆の付いたのを<sup>ミヤ</sup>用いたが、種々の関係から、之れと同じものを寺院、或は墓地、宗旨等同じくする者が計らつて漆塗の立派な輿を車で引く様につくり、大体寺院に格納して置き、一回幾らの損料を払つて使用する様になり、次いで町村合併により土葬となり、葬列も廃され、今は告別式となり至極簡素化された。

告げ人 これは施主の親戚、縁者、知己、友人等に葬儀の日時を知らせる使者で、前記の多少、遠近に依つて何組とは決められないが、七八組位が大かた普通であつた。その昔自転車のない時は、脚絆草鞋弁当持参で出たと古老の話だが、筆者はその経験は無い。但し親しい親戚の家を指定され、炊きたての昼食を、座敷の上り端で腰かけて御馳走になつた経験は何度もある。告げ人は座敷へ上つてご馳走になるものでないと言ひ聴かされていた。

又、親戚の人達は、三、五、に用問者の応待や葬式当日の招待状の

作製、又招待者への引出物の調達に走る。又、遠くの親類へ電報依頼やらでゴツタ返す。

ここで神棚に笹をひくと云う行事と云う程でもないが、つけ加えておく。死者が出来ると近所隣の者、或は隣保班の人でも竹の枝をきつて来て、神棚お札等に之を供える。いわれは私は浅学にして知らないが、昔より今でも必ず笹を供えて居る。又その頃の葬具屋は頼みに行つてから板を削り棺をくり花輪其他をつくつたものだった。

葬儀の前夜、湯灌に間に合う様葬具屋から棺桶やら葬具が届く。最その昔は葬具屋へ行った人が、荷車、或はリヤカーで引張つて来たものだが、今は皆車で運搬してくれる。

庭で組合の人達が、吊旗や花籠をつくつた削り屑を三脚に鍋で沸した湯をもつて、ユカン或はニツカンとも言つたが始まる。死者を洗ひ終ると、洗ひ湯の入つた桶や汚れ物フトンや寝巻等を素裸のまま染谷川迄行き、石油をそれ等の品々にかけて燃してくるのであつた。

死者も着替えた着物左前に衿をあわせ、帯はタツコギに結び、経カタブラに手甲脚絆を着け、足袋は甲の縫い目をはがしたものに草鞋をはかせ、腰にはズダ袋に橋銭を入れたのをさげて、金剛杖や其他の日常愛用品や隠し銭等入れられ額には三角頭巾を頂き、合掌をしその手に珠数をはめて納まる。

愈々葬式となる。

僧侶が来て読経が始まる前に鐘を叩いて、葬儀が始まる合図をする。和服の人は袴をはき喪章や衿袷袋等掛けて集まつて来る。

葬儀の読経が始る前に、班長が参列の人に葬列に持つ役割りを読みあげて依頼し、終ると読経が始り、引導を渡し終つて出棺する。庭に引付られた前記輿に入れて葬列は墓地迄続く。先頭に六地藏、吊旗、五色旗、吊花、四旗、花籠、又故人の写真、位牌膳、弓、天蓋等、大

体順序で香箱等も加わる。又、輿には白の晒木綿さらしの前の綱づんをつけ、女衆は喪服に、同じ晒木綿30cm程に切ったのを冠り綱の両側二列に並び綱を索いた。

この葬列の役割の持ち物は、大体、六地藏は隣保班或は近所の人が持つて行き墓地入口の左右に立てて蠟燭に火を点けておいた。吊旗、五色旗、吊花等に就いては、従兄弟の人達、花籠は孫、四旗は同じイトコでも最も近い人達、位牌は後継者即喪主、天蓋は本家の主人、或は故人、生家に当る様な人、写真は兄弟或は二、三男等、墓標も同じで膳は位牌持の妻等、四ヶ花は女子の子供や孫であった。弓は長女の婿が持ち、棺が読経中、左り廻り三巡りする時、鬼門へ向け矢を射る風習があった。

又花籠には、オヒネリの紙に小銭を入れて、この巡る時振り、し撒き銭をした。撒銭は前の綱の女達が袂から掴み出して投げるのが多い。こうして野辺の送りが済む埋葬にうつる。

大正の半頃迄は、隣保班の人が穴掘りをし棺の大きさより少し大き目に二メートル程の深さに掘ったが、其の後葬儀屋が請合う様になり、葬儀屋に委す様になった。

筆者も何度も穴掘りの経験が有るか、古い人骨が出てきたり一米四方位の空で終り近くなると身動き出来なくなり、土砂を抄う事が出来なくなるので、誠に大変な仕事であった。

棺を静に穴の中に下ろし砂をかけ埋め、土まんじゅうを造り、葬列の旗の竹を石なぞにたたきつけて割り、犬に掘られない様、目ツぱじきに四方八方に挿し、古石等を据えて野位牌を置き、香箱を供え葬列の花籠、四旗の類は交錯して立てておき、輿に塔を立てて香を立てて帰る。

喪家の入口には白の絵の書いた半紙が貼つてあり皿には塩が盛ら

れ、僧侶のつくつたお払があり、又鹽が置いてある。これによって、身を浄めてから家に入る。

床の間には位牌や写真、供え物等が飾られ、又十三仏の掛軸も掛けられ仏間となつて居る。

以前、お念仏組とお婆さん達が頼まれて、あと念仏を申したのだが、その組に入る人もだんだん少なくなり、お念仏の出来る人も居なくなり、今は、隣保班長か主役となり簡単にお念仏を申して終り、忌中払に移る。(以上昭和四十年)

## 結 婚 式

接待の種々 祝儀の接待の最大なものは、一見客の接待である。この一見客は婿かこ或は嫁の最も近い人で父母、兄弟、姉妹、伯叔、父母、又は本家、分家の当主、又は兄弟等の配偶者、特別に関係ある人をもつて構成される。凡そ人数は10名内外である。座敷が大体八畳間であるので、仲人、お相伴を入れる外にお伴も居る多くても12人位が限度である。給仕人は主に少年少女二人を使い、酒燗やご馳走の運搬や、其他雑用を弁ずるものである。

一見客には迎へイチゲン一見、送り一見、又普通それ等の名のつかないものがあつた。普通一見といふのは、結婚式前日、婿側から嫁の家へ出向き、酒肴のご馳走にあずかり、あくる日結婚式済ませて、その次の日に、嫁方の一見客が婿方に出向き、ご馳走になつて帰るのが普通であつた。然し種々の都合上、結婚式当日、嫁の方で婿方から出向き、又嫁と同時に嫁方の一見客が結婚式の終るを待て、婿方家へ乗りむ事もあり、之を迎へ一見、又は送りイチゲンと称した。之等は婚礼前に仲人、媒酌人が双方、婿方或は嫁方の方とよく打合せ、前もつて日時を決めて

おくのである。又ムコ方と嫁方と同時に、一つ会場に出合いして済ませる出会一見と称した。

先ず一見客は絞付（三つ絞五つ絞）羽織、袴をはき、礼装をして、式場へ乗込むのであったが、むかしの事で、今の様に自動車があるわけでもなし、徒歩での往来が主であるから、羽織、袴で行く訳にもゆかざれば、お伴を連れて行くのが普通である。

お伴はハサミ箱に各一見客の羽織、袴のたんだのを入れたのをかついで、一見客の後について行き、中宿まで行って之をおろし、各人に着させ、帰りは矢張り之を箱に納めてかついで帰るのであった。無論、婿嫁の家接近の場合は、お伴は不用になるが、此のお伴を努める人は、婿方より嫁に納める結納おさめの時も、花嫁衣裳は勿論、紅白粉等品々を容れたハサミ箱（函）を担いでゆく慣しであった。

それから婿方嫁方双方共、中宿というを定めて、この媒酌人に知らせておく必要があった。これは一見客が宴会の場へ入る時間の待合せ、又結婚式当日、待女房や近隣五人組の勢揃いの待ち時間等に備えるものとある。以上一見客を迎える前後の準備模様である。

一見客や嫁の出迎え 一見客が来る時間も、嫁が来る時間も予め決っており、迎えに出るのが普通である。

嫁を迎える場合は、薪をもって適當の場所まで出向いて迎えのカガリ火をたき、二三人が弓張り提灯に火を点けて、来る客に提灯を振つてわかる合図をするのであった。

嫁の来る場合は、先ず嫁の嫁入り道具が来るのが先で、主にタンス長持、手箱背負いと三人が普通で、之は中宿へは案内せず、直接婚家へ案内し荷物を下ろして、後の結婚式一見客の邪魔にならない様に飾り並べるのが普通である。

この嫁迎えの時場所によっては、高砂や 此の浦船に帆をあげて

月もろともにの謡曲をうたう所もあつたが、江田の結婚式にはこの謡は省略されてうたわなかつた。ただ結婚式場、三三九度の盃の場合には初めの

一饒で、所は高砂の尾上の松も年古りて、老ひの波も寄りくるや、木の下蔭の落葉かくなるまで命永らえて尚いつまでか生きの松それも久しき名所かなく、

二饒目に、四海波静かにて国も治まる時津風げに相生の松こそ目出度けれ、げにや仰ぎて内事もおろかや、かかると代にすめる民とて豊かなる君の恵みぞありかたやありがたや

第三饒目、神と君との道直ぐに都の春にゆくべくはこれぞ還城樂の舞 さて万才のお忌衣そらぎさすかいなには悪魔を払い おさむる手に寿福をいだし千秋樂はたみをなで万才樂仁は命を伸ぶ相生の松風颯々の声ぞ楽しむ

この三で謡曲は終て、結婚式も終了するのである。最もこの謡のあと、立会の五人組の人達、謡の人達にもキツタテのお造酒を順を追つて渡し肴（イカを縦に巻いて切つたもの）をまわし取して、又同席したお待女房三人にも同様の事で終る。

盆事が終り座敷をあげる時に、五人組の人々から嫁さんの名の披露を求められ、嫁の名がお勝手の方まで聞こえる程の声で披露される。

以上三三九度の盆事が終るが、嫁は女仲人と共に座敷の中央に座り夕食の膳が出される。この膳にはお椀に飯がうず高く盛りあがついて、嫁に沢山喰べられる様にとの祈りがこめられてあり、後日、祝儀の晩のお高盛りの様だと様々に比喻される。

このお高盛り行事がすむと、嫁は女仲人に連れられて別室に於て角隠しを取り、花嫁衣裳を普通の着物に着替えて、披露宴の席に出て各人に一献の酒を献じ、又勝手手伝いの女子の席へも現れてかねて女仲

人があづかかって嫁の実家よりあった手みやげのお手ふき（名前の書入れたもの）や茶菓子なぞ配って、仲間入りの証にしたのである。この時は姑と共に出て、姑が今後家の嫁で有る旨と、私同様宜敷くおいきまわしの程をと挨拶をした。扱て結婚披露宴は深夜に及びいつ果てるともしらずに過るものであった。

一夜明ければ、今日は鉄燵付の祝の日である。

近所の女子は、新婚夫婦が床入って、間もないのに、早や来て赤飯をふかす用意を始める。暗いうちに炊き上ったお赤飯を重箱にギツリ詰めて、重箱を嫁の実家へ届ける。南天の葉を赤飯にのせてゴマ塩を入った袋を添え又この鉄燵付の日は一見に行かなかった親類縁者、或は友達、知人等、招待して有るのに配る折詰の赤飯を詰める。或は、キンピラ牛蒡や肴にする豆腐の殻（切らずと云った）を煎るやら、客に出す膳を整えるやら、各々分担を決め、酒のカンをするもの、膳ごしらへをする者、飯を炊くもの、ご馳走をつくるもの、これらを配膳し、又終ったもの洗う等、一日中休みなしに客の接待におわれるのであった。

これらの準備の為、祝儀の前中より親族一統の女子が苞丁、真名板、或は笹やうどんをあげるしよぎや等必要な物を持ち寄り、大根や人参を洗い刻むや牛蒡をこそけるや、里芋を洗ったり、料理に必要な物品を各々その持場を定めて用意しておくのであった。

婚礼の肴は、キンピラ、切らず（豆腐の殻）に野菜をこまかく刻んだもの交せて、砂糖醤油を入れて食用油にて炒つたもの、数の子と大体決っており、其他の物は自給の沢庵漬や菜葉の漬物である。

又、祝儀の場合、参加者全員、子供、大人を問わず本膳に一度だけ座る。本膳には吸物、オヒラ、オツボ、チョコ皿がつくのであった。吸物は決ってコブ、タラとて鱈の切目を三つ四切にして、それに青い

糸昆布を入れて、ダシ汁を注いだもの、おツボには里芋、チクワ、イカの足や隠元豆を砂糖で甘く煮たもの他、大根、人参、牛蒡類をゴツク煮して少々葛粉を入れポツタリと味付したもの、皿は人参、大根の生酢に塩鮭の切目を茹でたものを三、四個に割ってつけたもので、一口に足りない程のものである。オヒラは主に里芋や油揚を一所に煮たものであったか、之等のご馳走、食の貧しい時、結構お美味く腹一杯に喰べられたのだ。

味付 先ず、前日料理番を二人決めておき、この人達の指図に依つてダシをつくる。鯉節を沢山削りたり、煮干や鶏のガラを煮出して沢山のダシをつくっておく。祝儀中の吸物や、そばつゆなどは皆これをつかう。又、ご馳走は一見客のみでなく、すべてに使うのであるか沢山要るわけだ。

ご馳走は、一見客には、普通婿方は吸物を五品、小皿五品が主たる慣わして、嫁にくれる方は、吸物、小皿共三品が普通であった。吸物の種類は大体似たりよつたりで、最初が昆布、鱈。二番目、イタ（かまぼこ二枚）に小松菜、京菜等の茹でたものをあしらう。三番目、鶏肉、鶏肉の小片二ヶにおなじ野菜。四番目、鯉こく、或は鯛等。五番、蛤等貝類のむき身に昆布や若芽。

以上大体こんなもので、料理番には魚屋が出張して全般をあつかう事が多かった。

又、小皿に盛るものは、キンピラ、数の子、ヌツペと称すに人参、牛蒡、里芋、隠元豆や勝栗等をゴツタに煮たものに葛粉をからませたもので、之等は皆小さく切つたものの角をおとし面をとり、成可く丸く見せる様に手を加えてあった。又、酢だこ、葱みそ、酢のもの、鮪刺身等がつかわれた。又、他に引物として、干するめ、鶴亀の型取ったミジンコの打物菓子、或は時によつて菓子折（生）、佃煮の詰合、干



鱒や干瓢等種々のものが使われた。それ等の他に特別にむしり肴という特別の待遇をする事も有った。

結婚式の準序としては大体次の通り

一、結納め

仲人が婿方より結納を預り嫁方へ渡す

一、結婚式前日

近親の人達は頼まれるま、当日の飲食の用意をする

一、結婚式当日は無論、必要な(式)器物を整え、シマ台や雄蝶、雌

蝶のキツタテ、嫁の座敷へ上る時のクグラセル鳥居、又式場にて謡

う謡曲の練習等前遺漏なき様準備しておく。

一、翌日は鉄奨付と称し、この日赤飯を炊いて嫁の実家へ届ける、同

時に嫁方の一見客を迎える準備。又、一般親戚、知人、友人等、招

待客の接待等、赤飯は折詰にして引物と同時に招待客に渡したり、

結婚式当日に倍して忙しいのである。

一、式三日目膝直し

嫁は座り通して疲れを直すと、婿仲人と共に里帰りとして、実家

へ少時息ぬきに帰ってくるのである。連れられて実家へ行き、膝を

休めてくる習慣であった。尚、此の日、隣近所の女子に特別お世話

になりご苦労を頂いたお礼の意味を兼ねて、ご大儀振舞と女子の慰

労宴である。これは余りもの乍ら一見客に準ずるご馳走をするので

あった。

嫁は姑に、或は本家新宅等のオバ様に案内されて、鎮守様、先祖の

墓や近所親戚巡りをせねばならない。

このむしり肴は余り一般的なものではないが、その村の地主だとか財産家だとか、名譽職に就いている、或は名望家である様な家系の家に多く、一般には余り経費の上からも用いられなかった。そのむしり

肴は、大体鯉或は鯛である。鯉の生きたものを一見の座敷に大皿に二匹盛つたのを持ち込み客に見せ、客に料理の好みにより焼くか煮るかを図つた上、焼く或は煮て出すのである。鯉ならば鯉こく、或は鯉あらいに。鯛ならば刺身、又塩焼と大体相場は決っているが、之は素人には出来ないもので町の魚屋から料理人を頼んで来た。その料理人に託すものである。所定の料理が出来ると、銘々皿に盛りわけて、客の膳に給仕人がその膳につけるのである。この肴を以て、ご馳走は打止めになるのが仕切たりになる様であった。このむしり肴は特殊なものとは云い乍ら皿の部に這入つていた様である。

算盤(そろばんだまのうら) 余りに古い記憶であるので多少の曖昧の所が有ると思うが、いつの頃より始められたか知らないが、確かであった事で、廃止されたのは大正一〇年頃と思う。それは算盤の背に男根と女蔭の形をつくり、結婚式の三三九度の盃事が終えた直後に、嫁さんが綿帽子を脱ぐ時だったか、その前か直後か記憶が曖昧であるが、兎に角、綿帽子を脱いだ嫁の目前にころばしてやり嫁に見せる行事である。

お相伴の人が三三九度の盆事が済むと婿に席をはずさせて、謡曲をやった三人の当番役の人、或はそれに連なつた人の中から婿の行方を問われると、お相伴はとぼけた振りで婿は逃げたとか、又は行方不明になつたとか、そこにユーモアをからませて五人組の人々との間に小時の緊張の息ぬきをなし、婿が居ないから、今夜は仕方がないから婿に替って俺(わし)が努めますと締めくくって問答を閉じ、披露宴にうつるのであった。

その算盤の裏につくられる男根、女陰は大体大根を以って男根をつくり、鯉の頭を女陰に見たててハタ草の葉をもって陰毛に見たてたものであった。又細い針金に綿を巻付けて、大根の男根から鯉の女陰に

至る様につくり付けて有った。これは式の前日、五人組の人が用意しておき、蓬萊山飾りの島台の下において公開されて、結婚式の終るまで床の間に飾りおかれた。大正の十年前後に余りにヤパンな風習であると廃止せられた。

**江田農事改良組合** 江田農事改良組合が創立されたのはいつ頃だったのか、私は知らない。しかし私が推定する所では、群馬郡立農蚕講習所が元総社村に設置されたのが、明治四十年であるから、其れ以後である事は間違いない様である。

この講習所は、元総社町第一区現在県道安中線の元総社農協の在る所から、あれはウシイケ川と言ったか川沿いに南方へ二〇〇米位下った所現在の高前国道十七号の北方で、現在住宅地になっている場所である。講習科目は普通農事課と蚕業課に分れて、普通農事科は、年の一月より三月までの三ヶ月を以て一応終了し、養蚕科は、四月より九月まで六ヶ月で終了する事になっていた。

前記の場所に入川沿の道路より門をくぐって入ると、間口25〜30米有ると思われる中二階建瓦葺の蚕室造りの家屋が一棟と、裏に亜鉛屋根の寄宿舎、続いて小使室や炊事室、他に貯桑室、農器具置場、堆肥小屋等、一応農業養蚕飼育する設備が整っており、小使は夫婦子供が住居して他に常時と期節に通ってくる農夫が三人位いた。又、本棟と寄宿舎の間には中庭になっていて、葡萄棚があり、秋は甲州ブドウの房成り下っていた。

生徒は群馬郡全町村から集ったが、遠い所例えば小野上や白井郷、又は室田等からの通学は困難であるから、寄宿或は親戚、知人宅へ泊ったりしていた様だった。

当時は北群馬郡というのは現在の北群馬郡を含めて群馬郡であったので、群馬郡と北群馬郡と二分されたのは戦後昭和三六年であったと

記憶する。

その講習所終了者を以て江田農事改良組合が組織され、米、麦、野菜等新品種が栽培される様になった様である。

玉葱や甘藍等が珍らしく栽培され始めて、又金州白菜やチーフー白菜等が栽培され、山東菜や杓子菜等が段々かけをひそめ、又米、麦等も今のうまい米にとつてかわれる様にアイコクとかシメハリ、又はタマムラ、小麦でいえばアカボーズ、ニツタセ、サイタマ、シロムギ等である。ただ昔は食味だけでなく、農閑期はつくる稲藁の利用等も考慮の範囲内に入っている様であり、藁も牛馬の飼料や養蚕用簇の利用を考えに入れねばならなかつた様だ。

以上の状況であるから一ガイに多収穫、或は食味はその長所にだけこだわらなくてもゆかなかつたのだろう。講習所が近い関係で江田はこの講習生になる人が多くて、農事養蚕に関する熱心さは他の地区の人達を圧倒していた様であつたから、東村地区に於ても、その新しい農業に取くむ事も群を抜いたのである。

私が知っている限りでは米、麦の採種の経営設置、これは県農事試験場より新品種発表の品種の種子の配布を、米は苗代より、田植は組合員総出にて田植をし、田の草取りも共同作業により時々郡農会技師、技手の指導により栽培育成してこれを組合員に配布し、麦に於ても同様の共同作業に依り、麦に於ては各人蒔溝に一粒を蒔付けて健全なる種子の確保に努めたのであつた。その米、麦の種子の消毒も温湯消毒は風呂釜で湯を炊いたり、寒暖計にて温度を計り浸湯時間か、温度の狂いのない様に万全注意を払い施行したものであつた。

化学が進み農薬の扱いも簡単にになり、そうした苦労は今の人々にはわからない。或は全然知らない者が多い世の中になり、農業に従事するのも面倒な事が省略された事は機械の発達と共にめでたい

事である。

以上書きましたが、又集団作業により組合組の心の結びつきもこの様に一家一族の様であったから、年一回春季総会は又実に楽しいものであった。午前十時頃より集まり始めて各大根、人参、牛蒡、馬鈴薯、甘藷、里芋等を持ち祝儀振舞の様に洗い刻み煮たり、焼いたり、自分達の昼食や夕食をつくるのであった。その為に組合でカレーの皿やフォーク匙を備品として用意してあった。街の肉屋へ契約しておいて、思いきり沢山の豚肉を入れたカレーを心ゆくまで盛りかえて、一寸動けなくなる程詰め入むのであった。

富沢太郎さんが永く組合長をしてくれていて、大正の頃だったか、昭和になった時代から農民の産業組合の父とよばれた。当時、勢多郡桂萱村産業組合長清水乃衛氏の講演会后、この手料理を伴にして戴いた事もあった。この席上に於て、清水先生に農民の産業組合の真条の親善愛の軸一本揮豪して頂いた記憶がある。この軸は農組合に代々譲られた用算筒の抽出に保存されて居る筈で今でも有ると思われる。

以上江田の大正期より近代農業の濫觴期の記憶に依る事を記す。

平成二年六月一日

文章を書くのが下手で申訳ないが、組合創立に最初尽力した人達は、小野里畜雄、同房治、富沢豊太郎、同太郎さん等の方々であつたらう。私の事で申訳ないが、大正九年一月、普通農事課を終へ四月に養蚕課へ入った。この年は江田から富沢利定、小野里藤七、富沢金市、同久さん私と五人一緒に入所して、十月まで寄宿生活をし、又富沢武徳さんが勢多農林学校を卒業したので講習職として入所していた。身分は助手であった。養蚕に関する勉強していたのであった。尚、私は大正九年一月にも普通事課に入り三月まで通った。此の講習所の講師先生

方は、主に郡農会の技師技手方で、交替で米、麦、野菜、花卉、果樹、園芸等の講義を受、時には県農試から派遣講師も来られて講義の事もあった。

又、蚕業課は講習所々長が長野県の方で当時開校された上田蚕糸専門学校第一期卒業生の初めは牛山作弥と云つたが、後、婿入結婚したとかで花岡作弥と云つた。

大正九年は、蚕がそれまでは日本種のみ品種であったが、日支交配種或は支欧交配種等、一代交配種が飼育せられようになり、後には三元交配、四元交配や化性の変化も人工に依り人工孵化等の技術が考案された。繭もくびのない随のもの、又色も純白物黄橙色やワインピンク色の繭ができてきた。

又講習所の運営であるが、これは全部群馬郡費を以って運営され、農事課も蚕業科も総べて無料で月謝はなく、尚養蚕課の三月から九月までの寄宿食事も無料であった。実習で耕作した米、麦、繭、或野菜等、販売収入も有つたのであるが、その収入はとても桑畑や田畑の少作料、其他の費用に比較すれば差引赤字は莫大なものらしかった。後年生徒数が少くなり、県に移管、甲種農学校にする運動も勢多農林学校に先を越されたりして、廃所の運命に至つた次第である。

以上、江田農事組合の設立概要を私のウロ覚えを記録しておく。

江田養蚕組合のこと 養蚕はいつ頃始められたのかわからない。各地六せい市で座繰糸や繭の売買はあつた様だが、私達が覚えて居るの女子はお母さん達が家で屑繭を鍋で煮て、座繰枠にて生糸をとり、それ大枠のヘデにあげかへし斗は熨斗買に、生糸は高崎の市へもって行き売つたり、又絹機を織つて一匹(二反)いくらで現金に替えてきた位しか知らない。高崎の市へ絹機を一匹二匹ともって行、夕方帰る時に大麦なら一俵の販売代金をふところに入れて帰るのは誠に魅力のあ

る仕事で、<sup>これ</sup>によつて女手のある家は暮しをたてる以上に身上を挙げ  
る家も稀ではなかつた。

だから明治末期より大正にかけて養蚕が盛んになり、蚕室を増築し  
たり居室蚕室に改造したりして繭の増産に力を入れたのであつた。  
農家で養蚕を始めたのは、明治或は江戸幕府時代に自家用の糸用に育  
したのもとも思われる。織物の太り縞といわれるは、古い自家用の反  
物の事であつたらう。太い絹糸で手染手織りの着物であつた。こんな  
状況で後明治初年頃より養蚕が盛んになりつつあり、村全体吾群馬県  
全体大きく言えば国全体が、蚕糸業に打込む様になり輸出の大宗と言  
われる様になり、蚕業教育に日進月歩の発達を期待したのである。

繭の取引に就いては桑摘ザルに見本繭を詰めて製糸家へ持つて行  
き、値段を決めて荷車に繭を積んでゆく、或は繭の仲買人が繭を収納  
(繭掻きといつた)して家を一戸一戸繭を見乍ら商談する等種々で  
あつた。買人は小さな稗採をもつて、繭を10粒内外を切つて中の蛹に  
出して繭層をハカリの値段を決めたり、時によつては横浜からの糸値  
の下落電報を見せられたり、それは虚々実々の懸引であつた。こんな  
値極めが昭和初期迄暫く続いたあと、これはどうしても共同で売る方  
が養蚕農家の利益だという事がわかつて来て、養蚕組合が結成される  
様になつた様である。だから養蚕組合が創成されたのも、農事改良組  
合のつくられたのと余り時代の隔りはない様に思われる。そして此の  
組合の創立に参加した人達が熱心に運動したと思われる。

富沢啓三郎 富沢浜吉 富沢文太郎 富沢紋太郎

小野里清八 富雄 房治 兵市

以上の人達でなかつたかと思われる。

今は農協江田支部の中の養蚕部で蚕飼育者も五、六戸と、ほんと養  
蚕を僅に手がける者が五、六戸で、これは片手間仕事で勤めに出る片

手間仕事である。村内戸数四、五〇戸の内、養蚕を飼育せぬ家は四、  
五戸で、養蚕期には臨時養蚕人夫で村はふくれあがるのであつた。

繭の取引に付養蚕家は勿論、製糸側も何とか改善されなければと深  
く考へて居た様であるが、繭は生物で一年中とれるものでなく春、夏、  
秋、蚕年三期の養蚕期に自分の工場の必要量だけは用意しなければな  
らないわけであるから、何してもその取繭期をのがさず手当しておき  
たいのが人情である。

多勢の工場従業員、男女工さんを遊ばす訳にもゆかない。殊に工女  
は新潟や信州或甲州等他県から来ており、暮になると各工場が連絡し  
あい方面別に臨時列車等で帰省せしむるのであつた。

又、繭を確保するの工場側に於ても莫大な金も用意せねばならない  
から、金融機関が金を借りるとしても当然何等かの保証が必要である  
から、種々考へたのがそれまでになるための試行錯誤は別として、養  
蚕農家或は養蚕組合との繭売買特約である。この特約は京都の郡是製  
が始めたらしく、之を手本に真似て片倉製糸や群馬県に於ては交水製  
糸や組合製糸の碓氷社や下仁田社、甘楽社、群馬社も皆倣つたらしい。

組合製糸は養蚕家自体が製糸を経営して、自分の繭は自分で糸にて  
売り、経費を差引いた残りは全部自分のものとなる。理想の下に設立  
された最も新しい経営法であるが、経営執行部と生産者側に幾分の  
不満意見の隔りを残す様なトラブルがあると、自分の工場へ出荷せず  
他の製糸工場へ転売する組合員もあり、これが組合運営に支障を来す  
原因になつた事も事実である。

今ここに大正十年の製糸工場と養蚕組合の特約契約書の雛型がある  
ので参考に掲げる。

〇〇製糸株式会社  
支店 生繭特約取引規定

改良特約組合の資格

- 第一項 一組合の全産繭ヲ当社ト取引スルヲ原則トスル
- 第二項 組合員ハ取引規定ヲ遵守シ、会社ヲ信頼シ、一途優良繭の生産ニ邁進シ、各社従来の商取引共遂ハズ共存共栄の互讓精神の以テ組合―会社兩者円満ナル取引ヲナス組合タルコト
- 第三項 組合員の素質正シク、統制向上進歩ヲ富ミ一系乱レザル組合タルコト
- 第四項 一組合如何ナル事情アリト雖モ系統正シ県將励品種、又ハ指定品種ヲ撰ミ同一品種同母体の同一人製造の蚕品種ヲ飼育スベキモノトスル
- 第五項 一組合ハ稚蚕期ヨリ上簇期ニ至ル飼育方法ハ一致協力統制ヲ図リ、殊ニ上簇の改良ヲ徹底的ニ断行シ全蚕期中ハ会社ヨリ派遣、養蚕技術員ノ指導ヲ受ケ会社指定の指導方針ニ従フモノトスル
- 第六項 供繭ハ組合中ヨリ互選の供繭委員ノ検査ヲ免ケタル後、出荷スベキモノトスル
- 第七項 本項ニヨル改良特約組合ニ就テハ会社ハ特別ノ考慮ヲ払フ

昭和七年十一月制定昭和八年春蚕ヨリ実施

生繭特約取引規定

- 第一項 取引スベキ生繭ノ種類  
本規定ニヨリ取引スベキ生繭の種類ハ系統正シキ、県將励品種又ハ当社指定蚕品種ニ依ルモノトスル、但シ特別の理由により予め会社承認を受けたるものはこの限りにあらず

第二項

取引すべき生繭の品位  
当社製糸原料として適当と認める品位の生繭に限て、但し不適當と認むるものは等外品として金銭の上価値相当の時価にて買受くるものとす

第三項

当社指定の受渡場所とする。但し遠距離ノ地方若くは交通不便の場所に於ては特に協定する事有るべし

第四項

生繭受渡方法

組合員組合長より発行する一定の組合章を携帯し、当者購繭員に示し持込みたる生繭は拝見台に載せ、繭質鑑定撰繭の上荷主立会の下ニ看貫受渡をなす

第五項

繭質鑑定の方法

組合にて各組合員の生産繭壹貫匁の見本を取揃いたる際は、当社指定の場所に集め、組合側代表―蚕業取締吏員―郡農蚕技術員、当社購繭係員立会の下に最合理的に左記内眼乃機械審査をなすものとす  
審査の公平を期する為、予め当社は代表見本を決め五階級用意し置き対照鑑定するものとする

肉眼鑑定

蚕品種特有の繭形、色合、光沢、縮皺緊縮、緊育の程度、撰繭の良否を審査し優劣を鑑定するものとす

機械審査

二〇粒の検査をなし、繭層歩合を測定し、其の成績を肉眼審査の一項に加う

実行成績

飼育乃上簇時の実行成績の如何を調査して、重要な審査項目とす

以上の審査地方組合の希望に依り、行う左記鑑定の方法を採り取引を簡易化する

尚ヲ第六項繭価の決定及繭代金の支払

第七項 養蚕技術員の派遣又ハ雇入

第八項 組合長の任務

第九項 養蚕技術員の任務

第十項 養蚕資金の融通

第十一項 資金及利子返案の方法

第十二項 蚕種代

第十三項 優良組合の表彰

第十四項 違約ニ依る制裁

第十五項 蚕種に関する規定

第十六項 契約書類の作成

第十七項 契約事項の改訂

第十八項 本規定ニ明記なき事項ハ本規定の精神により相互誠意を以ち取扱うものとす

以上

第六項より第十八項まで余り永くなるので斯る事に付て契約せる旨を契約せる概略を記し、余り長くなるので記述を省略した。

斯様なる特約組合の組織が、県内は勿論、外の製糸工場も同様の方針の下に、養蚕期の始る前、正月年始の挨拶と同時に特約調印をもらうべく競争が展開されたのであった。

生糸の輸出が需要者の高めに応じ、大正末期頃より十二中の細い物から第二時日支事変の頃より内需に移るべく余義なくされ、統制経済と空前の大変帯を乗り製糸も統一を迫られ、大日本蚕縮統制株式会社傘下に短繊維製造を迫られ、軍服製造の一翼を担う事になった。

繭取引は個々養蚕家経済に及ぼす影響が大きいので、何としても公正

にしなくてはならないと、終戦（昭和二十年後）県に於ても製糸側も養蚕家にも納得のゆく取引方法以改めなければならぬと、繭検定制度を定め県立の生繭検定所を創り、生繭取引は県の定める生繭検定制度に依る事になったのである。

生繭検定制度に依つて繭価が決定され、100%満足というわけでも有るまいが、売買双方が稍満足し過去の取でのいやな思い出もうすらいでいるのではないだろうか。昭和三十年頃より、輸出内需の生糸側も復活の兆しをみせたものの農業の機械化、化学繊維の進歩等に依り若者の繁雑な養蚕ばなれに、又発展途上国より輸入生糸の圧迫等総ての条件が養蚕を不利の状況に迫込み、僅に其の余喘を保つのみとなったとなつた次第である。

繭価の取引問題のみでは蚕品種、蚕飼育法、養蚕用具の変遷、養蚕型式、上簇後の手入、手当、或は桑品種の撰定改善、仕立方法、細かい所では作業を省くとか種々の事に労働力が経費が節減される様なのが考案されたりして、養蚕農家を迷わしたり喰い物にされたりで、これ等詳細すればとても容易の事ではない。

ただ養蚕の黎明期というべき大正末期より昭和初期に至る頃の飼育法というかを少し挙げてみる。

普通	育	安	全	育	純正	経済	育
蜜閉	育	行	燈	育	半	蜜	閉
高級	育	適	応	育	帶	進	会
(アイデアル)							
箱飼	飼	金	盤	育	条	桑	育
公尊	育	適	湿	育	そ	の	他
文化	育	覆	蓋	育			
豊蚕	社	湿	布	育			

もつと有つたかも知れないが思い出せない。これらの会の統率者は

おおかた信州の人であつたようだ、なかでも公導育会長、横沢友寿氏は最古く、此人の分派が各飼育名称を替えて分派したのが多かつたようである。ここで又重要な江田養蚕組合の名誉ある輝やかしい事であつた事を記しておく。

それは大正何年だつたか、まだ江田公会堂ができて間もない頃と記憶する。

その頃、大日本蚕糸会という全国組織の会が有り、この蚕糸会と總裁は皇族の伏見の宮様であつたか、他の宮様であつたか、私は覚えていないが皇宮さまよりの優良養蚕組合として江田養蚕組合が表彰されたのは事実である。この事は私が子供でおぼえていただけでくわしい事は知らない、養蚕組合の書庫にでも表彰状でも保存されておればその事実が判明するのだが、大日本蚕糸会からは蚕糸の光という雑誌が発行されていたが、今は見るべくもないが当時の之等の雑誌には報道されたと思われる。

これは余談であるが、その後古市養蚕組合が同じ表彰の栄に浴した記憶がある。この事は後世に伝えたい村の名誉である。

大正初期は養蚕業の勃興期で、各種機関が設置されたのである。例えば今までは農事試験所の中、一部課の中にあつた養蚕部或は蚕業課と云つたものが、一代交雑種の拡まりに依然糸の改善統一を図る為に県に於て原蚕種製造所を農事試験場より独立させ。この原蚕種、これはこの製造で飼育製造した蚕種を蚕種製造家へ配布して、この蚕種に依る蚕品種の普及統一を図るのが目的であつた。

だから県の原蚕種製造所は国で定めた原々種を受け、その原々種を飼育し蚕種製造者に配布する重要な機関である。この原蚕種製造所は多分三四年位で県の蚕業試験となり改められて、そのまま現在まで続いているのである。又、この原蚕種製造が出来た頃は、ヨーロッパ

種より微粒子病という蚕児の伝染病が流行して、欧州ではこの病気により蚕種が採れない状態に陥つたのである。その為群馬県より平付の在来の品種が何万枚の単位で島村の蚕種製造家、田島弥太郎氏が遠く伊太利のミラノへ出かけて輸出に熱を傾けたのであつた。この微粒子病は日本に於ても多大の被害を被、之が予防施設を必要と認め蚕病予防事務所が設置されたのであつた。

蚕病予防事務所は紅雲町の柿宮神社西方に稍隣り合つて建てられ、顕微鏡が沢山備えられ、之れによつて微粒子の病原のあるものは切りとつて焼却されたのであつた。梓制蚕種は一枚の種紙に28区産付けてあり、記号、番号が印刷されており、同じ蛾袋産卵の了へた蚕蛾が詰められて乾燥されており、この蚕蛾を摩りつぶして顕微鏡にて覗いて胞子（微粒子）の有無に依て合不合格を決定し不合格のものは焼却処分された。顕微鏡をみる職員は若い娘さんがこれに当り紫か紺の袴をはいて通うので当時は一寸女学生とまちがわれもした。

吾が江田の養蚕組合も時流に乗つて顕微鏡二台を購入し（六百倍のもの）、富沢太郎、小野里藤七、富沢善平、小野里照親四人が高崎の群馬郡役所に顕微鏡取扱操作の講習が有り、之に出席した者達が種紙の春蚕期催青が始るとよく覗いてみたものだった。

顕微鏡はその後どうなつたのやら、養蚕組合の用ダンスの中にしまつて有るだろうか。当時は未だ日本の技術は此種のカメラだとか顕微鏡等のたぐいの光学器械は作られず、ドイツのツアイス製というものだった。扱て話がいろいろの事にそれだが、矢張り当時の養蚕に対する社会の雰囲気は後の世代の人達に伝えおきたいと思うのである。

養蚕の種紙に先ず最も私共が覚えて古いものとは紙の表に絹笠様や馬の絵が書いてあつたり、蚕大当りとか福神とかエンジのよい絵や字が書かれて、重なる様に蚕か種が生み付けられていたが、大正年号に

なつてからは二十八蛾仕になり、やがて微粒子病検査になり、昭和年代になるまで、それが続いたのであった。

昭和年代も大戦終戦後、昭和25年頃か28付種紙が廃止せられて、カレンイ紗に産付けられたものを水に浸してバラ種となり、何瓦ワタという様に秤量される様になった。種紙でもバラ種でもレットルに化性品種名、製造年月日、製造所名は必ず印刷されておるが昔といつても昭和初期の事であつたらうか。

江田養蚕組合では正月六日、組合役員が個人の土蔵に保管してあつた種紙を取り出し、一晚寒水に漬けて障子張り様の刷毛で種子紙を洗い蛾の尿や俵を洗い落して寒中さらし乾燥して、又春蚕の催青の始まるまで之の土蔵に保護貯蔵しておいた事があつた。この行事は江田のみでなく各地でも施行した事で養蚕組合直合会あたりの指導の様である。

又、その頃は蚕製造家視察というが流行して、春蚕期の蚕の三眠四眠の頃を見計らつて蚕種製造家へ出かけて、その種子お蚕を見て来るのであるが、たねやとしても沢山の蚕を飼育しており、どの蚕のうんだ種が江田へ来るかわからないのであるが、種やとしても設備万端を見て貰い永く種子をとつて貰う為、視察人には丁寧なもてなしの待遇をしてくれた。

最も視察といつてもタネヤのサービスと金のかからない今のレジャーのひとつとしての目的が多分に含まれていた事も否定できない。

**蚕品種** 一代交雑種が普及してくると、明治時代から永く養蚕農家に飼育され親しまれてきた蚕品種は、僅か二年か三年にして姿を消した様であつた。小石丸だとか青熟だとか白鶴や又昔といったような優良在来種も一代交雑種によつて産れた繭には、とても比較できない。

すばらしきであつた。永く見馴れた一寸中央部のくびれた一寸細長い謂所繭型は、フックラと寸胴型の俵型となつて縮雛も見事に豊かさを現している美しさをもつていた。繭の色沢に於ては、在来種は純白であつたが、欧州種を交雑したものは肉色、或は黄繭種といつて黄色のものが在り繭は白一色とおもわれていたのが色のついたものも有る事に一驚した事であつた。種々蚕品種名があつたが、支々交雑、日支交雑、支欧交雑、日欧交雑、又、三元、四元雑等多元交雑種に依り新種の発見に努力を重ねた様であつた。

国蚕支五号×国蚕支四号

国蚕支四号×国蚕日一号

国蚕支四号×国蚕欧三号

国蚕欧七号×国蚕支七号

〃 支一〇一×〃 日一号

〃 支九号×〃 一〇七号

といった工合に沢山の優良品種同志の交雑で、殊に支七号×欧七号等に永くもてはやされた。此の沢山、国蚕系のものも有り、民間の蚕種家、製糸家による独得の品種もつくり出し、自家の特約組合に飼育せしめて生糸の統一を図り生産物の品質に寄与させた。郡是黄、白馬、等糸質、糸量等に於て有名であつた。





屋敷	9, 78
屋敷稲荷	425
屋敷神	5, 13, 101
屋敷祭り	298, 318
休日	44
屋根	83
山入り	387
山のつくりっこ	443
山始め	311
ヤンメ	230

ゆ

結納	347
結納おさめ	605
夕暮れ	596
夕立	237
湯灌	366
ユキノシタ	242
夢	234

よ

夜遊び	4, 277, 342
八日節句	314
八日だめ	399
陽気正月	238, 315
養蚕	92, 579
養子	51
用水	42
ヨソイキ	55
予兆	364
ヨトギ	20, 51
淀君	25
夜泣き	230
夜なべ仕事	87
ヨバイ	53
嫁入り行列	350
嫁の出迎え	615
嫁迎え	349
ヨモギ	242, 407

ら

雷電様	28, 105
雷電神社	463
落雷	238
ラジオ	505
ランプ	85

り

離婚	364
流産	328
竜柱	10, 83
料理番	360

れ

恋愛	343
----	-----

ろ

六部膏	473
六間取りの民家	535

わ

ワカイシ	47, 563
ワカイシュゲイヤク	48
若水	310, 384
和讃	263
渡し	97
ワタマシ	11
ワラジヌギ	41
ワラデッポー	421

拾い親 .....332  
披露宴 .....358

ふ

ふいっさく .....599  
フイトウサマ .....122  
ふかし饅頭 .....65  
不浄石 .....463  
普請 .....84, 87, 602  
不整形田字間取りの民家 .....522  
二つ子 .....225  
普段着 .....55  
仏壇 .....417  
フドウ様 .....400  
不動尊 .....313  
船尾の天狗 .....473  
ふなもち .....93, 315  
ブノビ .....38  
ふるいふるかね .....450  
分家 .....4, 50

へ

兵隊ごっこ .....568  
へソクリ .....5, 52  
臍の緒 .....326  
屁徳 .....444  
へビ .....240  
へビ除け .....233  
へまた .....443  
便所 .....9, 79, 229  
便所神 .....101  
便所まいり .....330

ほ

方角 .....29, 238  
方言 .....306  
奉公 .....88  
奉公人 .....492  
坊さん .....485  
帽子 .....57  
法事 .....375  
ほうとう .....63  
蓬萊山 .....358, 605  
ボタ餅 .....68  
盆 .....415  
盆送り .....418  
盆踊り .....29, 262

盆踊り唄 .....257  
本家 .....50  
本膳 .....360  
盆棚 .....418  
盆のウマ .....418  
盆迎え .....417

ま

まじない .....233  
待ち女房 .....353  
町家 .....540  
町屋敷 .....33  
松飾り .....427  
まねひき .....597  
マミサン河原 .....457  
豆なげの由来 .....441  
まゆかき .....398, 581  
マユ玉 .....68, 391  
まゆねじ .....398  
繭販売 .....581  
魔除け .....234  
マンガアライ .....91  
まんじゅう .....8, 74

み

見合い .....344  
三日月様 .....123  
三日月豆腐 .....123  
水あげ .....42  
水掛け着物 .....376  
味噌 .....70  
味噌汁 .....65  
道ぶしん .....42  
三峯講 .....122  
三峰様 .....122  
みとどけ .....360  
ミノ .....58  
見舞 .....53  
ミミズ .....240  
ミミズクの紺屋 .....439  
耳だれ .....230  
宮鍋さま .....464  
ミョウガ .....449  
苗字 .....36  
明神様 .....137  
ミロク山 .....462

む

六日づめ .....311  
六日年 .....387  
六日山 .....388  
無縁仏 .....28, 133, 418  
ムカデ .....240  
麦 .....59, 92, 574  
むぎまき .....596, 598  
麦飯 .....7  
ムケエダンス .....347  
むこのあいさつまわり .....351  
ムジナ .....464  
虫干し .....412  
ムラ .....2  
村入り .....41  
村人足 .....42  
村八分 .....46  
村廻り .....361  
ムラヤク .....40

め

命名 .....329  
飯 .....61

も

モンキ .....85  
餅 .....67  
餅つき .....319, 427, 428  
モノツクリ .....389  
モノビ .....40  
喪服 .....56  
木綿糸 .....59  
もりっこ湯 .....490

や

夜学 .....54  
焼餅 .....64  
役員 .....39  
役員交替 .....599  
薬師 .....124, 230  
薬師様 .....15, 113, 297, 317  
薬師祭り .....422  
厄年 .....336  
夜警番 .....603  
やけど .....231  
屋号 .....36

な

ナオシ .....365  
 流し針 .....591  
 流れ灌頂 .....328  
 投げ餅 .....82  
 仲人 .....345  
 仲人のお礼 .....363  
 仲人まわり .....348  
 なぞなぞ .....501  
 夏まつり .....133  
 七草 .....387, 558  
 七草粥 .....68, 311  
 七晩焼き .....22, 132, 316, 417  
 成り木責め .....400  
 ナンド .....80

に

西箱田 .....34  
 二十三夜様 .....297  
 二十二夜講 .....121  
 二十二夜様 .....121  
 二十二夜待 .....565  
 二夜様 .....403  
 入家 .....351  
 妊婦 .....229, 320

ね

猫 .....481  
 ネコが十二支にはいらぬ .....446  
 ネコとネズミ .....446  
 ネジリ袖 .....55  
 ねずみっぶさぎ .....318  
 鼠ぶさぎ .....599  
 ネックイ遊び .....566  
 練肥 .....598  
 年忌 .....377  
 年始 .....310  
 年始まわり .....385  
 念仏 .....263, 375  
 年雇い .....88  
 燃料 .....85

の

納棺 .....367  
 農作業 .....571

農休み .....315, 410, 582  
 軒下 .....224  
 後産 .....326  
 野辺の送り .....370  
 野馬塚 .....34  
 のみの夫婦 .....495  
 野良犬 .....283  
 野良犬今昔 .....280  
 野良犬獅子舞 .....288  
 野良犬の獅子舞 .....251  
 野良着 .....55

は

歯痛 .....230  
 羽織 .....7  
 墓 .....373  
 羽階権現 .....26  
 馬鹿婿 .....447  
 馬鹿息子 .....447  
 白山さま .....107  
 バクチ .....54  
 箱膳 .....78  
 箱田 .....455, 462  
 橋 .....97  
 機織り .....59  
 機織り名人 .....453  
 ハダカまつり .....397  
 畑 .....92  
 ハチ .....231  
 八十八夜 .....315, 407  
 鉢巻き .....57  
 八幡宮 .....287  
 八幡様 .....107  
 八幡様の舞台 .....273  
 八幡太郎義家 .....461  
 初市 .....311, 559  
 初卯 .....311  
 初午 .....313, 403, 565, 601  
 初絵 .....385  
 初買い .....311  
 初外出 .....330  
 二十日エビス .....400  
 二十日正月 .....313, 400, 563  
 初観音 .....399  
 八朔の節句 .....317, 420  
 初節句 .....333  
 初田植 .....12  
 はっちょうぐみ .....39  
 八丁じめ .....2, 43, 315, 411

発電所 .....85  
 初荷 .....557  
 初参り .....384  
 初詣 .....310  
 初夢 .....311, 385  
 馬頭観世音 .....462  
 馬頭観音 .....297  
 ハナ .....391  
 ハナカキ .....391  
 鼻血 .....231  
 はなどり .....91  
 腹帯 .....322  
 はらみ箸 .....312, 398  
 榛名 .....454  
 榛名湖 .....458  
 榛名講 .....115  
 春彼岸 .....314  
 春祭 .....314  
 半夏 .....315, 488  
 半夏様 .....134  
 ヘンケツ .....328  
 番小屋 .....41  
 半殺し .....448  
 バンタ .....20  
 番太 .....45, 509  
 番地 .....35  
 番頭 .....46, 87, 492  
 坂東太郎岩 .....26, 455

ひ

ヒエ .....60  
 東箱田の地藏様 .....274  
 彼岸 .....405  
 ヒガンバナ .....241  
 ひきつけ .....232  
 引出物 .....360  
 引間の源六 .....469  
 引間の妙見様 .....136, 412  
 人魂 .....234, 465, 482  
 ひとつこ山 .....443  
 日取り .....346  
 雛祭 .....314, 404, 570  
 避妊 .....328  
 火の玉 .....483  
 火の番 .....40  
 百万遍 .....130, 410, 420  
 百万遍念仏 .....123  
 病気除け .....337  
 肥料 .....573

世話人 .....108  
線香 .....134  
千庚申 .....126  
染色 .....59  
千匹がゆ .....313  
千枚田 .....449

そ

葬儀 .....613  
葬式 .....42, 364  
掃除番 .....603  
総社 .....33  
総社神社 .....16, 143, 156  
総社神社太々神楽 .....245  
総社神社本祭り .....272  
総社神社祭太鼓 .....273  
総社立石の獅子舞 .....256  
相続 .....51  
草履 .....57  
俗説 .....306  
測量 .....37  
ソバ .....62  
染谷川 .....464  
算盤 .....617

た

田 .....90  
大火 .....509  
大根のとしとり .....387  
胎児の性別 .....321  
大蛇 .....449  
ダイショ .....333  
大尽 .....474  
大神宮 .....107  
ガイドコロ .....80  
大日如来 .....298  
田植 .....90, 226, 576  
高井 .....33  
タクアン .....71  
竹 .....241  
田こなし .....597  
タツの日 .....91  
建前 .....82  
七夕 .....239, 315, 410, 415  
タヌキ .....479  
種蒔き .....598  
田の草取り .....493  
タバコ .....70

食べあわせ .....223  
食べ物 .....7  
卵 .....61  
多間取りの民家 .....538  
魂呼び .....365  
タメ .....79  
たもと袖 .....55  
だん家 .....44, 108  
誕生祝い .....333

ち

チカラメシ .....369  
力持ち .....472  
千葉常政 .....458  
茶 .....69  
中気 .....232  
中絶 .....328  
丁間稲荷 .....137  
鎮守様 .....107

つ

通婚圏 .....348  
月 .....450  
つきあい .....43  
ツジュウダンゴ .....68, 424  
ツネギ .....55  
ツバメ .....239  
ツボ山 .....10  
つぼ山 .....136, 224  
つみっこ .....8, 63  
通夜 .....366  
艶平さん .....465  
つるな .....562

て

デキモノ .....231  
手拭 .....57  
出不足 .....42  
手毬唄 .....567  
デヨメ .....347  
寺 .....108  
寺子屋 .....298  
天気 .....234  
電気 .....85, 506  
天狗 .....440  
天狗岩用水 .....26, 455  
電車 .....98, 282

天神講 .....115  
天神様 .....105, 115, 403  
天神待ち .....313  
天道 .....450  
天道念仏 .....124  
天王様 .....108, 292  
てんのう祭り .....584

と

ドウ .....591  
稲荷新田 .....34  
十日夜 .....133, 317, 421, 424  
道具送り .....354  
冬至 .....318, 429  
凍傷 .....231  
道祖神 .....108, 126, 131, 292, 391  
560  
道祖神は兄妹夫婦 .....445  
道祖神祭り .....21, 276  
道祖神焼き .....312  
豆腐 .....66  
トウモロコシ .....25, 508  
棟梁送り .....82  
道路 .....98  
トウロウ .....410  
十日夜の唄 .....263  
ドクダミ .....242  
床上げ .....331  
年男 .....310, 385  
年とり .....311  
ドジョウ .....241  
土蔵 .....78  
利根川 .....26, 27  
ドブクロ .....69  
トボグチ .....79  
とぼ口 .....135  
富沢作衛門 .....461  
土用 .....412  
土用の丑の日 .....315  
豊川稲荷 .....114  
虎が洩 .....457  
トリアゲバアサン .....325  
鳥追い .....21, 399  
鳥追い唄 .....262  
鳥羽 .....34  
取り結び .....357  
トロロメシ .....229  
頓智話 .....451  
どんど焼き .....391

コジョハン	72
ごぜ	271
子育て地藏和讃	275
ご馳走	73
小づかい	41
鼓笛隊	54
ことじまい	425, 605
言葉遊び	498
事始め	403, 605
子供組	49
事八日	426
こばい	569
ゴマ	60
五間取りの民家	531
米	59, 487
子守り	335
娯楽	339
御霊様	126
金比羅様	109
金ぴら様の日	312
金比羅参り	122
婚約	345

さ

災害	302
再婚	364
祭壇	368
祭文	271
境	38
さかなけえ	592
魚とり	590
さくたて	388
桜が丘	33
酒	69
ザシキ	80, 356
サツマイモ	60
里芋	60
里がえり	363
作法	223
さまとあがり	224
猿田彦大神	128
猿婿	437
猿谷橋	460
参宮講	607
三束雨	237
サンバさん	325
三間取りの民家	518
三夜様	122
三隣亡	124, 233

し

塩	507
地工大	557
地獄餅	406
仕事着	55
仕事始め	310, 386
仕事休み	89
私財	51
死産	328
獅子観音	108
四十九日	20
地震除け	234
地藏	109, 464
地藏様	274, 412
地藏っ子	585
地藏祭り	15, 109
地藏まわし	23, 129
地藏和讃	274
七五三	336
地づき	81
自転車	98
死水	365
芝居	277, 299
しまい正月	400
地祭り	81
しめなわ	427
ジャガイモ	60
尺取り虫	573
社日	314
祝儀膳	360
十五夜	317, 418
十三仏	134
十三夜	419
十二様	137
十二さま祭	314
十八がゆ	399
しょくしん	405
主食	61
出棺	370
出産	323
出産祝い	331
授乳	326
正月飾り	427
正月行事	379
正月棚	137, 428
正月の唄	262
上蔭	581
しょう塚	463

定使い	40
上棟祝い	82
ショウブ	407
消防団	40
醤油	70
食事	71, 310
ショクシン	8
職人	93
初潮	338
初七日	375
ジリヤキ	64
死霊	377
寝具	59
神宮寺	289
神経痛	232
真言	125
新宅	50
新田	33

す

水死人	45
水車	77
水神様	135
末風村	35
巢鳥	36
菅原神社	105
スグリ	328
すし	68
すすはき	426
ススリネジ	64
頭痛	229
諏訪様	105
諏訪神社	412

せ

整形田字間取りの民家	524
青年会	340
青年団	47
精武館	302
せき	231
赤飯	66
ぜげん	53
せちびき	318
節句	403
節句歳暮	43
雪駄	57
節分	313, 401, 564
せりつみ	311

お供え	310
おたかもり	358
おたなさがし	311
おつきりこみ	8
オッキリコミ	62
オテマル	68
オトウカ	478
男の節句	315
オニョウザエモン	461
小野小町	27
おはぎ	448
お歯黒	59
お化け	483
お花ヶ池	463
お花の池	28
おぼやき	330
お盆	22, 316, 589
母屋	78
親子盃	357
お湯よび	43
おれんが岩	455
女一見	18

か

蚊	451
かいこ	92, 571
蚕日庸	45
蚕品種	624
かいど	10
街道	280
鏡神社	105
鏡神社祭典	600
かがやく	502
ガキダナ	418
傘	58
笠	57
カサヌギ	42
飾りかえ	312, 389
飾りつけ	319
カシグネ	79
鍛冶町	33
迦葉山の天狗	439
糟漬	71
ガス燈	85
数え唄	258
家族	52
片貝の虚空蔵様	136
形見分け	376
カツドウ	277

活動写真	299
カネツケ	19, 361, 606
かねつけのおこわ	362
壁	84
壁土	38
釜	77
カマド	80, 225
カマノクチアキ	315
カマノクチアケ	22, 227, 409
414	
髪型	58
神様	100
上宿の獅子舞	256
上新田	462
雷除け	234
髪結い	58
髪結さん	362
かや	420
かゆかき棒	12
家例	5, 73, 382
川神様	135
川のり	473
かわり婿	358
観音	125
灌仏会	314

き

祇園	410
きじ	481
キジリ	81
キツネ	465, 477
ゴテイギブルマイ	362
木戸	46
絹糸	59
キヌガササマ	120
キハダ	242
キビ	60
木福様	137
木部姫	458
擬婉	325
行商人	99
行人塚	462
浄め	374
禁忌	223

く

食い初め	332
食い違い四間取りの民家	520

草分け	35
九十九谷	460
薬	229
口がため	346
区長	40
区費	40
熊谷稻荷	107
熊野	132
組	39
クモ	240
倉開き	312, 388
幕市	429
歎たて	312
桑つみ唄	258
群馬さん	473

け

芸人	272
契約	3, 47
夏至	412
化粧薬師	113
下駄	57
結婚式	606, 614
ケヤキ	476
けんか	51, 277
建築	94
ゲンノショウコ	242
元禄袖	56

こ

講	121, 604
庚申	601
庚申様	126
庚申信仰	16
庚申待	296
庚申祭	314
コウデ	231
香奠	372
水餅	315, 408
コグミ	39
極楽餅	406
後家	462
後家の八兵衛	461
後家箱田	35
小作	88
子授け	320
ご祝儀の服装	350
小正月	312, 389

# 索 引

## あ

青梨子……………33  
 赤城……………454  
 あがたの箱……………462  
 赤堀道元……………459  
 秋あげ……………88, 318, 423  
 秋の彼岸……………317  
 秋葉……………601  
 秋葉講……………116  
 秋葉様……………116, 291  
 秋祭……………317  
 秋元山壇徒定例……………147  
 アゲ祝い……………315  
 あげっこと……………599  
 朝湯……………310, 384  
 アシイレ……………347  
 味付……………616  
 小豆粥……………68, 312, 398  
 遊び……………277  
 アツケ……………232  
 あと念仏……………123, 376  
 アナップサゲ……………423  
 あの世……………484  
 あぶら餅 ……9, 318, 406, 407, 426  
     599, 603  
 雨乞い……………238  
 あまだれおち……………224  
 アワ……………7, 60, 490  
 淡島様……………122  
 淡島神社……………14  
 安産祈願……………320

## い

飯玉神社……………106  
 イカダ師……………94  
 生き盆……………22, 315, 416  
 生きみたま……………136  
 石臼……………77  
 石倉……………34  
 医者……………229  
 異常分娩……………326  
 伊勢参り……………135, 491  
 いたずら……………279, 503  
 市……………98  
 一見……………349, 615

一見座敷……………355  
 イチドリ……………43  
 一人前……………87, 243, 339  
 一番えらい人……………497  
 イッケ……………4, 50  
 井戸……………35, 78  
 井戸神……………101  
 井戸八幡……………107, 460  
 糸引き……………59, 89  
 いなごとり……………593  
 稲荷……………14  
 稲荷様……………115  
 稲荷神社……………105  
 稲荷祭り……………103, 424  
 稲あげ……………594  
 稲刈……………594  
 稲の掛け橋……………27  
 稲まるき……………594  
 衣服……………6  
 イボ……………231  
 忌明け……………376  
 いもばたけ……………446  
 囲炉裏……………81  
 隠居……………4  
 インキョメン……………50

## う

植野……………33  
 碓氷講……………132  
 うそつき……………474  
 ウタイゾメ……………3, 385  
 打ち身……………231  
 うで饅頭……………64  
 うどん……………62  
 姥捨山……………434  
 産毛……………329  
 ウブタテメシ……………325  
 産湯……………326  
 梅干……………71  
 漆原のざる観音……………461

## え

エイ……………88  
 エエ仕事……………41  
 江田……………34

江田実業会……………564  
 江田農事改良組合……………618  
 江田のかつぎ地藏……………274  
 江田の獅子舞……………246  
 江田村音楽隊……………601  
 越中ふんどし……………457  
 エビス講……………129, 313, 318, 426  
 エンガとテンガ……………449  
 縁側……………28, 224  
 縁起……………233, 513

## お

お伊勢様……………294  
 オウサン……………18, 346  
 王渡……………454  
 おえんどん岩……………455  
 大岡さま……………487  
 大掃除……………10, 318, 426  
 大友……………462  
 大祓式……………147  
 大みそ日……………319, 428  
 王守神社……………26, 27, 106  
 大屋敷……………34, 462  
 大渡……………26, 27, 34  
 オカイコビヨウ……………93  
 おかし……………70  
 オカッチ……………80  
 おかみむかえ……………143  
 おくんち……………317, 421  
 オコアゲ……………93  
 おこあげ祝い……………408  
 オコエ……………72  
 おこと……………313, 318  
 お蚕餅……………9, 73, 406, 407, 603  
 オコワ……………223  
 オサキ……………136  
 オサナブリ……………91, 408, 409  
 お産……………320  
 オジゴ……………332  
 お七夜……………330  
 お正月……………556  
 和尚塚……………460  
 オシラサマ……………120  
 オシラマチ……………397  
 オシンコ……………63  
 おせいぼ……………53, 318





前橋市民俗文化財調査報告書第二集

## 利根西の民俗

—清里・総社・元総社・東地区—

平成三年三月二十八日 印刷

平成三年三月三十日 発行

(非売品)

編集 前橋市教育委員会

前橋市大手町二丁目十二番一号

電話 027(24)1111(代)

印刷 朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町六七

電話 027(51)1111(代)